

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第96集

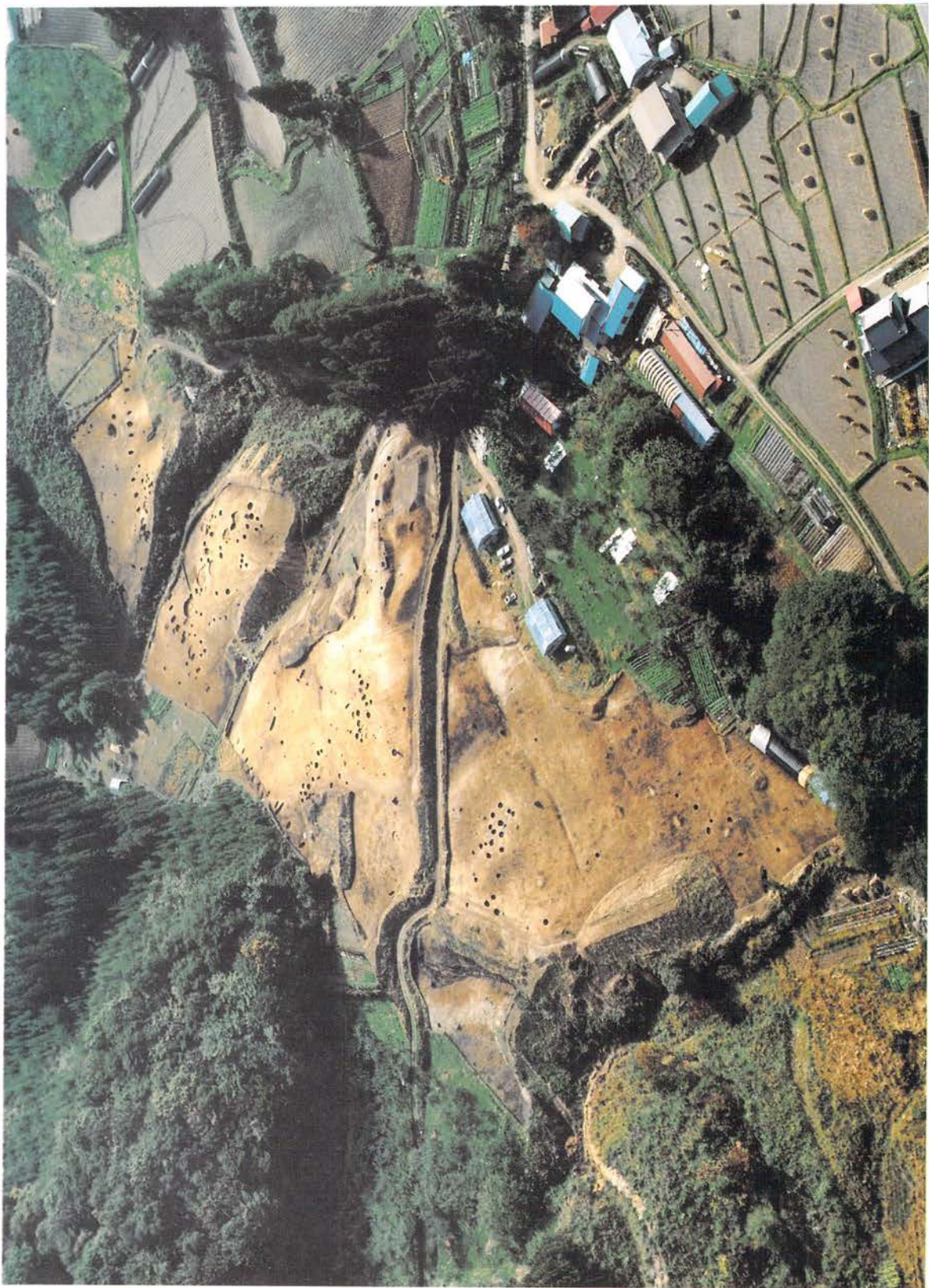
水神遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

水神遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査



調査後全景

北東から空中撮影

序

本県は遺跡の宝庫といわれるほど、縄文時代文化を中心とする数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。これら先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことは、我々県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本県は広大な面積を有し、その大部分が山地であります。現代生活を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発、特にもその基幹となる道路などの交通網整備は、県民の切実な願いでもあります。

このように、保護保存と開発という相反する目的を有する事業の調和のとれた行政施策が今日的課題となってきました。

当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたつて、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むをえず消滅する遺跡の発掘調査を行い、その記録を残す措置をとって参りました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に関連して、昭和59年度に発掘調査した二戸郡安代町水神遺跡の調査結果をまとめたものであります。この遺跡は縄文時代から、弥生時代、平安時代、中・近世に及ぶものですが、なかでも縄文時代の住居跡や土坑、陥し穴状遺構、そして縄文土器や石器が多数発見され、人々が長い間住んでいたことがうかがわれます。これらの調査成果は、岩手県北山間部の歴史解明の貴重な資料になるものと思われれます。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財への理解と関心をより深めるものとなることを期待しております。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成に、ご援助・ご協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、県教育委員会、安代町・同教育委員会をはじめ、各研究機関や地元関係各位に感謝申し上げますとともに、今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和61年1月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は岩手県二戸郡安代町字土沢108ほかに所在する水神遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡に対する発掘調査は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に関連する記録保存を目的とした事前調査であり、調査は日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て（財）岩手県埋蔵文化財センターが担当した。
3. 野外調査と整理期間は次のとおりである。

野外調査	昭和59年4月23日～同年10月26日
第一次整理	昭和59年11月1日～昭和60年3月31日
第二次整理	昭和60年4月1日～同年5月31日
4. 本遺跡の面積は30,000m²余であるが、本調査は自動車道路線内22,360m²を対象とし、その全面積を調査した。
5. 台帳に登載されている遺跡番号と略号は次のとおりである。

○遺跡番号	J E 55—0382	○遺跡略号	MG—84
-------	-------------	-------	-------
6. 調査担当者と整理担当者は次のとおりである。

野外調査	昆野 靖・高橋与右エ門・菊池利和・長沼 彬・光井文行・高橋義介
室内整理	1次—野外調査に同じ、 2次—高橋与右エ門
7. 本遺跡調査では縄文、弥生、古代、中・近世の各時代の遺構が検出され、その内訳は以下のとおりである。
 - ①縄文時代 ○住居跡23棟 ○住居跡状遺構1棟 ○土坑186基 ○陥し穴状遺構46基
○埋設土器2か所 ○焼土5か所
 - ②弥生時代 ○住居跡1棟
 - ③古 代 ○住居跡1棟
 - ④中・近世 ○土葬基10基 ○火葬基4基 ○溝跡2条
8. 全種類含めて35,000点余の遺物が出土し、その中から1,948点を本報告書に掲載したが、種類別の内訳は次のとおりである（実測、拓影、写真、一覧表、文章記載全て含む）。
 - ①縄文土器1,362点（実測274点、拓影1,082点）
 - ②弥生土器45点（実測4点、拓影41点）
 - ③土師器6点
 - ④陶磁器4点
 - ⑤土製品49点
 - ⑥石器415点
 - ⑦石製品16点
 - ⑧金属製品51点
9. 本報告書の執筆分担は次のとおりであるが、文末に略号を記し、文責を明らかにした。

I. 調査に至る経過	近藤宗光
------------	------

- | | |
|-----------------|---|
| II. 調査の方法 | 高橋与右エ門 |
| III. 位置と立地および環境 | 1・2は高橋与右エ門、3は玉川英喜 |
| IV. 縄文時代の遺構 | 昆野 靖 (Ko)、高橋与右エ門 (Y)、菊池利和 (Ki)
長沼 彬 (Na)、光井文行 (Mi)、高橋義介 (Ta) |
| | 遺物
高橋与右エ門 |
| V. 弥生時代の遺構と遺物 | 高橋与右エ門 |
| VI. 古代の遺構と遺物 | 遺構は光井文行、遺物は高橋与右エ門 |
| VII. 中・近世の遺構と遺物 | 昆野 靖 |
| VIII. まとめ | 1～3は高橋与右エ門、4は昆野 靖 |
| IX. むすび | 高橋与右エ門 |
10. 次の事項については次の方々へ分析や鑑定を依頼した。(敬称略)
- | | |
|--------------------------------|----------------------|
| ①. 石質鑑定 | 佐藤二郎 (岩手県立大船渡農業高校教諭) |
| ②. 樹種鑑定 | 早坂松次郎 (岩手県木炭協会) |
| ③. 岩手県内遺跡出土火山灰の蛍光X線谷析 | 三辻利一 (奈良教育大学) |
| ④. 安代町・浄法寺町における平安遺跡埋土中の火山灰について | 井上克弘 (岩手大学) |
| ⑤. 放射性炭素年代測定 | 木越邦彦 (学習院大学) |
| ⑥. 人骨鑑定 | 野坂洋一郎 (岩手医科大学) |
| ⑦. 獣骨について | 上野 猛 |
11. 野外調査や整理報告にあたり、次の方々からご指導をいただいた。(敬称略)
渡辺 誠 (名古屋大学)、宮沢 寛 (横浜市埋蔵文化財調査委員会)
12. 本遺跡の調査では、中間報告として現地説明会資料や調査略報を刊行しているが、本報告書の記載と喰い違いがある場合には、本報告書を正しいものとする。
13. 本遺跡の調査によって得られた一切の資料(全遺物、各種写真ネガフィルム)は当センターが保管している。
14. 本報告書の編集・レイアウト・校正は高橋与右エ門が担当した。

本文目次

序	
例言	
I. 調査に至る経過	3
II. 調査方法とその経過	4
1. 野外調査	4
2. 室内整理	9
3. 報告	10
4. 調査の経過	12
III. 位置と立地および環境	14
1. 位置と環境	14
2. 地形と地質	18
3. 安代町の遺跡	23
IV. 縄文時代の遺構と遺物	31
1. 住居跡	31
2. 住居跡状遺構	118
3. 土坑	120
4. 陥し穴状遺構	334
5. 埋設土器	405
6. 焼土遺構	407
7. 遺構外の遺物	410
V. 弥生時代の遺構と遺物	482
1. 住居跡	482
2. 遺構外の遺物	486
VI. 古代の遺構と遺物	488
VII. 中世・近世の遺構と遺物	490
1. 土葬墓	491
2. 火葬墓	505
3. 溝跡	509
4. 遺構外の遺物	511
VIII. まとめ	514
1. 縄文時代	514
2. 弥生時代	557
3. 古代	573
4. 中世・近世	574
IX. むすび	580

付編目次

1. 岩手県内遺跡出土火山灰の蛍光X線分析	583
2. 安代町・浄法寺町における平安遺跡埋土中の火山灰について	587
3. 放射性炭素年代測定結果報告書	593
4. 岩手県安代町水神遺跡出土人骨鑑定書	595

図版目次

第1図 岩手県全図	1
第2図 遺跡の位置	2
第3図 調査範囲と調査地点の区分	5
第4図 グリット配置図	7
第5図 遺跡付近の地形	15
第6図 地形面区分図	19
第7図 基本層序	22
第8図 安代町内の遺跡	27
第9図 遺構配置図(遺跡全体図)	29
第10図 遺構配置図(A区)	袋詰

第 11 图	遺構配置図(B区)……………袋詰	第 45 图	(16) II e 59住居跡(遺物—1)……………85
第 12 图	遺構配置図(C・D区)……………袋詰	第 46 图	(16) II e 59住居跡(遺物—2)……………86
第 13 图	(1) I h 40住居跡(遺構)……………33	第 47 图	(16) II e 59住居跡(遺物—3)……………87
第 14 图	(1) I h 40住居跡(遺物—1)……………34	第 48 图	(16) II e 59住居跡(遺物—4)……………88
第 15 图	(1) I h 40住居跡(遺物—2)……………35	第 49 图	(16) II e 59住居跡(遺物—5)……………89
第 16 图	(2) I i 37住居跡(遺構・遺物)………36	第 50 图	(17) II g 60住居跡(遺構—1)……………93
第 17 图	(3) I j 41住居跡(遺構)……………38	第 51 图	(17) II g 60住居跡(遺構—2)……………95
第 18 图	(3) I j 41住居跡(遺物—1)……………39	第 52 图	(17) II g 60住居跡(遺物—1)……………97
第 19 图	(3) I j 41住居跡(遺物—2)……………40	第 53 图	(17) II g 60住居跡(遺物—2)………101
第 20 图	(4) II i 39住居跡(遺構・遺物)………42	第 54 图	(17) II g 60住居跡(遺物—3)……………99
第 21 图	(5) II j 39住居跡(遺構・遺物)………43	第 55 图	(18) II i 63住居跡(遺構・遺物—1) 103
第 22 图	(6) III a 38住居跡(遺構・遺物)………45	第 56 图	(18) II i 63住居跡(遺物—2)………104
第 23 图	(7) III b 38住居跡(遺構)……………47	第 57 图	(19) II j 59住居跡(遺構)………105
第 24 图	(8) III e 43住居跡(遺構)……………49	第 58 图	(19) II j 59住居跡(遺物)………106
第 25 图	(9) III h 34住居跡(遺構・遺物)………51	第 59 图	(20) III b 59住居跡(遺構・遺物)………109
第 26 图	(10) I j 54住居跡(遺構)……………53	第 60 图	(21) III b 63住居跡(遺構・遺物—1) 110
第 27 图	(10) I j 54住居跡(遺物—1)……………54	第 61 图	(21) III b 63住居跡(遺物—2)………111
第 28 图	(10) I j 54住居跡(遺物—2)……………55	第 62 图	(22) II a 68住居跡(遺構)………113
第 29 图	(11) II a 60住居跡(遺構)……………57	第 63 图	(22) II a 68住居跡(遺物)………114
第 30 图	(11) II a 60住居跡(遺物—1)……………59	第 64 图	(23) II b 68住居跡(遺構)………116
第 31 图	(11) II a 60住居跡(遺物—2)……………60	第 65 图	(23) II b 68住居跡(遺物)………117
第 32 图	(11) II a 60住居跡(遺物—3)……………61	第 66 图	I j 74住居跡状遺構(遺構・遺物) 119
第 33 图	(12) II a 56住居跡(遺構)……………63	第 67 图	(1) III a 4 土坑……………121
第 34 图	(12) II a 56住居跡(遺物)……………64	第 68 图	(2) III a 17土坑……………122
第 35 图	(13) II b 58住居跡(遺構)……………67	第 69 图	(3) III b 11土坑……………123
第 36 图	(13) II b 58住居跡(遺物—1)……………69	第 70 图	(4) III b 13土坑……………124
第 37 图	(13) II b 58住居跡(遺物—2)……………70	第 71 图	(5) III b 14土坑……………125
第 38 图	(13) II b 58住居跡(遺物—3)……………71	第 72 图	(6) III c 7 土坑……………126
第 39 图	(13) II b 58住居跡(遺物—4)……………72	第 73 图	(7) III c 10土坑……………127
第 40 图	(14) II d 57住居跡—1(遺構)……………75	第 74 图	(8) III c 11土坑……………128
第 41 图	(14) II d 57住居跡—1(遺物—1)………77	第 75 图	(9) III c 12土坑—1……………129
第 42 图	(14) II d 57住居跡—1(遺物—2)………78	第 76 图	(10) III c 12土坑—2……………130
第 43 图	(15) II d 57住居跡—2(遺構)……………79	第 77 图	(11) III d 26土坑……………131
第 44 图	(16) II e 59住居跡(遺構)……………83	第 78 图	(12) III e 25土坑—1……………133

第79图	(13) III e 25土坑—2	134	第113图	(46) III a 36土坑	169
第80图	(14) III e 26土坑—1	135	第114图	(47) III a 37土坑—1	170
第81图	(15) III e 26土坑—2	136	第115图	(48) III a 37土坑—2	171
第82图	(16) III f 19土坑	137	第116图	(49) III a 38土坑	172
第83图	(17) III f 25土坑	138	第117图	(50) III a 36土坑	174
第84图	(18) III f 26土坑—1	139	第118图	(51) III b 36土坑	175
第85图	(19) III f 26土坑—2	141	第119图	(52) III b 37土坑—1	176
第86图	(20) III g 25土坑	142	第120图	(53) III b 37土坑—2	176
第87图	(21) III g 26土坑—1	142	第121图	(54) III b 37土坑—3	177
第88图	(22) III g 26土坑—2	143	第122图	(55) III b 37土坑—4	178
第89图	(23) III g 26土坑—3	144	第123图	(56) III b 37土坑—5	179
第90图	(24) III g 26土坑—4	145	第124图	(57) III b 38土坑—1	180
第91图	(25) III g 27土坑	146	第125图	(58) III b 38土坑—2	181
第92图	(26) III h 25土坑	147	第126图	(59) III b 38土坑—3	182
第93图	(27) III j 21土坑	148	第127图	(60) III b 38土坑—4	183
第94图	(28) III j 25土坑—1	149	第128图	(61) III b 39土坑	184
第95图	(29) III j 25土坑—2	150	第129图	(62) III c 35土坑	185
第96图	(30) III j 26土坑	151	第130图	(63) III c 38土坑—1	187
第97图	(31) III i 27土坑	151	第131图	(64) III c 38土坑—2	188
第98图	(32) IV a 27土坑	152	第132图	(65) III c 39土坑	188
第99图	(33) I f 40土坑	153	第133图	(66) III c 41土坑	189
第100图	(34) I h 40土坑	154	第134图	(67) III c 49土坑	190
第101图	(35) II c 38土坑	155	第135图	(68) III d 40土坑	191
第102图	(36) II c 40土坑—1	156	第136图	(69) III d 42土坑—1	192
第103图	(37) II c 40土坑—2	157	第137图	(70) III d 42土坑—2	193
第104图	(38) II d 40土坑	158	第138图	(71) III e 39土坑	194
第105图	(39) II e 41土坑	158	第139图	(72) III e 40土坑	195
第106图	(40) II i 38土坑—1	159	第140图	(73) III e 42土坑	196
第107图	(41) II i 38土坑—2	161	第141图	(74) III e 43土坑—1	197
第108图	(42) II i 39土坑	163	第142图	(75) III e 43土坑—2	198
第109图	II i 39土坑(遺物)	164	第143图	(76) III e 45土坑	199
第110图	(43) II j 34土坑	165	第144图	(77) III e 47土坑	199
第111图	(44) II j 37土坑	166	第145图	(78) III f 39坑	200
第112图	(45) II j 38土坑	168	第146图	(79) III f 40土坑	201

第147图 (80) III f 42土坑	202	第181图 (113) II b 58土坑—1 (遺物)	241
第148图 (81) III f 43土坑	203	第182图 (114) II b 58土坑—2	243
第149图 (82) III f 48土坑	204	第183图 (115) II b 59土坑	244
第150图 (83) III g 43土坑—1	205	第184图 (115) II b 59土坑(遺物)	245
第151图 (84) III g 43土坑—2	206	第185图 (116) II c 54土坑—1	248
第152图 (85) III g 43土坑—3	208	第186图 (117) II c 54土坑—2	249
第153图 (86) III g 43土坑—4	209	第187图 (118) II c 56土坑	251
第154图 (87) III g 43土坑—5	210	第188图 (119) II c 58土坑—1	252
第155图 (88) III g 44土坑	211	第189图 (120) II c 58土坑—2	254
第156图 (89) III h 43土坑	212	第190图 (121) II c 58土坑—3	255
第157图 (90) I j 52土坑	213	第191图 II c 58土坑—3 (遺物)	256
第158图 (91) I j 53土坑—1	214	第192图 II c 58土坑—3 (遺物)	257
第159图 (92) I j 53土坑—2	216	第193图 (122) II c 58土坑—4	260
第160图 (93) I j 55土坑	217	第194图 (123) II c 58土坑—5	260
第161图 (94) I j 57土坑	218	第195图 (124) II c 59土坑	262
第162图 (95) II a 52土坑	219	第196图 (125) II d 53土坑	263
第163图 (96) II a 53土坑—1 A	221	第197图 (126) II d 54土坑	264
第164图 (97) II a 53土坑—2 B	222	第198图 (127) II d 58土坑	265
第165图 (98) II a 53土坑—2	223	第199图 (128) II d 59土坑—1	266
第166图 (99) II a 55土坑—1	224	第200图 (129) II d 59土坑—2	269
第167图 (100) II a 55土坑—2	226	第201图 (130) II d 59土坑—3	269
第168图 (101) II a 58土坑—1	227	第202图 (131) II e 59土坑—1	271
第169图 (102) II a 58土坑—2	228	第203图 (132) II e 59土坑—2	272
第170图 (103) II a 58土坑—3	229	第204图 (133) II e 59土坑—3	273
第171图 (104) II a 58土坑—4	230	第205图 (134) II f 55土坑—1 (135) II f 55土坑—2	275
第172图 (105) II a 59土坑	231	第206图 (136) II f 57土坑	277
第173图 (106) II b 54土坑—1	233	第207图 (137) II f 58土坑—1	279
第174图 (107) II b 54土坑—2	234	第208图 (138) II f 58土坑—2	280
第175图 (108) II b 55土坑—1	235	第209图 (139) II f 59土坑—1	281
第176图 (109) II b 55土坑—2	236	第210图 (140) II f 59土坑—2	281
第177图 (110) II b 56土坑—1	237	第211图 (141) II f 60土坑	283
第178图 (111) II b 56土坑—2	238	第212图 (142) II g 56土坑	284
第179图 (112) II b 56土坑—3	239	第213图 (143) II h 56土坑	285
第180图 (113) II b 58土坑—1	240	第214图 (144) II h 57土坑—1	286

第215图 (145) II h 57土坑— 2	287	第249图 (179) I j 69土坑	326
第216图 (146) II h 58土坑	288	第250图 (180) I j 70土坑	327
第217图 (147) II h 59土坑	289	第251图 (181) II a 68土坑	328
第218图 (148) II h 60土坑	291	第252图 (182) II a 70土坑	329
第219图 (149) II h 61土坑	293	第253图 (183) II a 75土坑	330
第220图 (150) II i 59土坑	294	第254图 (184) II C 68土坑— 1	331
第221图 (151) II i 60土坑— 1	295	第255图 (185) II C 68土坑— 2	333
第222图 (152) II i 60土坑— 2	296	第256图 (186) II c 69土坑	334
第223图 (153) II i 60土坑— 3	297	第257图 (1) III d 9 陷し穴状遺構	335
第224图 (154) II i 60土坑— 4	298	第258图 (2) III e 8 陷し穴状遺構	336
第225图 (155) II i 61土坑— 1	300	第259图 (3) II j 46陷し穴状遺構	337
第226图 (156) II i 61土坑— 2	302	第260图 (4) III a 40陷し穴状遺構	339
第227图 (157) II i 61土坑— 3	303	第261图 (5) III a 43陷し穴状遺構	340
第228图 (158) II i 62土坑	304	第262图 (6) III c 48陷し穴状遺構	341
第229图 (159) II j 58土坑— 1	305	第263图 (7) III d 43陷し穴状遺構	342
第230图 (160) II j 58土坑— 2	307	第264图 (8) III e 43陷し穴状遺構	343
第231图 (161) II j 58土坑— 3	308	第265图 (9) III e 53陷し穴状遺構	344
第232图 (162) II j 59土坑	309	第266图 (10) III f 42陷し穴状遺構	346
第233图 (163) II j 60土坑	310	第267图 (11) III f 43陷し穴状遺構	347
第234图 (164) III a 59土坑	311	第268图 (12) III f 51陷し穴状遺構	348
第235图 (165) III a 60土坑	312	第269图 (13) III f 52陷し穴状遺構	350
第236图 (166) III b 59土坑	313	第270图 (14) III g 49陷し穴状遺構	351
第237图 (167) III c 60土坑	314	第271图 (15) III g 50陷し穴状遺構	353
第238图 (168) I h 67土坑	315	第272图 (16) III h 46陷し穴状遺構	354
第239图 (169) I h 69土坑	316	第273图 (17) III h 47陷し穴状遺構	355
第240图 (170) I i 67土坑	317	第274图 (18) III h 49陷し穴状遺構	356
第241图 (171) I i 68土坑— 1	318	第275图 (19) III i 44陷し穴状遺構	357
第242图 (172) I i 68土坑— 2	319	第276图 (20) III i 46陷し穴状遺構	358
第243图 (173) I i 68土坑— 3	320	第277图 (21) III j 43陷し穴状遺構	360
第244图 (174) I i 68土坑— 4	321	第278图 (22) IV b 34陷し穴状遺構	361
第245图 (175) I i 69土坑	323	第279图 (23) II g 63陷し穴状遺構	362
第246图 (176) I i 70土坑	324	第280图 (24) II h 62陷し穴状遺構	364
第247图 (177) I j 67土坑	325	第281图 (25) II h 63陷し穴状遺構	366
第248图 (178) I j 68土坑	325	第282图 (26) II i 62陷し穴状遺構	368

第283図	(27) II j 60陥し穴状遺構	370	第317図	遺構外の遺物(土器—9)	433
第284図	(28) III a 59陥し穴状遺構	372	第318図	遺構外の遺物(土器—10)	435
第285図	(29) III b 58陥し穴状遺構	374	第319図	遺構外の遺物(土器—11)	437
第286図	(30) III b 62陥し穴状遺構	375	第320図	遺構外の遺物(土器—12)	438
第287図	(31) III c 57陥し穴状遺構	376	第321図	遺構外の遺物(土器—13)	439
第288図	(32) O j 73陥し穴状遺構	378	第322図	遺構外の遺物(土器—14)	441
第289図	(33) I a 73陥し穴状遺構	379	第323図	遺構外の遺物(土器—15)	442
第290図	(34) I b 72陥し穴状遺構	381	第324図	遺構外の遺物(土器—16)	444
第291図	(35) I d 72陥し穴状遺構	382	第325図	遺構外の遺物(土器—17)	445
第292図	(36) I d 73陥し穴状遺構	384	第326図	遺構外の遺物(土器—18)	446
第293図	(37) I e 71陥し穴状遺構	385	第327図	遺構外の遺物(土器—19)	447
第294図	(38) I e 73陥し穴状遺構	387	第328図	遺構外の遺物(土製品—1)	449
第295図	(38) I e 73陥し穴状遺構(遺物)	389	第329図	遺構外の遺物(土製品—2)	451
第296図	(39) I f 71陥し穴状遺構	391	第330図	遺構外の遺物(石器—1)	455
第297図	(40) I g 71陥し穴状遺構	393	第331図	遺構外の遺物(石器—2)	458
第298図	(41) I i 70陥し穴状遺構	395	第332図	遺構外の遺物(石器—3)	460
第299図	(42) I j 69陥し穴状遺構	396	第333図	遺構外の遺物(石器—4)	462
第300図	(43) II a 68陥し穴状遺構	398	第334図	遺構外の遺物(石器—5)	464
第301図	(44) II a 69陥し穴状遺構—1	399	第335図	遺構外の遺物(石器—6)	465
第302図	(45) II a 69陥し穴状遺構—2	401	第336図	遺構外の遺物(石器—7)	467
第303図	(46) II b 68陥し穴状遺構	403	第337図	遺構外の遺物(石器—8)	468
第304図	(1) II a 58埋設土器	405	第338図	遺構外の遺物(石器—9)	469
第305図	(2) II f 61埋設土器	406	第339図	遺構外の遺物(石器—10)	470
第306図	A. III a 7 焼土 B. III b 5 焼土 C. III b 6 焼土—1	408	第340図	遺構外の遺物(石器—11)	471
第307図	A. III b 6 焼土—2 B. I i 74 焼土	410	第341図	遺構外の遺物(石器—12)	472
第308図	グリッド別土器出土点数	411	第342図	遺構外の遺物(石器—13)	473
第309図	遺構外の遺物(土器—1)	416	第343図	遺構外の遺物(石器—14)	476
第310図	遺構外の遺物(土器—2)	418	第344図	遺構外の遺物(石器—15)	477
第311図	遺構外の遺物(土器—3)	421	第345図	遺構外の遺物(石器—16)	478
第312図	遺構外の遺物(土器—4)	423	第346図	遺構外の遺物(石器—17) 石製品—1	480
第313図	遺構外の遺物(土器—5)	426	第347図	遺構外の遺物(石製品—2)	481
第314図	遺構外の遺物(土器—6)	428	第348図	III g 45住居跡(遺構)	483
第315図	遺構外の遺物(土器—7)	429	第349図	III g 45住居跡(遺物)	485
第316図	遺構外の遺物(土器—8)	431	第350図	遺構外の遺物(土器)	487

第351図	I j 75住居跡(遺構・遺物) ……489	第365図	(3) I i 40火葬墓-2(遺構・遺物) ……508
第352図	(1) III h 27土葬墓(遺構・遺物) ……491	第366図	(4) I j 40火葬墓(遺構・遺物) ……508
第353図	(2) I e 40土葬墓(遺構・遺物) ……493	第367図	溝跡 $\begin{pmatrix} (1) I d 40 \\ (2) II a 42 \end{pmatrix}$ ……510
第354図	(3) I g 41土葬墓-1(遺構・遺物) ……494	第368図	墓壇出土縄文土器 ……512
第355図	(4) I g 41土葬墓-2(遺構・遺物) ……495	第369図	遺構外の遺物 ……513
第356図	(5) h 40土葬墓(遺構・遺物) ……496	第370図	住居跡と時期別分布 ……514
第357図	(6) I i 41土葬墓(遺構) ……498	第371図	土坑の分布状況 ……521
第358図	(7) II b 41土壇(遺構) ……499	第372図	底部径と深さの相関図 ……526
第359図	(8) II i 38土葬墓(遺構・遺物) ……501	第373図	断面形態 ……527
第360図	(9) II i 39土葬墓(遺構・遺物) ……502	第374図	陥し穴状遺構の分布状況 ……536
第361図	(10) II j 38土葬墓(遺構・遺物-1) ……504	第375図	長さ・幅・深さの相関図 ……537
第362図	(10) II j 38土葬墓(遺構-2) ……505	第376図	陥し穴状遺構の類型分類 ……539
第363図	(1) I i 39火葬墓(遺構) ……506	第377図	器種別の出土比率 ……549
第364図	(2) I i 40火葬墓-1(遺構) ……507	第378図	石質別の出土比率 ……551

写真図版目次

P L-1	完掘後全景(空中写真) ……637	P L-15	(6) III a 38住居跡 ……651
P L-2	遺跡遠景 (北西から) ……638	P L-16	(7) III b 38住居跡 ……652
P L-3	遺跡全景 ……639	P L-17	(8) III e 43住居跡 ……653
A.	遠景 (南から) ……639	P L-18	(9) III h 34住居跡 ……654
B.	近景 (南から) ……639	P L-19	(10) I j 54住居跡 ……655
P L-4	A区全景 ……640	P L-20	(11) II a 60住居跡 ……656
P L-5	B区全景 ……641	P L-21	(12) II a 56住居跡 ……657
P L-6	C区全景 ……642	P L-22	(13) II b 58住居跡 ……658
P L-7	D区全景 ……643	P L-23	(14) II d 57住居跡-1 ……659
P L-8	雑物撤去・粗掘 ……644	P L-24	(15) II d 57住居跡-2 ……660
P L-9	人骨供養・現地説明会 ……645	P L-25	(16) II e 59住居跡 ……661
P L-10	基本層序 ……646	P L-26	(17) II g 60住居跡 ……662
P L-11	(1) I h 40住居跡 ……647	P L-27A	(18) II i 63住居跡 ……663
P L-12	(2) I i 37住居跡 ……648	B	(20) III b 59住居跡 ……663
P L-13A	(3) I j 41住居跡 ……649	P L-28	(19) II j 59住居跡 ……664
B	(4) II i 39住居跡 ……649	P L-29	(21) III b 63住居跡 ……665
P L-14	(5) II j 39住居跡 ……650	P L-30	(22) II a 68住居跡 ……666

P L-31 (23)II b 68住居跡……………667
 P L-32 I j 74住居跡狀遺構……………668
 P L-33 III g 45住居跡……………669
 P L-34 土坑-1 (III a 4土坑・III a 17土坑) ……670
 P L-35 土坑-2 (III b 13土坑・III b 14土坑) ……671
 P L-36 土坑-3 (III c 10土坑・III c 11土坑) ……672
 P L-37 土坑-4 (III c 12土坑-2・III d 26土坑) ……673
 P L-38 土坑-5 (III e 25土坑-2・III e 26土坑-1) ……674
 P L-39 土坑-6 (III f 19土坑・III f 25土坑) ……675
 P L-40 土坑-7 (III f 26土坑-2・III g 25土坑) ……676
 P L-41 土坑-8 (III g 26土坑-4・III g 27土坑) ……677
 P L-42 土坑-9 (III j 21土坑・III j 25土坑-1) ……678
 P L-43 土坑-10 (III j 25土坑-2) ……678
 P L-44 土坑-11 (III j 26土坑・IV a 27土坑) ……679
 P L-45 土坑-12 (III g 26土坑-2・III c 39土坑) ……679
 P L-46 土坑-11 (I f 40土坑・I h 40土坑) ……680
 P L-45 土坑-12 (II c 40土坑-1・II c 40土坑-2) ……681
 P L-46 土坑-13 (II e 41土坑・II i 38土坑-1) ……682
 P L-47 土坑-14 (II i 39土坑・II j 34土坑) ……683
 P L-48 土坑-15 (II j 38土坑・III a 37土坑-1) ……684
 P L-49 土坑-16 (III a 37土坑-2) ……684
 P L-49 土坑-16 (III a 38土坑・III a 39土坑) ……685
 P L-50 土坑-17 (III a 41土坑) ……685
 P L-50 土坑-17 (III a 36土坑・III b 36土坑) ……686
 P L-51 土坑-18 (III b 37土坑-1) ……686
 P L-51 土坑-18 (III b 37土坑-2・III b 37土坑-3) ……687
 P L-52 土坑-19 (III b 37土坑-4) ……687
 P L-52 土坑-19 (III b 37土坑-5・III b 38土坑-1) ……688
 P L-53 土坑-20 (III b 38土坑-2) ……688
 P L-53 土坑-20 (III b 38土坑-3・III b 38土坑-4) ……689
 P L-54 土坑-21 (III b 39土坑) ……689
 P L-54 土坑-21 (III c 35土坑・III c 38土坑-1) ……690
 P L-55 土坑-22 (III c 38土坑-2) ……690
 P L-55 土坑-22 (III c 49土坑・III d 40土坑) ……691
 P L-56 土坑-23 (III d 42土坑-1) ……691
 P L-56 土坑-23 (III d 42土坑-2・III e 39土坑) ……692
 P L-57 土坑-24 (III e 40土坑) ……692
 P L-57 土坑-24 (III e 42土坑・III e 43土坑-1) ……693
 P L-58 土坑-25 (III e 43土坑-2) ……693
 P L-58 土坑-25 (III e 45土坑・III e 47土坑) ……694
 P L-59 土坑-26 (III f 39土坑) ……694
 P L-59 土坑-26 (III f 40土坑・III f 43土坑) ……695
 P L-60 土坑-27 (III f 48土坑) ……695
 P L-60 土坑-27 (III g 43土坑-1・III g 43土坑-2) ……696
 P L-61 土坑-28 (III g 43土坑-3) ……696
 P L-61 土坑-28 (III g 43土坑-4・III g 43土坑-5) ……697
 P L-62 土坑-29 (III g 44土坑) ……697
 P L-62 土坑-29 (III h 43土坑・III f 42土坑) ……698
 P L-63 土坑-30 (II a 55土坑-1・I j 52土坑) ……698
 P L-63 土坑-30 (I j 53土坑-1・I j 53土坑-2) ……699
 P L-64 土坑-31 (I j 55土坑) ……699
 P L-64 土坑-31 (I j 57土坑・II a 52土坑) ……700
 P L-64 土坑-31 (II a 53土坑-1 A) ……700

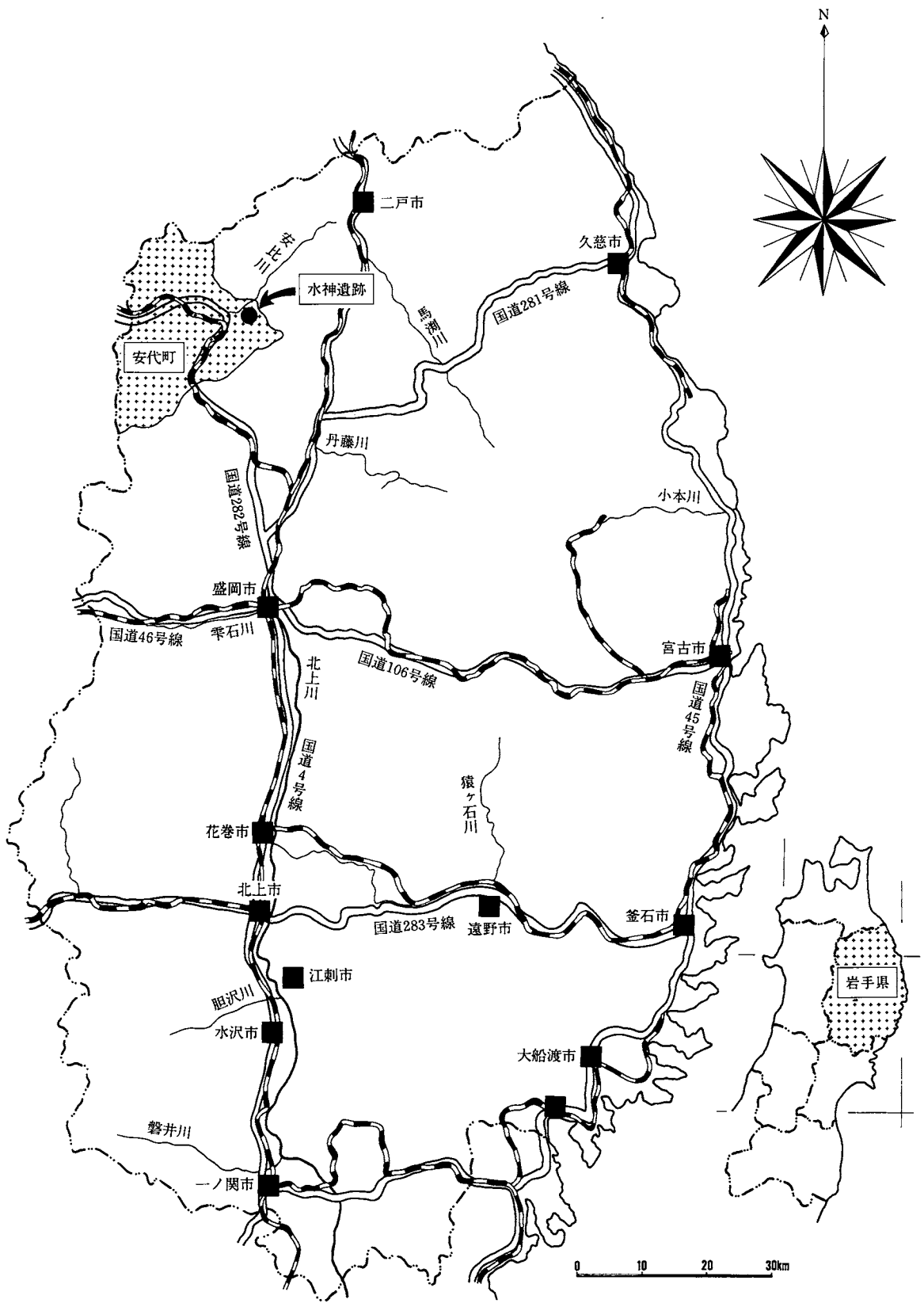
P L-65 土坑-32 (II a 53土坑-1 B・II a 53土坑-2) ……701
 P L-65 土坑-32 (II a 53土坑-2) ……701
 P L-66 土坑-33 (II a 58土坑-1・II a 58土坑-2) ……702
 P L-66 土坑-33 (II a 58土坑-3) ……702
 P L-67 土坑-34 (II a 58土坑-4・II a 59土坑) ……703
 P L-67 土坑-34 (II b 54土坑-1) ……703
 P L-68 土坑-35 (II b 54土坑-2・II b 55土坑-1) ……704
 P L-68 土坑-35 (II b 55土坑-2) ……704
 P L-69 土坑-36 (II b 56土坑-1・II b 56土坑-2) ……705
 P L-69 土坑-36 (II b 56土坑-3) ……705
 P L-70 土坑-37 (II b 58土坑-1・II b 58土坑-2) ……706
 P L-70 土坑-37 (II b 59土坑) ……706
 P L-71 土坑-38 (II c 54土坑-1・II c 54土坑-2) ……707
 P L-71 土坑-38 (II c 56土坑) ……707
 P L-72 土坑-39 (II c 58土坑-1・II c 58土坑-2) ……708
 P L-72 土坑-39 (II c 58土坑-3) ……708
 P L-73 土坑-40 (II c 58土坑-4・II c 58土坑-5) ……709
 P L-73 土坑-40 (II d 59土坑) ……709
 P L-74 土坑-41 (II d 53土坑・II d 58土坑) ……710
 P L-74 土坑-41 (II d 59土坑-1) ……710
 P L-75 土坑-42 (II d 59土坑-2・II d 59土坑-3) ……711
 P L-75 土坑-42 (II e 59土坑-1) ……711
 P L-76 土坑-43 (II e 59土坑-2・II e 59土坑-3) ……712
 P L-76 土坑-43 (II f 55土坑) ……712
 P L-77 土坑-44 (II f 55土坑-2・II f 57土坑) ……713
 P L-77 土坑-44 (II f 58土坑-1) ……713
 P L-78 土坑-45 (II f 58土坑-2・II f 59土坑-1) ……714
 P L-78 土坑-45 (II f 59土坑-2) ……714
 P L-79 土坑-46 (II f 60土坑・II g 56土坑) ……715
 P L-79 土坑-46 (II h 56土坑) ……715
 P L-80 土坑-47 (II h 57土坑-1・II h 57土坑-2) ……716
 P L-80 土坑-47 (II h 58土坑) ……716
 P L-81 土坑-48 (II h 59土坑・II h 60土坑) ……717
 P L-81 土坑-48 (II h 61土坑) ……717
 P L-82 土坑-49 (II h 61土坑) ……717
 P L-82 土坑-49 (II i 59土坑・II i 60土坑-1) ……718
 P L-82 土坑-49 (II i 60土坑-2) ……718
 P L-83 土坑-50 (II i 60土坑-3・II i 60土坑-4) ……719
 P L-83 土坑-50 (II i 61土坑-1) ……719
 P L-84 土坑-51 (II i 61土坑-2・II i 61土坑-3) ……720
 P L-84 土坑-51 (II i 62土坑) ……720
 P L-85 土坑-52 (II i 62土坑) ……720
 P L-85 土坑-52 (II i 58土坑-1・II i 58土坑-2) ……721
 P L-85 土坑-52 (II i 58土坑-3) ……721
 P L-86 土坑-53 (II i 59土坑・II j 60土坑) ……722
 P L-86 土坑-53 (III a 59土坑) ……722
 P L-87 土坑-54 (III a 60土坑・III b 59土坑) ……723
 P L-87 土坑-54 (III c 60土坑) ……723
 P L-88 土坑-55 (I h 67土坑・I h 69土坑) ……724
 P L-88 土坑-55 (I i 67土坑) ……724
 P L-89 土坑-56 (I i 68土坑-1・I i 68土坑-2) ……725
 P L-89 土坑-56 (I i 68土坑-3) ……725
 P L-90 土坑-57 (I i 68土坑-4・I i 69土坑) ……726
 P L-90 土坑-57 (I i 70土坑) ……726
 P L-91 土坑-58 (I j 67土坑・I j 69土坑) ……727
 P L-91 土坑-58 (I j 70土坑) ……727
 P L-92 土坑-59 (I j 70土坑) ……727
 P L-92 土坑-59 (II a 68土坑・II a 70土坑) ……728
 P L-92 土坑-59 (II a 75土坑) ……728
 P L-93 土坑-60 (II c 68土坑-1・II c 68土坑-2) ……729
 P L-93 土坑-60 (II c 69土坑) ……729
 P L-94 土坑-61 (I j 68土坑) ……730
 P L-94 土坑-61 (I j 68土坑・II b 58埋設土器) ……730
 P L-94 土坑-61 (II g 61埋設土器) ……730
 P L-95 燒土-1 (II a 7燒土・III b 5燒土) ……731
 P L-95 燒土-1 (III b 6燒土-1) ……731
 P L-96 燒土-2 (III b 6燒土-2・I i 74燒土) ……732
 P L-96 燒土-2 (III d 9陷穴) ……732
 P L-97 陷穴狀遺構-2 (III e 8陷穴・II j 46陷穴) ……733
 P L-97 陷穴狀遺構-2 (III a 40陷穴・III a 43陷穴) ……733

P L-98	陷穴状遺構-3	(Ⅲ c 48陷穴・Ⅲ d 43陷穴 Ⅲ e 43陷穴・Ⅲ e 53陷穴)	…734	P L-130	遺構内の土器(土坑-1)	…764
P L-99	陷穴状遺構-4	(Ⅲ f 43陷穴・Ⅲ f 51陷穴 Ⅲ f 52陷穴・Ⅲ g 49陷穴)	…735	P L-131	遺構内の土器(土坑-2)	…765
P L-100	陷穴状遺構-5	(Ⅲ h 50陷穴・Ⅲ h 46陷穴 Ⅲ h 49陷穴・Ⅲ i 44陷穴)	…736	P L-132	遺構内の土器(土坑-3)	…766
P L-101	陷穴状遺構-6	(Ⅲ i 46陷穴・Ⅲ i 43陷穴 Ⅳ b 34陷穴・Ⅱ g 63陷穴)	…737	P L-133	遺構内の土器(土坑-4)	…767
P L-102	陷穴状遺構-7	(Ⅲ h 62陷穴・Ⅲ h 63陷穴 Ⅱ i 61陷穴・Ⅱ j 60陷穴)	…738	P L-134	遺構内の土器(土坑-5)	…768
P L-103	陷穴状遺構-8	(Ⅲ a 59陷穴・Ⅲ b 58陷穴 Ⅲ c 57陷穴・0 j 73陷穴)	…739	P L-135	遺構内の土器(土坑-6)	…769
P L-104	陷穴状遺構-9	(Ⅰ a 73陷穴・Ⅰ b 72陷穴 Ⅰ d 72陷穴・Ⅰ e 71陷穴)	…740	P L-136	遺構内の土器(土坑-7)	…770
P L-105	陷穴状遺構-10	(Ⅰ d 73陷穴・Ⅰ e 73陷穴)	…741	P L-137	遺構内の土器(土坑-8)	…771
P L-106	陷穴状遺構-11	(Ⅰ f 71陷穴・Ⅰ g 71陷穴 Ⅰ i 70陷穴・Ⅰ j 69陷穴)	…742	P L-138	遺構内の土器(土坑-9)	…772
P L-107	陷穴状遺構-12	(Ⅱ a 68陷穴・Ⅱ a 69陷穴-1 Ⅱ a 69陷穴-2・Ⅱ b 68陷穴)	…743	P L-139	遺構内の土器(土坑-10)	…773
P L-108	陷穴状遺構-13	(Ⅲ h 49陷穴・Ⅲ b 62陷穴 Ⅲ f 42陷穴)	…744	P L-140	遺構内の土器(土坑-11)	…774
P L-109	副穴-1	(Ⅲ e 53陷穴・Ⅲ f 52陷穴 Ⅲ h 46陷穴)	…744	P L-141	遺構内の土器(土坑-12・陷穴-1)	…775
P L-110	副穴-2	(Ⅲ h 47陷穴・Ⅲ i 44陷穴・Ⅲ i 43陷穴 Ⅱ g 63陷穴・Ⅱ h 62陷穴・Ⅱ h 63陷穴)	…745	P L-142	遺構内の土器(陷穴-2)	…776
P L-111	副穴-3	(Ⅱ i 62陷穴・Ⅱ j 60陷穴・Ⅲ a 59陷穴 Ⅲ b 58陷穴・Ⅲ c 57陷穴・0 i 73陷穴)	…746	P L-143	遺構内の土器(陷穴-3)	…777
P L-112	副穴-4	(Ⅰ a 73陷穴・Ⅰ b 72陷穴・Ⅰ d 72陷穴 Ⅰ i 70陷穴・Ⅰ j 69陷穴・Ⅰ f 71陷穴)	…747	P L-144	遺構内の土器(陷穴-4・埋設土器・焼土)	…778
P L-113	副穴-5	(Ⅰ d 73陷穴・Ⅰ e 73陷穴・Ⅰ g 71陷穴 Ⅱ a 69陷穴・Ⅱ b 68陷穴)	…748	P L-145	遺構内の土器-1	…779
P L-114	土葬墓-1	((1)Ⅲ h 27土葬墓)	…748	P L-146	遺構内の土器-2	…780
P L-115	土葬墓-2	((2)Ⅰ e 40土葬墓 (3)Ⅰ g 41土葬墓-1)	…749	P L-147	遺構内の土器-3	…781
P L-116	土葬墓-3	((4)Ⅰ g 41土葬墓-2 (5)Ⅰ h 40土葬墓)	…750	P L-148	遺構内の土器-4	…782
P L-117	土葬墓-4	((6)Ⅰ i 41土葬墓 (7)Ⅱ b 41土葬墓)	…751	P L-149	遺構内の土器-5	…783
P L-118	土葬墓-5	((8)Ⅱ i 38土葬墓 (9)Ⅱ i 39土葬墓)	…752	P L-150	遺構内の土器-6	…784
P L-119	土葬墓-6・火葬墓-1	((10)Ⅱ j 38土葬墓・(3)Ⅰ i 40火葬墓-2 (4)Ⅰ j 40火葬墓)	…753	P L-151	遺構内の土器-7	…785
P L-120	火葬墓-2・古代住居跡	((1)Ⅰ i 39火葬墓・(2)Ⅰ i 40火葬墓-1 Ⅰ i 75住居跡)	…754	P L-152	遺構内の土器-8	…786
P L-121	溝跡	((1)Ⅰ d 40溝跡・(2)Ⅱ a 42溝跡)	…755	P L-153	遺構内の土器-9	…787
P L-122	遺構内の土器(住居跡-1)		…756	P L-154	遺構内の土器-10	…788
P L-123	遺構内の土器(住居跡-2)		…757	P L-155	遺構内の土器-11	…789
P L-124	遺構内の土器(住居跡-3)		…758	P L-156	遺構内の土器-12	…790
P L-125	遺構内の土器(住居跡-4)		…759	P L-157	遺構内の土器-13	…791
P L-126	遺構内の土器(住居跡-5)		…760	P L-158	石器-1	…792
P L-127	遺構内の土器(住居跡-6)		…761	P L-159	石器-2	…793
P L-128	遺構内の土器(住居跡-7)		…762	P L-160	石器-3	…794
P L-129	遺構内の土器(住居跡-8)		…763	P L-161	石器-4	…795
				P L-162	石器-5	…796
				P L-163	石器-6	…797

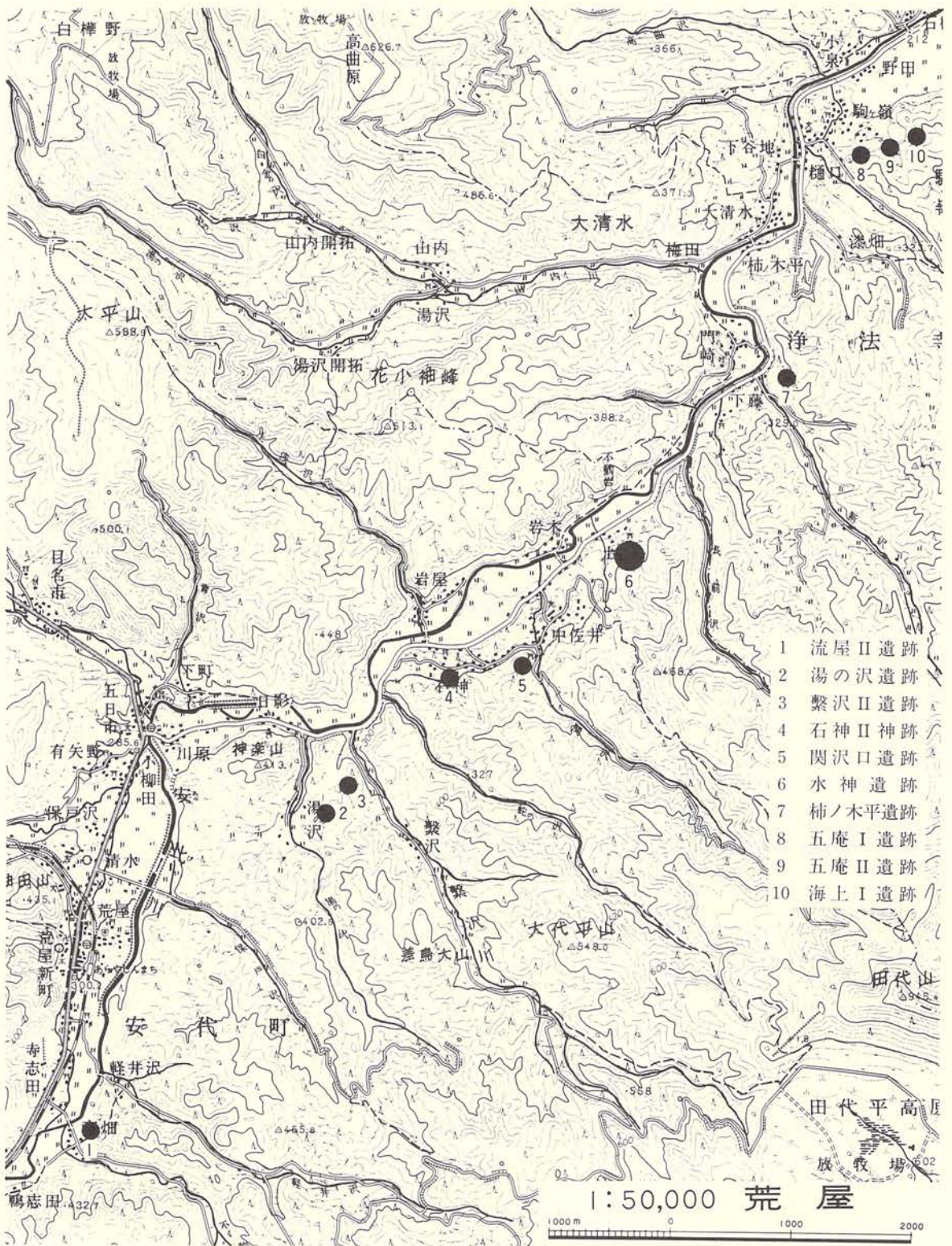
P L-164 石器-7	798	P L-175 石器-18	809
P L-165 石器-8	799	P L-176 石器-19	810
P L-166 石器-9	800	P L-177 石器-20	811
P L-167 石器-10	801	P L-178 石器-21	812
P L-168 石器-11	802	P L-179 石器-22	813
P L-169 石器-12	803	P L-180 弥生・古代	814
P L-170 石器-13	804	P L-181 中近世の遺物	815
P L-171 石器-14	805	P L-182 墓壙出土の遺物-1	816
P L-172 石器-15	806	P L-183 墓壙出土の遺物-2	817
P L-173 石器-16	807	P L-184 墓壙出土の中近世の遺物	818
P L-174 石器-17	808		

目 次

第 1 表	安代町内の遺跡	25	第 7 表	土製品計測一覧表	546
第 2 表	I j 40火葬墓出土の米粒計測表	509	第 8 表	石器の器種別・石質別集計表	555
第 3 表	住居跡観察一覧表	515	第 9 表	石器計測一覧表	558
第 4 表	土坑類観察一覧表	522	第 10 表	土葬墓・火葬墓等一覧表	576
第 5 表	土坑集計表	525	第 11 表	出土貨幣計測一覧表	577
第 6 表	陥し穴状遺構観察一覧表	534	第 12 表	金属製品計測一覧表	577



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡の位置

I 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、二戸郡安代町で青森線と分岐し、青森県八戸市に至る約68kmの高速自動車専用道である。このうち本県にかかわる第7次施行命令区間は約27.6km、第8次施行命令区間26.7kmである。第7次施行命令区間に所在する遺跡の調査は、昭和58年度で全て終了しており、安代町の分岐点から浄法寺町、二戸市を通り一戸インターチェンジに至る第8次施行命令区間の発掘調査を終了すれば、八戸線関連の調査は全て終了することとなる。

昭和53年11月に第8次施行命令が出され、その後命令区間の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて、県教育委員会と日本道路公団仙台建設局との間で協議が重ねられた。そのなかで浄法寺町には天台宗の古刹で種々の重要文化財を有する天台寺が存在し、天台寺緑地保全地域となっていることから、路線はこの地を避けて設定されることとなった。

県教育委員会文化課では、昭和54年12月に日本道路公団の協力を得て、実施計画路線沿いを500m幅で埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、その結果をもとに更に両者で協議を重ねた。昭和56年5月の日本道路公団による路線発表後、文化課では路線敷地内における埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、約30の遺跡を確認した。昭和57年度には安代町所在の5遺跡の発掘調査範囲について確認調査を行った。

昭和58年度には安代町内4遺跡の発掘調査が当センターに委託され、湯の沢Ⅲ遺跡、繫沢Ⅱ遺跡、石神Ⅱ遺跡の調査と、関沢口遺跡の粗掘遺構確認調査が行われた。関沢口遺跡は昭和59年度継続調査となった。また、この年度中に浄法寺町所在の12遺跡について発掘調査範囲の確認調査が行われた。

昭和59年度には、安代町の2遺跡・関沢口遺跡の継続調査と水神遺跡の調査及び浄法寺町所在9遺跡の柿の木平Ⅲ遺跡、五庵Ⅰ遺跡、五庵Ⅱ遺跡、海上Ⅰ遺跡、海上Ⅱ遺跡、大久保遺跡の調査と、沼久保遺跡、桂平遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡の工事用道路分の調査が委託されて、調査を実施した。このうち、沼久保・桂平・飛鳥台地Ⅰ遺跡の3遺跡は昭和60年度の継続調査となった。また、この年度中には、二戸市分と一戸町分それぞれ6遺跡の発掘調査範囲の確認調査が行われ、その際に浄法寺町所在の五庵Ⅲ遺跡、広沖遺跡が新たに追加された。これによって浄法寺町内の遺跡は既に確認されている田余内Ⅰ・田余内Ⅱ・安比内Ⅰ遺跡を加え14遺跡となり、これらの発掘調査は昭和60年度に行われることとなった。(第1・2図)(近藤)

II 調査方法とその経過

1. 野 外 調 査

〔調査区の設定と遺構の呼称〕

(第3・4図)

調査区域は高速道路線の最大幅110m強、路線延長300m強の広さがあり、発掘調査を必要とする面積は22.360m²である。調査区域内は安比川に合流する二つの沢と農道によって分断されていることから、これをもとにして便宜的に北からA区・B区・C区・D区に分けて呼称した。

調査区は4m×4mを最小単位とし、調査範囲全面を対象とする総グリッドを設定した。調査区を設定する基準点は、日本道路公団が測定した路線中心杭の平面直角座標第X系による公共座標値を、X=14340m、Y=23140mに移動・修正して0基点とした。0基点は調査区の北西角の交点とし、南北方向は北からアラビア数字で1・2・3……の連番とし80まで区分した。東西方向は最初に0基点から東に40mを単位とする大区画をし、東からローマ数字で0・I・II…IVと呼んだ。さらに、40mを4mずつに10等分し、西からアルファベットでa・b・c……iまで付した。1調査区単位の呼称は、東西方向の大区画名と小区画名を頭に冠し、続いて南北の区画名と組み合わせるとI a 1・II a 1・II i 10等と呼称した。

遺構名は、その遺構の位置する調査区名と遺構種別名を組み合わせ、II a 1住居跡、II a 1土坑、II a 1陥し穴状遺構のように命名した。1調査区に同種の遺構が複数ある場合(重複も含めて)は、II a 1住居跡-1、II a 1住居跡-2として区別したが、新旧関係は考慮していない。

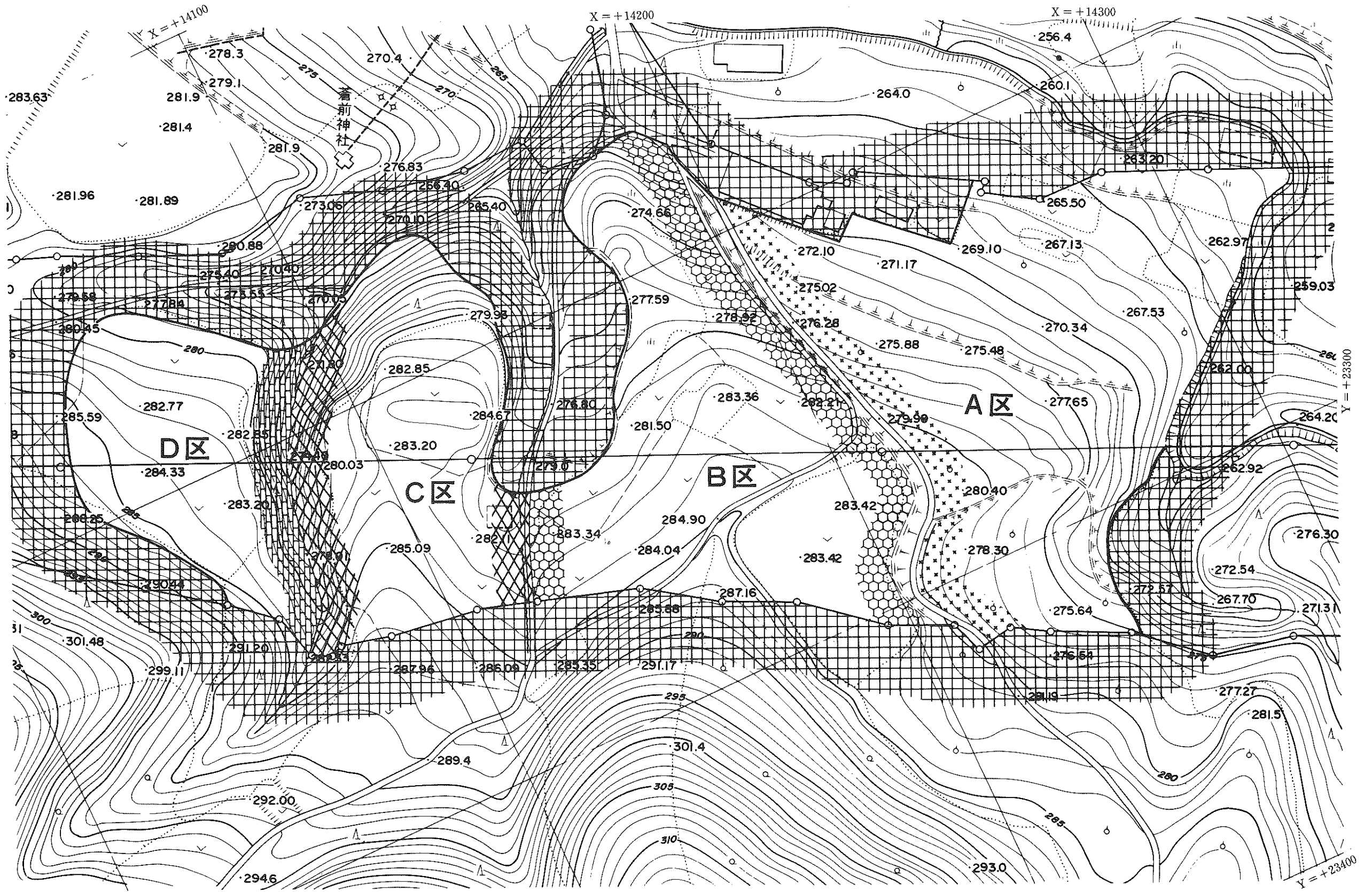
〔粗掘りと遺構検出〕

調査区域の現状が畑であることと、沢や農道によって大きく4地区に分かれ、地区によって地形や遺物の地表分布に差があることから、粗掘りと遺構検出は次のように計画した。

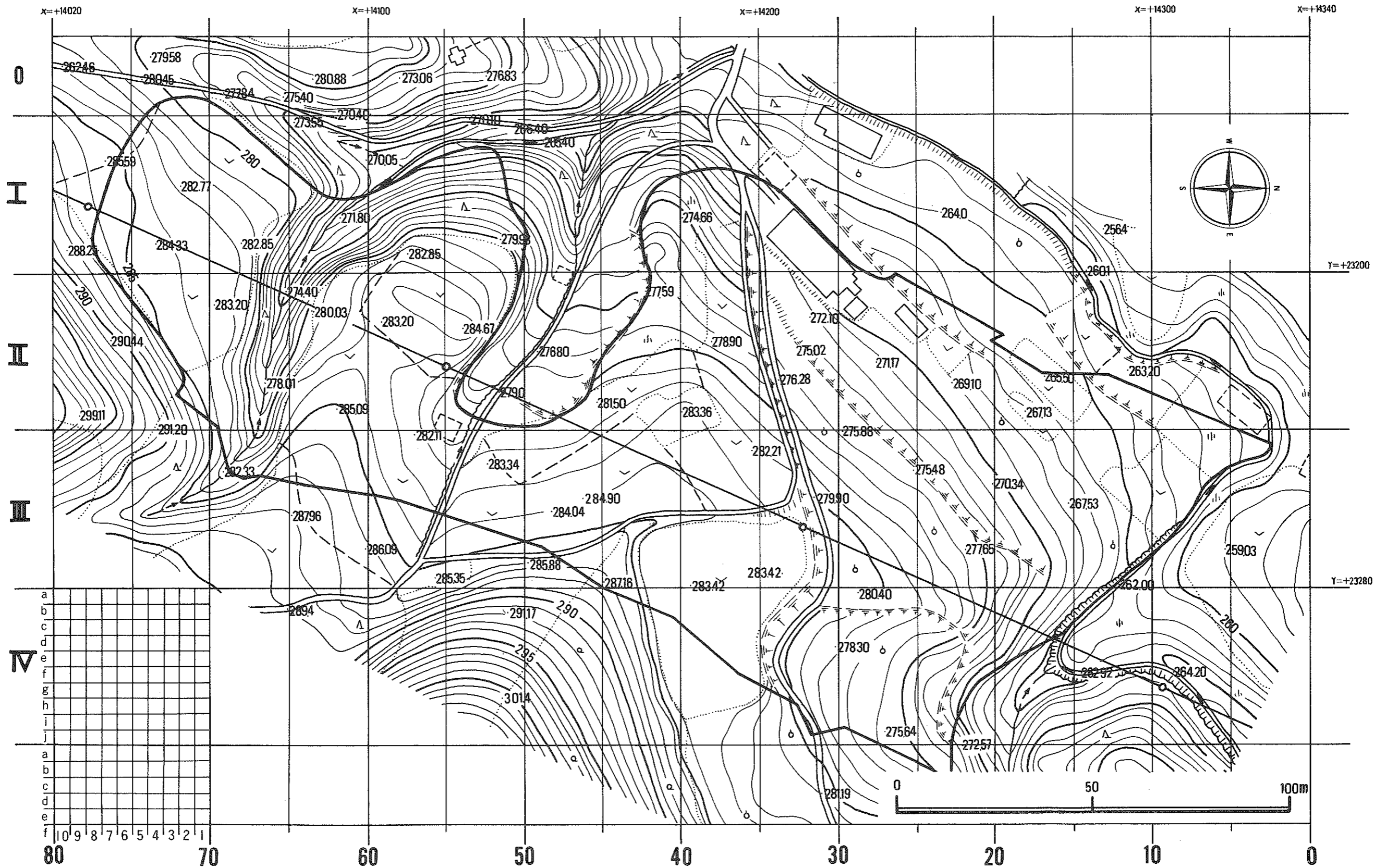
各区とも最初に試掘溝を入れて、旧地形や土層の堆積状況と遺物の包蔵状態を把握する。実際の粗掘りは、手掘りと重機を併用することとし、方法の選択は試掘溝での結果で決定する。ただし、二者択一的とはせず、自由に使い分ける。手掘り区は調査区ごと、層位ごとに進めることを原則とする。重機による場合は掘りすぎにならないように留意するとともに最後の一剝ぎは遺構検出を兼ねて手掘りとする。

以上の手順によって作業を進めたが、地区別では次の方法で粗掘りを行った。

A区北端の段丘崖沿いは表土も深く、遺物も若干包蔵されていることから手掘りとした。また、B区寄りの斜面部分には遺物が全くないことから重機によったが、最高位の緩斜面部分は



第3図 調査範囲と調査地点の区分



第4図 グリッド配置図

手掘りをした。B区は全面手掘りを原則としたが、北東端に位置する水田部分は最大層厚2m弱の盛土があるため、重機を使用した。C・D区は試掘溝の段階で遺物の出土が多かったことと、遺構と推定される部分が検出されたことや、表土が予想より薄いことから全面手掘りとした。

遺構は表土の薄い部分では基本層序第V層上面、厚い部分では同IV層で検出されている。従って、表土の厚い部分は反復して数回の遺構検出を行った。

検出された遺構は位置や規模を明瞭にするため、消石灰の水溶液で線引きし、明確にした。

〔精査〕

遺構の掘り上げは、住居跡4分法、土坑と陥し穴状遺構は2分法で行ったが、ほかの遺構はそれぞれの性格によって最良の方法を選択し、適宜使い分けた。

埋土の排除や遺物の取り上げは層位を確認して、作業を行った。遺構外から出土した遺物は出土地点、層位を確認し一括して取り上げた。遺構内出土の遺物も同様であるが、埋土上位のものは層位ごとに一括し、床面出土の遺物は平面図に位置を記入して写真撮影の後取り上げた。

〔記録〕

実測図は平面図、土層図、遺構断面図とも縮尺 $1/20$ を基準としたが、必要に応じて縮尺 $1/10$ も採用し、適宜使い分けた。実際の実測は、平面図は調査区区画線を基準とした1m間隔の水糸を遺構全面に張り、それを測量基線とした。土層図や完掘断面図は水平水糸を張り、それを基線として実測した。この方法は各遺構とも共通している。実測図は各遺構とも平面図・土層図・完掘断面図と、炉跡・焼土・埋設土器では断ち割り断面図をも作成した。

基本層序は、各区とも斜面高位から低位まで連続するように作成し、地形の傾斜と各土層の地点による層厚を把握した。ただし、深掘りはD区で行い、他の地区は土坑や陥し穴状遺構の壁面を観察して代用した。

土層名は、基本層序は上位層からローマ数字でI・II・IIIとし、遺構埋土は上位層からアラビア数字で1・2・3と表記し、細分される場合はII a・II bとアルファベットを付した。

写真撮影には、6cm×7cm版1台(モノクロ)と35mm版2台(モノクロ、カラーリバーサル)のカメラを一組みにして使用した。実際の撮影は、埋土土層、完掘一次、完掘二次、炉や柱穴、副穴の細部、場合によっては検出状況などを対象とした。また、遺物は床面直上出土のもの、埋土内出土でも実測したもの等は撮影した。ほかに遺跡の近景、遠景、作業風景等や随時メモ的に撮影し記録として残した。なお、終了に近い10月中旬に、航空機で空中から遺跡全景を撮影した。

2. 室内整理

〔実測図関係〕

各種の実測図は、野外調査中に一応の点検、修正、補記は終了していたが、再度点検の上報告書作成に必要な実測図を選択し、トレース用原図を作成した。なお、原図は遺構の種類ごとに分類した後、各遺構種別ごとに図面番号を付し、さらに全実測図を報告書の目次順に整理番号を与えて実測図登録台帳を作成した。

〔写真関係〕

撮影済のモノクロフィルムは全てベタ焼きを作成し、一組みにしてネガアルバムに整理し、遺構名や撮影場面等を書き込んだ。カラーライドはライドファイルに挿入し、必要事項の書き込みをした。続いて、モノクロ・カラーともそれぞれ連番を付し、整理台帳を作成した。

遺物の撮影は報告書に掲載するものに限定したが、遺物の登録番号順にベタ焼きと一組みにして、整理した。最後に、遺構同様整理台帳を作成した。

報告書には撮影した全遺構と例言に表示の遺物を掲載した。

〔遺物関係〕

土器の出土総点数が35,000点強と多量のため、野外調査中に水洗は終了したが、ラベル記入は全体の $\frac{2}{3}$ が終了しなかった。室内整理では、最初遺構出土とそれ以外、そして石器に大別した。遺構出土のものは各遺構ごとに出土点数を算出した後、掲載遺物の選択をし、1点ごとの観察一覧表を作成した。遺構外出土のものは調査区ごとに出土点数を数え、さらに口縁部・体部・底部の各部位ごとの出土数を把握した。その集計が終了したあと掲載遺物を選択したが、本遺跡の性格を網羅できるように配慮した。実際の選別は型式学的方法によった。実測図は全て実大で作成し、実測不能の個体については拓影図で掲載することにした。

石器の場合には、器種分類した後登録台帳に記入し、実測と法量計測を並行して行った。全て実大で実測した。

報告書掲載用のトレースは実大で行うことを原則としたが、特に大型のものは $\frac{1}{2}$ に縮尺してトレース原図とした場合もある。

3. 報 告

以上の作業を経て本報告書を作成した。本報告書の全体的な構成は次のとおりである。

〔遺構関係〕

図版は住居跡・土坑・陥し穴状遺構・墓墳関係 $\frac{1}{40}$ 、埋設土器・焼土遺構 $\frac{1}{10}$ 、溝跡 $\frac{1}{60}$ ・ $\frac{1}{120}$ になるように調整したが、各図版ごとに縮尺率を明記した。

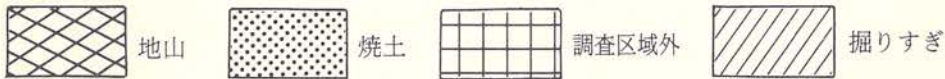
また、図版中で使用した略号やスクリーントーンは次のとおりである。

凡例—1

S——礫

P₀——土器

P₁・P₂・P₃……P_n—遺構内部に付随する土坑

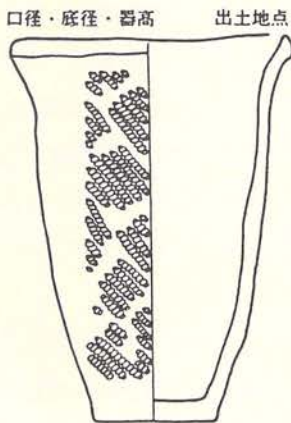


〔遺物関係〕

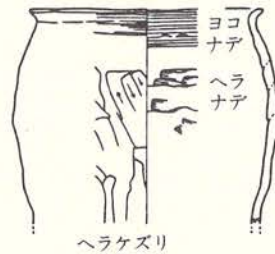
土器実測図— $1/2 \cdot 1/3$ 、土器拓影図— $1/2 \cdot 1/3$ 、土製品—実大・ $1/2 \cdot 1/3$ 、石器— $1/2 \cdot 1/3 \cdot 1/6$ 、金属製品— $1/2$ 、陶磁器— $2/3 \cdot 1/2$ で掲載したが、各図版ごとにその旨を明記した。

また、土器の出土地点、層位・法量は凡例—2、土師器の調整技法は凡例—3、石器の出土地点・器種は凡例—4のように示した。

凡例—2



凡例—3



凡例—4



〔写真関係〕

遺構関係の縮尺は不定である。

遺物は種類ごとに統一するように配慮したが、実測図と異なりおおよそ次の縮尺率を原則とした。

- 土器——実測図・拓影図とも $1/3$ ○土製品——全て $1/3$
- 石器——剝片石器と磨製石斧は $1/2$ 、礫器類は $1/3$ 、石皿は $1/4$
- 貨幣——実大 ○金属製品・馬の歯牙・狐の下顎—— $1/2$

〔執筆分担〕

野外調査で、各区を調査員が交替で担当していたことから、原則的には担当した調査員が原稿を執筆したが、遺物分と記載漏れ分については遺跡担当者が記述した。直接的な分担は例言に記したが、本文の中では次の略号で示した。

- 昆野 靖—Ko ○菊池利和—Ki ○長沼 彬—Na ○光井光行—Mi ○高橋義介—Ta
- 高橋与右エ門—Y なお、執筆者名のない中・近世以外の記載は全て高橋与右エ門が担当した。

4. 調査の経過

〔野外調査〕

冬期間の降雪量が多かったことから、消雪状況と調査範囲の確認、地形の把握、野外調査開始時期の決定等のために、4月12・13日に現地に赴き確認をしたところ、思いの外消雪が遅れており、当初予定されていた4月16日調査開始の日程を大幅に遅らせることとし、当安代町地区の関沢口・水神の2遺跡は4月23日に調査を開始することとした。

調査開始時点では、日向部分の地表がやっと露出する程度に雪が消えたのみで、日陰や吹き溜まり部分には50cm～1mの残雪があった。このため、当初は雪面に黒色土を散布したりの消雪作業を先行させ、並行して調査事務所建設予定地の整地、雪がない部分の雑物撤去、刈払い作業を4月23日から4月27日まで行った。調査事務所のプレハブ2棟は4月24・25日に建設した。

本格的な粗掘りを開始する前に、各地区とも試掘溝を入れて旧地形や土層等を確認する計画を立てていたことから、北端のA区からB・C・D区の順で4月28日から5月9日まで試掘溝による予備調査を行った。その結果をもとに、C・D区は手掘りのみによる粗掘り、A・B区は手掘りと重機を併用することにした。

粗掘りは5月7日にB区南西端の沢沿い低地から始め、順次C・D・B・A区と進め、手掘り部分に対する粗掘りは7月3日に終了した。その後、バケットの爪に鉄板を貼り付けたバックホー(0.7m³)での粗掘りを7月2日からA区を開始し、次いでB区に移動して7月24日に終了した。遺構検出は粗掘りの終了後、各地区ごとに行った。また、各地区とも斜面上位から下位まで続く土層観察用の畔を残し、粗掘りや遺構検出の一助とした。

調査区を区分する杭打ち作業を、粗掘り作業と並行して5月8日から始めた。路線中心杭の平面直角座標第X系による座標値から、公共座標に調査区基点を移動・修正し、C・D・B・A区の順に作業を進めた。

精査は、B区の粗掘り中に作業員を二班に分けて6月5日にD区から始め、7月20日で終了した。その後、当日からB区に移動し、10月25日に全て終了するまで続けた。一方、B区の粗掘りを続行した班はその後A区の粗掘りに移り、終了後は引き続き7月17日から8月11日まで精査を行った。8月3日からはA区の精査に従事した作業員の一部がC区の精査に着手した。A区の精査が完全に終了したのは8月11日であるが、その当日からC区の精査に合流し、精査が終了するまで継続した。また、B区西突端部については、精掘りをB区と同時に終了し、精査は数日遅れて始めた。

精査が進行していく段階で作成される各種の実測図は、作業員の中から2名一組の実測班を編成して作成し、この方法をほぼ固定させる形で精査を終了するまで継続した。写真撮影は作

業員が清掃を終了した後、調査員が行った。

出土した遺物は、調査開始当初から専属に作業員を充当して水洗作業を続け、さらに雨天や雨天直後の野外調査が困難な日も継続した。その間に一部はラベル記入も終えたが、大多数は室内整理に持ち越した。

なお、8月3日に当町教育委員会浅沢公民館主催による浅沢少年少女教室と老人教室が開かれたが、要請によって調査員が講師となって講話し、遺跡は体験学習の場として開放して協力した。野外調査が終了に近づいた10月12日に、安代町当局、関係各位、報道関係、一般町民など63名が参加して現地説明会を開いた。

また、数遺跡から2種類の火山灰が検出されたことから、6月30日に岩手大学井上克弘助教授を招き、現地で直接指導を受け鑑定を依頼した。A区とB区から合わせて10基の土葬墓と4基の火葬墓が検出されたが、岩手医科大学野坂洋一郎教授に鑑定を委託することとし、8月9日に人骨供養を行った後、8月9日～8月23日に野坂教授の手によって取り上げられた。

以上、野外調査に関わる一連の作業は10月25日に終了し、10月26日に撤収した。

〔室内整理〕

野外調査が終了後、11月1日から室内整理に入った。最初は、野外調査中に終了できなかった撮影済フィルムと写真の整理から始めた。その間に石器の仕分け分類を進め、11月6日から実測を開始し、出土した431点全てを終了したのは12月25日である。また、石器に並行して土製品の実測も行った。土器の仕分け分類は12月20日から始め、復元・実測を要するもの、拓影図を作成するものを選択しながら土器破片数の集計を行い、1月9日で終了した。一方、土器の接合・復元は実測とほぼ並行しながら、1月10日から2月5日まで続け、土器の実測は12月25日から2月7日までに290個体を実測した。土器と石器の実測図は点検・修正されたものから業者に委託してトレースした。

遺構内から出土した土器のうち、拓影図の作成を要するものは812点であり、2月5日から3月6日の約1カ月間を要した。引き続き断面図作成、断面図トレース、貼り合わせの作業を3月13日まで継続した。遺構外出土の土器で拓影図を要するものは311点であり、3月14日から3月29日までで終了した。

野外調査中に作成された遺構に関連する各種の実測図は、遺構の種類ごと、地区ごとに仕分けされた後整理番号を付し、登録台帳を作成した。次いで、再度点検の後トレース用第二原図を作成した。検出された総遺構数が281遺構であり、トレース・スクリーン貼り・文字打ち込みに12月27日から3月18日までを要した。

遺構関係の写真は外注で引き伸した後2月13日から3月8日までトリミングをし、引き続き台紙貼付に入った。遺物の撮影は3月25日から開始し、4月25日までの間に掲載遺物全てを終

了したが、写真関係の作業は固定した作業員が継続して行い、5月31日に終了した。

遺構・遺物の図版作成は3月19日から着手され、5月8日ではほぼ終了し、その後5月31日まで点検・確認作業を続けた。図版関係の作業が一段落した5月10日から遺物や各種実測図の収納に関連する台帳の作成を並行して行った。

原稿の執筆は、各地区を担当した調査員によって遺構説明の記述を行ったが、遺物については登録台帳の作成が終った3月以降から始められ、大半は4月・5月に持ち越した。

実際の作業は、既述したような単純なものではなく、常に何種類かの作業を並行して進めたが、検出遺構数281、掲載遺物総点数1948点の処理が昭和59年度内に終了する見込みが立たず、昭和60年度も4月・5月の2カ月延長して整理を続けた。終了予定期日の5月31日には、調査員が点検し修正する作業は若干残ったが、作業員を要する作業はほぼ終了した。

III 位置と立地および環境

1. 位置と環境

〔位置〕

(第2・5図)

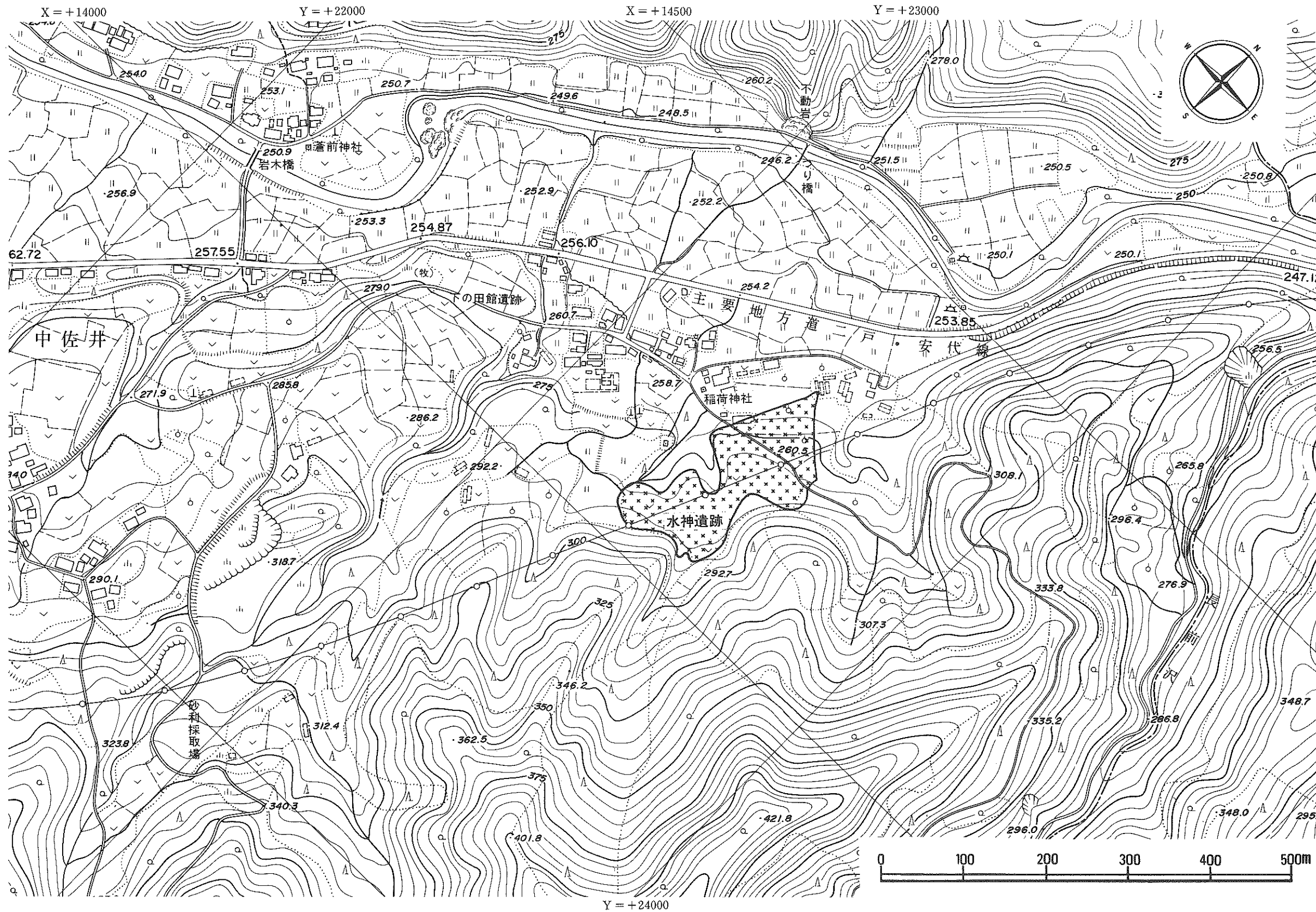
本遺跡は岩手県二戸郡安代町字土沢108を中心とする場所にあり、国鉄花輪線「荒屋新町駅」の北東5.8km、安代町役場の北東5.6kmに位置する。二戸郡安代町は岩手県の北西端、二戸郡では西端を占め、西は秋田県鹿角市、北は青森県三戸郡、そして東は浄法寺町、南が西根町と松尾村に四周を囲まれ、総面積456.94km²、人口8,400人余の町である。当町は昭和22年に市制町村制施行に伴って荒屋村と浅沢村が合併して荒沢村となり、その後、同31年に田山村をも合わせ、当地域の経済・文化に深い関わりをもつ安比川から「安」、米代川から「代」の一字ずつ採って安代町と命名された。遺跡の所在する「字土沢」は旧浅沢村に属し、当町内では最北東端に位置しており、浄法寺町に接している。

県都盛岡市から国道4号を北上し、岩手郡滝沢村分れ交差点で左折して国道282号を西進すると、岩手郡西根町・松尾村を通過して当安代町に入る。当町の役場が所在する荒屋新町を通り抜けて約2km北進すると五日市交差点に差し掛かり、ここで右折して主要地方道二戸—安代町線を北東に4.5km進むと、国鉄バス路線「土沢」停車場に到達する。遺跡はこの土沢停車場の南150mに約30,000m²の広がりをもって所在する。

〔環境〕

(第2・5図)

馬淵川水系最大の支流安比川は当町南端に在り、岩手郡松尾村と境する安比岳(1458m)北東斜面の中腹に流れをおこし、小屋の畑地区までは僅かに蛇行して北東に流れ、欠の山(635.9m)



第5図 遺跡付近の地形
- 15・16 -

の東側裾部を巻いて当町の中心をなす荒屋新町の東側を、やや北に向きを変えて五日市地区に至る。五日市地区ではやや上流で曲田川と新田川、下流では目名市沢と流れを合わせ、東に向きを変えて二戸郡浄法寺町を貫流し、二戸郡一戸町で馬淵川と合流する。

当町の平野部（平坦面）は安比川の本支流沿いに広がり、そのほとんどは農地として利用され、荒屋新町より上流部では微高地や丘陵地裾部に集落が立地する。五日市地区より下流左岸の岩屋・岩木地区の集落は上流部の立地と同じ状況を示し、右岸地区に比較して規模が小さい。右岸の石神・中佐井・土沢地区の集落は、裾部のほか河岸低地面より高位の段丘面に形成されている。これは左岸部は段丘の形成が悪く、集落立地として不適当なことによるであろう。右岸の主要地方道二戸—安代線沿いの家並は、土沢・中佐井・石神の集落を通る旧鹿角街道が、現在の路線に変更された後にできあがった。本遺跡もこれらの集落が立地する左岸の段丘面と連続する同位の段丘上に占地する。

遺跡の500mほど北方を安比川が北東に流れ、川筋と遺跡との間に河岸低地（沖積段丘新期面）が広がり、集落や農地として利用され、遺跡最高位と現河床面とは約37m、水田面と31m位の比高がある。遺跡の北西端には水田面と比高7m～8mの段丘崖があり、遺跡北端部の土層観察によれば、沖積段丘古期面に相当する部分が斜面裾部に残っている。

遺跡の北側～北東側は流水を伴う沢が比高7m～20mで開析し、300m北方で安比川と合流する。A区は全体が北端部と南端部が19mの比高をもつ北～北西向きの斜面をなし、本来はB区の北西斜面部に相当する。B区とC区の間には上流部が埋没した幅60m～70mで、最大比高21mの沢があり、現在も東側調査区域外の斜面裾部から僅かの湧水がある。また、B区の北側はA区に続く斜面部で、大半が南～南西向きの斜面をなしているが、西端は南北両側に傾斜する尾根が馬の背状に延びており、尾根末端部と最高位とは約8mの比高がある。C区も調査範囲内はB区西端と似た尾根状の台地であるが、D区と境する沢の右岸に扇状的に発達した地形で、元来はB区と連続していたのが、沢の浸食によって分断されたものと推定される。D区と限る沢は幅10m、比高11m～5mのV字谷で、常時流水を伴っている。D区は丘陵地北西側裾部に発達した緩斜面を示す段丘であるが、西側が比高7m～5m位の沢となっている。

遺跡の東側は田代山（954.4m）の北西斜面裾部が延び、土沢～石神間に観察される段丘は全てこの裾部にとりついている。

遺跡内の標高は地点によって差があるものの、最高位で287m、最低位261mで25m強の標高差がある。細かく見ると、A区の北端が261mと最も低く、B区では270m～287mと高低差が大きい。C区は280m～287mの範囲、D区が280m～285m位と、A・B区より差が小さい。

2. 地形と地質

〔地形〕

(第6図)

当町は南西端の安比岳(1458.3m)から、高倉山(1051.3m)、黒森(741.5m)、上の木山(768.5m)、稲庭岳(1078m)と北へ連なる標高700m以上の山群によって、西側の米代川流域と東の安比川流域に大別されるが、本遺跡の立地する安比川流域に限定して概観することとする。

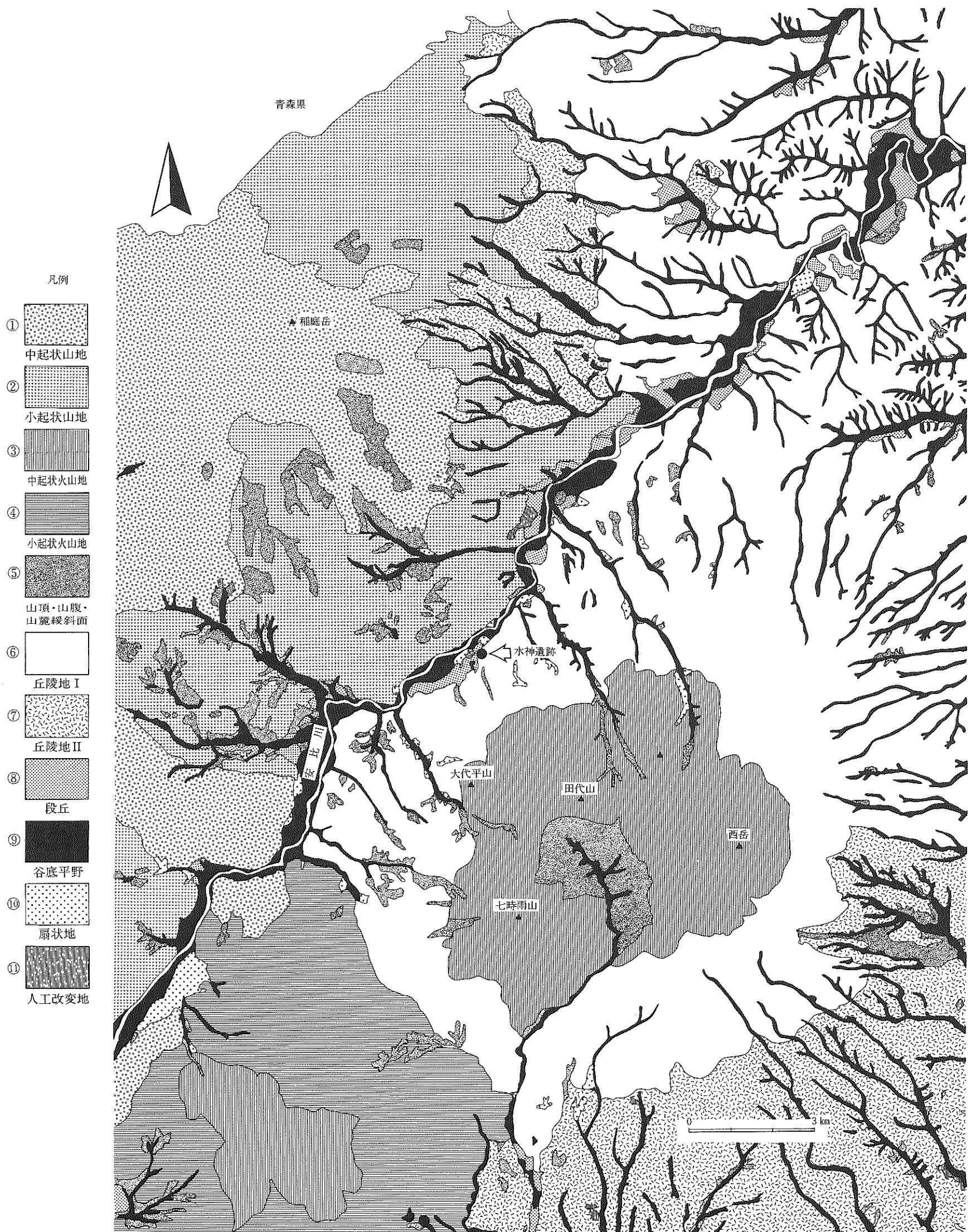
山地：当町の80%強は山林原野が占め、農地は僅か3.6%である。安比川の南には岩手郡西根町と境界をなす七時雨山(1060m)を主峰とする山群があり、南西部は八幡平連峰に続いている。この山群は田代山(954m)、毛無森(904m)を含む火山地で、田代平はこれらの崩壊性カルデラであり、裾野は各方向に広がる。浄法寺町の稲庭岳から南西に続く山群は、七時雨山地と異なり、新第三系の荒屋層を貫いて出た石英安山岩や石英粗面岩からなる例が多い。尾根上に広がる緩斜面は、第四紀の火山砕屑層が輝石安山岩を被って堆積し、牧草地として利用されている。

丘陵地：七時雨山群の裾野に広がる火山性山麓地が丘陵地として区分され、丘陵地Ⅰは左岸に、丘陵地Ⅱは両岸に観察される。右岸は、七時雨火山起源の火砕流や火山砕屑物で構成され、10km強の広がりをもつ。丘陵を刻む谷は放射状に延び、火山特有の谷を示し北斜面は安比川に合流している。丘陵地Ⅰは七時雨山群をとりまく標高700m～500mの地域で、500m以下が丘陵地Ⅱとなっている。丘陵地Ⅰ・Ⅱとも尾根部分は火山砕屑層からなる緩斜面をなし、牧草地として利用されている。

段丘：安比川流域の段丘形成は非常に不良である。特に、小屋の畑地区より上流にはみられない。左岸部は時沢、曲田川、目名市沢の合流点と曲田川の両岸に発達するが、曲田川沿いを除くと、小規模である。右岸地区には、石神から土沢に続く比較的規模の大きな面がある。安比川の現河床とは20m～40m、谷底平野とは5m～20m、水田面とは30m位の比高がある。これらの段丘面はいずれも乳白色や明灰褐色の火山灰が堆積した、いわゆる八戸浮石流凝灰岩からなるシラス台地としての特徴をもつ。この特徴は馬淵川流域の洪積低位面といわれる福岡段丘と共通することから、本段丘も洪積低位段丘に相当するであろう。なお、後背山麓との接続部が扇状地性堆積物や崖錐性堆積物に被覆される部分がある。たとえば、赤坂田・扇畑地区、有矢野地区、曲田川と新田沢の両岸に観察される。また、この面はシラスの上位が八戸火山灰に被われるのも特徴の一つである。農地や集落として利用されている。

この面には多くの遺跡が立地し、発掘調査された遺跡も大半はこの面上にあり、本遺跡も同様である。

谷底平野：安比川の本支流域では、その両岸に河岸低地としての谷底平野が良く発達する。本



第6图 地形面区分图

流域では幅が200m～300mあり、特に高畑地区～目名市沢との合流点付近までが300m～500mと広くなり、流域の平坦面としては最も広い面で、当町の中心街荒屋新町の町並が立地する。安比川の河床とは比高5m以内で良く安定した平坦面を形成し、ほとんどは水田、微高地は畑地として利用されている。火山灰の堆積は認められず、砂礫層や粘土化したシルト層の上位を、腐植質の多い黒色土系の土が被う。新期沖積面に相当するであろう。

また、上位の段丘との接続部分に新期面より若干高位の部分がある。たとえば、保戸沢、川原、日影、日影の対岸、岩木、本遺跡の北から北西の縁辺部に観察される。本遺跡の例では、新鮮な円礫の上位に砂質気味の明褐色シルトが堆積し、その上位を黒色土が被う。一部は崖錐性扇状地の可能性をもつが、所謂谷底平野の沖積古期面と理解することができ、馬淵川流域の堀野段丘に対比されるであろう。

現在のところ、古期面では遺跡の立地が知られる（保土沢遺跡）が、新期面ではない。

扇状地：谷底平野部に、段丘を開析する沢によって運ばれた一般的な扇状地と、斜面崖壊や流下に伴う崖錐性扇状地がある。前者はあまり顕著でないが、下町・岩屋・土沢に小規模な扇状地がある。後者は目名市沢の兩岸、小屋の畑地区に観察され、斜面から平坦面への変換点では、多少の差こそあれほとんどみられる。遺跡の存在は明らかではない。

以上のように、安比川流域で最も広い面積を有する平坦面は、本支流に広がる谷底平野で、農地（特に水田）や集落として利用される。段丘の発達は不良で、面積的にも狭く、地域的にも限定されており、畑地や集落が立地する。本地域の段丘には洪積低位面と、沖積古期・新期面がある。遺跡の立地を見ると、洪積低位面に多くあり、沖積古期面が少なく、新期面にはないという結果がでている。

〔地 質〕

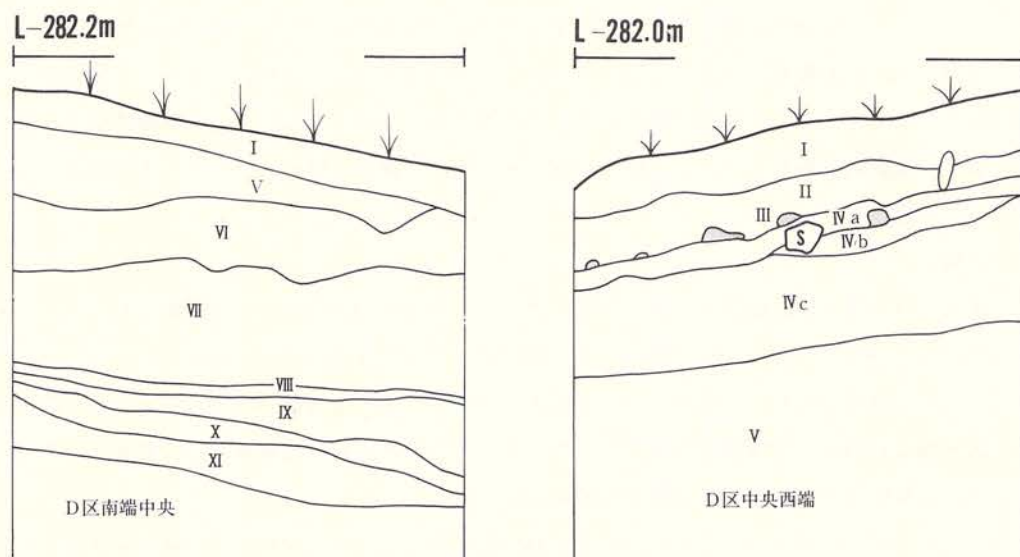
（第7図）

山地は全域が第三紀以降の火山性岩石を基盤とし、特に第四紀以降の安山岩質の岩石や火山碎屑物が広く分布する。安比川を始めとする河川沿いには洪積世の段丘や扇状地が形成され、段丘面は浮石流凝灰岩やその上位の八戸火山灰といった火山性堆積物が被う。安比川や沢沿いの谷底平野には細長く沖積層が堆積する。さらに、安山岩質岩石分布地域の沢源流部や谷の出合部には、崖錐性や扇状地性の堆積物が分布する。

いたる所に火山灰が堆積し、地表を被う土壌の全てが火山灰を母材にすると推定される。また、小起伏の山地と丘陵地には黒ボク土系の土壌、大起伏山地には褐色森林土に属する土壌が分布し、後者にも前者に類似するものが多い。

本遺跡の立地する地形は、洪積段丘低位面に相当することは既述のとおりである。以下にその基本層序を記すことにする。なお、層位は上位層からローマ数字でⅠ層・Ⅱ層とした。

- I 層：現在の地表を被う土で、ほとんどは耕作土である。耕作や攪乱と斜面下方への流下によって、土性が地点ごとに若干異なり、斜面下位は黒ボク土起源の黒色～黒褐色のシルト、斜面上位特に尾根頂上部はV層やVI層が露出し、灰褐色を示す火山灰質の土である。層厚は15cm～25cmで、ほぼ遺跡全面を被う。若干の遺物を包蔵するが、原位置を保っていない。本層から検出された遺構はない。
- II 層：斜面下位の耕作土の起源となった黒ボク土である。本来は遺跡全面を被うと考えられるが、斜面下位に流下したと推定され、現在は斜面上位には堆積しない。A区北端、B区南端、C区中央部南斜面、D区中央部北斜面等では30cm～50cm位の層厚がある。遺構のうち、掘り込みの深い住居跡や陥し穴状遺構に堆積する本層下部に、黄味を帯びた淡い茶褐色を示す微粒の白頭山火山灰が小塊状で点在することから、本層はさらに細分される可能性を示す。多くの遺物を包蔵するが、斜面上位から流下したものと推定される。本層から検出された遺構はない。
- III 層：十和田 a 降下火山灰層である。斜面下位のIV層が堆積する地点と、掘り込みの深い住居跡と陥し穴状遺構に堆積する。堆積状況には、厚さ3cm～5cmで層状に堆積する例、最大径10cm位の大塊状に混在する例、ほぼ全体に散状で混入する例の3型がある。上位の降



第7図 基本層序

下火山灰である白頭山火山灰の約10cm下位に堆積する。粒径1mm～1.5mmを最大とする浮石粒を多く含む降下火山灰で、色調は灰白色～灰褐色まで雑多である。遺構・遺物ともない。

- IV 層：暗褐色～黒褐色のシルトで、若干粘性をもつ。III層が堆積する斜面下位にのみ堆積し、遺構内では確認されていない。最も厚く堆積するC区中央南斜面部で25cm～30cmの層厚があり、B・D区では薄く、A区には堆積しない。本層の上位に縄文時代後期後葉の遺物を包蔵し、遺構が本層で検出されている。
- V 層：黄橙色のローム質火山灰で、八戸火山灰に相当するであろう。比較的軟弱で、径5cm～10cm位の軟質浮石塊を混じる。層厚は50cm～1mである。A区の南端、B区頂上部西側は、削平や流下によって堆積しない。また、斜面上位では表土である耕作土を除去すると本層上面が露出し、そのまま遺構検出面になる場合が多く、全ての遺構が本層を掘り込んでいる。なお、IV層の堆積する部分では、粒径1mm～1cm位の南部浮石的な浮石粒が本層の上面に層厚数cmで堆積する。無遺物層である。
- VI 層：八戸浮石流凝灰岩に相当すると考えられる「シラス」の堆積層である。A～D区まで堆積し、本遺跡の載る段丘の基盤を構成しており、大半の遺構は本層に達している。径15cm位の大粒浮石塊や炭化樹幹等を混在する。粒径は大小の差が大きく、良くしまっている。層厚は確認していない。無遺物層である。

以上が本遺跡で観察された基本層序の概略であるが、本層序は必ずしも全地区共通していない。たとえば、A区の北端部ではV層を欠いて新鮮な砂礫層が観察されるし、B区東端頂上部では、後背丘陵地裾部がV層の下位に潜り込む。D区では北端沢の崖沿いがV層の上位に沢を流下した土砂が堆積しており、調査区南端では丘陵地裾部がV層の下位に潜り込んでいる。

以上のことから考えると、本遺跡で観察されるV層（八戸浮石流凝灰岩）は、後背丘陵地の裾部を被う堆積状況を示し、A区北端の砂礫層は安比川による新期堆積の砂礫層と考えることができる。

遺構や遺物との関係でみると、本遺跡の主体をなす縄文時代後期後葉～末葉の遺構はIV層中で検出され、同時期の土器も同層上位が最も下層での出土であるが、本遺跡は黒色土の発達が貧弱で、表土を除去したV層上面で遺構の存在が確認される場合が多く、ほかの時代や時期と土層との関係は、明らかにし得なかった。

3. 安代町の遺跡

(第8図・第1表)

安代町内で遺跡台帳に登録されている遺跡は138か所である。その中から安比川水系に所在する縄文時代から中世にかけての84遺跡を第8図に示した。種類別の内訳は散布地49、集落跡31、

その他4、時代別では縄文時代81、弥生時代3、古代13、中世6である。なお、重複の場合はそれぞれ1遺跡とした。このうち、発掘調査された遺跡は昭和50年の保土沢遺跡、昭和53年以降の東北縦貫自動車道建設に伴う赤坂田Ⅰ遺跡をはじめとする18遺跡の計19遺跡である。以下、調査された遺跡を中心に、時代別にその概略を述べる。

縄文時代

縄文時代の時期別の内訳は早期1、前期7、中期26、後期31、晩期21である。散布地には各時期を含むが、発掘調査で検出された住居跡は中・後・晩期に属し、早・前期を欠く。中期の住居跡は12遺跡から44棟、後期が8遺跡から59棟、晩期が4遺跡から59棟、中期末葉から後期初頭にかけての6棟、その他時期不明が17棟である。中期の遺跡で10棟を越える住居跡を検出している遺跡はなく、1～3棟の遺跡が多い。後期になると5～8棟の遺跡が多く、本遺跡例のように10棟を越える例もある。晩期になると、曲田Ⅰ遺跡では55棟、他の遺跡では1～2棟が検出されている。住居跡が検出された遺跡数は時期が下がると減り、一遺跡あたりの住居跡数は逆に増える傾向にある。

弥生時代

この時代の遺構が検出された遺跡は曲田Ⅰ遺跡と本遺跡のみである。当遺跡からは住居跡、曲田Ⅰ遺跡からは墓塚が検出されている。他には関沢口・曲田Ⅰ・上の山館・当遺跡から若干の土器片が出土したのみで、この時代の遺跡は少ない。

古代

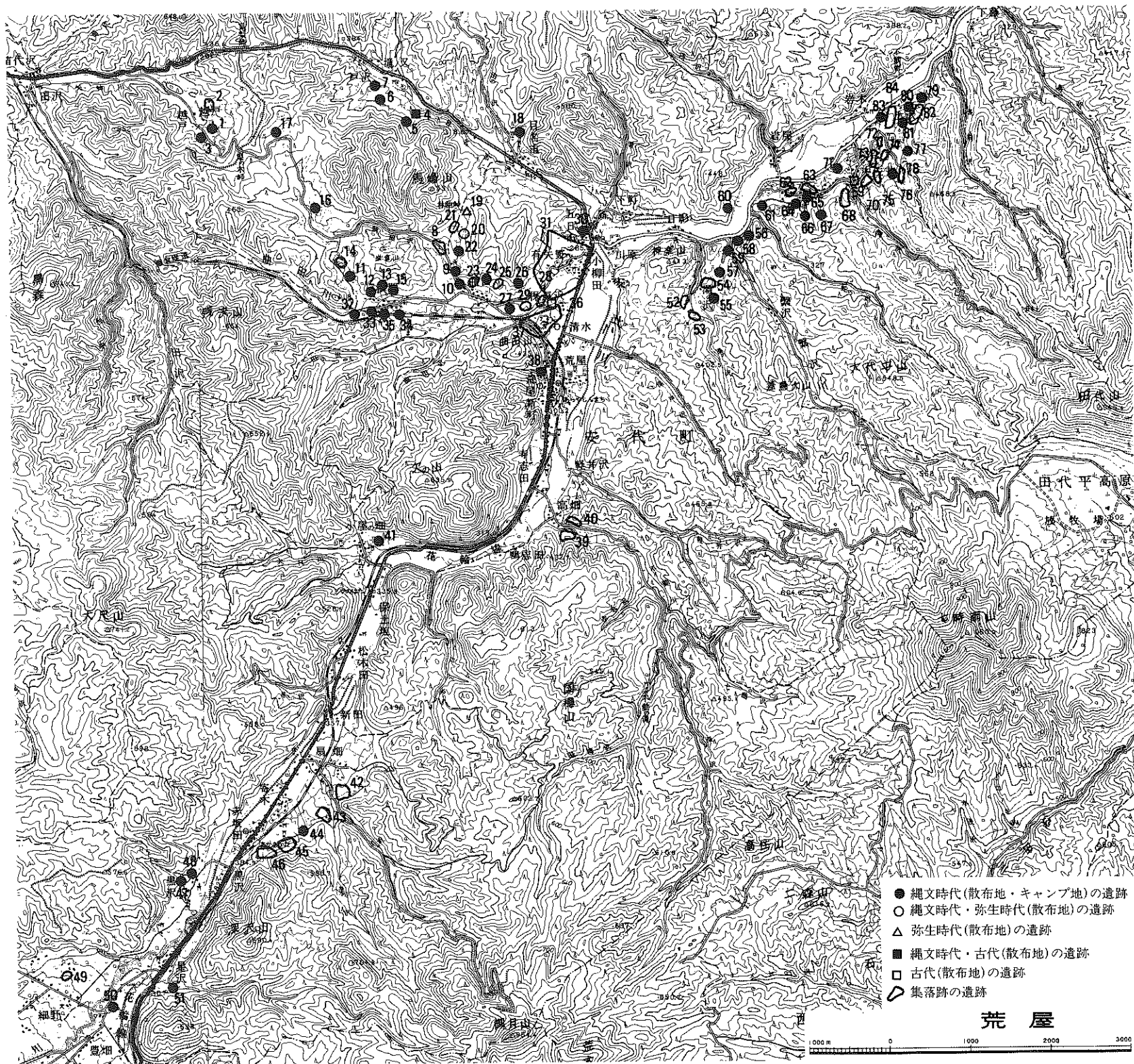
検出された住居跡はいずれも平安時代に属し、奈良時代の例はない。10遺跡から72棟の住居跡が検出され、10棟を越える遺跡が扇畑Ⅰ遺跡(11棟)と上の山Ⅶ遺跡(39棟)の2カ所ある。他の8遺跡はいずれも1～5棟の検出である。安比川流域では奈良時代の住居跡例は現段階ではなく、全て平安時代に属するのが特徴である。

中世

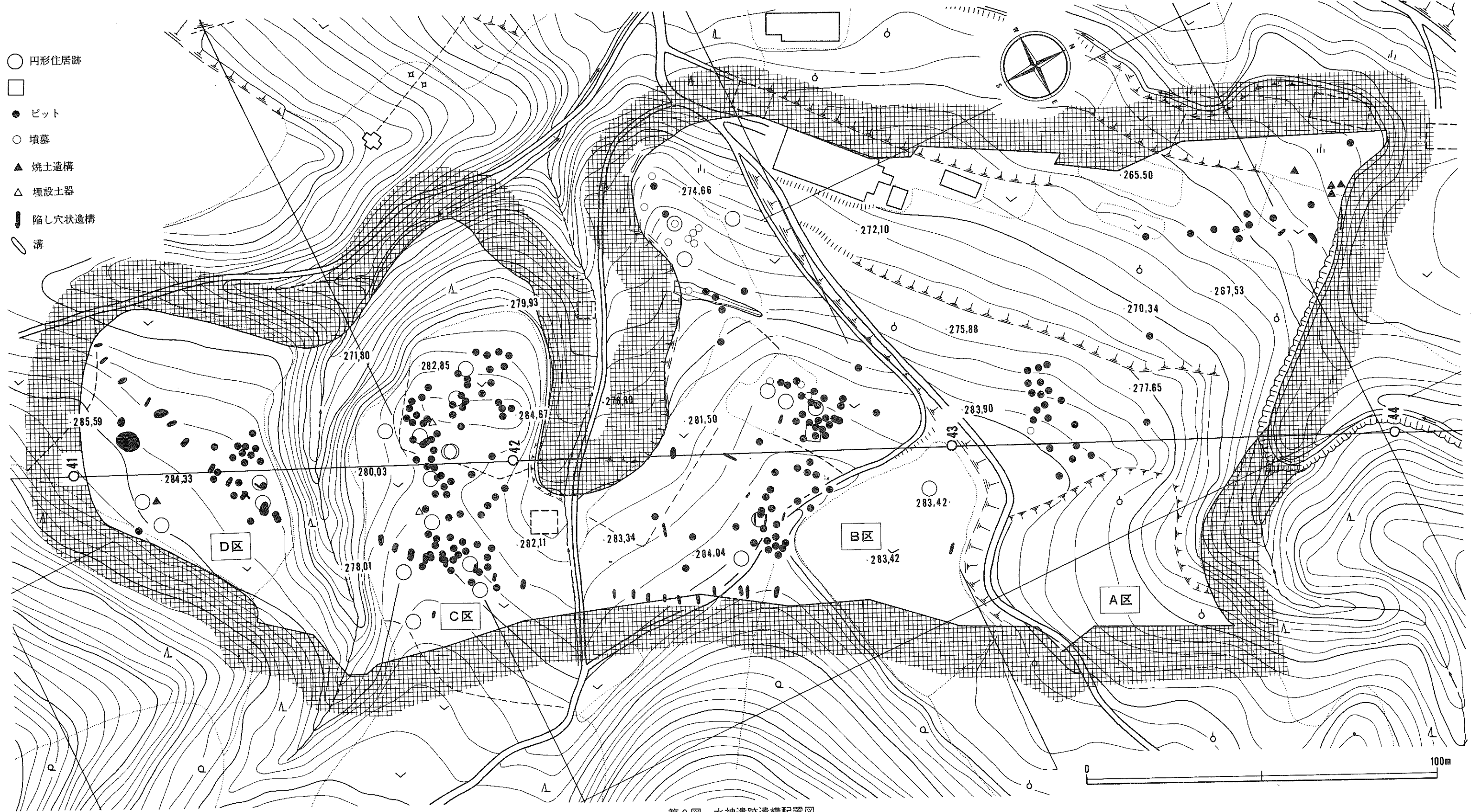
中世のものと思われる建物跡遺構は、関沢口遺跡の3棟をはじめ上の山館遺跡、曲田Ⅰ遺跡にある。共伴遺物によって所属時代が明確にされている例はないが、形態から、中世ないしは近世前期頃までの遺構としたものが多い。(玉川英喜)

第1表 周辺遺跡一覽表

番号	遺跡名	種別	時代(時期)	番号	遺跡名	種別	時代(時期)
1	越戸 I	散布地	縄文時代	43	厚畑 II	集落跡	縄文時代
2	越戸 II	集落跡	" (中期)	44	寄木	散布地	"
3	越戸 III	散布地	"	45	赤坂田 I	集落跡	" (後・晩期)・古代
4	戸沢 I	"	"・古代	46	赤坂田 II	"	" (中・後期)
5	戸沢 II	"	" (中～晩期)	47	黒沢 I	キヤンブ	"
6	戸沢 III	"	"	48	黒沢 II	"	"
7	戸沢 IV	"	"	49	細野	集落跡	" (後期)
8	曲田 I	集落跡	"	50	豊畑 I	散布地	" (中・後期)
9	曲田 II	散布地	"	51	星沢	キヤンブ	" (中期)
10	曲田 III	"	"	52	湯の沢 I	集落跡	" (中・後期)
11	曲田 IV	"	"	53	湯の沢 II	"	" (中・後期)
12	曲田 V	"	"	54	湯の沢 III	"	" (中～晩期)
13	曲田 VI	"	"	55	湯の沢 IV	散布地	"
14	曲田 VII	集落跡	"	56	繫沢 I	"	" (中期)
15	曲田 VIII	散布地	"	57	繫沢 II	"	" (前・中期)
16	曲田 IX	"	" (中期)	58	日影 I	"	"
17	曲田 X	"	" (後・晩期)	59	日影 II	"	"
18	目名市	"	" (後期)	60	岩屋	"	"
19	上の山 I	"	弥生時代(中期)	61	山口	"	"
20	上の山 II	"	縄文時代・弥生時代(後期)	62	八幡館跡	集落跡・館跡	" (前・中期)
21	上の山 III	集落跡	縄文時代(後・晩期)弥生時代(中期)	63	石神 I	集落跡	" (前期)
22	上の山 IV	散布地	縄文時代(中期)	64	石神 II	散布地	"
23	上の山 V	集落跡	"・古代	65	石神 III	"	" (前期)
24	上の山 VI	散布地	"	66	石神 IV	"	" (後・晩期)
25	上の山 VII	集落跡	" (中・後期)・古代	67	石神 V	"	" (後・晩期)
26	上の山 VIII	散布地	"・古代	68	関沢	集落跡	" (中・後期)・古代
27	上の山 IX	"	" (中・後期)	69	古屋敷	散布地	古代
28	上の山 X	集落跡	" ()・古代	70	山の神	集落跡	縄文時代(後・晩期)
29	上の山 III	"・館跡	" (中期)・古代・中世	71	北ノ城	跡	"・中世
30	有矢野館	散布地・館跡	" (中・後期)・中世	72	中佐井 I	集落跡	" (後・晩期)
31	有矢野	集落跡	" (早～晩期)・古代	73	中佐井 II	"	" (後・晩期)
32	ヤカマシダ	散布地	" (晩期)	74	中佐井 III	"	" (中～晩期)
33	横間台	"	" (前・中期)	75	中佐井 IV	"	" (中～晩期)
34	横間 I	"	"	76	中佐井 V	散布地	"
35	横間 II	"	"	77	山岸 I	"	" (後・晩期)
36	保土沢	"	古代	78	山岸 II	集落跡	" (晩期)
37	保土坂	集落跡	縄文時代(中・晩期)・古代	79	土沢 I	散布地	" (後・晩期)
38	荒屋館	散布地・館跡	"・古代・中世	80	土沢 II	"	" (後・晩期)
39	荒屋 I	集落跡	" (中・後・晩期)	81	土沢 III	"	" (後・晩期)
40	荒屋 II	"	" (中期)	82	水	集落跡	"
41	小屋畑	散布地	" (前期)	83	下の田	散布地	" (後期)
42	扇畑 I	集落跡	" (後期)・古代	84	下の田館	集落跡・館跡	" (後・晩期)・中世



第8図 安代町の遺跡位置



第9図 水神遺跡遺構配置図

IV 縄文時代の遺構と遺物

本遺跡の発掘調査で検出された遺構には、縄文時代、弥生時代、古代、中・近世に位置づけられるものがある。その中で縄文時代の遺構の種類と数は次のとおりである。

○住居跡——23棟 ○住居跡状遺構——1棟 ○土坑——186基

○陥し穴状遺構—46基 ○焼土遺構——5か所 縄文時代の遺構合計—268遺構

現地調査では、調査必要面積が22,360㎡と广大で、道路や沢によって分断されているため、A区からD区まで分けて呼称した。その地区分けに沿って記述することにする。(第9～12図) また、遺構内からは完形や破片の土器を出土しており、その内訳は以下のとおりである。

土器

○住居跡——実測土器76点、破片総数	3808点 (内 231点拓影)	掲載点数	307点
○住居跡状遺構——実測土器 1点、破片総数	11点 (内 2点 〃)	掲載点数	3点
○土坑——実測土器40点、破片総数	1789点 (内 419点 〃)	掲載点数	459点
○陥し穴状遺構——実測土器16点、破片総数	655点 (内 124点 〃)	掲載点数	140点
○その他——実測土器 2点、破片総数	1点 (内 1点 〃)	掲載点数	3点
合計	134点	6253点 (内 785点 〃)	掲載総点数 912点

石器

○住居跡——95点(内訳—剥片石器40点、石核 1点、磨製石斧 3点、礫器39点、石製品 2点)

○土坑——46点(内訳——剥片石器 7点、磨製石斧 2点、礫器36点、石製品 1点)

○陥し穴状遺構——6点(内訳——剥片石器 1点、磨製石斧 3点、礫器 1点、石製品 2点)

合計 147点(内訳——剥片石器48点、石核 1点、磨製石斧 5点、礫器37点、石製品 5点)

以上、遺構に伴って出土した遺物は、土器は一部を選択し、石器は全点掲載した。実測図はそれぞれの出土した遺構の実測図と組み合わせている。

1. 住居跡

A区を除く各地から、B区——9棟、C区——12棟、D区——2棟検出されている。

〔B区〕

(1) I h 40住居跡

〔遺構〕 (第13図、P L—11)

B区西方突端部の尾根中央部に位置する。I h 40土葬墓と重複し、すぐ西側にはI h 40土坑が近接している。I h 40土葬墓の盛土を除去し、さらに基本層序第II層の黒色土を剥いた面で

検出された。基本層序第V層を掘り込んだ堅穴住居跡である。

確認された規模は、東西4.66m、南北3.53m位であるが、北壁方は斜面にかかっているため明確でない。形状は、東西方向を長軸とする長円形と推定される。

壁は30cmでいずれも緩やかであり、床面はほとんど平坦であるが、斜面に沿って西側に若干傾斜している。炉周辺の床面は比較的堅固であるが、東側では特に変化は認められない。

炉跡は西壁寄りに位置する石囲い炉であり、I h 40土葬墓によって東側ほぼ半分が壊されているが、本来は径50～60cm位の円形と推定される。残存する4個の垂角礫は、床面から27～30cm位掘り込んで据えられている。炉床には炭化物が含まれ、薄い焼土の形成が認められる。

北壁寄りの床面からは径85cm、深さ18cm位の不整な円形土坑が検出されている。断面は浅い皿状となるが、壁や底面に凹凸部分があり、攪乱を受けて不整をなす埋土からは、木根の痕跡と識別することができない。

そのほか、住居跡に伴うと思われる柱穴や壁構等の施設跡は確認されていない。

埋土は、基本層序第II・IV層を主体とするシルト質土で、5層に細分される。いずれの土層にも多少の浮石が点在するほか、1層には炭化物もまじる。一部は攪乱を受けているが、東側からの流入が多い推積状況を示すことから、自然に埋没した遺構と推定される。(Ko)

〔遺物〕

土器と石器があり、石器3点(277～279)以外はすべて埋土内から出土した。

土器 (第14・15図1～7・308、PL-122)

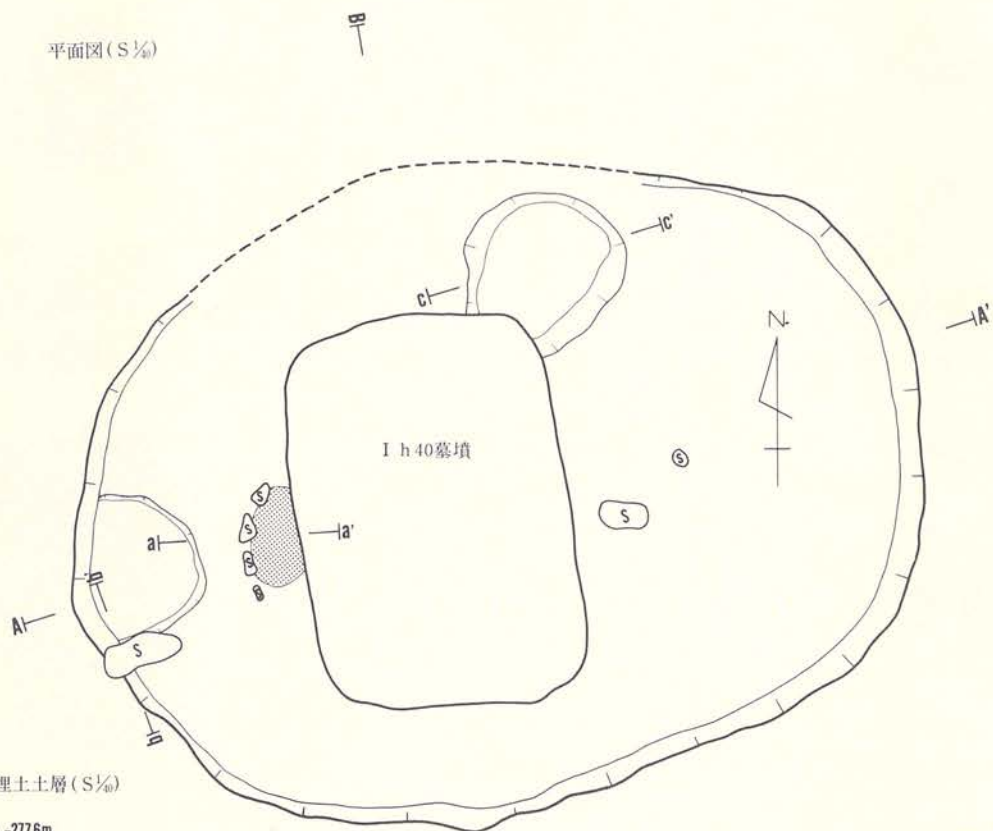
実測可能なもの3点と破片187点が出土した、1・2は底部～体部下端を残存する深鉢形か鉢形土器の破片で、1・2とも底面には木葉痕(笹?)がある。308は口縁部～体部中位と底部を残す個体であるが、実測図は図上で推定復元された。推定される器高約48.5cm、底径12.2cm、口縁部径29.6cmの深鉢で、底面に網代痕がある。体部上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は外反し、端部が肥厚する複合口縁である。他は全体部の破片である。1以外の器表にはいずれもLR(2・5・6・308)、RL(3・7)、RLR(4)の縦回転や横回転による単節や複節の斜行縄文をもつ。

以上のことから、当遺跡の分類にしたがえば全て第IX群に属し、その中でも1～8は1類、308は7類に該当する。

石器 (第15図52・170・277～279、PL-159・165・170・171)

52は搔器で、幅広で短い剥片を素材とし、下縁～右側縁に裏面から片面剥離を主とした調整を加え、下縁には裏面へも簡単な剥離がある。170は不定形剥片の下縁左側に使用時の刃毀れと考えられる使用痕をもつ剥片である。277～279は円礫の自然面を磨石と凹み石に使用している。磨面はいずれも両面にもち、凹みは277以外が両面使用である。

平面図 (S_{1/40})



埋土土層 (S_{1/40})

A1L-277.6m

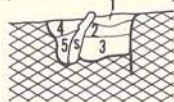


B1L-277.3m

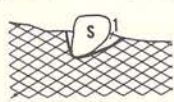


炉跡断面 (S_{1/40})

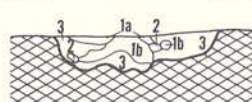
a1L-277.0m



b1L-277.1m



c1L-277.2m



縮尺 1/40

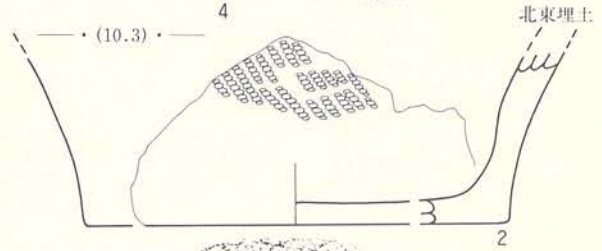
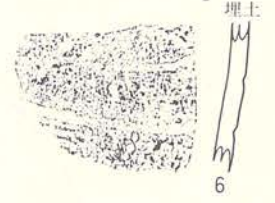
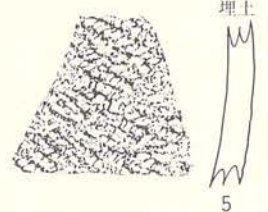
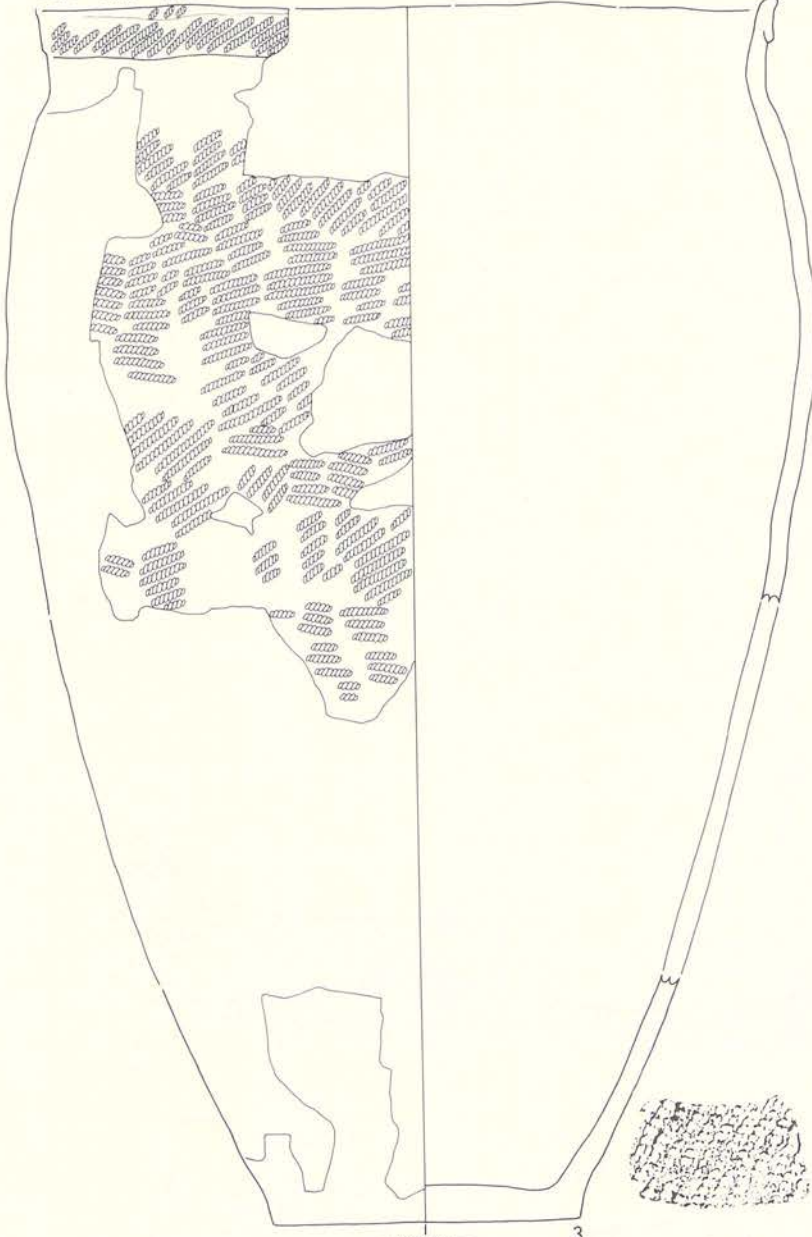
I h 40住土層

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 褐色	シルト質。浮石・炭化物点在。
2	7.5YR 5/6 橙色	〃
3	7.5YR 3/4 暗褐色	〃 浮石点在。
4	7.5YR 5/6 褐色	〃
5	7.5YR 5/6 明褐色	〃

I h 40住炉跡土層

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 極暗褐色	シルト。炭化物・焼土含む。
2	7.5YR 5/6 褐色	シルト。焼成で赤変。
3	7.5YR 5/6 明褐色	焼土。
4	7.5YR 5/6 橙色	基本層序IV層。
5	5 YR 5/6 赤褐色	シルト。炉石の掘り方埋土。
6	5 YR 5/6 〃	〃
7	7.5YR 5/6 暗褐色	〃 攪乱層。
8	7.5YR 5/6 明褐色	基本層序V層。
9	7.5YR 5/6 暗褐色	シルト。炉石掘り方埋土。

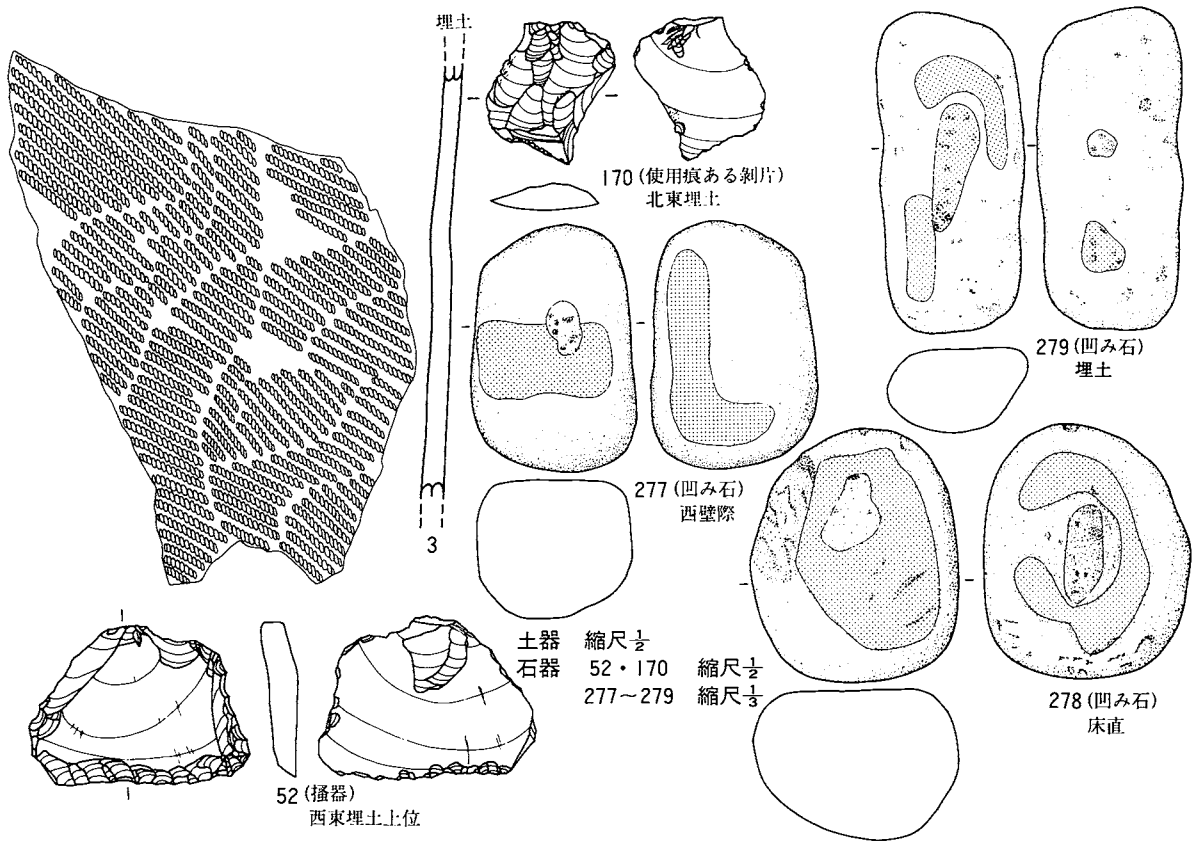
第13図 (I) I h 40住居跡(遺構)



308 縮尺 $\frac{1}{3}$
 その他 縮尺 $\frac{1}{2}$



第14図 (1) I h 40住居跡(遺物-I)



第15図 (I) I h 40住居跡(遺物-2)

〔遺構の時期〕

時期を明確にできる土器の出土状況ではないが、埋土上位から出土した308は後期初葉に属する特徴であり、さらに4の複節斜行縄文は中期後半に例が多い。また、炉が中心から壁に偏るのも中期後半の特徴である。このことから、本住居跡は中期後半に属するであろう。

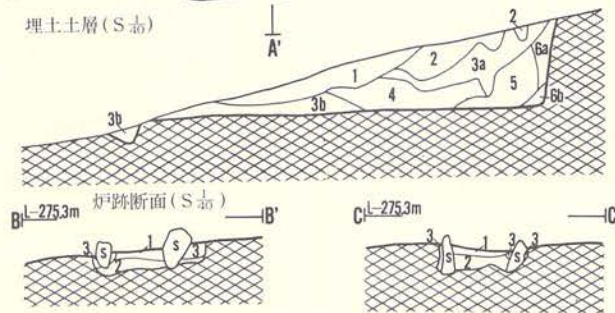
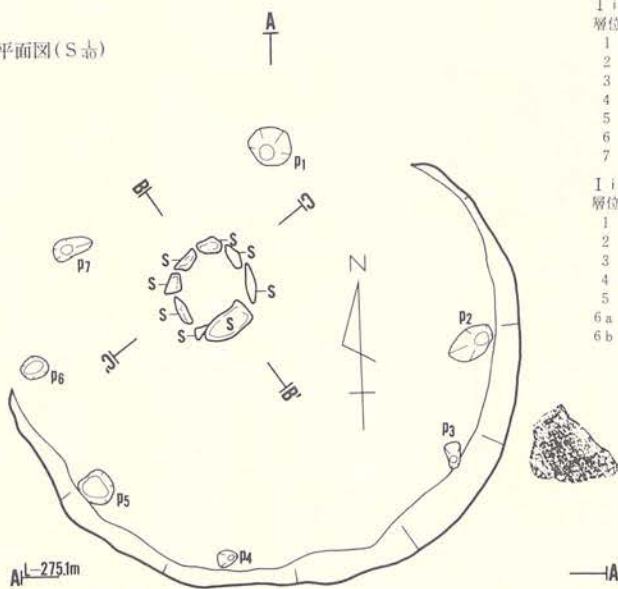
(2) I i 37住居跡 (旧 I j 37住居跡)

〔遺 構〕 (第16図、P L-12)

B区西方突端部の尾根から北側に続く斜面に位置し、尾根頂部の I h 40住居跡からほぼ9m北側にあっている。畑地耕作土(基本層序第I層)を除去して検出され、基本層序第V層面で確認された堅穴住居跡である。

確認された規模は、東西2.75m、南北2.14mであるが、北側の壁及び床面は耕作によって削平

平面図(S 志)

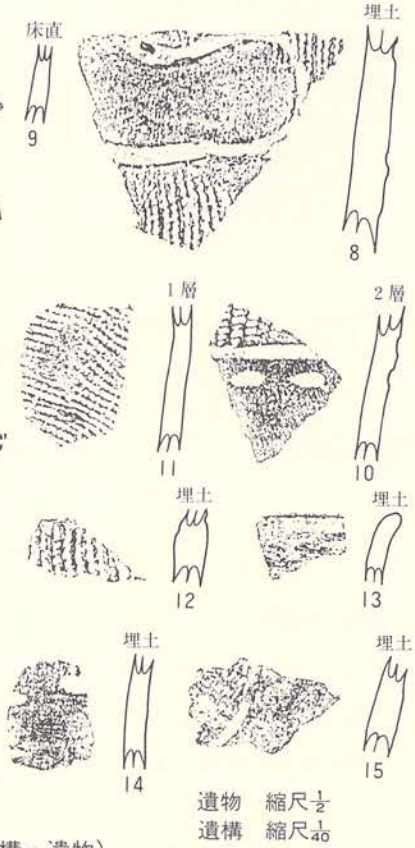


I i 37住炉跡土層

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 黒褐色	シルト質。炭化物を含む。
2	7.5YR 5/6 暗褐色	焼成を受けている。
3	7.5YR 5/6 黒褐色	石堀り方の埋土。
4	7.5YR 5/6 明褐色	よごれた基本層序V層。
5	7.5YR 5/6 暗褐色	砂質である。
6	7.5YR 5/6 明褐色	基本層序V層。
7	7.5YR 5/6 黒褐色	木根跡。

I i 37住土層

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 黒色土	シルト質。浮石粒が点在。
2	7.5YR 5/6 黒褐色土	
3	7.5YR 5/6 暗褐色土	
4	7.5YR 5/6 極暗褐色土	
5	7.5YR 3/4 黒褐色土	黒色土の混入ある。
6a	7.5YR 5/6 褐色土	しまる。
6b	7.5YR 5/6 *	暗褐色混じる。



第16図 (2) I i 37住居跡(遺構・遺物)

を受けているため明確でないが、遺存する形状から円形を示すと推定される。

壁の立ちあがりは全体に強く、もっとも遺存の良好な南側の壁高は45cmである。床面は平坦でほとんど水平をなし、踏み固められたような堅固な部分が多い。

炉は床面の中央から僅か北寄りに位置する石囲い炉である。8個の亜角礫を使用して径40cm位の円形に築かれ、床面から7~15cmほど掘り込んで礫を立て、上面を揃える部分も認められ

る。炉の埋土には炭化物粒が混入し、炉床は焼成によって赤変している。

壁際の床面には、P₁ (径22cm×20cm、深さ10cm)、P₂ (径30cm×15cm、深さ17cm)、P₃ (径14cm×10cm、深さ13cm)、P₄ (径10cm×10cm、深さ9cm)、P₅ (径18cm×18cm、深さ9cm)、P₆ (径14cm×10cm、深さ4cm)、P₇ (径22cm×12cm、深さ10cm)の柱穴状小土坑がある。しかし、全体に不整な形状で浅く、柱穴として特定できるかは明確でない。

床面を被う埋土は、黒色～褐色のシルトで7層に細分される。赤褐色の浮石粒が全層に混じるほか、3層には明褐色(7.5YR⁵/₈)の地山粒が混入している。堆積状況を見ると、斜面上位の南側から流入する堆積層が多いことから、自然堆積で埋没した遺構であろう。(Ko)

〔遺物〕

土器の破片8点と、石器が2点出土した。床面直上から出土したのは土器片1点(9)のみで、他は全て埋土内からの出土である。

土器 (第16図8～15、PL-122)

口縁部被片は13のみで、他は体部被片である。床直上から出土した9は表裏両面とも無文である。8は縄文が付された後沈線で区画し、その部分の縄文を磨消している。10も8とほぼ同様であるが、磨消部に沈線と並行する列点文を付す。14は無文の器表に列点文を付し、8と同じ様相である。15は8に近い。11・12は器表に縄文だけを付す体部破片である。器表の縄文には、単軸絡条体縦回転による撚糸文(8・12)、0段多条による原体LR縦回転(10・15)や原体RL横回転による単節斜行縄文が付されている。

以上の特徴から、8・10・14・15は第Ⅲ群4類(8)、5類(10・14・15)に相当する。

石器 (第16図156～157、PL-164)

2点とも使用痕をもつ剥片である。156は縦長剥片の左側縁～下縁に剝離調整らしき剝離痕をもつが、規則的なものではないので、使用時の刃毀れと判断した。157も縦長剥片を使用したもので、右側縁上部に裏面への刃毀れがある。

〔遺構の時期〕

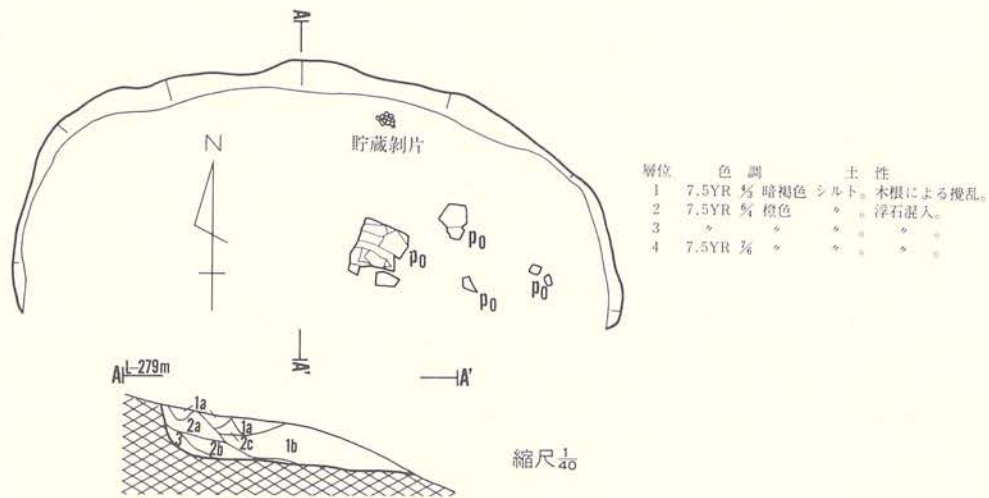
8・10・14・15は、文様の特徴から中期末の大木10式に相当する。床面直上から出土した土器もこれらの無文部と理解すれば、この住居跡は中期末に位置づけられる。

(3) I j 41住居跡

〔遺構〕 (第17図、PL-13)

B区突端部の中央に位置し、I h 40住居跡の南東4.5mにある。基本層序第Ⅰ・Ⅱ層を除去して検出されるが、中央尾根から南斜面にかかるため、南半部は既に失われて明らかでない。

確認される規模は、東西3.25m、南北1.35mであるが、本来は円形を示す堅穴住居跡と推定さ



第17図 (3)I j 4I住居跡

れる。壁の立ちあがりは東西両側がやや強く、壁高は35cm位である。床面は斜面に沿って南に傾斜しているが、ほとんど平坦に近く、特に踏み固められた等の特徴は確認されていない。また、付属する内部施設としての炉跡、柱穴、壁溝等は検出されず、明らかでない。

埋土は暗褐色～橙色のシルトで3層に大別され、2層は硬さによって3層に、1層は攪乱の有無によって2層に細分されているが、基本層序第V層の混土層が主体をなす。これらの埋土には斜面上位から流入した堆積を示し、自然堆積で埋没した遺構と考えることができる。

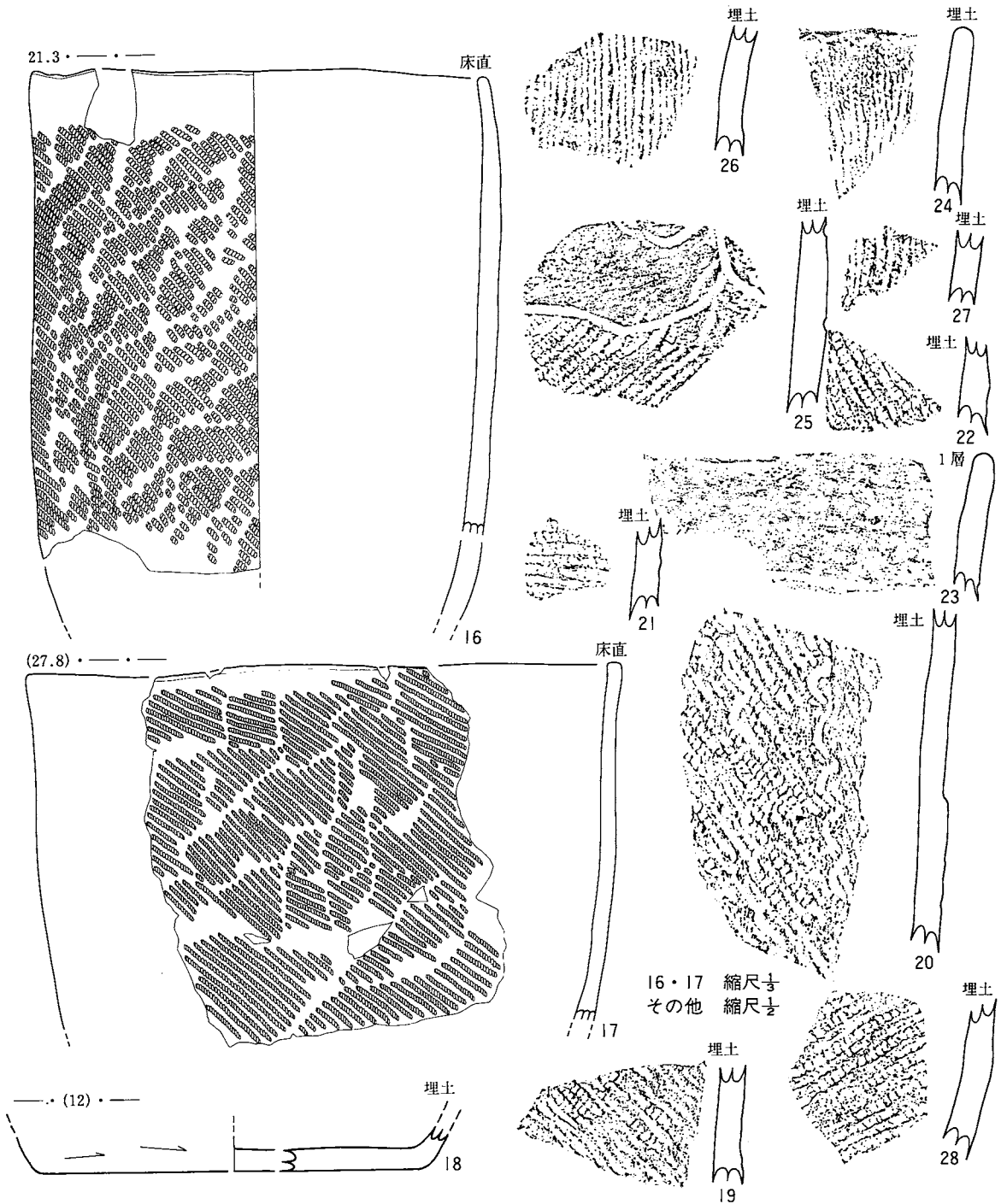
(Ko)

〔遺物〕

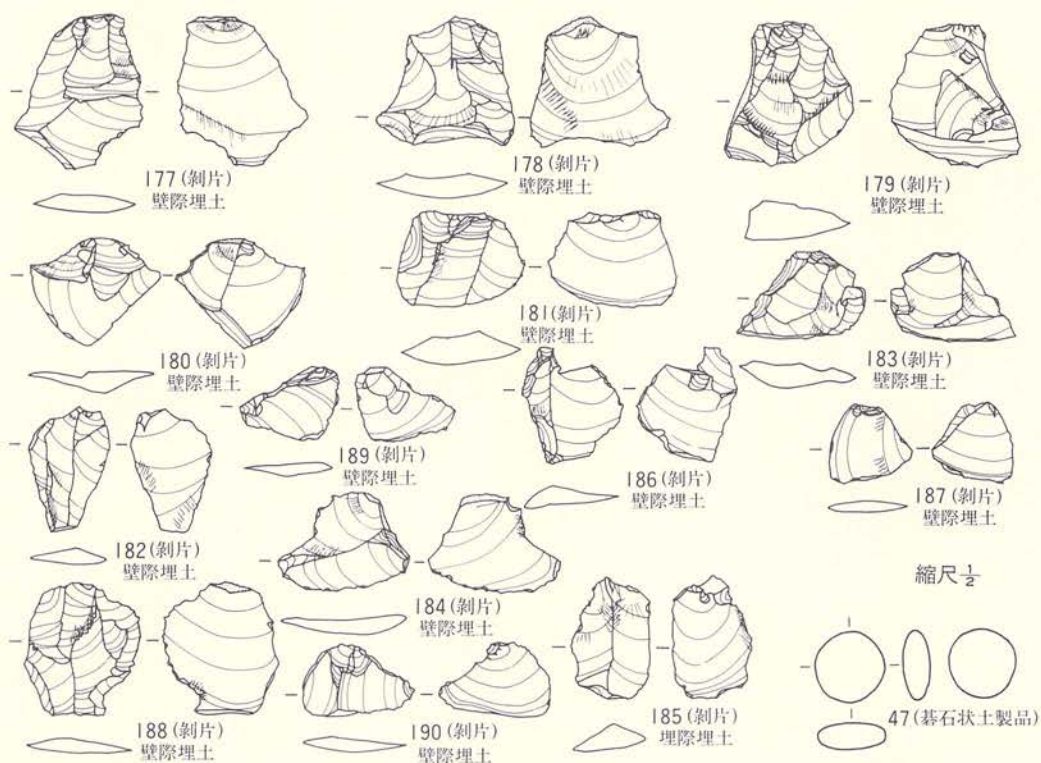
床面から実測可能な土器2点の他、埋土内から47点の土器片と、埋土下位から貯蔵された剥片14点、碁石状をした土製品が1点出土している。

土器 (第18図16～18、PL-122)

16・17は床面直上から出土した粗製土器である。16は口縁端部に無文部をもつ以外は体部全体に原体RL横回転による単節斜行縄文を付す。17もほぼ同様であるが、両者では器形と0段多条の原体RL横回転による単節斜行縄文を付すことに相違がある。18は底部～体部下端を残存する被片である。19～22・28は原体LRの縦回転(22)や横回転、RLの横回転(19・21・20)や縦回転(28)による単節斜行縄文で、20には結節部縦回転による綾絡文が付されている。24・26・27は単軸絡条体縦回転による撚糸文が付される。25は原体RL縦回転による単節斜行縄文を付した器面を沈線で区画し、その部分の縄文を磨消している。23は口縁部破片であるが、頸部に端部と並行する沈線を入れ頸部を無文としている。



第18図 (3)I j 41住居跡(遺物-1)



第19図 (3) I j 41住居跡(遺物-2)

以上のことから、23・25は第III群4類に相当する。16・17は器形が中期末のものに近似することから、25と同様と理解される。

土製品 (第19図47、P L-157)

床面直上から基石状をした土製品が1点出土している。径1.9cmの円形で、厚さが7mm位と扁平である。周縁は丸味をもち、中心部が最も厚く、周縁ほど薄くなる。

石器 (第19図177~190、P L-165)

北壁際の埋土最下位から14点まとめて出土したことから、貯蔵された剥片と推定される。剥離面の光沢や色調から3個の原石から剥離されたものが混在している。177~186が同原石からの剥片で、小型のものが多い。形態も不定であまり良好なものとはいえない。187は1点のみである。188~190が同原石から剥離された小型の剥片である。いずれも使用痕や調整痕を残すものはない。また、剥片間で接合するものもない。

〔遺構の時期〕

床面直上から出土した16・17や埋土内から出土した23・25から考えて、中期末に属する住居跡と推定される。

(4) II i 39住居跡

〔遺構〕 (第20図、P L-13)

B区中央北寄りの頂上部から西斜面にかけてのグリッドII i 39・40とII j 40にまたがって位置する。遺構は西側の斜面下位部分は削平によって消失し、さらに、近世のII i 39土葬墓と重複している。

残存する規模は南北約2.7m、東西2.1mで、本来は円形か楕円形の堅穴住居跡と推定される。壁は緩やかに立ちあがり、壁高は最も高い東壁で8cmである。床面には若干凹凸があり、全体として西側にやや傾斜している。また、踏み固めによると考えられる特に硬い部分も認められない。住居跡に伴う柱穴・壁構・炉等の施設や貼床は検出されていない。

埋土は、炭化物を少量含み、基本層序第V層相当の褐色土粒がブロック状に混入した黒褐色土と暗褐色土の2層に細分される。自然堆積で埋没したものであろう。(Mi)

〔遺物〕

床面直上から出土したものは土器5点と土器片円盤・凹み石・石皿が各1点で、そのほか埋土内から10点の土器が出土している。

土器 (第20図29～33、P L-123)

床面直上から出土した5点は全て体部の破片である。29～32は0段多条による原体LR横回転による単節斜行縄文である。33は無文で若干外反することから頸部の破片である可能性がある。以上の特徴から、29～32は第IX群1類に相当する。

土製品 (第20図26、P L-157)

原体LR縦回転による単節斜行縄文の付された体部の土器片を利用し、その周辺部を打ち欠いて径3.5cm位の円形に仕上げている。埋土内から出土した。

石器 (第20図290・368、P L-171・176)

290は片面に凹みをもつ凹み石で、磨石としても使用されている。368は遺構平面図に記入されている不整形の石皿である。片面にある自然の凹みを使用面としている。

〔遺構の時期〕

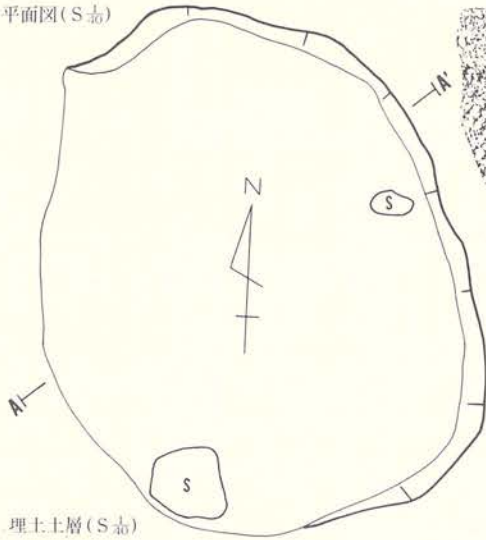
時期を明確にし得る土器の出土はないが、29～32に付された縄文は後期後半に多用される傾向がみられることから、後期後半の住居跡として大過ないであろう。

(5) II j 39住居跡

〔遺構〕 (第21図、P L-14)

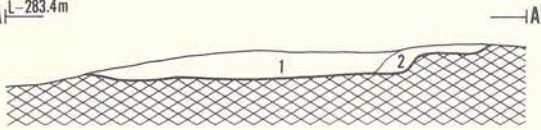
B区中央北寄りの頂上部平坦面のグリッドII j 39に位置し、他の遺構との重複はない。

平面図(S 北)



埋土土層(S 北)

A-A' 283.4m



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$



床直

32



床直

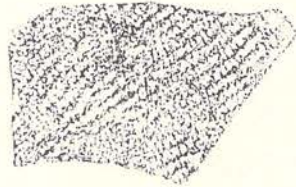
29

床直



31

床直



30

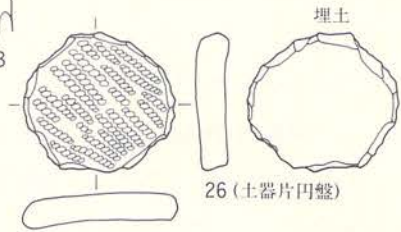


床直

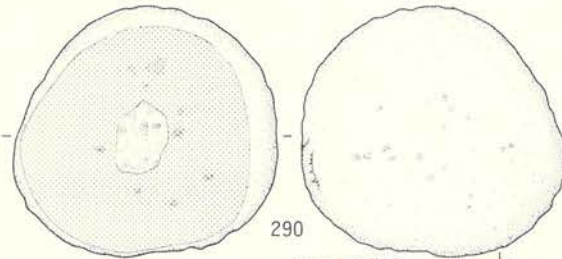
33

II i 39住土層

層位 色調 土性
 1 7.5YR 弱 黒褐色シルト。黄褐色土粒を含む。
 2 10 YR 弱 暗褐色シルト。

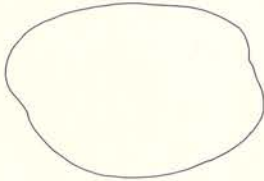


26 (土器片円盤)



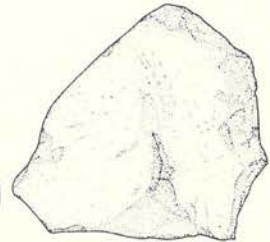
290

(凹み石) 床直

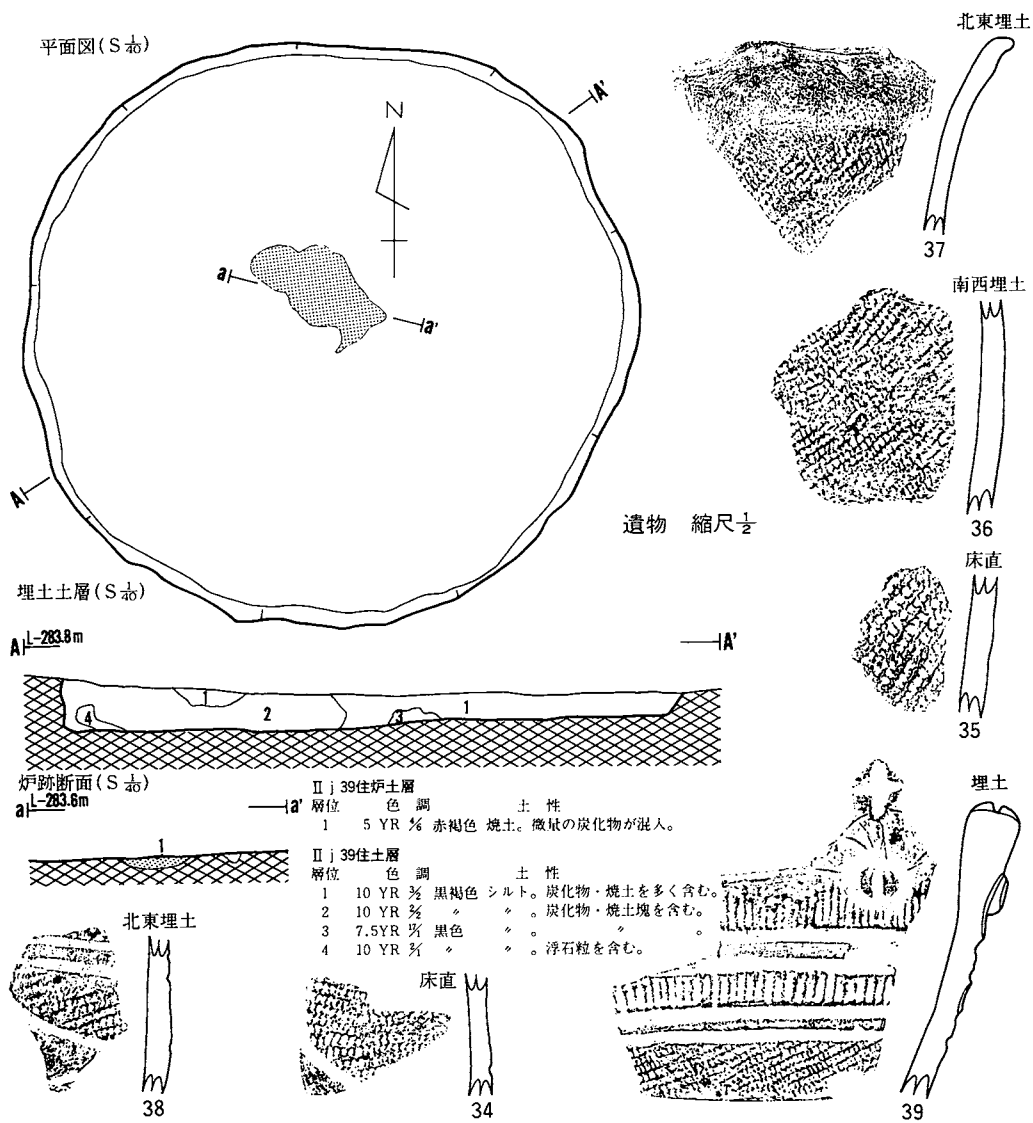


遺物
 土器・土製品 縮尺 $\frac{1}{2}$
 石器 368 縮尺 $\frac{1}{2}$
 石器 290 縮尺 $\frac{1}{2}$

368 (石皿) 床直



第20図 (4) II i 39住居跡(遺構・遺物)



第21図 (5) II j 39住居跡(遺構・遺物)

規模は東西3.3m、南北3.15mで、平面形が円形の堅穴住居跡である。壁高は最も高い北東側が6cm、最も低い北西側が3cm位で、壁面は若干外傾している。床面には多少の凹凸があるものの、踏み固めによって非常に硬い。貼床された部分やその痕跡はない。

床面の中央やや北寄りに東西に長い不整形の焼土をもつ地床炉が検出されている。焼土の範囲は、東西78cm、南北38cm、厚さ6cmで、長時間使用された炉と理解される。そのほか、柱穴、壁溝等住居跡に伴う施設は検出されていない。

床面直上やや上位から多量の炭化材・炭化物粒・焼土が検出されていることや、床面に焼成

を受けた痕跡を残し、特に北側が強いことから考えて、本住居跡は焼失した住居跡と推定される。

埋土は黒褐色や黒色のシルトが主体で構成され、混入物の違いによって4層に細分される。どの層にも多少の差はあるが炭化物と焼土が混入し、特に2層と3層には多量に混じっている。自然堆積で埋没したことを示すものであろう。(Mi)

〔遺物〕

土器片が68点出土したが、2点以外は埋土内から出土した。

土器 (第21図34~39、P L-123)

床面直上から出土したのは34・35の2点で、34は0段多条による原体LR斜回転による横行縄文が付され、沈線で区画された後縄文を磨消している。35は原体LR横回転による斜行縄文をもつ体部破片である。38は34と同じ様相を示しているので同個体の可能性が高い。36・37は0段多条による原体LR横回転による単節斜行縄文が付された口縁部(37)と体部(36)の破片である。37は口縁部が外湾し、無文帯としている。39は三角形山形の突起をもつ口縁部破片で、0段多条による原体LR横回転の単節斜行縄文を付した後、沈線で区画して無文帯とし、その部分を篋先によって横に並ぶ刻目帯としている。また、突起部には縦に割られた円形の瘤状突起が貼付されている。

以上の特徴から39は第VI群9類に相当し、34・38は39の体部片である可能性がある。35~37は第IX群に属し、その中でも37は1類に入る土器である。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

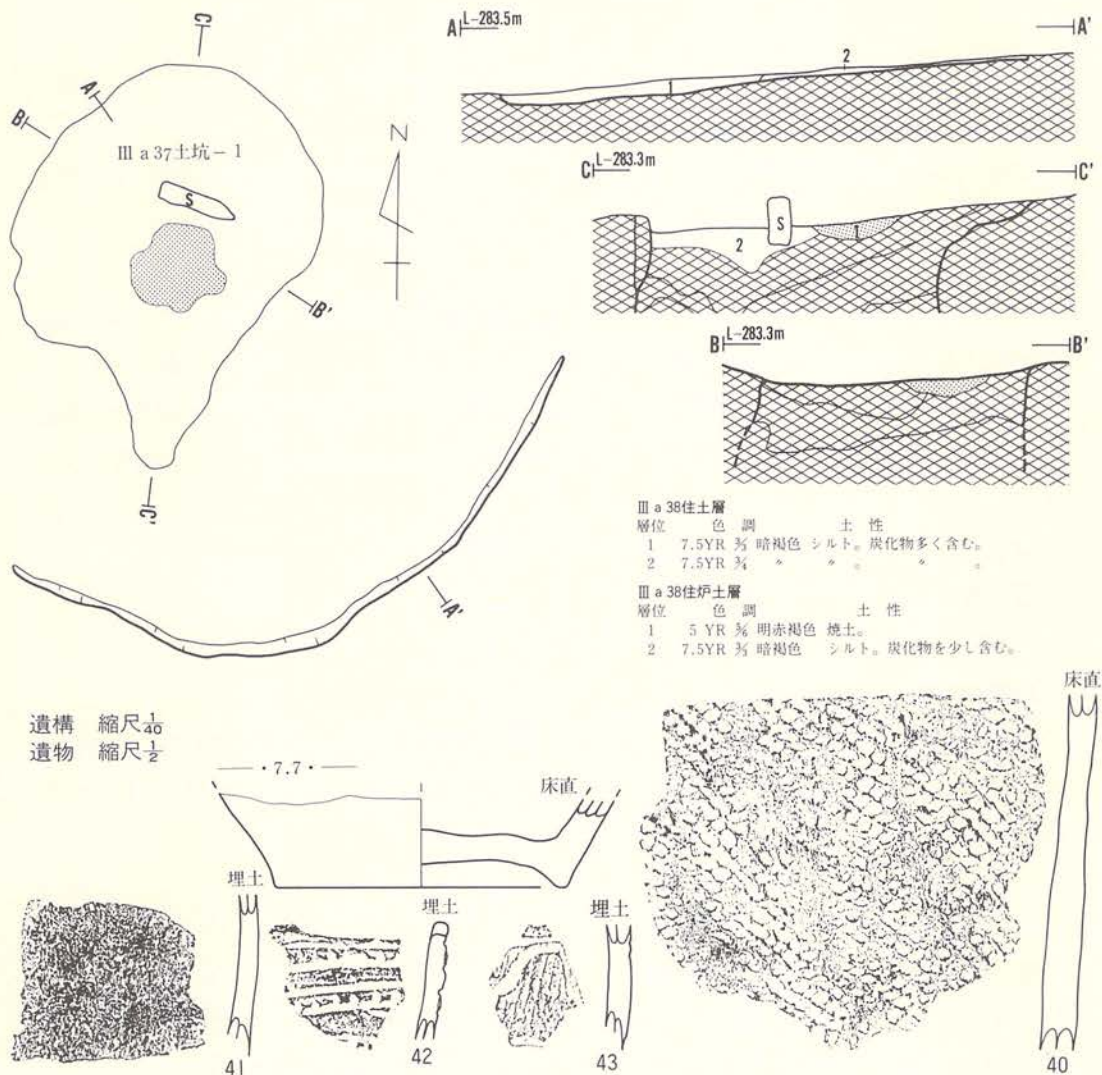
34・38・39は後期末のいわゆる瘤付土器の1群に共通することは明らかである。これによって、住居跡は後期末に位置づけられるであろう。

(6) III a 38住居跡

〔遺構〕 (第22図、P L-15)

B区中央北寄りの頂上平坦部から北斜面にかかるグリッドIII a 38・39とIII b 38・39にまたがって位置し、III a 37土坑-1の上部を壊して作られている。

南壁だけが残存し、他の壁は耕作による削平によって消失している。残存する壁から推定される規模は径4m位で、本来は円形か楕円形の堅穴住居跡と考えられる。壁高は最も高い南壁中央部で約8cmである。床面は全面に多少の凹凸があり、全体に斜面下方の北側に傾斜している。



第22図 (6) III a 38住居跡(遺構・遺物)

III a 37土坑-1の上にある炉周辺は浅皿状に窪んでいる。貼り床はなく、踏み固めによって硬くしまっている。

炉は、北側に扁平な礫(長さ43cm、高さ26cm、厚さ12cm)を1個10cm位の深さに埋め込んだ配石炉で、床面のほぼ中央と推定されるIII a 37土坑-1の上面に位置している。炉床の焼土は、径51cm×46cm、厚さ10cmの不整な略円形の広がりをもつことから、長時間使用された炉と考えることができる。

南壁際の床面に径12cmの円形で深さ2cmの柱穴状土坑が1基検出されているが、本住居跡に伴うか否かは不明である。ほかの柱穴や壁溝といった施設は検出されていない。

埋土は炭化物を多く含み、黄褐色土(基本層序第V層相当)がブロック状に混入する暗褐色

のシルトで占められている。自然推積で埋没した遺構であろう。

(Mi)

〔遺物〕

底部～体部下端の実測可能土器1点を含む8点の土器が出土したのみで、石器類は全く出土していない。床面直上から出土したのは2点だけで、他は埋土内からの出土である。

土器 (第22図40～43・310、PL-124)

床面直上から出土した40は原体LR縦回転による単節斜行縄文を付す体部破片で、310は外底面が上げ底で輪高台状になる底部破片で、縄文施文部は残っていない。41～43は埋土内からの出土である。41は縄文や他の文様をもたない無文の体部片で、42は無文の器面を横走る沈線で区画し、1列おきに粗雑な刻目帯とする口縁部破片である。43は条痕文に沈線で施文された体部の破片である。

以上から、42は第VI群7類、41は第VIII群、40は第IX群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を明確にし得る出土状況を示す土器はないが、遺構の埋土が最下層部であることを考えれば、42の土器に近い時期と考えることができる。したがって、本住居跡は後期末に位置づけられるであろう。

(7) III b 38住居跡 (旧III c 38住居跡)

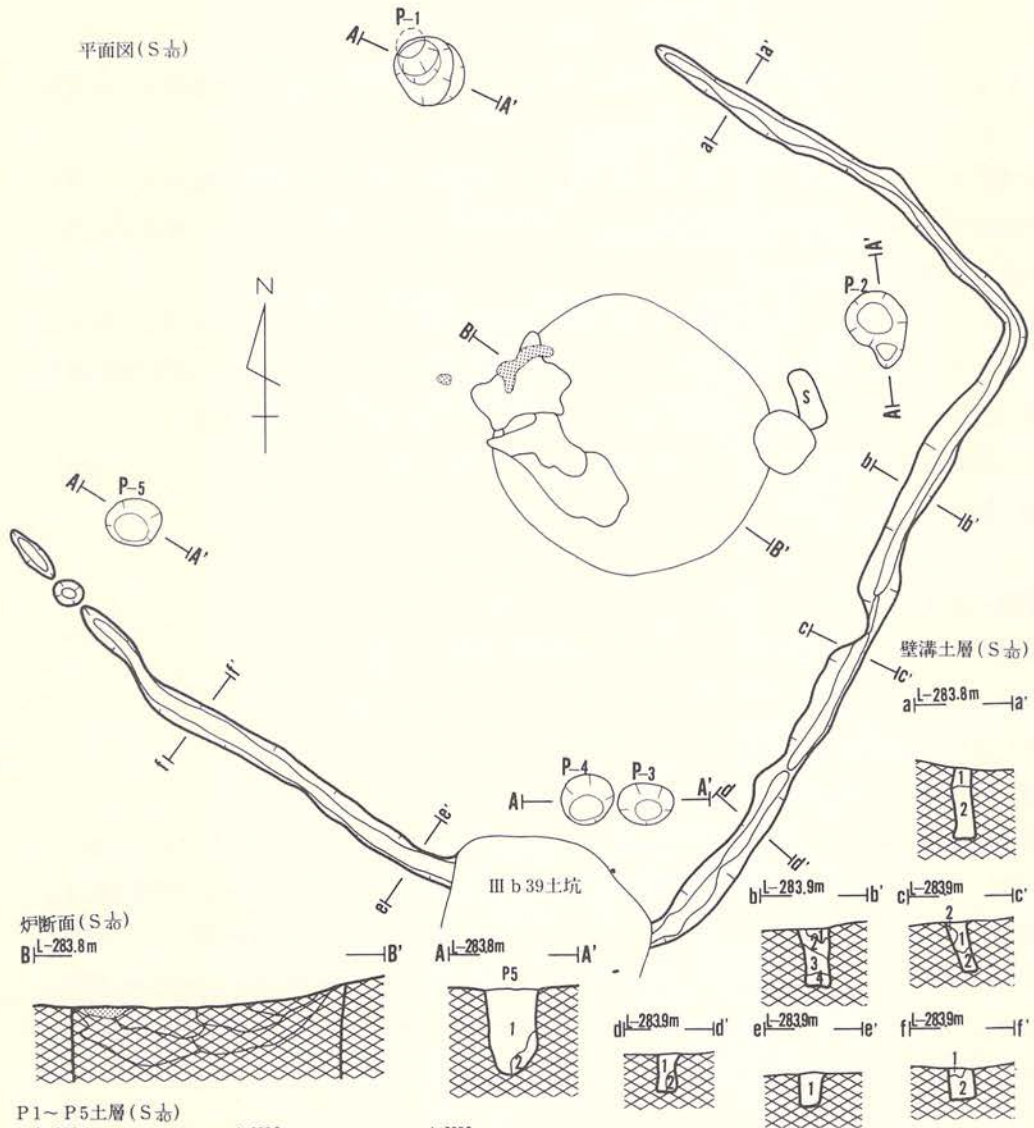
〔遺構〕 (第23図、PL-16)

B区中央北寄りの頂上平坦部のグリッドIII b 38・39とIII c 38・39にまたがって位置している。壁溝や柱穴がIII b 38土坑-3・4、III c 38土坑を壊し、III b 39土坑によって壊されている。また、炉はIII c 38土坑-2の上面に設置されている。以上のことから、本住居跡はIII c 38土坑-1・2、III b 38土坑-3・4より新しく、III b 39土坑より古い。III b 38土坑-2との関係は不明である。

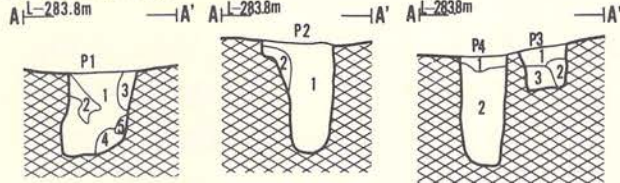
壁は耕作による削平のため残存せず、「コ」状にめぐる壁溝と柱穴の検出によって確認された。推定される規模は、長径4.5m、短径3.36mで、平面形は四隅が若干丸味をもつ隅丸長方形を示すと考えられる。貼り床が確認されていないので、検出された面が床面直上であるかは不明であるが、凹凸が少なく、全体が北側にやや傾斜し、良くしまつて硬い。

壁溝から60～70cm離れた対角線上の床面で、P₁(径38cm×36cm、深さ52cm)、P₂(径34cm×30cm、深さ56cm)、P₃(径30cm×22cm、深さ25cm)、P₄(径20cm×18cm、深さ57cm)、P₅(径30cm×24cm、深さ45cm)の柱穴状土坑が検出されている。位置や規模から考えて、P₁・P₂・P₄・P₅が本住居跡の支柱穴を構成し、P₃は支柱か補助柱と推定される。なお、P₁～P₄の距離が4.2

平面図 (S 志)



P1~P5 土層 (S 志)



III b 38 住溝土層

層位	色調	土性
a.		
1	10 YR 5/2 暗褐色	シルト。浮石や炭化物粒を含む。
2	10 YR 5/2 *	*。浮石が全体に散在。
b.		
1	7.5YR 5/2 暗褐色	シルト。浮石・炭化物を含む。
2	10 YR 5/2 黄褐色	*。炭化物を含む。
3	10 YR 5/2 褐色	*。浮石・炭化物を含む。
4	10 YR 5/2 黄褐色	*。浮石含む。
c. d. e.		
1	10 YR 5/2 黄褐色	シルト。炭化物含む。
2	10 YR 5/2 褐色	*。炭化物・浮石含む。
f.		
1	10 YR 5/2 暗褐色	シルト。浮石含む。
2	10 YR 5/2 褐色	*。炭化物・浮石を含む。

III b 38 住柱穴土層

層位	色調	土性
P 1		
1	7.5YR 5/2 暗褐色	シルト。炭化物を多く含む。
2	7.5YR 5/2 褐色	*。基本層序 V 層。
3	10 YR 5/2 暗褐色	*。炭化物を多く含む。
4	10 YR 5/2 明黄褐色	*。基本層序 V 層。
5	10 YR 5/2 暗褐色	*。浮石を含む。
P 2		
1	10 YR 5/2 暗褐色	シルト。炭化物を多く含む。
2	10 YR 5/2 *	*。浮石を含む。
P 3		
1	7.5YR 5/2 黒褐色	シルト。炭化物を含む。
2	10 YR 5/2 暗褐色	*。浮石を含む。
3	10 YR 5/2 褐色	*。炭化物と浮石を含む。
P 4		
1	7.5YR 5/2 暗褐色	シルト。炭化物・浮石を含む。
2	10 YR 5/2 黄褐色	*。炭化物を含む。
P 5		
1	7.5YR 5/2 暗褐色	シルト。炭化物・浮石を含む。
2	7.5YR 5/2 *	*。浮石を含む。

第23図 (7) III b 38 住跡 (遺構)

m、P₂—P₅の距離が4.15mである。埋土は、主に炭化物を多く含む暗褐色土や黄褐色で構成され、それぞれによって何層かに細分されている。

北東壁から南西壁まで「コ」状にめぐる壁溝は、最小約6cm、最大約21cmの幅があり、深さは最深部で約36cm、平均すると25cm前後である。埋土は、主に炭化物を少量含む暗褐色土や、黄褐色等で構成されている。

炉は、III c 38土坑—2の北西壁に一部かかる床面ほぼ中央に位置する地床炉である。焼土は不整形の長径69cm、短径54cmの範囲に分布し、厚さ約7cmである。炉の東約1.4mの位置に扁平な礫（長径34cm、厚さ13cm）が埋設されていたが、性格や共伴関係は不明である。

本住居跡は耕作等の削平によって埋土が全く残存していない。 (Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を決定し得る遺物の出土がないので、不明である。

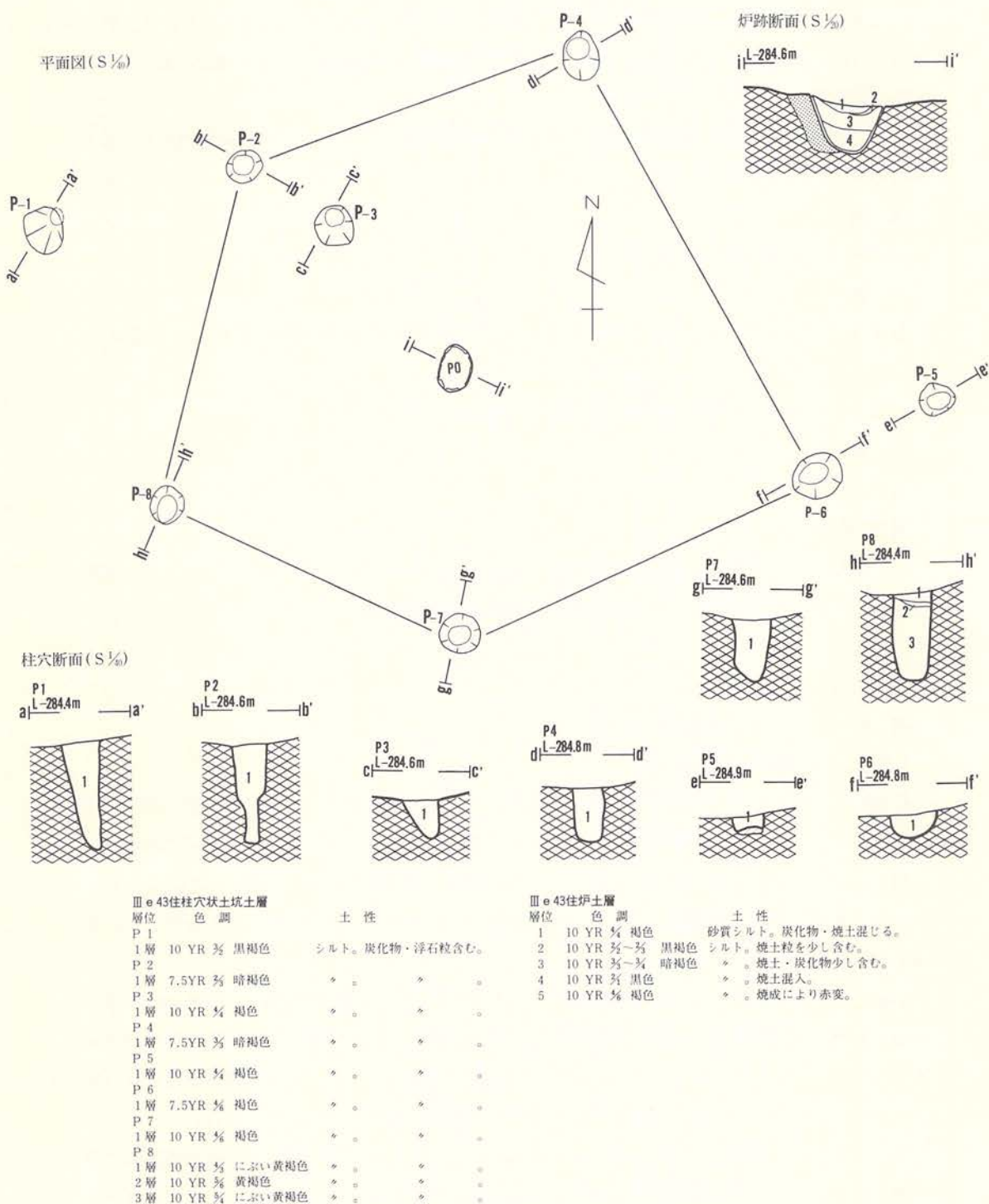
(8) III e 43住居跡

〔遺物〕 (第24図、PL—17)

B区中央やや東寄りの南向き緩斜面の上部で、グリッドIII e 43・44とIII f 43・44にまたがって位置し、III e 43土坑—1とP₂が重複している。新旧関係では、III e 43土坑—1の埋土内にP₂が掘り込まれていることから、III e 43土坑—1やこの土坑に壊されるIII e 43土坑—2とIII f 43陥し穴状遺構より本住居跡の方が新しい。また、III e 43陥し穴状遺構は配列・主軸方向・規模・形態等からIII f 43陥し穴状遺構と同時期と考えられるので、III e 43陥し穴状遺構よりも新しい。また、III f 43土坑の上部に貼り床したり、踏み固めがないことから、この土坑よりも古いと考えられる。

壁が削平によって消失しているので、詳細は不明であるが、炉跡と推定される埋設土器を囲むような形で柱穴状の土坑が位置していることから、住居跡と認定した。平面形や規模は定かでないが、柱穴状土坑の配列から推定すると、長径5m前後、短径4.6m位の規模をもつ楕円形を示していたと考えられる。床面の状況は全く不明であるが、III e 43土坑—1の埋土上部が黄橙色や黄褐色の基本層序第V層のシルト質粘土で埋め戻されていたが、本住居を構築する際に埋められている可能性がある。壁溝は検出されていない。

検出された柱状土坑は、P₁(径30cm×26cm、深さ72cm)、P₂(径22cm×22cm、深さ64cm)、P₃(径28cm×26cm、深さ28cm)、P₄(径32cm×28cm、深さ35cm)、P₅(径28cm×20cm、深さ10cm)、P₆(径36cm×28cm、深さ20cm)、P₇(径26cm×26cm、深さ40cm)、P₈(径24cm×22cm、深さ60



第24図 (8)Ⅲ e 43住居跡(遺構)

cm)である。全体では、規模や深さによって若干のバラツキがあるものの、P₂・P₄・F₆・P₇・P₈が本住居跡を構成する柱穴と推定される。埋土は褐色～黒褐色のシルトで構成され、中には浮石や炭化物等を混入するものが多い。

炉は、床面ほぼ中央に体部から底部を残存する長径27cm・短径24cm・残存器高34cmの土器が埋設された土器埋設炉である。(Mi)

〔遺物〕

炉に埋設された土器1点のみである。

土器

整理段階に行方不明となり、図化できなかったが、体部に単節斜行縄文の付された粗製の深鉢である。

分類にしたがえば、第IX群1類に相当するであろう。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

炉に埋設された土器から時期を決定できる状況ではないが、器形や縄文等から考えると後期や晩期の特徴に近似しており、住居跡もこの時期に属するであろう。

(9) III h 34住居跡

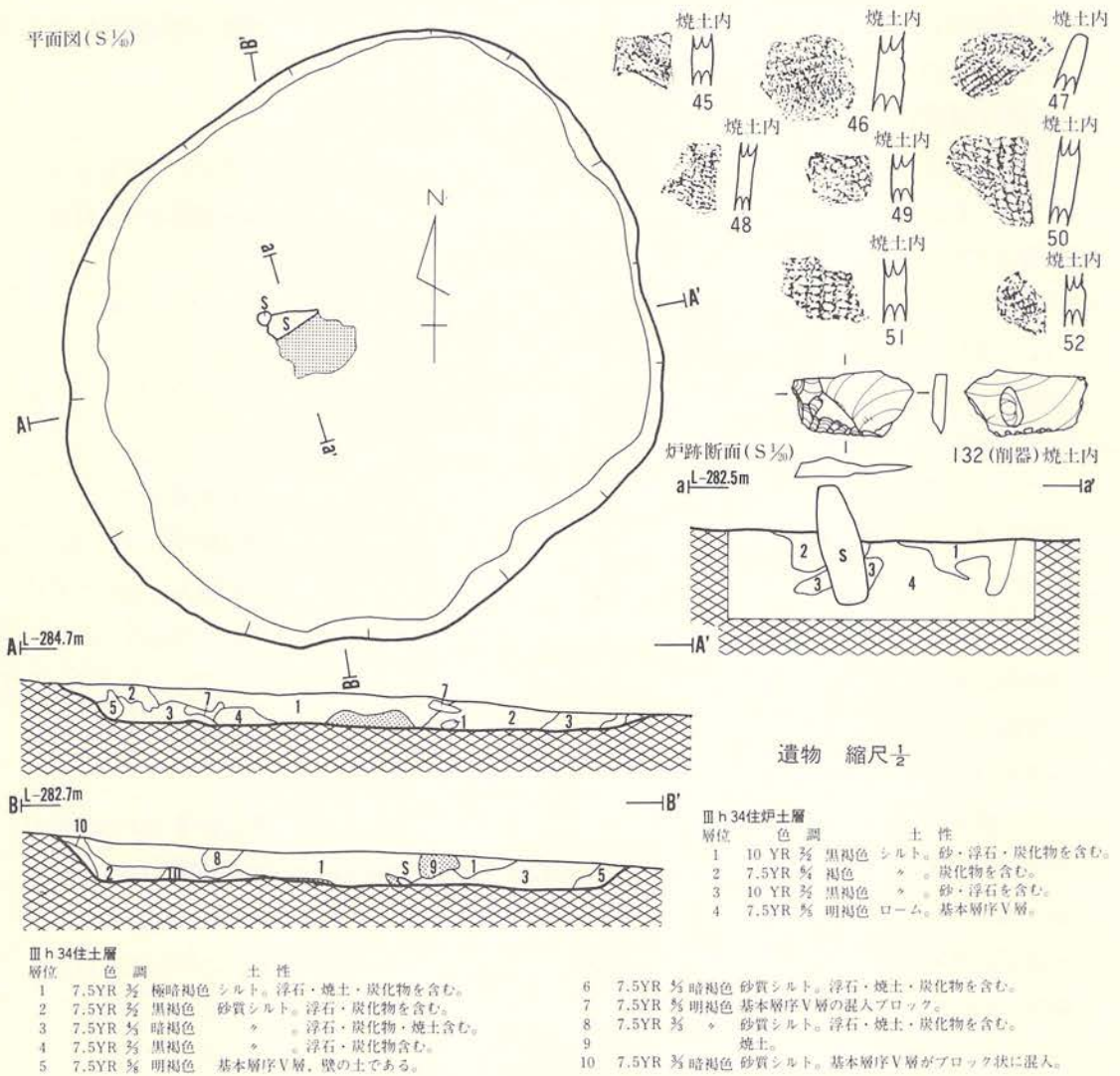
〔遺物〕 (第25図、P L—18)

B区北端部の東寄りに位置する。

長軸3.3m、短軸2.9mの規模をもち、平面形が北東—南西に長軸をもつ凸辺隅丸長方形を示す堅穴住居跡である。壁高は最高20cm、最低4cmの範囲にあるが、北東側は斜面下位であることと開田による削平によって低くなっている。壁は床面から外傾(120～130度)して立ちあがっている。床面は若干の凹凸があるほかはほぼ平坦で、中央部を中心に焼成によると考えられる赤変部分が観察される。

炉跡は床面中央部のやや西寄りに位置し、北々西側に礫を1個(長径30cm、短径10cm、厚さ10cm)配置した配石炉で、床面を16cmほど掘り込んで据えている。炉の焼土は不整形な40cm×35cmの広がりをもつが、層としては図面化が困難な位薄い。したがって、長時間使用された炉ではない可能性が強い。ほかの柱穴や壁溝といった内部施設は検出されていない。

埋土は黒色土～暗褐色のシルトが主体で構成され、10層に細分される。いずれも焼土粒や炭化物の混入が多く、特に床面ほぼ中央には薄い焼土層と炭化物がまとまって出土したこと等から考えて、本住居跡は焼失した住居跡である可能性が強い。自然堆積の埋没であろう。(Ta)



第25図 (9) III h 34住居跡(遺構・遺物)

〔遺物〕

床面直上からは全く出土せず、埋土内の焼土層から土器片8点と削器が1点出土している。

土器 (第25図45~52、P L-123)

全て破片である。47は口縁部で原体LR横回転による単節斜行縄文を付す。48・52はほぼ同じ特徴をもち、同個体の破片であろう。その他も原体LR横回転による単節斜行縄文の付された体部の破片であるが、小破片のため、詳細は定かでない。

第IX群に属する土器であろう。

石器 (第25図132、P L-163)

縦長剝片の下縁部を裏面から剝離調整した削器である。裏面にも粗雑な調整（刃毀れ？）がある。上部のバルブ部分を残しておらず、意識的に折断した可能性がある。

〔遺構の時期〕

時期を決定し得るような状況ではないが、このような配石炉はB区だけではなくC区にもみられる。C区の場合は後期後半に属する土器を出土している。おそらく、本住居跡もこの時期に相当するものと推定される。

〔C 区〕

(10) I j 54住居跡（旧 I j 55住居跡）

〔遺 構〕 （第26図、P L-19）

C区の北西端 I j 54・55と II a 54・55にまたがって位置し、I j 55土坑と II a 55土坑-1と重複している。三者の新旧関係を埋土土層図でみると、いずれの土坑も本住居跡を壊している。

東西3.65m、南北3.5の規模をもち、ほぼ円形を示す堅穴住居跡である。壁は床面に対して直角に近い急な角度で立ちあがり、高さは最も高い南壁で40cm前後、低い北西壁で10cm位と北や北西部に寄るほど低くなるが、これは自然の傾斜地形によるものである。

床面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、中央部が若干低くなる傾向がある。全体的に踏み固めが強く、特に炉の周囲がほかの部分に比較し硬くなっている。

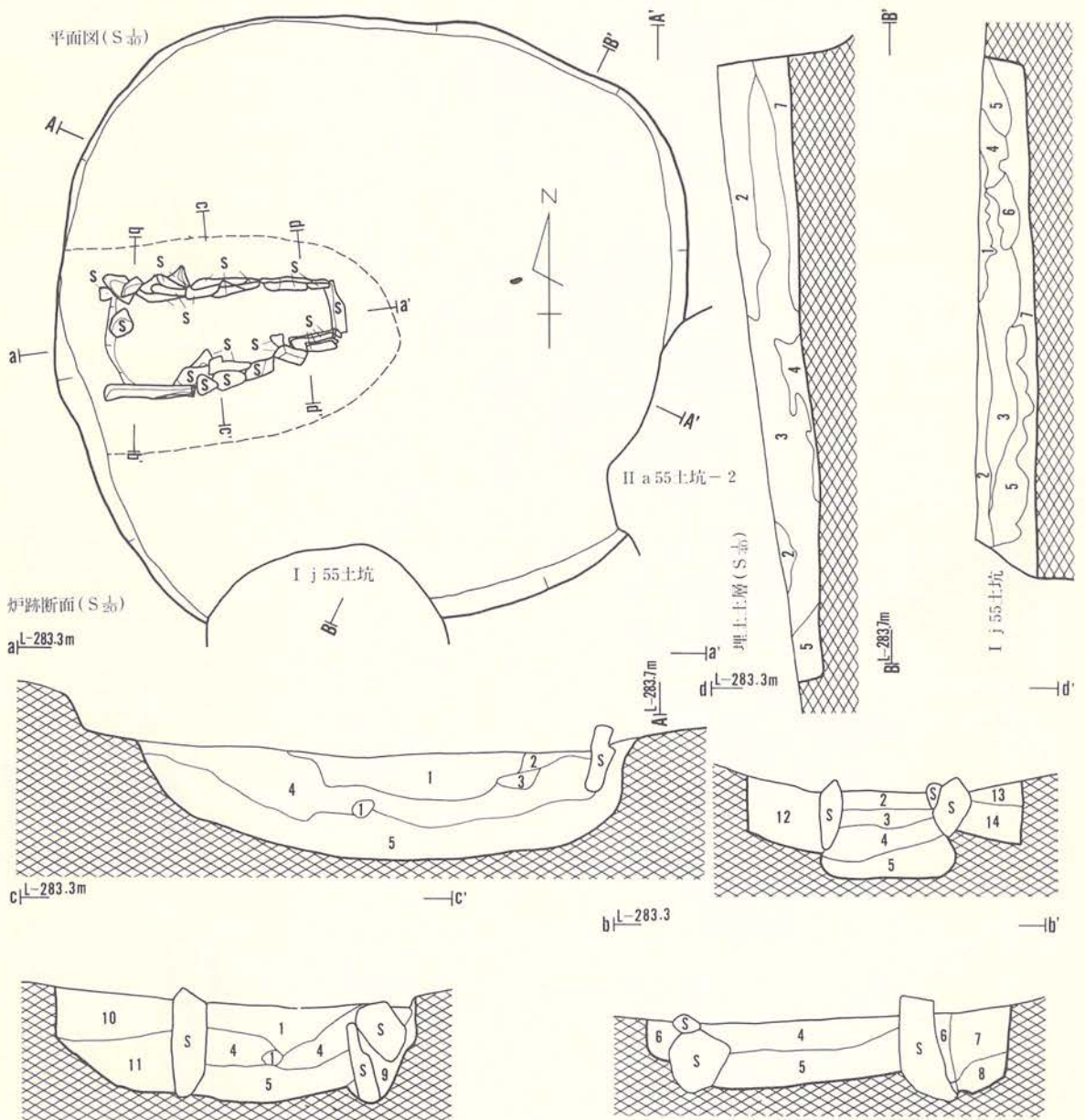
炉は18個の垂角礫を使って長方形に組んだ石囲い炉で、西壁に接する位置に設置され、床面中央からは極端に西に寄っている。石囲いの規模は、西壁部の南北75cm、東側の南北40cm、北側の東西1.4m、南側の東西1.45mで、内部の区画はない。燃烧部の焼土は層として図化できないほどの薄層で、広がりも非常に狭く、長時間使用されたとは考えられない。この炉は床面を東西1.8m、南北1.2mの範囲で30cm～35cm掘り下げ、炉石を据え付けながら埋め戻して構築している。ほかに柱穴や壁溝といった施設は検出されていない。

埋土は褐色や橙色のシルトを主体としており、色調や混入物等によって8層に細分される。特に基本層序第V層の明褐色や同VI層のにぶい褐色等のシルトが人為的に投棄されているのが特徴で、ほかに炭化物や浮石粒の混入も多い。人為的に埋め戻された可能性が大きい。（Y）

〔遺 物〕

土器が実測可能個体10点と163点の破片、凹み石1点が出土している。これらの中で床面直上から出土したのは54～56の土器4点と凹み石1点のみである。しかし、ほかの土器も埋土中位から下位（床上5cm位まで）で出土した。特に実測した59・60・62は埋土下位の床上5cm位から出土した。

〔土 器〕 （第27・28図53～71、P L-123）



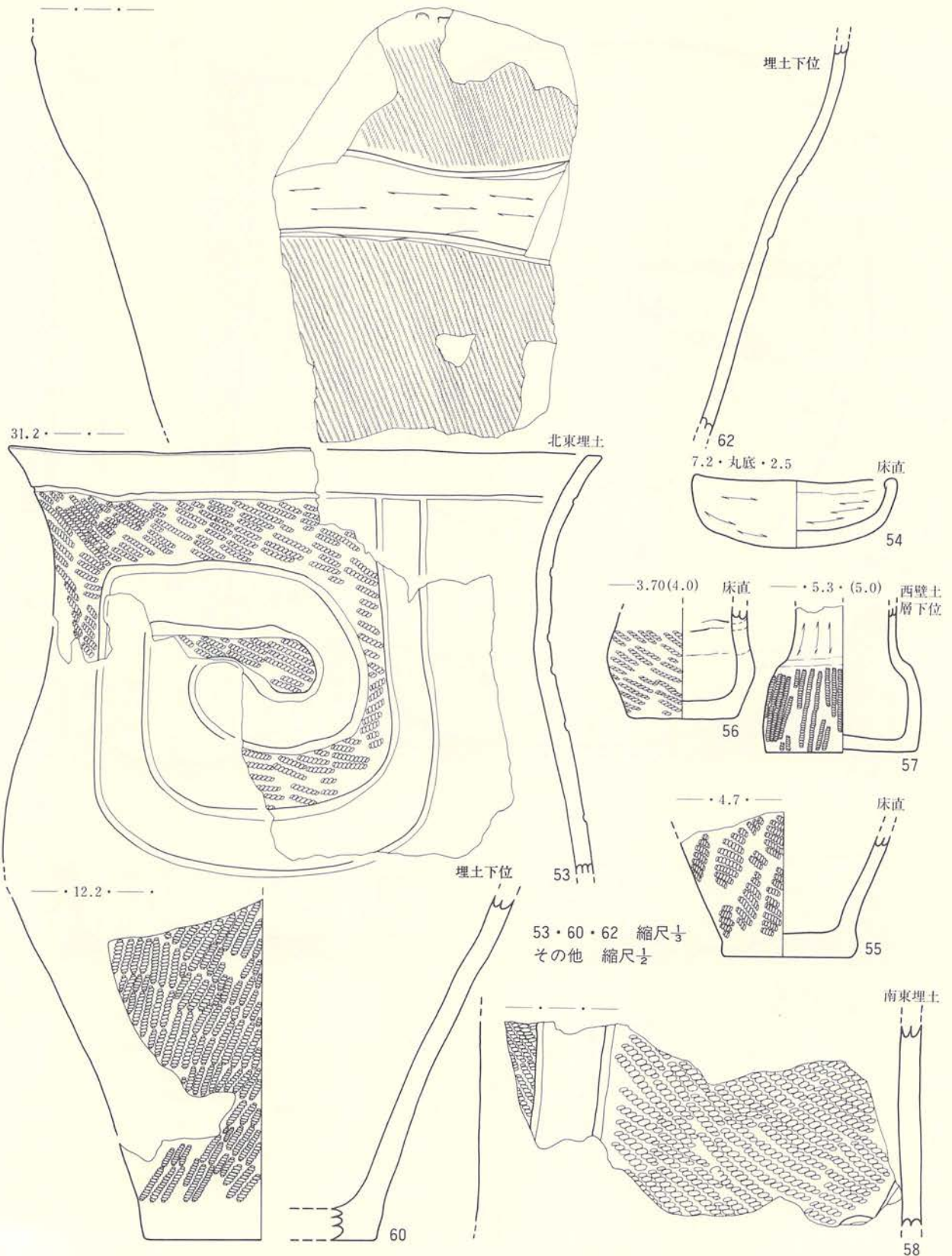
I j 54住伊土層

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 黄橙色	汚れた基本層序Ⅳ層のシラス。
2	10 YR 5/6 褐色	汚れた基本層序Ⅳ層。
3	10 YR 2/3 黒褐色	砂質シルト。炭化物・焼土混じる。
4	7.5YR 5/6 褐色	4層とほぼ同じ。
5	7.5YR 5/6 褐色	汚れた基本層序Ⅴ層。
6	10 YR 5/6 褐色	基本層序Ⅴ層。
7	7.5YR 5/6 褐色	砂質シルト。基本層序Ⅴ層に混じた土。
8	10 YR 5/6 褐色	6層と同じ。
9	10 YR 5/6 褐色	炭化物混じる。
10	10 YR 5/6 褐色	炭化物混じる。
11	7.5YR 5/6 褐色	炭化物混じる。
12	7.5YR 5/6 褐色	炭化物混じる。
13	10 YR 5/6 褐色	炭化物混じる。
14	7.5YR 5/6 暗褐色	シルト。少量の炭化物混じる。

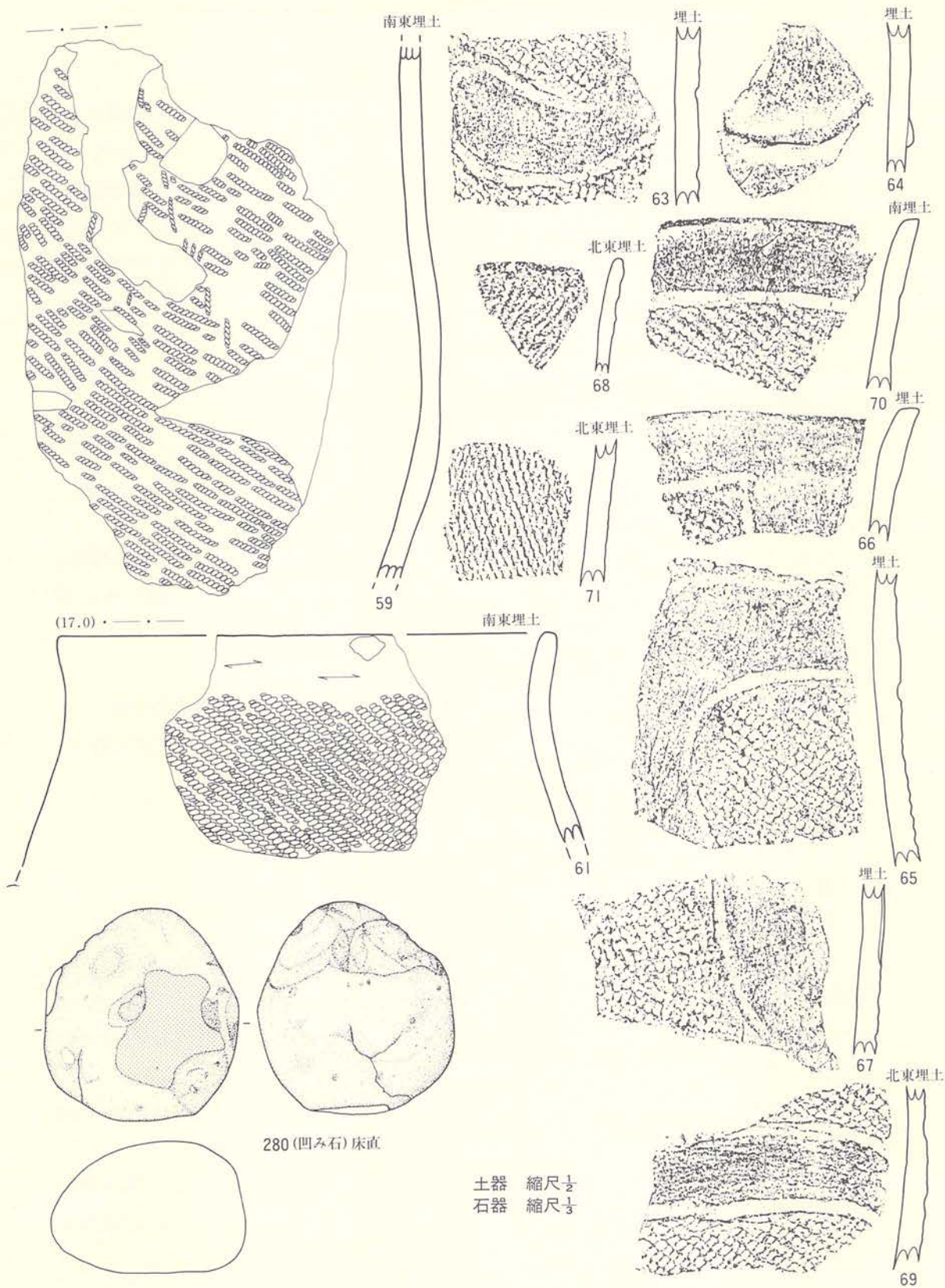
I j 54住土層

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 明褐色	シルト。基本層序Ⅴ層の投げ込み。
2	7.5YR 5/6 褐色	シルト。浮石粒や炭化物粒が混じる。
3	7.5YR 5/6 黄褐色	シルト。汚れた基本層序Ⅴ層の投げ込み。
4	7.5YR 5/6 褐色	シルト。2層とほぼ同じ。
5	7.5YR 5/6 褐色	シルト。2層とほぼ同じ。
6	7.5YR 5/6 褐色	シルト。浮石粒・炭化物粒混じる。
7	7.5YR 5/6 褐色	砂質シルト。
8	7.5YR 5/6 褐色	シルト。少量の炭化物が混じる。

第26図 (10) I j 54住居跡(遺構)



第27図 (10) I j 54住居跡(遺物-1)



第28図 (10) I j 54住居跡(遺物-2)

実測土器53・58と拓影土器63・65～67・69・70は、原体L R縦回転による単節斜行縄文の付された器面を沈線で区画し、その部分の縄文を磨消するという共通した特徴をもっている。57・62もほぼ同様の磨消縄文の文様をもつが、地文が単軸絡条体縦回転による撚糸文である。59・60は原体L R縦回転（59）や横回転（60）による単節斜行縄文が付された土器で、59の場合は自縄自縛による末端部の回転文（綾絡文）をもつ。64は、縄文施文部と縄文磨消部の境に断面三角形の隆帯をもつ。54は全面が研磨された無文丸底の小型土器（口径7cm・高さ2.4cm）で、56・57は頸部を無文にした小型土器で、体部に原体L R縦回転（56）、単軸絡条体縦回転による撚糸文（57）をもつ。61は口縁端部を無文にし、体部に原体L R縦回転による単節斜行縄文をもつ粗製土器である。

以上のことから、縄文の付された器面を区画し縄文を磨消する土器（例53・62）は第III群4類に相当するし、64は同群5類に近い要素である。

石 器 （第28図280、P L—171）

出土した石器は凹み石1点のみで、床面直上から出土した。平面、断面とも楕円形の円礫を凹み石として使用したもので、片面に凹みと磨面をもち、大きさは長径10.8cm、短径9.9cm、厚さ6.8cmである。石材は奥羽山系中新統新第三系産の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

床面直上から出土した53・57や埋土内出土の62～67等の土器は、中期末葉の特徴であるとともにそれ以外の土器を含まないことから、本住居跡は中期末葉に位置づけられる。炉が偏っているのもこれを裏付けている。

(11) II a 60住居跡

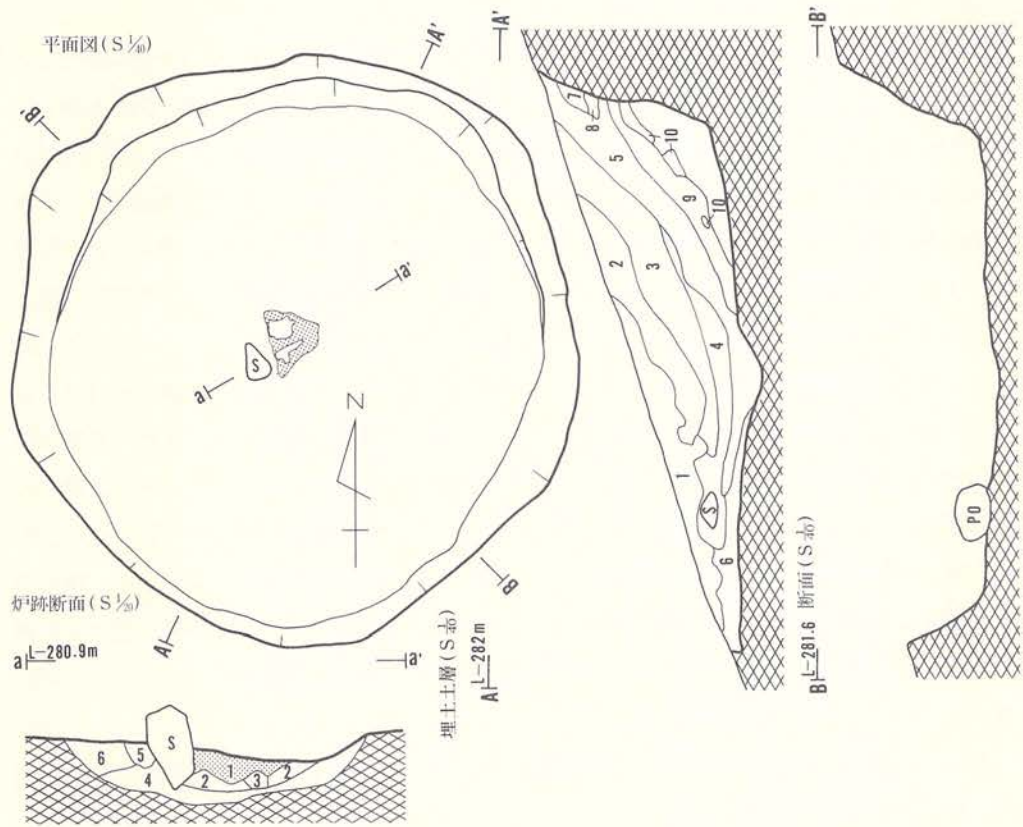
〔遺 構〕 （第29図、P L—20）

C区中央南斜面の沢沿いで、グリッドII a 60・61とII b60・61にまたがって位置する。

東西・南北とも径3cm位の規模をもち、ほぼ正円に近い円形を示す堅穴住居跡である。壁高は最も高い北東壁で120cm、最も低い南西壁で10cm位と極端の相違があるが、これは自然地形が南に向う急斜面であることに起因する。壁面は下部ほど床面と直角に近く、上位ほど強く外傾するが、これは上位が崩れによるものであろう。

床面は炉の周囲が軽く窪み、南に向って全体が緩く傾斜するものの、大きな凹凸もなくほぼ平坦である。踏み固めによって全面が非常に硬く、特に炉の周囲が顕著である。

炉は南西側に長径24cm、短径15cm、高さ23cmの礫を1個埋設した配石炉である。炉床の焼土は30cm×30cmの不整な三角形の広がりをもち、厚さが7cm位と長時間使用された状況を示している。ほかの柱穴や壁溝といった施設は検出されていない。



II a 60住土層

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 褐色	シルト。炭化物を全体に含む。
2	10 YR 5/6 黒褐色	シルト。炭化物1層より多い。
3	10 YR 5/6 褐色	シルト。浮石・炭化物を含む。
4	10 YR 5/6 暗褐色	シルト。炭化物の混入が多い。
5	10 YR 5/6 褐色	シルト。浮石・炭化物含む。
6	10 YR 5/6 黄褐色	シルト。細粒浮石を含む。
7	10 YR 5/6 明黄褐色	シルト。白砂が混入。
8	10 YR 5/6 にぶい黄褐色	シルト。非常に硬い。
9	10 YR 5/6 黄褐色	シルト。浮石を含む。
10	10 YR 5/6 にぶい黄褐色	シルト。非常に硬い。
11	10 YR 5/6 黄褐色	シルト。白砂が多い。

II a 60住炉土層

層位	色調	土性
1	5 YR 5/6 赤褐色	焼土。焼成を受け赤変している。
2	10 YR 5/6 褐色	粘土質。若干赤味をもつ。
3	〃	粘土質。
4	〃	礫混じり、基本層序VI層。
5	10 YR 5/6 黒褐色	シルト。礫石掘り方。
6	10 YR 5/6 褐色	シルト。

第29図 (II) II a 60住居跡(遺構)

埋土は褐色・黄褐色・黒褐色等のシルトが主体で構成され、11層に細分される。中でも6～11層は基本層序第VI層とした白砂(火山灰流凝灰炭)が堆積したり混入した層であり、その意味ではこれらの層は人為的な土層と理解することも可能である。全体的には浮石や炭化物が多少の差こそあれ混入している。自然堆積で埋没したと考えられる。

〔遺物〕

床面直上から出土したのは底部を欠失する大形の深鉢形土器 1 点のみで、他は全て埋土内からの出土である。遺物には実測 6 点、破片 388 点の土器と土器片円盤 4 点、石器 8 点がある。

土器 (第30・31図72~94・309、P L—124)

床面直上から出土した72は、頸部~口縁部を無文にし、頸部下端に横方向の原体側面による押圧縄文を付した後、体部中位まで原体 L R 横~斜回転による単節の斜行~横行縄文があり、体部下端は無文である。底部を欠失するが、残存器高約27cm、口縁部径24.3cm、体部最大径(肩部) 25cmの大きさで、頸部で窄んだ後口縁部が外反する。73は原体 L R の縦や横回転された単節の斜行縄文で、一部は羽状的な部分もあり、口唇にも原体の回転文がある。器形は72とほぼ同様である。74は頸部に刺突を付す隆帯が全周した無文土器である。器形は頸部で窄み体部が丸味をもつらしい様相であることから、広口壺状かもしれない。75・76は底部だけを残す個体で、ともに上げ底で輪高台状になる。2点とも原体 L R 横回転による単節斜行縄文を付す。77は注口土器から剥落した注口部である。79・80・84・85は原体 R L 縦回転で付された単節斜行縄文の付された器表を、沈線で入組文的に区画しその部分を無文としている。86~88は無文の器面に並行する 2 条や 4 条の沈線を引いた後、篋先による沈線の刻みや斜め刺突による引き起しがあり、86には円形の瘤状突起の貼付がある。80の口縁部も88と同様の施文がある。78は口唇が内削ぎされて短く外折し、口縁上端に円形で小さな瘤が付着する。その他の土器は全て縄文だけが付された粗製土器である。縄文には 0 段多条による原体 L R 横回転 (81・89・92・309) や縦回転 (93) による斜行縄文である。

以上のことから、72は第IX群 5 類、73は同群 3 類、74・86~88は第VI群10類に相当し、80は同群 8 類に入る土器である。

土製品 (第31図 1・21~23、P L—156・157)

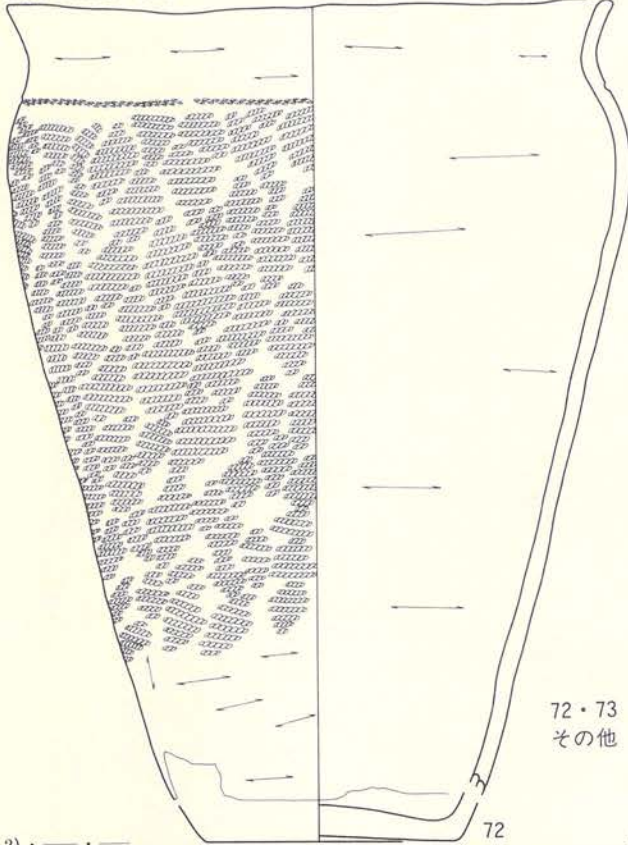
1 は耳飾りと思われる円盤形の土製品で、表面の中央に縦長の瘤がありその位置から二条 1 組の沈線が放射状に付されている。形は径4.9cmのほぼ正円で、中心が厚さ1.9cmで最も厚く、側縁には溝が全周している。21~23は土器破片の周辺部を再加工して円形や楕円形に仕上げた土器片円盤である。器面に縄文だけを付すもの (21) や縄文と沈線のあるもの (23)、無文のものがあり、直径や重量はそれぞれによって差がある。

石器 (第32図19・20・86・87・228・262~264、P L—158・161・168・170)

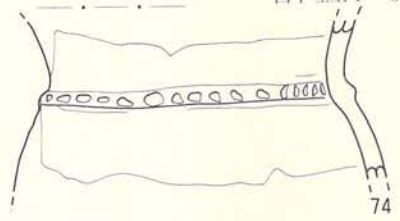
石匙 2 点、削器 2 点、凹み石 3 点、磨石 1 点の石器が出土したが、全て埋土内からの出土で床面直上からの出土はない。石匙は 2 点とも同じ型の横形右爪型で、20の方がやや大き目である。2点とも縦形の剥片を素材とし、パルプを右側にした側縁に抓みを作り出しており、その反対側の側縁 (実測図では下縁) に裏面からの剝離調整を加えて作られている。86・87は削器

24.3・(10.2)・33.5

床直



西半埋土1~3層



西半埋土1~3層

西半埋土1~3層



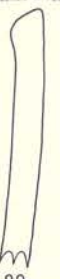
84

91

72・73 縮尺 $\frac{1}{3}$
その他 縮尺 $\frac{1}{2}$

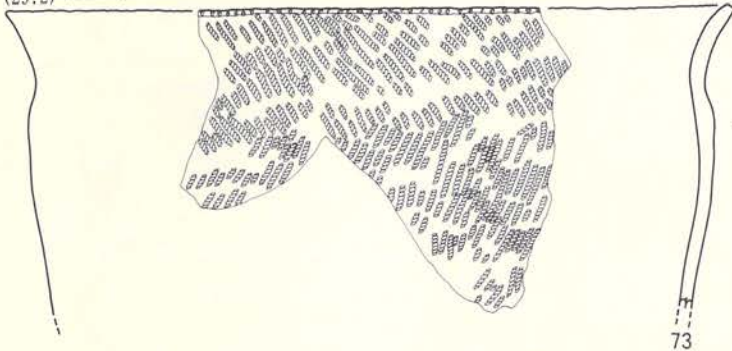


埋土2層



89

(29.2)・



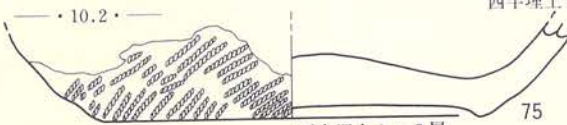
埋土3層



東半埋土1~3層

92

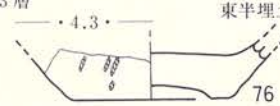
・10.2・



西半埋土1~3層

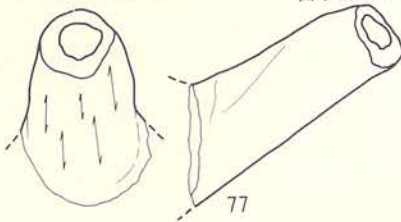
西半埋土1~3層

・4.3・



東半埋土3層

西半埋土1~3層



77

西半埋土1~3層



85



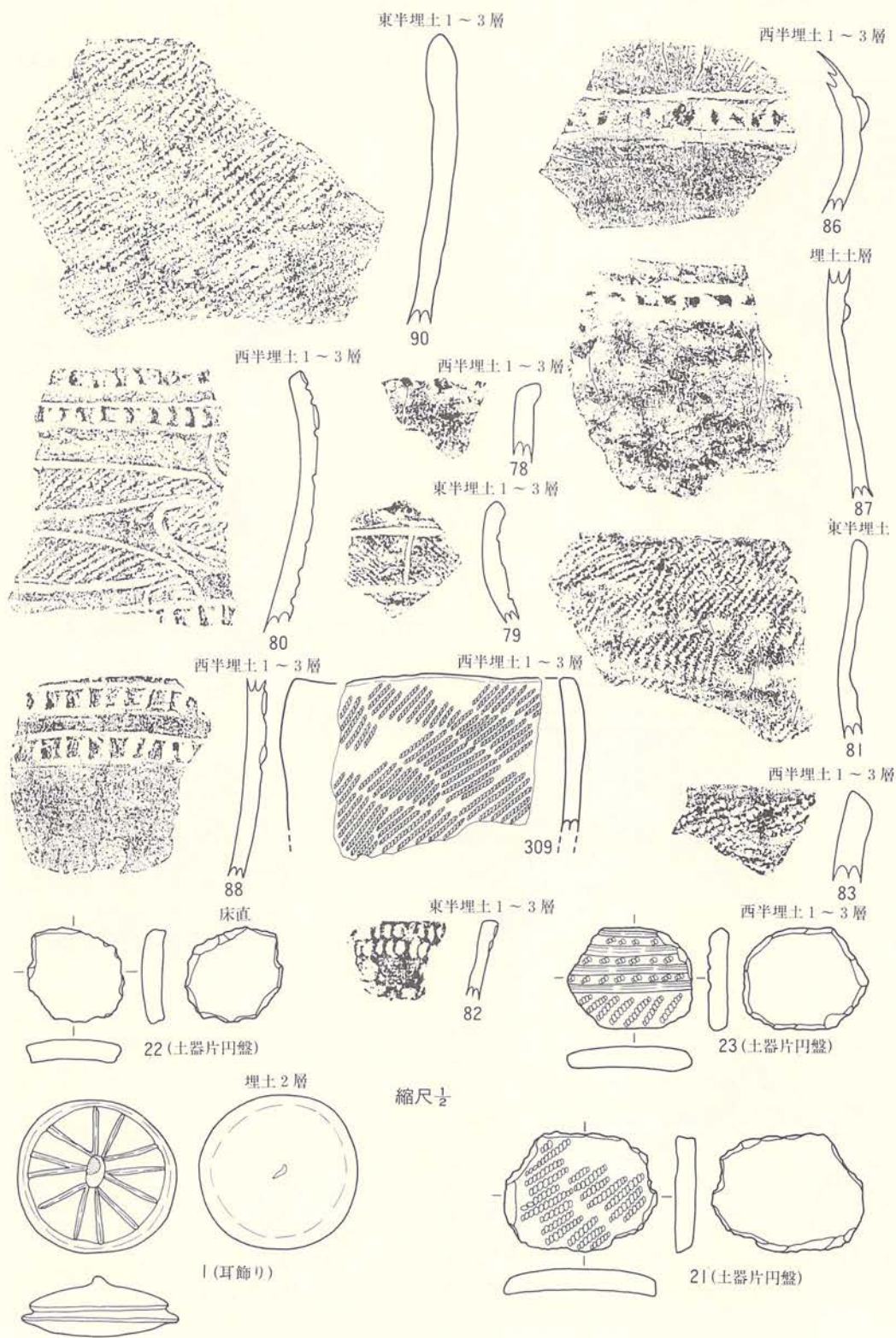
94

西半埋土1~3層

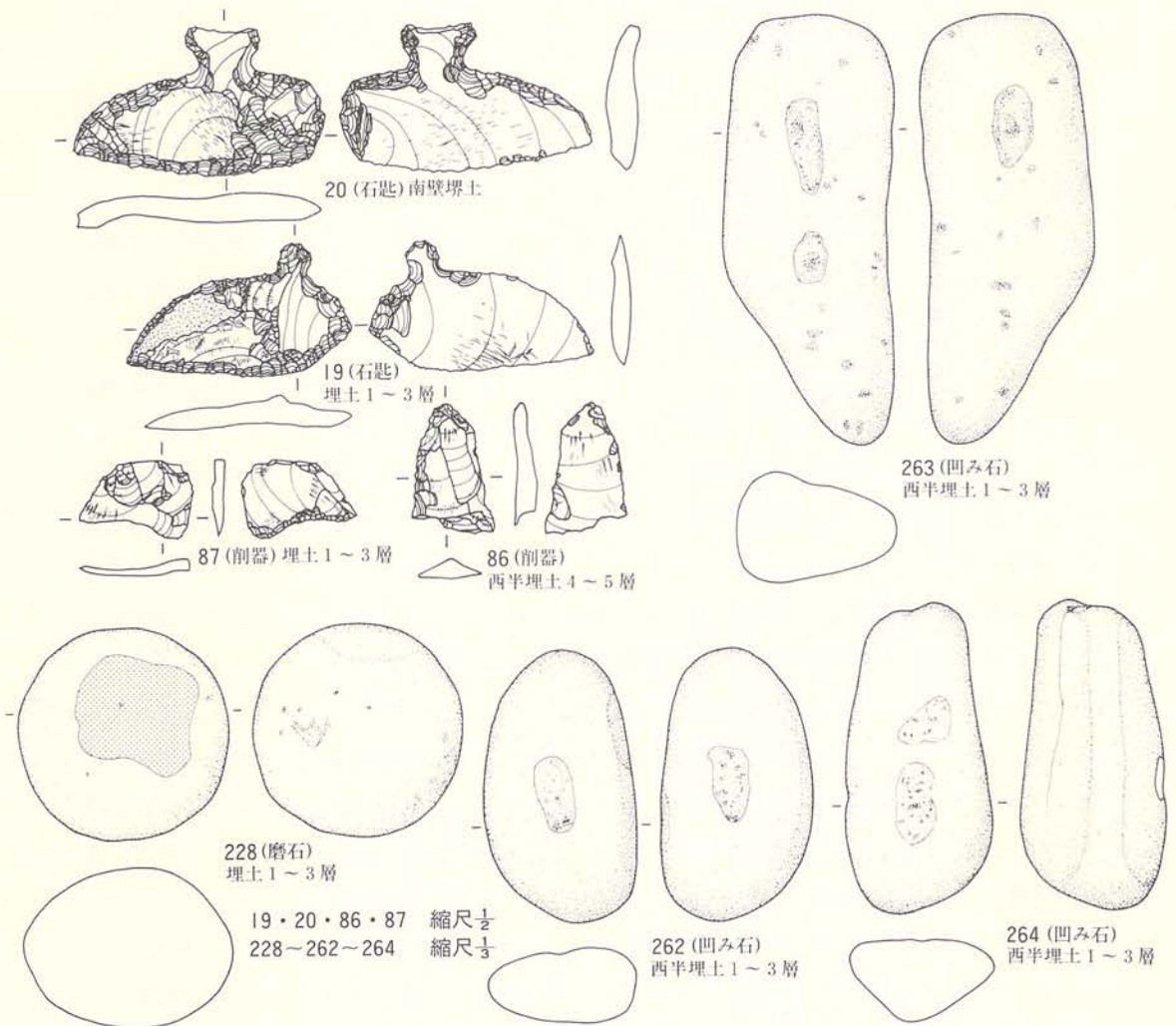


93

第30図 (II)II a 60住居跡(遺物-1)



第31図 (II) II a 60住居跡(遺物-2)



第32図 (II) II a 60住居跡(遺物-3)

で、剥片の周縁部の一部を剥離調整して使用したものである。262~264は凹み石である。3点とも長円形や棒状の円礫を使用したもので、262・263は両面、264は片面に使用痕を残している。228は円形で断面が扁平な円礫の1面を磨石として使用している。

石材の石質は、19・20が奥羽山系新第三系中新統産の珪質泥岩、削器も同産の凝灰質泥質珪岩と珪質泥岩、228は北上山地古生界産の硬砂岩、262~264は奥羽山地新第三系中新統の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

床面直上から出土した72は後期初頭に位置づけられる土器である。その他の時期の判明する

土器は後期末葉であるが、これらは埋土上層からの出土が主で、下層からの出土は全くない。以上のことから考えて、本住居跡は後期前葉に位置づけられるであろう。

(12) II a 56住居跡 (旧II b 56住居跡)

〔遺 構〕 (第33図、P L-21)

C区の北西端、グリッドII a 56・II b 55・56にまたがって位置し、I j 54住居跡の約4 m南方にある。また、II b 55土坑-1・2とII b 56土坑-3と重複しているが、II b 55土坑-1は本住居跡より新しく、ほかは古い。

東西・南北とも3.2mの規模をもち、ほぼ正円に近い円形を示す堅穴住居跡である。壁は30cm～35cmの高さがあり、この付近の自然地形が西側に傾斜するため、西壁寄りが低くなっている。壁の立ちあがりは全体的にみれば外傾しているものの、床面に対して比較的直角に近い部分が多い。床面には凹凸もなくほぼ平坦で、北西壁寄りが若干低くなる傾向がある。踏み固めによって全面が硬く、特に炉の周囲にはこの傾向が強い。

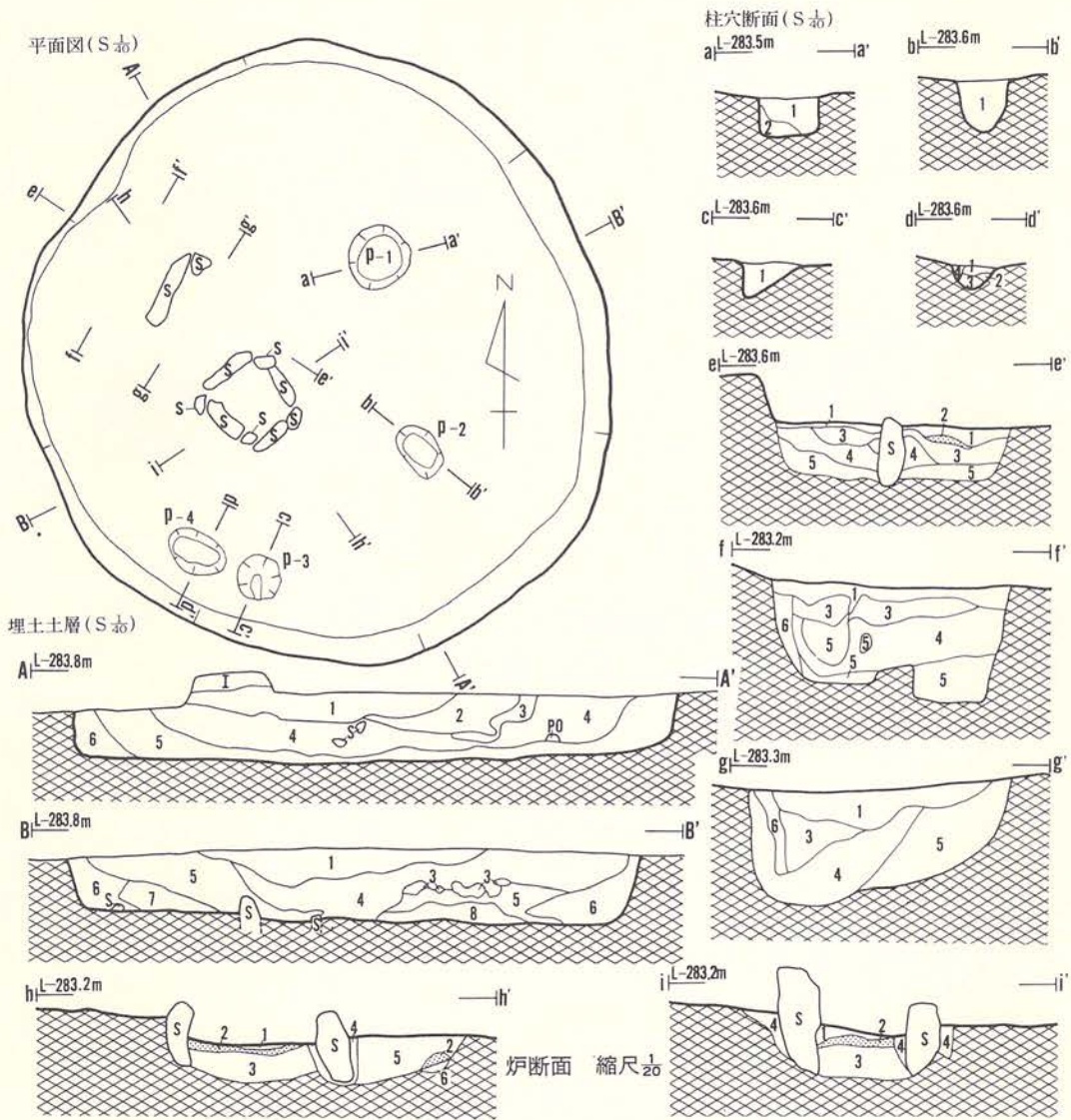
炉は8個の扁平で細長い円礫を床面から10cm～15cm掘り下げ、50cm×45cmの略方形に埋めて作った石囲い炉で、床面の中央からやや南西壁寄りに設置されている。また、この石囲い炉を精査したところ、この炉を築く以前には北西壁寄りに作られていたことが判明した。それは、北西壁から60cmほど中央に寄った位置で検出された長径45cm、短径10cm、高さ35cmの円礫と、新しい炉の間から検出された焼土の存在によって証明された。古い炉も石囲い炉で、それに伴う焼土は床面下10cmで、4 cmほどの層厚がある。範囲は明確にし得なかった。新しい炉は、古い炉を壊して作られ、焼土も4 cm～5 cmの層厚があり、長時間使用されたことを示している。新炉・旧炉とも壁に偏っていることから考えると、本来は複式炉であった可能性が強い。

床面上からP₁(径34cm×34cm、深さ23cm)、P₂(径30cm×20cm、深さ27cm)、P₃(径22cm×22cm、深さ18cm)、P₄(径34cm×22cm、深さ11cm)の柱穴状土坑が検出されている。P₁—P₂の距離1.1m、P₂—P₃の距離1.1m、P₁—P₃の距離1.9mそれぞれ離れて位置し、P₃・P₄が南西壁際に偏るだけでなく、全体の配置関係が南西壁寄りにずれている。規模にはあまりバラツキがないので柱穴とすることに問題はないが、南西壁に偏ることに疑問を残している。壁溝は検出されていない。

埋土は明褐色や褐色、暗褐色等のシルトで構成され、8層に細分される。浮石粒や炭化物粒が全体に混入することと、汚れた基本層序第V層が混入する例が多いことを特徴としている。人為的に埋め戻された可能性が大きい。(Y)

〔遺 物〕

埋土内から75点の土器片と炉脇床面から凹み石1点、埋土から石弾1点が出土している。



II a 56住炉土層

層位	色調	土性
e・f・g ライン		
1	7.5YR 極暗褐色	シルト。炭化物和焼土を含む。
2	明褐色	焼土。あまり強い焼成ではない。
3	7.5YR 褐色	砂質シルト。若干の炭化物を含む。
4	7.5YR *	シルト。汚れた基本層序VI層。
5	7.5YR *	*。基本層序VI層。
6	10 YR 暗褐色	砂質シルト。若干粘性あり。
h・i ライン		
1	7.5YR 暗褐色	シルト。炭化物和焼土粒含む。
2	7.5YR 褐色	シルト。焼成を受けている。
3	7.5YR 明褐色	基本層序VI層上部。
4	7.5YR 暗褐色	砂質シルト。炉石振り方の埋土。
5	*	*
6	暗褐色	焼土。古い炉の燃焼部。
7	7.5YR 暗褐色	4層と同じ。
8	7.5YR *	基本層序VI層。

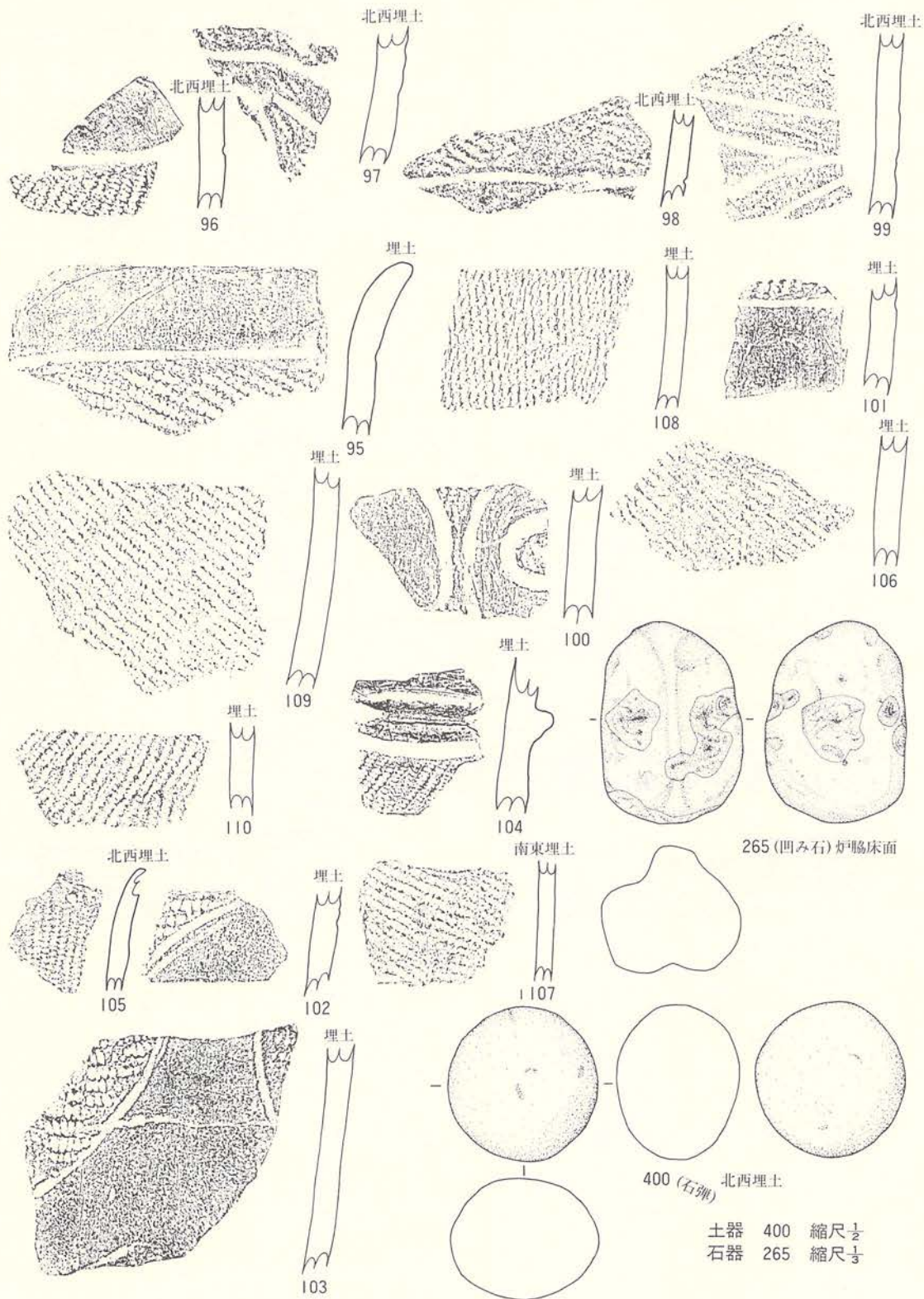
II a 55住土層

層位	色調	土性
I 層		
1	7.5YR 明褐色	シルト。基本層序V層と暗褐色土の混合土。
2	7.5YR 褐色	砂質シルト。浮石粒を多量に含む。
3	10 YR 黄褐色	基本層序V層のブロック。
4	10 YR 暗褐色	砂質シルト。浮石を多量に混入。
5	10 YR *	*。炭化物の混入あり。
6	7.5YR 褐色	シルト。汚れた基本層序V層。
7	7.5YR 暗褐色	シルト。5層より明るい。
8	7.5YR 褐色	砂質シルト。浮石や炭化物が混入。

II a 56住柱穴土層

層位	色調	土性
P 1		
1	7.5YR 褐色	シルト。基本層序VI層に近い。
P 2		
1	*	暗褐色シルト。浮石が若干混入。
P 3		
1	*	褐色シルト。汚れた基本層序VI層。
P 4		
1	*	暗褐色シルト。浮石粒を混入。
2	褐色	シルト。若干粘性あり。
3	暗褐色	シルト。炭化物の小粒混入。
4	褐色	シルト。汚れた基本層序IV層。

第33図 (12) II a 56住居跡(遺構)



第34图 (I2) II a 56住居跡(遺物)

土器 (第34図95～110、P L—125)

実測可能な土器は1点も含まれず、全て破片のみである。文様の施文されている95～103は全て器表に縄文が施文された後、沈線で区画して縄文を磨消する共通した特徴をもっているが、縄文には原体R L縦回転による単節斜行縄文(96・101・103)とL R縦回転による斜行縄文(98)の2種類がある。104は隆帯の貼付と沈線がつく。縄文だけを付す破片には0段多条による原体L R横回転の単節斜行縄文(109)と単軸絡条体縦回転による撚糸文が付されている。

以上のことから、器面に縄文以外の文様を付す土器は全て第III群4類に相当し、その他は第IX群に属するであろう。

石器 (第34図265・400、P L—170・178)

265は長径9.7cm、短径6.7cm、厚さ5.8cmの円礫を凹み石として使ったもので、5面に使用痕(凹み)をもっている。400は径5cmのほぼ正円で扁平な断面をもつ円礫の石弾である。石材の石質は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

床面から出土した土器が全くないので断定できないが、時期の判明する土器が全て中期末葉に属することから考えると、本住居跡は中期末葉に位置づけられると推定される。

(13) II b 58住居跡(旧II a 58住居跡)

〔遺構〕 (第35図、P L—22)

C区の西端に近いII b 58・59、II c 58・59、II d 58・59の6グリッドにまたがって位置し、尾根頂上部から南向きの緩斜面にかけて立地する。北東から東側の壁際でII c 58土坑—1～3、南壁際でII c 59土坑と重複している。新旧関係を埋土の土層図で見ると、いずれの土坑も本住居跡の埋土や床面を掘り込んでいることから、土坑の方が新しいことになる。

東西6.6m、南北6.6mの規模をもち、ほぼ正円に近い円形を示す堅穴住居跡である。壁の高さは最も高い北壁が60cmであり、最も低い南壁では斜面にかかるために流亡して残っていない。壁面が床面とほぼ直角に立ちあがる部分(西壁)もあるが、ほとんどは外傾しており、場所によって程度に違いがある。

床面には細波のような小凹凸が全面にみられ、全体が南東に向って軽く傾斜している。踏み固めが強く全面が非常に硬いが、特に炉の周囲と炉より北側が顕著で、移植竈で削れないほどである。また、床面直上に1mm以下の炭化物層が観察され、さらに床面の凸部に焼成によると考えられる赤色変化もみられる。このことから、本住居跡は焼失した可能性が高い。

炉は10個の亜角礫を南東側が開口する「C」形状に配置した石囲い炉で、床面中央から若干東に寄って位置する。炉石には大小があるものの、概して扁平で長目のものを選び、床に5cm

～10cm埋めて据えている。しかし、中には床に埋め込むことなく、床面に並べて置きシルトで固定したらしいものもある。炉内の焼土は全面に広がるが、層としては3cm～5cm位と薄い。また、炉に使用された礫の内、南端の他の礫と若干離れているものは、他と比較すると極端に大きく、縦に長く外傾するように立っていた。柱穴や壁溝といったほかの施設は検出されていない。

埋土は明褐色・褐色・暗褐色・灰褐色・黒褐色等のシルトで、11層に細分される。1層から8層までは炭化物や焼土の混入が多く、特に床面直上には炭化物の薄層が観察される。また、4・5層は汚れた基本層序第VI層の地山土である。炭化材というほどの大きさのものはないが、ほぼ全層に炭化物や焼土が混入していることから、本住居跡は焼失したことを表すものであろう。自然堆積によって埋没した住居跡であろう。

〔遺物〕

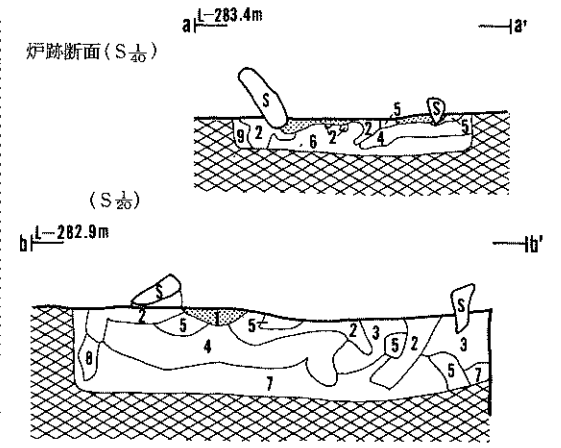
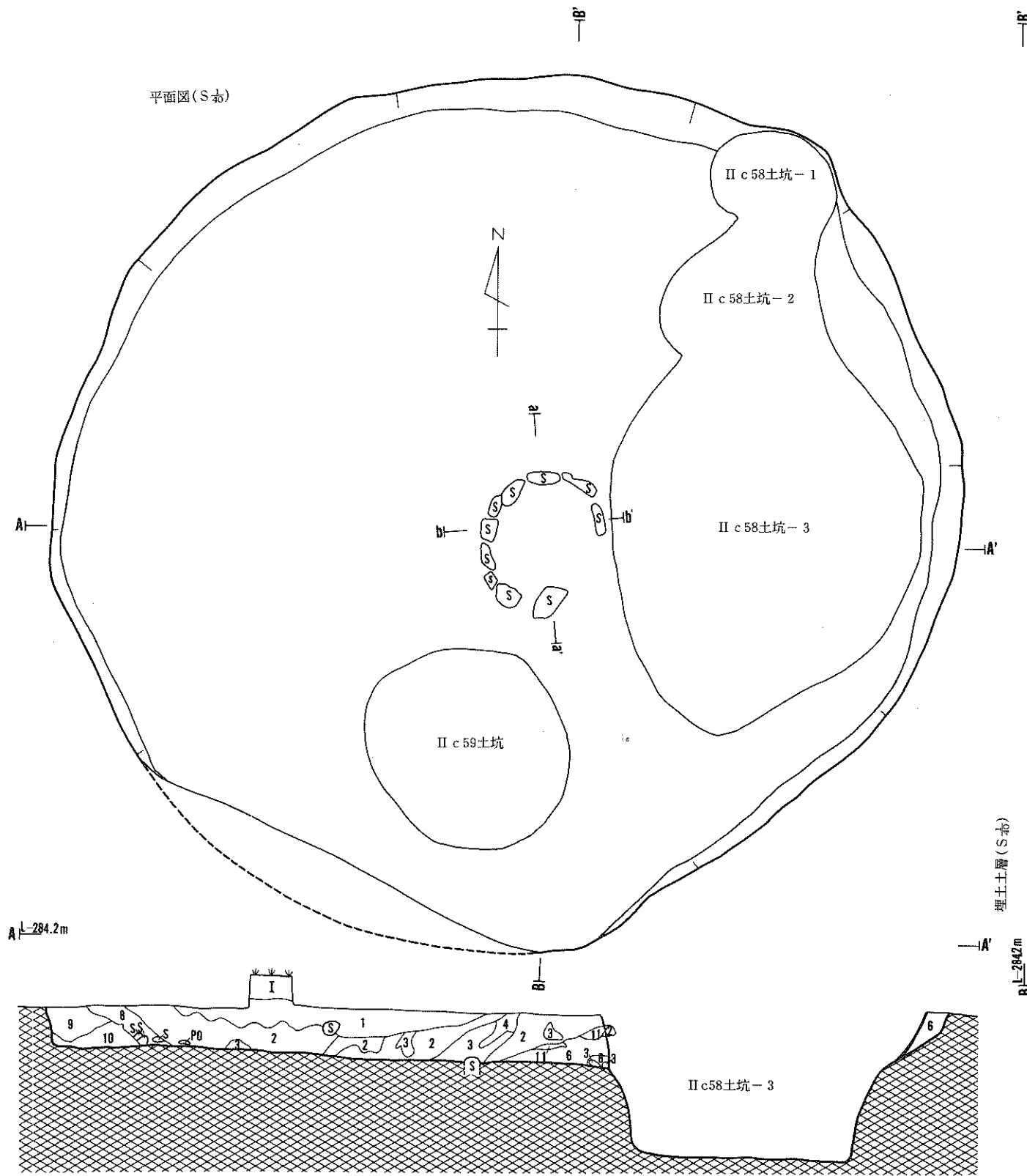
実測可能なもの12点と破片728点の土器と土製品1点、石器15点が出土している。出土状況を見ると、床面直上から出土したのは実測土器4点(111～114)と石皿3点のみである。その他の遺物は全て埋土内からの出土である。

土器 (第36・37図111～147、P L—125)

床面直上から出土したのは111～114の4点のみである。111・112・121は体部下位から底部を残存する鉢か深鉢形で、器表に原体LR横回転による斜行縄文が付され、112の底部は上げ底になっている。113は無文で丸底風の小型土器である。114は無文で底部が上げ底風の壺形土器で、体部中位から底部を残存する。118・119は体部下端と底部を残す破片で、119の器表には原体LR横回転による単節斜行縄文をもつ。117は無文で体部下位から底部を残す小型土器である。122は無文の壺形の頸部破片である。115は壺形の頸部下端から肩部を残す破片で、原体LR横回転による斜行縄文を付す。124～126と130～136までは縄文をもつ器面が入組文的な沈線で区画され、一部が磨消されたりさらに磨消部を篋先の刻目帯とする、共通の特徴をもつ。127はa・bとも器面に沈線や列点文を付す土器であり、128・129は縄文を付す器面を沈線で入組文的に区画し、その部分の縄文を磨消している。器面に縄文だけを付す137・139～142は、0段多条の原体LR横回転(137)や横回転(140～142)による単節斜行縄文や羽状縄文(139)である。138は体部に原体LR横回転による単節斜行縄文を付して頸部を無文にし、口唇には上面からの押圧による凹みが連続する。143～145は器面に横方向の太い条線の入る土器である。146・147は無文土器の破片である。

以上のことから、123・127a・127bは第VI群3類、124・125・130～136は第VI群7類か8類、126・128・129は第VI群9類、その他無文土器は第VIII群土器、縄文だけを付す粗製土器は第IX群土器に相当する。

土製品 (第37図20、P L—157)



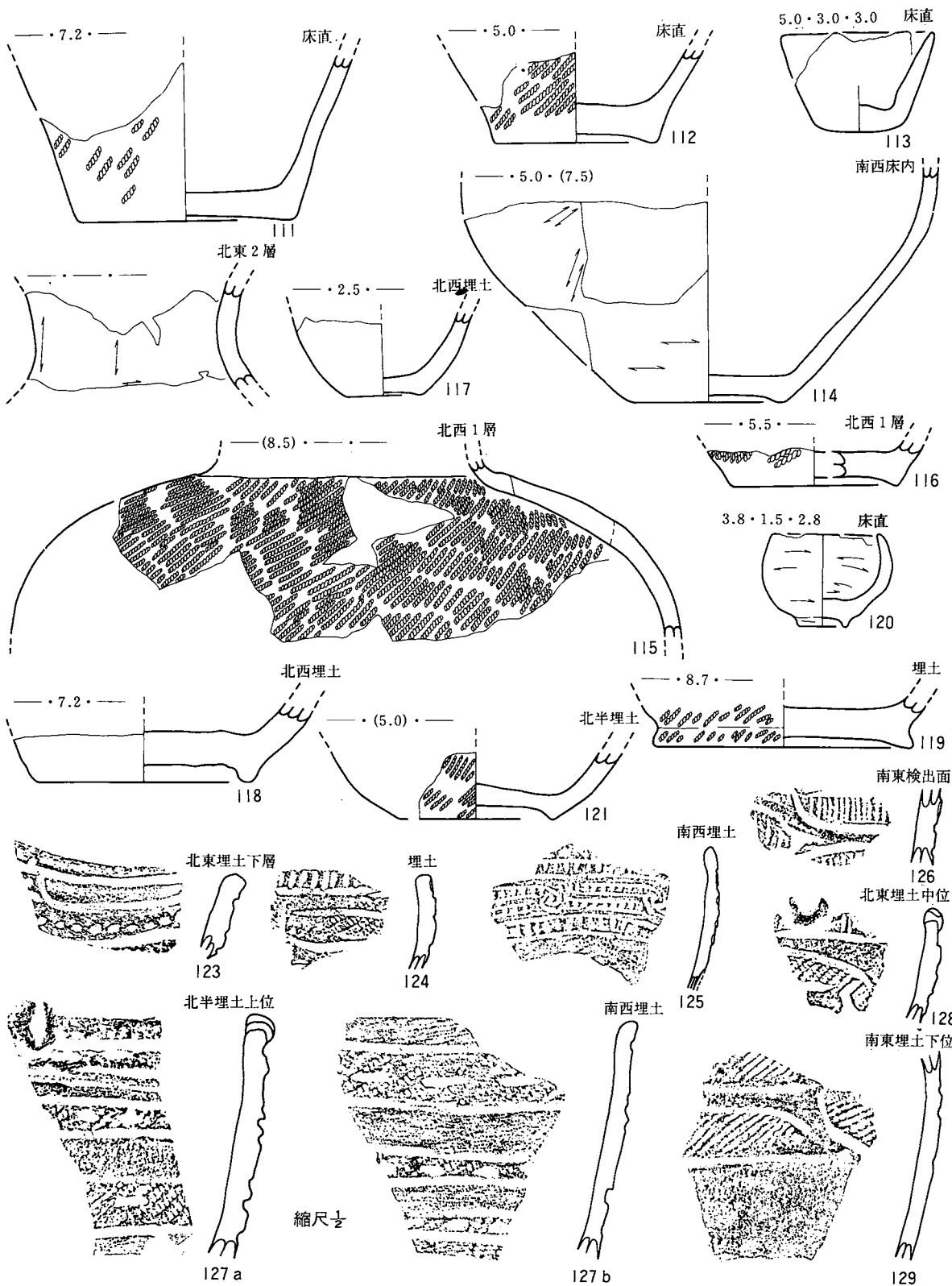
II b 住土層

層位	色調	土性
I層	7.5YR 8/ 黒褐色	基本層序 I 層。表土。
1	7.5YR 8/ 〃	シルト。団粒構造でボロボロ。
2	7.5YR 8/ 暗褐色	シルト。炭化物や焼土が混入。
3	7.5YR 8/ 〃 橙色	基本層序 VI 層の投げ込み。
4	7.5YR 8/ 褐色	シルト。汚れた基本層序 V 層。
5	7.5YR 8/ 明褐色	シルト。4 層とほぼ同様。
6	7.5YR 8/ 灰褐色	シルト。草木灰・炭化物・焼土が多量に混入。
7	7.5YR 8/ 〃	〃。焼土と潰れた炭化物が多量に混入。
8	7.5YR 8/ 褐色	シルト。浮石・炭化物が混入。
9	7.5YR 8/ 〃	シルト。8 層とほぼ同じで若干
10	7.5YR 8/ 灰褐色	シルト。炭化物が混入。
11	7.5YR 8/ 黒褐色	シルト。1 層と同じ。

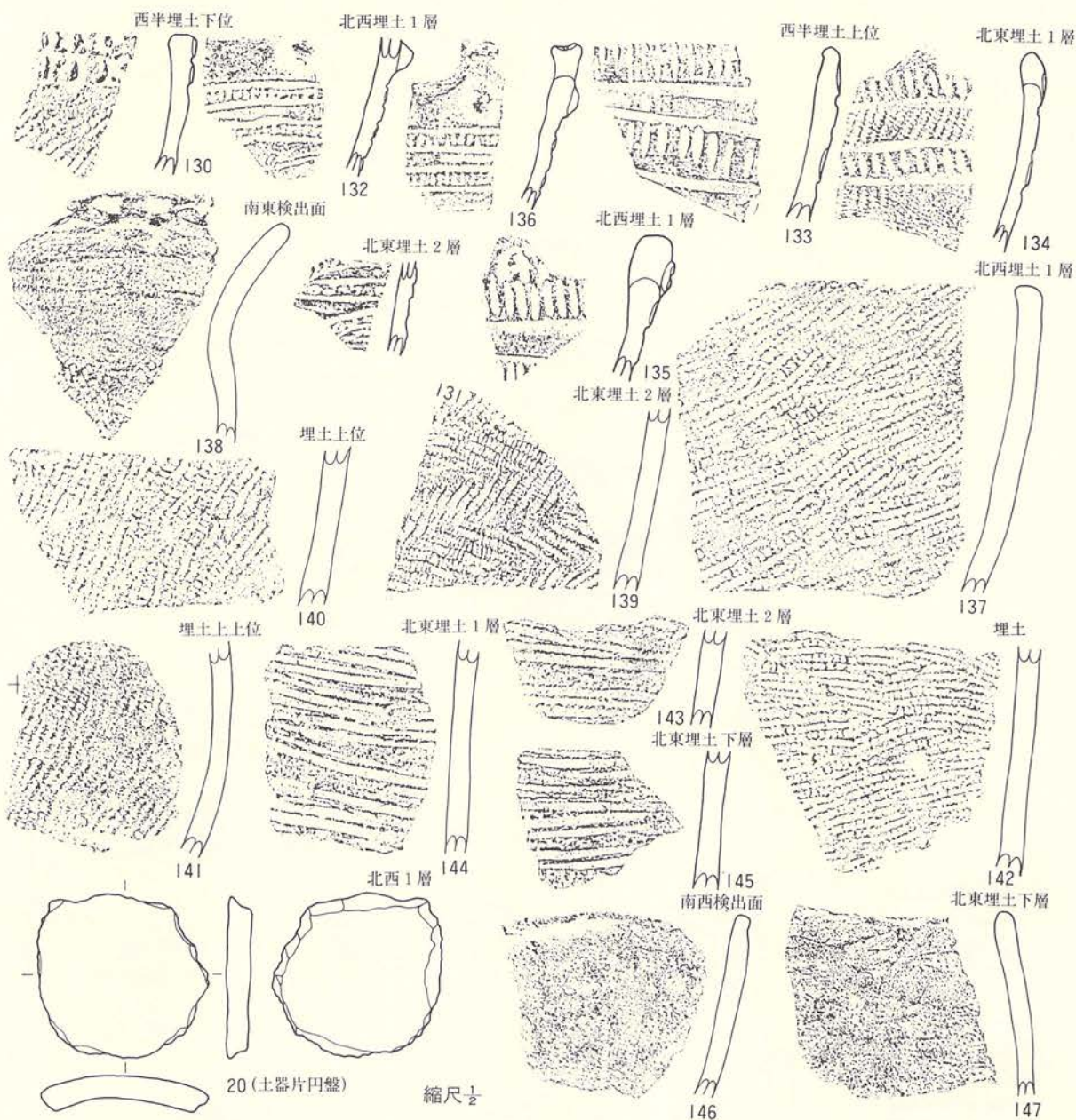
II b 58 住炉土層

層位	色調	土性
1		焼土。
2	10 YR 8/ 暗褐色	シルト。炭化物と焼土を含む。
3	10 YR 8/ 明黄褐色	汚れた基本層序 V 層。
4	7.5YR 8/ 明褐色	若干汚れた基本層序 VI 層。
5	10 YR 8/ に近い黄褐色	シルト。基本層序 VI 層ブロック。
6		〃。基本層序 VI 層。
7	7.5YR 8/ 明褐色	〃。汚れた基本層序 VI 層。
8	10 YR 8/ 明黄褐色	〃。
9		明褐色と暗褐色のシルト混合土。

第35図 (13) II b 58住居跡(遺構)



第36图 (13) II b 58住居跡(遺物-1)

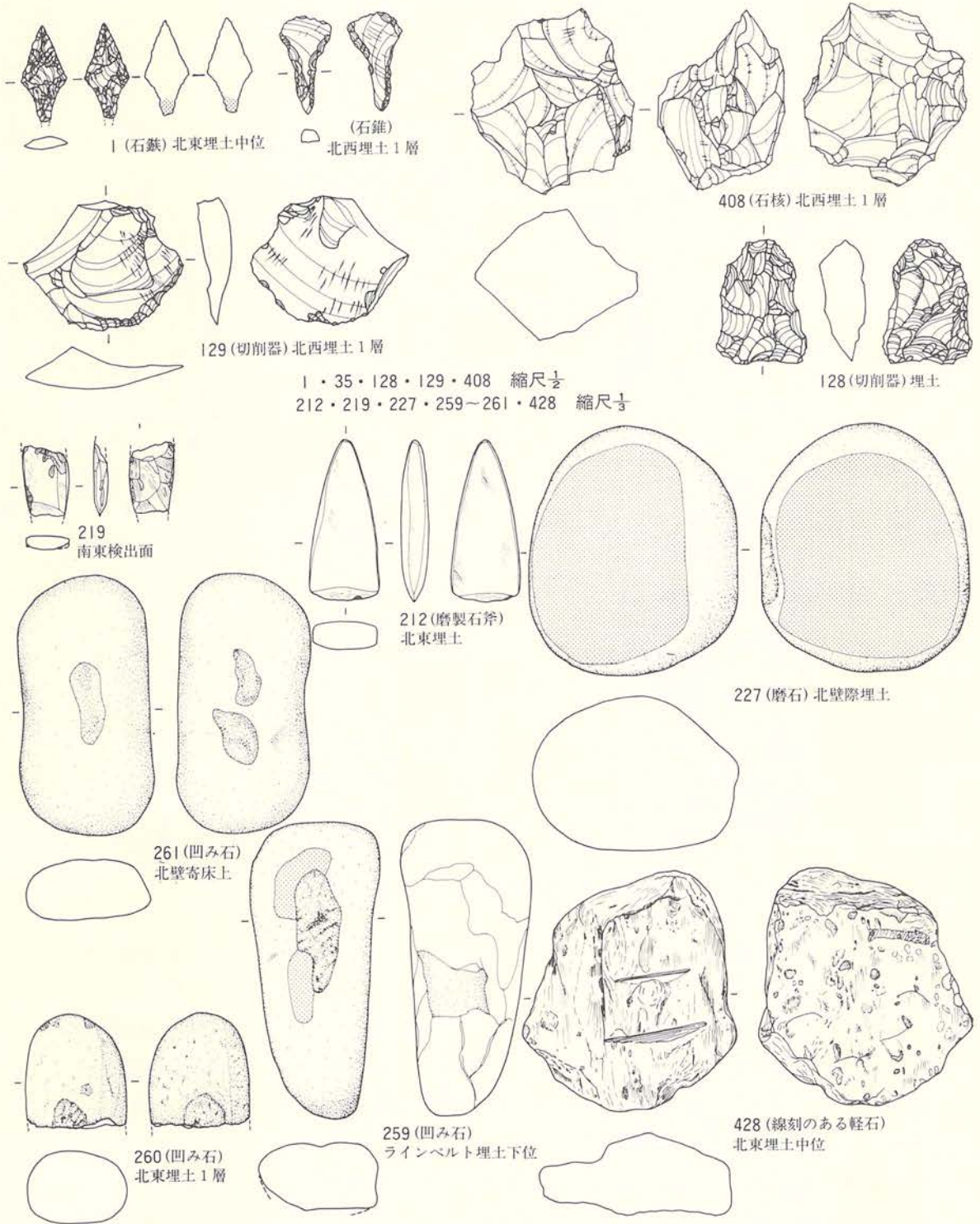


第37図 (I3) II b 住居跡(遺物-2)

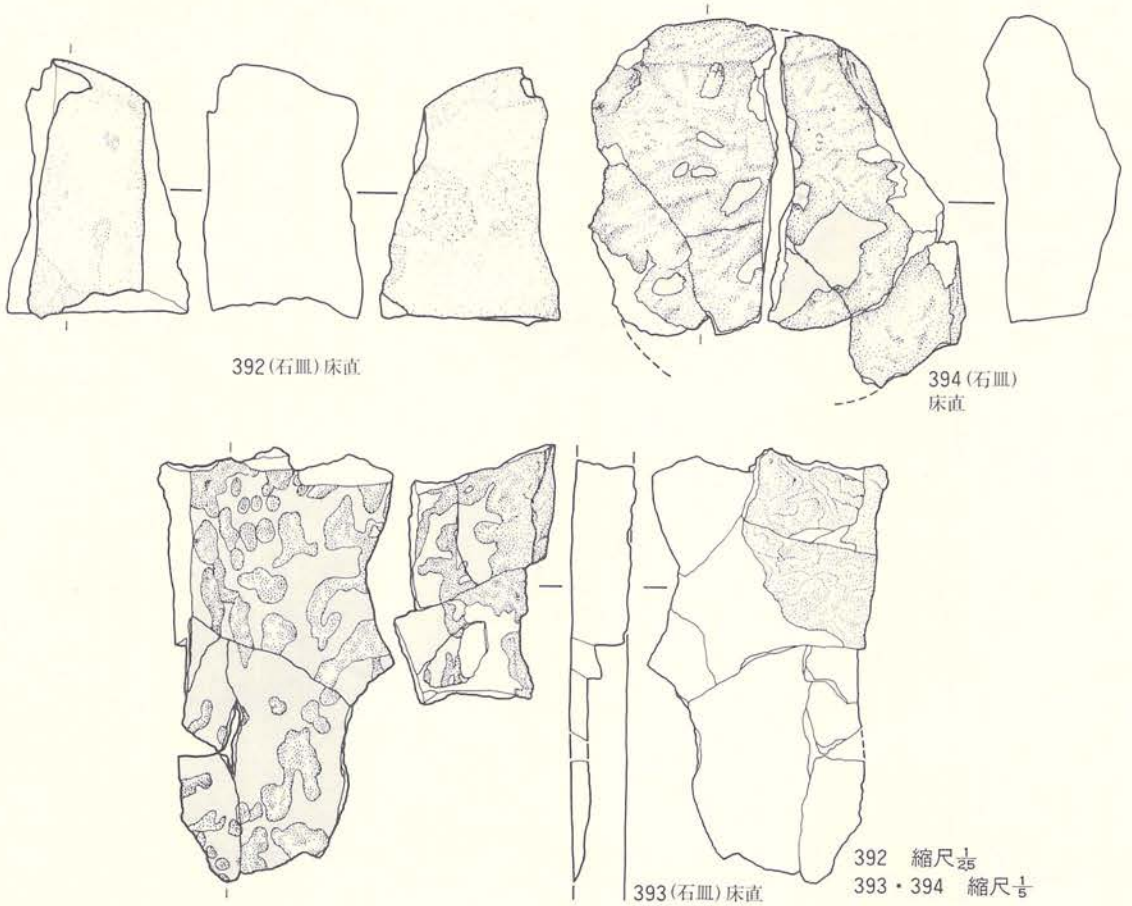
埋土内から出土した土器片の周辺部を打ち欠いて加工した土器片円盤である。長径5.2cm、短径4.6cm、厚さ7.2mm、重さ20.9gで、無文部の体部破片を使用している。

石器 (第38・39図 1・35・128・129・212・219 P L—158・163・167・168, 227・259~261・408・428 170・172・179)

石鏃1点、切削器2点、石核1点、磨製石斧2点、磨石1点、凹み石3点、石皿3点、線刻



第38図 (13 II b 58住居跡(遺物-3))



第39図 (13)II b 58住居跡(遺物-4)

のある軽石1点が出土しているが、床面直上から出土したのは石皿3点のみで、ほかは埋土内からの出土である。

石鏃(1)は茎部を欠失した比較的小型のもので、茎部の両面に黒色のタール状物質が付着している。剥離調整は両面に入念にされている。切削器(128・129)は不定形剥片の周縁に単で粗雑な調整をもつものである。石核(408)は礫の周辺部から両面に剥片を剥ぎとっており、断面が平行四辺形状である。磨製石斧は2点(212・219)で、219は欠損品である。212は全長8.8cm、幅3.1cm、厚さ1.4cmで、本遺跡出土の中では中型品の部類に入る。219は頭部を欠くが、幅2.1cmと小型品に入るであろう。磨石(227)は楕円形で扁平な長径11cmの円礫の両面を磨石

としている。凹み石(259~261)は長めの円礫の両面を凹み石としたもので、260は約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。石皿(292~294)は、西壁際の床面から火熱によって破碎したとおもわれる石屑を接合した結果判明したもので、さらに数多くの破片があるので、本来は大型の石皿であったと推定される。3点とも扁平な自然礫を石皿として使用したものである。428は線刻のある軽石である。35は粗雑に作られた石錐である。

石材は、石鏃・石錐・切削器が凝灰質珪質泥岩、石核が流紋岩質極細粒凝灰岩、磨石と凹み石が輝石安山岩の奥羽山地新第三系中新統産の礫や磨製石斧が北上山地古世界産の輝石玢岩を使用している。

〔遺構の時期〕

床面直上から出土した土器に時期を明確にし得るものがないので断定できないが、重複するII c 58土坑一3から出土した土器は後期末葉に属する土器であることと、本住居跡から出土した土器も後期末葉であることから、後期後半に属する遺構であろう。

(14) II d 57住居跡一1

〔遺構〕 (第40図、P L-23)

C区中央からやや北西寄りの尾根頂上部にあたるグリッドII d 57・58とII e 57・58にまたがり、II b 58住居跡と約3m、II e 59住居跡と約5mの距離があり、II d 57住居跡一2の後身住居跡である。

長径4.7m、短径4mの規模をもち、北東一南西に長軸方向をもつ楕円形を示す堅穴住居跡である。壁高は最も高い北壁で32cm、最も低い南壁で17cmと、自然地形が南に向って緩やかに傾斜しているため、南に寄るほど壁が低くなる。壁は床面に対して若干外傾するが、直角状の部分が多く観察される。

床面には若干凹凸があるものの、総じてみればほぼ平坦で水平に近い。床は踏み固めによって硬く、特に炉の周辺が顕著である。

炉は9個の垂角礫を南東部が開口する「C」状に配列した石囲い炉であり、床面中央よりやや南に寄って位置する。炉石の大きさは大型は長軸15cm位、小型が10cmほどで、径80cmの円周上に配置し、炉石と炉石の間は密着している部分とそうでない部分がある。構築方法をみると、全体を10cm~15cm掘り窪めた後炉石を据え、埋め戻して固定する方法がとられている。炉床の焼土はほぼ全面に広がっているが、層としては非常に薄く、あまり長時間火熱を受けたとは考えられない。ほかに柱穴や壁溝といった施設は検出されていない。

埋土は、黒褐色~褐色まで差はあるがシルトを主体として構成され、16層に細分される。また、埋土最上層(8層)には十和田a降下火山灰が堆積している。そのほか、全体的に浮石が

混入し、一部には炭化物の混入も観察される。自然堆積による埋没である。 (Y)

〔遺物〕

実測可能7点、破片181点の土器と、石匙・搔器・凹み石・石皿を含む4点の石器が出土しているが、床面直上から出土したのは土器4点と石器2点のみで、ほかは埋土内の出土である。

土器 (第41・42図148～166、P L—126)

実測土器7点の内床面直上から出土したのは148・149の2点である。148は原体L R横回転による単節斜行縄文を付す体部下位～底部を残す破片である。149は無文で口縁に5個の突起をもつ小型小器である。150は148と同じ様相を示す、151は器面に原体L R横回転による単節斜行縄文を付した後、沈線で入組文的に区画して無文とし、一部には篋先による縦形の刻目を全周させる。口縁部は8個(?)の山形突起を付す。152は体部に原体L R横回転や斜回転による斜行や横行の単節縄文を付し、体部最上位(肩部)に最大径をもって頸部で窄み、口縁部が軽く外反する。口縁部には8個の山形突起をもち、器高25.5cm、口縁部径11.5cmの深鉢である。153は頸部に原体側面押圧による圧痕文を1条全周させ、口縁部は無文、体部には原体R L横回転による単節斜行縄文を付す。155～158は0段多条による原体L Rの縦・横回転による羽状縄文が付された器面を沈線で区画し、無文としている。165・166を除くほかは、縄文のみが付された粗製土器の破片である。

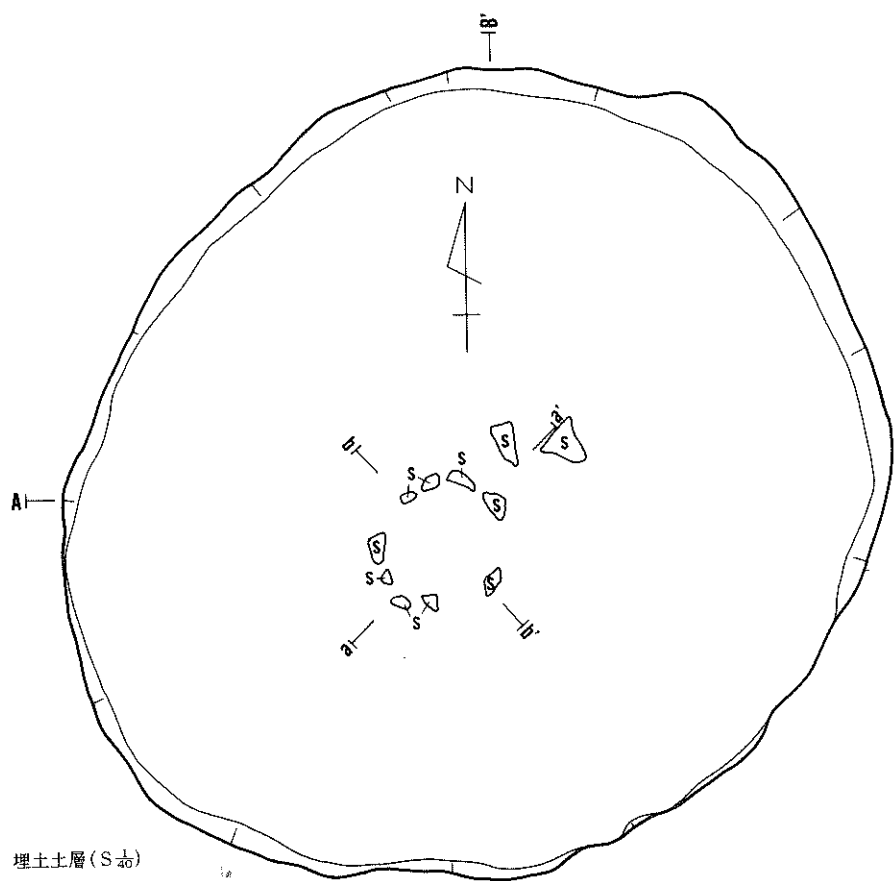
以上のことから、155～157は第VI群4類、151は第VI群9類、154は第VII群2類、153は第IX群5類、149・155・156は第VIII群土器、そのほかの粗製土器は第IX群に分類される。

石器 (第42図10・54・267・363、P L—158・160・170・175)

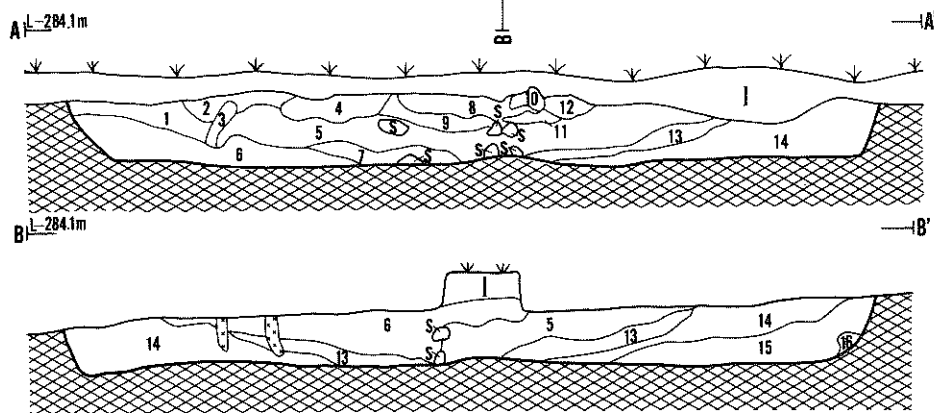
4点の出土である。10は縦形右刃型の石匙で、全長5.5cmである。54は縦長剝片を素材とし、その両側縁に裏面からの剝離調整を加えたもので、全長9.8cmである。267は片面に磨面、両面に凹みをもつ凹み石で、全長15.7cmの棒状縦長の円礫を素材としている。363は炉石として使用されていた石皿の破片である。残存する長さ15.9cm、幅18.8cm、厚さ7.8cmで、両面に使用面をもつ。石材の石質は10・54が珪質泥岩、267・363は輝石安山岩と、ともに奥羽山地新第三系中新統産である。

〔遺構の時期〕

出土した土器の中で、時期の明確なものには後期初葉(153)、後期後葉(155～157)、後期末葉(151・152)、晩期(154)がある。しかし、これらの中に床面直上から出土したものは全くない。床面から出土した149の特徴は後期末葉に近い様相である。151・152とは出土層位が極端に違うという問題点はあるが、149とは時期的に近いと理解される。よって、本住居は後期末葉に属するであろう。

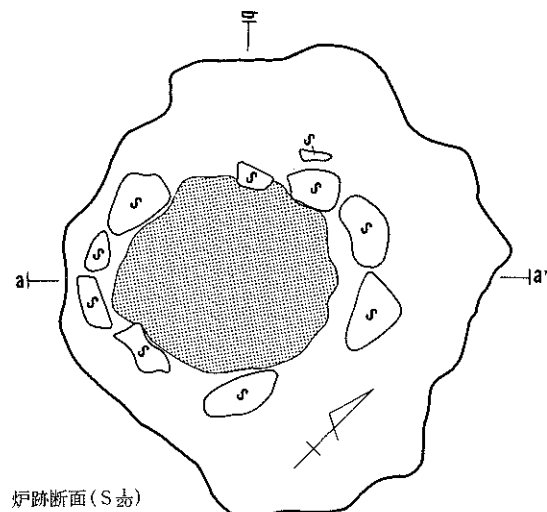


埋土土層(S₁)

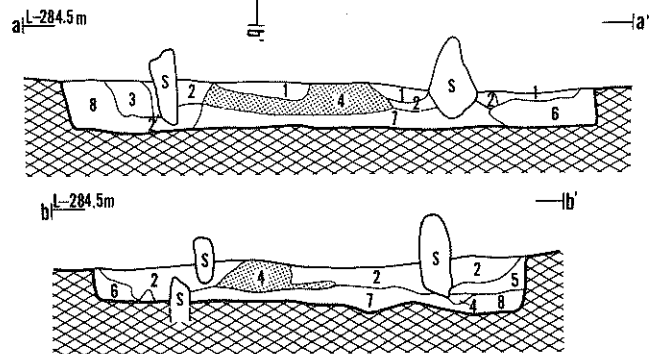


II d 57住居跡炉土層

層位	色調	土性
1	7.5YR 4/6 暗褐色	シルト。炭化物・焼土を含む。
2	7.5YR 4/6	シルト。1層とほぼ同様。
3	7.5YR 4/6 褐色	シルト。明褐色土と混合し斑状。
4	7.5YR 6/6 橙色	焼土。
5	7.5YR 4/6 黒褐色	シルト。黒色土が混入。
6	7.5YR 6/6 橙色	シルト。基本層序VI層。
7	7.5YR 4/6 明褐色	シルト。汚れた基本層序V層。
8	7.5YR 4/6 褐色	シルト。浮石が混入。



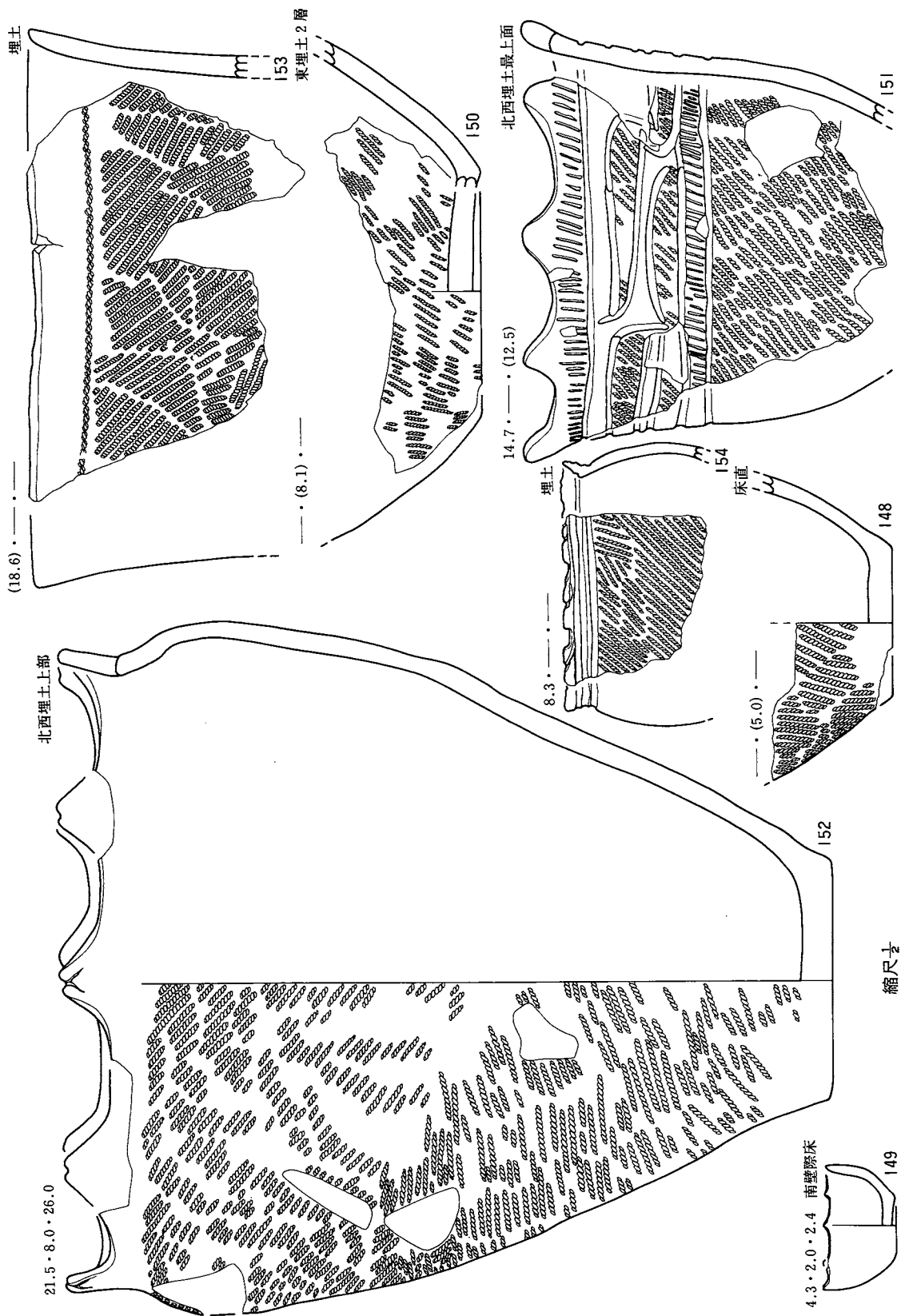
炉跡断面(S₂)



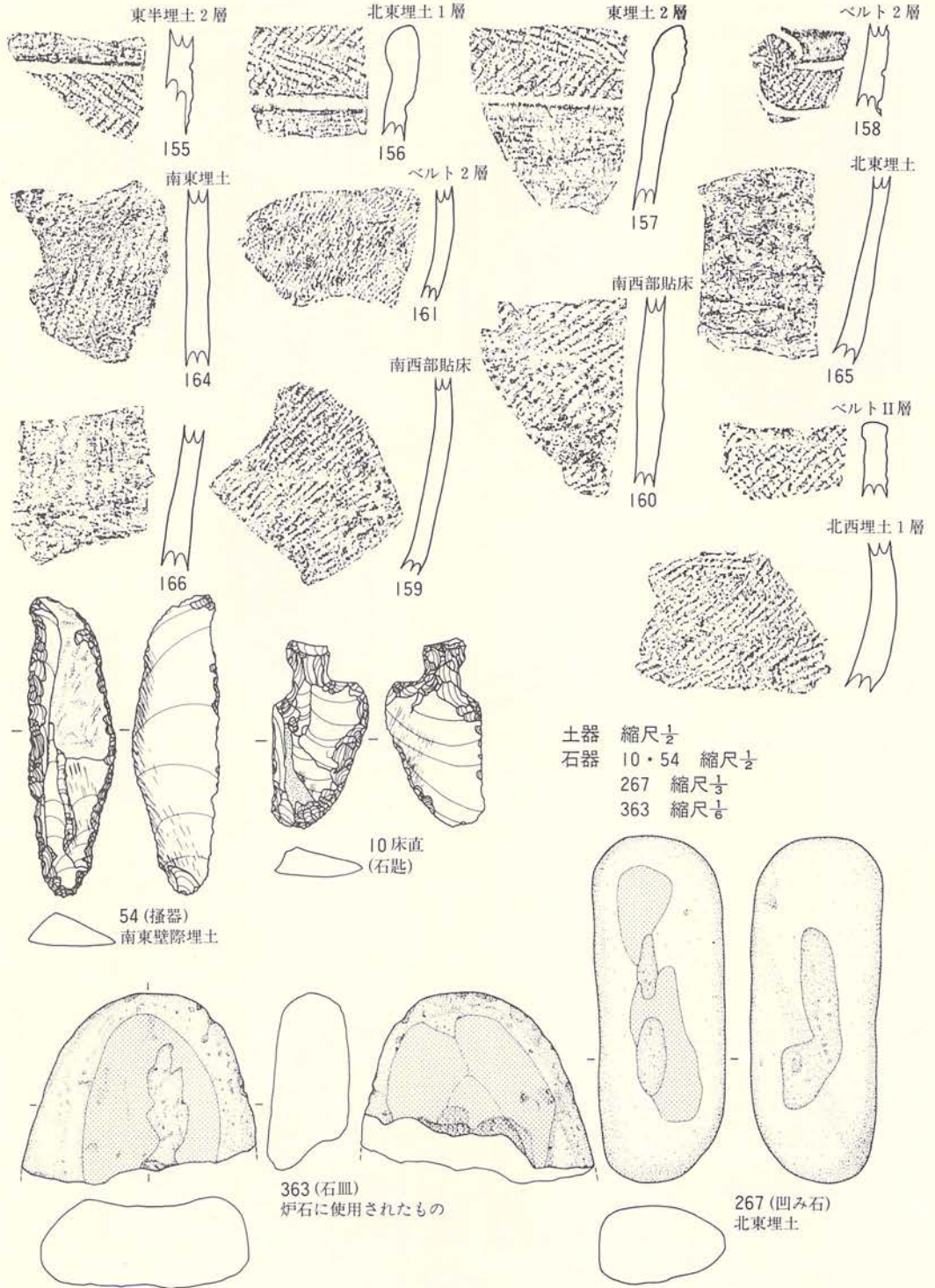
II d 57住居跡土層

層位	色調	土性
1	10 YR 4/6 暗褐色	シルト。細粒浮石混じる。
2	10 YR 4/6 黒褐色	シルト。
3	10 YR 4/6 暗褐色	シルト。
4	10 YR 4/6	シルト。炭化物・浮石を含む。
5	10 YR 4/6 黒褐色	シルト。
6	10 YR 4/6 暗褐色	シルト。少量の浮石を含む。
7	10 YR 4/6 黒褐色	シルト。炭化物・浮石を含む。
8		灰白色 基本層序III層(十和田火山灰)
9	10 YR 4/6 黒褐色	シルト。粘性なし。
10	10 YR 4/6	シルト。
11	10 YR 4/6	シルト。炭化物・浮石を含む。
12	7.5YR 4/6 暗褐色	シルト。浮石を含む。
13	10 YR 4/6	シルト。
14	10 YR 4/6 黄褐色	シルト。
15		シルト。少量の浮石を含む。
16		シルト。褐色のシルト混入。
I	10 YR 4/6 黒褐色	シルト。基本層序I層。

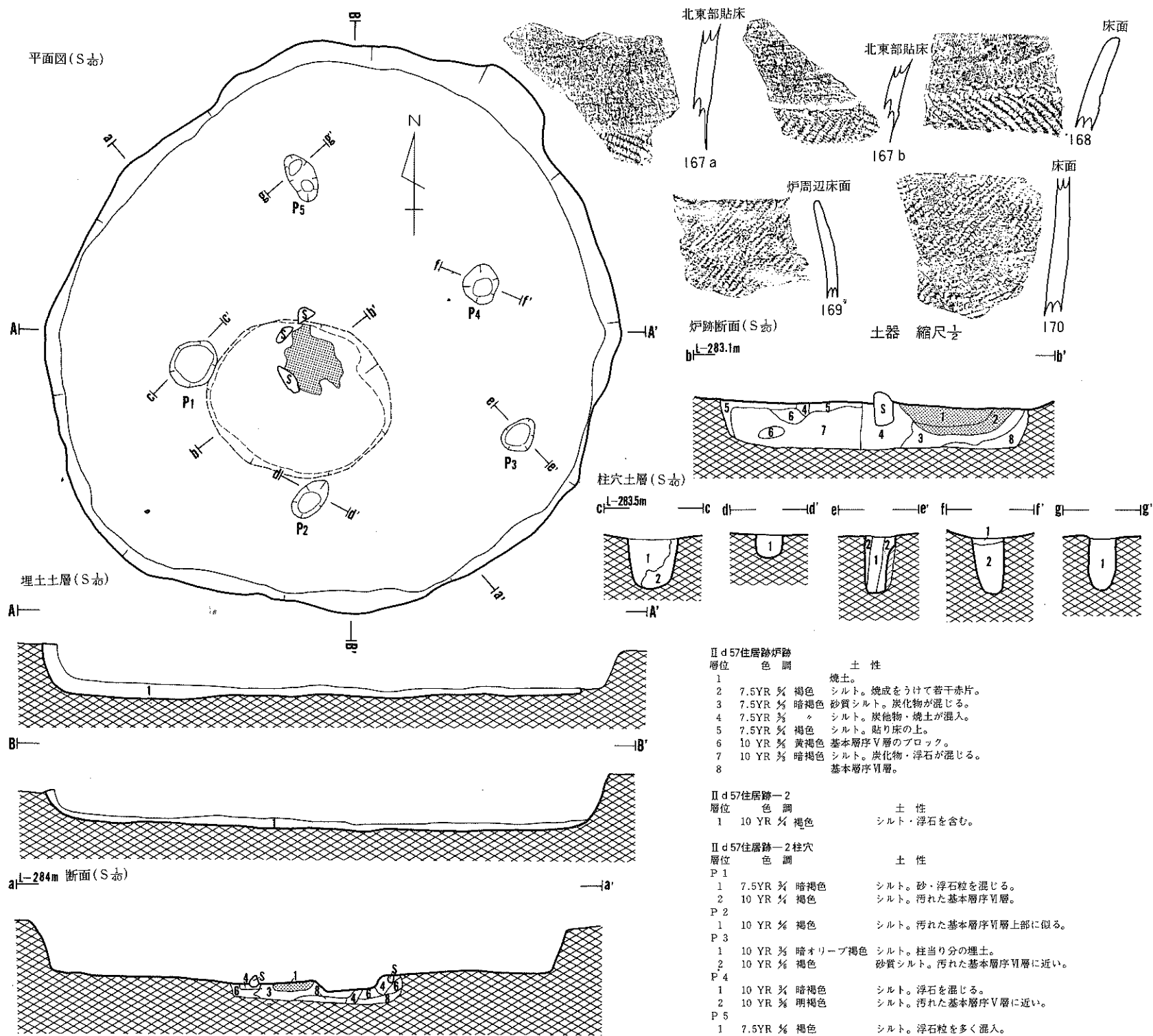
第40図 (14) II d 57住居跡 - I (遺構)



第41圖 (4) II d 57居住跡-I (遺物-I)



第42図 (14) II d 57住居跡 - I (遺物 - 2)



第43図 (15) II d 57住居跡-2 (遺構)

(15) II d 57住居跡— 2

〔遺 構〕 (第43図、P L—24)

II d 57住居跡— 1 と全く同じ位置にあり、II d 57住居跡— 1 に先行する住居跡と考えられる。長軸4.8m、短軸4.2mの規模をもち、北東—南西方向に長軸方向をもつ竪穴住居跡である。壁高は最も高い北壁で38cm、低い南壁で24cmと、自然地形が南に向って若干傾斜していることから、南壁が幾分低くなっている。また、壁は床面に対して若干外傾しているが、II d 57住— 1 とほぼ同様である。床面の殆ど全面が踏み固めによって非常に硬い。特に炉の周辺部にその傾向が強く、移植篋でも削れない位の硬さがある。細波状の小凹凸が全面に観察されるが、全体的にみると水平状態に近い。

炉はII d 57住居跡— 1 のそれとほぼ同じ場所にあり、石が一部抜き取られているが垂角礫～円礫を円形状に埋設した石囲い炉で、床面中央から若干南に偏っている。構築方法をみると、炉の下部を長径1.4m、短径1.2m、深さ15～17cm位の長軸を北西—南東にもつ楕円形の土坑状に掘り下げ、炉石を据えた後固定するように埋め戻している。しかし、炉は掘り方の中心から北にずれて構築され、北端の炉石が掘り方からはみでている。炉石は長径10cm～24cmの範囲の大きさで、4個が残存していた。焼土は不整な楕円形を示す50cm×40cmの広がりをもち、層厚が8cm位と長時間使用された状況を示している。

床面上からP₁(径40cm×33cm、深さ27cm)、P₂(径38cm×20cm、深さ19cm)、P₃(径30cm×25cm、深さ45cm)、P₄(径30cm×28cm、深さ43cm)、P₅(径40cm×10cm、深さ44cm)の柱穴状土坑が検出され、P₁—P₂が1.4m、P₂—P₃が1.7m、P₃—P₄が1.2m、P₄—P₅が1.6m、P₅—P₁が1.7mの間隔で配置されている。住居の平面からみれば全体が南東壁に若干偏っているが、これらが本住居跡の柱穴を構成しているであろう。壁溝は検出されていない。

埋土はほとんどがII d 57住居跡— 1 を構築する際に掘りとられてしまっていて残っていない。わずかに最下層の埋土が5cm～7cm残っているのみである。褐色のシルトで、浮石や炭化物を混入している。埋没の状況は不明である。(Y)

〔遺 物〕

本住居跡は埋土の残りが悪いので、遺物の出土が少なく、5点の土器片が出土したのみである。しかし、埋土最下層から出土したことから本住居跡に伴う遺物であろう。

土 器 (第43図167～170、P L—126)

床面直上から出土したのは168～170までの3点のみである。168は口縁部を無文にし、体部に0段多条による原体R L横回転による単節斜行縄文が付されている。169・170は0段多条の原体L R横回転による単節斜行縄文の付された粗製土器で、169は口縁部、170は体部の破片である。167 a・bは同一個体の破片で、口縁部を無文にし、体部に0段多条の原体L R縦横回転に

よる羽状縄文が付されている。

以上のことから、167・168は第IX群4類に相当し、他は第IX群1類に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の判明する167・168の出土から考えて、本住居跡は後期後葉～末葉に位置づけられるであろう。

(16) II e 59住居跡

〔遺構〕 (第44図、P L-25)

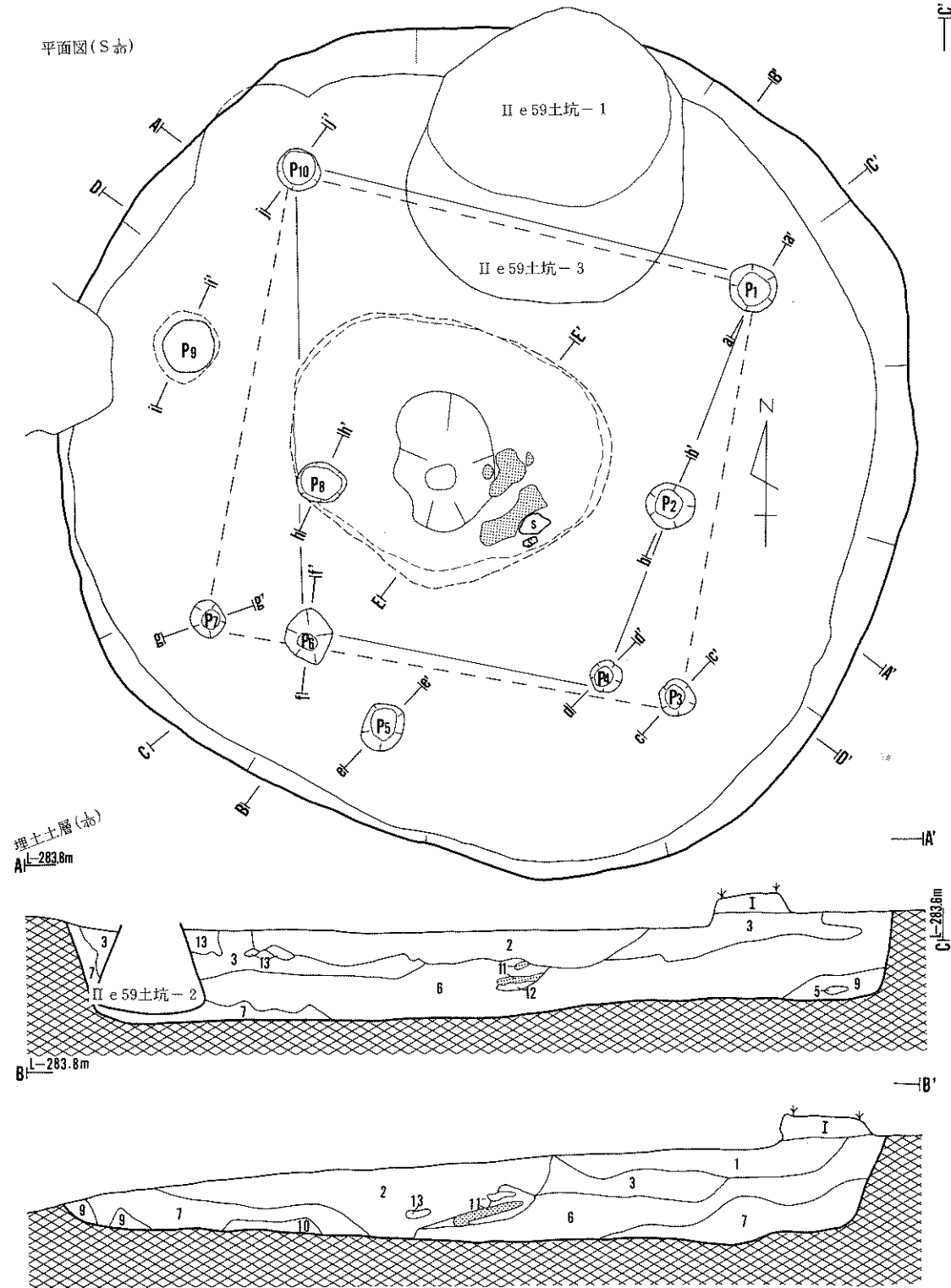
C区のほぼ中央、南向き斜面に立地し、II b 58住居跡の約4 m東方でII g 60住居跡の西方約4 m、II e 59・60とII f 59・60グリッドにまたがって位置する。また、II e 59土坑-1～3と北側で重複しているが、新旧関係では土坑の方が全て新しい。

東西・南北とも径約5.4mの規模をもち、若干歪んでいるがほぼ正円に近い竪穴住居跡である。壁高は最も高い北東壁で70cm、最も低い南西壁で6 cmと、極端な違いがある。これは、自然地形が南へ向く斜面に立地していることによる。壁面は床面に対してほぼ直角の部分も見受けられるが、ほとんどは若干外傾している。

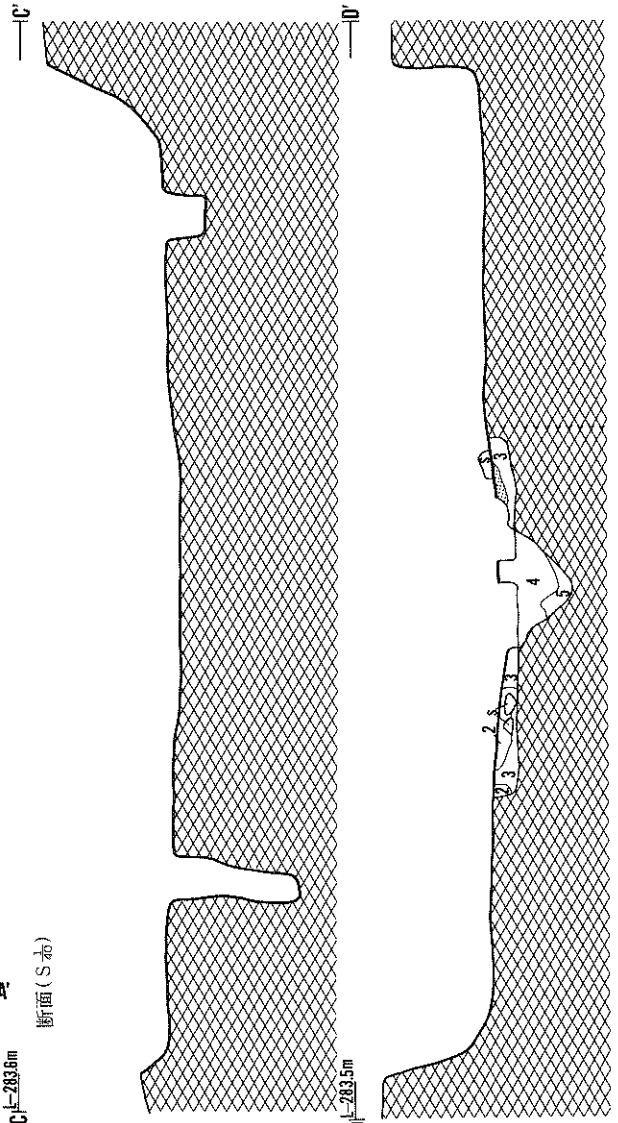
床面には全面に細波状の小凹凸があるものの、全体的にみれば水平状態に近い。また、踏み固めによって非常に硬く、移植篋でも削れない位であり、この傾向は炉の周辺で特に強い。

炉は床面中央より若干南東寄りに位置する。床面が長軸2 m、短軸1.6m、深さ15cmで、長軸を北西-南東方向にもつ不整な楕円形の土坑状に掘り込まれ、その上面を炉としている。しかし、それ以外の施設(石囲いとか土器埋設)は何ら検出されていない。この土坑状の掘り込みは貼り床されていたことから、本住居跡より古い遺構である可能性もあるが、埋土内に焼土や炭化物の混入も多く、土層も乱れ人為的に埋め戻された様相を示すことから、炉を設置する際の掘り込みで、本来は石囲い炉であった可能性が強い。炉床の焼土は近接して2箇所に分かれ、北西側が35cm×25cm、南東側が40cm×15cmの不整な長方形や長楕円形の広がりをもち、層厚は5 cm位である。

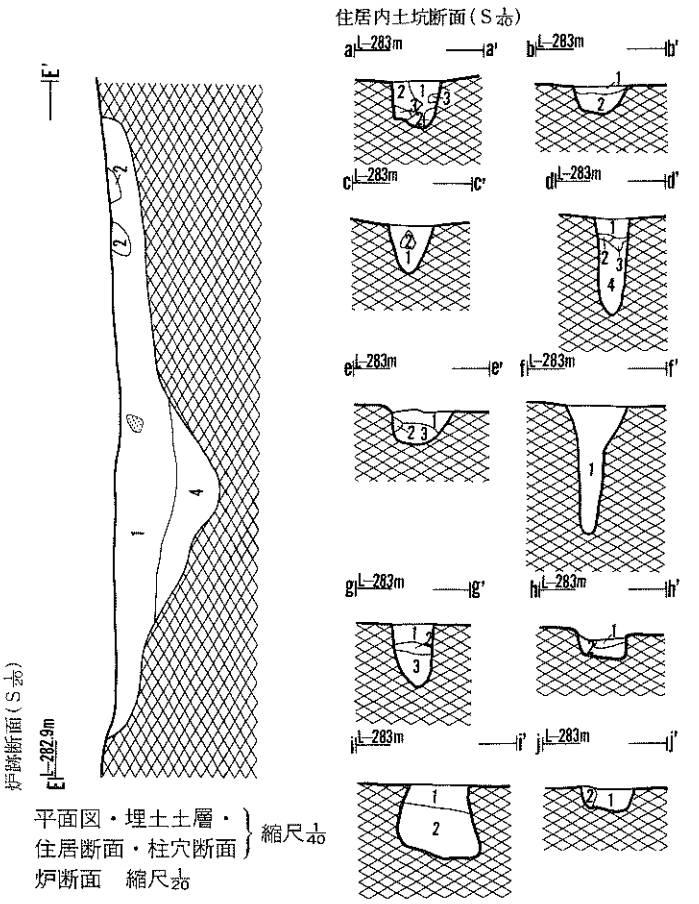
床面上からP₁(径32cm×30cm、深さ24cm)、P₂(径30cm×30cm、深さ20cm)、P₃(径24cm×22cm、深さ29cm)、P₄(径24cm×20cm、深さ56cm)、P₅(径30cm×26cm、深さ20cm)、P₆(径30cm×30cm、深さ69cm)、P₇(径24cm×20cm、深さ32cm)、P₈(径32cm×26cm、深さ15cm)、P₉(径46cm×42cm、深さ37cm)、P₁₀(径10cm×10cm、深さ15cm)の柱穴状土坑が検出されている。この中でP₄・P₆の深さが56cm・69cmと最も深く、その他は15cm～37cmである。また、P₉は断面



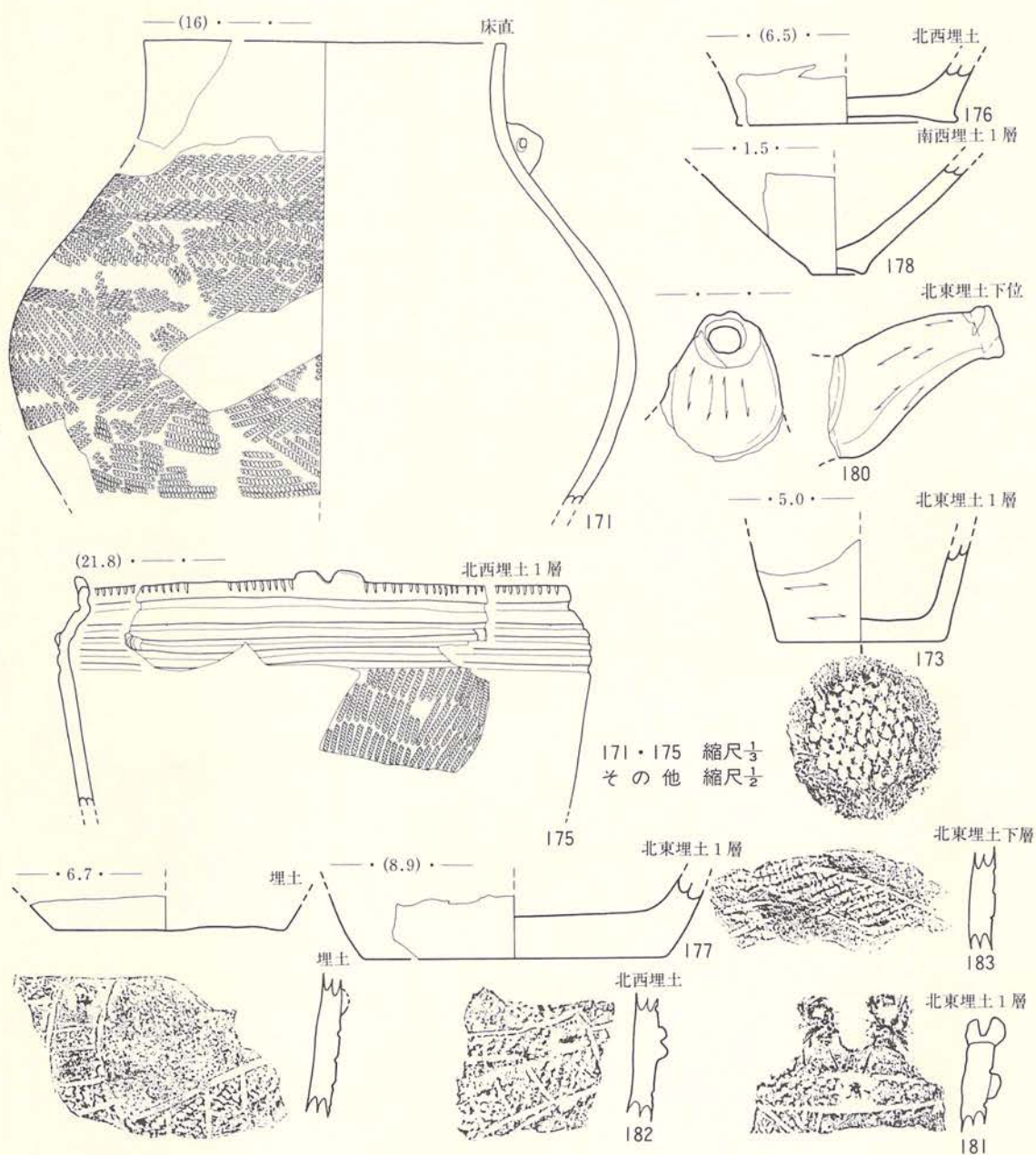
第44図 (I) II e 59住居跡(遺構)



II e 59住居跡	層位	色調	土性
II e 59住居跡	1	7.5YR 5/ 極暗褐色	基本層序I層。
	1	7.5YR 5/ 黒褐色	シルト。団粒構造。
	2	7.5YR 5/ 暗褐色	シルト。基本層序V層が散状に混入。
	3	7.5YR 5/ 暗褐色	シルト。2層のV層の混入。
	4	7.5YR 5/ 黒褐色	シルト。炭化物・焼土・浮石を混入。
	5	7.5YR 5/ 褐色	シルト。汚れた基本層序V層。
	6	7.5YR 5/ 暗褐色	シルト。炭化物混入。
	7	7.5YR 5/ 褐色	シルト。6層と同じ。
	8	7.5YR 5/ 明褐色	シルト。基本層序V・VI層の汚れた土。
	9	7.5YR 5/ 褐色	シルト。黒色土粒が混入。
	10	7.5YR 5/ 暗褐色	シルト。浮石・炭化物が混入。
	11	7.5YR 5/ 明褐色	投げこまれた焼土。
	12	7.5YR 5/ 極暗褐色	シルト。炭化物多目に混入。
13	7.5YR 5/ 明褐色	基本層序V層の混入層。	
II e 59住居跡炉	1	7.5YR 5/ 褐色	土性 焼土。
	2	7.5YR 5/ 褐色	シルト。炭化物が混入。
	3	7.5YR 5/ 明褐色	シルト。掘り込み部の粘床。
	4	7.5YR 5/ 褐色	シルト。炭化物が混入。
	5	7.5YR 5/ 褐色	シルト。汚れた基本層序IV層。

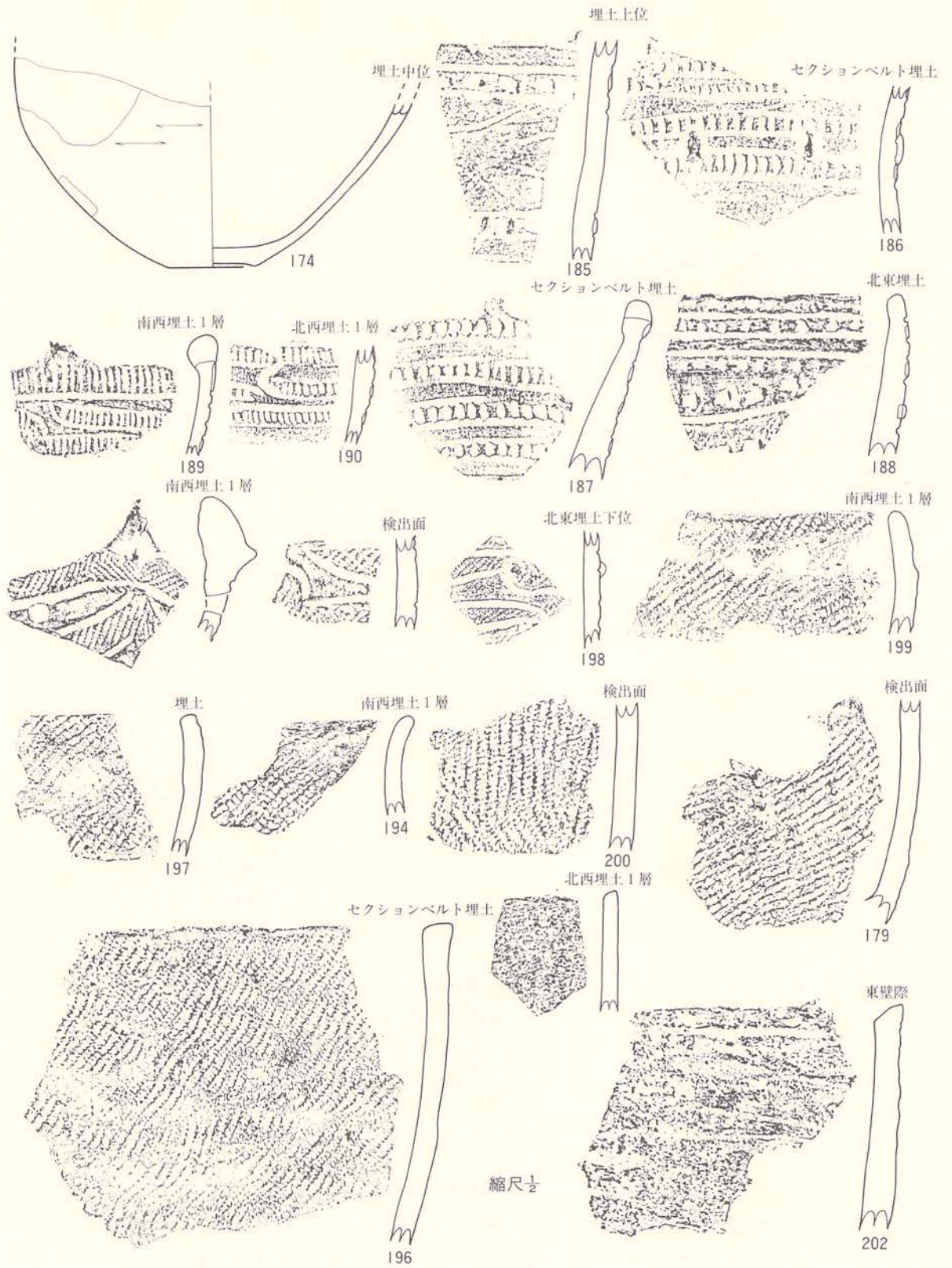


II e 59住居跡柱穴	層位	色調	土性
II e 59住居跡柱穴	P 1		
	1	10 YR 5/ 暗褐色	砂質シルト。炭化物と浮石粒を含む。
	2	7.5YR 5/ 褐色	。基本層序V層が混入。
	3	7.5YR 5/ 黄褐色	汚れた基本層序V層。
	P 2		
	1	7.5YR 5/ 褐色	シルト。炭化物を含む。
	2	10 YR 5/ 黄褐色	若干汚れた基本層序V層。
	P 3		
	1	7.5YR 5/ 褐色	シルト。浮石粒含む。
	2	10 YR 5/ 黄褐色	汚れた基本層序V層。
P 4			
1	10 YR 5/ 暗褐色	シルト。浮石混入。	
2	10 YR 5/ 黄褐色	シルト。基本層序V層の混入層。	
3	7.5YR 5/ 褐色	砂質シルト。浮石を含む。	
4	10 YR 5/ 暗褐色	シルト。浮石混入。	
P 5			
1	10 YR 5/ 褐色	シルト。浮石・炭化物を含む。	
2	10 YR 5/ 黄褐色	シルト。基本層序V層の混入。	
3	10 YR 5/ 褐色	砂質シルト。浮石混入。	
P 6			
1	10 YR 5/ 褐色	砂質シルト。浮石混入。	
P 7			
1	10 YR 5/ 暗褐色	シルト。多量の浮石を混入。	
2	7.5YR 5/ 暗褐色	。基本層序V層混入。	
3	10 YR 5/ 褐色	砂質シルト。浮石粒混入。	
P 8			
1	10 YR 5/ 黄褐色	基本層序V層。	
2	10 YR 5/ 褐色	シルト。浮石・炭化物を含む。	
P 9			
1	10 YR 5/ 黄褐色	砂質シルト。汚れた基本層序V層。	
2	10 YR 5/ 褐色	。多量の浮石と炭化物を含む。	
P 10			
1	10 YR 5/ 暗褐色	シルト。浮石粒・炭化物を含む。	
2	10 YR 5/ 黄褐色	シルト。基本層序V層。	

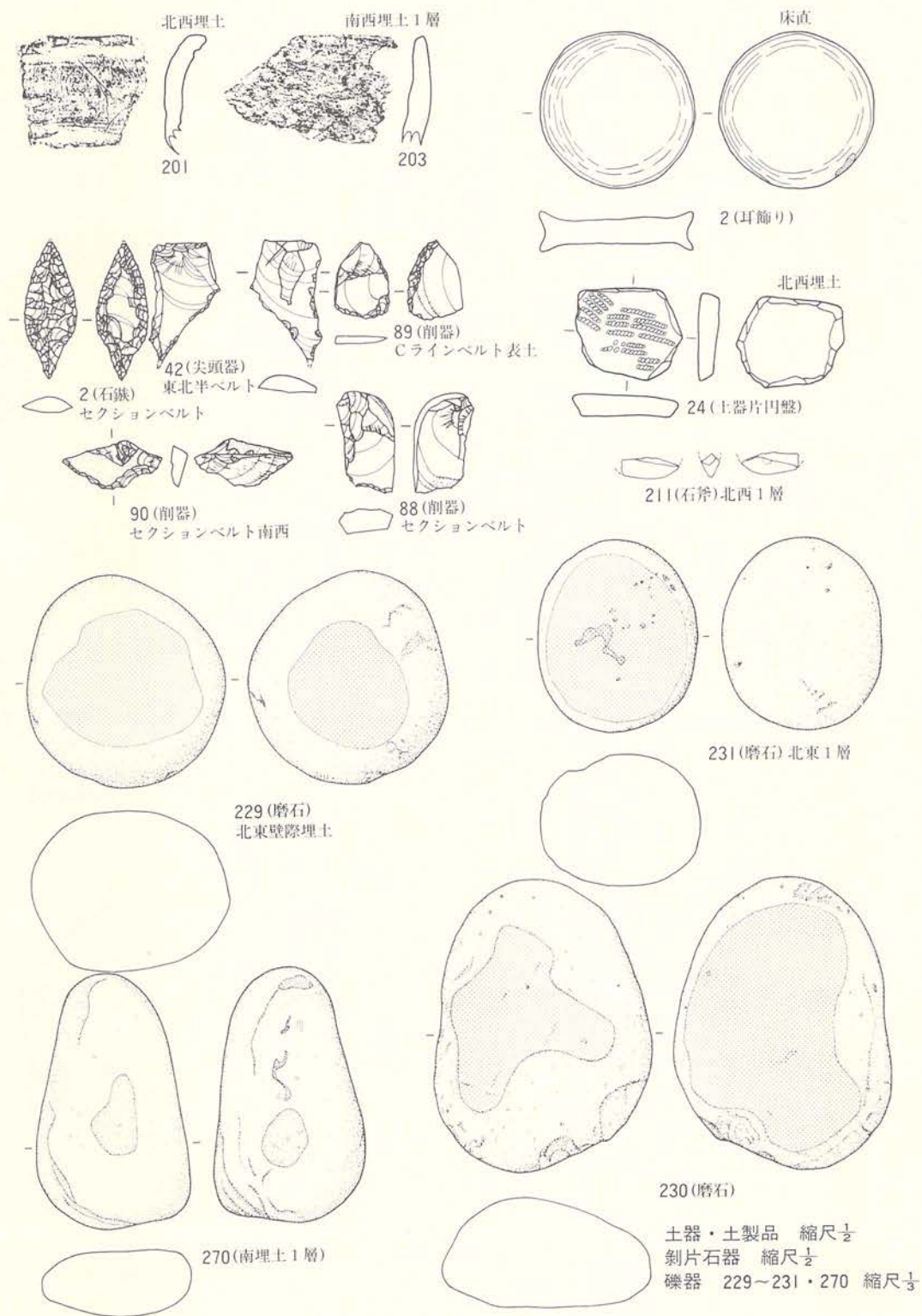


第45図 (16) II e 59住居跡(遺物-1)

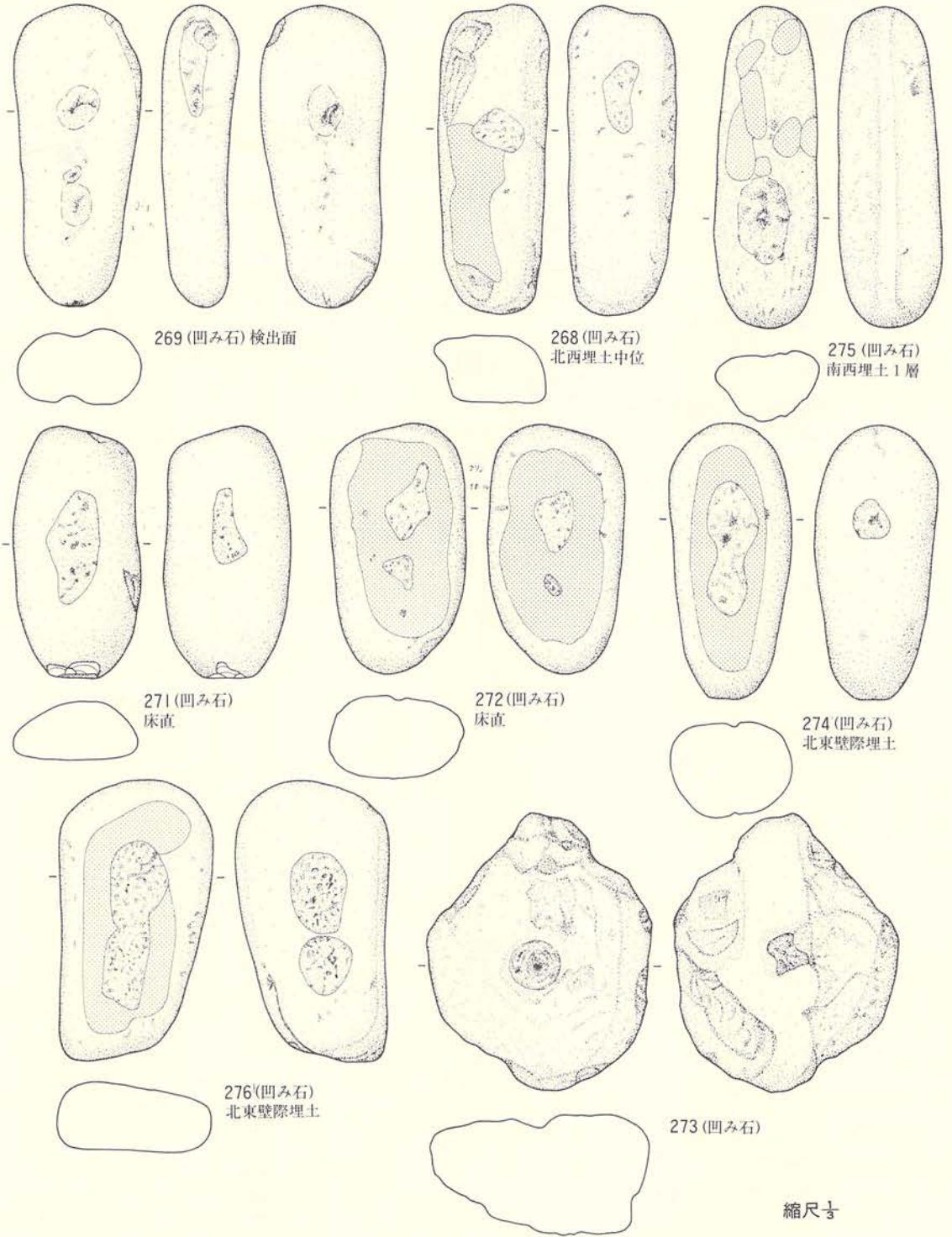
形がフラスコ形に近似していることや、規模が若干大型であることから、いわゆる柱穴状土坑ではなく、貯蔵穴的性格が強いであろう。検出された柱穴状土坑の規模や深さ、位置から考えて、 $P_1-P_3-P_7-P_{10}$ と $P_1-P_2-P_4-P_6-P_8-P_{10}$ の2通りの組合せが推定される。 P_5 は



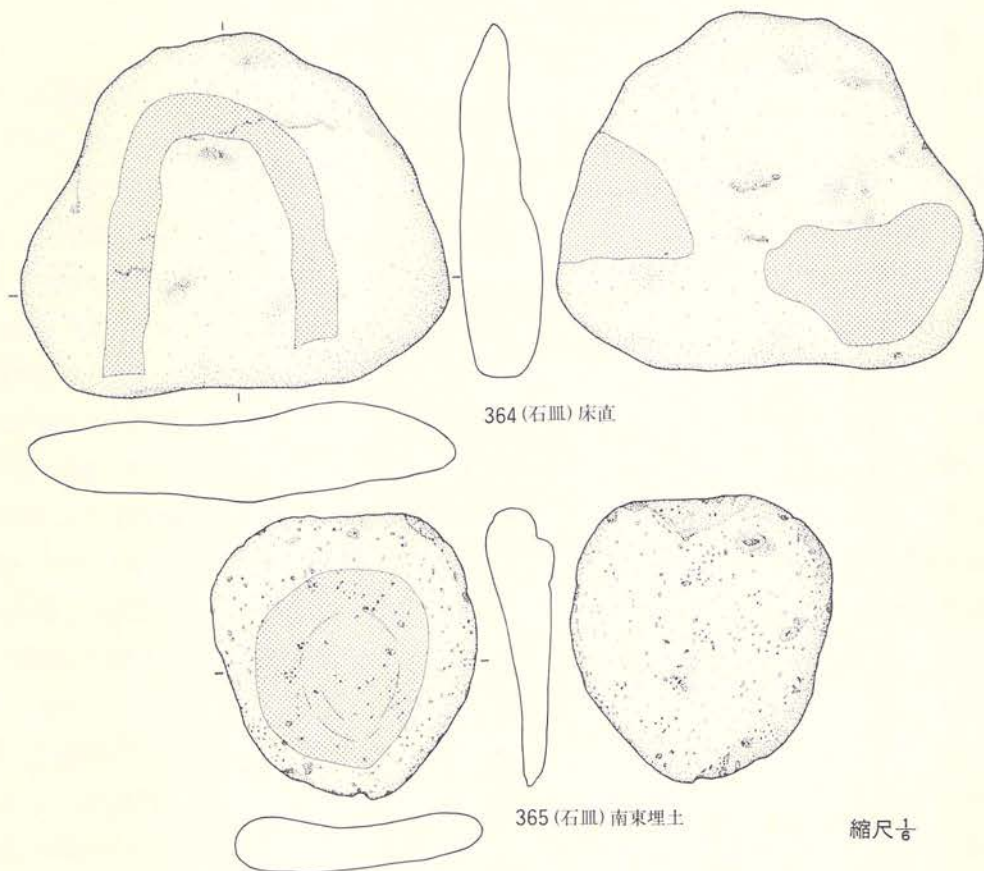
第46図 (16) II e 59住居跡(遺物-2)



第47図 (16) II e 住居跡(遺物-3)



第48図 (16)II e 59住居跡(遺物-4)



第49図 (16) II e 59住居跡(遺物-5)

前者の配列の一部である可能性もあるが、明確でない。以上のことから、本住居跡は柱穴の交換を伴う改築が行なわれていることを示している。埋土の土層観察では、縮小された状況を示す重複関係は見られないので、おそらく拡張されたものと推定される。

埋土は黒褐色～明褐色のシルトを主体にして構成され、13層に細分される。浮石粒や焼土粒が全体に混入するとともに、一部には基本層序第V・VI層がブロック状に混じり、投げ込まれたものであろう。11層は投棄された焼土塊であり、炭化物の混入も多く観察される。自然堆積による埋没であろう。(Y)

〔遺物〕

実測可能なもの9点、破片565点の土器と、土製品2点、石器20点が出土している。しかし、

床面直上から出土したのは土器1点、土製品1点、石器4点のみで、ほかは埋土内から出土した。図化した土器は、完形のものを全く含まず、全て破片からの復元実測や反転実測をしたものである。

土 器 (第45～47図171～203、P L—126・127)

171は床面直上から出土したもので、体部に0段多条による原体R L縦横回転の羽状縄文が全面に付された壺である。体部中位(?)に最大径をもって頸部で窄み、口縁部はほぼ直立する。残存部の頸部には環耳が付着することから、本来は複数の環耳がつくものであろう。173は無文で体部下位から底部を残す破片である。174も173と同様であるが、体部径が大きく器種が173は鉢か深鉢、174は壺(?)の違いがある。176～179は体部下位～底部を残す鉢か深鉢の破片である。175は体部上位(肩部)に最大径をもち、頸部で窄んだ後口縁部がほぼ直立する鉢の破片である。体部には原体R L横回転による単節斜行縄文を付し、肩部から上位は5条並行する沈線が引かれ、ところどころに瘤状の貼り付けがある。口縁端部から口唇部には篋先による縦形の刺突痕が全周し、口唇にはB形状の突起をもつ。180は剥落した注口部である。181～184は原体L R横回転による単節斜行縄文を付した後、沈線で区画して縄文を磨消し、縄文施文部に斜格子状や並行する沈線を付す土器である。181は口縁突起部で他は体部片であり、181・182・184の器面には小さな貼瘤がある。185～188は無文の器面に並行する沈線を引いて篋先による刻目帯を全周させ、瘤を付す例(186)もある。189・190は185～188と近似するが、沈線で入組的な区画をする違いがある。192・193は189・190の刻目帯の部分が縄文施文であるという違いがあるものの、189や190の体部破片である可能性が強い。191は三角形に尖る口縁部突起で、0段多条の原体L R縦横回転による羽状縄文を付した後沈線で区画し、突起部に貼瘤がある。195は縄文のみが付された粗製土器であるが、口縁端部寄りに横位の列点文をもつ。194・196～199は縄文のみが付された粗製土器の破片である。200～204は無文土器の破片である。

以上のことから、181～184は第VI群5類、185～188は第VI群7類、189～193は第VI群8類、191は第VI群4類、175は第VII群3類、縄文だけを付す粗製土器は第IX群、無文土器は第VIII群にそれぞれ相当する。

土製品 (第47図2・24、P L—156・157)

耳飾り1点と土器片円盤1点の2点が出土している。2は径4.8cmの円盤形の側面を凹ませて滑車形にした耳飾りである。中央部が約8mm、縁1.2cmの厚さがあり、全面が良く研磨されている。24は原体L R斜回転による単節の横走縄文が付された土器片を素材とし、その周囲を打ち欠いて径2.7cmの不整円形気味に整形したものである。

石 器 (第47～49図^{2・42・88～90・229～231}_{268～276・364・365} P L—158・159・161・168・170・175)

石鏃1点、尖頭器1点、削器3点、磨石3点、凹み石9点、石皿2点が出土している。その

中で床面直上から出土したのは磨石1点、凹み石2点、石皿1点の4点のみである。2は全長4.3cmの石鏃の完形品で、表面に一次剝離面を残し、周縁を入念に剝離調整し、茎部を作り出している。42は尖頭器で、実測図の下端と右側縁に剝離調整があり、千枚通し的な使用が想定される。88～90は削器で、不定形な剝片の周縁に簡単で粗雑な調整を加えている。229～231は円形や楕円形のやや扁平な両面を磨石としたものである。268～276は棒状で細長い円礫を使用した凹み石で、ほとんどが両面に凹みをもつが、268・272・274・275は磨面をもつ例である。364・365は扁平で大形の円礫を素材とした石皿で2点とも片面のみを使用している。

〔遺構の時期〕

床面直上から出土した土器が少ないので断定できないが、出土した土器に後期の土器が最も多く含まれることや、炉がII d 57住一2と同様であることから考えて、後期末葉に位置づけられると推定される。

(17) II g 60住居跡

〔遺 構〕 (第50・51図、P L—26)

C区中央やや東寄りの尾根頂上部から南向き斜面にかけて立地し、グリッドII g 59～61とII h 59～61にまたがって位置する。南西部がII g 60土坑、南壁は風倒木痕によって攪乱を受けている。

長径6.6m、短径5.8mの規模をもち、長軸が北西—南東にある楕円形を示す竪穴住居跡である。壁高は最も高い南東で99cm、最も低い南西壁で50cmと、全体的に掘り込みの深い住居跡である。西側から南側にかけて低くなるが、これは自然地形の傾斜によるものである。壁面は床面に対して若干外傾しているものの、全体でみれば直角に近い部分の方が多い。

床面は細波状の小凹凸を呈するが、踏み固めによって非常に硬く、移植篋で削れない部分もあり、炉の周囲が特に顕著であった。床面の高さをみると、北東壁寄りが高く、南西に寄るほど低くなる傾向があり、10cmほどの比高がある。また、南西壁のほぼ中央では幅1.2m、長さ1.7mにわたって壁際が高く床面中央寄りのP₈付近まで低くなるスロープ状を示し、床面から見ると最高30cm位の比高がある。スロープの北縁には長さ85cm、幅25cm、深さ10cmの溝が掘られていたが、南縁は風倒木痕による攪乱のため定かでない。また、スロープの下縁にも長さ65cm、幅10cm～15cm、深さ15cm位の溝が掘られ、P₈はその溝上に掘られている。以上のことから、このスロープは本住居跡に伴う出入口施設に関連する遺構の可能性が強い。

炉は8個の円礫や亜角礫を径90cmの円周上に「C」状に配列した石囲い炉である。炉石の大きさは最小径15cm位から最大径30cm位までであるが、径15cm～20cmのものが最も多い。南端に配置されている礫が径30cm×13cm、高さ25cmと他の炉石に比較して大型で、立石的状况を示して

いることから、II b 58住居跡の炉と同様であろう。炉床内の焼土は55cm×45cmの不整な略円形の広がりを持ち、層厚は5cm位である。

床面から貯蔵穴的な土坑P₁（開口部径50cm×45cm、底面径55cm×55cm、深さ50cm）、P₂（開口部径50cm×45cm、底面径65cm×55cm、深さ49cm）、P₃（開口部径45cm×45cm、深さ65cm）が検出され、P₁・P₂は断面がフラスコ形に近い形状を示し、P₃はビーカー形に近い。埋土をみると、基本層序第V・VI層が混じり合い、人為的に埋め戻した様相を示す例（P₁・P₂）もある。その外柱穴状土坑としてP₄（径25cm×12cm、深さ77cm）、P₅（径12cm×12cm、深さ39cm）、P₆（径15cm×12cm、深さ38cm）、P₇（径15cm×15cm、深さ35cm）、P₈（径25cm×20cm、深さ74cm）、P₉（径25cm×25cm、深さ33cm）、P₁₀（径20cm×18cm、深さ58cm）、P₁₁（径15cm×15cm、深さ10cm）、P₁₂（径15cm×13cm、深さ53cm）、P₁₃（径13cm×13cm、深さ17cm）が検出されている。平面規模はバラツキがあつて一様でないが、深さは70cm台-2、50cm台-2、30cm台-4、10cm台-2となり、深さと位置から考えるとP₄-P₆-P₈とP₅-P₁₀-P₁₂の2通りの組み合わせが推定される。ほかのP₇、P₉、P₁₁、P₁₃の性格は定かでないが、補助柱の柱と考えられる。二組の組み合わせが正しいとすれば、新旧関係は不明であるが、改築が行われ、ほぼ同様の配置を示す柱があつたことを示すものであろう。壁溝は検出されていない。

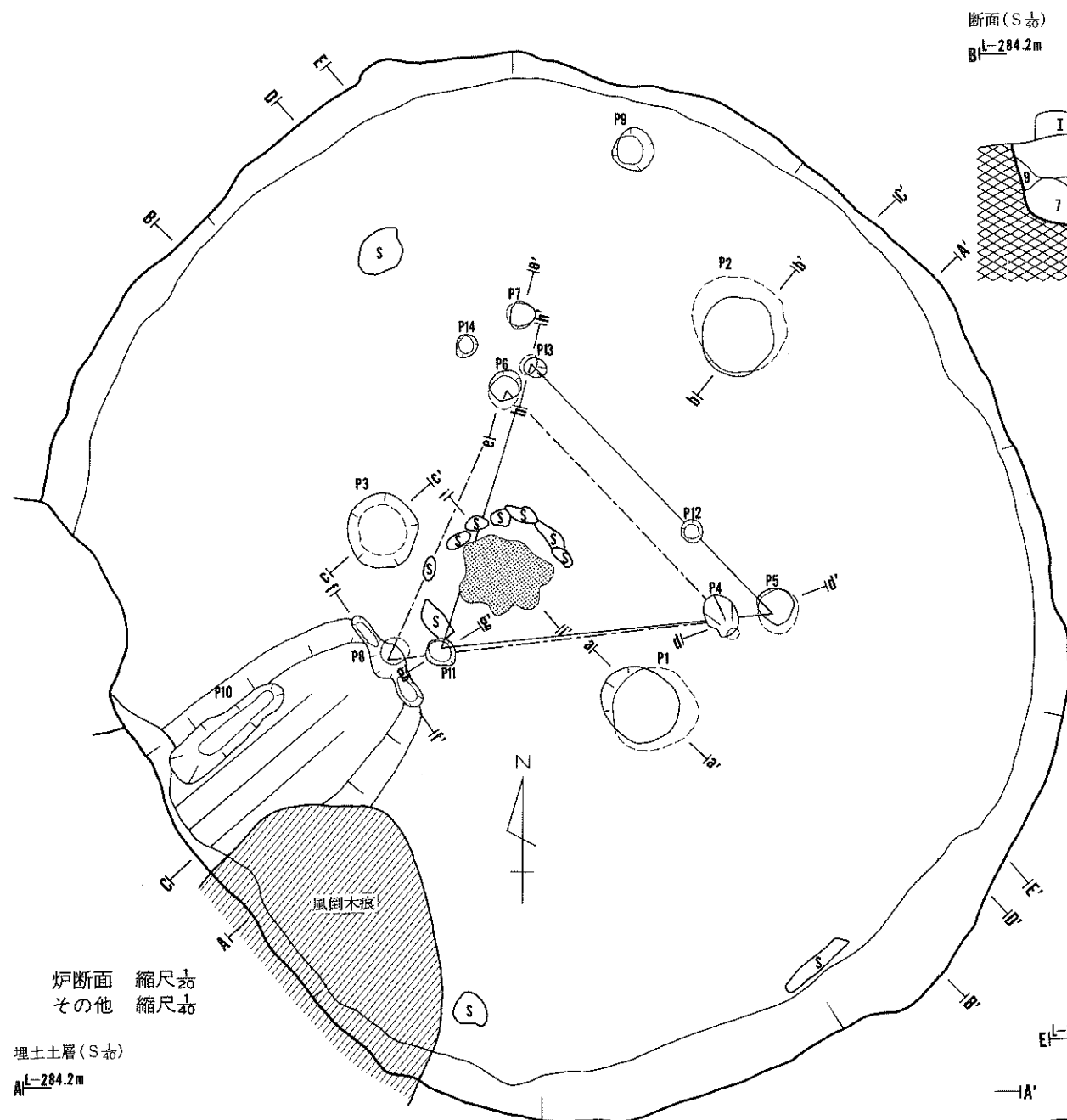
埋土は黒褐色から明褐色までのシルトを主体とするが、最上層に十和田a降下火山灰の堆積もある。また、全体的に浮石の混入が多く、さらに基本層序第V・VI層といった地山土のブロックや小粒が多く混入するのも特徴である。なお、5層～6層にかけて多量の炭化材と焼土が検出された。位置は床面のほぼ中央で、径1.5m位の円形状の広がりをもっている。全体や方向等を正確に把握できる残存状況ではないが、最も長いもので1.5m、方向はほぼ東西である。そのほかは40cm～50cmの長さで、焼土と混在している。炭化物粒と焼土粒はほぼ全層に亘って混在することから、本住居跡は焼失したことを示すものであろう。自然埋没である。（Y）

〔遺物〕

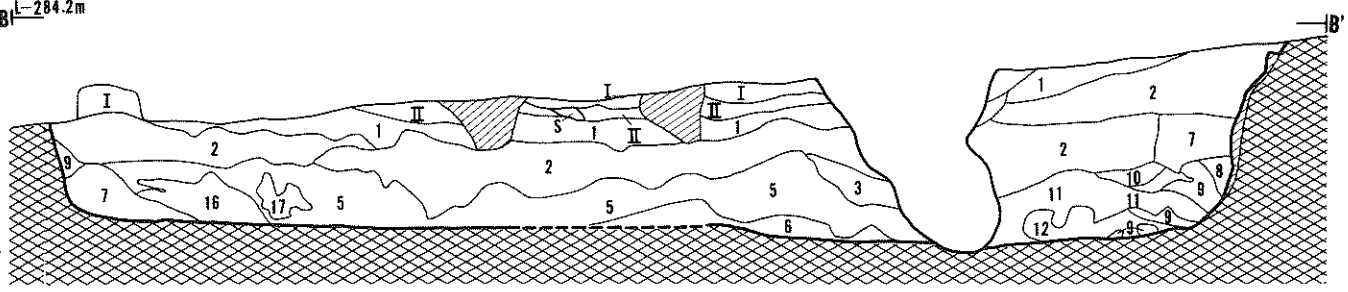
実測可能13点、破片944点の土器と、土製品2点、石器13点、石製品1点の遺物が出土している。この中で床面直上から出土したのは土器2点と石器5点のみで、ほかは埋土内から出土した。

土器 （第52・53図204～244、P L-127・128）

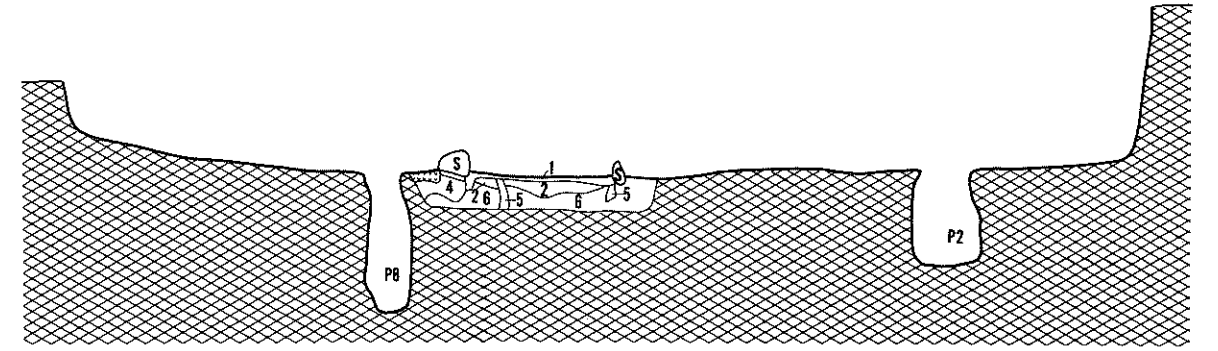
掲載した40点の中には床面直上から検出された貯蔵穴状の土坑P₁から出土した4点（240～243）とP₂から出土した1点（244）が含まれている。床面直上から出土したのは204・205の2点で、出入口状スロープの北側から50cm位の間隔で出土した。204は頸部～口縁部を欠失するが、ほぼ完形の注口土器である。器表に0段多条の原体R L横回転による縄文を付した後沈線で木葉文的に区画し、縄文を磨消している。205は体部が無文で口縁端部に縦位の刻目帯



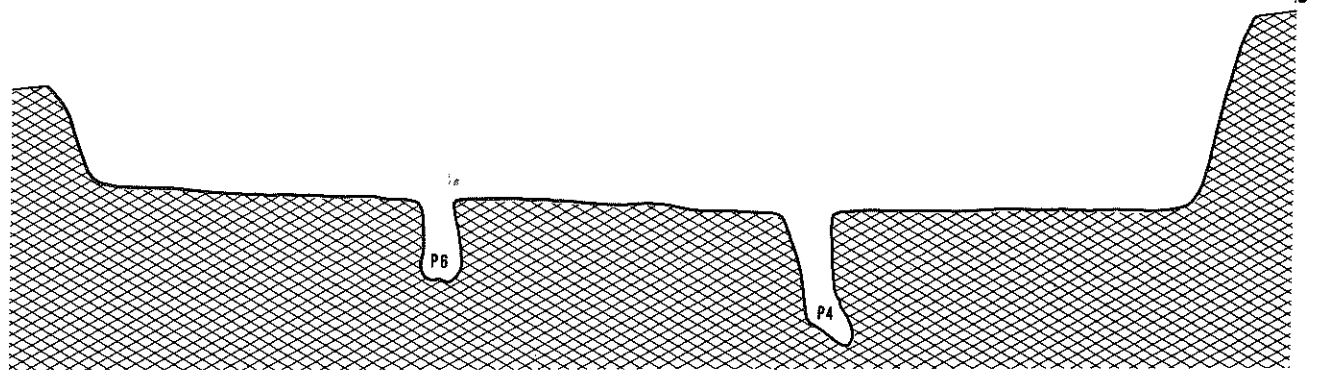
断面 (S 示)
B1L-284.2m



C1L-284.1m 断面 (S 示)

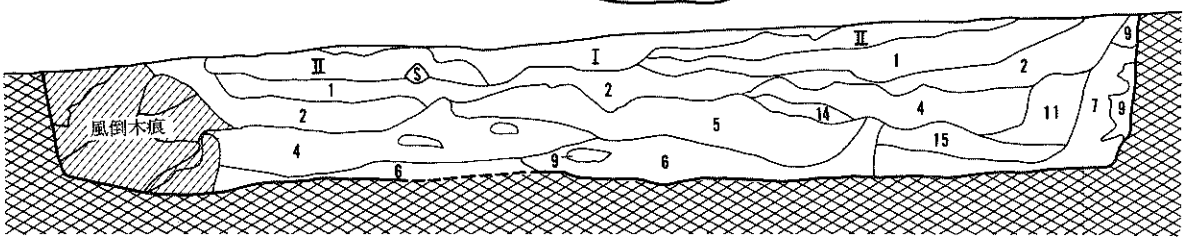


D1L-284.2m



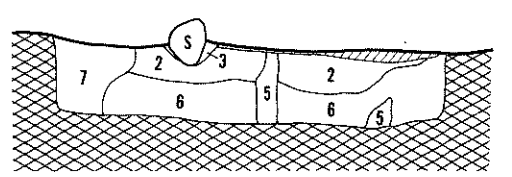
断面 (S 示)

E1L-284.2m



A1L-284.2m

i1L-283.2m

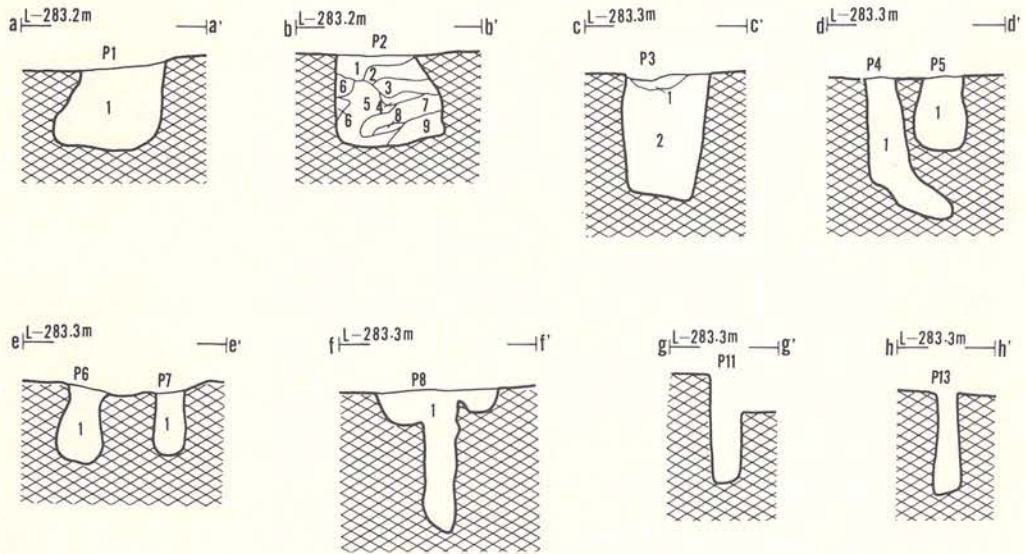


II g 60住居跡

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 暗褐色	シルト。炭化物・浮石が多量混入。
2	7.5YR 5/6 褐色	。中央部に炭化物が多量に混入。
3	。。	砂質シルト。浮石粒・炭化物が混入。
4	5 YR 5/6 赤褐色	基本層序V層がブロック状に混入。
5	。	シルト。炭化材が多量に混入。
6	5 YR 5/6 。	質的には5層と同じ。
7	7.5YR 5/6 褐色	シルト。浮石・炭化物が混入。
8	。	基本層序V層や黒色土がブロック状に混入。
9	7.5YR 5/6 明褐色	壁の崩れによる基本層序V層。
10	7.5YR 5/6 黒褐色	砂質シルト。浮石・炭化物が混入。
11	7.5YR 5/6 褐色	汚れた基本層序V層、壁の崩れ。
12	7.5YR 5/6 暗褐色	シルト。炭化物・浮石粒を混入する。
13	7.5YR 5/6 黒褐色	。砂粒・基本層序V層が混入。
14	10 YR 5/6 褐色	。浮石が混入。
15	。	。基本層序VI・VII層が混入。
16	7.5YR 5/6 明褐色	汚れた基本層序V層。
17	10 YR 5/6 黄褐色	。
I		基本層序I層、表土。

第50図 (17)II g 60住居跡(遺構)

柱穴・土坑土層・断面(S 志)



II g 60住居内土坑

層位 色 調

層位	色 調
P 1	
1	7.5YR 5/2 暗褐色
P 2	
1	7.5YR 5/2 暗褐色
2	7.5YR 5/2 黒色
3	7.5YR 5/2 暗褐色
4	7.5YR 5/2 暗褐色
5	7.5YR 5/2 暗褐色
6	10 YR 5/2 にぶい黄褐色
7	7.5YR 5/2 褐色
8	10 YR 5/2 黄褐色
9	7.5YR 5/2 明褐色

土 性

土 性
砂質
砂質シルト。基本層序V・VI・VII層の混合土。
砂質シルト。
シルト。僅かに粘性をもつ。
シルト。2層より粒が粗い。
砂質シルト。基本層序VIII層のブロック。
シルト。基本層序VIII層が混じる。
汚れた基本層序VIII層。
シルト。基本層序V・VIII層が混入。
シルト。基本層序VIII層が混じる。
汚れた基本層序V層。

P 3

1	7.5YR 5/2 褐色	シルト。浮石が混入。
2	5 YR 5/2 赤褐色	砂質シルト。汚れた基本層序VIII層。

P 4

1	7.5YR 5/2 極暗褐色	シルト。基本層序VIII層と炭化物含む。
---	----------------	----------------------

P 5

1	7.5YR 5/2 褐色	シルト。基本層序VIII層と暗褐色土混合。
---	--------------	-----------------------

P 6・P 7YR

1	7.5YR 5/2 橙褐色	汚れた基本層序VIII層。
---	---------------	---------------

P 8

1	7.5YR 5/2 暗褐色	砂質シルト。浮石を混じる。
---	---------------	---------------

第51図 (17) II g 60住居跡(遺構-2)

を全周させ、口縁は山形の波状にしている。206は頸部と高台基部に貼瘤のある無文の台付鉢である。207は小さな輪高台の付く無文の注口土器である。肩部(体部上位)に最大径をもち、頸部で穿んだ後口縁部が大きく外傾する。208~211は体部下位~底部の残存する破片である。212は香炉形土器の冠部分の破片で、2個一対になる突起をもつ。213・215は無文の器面に刺突(213)や刻目(215)によって文様を付す。216は壺の口縁部破片で、無文の器面に沈線による文様をもつ。217は210と同様で、218は207と共通する。214は体部に縄文のみが付された粗製土器で、229~236、241~244も同様である。238は条痕が付され、237・239・240は無文である。

以上のことから204は第VI群5類、205・213・215・219~222は第VI群3類、223~225は第VI

群9類、226～228は第VI群9類、212・217は第VI群11類、そのほか無文土器は第VIII群、縄文のみが付された土器は第IX群に相当する。

土製品 (第52図3・27、PL-156・157)

3は滑車形耳飾りの破片で、27は土器片円盤であるが、2点とも埋土内から出土している。

3は全体の約 $\frac{1}{3}$ 位残存し、環状で外側面を凹ませた滑車形である。27は器面に原体LR横回転による単節斜行縄文を付した後沈線で区画し、縄文を磨消した破片の周辺部を打ち欠いて円盤状にしたもので、下方を欠損している。

石器 (第53・54図、PL-163・168・171・175)

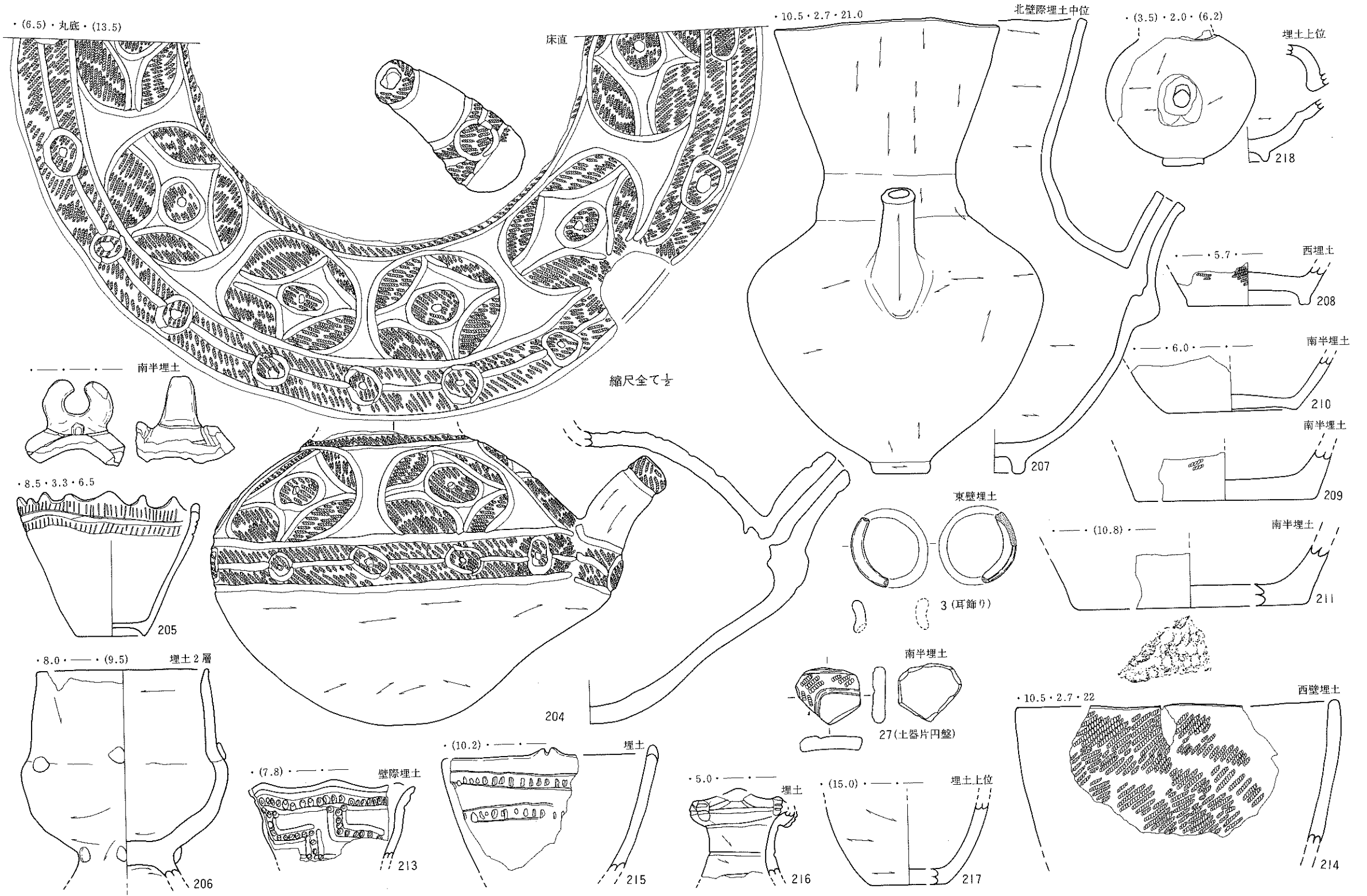
切削器1点、磨石1点、凹み石9点、石皿2点の13点が出土している。床面直上から出土したのは磨石(232)、凹み石(288・289)、石皿(366・367)の5点のみで、他は埋土内から出土している。切削器(131)は縦長剥片を素材とし、その左側縁には裏面から表面への片面剥離があり、右側下縁湾曲部には両面への剝離がある。磨石は断面、平面とも楕円形で長径11.5cmの自然礫の全面を、磨面としたものである。凹み石(281～289)は楕円形(281・287・288)や棒状(282～286)の自然礫の片面や両面を凹み石としたもので、281・285には磨面もある。石皿は366・367の2点で、ともに扁平で大型自然礫の平坦面を使用している。石質は、切削器は奥羽山地新第三系中新統の凝灰質珪質泥岩、磨石は北上山地古生界産の石英閃緑岩、凹み石は北上山地古生界産の凝灰質硬砂岩、奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩と両輝石安山岩がそれぞれ使用されている。

石製品 (第54図424、PL-179)

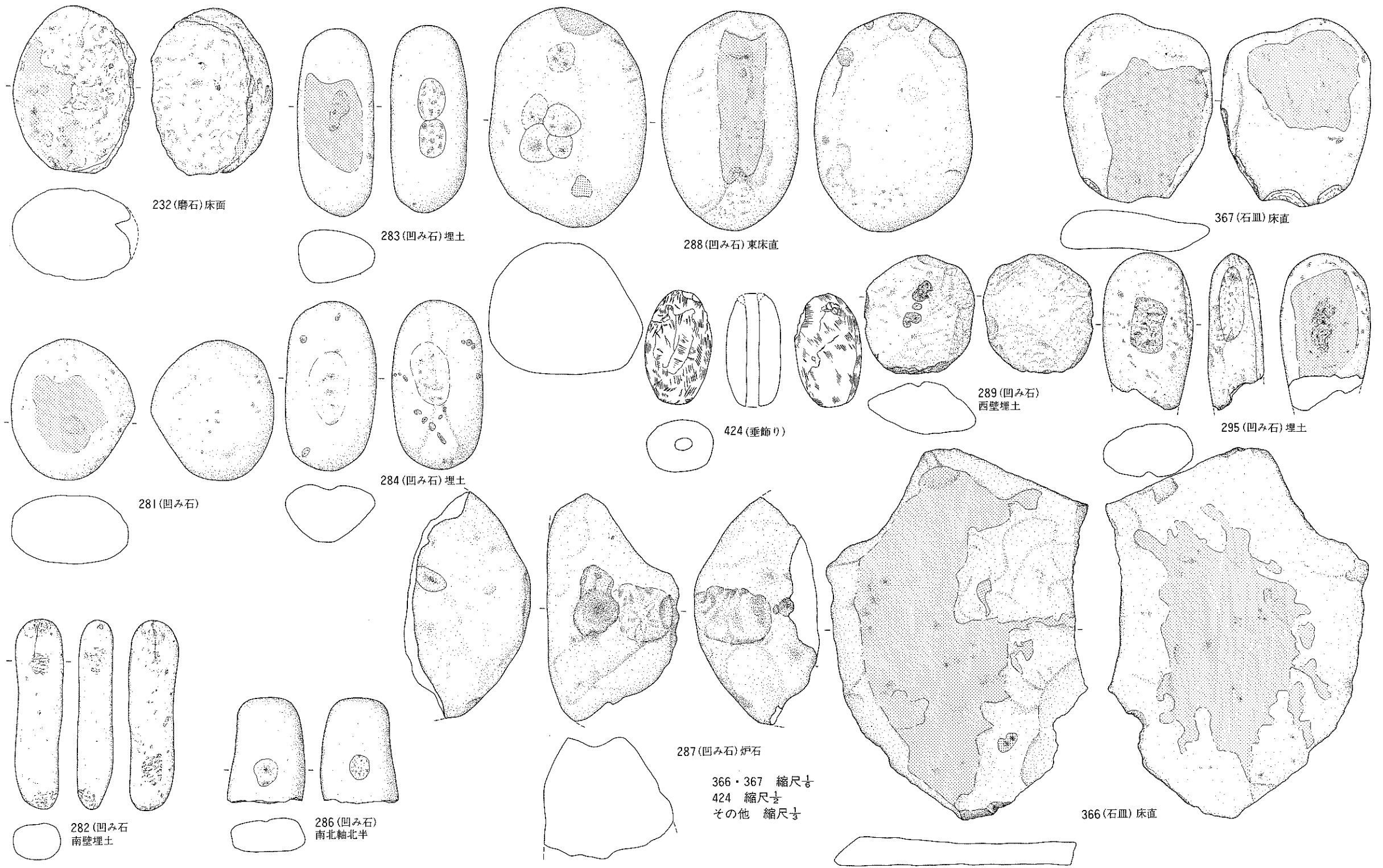
北東部の埋土内から出土した大型の橢形をした垂飾りである。大きさは全長5.2cm、幅3.1cm、厚さ2.5cm、重さ60gである。北上山地古生界産の凝灰質チャート素材とし、平面が長円形、断面が楕円形で長軸の中心部に貫通孔がある。表面は全面が良く研磨されるが、研磨の際の擦痕を残している。

〔遺構の時期〕

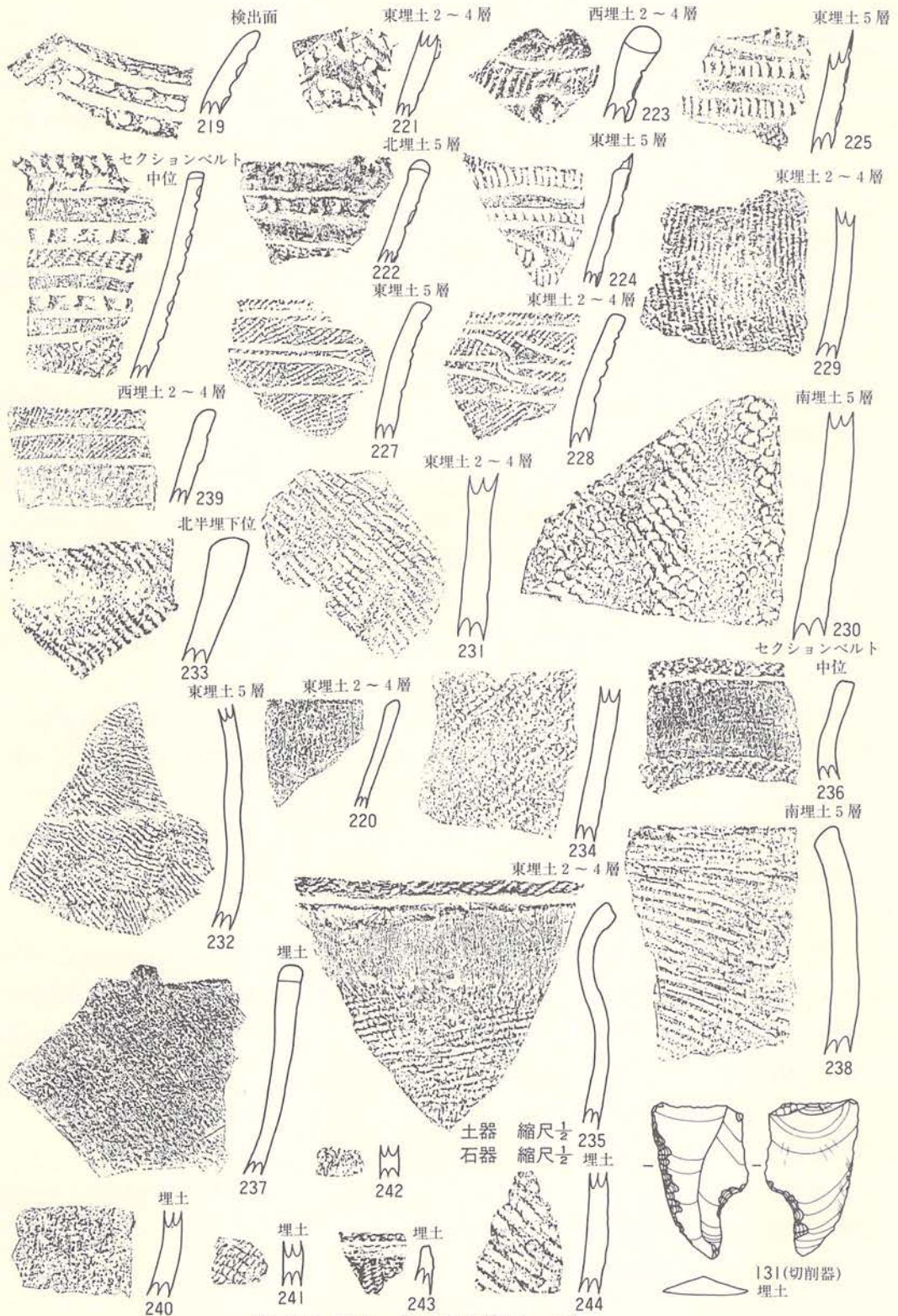
床面直上から出土した204・205の土器は、ともに後期に位置づけられることは明白であるが、現在の編年上からみた場合必ずしも並行関係にあるとは理解されていない面もある。205は後期でも末葉に属することは動かしがたい。204については帯状の縄文と沈線による円文を新地式の流れてみれば、これも後期末葉に属することになる。以上のことを総合すると、本住居跡は後期末葉として大きな誤りはないであろう。



第52図 (17)II g60住居跡(遺物-1)



第54図 (I)II g60住居跡(遺物-3)



第53図 (17) II g 60住居跡(遺物-2)

(18) II i 63住居跡 (旧II i 62住居跡)

〔遺構〕 (第55図、P L—274)

C区南東端に近い緩い南西向き斜面に立地し、グリッドII i 63に位置する。重複遺構は全くない。

長軸2.7m、短軸2.3mの規模をもち、長軸方向が北西—南東方向の楕円形を示す小型の竪穴住居跡である。壁高は最も高い南東部で28cm、最も低い北西部が9cmと、自然地形が北西向きの緩斜面であることから、北西部に寄るほど低い。壁面は床面に対して若干外傾するが、一部は直角気味を示す。

床面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、全体が南東にむかって緩く傾斜している。また、踏み固めによる硬さがほとんどなく、どちらかという軟弱である。おそらく、あまり長時間居住されていないであろう。

炉は床面中央やや南西寄りに位置し、南西側に1個の自然礫を配置した配石炉である。炉石は中心から2個に大きく縦割れしているが、原形の大きさが幅30cm、厚さ13cm、高さ26cmで、床面が18cm位の幅で掘り込まれ、その中に22cm位埋めている。炉床に伴う焼土は炉石の北東側に13cm×6cmの不整形な広がりを持ち、厚さは層として図化できない位の薄層である。このことから長時期使用された状況とは考えられない。ほかの柱穴や壁溝といった施設は検出されていない。

埋土は最上層が黒褐色、その下位が暗褐色、最下層が褐色といった色調のシルトで構成されている。全体的にしまりがなく、炭化物粒や浮石粒が混入し、自然堆積の様相を示している。(Y)

〔遺物〕

埋土内から46点の土器片と、凹石、石皿各1点の石器、土製品1点が出土している。いずれも埋土内からの出土である。

土器 (第55図245～249、P L—128)

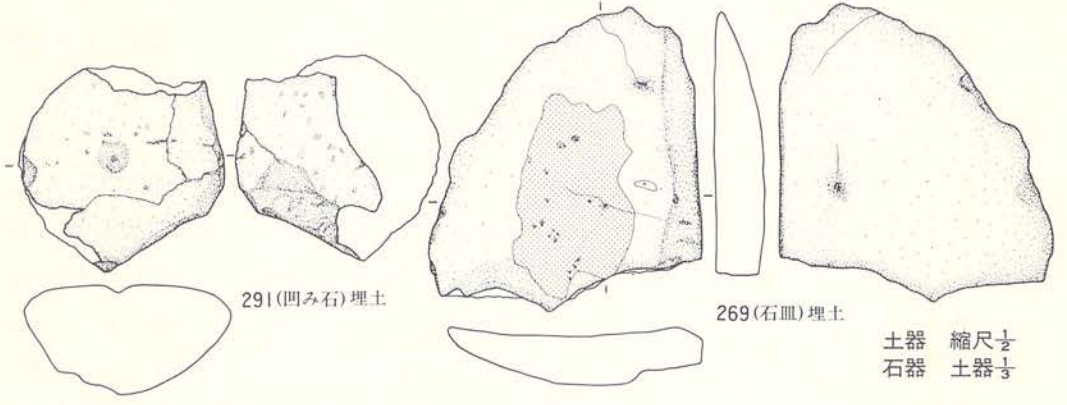
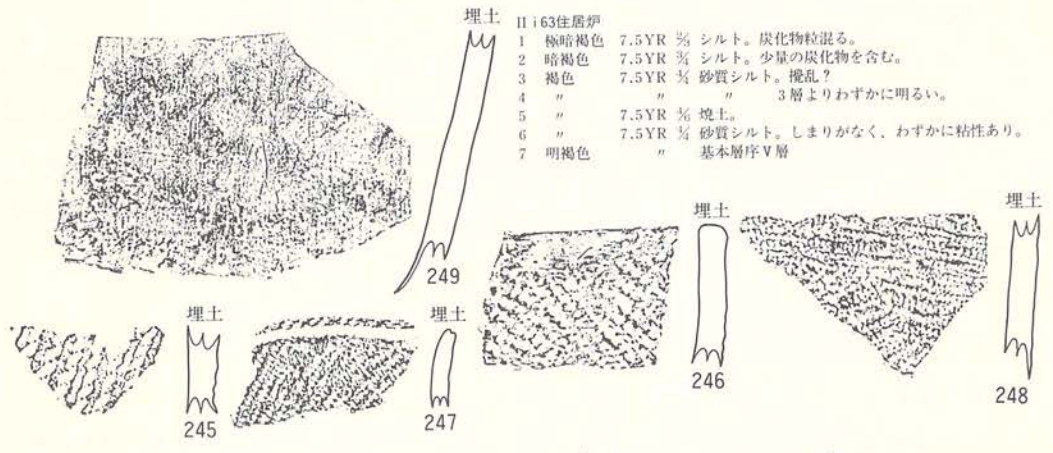
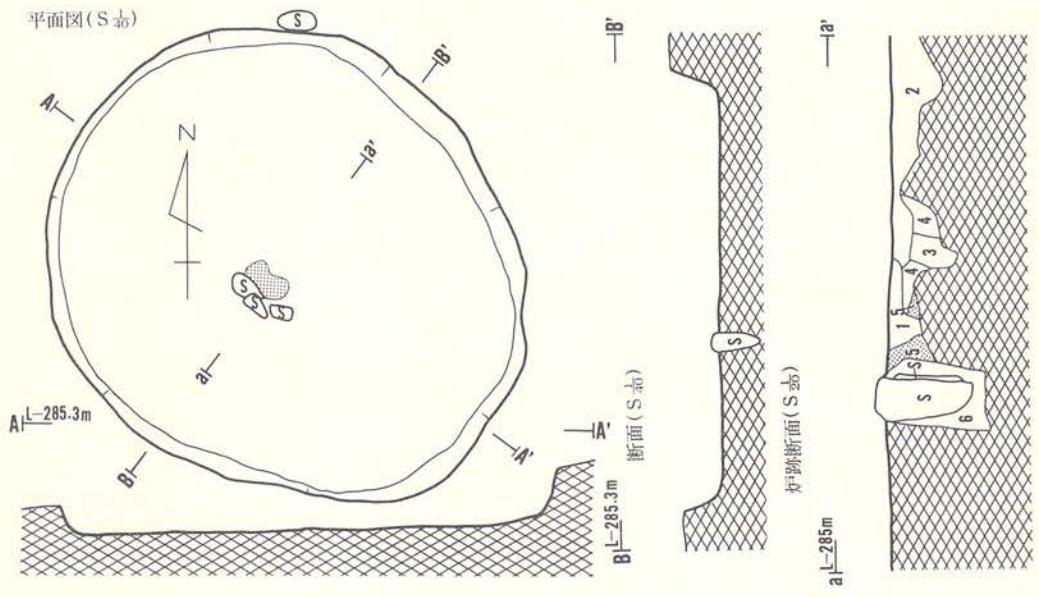
245～248は器表に縄文のみを付す口縁部～体部の破片で、247は口唇にも原体の回転文が付される。縄文の種類には0段多条による原体LR横回転(247)や斜回転(248)による単節斜行縄文、原体RL横回転による単節斜行縄文(246)、単軸絡条体縦回転による撚糸文(245)があり、249は無文である。

以上のことから、無文土器は第VIII群、縄文のみの粗製土器は第IX群に相当する。

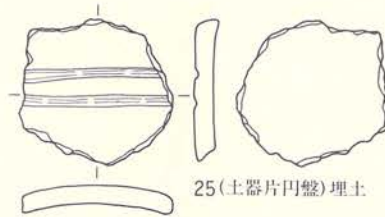
土製品 (第56図25、P L—157)

無文に沈線による文様をもつ土器の体部片を利用し、その周囲を打ち欠いて整形した土器片円盤である。大きさは径4cm×3.5cmで、厚さは5mmである。

石器 (第55図291・369、P L—171・176)



第55図 (18) II i 63住居跡(遺構・遺物 - 1)



第56図 (18)II i 63住居跡(遺物-2)

凹み石 (291) と石皿 (369) がある。291は周辺の一部を欠損するが、略円形の自然礫を凹み石として使用したもので、片面のほぼ中央に凹みをもつ。369は三角形の扁平な自然礫の平坦面を石皿的に使用したものである。

〔遺構の時期〕

床面直上から出土した土器が皆無であることと、埋土内出土の中に時期の明確な土器がないので定かでない。しかし、247・248は使用されている原体が後期後葉～末葉に多用されるものであり、特に口唇にも付される247は後期後葉であろう。245は中期末葉に近い様相であるが、その他は不明である。以上のことから、後期後葉から末葉にかけての時期と推定することができる。

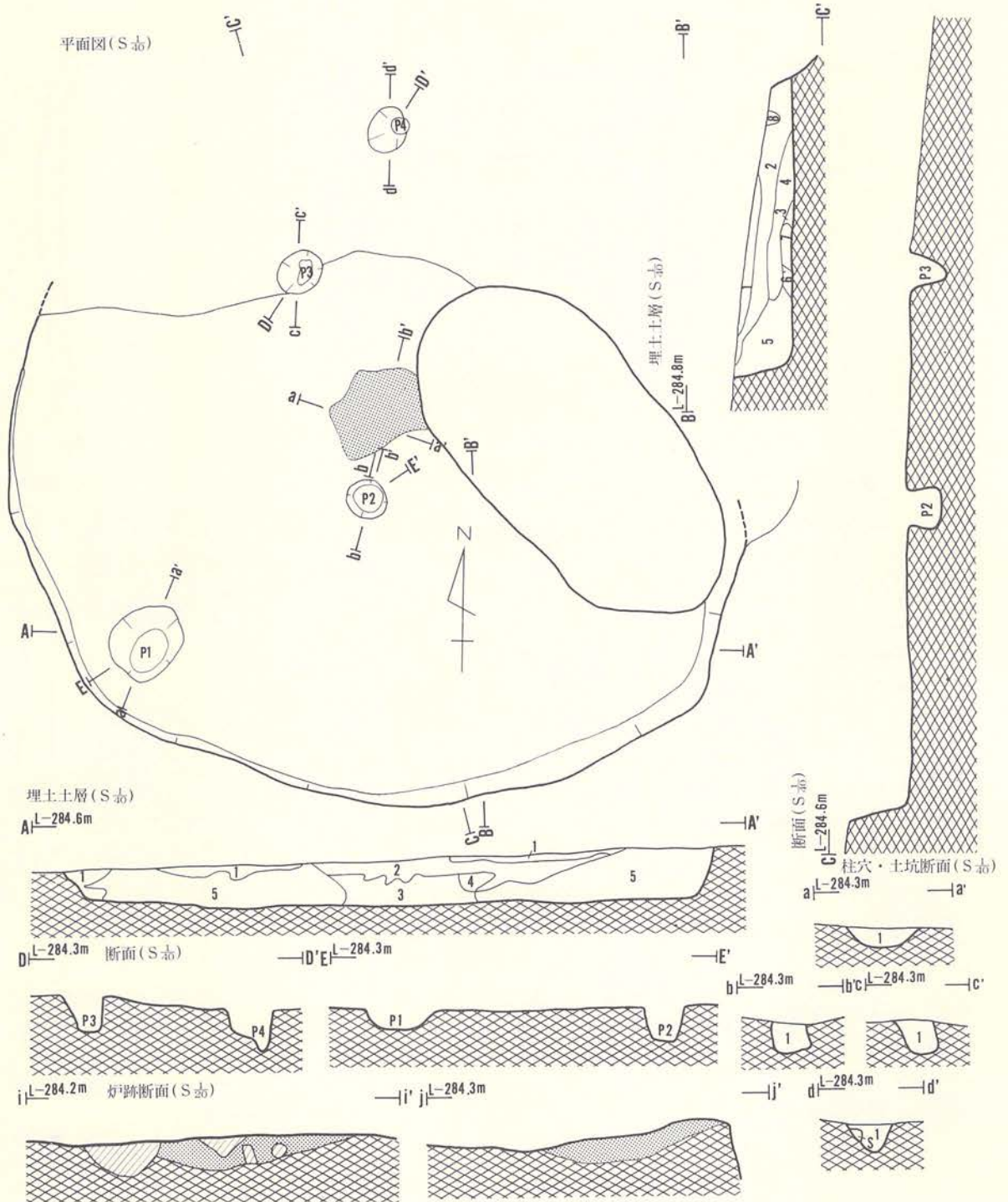
(19) II j 59住居跡

〔遺 構〕 (第57図、P L-28)

C区東端の北向斜面上位に立地し、グリッドII j 59・60とIII a 59・60にまたがって位置する。また、III a 59土坑、III a 59陥し穴状遺構と北東部で重複しているが、その新旧関係はIII a 59陥し穴状遺構が最も新しく、次いでIII a 59土坑となり本住居跡は最も古い。

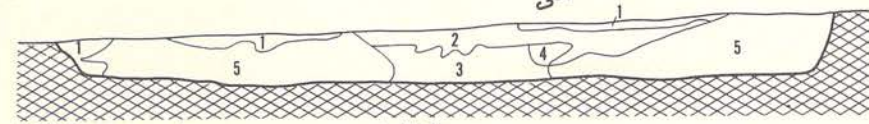
本住居跡は北向き斜面にかかっているため、斜面下位部分が流失し、検出されたのは全体のほぼ $\frac{1}{2}$ 位と推定される。検出された部分は北西-南東4.8m、北東-南西3.4mの規模をもち、本来の形状は径5m位の円形か楕円形を示す竪穴住居跡であろう。壁は南東部が最も高く38cmであり、斜面下位の北～北西に寄るほど低くなり、北壁部分の全体の約 $\frac{1}{2}$ は残存していない。壁面は床面に対して若干外傾する部分が多いものの、一部はほぼ直角に近い場所もある。床面は凹凸もなくほぼ平坦で水平状態に近い。炉の周囲から南東部の床面は踏み固めによって硬いが、ほかの部分ではむしろ軟かく、踏み固めが観察されない。また、北側は流失して残ってい

平面図(S 56)



埋土土層(S 56)

A1 L=284.6m



D1 L=284.3m 断面(S 56)

—D'E' L=284.3m

断面(S 56)

C1 L=284.6m

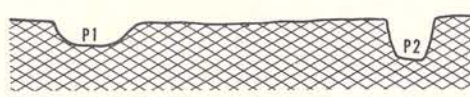
柱穴・土坑断面(S 56)

a1 L=284.3m —a'

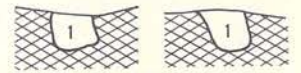
b1 L=284.3m —b'c' L=284.3m —c'



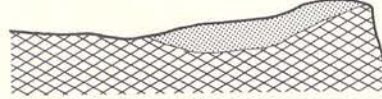
i1 L=284.2m 炉跡断面(S 56)



—j1 L=284.3m



—j' d1 L=284.3m —d'



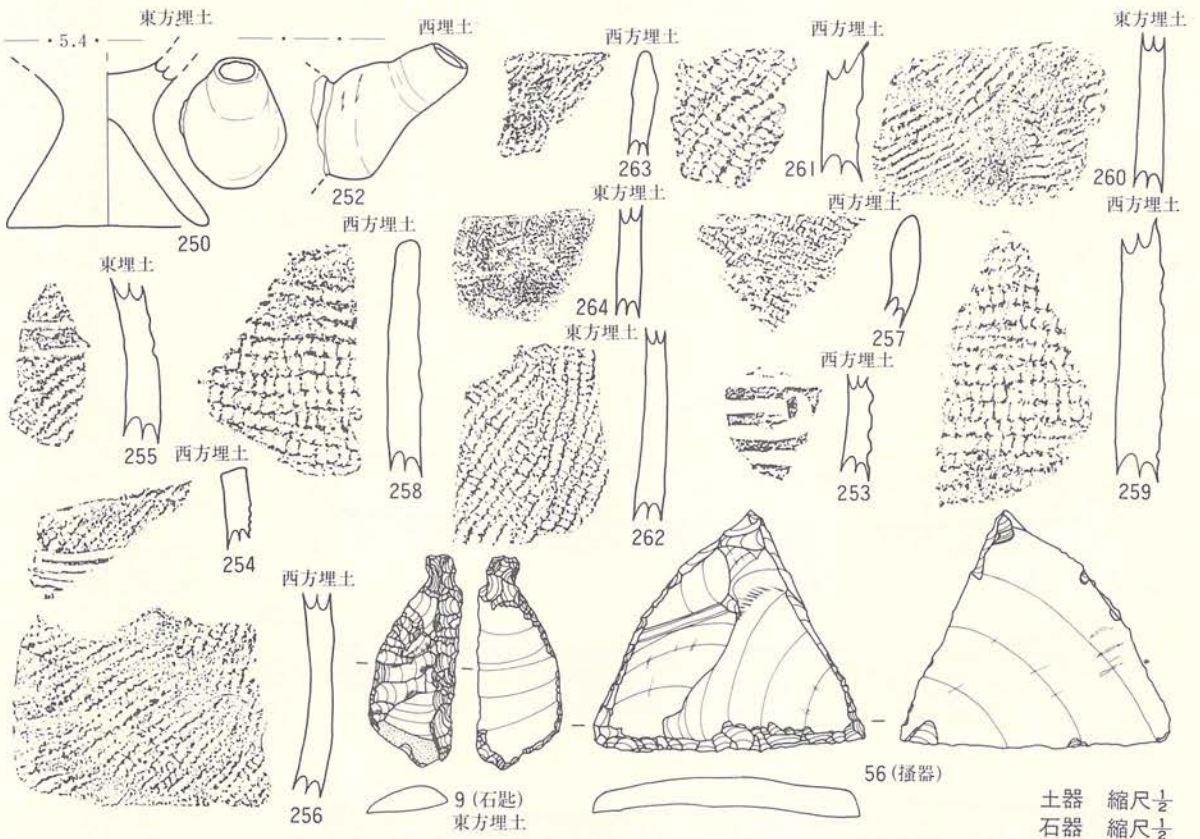
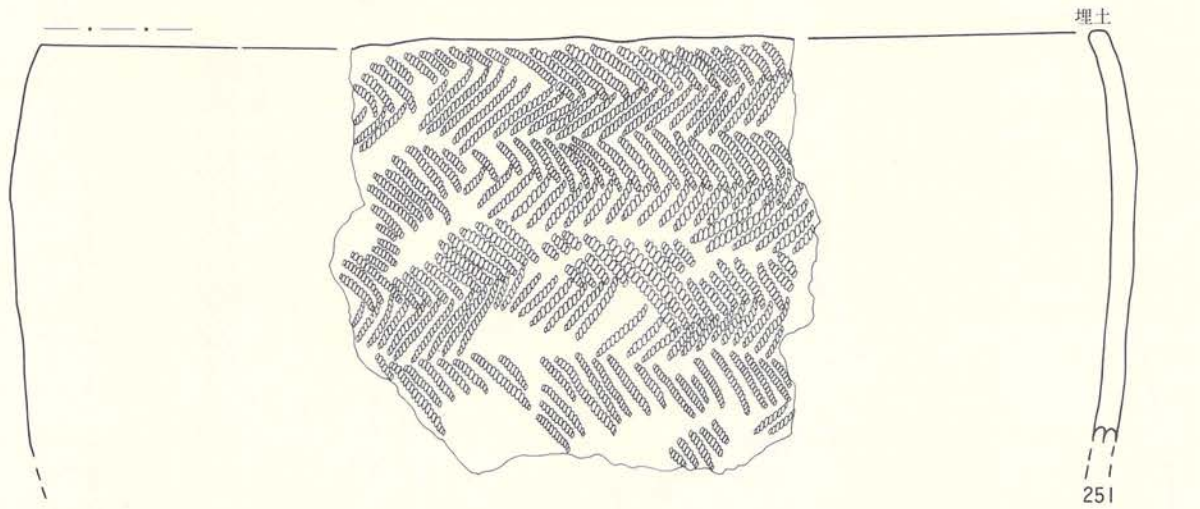
II j 59住居跡炉

層位	色調	土性
1	7.5YR 7/2 黒褐色	シルト。木根による攪乱。
2	5 YR 7/2 明赤褐色	焼土。

II j 59住居跡

層位	色調	土性
1	10 YR 7/2 黒褐色	シルト。暗褐色土粒が混じる。
2	10 YR 7/2 暗褐色	シルト。黒褐色土や浮石混じる。
3	10 YR 7/2 黄褐色	シルト。暗褐色シルト混じる。
4	10 YR 7/2 褐色	シルト。炭化物を含む。
5	10 YR 7/2 褐色	シルト。暗褐色シルト・浮石混じる。
6	10 YR 7/2 黄褐色	シルト。少量の浮石を混じる。
7	10 YR 7/2 褐色	シルト。浮石を混じる。
8	10 YR 7/2 黒褐色	シルト。浮石を混じる。

第57図 (19) II j 59住居跡(遺構)



第58圖 (19) II j 59住居跡(遺物)

ない。

炉は地床炉で、南壁から北側約2.4m 離れていることから、本来は床面のほぼ中央に設置されていたものと推定される。炉床の焼土は65cm×50cm位の略楕円形の広がりを持ち、層厚は10cm位あって長時間使用されたことを表している。

床面からP₁（径50cm×44cm、深さ11cm）、P₂（径26cm×26cm、深さ11cm）、P₃（径30cm×26cm、深さ23cm）、P₄（径30cm×25cm、深さ25cm）の柱穴状土坑が検出されているが、規模的には柱穴状であるが、位置が不定であるため、本住居跡に伴う柱穴と理解するには問題を残している。

埋土は黒褐色～黄褐色までのシルトを主体に構成され、8層に細分される。全体的にみると、多少の差こそあるが浮石の混入がみられ、その他に色調の異なるシルトも混入している。また、4層には炭化物の混入もある。おそらく、自然堆積によって埋没したことを示すものであろう。

(Y)

〔遺物〕

実測可能3点、破片59点を含む土器と石器2点が出土している。床面直上から出土したものは全くなく、全て埋土内から出土した。

土器 (第58図250～264、P L-128)

250は台付土器（鉢?）の台部のみで、器面に縄文をもたない無文である。251は0段多条の原体L R・R Lを連結させて横回転した単節の羽状縄文を付す粗製土器の破片である。器種は深鉢で、体部上位～口縁部が内湾する器形である。252は注口土器の剝落した注口部のみである。253は無文の器面に沈線のみで施文されている。254は原体L R横回転による単節斜行縄文の付された器面に、4条の並行沈線で文様を付す。255は原体R L縦回転による単節斜行縄文を付したのち沈線で区画し磨消している。256～262は縄文だけが施された粗製土器で、縄文の種類には0段多条の原体R L（257、262）やR L（256、261）等の単節斜行縄文がある。

以上のことから、254は第VI群1類、255は第V群2類、253は第IV群4類、無文土器は第VIII群、縄文のみを付す粗製土器は第IX群に相当する。

石器 (第58図9・56、P L-158・160)

石匙1点と搔器が1点出土している。9が石匙で縦形左刃型に属する。縦長の剝片を素材とし、打点部に抓みを作り出し、両側縁に裏面からの剝離調整を施している。56は三角形の大型剝片の2辺（実測図表面の左側辺と下辺）に裏面からの剝離調整が施されている。断面が比較的薄く、僅かに外湾している。

〔遺構の時期〕

床面直上から出土した土器が全くないので明らかでない。埋土内から出土した土器はいずれ

も後期に属するものばかりである。このことから考えると、本住居跡は後期に属することは確実であろうが、それ以上は確定不能である。

(20) III b 59住居跡

〔遺構〕 (第59図、P L-278)

C区ほぼ北東端の北向き緩斜面上位に立地し、グリッドII b 59・II b 60にまたがって位置する。

北端部が斜面下位にかかるため流失して残っていないが、検出された部分は東西2.6m、南北2mの規模をもち、本来は径2.6m位の円形か楕円形を示す竪穴住居跡と推定される。壁は最も高い南壁で約27cmあり、斜面に立地することから斜面下位の北に寄るほど低くなる。壁面は床面に対して内湾気味にやや外傾する部分が多いが、一部(南東・南西)は直角に近いところもある。

床面には凹凸もほとんどなく、平坦でほぼ水平状態に近い。踏み固めによる硬さは観察されず、むしろ全体的に軟弱である。

炉は東側に円礫を1個配置した配石炉で、南壁から1.2m北に位置するが、本来は床面中央付近に設置されたものであろう。礫の大きさは10cm×10cm、高さ10cmと小さい。構築方法をみると、礫が床面を掘り込んで埋めた状況ではなく、床面に配置してその周囲をシルトで固定したものらしい。炉床の焼土は不整形な50cm×40cm位の広がりを示し、層厚は6cmほどである。ほかに柱穴や壁溝といった施設は検出されていない。

埋土は黒色と極暗褐色の砂質シルト(1・2層)と、褐色の汚れた基本層序V層に相当する地山土(3層)で構成され、炭化物粒や浮石粒が混入している。(Y)

〔遺物〕

埋土内から28点の土器片が出土した以外、石器等は出土していない。

土器 (第59図265~269、P L-128)

全て縄文のみが付された粗製土器の破片で、265・266が口縁部であるほかは体部片である。256~267は原体L横回転による斜行無節縄文、268は原体L R縦回転による単節斜行縄文、269は0段多条の原体L R縦回転による単節の斜行縄文である。

以上のことから、これらは全て第IX群土器に位置づけられる。

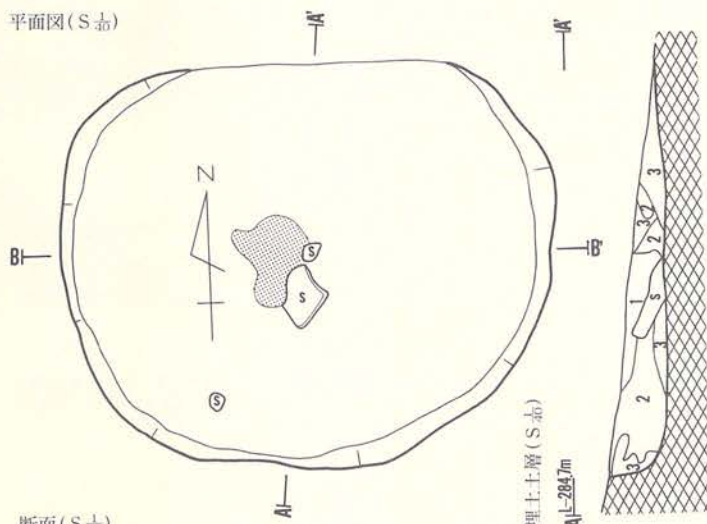
石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

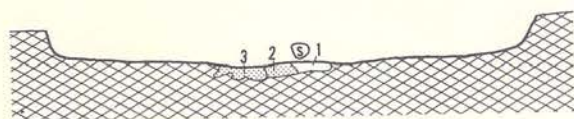
床面直上からの出土がなく、埋土内からも時期を推定し得るものが出土していない。しかし、

平面図 (S₃₀)



断面 (S₃₀)

B₁ 284.7m

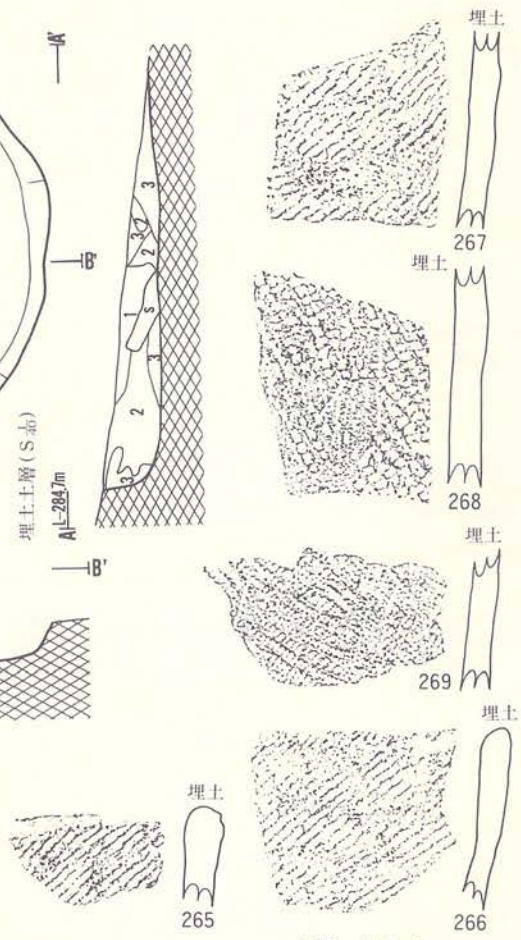


Ⅲ b 59住居跡

層位	色調	土性
1	7.5YR 7/1 黒色	砂質シルト。浮石・炭化物を含む。
2	7.5YR 7/2 極暗褐色	＊ ＊ ＊ 1層と同じ。
3	7.5YR 7/3 褐色	汚れた基本層序V層。

Ⅲ b 59住居跡炉

層位	色調	土性
1	7.5YR 7/3 褐色	砂質シルト。汚れた基本層序V層。
2	10 YR 7/3 黄褐色	焼土。
3	7.5YR 7/3 暗褐色	砂質シルト。焼土粒と炭化物を含む。



土器 縮尺 $\frac{1}{2}$

第59図 (20)Ⅲ b 59住居跡(遺構・遺物)

268は縄文や胎土が中期的である以外は、後期の土器に属する様相を示している。以上から、本住居跡は後期（後半か）に属するとして大過ないであろう。

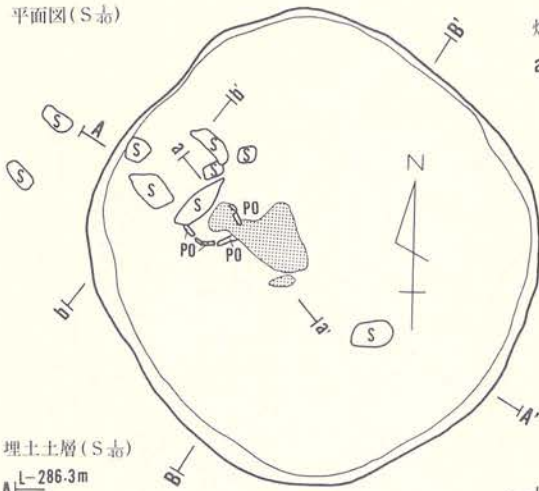
(21) Ⅲ b 63住居跡

〔遺構〕 (第60図、P L-29)

C区東端の尾根の南側崖寄りでは北西向きの緩斜面に立地し、グリッドⅢ b 63・64にまたがって位置する。

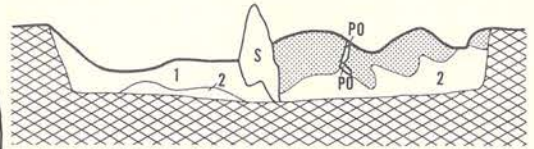
北西-南東2.4m、北東-南西2.25mの規模をもち、長軸が北西-南東にある隅丸の長方形気

平面図 (S 迹)

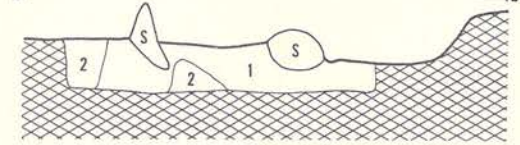


炉跡断面 (S 迹)

a1 L-286m

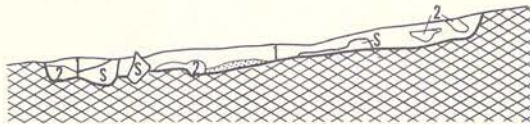


b1 L-285.9m

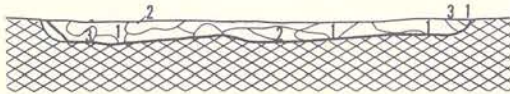


埋土土層 (S 迹)

A1 L-286.3m



B1 L-286.2m



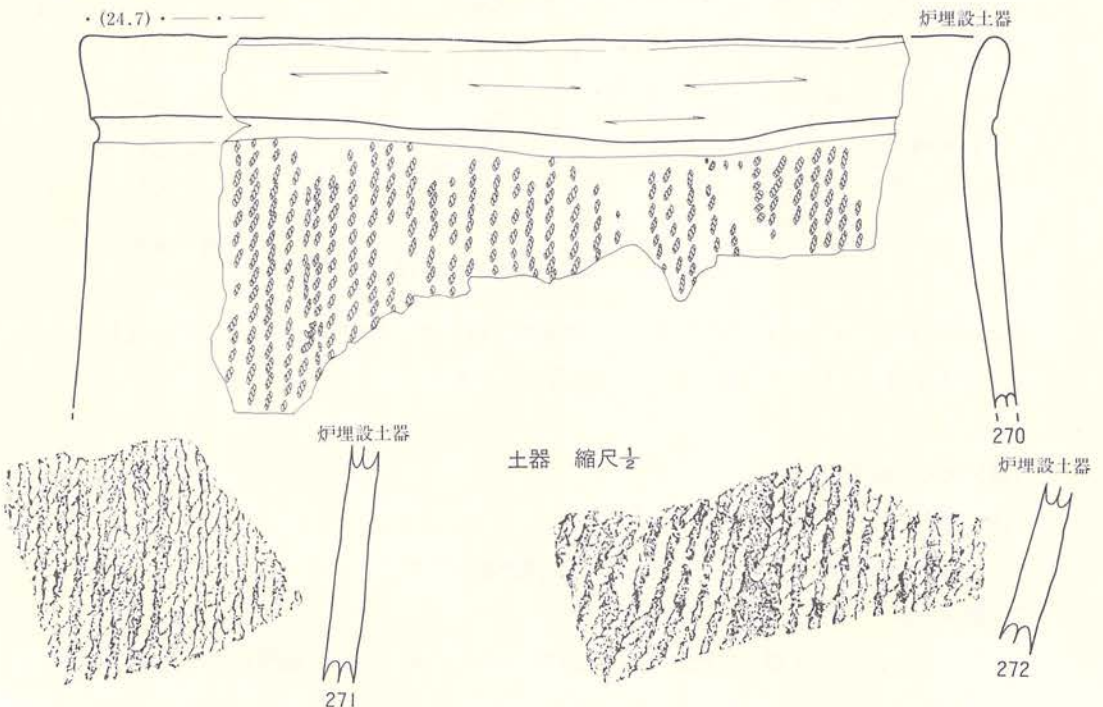
III b 63住居跡

層位	色調	土性
1	7.5YR 7/5 暗褐色	シルト。炭化物・焼土・浮石が多量に混じる。
2	10 YR 7/5 褐色	。1層に基本層序V層粒が多量混入。
3	10 YR 7/5	。汚れた基本層序V層。
4	7.5YR 7/5 黒褐色	。1層と同じ。

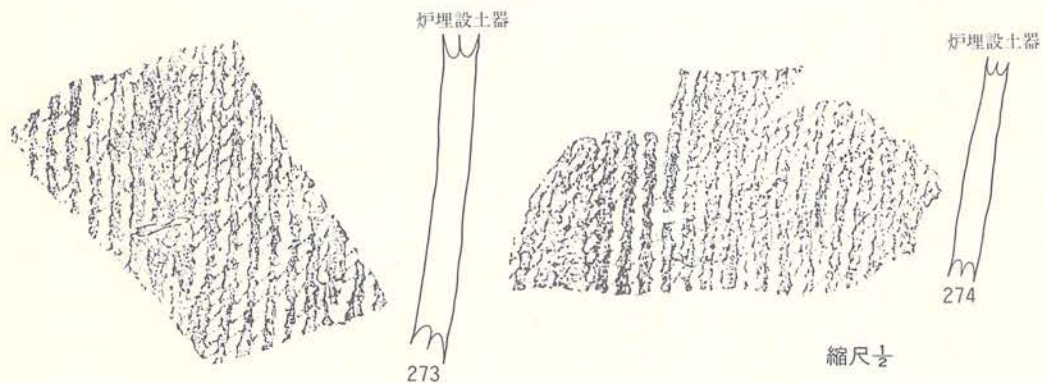
III b 63住居跡炉

層位	色調	土性
1	7.5YR 7/5 褐色	シルト。粒性なし。
2	7.5YR 7/5 明褐色	基本層序V層。焼土粒の混入多い。
3	赤褐色	焼土。

・ (24.7) ・



第60図 (2) III b 63住居跡(遺構・遺物 - 1)



第61図 (2) III b 63住居跡(遺物-2)

味を示す竪穴住居跡である。壁の高さは全て10cm~15cmの範囲にあるが、これは床面の高さが地表面の高さに比例していることに起因する。壁面の状況は壁高が低いため明確にし難いが、床面に対して若干外傾している。

床面には若干凹凸があり、全体が北西に向って傾斜している。炉の周囲は踏み固めによって硬いが、他は軟かい。

炉は燃焼部と前庭部をもつ複式炉で、北西壁に前庭部が接するように設置されている。前庭部は扁平で長めの円礫3個で構成され、前庭部内は周囲の床面より5cm位掘り込まれている。礫の大きさは、北東側が長さ30cm、幅8cm、高さ18cm、南東側が長さ36cm、幅12cm、高さ27cm、南西側が長さ26cm、幅14cm、高さ11cmあり、それぞれが床面に5cm~12cm位埋込まれ、礫の上面が揃えられている。3個の礫は北西部が開口する「コ」状に配置されて燃焼部と区画している。燃焼部には深鉢形の口縁部大形破片が埋設されているが、焼土の分布範囲は土器から大きくはみ出している。埋設された土器は、口縁部径25cm位で、頸部に断面丸形の沈線を全周させて体部と限り、口縁部は無文、体部には単軸絡条体縦回転による擦糸文が付されている。同一個体の破片が10数点出土しているが、接合しないので埋設された高さは不明である。燃焼部の焼土は埋設土器内から南東に延び、その範囲は30cm×55cmの広がりをもつ。

埋土は黒褐色~褐色までのシルトが主体をなし、4層に細分されているが、多量の焼土と炭化物が混入しており、床面直上にも焼成による赤色変化部分が観察されることから、本住居跡は焼失したものと推定される。(Y)

〔遺物〕

炉に埋設されていた土器が39個の破片になって出土したのみである。

土器 (第60・61図270~274、P L-128)

接合しないので全体的なことは不明であるが、口縁径約25cmで、頸部に1条の断面丸形の沈線を全周させ、口縁部を無文、体部を単軸絡条体縦回転による捺糸文を付す。

以上のことから、第Ⅲ群6類に位置づけられる。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

炉に埋設された土器と炉が複式炉であることから、本住居跡は中期末葉に位置づけられる。

〔D 区〕

(22) II a 68住居跡

〔遺 構〕 (第62図、P L-30)

D区北端沢沿いの崖縁に立地し、グリッドII a 68・II b 68にまたがって位置する。南東部で北東-南西方向に長軸をもつII a 68陥し穴状遺構とII a 68土坑と重複しているが、新旧関係は本住居跡の方が新しい。また、北側約 $\frac{1}{2}$ は木根による攪乱や斜面下位にかかるため残存していない。

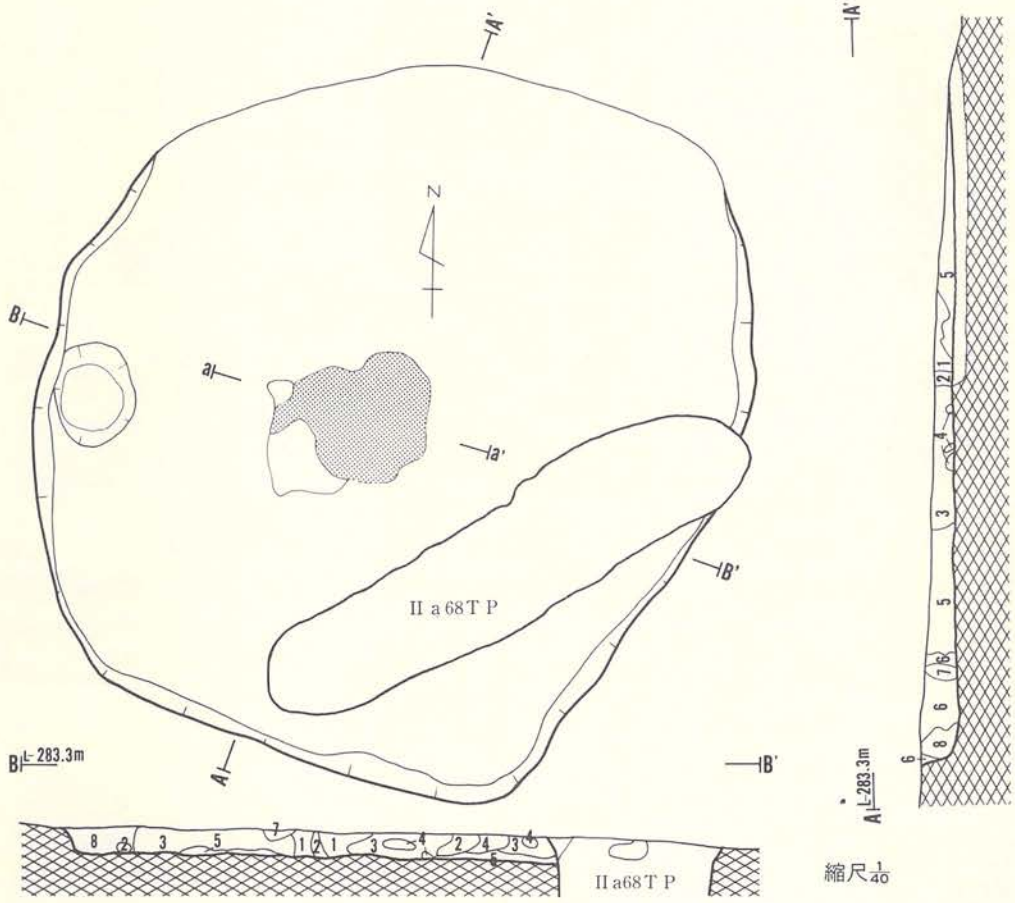
残存する壁や貼り床の範囲は北東-南西4.4m、北西-南東3.6mの規模をもち、一辺の長さが約2.2mで北東-南西に長軸をもつ長めの六角形に近い不整形を示す竪穴住居跡である。壁は最も高い南壁中央部が24cmで、斜面下位の北に寄るほど低くなる。壁面は床面に対して若干外傾するが、一部は直角に近い状況を示す部分もある。床面に若干起伏があるもののほぼ平坦で、水平に近い。南側半分が踏み固めによって非常に硬く、移植篋で割れないほどであるのに対して、貼り床されている北側は幾分軟かく、強い踏み固めは観察されない。貼り床に使用された土は基本層序V層起源の黄褐色シルトである。

炉は地床炉で、床面ほぼ中央に設置されたものであろう。焼土は60cm×40cmの正円状に近い不整形の広がりを示し、層厚は約8cmである。また、西壁際の床面から長軸55cm、短軸42cm、深さ13cm位で、長軸を南北にもつ楕円形を示す浅い土坑状の掘り込みが検出されている。埋土は住居跡の埋土最下層と共通することから、これに伴う遺構と考えられるが性格は不明である。ほかに柱穴状土坑や壁溝は検出されていない。

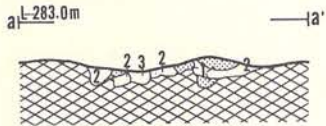
埋土は主に炭化物を含むにぶい黄褐色土やにぶい褐色土で構成され、8層に細分されている。全体的に炭化物の混入が観察されるものの、焼失した状況は示していない。 (M i)

〔遺 物〕

実測可能3点、破片54点の土器と石器が1点出土している。床面直上から出土したのは完形土器(275)を含む7点のみで、他は埋土内からの出土である。



縮尺 $\frac{1}{40}$



II a 68住居跡

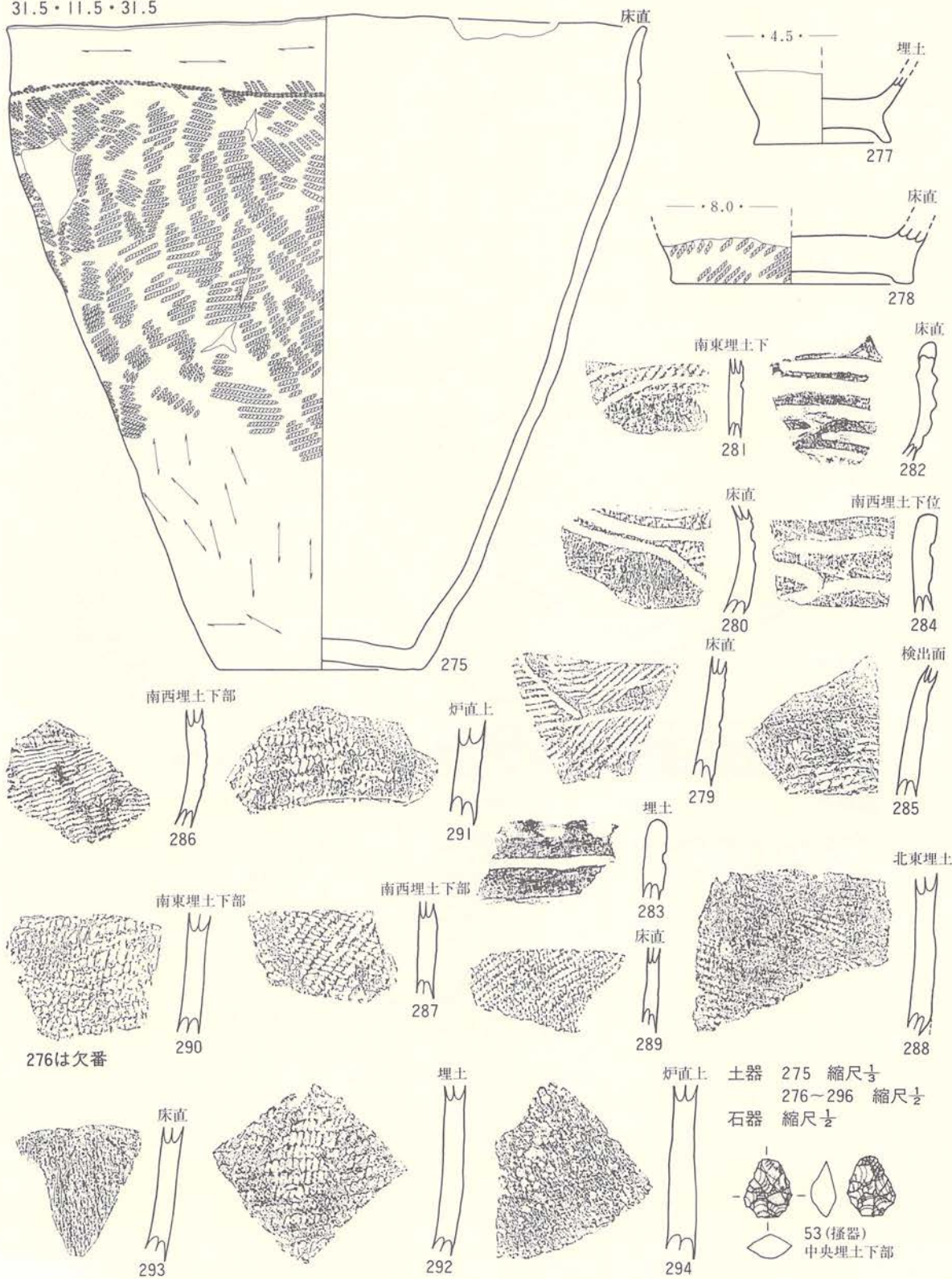
層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 にふい黄褐色	シルト。炭化物を多量に含む。
2	10 YR 5/6 黄褐色	* 基本層序V層起源。
3	10 YR 5/6 にふい黄褐色	* 炭化物・浮石混入。
4	10 YR 5/6 明黄褐色	* 基本層序VI層起源。
5	10 YR 5/6 黄褐色	* 基本層序V層起源。
6	7.5YR 5/6 にふい褐色	* 浮石を混入する。
7	7.5YR 5/6 暗褐色	* * *
8	7.5YR 5/6 褐色	* 炭化物を多量に混入。

II a 68住居跡炉

層位	色調	土性
1	5 YR 5/6 暗赤褐色	焼土。
2	10 YR 5/6 黄褐色	シルト。炭化物や浮石を多く含む。
3	7.5YR 5/6 黒褐色	* 木根による剥乱。

第62図 (2) II a 68住居跡(遺構)

31.5・11.5・31.5



第63図 (2) II a 68住居跡(遺物)

土器 (第63図275・277~294、P L-129)

275は南東壁際の床面直上から出土した器高32.3cm、口縁部径32cmの完形土器で、肩部に最大径をもち、頸部で窄み口縁部が軽く外反する器形を示す。口縁部と体部は縄文原体の側面圧痕文によって限られ、体部には原体L R横回転による単節の斜行縄文を付し、口縁部は無文である。277は器面を無文にした台付鉢の高台部の破片である。278は器表に原体L R横回転による単節斜行縄文を付した上げ底の底部破片である。279は原体L横回転の無節斜行縄文を付した後沈線で区画し、縄文を磨消しているが、一部消し残しがある。280・281は279とほぼ同じ様相を示す。282・283は無文の器面に沈線で文様を付す。284は無文の器面に工字的な沈線による文様が付された三角形の突起をもつ口縁部破片である。285~292は器面に縄文だけが付された粗製土器であるが、縄文の種類には原体L無節縄文(285・286)、原体R L横回転(288)、原体L R横回転(287・289~292)等による単節斜行縄文がある。293と294は無文土器の破片である。

以上のことから、275・286は第IX群5類、280・281は第IV群3類、282・283は第IV群4類、284は第VII群5類、無文土器は第VIII群、縄文のみの粗製土器は第IX群に相当する。

石器 (第63図53、P L-159)

53は小型の剝片を素材としてその周縁部に表裏両面へ剝離調整したもので、器種は搔器と認定した。中心部が厚くて周縁部が薄くなり、断面が菱形に近い。

〔遺構の時期〕

床面直上から出土した275の存在から、後期初頭に位置づけられるであろう。

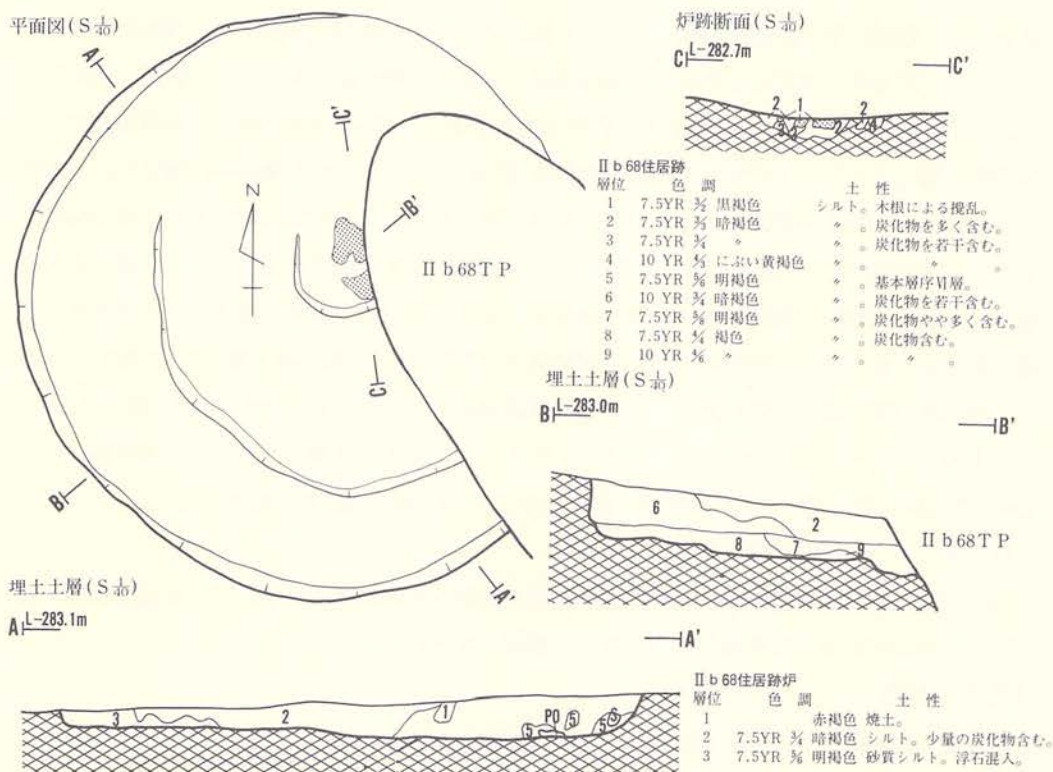
(23) II b 68住居跡

〔遺構〕 (第64図、P L-31)

D区北東端の沢の崖縁に立地し、II a 68住居跡の東側2 mのグリッドII b 68・69とII c 68・69にまたがって位置する。東側部分がII b 68陥し穴状遺構と重複しているが、新旧関係はII b 68陥し穴状遺構が新しい。

立地する地形が北東に向かう緩斜面であるため、北東壁が流失で残っていないが、長径3.1m、短径2.92mの規模をもち、ほぼ正円に近い円形を示す竪穴住居跡である。壁は最も高い南壁で約30cmあり、北東に寄るほど低くなる。壁面は床面に対して若干外傾しほぼ揃っている。床面は周壁寄りの幅約70cmと、その内側(炉の周囲)で5cm~13cmの高低差があるものの、その範囲内ではあまり凹凸もなくほぼ平坦であるが、全体が北東に向って弱く傾斜している。踏み固めは強く、北東部以外では硬い。

炉は地床炉で、床面中央より若干北東に寄って位置するが、東側約 $\frac{1}{2}$ がII b 68陥し穴状遺構によって削られている。焼土は径50cm位の不整形の広がりをもち、層厚5cmである。また、炉



第64図 (23) II b 68住居跡(遺構)

286

の周囲の床面が径70cmの略円形で約10cm位掘り込まれ、焼土面も床面より5cm低い特徴をもっていることから、本来は炉全体が浅い皿形を示していたものと推定される。ほかの柱穴や壁溝等の施設は検出されていない。

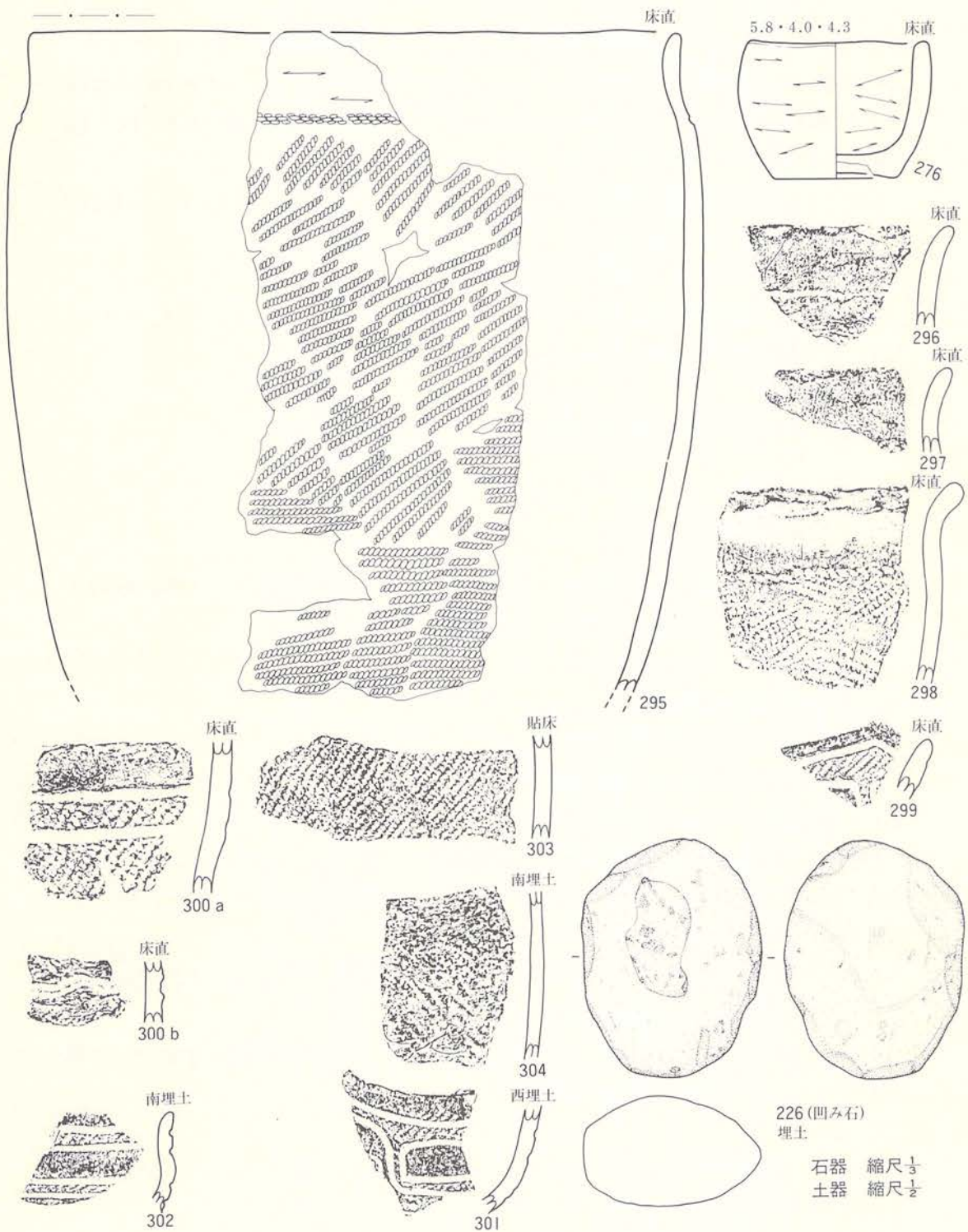
埋土は南壁周辺が炭化物を少量含むにぶい黄褐色であるほかは、主に炭化物を多量に含む褐色土がブロック状に多く混入する暗褐色で占められ、9層に細分される。(M i)

〔遺物〕

実測可能2点、破片101点を含む土器と石器1点が出土している。床面直上からは完形品1点を含む9点の土器が出土している。

土器 (第65図276・295~304、P L-129)

276・295~300は床面直上からの出土である。276は器高4.5cm、最大径6.2cm、口縁部径5.8cmの小型鉢で、器面に全く文様をもたない無文土器である。295は破片の出土であるが、口径約21cm、体部最大径約22.5cm位の大きさと推定され、頸部に原体の側面押圧による圧痕文が付され、



第65図 (23) II b 68住居跡(遺物)

体部に原体LR横回転による単節斜行縄文が施文され、口縁部を無文とする土器である。296～298は295と同じ様相を示す。299～362はほぼ同じ特徴を示し、0段多条の原体RL縦回転による単節斜行縄文の付された器面が沈線で区画され、縄文を磨消する土器である。303・304は縄文のみが付された粗製土器である。

以上のことから、295は第IX群5類、299～301は第IV群3類、276は第VIII群、縄文のみの粗製土器は第IX群土器に相当する。

石器 (第65図266、PL-170)

長径11.7cm、短径8.7cmで楕円形の円礫の片面を凹み石として使用したものである。石材の石質は奥羽山地第三系中新統産の両輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

床面直上から出土した土器295の存在により、後期初葉頃に位置づけられる。

2. 住居跡状遺構

この遺構は規模や形状は竪穴住居跡と近似するが、炉や柱穴が検出されず住居跡と認定する決め手を欠く遺構で、本遺跡ではD区から1棟検出されている。

(1) I j 74住居跡状遺構

〔遺構〕 (第65図、PL-32)

D区中央東端の低丘陵北側裾部の緩斜面に立地し、グリッドI j 74とII a 74にまたがって位置する。他の遺構との重複関係はない。

長径約3.61m、短径約3.32mの規模で、五角形に近い不整形を示す竪穴である。壁の高さは8cm～12cm位の範囲に入り、ほぼ一定している。壁面は床面に対して外傾する部分が多いが、一部は直角に近い状態の部分もある。

床面には小起伏があるもののほぼ平坦で水平に近く、踏み固めと推定される硬さが観察される。炉・柱穴・壁溝といった施設は検出されていない。

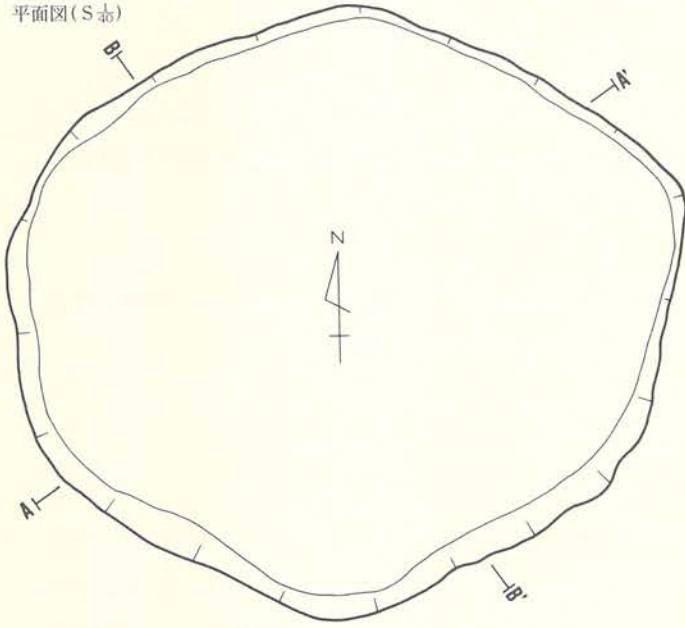
埋土は主に褐色土をブロック状に含む黒褐色土であるが、壁際や床面直上には暗褐色土や明褐色土がブロックで堆積し、5層に細分される。

〔遺物〕

埋土内から実測可能1点を含む12点の土器が出土しているが、床面から出土したものは全くない。石器の出土はない。

土器 (第65図305～307、PL-129)

平面図(S 66)

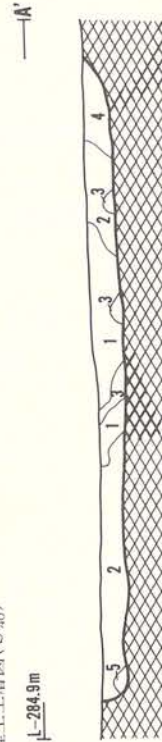


I j 74住居跡状遺構

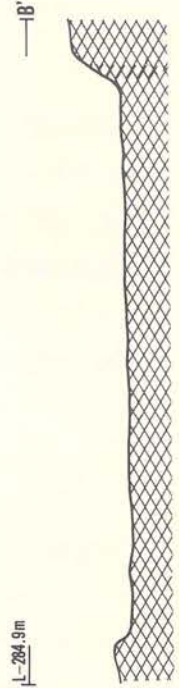
層位	色調	土性
1	10 YR 7/3 黒褐色	シルト。炭化物・浮石混入。
2	10 YR 7/3	浮石が混入。
3	10 YR 7/3 暗褐色	
4	10 YR 7/3	
5	7.5YR 7/3 明褐色	

埋土土層図(S 66)

A I-284.9m

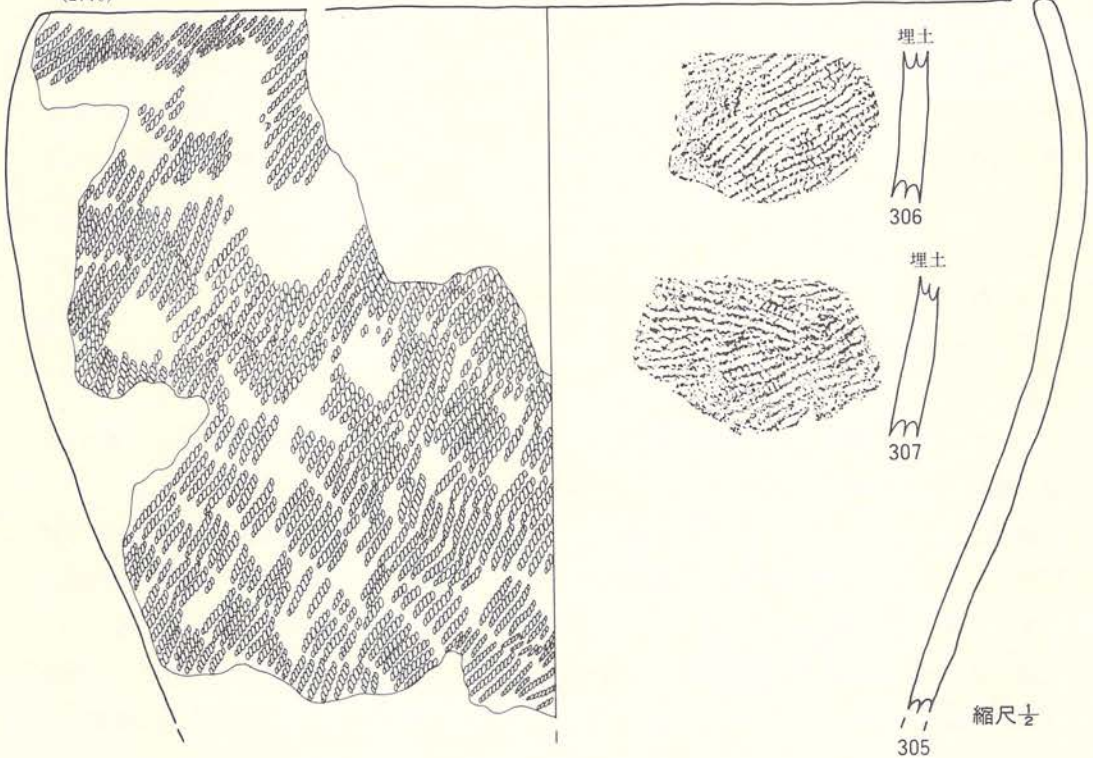


B I-284.9m



・ (27.0) ・

北西埋土



第66図 I j 74住居跡状 (遺構・遺物)

305～307はともに器面に縄文のみが付された粗製土器である。305体部上位に最大径（28.7cm）をもって口縁部（27cm）で内湾する器形をもち、原体LR横回転による単節の斜行縄文を付す。306・307は原体RL縦回転による単節斜行縄文をもつ。

〔遺構の時期〕

床面直上や時期を決定し得るよう土器が出土していないので定かでないが、305は体部の縄文や胎土が後期的である。よって本遺構は後期に位置づけられるものと考えられる。

3. 土 坑

本遺跡の発掘調査では193基の土坑が検出されている。検出された遺構の中には弥生時代や古代、中・近世に属するものがあり、土坑についても同じ様相を示すと考えられるが、遺物を出土しないと所属時期を決定する決め手がないため、時期を確定するのが困難である。以上のことから、時期の確定できなかった土坑については、一応縄文時代として本項に一括した。

A区-32基、B区-57基、C区-78基、D区-19基に分散して位置するが、各区によってその在り方に違いがみられる。A区の場合は北端部の段丘崖沿いとB区寄りのB区から延びる斜面に分かれて立地しており、B区寄りの一群はB区の遺構群を構成する一部の可能性が強い。B区は尾根頂上部にほぼ集中してあり、一部が西に延びる尾根突端部に位置する。C区の場合はほぼ全域に散在している。D区は北側にある沢の崖沿いに集中している。遺構群全体の構成からみると、B・C・D区は住居跡の存在と深い関わりを看取することができるが、A区にある2地点に集中する土坑は、住居跡と共存しない在り方を示し、他区とは異なる状況を示している。

< A 区 >

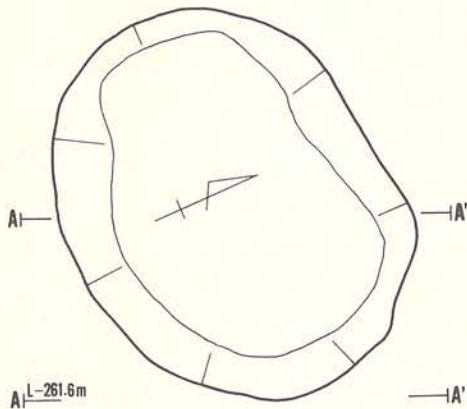
(1) III a 4 土坑

〔遺 構〕 (第67図、PL-34)

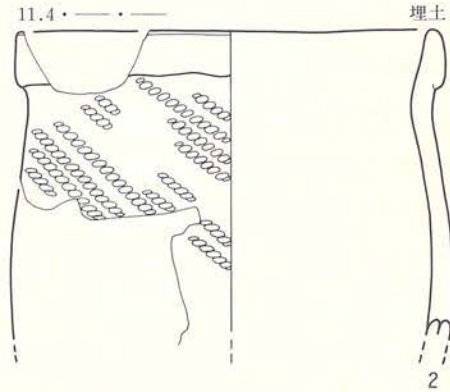
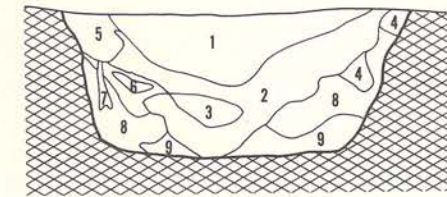
調査範囲内では最北にある遺構で、グリッドIII a 4に位置し、北東側沢の崖沿いに立地する。他の遺構との重複関係はない。

開口部径2.17m×1.68m、底部径1.8m×1.2mの規模をもち、平面形は長軸が東-西にある楕円形である。深さは最も深い東壁で85cmあり、壁が約103度外傾し、断面形はバケツ形である。底面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、東側から西側へ14cmの比高で傾斜している。

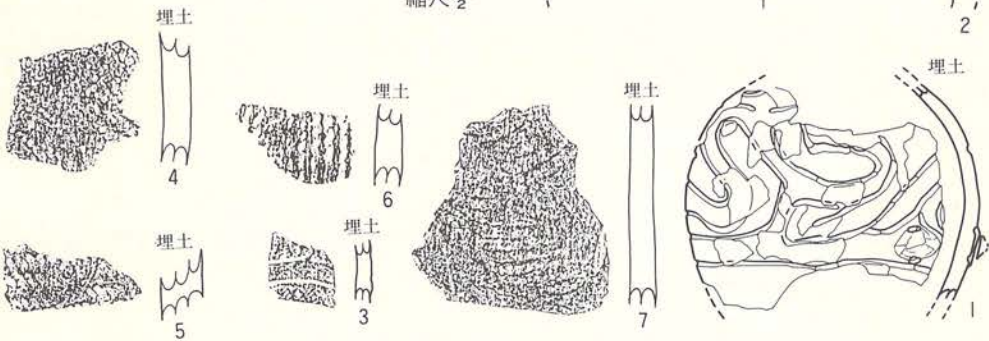
埋土には黒色・黒褐色・極暗褐色・褐色のシルトや砂が堆積し、9層に細分される。1層は炭化物が混入して軟らかく粘性がある。2層には砂と浮石が含まれ、その他の土層は砂質がか



層位	色調	土性
1	7.5YR 5/2 黒色	砂質シルト。炭化物混入。
2	7.5YR 5/2 黒褐色	〃
3	10 YR 5/2 〃	〃
4	7.5YR 5/2 極暗褐色	〃
5	〃	基本層序IV層。
6	〃	基本層序V層。
7	〃	木根の跡。
8	7.5YR 5/2 褐色	砂層。
9	7.5YR 5/2 黒褐色	砂質シルト。



縮尺 1/2



第67図 (I) III a 4 土坑

ったシルトで、硬くしまる。

(Na)

埋土の堆積状況を見ると、層序がレンズ状の堆積を示すことから、自然堆積の埋没であろう。

[遺物]

埋土内から実測土器 2 点を含む 28 点の土器片が出土している。石器の出土はない。

土器 (第67図 1~7、PL-130)

1 は無文で研磨された器面に沈線による文様をもつ。2 は口縁端部を肥厚させた複合口縁に

し、器面に原体LR縦回転による単節の斜行縄文である。3は原体RL横回転による単節斜行縄文を付した後沈線で区画し、縄文を磨消する。4・5は縄文のみを付す粗製土器で、6も捺糸文を付す以外は4・5と同様である。7は無文である。

以上のことから1は第IV群4類、2は第IX群7類、3～6は第IX群、7は第VIII群に相当する。

〔遺構の時期〕

出土した土器の中で時期の明確な1～3はいずれも後期初葉の特徴を示すことから、本土坑は後期初葉に位置づけられるであろう。

(2) III a 17土坑

〔遺 構〕 (第68図、P L-34)

III a 4土坑の南約50m、グリッドIII a 17に位置し、A区北部遺構群の中では最南にあり、北面する緩斜面に立地している。

開口部径1 m×95 cm、底部径80cm×70cmの規模をもち、平面形は円形である。深さは最も深い南壁で14cmと浅く、断面形は壁が底面に対して約170度外傾する浅皿形を示す。底面には凹凸もなくほぼ平坦であるが、北壁寄りが10cmほど低くなっている。

埋土は粘性が強く、基本層序V層の地山粘土がブロック状に混入する黒色シルトの単層である。堆積状況を見ると、埋土が薄く単層であるため明確なことは定かでないが、地山粒の混入等から推定すると、人為的に一気に埋め戻されている可能性が強く、時代的にも新しいかも知れない。

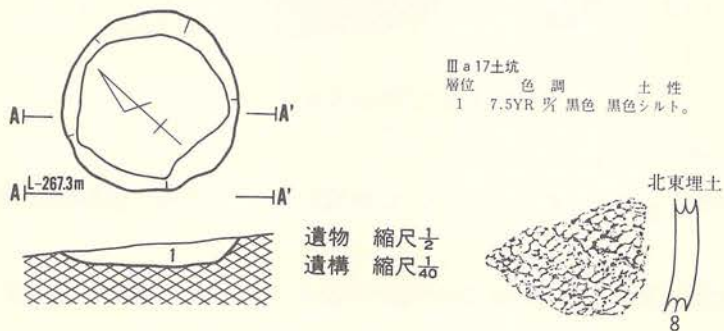
(Na)

〔遺 物〕

埋土内から土器片が1点出土している。

土 器 (第68図8、P L-130)

器面に原体LR縦回転による単節斜行縄文を付す粗製土器の破片である。第IX群に属する。



第68図 (2) III a 17土坑

〔遺構の時期〕

縄文土器が出土しているものの、遺構埋土の項で記したとおり、新しい時期（近・現代）の土坑である可能性が大きい。

(3) III b 11土坑

〔遺 構〕 (第69図、P L-34)

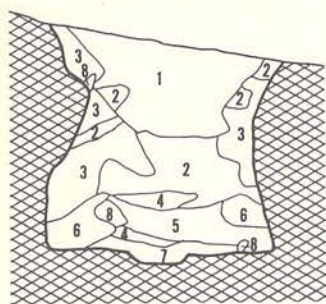
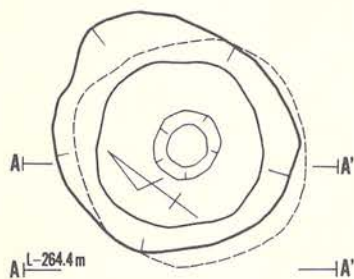
北端遺構群のほぼ中央西よりのグリッドIII b 11に位置し、III c 11土坑の西3 mの北面する緩斜面に立地する。他の遺構との重複はない。

開口部径1.38m×1.2m、底部径1.3m×1.2mの規模をもち、最も深い南東壁で1.24mの深さをもち円形を示す土坑である。壁は底面に対して77度内傾し、断面形は底面の上位70cmに径94cm×90cmの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位壁面は外傾している。底面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、ほぼ中央に径38cm×30cm、深さ17cmの副穴があり、全体が5 cm位の比高で北～北西に軽く傾斜している。

埋土は、黒色・黒褐色・極暗褐色・橙色のシルトが堆積し、8層に細分される。3層と6層には僅かの炭化物が混じり、7層は多量の基本層序第V層粒や砂・浮石が混入する。全体的に軟弱でしまりがなく、粘性は下位層ほど強い。

埋土の堆積状況を見ると、壁際には壁の崩落と考えられる地山粒の混入が多いことや、上位層には黒色土系の堆積が多いことから、自然堆積で埋没した土坑であろう。 (N a)

〔遺 物〕



III b 11土坑

層位	色 調	土 性
1	7.5YR 7/1 黒色	シルト。砂粒と浮石粒含む。
2	7.5YR 7/2 黒褐色	＊。基本層序V層。
3	7.5YR 7/3 極暗褐色	＊。炭化物含む。
4	7.5YR 7/4 黒色	＊。浮石粒含む。
5	7.5YR 7/5 黒褐色	＊。地山粒・浮石粒含む。
6	7.5YR 7/6 褐色	地山シルト。炭化物含む。
7	7.5YR 7/7 黒色	シルト。地山粒・砂粒・浮石粒含む。
8	7.5YR 7/8 橙色	粘土質シルト。浮石粒・凝灰岩粒含む。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第69図 (3)III b 11土坑

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので明確でないが、形状からみて縄文時代の遺構であろう。

(4) III b 13土坑

〔遺 構〕 (第70図、P L-35)

北端部遺構群中央やや南寄りのグリッドIII b 13に位置し、III b 11土坑の南8 mで北西向き緩斜面に立地する。重複する遺構はない。

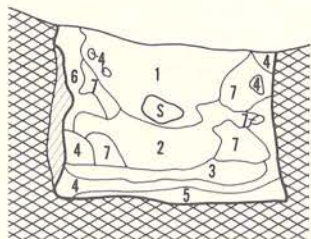
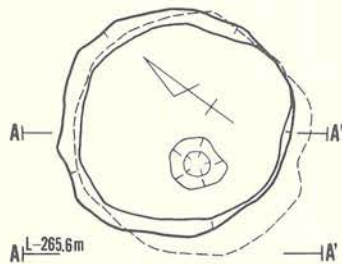
開口部径1.26m×1.26m、底部径1.3m×1.2mの規模をもち、最も深い南東壁で89cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は床面に対して75度内傾し、断面形は底面の上位60cmに径1.08m×1.08mの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は僅かに外傾する。底面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、中央南寄りに径30cm×30cm、深さ15cmの副穴があり、全体が12cmの比高で北西に傾斜している。埋土は黒色・黒褐色・褐色のシルトを主体として堆積し、7層に細分される。4層は基本層序第V層相当の粘性の強い土であり、1層には浮石粒と焼土粒が混入している。全体的には、4・6層の壁崩落土、外部から流入した黒色土系と両者の混合土に3大別して考えることができる。

堆積状況を観察すると、全体が広義のレンズ状堆積を示すことから、自然堆積で埋没した土坑と考えることができる。

〔遺 物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕



III b 13土坑

層位	色 調	土 性
1	7.5YR 7/2 黒色	シルト。浮石粒・焼土粒含む。
2	7.5YR 7/2 黒褐色	〃
3	7.5YR 7/2 漆黒色	〃
4	7.5YR 7/2 褐色	基本層序V層。
5	7.5YR 7/2 漆黒色	3層と同様。
6	7.5YR 7/2 褐色	シルト。黒色土粒混入。基本層序V層。
7	7.5YR 7/2 黒褐色	〃。浮石粒・焼土粒含む。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第70図 (4)III b 13土坑

遺物が出土していないので断定できないが、形状から判断して縄文時代の土坑であろう。

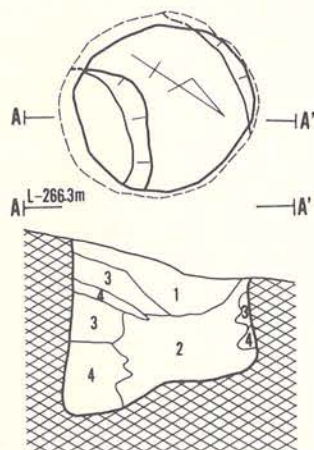
(5) III b 14土坑

〔遺構〕 (第71図、P L-35)

北端部遺構群の南端に近いグリッドIII b 14・15にまたがって位置し、III b 13土坑の南約5 mで北西緩斜面部に立地している。重複する遺構はない。

開口部90cm×85cm、底部径1.05m×95 cmの規模をもち、深さが最も深い南東壁で90cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して約75度内傾し、断面形は底面の上位50cmに径85cm×85cmの頸部をもつフラスコ形である。底面に凹凸はないが、南東壁際が長軸を北東-南西にもつ90cm×45cmの楕円形状に、北西部の底面より35cmほど低くなっている。

埋土は黒色・黒褐色・極暗褐色・橙色のシルトで構成され、4層に細分されている。1・2層は黒色土系のシルト、3・4層は壁の崩落による地山土の堆積層である。黄色や橙色の浮石が混入し、いずれの層にも粘性があり、良くしまっている。堆積状況を観察すると、レンズ状の堆積が観察されることから、自然堆積で埋没した土坑であろう。 (Na)



III b 14土坑

層位	色調	土性
1	7.5YR 灰黒色	シルト。浮石粒含む。
2	7.5YR 灰黒褐色	〃
3	7.5YR 灰極暗褐色	基本層序V層。
4	7.5YR 灰橙色	〃

縮尺 $\frac{1}{40}$

第71図 (5)III b 14土坑

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を確定できる遺物の出土はないが、断面形がフラスコ形であることや埋土の堆積状況から考えて、縄文時代の土坑であろう。

(6) III c 7 土坑

〔遺構〕 (第72図、P L-35)

北東部崖縁の南西7mのグリッドIII c 7・III c 8にまたがって位置し、III e 8 陥し穴状遺構の北西7mで、北端部遺構群としては北端に近い北西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1m×1m、底部径1.2m×1.2mの規模をもち、最も深い東壁で95cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して約80度内傾し、断面形は床面上位に径85cm×85cmの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外傾する。底面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、北東部が5cmの比高で低くなる。底面中央のやや南西寄りには規模が45cm×40cmの円形で、深さが12cmの副穴がある。また、底面中央やや東寄りの床底で、副穴の東部分を約 $\frac{1}{2}$ を塞ぐように2個の大形円礫が出土した。1個は40cm×30cm、厚さ26cmの大きさで、別の1個は20cm×15cm、厚さ12cmの大きさがあり、前記した礫の西側に一部潜っている。

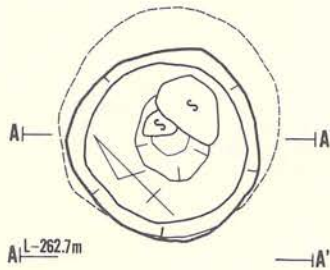
埋土は黒色、黒褐色、暗褐色、褐色のシルトで構成され、10層に細分される。いずれも浮石を混入し、全体的に粘性がない。

堆積状況から判断して、自然堆積によって埋設した土坑であろう。

(Na)

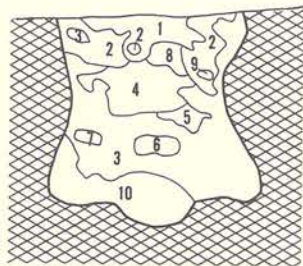
〔遺物〕

埋土内から土器片が3点出土したが、石器は出土していない。



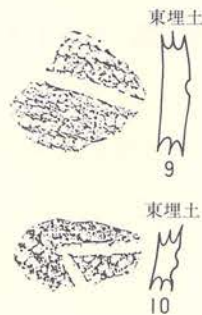
A1-262.7m

遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



III c 7 土坑

層位	色	調	土性
1	7.5YR	矽	黒色 浮石含む。
2	7.5YR	矽	黒褐色 〃
3	10 YR	矽	暗褐色 〃
4	7.5YR	矽	黒褐色 〃
5	10 YR	矽	粘性なし。
6	10 YR	矽	褐色 浮石含む。
7	10 YR	矽	粘性なし。
8	10 YR	矽	黒褐色 浮石含む。
9	10 YR	矽	暗褐色 〃
10	10 YR	矽	〃 〃



第72図 (6)III c 7 土坑

土 器 (第72図9~11、P L-130)

9~11はともに同じ特徴を示す破片で、原体R L横回転による単節の斜行縄文を付した後、沈線で施文される。

以上のことから、第IV群2類に属する土器であろう。

[遺構の時期]

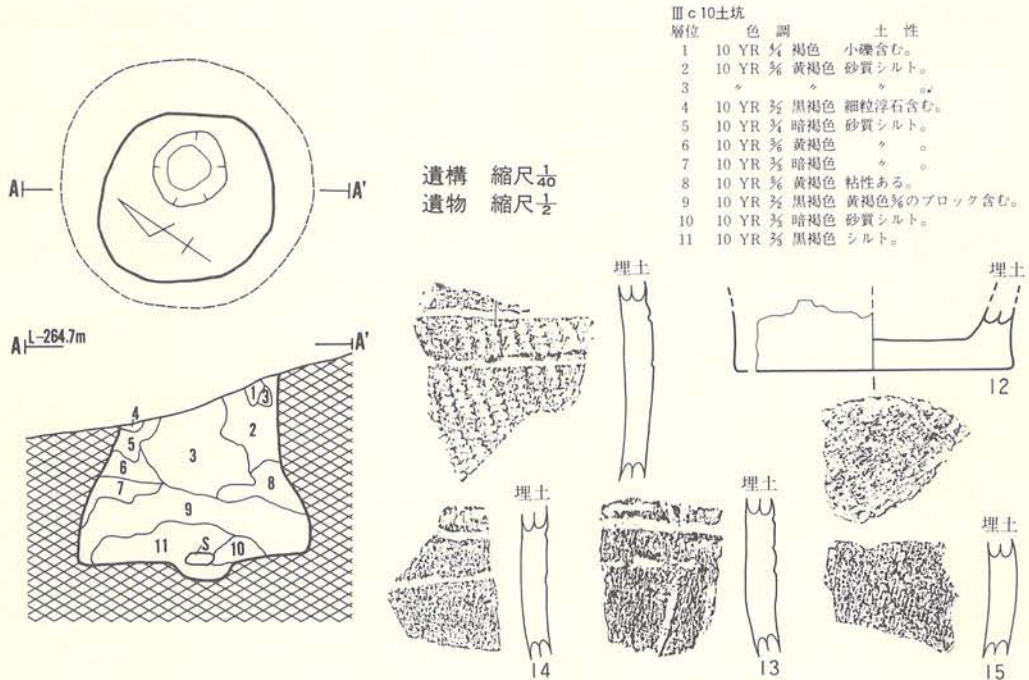
9~11の土器は後期初葉に位置づけられることから、本土坑も後期初葉に属するであろう。

(7) III c 10土坑

[遺 構] (第73図、P L-36)

北端部遺構群のほぼ中央グリッドIII c 10に位置し、III d 9 陥し穴状遺構の西4 mで北西向き
の緩斜面に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1 m×90 cm、底部径1.35m×1.35mの規模をもち、最も深い南東壁で1 mの深さを
もつ円形の土坑である。壁は底面に対して約70度内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形
である。底面には凹凸もなくほとんど平坦でほぼ水平状態に近い。底面中央やや東寄りに40cm×
38cmの規模で、深さが12cmの円形を示す副穴がある。



第73図 (7)III c 10土坑

埋土は褐色、黄褐色、暗褐色のシルトが堆積し、11層に細分される。全体的に砂質気味で比較的しまりが良く粘性をもつ。

堆積状況を観察すると、下位層の9～11層に黒色土系、上位の2・3層は地山の基本層序第V層起源の黄褐色土系が堆積しており、自然状態で埋没したとするには不自然な部分もあり、上位層は人為的な堆積を示している可能性がある。

〔遺物〕

埋土内から7点の土器片が出土しているが、石器の出土はない。

土器 (第73図12～16、PL-130)

12は笹の葉と推定される木葉痕の付された底部破片である。13・14は同個体の破片と推定されるが、無文の器面に沈線による文様をもつ。15は原体LR縦回転による縄文が付された後、沈線による文様を付す。16は無文土器である。

以上から、13・14は第IV群4類、15は第IV群2類、16は第VIII群土器に相当する。

石器

出土していない。

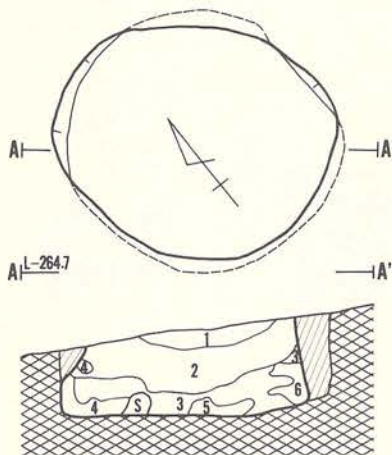
〔遺構の時期〕

出土した土器の中で、時期が明確なのは13～15であるが、3点とも後期初葉に位置づけられることから、本土坑も後期初葉と考えることができる。

(8) III c 11土坑

〔遺構〕 (第74図、PL-36)

北端部遺構群の中央やや南のグリッドIII c 11に位置し、III b 11土坑の約3 m 東方で北西向きの緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。



III c 11土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 3/ 黒褐色	やや硬く、粘性ある。
2	10 YR 3/ 〃	細粒浮石含む。
3	10 YR 3/ 〃	やや硬く、粘性ある。
4	10 YR 5/ 黄褐色	〃
5	10 YR 3/ 黒褐色	やや硬く、浮石含む。
6	10 YR 5/ 黄褐色	硬く、粘性ある。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第74図 (8) III c 11土坑

開口部径1.4m×1.25m、底部径1.45m×1.35mの規模をもち、最も深い南東壁で51cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して約80度の角度で外傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面にはほとんど凹凸がなくほぼ平坦であるが、北西部が10cmの比高で低くなる。

埋土は黒褐色・黄褐色のシルトで構成され、6層に細分されている。1層と5層には浮石、3・6層には黄褐色や褐色の地山を起源とする土がブロックで混入する。全体的に良くしまり、粘性をもつ。堆積状況を観察すると、レンズ状の堆積を示すことから、自然堆積によって埋没した土坑とすることができよう。(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、形状や埋土の堆積状況から考えて、縄文時代の土坑であろう。

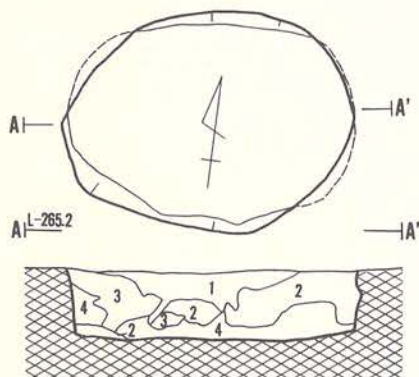
(9) III c 12土坑-1

〔遺構〕 (第75図、PL-36)

北端部遺構群中央の南寄りグリッドIII c 12に位置し、III c 11土坑の南方4mで北西向きの緩斜面に立地している。他の遺構との重複関係はない。

開口部径1.55m×1.15m、底部径1.55m×1.05mの規模をもち、最も深い南東壁で40cmの深さをもつ楕円形の土坑である。壁は底面に対して105度外傾し、断面形は浅いビーカー形である。底面には凹凸もなく、平坦でほぼ水平に近い。

埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色の浮石や砂粒の混入したシルトで、4層に細分される。1層には浮石の混入が多く、4層は基本層序第V層起源の地山粒が多く含まれる。全体的にみ



III c 12土坑-1		土性	
層位	色調		
1	7.5YR 8/ 黒色	シルト	砂・浮石粒含む。
2	7.5YR 8/ 黒褐色	〃	〃
3	7.5YR 8/ 暗褐色	〃	〃
4	7.5YR 8/ 褐色	〃	基本層序V層。

第75図 (9)III c 12土坑

ると上位層ほど黒味が強く、下位層ほど地山粒の混入が多い。

以上から、本土坑は自然堆積で埋没した土坑と考えることができる。

(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かでないが、形状や埋土の状況から判断して縄文時代の土坑と考えられる。

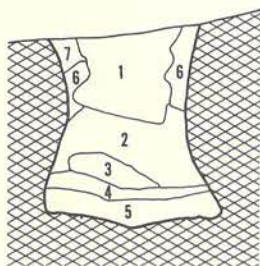
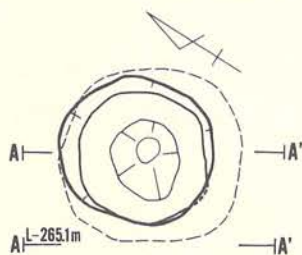
(10) III c 12土坑-2

〔遺構〕 (第76図、P L-37)

北端部遺構群の中央やや南寄りグリッドIII c 12に位置し、III c 12土坑-1の西2 mで北西向きの緩斜面に立地している。重複する遺構はない。

開口部径80cm×80cm、底部径1 m×1 mの規模をもち、最も深い南東壁で1.04mの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して60度で内傾し、断面形は底面の上位50cmに径70cm×70cmの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外傾する。底面に凹凸もなくほぼ平坦であるが、南東部が5 cmの比高で低くなっている。底面の中央やや西寄りに径40cm×40cm、深さ10cmの円形を示す副穴がある。

埋土は黒褐色、極暗褐色、褐色のシルトや砂質シルトが堆積し、7層に細分される。1層から5層は浮石粒や腐植土を混入する褐色や極暗褐色のシルトで、6・7層は壁からの崩落と推定される地山起源の粘土層である。



縮尺 $\frac{1}{50}$

III c 12土坑-2

層位	色調	土性
1	7.5YR 7/2 黒褐色	シルト。砂粒・浮石粒混入。
2	7.5YR 7/3 極暗褐色	〃。地山粒の混入。
3	7.5YR 7/4 暗褐色	〃。砂粒と浮石粒・地山粒の混入。
4	7.5YR 7/5 黒褐色	〃。腐植混じりの土・浮石粒の混入。
5	7.5YR 7/6 〃	砂質シルト。浮石粒・地山粒の混入。
6	7.5YR 7/7 褐色	〃。地山粒の混入。
7	7.5YR 8/6 橙色	基本層序V層。

第76図 (10)III c 12土坑-2

4層と5層が平面的な堆積を示していることに疑問を感じるが、概ね自然堆積で埋没した土坑であろう。(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かでないが、形状や埋土の状況から考えて縄文時代の土坑であろう。

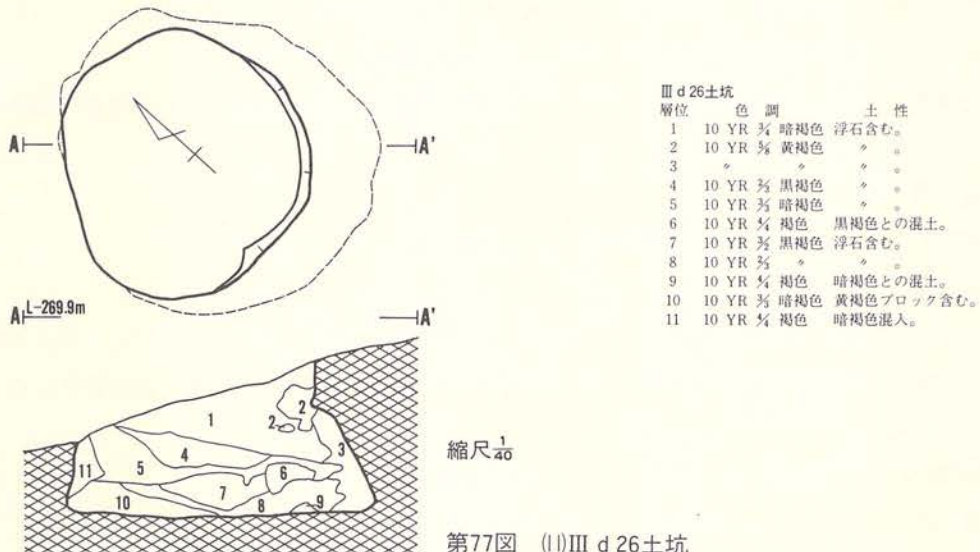
(11) III d 26土坑

〔遺構〕 (第77図、P L-37)

南部遺構群の中では最も西方にありグリッドIII d 26、III e 26にまたがって位置する。北端部遺構の最も南にあるIII a 17土坑から南々東へ約40mあり、北西向き斜面の上位に立地し、重複遺構はない。

開口部径1.4m×1.4m、底部径1.7m×1.6mの規模をもち、最も深い南壁で87cmの深さをもつ若干歪んだ円形の土坑である。壁は底面に対して62度で内傾し、底部の上位60cmの東壁～南壁に径1.4m×1.3mの頸部をもち、本来の断面形は頸部をもつフラスコ形であろう。なお、頸部から上位は直立する。底面には凹凸もなく平坦であるが、南壁が5cm位の比高で低くなっている。また、立地する地形が傾斜地であるため、西壁の深さが44cmと浅く、崩落によって壁面の内傾も弱い。

埋土は暗褐色・黄褐色・黒褐色・褐色のシルトが堆積し、12層に細分されている。ほとんどの土層に浮石の混入があるものの、1層には特に多い。6・9・11層は黒褐色や暗褐色が多く



第77図 (11) III d 26土坑

混入している。9・12層以外には若干しまりがあり、粘性はない。

土層図で堆積状況を観察すると、4層以下の堆積状況は斜面下位から流入したことを示しており、3層と11層を壁の崩落とすればほぼ自然堆積と理解できる。最終の埋土である1層は一気に堆積した様相を示している。このことから、本土坑は廃絶した当初は自然堆積による埋没であろうが、最終的には人為的に埋め戻されていると考えられる。(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物が出土していないので明確ではないが、形状や埋土の状況から縄文時代に属するであろう。

(12) III e 25土坑-1

〔遺構〕 (第78図、PL-37)

南部遺構群の中では西端寄りのグリッドIII e 25に位置し、III d 26土坑の北3mで北西向斜面上に立地している。他の遺構との重複はないが、北壁部分は崩落によって不明である。

開口部約1m×1m、底部径1.5m×1.5mの規模をもち、最も深い南東壁で83cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して60度内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。北西壁は斜面下位に位置するため壁高が55cmと低く、頸部をもつような形状であるが、他方向の壁に頸部が観察されないので、本来頸部をもたないものと断定した。底面にはほとんど凹凸がなく平坦でほぼ水平である。

埋土は黒褐色、暗褐色、褐色の浮石粒が混入したシルトが堆積し、10層に細分されている。7層に少量の炭化物が混入する以外は、どの層も基本的に同じである。

土層図で堆積状況を観察すると、レンズ状の堆積を示していることから、自然堆積で埋没した土坑と考えることができよう。(Na)

〔遺物〕

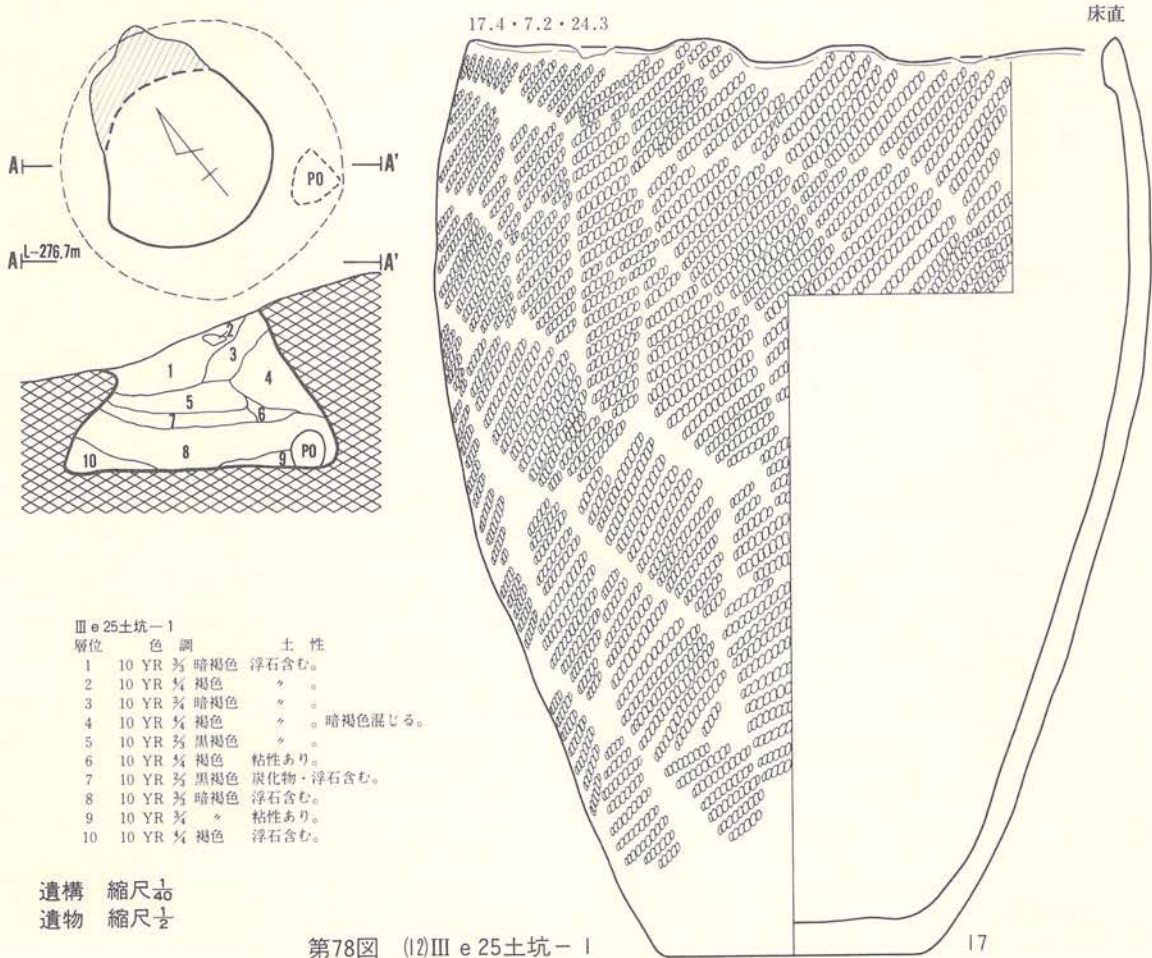
南東壁際の底面直上から、完形の深鉢が1点横転して出土した。

土器 (第78図17、PL-130)

17は口縁部径17.4cm、底部径7.2cm、器高24.3cmの深鉢で、器表に原体LR横回転による単節の斜行縄文だけを付す粗製土器である。最大径を体部上位にもち、口縁端部内側を肥厚させ、1か所に丸形の突起をもつ波状口縁である。

第IX群に属する土器である。

石器



出土していない。

〔遺構の時期〕

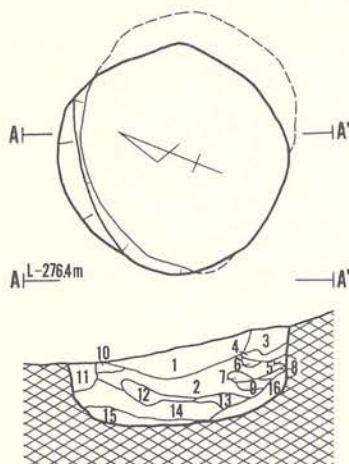
土器の口縁端部内側を肥厚させるのは後期後半に多用される技法であることから、本土坑も後期後半に位置づけられるであろう。

(13) III e 25土坑-2

〔遺構〕 (第79図、P L-38)

南部遺構群の西寄りIII e 25グリッドに位置し、III e 25土坑-1の北方1 mで北西向き斜面に立地する。重複する遺構はない。

開口部径1.2m×1.15m、底部径1.3m×1.15mの規模をもち、最も深い南東壁で46cmの深さを



III e 25土坑-2

層位	色調	土性
1	10 YR 2/6 暗褐色	浮石含む。
2	10 YR 2/6 *	* * *
3	10 YR 2/6 褐色	* * * 暗褐色が混入。
4	* * *	粘性なし。
5	10 YR 2/6 黄褐色	* * *
6	10 YR 2/6 褐色	浮石含む。
7	10 YR 2/6 黒褐色	* * *
8	10 YR 2/6 褐色	やや粘性あり。
9	10 YR 2/6 暗褐色	浮石含む。
10	10 YR 2/6 黒褐色	* * *
11	10 YR 2/6 褐色	* * *
12	* * *	炭化物・浮石含む。
13	10 YR 2/6 黄褐色	浮石含む。
14	10 YR 2/6 褐色	* * * 黄褐色が混入。
15	10 YR 2/6 黄褐色	* * *
16	10 YR 2/6 に近い黄褐色	* * *

第79図 (13)III e 25土坑-2

もつ若干歪んだ円形の土坑である。壁は東壁が約60度内傾し、西壁では120度外傾しているが、西～北西側は斜面下位に位置するため壁が崩落したことによると考えられ、本来は浅いフラスコ形を示すものであろう。底面に凹凸はないが、中央部が最も低く、壁に寄るほど高くなり丸味をもって壁に接続している。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色等の浮石が混入したシルトで構成され、16層に細分されている。12層には炭化物が少量混入し、3・14層には地山起源の黄褐色シルトが混じる。全体的に各層が薄層で堆積する特徴があり、さらに地山起源の黄褐色シルトの堆積も多いことから考えると、人為的に埋め戻されている可能性が強い。(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

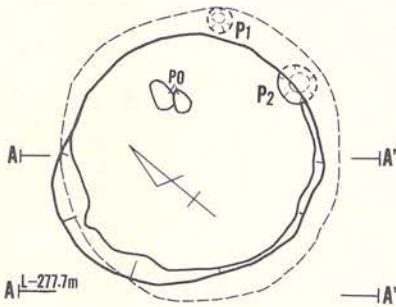
遺物の出土がないので定かでないが、形状と埋土の状況から考えて、縄文時代に属すると推定される。

(14) III e 26土坑-1

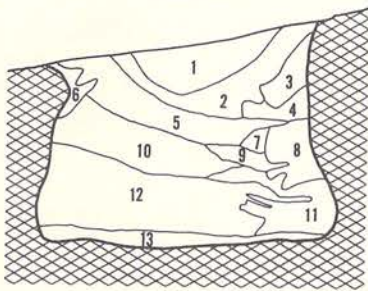
〔遺構〕 (第80図、PL-38)

南部遺構群西端寄りのグリッドIII e 26・III e 27にまたがって位置し、III d 26土坑の南東3mで北西向き斜面に立地する。重複する遺構はない。

開口部径1.4m×1.35m、底部径1.55m×1.55mの規模をもち、最も深い南東壁で1.15mの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して70度～80度内傾し、断面形は底面の上位80cmに径



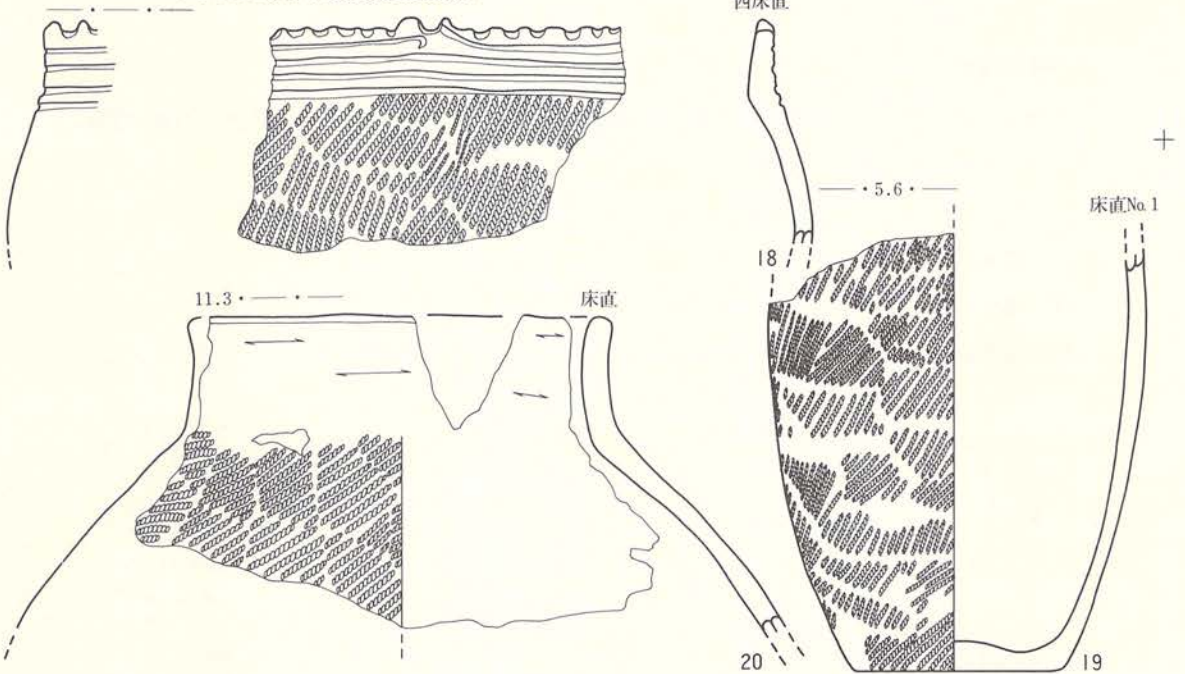
A-A' 1.3m



III e 26土坑-1

層位	色調	土性
1	10 YR 5/1 黒褐色	浮石含む。
2	10 YR 5/1 *	*
3	10 YR 5/1 暗褐色	褐色土と混土。
4	10 YR 5/1 褐色	細粒浮石含む。暗褐色との混土。
5	10 YR 5/1 暗褐色	浮石含む。
6	10 YR 5/1 褐色	*
7	*	暗褐色との混土。
8	10 YR 5/1 黄褐色	浮石含む。
9	10 YR 5/1 黒褐色	*
10	10 YR 5/1 暗褐色	粘性なし。
11	10 YR 5/1 褐色	浮石含む。
12	10 YR 5/1 暗褐色	*
13	10 YR 5/1 *	*

遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



第80図 (I4) III e 26土坑-1

1.3m×1.3mの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外傾する。底面には凹凸もなくほぼ平坦で水平状態に近い。東壁際の底面にはP₁（径15cm×15cm、深さ5cm）、P₂（径20cm×20cm、深さ6cm）の副穴が55cmの間隔である。

埋土は黒褐色、暗褐色、褐色、黄褐色のシルトや基本層序第V層起源の地山土等が堆積し、13層に細分される。いずれの層にも浮石を混入し、しまりがあるが粘性はない。堆積状況を観察すると、ほぼレンズ状堆積と理解されるので、自然堆積で埋没した土坑であろう。(Na)

〔遺物〕

床面直上から実測可能な土器3点と、埋土内から21点の破片が出土している。

土器 (第80図18~20、PL-130)

18は西部床面、19・20は北東部床面からの出土である。18は頸部に並行沈線を引き、口唇部を丸棒側面押圧による刻みを付す。体部上位に最大径をもって頸部で窄み、口縁部はほぼ直立する。器面には原体LR横回転による単節の斜行縄文を付す。19は体部上位から口縁部を欠失するが、器表に原体LR横回転による単節の斜行縄文をもつ土器である。20は口縁部を無文とし体部に原体LR横回転による単節斜行縄文を付した壺である。

以上のことから、18は第VII群3類、19・20は第IX群に相当する。

石器

出土していない。

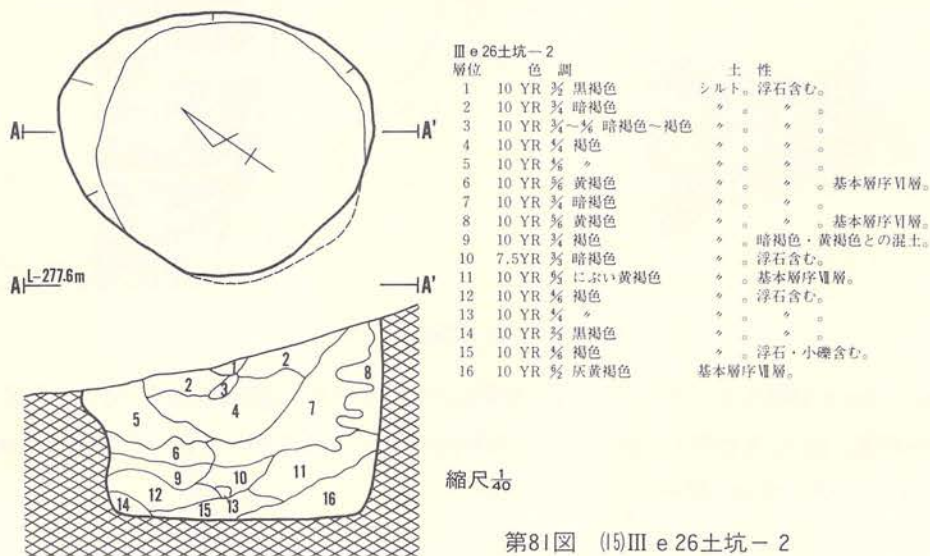
〔遺構の時期〕

底面直上から出土した18の土器は晩期中葉に位置づけられることから、本土坑も晩期中葉に属するであろう。

(15) III e 26土坑-2

〔遺構〕 (第81図、PL-38)

南部遺構群西端に近いグリッドIII e 26・III f 26にまたがって位置し、III e 26土坑-1の北3



第81図 (15)III e 26土坑-2

m で北西向き斜面に立地する。重複する遺構はない。

開口部径1.7m×1.4m、底部1.4m×1.4mの規模をもち、最も深い南東壁が1.05mの深さをもつ円形の土坑である。北部の壁に若干崩落があるものの、底面に対して直角か100度位で外傾しており、断面形はピーカー形である。底面に全く凹凸がなく、平坦で水平状態に近い。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色・黄橙色・灰黄褐色等のシルトや地山起源の土が堆積し、16層に細分されている。6層と8層は壁の崩落による基本層序第VI層相当のシラスに近い土であるし、16層も壁の崩れによる基本層序第VI層の土である。また、3～5・7・9層は暗褐色や黄褐色のシルトや基本層序第V層粒が多く入っている。全体的に浮石粒を多く含み、良くしまっているが、粘性はほとんどない。

堆積状況を土層図で観察すると、7・11・15・16層は斜面上位から流れ込んだことを示し、壁際に堆積する地山起源の土を意識すれば、自然堆積で埋没した土坑と考えることができよう。

(N a)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

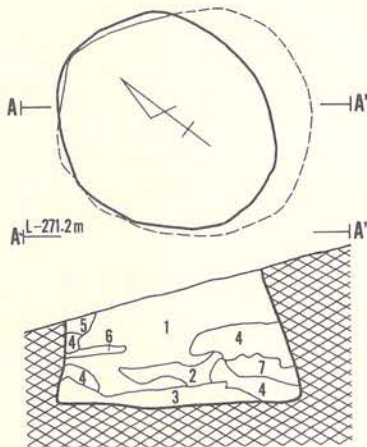
遺物が出土していないので定かでないが、形状や埋土の状況から考えて、縄文時代に属する土坑であろう。

(16) III f 19土坑

〔遺構〕 (第82図、P L-39)

北端部遺構と南部遺構群のほぼ中間グリッドIII f 19に位置し、北西向きに緩斜面に立地する。重複する遺構はない。

開口部径1.15m×1.15m、底部径1.35m×1.25mの規模をもち、最も深い南東壁で65cmの深さ



層位	色調	土性
1	7.5YR 弱 黒褐色	シルト。浮石粒の混入あり。
2	7.5YR 弱 黒色	浮石粒の混入なし。
3	7.5YR 弱	地山粒の混入あり。
4	7.5YR 弱 暗褐色	基本層序V層。
5	7.5YR 弱 極暗褐色	浮石粒の混入あり。
6	弱	5層と同じ。
7	7.5YR 弱 黒褐色	1層と同じ。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第82図 (16)III f 19土坑

をもつ円形の土坑である。壁は底面に対して70度内傾し、断面形はフラスコ形である。なお、西壁から北壁は崩落したと推定され、底面に対してほぼ直角である。底面には凹凸もなくほぼ平坦であるが、南壁に向って5 cmの比高で傾斜している。

埋土は黒褐色・黒色・暗褐色・極暗褐色のシルトが堆積し、7層に細分されている。1・2・5層には浮石粒が混入し、良くしまり粘性ははない。自然堆積で埋没した土坑であろう。

(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので明確でないが、形状や埋土から縄文時代の遺構であろう。

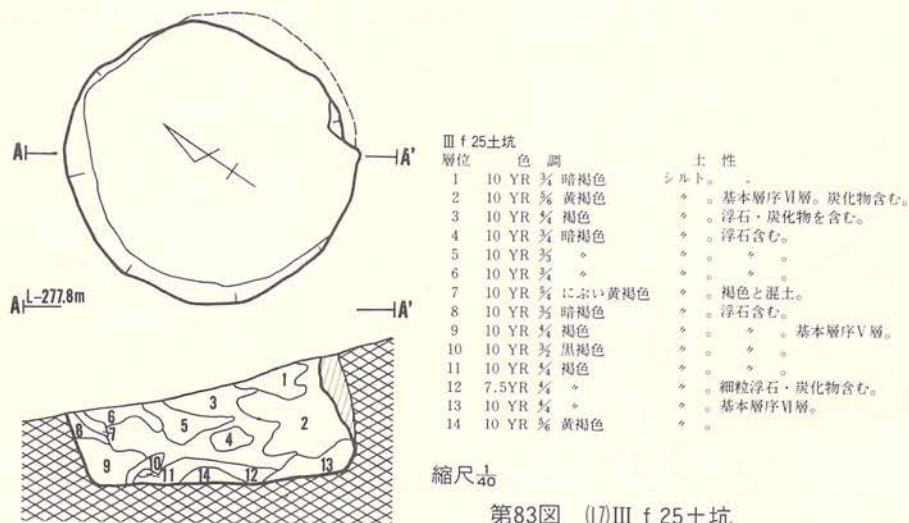
(17) III f 25土坑

〔遺構〕 (第83図、P L-39)

南部遺構群の中央西寄りのグリッドIII f 25・III f 26にまたがって位置し、III e 26土坑-2の北東2 mで北西向きの斜面に立地する。他の遺構との重複はない。

開口部径1.5m×1.4m、底部径1.5m×1.45mの規模をもち、最も深い南東壁で74cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して70度で内傾し、断面形は底面の55cm上位に頸部をもつフラスコ形であるが、北壁、西壁、南壁は崩落したものと考えられ、底面に対して直角(南壁・北壁)や120度外傾(西壁)している。底面には凹凸もほとんどなく平坦であるが、北に向って5 cmの比高で低くなっている。

埋土は暗褐色・褐色・黄褐色・にぶい黄褐色のシルトが堆積し、14層に細分される。9層は壁の崩落と考えられる基本層序第V層相当の土で、2・13層には基本層序第VI層がブロック状



第83図 (17)III f 25土坑

で混入している。いずれの層にも浮石が混じり、2層だけに炭化物が含まれる。全体的に若干しまりがあるものの、粘性はない。

堆積状況を土層図で観察すると、壁際には壁の崩落によると推定される地山起源の土が多く、中央部に黒色土系の土が堆積することから、自然堆積で埋没したことを示すものであろう。

(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かでないが、形状や埋土から考えて縄文時代の土坑であろう。

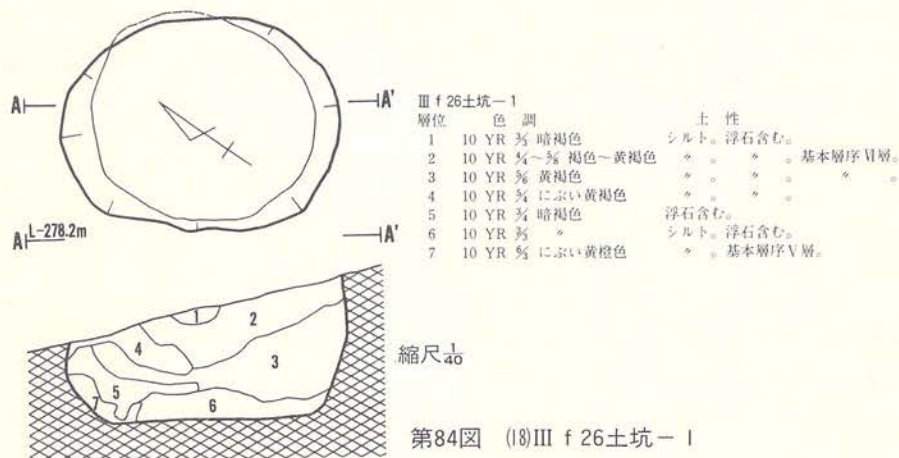
(18) III f 26土坑-1

〔遺構〕 (第84図、P L-39)

南部遺構群の中央西寄りグリッドIII f 26に位置し、III f 25土坑の南2mで北西向きの斜面に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.5m×1.15m、底部径1.2m×1.1mの規模をもち、最も深い南東壁で75cmの深さをもつが、平面形が開口部では楕円形、底部では円形であるものの、底部形が本来の形とすれば、開口部も円形であろう。壁は底面に対して内傾するのは北西部の一部だけで、他はいずれも100度から120度外傾し、断面形はピーカー形に近い。底面には凹凸もなくほぼ平坦で水平状態に近いが、壁際は次第に高くなり、丸味をもって壁と接続する。

埋土は暗褐色・褐色・黄褐色・黄橙色・にぶい黄褐色のシルトが堆積し、7層に細分されている。全体的に地山起源の埋土が多く、黒色土系に近いのは1・5・6層のみである。2・3層は基本層序第V層起源、7層は同VI層起源である。全層に浮石が混入し、3層には炭化物が混じる。いずれも良くしまり、粘性はない。



この土坑の埋土は地山起源の土が多く堆積していることから、人為的に埋め戻された可能性が強い。(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので明確ではないが、形状や埋土から縄文時代の土坑であろう。

(19) III f 26土坑-2 (旧III f 27土坑)

〔遺構〕 (第85図、P L-40)

南部遺構群の西寄りグリッドIII f 26・III f 27にまたがって位置し、III f 26土坑-1の南1.5mで北西向きの斜面に立地する。重複する遺構はない。

開口部径1.3m×1.1m、底部径1.5m×1.45mの規模をもち、最も深い南東で92cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は位置によって若干差はあるが55度～60度内傾し、断面形は底面の50cm上位に1.15m×1mの頸部をもつフラスコ形である。底面には凹凸もなくほぼ平坦で水平に近い。南西部の底面には径35cm×35cm、深さ3cmの規模をもつ副穴がある。

埋土は暗褐色・褐色・にぶい黄褐色のシルトが堆積し、10層に細分されている。いずれの層にも浮石が混入し、2・8・9層には炭化物が混じる。全体的にしまりが良く、粘性はない。土層図で埋土の堆積状況を観察すると、9・10層は斜面下位から一気に流入し、7層が堆積した後はレンズ状に堆積している。2・3・5・7層は地山起源の土である。以上のことから、本土坑は人為的に埋め戻された可能性をもっている。(Na)

〔遺物〕

南壁寄りの底面から15cm上位の埋土内から完形土器が1点と、埋土内から36点の土器片が出土している。

土器 (第85図21・22、P L-130)

21は底面直上15cmから出土した完形土器で、器表に原体LR横回転による単節の斜行縄文を付す。体部上位に最大径をもち、口縁部で窄み、小起伏する波状口縁である。22は器表に原体LR斜回転による単節の縦行縄文を付し、口縁を波状とする。

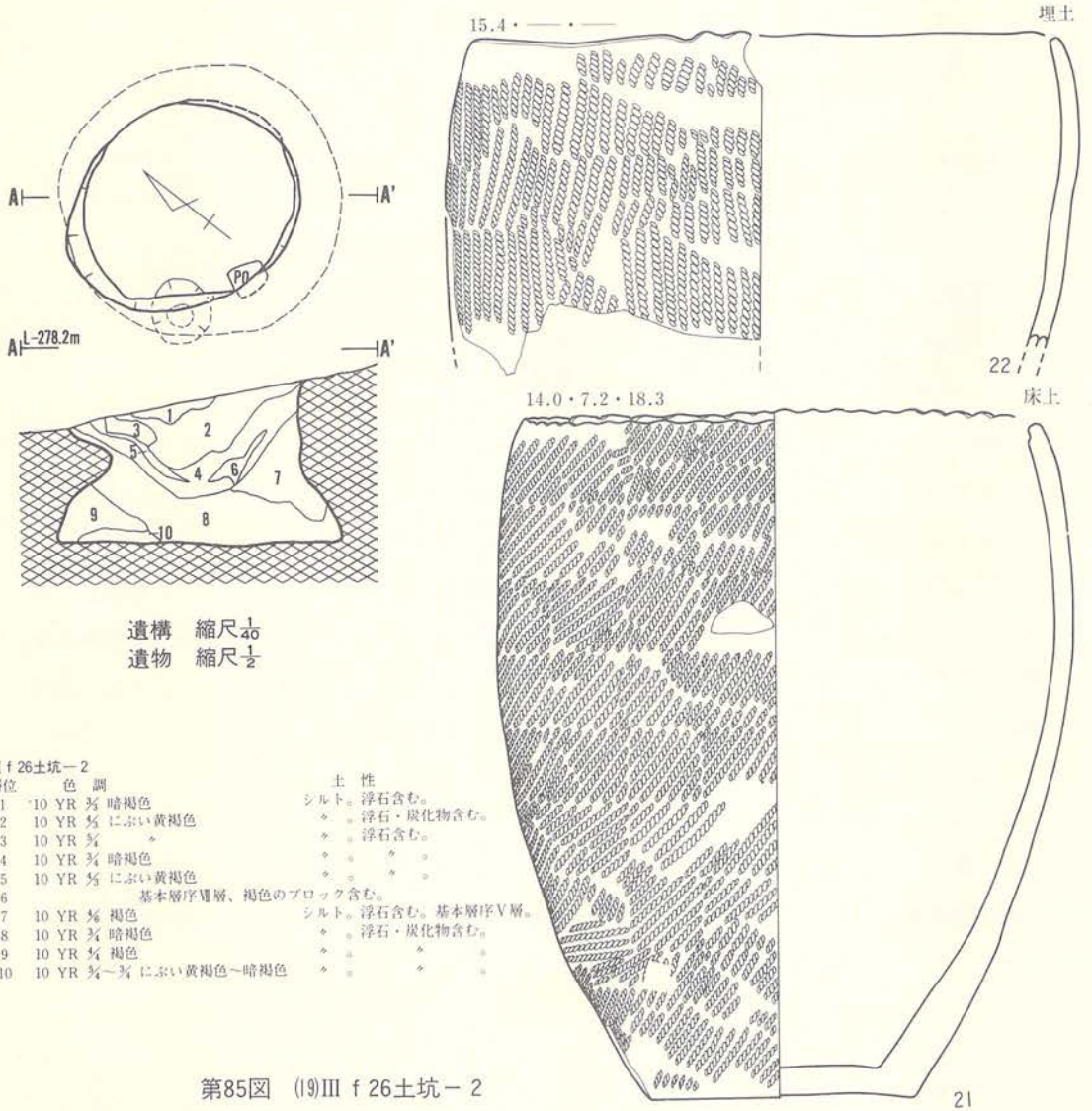
以上のことから、21・22ともに第IX群に相当する土器である。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

21は晩期前葉の特徴をもつことから、本土坑も晩期前葉に属するであろう。

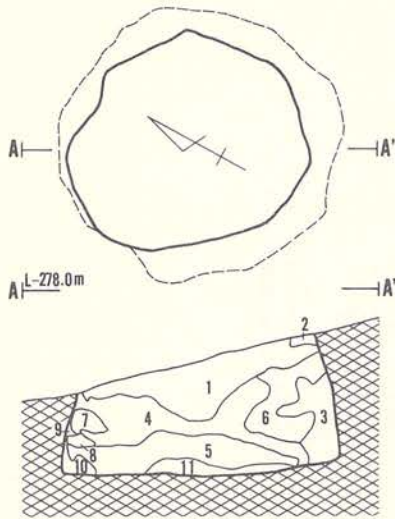


(20) III g 25土坑

〔遺構〕 (第86図、P L-40)

南部遺構群中央のやや北西寄りグリッド III g 25 に位置し、III f 25 土坑の北東 3 m で北西向き斜面に立地する。他の遺構との重複はない。

開口部径 1.25m × 1.1m、底部径 1.5m × 1.45m の規模をもち、最も深い南東で 63cm の深さをも



II g 25土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 7/5 黒褐色	浮石含む。
2	10 YR 7/5 暗褐色	粘性なし。
3	10 YR 7/5 褐色	浮石含む。
4	10 YR 7/5 黒褐色	浮石・炭化物含む。
5	10 YR 7/5 *	浮石含む。
6	10 YR 7/5 暗褐色	黄褐色10YR 7/5 と混ぜ土。
7	10 YR 7/5 黒褐色	浮石含む。
8	10 YR 7/5 褐色	*。
9	10 YR 7/5 *	細粒浮石含む。
10	10 YR 7/5 黄褐色	粘性なし。
11	10 YR 7/5 暗褐色	細粒浮石含む。

縮尺 1/40

第86図 (20) III g 25土坑

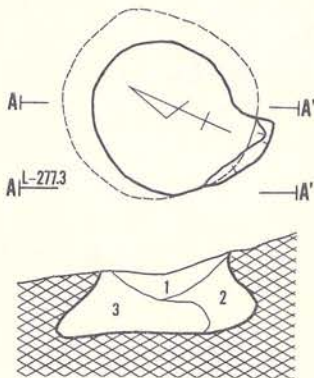
つ円形の土坑である。壁は底面に対して70度で内傾し、断面形はフラスコ形である。本土坑は他と異なり、壁面の凹凸が著しく、この様相は開口部についても同様である。底面には凹凸もなくほぼ平坦で水平状態に近い。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色のシルトが堆積し、11層に細分される。6層以外の各層には浮石が混入し、4層には炭化物が混じる。6層には壁の崩落と推定される地山起源の黄褐色土の混入がある。しまりは良好であるが粘性はほとんどない。全体がほぼレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積による埋没を示すものであろう。(Na)

(21) III g 26土坑-1

[遺構] (第87図、P L-39)

南部遺構群の中央やや西寄りグリッド III g 26・III g 27にまたがって位置し、III f 26土坑-2の東方3 mで、北西向き斜面に立地する。



III g 26土坑-1

層位	色調	土性
1	10 YR 7/5 黒褐色	くずれやすい。
2	10 YR 7/5 暗褐色	浮石含む。
3	10 YR 7/5 黒褐色	*。

縮尺 1/40

第87図 (21) III g 26土坑-1

開口部径75cm×70cm、底部径1 m×1 mの規模をもち、最も深い南東で48cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して約50度の角度で内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面にはほとんど凹凸もなくほぼ平坦であるが、5 cmの比高で北西に傾斜している。

埋土は黒褐色・暗褐色のシルトが堆積し、3層に細分される。堆積の仕方が特徴的で、2層と3層は色調に違いがあるものの同時層であるとすれば、自然堆積で埋没した土坑であろう。

(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はないものの、形状や埋土から考えて縄文時代の土坑であろう。

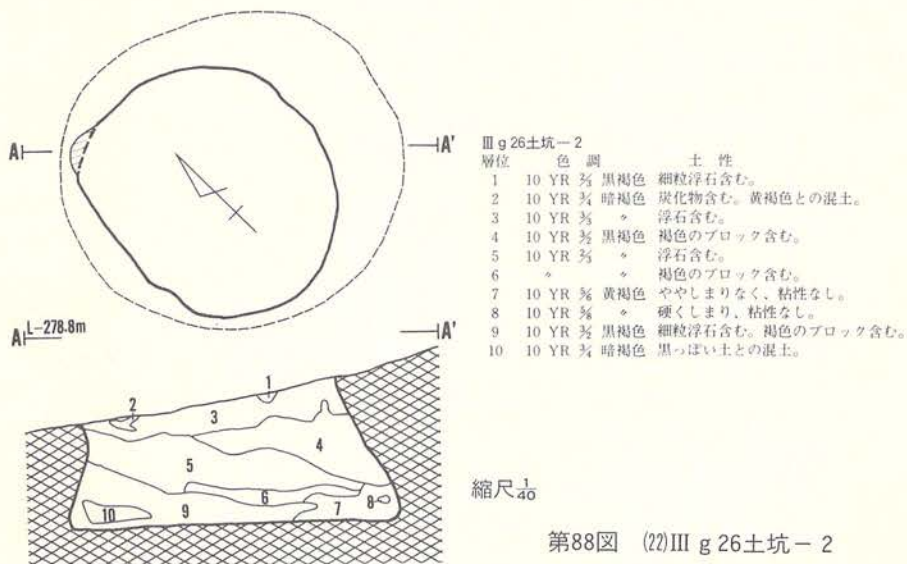
(22) III g 26土坑-2

〔遺構〕 (第88図、P L-43)

南部遺構群のほぼ中央グリッドIII g 26・III g 27にまたがって位置し、III g 26土坑-1の北東3mで北西向き斜面に立地する。重複する遺構はない。

開口部径1.4m×1.2m、底部径1.8m×1.65mの規模をもち、最も深い南東壁で84cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して70度で内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面には凹凸もなくほぼ平坦で水平状態に近い。

埋土は黒褐色・暗褐色・黄褐色のシルトが堆積し、10層に細分される。2層には少量の炭化物、3・5層には径1mm～2mmの浮石粒が比較的多量に混入する。概ね硬くしまっているが、



第88図 (22)III g 26土坑-2

粘性はあまりない。土層図で堆積状況を観察すると、4層から下位は斜面下位から流入したことを示している。このことから人為的に埋め戻されている可能性が高い。(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かでないが、形状や埋土から考えて、縄文時代の土坑であろう。

(23) III g 26土坑-3

〔遺構〕 (第89図、P L-40)

南部遺構群のほぼ中央グリッドIII g 26に位置し、III g 26土坑-2の西3mで北西向き斜面に立地している。III g 26土坑-4と南東部で重複している。本土坑の埋土8層がIII g 26土坑-4の埋土8層に共通し、9層との境部分が本土坑の底面の延長で続くことから考えると、本土坑の方が新しい可能性があるものの、調査時には明確にできなかった。

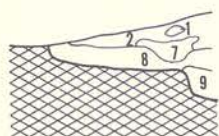
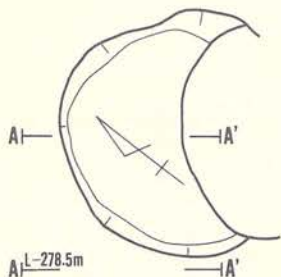
重複する南東壁が不明であるが、開口部径1.3m、底部径1.15mの規模をもち、深さの明確な南壁で62cmの深さをもつ円形の土坑と推定される。壁は底面に対して110度で外傾していることから、現状の断面形は浅皿状であるが、本来この形状であったかは明らかでない。底面にはほとんど凹凸もなくほぼ平坦で、水平状態に近い。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色のシルトで構成され、4層に細分される。1・7・8層には炭化物と浮石が混入し、良くしまっている。おそらく自然堆積で埋没した土坑であろう。(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕



III g 26土坑-4				土性
層位	色	調		
1	10 YR	5/	暗褐色	シルト。炭化物・浮石含む。
7	10 YR	5/	黒褐色	〃
8	10 YR	5/	暗褐色	〃
9	10 YR	5/	褐色	〃。浮石含む。

縮尺 $\frac{1}{20}$

第89図 (23) III g 26土坑-3

遺物の出土がないので明確でないが、形状・埋土から考えて縄文時代の土坑であろう。

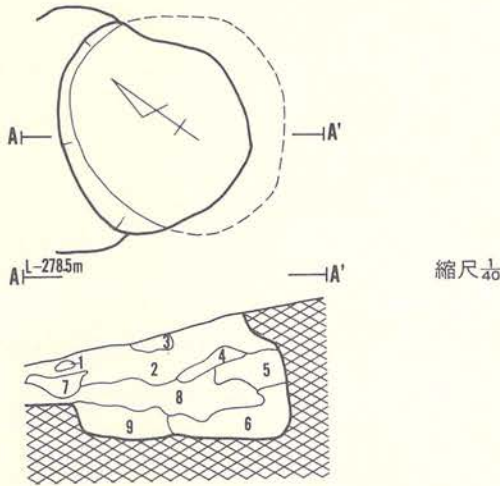
(24) III g 26土坑-4

〔遺構〕 (第90図、P L-41)

南部遺構群のほぼ中央III g 26に位置し、III g 26土坑-2の西3 mで北西向き斜面に立地している。III g 26土坑-3と西で重複しているが、III g 26土坑-3で記した状況から本土坑の方が古い可能性が強い。

開口部径1 m×1 m、底部径1.5m×1.5mの規模をもち、最も深い南部で69cmの深さをもつ円形の土坑である。南壁は底面に対して60度で内傾するが、北壁は110度で外傾している。本来の断面形はフラスコ形を示したものであろう。底面にはほとんど凹凸がなく平坦で、ほぼ水平状態に近い。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色のシルトが堆積し、6層に細分されるが、新旧関係の理解が正しいとすれば、本土坑に直接伴う埋土は2・5・6・9の4層である可能性がある。いずれも浮石を混入し、良くしまっている。おそらく自然堆積で埋没した土坑であろう。 (Na)



III g 26土坑-3

層位	色調	土性
1	10 YR 7/3 暗褐色	シルト。炭化物・浮石含む。
2	10 YR 7/3 にぶい黄褐色	炭化物・炭
3	10 YR 7/3 黒褐色	炭化物・炭
4	10 YR 7/3 暗褐色	炭化物・炭
5	10 YR 7/3 黄褐色	炭化物・炭
6	10 YR 7/3 褐色	炭化物・炭
7	10 YR 7/3 黒褐色	炭化物・炭
8	10 YR 7/3 褐色	炭化物・炭
9	10 YR 7/3	炭化物・炭

第90図 (24) III g 26土坑-4

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かでないが、形状・埋土から考えると縄文時代の土坑であろう。

(25) III g 27土坑

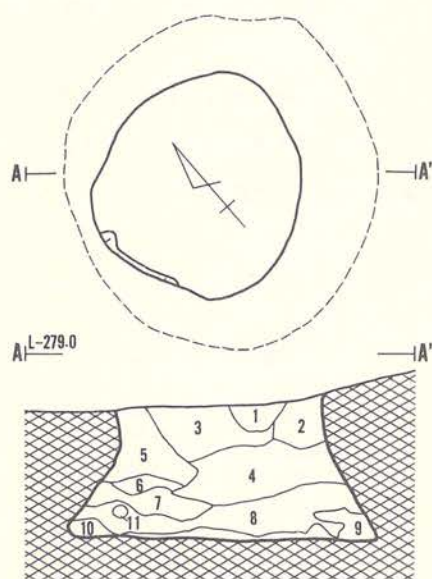
〔遺構〕 (第91図、P L-41)

南部遺構群の中央南端のグリッドIII g 26・III g 27にまたがって位置し、III g 26土坑-2の南約3 mで北西向き斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.15m×1.1m、底部径1.7m×1.7mの規模をもち、最も深い南東で89cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して50度で内傾し、断面形は底面の上位50cmに1.1m×1.1mの頸部をもつフラスコ形である。頸部から上位の壁面はほぼ直立する。底面には凹凸がなくほぼ平坦で、水平状態に近い。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色のシルトが堆積し、11層に細分される。1・3層には炭化物、そのほか9・10層以外には浮石が混入する。全体的に上位層が良くしまり、下位層ほど軟弱である。中央部分には黒色土系が堆積し、壁寄りには壁の崩落と思われる地山起源の土が多く含まれる。堆積状況を見ると、ほぼレンズ状の堆積を示すことから、自然堆積によって埋没した土坑であろう。

(Na)



III g 27土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 7/2 黒褐色	細粒浮石・炭化物含む。
2	10 YR 7/2 暗褐色	浮石含む。
3	10 YR 7/2 *	浮石・炭化物含む。黄褐色土が混じる。
4	10 YR 7/2 黒褐色	浮石含む。
5	10 YR 7/2 暗褐色	浮石含む。
6	10 YR 7/2 黄褐色	硬くしまり・粘性なし。
7	10 YR 7/2 黒褐色	浮石含む。
8	10 YR 7/2 *	*
9	10 YR 7/2 褐色	黄褐色と混土。混土。 と褐色の混土。
10	10 YR 7/2 *	暗褐色と混土。
11	10 YR 7/2 *	*。浮石含む。

縮尺 $\frac{1}{20}$

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物が出土していないので定かでないが、形状や埋土から考えて縄文時代の土坑であろう。

(26) III h 25土坑

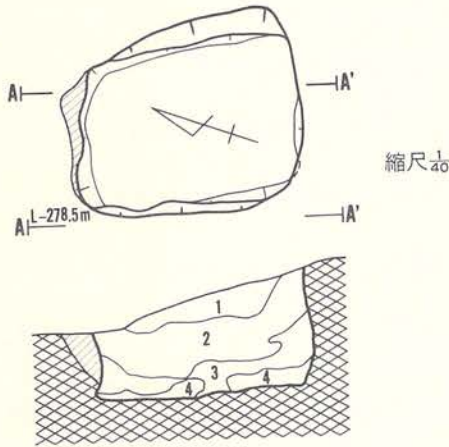
〔遺構〕 (第92図、P L-41)

南部遺構群の中央やや北東寄りのグリッドIII h 25・III i 25にまたがって位置し、III g 25土坑の東6mで北西向き斜面に立地している。

開口部径が北西辺60cm・南東辺90cm×1.2m、底部径が北西辺70cm・南東辺80cm×1.1mの規模をもち、最も深い北東で60cmの深さがあり、長軸を北西-南東方向にもつ長方形である。壁は底面に対して直角か110度で外傾し、断面形は浅いピーカー形である。底面にはほとんど凹凸

もなくほぼ平坦であるが、南壁寄りが10cmの比高で低くなっている。

埋土は黒色・黒褐色・褐色のシルトが堆積し、4層に細分される。1・2・4層には浮石の混入があり、全体的に良くしまつて硬い。全体に黒色土系のシルトが堆積し、それもレンズ状堆積であることから自然堆積による埋没と考えられる。(Na)



第92図 (26)III h 25土坑

III h 25土坑			
層位	色調	土性	
1	10 YR 8/1 黒色	細粒浮石含む。	
2	10 YR 8/1 *	浮石含む。	
3	10 YR 8/1 黒褐色	褐色土が混じる。	
4	10 YR 8/1 褐色	細粒浮石含む。	

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かでないが、埋土の堆積状況では縄文時代の土坑と考えられるが、平面形が長方形と言うことに疑問がある。墓墳であろうか。

(27) III j 21土坑

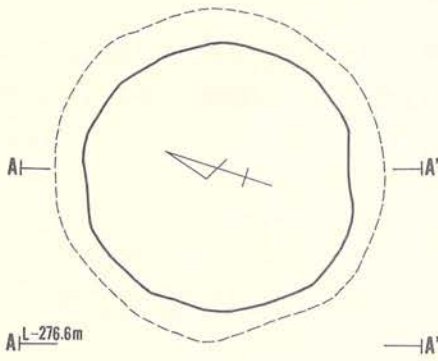
〔遺構〕 (第93図、P L-42)

南部遺構群とIII f 19土坑のほぼ中央東端のグリッドIII j 21に位置し、III h 25土坑の北々東16mのやや急な北西向き斜面に立地する。重複する遺構はない。

開口部径1.5m×1.4m、底部径1.8m×1.75mの規模をもち、最も深い南東で1.05mの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して80度内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面には大きな起伏があり、北西部が南東部より8cm低くなっているが、小さい凹凸はなく平坦に近い。

埋土は暗褐色・褐色・黄褐色・黒褐色のシルトが堆積し、14層に細分される。1・2・6・12層には浮石が混じり、1・4・5・12層に地山起源の黄褐色土ブロックが含まれる。上位と下位の層が良くしまり、中位層は軟弱である。また、上位層には粘性がなく、下位層ほど強くなる傾向がある。堆積状況を見ると、6層から下層は斜面下位からの流入を示し、その上層は斜面上位からの流れ込みである。特に8層は一気に大量の土砂が堆積したことを示している。

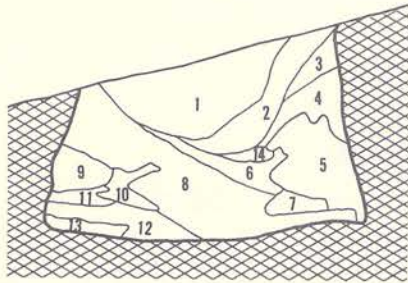
おそらく、8層(6・7層も可能性もつが)は人為的に投棄された堆積状況であろう。最終的には自然堆積による埋没と考えられる。(Na)



層位	色	調	土性
1	10 YR	ㄹ	暗褐色 浮石含む。にぶい黄褐色土のブロック含む。
2	7.5YR	ㄹ	ㄹ
3	10 YR	ㄹ	ㄹ 褐色土が混じる。
4	7.5YR	ㄹ	褐色 黄褐色ブロック含む。
5	11 YR	ㄹ	黄褐色 にぶい黄褐色の層が下部にある。
6	11 YR	ㄹ	暗褐色 浮石含む。
7	11 YR	ㄹ	褐色
8			1層と同じ
9	2.5YR	ㄹ	黒褐色 やや粘性ある。
10	10 YR	ㄹ	ㄹ
11	10 YR	ㄹ	褐色
12	10 YR	ㄹ	黒褐色 浮石含む。黄褐色が混じる。
13	10 YR	ㄹ	褐色 やや粘性ある。
14	10 YR	ㄹ	暗褐色

縮尺 $\frac{1}{40}$

第93図 (27) III j 21土坑



〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので明確ではないが、形状や埋土から考えて縄文時代の土坑であろう。

(28) III j 25土坑-1

〔遺構〕 (第94図、P L-42)

南部遺構群の北東端グリッド II j 25・VI a 25にまたがって位置し、III h 25土坑の東8 mで北西向きの斜面に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.85m×1.55m、底部径1.9m×1.75mの規模をもち、最も深い南東で85mの深さをもつ、楕円形の土坑である。北と南東部の壁は崩落して100度～110度外傾するが、ほかは80度で内傾しており、本来の断面形は頸部をもたないフラスコ形であろう。底面にはほとんど凹凸がなく平坦でほぼ水平状態に近い。

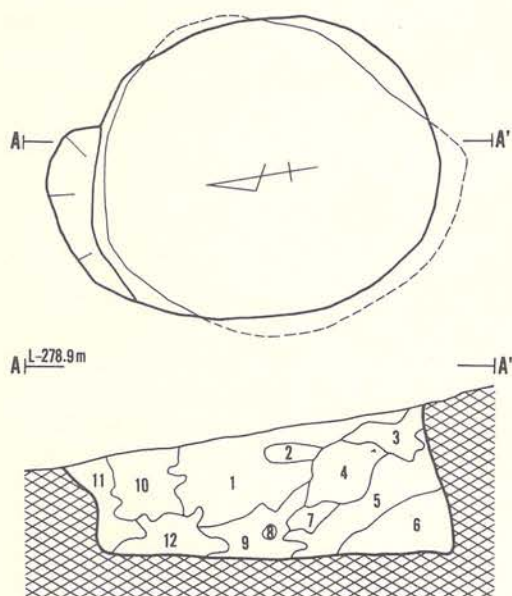
埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色・明黄褐色・にぶい黄褐色を示すシルトが堆積し、12層に細分される。6・11・12層は壁の崩落と考えられる地山土で、中央部は黒色土系の堆積である。1～4層には浮石が混じり、そのほか1層に炭化物が混入する。良くしまっているが、粘性のない層が多い。おそらく自然堆積によって埋没した土坑であろう。 (Na)

〔遺物〕

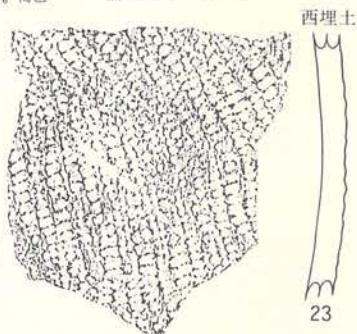
埋土内から土器片が2点出土している。

土器 (第94図23、P L-130)

器面に原体RL横回転による単節の斜行縄文をもつ体部破片である。第IX群に相当する。



層位	色調	土性
1	10 YR 5/ 黒褐色	浮石・炭化物含む。
2	10 YR 5/ 〃	細粒浮石含む。
3	10 YR 5/ 褐色	浮石含む。褐色との混土。
4	10 YR 5/ 黒褐色	〃。褐色のブロック含む。
5	10 YR 5/ 褐色	暗褐色土が混じる。
6	10 YR 5/ にぶい黄橙	硬くしまり粘性ある。
7	10 YR 5/ 褐色	黒褐色との混土。
8	10 YR 5/ 黄褐色	硬くしまり粘性ある。
9	10 YR 5/ 暗褐色	黒褐色との混土。
10	10 YR 5/ 褐色	黒っぽい土との混土。
11	10 YR 5/ 明黄褐色	黄橙色との混土。
12	10 YR 5/ 褐色	黒っぽい土との混土。



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

第94図 (28) III j 25土坑-1

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器には縄文だけが施文されているので断定できないが、胎土、縄文、焼成等は後期の特徴に近い。以上のことから、本土坑は後期かそれ以降に属する可能性が高い。

(29) III j 25土坑-2

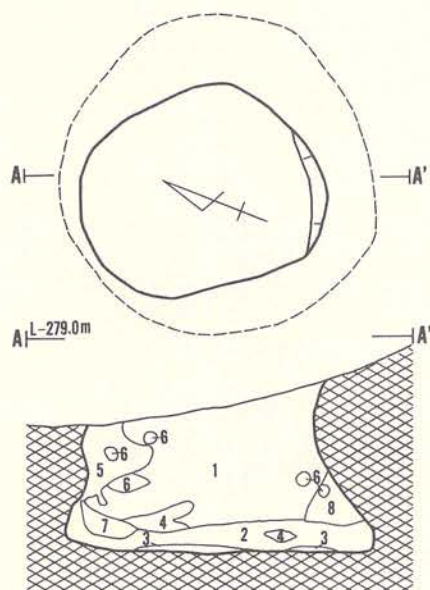
〔遺構〕 (第95図、P L-42)

南部遺構群のほぼ東端グリッド III j 25・III j 26にまたがって位置し、III j 25土坑-1の南西4mで北西向きの斜面に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.2m×1m、底部径1.7m×1.65mの規模をもち、最も深い南東で93cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して50度から60度に内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。東北東部で一部頸部らしい括れをもつが、壁の崩落によるものと理解される。底面には凹凸もなく、平坦で水平状態に近い。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、8層に細分される。1・2・4・8層には微量の炭化物が混じり、1・4・7層は浮石を含む。いずれもしまり・粘性とも

少ない。5・6・8層の地山起源の土は壁の崩落によると考えられるが、2層の基本層序VI層相当の土は人為的な投棄によるものである。以上のことから、2・3・7層は人為的なものであるが、最終的には自然堆積で埋没した土坑と考えることができる。(Na)



III j 25土坑-2

層位	色調	土性
1	7.5YR 2/6 黒褐色	シルト。浮石粒・砂粒・炭化粒混入する。基本層序VI層。
2	7.5YR 2/6 褐色	炭化物含む。基本層序VI層。
3	7.5YR 2/6 暗褐色	シルト。
4	※	※。浮石粒含む。基本層序V層。
5	※	※。基本層序V層。
6	※	基本層序V層のブロック混入。
7	10 YR 2/6 暗褐色	シルト。炭化物・浮石粒含む。基本層序VI層。
8	※	炭化物粒含む。基本層序V層。

縮尺 $\frac{1}{50}$

第95図 (29) III j 25土坑-2

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かでないが、形状・埋土から考えて縄文時代の土坑であろう。

(30) III j 26土坑

〔遺構〕 (第96図、P L-43)

南部遺構群の東端グリッド III j 26に位置し、III j 25土坑-2の北西3mで北西向き斜面上に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.75m×1.4m、底部径1.6m×1.5mの規模をもち、最も深い南東で90cmの深さをもつ円形の土坑である。北々東と南々東の壁は底面に対して90度～100度外傾するが、東と西壁は90度～80度内傾していることから、本来は断面形がフラスコ形になるものであろう。底面には凹凸もなく平坦でほぼ水平状態に近い。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色・明黄褐色を示すシルトが堆積し、9層に細分されている。4層と7層は同質で、壁の崩落による基本層序第V層相当の地山土である。廃絶後9層が堆積してまもなく壁が崩落したものであろう。1・2・3・5層には炭化物が含まれ、2～4層には浮石が混じる。全体に良くしまっているが、粘性はない。自然堆積による埋没と考えられる。(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かではないが、形状・埋土から縄文時代の土坑であろう。

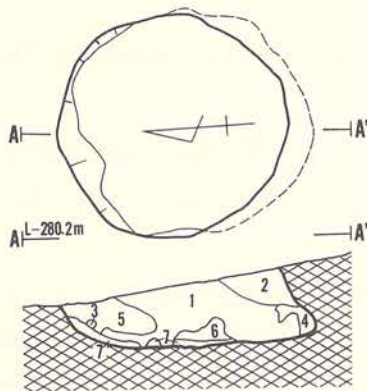
(32) IV a 27土坑

〔遺 構〕 (第98図、P L-43)

南部遺構群の南東端グリッドIV a 27に位置し、III i 27土坑の東6 mで北西向き斜面に立地している。重複遺構はない。

開口部径1.2m×1.15m、底部径1.2m×1.15mの規模をもち、最も深い南東壁で41cmの深さをもつ円形の土坑である。北壁は底面に対して125度外傾するが、南壁では60度内傾することから、本来の断面形はフラスコ形の可能性が強い。底面には凹凸もなく平坦ではあるが、壁際ほど高くなり、特に北壁部分では壁とフロブ状で接続している。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色・にぶい黄橙色のシルトや地山土が堆積し、7層に細分されている。1・5層には浮石と炭化物が混入し、全体的に良くしまっているが、粘性はない。おそらく、自然堆積で埋没した土坑であろう。 (Na)



IV a 27土坑

層位	色 調	土 性
1	10 YR 5/ 黒褐色	炭化物・浮石含む。
2	10 YR 5/ 暗褐色	明黄褐色・褐色ブロックで含む。
3	10 YR 5/ 黄褐色	やや硬く・粘性なし。
4	10 YR 5/ 褐色	細粒浮石含む。
5	10 YR 5/ 暗褐色	炭化物・細粒浮石含む。
6	10 YR 5/ 褐色	ややしまり・粘性なし。
7	10 YR 5/ にぶい黄橙	やや硬く・粘性なし。

第98図 (32)IV a 27土坑

〔遺 物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

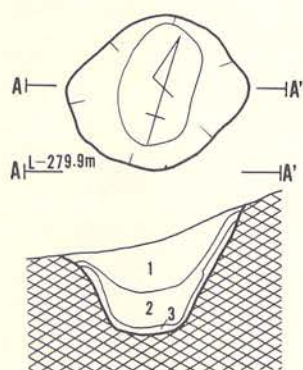
遺物の出土がないので定かでないが、形状・埋土から考えて縄文時代の土坑であろう。

< B 区 >

(33) I f 40土坑

〔遺 構〕 (第99図、P L-44)

西方突端部のグリッド I f 40・I f 41にまたがって位置し、中世の I e 40土葬墓の東方1 m



I f 40土坑		土性
層位	色調	
1	7.5YR 5/6 暗褐色	
2	7.5YR 5/6 褐色	黄橙色土・褐色土と混じる。
3	7.5YR 5/6 明褐色	シルト。に濃い橙色7.5YR 5/6の混入。

第99図 (33) I f 40土坑

で、全体が西斜面となる先端部に立地している。重複する遺構はない。

開口部径98cm×82cm、底部径68cm×40cmの規模をもち、最も深い北西部で68cmの深さがあり、平面形は検出面が不整な平行四辺形で、底部は長円形を示すが、検出面の長軸と底部の長軸とは一致していない。壁は底面に対して120度外傾し、断面形はバケツ形に近い。底面には凹凸もなくほぼ平坦で水平に近い。

埋土はいずれも基本層序第V・VI層を主体とする褐色のシルトで占められ、3層に細分される。全体に層が厚く、I e 40土葬墓やI g 40土葬墓-1の埋土と類似していることから、人為的に埋め戻されている可能性がある。(Ko)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土の堆積状況から中世の土葬墓に類似しており、本来は中世に属する可能性が大きい。

(34) I h 40土坑

〔遺構〕 (第100図、P L-44)

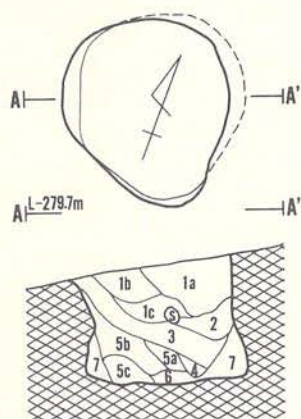
西方突端部のほぼ中央グリッドI h 40・41に位置し、I h 40住居跡の西1mで尾根のほぼ頂上部に立地している。一部はI h 40土葬墓の盛土部分と重複している。

開口部径1.06m×1.12m、底部径1.36m×1.47mの規模をもち、最も深い東側で93cmの深さをもつ若干不整な円形の土坑である。壁は70度～75度で内傾し、断面形は底面の60cm上位に径約1mの頸部をもつフラスコ形である。底部には凹凸もなくほぼ平坦であるが、東壁寄りが5cmの比高で高くなっている。

埋土は基本層序第I・II層とV・VI層の混土層が多く堆積し、10層に細分される。中位層以下では基本層序第V・VI層が主体をなし、下位層の直上では炭化物粒を含む黒褐色土が堆積す

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、形状・埋土から考えて縄文時代の土坑であろう。



III c 38土坑				
層位	色	調	土性	
1 a	7.5YR	3/4	暗褐色	シルト。炭・赤褐色粒・黄橙色混じる。
1 b	々	々	々	シルト。黄橙色混じる。
1 c	々	々	々	。1の層よりやや明るい。
2	7.5YR	3/4	褐色	々
3	7.5YR	3/4	々	々
4	7.5YR	3/4	々	黄橙色混じる。
5 a	7.5YR	3/4	暗褐色	々
5 b	々	々	々	黄橙色混じる。
5 c	々	々	々	々
6	7.5YR	3/4	褐色	々
7	々	々	々	々

縮尺 1/40

第101図 (35) II c 38土坑

(36) II c 40土坑-1 (旧II c 41土坑-1)

〔遺構〕 (第102図、P L-45)

西突端部の遺構群では東端に近いグリッドII c 40に位置し、II d 40土坑の西1.7mで尾根の南向き斜面中位に立地する。II e 38溝中央部の西側法面と重複しているが、本土坑の方が古い。

北西部が一部崩落しているが、開口部径1.45m×1.1m、底部径1.3m×1.3mの規模をもち、最も深い北部で1mの深さをもつ円形の土坑である。壁は70度～80度内傾し、断面形は底面の上位50cmに径約1mの頸部をもつフラスコ形である。底面にはほとんど凹凸もなくほぼ平坦で水平状態に近い。

埋土は黒褐色・極暗褐色・暗褐色・明褐色・橙色等のシルトが堆積し、7層に大別され、さらに細分される。上・中位層に黒褐色シルトが褐色するほかは、基本層序V・VI層の混りが多く、壁寄りには壁の崩落とみられる厚層が堆積している。自然堆積で埋没した土坑であろう。

(Ko)

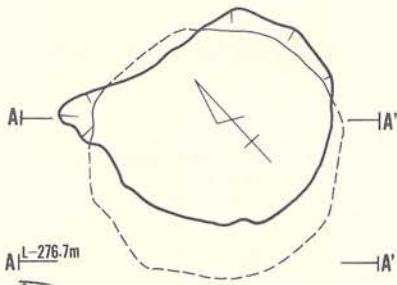
〔遺物〕

埋土内から24点の土器片が出土している。

土器 (第102図24～31、P L-131)

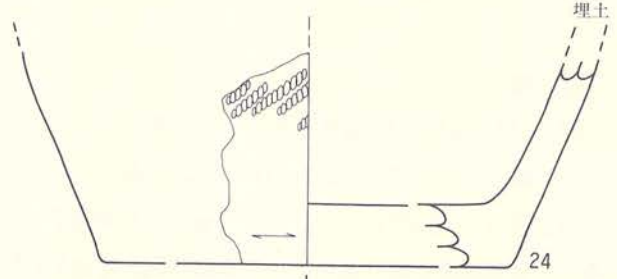
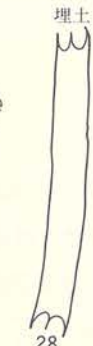
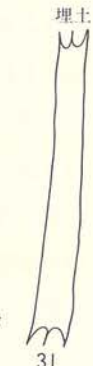
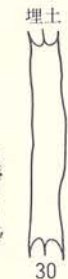
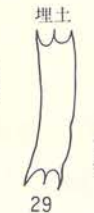
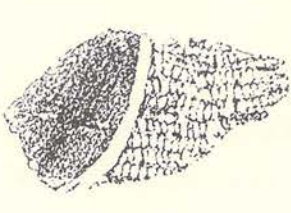
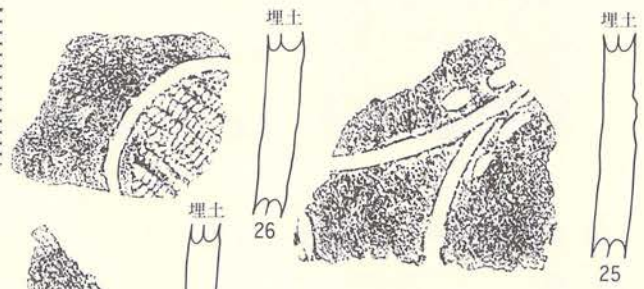
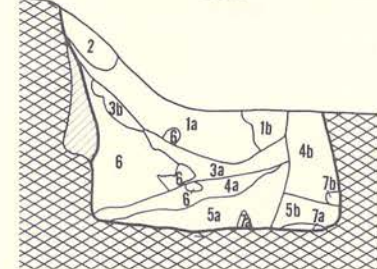
24は底面に笹の葉と思われる木葉痕のある体部下位～底部の小破片である。25～29は0段多条による原体RL縦回転による単節斜行縄文を付した後、沈線で区画し縄文を磨消する。また、25は沈線に並行して列点を付す。30・31は縄文からみて25～29と同個体の破片であろう。

以上のことから、第III群4類か5類に位置づけられるであろう。



IIc 40土坑-1

層位	色調	土性
1a	7.5YR 8% 黒褐色	シルト。木炭点在。
1b	7.5YR	※
2	7.5YR 8% 明褐色	※。暗褐色土混じる。
3a	7.5YR 8% 極暗褐色	※。炭化物混入。
3b	7.5YR	※。同上少ない。
4a	7.5YR 8% 黒褐色	※。にぶい橙色上の混じりあり。
4b	7.5YR	※。同上混入多し。
5a	7.5YR 8% 暗褐色	※。明褐色土の混入。
5b	7.5YR	※。同上混入少ない。
6	7.5YR 8% 橙色	※。シラスの混入あり。
7a	7.5YR 8% にぶい褐色	シラスブロック。
7b	7.5YR	※



遺構 縮尺 1/20
遺物 縮尺 1/2

第102図 (36) IIc 40土坑-1

〔遺構の時期〕

25～29の土器は中期末葉に属することから、本土坑も中期末葉に位置づけられる。

(37) II c 40土坑-2 (旧II c 41土坑-2)

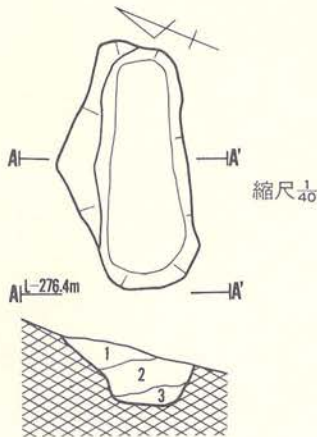
〔遺構〕 (第103図、P L-45)

西突端部の遺構群では東端に近いグリッドII c 40に位置し、II c 40土坑-1の南約2 mで南向き斜面の下位に立地する。II e 38溝の確認中に検出され、同溝の西側法面と重複している。新旧関係は本土坑が新しい可能性がある。

開口部径1.28m×50cm、底部径1.1m×40cmの規模をもち、最も深い北部で35cmの深さがあり、平面形は南西-北東に長軸をもつ隅丸の略長方形である。壁は底面に対して110度で外傾し、北壁の場合は底面の上位15cmで140度に強く外反しており、断面形は浅いバケツ形に近い。底面には凹凸もなくほぼ平坦で水平に近い。

埋土は褐色のシルトが堆積し、3層に細分される。最下層は基本層序第V層の混りが多いがほとんど同質であろう。3層とも平面的な堆積を示し、人為的に埋め戻された可能性がある。

(Ko)



II c 40土坑-2		土性	
層位	色調		
1	7.5YR 灰褐色	シルト	にふい橙色土の混入。
2	7.5YR 灰	*	同混入少ない。
3	7.5YR 灰	*	同混入多い。

第103図 (37) II c 40土坑-2

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、形状・埋土とも縄文時代とするには問題があり、むしろ、中世か近世の遺構である可能性が強い。

(38) II d 40土坑

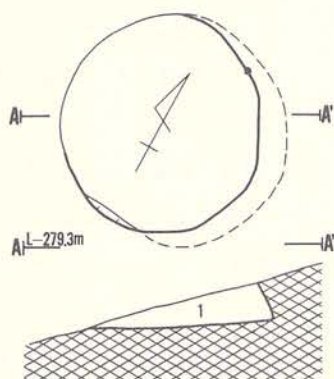
〔遺構〕 (第104図、P L-45)

西突端部の遺構群では東端に近いグリッドII d 40に位置し、II e 38溝中央部の東40cm、II e 41土坑が南東6.5mの西向き斜面に立地する。重複する遺構はない。

斜面に立地するため西側は残存していないが、開口部径1.1m、底部径1.2mの規模で、最も

深い東側で26cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して75度で内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面にはほとんど凹凸もなく平坦で水平状態に近いが、南端は削平を受けている。

埋土は褐色のシルト単層であり、全体が植生痕による攪乱を受けている。 (Ko)



II d 40土坑
層位 色 調 土 性
1 7.5YR 5/1 褐色シルト。黄褐色浮石含む。

縮尺 $\frac{1}{100}$

第104図 (38)II d 40土坑

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

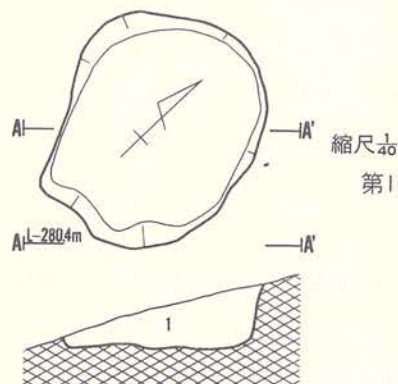
遺物の出土がないので定かでないが、形状と埋土から縄文時代の土坑と推定される。

(39) II e 41土坑

〔遺構〕 (第105図、P L-46)

西突端部遺構群の東端グリッドII e 41・II f 41にまたがって位置し、II d 40土坑の南東7mで南向き斜面の中位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.28m×1.02m、底部径1.12m×92cmの規模をもち、最も深い北東側で32cmの深さをもつ楕円形の土坑である。壁は底面に対して102度で外傾し、断面形は浅いフラスコ形である。



II e 41土坑
層位 色 調 土 性
1 7.5YR 5/1 褐色シルト。黄褐色浮石含む。

縮尺 $\frac{1}{100}$

第105図 (39)II e 41土坑

底面には小さな凹凸があり、中央部に向かって深くなり、底面と壁面とは丸味をもって接続している。

埋土は炭化物・浮石・黄褐色土を含む暗褐色

土の単層で構成されている。浮石には黄橙色と灰白色のものがあり、全体に散在している。暗褐色土は壁際にブロック状に混じる。粘性・硬さともにならない。また、北壁際の底面直上に径8cmの円礫がある。自然堆積で埋没した土坑であろう。(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かでないが形状・埋土の状況から縄文時代の土坑と推定される。

(40) II i 38土坑-1

〔遺構〕 (第106図、P L-46)

頂上部遺構群の中では北西のグリッドII i 38・II i 39にまたがって位置し、II e 38溝の北端から東へ16m 離れ、尾根頂上部から北斜面に若干下ったところに立地している。東側が近世の墓坑II j 38墓と重複しているが、本土坑の方が古い。

開口部径1.24m×1.2m、底面径1.1m×1.1mの規模をもち、最も深い南側で51cmの深さをもつ若干歪んだ円形の土坑である。南側から北東側にかけての壁は崩落のため底面に対して100度位外傾しているが、北西壁は70度で内傾している。現状での断面形はビーカー型を示す部分が多いものの、壁の崩落と北西部にみられる内傾する壁を合せて考えると、本来はフラスコ形を示す土坑の可能性が高い。底面には凹凸はほとんどないが、中央部が深く壁際に向って次第に高くなる。東壁際には径24cm、深さ30cmで円形を示す副穴が検出されている。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色を示すシルトが堆積し、10層に細分される。埋土上部



第106図 (40) II i 38土坑-1

を占める暗褐色土はU字状に堆積し、埋土下部の壁際に堆積する褐色土や黄褐色土は、壁の崩落による土と考えられる。底面直上には炭化物を含む黒褐色土が堆積している。全体がレンズ状の堆積であることから、自然堆積で埋没した土坑であろう。(Mi)

〔遺物〕

埋土内から13点の土器片が出土している。

土器 (第106図32・33、P L—131)

32・33とも埋土上部からの出土であり、32は原体R L横回転による単節の斜行縄文を付した後、沈線で区画して縄文を磨消する。32・33とも一部に鱗状突起と通称される隆起帯がある。

以上のことから、2点とも第Ⅲ群5類に位置づけられる。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

32・33の土器は埋土上部の出土であるが、2点とも中期末葉に属する土器であることから、中期末葉頃の土坑と考えられる。

(41) II i 38土坑—2 (旧II i 土坑—4)

〔遺構〕 (第107図、P L—46)

尾根頂上部遺構群の西端グリッドII i 38・39とII j 38・39にまたがって位置し、II i 38土坑—1の南2 mで、ほぼ頂上の平坦部に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.34m×1.16m、底部径1.64m×1.41mの規模をもち、最も深い南東部で84cmの深さをもつ東西を長軸とする楕円形の土坑である。壁は底面に対して直立(南～西)や70度で内傾し、断面形はフラスコ形である。底面には若干凹凸があり、中央部が壁際より3～4 cm低くなっている。

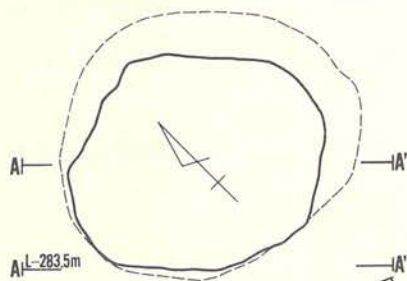
埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色・にぶい黄橙色のシルトが堆積し、9層に細分される。埋土の大半に炭化物を多く含み、黄褐色土が小塊状で混入する黒色土や黒褐色土で占められている。壁際の最下部には壁の崩落によるにぶい黄橙色土、最上部には褐色や明褐色のシルトが堆積している。堆積状況は概ね自然堆積の層相を示していることから、自然に埋没した土坑であろう。(Mi)

〔遺物〕

埋土内からほぼ完形を含む25点の土器が出土している。

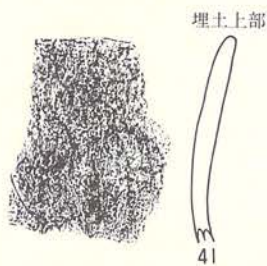
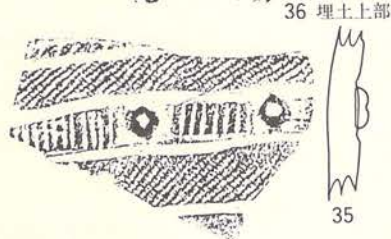
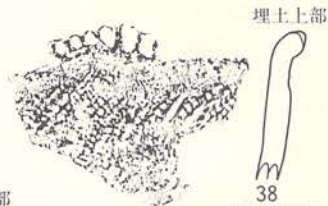
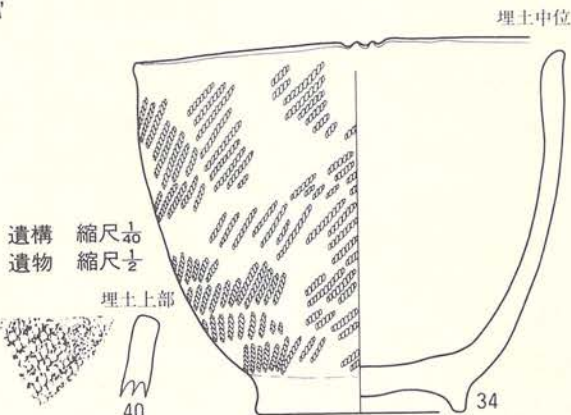
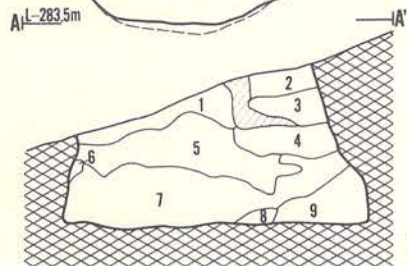
土器 (第107図34～42、P L—131)

34は中位から出土した完形土器である。器表に原体L R横回転による単節の斜行縄文を付し、



II i 38土坑-2

層位	色調	シルト
1	7.5YR 7/5 暗褐色	黄褐色浮石・炭化粒・褐色土小ブロック状含む。
2	7.5YR 8/5 明褐色	炭化粒含む。
3	7.5YR 8/5 褐色	本根による攪乱あり。
4	7.5YR 7/5 暗褐色	炭化物・明黄褐色土含む。黄褐色浮石散在する。
5	10 YR 8/5 黒褐色	黄褐色浮石・黄褐色土含む。炭化物混入。
6	10 YR 8/5 に近い黄橙色	黒褐色土ブロック含む。
7	7.5YR 7/5 黒色	炭化物・黄褐色細粒浮石・明赤褐色浮石含む。
8	7.5YR 7/5 褐色	黄褐色浮石・に近い黄橙色含む。明黄褐色土。
9	7.5YR 7/5 に近い黄橙色	粘質シルト。基本層序逆層。



第107図 (4)II i 38土坑-2

底部には高台が付き口縁部の一部を小波状にした鉢である。35~37は0段多条の原体R L縦回転による縄文を付した後沈線で区画し、縄文を磨消したり、縦形で横に連続する刻目帯にし、さらに中央部が凹む円形浮文が貼付される例もある。なお、36・37の沈線区画は入組文風と推定されるし、35・36は同個体の破片である。38は原体L R横回転による単節斜行縄文を付した

粗製土器であるが、一部の口縁を高くし上からの刺突による凹みがある。39は原体RL縦回転による縄文を付した後沈線で区画し、縄文を磨消した体部破片である。40は原体LR横回転による単節斜行縄文をもつ粗製土器である。41・42は無文土器の破片である。

以上のことから、35～37・39は第VI群8類、41・42は第VIII群、34・38・40は第IX群土器である。

石 器

出土していない。

〔遺構の時期〕

埋土内からの出土ではあるが、出土した土器は全て後期末葉に属する。よって、後期末葉に位置づけられる土坑であろう。

(42) II i 39土坑

〔遺 構〕 (第108図、P L—47)

尾根頂上部の遺構群の西端グリッドII i 39に位置し、II i 38土坑—2の南西2 mで頂上部から若干西斜面にかかったところに立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.08m×92cm、底部径2.22m×2.2mの規模をもち、最も深い東側で1.24mの深さとなる円形の土坑である。西壁は底面に対して40度、東壁が50度内傾し、断面形は底面の上位1 mに径1 mの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は幾分外傾している。西壁では底面の上位50cmに頸部があり、その下位の壁面は大きく抉られている。底面には若干の起伏があり、中央部～東壁寄りが若干低くなり、東壁際では次第に高くなって壁面に続く。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色・明黄褐色・灰褐色等のシルトが堆積し、15層に細分される。開口部から頸部にかけての上部が汚れの少ないにぶい黄褐色土やにぶい黄橙色土の地山起源の土が堆積し、下位層は上半が黒褐色、下半が基本層序VI層起源の汚れの少ない褐灰色土が堆積している。また、壁際や底面直上には黄褐色が大塊状に堆積している。

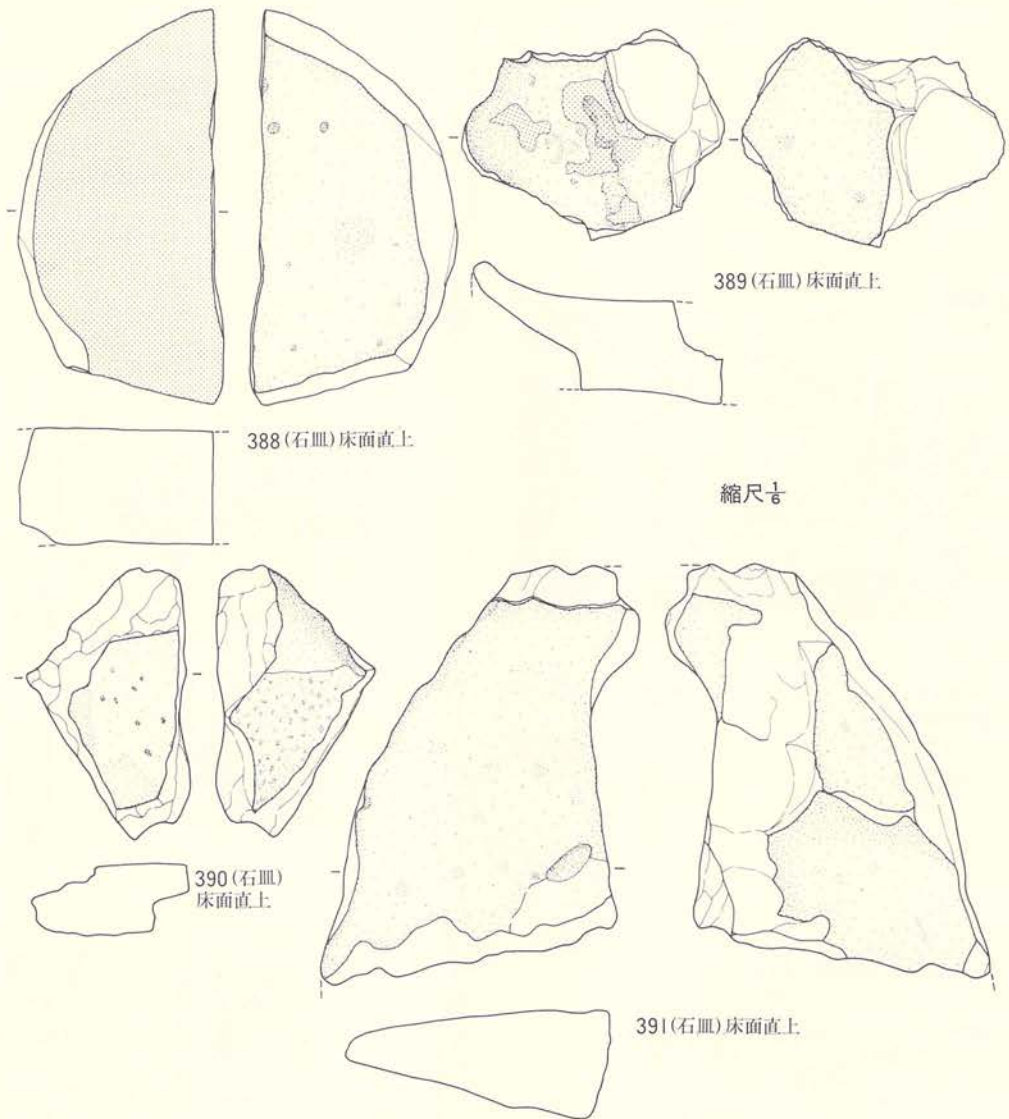
堆積状況を観察すると、少なくとも開口部から頸部にかけては人為的に埋め戻された可能性が強く、その下位は自然堆積であろう。 (Mi)

〔遺 物〕

埋土内から12点の土器片と石器1点、底面直上から石皿の破片4点が出土している。

石 器 (第108図43～49、P L—131)

43・44とも無文の器面に沈線と刻目帯による文様を付し、45～48は原体LR横回転(45)や縦回転(47・48)、RL横回転(46)による単節の斜行縄文が付された粗製土器の破片である。49は無文土器である。



第109図 (42)II i 39土坑-1 (遺物)

以上から、43・44は第VI群7類(43)と9類(44)、45~48は第IX群、49は第VIII群に相当する。

石器 (第108・109図158・388~391、PL-164・177・178)

158は縦長剝片の周縁に使用によると考えられる刃毀れがある。388~391は石皿であるが、全て破損した一部である。扁平な自然石の平坦面に使用痕をもつが、388のように片面の全面を使

う場合と一部にのみ使用痕をもつ例がある。

〔遺構の時期〕

文様の明確な43・44はともに後期末葉に属する土器であることから、土坑も後期末葉に位置づけられるであろう。

(43) II j 34土坑

〔遺構〕 (第110図、P L-47)

頂上部から北側斜面に約10m下ったグリッドII j 34・II j 35にまたがって位置し、II i 38土坑-1の北方14mで北向きの緩斜面に立地している。

開口部径1.02m×1m、底部径1.06m×1.01mの規模をもち、最も深い南側で39cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度～71度の範囲で内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面にはほとんど凹凸もなくほぼ平坦で水平に近い。

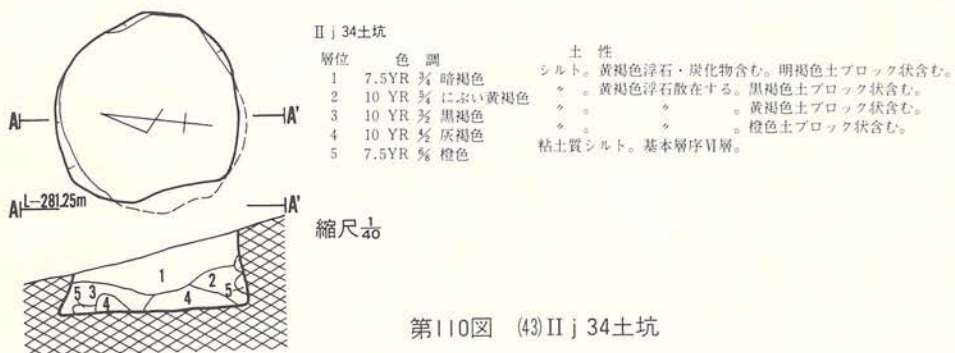
埋土は黒褐色・暗褐色・灰褐色・黄褐色・橙色のシルトや地山土が堆積し、5層に細分される。上位が暗褐色土で全体の1/2を占め、炭化物、浮石、基本層序V層の明褐色土大塊が混じる。下位が黒褐色土や灰褐色土で、壁の崩落と考えられる地山起源の黄褐色土や橙色土が塊状に多く混入している。自然堆積による埋没を示すものであろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かでないが、形状・埋土から縄文時代の土坑であろう。



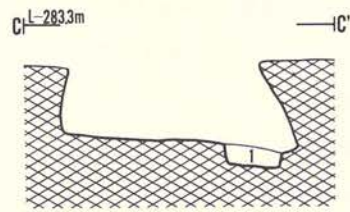
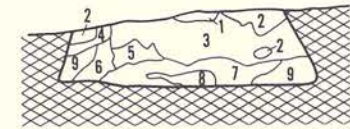
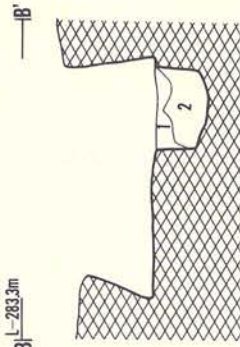
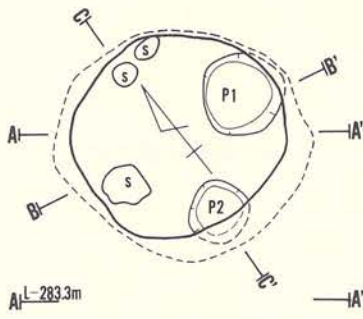
第110図 (43) II j 34土坑

(44) II j 37土坑

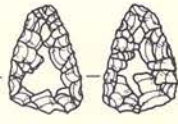
〔遺構〕 (第111図、P L 47)

尾根頂上部遺構群の北西端グリッドII j 37・38とIII a 37・38にまたがって位置し、II i 38土

II j 37土坑



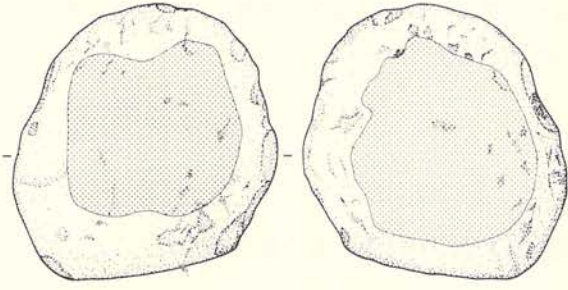
遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$



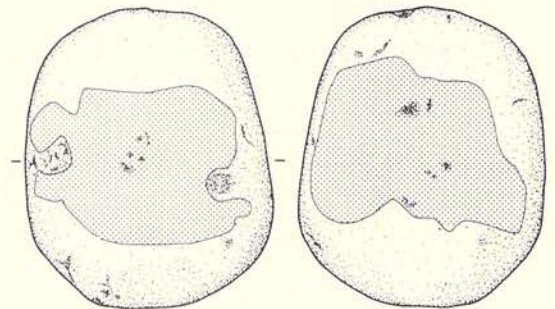
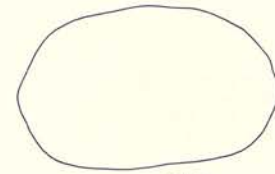
8 (石鏃) 埋土上部

層位	色調	土性
1	7.5YR 7/5 暗褐色	シルト。炭化物含む。
2	10 YR 7/5 *	* 黄褐色浮石含む。
3	10 YR 7/5 黒褐色	* 炭化物含む。砂粒散乱する。
4	10 YR 7/5 褐色	砂質シルト。黄褐色浮石含む。
5	10 YR 7/5 暗褐色	シルト。*
6	10 YR 7/5 褐色	* *
7	7.5YR 7/5 黒褐色	* 炭化物含む。基本層序V層
8	10 YR 7/5 明黄褐色	粘土質シルト。黄褐色浮石含む。基本層序VI層。
9	10 YR 7/5 に近い黄褐色	シルト。*

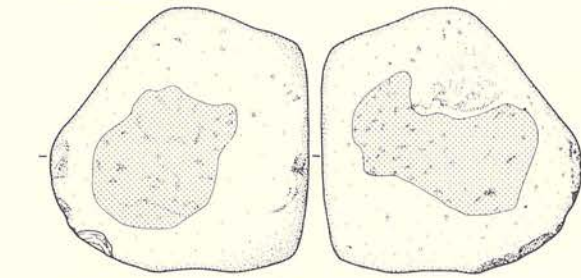
層位	色調	土性	
P 1	10 YR 7/5 に近い黄褐色	粘土質シルト。黄褐色浮石含む。	
P 2	1	10 YR 7/5 暗褐色	シルト。黄褐色浮石含む。
	2	10 YR 7/5 黄褐色	* * 基本層序V層。



238 (磨石) 埋土最下部



239 (磨石) 埋土最下部



373 (磨石) 埋土最下部No.1

遺物 土器 縮尺 $\frac{1}{2}$
石器 8 縮尺 $\frac{1}{2}$
238・239・373 縮尺 $\frac{1}{2}$

坑一1の北東4mで北向き緩斜面に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.14m×1.08m、底部径が1.38m×1.21mの規模をもち、最も深い南東部で38cmの深さをもつ若干歪んだ円形の土坑である。壁は底面に対して71度内傾し、断面形はフラスコ形である。底面にはゆるい凹凸があるものの、全体的にはほぼ水平に近い。また、東壁際と南壁際の底面にP₁(径45cm×42cm、深さ16cm)、P₂(径30cm×30cm、深さ10cm)の副穴がある。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色のシルトが堆積し、9層に細分される。上部を占める3層の黒褐色土は炭化物を多く含み、斜面下位ににあたる北側から流入している。下部の大半は黄褐色土を塊状に含む暗褐色土が堆積している。副穴の埋土も基本的には土坑本体のそれと差がない。おそらく自然堆積で埋没した土坑であろう。(Mi)

[遺物]

埋土上部から4点の土器片と石器1点、埋土最下部から石器が3点出土している。

土器 (第111図50・51、PL-131)

50・51は原体LR縦回転による単節の斜行縄文を付した体部破片である。第IX群に属する。

石器 (第111図8・238・239・373、PL-158・169・176)

238・239は磨石で、扁平な円礫の両面を磨り面としている。373は石皿としたが、磨石と同様に両面を使用面としているが、磨石よりも扁平である。

[遺構の時期]

出土した土器が中期の特徴をもつことから、中期に属する土坑であろう。

(45) II j 38土坑 (旧II i 38土坑-2)

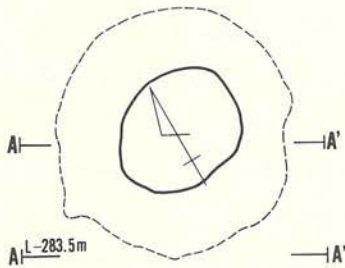
[遺構] (第112図、PL-48)

尾根頂上部遺構群の西端寄りグリッドII j 38に位置し、II j 37土坑の南3mで尾根の頂上部に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径81cm×76cm、底部径1.32m×1.26mの規模をもち、最も深い南壁で76cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して51度内傾し、断面形は底面の上位50cmに径61cmの頸部をもつフラスコ形で、頸部から上位は外傾している。底面の東壁際は径38cmの浅皿状に6cmほど低い。他は凹凸もなく平坦で水平状態に近い。

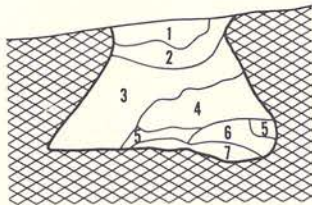
埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・明黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、7層に細分される。上位は炭化物を含む暗褐色や黒褐色のシルトである。中位は炭化物と黄褐色土を塊状に含む黒色と黒褐色のシルトで、下位は壁の崩落と考えられる地山起源の明黄褐色土が堆積している。自然堆積で埋没した土坑であろう。(Mi)

[遺物]

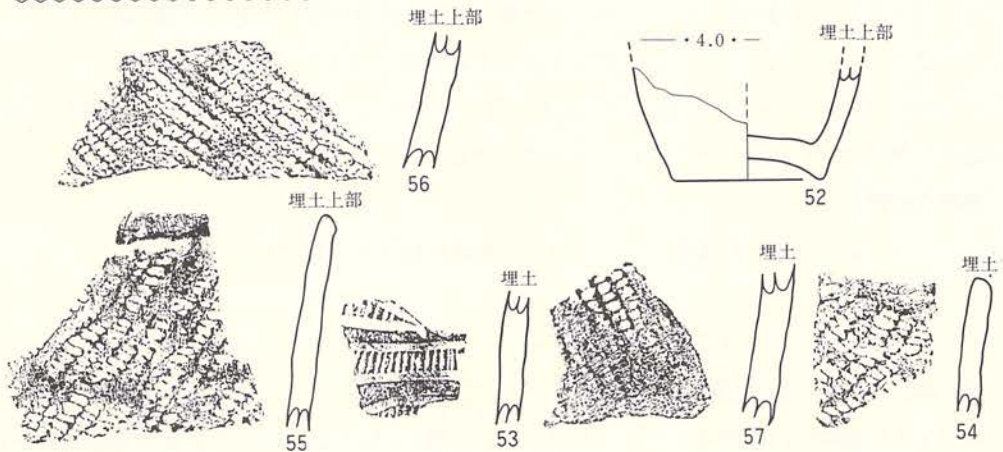


II j 38土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 3/6 暗褐色	シルト。黄褐色浮石の細粒含む。炭化物散在する。
2	10 YR 3/6 黒褐色	〃 〃 炭化物少量含む。
3	7.5YR 3/6 〃	I層と同じ。
4	10 YR 3/6 〃	〃
5	10 YR 3/6 黒色	粘土質シルト。黄褐色浮石含む。
6	7.5YR 3/6 黒褐色	シルト。黄褐色浮石・炭粒含む。
7	10 YR 3/6 明黄褐色	粘土質シルト。黒褐色土ブロック状含む。



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
 遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



第112図 (45) II j 38土坑

埋土内から10点の土器片が出土している。

土器 (第112図52~57、P L-131)

52は体部下半と底部を残す上げ底の小型土器である。器面に文様をもたない無文土器である。53は器面を沈線と横に連続する縦形の刻目帯で施文される。54~57は縄文だけを施文した粗製土器で、原体LRの縦回転(56・57)、RL縦回転(54・55)による単節の斜行縄文を付す。

以上のことから、53は第VI群8類、52は第VIII群、54~57は第IX群に相当する。

石器

出土していない。

[遺構の時期]

埋土内の出土ではあるが、時期の明らかな土器は53のみである。形状や埋土から考えて縄文時代の土坑であることは明らかであり、53の土器からみれば後期末葉に属する可能性が強い。

(46) III a 36土坑 (旧III b 36土坑-2)

〔遺構〕 (第113図、P L-50)

尾根頂上部遺構群の中央北寄りグリッドIII a 36・III b 36にまたがって位置し、II j 37土坑の北東7 mで尾根頂上部から北向斜面に若干下りた部分に立地する。他の遺構との重複はない。

開口部径52cm×47cm、底部径60cm×58cmの規模をもち、最も深い南で37cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して65度内傾し、断面形は底面の上位30cmに径50cmの頸部をもつフラスコ形である。底面には若干凹凸があり、壁際に寄るほど次第に高くなり、壁面とは丸味をもって接続している。

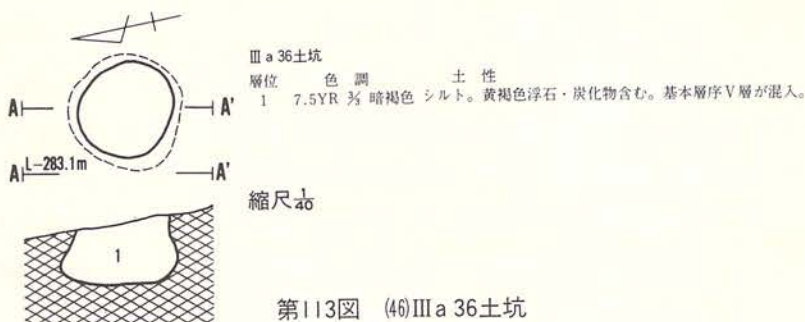
埋土は全体ににぶい黄橙色や黄褐色の地山起源のシルトが塊状に混入した暗褐色土の単層で占められる。炭化物の混入がある。単層で構成されていることから、人為的な埋没が考えられる。 (Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

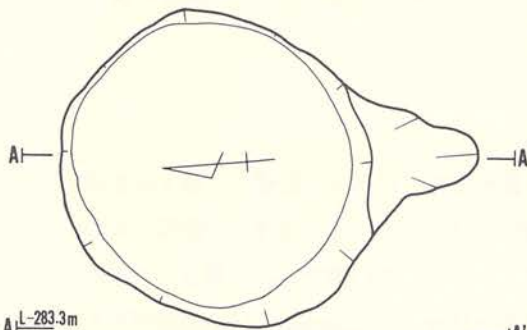
遺物の出土がないので定かでないが、形状・埋土から縄文時代の土坑と考えられる。



(47) III a 37土坑-1

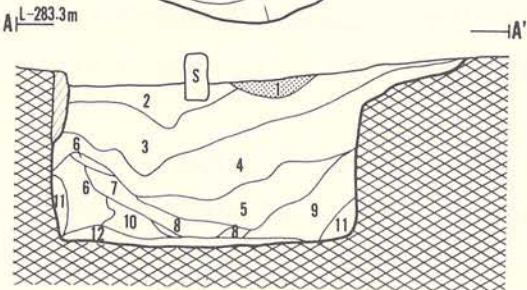
〔遺構〕 (第114図、P L-47)

尾根頂上部遺構群中央のやや北寄りのグリッドIII b 37・III b 38にまたがって位置し、II j 37土坑の東3 mで頂上部平坦面に立地している。III a 38住居跡の中央やや北西寄りと重複しているが、本土坑の南壁寄りにIII a 38住居跡の炉が設置されていることから、本土坑の方が古い。

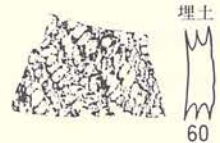
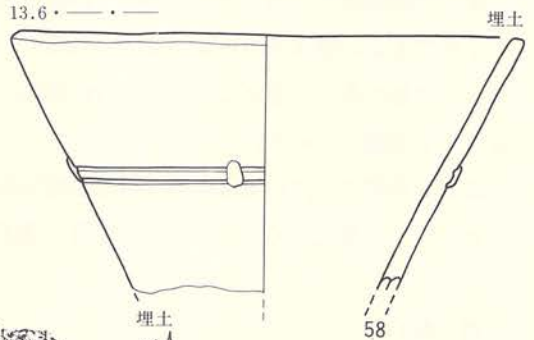
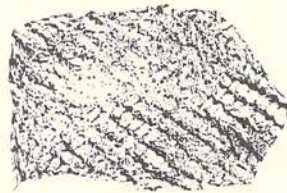


Ⅲa 37土坑-1

層位	色調	土性
1	5 YR 5/6 明赤褐色	焼土。
2	7.5YR 5/6 暗褐色	シルト。黄褐色浮石。黄褐色土含む。
3	7.5YR 5/6 黒褐色	〃。黄褐色浮石。にぶい黄橙色土・明黄褐色土含む。
4	10 YR 5/4 にぶい黄褐色	〃。浮石。明黄褐色土・にぶい・黄橙色土含む。
5	10 YR 5/4 にぶい黄褐色	〃。黄褐色浮石。明黄褐色土含む。
6	10 YR 5/4 黒褐色	〃。〃。
7	7.5YR 5/6 暗褐色	粘土質シルト。明赤褐色・黄褐色浮石含む。
8	7.5YR 5/6 黄褐色	シルト。黄褐色浮石含む。
9	10 YR 5/4 明黄褐色	〃。〃。基本層序Ⅵ層。
10	10 YR 5/4 明褐色	〃。〃。炭化物。黄褐色土含む。
11	10 YR 5/4 にぶい黄褐色	〃。基本層序Ⅶ層。
12	10 YR 5/4 黒褐色	〃。黄褐色浮石・炭化物・にぶい黄褐色土含む。



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



第114図 (47)Ⅲa 37土坑-1

開口部径1.64m×1.58m、底部径1.52m×1.42mの規模をもち、最も深い東側で92cmの深さをもつ円形の土坑である。北西壁は底面の上位46cmまでが95度外傾し、その上位は65度で内傾しているが、その他の壁は直角かやや外傾する部分が多く、断面形はピーカー形である。底面には若干凹凸がみられ、壁際に寄るほど次第に高くなるが、全体としては10cmの比高で西壁寄りの方が低くなっている。また、埋土下部の壁際の埋土には壁の崩落と考えられる地山起源の土が多く堆積していることから、壁がかなり崩壊しているものと考えられる。

埋土は黒褐色・暗褐色・明褐色・明赤褐色・明黄褐色等のシルトや地山起源の土が堆積し、12層に細分されている。最下部に黒褐色土の薄層が堆積するほかは、すべてレンズ状の堆積状況を示している。4・5・8～11はいずれも地山起源のシルトではあるが、4・5層は土坑外から投棄された土と考えられ、11は壁の崩落であろう。全体的にみると自然堆積による埋没状況ではあるが、4・5・9層の堆積から一部は人為的な要素を示している。 (Mi)

〔遺物〕

埋土内から実測可能1点を含む5点の土器が出土している。

土器 (第114図58~61、P L-131)

58は無文の器面に沈線と貼瘤による文様をもつ。59・60は原体RL横回転による単節斜行縄文の付された破片である。61もほぼ同様と考えられるが、小片のため定かでない。

以上から58は第VI群11類、59~61は第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器の中で時期が明確なのは58だけである。よって後期末葉の土坑と推定される。

(48) III a 37土坑-2

〔遺構〕 (第115図、P L-48)

尾根頂上部中央のやや北寄りのグリッドIII a 37に位置し、III a 37土坑-1の北西1.5mで頂上平坦部に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径51cm×44cm、底部径58cm×52cmの規模をもち、最も深い南側で34cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底部に対して88度で内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面には凹凸もなくほぼ平坦であるが、中央部から壁際に向かって5cmの比高で高くなる。

埋土は黒褐色と褐色のシルト2層によって構成され、黒褐色土は上位 $\frac{2}{3}$ 程を占める。全体に褐色土が塊状に混入し浮石が散在する。中間に黒色土の薄層を挟み、下位 $\frac{1}{3}$ を占める褐色土は西壁際が厚く堆積し、黒色土が縞状に混入している。自然堆積で埋没した土坑であろう。

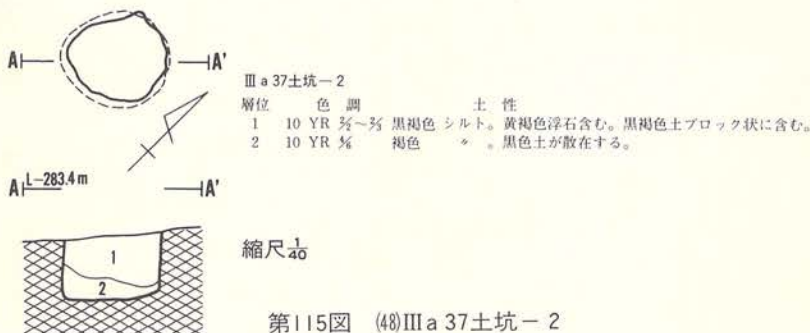
(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土遺物がないので定かでないが、形状・埋土から縄文時代の土坑と考えられる。

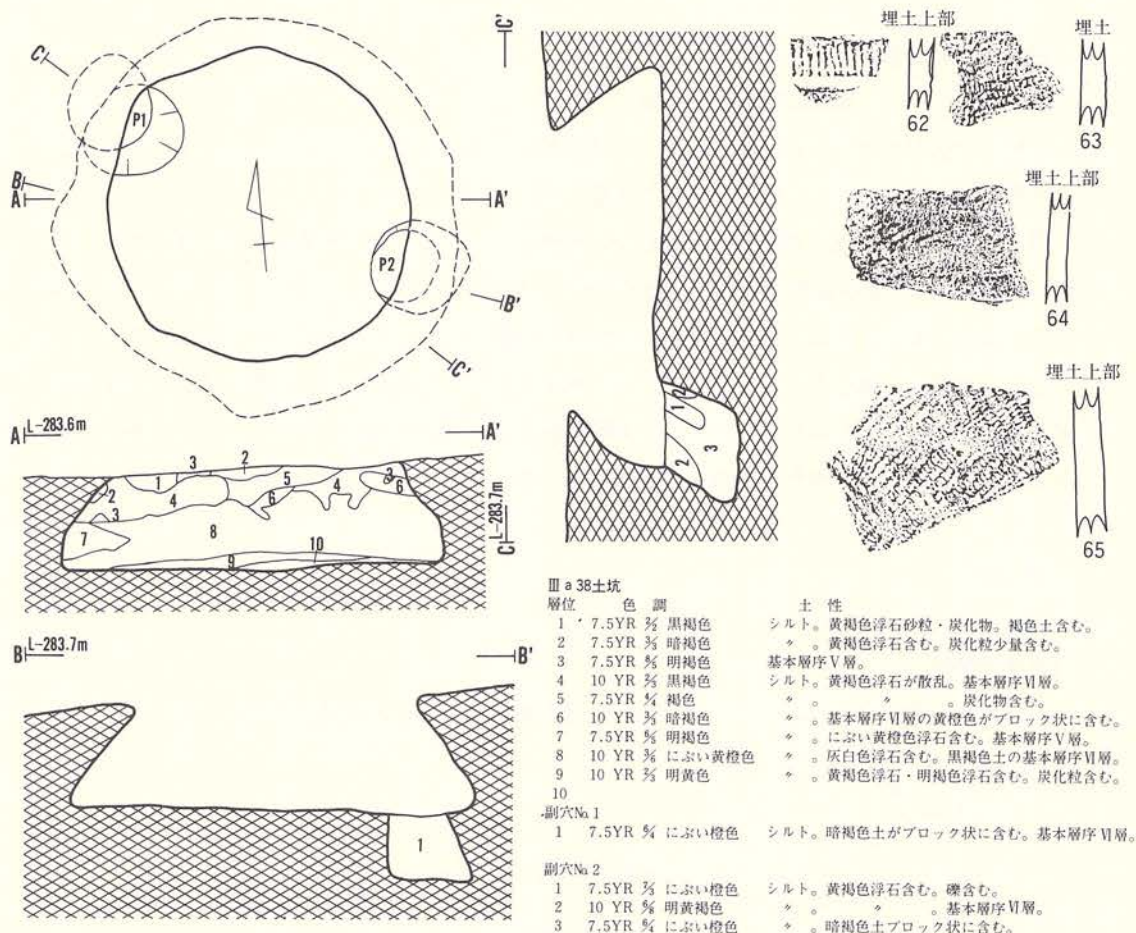


(49) III a 38土坑

〔遺構〕 (第116図、P L-49)

尾根頂上部遺構群の中央やや南寄りのグリッドIII a 38・III a 39・III b 38・III b 39にまたがって位置し、III a 37土坑-1の南4mで頂上平坦部に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.8m×1.78m、底面径2.14m×2.1mの規模をもち、最も深い東側で52cmの深さをもつ若干歪んだ円形の土坑である。壁は底面に対して56度で内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面には幾分凹凸があり、中央部西寄りが5cmほど高く、壁面とは丸味をもって接続している。また、底面の北西壁際と南東壁際には、P₁(開口部径48cm×46cm・底部径52cm×44cm、深さ39cm)、P₂(開口部径39cm×33cm・底部径49cm×47cm、深さ32cm)の断面フラ



第116図 (49)III a 38土坑

スコ形で底部が中央より外方にずれる副穴がある。底面はいずれも凹凸がなく平坦で、ほぼ水平状態に近い。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色・にぶい黄橙色・明黄色等のシルトが堆積し、10層に細分される。中でも、8層の地山を起源とするにぶい黄橙色のシルトは埋土下部の大半を占めている。底面との境は黒褐色の薄層で限られている。埋土上部は黒褐色や暗褐色のシルトが主である。以上のことから、埋土下部は投棄された土で占められるので人為的に埋め戻された可能性が強く、上部もほぼ同じと考えることができる。

なお、副穴の埋土も基本的には土坑本体と同様で、地山起源の明褐色やにぶい橙色のシルトが堆積し、 P_1 は3層に細分されるが、 P_2 は単層である。(Mi)

〔遺物〕

埋土内から9点の土器片が出土している。

土器 (第116図62~65、P L-131)

62は横に連続する縦位の刻目帯をもつ土器片で、その他は0段多条の原体L R横回転による単節斜行縄文(63)や原体L横回転の無節縄文(64)、0段多条の原体L R横・縦回転による羽状縄文(65)をもつ土器である。

以上のことから、62は第VI群9類、その他は第IX群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

時期の明確な土器は62のみであるが、63・65の縄文の特徴から考えて後期末葉に属するであろう。

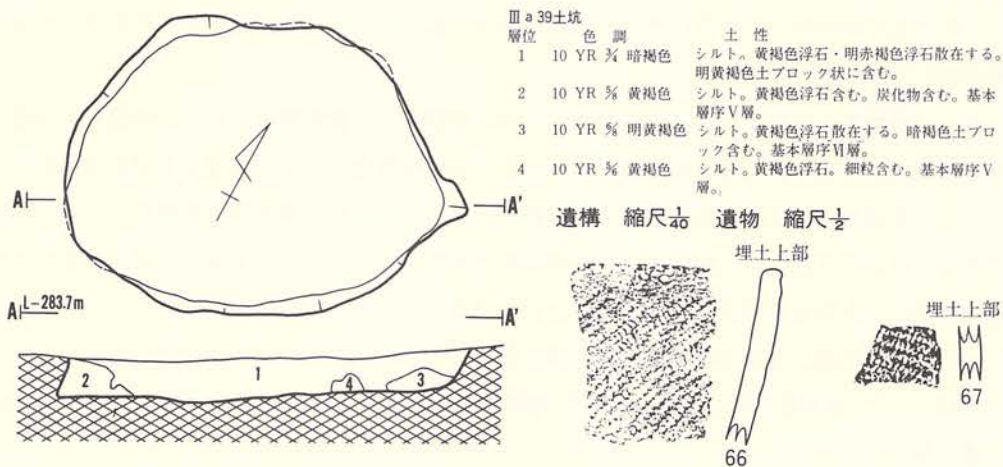
(50) III a 39土坑

〔遺構〕 (第117図、P L-49)

尾根頂上部遺構群中央の南端寄りグリッドIII a 39とIII b 39にまたがって位置し、III a 38土坑の南2 mで尾根南側の緩斜面上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.12m×1.52m、底部径1.98m×1.47mの規模をもち、最も深い北壁で21cmの深さをもつ長軸が西北西-東南東にある楕円形の土坑である。壁は底面に対して70度位内傾する部分もあるが、全体では90度~100度外傾する部分が多く、現状では浅い皿形であるが、本来はフラスコ形であった可能性がある。底面には若干凹凸があり、北壁から東壁にかけては比高5 cmで高くなっている。

埋土は暗褐色・黄褐色・明黄褐色のシルトが堆積し、4層に細分されている。大半が暗褐色



第117図 (50) III a 39土坑

土で占められ、壁際に地山起源の黄褐色や明黄褐色のシルトが堆積している。暗褐色土には炭化物と浮石を含み、上位に明黄褐色土が大塊状に多く混入している。他の層にも少量の炭化物が混じり、全体に浮石が混じる。自然堆積で埋没した土坑であろう。(Mi)

〔遺物〕

埋土内から12点の土器が出土しているが、ほとんどが小破片である。

土器 (第117図66・67、P L-131)

66は原体LR横回転による単節の斜行縄文を付し、67は同RL横回転による単節斜行縄文であり、ともに0段が多条の原体である。2点とも第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

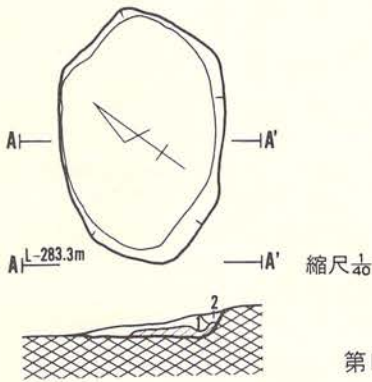
時期の明確な土器ではないが、0段多条の原体は後期後半に多様されるが、本種もほぼそれに近い。以上のことから縄文時代後期後半に属する土坑であろう。

(51) III b 36土坑

〔遺構〕 (第118図、P L-50)

尾根頂上部遺構群の北端に近いグリッドIII b 36・III b 37にまたがって位置し、III a 36土坑の南東1mで尾根の北向き緩斜面上位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.34m×84cm、底部径1.25m×81cmの規模をもち、最も深い南壁で8cmの深さをもつ北東—南西に長軸のある楕円形の土坑である。しかし、斜面下位の北側は削平や流失のため残存しないので不明な部分があり、本来は円形を示す土坑であった可能性も考えられる。壁は底



III b 36土坑

層位	色調	土性
1	7.5YR 8/ 褐色	シルト。基本層序VI層。
2	7.5YR 8/ 暗褐色	シルト。黄褐色浮石・明褐色含む。基本層序VI層。

第118図 (5)III b 36土坑

面に対して157度外傾し、現状での断面形は浅皿形である。底面は一部掘りすぎのため明確でない部分もあるが、全面に若干の凹凸があったと推定されるものの、全体的には水平状態に近かったと推定される。

埋土は褐色と暗褐色のシルトが堆積し、2層に細分されるが、ほとんどが地山起源の黄褐色のシルトを塊状に含む暗褐色土である。人為的に埋め戻されている可能性が強い。(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から縄文時代の土坑とは考えられるが、明確でない。

(52) III b 37土坑—1

〔遺構〕 (第119図、P L—50)

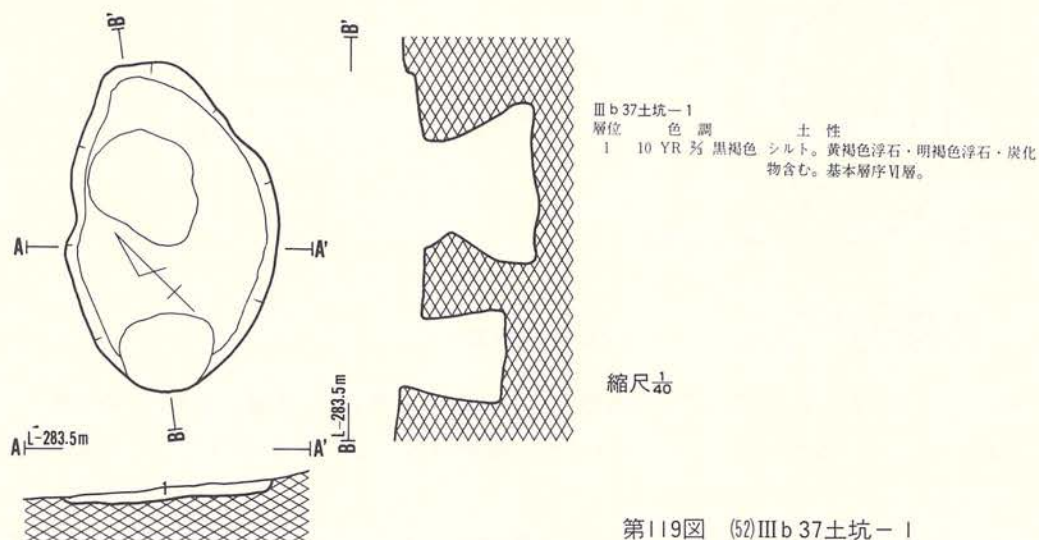
尾根頂上部遺構群の北西端グリッドIII b 37とIII c 37にまたがって位置し、III b 36土坑の南東4mの頂上部平坦面に立地している。III b 37土坑—4・5と重複している。新旧関係は本土坑が他の土坑の上部を壊していることから、本土坑の方が新しい。また、中央部分を東西方向に水道管が埋設されている。

開口部径1.74m×1.18m、底部径1.58m×1.02mの規模をもち、最も深い東壁で10cmの深さをもつ長軸が北東—南西にある楕円形の土坑である。壁は底面に対して全て外傾し、断面形は浅皿形である。底面には若干凹凸があり、北西側に5cmの比高で傾斜している。

埋土は黒褐色シルトの単層であるが、炭化物を少量含み、地山起源の黄褐色土が塊状に多く混入し、全体に浮石が散在する。自然堆積による埋没であろう。(Mi)

〔遺物〕

出土していない。



第119図 (52) III b 37土坑-1

〔遺構の時期〕

形状が若干不整ではあるが、埋土の状況は縄文時代のそれと大差がなく、本土坑も縄文時代の土坑と考えられる。

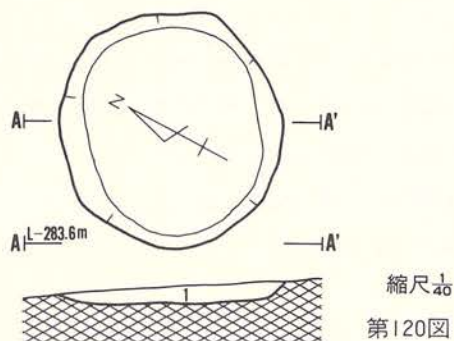
(53) III b 37土坑-2

〔遺構〕 (第120図、P L-51)

尾根頂上部遺構群の北西端に近いグリッド III b 37・III b 38にまたがって位置し、III b 37土坑-1の南々西2.5mで頂上部平坦面に立地している。他の遺構との重複関係はない。

開口部径1.26m×1.16m、底部径1.1m×91cmの規模をもち、最も深い東壁で10cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して146度で外傾し、断面形は浅い皿形を示している。底面には大小の凹凸があり、中央部が深く壁に寄ると次第に高くなっている。

埋土は炭化物を少量含み、地山起源の黄褐色土が全体に塊状をなして混入した暗褐色の単層で占められる。自然堆積による埋没かは定かでない。(Mi)



第120図 (53) III b 37土坑-2

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から、縄文時代の土坑と考えられる。

(54) III b 37土坑-3

〔遺構〕 (第121図、P L-51)

尾根頂上部遺構群の北西端に近いIII b 37・38とIII c 37・38にまたがって位置し、III b 37土坑-2の東1mで頂上部平坦面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.52m×1.36m、底部径1.42m×1.26mの規模をもち、最も深い東壁で21cmの深さをもつ北々東-南々西に長軸のある楕円形を示す土坑である。壁は床面に対して106度外傾し、断面形は浅い皿形である。底面には若干凹凸があり、北壁際が幾分高いが全体的にはほぼ水平に近い。

埋土は黒褐色・暗褐色・明褐色・黄褐色のシルトが堆積し、6層に細分されている。中央部や北壁際は木根等で攪乱を受けているが、全体に浮石を含む暗褐色と黒褐色のシルトが中央部に、基本層序第V層起源の明褐色土が南壁際、同地山起源の黄褐色土が北壁際に堆積している。

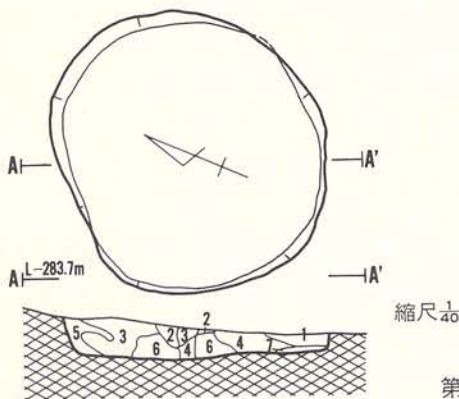
堆積状況を見ると、層が若干乱れてはいるが、ほぼ自然堆積による埋没であろう。(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から縄文時代の土坑と考えられるが、時期は不明である。



層位	色調	土性
1	7.5YR 5/2 暗褐色	シルト。黄褐色浮石の細粒含む。
2	10 YR 5/2	〃
3	7.5YR 5/2	〃。黄褐色浮石・炭化物含む。
4	7.5YR 5/2 黒褐色	〃。黄褐色浮石の細粒含む。
5	7.5YR 5/2 明褐色	〃。基本層序V層。
6	10 YR 5/2 暗褐色	〃。黄褐色浮石含む。
7	10 YR 5/2 黄褐色	〃。基本層序V層。

第121図 (54) III b 37土坑-3

(55) III b 37土坑-4

〔遺構〕 (第122図、P L-51)

尾根頂上部遺構群の北西端寄りグリッドIII b 37に位置し、III b 36土坑の南東3.5mで頂上部平坦面に立地している。III b 37土坑-1と重複しているが、新旧関係は、上部をIII b 37土坑-1に削平されていることから、本土坑の方が古い遺構である。

開口部径48cm×46cm・底部径61cm×51cmの規模をもち、最も深い南壁で56cmの深さをもつ円形の土坑である。壁面は底面に対し82度内傾し、断面形は小形のフラスコ形である。南西の壁面は崩落のためほぼ直立である。底面には幾分凹凸があり、北東側に若干傾斜している。

埋土は黒褐色・暗黄褐色・橙色・にぶい黄橙色のシルトが堆積し、5層に細分されている。上位は暗褐色や明褐色のシルトが塊状に混入し、浮石が散在する橙色土で、中位はにぶい黄褐色土の小粒が若干混入した黒褐色土で、埋土の半分を占めている。下位は基本層序第VI層起源とおもわれるにぶい黄橙色で、中間に黒褐色土の薄層を挟んでいる。上位は不明であるが、中位・下位は自然状態による堆積であろう。

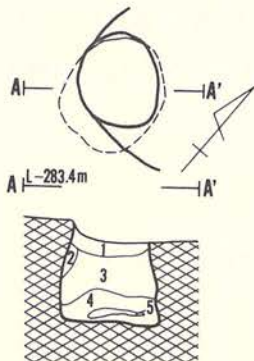
(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から、縄文時代の土坑と考えられる。



III b 37土坑-4

層位 色調

- 1 7.5YR 5/6 橙色
- 2 10 YR 5/6 暗黄褐色
- 3 7.5YR. 2/4 黒褐色
- 4 10 YR 2/4 にぶい黄橙色
- 5 10 YR 3/4 黒褐色

土性

- シルト。黄褐色浮石含む。暗褐色土・明褐色土ブロック状に含む。
- ＊。黄褐色浮石細粒含む。基本層序V層。
- ＊。黄褐色浮石含む。暗褐色土・にぶい黄褐色土ブロック状に含む。
- 粘土質シルト。浅黄褐色浮石含む。基本層序VI層。
- シルト。

縮尺 1/50

第122図 (55)III b 37土坑-4

(56) III b 37土坑-5

〔遺構〕 (第123図、P L-52)

尾根頂上部遺構群の北西端グリッドIII b 37・III c 37にまたがって位置し、III b 37土坑-4の北東1mで頂上部平坦面から北向き斜面に移行する地点に立地する。本土坑はIII b 37土坑-1の北東端にあり、III b 37土坑-1によって上部を削平されている。

開口部径55cm×49cm、底面径91cm×84cmの規模をもち、最も深い東壁で66cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して下部で84度、上部で56度内傾し、断面形はフラスコ形である。南東壁は他より大きく内傾し、南壁は逆に内傾の程度が小さいが、これは壁の崩落による

ものであろう。底面には大小の凹凸があり、南西側が4cmの比高で低い。

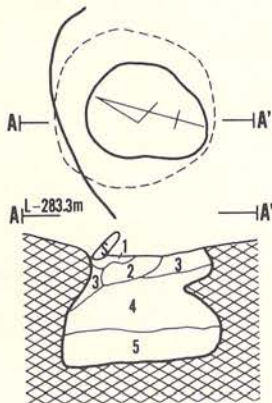
埋土は暗褐色・褐色・黄褐色・にぶい橙色のシルトが堆積し、4層に細分されている。上位は黄褐色土・褐色土が堆積し2層には炭化物を含む。中位は黒褐色・明黄褐色・にぶい黄橙色のシルトが塊状や帯状に混入し浮石が散在する暗褐色土で、埋土の半分を占める。下位はほぼ水平に堆積するにぶい橙色土で、黒褐色が混じる。4・5層が水平に近い堆積状況を示すことから、自然状態で埋没したとは思えない点がある。(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から、縄文時代の土坑と考えられる。



III b 37土坑-5

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 黄褐色	シルト。黄褐色浮石・明赤褐色浮石含む。
2	7.5YR 5/6 褐色	〃。黄褐色浮石・炭化物含む。
3	10 YR 5/6 暗褐色	〃。黄褐色浮石・炭化物含む。明赤褐色浮石含む。
4	7.5YR 5/6 〃	〃。黄褐色浮石の細粒含む。
5	7.5YR 5/4 にぶい橙色	粘土質シルト・黒褐色土ブロック状に含む。

縮尺 1/50

第123図 (56) III b 37土坑-5

(57) III b 38土坑-1

〔遺構〕 (第124図、P L-52)

尾根頂上部遺構群の中央東寄りグリッドIII b 38に位置し、III b 37土坑-2の南2mで頂上部平坦面に立地している。本土坑の南端がIII b 38土坑-2によって壊されている。

開口部径1.41m×1.38m、底部径1.62m×1.53mの規模をもち、最も深い西壁で16cmの深さをもつ円形の土坑である。壁面は底面に対して83度内傾し、断面形はフラスコ形である。底面には若干凹凸があり、壁際に向って次第に高くなっている。

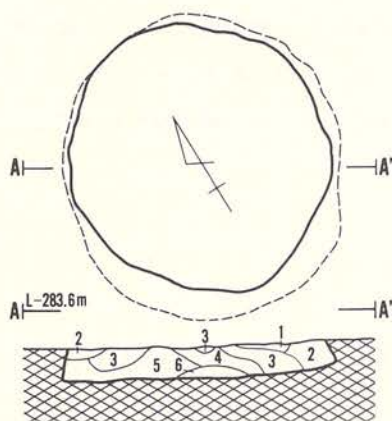
埋土は黒褐色・暗褐色・明褐色・黄褐色・明黄褐色のシルトが堆積し、6層に細分される。中央部は少量の炭化物や明褐色土の小塊が混入した、暗褐色土が山形状に堆積している。壁際は上位から明黄褐色土・明褐色土・黒褐色土で、中央部の暗褐色土を一部覆う状態で堆積している。埋土の堆積状況を観察すると、明褐色や明黄褐色のシルトは基本層序V層を起源とすることから、壁の崩落があったものと推定され、本来はもっと深いフラスコ形の土坑であったものと考えられる。おそらく、自然堆積で埋没した土坑であろう。(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から考えて、縄文時代の土坑であろう。



III b 38土坑-1

層位	色調	土性
1	10 YR 8/2 明黄褐色	シルト。基本層序V層。
2	7.5YR 8/2 明褐色	。黄褐色浮石の細粒含む。
3	10 YR 8/2 黒褐色	。
4	10 YR 8/2 にぶい黄褐色	。黄褐色浮石・明赤褐色浮石含む。
5	7.5YR 8/2 暗褐色	。明赤褐色浮石・炭化物を含む。
6	10 YR 8/2 黄褐色	。黄褐色浮石・炭化物を含む。

縮尺 1/40

第124図 (57)III b 38土坑-1

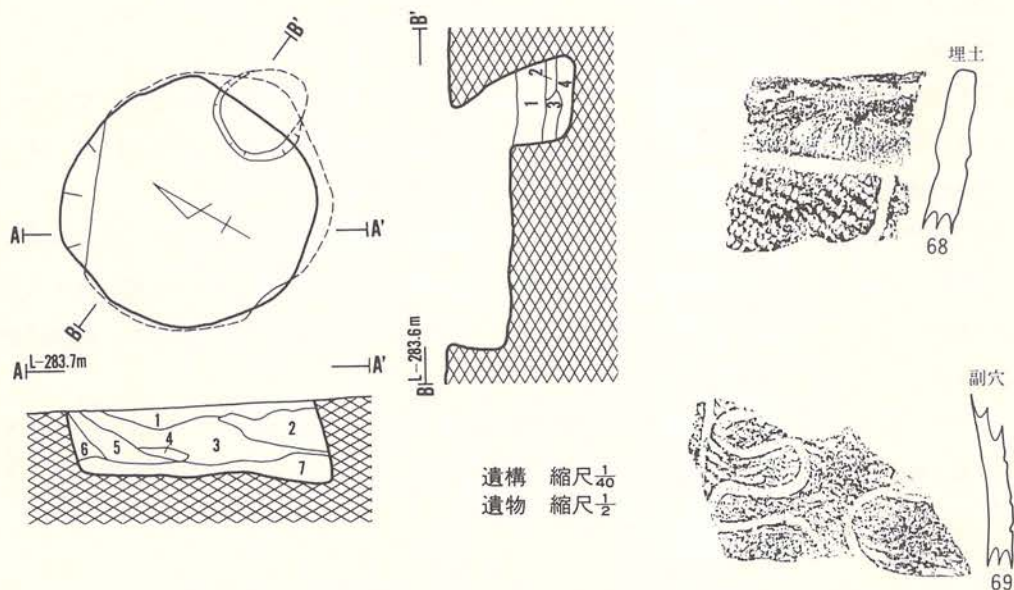
(58) III b 38土坑-2

〔遺構〕 (第125図、P L-52)

尾根頂上部遺構群の中央東寄りグリッドIII b 38に位置し、III b 38土坑-1の南東部に接し頂上部平坦面に立地している。本土坑はIII b 38土坑-1の一部を壊しており、さらにIII b 38住居跡とも重複しているが、新旧関係は定かでない。

開口部径1.38m×1.34m、底部径1.36m×1.3mの規模をもち、最も深い西壁で42cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度から79度内傾する部分と、90度から110度外傾する部分(北壁)があるものの、本来の断面形は頸部をもたないフラスコ形を示すものであろう。底面には若干凹凸があり、全体が比高5cmで東側に傾斜している。壁の外傾する北壁と大きく内傾する東壁は壁の崩落があったものであろう。また、東壁の底面には規模50cm×48cm・深さ30cmで断面形がフラスコ形となる副穴がある。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・にぶい褐色・黄褐色・にぶい黄褐色・明黄褐色のシルトが堆積し、7層に細分される。上部は地山起源の黄褐色土が浅皿状に堆積し、中部は壁際に明黄褐色土・にぶい黄褐色土が入り、中央に炭化物を少量含む褐色土や暗褐色土が堆積している。下部は明黄褐色土を塊状に含む黒褐色土が堆積している。副穴の埋土は、上部が炭化物を少量含む黒褐色土、中部がにぶい黄褐色土と黄褐色土、下部に明黄褐色土が堆積し、基本的には土坑本体の埋土と同じである。7層以下(副穴も含む)は水平状態に近い堆積状況を示すことと、1層が地山起源の土であることから、この部分は人為的な埋め戻しか残土の投棄があったものと考えられ、2～6層は北西からの流れ込みを示している。中間は自然堆積の可能性もあるが、全体的にみれば人為的な可能性の方が強い。(Mi)



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

Ⅲ b 38土坑-2

層位	色調	土性
1	10 YR 5% 黄褐色	シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。暗褐色土ブロック状に含む。
2	10 YR 5% にふい黄褐色	＊。黄褐色浮石・赤褐色浮石含む。黄褐色土・暗褐色土ブロック状に含む。
3	7.5YR 5% 暗褐色	＊。黄褐色浮石・赤褐色浮石・炭化物含む。黄褐色土ブロック状に含む。
4	7.5YR 5% にふい褐色	＊。黄褐色浮石・炭化物含む。にふい黄褐色土ブロック状に含む。
5	7.5YR 5% 褐色	＊。黄褐色浮石・炭化物・赤褐色浮石含む。明黄褐色土ブロック状・粒状に含む。
6	10 YR 5% 明黄褐色	＊。黄褐色浮石・赤褐色浮石含む。基本層序V層。
7	10 YR 5% 黒褐色	＊。黄褐色浮石・赤褐色浮石含む。明黄褐色土ブロック状に含む。
副穴		
1	7.5YR 5% 黒褐色	シルト。黄褐色浮石・明赤褐色浮石含む。にふい黄褐色土・明黄褐色土ブロック状に含む。
2	10 YR 5% にふい黄褐色	粘土質シルト。基本層序Ⅳ層。暗褐色土ブロック状に含む。
3	10 YR 5% 黄褐色	シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。にふい黄褐色土ブロック状に含む。
4	10 YR 5% 明黄褐色	粘土質シルト。黄褐色浮石含む。

第125図 (58)Ⅲ b 38土坑-2

〔遺物〕

埋土内から土器片が2点出土している。

土器 (第125図68・69、P L-132)

68は器面に原体R L横回転による単節の斜行縄文を付した後、体部と口縁部を沈線で区画して口縁部の縄文を磨消する。頸部の沈線から体部の下位にも沈線を付して区画し、縄文を磨消する。69は原体Rの無節縄文を付した後、直線や曲線で体部を区画し、一部の縄文を磨消する。

以上のことから、68は第Ⅲ群6類、69は第Ⅳ群2類に位置づけられる。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は、68が中期末葉、69が後期初葉に属する。よって中期末葉か後期初葉の土坑と推定される。

(59) III b 38土坑-3

〔遺構〕 (第126図、P L-53)

尾根頂上部遺構群の中央東端に近いグリッドIII b 38・III e 38にまたがって位置し、III b 38土坑-1の東2 mで頂上部平坦面に立地している。III b 38住居跡の壁溝が本土坑の東端を、そして同住北西隅の柱穴が西端をそれぞれ壊している。

開口部径1.16m×1.04m、底部径1.05m×1.03mの規模をもち、最も深い北壁で18cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度～107度外傾する部分と、90度～85度内傾する部分(南壁)があり、断面形は浅いピーカー形を示している。底面は若干凹凸があり、壁際に寄ると次第に高くなる。

埋土は、最上部中央寄りに少量の炭化物を含む褐色土が堆積するほかは、暗褐色土で占められ、炭化物と褐色土の塊が混入しさらに浮石が散在している。最上部は地山起源の土であることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

〔遺物〕

埋土内から7点の土器片が出土している。

土器 (第126図70～73、P L-132)

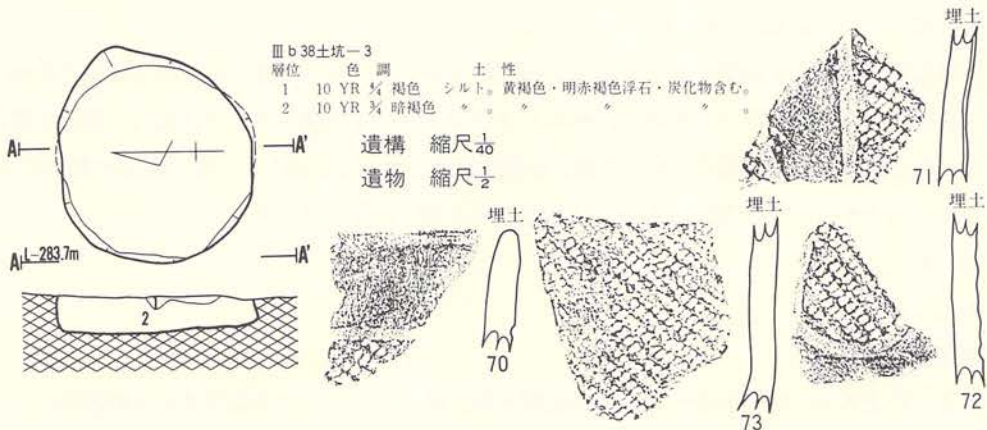
70～73とも原体R L縦回転による単節斜行縄文が付され、70～72はその後沈線で区画され縄文を磨消している。以上のことから、全て第III群2類に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器はいずれも中期末葉に位置づけられることから、本土坑も中期末葉に属するであろう。



第126図 (59)III b 38土坑-3

(60) III b 38土坑— 4

〔遺 構〕 (第127図、P L—53)

尾根頂上部遺構群の中央東寄りグリッドIII b 38・III b 39にまたがって位置し、III a 38土坑の東2 mで頂上部平坦面に立地している。南側の一部がIII b 38住居跡の壁溝と柱穴によって壊されている。

開口部径1.78m×1.76m、底部径1.58m×1.56mの規模をもち、最も深い南東壁で39cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度～101度外傾し、断面形は浅い皿形である。底面には若干凹凸があり、壁に寄るほど高くなる。

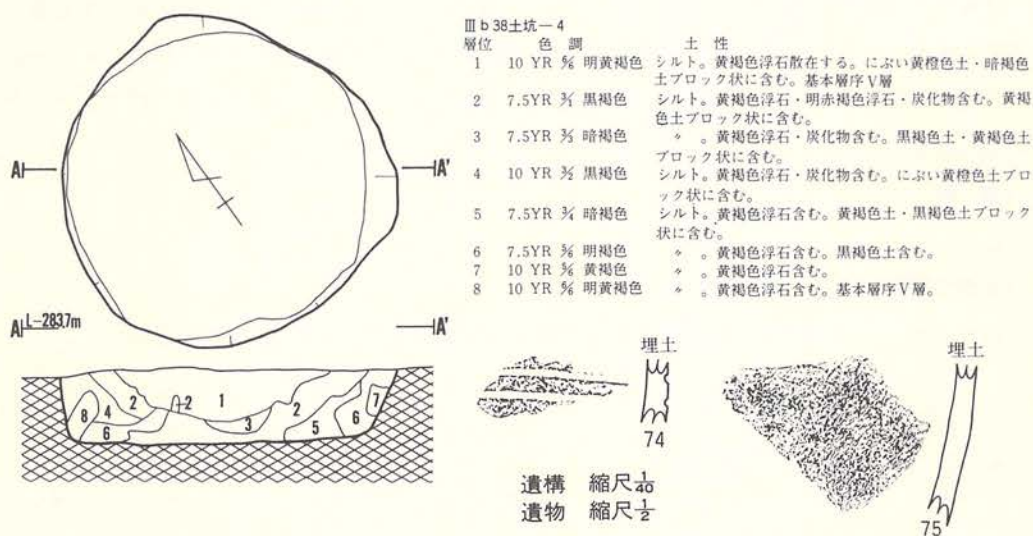
埋土は黒褐色・暗褐色・明褐色・黄褐色・明黄褐色のシルトや基本層序第V層・VI層を起源とする土が堆積し、8層に細分される。1層は汚れのない基本層序第V層相当の明黄褐色土が堆積し、2層～5層は黄褐色土を塊状に混入した黒褐色土や暗褐色土である。壁際の6～8層は地山起源の明褐色・黄褐色・明黄褐色の土が堆積している。堆積状況の観察では、1層の地山起源の土に疑問があり、本土坑は人為的に埋め戻された可能性が強い。(Mi)

〔遺 物〕

埋土内から7点の土器片が出土している。

土 器 (第127図74・75、P L—132)

74は無文の器面に二条横走る並行沈線の付された土器である。75は無文土器である。以上



第127図 (60)III b 38土坑— 4

のことから74は第VI群11類、75は第VIII群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は文様や胎土・焼成の状況から後期に属すると考えられる。よって本土坑も後期頃の遺構と推定される。

(61) III b 39土坑

〔遺構〕 (第128図、P L-53)

尾根頂上部遺構群の中央南端に近いグリッド III b 39 と III c 39 にまたがって位置し、III a 39 土坑の東 4 m で南に若干傾斜する地点に立地している。III b 38 住居跡の南東隅と重複しているが、本土坑が同住居跡を壊している。

開口部径 1.24m × 1.19m、底部径 1.21m × 94cm の規模をもち、最も深い南東壁で 28cm の深さをもつ北々西一南々東に長軸のある楕円形の土坑である。壁は底面に対して 90度～85度内傾する部分(南東壁)と 90度～102度外傾する部分があるものの、外傾する壁が多いことから断面形は浅い皿形を示すものであろう。底面には若干凹凸があり、壁際に寄るほど高くなる。

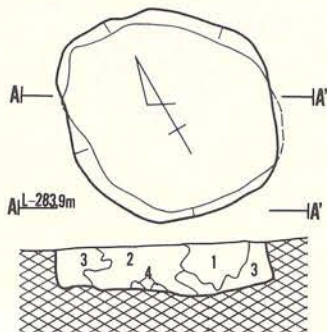
埋土には黒褐色と暗褐色のシルトが堆積し、4層に細分される。暗褐色土には少量の炭化物と黄褐色土が塊状に混入し、さらに全体に浮石が散在している。黒褐色には最大径 2cm もある炭化物を多量に含み、浮石が全体に散在する。底面中央の直上に地山起源の黄褐色土が 8cm 位の塊状で堆積している。全体として堆積状況が不規則であることから、人為的に埋め戻された可能性が強い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状・埋土の堆積状況、他遺構との重複関係から考えて、縄文時代の土坑であろう。



III b 39土坑

層位	色調	土性
1	7.5YR ㉔ 暗褐色	シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。
2	7.5YR ㉔ 黒褐色	㉔。黄褐色浮石・明赤褐色浮石・炭化物含む。
3	7.5YR ㉔ 暗褐色	㉔。黄褐色浮石・炭化物含む。黄褐色のブロック混入。
4	10 YR ㉔ 黄褐色	㉔。基本層序V層。

縮尺 1/40

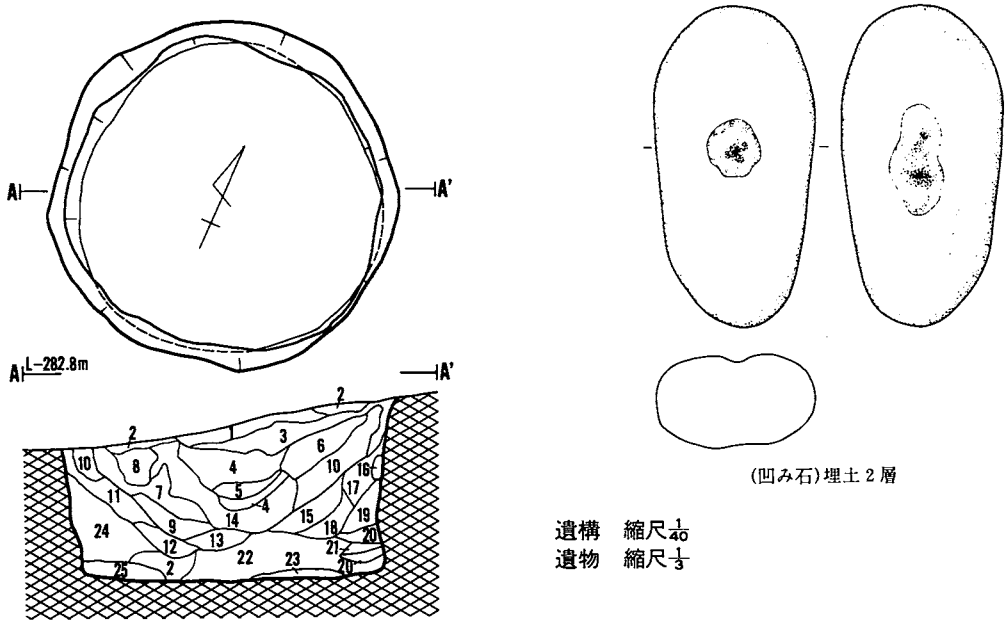
第128図 (61) III b 39土坑

(62) III c 35土坑

〔遺構〕 (第129図、P L-54)

尾根頂上部遺構群としては最も北のグリッドIII c 35に位置し、II j 34土坑の東10mで北向き斜面の上位に立地している。頂上部遺構群としては他遺構と10m位の距離があり、重複する遺構はない。

開口部径1.86m×1.84m、底部径1.61m×1.59mの規模をもち、最も深い北東壁で91cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は原形に近いとおもわれる南東壁で、底面の上位24cmまでは78度



III c 35土坑

層位	色調	土性
1	7.5YR 黒褐色	シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。
2	7.5YR 灰褐色	十和田A 降下火山灰。
3	7.5YR	シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。十和田A 降下火山灰。
4	7.5YR 黒色	〃
5	7.5YR 黒褐色	〃。十和田A 降下火山灰含む。
6	10 YR にぶい橙色	〃
7	10 YR	〃
8	7.5YR 褐色	〃。炭化物含む。
9	10 YR にぶい黄褐色	〃。黄褐色浮石・炭化物含む。にぶい橙色土ブロック状に含む。
10	7.5YR 暗褐色	〃。黄褐色浮石含む。
11	7.5YR 黒褐色	〃。にぶい橙色土ブロック状に含む。
12	7.5YR 褐色	粘土質シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。黄褐色土ブロック状に含む。
13	7.5YR	〃。炭化物含む。にぶい橙色土ブロック状に含む。
14	7.5YR 黒褐色	シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。灰褐色土ブロック状に含む。
15	10 YR にぶい黄褐色	粘土質シルト。黄褐色浮石・明褐色浮石・炭化物含む。
16	7.5YR にぶい橙色	シルト。基本層序VI層。
17	7.5YR 暗褐色	〃。にぶい橙色、黄褐色土ブロック状に含む。
18	10 YR 黄褐色	〃。基本層序VI層。
19	10 YR 明黄褐色	粘土質シルト。基本層序VI層。
20	10 YR にぶい橙色	〃
21	10 YR 黄褐色	〃。明褐色土ブロック状に含む。
22	10 YR にぶい橙色	〃。黄褐色土・にぶい橙色土ブロック状に含む。
23	10 YR にぶい黄褐色	〃
24	10 YR 暗褐色	シルト。黄褐色土・にぶい橙色土ブロック状に含む。
25	10 YR にぶい黄褐色	〃。炭化物含む。黄褐色土・明褐色土含む。

第129図 (62)III c 35土坑

で内傾し、その上位は96度～112度で外傾している。全体でみると、下部は85度～95度位、上部は90度～110度位となり、底面の上位24cmに径1.58mの頸部をもつことから、現状の断面形はビーカー形に近いが、本来はフラスコ形であったと推定される。底面には若干凹凸があり、壁に寄るほど幾分高くなる。

埋土は各種の色調を示すシルトや地山を起源とする土が堆積し、色調・混入物・土性によって25層に細分される。全体的な傾向として上部は炭化物を多く含む黒色～黒褐色土で、その下位に褐色～にぶい橙色土が堆積している。中位にはにぶい橙色土を塊状に含む黒褐色～褐色土で、下位は北壁寄りが暗褐色土、南壁寄りが黄褐色～にぶい橙色土で占められる。最下位にはにぶい黄褐色土が堆積している。間層のところどころに地山起源の土が堆積している。堆積状況を見ると、全て遺構外から中心部に向かってレンズ状に堆積していることから、自然堆積で埋没した土坑であろう。

〔遺物〕

埋土上部から石器が1点出土している。

土器

出土していない。

石器 (第129図307、P L—172)

全長12.7cm、最大巾6.5cm、厚さ3.5cm、重さ45.3gの断面がやや扁平で細長い円礫の両面を凹み石として使用している。石材は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

形状・埋土の状況から縄文時代の土坑と考えられる。

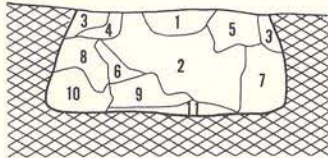
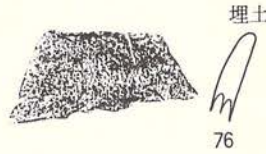
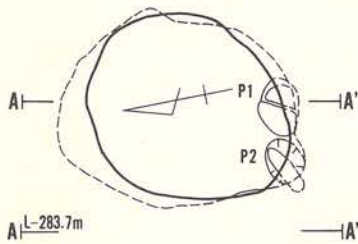
(63) III c 38土坑—1

〔遺構〕 (第130図、P L—54)

尾根頂上部遺構群の東端寄りグリッドIII c 38に位置し、III b 38土坑—3の東1mで頂上部平坦面に立地している。南側の一部が北西—南東に走るIII b 38住居跡の壁溝で壊されている。

開口部径1.12m×96cm、底部径1.28m×98cmの規模をもち、最も深い北壁で58cmの深さをもつ北々東—南々西に長軸のある楕円形の土坑である。若干不規則ではあるが、壁は底面に対して90度～81度内傾し、断面形はフラスコ形である。底面にはほとんど凹凸がなく平坦ではあるが、西側が比高5cmで低くなっている。南壁際の底面にP₁(規模径31cm×22cm、深さ3cm)、P₂(規模径22cm×19cm、深さ3cm)の副穴が検出され、P₂の底面は壁を挟んで外方に位置する。

埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・にぶい褐色・にぶい黄褐色等のシルトが堆積し、11層に細分される。上部や壁際に堆積する1・3～5・7・8層には地山を起源とする黄褐色土が大塊状



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

III c 38土坑-1

層位 色 調

- 1 10 YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色
- 2 10 YR $\frac{3}{4}$ *
- 3 7.5YR $\frac{3}{4}$ 褐色
- 4 7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色
- 5 7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色
- 6 10 YR $\frac{3}{4}$ *
- 7 7.5YR $\frac{3}{4}$ *
- 8 10 YR $\frac{3}{4}$ 褐色
- 9 7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色
- 10 10 YR $\frac{3}{4}$ にぶい黄褐色
- 11 7.5YR $\frac{3}{4}$ にぶい褐色

土 性

- シルト。黄褐色浮石含む。黒褐色土・明黄褐色土・にぶい黄褐色土、ブロック状に混入。
- * 黄褐色浮石・明赤褐色浮石・炭化物含む。にぶい黄褐色土、ブロック状に混入。
- * 黄褐色浮石・炭化物含む。黄褐色土ブロック状に含む。
- * 黄褐色浮石含む。黄褐色土帯状に含む。
- * 黄褐色浮石・明赤褐色浮石・炭化物含む。にぶい黄褐色土ブロック状に混入。
- * 黄褐色浮石・炭化粒含む黄褐色土ブロック状に混入。
- * 黄褐色浮石・明赤褐色浮石・炭化粒含む。にぶい黄褐色土・黄褐色土ブロック状に混入。
- * 黄褐色浮石・炭化粒含む。にぶい黄褐色・明褐色土ブロック状に混入。
- * 黄褐色浮石・明赤褐色浮石・炭化粒含む。明黄褐色土ブロック状に混入。
- 粘土質シルト。黄褐色浮石含む。黒褐色土・にぶい黄褐色土ブロック状に混入。
- * 黄褐色浮石・炭化粒含む。にぶい黄褐色土ブロック状に混入。

第130図 (63)III c 38土坑-1

で多量混入し、2層には炭化物を多く含むが、黄褐色土の混入は少ない。10・11層は壁の崩落による地山起源の土である。

〔遺物〕

埋土内から土器片が1点出土している。

土器 (第130図76、P L-132)

76は無文土器の口縁部破片である。胎土や焼成・色調をみると第III群に入る様相をもつ。

石器

出土していない。

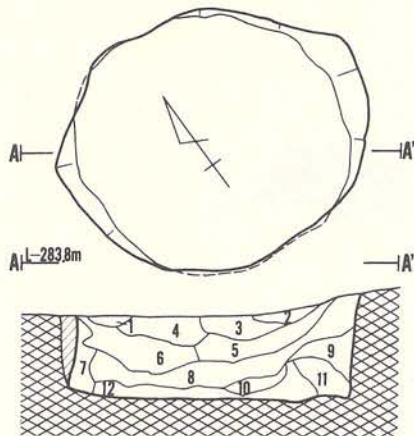
〔遺構の時期〕

76が第III群に入る土器と考えられるので、中期末葉に属する土坑であろう。

(64) III c 38土坑-2

〔遺構〕 (第131図、P L-54)

尾根頂上部遺構群の南東寄りグリッドII c 38・II c 39にまたがって位置し、III b 38土坑-4の東3 mで頂上部平坦面に立地している。III b 38住居跡の炉が本土坑の西側上面に設置されて



III c 38土坑-2

層位	色調	土性
1	5 YR 8/ 橙色	焼土。
2	7.5YR 8/ 黒褐色	シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。黄褐色土ブロック状に混入。
3	10 YR 8/ 明黄褐色	シルト。黄褐色浮石含む。
4	7.5YR 8/ 暗褐色	黄褐色浮石・炭化物含む。黄褐色土ブロック状に混入。
5	10 YR 8/ 黒褐色	シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。黄褐色土ブロック状に混入。
6	10 YR 8/ *	*
7	7.5YR 8/ 明褐色	*
8	7.5YR 8/ 暗褐色	シルト。黄褐色・赤褐色浮石・炭化物含む。黄褐色土ブロック状に混入。
9	10 YR 8/ にぶい黄橙色	シルト。黄褐色・明赤褐色浮石・炭化物含む。にぶい黄橙色土・黄褐色土ブロック状に混入。
10	10 YR 8/ 暗褐色	シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。黄褐色土含む。
11	10 YR 8/ にぶい黄褐色	黄褐色浮石・炭化物含む。明赤褐色土・にぶい黄褐色土ブロック状に混入。
12	10 YR 8/ 灰黄褐色	シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。にぶい黄褐色土・黄褐色土ブロック状に混入。

縮尺 1/50

第131図 (64)III c 38土坑-2

いることから、本土坑の方が古い遺構である。

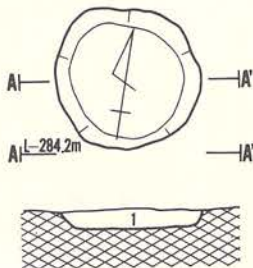
開口部径1.69m×1.31m、底部径1.42m×1.34mの規模をもち、最も深い南東壁で57cmの深さをもつ東西に長軸のある楕円形の土坑である。壁は底面に対して90度~100度外傾する部分と85度位内傾する部分があり、現状の断面形はピーカー形であるが、本来はフラスコ形であった可能性が大きい。底面には若干凹凸があり、全体が比高5cmで南に傾斜し、なお壁際に寄るほど高くなっている。

埋土は黒褐色・暗褐色・灰黄褐色・明黄褐色等各種の色調を示すシルトや地山起源の土が堆積し、12層に細分されている。上部は黒褐色土を帯状に含む明黄褐色土や暗褐色土が堆積し、中部は上半が黒褐色土、下半が暗褐色で、炭化物や地山起源の黄褐色土を塊状に混入する。また、北西壁付近には明褐色土、南東壁付近には黄橙色土が堆積する。下部は多くの炭化物を含み、黒褐色土を塊状に混入する灰黄褐色土である。以上のことから、上部層はIII b 38住居跡を構築する際かそれ以前に、人為的に埋め戻された可能性がある。5・6層以下は自然堆積による埋没と考えられる。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]



III c 39土坑

層位	色調	土性
1	7.5YR 8/ 黒褐色	シルト。明褐色浮石・炭化物含む。黄褐色土ブロック状に混入。

縮尺 1/50

第132図 (65)III c 39土坑

形状・埋土と他遺構との重複状況から、縄文時代の土坑と考えられる。

(65) III c 39土坑

〔遺 構〕 (第132図、P L-43)

尾根頂上部遺構群の南東端寄りグリッドIII c 39・III d 39にまたがって位置し、III b 39土坑の東4 mで頂上部から南西向き緩斜面に下った部分に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径79cm×74cm、底部径62cm×58cmの規模で、最も深い北壁で13cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して137度外傾し、断面形は浅皿形である。底面には壁際ほど大小の凹凸があり、全体が西壁寄りに若干傾斜している。

埋土は少量の炭化物と黄褐色土を塊状に混入し、全体に浮石が散在する黒褐色のシルトである。おそらく自然堆積で埋没した土坑であろう。

〔遺 物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状・埋土の状況から縄文時代の土坑と推定される。

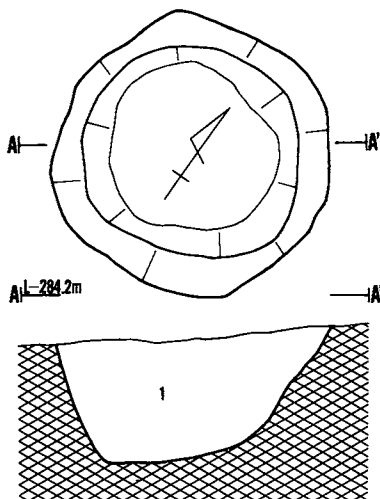
(66) III c 41土坑

〔遺 構〕 (第133図、P L-49)

南東部遺構群の北西端グリッドIII c 41・42、III d 41・42にまたがって位置し、III c 39土坑の南8 mで南西向き斜面の上位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.54m×1.44m、底部径90cm×88cmの規模をもち、最も深い北東壁で66cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して115度～135度外傾し、断面形は楕円形に近い。底面には凹凸があり、全体的に比高7 cmで南側に傾斜し、さらに壁際が高くなっている。

埋土は地山を起源とする黄褐色のシルトであ



III c 41土坑
層位 色 調 土 性
1 10 YR 5% 黄褐色 粗いシルト。淡黄褐色浮石・明赤褐色浮石含む。黒褐色土ブロック状に混入。

縮尺 1/50

第133図 (66)III c 41土坑

るが、上位に黒色土を塊状に混入し、全体に浮石が散在する。浮石は大半が粒径5cm～10cmの淡黄褐色のもので、僅かに明赤褐色のものもある。埋土が地山起源の土の単層であることから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の堆積状況から考えて縄文時代の土坑であろう。

(67) III c 49土坑

〔遺構〕 (第134図、P L—55)

南東部遺構群の南端グリッドIII c 49に位置し、III c 41土坑の南30mで西向き斜面の下位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径96cm×74cm、底部径82cm×38cmの規模をもち、最も深い東壁で75cmの深さをもつ東西に長軸のある楕円形の土坑である。なお、底部は検出面から33cm下位と東壁の下位75cmと二段構造に近い様相を示し、東壁下の底面は径20cm×20cm位の円形である。壁の状況も不規則で、西壁は大きく傾斜(外傾)し、東壁は95度位外傾している。断面形をみると、皿状に近い土坑の東壁際に西から東に傾斜する柱穴状の土坑をもっている。

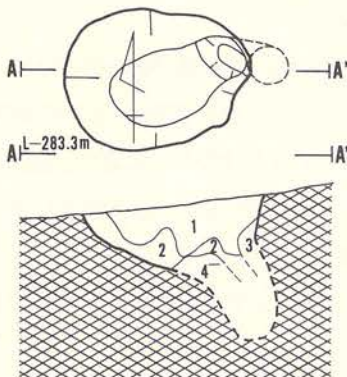
埋土は黒色・黒褐色・暗褐色のシルトが堆積し、3層に細分されている。いずれの層にも浮石粒が混入し、3層には基本層序第V層粒が混じる。自然的な埋没か人為的なものかは定かでない。

(Mi)

ない。

〔遺物〕

出土していない。



III c 49土坑

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/2 黒褐色	砂質シルト・浮石と砂粒が混じる。
2	7.5YR 5/2 暗褐色	＊。1層に基本層序V層混じる。
3	7.5YR 5/2 黒色	シルト。浮石粒含む。基本層序V層が混入。
4	7.5YR 5/2 黒色	＊。小粒の浮石含む。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第134図 (67)III c 49土坑

〔遺構の時期〕

当遺跡で検出されている土坑の中で、このような形状や規模を具備している土坑はない。遺物の出土もなく、時期を決定する資料を欠いているが、縄文時代の土坑ではない可能性が高い。

(68) III d40土坑

〔遺構〕 (第135図、P L—55)

尾根頂上部遺構群の東端寄りグリッドIII d 40に位置し、III c 39土坑の東3.5m で南西向き斜面の上位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.26m×1.06m、底部径1.04m×84cmの規模をもち、最も深い北東壁で18cmの深さをもつ北東—南西に長軸のある楕円形の土坑である。壁は底面に対して、118度外傾し、断面形は浅皿形である。底面には若干凹凸があり、南西壁際が中央部より4cm位低い、他は壁に寄るほど高くなっている。

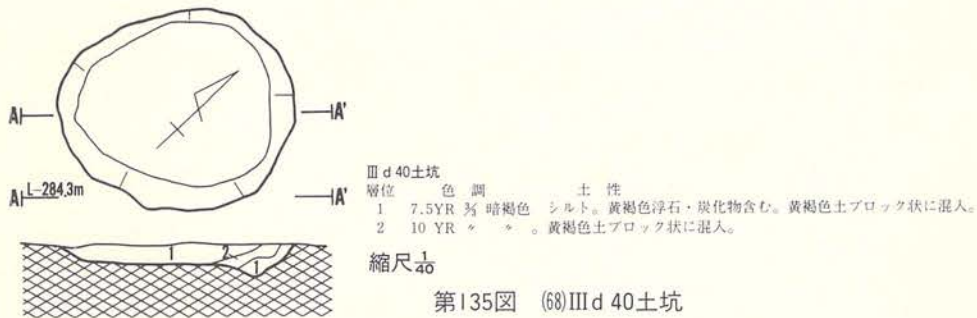
埋土は多くの炭化物と地山起源の黄褐色土が塊状に混入する暗褐色のシルトである。南西壁際に木根による攪乱がある。自然堆積なのか人為的な堆積かは定かでない。 (Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の堆積状況から縄文時代の土坑と考えられる。



(69) III d 42土坑—1

〔遺構〕 (第136図、P L—55)

南東部遺構群の北西端に近いグリッドIII d 42とIII e 42にまたがって位置し、III e 43土坑の南東4mで南西向き斜面の上位に立地している。底部が接続しているIII d 42土坑—2に南壁の下半を壊されている。

開口部径1.28m×1.04m、底部径1.92m×1.82mの規模をもち、最も深い北壁で1.16mの深さをもつ北東—南西に長軸のある楕円形に近い土坑であるが、本来は円形を示すものと推定される。壁は底面に対して80度～61度の角度で内傾し、断面形は底面の60cm上位に径1.1mの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は90cm～100度外傾する。壁の内傾角度は東壁部分が弱く、その

積し、10層以下は黒褐色土と黄褐色土が互層をなしている。また、副穴の埋土は、いずれも地山を起源とする黄褐色を基調とした単層である。埋土土層図で堆積状況を観察すると、一部壁の崩落としては量の多過ぎる土層（12層）もみられ、下位は人為的に埋め戻した可能性も考えられるが、上位は概ね自然堆積による埋没であろう。（Mi）

〔遺物〕

出土していない。

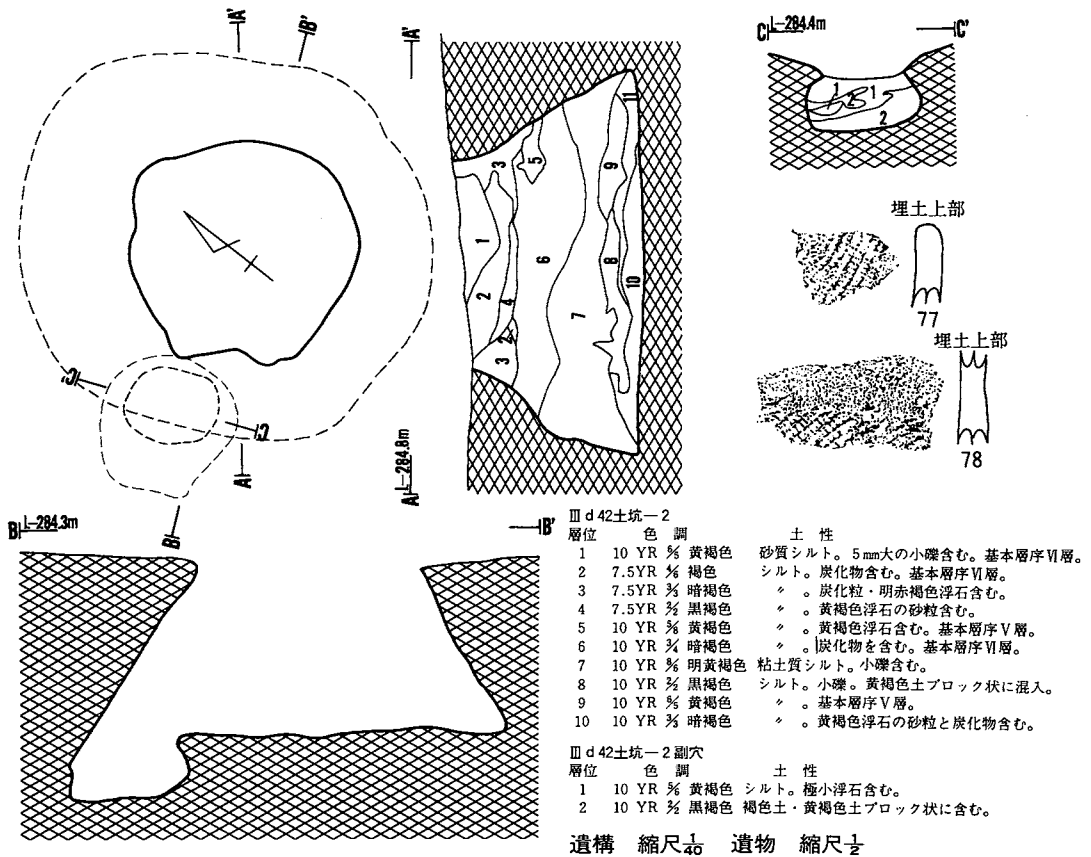
〔遺構の時期〕

形状と埋土の堆積状況から考えて、縄文時代の土坑であろう。

(70) III d 42土坑-2

〔遺構〕 (第137図、P L-56)

南東部遺構群のほぼ北西端グリッドIII d 42・43とIII e 42・43にまたがって位置し、III d 42土坑-1と隣接し南西向き斜面の上位に立地している。III d 42土坑-1の南壁の下半を壊している



第137図 III d 42土坑-2

る。

開口部径1.28m×1.24m、底部径2.18m×1.98mの規模をもち、最も深い北東壁で1.05mの深さをもつ円形の土坑である。壁の内傾程度は位置によって若干差があるが、平均すると60度～70度内傾する部分が多く、断面形はフラスコ形を示す。なお、壁の上端は内傾程度が弱くなって上向きとなるが、頸部とする程ではない。底面は中央部が若干凹むもののほぼ平坦で水平状態に近い。また、西壁を抉るように開口部径52cm×40cm、底部径73cm×62cm、深さ39cmの規模をもち、断面形がフラスコ形の副穴が掘られている。

埋土は大きく黒褐色・暗褐色土系と褐色・黄褐色土系に大別され、それが交互に2回堆積している。1・2層と7層は地山を起源とする汚れの少ない褐色や黄褐色・明黄褐色の土が堆積しており、人為的に外部から投棄された土であろう。全体的にみて、本土坑の埋土は平面的な堆積が多いことや、前記の状況から考えて人為的に埋め戻されている可能性が大きい。(Y)

〔遺物〕

埋土内から5点の土器片が出土している。

土器 (第137図77・78、P L-132)

77・78ともに0段多条の原体LR横回転による単節の斜行縄文を付し、78は一部を磨消している。第IX群に属する土器である。

石器

出土していない。

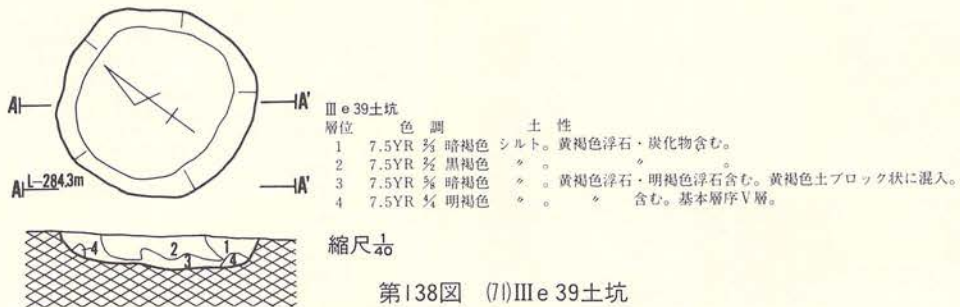
〔遺構の時期〕

77・78の土器の縄文に使用されている原体は後期後半に多様されるとともに、胎土や焼成も後期の様相を示している。よって、本土坑も後期後半に属するであろう。

(71) III e 39土坑

〔遺構〕 (第138図、P L-56)

尾根頂上部遺構群の東端寄りグリッドIII e 39に位置し、III d 40土坑の北東2mで南西向き緩



第138図 (71)III e 39土坑

斜面に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1m×1m、底部径82cm×76cmの規模をもち、最も深い北壁で18cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して122度外傾し、断面形は浅皿形を示している。底面に若干凹凸があり、壁際に向って次第に高くなっている。

埋土は黒褐色・暗褐色・明褐色のシルトが堆積し、4層に細分される。中央上部は黒褐色で、多量の炭化物と浮石が全体に散在する。下部は黄褐色土や明褐色を塊状に混入する暗褐色土である。自然堆積による埋没であろう。(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の堆積状況から考えて、縄文時代の土坑であろう。

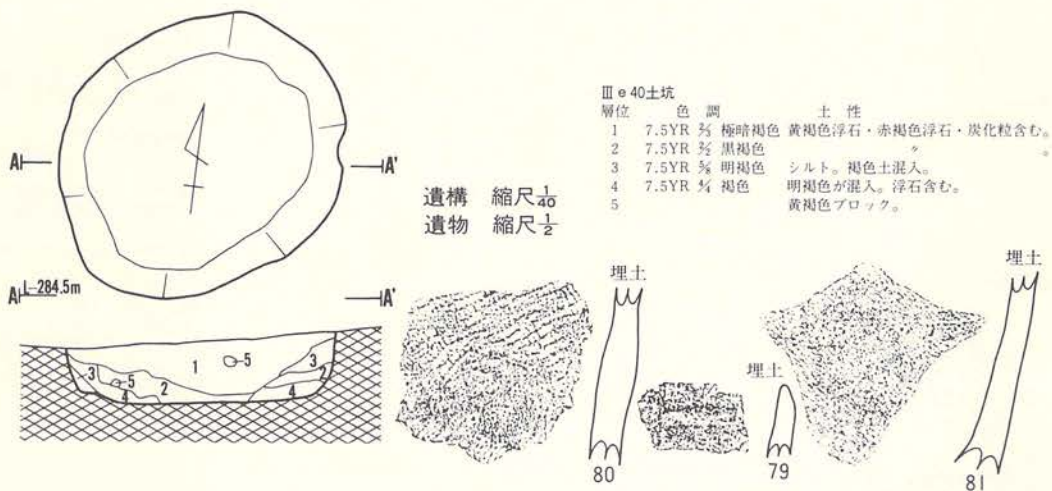
(72) III e 40土坑 (旧III f 40土坑)

〔遺構〕 (第139図、P L-56)

尾根頂上部遺構群のほぼ東端グリッドIII e 40・41にまたがって位置し、III d 40土坑の東4.5mで南西向きに緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.65m×1.38m、底部径1.3m×1.04mの規模をもち、最も深い東壁で35cmの深さをもつ北東-南西に長軸のある楕円形の土坑である。壁は底面に対して90度~120度で外傾し、断面形は浅皿形を示す。底面には小さい凹凸があるものの、ほぼ平坦で中央部が低く壁際に寄るほど高くなる。

埋土は黒褐色・極暗褐色・褐色・明褐色のシルトが堆積し、5層に細分される。いずれの層



第139図 (72)III e 40土坑

にも多少の浮石を混入し、さらに1・2層には炭化物が含まれる。5層は基本層序第V層相当の黄褐色土の塊である。おそらく自然堆積による埋没であろう。(Y)

〔遺物〕

埋土内から12点の土器片が出土している。

土器 (第139図79~81、PL-132)

79は無文土器の口縁部破片である。80は器表に0段多条の原体LR横回転による単節の斜行縄文を付す体部の破片である。81は細い原体L縦回転による斜行の無節縄文をもつ体部下位の破片である。以上から、79は第VIII群、80・81は第IX群に属する。

〔遺構の時期〕

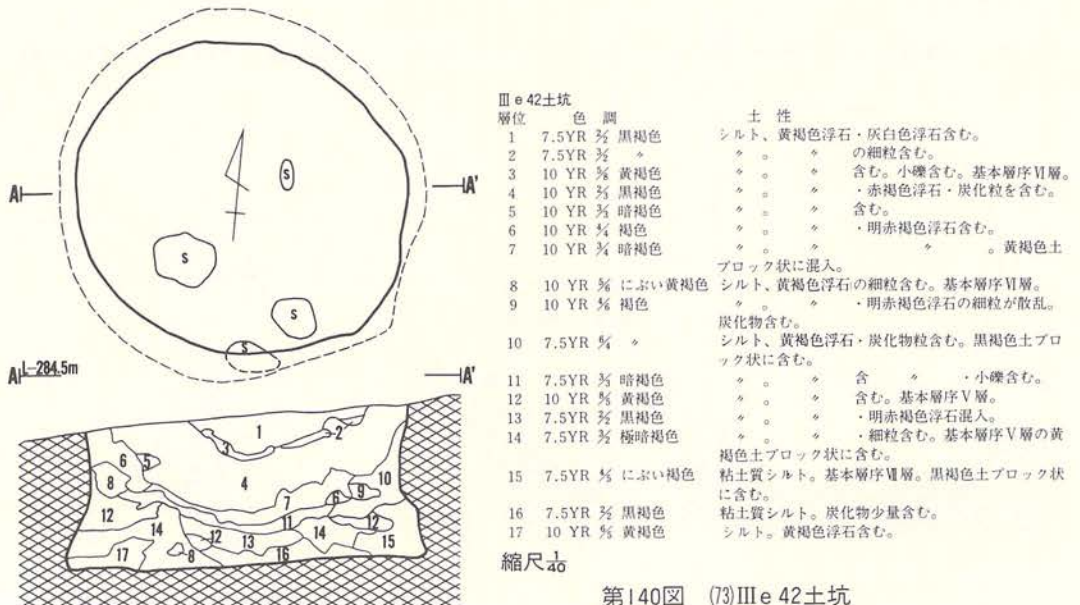
出土した土器は縄文や胎土・焼成等から後期後半に属するものと推定されることから、本土坑も後期後半頃に位置づけられるであろう。

(73) III e 42土坑

〔遺構〕 (第140図、PL-57)

南東部遺構群の中央北部のグリッドIII e 42・43にまたがって位置し、III d 42土坑-2の東3mで南西向き緩斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.74m×1.64m、底部径1.98m×1.9mの規模をもち、最も深い北壁で82cmの深さをもち円形の土坑である。壁は底面の上位40cmまでは67度内傾し、その上位は96度で外傾しており、断面形は底面の上位40cmに径1.69m×1.64mの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外



第140図 (73) III e 42土坑

傾している。底面には若干凹凸があるもののほぼ平坦で斜面下方の西側に僅かに傾斜している。

埋土には各種の色調を示すシルトや地山を起源とする土が堆積しており、17層に細分される。最上部に暗褐色土が皿状に、そして黄褐色土の薄層を挟んで下位に黒褐色土・暗褐色土が堆積している。壁際には黄褐色土・極暗褐色土・にぶい褐色土等が堆積している。南壁際から中央部にかけての底面直上で、最大34cm×28cm、厚さ9cmの河川礫が4個出土している。土層図で堆積状況を観察すると、ほとんどの層がレンズ状の堆積を示していることから、自然堆積で埋没した土坑であろう。

(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の堆積状況から縄文時代の土坑と考えられる。

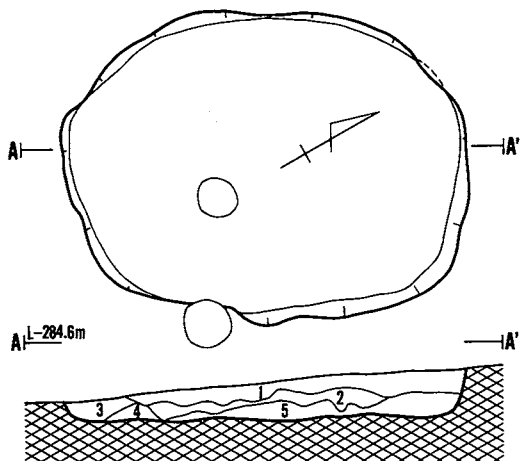
(74) III e 43土坑-1

〔遺構〕 (第141図、P L-57)

南東部遺構群西端寄りのグリッドIII e 43とIII f 43にまたがって位置し、III e 42土坑の南3mで南西向き斜面の上位に立地している。東側にIII f 43陥し穴状遺構、西側でIII e 43土坑-2と重複しているが、ともに本土坑が壊している。

開口部径2.14m×1.66m、底部径2.08m×1.62mの規模をもち、最も深い北東壁で24cmの深さをもつ長軸が北々東一南々西にある楕円形の土坑である。壁は底面に対して112度外傾し、断面形は浅皿形である。底面に極端な凹凸はないが、小さい起伏があるものの、全体としては水平状態に近い。

埋土は上部が汚れの少ないにぶい黄橙色土と黄褐色土、下部が暗褐色土を含む褐色土と黒褐



III e 43土坑-1		
層位	色調	土性
1	10 YR 8/ にぶい黄橙色	シルト。黄褐色浮石。黄褐色土含む。
2	10 YR 8/ 黄褐色	にぶい黄褐色土含む。
3	10 YR 8/ 褐色	黄褐色土含む。
4	10 YR 8/ 明黄褐色	暗褐色土含む。
5	10 YR 8/ 黒色	黄褐色土・にぶい黄褐色土含む。

縮尺 1/50

第141図 III e 43土坑-1

色土で構成され、5層に細分されている。土層図の観察では1・2層が地山起源であることから、本土坑は人為的に埋め戻されたと推定される。(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から考えて、縄文時代の土坑であろう。

(75) III e 43土坑-2

〔遺構〕 (第142図、P L-57)

南東部遺構群の中央西端グリッドIII e 43に位置し、III e 42土坑の南3 mで南西向き緩斜面に立地している。本土坑はIII e 43土坑-1の西壁と重複しているが、本土坑の方が壊されている。

開口部径1.08m×94cm、底面径74cm×62cmの規模をもち、最も深い北東壁で74cmの深さをもつ北西-南東に長軸のある不整の楕円形である。壁は底面に対して90度~110度外傾し、断面形はピーカー形である。底面は中央部がやや高いが、凹凸はなく平坦である。

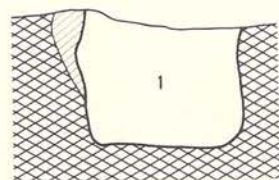
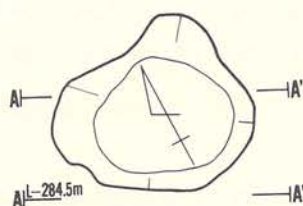
埋土は硬くしまった汚れのない褐色土で占められており、人為的に埋め戻された可能性がある。(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の堆積状況から、縄文時代の土坑と推定される。



縮尺 $\frac{1}{40}$

第142図 (75)III e 43土坑-2

III e 43土坑-2
層位 色調 土性
1 10 YR 5/ 褐色シルト。径1 cm~3 cm大の浮石5 %位含有する。

(76) III e 45土坑

〔遺構〕 (第143図、P L-58)

南東部遺構群の中央グリッドIII e 45に位置し、III e 43土坑-2の南7 mで南西向き緩斜面の

上位に立地している。他の遺構の重複はない。

開口部径54cm×42cm、底部径36cm×24cmの規模をもち、最も深い東壁で85cmの深さをもつ楕円形の土坑である。壁は北側が105度外傾、南側が75度内傾、東西両側がほぼ直立で、断面形は全体が北向きの斜位を示すピーカー形である。底面は平坦である。

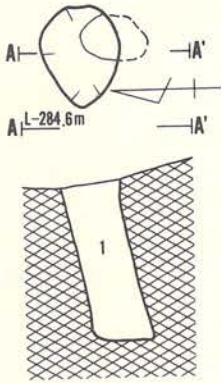
埋土は黒褐色シルトの単層である。全体的に浮石や地山起源の黄褐色土粒が混じる。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

本土坑は形状が一般的な貯蔵穴と異なり、柱穴状の土坑である。遺物の出土がないので時期を明示し難いが、埋土の状況は縄文時代の遺構と差がない。おそらく、縄文時代の遺構と考えられる。



III e 45土坑
層位 色調 土性
層位 10 YR 2/2 黒褐色シルト。黄褐色土が混入。

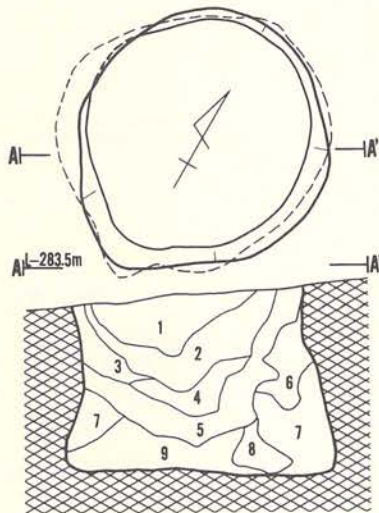
縮尺 1/50

第143図 (76) III e 45土坑

(77) III e 47土坑

〔遺構〕 (第144図、P L-58)

南東部遺構群の南端グリッド III e 47に位置し、III e 45土坑の南10cmで南西向き斜面の中位



III e 47土坑
層位 色調 土性
1 7.5YR 2/2 黒色 シルト。黄褐色浮石・灰白色浮石・明赤褐色浮石含む。
2 10 YR 2/2 黒色 明赤褐色浮石散在する。黄褐色土ブロック状に含む。
3 10 YR 2/2 褐色 1層と同じ。明黄褐色土・黒色土ブロック状に含む。
4 10 YR 2/2 黒色 黄褐色土ブロック状に含む。
5 10 YR 2/2 暗褐色 黄褐色土・黒褐色土ブロック状に含む。
6 10 YR 2/2 黄褐色 粘土質シルト。黄褐色浮石含む。基本層序VI層。
7 7.5YR 2/2 明褐色 黄褐色浮石含む。基本層序VII層。
8 7.5YR 2/2 暗褐色 黄褐色浮石・明赤褐色浮石含む。黄褐色土・にぶい橙色土ブロック状に含む。
9 7.5YR 2/2 黒色 暗褐色土・黄褐色土帯状に混入。

縮尺 1/50

第144図 (77) III e 47土坑

に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.5m×1.32m、底部径1.56m×1.42mの規模をもち、最も深い北東壁で98cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して75度で内傾し、断面形は底面の上位50cmに径1.28m×1.18mの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は100度で外傾する。底面には小起伏があつて中央部が高く、全体が南東側に傾斜している。

埋土は黒色・褐色・黄褐色・明黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、9層に細分されている。1～5層には黒色・褐色・暗褐といった黒色土系の土が堆積して全体の $\frac{2}{3}$ を占め、壁際に地山起源の黄褐色や明褐色といった土が堆積している。自然堆積による埋没であろう。(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から、縄文時代の土坑と考えられる。

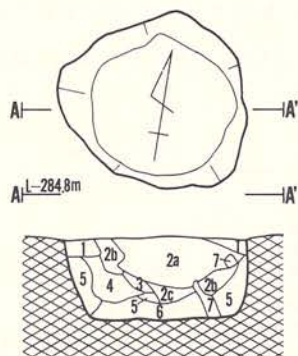
(78) III f 39土坑

〔遺構〕 (第145図、P L-58)

尾根頂上部遺構群の東端でグリッドIII f 39に位置し、III e 40土坑の北3mで頂上部平坦面に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1m×90cm、底部径75cm×75cmの規模をもち、最も深い北壁で36cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度～95度外傾し、断面形は浅いピーカー形である。底面には小凹凸があるものの、ほぼ平坦で東壁際が若干低くなっている。

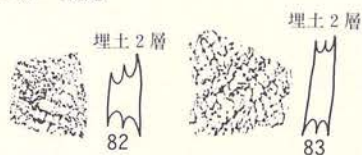
埋土は黒褐色・極暗褐色・暗褐色・褐色・明褐色・黄橙色等のシルトや地山起源の土が堆積



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

III f 39土坑

解位	色調	土性
1	7.5YR 5/4 褐色	シルト。暗褐色混土。
2 a	7.5YR 5/4 極暗褐色	〃。赤褐色・黄橙色浮石粒含む。
2 b		黄橙色シルト混じる。
2 c		脆い。
3	7.5YR 5/4 黒褐色	2 a 層と同じ。
4	7.5YR 5/4 暗褐色	シルト。褐色土混入
5	7.5YR 5/4 明褐色	2 a 層と同じ。
6	7.5YR 5/4 極暗褐色	粘性あり。
7	ブロック 黄橙色	



第145図 (78) III f 39土坑

し、7層に大別され2層はさらにa～cに細分されている。全体に浮石が混じり、黒色土系の土にも明褐色土粒が混入している。壁際には壁の崩落と考えられる地山起源の明褐色土が堆積している。自然堆積によって埋没した土坑であろう。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から縄文時代の土坑であろう。

(79) III f 40土坑 (旧III f 41土坑)

〔遺構〕 (第146図、P L-59)

尾根頂上部遺構群の南東端グリッドIII f 40・41にまたがって位置し、III e 40土坑の南東4 mで頂上部平坦面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.65m×1.55m、底部径1.5m×1.5mの規模をもち、最も深い西壁で39cmの深さをもつ若干歪んだ円形の土坑である。壁は底面に対して西壁で80度内傾し、ほかは90～120度外傾している。断面形はフラスコ形であった可能性もあるが、現状では浅いピーカー形である。

埋土は黒色・黒褐色・極暗褐色のシルトが堆積し、3層に細分されている。全層に浮石粒、3層には炭化物と小礫粒が混入している。自然堆積による埋没であろう。(Y)

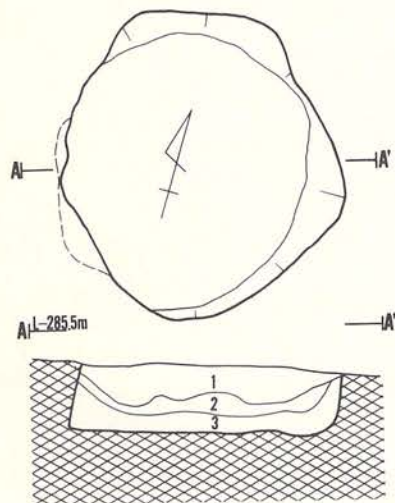
〔遺物〕

埋土内から土器片が1点出土している。

土器 (第146図84、P L-132)

0段多条の原体LR横回転による縄文を付す口縁部破片である。

〔遺構の時期〕



III f 40土坑	色調	土性
解位 1	7.5YR 5/1 黒色	シルト。浮石粒含む。
2	10 YR 5/1 黒褐色	〃
3	7.5YR 5/1 極暗褐色	炭化物・小礫粒の混入あり。

遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



第146図 (79)III f 40土坑

84の土器は後期後半に多用される縄文を付しており、本土坑も後期後半の可能性が高い。

(80) III f 42土坑 (旧III f 43土坑)

〔遺構〕 (第147図、P L-62)

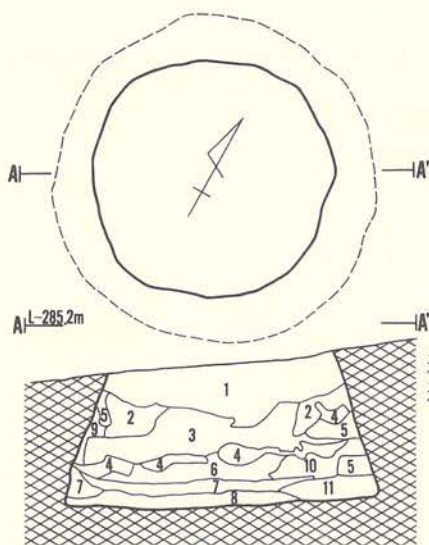
南東部遺構群の中央部北端グリッドIII f 42・43にまたがって位置し、III e 42土坑の東4 mで南西向き緩斜面の上位に立地している。他遺構との重複はない。

開口部径1.3m×1.25m、底部径1.7m×1.7mの規模をもち、最も深い北東壁で88cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して70度で内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面には小凹凸もほとんどなく平坦であるが、中央が低く壁際に寄るほど高くなっている。

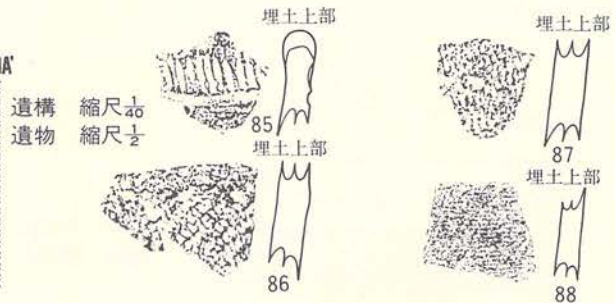
埋土は黒褐色・極暗褐色・暗褐色・褐色・明褐色・橙色等の各種の色調を示すシルトや地山起源の土が堆積し、11層に細分されている。1～7層には浮石と炭化物の混入がみられ、8層と10層には黒色土粒が混じっている。4・5・7層は地山を起源とする明褐色土であるが、5層は壁の崩落であろうが、他は外部からの投棄による土であろう。また、土層がほとんど平面堆積の様相を示しており、4層以下は人為的に埋め戻された可能性が大きく、上位層は自然堆積であろう。 (Y)

〔遺物〕

埋土内から4点の土器片が出土している。



III f 42土坑	層位	色調	土性
1	7.5YR	暗褐色	シルト。浮石や炭化物が混入。
2	7.5YR	褐色	〃
3	7.5YR	極暗褐色	〃
4	7.5YR	橙色	〃
5	7.5YR	明褐色	〃
6	7.5YR	黒褐色	〃
7	7.5YR	明褐色	〃。浮石混入。
8	7.5YR	暗褐色	〃。1 cm以下の黒色土粒混入。
9	7.5YR	褐色	〃。2層より暗く、もろい。
10	7.5YR	暗褐色	〃。黒色土粒混入。
11			10層よりやや暗いシルト。



第147図 (80)III f 42土坑

土 器 (第147図85~88、P L-132)

85は無文の器面を沈線で区画し、横に連続する刻目帯を付す。86・87は原体LR横回転によるLRの単節斜行縄文をもつ。88は無文土器の破片である。以上のことから、85は第VI群8類か9類に相当し、86・87は第IX群、88は第VIII群に該当するであろう。

石 器

出土していない。

〔遺構の時期〕

85は後期末葉に属する土器であることから、後期末葉頃の土坑と考えられる。

(81) III f 43土坑

〔遺 構〕 (第148図、P L-59)

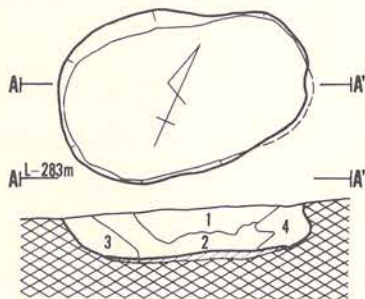
南東部遺構群の中央グリッドIII f 43に位置し、III f 42土坑の南3 mで南西向き斜面の上位に位置している。III f 43陥し穴状遺構の南東端と重複しているが、本土坑がIII f 43陥し穴状遺構を壊している。

開口部径1.34m×88cm、底面径1.32m×76cmの規模をもち、最も深い北壁で27cmの深さをもつ北東—南西方向に長軸のある楕円形の土坑である。壁は底面に対して北東が85度で内傾し、全体として西側に軽く傾斜している。

埋土は黒褐色・褐色のシルトが堆積し、4層に細分される。全体的に炭化物を含み、壁際に地山起源の褐色土が堆積している。自然堆積による埋没と推定される。 (Mi)

〔遺 物〕

出土していない。



〔遺構の時期〕

形状や埋土の堆積状況から考えて、縄文時代の土坑であろう。

III f 43土坑

層位	色 調	土 性
1	10 YR 2/2 黒褐色	シルト。浮石粒・砂粒の混入。炭化物含む。
2	10 YR 2/2	砂質シルト。多量の浮石粒と炭化物混入。
3	10 YR 2/2 褐色	基本層序I層と黒褐色土が混じった地山。
4	10 YR 2/2 黒褐色と褐色	3層と同じ。黒褐色土と褐色土がブロック状に混じる。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第148図 (81) III f 43土坑

(82) III f 48土坑

〔遺 構〕 (第149図、P L-59)

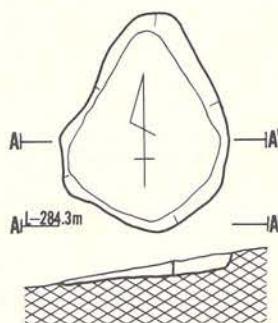
南東部遺構群の最南端グリッドIII f 48・49にまたがって位置し、III c 49土坑の東14m で西向き緩斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.14m×90cm、底部径98cm×80cmの規模をもち、最も深い北壁で7cmの深さをもつ菱形に近い不整形の土坑である。壁は底面に対して109度外傾し、現状の断面形は浅い皿形を示しているが、本土坑は斜面に立地するため、斜面下位の西壁が僅か数cmの残在であるため、検出された状況が原形を示すとは考えられないので、本来の形状は不明である。底面には小凹凸が多くあり、南側に軽く傾斜している。

埋土は黄褐色土を塊状に含む黒褐色シルトの単層で、全体に浮石が混入する。 (Mi)

〔遺物〕

出土していない。



III f 48土坑
層位 色 調 土 性
1 7.5YR 5/2 暗褐色シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。

縮尺 1/40

第149図 (82)III f 48土坑

〔遺構の時期〕

削平が強いため形状では判断不能であるが、埋土の状況は縄文時代のそれと差がなく、本土坑は縄文時代の土坑と推定される。

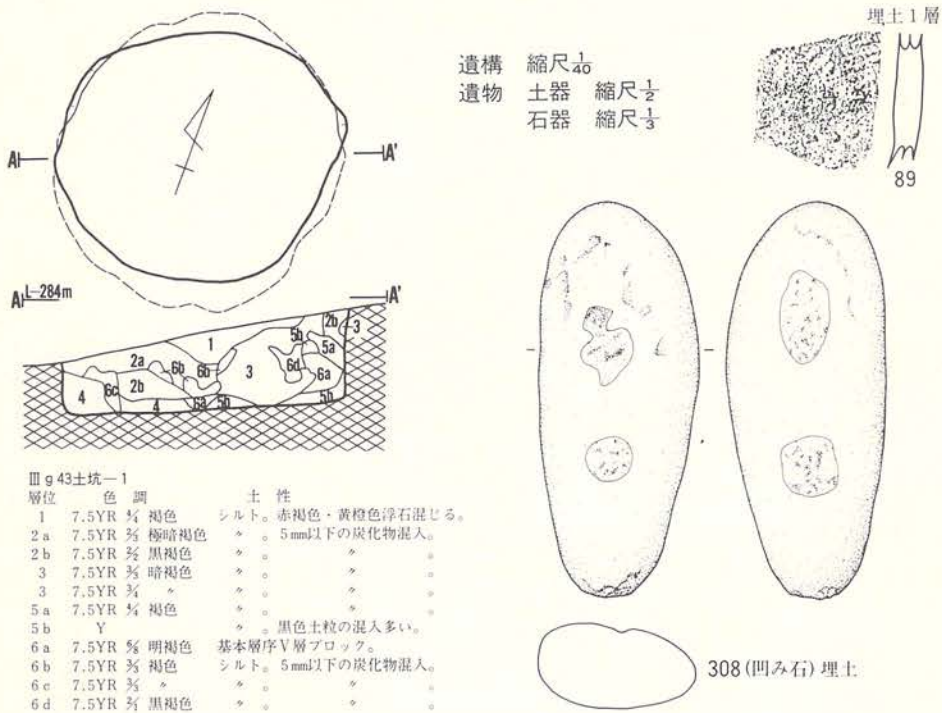
(83) III g 43土坑—1

〔遺構〕 (第150図、P L—60)

南東部遺構群のほぼ東端グリッドIII g 43とIII g 44にまたがって位置し、III f 43土坑の東3m で南西向き緩斜面の上位に立地する。他の遺構との重複はない。

開口部径1.4m×1.35m、底部径1.6m×1.5mの規模をもち、最も深い東壁で56cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度～75度であり、一部外傾する部分もあるものの断面形はフラスコ形を示す。底面には小凹凸がみられるが、ほぼ平坦で全体が南西に僅かに傾斜している。

埋土は黒褐色・極暗褐色・暗褐色・褐色・明褐色等の各種の色調を示すシルトと地山起源の土が堆積し、6層に大別された後2層・5層・6層はさらに細分される。ほとんどの層に炭化物粒が混入し、さらに1層には浮石粒、5・6層には黒色土粒の混じりが多い。一部土層の乱れはあるものの、ほぼ自然堆積による埋没であろう。



第150図 (83) III g 43土坑-1

〔遺物〕

埋土内から土器片1点と石器1点が出土している。

土器 (第150図89・P L-132)

原体L R横回転による単節斜行縄文が付された体部破片である。第IX群に属する。

石器 (第150図308、P L

全長15.7cm、幅6.4cm、厚み3.4cm、重さ44.8gの大きさをもつ細長い円礫の両面を凹み石としたものである。石材は奥羽山地新第三系産の輝石安山岩である。

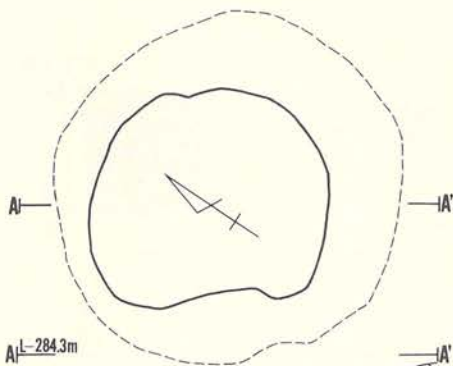
〔遺構の時期〕

出土した土器の縄文や胎土・焼成は後期の特徴に近似していることから、本土坑も後期に属する可能性が強い。

(84) III g 43土坑-2

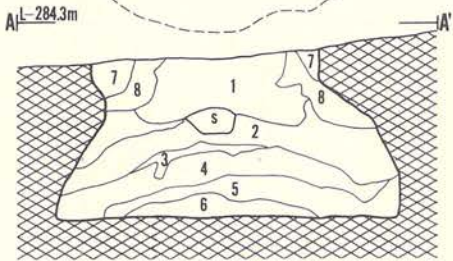
〔遺構〕 (第151図、P L-60)

南東部遺構群のほぼ東端グリッドIII g 43に位置し、III g 43土坑-1の北東2mで南西向き緩

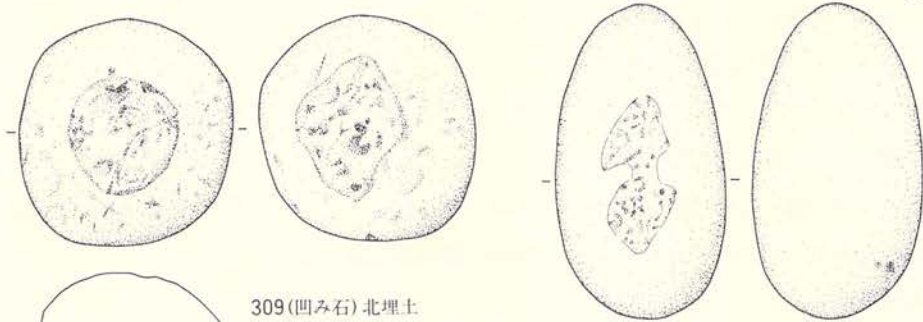
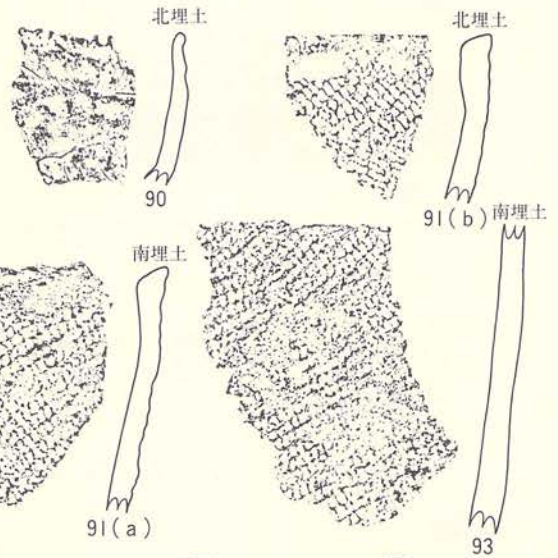


III g 43土坑-2

層位	色調	土性
1		基本層序V層。
2	7.5YR 5% 明褐色	赤褐色浮石含む。
3	7.5YR 2% 極暗褐色	炭化物含む。
4	7.5YR 5% 明褐色	砂質シルト。
5	7.5YR 5% 〃	〃
6	7.5YR 3% 黒色	腐植土。
7	7.5YR 2% 〃	明褐色シルト。赤褐色浮石が混じる。
8	7.5YR 2% 暗褐色	黄褐色浮石含む。



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$



309(凹み石) 北埋土

310(凹み石) 北埋土

遺物 土器 縮尺 $\frac{1}{2}$
石器 縮尺 $\frac{1}{3}$

第151図 (84)III g 43土坑-2

斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.3m×1.3m、底部径1.9m×1.85mの規模をもち、最も深い東壁で90cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して60度で内傾し、断面形は底面の上位70cmに径1.1mの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外傾している。底面には凹凸もなくほぼ平坦で、ほぼ水平状態に近い。

埋土は黒色・極暗褐色・暗褐色・明褐色のシルトや砂質シルト、腐植土等が堆積し、8層に細分される。1・2・4・5層は基本層序第V層を起源とする明褐色土が堆積し、6層は黒色の腐植土である。3層は挟在する極暗褐色のシルトで、7・8層は黒色や暗褐色のシルトである。炭化物や浮石を混入する層が多い。本土坑の埋土は地山を起源とする土層が多いことを特徴としていることから、人為的に埋め戻された土坑であろうと推定される。

〔遺物〕

埋土内から土器片が24点と石器2点が出土している。

土器 (第151図90～93、P L—132)

90は無文の口縁部破片で、ほかは原体LR横回転による単節の斜行縄文をもつ粗製土器の破片である。90は第VIII群、他はIX群に相当する。

石器 (第151図309・310、P L—172)

2点とも凹み石で、309は長さ9cm、幅8.6cm、厚さ7.1cm、重さ70.3gの大きさと、310は長さ12.6cm、幅6.8cm、厚さ4.9cm、重さ60gで、309の場合は両面に、310は片面に使用面をもつ。石材は奥羽山地新第三系産の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

出土した土器は全て後期後半の特徴をもっていることから、本土坑も後期後半頃に属すると推定される。

(85) III g 43土坑—3 (旧III h 43土坑)

〔遺構〕 (第152図、P L—60)

南東部遺構群の東端グリッドIII g 43・III h 43にまたがって位置し、III g 43土坑—2の北東1mで南西向き斜面の上位に立地している。北西部がIII g 43土坑—4と重複しているが、本土坑が壊されている。

開口部径1.4m×1.35m、底部径1.55m×1.35mの規模をもち、最も深い南東壁で90cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して95度で外傾する部分(北々西)と90度～70度で内傾する他の部分とがあり、断面形は底面の70cm上位に径1.3mの頸部をもつフラスコ形である。底面には凹凸があり、全体が北西に向って軽く低くなっている。また、北々西壁寄りの底面が

ら径60cm×50cm、深さ30cmの副穴が検出されている。

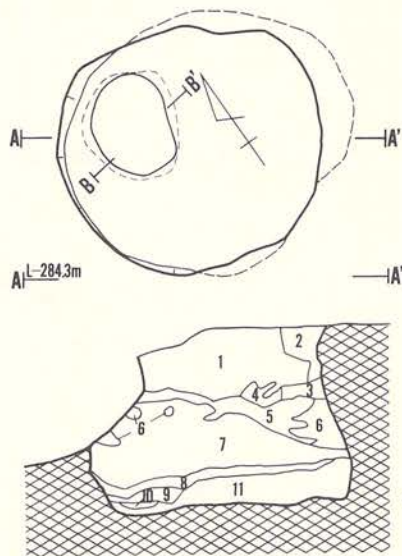
埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色のシルトや地山を起源とする土が堆積し、11層に細分されている。1・3・7・9・11層が地山を起源とする明褐色土が堆積し、その他の土が間層として挟在している。以上のことから、本土坑は人為的に埋め戻されたものと考えられる。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から、縄文時代の土坑と推定される。



III g 43土坑-3

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 明褐色	基本層序V層。
2	7.5YR 5/6 暗褐色	シルト。浮石小粒混入。
3	7.5YR 5/6 明褐色	1層の汚れた土。
4	7.5YR 5/6 黒褐色	シルト。基本層序VI層の混入。
5	7.5YR 5/6 黒色	*。浮石の小粒・少量の炭化物混じる。
6	7.5YR 5/6 褐色	*。質的に4層に近い。
7		1層と同じ。
8		5層と同じ。
9		3層と同じ。
10		5層と同じ。
11		1層と同じ。

縮尺 1/40

第152図 (85) III g 43土坑-3

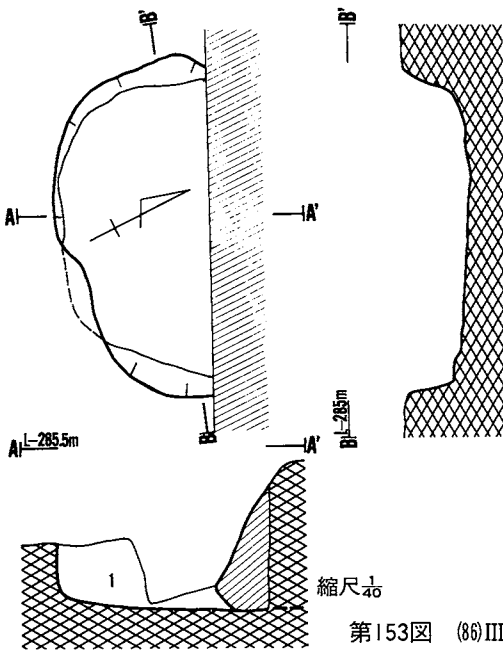
(86) III g 43土坑-4

〔遺構〕 (第153図、P L-61)

南東部遺構群の東端グリッド III g 43に位置し、III g 43土坑-2の北2.5mで南西向き緩斜面の上位に立地している。III g 43土坑-3北西部と重複し、本土坑がIII g 43土坑-3を壊している。なお、北東部の約1/2強が開畑の際に削平され残存していない。

検出された部分は開口部径1.8m×80cm、底部径1.55m×88cm、最も深い南東壁で31cmの深さをもち、検出された部分の形状から考えて円形か楕円形を示す土坑と考えられる。壁は90度～80

度で内傾する部分と、90度～105度外傾する部分があり、現状の断面形は浅い皿形であるが、本来はフラスコ形であった可能性が高い。底面には凹凸がほとんどなく平坦であるが、中央部が



低く壁際が次第に高くなっている。

埋土は基本層序第V層粒の混入した暗褐色シルトの単層である。人為的に埋め戻されている可能性が高い。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から、縄文時代の土坑と考えられる。

III g 43土坑-4
層位 色調 土性
1 7.5YR 暗褐色シルト。褐色土(基本層序V層)粒と混入。

第153図 (86) III g 43土坑-4

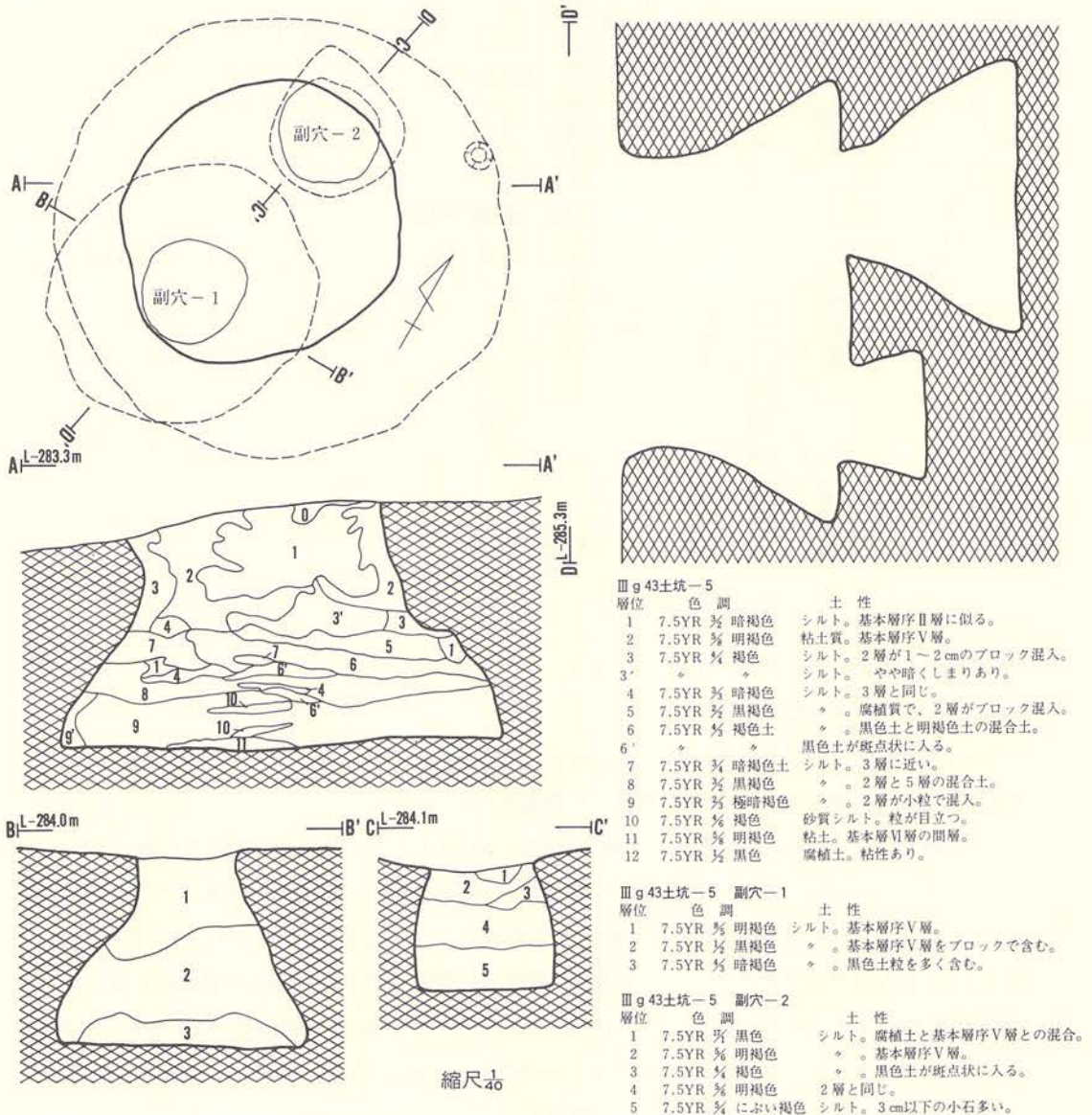
(87) III g 43土坑-5 (旧III g 43土坑-3 A)

〔遺構〕 (第154図、P L-61)

南東部遺構群の中央東端寄りグリッドIII g 43に位置し、III g 43土坑-1の北2mで南西向き緩斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.65m×1.55m、底部径2.55m×2.44mの規模をもち、最も深い東壁で1.3mの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して60度～70度で内傾し、断面形は底面の上位1mに径1.4mの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外傾している。底面は凹凸がなくほぼ平坦であるが、北部が若干低くなっている。南壁際(P₁)と北壁際(P₂)の底面には副穴がある。P₁は開口部径60cm×55cm、底部径1.55m×1.35mの規模をもち、底面から90cmの深さをもつ円形の土坑で、断面形は壁が底面に対して50度～60度内傾し、底面の上位90cmに径50cmの頸部をもつフラスコ形である。底面は平坦で水平状態に近い。P₂は開口部60cm×55cm、底部径70cm×70cmの規模をもち、底面から50cmの深さをもつ円形の土坑で、断面形は底面に対して80度内傾するフラスコ形である。底面は平坦で水平状態に近い。

埋土は各種の色調を示すシルトや地山を起源とする土が堆積し、12層に大別された後、3層



第154図 (87)III g 43土坑-5

と6層はさらに细分されている。全体的に黒色土系と地山起源の土が混合しており、各土層は混合する量の多少によった場合が多い。下半の埋土は平面的な堆積状況を示し、人為的に埋め

戻された状況を示している。副穴の埋土は基本層序第V層の塊を基調にし、団粒状で非常にボソボソしたしまりのない土が堆積している。おそらく人為的に埋め戻したものであろう。

本土坑の副穴は、9層を除去中に9層内で検出されている。また、9層は非常に良くしまっている。このことから考えると、本土坑は一度9層まで埋め戻して再利用し、その時点で副穴を掘っている可能性が大きい。最終的な廃絶期も人為的に埋め戻している。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から、縄文時代の土坑であろう。

(88) III g 44土坑

〔遺構〕 (第155図、P L-61)

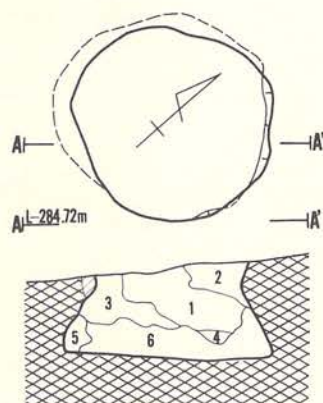
南東部遺構群の東端寄りグリッドIII g 44に位置し、III g 43土坑-2の南2 mで南西向き緩斜面の上位に立地している。重複する遺構はない。

開口口径1.1m×1 m、底部径1.15m×1.05mの規模をもち、最も深い北東壁で54cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して70度で内傾し、断面形は底面の上位40cmに径85cmの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外傾している。底面にはほとんど凹凸もなくほぼ平坦で、南西部に向って軽く傾斜している。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色のシルトや地山を起源とする土が堆積し、6層に細分されている。1・2層は基本層序第V層を起源とし、人為的に投棄された土である。3層にはV層が多量に混り斑状である。以上のことから、本土坑は人為的に埋め戻された土坑と推定される。(Y)

〔遺物〕

出土していない。



III g 44土坑		土性	
層位	色調		
1	7.5YR 5/6 明褐色	基本層序V層。	
2	7.5YR 5/6 褐色	シルト。汚れた基本層序V層。浮石の小粒・黒色土粒混入。	
3	7.5YR 5/6 黒褐色	。基本層序V層粒混入。	
4	7.5YR 5/6 暗褐色	。	
5	。	4層と同じ。	
6	7.5YR 5/6 褐色	2層と同じ。浮石粒混入する。	

縮尺 $\frac{1}{40}$

第155図 (88) III g 44土坑

<C 区>

(90) I j 52土坑

〔遺 構〕 (第157図、P L-62)

尾根の北西端付近グリッド I j 52・53、II a 52・53にまたがって位置し、II a 52土坑の南西2 m で北向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.25m×1.2m、底部径1.2m×1.2mの規模をもち、最も深い南壁で1 mの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して80度内傾し、断面形は底面の上位45cmに径1 mの頸部をもつフラスコ形である。底面には凹凸もなく平坦であるが、中央部が若干低く壁際に寄るほど高くなる。

埋土は褐色・黄褐色・にぶい黄褐色のシルトが堆積し、6層に細分される。全層に浮石が混じり、下層は比較的しまりが良く若干粘性をもつ。5・6層は基本層序第V層に相当する土で人為的に投棄された土と考えられる。1層にも黄橙色や黄褐色のシルトが塊状で混入し、やや黄味を帯びている。おそらく人為的に埋め戻された土坑であろう。 (Y)

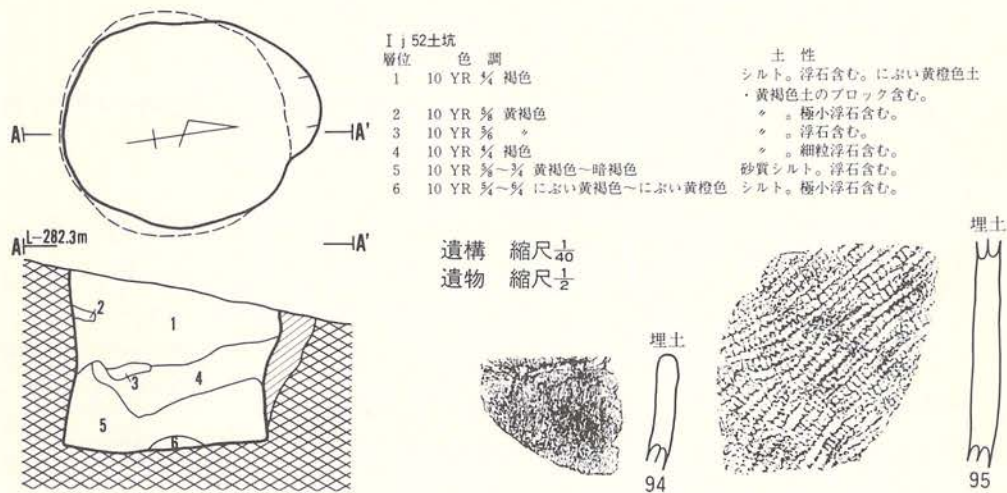
〔遺 物〕

埋土内から4点の土器片が出土している。

土 器 (第157図94・95、P L-132)

94は無文土器の口縁部破片である。95は0段多条の原体LR横回転による単節斜行縄文を付す粗製土器の破片である。以上のことから、94は第VIII群、95は第IX群に属する。

石 器



第157図 (90) I j 52土坑

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期後半の特徴をもっていることから、本土坑も後期後半に位置づけられると推定される。

(91) I j 53土坑-1

〔遺構〕 (第158図、P L-63)

尾根北西端のグリッド I j 53 と II a 53 にまたがって位置し、I j 52 土坑の南 3 m で北西向き斜面の上位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径 1.85m × 1.65m、底部径 1.75m × 1.7m の規模をもち、最も深い南壁で 1.1m の深さをもつほぼ円形の土坑である。壁は底面に対して 90~70 度内傾する部分もあるが、ほとんどは 90 度~100 度で外傾しており、断面形は一部の壁の底面上位 70cm に径 1.45m の頸部をもつフラスコ形の部分（南北方向）とピーカー形（東西方向）の部分がある。底面には凹凸もなくほぼ平坦であるが、全体が比高 5cm で北に傾斜している。

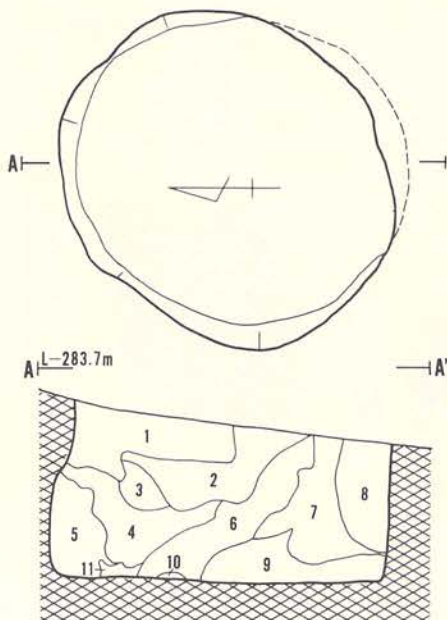
埋土は黒褐色・褐色・黄褐色等のシルトや地山起源の土が堆積し、11層に細分される。全層に浮石が混入する特徴があり、2・6・9・10層には炭化物も混じっている。3・5~11層は地山の基本層序第V層を起源とする土で、人為的に投棄されたものであろう。土層全体が乱雑な堆積状況を示していることから、人為的に埋め戻された土坑であろう。 (Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から、縄文時代の遺構と推定される。



I j 53土坑-1

層位 色 調

- 1 10 YR 5/2 褐色
- 2 10 YR 5/2 にふい黄褐色
- 3 10 YR 5/2 黄褐色
- 4 10 YR 5/2 黒褐色
- 5 10 YR 5/2 黄褐色
- 6 10 YR 5/2 にふい黄褐色
- 7 10 YR 5/2 黄褐色
- 8 10 YR 5/2 暗黄褐色
- 9 10 YR 5/2 黄褐色
- 10 10 YR 5/2 にふい黄褐色
- 11 10 YR 5/2 にふい黄褐色-褐色

土 性

- シルト。浮石が点在する。にふい黄褐色土ブロックを含む。
- シルト。浮石・炭化物含む。黄褐色土。
- 。浮石混入する。暗褐色土。
- 。浮石・炭化物含む。暗褐色混入。黄褐色土がブロックを含む。
- 浮石含む。基本層序V層。
- シルト。浮石・炭化物含む。
- 浮石含む。褐色10YR 5/2がブロックで含まれる。基本層序V層。
- 。基本層序V層。
- シルト。浮石・炭化物含む。褐色10YR 5/2が混じる。
- 炭化物含む。黄褐色・暗褐色が混じる。
- 混ざり土で汚れている。

縮尺 1/50

第158図 (91) I j 53土坑-1

(92) I j 53土坑-2

〔遺構〕 (第159図、P L-63)

尾根北西端のグリッド I j 53・54にまたがって位置し、I j 53土坑-1の南に数10cmで隣接しており、西向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.25m×2.2m、底部径2.1m×1.9mの規模をもち、最も深い南東壁で1.2mの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面の上位30cm位まではほぼ直立するが、その上位は90度～100度で外傾し、現状の断面形はピーカー形であるが、本来はフラスコ形であった可能性もある。底面は平坦であるが、南西に向かって若干傾斜している。

埋土には多種多様の土が堆積し、35層に細分されているが、主体をなすのは黒色土系の黒褐色のシルト、地山起源の黄褐色土・黄橙色土系、その中間の両者混合した褐色土の3種類に大別され、全体的にはそれらの互層であり、この傾向は下位層ほど著しい。堆積状況がレンズ状を示している層が多く（特に上・中位層）、地山起源の土を壁の崩落と理解すれば、自然堆積で埋没した土坑といえるが、31・35層の平面堆積を示す状況も加味して考えれば、一部人為的な埋め戻しを伴っている可能性がある。(Y)

〔遺物〕

埋土内から29点の土器片と石器が出土している。

土器 (第159図96～100、P L)

96は体部下位から底部を残存する破片で、器表に原体L R横回転による単節斜行縄文と底部に網代痕を付す。97～100は同じ特徴をもつことから同個体の破片と思われるが、器表に原体L R横回転による単節斜行縄文を付した後、蛇行する沈線で文様を施した土器である。以上のことから、97～100は第IV群2類に相当し、96は不明である。

石器 (第159図295)

全長15.1cm、幅7.1cm、厚さ3.7cm、重さ55.3gの大きさをもち、断面が扁平で略長方形気味の円礫の両面を使用した凹み石である。石材は奥羽山地新第三系産の輝石安山岩である。

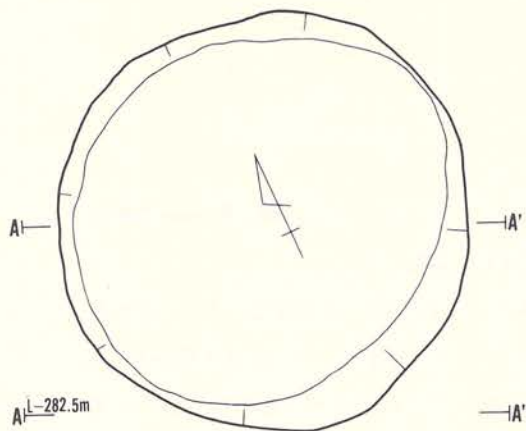
〔遺構の時期〕

出土した土器が後期初葉に属することから、本土坑も後期初葉に位置づけられるであろう。

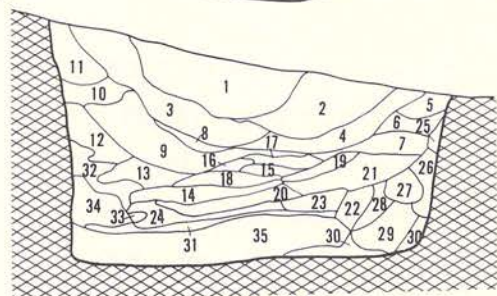
(93) I j 55土坑

〔遺構〕 (第160図、P L-63)

尾根北西端のグリッド I j 55とII a 55にまたがって位置し、I j 53土坑-2の南6mで西向き斜面に立地している。I j 54住居跡の南壁と重複しているが、本土坑がI j 54住居跡を壊している。



A-A' 282.5m



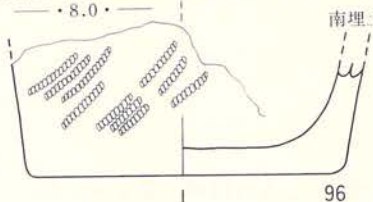
I j 53土坑-2

層位 色 調

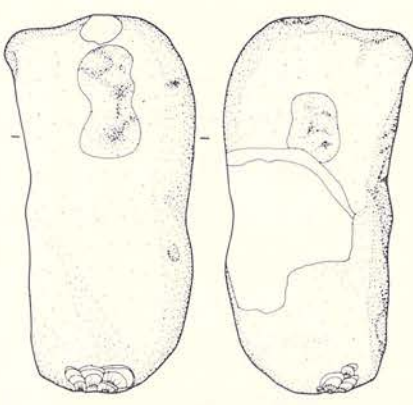
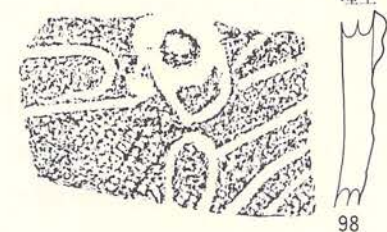
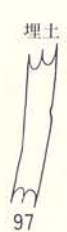
- 1 10 YR 5/2 黒褐色
- 2 10 YR 5/2 暗褐色
- 3 10 YR 5/2-5/4 黒褐色~褐色
- 4 10 YR 5/4 褐色
- 5 10 YR 5/4 黄褐色
- 6 *
- 7 10 YR 5/2-5/4 黄褐色~褐色
- 8 10 YR 5/2-5/4 褐色~暗褐色
- 9 10 YR 5/4 黄褐色
- 10 10 YR 5/4 褐色
- 11 *
- 12 10 YR 5/4 黄褐色
- 13 *
- 14 10 YR 5/4 に近い黄橙色
- 15 *
- 16 10 YR 5/4 暗褐色
- 17 10 YR 5/4 に近い黄橙色
- 18 *
- 19 10 YR 5/2-5/4 に近い黄橙色~に近い黄褐色
- 20 10 YR 5/4 に近い黄褐色
- 21 *
- 22 10 YR 5/4 黄褐色
- 23 10 YR 5/4 褐色
- 24 10 YR 5/2-5/4 黄褐色~褐色
- 25 10 YR 5/2-5/4 黄褐色~灰黄褐色
- 26 *
- 27 10 YR 5/4 に近い黄褐色
- 28 10 YR 5/4 黄褐色
- 29 10 YR 5/4 に近い黄褐色
- 30 10 YR 5/4 に近い黄褐色
- 31 10 YR 5/4 褐色
- 32 10 YR 5/4 に近い黄褐色
- 33 10 YR 5/4 黄褐色
- 34 10 YR 5/4 灰黄褐色
- 35 10 YR 5/4 に近い黄褐色

土 性

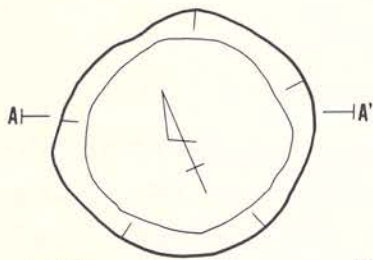
- シルト。炭化物・浮石含む。
- *
- *
- 細粒浮石混じる。暗褐色のブロック含む。
- 浮石含む。基本層序層。
- 砂質シルト。浮石含む。褐色が混じる。
- 浮石・炭化物含む。
- シルト。浮石多く含む。黄褐色のブロック含む。
- *
- 浮石含む。褐色のブロック含む。
- *
- *
- 極小浮石・炭化物含む。
- *
- 灰黄褐色のブロック含む。
- 浮石含む。
- 砂質シルト。浮石含む。
- 礫含む。
- 褐色土混じる。
- *
- 10 YR 5/2-5/4 に近い黄褐色~に近い黄褐色 浮石含む。
- 褐色土と混ぜ土。
- シルト。浮石・炭化物含む。
- *
- 白っぽい土と混ぜ土。
- *
- 黒褐色が混入。
- 暗褐色混入する。
- シルト。混ざり土。
- 26 *
- 混ざり土。褐色のブロック含む。
- 褐色土と混ざり土。
- 浮石含む。
- 浮石含む。黒褐色ブロックで含まれる。
- 浮石少量含む。
- 粘性ほとんどなし。
- 浮石・炭化物少量含む。
- 砂質シルト。浮石含む。



遺構 縮尺 1/6
遺物 縮尺 1/2



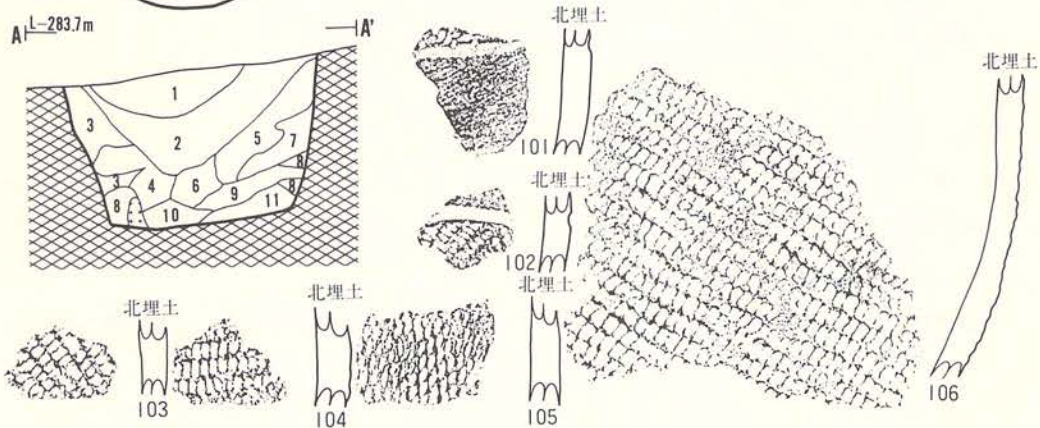
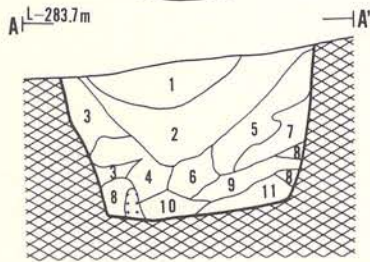
第159図 (92) I j 53土坑-2



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

I j 55土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 褐色	シルト。炭化物・浮石粒含む。
2	7.5YR 5/6 褐色	〃
3	5 YR 5/6 赤褐色	〃
4	5 YR 5/6 褐色	〃
5	5 YR 5/6 褐色	〃
6	5 YR 5/6 明赤褐色	〃
7	7.5YR 5/6 褐色	基本層序VI層。
8	7.5YR 5/6 明褐色	汚れた基本層序VI層。
9	10 YR 5/6 褐色	シルト。一部黒色のブロック混じる。
10	7.5YR 5/6 褐色	〃 炭化物・浮石粒含む。
11	7.5YR 5/6 明褐色	〃 8層より暗い。



第160図 (93) I j 55土坑

開口部径1.4m×1.25m、底部径1.05m×1mの規模をもち、最も深い南東壁で92cmの深さをもち円形の土坑である。壁は底面に対して105度～110度で外傾し、断面形はピーカー形である。底面には若干凹凸があり、中央部が凹み壁際に寄るほど幾分高くなり、全体が西に軽く傾斜している。

埋土は褐色・明褐色・赤褐色・明赤褐色を示すシルトや地山起源の土が堆積し、11層に細分される。1・2・9・10層は黒色土と基本層序第V層が混じり合って褐色を示す土で、ほかは地山を起源にする土が堆積している。全体的に浮石粒の混入が多く、1～5・10層には炭化物も混入している。堆積状況を見ると、1・2層は自然堆積的であるが、その下位は乱雑な堆積状況を示している。以上のことから、下位は人為的に埋め戻されている可能性が強い。(Y)

〔遺物〕

埋土内から土器片が13点出土している。

土器 (第160図101～106、PL-132)

101～102は器表に0段多条の原体LR横回転による単節の斜行縄文を付した後、沈線で区画して縄文を磨消している。104は101と同一個体の可能性がある。103・106は原体RL横回転による単節の斜行縄文を付した体部破片である。105は単軸絡条体縦回転による撚糸文の付された

破片である。以上から101・102は第Ⅲ群4類、その他も第Ⅲ群に属するであろう。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

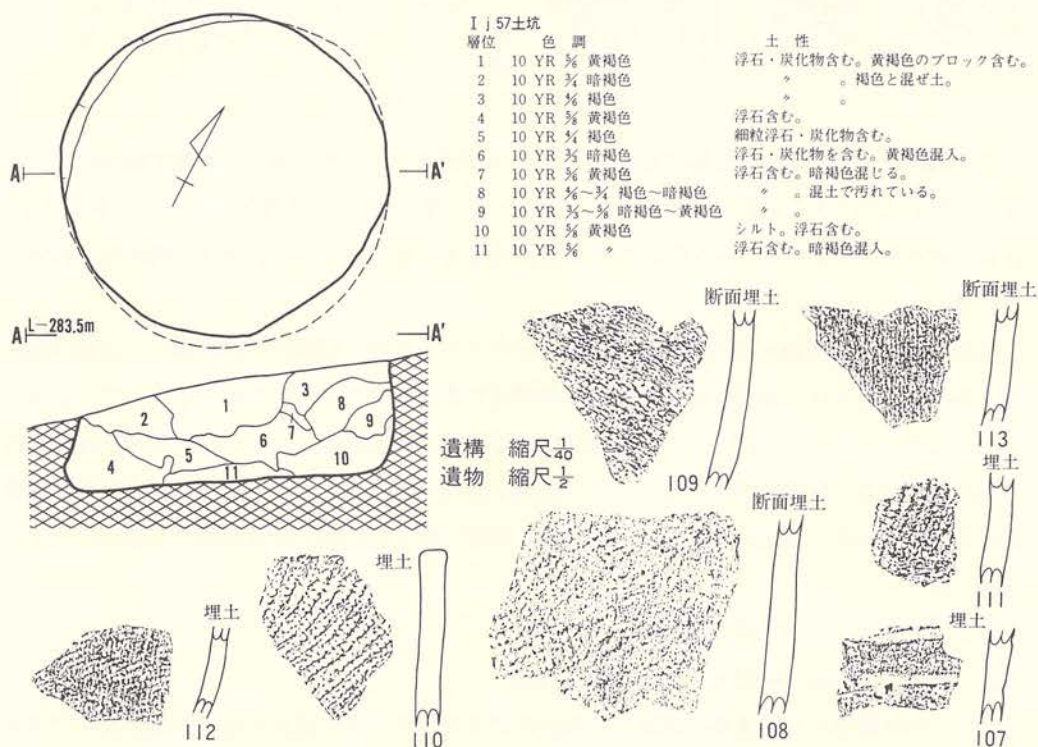
埋土内から出土した土器は全て中期末葉に属するが、重複する I j 54住居跡が中期末葉に位置づけられる同様の土器を出土していることから、本土坑の土器は I j 54住居跡の埋土から転落した可能性も考えられる。以上のことを加味して考えると、本土坑は中期末葉以降であることは確実で、むしろ後期頃に属する可能性が大きいと推定される。

(94) I j 57土坑

〔遺構〕 (第161図、P L-64)

尾根の西端部グリッド I j 57・58にまたがって位置し、I j 55土坑の南8mで西向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.7m×1.7m、底部径1.8m×1.7mの規模をもち、最も深い東壁で62cmの深さをもつ



第161図 (94) I j 57土坑

円形の土坑である。壁は底面に対して70度～80度内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面には若干凹凸があるものの全体に平坦であり比高5cmで南西に傾斜している。

埋土は地山を起源とする黄褐色と黒色土を起源とする暗褐色土や褐色土に大別されるが、全体が11層に細分される。1・4・7・9～11は基本層序第V層を起源とする黄褐色土で、そのほかは暗褐色や褐色の土である。浮石が全体に混入し、1～3・4・5層には炭化物が混じる。堆積状況を見ると、乱雑な堆積を示しており、全体が人為的に埋め戻されている可能性が大きい。(Y)

〔遺物〕

埋土内から15点の土器片が出土している。

土器 (第161図107～113、P L—132)

117は無文の器面に沈線による文様をもつ。108～112は原体LR (108・111・112) やRL (110)の縦回転 (110) や横回転 (108・111・112) による単節斜行縄文を付す。以上から107は第VI群11類、109・113は第VIII群、他は第IX群に属する。

石器

出土していない。

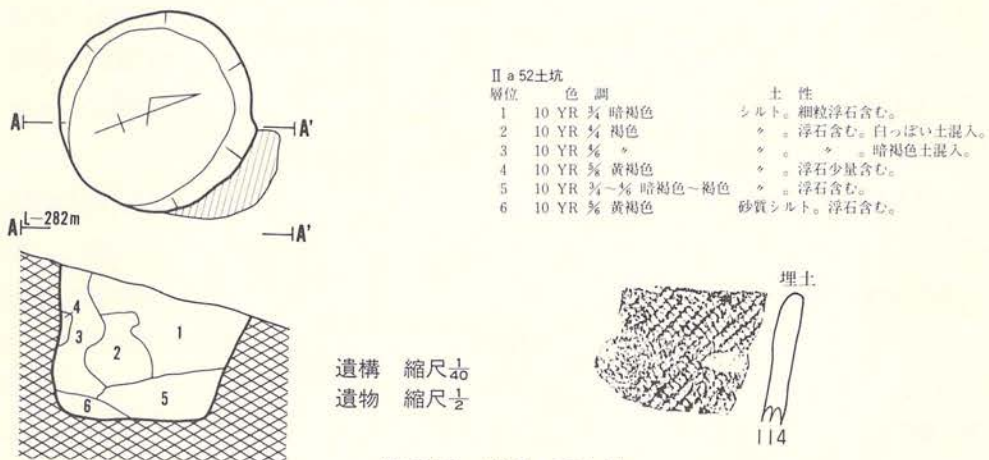
〔遺構の時期〕

出土した土器はいずれも後期後半頃の特徴をもっていることから、本土坑も後期後半に属するであろう。

(95) II a 52土坑

〔遺構〕 (第162図、P L—132)

尾根北西端のグリッドII a 52に位置し、I j 52土坑の北東2.5mで北向き斜面の上位に立地



第162図 (95) II a 52土坑

している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.05m×1 m、底部径95cm×95cmの規模をもち、最も深い南西壁で1.03mの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度～100度で外傾し、断面形はほぼピーカー形である。底面には凹凸もなくほぼ平坦であるが、全体が北東に軽く傾斜している。

埋土は暗褐色・褐色・黄褐色のシルトが堆積し、6層に細分される。4・6層は壁の崩落と考えられる地山起源の黄褐色土で、その他は暗褐色・褐色の土である。全層に浮石粒が混入し、さらに2層には基本層序第VI層の白砂が混じっている。全体が乱雑で不規則な堆積状況であることから、人為的に埋め戻された可能性が強い。(Y)

〔遺物〕

埋土内から土器片が1点出土している。

土器 (第162図114、

器表に0段多条の原体LR横回転による単節斜行縄文を付した粗製土器の破片である。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器に付された縄文は後期後半に多用されるものであることから、本土坑も後期後半に位置づけられるであろう。

(96) II a 53土坑-1 A

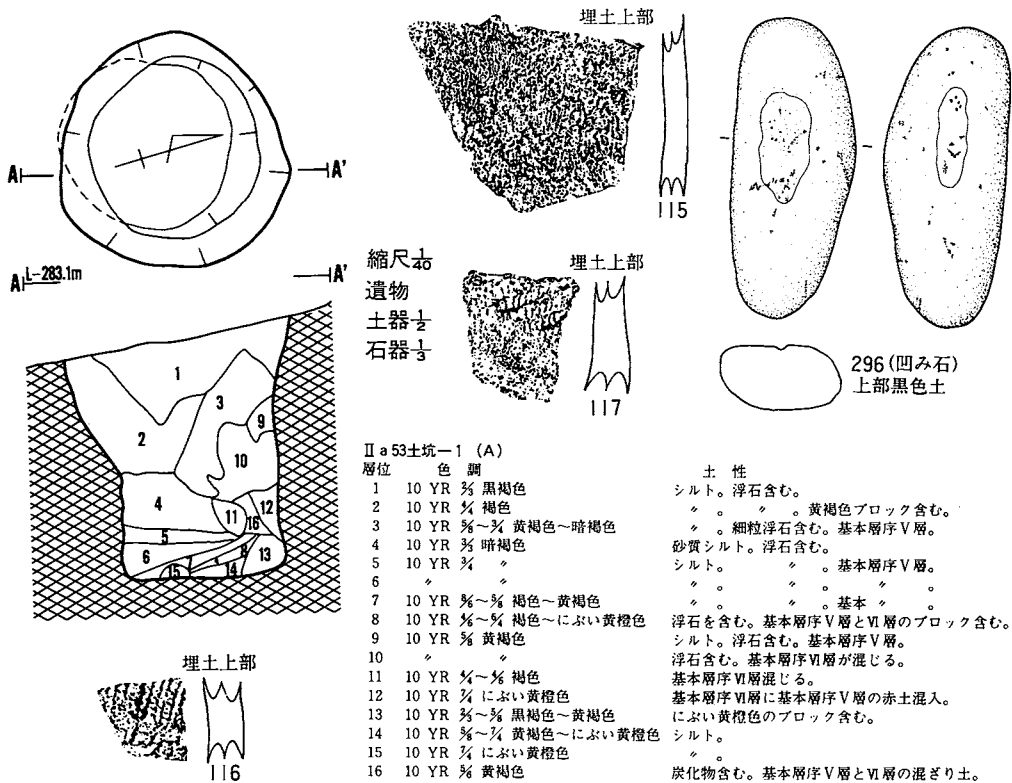
〔遺構〕 (第163図、P L-64)

尾根の北西端に近いグリッドII a 53・54にまたがって位置し、I j 53土坑-2の東4 mで北東向き斜面の上位に立地している。本土坑はII a 53土坑-1 Bを壊して掘られている。

開口部径1.25m×1.2m、底部径95cm×95cmの規模をもち、最も深い南西壁で1.39mの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して底面の上位55cmまでが90度～80度で内傾し、断面形は径90cmの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外傾している。底面には若干凹凸があり、全体が北東に軽く傾斜している。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色等の色調を示すシルトや地山を起源とする土が堆積し、16層に細分されている。3・9・10・12・14～16層は基本層序第V層を起源とする土で、主として南西壁際に堆積している。他は黒色土系の褐色土であるが、いずれも浮石粒や地山起源の塊が混入し、一部には炭化物も含まれる。土層が乱雑であることから人為的な様相ではあるが、下位層は自然堆積の可能性が大きい。(Y)

〔遺物〕



第163図 (96) II a 53 土坑-1 A

埋土内から4点の土器片と石器が1点出土している。

土器 (第163図115~117、P L-132)

115は無文土器の体部破片である。116は原体LRの太さの異なる二本の縄を撚り合わせた付加条による単節斜行縄文をもち、117は原体LR横回転による単節斜行縄文を付す。以上から、115は第VIII群、他は第IX群に相当する。

石器 (第163図296、P L-172)

全長12cm、幅4.9cm、厚さ2.7cm、重さ25.2gの大きさをもつ凹み石で、断面が扁平でやや細長い円礫の両面を使用している。石材は奥羽山地新第三系産の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期中葉～後葉の特徴をもっている。よって本土坑も後期後半頃に位置づけられるであろう。

(97) II a 53土坑-1 B

〔遺構〕 (第164図、P L-65)

尾根の北西端に近いグリッドII a 53・54にまたがって位置し、I j 53土坑-2の東4 mで北東向き斜面の上位に立地している。本土坑の大半はII a 53土坑-1 Aに壊されている。

開口部径1.5m×1.4m、底部径1.25m×1.2mの規模をもち、最も深い南西壁で80cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度～85度で内傾し、断面形はフラスコ形である。底

面の状況は、II a 53土坑-1 Aによって掘り取られているため定かでないが、残存部分にはあまり凹凸もなくほぼ平坦である。

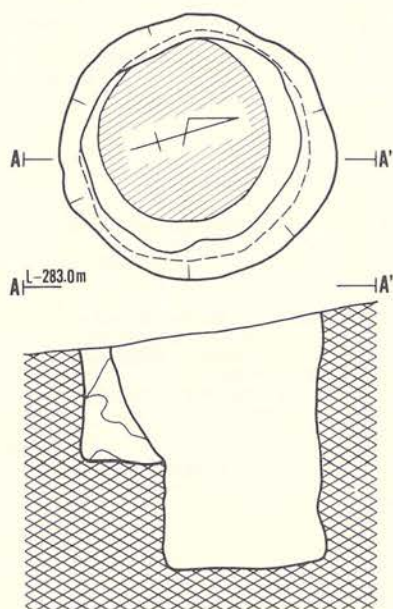
埋土は、明褐色と黄褐色のシルトを主体としている。おそらく人為的に埋め戻されたものと推定される。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

重複関係から考えて、II a 53土坑-1 Aより古いことは確実である。しかし、付近から出土した土器や検出された遺構は中期末葉～後期後半の範囲に入ることや、II a 53土坑-1 Aが後期後半の遺構であることから考えると、中期末葉から後期前半に位置づけられる。



縮尺 1/50

第164図 (97)II a 53土坑-1 B

(98) II a 53土坑-2 (旧II a 52土坑-2)

〔遺構〕 (第165図、P L-65)

尾根の西端部に近いグリッドII a 53に位置し、I j 52土坑の東3 mで北向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径98cm×85cm、底部径98cm×90cmの規模をもち、最も深い南壁で74cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して南西部が90度～80度で内傾するが、ほかは直立～95度で内傾しており、断面形は一部フラスコ形であるが全体的にはビーカー形である。底面にはほとんど凹凸もなくほぼ平坦であり、全体は比高5 cmで北に傾斜している。

埋土は黒褐色、暗褐色、褐色等のシルトが堆積し、10層に細分される。3・6・9・10層に

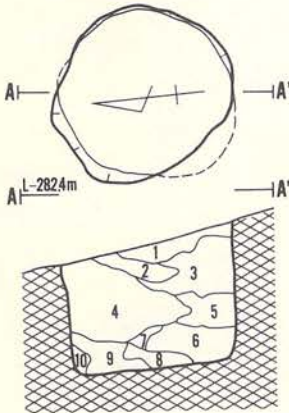
は基本層序第V層を起源とする黄褐色シルトの塊が混入し、さらに3・7層には小礫も混じり、全体的に浮石が含まれている。土層の観察では、いずれの層も斜面下位からの流入を示しているが、ほぼ自然堆積による埋没であろう。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から、縄文時代の土坑であろう。



II a 53土坑-2		土性
層位	色調	
1	10 YR 5/6 黒褐色	シルト。細粒浮石含む。
2	〃	〃
3	10 YR 5/6~5/6 暗褐色~黄褐色	〃。細粒浮石と礫含む。
4	10 YR 5/6 黒褐色	〃。細粒浮石含む。
5	10 YR 5/6 褐色	〃
6	〃	〃。黄褐色のブロック含む。
7	10 YR 5/6 〃	〃。小礫含む。
8	10 YR 5/6 黄褐色	少量の浮石含む。
9	10 YR 5/6 黒褐色	細粒浮石含む。黄褐色ブロック含む。
10	10 YR 5/6~5/6 褐色~黄褐色	シルト。極小浮石含む。

縮尺 1/40

第165図 (98) II a 53土坑-2

(99) II a 55土坑-1

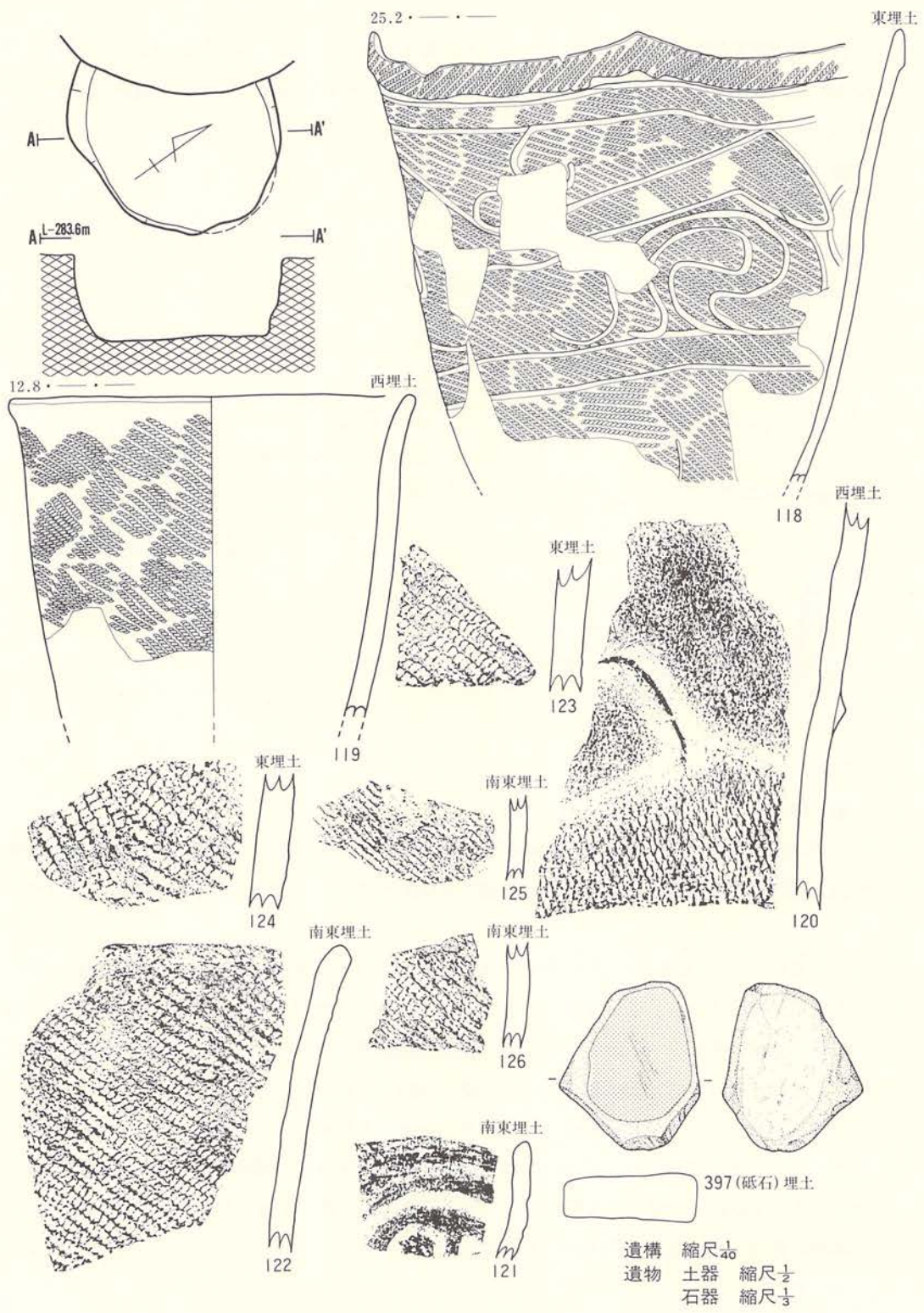
〔遺構〕 (第166図、P L-62)

尾根の北西端に近いグリッド II a 55・II b 55にまたがって位置し、I j 55土坑の東4mで尾根頂上部の北向き緩斜面に立地する。西側がII a 55土坑-2と重複し、全体の約1/2が掘り取られている。

開口部径1.33m、底部径1.2mの規模をもち、最も深い南東壁で60cmの深さをもつ円形か楕円形の土坑と推定される。壁は底面に対して90度~85度で内傾する部分(南西と北東壁)と90度~95度で外傾する部分(東壁)があるが、本来的に断面形はピーカー形と考えられる。底面には若干凹凸があり、全体が南西に向かって軽く傾斜している。

当初、土坑としての認定に難があったため、土層図を作成しないで完掘に至ったが、上部に黒色シルトが15cm観察された以外は、底面直上まで基本層序第V層に相当する土の単層であった。全体に浮石粒と少量の炭化物が混入しているが、地山層と区別がつかなかった。おそらく、人為的に完全に埋め戻されたものであろう。(Y)

〔遺物〕



第166圖 (99)II a 55土坑-I

埋土内から実測2点と9点の土器片、石器が1点出土している。

〔土器〕 (第166図118~126、P L-133)

118は全体の $\frac{1}{2}$ 強を残存する土器で、器面に原体LR縦回転による単節斜行縄文を付し、その後沈線によって文様を施している。口縁は三角形状に尖る4個の波状縁で、口縁端部が肥厚する。119は器表に原体LR縦回転による単節斜行縄文をもつ粗製土器である。120は単軸絡条体縦回転による撚糸文を付した後沈線で区画し、その部分の縄文を磨消した無文帯に断面三角形の鱗状突起をもつ。121も縄文を付した後沈線で区画し、縄文を磨消している。123・124・126は同一個体と推定されるが、原体RL横回転による縄文をもつ。122はLR縦回転による縄文である。以上のことから、120は第III群5類、121は第III群3類、119は第IV群1類、ほかは第IX群に属する。

石器 (第166図397、P L-178)

長さ8cm、幅6.6cm、厚さ2.3cm、重さ152gの断面が扁平で不整形な円礫を使用した砥石である。石材は奥羽山系新第三系中新統産の流紋岩質極細粒凝灰岩である。

〔遺構の時期〕

本土坑を壊しているII a 55土坑-2は中期末葉に属するI j 54住居跡をも壊していることから、I j 54住居跡と同期か若干新しい時期の遺構と考えられ、中期末葉~後期初葉の土坑であろう。

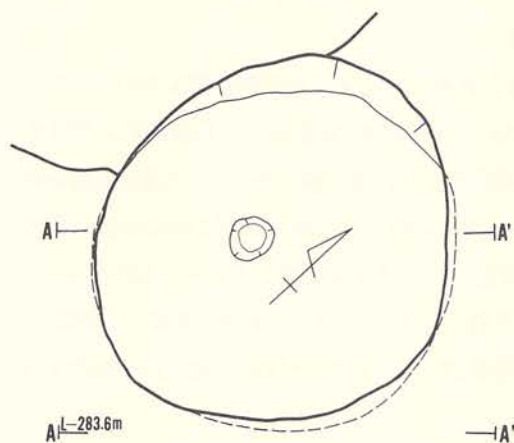
(100) II a 55土坑-2

〔遺構〕 (第167図、P L-65)

尾根の西端に近いグリッドII a 55に位置し、I j 55土坑の北東2.5mで頂上部の北向き緩斜面に立地している。I j 54住居跡の東壁とII a 55土坑-1の西壁が本土坑と重複しているが、本土坑が両者を壊している。

開口部径2m×1.85m、底部径1.85mの規模をもち、最も深い南東壁で1mの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面上位40cmまでが底面に対して75度内傾し、その上位は90度~95度で外傾しており、断面形は底面上位40cmに径1.8mの頸部をもつフラスコ形とも理解できるが、大半を占めるその上位はピーカー形を示している。上位の壁が崩落してピーカー形になったとも考えられるが、ここではピーカー形としておく。底面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、全体が北に若干傾斜している。また、底面中央のやや西寄りに、規模が25cm×24cm、深さ4cmの副穴が検出されている。

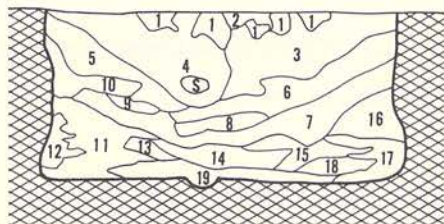
埋土は各種の色調を示すシルトや地山起源の土が堆積し、19層に細分されている。5~8・10~12・15~18が基本層序第V層やVI層を起源とする黄褐色土や灰白色の白砂で、壁際を主体



II a 55土坑-2

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 褐色	シルト。浮石・炭化物含む。
2	10 YR 5/6-7/6 黒褐色~暗褐色	。腐植土が混入。
3	10 YR 5/6 暗褐色	浮石・炭化物含む。黄褐色混入。
4	。。	。
5	10 YR 5/6 黄褐色	。
6	。	。
7	。	。
8	10 YR 5/6-7/6 黄褐色~褐色	浮石含む。炭化物は多く含む。
9	10 YR 5/6-7/6 褐色	。
10	10 YR 5/6 黄褐色	。
11	。	浮石・炭化物含む。
12	10 YR 5/6 にぶい黄褐色	基本層序層が混じる。
13	10 YR 5/6 褐色	細粒浮石含む。黄褐色土混入。
14	10 YR 5/6 。	浮石多く含む。
15	10 YR 5/6 黄褐色	浮石・炭化物少量含む。
16	10 YR 5/6 。	浮石含む。暗褐色がブロックで含む。
17	10 YR 5/6 黄褐色	にぶい黄褐色混入。
18	。	粘性なし。
19	10 YR 5/6 褐色	浮石・炭化物含む。

縮尺 1/50



第167図 (100) II a 55土坑-2

にして多量堆積している。おそらく壁の崩落によるであろう。黒色土系の褐色や暗褐色のシルトはそれらの間層として観察され、1~4層は

壁の崩れを伴わない外部からの流入であろう。全層に浮石が混じり、1・3・8・11・15・19層には炭化物粒も含む。おそらく自然堆積によって埋没した土坑であろうと推定される。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

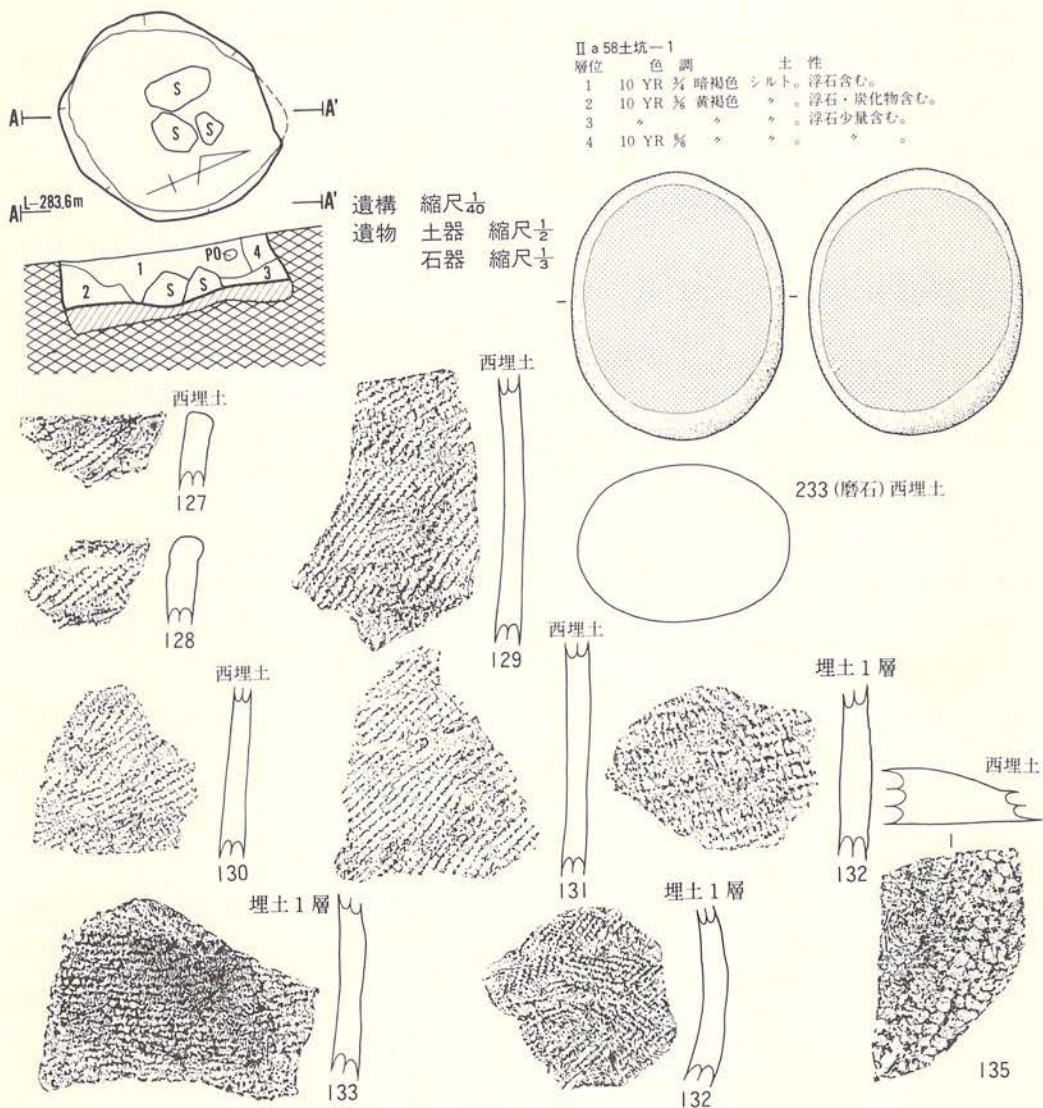
形状や埋土の状況から縄文時代の土坑であることは確実である。時期は中期以降ではあるが明確ではない。おそらく後期の土坑であろう。

(101) II a 58土坑-1

〔遺構〕 (第168図、P L-66)

尾根の西端中央やや南寄りのグリッド II a 58に位置し、I j 57土坑の南東3mで南西向き斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.15m×1m、底部径1.1m×95cmの規模をもち、最も深い北東壁で30cmの深さをもつやや歪んだ不整楕円形である。壁は北側が60度で内傾するが、他は90度~100度で外傾しており、現状での断面形は浅い皿形である。底面には若干凹凸があり、南に軽く傾斜している。また、底面中央で35cm×20cm×10cm、25cm×15cm×15cm、20cm×12cm×15cmの大きさをもつ3個



第168図 (101) II a 58 土坑-1

の亜円礫が出土している。

埋土は暗褐色、黄褐色、明黄褐色のシルトと地山起源の土が堆積し、4層に細分されている。いわゆる黒色土系は1層のみで、浮石が混じる。2～4層は基本層序第V層を起源とする土で、2層は若干よごれ、炭化物が混入している。全層に浮石が混入する。一部壁の崩れがあると思われるがほぼ自然堆積による埋没であろう。(Y)

〔遺物〕

埋土内から48点の土器片と石器が1点出土している。

土器 (第168図127~135、P L-133)

127~134はともに縄文だけを付した粗製土器の口縁部や体部の破片である。縄文は全て原体LR横回転による単節斜行縄文である。135は網代痕をもつ底部の小破片である。以上から127~134は第IX群に属する。

石器 (第168図233、P L-168)

長さ10.6cm、幅8.5cm、厚さ6.2cm、重さ93.5gの大きさをもつ断面が扁平な楕円形の円礫の両面を使用面とした磨り石である。石材は北上山地古生界産の凝灰質硬砂岩である。

〔遺構の時期〕

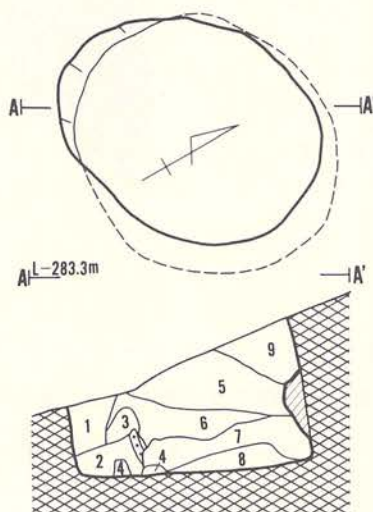
出土した土器の特徴は後期後半のものに近似していることから、本土坑は後期後半頃に属するであろう。

(102) II a 58土坑-2

〔遺構〕 (第169図、P L-66)

尾根南西端のグリッドII a 55・56にまたがって位置し、II a 55土坑-1の南4mで、南西向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.4m×1.15m、底部径1.5m×1.3mの規模をもち、最も深い北東壁で80cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は西壁が100度位で外傾以外は90度~100度で内傾し、本来の断面形はフラスコ形と考えられる。底面には凹凸もなく平坦であるが、中央部が低く壁際に寄るに従って若干高くなっている。



埋土は暗褐色・褐色・黄褐色等のシルトや地山起源の土が堆積し、9層に細分される。3・4・7・8層は地山起源の黄褐色土であり、そ

II a 58土坑-2

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 暗褐色	木根跡。
2	7.5YR 5/6 褐色	粘性わずかにある。
3	10 YR 5/6 黄褐色	浮石含む。
4	10 YR 5/6 にぶい黄橙色	混じり土で汚れている。
5	10 YR 5/6 暗褐色	細粒浮石・炭化物含む。
6	〃	〃 黄褐色のブロックを含む。
7	10 YR 5/6 黄褐色	浮石含む。暗褐色のブロック含む。
8	〃	細粒浮石含む。
9	10 YR 5/6 褐色	〃 黄褐色のブロック含む。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第169図 (102) II a 58土坑-2

の他が褐色土である。全層に浮石の混入がある。土層を観察すると5・6・9層は斜面下位からの堆積を示し、自然状態の埋没とは考えられない。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から縄文時代の土坑であろう。

(103) II a 58土坑-3

〔遺構〕 (第170図、P L-66)

尾根南西端のグリッドII a 58に位置し、II a 58土坑-1の北側数10cmに隣接し南西向き斜面の上位に立地している。重複する遺構はない。

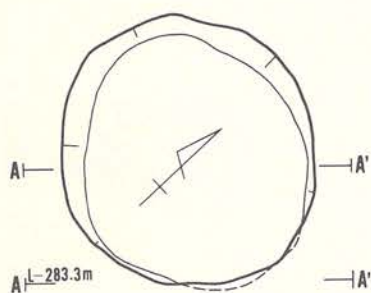
開口部径1.45m×1.4m、底部径1.4m×1.2mの規模をもち、最も深い北東壁で50cmの深さをもちやや楕円形気味の土坑である。壁は底面に対して95度外傾し、断面形はピーカー形である。底面にはほとんど凹凸はないが、中央部が低く壁寄りが次第に高くなっている。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色を示すシルトと地山起源の土が堆積し、11層に細分される。全体に浮石を混入し、8層には炭化物も混じる。3～6・9～11層は地山を起源とする土で壁の崩落と投棄があったものと推定される。一部は人為的な埋め戻しがあると考えられる。

(Y)

〔遺物〕

出土していない。



II a 58土坑-3

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 褐色	シルト。浮石少量含む。
2	10 YR 5/2 黒褐色	〃 〃 〃
3	10 YR 5/2 黄褐色	〃 〃 浮石含む。褐色ブロック含む。
4	〃	〃 〃 〃
5	10 YR 5/2 にぶい黄褐色	〃 〃 浮石少量含む。
6	10 YR 5/2 〃	〃 〃 にぶい黄褐色が混じる。
7	10 YR 5/2 褐色	黄褐色が混じる。
8	10 YR 5/2 暗褐色	シルト。少量の細粒浮石・炭化物含む。
9	10 YR 5/2 にぶい黄褐色	〃 〃 少量の浮石含む。
10	〃	〃 〃 にぶい黄褐色ブロック含む。
11	10 YR 5/2 にぶい黄褐色	〃 〃 褐色のブロック含む。

縮尺 1/40

第170図 (103) II a 58土坑-3

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から、縄文時代の土坑であろう。

(104) II a 58土坑-4 (旧II b 58土坑-3)

〔遺 構〕 (第171図、P L-67)

尾根南西端に近いグリッドII a 58・59にまたがって位置し、II a 58土坑-2の東2 mで南西向き斜面に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.45m×1.3m、底部径1.8m×1.55mの規模をもち、最も深い北東壁で50cmの深さをもつやや歪んだ楕円形の土坑である。壁は南西壁が95度で外傾するものの、他は90度～50度で内傾し、断面形は南西壁が崩落と考えれば頸部をもたないフラスコ形である。底面には若干凹凸があり、壁寄りほど次第に高くなっている。

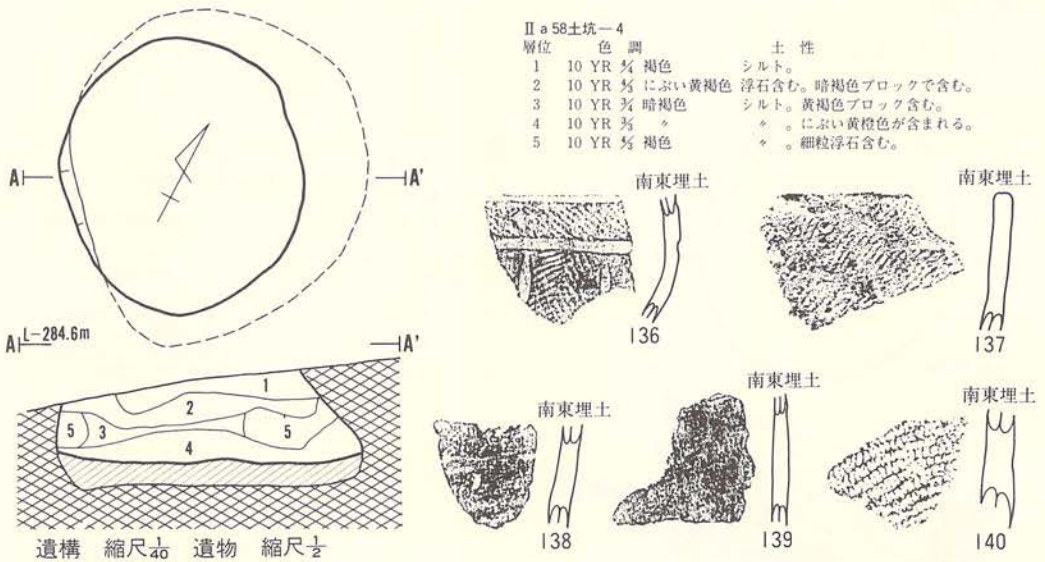
埋土は暗褐色・褐色・黄褐色のシルトや地山を起源とする土が堆積し、5層に細分される。2層は基本層序第V層の汚れた土で外部からの投げ込みであろう。全層に浮石を含む。土層をみると、いずれの層も平面堆積の様相を示し、本土坑は人為的に埋め戻されたものと考えられる。

(Y)

〔遺 物〕

埋土内から土器片が8点出土している。

土 器 (第171図136～140、P L-133)



第171図 (104) II a 58土坑-4

136は原体R L縦横回転による羽状縄文を付した後沈線で区画し、縄文を磨消している。138・139は無文土器である。137は原体Lの無節縄文、140は0段多条の原体L Rによる単節の斜行縄文を付す。以上から、136は第VI群4類、138・139は第VIII群、137・140は第IX群に属する。

〔遺構の時期〕

出土した土器は全て後期後葉に位置づけられることから、本土坑も後期後葉頃であろう。

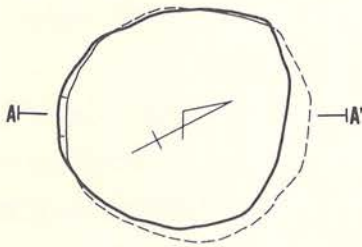
(105) II a 59土坑

〔遺 構〕 (第172図、P L-67)

尾根の南西端に近いグリッドII a 59・II b 59にまたがって位置し、II a 58土坑-4の南2.5mで南西向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.2m×95cm、底部径1.35m×1.25mの規模をもち、最も深い北東壁で70cmの深さをもち若干歪んだ楕円形の土坑である。壁は南西側の一部が90度～95度で外傾する以外は90度～70度で内傾しており、特に北東壁は底面の上位35cmまで60度で内傾し、その上位はほぼ直立している。断面形は一部ピーカー形の部分もあるが、本来はフラスコ形を示すと考えられる。底面には若干凹凸があり、中央部が幾分低く壁際が若干高くなっている。

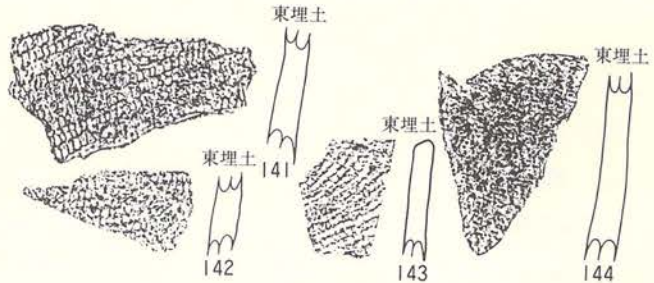
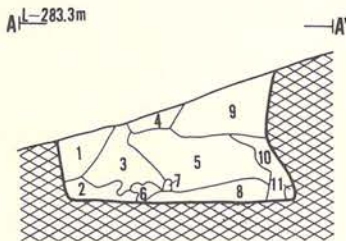
埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色等のシルトと地山を起源とする土が堆積し、11層に細分される。4・7・8層は地山を起源とする黄褐色土で、そのほかは黒色土系の土である。全



縮尺 $\frac{1}{40}$

II a 59土坑

層位	色 調	土 性
1	10 YR 5/ 褐色	黄色土が混じる。
2	10 YR 5/ 暗褐色	にぶい黄橙色が混じる。
3	10 YR 5/ 墨褐色	細粒浮石・炭化物含む。
4	10 YR 5/ 黄褐色	浮石少量含む。
5	10 YR 5/ 黒褐色	浮石含む。褐色がブロックで含まれる。
6	10 YR 5/ 暗褐色	細粒浮石含む。
7	10 YR 5/ にぶい黄橙色	。
8	10 YR 5/ 黄褐色	白っぽい土と褐色が混じる。
9	10 YR 5/ 褐色	汚れた黄褐色がブロックで含まれる。
10	10 YR 5/ 黒褐色	白っぽい土が混じり汚れている。
11	10 YR 5/ にぶい黄橙色	7層と同じ。



第172図 (105) II a 59土坑

層に浮石が混じり、3層には炭化物も含まれる。

〔遺物〕

埋土内から9点の土器片が出土している。

土器 (第172図141~144、P L-133)

141・142は原体L R横回転による単節斜行縄文をもつ体部破片で、143はR L縦回転による単節斜行縄文である。144は無文である。以上から、141~143は第IX群、144は第VIII群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期後半頃の特徴をもっていることから、本土坑も後期後半頃に属するであろう。

(106) II b 54土坑-1

〔遺構〕 (第173図、P L-67)

尾根の北西端に近いグリッドII b 54に位置し、II a 53土坑-1の南東3mで北東向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.4m×1.35m、底部径1.45m×1.4mの規模をもち、最も深い南西壁で95cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は南西側が底面の上位75cmまで70度で内傾し、北壁は底面の上位30cmまでが大きく扶られ、その上位は110度で外傾している。断面形は径1.15m位の頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は90度~95度で外傾している。底面にはほとんど凹凸がなく平坦で、ほぼ水平に近い。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色等のシルトや地山を起源とする土が堆積し、12層に細分される。2・10~12は地山起源の黄褐色土で、ほかは黒色土系の土である。全体に浮石が多く混じる。土層図をみると、非常に特異な堆積を示しているが、壁際から底部寄りには地山起源の土、中心部は黒色土系の堆積であることを考えると、自然状態で埋没した土坑であろう。

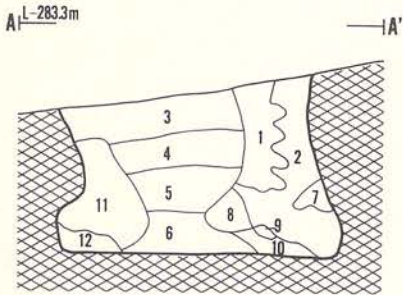
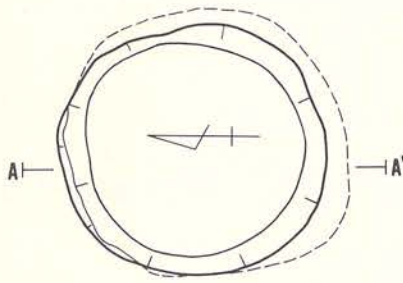
(Y)

〔遺物〕

埋土内から5点の土器が出土している。

土器 (第173図145~149、P L-133)

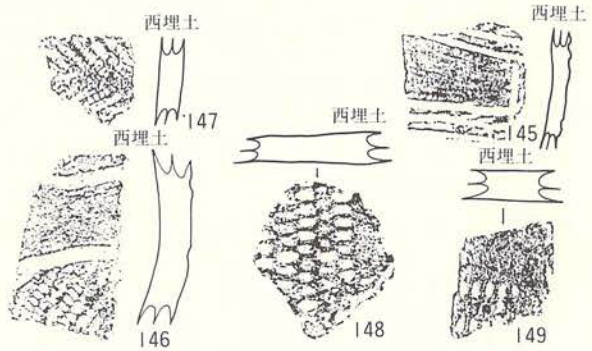
145は原体R L縦回転による縄文を付した後2条~3条の並行沈線で区画し、縄文を磨消している。146もほぼ同様であるが、縄文がL R横回転、区画する沈線が単線という違いがある。147は羽状縄文をもつ。148・149は網代痕をもつ底部破片である。以上から、145は第VI群3類、146



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

II b 54土坑-1

層位	色調	土性
1	10 YR 5/1 暗褐色～黄褐色	赤色浮石含む。基本層序V層。
2	10 YR 5/1 黄褐色～褐色	若干 〃。基本層序V層の赤土が混じる。
3	10 YR 5/1 黒褐色	シルト。浮石多く含む。
4	〃	〃
5	10 YR 5/1 褐色	〃。粘性わずかにある。
6	10 YR 5/1 暗褐色	〃。細粒浮石含む。
7	10 YR 5/1 褐色	砂質シルト。浮石含む。
8	10 YR 5/1 褐色～暗褐色	シルト。細粒浮石含む。
9	10 YR 5/1 暗褐色	〃
10	10 YR 5/1 黄褐色	砂質シルト。基本層序VI層。
11	10 YR 5/1 黄褐色～褐色	シルト。浮石・炭化物含む。基本層序V層。
12	10 YR 5/1 黄褐色	砂質シルト。浮石含む。



第173図 (106) II b 54土坑-1

は第IV群4類、147は第IX群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

146は中期末葉の土器であるが、145・147は後期後半に属する。よって本土坑は後期後半に位置づけられるであろう。

(107) II b 54土坑-2

〔遺構〕 (第174図、P L-68)

尾根の北西端に近いグリッドII b 54・II b 55にまたがって位置し、II b 54土坑-1の南東3mで北東向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.05m×1.05m、底部径1.3m×1.25mの規模をもち、最も深い南東壁で58cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して80度で内傾し、断面形はフラスコ形である。底面に若干凹凸があり、壁際が幾分高くなっている。

埋土は黒褐色、暗褐色、褐色、黄褐色のシルトや地山を起源とする土が堆積し、13層に細分されている。4～10・12・13層は基本層序第V・VI層を起源とする黄褐色土で、斜面上位の南壁

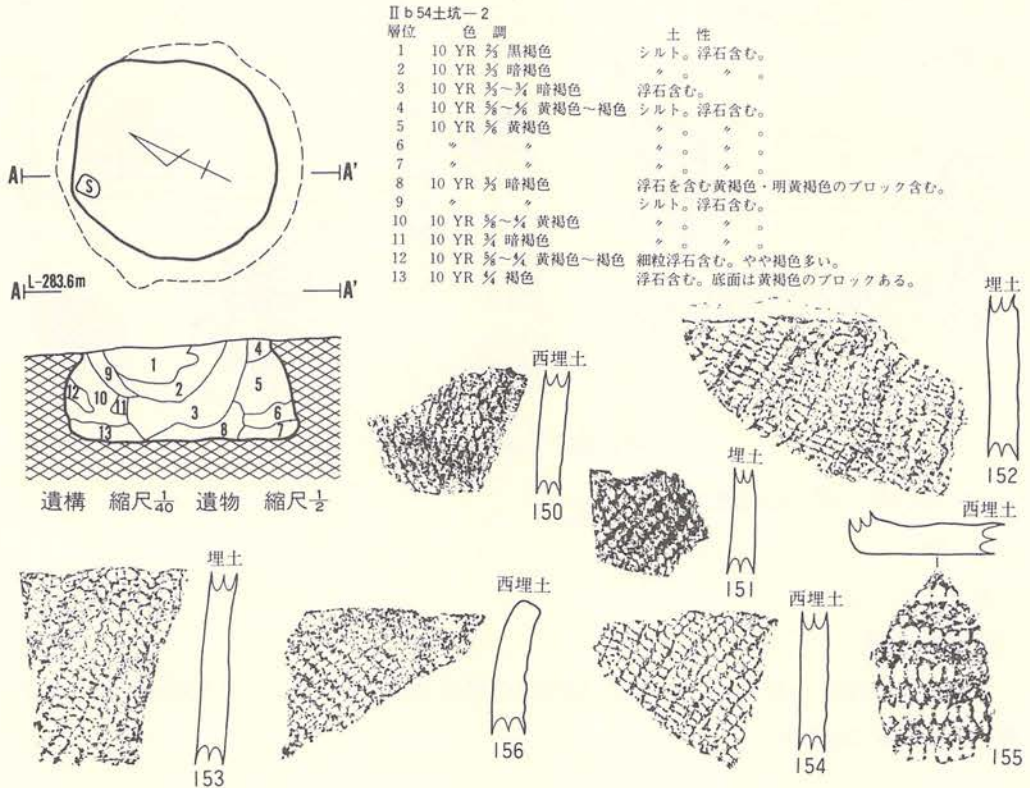
寄りに多く堆積している。全層に浮石が混入している。自然堆積による埋没であろう。(Y)

〔遺物〕

埋土内から12点の土器片が出土している。

土器 (第174図150~156、P L-133)

155は縄代痕をもつ底部の破片であるが、ほかは全て縄文だけを付した粗製土器の破片であ



第174図 (107) II b 54土坑-2

る。縄文は原体LR横回転(150・151・153・154)や縦回転(156)、0段多条のRL縦回転(152)による単節の斜行縄文である。以上から、第IX群に属する。

〔遺構の時期〕

出土した土器には中期的なものと後期的なものがあり、本土坑は後期に伴うであろう。

(108) II b 55土坑-1 (旧II b 56土坑)

〔遺構〕 (第175図、P L-68)

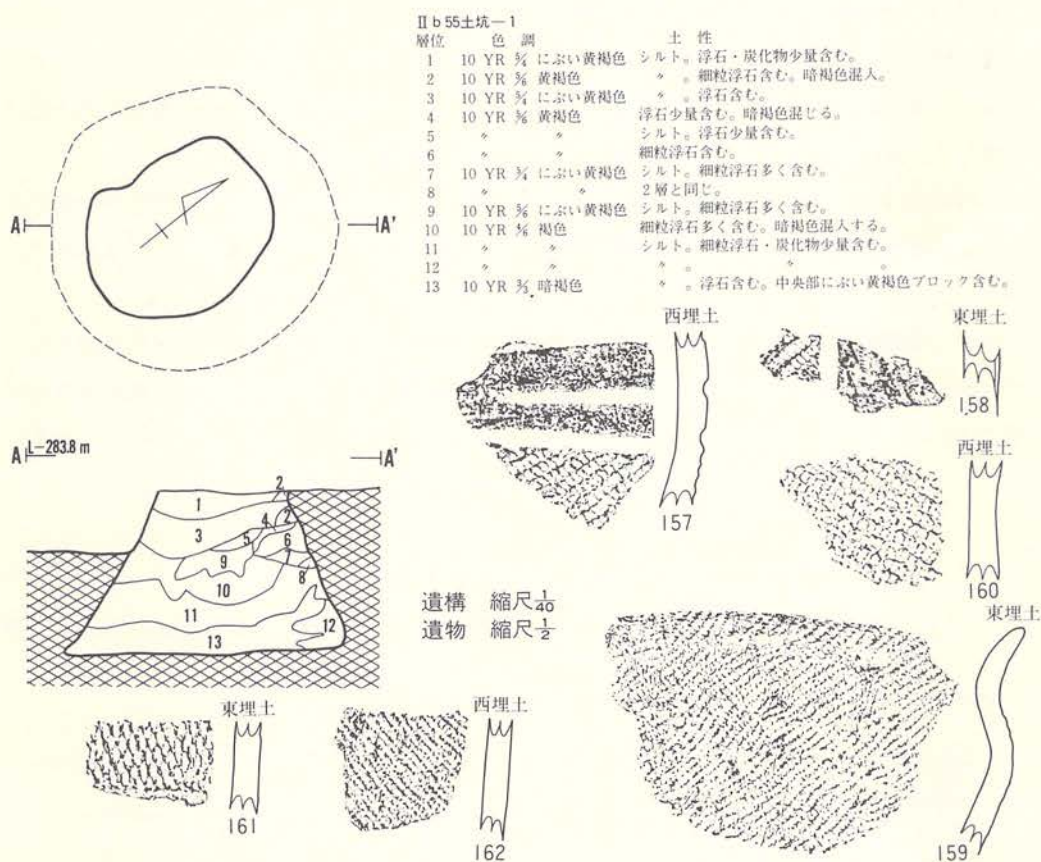
尾根の北西端に近いグリッド II b 55・56にまたがって位置し、II b 54土坑-2の南4 mで尾根の頂上部に立地している。II a 56住居跡の北東壁と重複し、本土坑がII a 56住居跡を壊している。

開口部径1.05m×80 cm、底部径1.5m×1.3mの規模をもち、最も深い南東壁で1 mの深さをもつほぼ円形の土坑である。壁は底面に対して80度～60度で内傾し、断面形はフラスコ形である。底面には凹凸もなく平坦であるが、比高10cmで西壁寄りが低い。

埋土は褐色・暗褐色・黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、13層に細分される。上部層の1～9層は黄褐色を基調とする基本層序第V・VI層を起源とする土が堆積し、10層～12層は黒色土系の土である。全層に浮石が混入し、1層には少量の炭化物も含む。人為的に埋め戻した可能性がある。

〔遺物〕

埋土内から16点の土器片が出土している。



第175図 (108) II b 55土坑-1

土 器 (第175図157~162、P L—133)

157・158は0段多条の原体L R縦回転による単節の斜行縄文を付した後沈線で区画し、縄文を磨消している。160・162は原体R L横回転による単節斜行縄文である。161は単軸絡条体縦回転による燃糸文をもつ。159は原体L R横回転による単節斜行縄文を付す。以上から、157~158は第III群3類、そのほかは第IX群に属する。

石 器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器の中で157・158は中期末葉に属し、160・161も同様であろう。159・162は後期後半の特徴をもっている。本土坑に壊されているII a 55住居跡が中期末葉であることから、157・158は住居跡に伴う土器と考えれば、本土坑は後期後半に位置づけられる。

(109) II b 55土坑-2 (旧II b 55土坑)

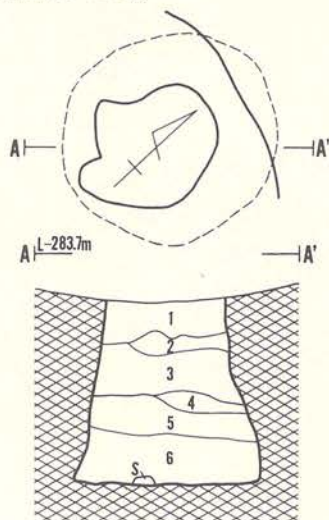
〔遺 構〕 (第176図、P L—68)

尾根の北西端に近いグリッドII b 55に位置し、II b 55土坑-1の西数10cmで尾根の頂上部に立地している。本土坑はII a 55住居跡内にあるが、本土坑の方が古い遺構である。

開口部径60cm×55cm、底部径1.15m×1 mの規模をもち、1 mの深さがある円形の土坑である。壁は80度~60度で内傾し、断面形は底面の上位70cmに径50cmの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外傾している。底面には凹凸もなくほぼ平坦で、水平状態に近い。

埋土は暗褐色と褐色のシルトが堆積し、6層に細分される。5層以外には炭化物が混入し、その他全層に浮石がまじる。どの層も平面的な堆積情況を示しており、人為的に埋め戻された可能性がある。

(Y)



〔遺 物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況、重複関係から考えて、中期かそれ以前の土坑であろう。

II b 55土坑-2

層位	色 調	土 性
1	10 YR 3/6 暗褐色	砂質シルト。炭化物・浮石が混入。
2	10 YR 3/6 褐色	〃。炭化物が混入。
3	10 YR 3/6 暗褐色	浮石・炭化物が混入。
4	10 YR 3/6 褐色	砂質シルト。炭化物が混入。
5	〃	基本層序IV層。
6	7.5YR 3/6	砂質シルト。炭化物が混入。

縮尺 1/40

第176図 (109) II b 55土坑-2

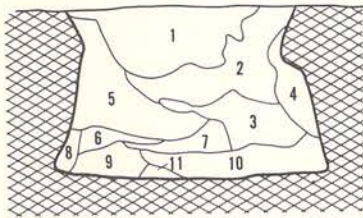
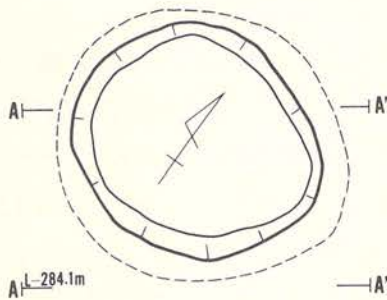
(110) II b 56土坑-1 (旧II c 56土坑-1)

〔遺構〕 (第177図、P L-69)

尾根の北西端に近いグリッドII b 56・57、II c 56・57にまたがって位置し、II b 55土坑-1の南東4.5mで尾根の頂上部に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.35m×1.2m、底部径1.65m×1.5mの規模をもち、最も深い南東壁で92cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は80度~70度で内傾し、断面形は底面の上位70cmに径1.2m×1mの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外傾している。底面には若干凹凸があり、中央部が低く壁に寄るほど高くなる。

埋土は暗褐色、褐色、黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、11層に細分される。3~6・8・9層は基本層序第V・VI層を基源とする土で、壁際を中心に堆積し、黒色土系の褐色土は中心部に多く堆積している。1・5・9・11層には炭化物が混じるほか、全層に浮石粒が混入している。自然堆積による埋没と考えられる。(Y)



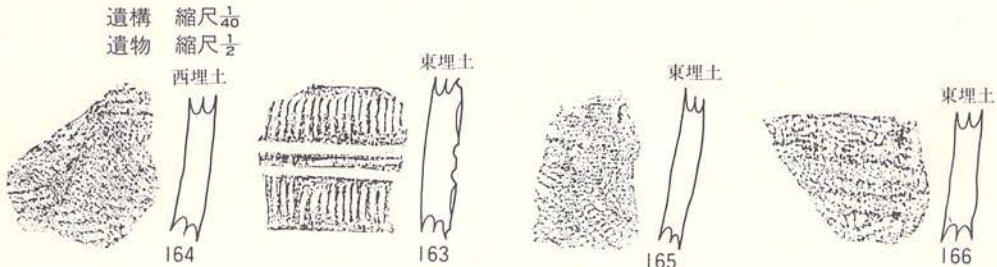
〔遺物〕

埋土内から土器片が10点出土している。

土器 (第177図163~166、P L-134)

163は無文の器表を沈線で区画し、刻目を充填した土器片である。ほかは単節の斜行縄文が付された粗製土器の体部破片である。以上から163

II c 56土坑-1	層位	色調	土性
1	10 YR 5/2	褐色	浮石・炭化物含む。
2	10 YR 5/2	褐色	黄褐色混入する。
3	10 YR 5/2	黄褐色	基本層序V層。
4	10 YR 5/2	黄褐色	浮石含む。
5	10 YR 5/2	黄褐色~褐色	浮石・炭化物含む。
6	10 YR 5/2	黄褐色	浮石含む。
7	10 YR 5/2	暗褐色	シルト。
8	10 YR 5/2	黄褐色	シルト。
9	10 YR 5/2	黄褐色	砂質シルト。浮石・炭化物含む。
10	10 YR 5/2	褐色	浮石含む。
11	10 YR 5/2	褐色	シルト。浮石・炭化物含む。



第177図 (110) II b 56土坑-1

は第VI群の9類、ほかは第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は全て後期後半の特徴をもっていることから、本土坑も後期後半（特に末葉）に位置づけられるであろう。

(111) II b 56土坑-2

〔遺構〕 (第178図、P L-69)

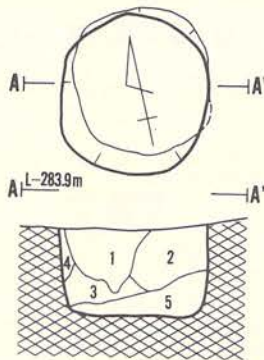
尾根の中央北西寄りのグリッドII b 56に位置し、II b 55土坑-1の南東1.5mにあり尾根の頂上部に立地している。

開口部径90cm×80cm、底部径75cm×70cmの規模をもち、最も深い北壁で50cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対し80度で内傾し、断面形はフラスコ形である。底面に凹凸はないものの、中央が低く壁際が若干高くなり、壁とは丸味をもって接続している。

埋土は褐色、黄褐色のシルトが堆積し、5層に細分されている。3～5層は地山を起源とする土で、壁際と底部寄りに堆積し、上位は黒色土系の褐色シルトである。全層に浮石が混じる。

おそらく、自然堆積で埋没した土坑であろう。

(Y)



層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 褐色-暗褐色	浮石含む。暗褐色のブロック含む。
2	〃	〃
3	10 YR 5/6 黄褐色	シルト。浮石含む。
4	10 YR 5/6 〃	〃 〃 〃。基本層序V層。
5	10 YR 5/6 〃	砂質シルト。浮石含む。

縮尺 1/40

第178図 (III) II b 56土坑-2

〔遺物〕

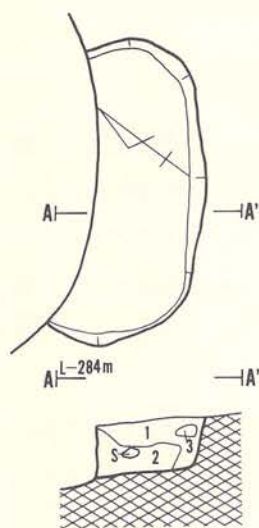
出土していない。

〔遺構の時期〕

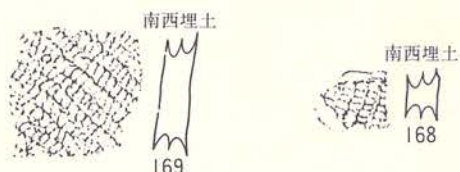
形状や埋土の状況から縄文時代の土坑と考えられる。

(112) II b 56土坑-3 (旧II b 57土坑)

〔遺構〕 (第179図、P L-69)



II b 56土坑-3			
層位	色調	土性	
1	10 YR 5/6 黄褐色	シルト	暗褐色混入する。
2	々	々	浮石含む。
3	々	々	々



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

第179図 (II) II b 56土坑-3

尾根の中央北寄りのグリッド II b 56に位置し、II b 56土坑-2の南2mにあり、尾根の頂上部に立地している。北西側がII a 56住居跡と重複し、本土坑が壊されている。

開口部径1.65m×残存60cm(90cm~1mと推定)、底部径1.5m×残存50cm(70cm~90cmと推定)の規模をもち、最も深い南東壁で28cmの深さをもつ北東-南西に長軸のある楕円形の土坑である。壁は底面に対して110度で外傾し、断面形は浅いピーカー形である。底面は平坦でほぼ水平状態に近い。

埋土は地山を起源とする黄褐色土が堆積し、混入物によって3層に細分されている。1層には暗褐色土が混じり若干黒味が強くみえ、2層にも暗褐色土の塊が混入している。全層に浮石が入る。人為的に埋め戻された可能性が強い。(Y)

〔遺物〕

埋土内から土器片が2点出土している。

土器 (第179図167・168、P L-134)

いずれも縄文のみが付された体部破片である。縄文は原体R L横回転(167)と縦回転(168)である。第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は中期末葉的であることから、II a 56住居跡の遺物と考えられる。したがって、本土坑は重複関係からみて、中期に属するであろう。

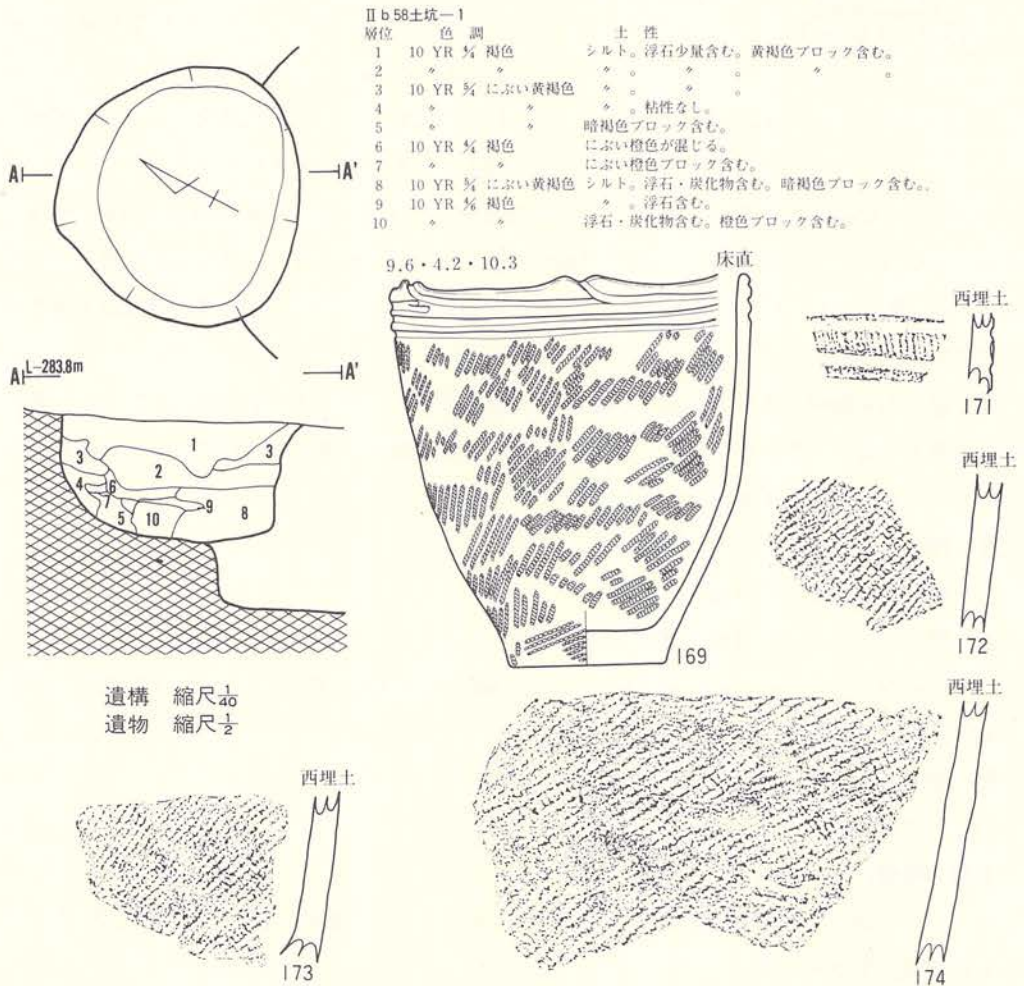
(113) II b 58土坑-1

〔遺構〕 (第180図、P L-70)

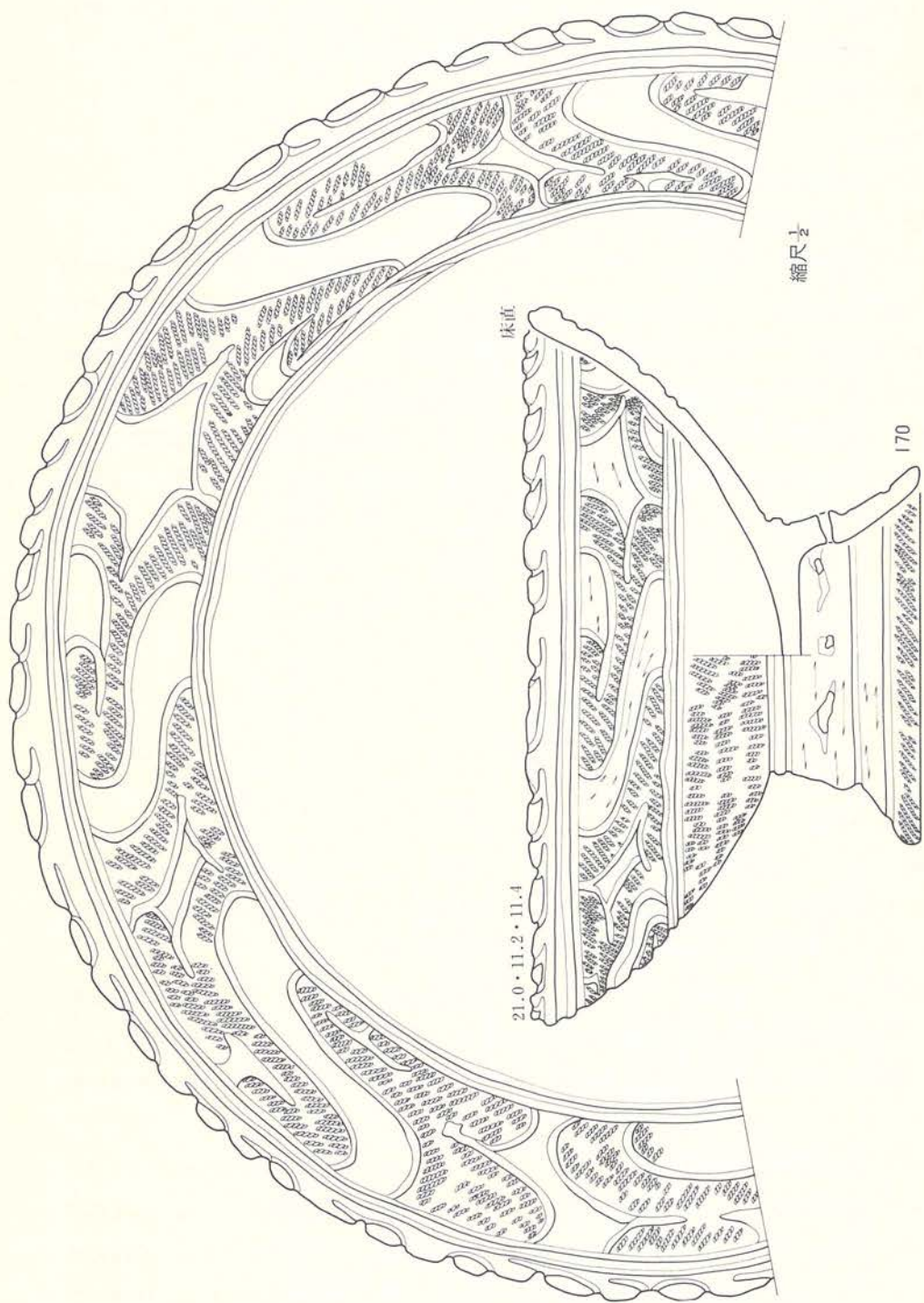
尾根南西端寄りのグリッドII b 58に位置し、II a 58土坑-4の北々東3 mにあり南西向き斜面の上位に立地している。II b 58土坑-2の北西部と重複しているが、本土坑の方が新しい。

開口部径1.4m×1.35m、底部径1.2m×1.1mの規模をもち、最も深い北壁で75cmの深さをもつやや歪んだ円形の土坑である。壁は底面に対して100度～110度で外傾し、断面形はピーカー形である。底面に凹凸はないものの中央部が比高5 cmで低く、壁に寄るほど次第に高くなり、壁とは丸味をもって接続する。

埋土は褐色と黄褐色を示すシルトや地山を起源とする土が堆積し、10層に細分されている。



第180図 (113) II b 58土坑-1



第181图 (113) II b 58土坑一I (遺物)

3～5・8層は基本層序第V層を起源とする黄褐色のシルトで、そのほかは黒色土起源の褐色土である。全層に浮石が混じり、8・10層には炭化物の混入もある。若干層に乱れがあることから人為的に埋め戻された可能性がある。(Y)

〔遺物〕

底面直上から完形土器2点、埋土内から21点の土器片が出土している。

土器 (第180・181図169～174、P L-134)

169・170は北西壁際の底面直上から出土した完形品である。169は口縁部径9.6cm、底部径4.2cm、器高10.3cmの大きさをもつ鉢である。体部には原体LR横回転による単節の斜行縄文である。口縁部には全周する並行沈線が引かれ、口縁は波状を示す。170は口縁部径21cm、底部径11.2cm、器高11.4cmの大きさをもつ台付鉢である。鉢部は器高8cmである。鉢の体部下半は原体LR横回転による単節斜行縄文を付し、上半は縄文を付した後沈線で区画して縄文を腐消し、口唇は小突起をもつ。台部には透かし窓がつき、下端部以外は無文である。171は刻目帯をもつ破片で、その他は縄文のみをもつ粗製土器の破片である。以上から、169は第VII群3類、170は第VII群2類、171は第VI群9類、172～174は第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

169・170の出土から晩期中葉に位置づけられる。

(114) II b 58土坑-2

〔遺構〕 (第182図、P L-70)

尾根の南西端に近いグリッドII b 58に位置し、II a 58土坑-4の北東2mで南西向き斜面に立地する円形の土坑であり、北西部がII b 58土坑-1に壊されている。

開口部径2.1m×2m、底部径1.85m×1.75mの規模をもち、最も深い北壁で1.09mの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して100度～110度で外傾し、断面形はピーカー形である。底面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、中央部が比高6cmで低く、壁に寄るほど次第に高くなっている。

埋土は褐色、黄褐色、明黄褐色等のシルトや地山起源の土が堆積し、18層に細分される。3・4・6・8・10～18層は基本層序第V・VI層を起源とする黄褐色、明黄褐色、にぶい黄褐色等の土が堆積し、特に下位層の主体をなす。ほかは黒色土を起源とする褐色土である。全層に浮石が混じり、4～6層には炭化物を含む。本土坑の埋土は平均的な堆積状況を示し、中位～下位に一部乱れが観察されることから、中・下位は人為的に埋め戻された可能性が強い。(Y)

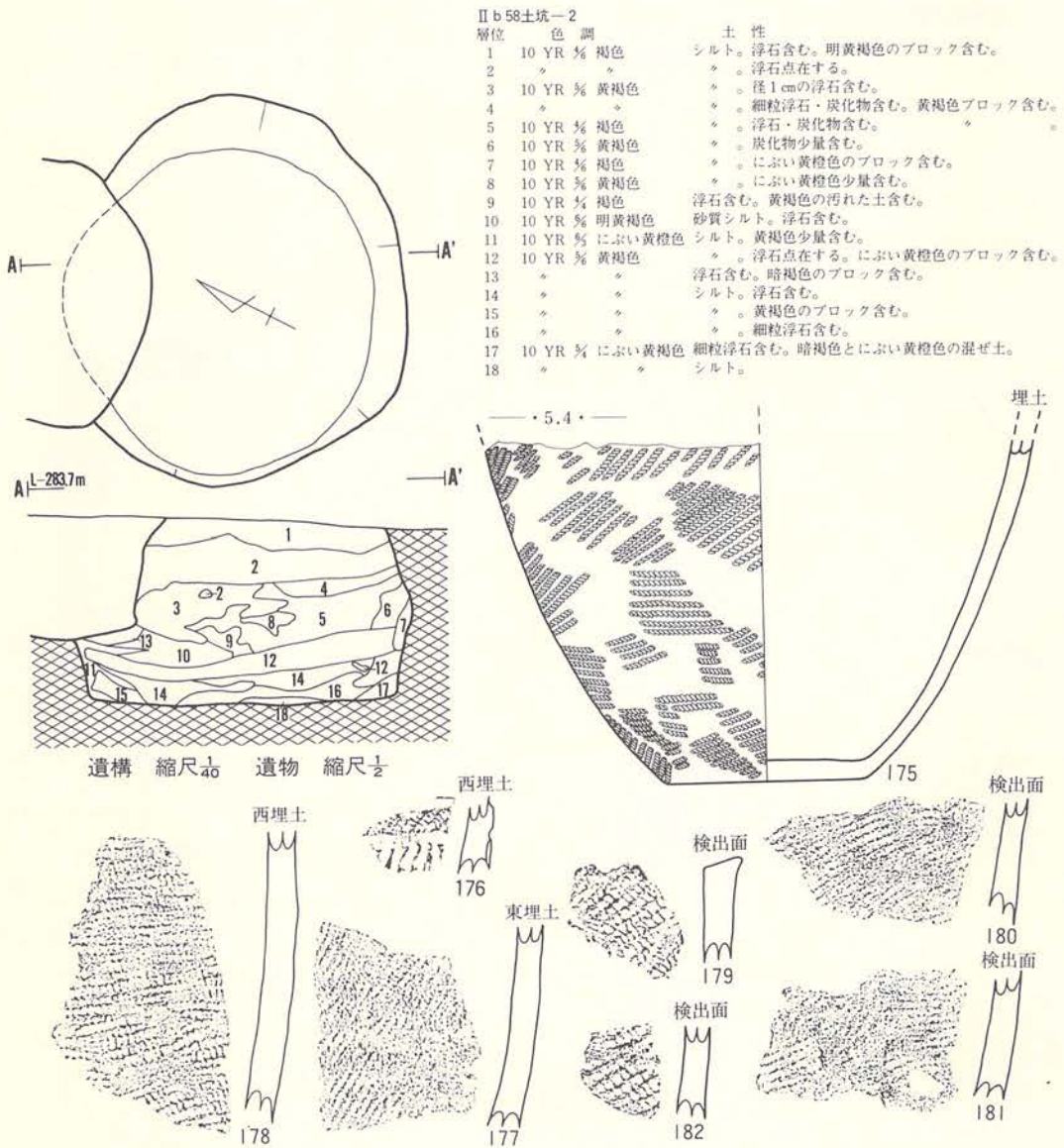
〔遺物〕

埋土内から土器片が21点出土している。

土器 (第182図175~182、P L-134)

175~178は埋土中位~下位の出土であるが、179~182は検出面の最上位からの出土である。

175は体部下半を残存する鉢で、残存口縁部径15cm、底径5.5cm、残存器高9cmの大きさで、



第182図 (II b 58土坑-2)

器表に原体R L縦～斜回転による斜行縄文を付す。176は刻目帯をもつ破片である。ほかは縄文のみを付す粗製土器の破片である。縄文には原体R L斜回転(178)、L R横回転(177・179・182)、R斜回転による単節や無節である。以上から、176は第VI群9類、ほかは第IX群である。

石器

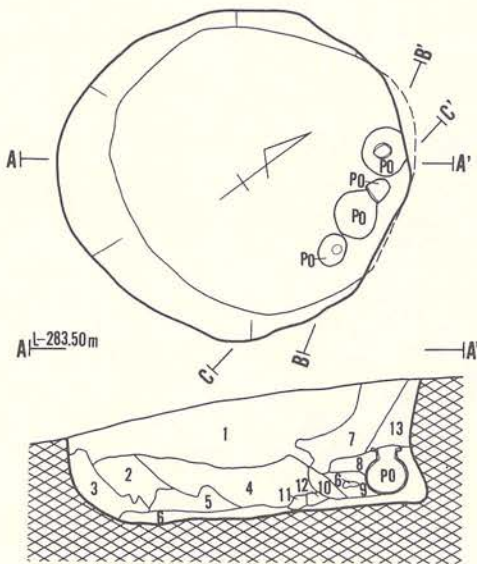
出土していない。

〔遺構の時期〕

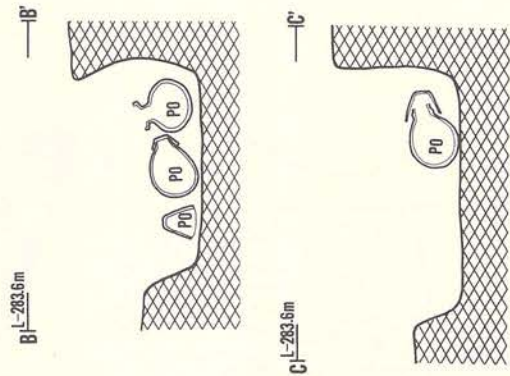
出土した土器は全て後期後半の特徴をもつことと、II b 58土坑-1が晩期中葉に属することから、後期後半～末葉頃に位置づけられるであろう。

(115) II b 59土坑

〔遺構〕 (第183図、P L-70)

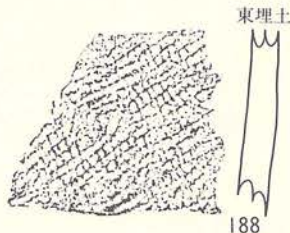


遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$ 遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

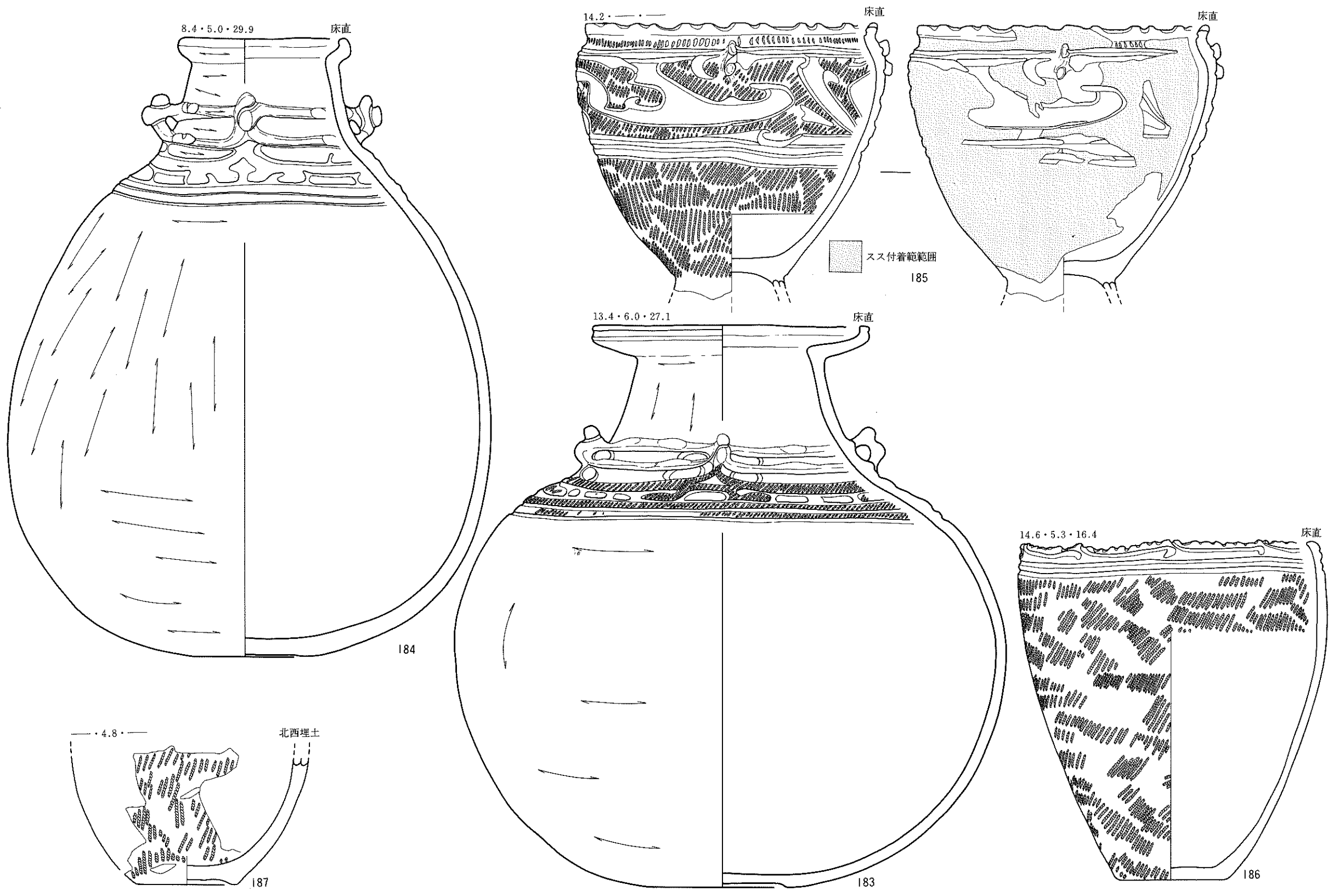


II b 59土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 褐色	シルト。浮石含む。黒褐色のブロック含む。
2	〃 〃 〃	〃 〃 〃 黄褐色のブロック含む。
3	10 YR 5/6 黄褐色	浮石含む。混ざり土で汚れている。
4	10 YR 5/6 褐色	細粒浮石含む。にぶい黄褐色のブロック含む。
5	10 YR 5/6 にぶい黄褐色	〃 〃 〃
6	10 YR 5/6 〃	砂質シルト。浮石含む。
7	10 YR 5/6 黄褐色	シルト。細粒浮石含む。
8	10 YR 5/6 褐色	浮石少量含む。にぶい黄褐色のブロック含む。
9	7.5YR 5/6 〃	粘土質シルト。浮石少量含む。
10	10 YR 5/6 にぶい黄褐色	砂質シルト。暗褐色のブロック含む。
11	10 YR 5/6 褐色	粘性シルト。にぶい黄褐色のブロック含む。
12	〃 〃 〃	3層と同じ
13	〃 〃 〃	7層と同じ。



第183図 (115) II b 59土坑



第184図 (115) II b 59土坑(遺物)

尾根の南西端に近いグリッド II b 58・59 にまたがって位置し、II a 59 土坑の北東 1 m で南西向き斜面の上位に立地している。東端が II b 58 住居跡と接しているが、本土坑の方が新しい。

開口部径 1.85m×1.75m、底部径 1.6m×1.5m の規模をもち、最も深い北壁で 77cm の深さをもつ円形の土坑である。壁は北～東側が 90度～85度で内傾し、ほかは 90度～110度で外傾している。現状の断面形では北～東側がフラスコ形でほかはピーカー形であるが、本来はアラスコ形であった可能性が大きい。底面には凹凸もほとんどなく平坦で、壁際が若干高くなっている。埋土は褐色、黄褐色、にぶい黄橙色を示すシルトや地山起源の土が堆積し、13層に細分される。3・4・5～7・10・12・13層は基本層序第 V・VI層を起源とする黄褐色やにぶい黄橙色の土で、浮石や暗褐色シルトの塊等が混じる。ほかは黒色土起源のシルトであるが、黄褐色土粒を混入する例が多く、浮石を含む。6・8～13層は他より粘性が強く、若干黒味の強い土が堆積している。特に、完形土器が出土した北～南東壁寄りでの傾向が強く、これは出土した土器に起因するものと考えられる。堆積状況を考えると、土層に乱れがあることや、地山起源の土が多いことから人為的に埋め戻されたものと推定される。(Y)

〔遺物〕

北壁～東壁にかけての底面上位 5 cm から壺 2 点、鉢 1 点、台付鉢 1 点の完形土器 4 点と、埋土内から 19 点の土器片が出土している。

土器 (第 183・184 図 183～191、P L—135)

完形の 183～186 は北東壁際の底面上位 5 cm の出土で、北から 183・185・184・186 の順に並んでいた。出土した状況は、183 (壺) は正立で若干南に傾き、内部に少々の土が入っていたがほぼ中空であった。185 の台付鉢は 184 の壺の口縁部を塞ぐ合せ口状に横転しており、184 も 183 同様中空であった。186 は倒立で出土した鉢であるが、やはり中空である。183 は調査時に蓋はなかったが、埋土が全く内部に落ちていないことは、当初蓋をしてあったことを示している。蓋は腐敗性のものであったため、その後腐敗してしまったものであろう。また、土器付近の埋土の黒味が強いことは、少なくとも 183・184 の内部に何か「物」が入っていた可能性が強い。

188 は口縁部径 8.4cm、体部最大径 23.5cm、底径 5 cm、器高 29.9cm の大きさで、体部は入念な研磨痕をもつ以外は無文である。体部の最上位～頸部は沈線と降帯による文様をもち、口縁端部には受口状の縁帯が全周している。体部は無花果状に膨らみ、底部は上げ底状に凹む。183 は口縁部径 13.4cm、体部最大径 26.8cm、底径 6 cm、器高 27.1cm の大きさで、体部は無文である。体部最上位～頸部は縄文を付した後沈線や降帯を施している。口縁部は受口状を示し、底部は凹む。185 は台部を欠失した台付鉢で口縁部 14.2cm、残存部底径 5.5cm、残存器高 13cm の大きさがあり、体部下半には原体 L R 横回転による単節斜行縄文を付す。上位は縄文を付した後沈線で区画して縄文を磨消し、頸部には列点状の刻目帯を全周させ、口縁は小波状を示す。186 は口

8層は基本層序第V層を起源とする土で、浮石を多く混入する。1・4層より下位は人為的に埋め戻された可能性が強い。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から、縄文時代の土坑と考えられる。

(117) II c 54土坑-2

〔遺構〕 (第186図、P L-71)

尾根の北端に近いグリッドII c 54・II d 54にまたがって位置し、II c 54土坑-1の東1 mで北東向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.35m×1.35m、底部径1.3m×1.2mの規模をもち、最も深い南壁で43cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底部に対して90度～100度外傾し、断面形は浅いピーカー形である。底面には凹凸もなくほぼ平坦であるが、中央が若干低く壁寄りが次第に高くなっている。

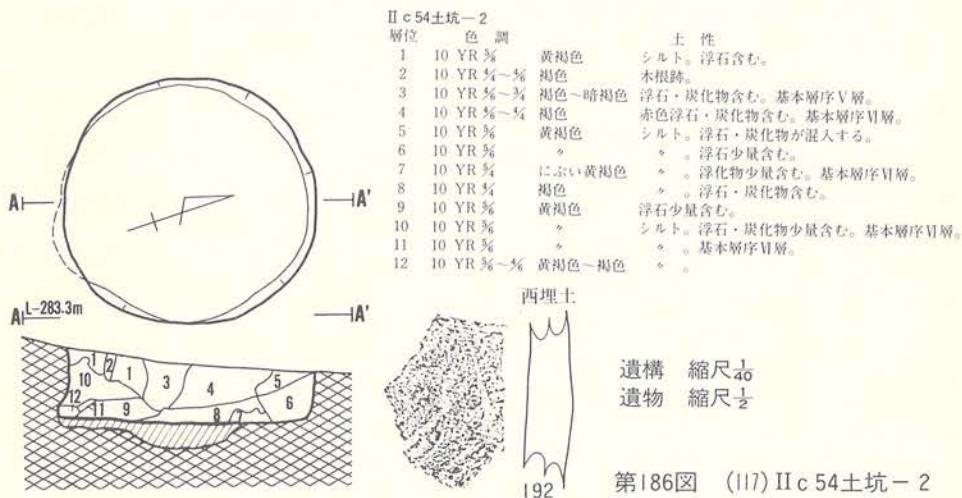
埋土は暗褐色・褐色・黄褐色・にぶい黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、12層に細分される。全体として地山の基本層序第V・VI層を起源とする土が堆積し、3～5・7・8・10層には炭化物の混入がみられ、ほかに全層に浮石が混入する。層が乱れていることから、人為的に埋め戻された可能性が大きい。(Y)

〔遺物〕

埋土内から1点の土器片が出土している。

土器 (第186図192、P L-134)

192は無文土器の体部破片である。第VIII群に属する。



〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から、縄文時代の土坑と考えられる。

(118) II c 56土坑 (旧II c 56土坑-2)

〔遺 構〕 (第187図、P L-71)

尾根の北寄り中央部のグリッドII c 56・57、II d 56・57にまたがって位置し、II b 56土坑-1の東4 mで尾根の頂上平坦部に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.8m×1.65m、底部径2 m×2 mの規模をもち、最も深い南西壁で1.54mの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して80度で内傾し、断面形は底面の1.2m上位に径1.65m×1.6mの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外傾している。また、北東壁と南西壁の底面から45cm上位に副穴的な外方に脹らむ掘り込みがある。規模は、北東壁が間口50cm・奥行20cm、南西壁は間口70cm・奥行40cmである。底面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、中央部が若干低く、壁際に寄るほど次第に高くなる。なお、北東壁際の底面には開口部径50cm×40cm、底部径40cm×35cm、深さ30cmの規模をもつ副穴があり、断面形はビーカー形であるが底部が外方に張り出している。 (Y)

〔遺 物〕

埋土内から28点の土器片と土製品が1点出土している。

土 器 (第187図193~204、P L-135)

193は副穴内から出土した無文の鉢で、口縁部径16.2cm、底部径7.4cm、器高7.7cmの大きさをもつ。195は原体L R横回転による縄文を付した後沈線で区画し、縄文を磨消している。196・197は器表に断面が扁平な隆帯を付した後原体R L縦回転による縄文を付す。198は原体L R縦回転による縄文と刻目帯をもつ。その他は縄文だけを付す粗製土器の破片である。以上から、198は第VI群9類、196・197は第IV群1類、195は第V群2類、193は第VIII群、ほかは第IX群に属する。

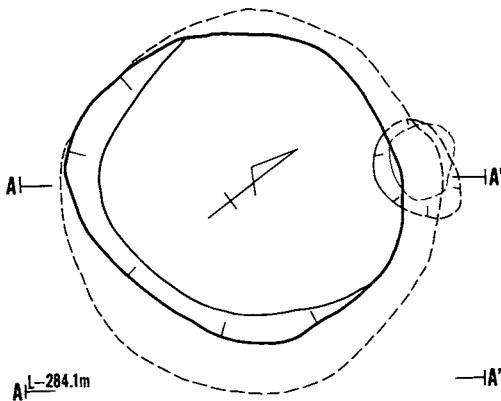
土製品 (第187図14、P L-157)

頭部、右腕、左手、左右の脛~足を欠失した土偶が1点出土している。正面の下腹部を大きく隆起させ、頂上部を十字状に割っている。臀部も軽く隆起させている。乳房の表出はないが妊娠女性を表現したものであろう。残存高さ4 cm、肩幅2.2cm、下腹部の最大厚1.6cmの大きさがある。後期の土偶であろうと推定される。

石 器

出土していない。

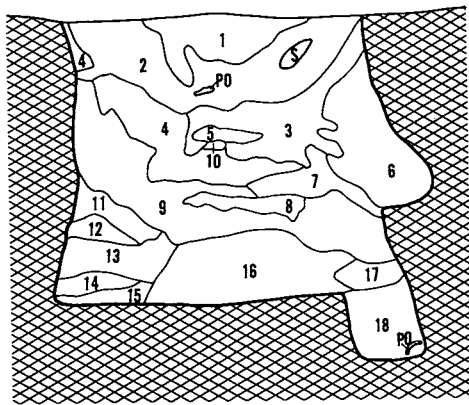
〔遺構の時期〕



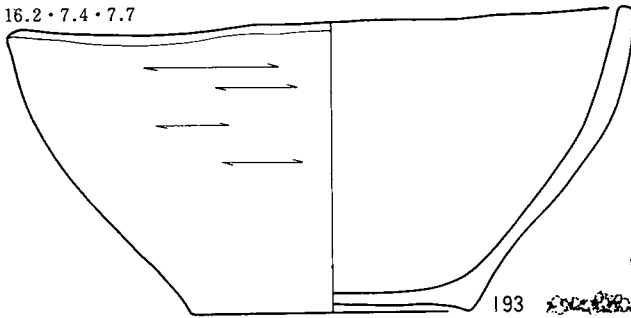
IIc 56土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 黒褐色	浮石含む。
2	10 YR 5/6 暗褐色～褐色	炭化物を含む。基本層序V層。
3	10 YR 5/6 暗褐色～黄褐色	〃
4	10 YR 5/6 黄褐色～暗褐色	〃
5	10 YR 5/6 黄褐色	浮石・炭化物含む。
6	10 YR 5/6 〃	浮石 暗褐色の含む。
7	10 YR 5/6 におい黄褐色～黄褐色	シルト。浮石含む混ぜ土。
8	10 YR 5/6 暗褐色～黄褐色	〃
9	10 YR 5/6 黄褐色	〃。浮石におい黄褐色含む。
10	10 YR 5/6 褐色	〃
11	10 YR 5/6 におい黄橙色	黄褐色含まれる。基本層序VI層。
12	10 YR 5/6 におい黄橙色～褐色	炭化物含む。基本層序VII層。
13	10 YR 5/6 暗褐色～黄褐色	シルト。浮石含む。
14	10 YR 5/6 におい黄褐色	砂質シルト。
15	10 YR 5/6 暗褐色～におい黄橙色	炭化物含む。基本層序VIII層。
16	10 YR 5/6 暗褐色	浮石少量含む。
17	10 YR 5/6 黄褐色	砂質シルト。浮石含む。
18	10 YR 5/6 暗褐色	炭化物含む。基本層序IX層。

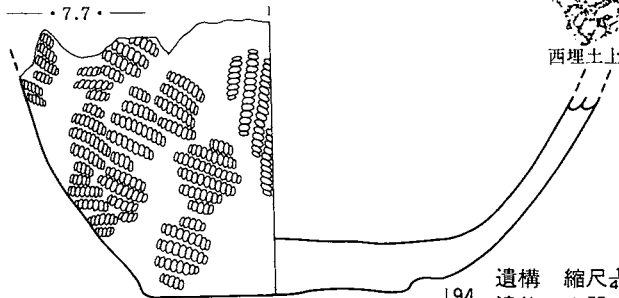
A-A' 284.1m



16.2・7.4・7.7



7.7



194

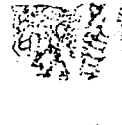
遺構 縮尺 1/10
遺物 土器 縮尺 1/2
土偶 縮尺 1/2

埋土中位



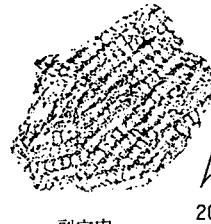
195

埋土上位



196

埋土1層



埋土1層

200



199

埋土中位



203

埋土中位



204

埋土1層

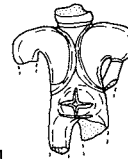
197

西埋土上位



198

北西埋土下位



14

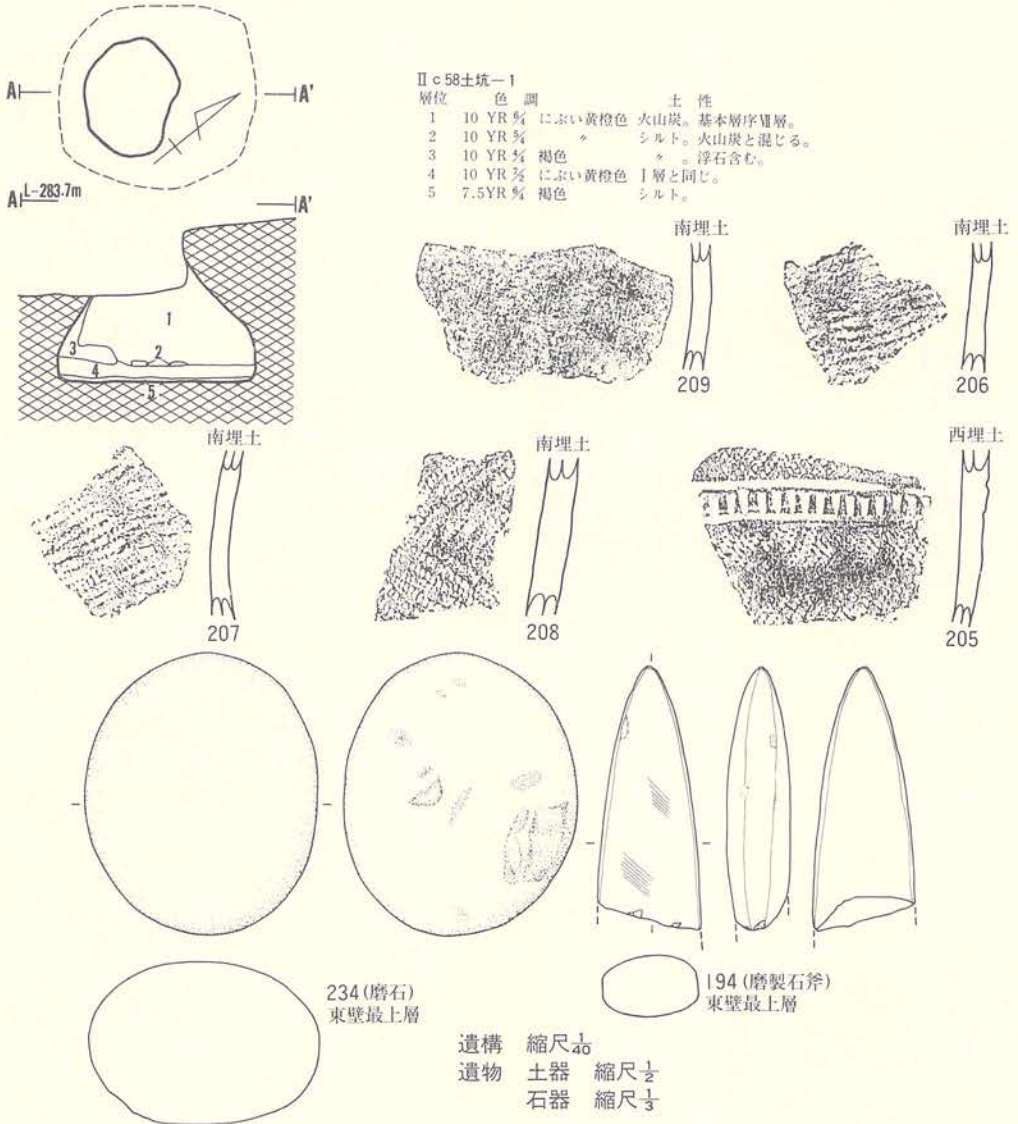
第187図 (118) IIc 56土坑

193は後期後半の特徴をもっていることから、本土坑も後期後半に属すると考えられる。

(119) II c 58土坑-1 (旧II d 58土坑)

〔遺構〕 (第188図、P L-72)

尾根の中央部やや西寄りのグリッドII c 58・59にまたがって位置し、II b 58土坑-2の東5



第188図 (119) II c 58土坑-1

m で南西向き斜面の上位に立地している。本土坑は II b 58 住居跡の埋土内に II c 58 土坑-2 の北端を壊して掘られている。

開口部径60cm×45cm、底部径1.05m×1 m の規模をもち、最も深い北東壁で82cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して70度～60度で内傾し、断面形は底面の上位70cmに径40cm位の頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位はほぼ直立である。底面には凹凸もほとんどなくほぼ平坦で水平状態に近い。

埋土は褐色とにぶい黄橙色のシルトと地山起源の土が堆積し、5層に細分される。特に1～4層は基本層序第VII層を起源とする白砂とその汚れた土が堆積し、人為的に埋め戻されたものであろう。

〔遺物〕

埋土内から16点の土器片と石器が2点出土している。

土器 (第188図205～209、P L-134)

205は原体LR横回転による縄文を付した後沈線で区画し、刻目帯とする。206・207は原体LR横回転の単節斜行縄文、208はLR・RL横回転による羽状縄文をもち、209は無文土器である。以上から、205は第VI群7類、206～208は第IX群、209は第VIII群に属する。

石器 (第188図194・234、P L-166・168)

磨製石斧1点と磨石1点が出土している。194は刃部を欠失した定角式の磨製石斧で、残存長10.5cm、最大幅3.8cm、厚さ2.4cm、重さ160gの大きさで、北上山地古生界産の輝石玢岩を石材としている。部分的に研磨する際の擦痕をもち、先端に黒色の付着物がある。234は全面に磨面をもつ磨石で、一部に剝落痕をもつ。大きさは径11.3cm×9.3cm、厚さ6.5cm、重さ106.5gで、北上山地古生界産の硬砂岩を石材としている。

〔遺構の時期〕

本土坑が壊している II c 58 土坑-2 は重複関係からみて後期後半であることは事実であり、本土坑も後期後半頃に属するであろう。

(120) II c 58 土坑-2

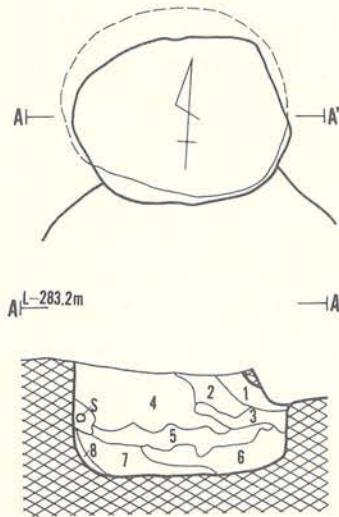
〔遺構〕 (第189図、P L-72)

尾根の中央部やや西寄りのグリッド II c 58 に位置し、II a 58 土坑-4 の東 7 m で南西向き斜面の上位に立地している。本土坑は北が II c 58 土坑-1、南が II c 58 土坑-3 と重複しており、II c 58 土坑-1 → II c 58 土坑-2 → II c 58 土坑-3 の順で古くなる。また II a 58 住居跡の埋土に掘った土坑である。

開口部径1.1m×90cm、底部径1.15m×1.1m の規模をもち、II a 58 住居跡の床面から66cmの深

さをもつ若干歪んだ楕円形気味の土坑である。壁は90cm～80cmで内傾し、断面形はフラスコ形である。底面には凹凸もなくほぼ平坦で、壁際に寄るほど次第に高くなっている。

埋土は褐色、暗褐色、明褐色、黄褐色、明黄褐色等の地山起源のシルトを主体とした土が堆積し、8層に細分される。1～6層までが基本層序第V～VII層を起源とする土であり、人為的に埋め戻されたものであろう。



II c 58土坑-2

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 黄褐色	汚れた基本層序V層。浮石粒・炭化物粒が混入する。
2	10 YR 5/6 明黄褐色	〃
3	7.5YR 5/6 明褐色	〃
4	2.5YR 5/6 明赤褐色	砂質シルト。浮石粒・砂粒を含む。炭化物粒・焼土粒も含む。
5	7.5YR 5/6 暗褐色	シルト。基本層序VI層粒や浮石粒を混入する。
6	R	3層と内じ。
7	7.5YR 5/6 褐色	シルト。基本層序VI層粒や、少量の浮石粒含む。
8	7.5YR 5/6 にぶい褐色	基本層序V層。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第189図 (120) II c 58土坑-2

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

重複関係から考えて、後期後半～末葉頃と推定される。

(121) II c 58土坑-3 (旧II c 58土坑)

〔遺構〕 (第190図、P L-72)

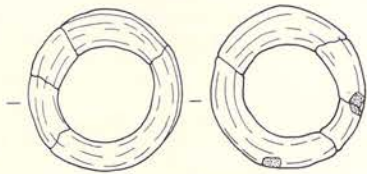
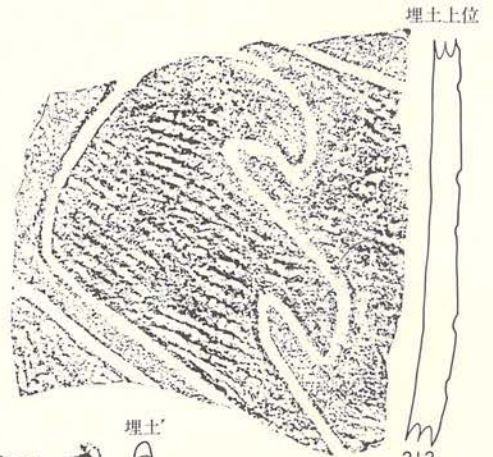
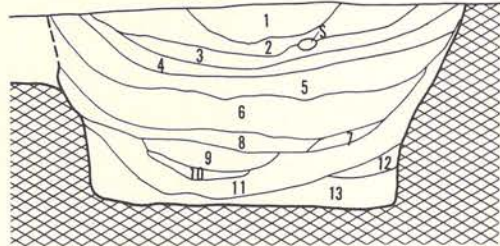
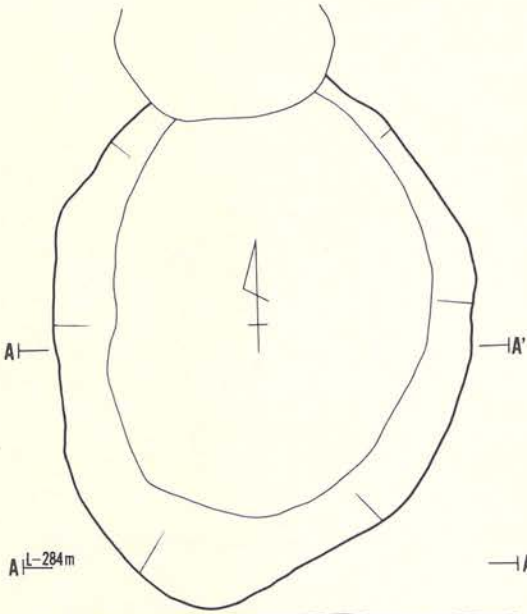
尾根の中央部やや西寄りのグリッドII c 58・59にまたがって位置し、II c 58土坑-2の南に隣接している。本土坑はII a 58住居跡の埋土内に掘られ、北部がII c 58土坑-2によって壊されている。

開口部径2.9m×2.25m、底部径2.3m×1.7mの規模をもち、II a 58住居跡の床面から69cmの深さをもつ南北に長軸のある楕円形の土坑である。壁は底面に対して100度～110度で外傾し、断面形はビーカー形である。底面には若干凹凸があるもののほぼ平坦で、中央部が比高7cmで低く、壁に寄るほど次第に高くなっている。

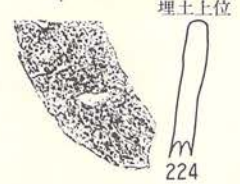
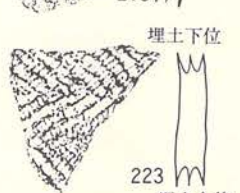
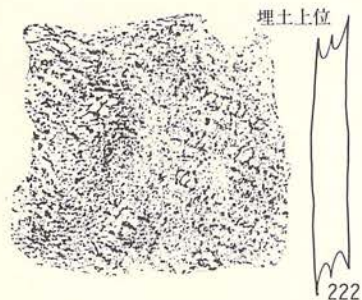
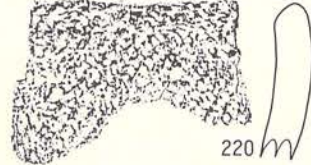
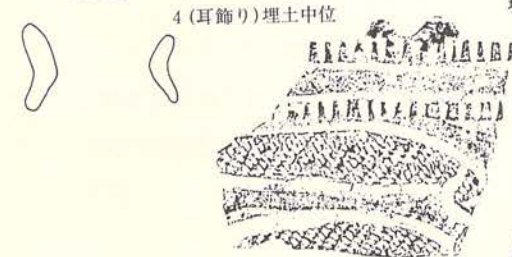
埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・にぶい褐色・赤褐色・明褐色・橙色等各種の色調を示すシルトや地山を起源とする土が堆積し、13層に細分される。2・5・12・13層は基本層序第V層、4・9層は同VI層を起源とする土の堆積層で、その他は黒色土系の層である。全層に浮石粒が

II c 58土坑-3

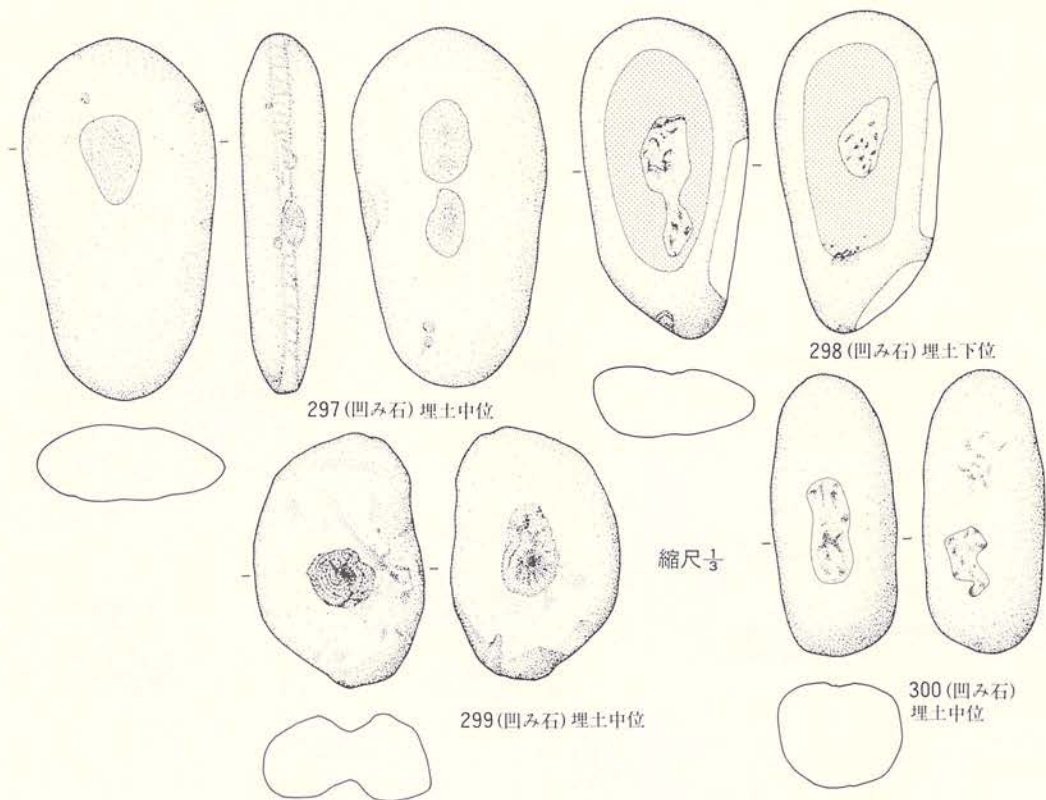
層位	色調	土性
1	7.5YR 8% 暗褐色	シルト。砂粒・浮石粒含む。基本層序V層。
2	7.5YR 8% 明褐色	。浮石粒・炭化物粒含む。基本層序VI層。
3	7.5YR 8% 褐色	。浮石粒・炭化物粒含む。基本層序VI層。
4	7.5YR 8% におい褐色	基本層序VI層。
5	10 YR 8% 黄褐色	シルト。浮石粒と炭化物粒含む。基本層序VI層とVII層の混合層。
6	7.5YR 8% 褐色	。浮石粒・炭化物粒含む。基本層序VI層。
7	7.5YR 8% 暗褐色	。浮石粒・炭化物粒含む。基本層序VI層。
8	5 YR 8% 赤褐色	。7層と同じ。
9	7.5YR 8% におい褐色	基本層序VI層。
10	7.5YR 8% 褐色	シルト。炭化物含む。基本層序VI層。
11	7.5YR 8% 黒褐色	。浮石粒・炭化物粒含む。
12	7.5YR 8% 橙色	基本層序V層。
13	7.5YR 8% 明褐色	。浮石粒・炭化物粒含む。



4 (耳飾り) 埋土中位



第190図 (12) II c 58土坑-3



第191図 (121) IIc 58土坑-3

混じるとともに、2・3・5～10・13層には炭化物も混入している。堆積状況を観察すると、全層がレンズ状の堆積を示しているが、地山起源の土が成層で堆積することは人為的な要素といえるだろう。おそらく、9～13層が一度、1～8層が一度の二度の埋め戻しの可能性がある。

(Y)

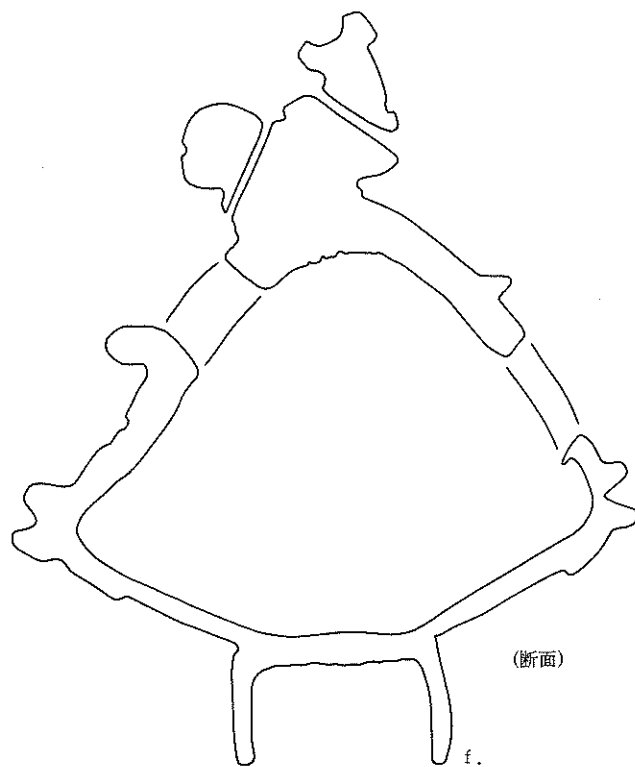
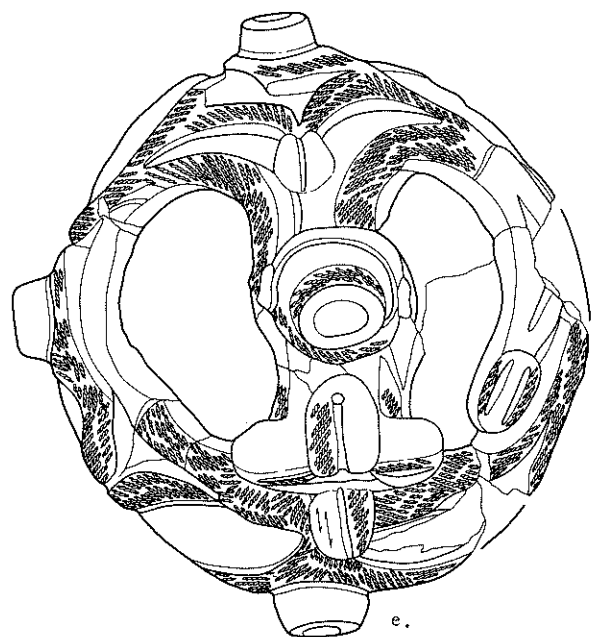
〔遺物〕

南西壁寄りの底面上位10cmから完形2点、埋土内から破片64点の土器と土製品1点、石器4点が出土している。

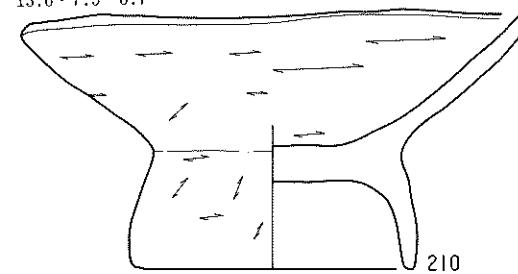
土器 (第190・191図210～224、P L-134・136)

210・211は南西壁寄りの底面上位10cmから2点並んで出土した。210は無文の台付鉢で、器面内外に研磨痕をもつ。大きさは口縁部径13.6cm、鉢底部径6.6cm、台底部7.5cm、鉢器高4.4cm、台器高2.3cmで、台部は下端が内湾気味に外方に軽く踏ん張り、鉢部は僅かに内湾して強く外傾

(上面觀)

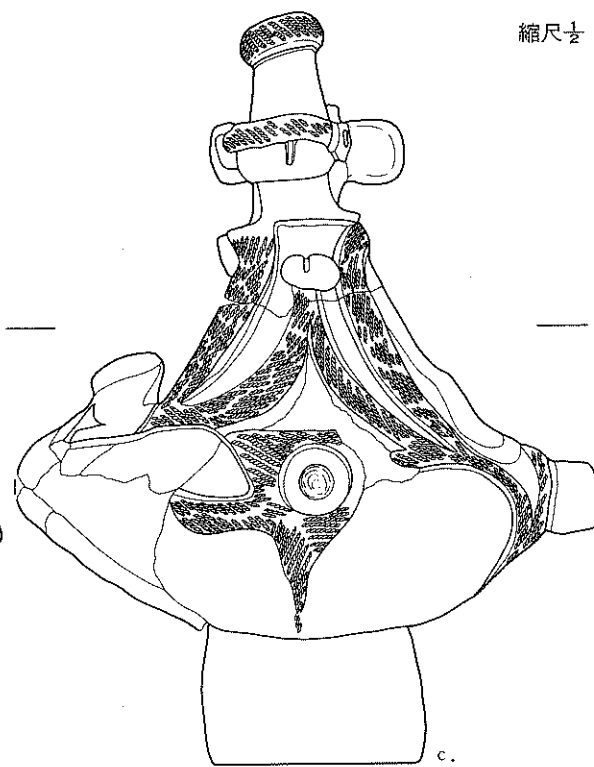
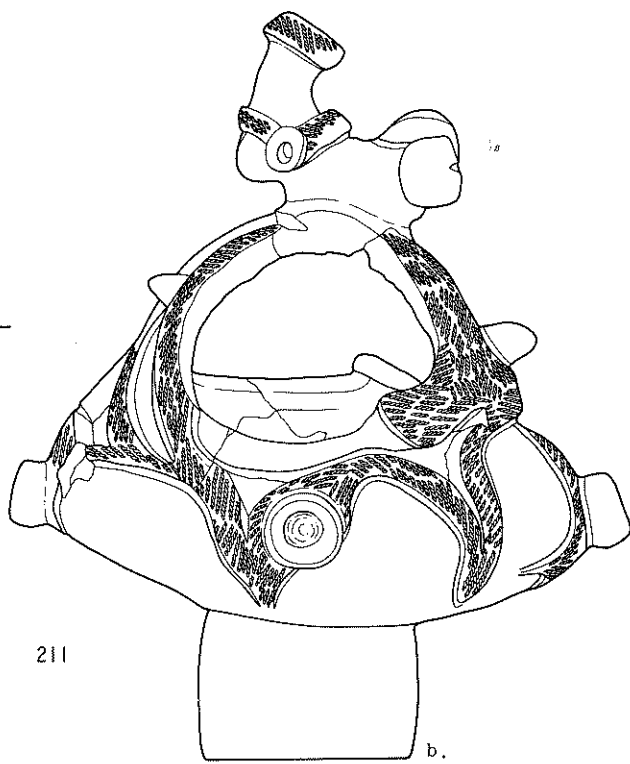
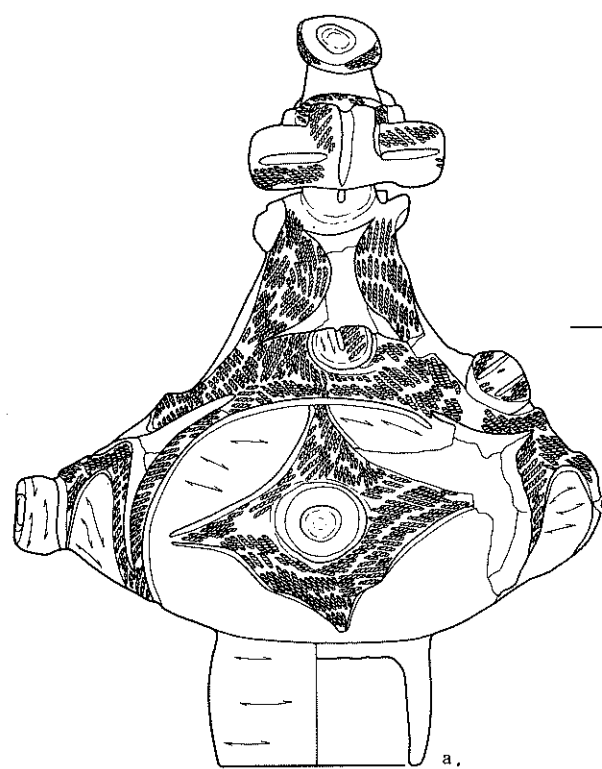


13.6·7.5·6.7



(断面)

縮尺 $\frac{1}{2}$



211

第192圖 (122) II c58土坑-3

し、皿とも呼べる器形である。211は香炉形土器で、大きさは器高19cm、体部最大幅16.5cm、台部径—上端5.5cm、中位5.9cm、下端5.5cm、台部器高3.5cmである。体部は隆起する縄文施文部と低い無文部で加飾され、これが橋状部～冠部まで続く、ところどころに透し窓と円形浮文状の丸い瘤を貼りつけている。冠は上方に突き出す円柱状の屈曲する突起物で加飾している。台部は無文でほぼ円筒状である。212は原体L R縦回転による単節の斜行縄文を付した後、沈線で施文している。213～218は器面に縄文を付した後沈線で区画し、一部の縄文を磨消するとともに横に連続する刻目帯や列点文を付している。沈線の区画は一部に入組文的なもの(214・215)もある。口縁は2個1対の小突起がつく波状縁である。219は口縁端部に細い隆帯を貼付し、隆帯の上面に刻目をもつ。220～223は単節斜行縄文や羽状縄文をもつ粗製土器の破片である。224は無文土器の破片である。

以上から、211は第VI群4類、212は第IV群2類、213は第III群3類、214～216は第VI群8類、217・218は第VI群7類、219は第IV群1類、220～223は第IX群、224は第VIII群に相当する。

土製品 (第190図4、P L—156)

滑車形の耳飾りである。断面く字状で側面を凹ませる。全体が径4.1cm位の環状をしている。

石器 (第192図297～300、P L—172)

4点とも凹み石で、いずれも両面に凹みをもち、298は両面に小範囲の磨面をもつ。大きさは最大50g～22gまであり、形はやや細長い河原石を使っている。石材は奥羽山地新第三系産の輝石安山岩(3点)と両輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

211や213～218の出土から後期末葉に位置づけられるであろう。

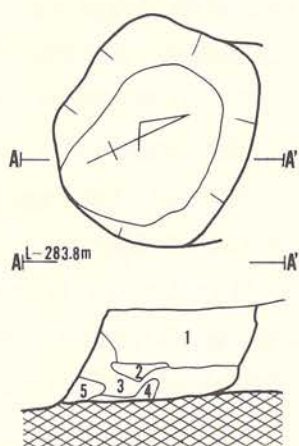
(122) II c 58土坑-4

〔遺構〕 (第193図、P L—73)

尾根の中央部やや西寄りのグリッドII c 58に位置し、II c 58土坑-1の北1mで南西向き斜面上位に立地している。南側がII a 58住居跡、北側がII c 58土坑-5とそれぞれ重複しており、II a 58住居跡→本土坑→II c 58土坑-5の順で古くなる。

開口部径1.15m×95cm、底部径90cm×65cmの規模と推定され、最も深い北壁で59cmの深さをもち北々西—南々東に長軸のある楕円形の土坑である。壁は底面に対して110度で外傾し、断面形はピーカー形に近い形状である。底面は凹凸もなくほぼ平坦であるが、南に向って若干傾斜している。

埋土は暗褐色・黄褐色・明黄褐色・にぶい黄橙色のシルトと地山起源の土が堆積し、5層に細分される。1層は黒色土起源のシルトで埋土の上部½強を占め、その他は全て基本層序第V



縮尺 $\frac{1}{40}$

第193図 (122) II c 58土坑-4

層やVI層を起源とする土が堆積し、全層に浮石、3層に炭化物が混入する。人為的に埋め戻された可能性がある。(Y)

II c 58土坑-4

層位	色調	土性
1	10 YR 5% 暗褐色	浮石少量含む。
2	10 YR 5% にぶい黄橙色	シルト。基本層序VI層。
3	10 YR 5% 黄褐色	炭化物少量含む。
4	10 YR 5% 明黄褐色	砂質シルト。基本層序V層。
5	10 YR 5% 黄褐色	粘性ある。

〔遺物〕

出土していない。

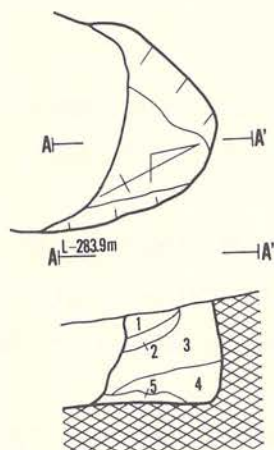
〔遺構の時期〕

重複関係からみて後期中葉～前半頃であろう。

(123) II c 58土坑-5

〔遺構〕 (第194図、P L-73)

尾根の中央部やや西寄りのグリッドII c 58に位置し、II c 58土坑-4の北に隣接し南西向き斜面の上位に立地している。南側の約 $\frac{1}{2}$ 強がII c 58土坑-4に壊されているため、一部不明である。



縮尺 $\frac{1}{40}$

第194図 (123) II c 58土坑-5

II c 58土坑-5

層位	色調	土性
1	10 YR 5% 黄褐色	浮石・炭化物含む。明黄褐色のブロック含む。
2	10 YR 5% *	浮石含む。
3	10 YR 5% *	シルト。
4	10 YR 5% *	砂質シルト。
5	10 YR 5% にぶい黄橙色	基本層序V層。

残存する規模は開口部径1.1m×50cm、底部径70cm×45cmで、最も深い北壁で51cmの深さをもつ土坑で、平面形は円形か楕円形と推定される。壁は底面に対してほぼ直角に近い北東壁と、90度～110度で外傾するその他の壁とあり、断面形は皿形に近いであろう。底面にはほとんど凹凸がなくほぼ水平状態に近い。

埋土は全て地山を起源とする黄褐色やにぶい黄褐色の土であるが、5層に細分される。おそらく、人為的に埋め戻されたものであろう。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

重複関係から考えて、後期中葉～前半頃に属するであろう。

(124) II c 59土坑

〔遺構〕 (第195図、P L-73)

尾根の中央部やや西寄りのグリッドII c 59に位置し、II c 58土坑-3の南西2mで南西向き斜面に立地している。本土坑はII a 58住居跡の南部埋土内に掘られている。

開口部径1.8m×1.6m、底部径1.2m×1.05mの規模をもち、II a 58住居跡の床面から70cmの深さをもつ東西に長軸のある楕円形の土坑である。壁は底面に対して100度～110度で外傾し、断面形はバケツ形である。底面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、中央部が低く壁際が若干高くなっている。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、6層に細分される。3～6層が基本層序第V層～VI層を起源とする土が堆積し、4・5層には炭化物も混じる。おそらく人為的に埋め戻されたものであろう。(Y)

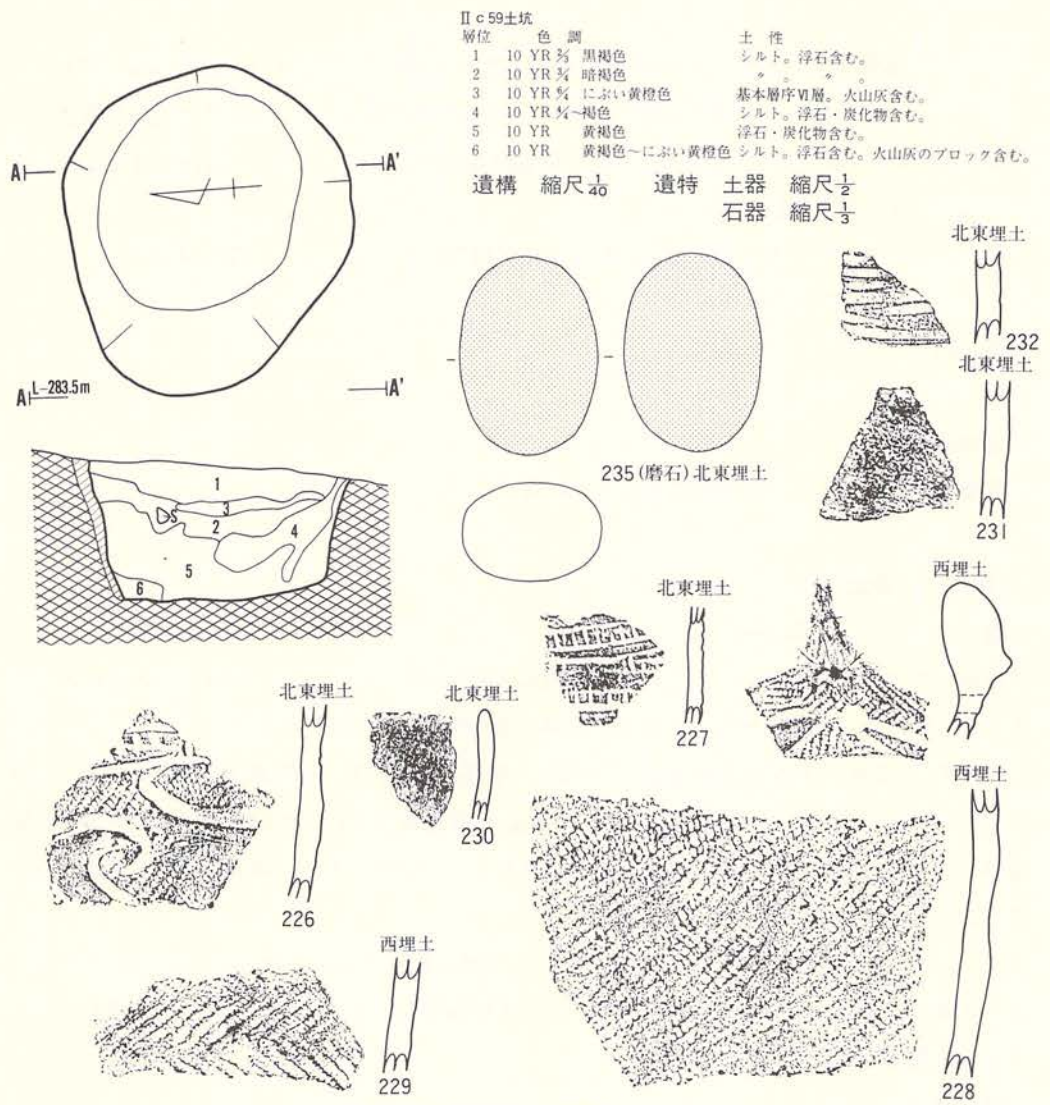
〔遺物〕

埋土内から29点の土器片と石器が1点出土している。

土器 (第195図225～232、P L-137)

225は鋭角に尖る突起をもつ波状縁の口縁部破片で、器表を沈線で区画した後原体LR縦横回転による羽状縄文を充填し、小さな丸い瘤を貼付する。226は器面に原体LR横回転による単節の斜行縄文を粗く付した後沈線で区画し、一部に列点状の文様を付す。227は無文の器面に沈線を引き縦形の刻目を充填している。228・229は単節の斜行縄文(228)や羽状縄文(229)を付した粗製土器の破片である。230・231は無文土器で、232は並行条線をもつ。以上から、225は第VI群4類、226・227は第VI群8類、228・229は第IX群、230・232は第VIII群に属する。

石器 (第195図235、P L-169)

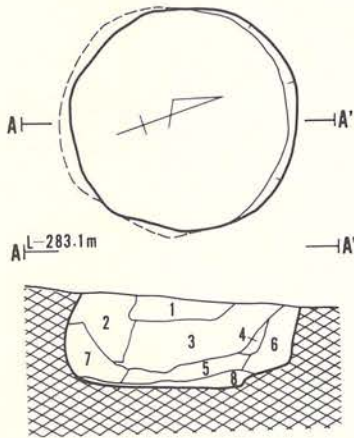


第195図 (124) II c 59土坑

磨石が1点出土している。全長7.9cm、幅5.5cm、厚さ3.9cm、重さ25.3gの大きさをもつ扁平で楕円形の河原石を使用したもので、両面に使用面をもつ。石材は北上山地古生界産の硬砂岩である。

〔遺構の時期〕

出土した土器が後期末葉のものだけであることや、重複関係から考えて後期末葉に属するであろう。



II d 53土坑			土性
層位	色調		
1	10 YR 5/6 褐色		黄褐色シルト含む。浮石全面に含む。
2	10 YR 5/6 黄褐色		基本層序V層。細粒浮石含む。
3	10 YR 5/6 褐色		浮石含む。明黄褐色ブロックある。
4	10 YR 5/6 黄褐色		極小浮石含む。基本層序V層。
5	10 YR 5/6 におい黄褐色		浮石含む。
6	10 YR 5/6 明黄褐色	〃	基本層序V層。
7	10 YR 5/6 黄褐色	〃	におい黄褐色混入。
8	10 YR 5/6 におい黄褐色	シルト	黄褐色ブロックで含まれる。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第196図 (125) II d 53土坑

(125) II d 53土坑

〔遺構〕 (第196図、P L—74)

尾根の北端やや東寄りのグリッドII d 53に位置し、II c 54土坑—2の北々東2 mの北東向き斜面の上位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.2m×1.2m、底部径1.24m×1.25mの規模をもち、最も深い南壁で45cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して80度位内傾し、断面形はフラスコ形である。底面には凹凸もなくほぼ平坦であるが、中央部が低く壁際に寄るほど次第に高くなり、壁とは丸味をもって接続している。

埋土は褐色、黄褐色、明黄褐色等の色調をもつシルトや地山を起源とする土が堆積し、8層に細分される。1・3層は黒色土系の褐色シルトであるが、ほかは全て基本層序第V層やVI層を起源とする土である。これらの土を壁の崩落によるものとするには量が多すぎることから、人為的に投棄されている可能性がある。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

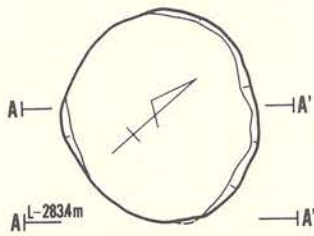
〔遺構の時期〕

形状・埋土の状況から縄文時代の土坑と考えられる。

(126) II d 54土坑

〔遺構〕 (第197図、P L—74)

尾根の北端やや東寄りのグリッドII d 54に位置し、II c 54土坑—2の東1.5mで北東向き斜



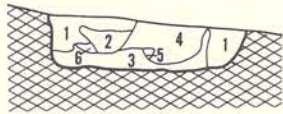
II d 54土坑

層位 色 調

- 1 10 YR 8/6 褐色
- 2 10 YR 8/6 *
- 3 10 YR 8/6 黄褐色
- 4 10 YR 8/6 褐色
- 5 10 YR 8/6-7 暗褐色～褐色
- 6 10 YR 8/6 褐色

土 性

- シルト。赤色及び白色浮石含む。
- *。赤色浮石混入する。基本層序VI層。
- *。浮石含む。基本層序VI層。
- *。*。*。基本層序V層。
- *。赤色浮石含む。腐植土混じる。
- *。*。*。基本層序VI層。



縮尺 1/40

第197図 (126) II d 54土坑

面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.1m×1.05m、底部径1.1m×1 mの規模をもち、最も深い南壁で32cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度～80度で内傾し、断面形はフラスコ形である。底面にはあまり凹凸はなくほぼ平坦であるが、北西側が比高5cmで高くなっている。

埋土は暗褐色・褐色・黄褐色のシルトと地山起源の土が堆積し、6層に細分される。1・3・5層は基本層序第V・VI層を起源とする土であり、ほかは黒色土系の土である。人為的に埋め戻された堆積状況であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の堆積状況から考えて、縄文時代の土坑と推定される。

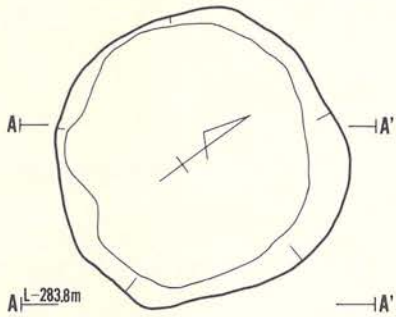
(127) II d 58土坑

〔遺構〕 (第198図、P L-74)

尾根の中央部やや西寄りのグリッドII d 58・59にまたがって位置し、II c 58土坑-2の東2mで南西向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

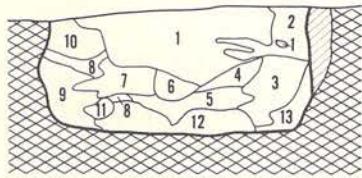
開口部径1.6m×1.5m、底部径1.35m×1.35mの規模をもち、最も深い北壁で70cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度～105度で外傾し、断面形はピーカー形である。底面にはほとんど凹凸がなくほぼ平坦であるが、壁寄りに比較して中央部が若干低くなっている。

埋土は黒褐色、暗褐色、褐色、黄褐色、黄橙色等の各種の色調を示すシルトや地山起源の土が堆積し、13層に細分される。1・3・8・9層は基本層序第VI層の白砂を起源とする埋土で、その他も黒色土起源の土ではあるが地山の塊が多く混じっている。全体に浮石が多く混入し、一部には炭化物も含まれる。堆積状況を見ると、層が乱れていることと、地山起源の1層の存

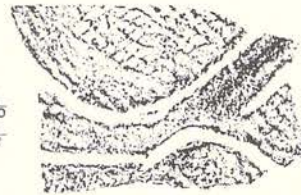


II d 58土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6~5/6	にぶい黄褐色 シルト。浮石含む。基本層序VI層。
2	10 YR 5/6~5/6	褐色~暗褐色 浮石多く含む。基本層序VI層。
3	10 YR 5/6	黄褐色 浮石少量含む。黒褐色のブロック含む。
4	10 YR 5/6	暗褐色 細粒浮石含む。黄褐色と黒褐色混入する。
5	10 YR 5/6	〃
6	10 YR 5/6	褐色 〃 にぶい黄褐色ブロックで含む。
7	10 YR 5/6	暗褐色 〃 黄褐色と黒褐色混入する。
8	10 YR 5/6	黄褐色 浮石少量含む。基本層序V層。
9	10 YR 5/6	〃
10	10 YR 5/6	褐色 浮石・炭化物含む。
11	10 YR	8層と同じ。
12	10 YR 5/6	黒褐色 浮石少量含む。
13	10 YR 5/6	褐色 浮石含む。基本層序VI層。



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



西埋土



234

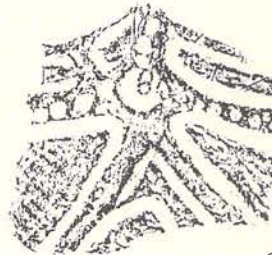


235

東埋土



236



西埋土



233

第198図 (127) II d 58土坑

在から考えると、埋め戻された土坑といえよう。

〔遺物〕

埋土内から39点の土器片が出土している。

土器 (第198図233~236、P L-137)

233・234は同個体の可能性があり、器表に原体LR縦回転による単節斜行縄文を付した後、沈線で区画し縄文を磨消している。233はさらに口縁部に隆起帯を貼付し、上面に円形の刺突痕をもつ。235・236は縄文だけをもつ粗製土器の破片である。以上から、233・234は第IV群1類、ほかは第IX群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

233・234ともに後期初葉の土器であることから、後期前葉頃に位置づけられるであろう。

(128) II d 59土坑-1

〔遺 構〕 (第199図、P L-74)

尾根の中央やや西寄りのグリッドII d 59に位置し、II d 58土坑の南東2 mで南西向き斜面上に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径95cm×95cm、底部径1.45m×1.4mの規模をもち、最も深い北壁で67cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して70度の角度で内傾し、断面形はフラスコ形を示す。底面には凹凸もなくほぼ平坦であるが、南西部に10cmの比高で傾斜している。

埋土は褐色・黄褐色・にぶい黄橙色のシルトと地山を起源とする土が堆積し、6層に細分される。1層は基本層序第VI層相当の土で、そのほかの層にも地山が塊状に混入している。人為的に埋め戻された土坑であろう。

〔遺 物〕

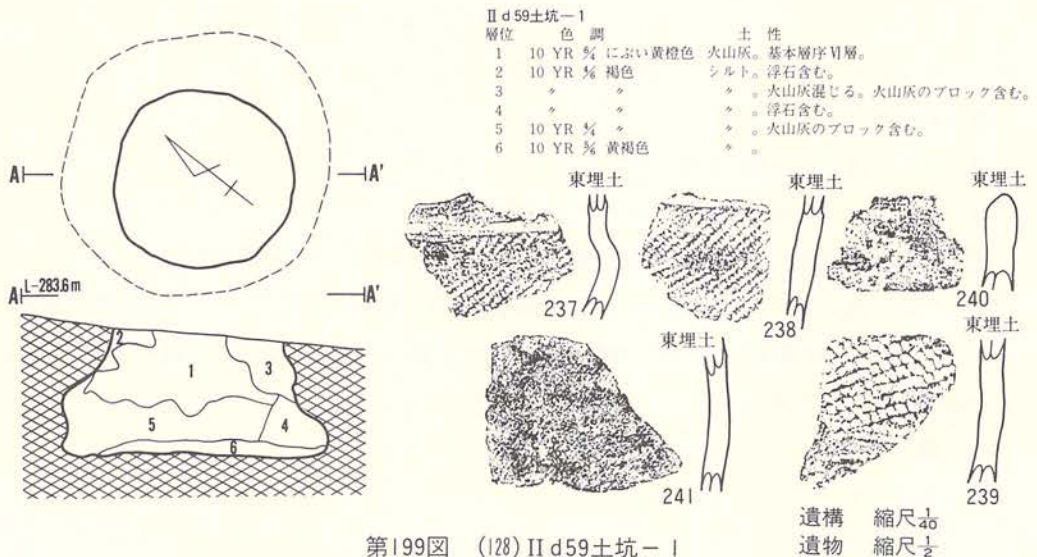
埋土内から土器片が10点出土している。

土 器 (第199図237~241、P L-137)

237~239は磨消縄文手法で施文された土器片で、原体LR横回転による単節の斜行縄文をもつ。240・241は無文である。237・238は第IX群4類、239は第IX群、240・241は第VIII群に相当するであろう。

石 器

出土していない。



〔遺構の時期〕

出土した土器はいずれも後期後半の特徴をもつことから、本土坑も後期後半頃に位置づけられるであろう。

(129) II d 59土坑-2

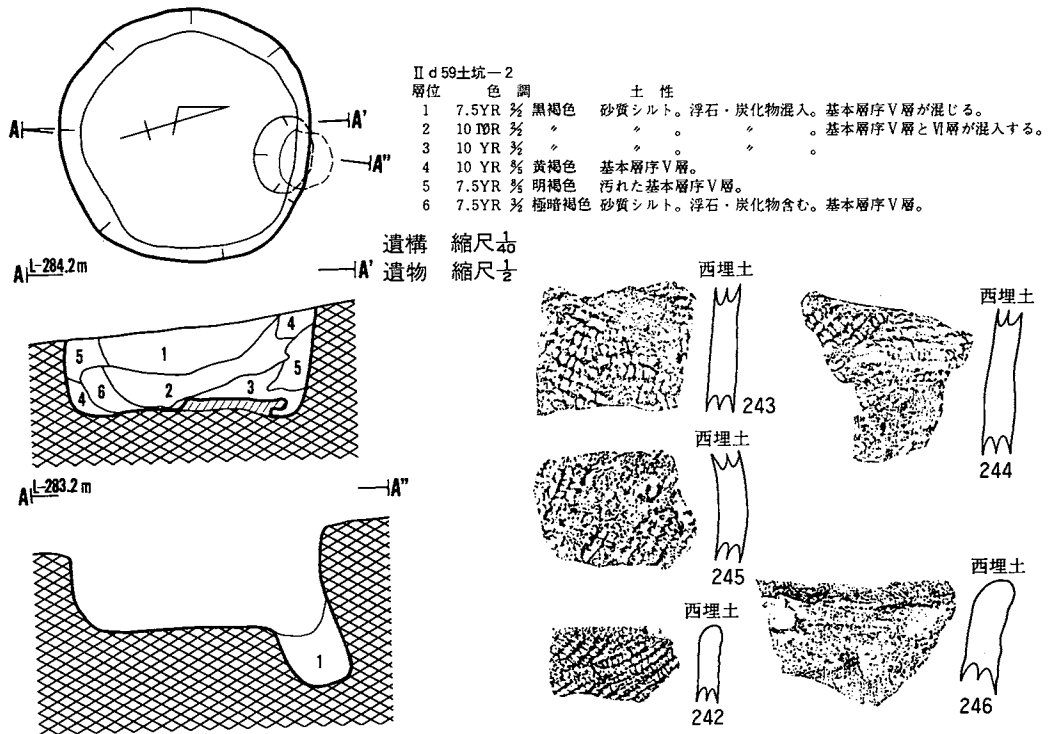
〔遺 構〕 (第200図、P L-75)

尾根の中央やや西寄りのグリッドII d 59・60にまたがって位置し、II d 59土坑-1の南3mで南西向き斜面の上位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.35m×1.35m、底部径1.15m×1.1mの規模をもち、最も深い北壁で50cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対してほぼ直立し、断面形はピーカー形である。底面には凸凹もなく平坦で、ほぼ水平状態に近い。なお、北壁際の底面には開口部径40cm×30cm、底部径30cm×30cm、深さ35cmの規模で、底部には外方に張り出す斜位の副穴がある。

埋土は黒褐色、極暗褐色、明褐色、黄褐色のシルトと地山起源の土が堆積し、6層に細分されている。4・5層は壁の崩落による基本層序第V層相当の土で、ほかの層にも塊状に混入している。副穴の埋土も、基本的には差がない。自然堆積による埋没であろう。

〔遺 物〕



第200図 (129) II d 59土坑-2

埋土内から51点の土器片が出土したが、細片が大半を占める。

土器 (第200図242～246、P L—137)

242～245は縄文のみが付された粗製土器の破片で、246は無文土器である。以上から、242～244は第IV群、246は第VI群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は全て後期後半の特徴をもつことから、本土坑も後期後半頃に属すであろう。

(130) II d 59土坑—3 (旧II e 59土坑)

〔遺構〕 (第201図、P L—75)

尾根の中央やや西寄りのグリッドII d 59・II e 59にまたがって位置し、II d 59土坑—2の北東3mで南西向き斜面に立地している。本土坑の東端とII e 59住居跡の西端が重複しており、本土坑の方が古い遺構である。

開口部径1.2m×1m、底部径1.4m×1.35mの規模をもち、最も深い北壁で90cmの深さをもつ円形の土坑であるが、重複する南西壁は削平されているため明確でない。壁は底面に対して70度～80度で内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、中央部が壁寄りに比較して僅かに低い。なお、北東壁際に開口部径35cm×30cm、底部径15cm×15cm、深さ40cmの副穴がある。

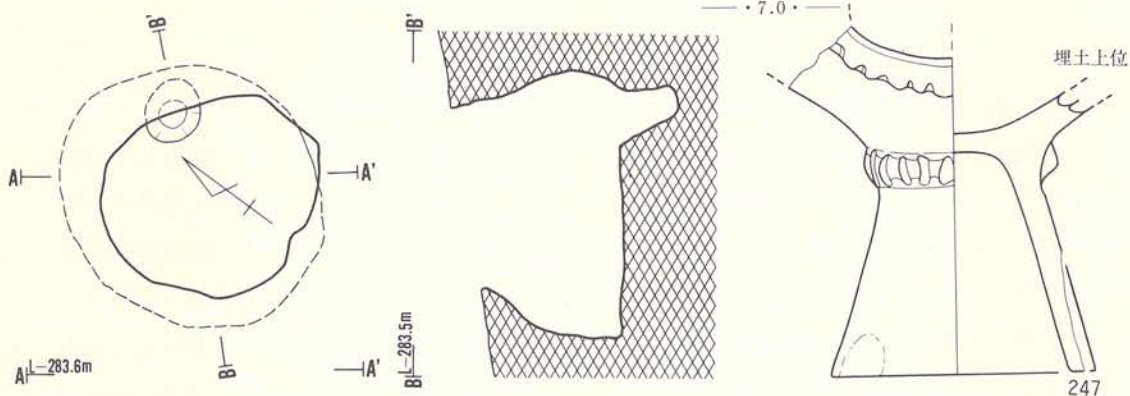
埋土は黒褐色、暗褐色、褐色、黄褐色、にぶい黄橙色等を示すシルトや地山起源の土が堆積し、6層に細分される。4層は基本層序第VI層の白砂の堆積層であり、6層は同V層を主体としている。1～3・5層は黒色土系の褐色土であるが、地山の塊を混じる。人為的に埋め戻された土坑である。

〔遺物〕

埋土内から実測個体2点を含む45点の土器片と5点の石器が出土している。土器片は細片が大半を占めている。

土器 (第201図247・248、P L—137)

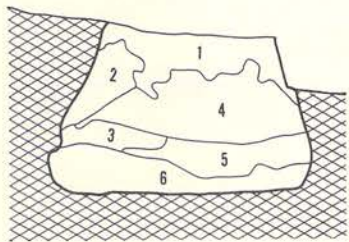
247は埋土上位から出土した香炉形土器と推定される土器である。残存器高9.3cm、上端部径7.5cm、台部上端5.3cm、台部下端7.1cm、台部高6cmの大きさがあり、香炉部分の大半を欠失している。台部上端には刻目を付した隆帯を全周させ、香炉部上端もほぼ同様である。それ以外は全て無文である。248は原体LR横回転による単節の斜行縄文を付した粗製土器の口縁部破片である。以上から、247は第V群1類、248は第IX群に相当する。



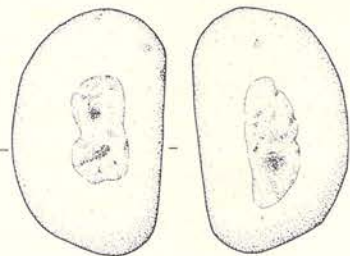
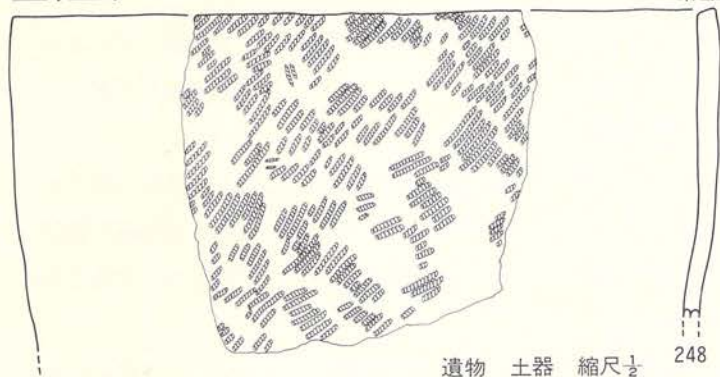
縮尺 $\frac{1}{40}$

II d 59土坑-3

層位	色調	土性
1	10 YR 5/3 黒褐色	火山灰が混じる。
2	10 YR 5/3-5/4 褐色-暗褐色	シルト。
3		
4	10 YR 5/3 に近い黄褐色	火山灰。基本層序Ⅳ層。
5	10 YR 5/3 暗褐色	シルト。浮石含む。
6	10 YR 5/3 著褐色	* 細粒浮石含む。基本層序Ⅴ層。

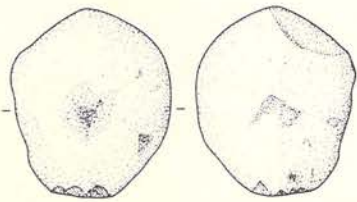


東埋土

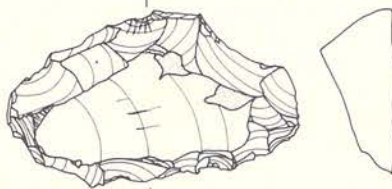


304(凹石) 東埋土

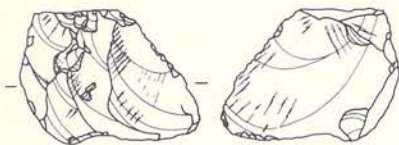
遺物 土器 縮尺 $\frac{1}{2}$
 石器 91・92・225 縮尺 $\frac{1}{2}$
 303・3・4 縮尺 $\frac{1}{3}$



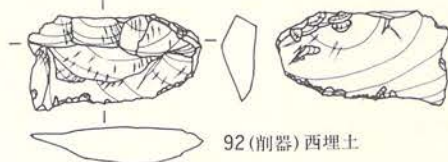
303(凹み石) 北埋土



225(搔器) 東埋土



91(削器) 西埋土



92(削器) 西埋土

第201図 (130) II d 59土坑-3

石器 (第201図55・91・92・303・304、P L—160・161・172)

搔器(55) 1点と削器(91・92) 2点、凹み石(303・304) 2点がある。55は縦長剥片の側縁を刃部としたもので、裏面からの片面調整によって仕上げられている。91・92は剥片の下縁に簡単に粗雑な片面剥離をしたものである。303は扁平でやや歪んだ楕円形の礫の両面を凹み石としたものである。304も303とほぼ同様であるが、やや長めの円礫を使用している。石材は、55が北上山地古生界産の粘板岩、91・92は奥羽山地新第三系産の流紋岩質極細粒凝灰岩、凹み石は、奥羽山地新第三系中新統産の両輝石安山岩(303)と輝石安山岩(304)である。

〔遺構の時期〕

出土した247は後期中葉に属する土器である。また、重複するII e 59住居跡は後期末葉であることから、本土坑は後期中葉～後葉に位置づけられる可能性が大きい。

(131) II e 59土坑—1

〔遺構〕 (第202図、P L—75)

尾根のほぼ中央やや南寄りのグリッドII e 58・59にまたがって位置し、II d 59土坑—1の東4mで南西向き斜面の上位に立地している。本土坑はII e 59住居跡の北端部を壊して掘り込まれ、さらに、II e 59土坑—3が本土坑を壊している。

開口部径1.5m×1.25m、底部径1.6m×1.5mの規模をもち、最も深い北壁で1.17mの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して80度～70度で内傾し、断面形は底面上位80cmに頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は軽く外傾している。底面にはほとんど凹凸もなく平坦であるが、北に僅か傾斜している。

埋土は黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色、橙色のシルトや地山起源の土が堆積し、11層に細分される。3・5・7・8・11層は基本層序V・VI層を起源とする土の堆積層で、そのほかは黒色土起源のシルトである。全層に浮石が混入し、1・4～6・7・8層には炭化物粒も混じる。土層が乱れていることや地山起源の土が多く堆積することから、人為的に埋め戻された土坑であろう。

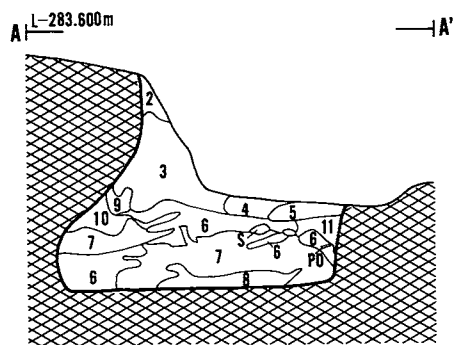
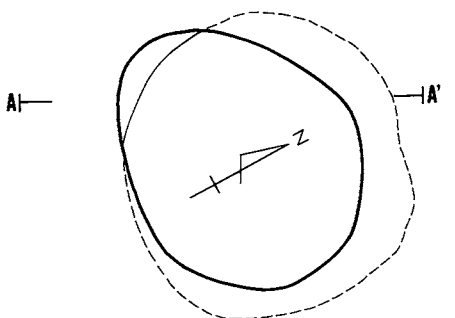
(Y)

〔遺物〕

埋土内から45点の土器片が出土している。

土器 (第202図249 5 256、P L—137)

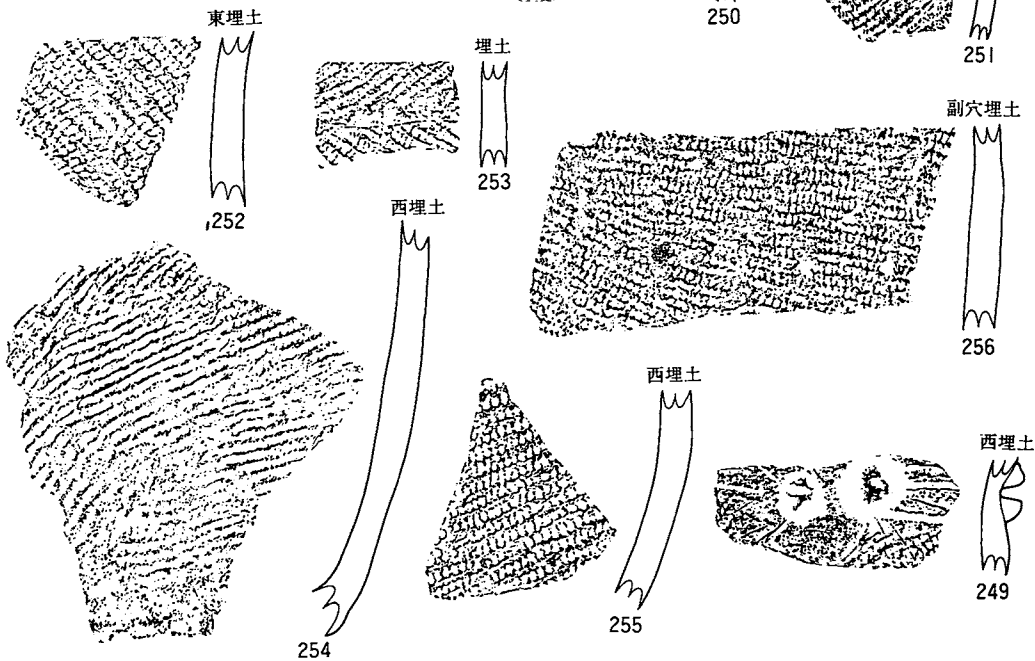
249は原体LR横回転による単節斜行縄文を付し、沈線と貼瘤による加飾をもつ。250は器表に羽状縄文を付した後、沈線が引かれている。251は0段多条によるLR横回転の単節斜行縄文をもち、口縁部に沈線による羊歯状文をもつ。252～256は縄文のみが付された粗製土器の破片で、縄文にはLR横(255)、L横(254)、LR縦(252)回転による単節縄文、羽状縄文(23)



II d 59土坑-1

層位	色調	土性
1	7.5YR 7/4 暗褐色	シルト。浮石粒含む。
2	7.5YR 7/4 褐色	〃。〃。〃。基本層序V層。基本層序VI層のブロック含む。
3	7.5YR 7/4 暗褐色	浮石粒・炭化物粒含む。
4	7.5YR 7/4 褐色	シルト。浮石粒・炭化物の小粒含む。基本層序VI層。
5	7.5YR 7/4 黒褐色	〃。浮石粒・焼土粒・炭化物粒混じる。
6	7.5YR 7/4 明褐色	〃。浮石粒含む。汚れた基本層序V層。
7	7.5YR 7/4 暗褐色	〃。炭化物粒含む。基本層序V層。
8	7.5YR 7/4 褐色	〃。炭化物・浮石粒含む。
9	7.5YR 7/4 〃	〃。基本層序VI層。
10	7.5YR 7/4 橙色	〃。〃。

遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
 遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



第202図 (131) II d 59土坑-1

がある。以上から、249は第VI群5類、250は第VI群4類、251は第VII群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

249・250は後期後葉～末葉の土器であるが、251は晩期前葉に属する。したがって、本土坑は晩期前葉に位置づけられる可能性が大きい。

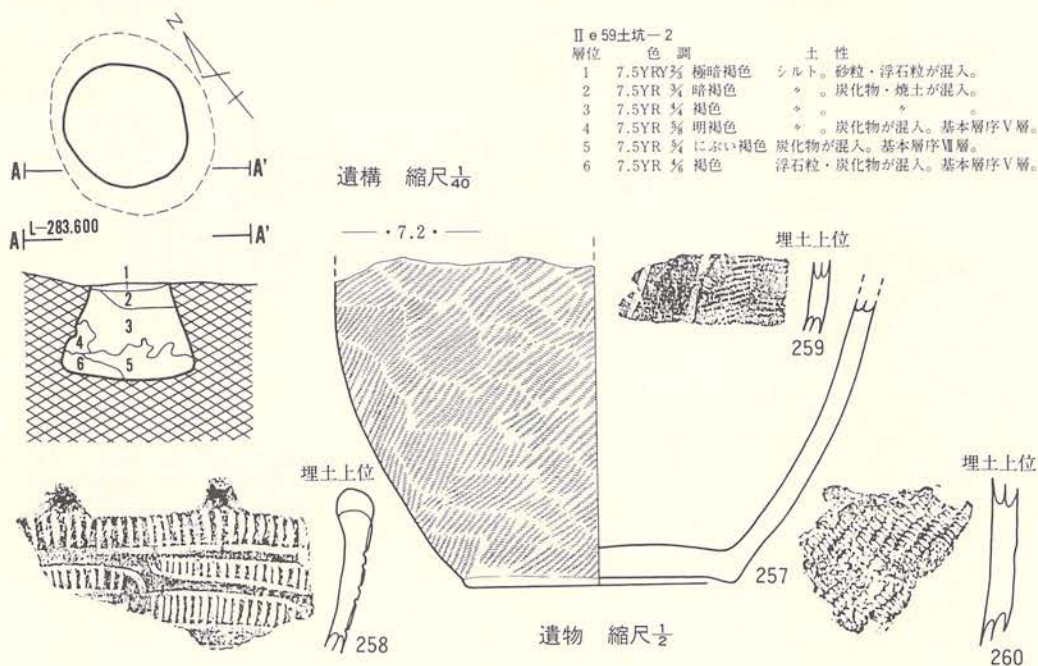
(132) II e 59土坑-2

〔遺構〕 (第203図、P L-76)

尾根の中央やや西寄りのグリッドII e 59に位置し、II d 59土坑-1の東2mで南西向き斜面の上位に立地している。II e 59住居跡の北西壁を壊し、同住居跡の埋土内に掘られている。

開口部径70cm×65cm、底部径1m×85cmの規模をもち、最も深い北西壁で50cmの深さをもつやや楕円形気味の土坑である。壁は底面に対して70度で内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面には若干凹凸があり、中央部が低く壁に寄るほど高くなっている。

埋土は極暗褐色、暗褐色、明褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、6層に細分されている。



第203図 (132) II e 59土坑-2

4・6層は汚れた基本層序第V層、5層は同VI層を起源とする土で炭化物が混入している。1～3層は黒色土系であるが、2・3層には炭化物や焼土粒が混じる。人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕

埋土内から39点の土器片が出土している。

土器 (第203図257～260、P L-137)

257は器面に原体Rの斜や横回転による無節縄文が付された。体部中位～底部を残存する土器である。258は無文の器面に沈線による入組文的な区画をし、刻目を充填し、口縁部には小突起がつく。259は磨消縄文手法による文様をもつ。260は縄文のみを付す。以上から、258は第VI群8類、259は第VI群4類、257・260は第IX群に属する。

石器

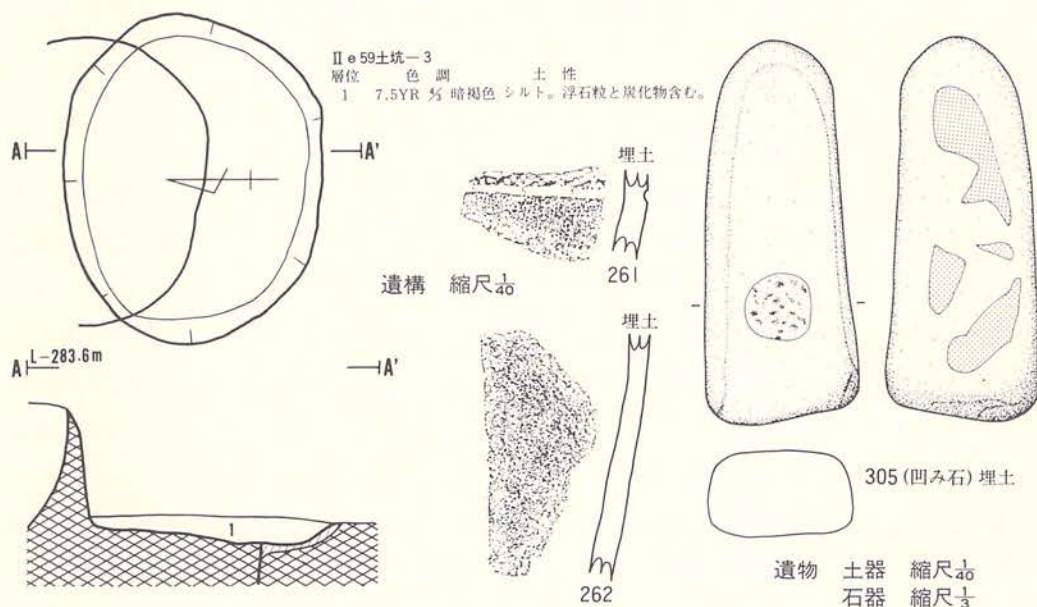
出土していない。

〔遺構の時期〕

258・259は後期末葉の土器であることから、本土坑も後期末葉に位置づけられるであろう。

(133) II e 59土坑-3

〔遺構〕 (第204図、P L-76)



第204図 (133) II e 59土坑-3

尾根の中央やや西寄りグリッド II e 59 に位置し、II e 59 土坑— 2 の東 2 m で南西向き斜面に立地している。本土坑は II e 59 住居跡の北端部と II e 59 土坑— 1 の南端部を壊して掘られている。また、検出が II e 59 住居跡の精査中であつたため、壁や開口部の状況が定かでない。

II e 59 住居跡の床面での開口部径 1.75m × 1.35m、底部径 1.5m × 1.2m の規模をもち、II e 59 住居跡の床面から 12cm、地表面（北壁）から 70cm の深さをもつ楕円形の土坑である。壁は底面に対して 90度～100度外傾しているが定かではない。断面形は現状ではピーカー形であるが、明確でない。底面には若干凹凸があり、南に軽く傾斜している。

埋土は最下層だけが残存しているが、暗褐色のシルトで、浮石粒と炭化物が混入している。

〔遺物〕

埋土内から 6 点の土器片と石器が 1 点出土している。

土器 (第204図261・262、P L—137)

261は磨消縄文手法による文様を付した土器で、262は無文土器である。以上から、261は第VI群 4 類、262は第VIII群である。

石器 (第204図305、P L—172)

全長 15.3cm、幅 6.1cm、厚さ 3.5cm、重さ 59.5g の大きさで、長方形気味の形をした円礫を使用した凹み石である。凹みは片面にあり、別の面に磨面をもつ。

〔遺構の時期〕

261・262ともに後期後半の土器であることから、本土坑も後期後半頃に属するであろう。

(134) II f 55 土坑— 1

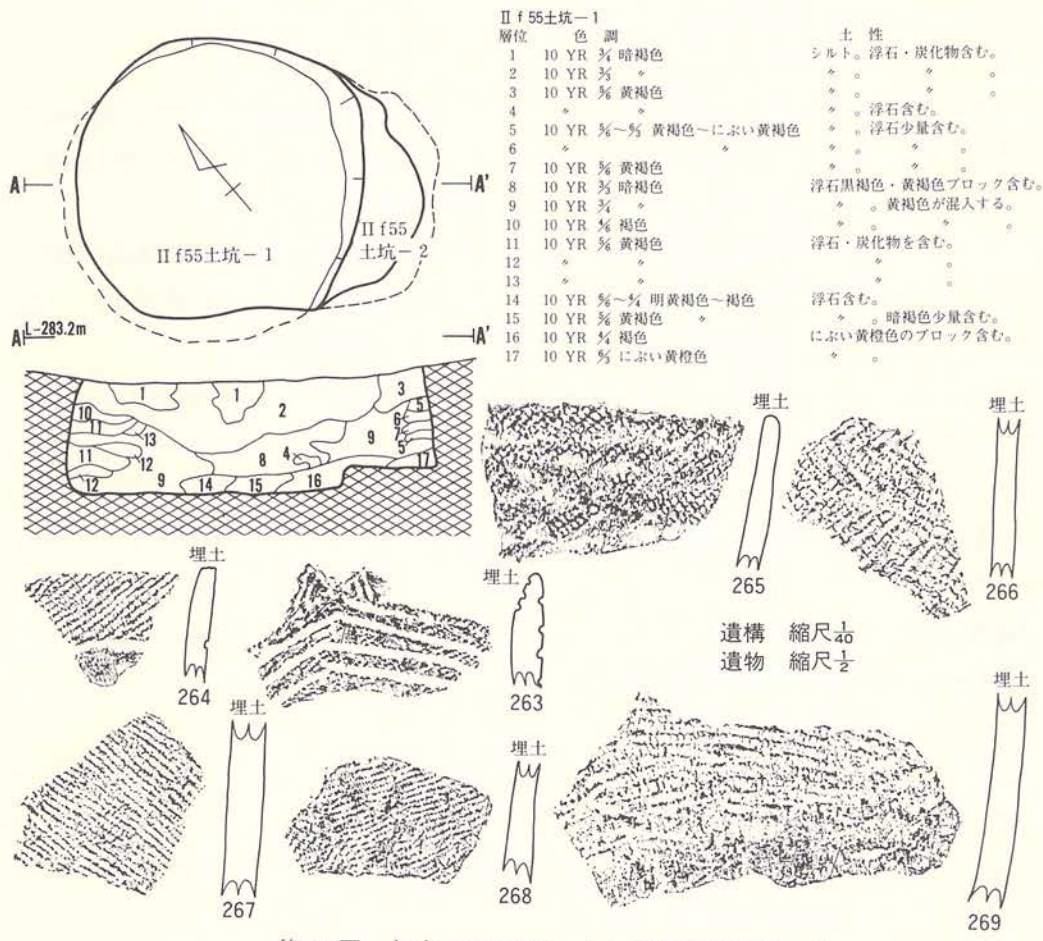
〔遺構〕 (第205図、P L—76)

尾根の中央北端部のグリッド II f 55・56 にまたがって位置し、II c 56 土坑の東北東 10cm で北東向き斜面の上位に立地している。東壁が II f 55 土坑— 2 と重複しているが、新旧関係を明確にしえなかった。

開口部径 1.5m × 1.5m、底部径 1.6m × 1.5m の規模をもち、最も深い南壁で 70cm の深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して 90度～70度で内傾する西半部分と、90度～100度で外傾する東半部があり、本来の断面形はフラスコ形であろうと思われる。底面には若干凹凸がみられるものの、ほぼ平坦で水平状態に近い。

埋土は暗褐色、褐色、黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、11層に細分されている。中心部と壁際に地山起源の土が堆積し、中心部付近には黒色土系の土が堆積している。おそらく、自然堆積で埋没した土坑であろう。 (Y)

〔遺物〕



第205図 (134) II f 55 土坑-1 ・ (135) II f 55 土坑-2

埋土内から土器片が20点出土している。

土器 (第205図、263~269、P L-137)

263は縄文の付された器面に複数の並行する沈線を引く土器で、264は磨消縄文手法による文様をもつ。265~269は縄文だけを付す粗製土器の破片で、縄文にはL R横 (265・268)、R L横 (267)、R L斜 (269)、羽状 (266) がある。以上から3、263・264は第V群2類、ほかは第IX群に相当する。

石器

出土していない。

[遺構の時期]

263・264は後期後葉の土器であることから、本土坑も後期後半頃であろう。

(135) II f 55土坑-2

〔遺構〕 (第205図、P L-77)

尾根の中央北端部のグリッドII e 55・56にまたがって位置し、II e 56土坑の東北東10.5mで北東向き斜面の上位に立地している。II f 55土坑-1の南東部と重複しているが、新旧関係は明らかにしえなかった。したがって、北西部の大半は不明である。

検出された規模は開口部径1.2m×25cm、底部径1.25m×40cmで、最も深い南壁が48cmの深さをもつ円形か楕円形の土坑と推定される。壁は底面に対して80度で内傾し、断面形はフラスコ形である。残存している底面にはほとんど凹凸がなく、ほぼ水平状態に近い。

埋土は黄褐色やにぶい黄橙色の主として地山起源の汚れた土が堆積し、6層に細分されている。壁際には壁の崩落と推定される土が堆積している。おそらく自然堆積であろう。(Y)

〔遺物〕

II f 55土坑-1から出土した遺物の中に、本土坑に伴うものが含まれている可能性があるが、定かではない。

〔遺構の時期〕

重複関係から考えて後期後半頃と考えられる。

(136) II f 57土坑

〔遺構〕 (第206図、P L-77)

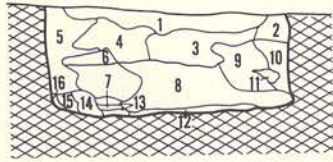
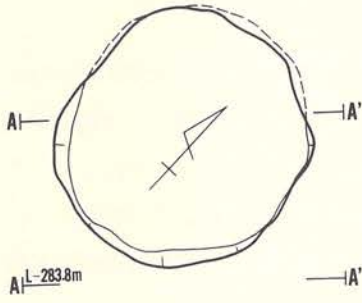
尾根の中央部やや北寄りのグリッドII f 57に位置し、II f 55土坑-1の南6mで北東向き斜面の上位に立地している。他遺構の重複はない。

開口部径1.4m×1.25m、底部径1.35m×1.25mの規模をもち、最も深い南壁で58cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度～85度内傾する北壁と、90度～100度外傾するほかの壁があり、本来の断面形はフラスコ形を示すものであろう。底面には若干凹凸があり、中央部が低く壁に寄るほど高くなる。

埋土は黒褐色、暗褐色、褐色、黄褐色を示すシルトや地山起源の土が堆積し、16層に細分される。5・7・10・16層は基本層序第V層を起源とする土で、壁際に多く堆積していることから壁の崩落によるものであろう。その他は黒色土系のシルトで、浮石粒や炭化物粒、地山粒を混入している。層に乱れはみられるが、地山起源の土が壁の崩落土であることから、自然堆積で埋没したものであろう。(Y)

〔遺物〕

埋土内から実測可能1点を含む27点の土器と、石器が2点出土している。

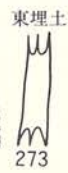
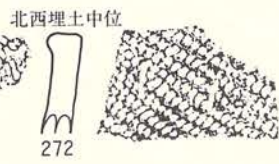
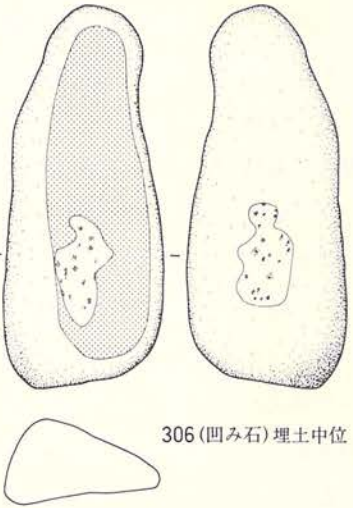
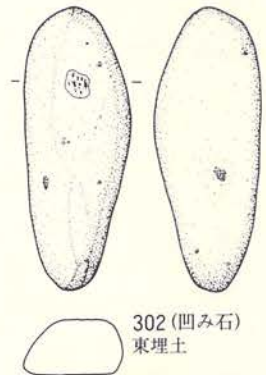
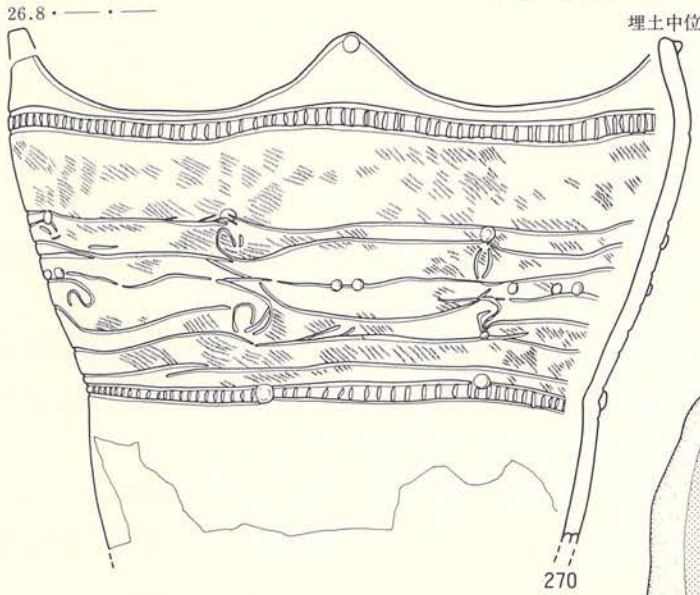


II f 57土坑

層位	色調
1	10 YR 5/2 黒褐色
2	10 YR 5/2 暗褐色
3	10 YR 5/2 黒褐色
4	10 YR 5/2 褐色
5	10 YR 5/2 黄褐色
6	10 YR 5/2 褐色
7	10 YR 5/2 黄褐色~褐色
8	10 YR 5/2 暗褐色
9	5/2
10	10 YR 5/2 黄褐色~暗褐色
11	10 YR 5/2 黒褐色
12	10 YR 5/2 暗褐色
13	10 YR 5/2 黒褐色
14	10 YR 5/2 褐色
15	5/2
16	10 YR 5/2 黄褐色

土性性
 シルト。浮石少量含む。基本層序V層混入。
 浮石含む。
 細粒浮石含む。
 シルト。細粒浮石含む。
 浮石・炭化物含む。
 浮石含む。
 浮石含む。
 シルト。浮石含む。
 浮石含む。黄褐色の混じり土。
 14層と同じ。
 シルト。

遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
 遺物 土器 縮尺 $\frac{1}{2}$
 石器 縮尺 $\frac{1}{3}$



第206図 (135) II f 57土坑

土 器 (第206図270~273、P L-138)

270は埋土中位からの出土である。体部中位が窄み、体部下半は無文である。上半部に原体R横回転による無節縄文が粗く付され、沈線によって入組文の初歩的な文様を施し、上端と下端には刻目帯を全周させる。口縁部は4単位の大波状縁である。また、ところどころに小型の円形を示す瘤を貼付している。271は波状を示す口縁部破片であるが、沈線による文様をもつ。272・273は縄文だけが付された破片である。以上のことから、270は第VI群8類、271は第V群2類、ほかは第IX群に相当する。

石 器 (第206図302・306、P L-172)

凹み石が2点出土しているが、306は磨面ももっている。2点ともやや長めの不整の楕円形を示す円礫を使用し、2点とも両面に使用痕をもつ。全長は306が15cm、302が11.2cmと302の方が大型である。石材は両者とも奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

270・271の土器は後期末葉であることから、本土坑も後期末葉に属するであろう。

(137) II f 58土坑-1

〔遺 構〕 (第207図、P L-77)

尾根のほぼ中央グリッドII f 58に位置し、II e 59土坑-1の北東3 mで尾根のほぼ頂上平坦面に立地している。

開口部径1.7m×1.6m、底部径1.55m×1.5mの規模をもち、最も深い北東壁で22cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度~85度で内傾し、本来の断面形は浅いはフラスコ形と推定される。底面にはほとんど凹凸がなく、平坦で水平状態に近い。

埋土は暗褐色のシルトと明褐色の基本層序第V層を起源とする土の2層が堆積している。両層とも浮石が多く混入し、1層には炭化物も点在する。人為的に埋められた可能性がある。(Y)

〔遺 物〕

埋土内から土器片が17点出土している。

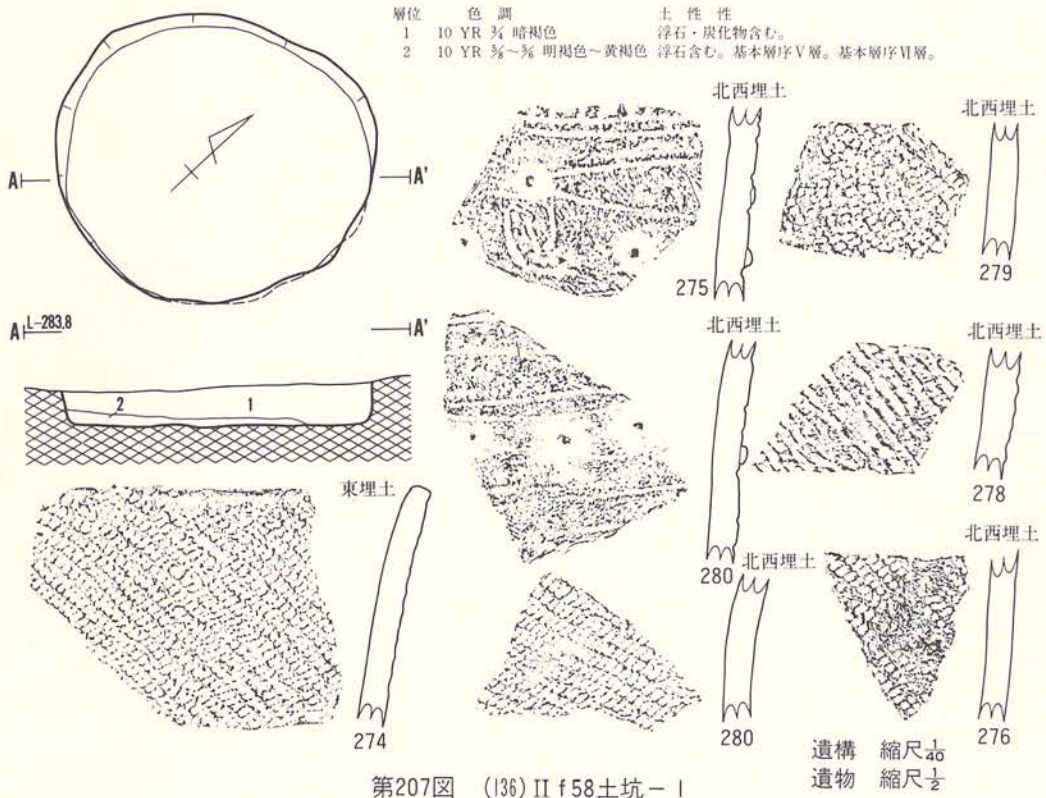
土 器 (第207図274~280、P L-138)

274・275は沈線と小さな貼瘤によって加飾した土器で、両者は同一個体の可能性が強い。ほかは縄文だけを施文する粗製土器で、縄文にはLR縦回転である。以上から、274・275は第VI群5類、ほかは第IX群に属する。

石 器

出土していない。

〔遺構の時期〕



274・275は後期末葉の土器であることから、本土坑も後期末葉と考えられる。

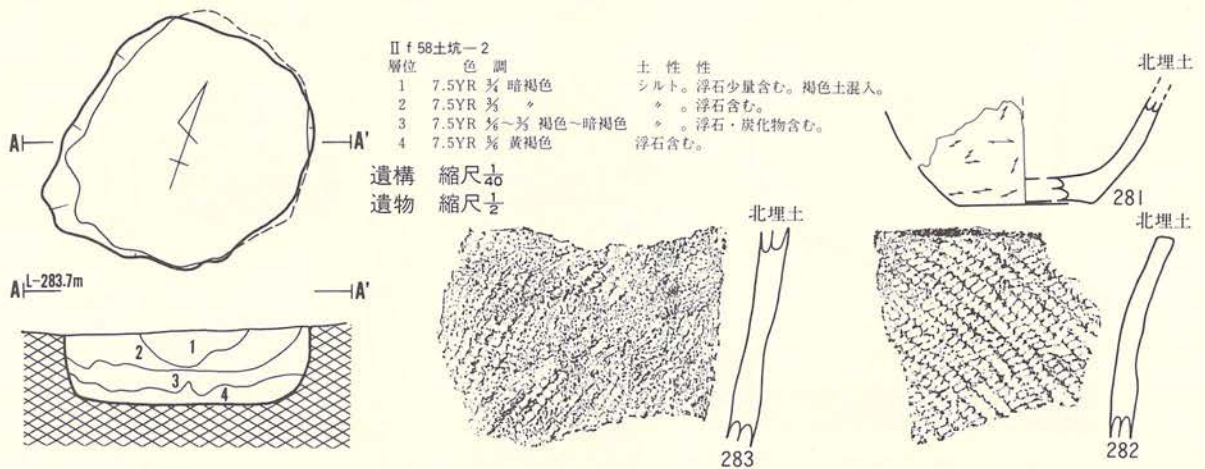
(138) II f 58土坑-2 (旧II f 土坑)

〔遺構〕 (第208図、P L-78)

尾根のほぼ中央のグリッドII f 58・59にまたがって位置し、II f 58土坑-1の南1 mで尾根の頂上平坦面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.5m×1.2m、底部径1.3m×1.2mの規模をもち、最も深い北東壁で30cmの深さをもつやや歪んだ楕円形である。壁は底面に対して東壁がほぼ直角を示し、ほかは90度～95度で外傾し、本来の断面形は浅いフラスコ形か浅いピーカー形と推定される。底面にはほとんど凹凸がないものの、南壁寄りが比高10cmで高くなっている。

埋土は暗褐色、褐色、黄褐色のシルトと地山起源の土が堆積し、4層に細分されている。1～3層は黒色土系のシルトで、浮石が混じり、3層には炭化物も混入する。4層には基本層序



第208図 (138) II f 58土坑-2

第V層起源の土である。自然堆積で埋没した土坑であろう。

〔遺物〕

埋土内から9点の土器片が出土している。

土器 (第208図281~283、P L-138)

281は体部下位と底部を残存する無文土器で、ほかは原体L R横(283)縦(282)回転による単節斜行縄文を付した粗製土器の破片である。281は第VIII群、282・283は第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期後半頃の特徴をもっていることから、本土坑も後期後半頃に属するであろうと推定される。

(139) II f 59土坑-1 (旧II g 59土坑)

〔遺構〕 (第209図、P L-78)

尾根の中央やや南寄りのグリッドII f 59・60にまたがって位置し、II f 59土坑-2の南2.5mで南西向き斜面の上位に立地している。他遺構との重複はない。

開口部径1.85m×1.6m、底部径1.45m×1.2mの規模をもち、最も深い北東壁で55cmの深さをもつ若干歪んだ凸辺の隅丸長方形気味の土坑である。壁は底面に対して100度~110度で外傾し、断面形は皿形である。底面はほとんど凹凸もなく平坦で、水平状態に近い。

埋土は黒褐色、暗褐色、黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、7層に細分されている。

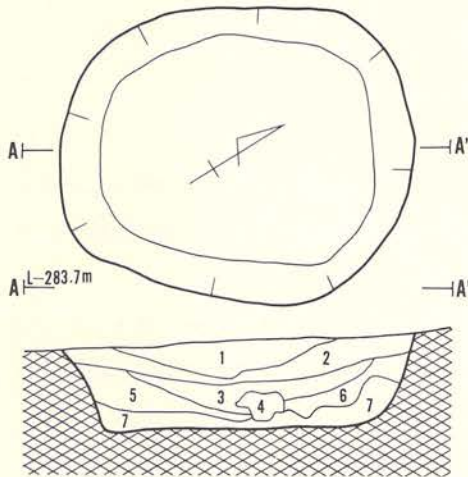
7層は基本層序第V層起源の土であるが、ほかは全て黒色土系のシルトで、地山粒や浮石粒、炭化物等を混入している。自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

埋土内から土器片が2点出土しているが、細片であるため拓影図は作成しなかった。いずれも縄文が施文されている。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から考えて、縄文時代の土坑と推定される。



II f 59土坑	層位	色調	土性
1	10 YR 5/2	黒褐色	シルト。浮石含む。基本層序V層。
2	10 YR 5/2	*	浮石・炭化物含む。
3	10 YR 5/2	暗褐色	* 基本層序VI層。
4	10 YR 5/2	*	細粒浮石含む。基本層序V層ブロックで含む。
5	10 YR 5/2~5/4	黒褐色～黄褐色	浮石含む。基本層序V層。
6	*	*	*
7	10 YR 5/2	黄褐色	基本層序V層。

縮尺 1/50

第209図 (139) II f 59土坑-1

(140) II f 59土坑-2

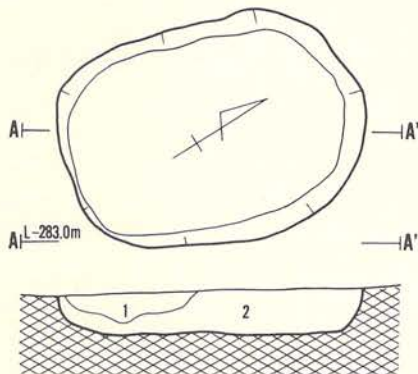
〔遺構〕 (第210図、P L-78)

尾根の中央やや南寄りのグリッドII f 59に位置し、II f 58土坑-2の東1mで南西向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.6m×1.2m、底部径1.5m×1mの規模をもち、最も深い北東壁で22cmの深さをもつ南-北に長軸のある楕円形の土坑である。壁は底面に対して90度～95度で外傾し、断面形は浅皿形を示す。底面には凹凸もほとんどなく、平坦で水平状態に近い。

埋土は暗褐色と褐色のシルトが堆積し、2層に細分されている。2層とも浮石を混入する。

おそらく、自然堆積による埋没であろう。



II f 59土坑-2	層位	色調	土性
1	10 YR 5/2	暗褐色	シルト。浮石含む。
2	10 YR 5/2	褐色	* * * 暗褐色のブロック含む。

縮尺 1/50

第210図 (140) II f 59土坑-2

〔遺物〕

埋土内から2点の土器片が出土したものの、細片であるため拓影の作成はしていない。2点とも縄文が付されている。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から、縄文時代の土坑と推定される。

(141) II f 60土坑 (旧II g 60土坑)

〔遺構〕 (第211図、P L-79)

尾根の中央部南寄りのグリッドII f 60・II g 60にまたがって位置し、II f 59土坑-1の南々東4 mで南西向き斜面に立地している。II g 60住居跡の西壁と重複するが、本土坑が壊されている。

開口部径1.5m×1.5m、底部径95cm×65cmの規模をもち、最も深い北壁で82cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して130度～140度で外傾し、断面形は楕円形に近い。底面には若干凹凸があり、壁との境界が明瞭でない。

埋土は黒褐色、暗褐色、褐色のシルトが堆積し、6層に細分されている。1～4・6層に炭化物が混入し、全層に浮石粒が混入する。自然堆積による埋没であろう。 (Y)

〔遺物〕

埋土内から36点の土器片と土製品が1点出土している。

土器 (第211図286～300、P L-138)

286・291は原体LR縦回転による単節斜行縄文を付した後、沈線と列点文で施文している。287は無文の器面に沈線のみで文様を付す。290・292は縄文(RL縦)を付した器面を沈線で区画し、縄文を磨消している。293～298は縄文だけを付した粗製土器の破片で、縄文には各種ある。299・300は無文土器である。以上から、286・291は第IV群3類、287は第IV群4類、290・292は第V群2類、293～298は第IX群、299・300は第VIII群に相当する。

土製品 (第211図27、P L-157)

土器片の周縁部を打ち欠いたり研磨して仕上げた土器片円盤である。径3cm×2.7cmの大きさがある。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

重複関係と286・288～290の出土から後期後半の土坑と考える。

(142) II g 56土坑

〔遺構〕 (第212図、P L-79)

尾根の中央部北端のグリッドII g 56・II h 56にまたがって位置し、II f 55土坑-1の東7.5mで北西向き斜面の中位に立地している。他遺構との重複はない。

開口部径1 m×95cm、底部径1.15m×95cmの規模をもち、最も深い南壁で64cmの深さをもつ楕円形気味の土坑である。壁は底面に対して90度～70度で内傾し、断面形は北東壁に崩落があるもののフラスコ形と考えられる。底面には若干凹凸があり、北壁寄りが比高10cmで低くなっている。

埋土は暗褐色、褐色、黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、9層に細分される。壁際に堆積する6～9層は基本層序第V層起源の上で、中心部には黒色土系のシルトが堆積している。全体に浮石粒が混入している。おそらく自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

埋土内から土器片が2点出土している。

土器 (第212図284・285、P L-138)

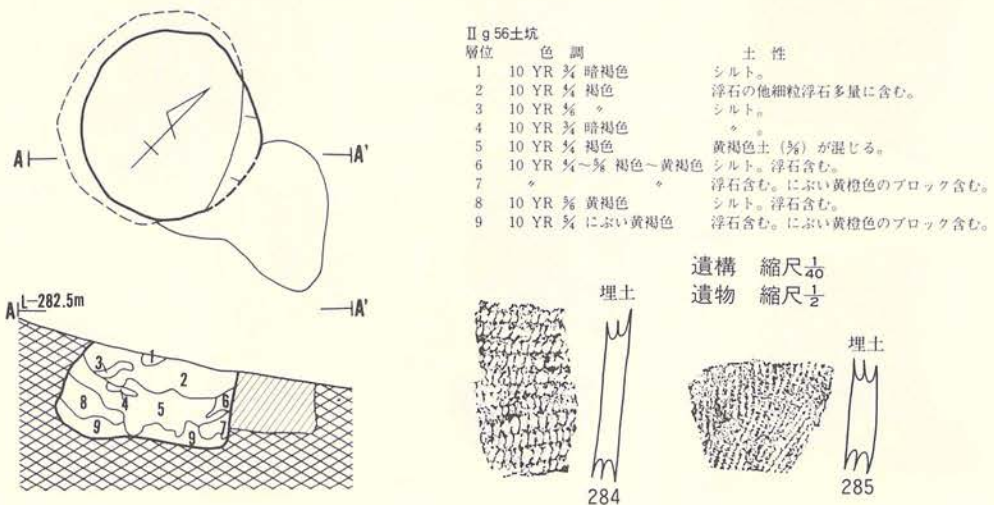
2点とも器面に原体LR横回転による単節斜行縄文だけが付された粗製土器の破片である。第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期後半頃の特徴をもっていることから、本土坑も後期後半頃に属すると推



第212図 (142) II g 56土坑

定される。

(143) II h 56土坑

〔遺構〕 (第213図、P L-79)

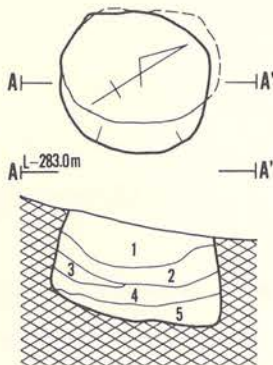
尾根の中央部北端のグリッド II h 56に位置し、II g 56土坑の南々東 3 m で北西向き斜面の中位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径80cm×75cm、底部径85cm×60cmの規模をもち、最も深い南壁で55cmの深さをもつほぼ円形の土坑である。壁は東側が底面に対して90度～110度で外傾し、ほかは90度～85度内傾している。断面形は一部ピーカー形もみられるが、本来は80度位で内傾するフラスコ形と推定される。底面には幾分凹凸があり、北壁側が比高20cmで低くなっている。

埋土は黄褐色、にぶい黄褐色の基本層序第V～VI層起源の土が堆積し、5層に細分されている。人為的に埋め戻された土坑であろう。

〔遺物〕

出土していない。



〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から、縄文時代の土坑と推定される。

II h 56土坑		土性
層位	色調	
1	10 YR 8/ 黄褐色	シルト。浮石含む。基本層序V層。
2	〃 〃 〃	〃 〃 〃
3	〃 〃 〃	〃 〃 〃 におい黄褐色ブロック含む。
4	10 YR 8/ におい黄褐色	〃 〃 〃 基本層序VI層。
5	10 YR 8/ 黄褐色	〃 〃 〃 極小浮石を多量に含む。

縮尺 1/40

第213図 (143) II h 56土坑

(144) II h 57土坑-1

〔遺構〕 (第214図、P L-80)

尾根の中央部北寄りのグリッド II h 57に位置し、II h 56土坑の南々東2.5m にあり北東向き斜面の中位に立地している。重複する遺構はない。

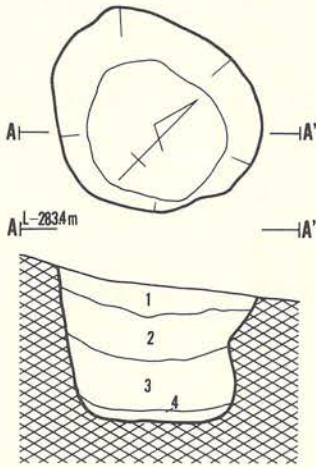
開口部径1.15m×1.05m、底部径80cm×70cmの規模をもち、最も深い南壁で85cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して110度で外傾し、断面形はピーカー形に近い。底面に凹凸はなく平坦であるが、壁際が高くなり壁と丸味をもって接続している。

埋土は褐色、黄褐色、にぶい黄褐色のシルトと地山起源の土が堆積し、4層に細分されてい

る。1～3層は基本層序第V層（1層）、VI層（2・3層）を起源とする埋土で、4層は黒色土起源のシルトである。人為的に埋め戻された土坑であろう。

〔遺物〕

出土していない。



〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から、縄文時代の土坑と考えられる。

II h 57土坑-1

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 黄褐色	シルト。浮石含む。基本層序V層。
2	10 YR 5/6 にぶい黄褐色	。浮石多量に含む。
3	10 YR 5/6	。基本層序VI層。
4	10 YR 5/6 褐色	。細粒浮石含む。

縮尺 1/40

第214図 (I44) II h 57土坑-1

(145) II h 57土坑-2

〔遺構〕 (第215図、P L-80)

尾根の中央部北東寄りのグリッドII h 57・58に位置し、II h 57土坑-1の南々東2 mで北東向き斜面の上位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.05m×80cm、底部径70cm×70cmの規模をもち、最も深い南壁で59cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して95度～100度で外傾し、断面形はピーカー形である。底面には若干凹凸があるもののほぼ平坦で水平状態に近い。

埋土は基本層序第V～VI層を起源とする黄褐色と明黄褐色の土で占められ、5層に細分されている。人為的に埋め戻された土坑であろう。 (Y)

〔遺物〕

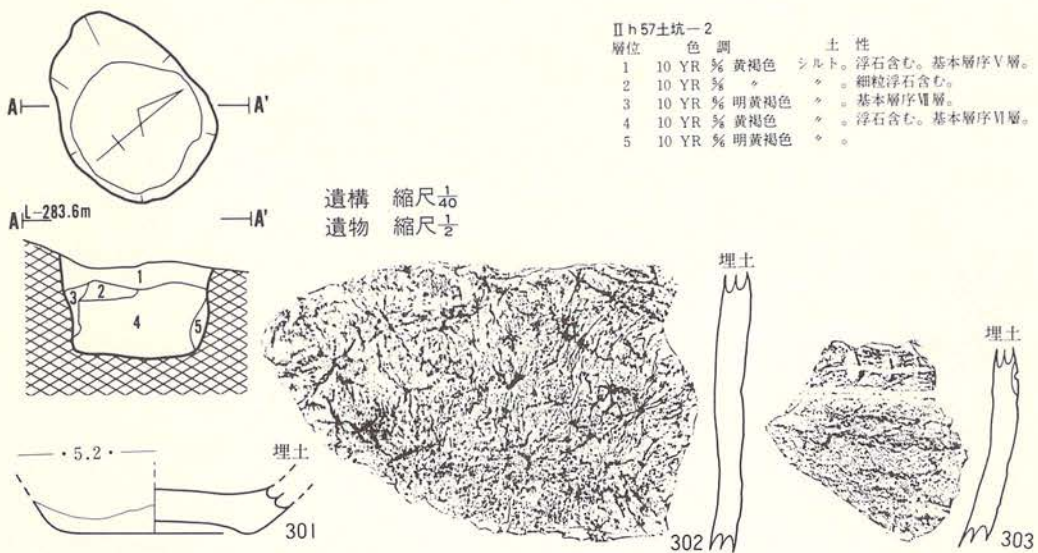
埋土内から27点の土器片が出土している。

土器 (第215図301～303、P L-138)

301は底部だけを残存する上げ底の土器である。302は無文土器の体部破片である。303は無文の器面に沈線を刻目で文様を付す。以上から、302は第VIII群、303は第VI群7類に属する。

石器

出土していない。



第215図 (145) II h 57土坑-2

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期末葉であることから、本土坑も後期末葉に属するであろう。

(146) II h 58土坑 (旧II h 59土坑-1)

〔遺構〕 (第216図、P L-80)

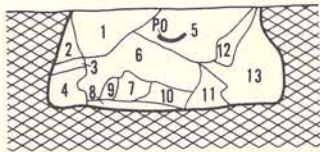
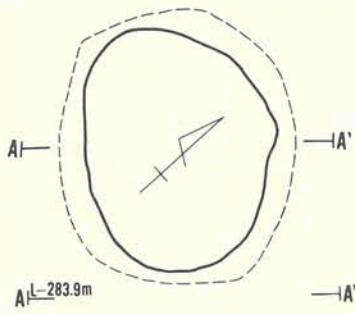
尾根の中央やや東寄りのグリッドII h 58・59にまたがって位置し、II h 57土坑-2の南西5mで尾根の頂上平坦面に立地している。他遺構との重複はない。

開口部径1.3m×1m、底部径1.45m×1.25mの規模をもち、最も深い南東壁で67cmの深さをもつ北西-南東に長軸のある楕円形を示す土坑である。壁は底面に対して70度で内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面にはほとんど凹凸がなく平坦であるが、中央部が若干凹んでいる。

埋土は黒褐色、暗褐色、黄褐色、にぶい黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、13層に細分されている。壁寄りの2~4と11~13層、底面上の8・9層が基本層序第V層を起源とする土で、壁際に堆積する層は壁の崩落によるものであろう。中央部には黒色土系のシルトが堆積し、浮石や炭化物が混入しているおそらく自然堆積による埋没であろう。 (Y)

〔遺物〕

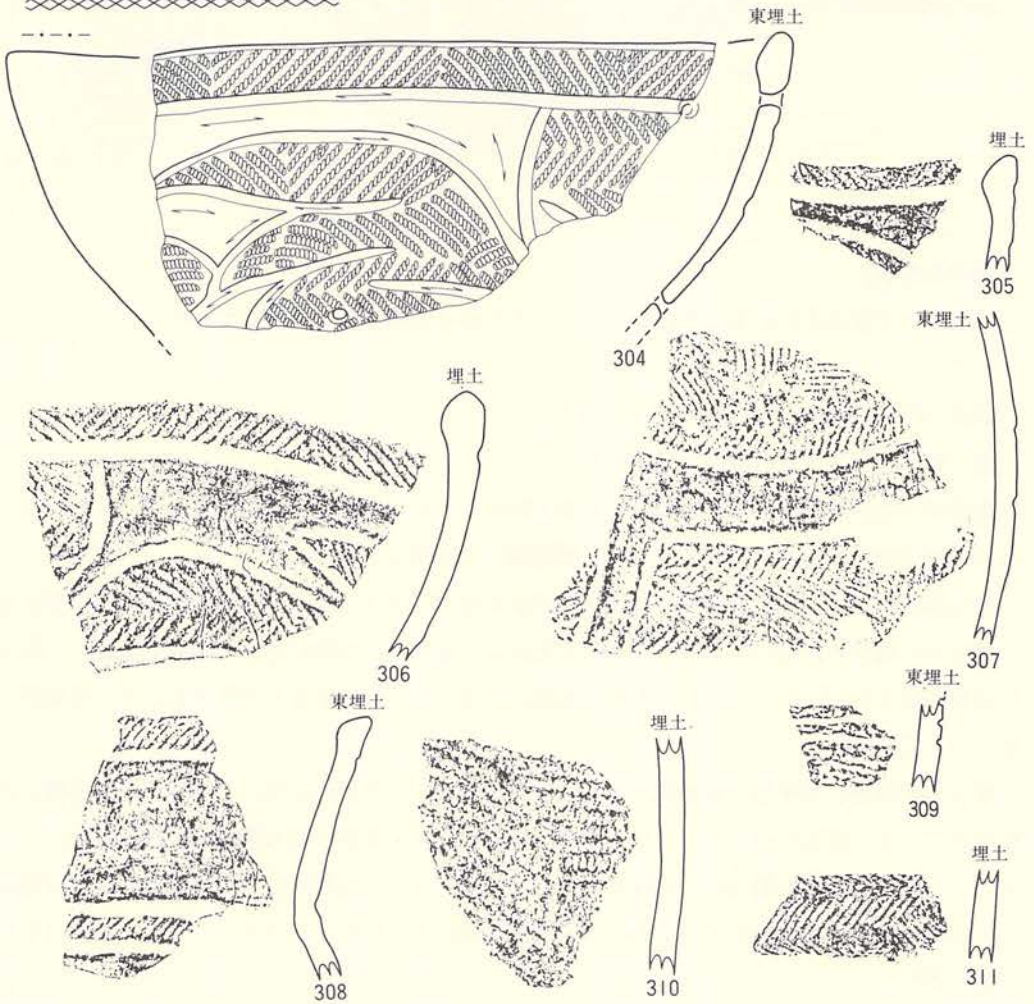
埋土内から実測可能な1点を含む37点の出器片が出土している。



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

II h 58土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 暗褐色	木根跡。
2	10 YR 黄褐色	浮石・炭化物含む。基本層序V層。
3	*	*
4	*	*
5	10 YR 黒褐色	*
6	*	*
7	10 YR 暗褐色	*
8	10 YR 黄褐色	浮石含む。基本層序V層。
9	*	暗褐色混じる。
10	10 YR 暗褐色	浮石・炭化物含む。基本層序V層。
11	10 YR におい黄褐色	黄褐色のブロック含む。
12	*	*
13	10 YR 黄褐色	基本層序V層。



第216図 (146) II h 58土坑

土器 (第216図304~311、P L-138)

304~308はほぼ同じ様相を示す土器で、無文の器面を沈線で区画し、一部に縄文を充填し残った部分は無文で良く研磨している。309は縄文を付した後沈線を入れている。310と311は単節斜行縄文(310)や羽状縄文(311)を付す土器である。以上から、304~308は第V群3類、309は第V群2類、310・311は第IX群に相当する。

石器

出土していない。

[遺構の時期]

304~308は後期中葉末の土器であることから、本土坑も後期中葉頃であろう。

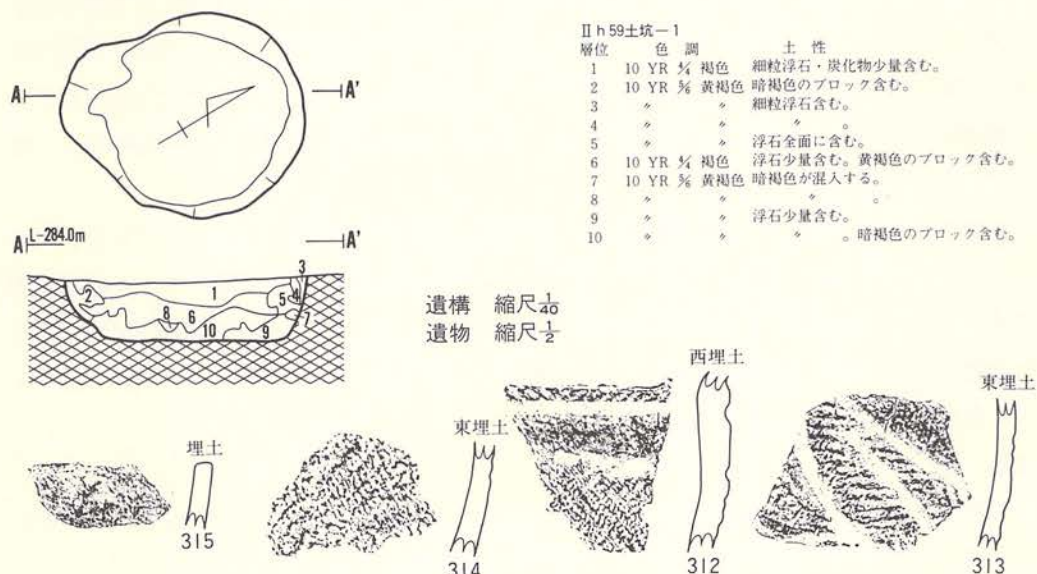
(147) II h 59土坑 (II h 59土坑-2)

[遺構] (第217図、P L-81)

尾根の中央やや南東寄りのグリッドII h 59に位置し、II h 58土坑の3 m南で尾根の頂上平坦面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径は1.3m×1.1m、底部径1 m×90cmの規模をもち、最も深い東壁で37cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して95度~110度で外傾し、断面形は浅皿形である。底面にはほとんど凹凸もなく、平坦でほぼ水平状態に近い。

埋土は褐色、黄褐色のシルトと地山起源の土が堆積し、10層に細分されている。黒色土系の



第217図 (147) II h 59土坑

褐色シルトは、1・6層のみで、ほかは基本層序第V層を起源とする汚れた土である。自然堆積で埋没した土坑であろう。(Y)

〔遺物〕

埋土内から13点の土器片が出土している。

土器 (第217図312～315、P L—139)

312・313は同じ様相を示し、器面に羽状縄文(原体L R・R L縦横回転)を付した後沈線で区画し、一部の縄文を磨消している。314は原体L R横回転による縄文をもち、315は無文である。以上から312・313は第V群2類、314は第IX群、315は第VIII群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

312・313は後期中葉末の土器であることから、本土坑も後期末と推定される。

(148) II h 60土坑

〔遺構〕 (第218図、P L—81)

尾根の中央部東寄りII h 60・61・II i 60・61グリッドにまたがって位置し、II h 59土坑の南東6mで尾根の頂上平坦面に立地している。南東部でII i 61土坑一2と重複しているが、本土坑の方が新しい。また、本土坑の西側は輪郭が不明瞭で掘り過ぎたため、明確にできなかった。

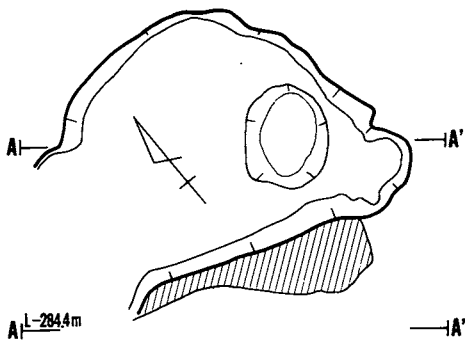
検出された規模は開口部径1.45m×1.35m、底部径1.3m×1.1m位で、最も深い北東壁で30cmの深さをもつ北西—南東に長軸がある楕円形の土坑である。壁は底面に対して90度～95度で外傾し、断面形は浅い皿形である。底面にはあまり凹凸もなく平坦で、水平状態に近いものの、南東壁際に開口部径55cm×55cm、底部径45cm×30cm、深さ10cmで、長軸を北東—南西にもつ楕円形の副穴が検出されている。

埋土は黒褐色、褐色、にぶい黄橙色のシルトと粘土が堆積し、4層に細分されている。4層は副穴内を充填していた粘土の塊であるが、その粘土は一度軟かくして餅状にしたものを底面に置いた状況を示している。砂粒が多く混じるものの粒子が細かく、植物繊維等のすさを入れた痕跡はない。そのほか黒色土系のシルトで炭化物や浮石粒、地山粒が混入している。おそらく、自然堆積で埋没した土坑であろう。

〔遺物〕

南東部底面から多くの土器片が出土したが接合しなかった。埋土から出土したものも含めると、実測2点を含む83点の土器と石器が1点出土している。

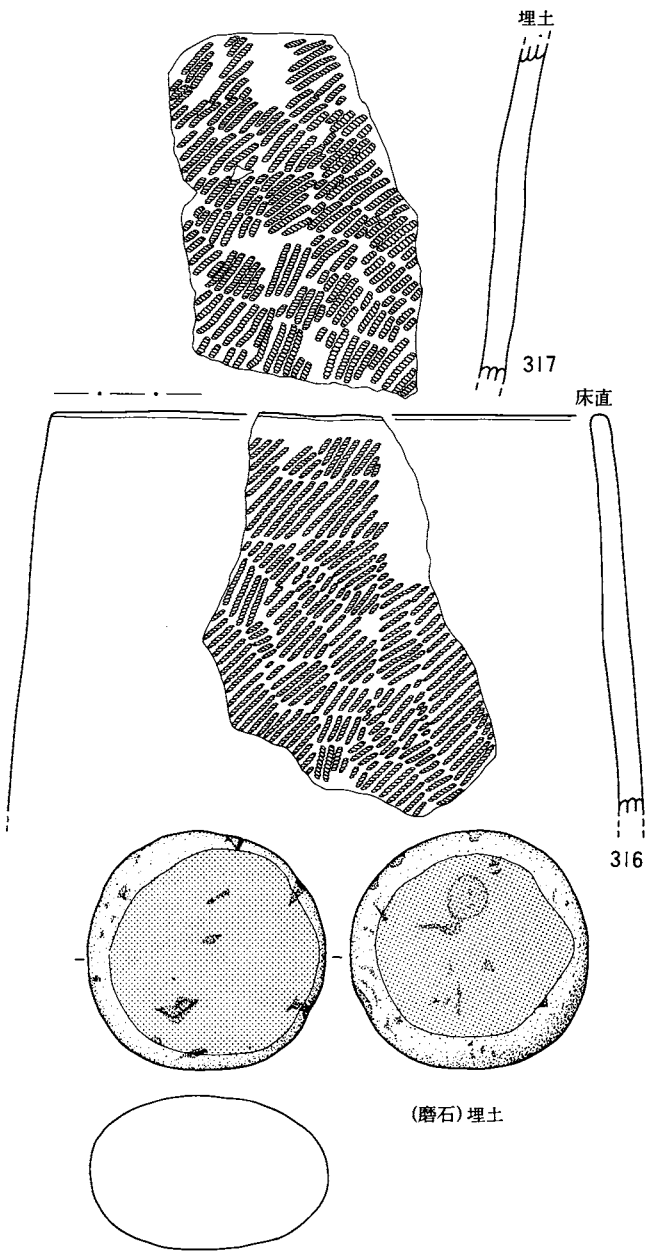
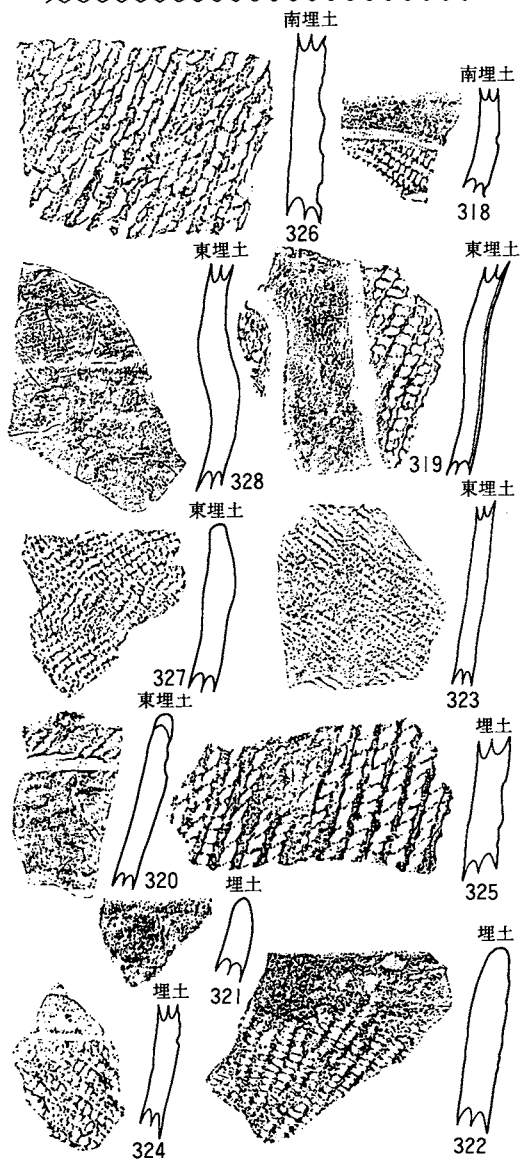
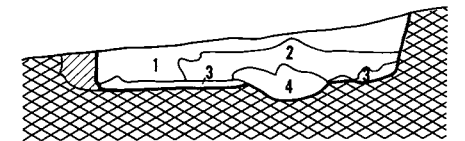
土器 (第218図816～328、P L—139)



II h60土坑-1

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 黒褐色	砂質シルト。炭化物・浮石含む。
2	10 YR 5/2	。炭化物・浮石粒含む。
3	7.5YR 5/2 褐色	汚れた基本層序V層。
4	7.5YR 5/2 により黄橙色	粘土・砂粒含む。

遺構 縮尺 1/2
 遺物 土器 縮尺 1/2
 石器 縮尺 1/3



第218図 (148) II h60土坑

316・317は器面に原体RL縦回転による単節斜行縄文を付す土器で、同一個体の可能性が高い。318～320、324は縄文の付された器面を沈線で区画し、縄文を磨消している。321～323は縄文だけが施文された粗製土器である。325・326は単軸絡条体縦回転による撚糸文をもつ。327・328は無文である。以上から、318～320、324は第Ⅲ群4類、327・328は第Ⅷ群、ほかは第Ⅸ群に属する。

石 器 (第218図236、P L—169)

磨石が1点出土している。大きさが9.5cm×9.5cm、厚さ6.3cm、重さ83.2gで、扁平で円形の円礫の両面を磨石として使用している。石材は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

底面直上から出土した317や埋土内出土の318～320、324は中期末葉に属する土器であることから、本土坑も中期末葉に位置づけられるであろう。

(149) II h 60土坑

〔遺 構〕 (第219図、P L—81)

尾根の中央部南寄りのグリッドII h 61に位置し、II h 60土坑の西2 mで南西向き斜面に立地している。本土坑はII g 60住居跡の南東部壁に近い埋土内に掘り込まれている。

開口部径1.3m×40cm、底部径90cm×30cmの規模をもち、最も深い北東壁で1 mの深さがある。形状が不整で、三日月形に湾曲した細く短い溝状を示している。壁は底面に対して北西壁が130度外傾し、断面形は斜めに掘られたズンドウ形である。底面には凹凸もなく平坦であるが、全体が丸くなっている。

埋土は黒色、黒褐色、にぶい黄橙色のシルトや火山灰が堆積し、4層に細分されている。2層は十和田a降下火山灰の堆積で、1層は火山灰起源の黒色シルトである。3・4層は浮石粒の混じったシルトであり、4層には炭化物も混入している。自然状態の埋没であろう。

〔遺 物〕

埋土内から土器片が3点出土している。

土 器 (第219図460～462、P L—141)

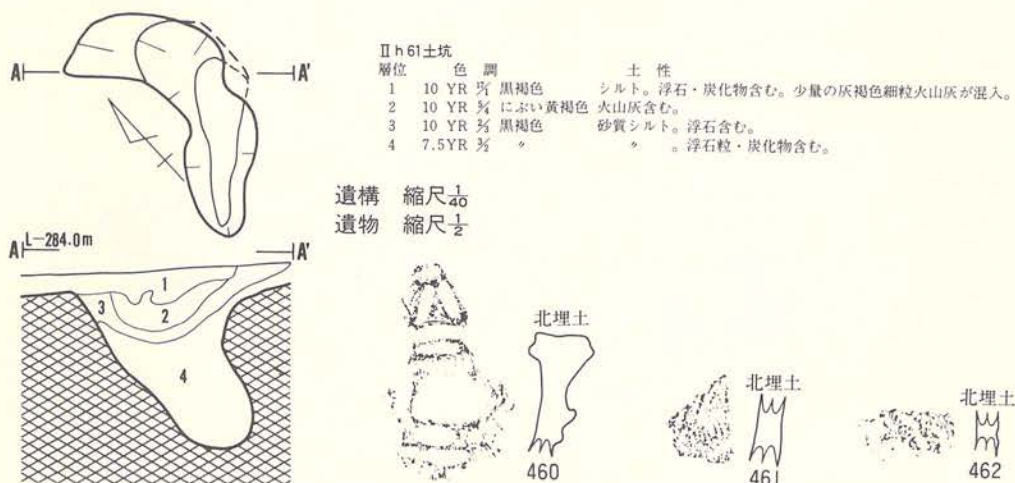
460は口縁部突起で、沈線による文様をもつ。461・462は小破片のため詳細は不明であるが、器表に縄文をもつ。所属は定かでない。

石 器

出土していない。

〔遺構の時期〕

重複関係と埋土の状況から考えて、縄文時代の遺構であろう。



第219図 (149) II h 61土坑

(150) II i 59土坑 (旧II i 59土坑-2)

〔遺構〕 (第220図、P L-82)

尾根の中央部東寄りのグリッドII i 59に位置し、II h 59土坑の東6.5mで北東向き緩斜面の上位に立地している。他遺構との重複はない。

開口部径95cm×85cm、底部径1.1m×1.1mの規模をもち、最も深い南壁で53cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して70度で内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面には凹凸もなく平坦で、ほぼ水平状態に近い。

埋土は暗褐色、褐色、にぶい褐色のシルトが堆積し、8層に細分されている。1・2・6～8層には基本層序第V層を起源とする土が混入し、全体が汚れている。浮石や炭化物粒が混じっている。おそらく、自然堆積で埋没した土坑であろう。

〔遺物〕

埋土内から7点の土器片が出土している。

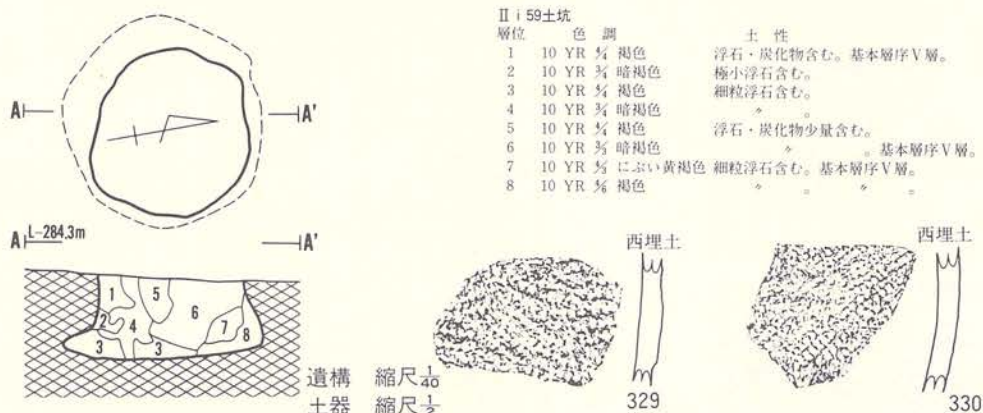
土器 (第220図329・331、P L-139)

2点とも縄文だけを付す粗製土器の破片である。付されている縄文には原体RL横回転(329)と縦回転(331)がある。いずれも第IX群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕



第220図 (150) II i 59土坑

出土した土器は後期的な特徴をもっていることから、本土坑も後期に属するであろう。

(151) II i 60土坑—1 (旧II i 60土坑—2)

〔遺構〕 (第221図、P L—82)

尾根の中央やや東寄りのグリッドII i 60に位置し、II i 59土坑の南3 mで尾根の頂上部平坦面に立地している。

開口部径1.05m×80cm、底部径1.15m×1.15mの規模をもち、最も深い南壁で84cmの深さをもつ円形の土坑である。開口部が楕円形を示すのは崩落があったものと推定され、本来は開口部も円形と考えられる。壁は南壁で90度～95度外傾するが、ほかは90度～60度内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形と推定される。底面はほぼ平坦で水平状態に近い。

埋土は暗褐色、褐色、黄褐色のシルトと地山起源の土が堆積し、11層に細分されている。3・5・7・9～11層は基本層序第V層を基調とする土で、南壁際と最下部に多く堆積している。ほかは黒色土系のシルトで、浮石や少量の炭化物等が混入する。8・11層は人為的に投棄された土であろうが、他は自然堆積と考えられる。

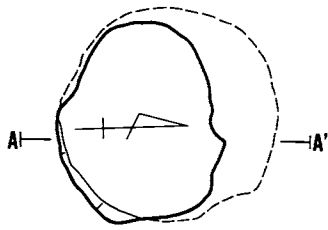
〔遺物〕

埋土内から43点の土器片が出土しているものの、細片が多く拓影の作成ができないものが多い。

土器 (第221図332～337、P L—139)

332は無文土器の破片である。ほかは器面に縄文のみを施文する土器片で、縄文には各種ある。332は第VIII群、ほかは第IX群に相当する。

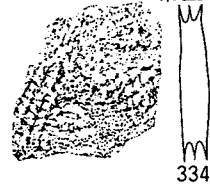
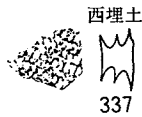
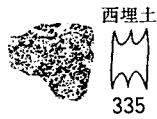
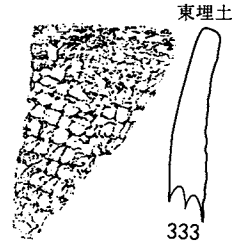
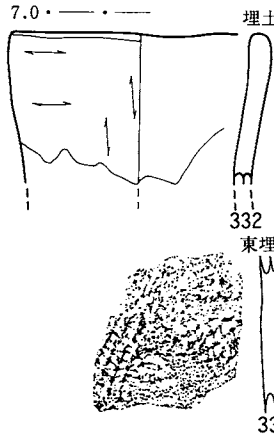
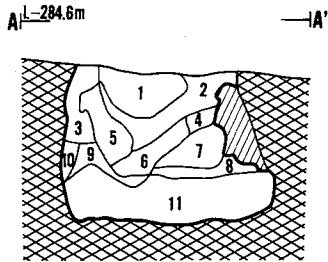
石器



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

II i 60土坑-2

層位	色調	土性
1	10 YR 4/2 暗褐色	浮石・炭化物含む。
2	10 YR 4/2 褐色	〃
3	10 YR 4/2 黄褐色	褐色少量混入する。
4	10 YR 4/2 褐色	浮石含む。黄褐色少量混じる。
5	〃	浮石少量含む。
6	10 YR 4/2 褐色	炭化物少量含む。
7	10 YR 4/2 黄褐色	褐色が混入する。
8	10 YR 4/2 褐色	黄褐色が混入する。
9	10 YR 4/2 黄褐色	浮石少量含む。褐色混入する。
10	〃	褐色が混入する。
11	〃	浮石含む。にぶい黄橙色のブロック含む。



第221図 (151) II i 60土坑-1

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期的な特徴をもつことから、本土坑も後期に位置づけられるであろう。

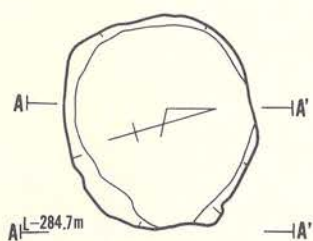
(152) II i 60土坑-2 (旧II i 59土坑-1)

〔遺構〕 (第222図、P L-82)

尾根の中央やや東寄りのグリッドII i 60に位置し、II i 60土坑-1の西2.5mで尾根の頂上平坦面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.2m×90cm、底部径1.1m×90cmの規模をもち、最も深い南壁で32cmの深さをもつ南西-北東に長軸のある楕円形の土坑である。壁は底面に対して120度で外傾し、断面形は皿形である。底面には凹凸もなくほぼ平坦で、水平状態に近い。なお、南西壁寄りの底面に開口部径45cm×45cm、底部径30cm×30cm、深さ10cmの副穴状の窪みが検出されている。

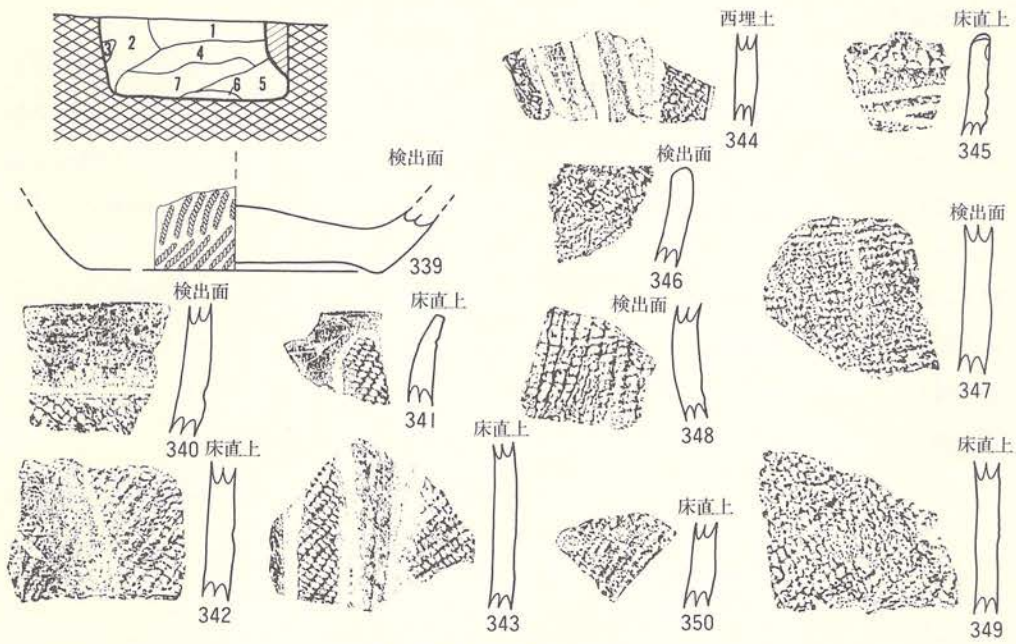
埋土は黒褐色、暗褐色、黄褐色のシルトが堆積し、11層に細分される。1・3・6・9・10層が基本層序第V層起源の土であるが、全体からみれば量も少なく、南西壁際や底面付近に塊で混在している。そのほかは浮石や炭化物が混じる黒色土起源の土である。自然堆積で堆積し



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
 遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

II i 60土坑-3

層位	色調	土性
1	10 YR 8/2 暗褐色	浮石少量含む。
2	10 YR 8/2 褐色	。黄色のブロック含む。
3	10 YR 8/2 黄褐色	。暗褐色のブロック含む。
4	10 YR 8/2 暗褐色	浮石含む。黄色のブロック含む。
5	10 YR 8/2 黄褐色	浮石・炭化物含む。暗褐色の混じり土。
6	10 YR 8/2 褐色	浮石少量含む。
7	10 YR 8/2 黄褐色	浮石含む。暗褐色混じる。



第223図 (153) II i 60土坑-3

4層は黒色土系の土である。自然堆積による埋没であろう。 (Y)

〔遺物〕

底面直上と検出面から合計22点の土器が出土している。

土器 (第223図339~350、P L-139)

339は体部下端と底部を残す破片で、器面に原体LR横回転による縄文を付す。340~344は縄文を施文した器面を沈線で区画し、縄文を磨消した土器である。345は340~344の特徴に口縁端部に並行する列点文をもつ。346~350は縄文だけを施文した粗製土器の破片である。以上から、340~345は第III群2類、ほかは第IX群である。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器が中期末葉であることから、中期末葉の土坑と考える。

(154) II i 60土坑-4

〔遺 構〕 (第224図、P L-83)

尾根の中央部から南東寄りのグリッドII j 60・61、II i 60・61にまたがって位置し、II i 60土坑-2の東に隣接した尾根頂上部の北西向き緩斜面に立地している。II i 60陥し穴状遺構の南西壁と重複しているが、本土坑の方が古い遺構である。

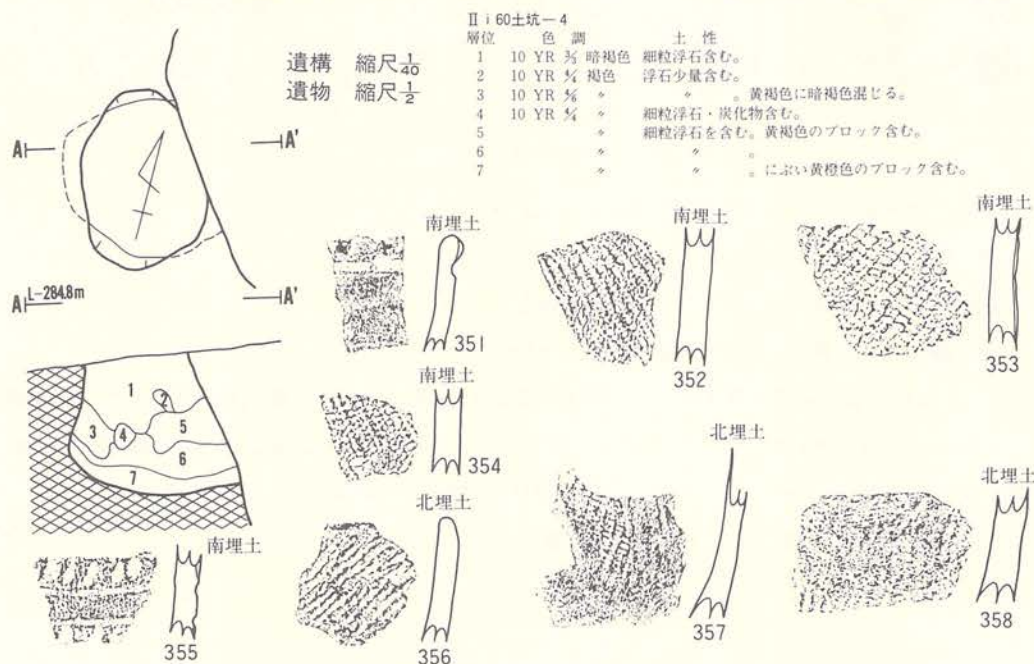
検出された規模は開口部径95cm×90cm、底部径90cm×80cm位で、最も深い南壁で86cmの深さをもつ土坑で、平面形は円形と推定される。壁は南壁と北壁が90度～100度外傾し、西壁と東壁は90度～70度で内傾している。おそらく本来の断面形はフラスコ形を示し、南壁と北壁は崩落したものであろう。底面には凹凸はないが、中央部が低く壁際が比高20cmで次第に高くなっている。

埋土は暗褐色と褐色のシルトが堆積し、7層に細分されている。全体に浮石が混入し、3・5・7層は地山起源の黄褐色シルトも混じっている。自然堆積による埋没であろう。(Y)

〔遺 構〕

土 器 (第224図351～358、P L-139)

351は無文の器面に沈線と小さな瘤を貼付した口縁部破片である。355は無文の器面に沈線と



列点状の刻目を付す土器である。ほかは縄文だけを施文した粗製土器の破片である。以上から351は第VI群4類、355は第VI群5類、ほかは第IX群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器から考えて、後期末葉の土坑であろう。

(155) II i 60土坑—1

〔遺構〕 (第225図、P L—83)

尾根の中央部南東寄りのグリッドII i 61に位置し、II i 60土坑—3の南3mで北西向き斜面に立地している。II i 61陥し穴状遺構の北壁に接続し、さらに東壁にII i 61土坑—2と重複している。新旧関係をみると、II i 61土坑—2→II i 61土坑→II i 61陥し穴状遺構の順で新しくなる。

開口部径1.3m×1.3m、底部径1.05m×95cmの規模をもち、最も深い南東壁で54cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して95度～105度で外傾し、断面形はビーカー形に近い。底面には若干凹凸があり、さらに南東部が比高10cmで低くなっている。

埋土は黒褐色、暗褐色、黄褐色のシルトが堆積し、7層に細分される。5・6層は基本層序第V層を起源とする汚れた黄褐色土で、壁の崩落によるものであろう。そのほか浮石や炭化物が混入した黒色土系のシルトが堆積している。自然堆積による埋没であろう。(Y)

〔遺物〕

埋土内から15点の土器片と、石器1点、石製品1点が出土している。

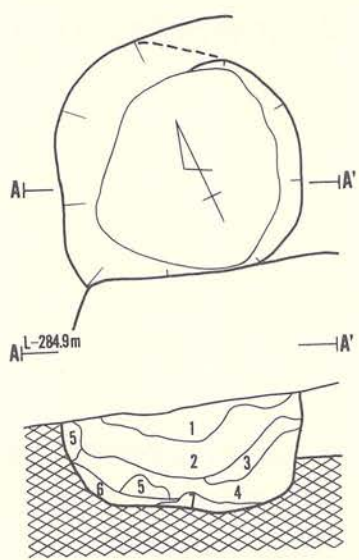
土器 (第225図359～368、P L—139)

359は原体LR横回転の単節斜行縄文を付した器面を沈線で区画し、縄文を磨消している。360は無文の器面に沈線と刻目による文様を施す。362は原体RL横回転による縄文を体部に付し、口縁部は無文で口唇部には小凹凸がある。368は無文土器の破片である。ほかは縄文だけを付した粗製土器の破片で、縄文には各種ある。以上から、359は第V群3類、360は第VI群7類、368は第VIII群、ほかは第IX群に相当する。

石器 (第225図93、P L—161)

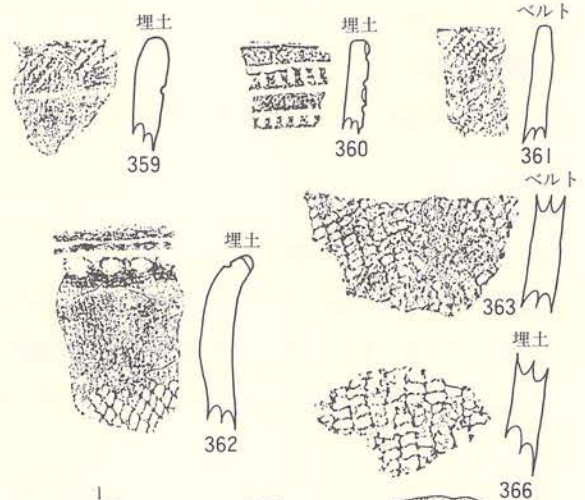
削器が1点出土している。小型の剥片の側縁に簡単な剝離調整を加えたものである。全長2.3cm、幅2.4cm、厚さ6mm、重さ3.34gの大きさで、石材は奥羽山地新第三系中新統産の珪質泥岩である。

石製品 (第225図427、P L—179)

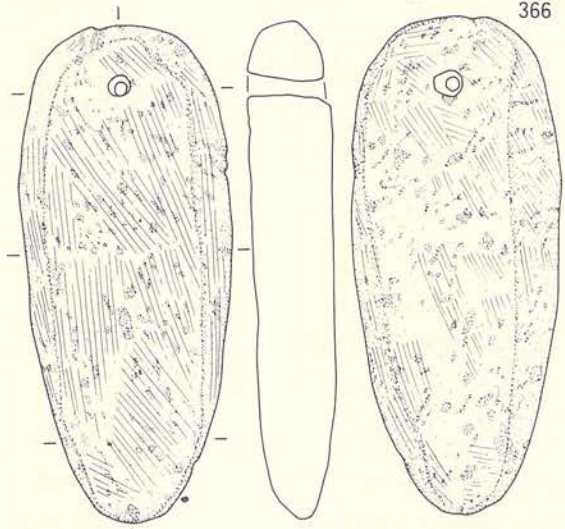
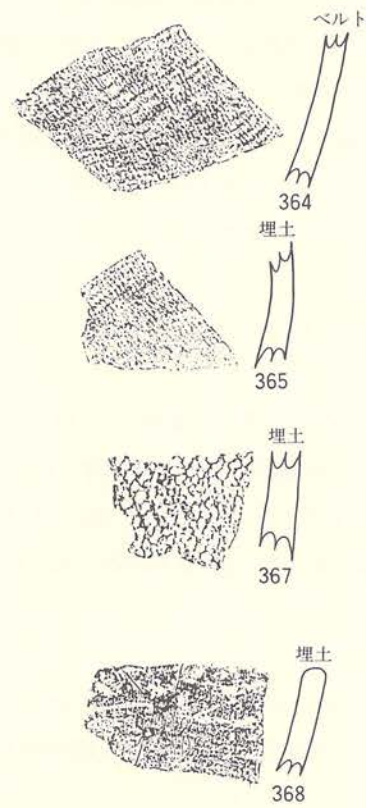


II i 61土坑-1

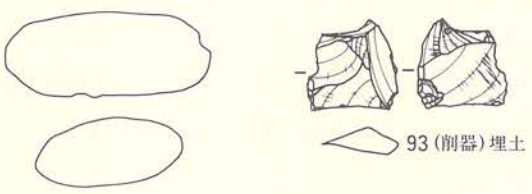
層位	色調	土性
1	10 YR 7/2 黒褐色	浮石・炭化物少量含む。
2	10 YR 7/2 暗褐色	浮石・炭化物全面に点在する。
3	10 YR 7/2 *	浮石・炭化物少量含む。黒褐色のブロック含む。
4	*	細粒浮石含む。黄褐色のブロック含む。
5	10 YR 7/2 黄褐色	暗褐色が混じり汚れた色含む。
6	*	暗褐色が混じりが少なく汚れた色だが明るい。
7	10 YR 7/2 暗褐色	黄褐色のブロック含む。



遺構 縮尺 $\frac{1}{10}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



427 (石器品) 西埋土



第225図 (155) II i 61土坑-1

軽石を素材にして全面を磨って整形し、大珠形に仕上げ、上端には貫通孔を穿っている。大きさは、長さ13.2cm、幅5.5cm、厚さ2.2cm、重さ60gである。石材は稲庭岳第四系産であろう。

〔遺構の時期〕

出土した土器は全て後期後半特に末葉に近い特徴をもっていることから、本土坑も後期末葉に位置づけられているものと推定される。

(156) II i 61土坑-2

〔遺構〕 (第226図、P L-84)

尾根の中央部南寄りのグリッドII i 61に位置し、II i 60土坑-3の南3mで北西向き斜面に立地している。南壁でII i 61陥し穴状遺構、西壁でII i 61土坑-1と重複しているが、本土坑が最も古い遺構である。

検出された規模は開口部径1.3m×70cm、底部径1.2m×60cm位で、最も深い南東壁で44cmの深さをもつ径1.3m位の円形を示す土坑と推定される。壁は底面に対して100度で外傾し、断面形はピーカー形に近い。底面に若干凹凸があり、北西部が比高10cmで低くなっている。

埋土は、褐色、黄褐色、にぶい黄褐色のシルトが堆積し、4層に細分される。1・3・4層は地山起源と考えられる黄褐色のシルトで、浮石が混入する。2層は黒色土起源のシルトで、浮石と炭化物が混入する。自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

埋土内から22点の土器片と、石器が2点出土している。

土器 (第226図369~377、P L-140)

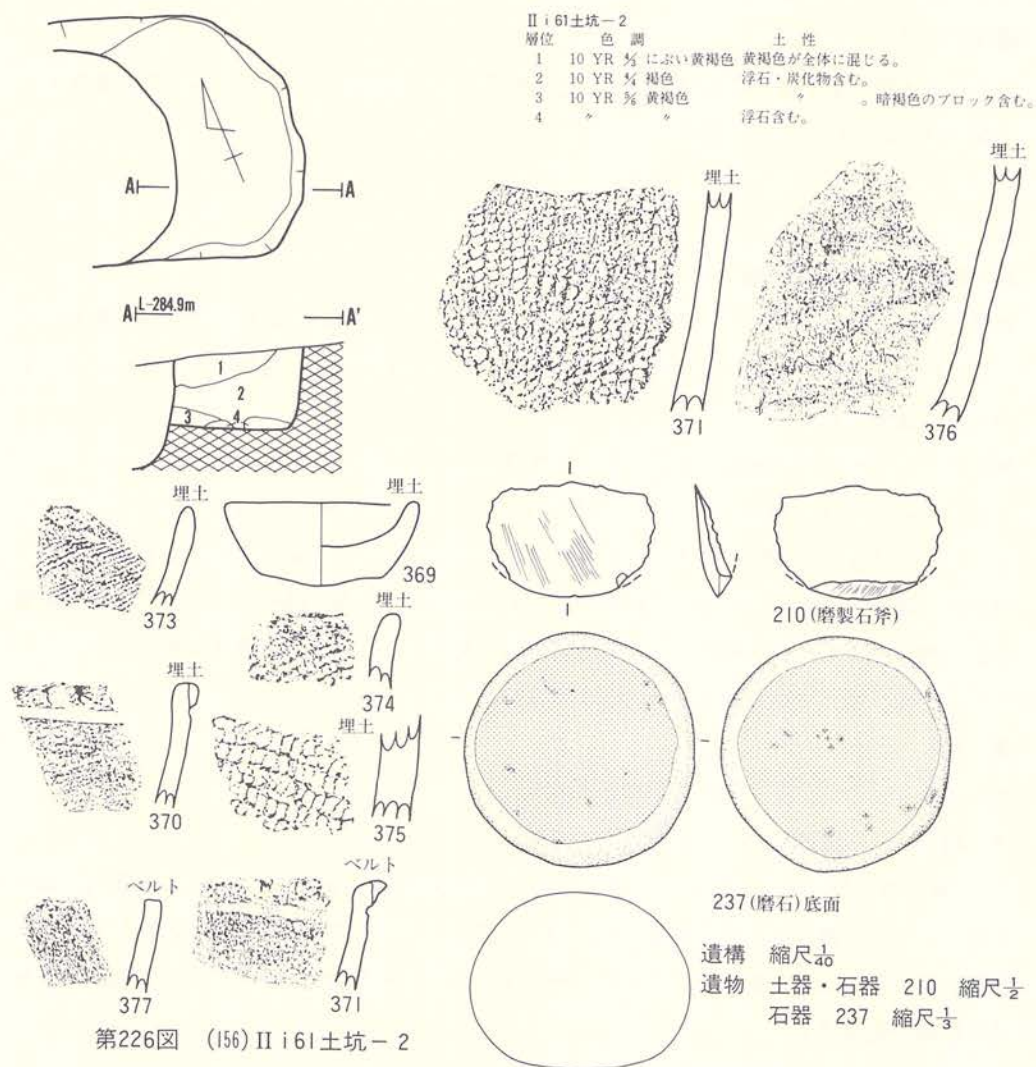
369は無文の小型土器の完形品で、底部の中央が外方に軽く突出する。370・371は無文の器面に沈線と貼瘤で加飾する土器である。372~375は縄文だけが付された粗製土器の破片で縄文には各種ある。376・377は無文土器である。369・376・377は第VIII群、370・371は第VI群4類、ほかは第IX群に相当する。

石器 (第226図210・237、P L-167・169)

磨製石斧1点(210)と磨石1点(237)が出土している。210は磨製石斧の先端部が剥落したもので、もとは大型品と考えられる。石材は北上山地古生界産のチャート質淡緑質凝灰岩である。237は径9.3cm×9.1cm、厚さ7cm、重さ25.3gの大きさがある円礫を磨石としたもので、石材は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期末葉であることから、本土坑は後期末葉に属するであろう。

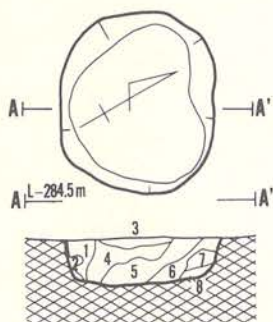


(157) II i 61土坑-3 (旧II h 60土坑-2)

〔遺構〕 (第227図、P L-84)

尾根の中央部南東寄りのグリッドII i 61に位置し、II i 61土坑-1の北西2.5mで南西向き斜面に立地している。II h 60土坑の南東壁と重複しているが、本土坑の方が新しい。

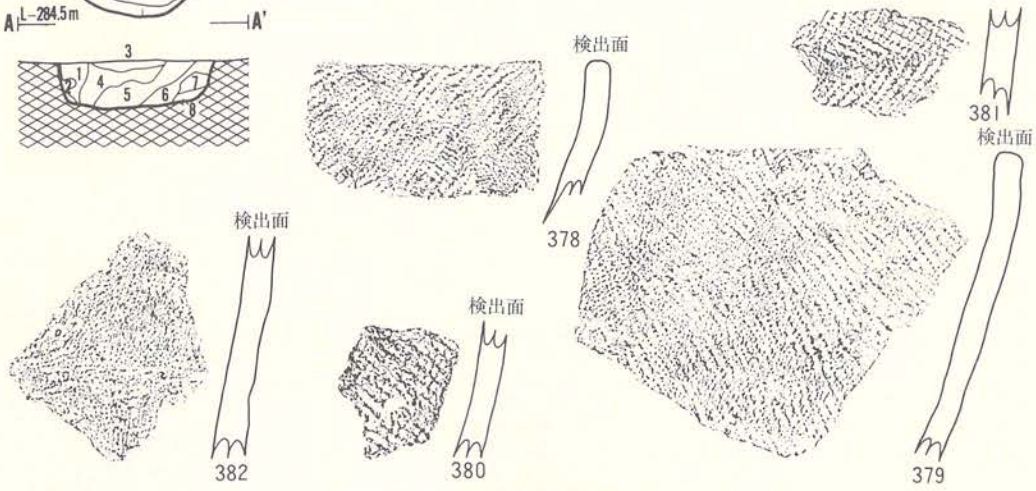
開口部径1m×80cm、底部径85cm×70cmの規模をもち、最も深い東壁で28cmの深さをもつやや歪んだ円形の土坑である。壁は底面に対して90度～100度外傾し、断面形は浅皿形である。底面には若干凹凸があり、北西壁寄りが比高10cmで低くなっている。



II i 61土坑-3

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 暗褐色	浮石含む。
2	10 YR 5/6 黄褐色	細粒浮石含む。
3	10 YR 5/6 におい黄橙色	基本層序VI層。
4	10 YR 5/6 暗褐色	赤色浮石・炭化物含む。
5	10 YR 5/6 *	*
6	* *	赤色浮石含む。
7	* *	黄褐色ブロックで含む。
8	10 YR 5/6 黄褐色	浮石含む。

遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
 遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



第227図 (157) II i 61土坑-3

埋土は暗褐色・黄褐色・におい黄橙色のシルトが堆積し、8層に細分される。全層に浮石が混じり、一部には炭化物も混入する。黒色土起源のシルトを主とした堆積を示し、自然堆積で埋没したことを表すものであろう。(Y)

〔遺物〕

埋土内から土器片が29点出土している。
 土器 (第227図378~382、P L-140)

4点とも縄文のみが付された粗製土器の破片で、縄文には各種ある。いずれも第IX群に相当する。

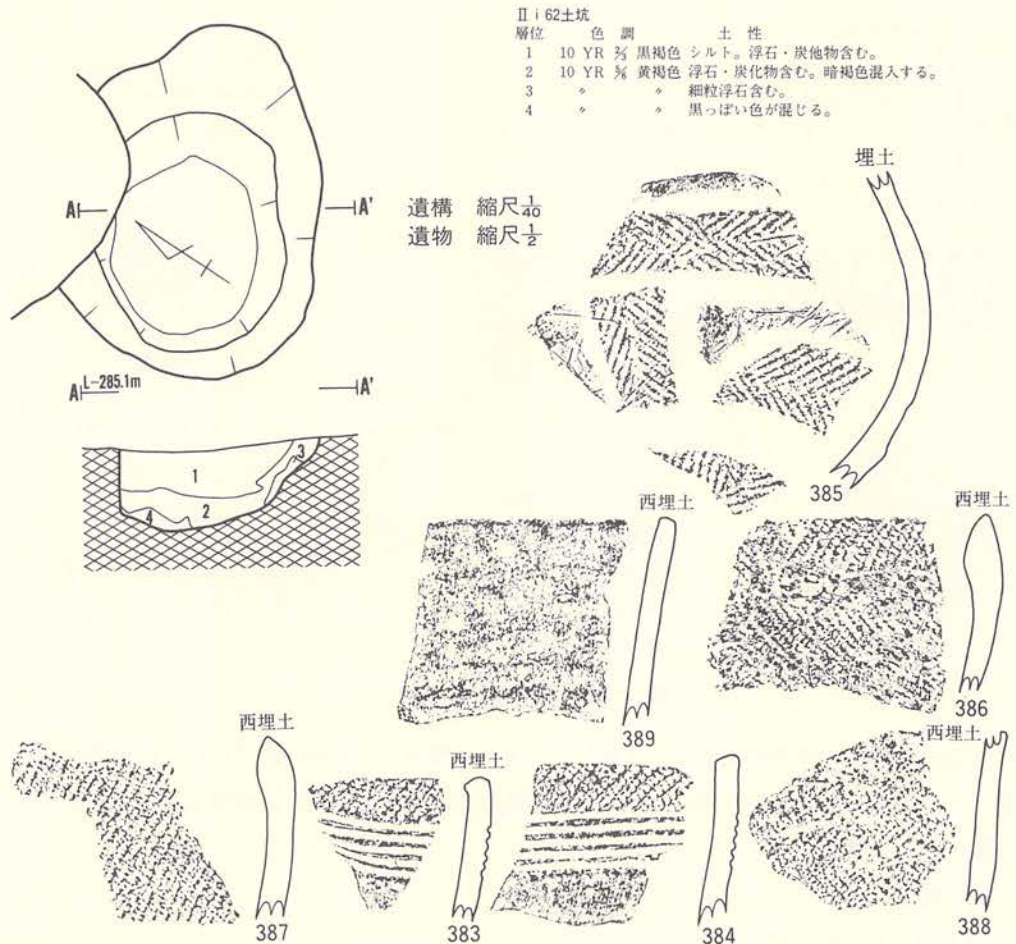
〔遺構の時期〕

出土した土器は後期の特徴をもつことから、本土坑も後期の土坑と推定される。

(158) II i 62土坑 (旧II i 61土坑-3)

〔遺構〕 (第228図、P L-84)

尾根の中央南東寄りのグリッドII i 62とII j 62にまたがって位置し、II i 61土坑-2の南東2mで南西向き斜面の上位に立地している。北西壁がII i 61陥し穴状遺構で壊されている。



第228図 (158) II i 62土坑

開口部径1.9m×1.4m、底部径95cm×80cmの規模をもち、最も深い東壁で42cmの深さをもつほぼ楕円形の土坑である。壁は底面に対して110度～120度で外傾し、断面形は半円状に近い。底面にはほとんど凹凸はないが、中央部が低く壁際が次第に高くなり、底面と壁面に明瞭な境のつけにくい状況を示している。

埋土は黒褐色と黄褐色のシルトが堆積し、4層に細分される。全層に浮石が混じり、一部に炭化物も混入している。自然堆積による埋没であろう。(Y)

〔遺物〕

埋土内から64点の土器片が出土している。

土器 (第228図383～389、P L-140)

383・384は器面に縄文を付した後5条の沈線を引き、その下位の縄文を磨消している。385は器面に羽状縄文を付して一部の縄文を磨消している。386～388は縄文だけを付した粗製土器の破片である。389は無文土器である。以上から、383・384は第VI群1類、385は第V群2類、389は第VIII群、ほかは第IX群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

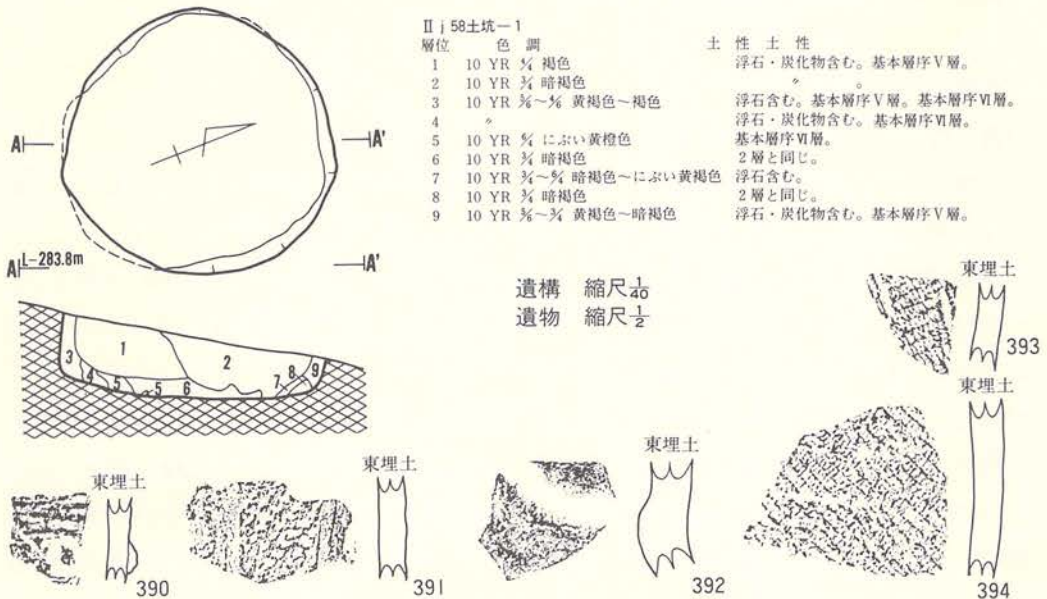
出土した383～385は後期中葉末から後葉初め頃の土器であることから、本土坑も後期後葉と推定される。

(159) II j 58土坑-1

〔遺構〕 (第229図、P L-85)

尾根の中央から北東に寄ったグリッドII j 58に位置し、II h 57土坑-2の東8 mで北向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.4m×1.4m、底部径1.4m×1.3mの規模をもち、最も深い南壁で49cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して90度～100度で外傾し、断面形は南壁の一部が内傾するこ



第229図 (159) II j 58土坑-1

とから考えると、フラスコ形を示していた可能性が強い。底面には凹凸もなく平坦であるが、北側が比高10cmで低くなっている。

埋土は暗褐色・褐色・黄褐色・にぶい黄橙色のシルトと地山起源の土が堆積し、9層に細分される。基本層序V・VII層を起源とする3～6・9層は壁際や最下層として堆積している。1・2層は黒色土系のシルトで、浮石や地山粒、炭化物等が混じる。人為的に埋め戻された可能性がある。(Y)

〔遺物〕

埋土内から土器片が11点出土している。

土器 (第229図390～394、P L—140)

390は無文の器面に沈線と貼瘤で施文した土器である。391・394は縄文の施文された器面を沈線で区画し一部の縄文を磨消している。392・393は縄文だけを付した粗製土器の破片である。以上から、390は第VI群10類、391は第III群2類、394は第III群5類、ほかは第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

390は後期末葉に属し、391・394は中期末葉に属する土器である。したがって、本土坑は390の時期から後期末葉頃と推定される。

(160) II j 58土坑—2

〔遺構〕 (第230図、P L—85)

尾根の中央部から東に寄ったグリッドII i 58、II j 58・59にまたがって位置し、II j 58土坑—1の南西3.5mで北向き緩斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.2m×1.2m、底部径1.6m×1.55mの規模をもち、最も深い南壁で87cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して80度～60度で内傾し、断面形は底面の上位40cmに径1.15mの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は軽く外傾している。底面にはほとんど凹凸もなく平坦で、ほぼ水平状態に近いが、壁際が僅かに高くなり、壁とは丸味をもって接続している。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、12層に細分される。上位の壁際に1～5層の基本層序V層起源の汚れた土が堆積し、ほかは黒色土系の暗褐色土が堆積している。全体に浮石や地山粒、炭化物が混入している。層に若干乱れがあるものの、ほぼ自然堆積による埋没であろう。(Y)

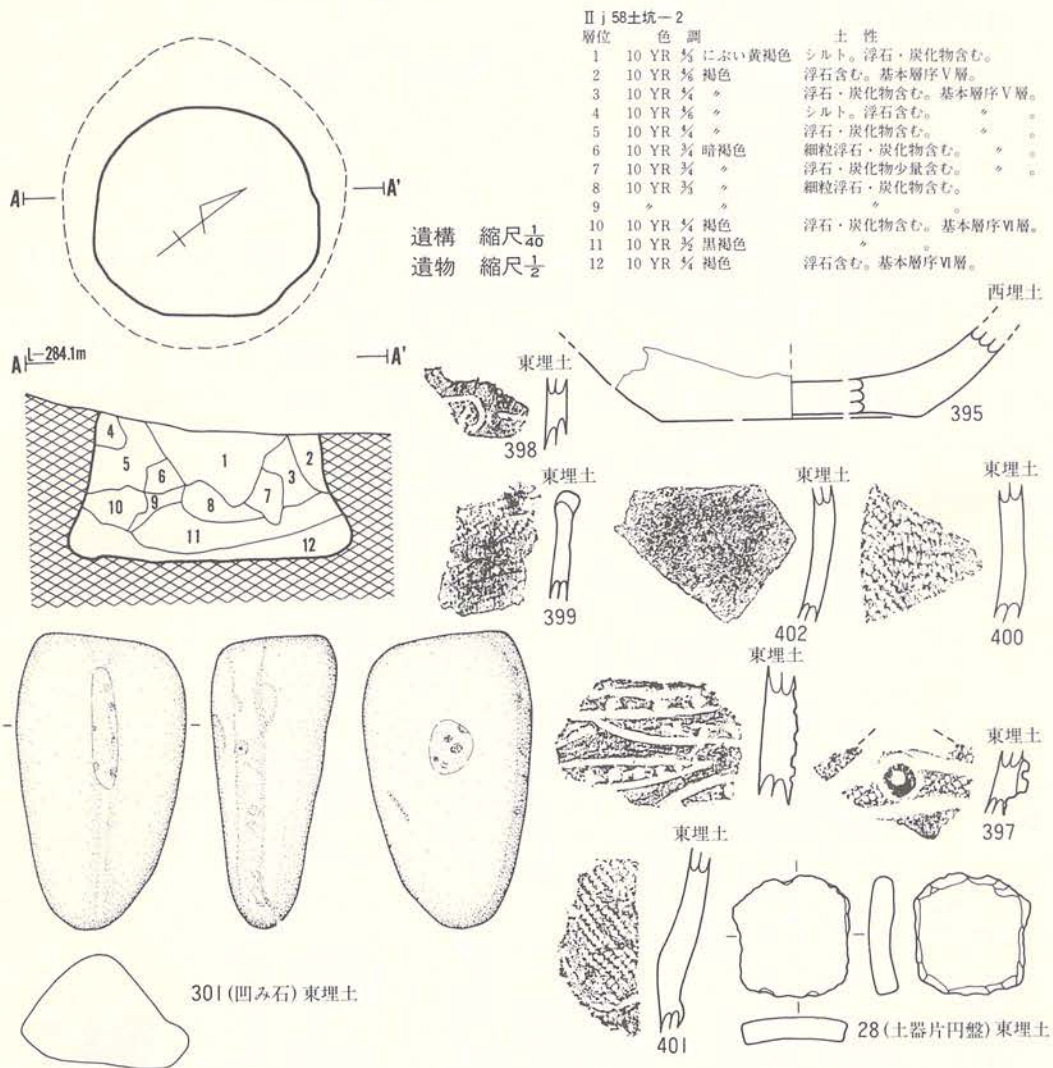
〔遺物〕

埋土内から土器片が29点と、土製品1点、石器1点が出土している。

土器 (第230図395~402、P L-140)

395は体部下端と底部を一部残す破片である。396は無文の器面に入組文的な沈線と列点文風の刻目が施文されている。397は原体LR横回転による縄文を付した後沈線を引き、中心部が凹む円形の貼瘤がある。400・401は縄文だけを付す粗製土器の破片である。402は無文土器である。以上から、396は第VI群8類、397は第VI群7類に相当する。

土製品 (第230図28、P L-157)



第230図 (160) II j 58土坑-2

無文土器の破片の周囲を略方形に整形した土器片円盤である。大きさは3.2cm×3cmである。

石器 (第230図301、P L-172)

凹み石が1点出土している。大きさは長さ11.7cm、幅6.7cm、厚さ4.3cm、重さ46.2gで、断面・平面とも三角形気味の円礫の両面を使用している。石材は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

396・397の土器は後期末葉であることから、本土坑も後期末葉頃であろう。

(161) II j 58土坑-3 (旧III a 58土坑)

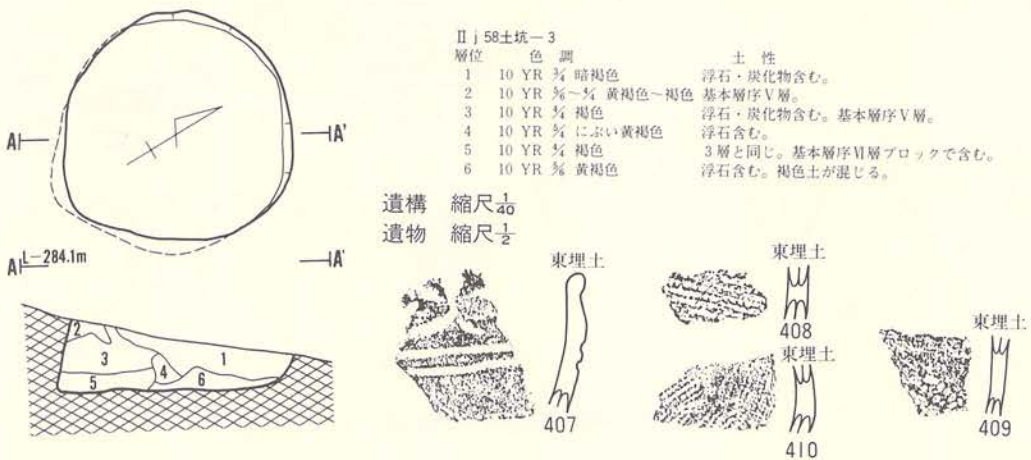
〔遺構〕 (第231図、P L-85)

尾根の中央部から東寄りのグリッドII j 58・III a 58にまたがって位置し、II j 58土坑-2の東4mで北向き緩斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.3m×1.25m、底部径1.3m×1.2mで最も深い南壁で42cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して南東壁が90度~70度で内傾し、ほかは90度~95度で外傾している。断面形はフラスコ形の部分とビーカー形の部分があるものの、本来はフラスコ形と推定される。底面には若干凹凸があるもののほぼ平坦で、水平状態に近い。

埋土は暗褐色・褐色・黄褐色等のシルトで構成され、6層に細分される。全層に浮石や地山粒が混入し、一部に炭化物も混じる。自然堆積による埋没であろう。(Y)

〔遺物〕



第231図 (161) II j 58土坑-3

埋土内から11点の土器片が出土している。

土器 (第231図407~410、P L-140)

407は無文の器面に沈線のみによって文様を施している。ほかは縄文だけを付した土器片である。407は第VI群11類、ほかは第IX群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期後葉であることから、本土坑も後期後葉であろう。

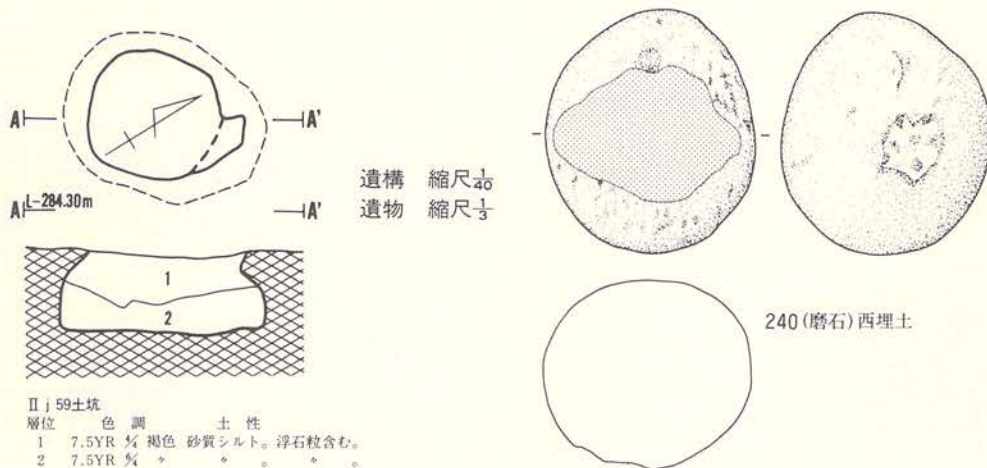
(162) II j 59土坑

〔遺構〕 (第232図、P L-86)

尾根の中央部から東に寄ったグリッドII j 59に位置し、II i 59土坑の東2.5mで西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径70cm×65cm、底部径1.1m×85cmの規模をもち、最も深い南東壁で46cmの深さをもつ北東-南西に長軸のある土坑である。底面付近の壁は直角気味に挟られるが、ほぼ70度で内傾し、断面形は頸部をもたないフラスコ形である。底面には若干凹凸があり、北側の一部が低くなっている。

埋土は褐色のシルトであるが、色調の違いによって2層に細分される。浮石粒が混入する。人為的に埋め戻された可能性が大きい。



第232図 (162) II j 59土坑

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から、縄文時代の土坑であろう。

(163) II j 60土坑

〔遺構〕 (第233図、P L-86)

尾根の中央部から東に寄ったグリッドII j 60に位置し、II i 60土坑-1の南東3 mで北西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径80cm×80cm、底部径90cm×90cmの規模をもち、最も深い南壁で68cmの深さをもつやや歪んだ円形を示す土坑である。壁は底面に対して80度~70度で内傾し、断面形は底面の上位40cmに径60cmの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外傾している。底面には若干凹凸があり、北側が5 cmの比高で低くなっている。

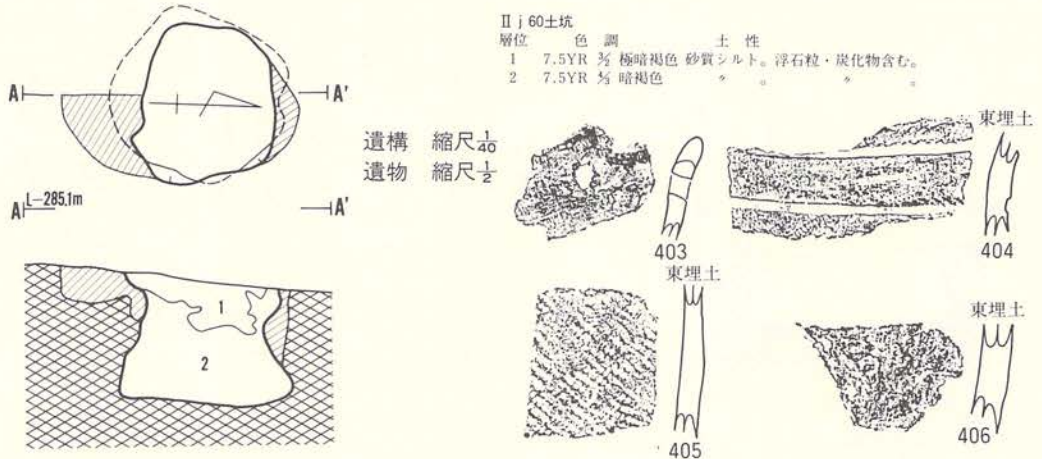
埋土は極暗褐色と暗褐色のシルトで、2層に細分される。全体に浮石粒や炭化物粒が多く混入している。自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

埋土内から7点の土器片が出土している。

土器 (第233図403~406、P L-140)

403は無文土器の口縁部破片で、404は無文の器面に沈線を付す。405・406は縄文だけが付き



れ、粗製土器の破片である。以上から403は第VIII群、404は第VI群、ほかは第IX群に相当する。

〔遺構の時期〕

出土した土器が後期後葉～末葉の特徴をもつことから、本土坑も後期後半に位置づけられるであろう。

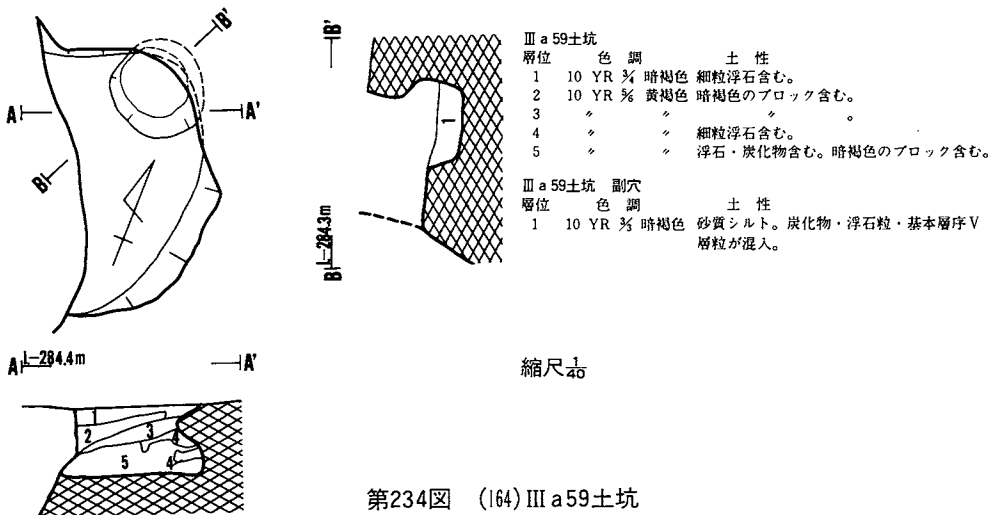
(164) III a 59土坑

〔遺 構〕 (第234図、P L-86)

尾根の中央部から東端に寄ったグリッドIII a 59に位置し、II i 59土坑の東6 mで北西向き緩斜面に立地している。本土坑は南西側でII j 59住居跡とIII a 59陥し穴状遺構と重複しているが、III a 59陥し穴状遺構が本土坑を壊していることは確実であるが、II j 59住居跡との関係は明らかでない。

検出された規模は開口部径1.4m×50cm、底部径1.35m×40cmで、最も深い南東壁で35cmの深さをもつが、平面形は径1.3～1.4m位の円形を示すと推定される。壁は底面に対して50度で内傾し、断面形は底面の上位28cmに頸部をもつフラスコ形であるが、おそらく、頸部上位の壁が流れたことによって頸部状になったものと推定される。底面には凹凸もなくほぼ平坦で、水平状態に近いが、北壁寄りで開口部径52cm×50cm、底部径38cm×34cm、深さ20cmの規模をもつ副穴が検出されている。

埋土は暗褐色と黄褐色のシルトが堆積し、5層に細分されている。全層に浮石、地山粒、炭化物等が混入している。自然堆積による埋没であろう。 (Y)



第234図 (164) III a 59土坑

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

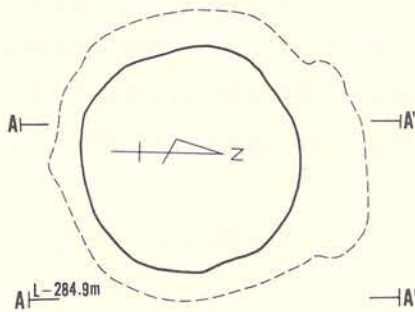
他遺構との重複関係から考えて、縄文時代の土坑であることは明らかであるが、時期の特定はできない。

(165) III a 60土坑

〔遺構〕 (第235図、P L-87)

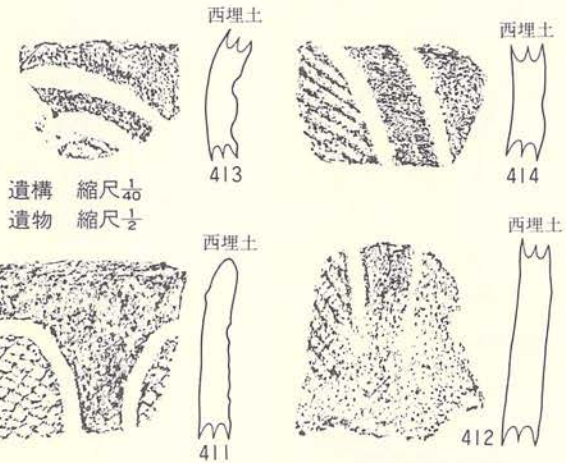
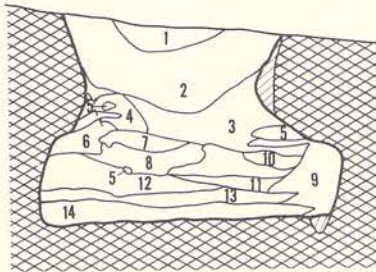
尾根の中央部から東端に近いグリッド II a 60・II b 60にまたがって位置し、III a 59土坑の南3 mで北西向き緩斜面の上位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.2m×1.2m、底部径1.64m×1.55mの規模をもち、最も深い南壁で1.1mの深さをもち円形の土坑であるが、北壁部分は外に張りだすように掘り込んでいる。壁は底面に対して



III a 60土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 黒褐色	シルト。細粒浮石含む。
2	10 YR 5/2 暗褐色	。浮石含む。黒褐色のブロック含む。
3	。。	。細粒浮石含む。黄褐色のブロック含む。
4	。。	。黄褐色のブロック含む。
5	10 YR 5/2 黄褐色	。基本層序V層。
6	。。	。暗褐色の混ざり土。
7	10 YR 5/2 暗褐色	。浮石含む。黄褐色のブロック含む。
8	。。	細粒浮石含む。
9	10 YR 5/2 褐色	シルト。浮石含む。
10	10 YR 5/2 黄褐色	細粒浮石含む。暗褐色のブロック含む。基本層序V層。
11	10 YR 5/2 暗褐色	。黄褐色のブロック含む。
12	。。	。。
13	。。	シルト。細粒浮石含む。黄褐色多く混じる。
14	。。	13層と同じ。



第235図 (165) III a 60土坑

70度で内傾し、断面形は底面の上位70cmに径1mの頸部をもつフラスコ形で、頸部の上位は外傾している。底面には小さい凹凸があるものの、総じてみれば水平状態に近い。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、14層に細分される。5・6・10層は基本層序第V層起源の黄褐色土で、主に壁際に堆積することから壁からの崩落であろう。そのほかは黒色土系のシルトで、全層に浮石や地山粒、炭化物等が混入している。12～14層の堆積に疑問を残すが、概ね自然堆積による埋没であろう。(Y)

〔遺物〕

埋土内から8点の土器片が出土している。

土器 (第235図411～415、P L-140)

411～414は器面に縄文を付した後沈線で区画し、縄文を磨消した土器である。415は縄文のみを付した土器片である。以上から、411・412は第III群2類、413・414は第III群3類、415は第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器が全て中期末葉であることから、本土坑も中期末葉に位置づけられるであろう。

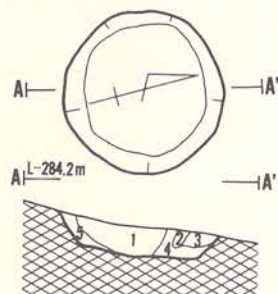
(166) III b 59土坑

〔遺構〕 (第236図、P L-87)

C区遺構群のほぼ東端でグリッドIII b 59に位置し、III a 59土坑の東北東5mで北西向き緩斜面上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径85cm×85cm、底部径70cm×65cmの規模をもち、最も深い南壁で47cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して北側半分が110度で外傾し、断面形は浅い皿形を示している。底面には凹凸もなくほぼ平坦であるが、全体が比高5cmで北側に傾斜している。

埋土は黒褐色・褐色・黄褐色のシルトが堆積し、5層に細分される。全体に浮石や地山粒が



II b 59土坑-1

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 黒褐色	細粒浮石含む。黄色のブロック含む。
2	10 YR 5/2 に近い黄褐色	粘性ある。
3	*	*
4	10 YR 5/2 黄褐色	細粒浮石含む。
5	10 YR 5/2 褐色	極小浮石含む。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第236図 (166) III a 60土坑

混入している。自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の土坑とは推定されるが、時期は特定できない。

(167) III c 60土坑

〔遺構〕 (第237図、P L-87)

C区遺構群の最東端でグリッドIII c 60・61にまたがって位置し、III a 60土坑の東南東6 mで北西向き緩斜面の上位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径90cm×85cm、底部径1 m×85cmの規模をもち、最も深い南壁で47cmの深さをもつ若干歪んだ円形を示している。壁は底面に対して北側が90度～95度で外傾し、南側が90度～85度で内傾しており、本来の断面形はフラスコ形であったと推定される。底面には凹凸もなくほぼ平坦であるが、西側が比高5 cmで高くなっている。 (Y)

〔遺物〕

埋土内から8点の土器片が出土している。

土器 (第237図434～436)

434は縄文だけが付された土器片で、他の2点は無文土器である。434は第IX群、435・436は第VIII群に相当する。

石器

出土していない。



第237図 (167) III c 60土坑

〔遺構の時期〕

434は中期的であるが、435・436は後期後半頃の特徴をもっている。以上から本土坑も後期後半頃と推定される。

〈D 区〉

(168) I h 67土坑

〔遺 構〕 (第238図、P L—88)

D区土坑群の中では北西端のグリッド I h 67に位置し、I i 67土坑の東3.5m で西向き緩斜面の中位で、北側の沢の左岸崖縁に立地している。他遺構との重複はない。

開口部径1.05m×1.02m、底部径78cm×74cmの規模をもち、最も深い東壁で24cmの深さをもつ開口部が不整円形、底部が楕円形の土坑である。壁は底面に対して150度で外傾し、断面形は浅い皿状を示す。底面には小さな凹凸があって不規則で、さらに北西に若干傾斜している。

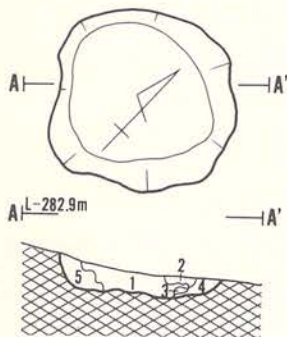
埋土は暗褐色・褐色の砂質シルトが堆積し、5層に細分される。全体に浮石が混入する。土層に乱れがみられることから、人為的に埋め戻された可能性が強い。 (Ki)

〔遺 物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状が不規則であるとともに、土層にも乱れがあり、新しい耕作時にできた土坑の可能性が強い。



I h 67土坑			
層位	色	調	土 性
1	7.5YR	4/6	暗褐色 軽石含む。
2	10 YR	4/6	褐色 浮石含む。
3	10 YR	4/6	暗褐色 白色浮石含む。
4	10 YR	4/6	褐色 浮石少量含む。
5	7.5YR	4/6	白色浮石含む。

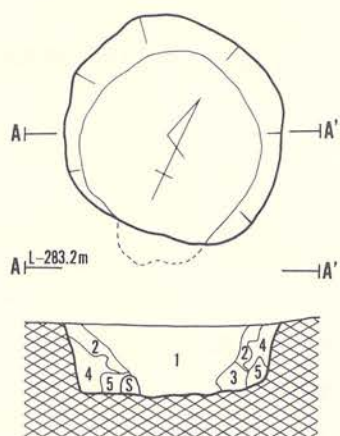
縮尺 $\frac{1}{40}$

第238図 (168) I h 67土坑

(169) I h 69土坑

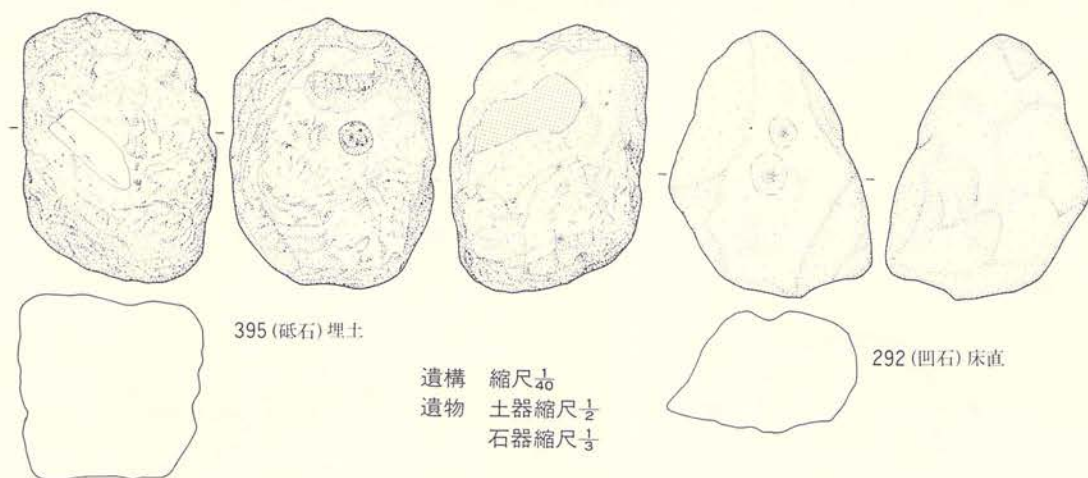
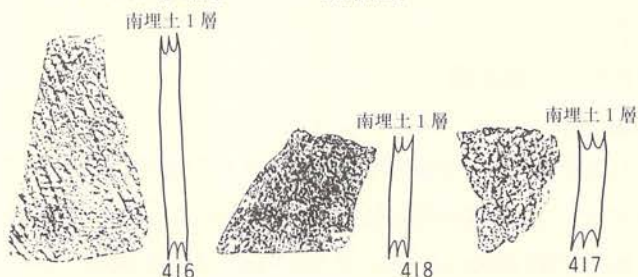
〔遺 構〕 (第239、P L—88)

D区土坑群の南西端でグリッド I h 69・70にまたがって位置し、I h 67土坑の西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。



I h 69土坑

層位	色調	土性
1	7.5YR 7/5 暗褐色	黄褐色浮石・炭化物・焼土粒含む。褐色土ブロック含む。
2	7.5YR 7/5 *	*
3	7.5YR 7/5 明褐色	*
4	10 YR 7/5 褐色	*
5	7.5YR 7/5 暗褐色	炭化物含む。褐色土ブロック含む。
6	7.5YR 7/5 明褐色	焼土粒含む。



第239図 (139) I h 69土坑

開口部径1.27m×1.2m、底部径1.15m×95cmの規模をもち、最も深い東壁で50cmの深さをもつやや歪んだ円形の土坑である。壁は底面に対して100度外傾し、断面形はバケツ形である。底面には若干凹凸があり、南側に浅い凹みをもつ。

埋土は暗褐色・褐色・明褐色等の砂質シルトが堆積し、6層に細分される。1・2層の暗褐色土が大半を占め、地山起源の3・6層が底面付近に堆積する。全体に浮石と炭化物が僅かに混入し、軟らかくしまりが無い。人為的に埋め戻された可能性が強い。(Ki)

〔遺物〕

埋土内から9点の土器片と、石器2点が出土している。

土器 (第239図416~418、P L-140)

416は原体L R縦回転による単節の斜行縄文を付す土器で、ほかは無文土器の破片である。以上から416は第IX群、417・418は第VIII群に属する。

石器 (第239図292・395、P L-172・178)

凹み石1点(292)、砥石1点(395)が出土している。292は長さ20.6cm、幅15.1cm、厚さ8.7cm、重さ345gの大きさをもつ亜角礫を使用した凹み石である。395は砥石面と凹み面をもつもので、長さ20.2cm、幅14.8cm、厚さ14.7cm、重さ622gの大きさをもつ亜角礫を使用している。石材は2点とも奥羽山地新第三系中新統産の両輝石安山岩である。

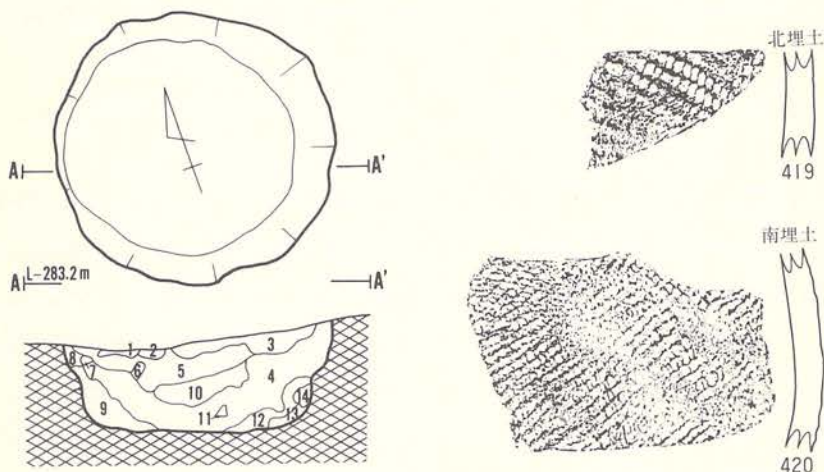
〔遺構の時期〕

出土した土器が後期的な特徴をもっていることから、本土坑も後期に属するであろう。

(170) I i 67土坑

〔遺構〕 (第240図、P L-88)

D区土坑群のほぼ北端グリッド I i 67・68に位置し、I h 67土坑の東4 mで北側沢の左岸崖



I i 67土坑

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 暗褐色	粘りなし。
2	7.5YR 5/6 明褐色	暗褐色混じる。
3	10 YR 5/6 褐色	極細粒浮石含む。
4	10 YR 5/6 暗褐色	炭化物含む。
5	7.5YR 5/6 *	炭化物ブロック状に含む。
6	10 YR 5/6 褐色	焼土少量含む。
7	10 YR 5/6 *	浮石混入する。
8	7.5YR 5/6 *	極細粒浮石含む。
9	10 YR 5/6 *	浮石・炭化物含む。黒褐色土ブロック状に含む。
10	* *	焼土。極細粒浮石含む。
11	7.5YR 5/6 *	極細粒浮石含む。
12	10 YR 5/6 *	"
13	* *	"
14	7.5YR 5/6 *	" 炭化物含む。

遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

第240図 (140) I i 67土坑

縁で西向きの緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.5m×1.4m、底部径1.25m×1.15mの規模をもち、最も深い東壁で50cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して110度で外傾し、断面形はバケツ形を示している。底面には凹凸もなくほぼ平坦であるが、壁際が若干高くなっている。

埋土は暗褐色・褐色・明褐色等の砂質シルトが堆積し、14層に細分される。4・5・9層に炭化物が混じり、全体的にややしまりが良く、粘性はない。自然堆積の様相を示している。(Ki)

〔遺物〕

埋土内から2点の土器片が出土している。

土器 (第240図419・420、P L-140)

419・420とも縄文のみを付す粗製土器の破片で、縄文は原体L R (420)、R L (419) 横回転による単節斜行縄文が施されている。2点とも第IX群である。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器が後期的であることから、本土坑も後期に位置づけられるであろう。

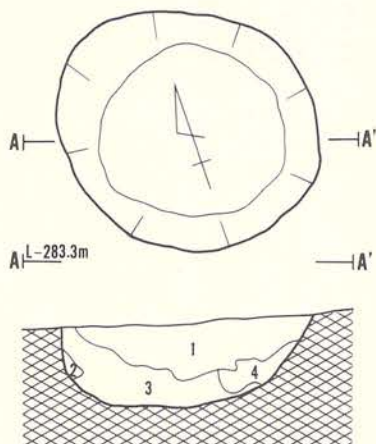
(171) I i 68土坑-1

〔遺構〕 (第241図、P L-89)

D区土坑群が最も密集するグリッド I i 68・I j 68にまたがって位置し、I i 67土坑の南東1mで北側沢の左岸崖縁の西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.45m×1.3m、底部径1m×90cmの規模をもち、最も深い東壁で45cmの深さをもつ楕円形気味の土坑である。壁は底面に対して110度～120度で外傾し、断面形はバケツ形に近い。

底面にはほとんど凹凸もなく平坦であるが、壁際が若干高くなって壁とは丸味をもって接続する。



層位	色調	土性
1	10 YR 8/2 黒褐色	浮石・炭化物含む。
2	7.5 YR 8/2 褐色	暗褐色土含む。
3	10 YR 8/2 暗褐色	少量の浮石含む。
4	※	※

縮尺 1/40

第241図 (171) I i 68土坑-1

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色の砂質シルトが堆積し、4層に細分される。全体的に浮石が混入するとともに、1層には炭化物も含まれる。自然堆積による埋没であろう。(Ki)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状・埋土の状況から縄文時代の土坑と考えられるが、時期は特定できない。

(172) I i 68土坑-2

〔遺構〕 (第242図、P L-89)

D区土坑群が密集するグリッド I i 68に位置し、I i 68土坑-1の西2.5mで北側沢の左岸崖縁の西向き緩斜面に立地している。南東壁の一部が I i 68土坑-4の北西壁と接しているが、本土坑の方が新しい。

開口部径1.3m×1.2m、底部径98cm×95cmの規模をもち、最も深い東壁で40cmの深さをもつ若干歪んだ円形の土坑である。壁は底面に対して120度で外傾し、断面形は浅いバケツ形を示している。底面には幾分凹凸があるものの、総じて平坦で水平状態に近い。

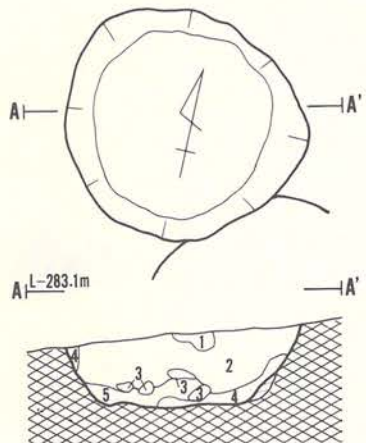
埋土は褐色・黄褐色の砂質シルトが堆積し、5層に細分される。2層の褐色シルトが埋土の大部分を占め、浮石や炭化物が混じる。全体的にみても多少の差こそあれ浮石が混入する。人為的に埋め戻された土坑であろう。(Ki)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状・埋土の状況から考えて縄文時代の土坑と考えられるが、時期は特定できない。



I i 68土坑-2

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 褐色	シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。
2	10 YR 5/6 褐色	シルト。
3	10 YR 5/6 黄褐色	黄褐色浮石含む。
4	10 YR 5/6 褐色	砂質シルト。
5	10 YR 5/6 褐色	シルト。

縮尺 1/40

第242図 (172) I i 68土坑-2

(173) I i 68土坑-3

〔遺構〕 (第243図、P L-89)

D区土坑群が密集するグリッド I i 68に位置し、I i 68土坑-2の南西に隣接する北側沢の左岸崖縁の西向き緩斜面に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.5m×1.5m、底部径1.17m×1.05mの規模をもち、最も深い東壁で30cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して120度～130度で外傾し、断面形は皿状を示している。底面にはほとんど凹凸もなく平坦で水平状態に近い。

埋土は暗褐色・褐色・黄褐色等の砂質シルトが堆積し、3層に細分される。全体的に浮石、炭化物が混入し、下位ほどしまりがある。1層はやや軟らかく炭化物の混入が多い。自然堆積による埋没であろう。 (Ki)

〔遺物〕

埋土内から10点の土器片が出土している。

土器 (第243図421～423、P L-140)

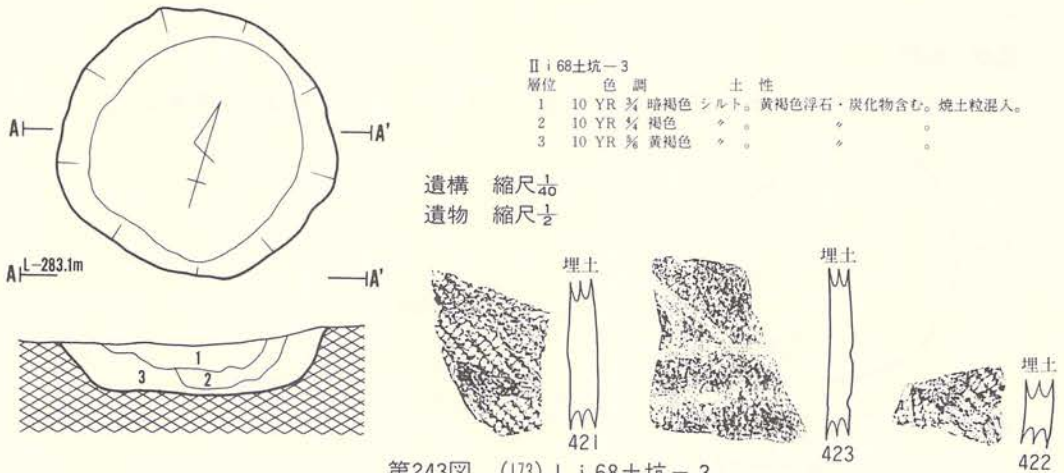
421・422は原体R L横回転による単節斜行縄文をもつ。423は無文の器面に沈線による文様をもつ。以上から423は第IV群4類、ほかは第IX群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器から考えて、後期前葉頃の土坑と推定される。

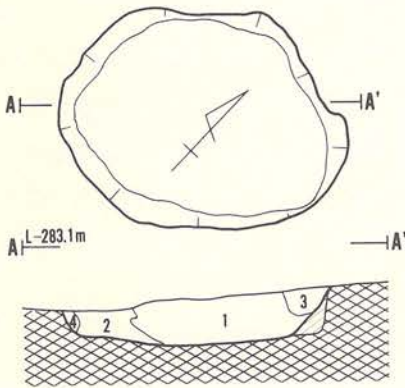


(174) I i 68土坑-4

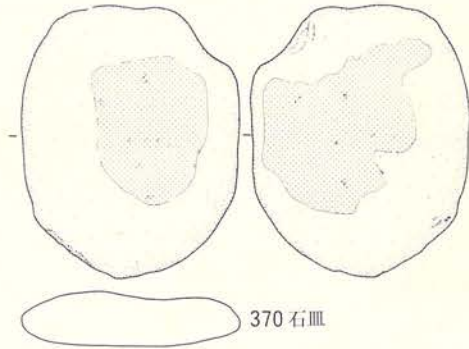
[遺構] (第244図、PL-90)

D区土坑群の密集するグリッド I i 68に位置し、II i 68土坑-3の東50cmで北側沢の左岸崖縁の西向き緩斜面に立地している。I i 68土坑-2の南東壁と重複するが、本土坑の方が古い。

開口部径1.55m×1.15m、底部径1.38m×1mの規模をもち、最も深い東壁で25cmの深さをもつ北東-南西方向に長軸がある楕円形の土坑である。壁は底面に対して北東側が100度、南西側が140度外傾し、断面形は浅い皿状を示している。底面には小さい凹凸はないが北東側が比高4cm位で低くなって浅い窪み状を示し、壁とは若干丸味をもって接続している。

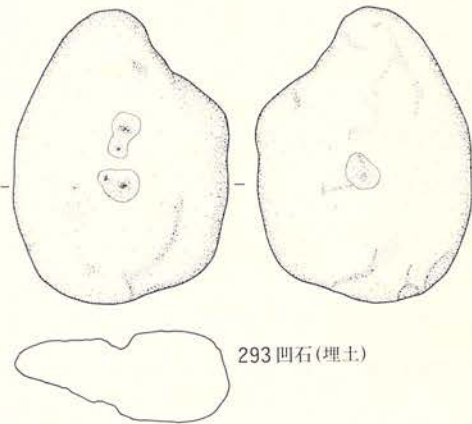
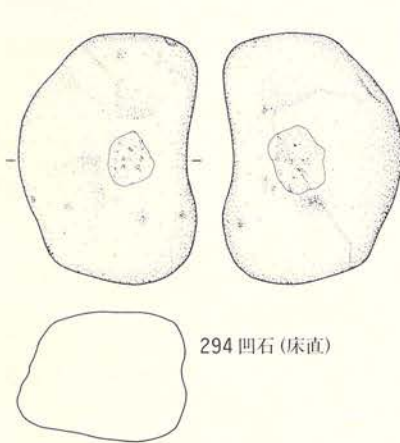


遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
 遺物 370 縮尺 $\frac{1}{8}$
 293・294 縮尺 $\frac{1}{3}$



II i 68土坑-4

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 褐色	砂質土。褐色浮石・炭化物含む。基本層序V層。
2	7.5YR 5/6 暗褐色	炭化物混入する。
3	7.5YR 5/6 黒褐色	褐色土ブロック状に混じる。
4	7.5YR 5/6 褐色	基本層序V層。



第244図 (174) I i 68土坑-4

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色の砂質シルトが堆積し、4層に細分される。1層は基本層序第V層起源の土が多く混入する褐色土で、炭化物が僅か含まれる。2・3層にも炭化物が混入する。おそらく、人為的に埋め戻された土坑であろう。(Ki)

〔遺物〕

底面直上から2点、埋土内から1点の石器が出土している。

土器

出土していない。

石器 (第244図293・294・370、PL-171・172・176)

底面直上からは凹み石(294)と石皿(370)で、埋土内からは凹み石(293)が出土した。293・294とも奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩の両面を凹み石としたものである。大きさは293が391g、294が560gである。370は長さ21.3cm、幅17.2cm、厚さ3.8cm、重さ2.35kgの大きさをもつ扁平な円礫の両面に使用面をもつ石皿で、石材は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から縄文時代の土坑と考えられるが、時期の特定はできない。

(175) I i 69土坑

〔遺構〕 (第245図、PL-90)

D区土坑群が密集するグリッドI i 69に位置し、I i 68土坑-4の南2mで西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.8m×1.75m、底部径1.55m×1.55mの規模をもち、最も深い東壁で40cmの深さをもつ若干歪んだ円形を示す土坑である。壁は底面に対して90度～110度で外傾し、断面形は浅い皿状である。底面に小凹凸はないが、中央部が比高10cmで低く壁寄りが次第に高くなっている。

埋土は黒色・黒褐色・褐色・明褐色を示す砂質シルトが堆積し、8層に細分される。全体に炭化物と浮石を含み、やや軟らかい。人為的に埋め戻された土坑であろう。(Ki)

〔遺物〕

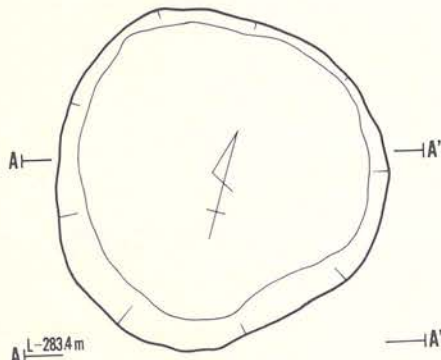
埋土内から土器片が2点と石器が1点出土している。

土器 (第245図424・425、PL-140)

2点とも縄文のみを付した粗製土器の破片である。縄文には原体RL縦回転(425)とLR縦・斜回転(424)による単節縄文がある。ともに第IX群に属する。

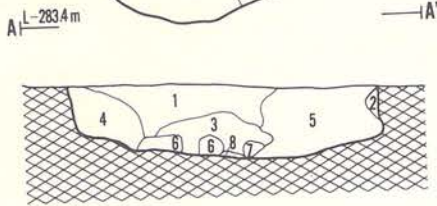
石器 (第245図152、PL-164)

152は切削器である。頂部を打点とする三角形気味の剝片を素材とし、その下縁に裏面からの

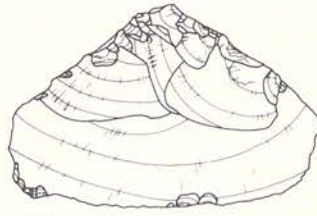
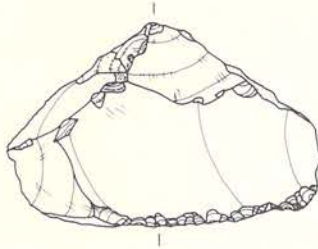
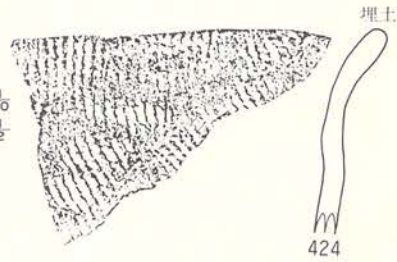


II i 69土坑

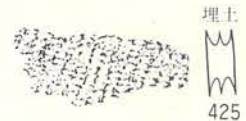
層位	色調	土性
1	5 YR 2/5 極暗赤褐色	炭化物少量含む。浮石・焼土が混入する。
2	7.5YR 3/5 明褐色	焼土少量含む。
3	7.5YR 2/5 黒色	浮石混入する。
4	7.5YR 3/5 褐色	炭化物・明赤褐色浮石含む。
5	7.5YR 2/5 黒褐色	※
6	7.5YR 3/5 暗褐色	※
7	10 YR 3/5 黄褐色	※
8	10 YR 5/5 明黄褐色	※



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



I 52 (切削器)埋土



第245図 (175) I i 69土坑

片面剝離調整で刃部を作り出している。側縁の上部にも若干剝離をもつが、掴み部の調整に伴うものであろう。石材は奥羽山地中新統新第三系産の珪質細粒凝灰岩である。

〔遺構の時期〕

出土した土器の内424の器形は後期中葉頃の器形に近いことから、本土坑も後期中葉頃に位置づけられるであろう。

(176) I i 70土坑 (旧 I j 70土坑-1)

〔遺構〕 (第246図、P L-90)

D区土坑群の中では南端のグリッド I i 70・I j 70にまたがって位置し、I i 69土坑の南5mで西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.25m×1.15m、底部径1.05m×95cmの規模をもち、最も深い東壁で15cmの深さをもつやや歪んだ円形の土坑である。壁は底面に対して130度外傾し、断面形は浅い皿状を示してい

る。底面には凹凸もほとんどなく、平坦で水平状態に近い。

埋土は黒褐色を示す砂質シルトの単層である。全体にしまりがなく、炭化物が混入する。自然堆積で埋没した土坑であろう。 (Ki)

〔遺物〕

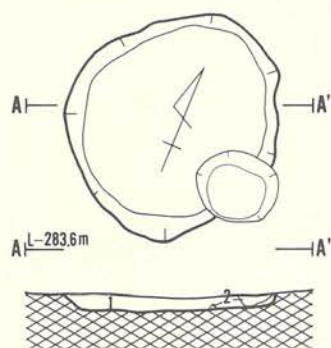
埋土内から6点の土器片が出土しているが、小破片が多く拓影図の作成が不能であった。

土器 (第246図426、P L-140)

426は口縁端部に口唇と並行する原体側面押圧による原体圧痕文をもつ口縁部破片で、ほかに文様はない。第IX群5類に相当する。

石器

出土していない。



〔遺構の時期〕

出土した土器は後期初葉に属することから、本土坑も後期前葉頃であろう。

I i 70土坑
層位 色調 土性
1 10 YR 7/2 黒褐色 シルト。炭化物混入。黄褐色浮石散在する。

遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



第246図 (176) I i 70土坑

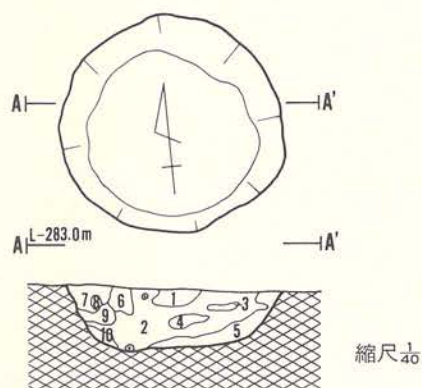
(177) I j 67土坑

〔遺構〕 (第247図、P L-91)

D区土坑群の北端部グリッド I j 67・68にまたがって位置し、I i 67土坑の東3mで北側沢の崖縁の西向き斜面に立地している。

開口部径1.15m×1.15m、底部径90cm×90cmの規模をもち、最も深い東壁で37cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して120度で外傾し、断面形は皿形である。底面には凹凸もなく平坦で水平状態に近いものの、壁際が若干高くなり壁とは丸味をもって接続する。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色等の砂質シルトが堆積し、10層に細分される。全体的に細かい浮石が混入し、しまり・粘性ともに弱い。9層には炭化物が混入している。土層を観察すると、全体的に乱れがみられ、人為的に埋め戻された土坑の可能性が高い。 (Ki)



I j 67土坑

層位	色	調	土性
1	5 YR	ㄥ	黒褐色 細粒浮石含む。
2	7.5YR	ㄥ	褐色 * 軽石含む。
3	7.5YR	ㄥ	暗褐色 浮石含む。
4	10 YR	ㄥ	* 軽石含む。
5	10 YR	ㄥ	黄褐色 浮石含む。
6	7.5YR	ㄥ	暗褐色 細粒浮石含む。
7	10 YR	ㄥ	褐色 浮石含む。
8	7.5YR	ㄥ	黒褐色 細粒浮石含む。
9	10 YR	ㄥ	褐色 細かい炭化物・浮石含む。
10	10 YR	ㄥ	黄褐色 浮石含む。

第247図 (177) I j 67土坑

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から考えて、縄文時代の土坑とは思いますが、時期の特定はできない。

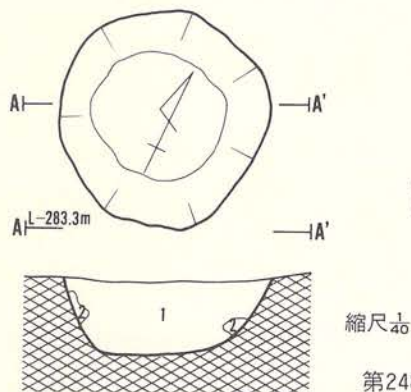
(178) I j 68土坑

〔遺構〕 (第248図、P L-94)

D区土坑群の密集するグリッド I j 68に位置し、I i 68土坑-1の南2.5mで西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.13m×1.1m、底部径70cm×65cmの規模をもち、最も深い東壁で45cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して120度で外傾し、断面形は浅いバケツ形を示している。底面にはほとんど凹凸もなく平坦ではあるが、中央部が低く壁寄りが次第に高くなり、壁とは丸味をもって接続している。

埋土は暗褐色・褐色の砂質シルトで2層に細分されるが、1層の暗褐色シルトが大半を占めている。2層は壁の崩落によるものであろう。全体的に黄褐色の浮石が混じり、ややしまっている。自然堆積で埋没した土坑であろう。(Ki)



II j 68土坑

層位	色	調	土性
1	10 YR	ㄥ	暗褐色シルト。黄褐色浮石を全体に含む。褐色土のブロック含む。
2	10 YR	ㄥ	褐色 * 炭化物・浮石を含む。基本層序V層。

第248図 (178) I j 68土坑

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から判断して、縄文時代の土坑とは思いますが時期の特定はできない。

(179) I j 69土坑

〔遺構〕 (第249図、P L-91)

D区土坑群の南東寄りグリッド I j 69と II a 69にまたがって位置し、I j 68土坑の南東5 mで西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.2m×1.1m、底部径98cm×88cmの規模をもち、最も深い東壁で15cmの深さをもつやや歪んだ円形の土坑である。壁は底面に対して120度位外傾し、断面形は浅い皿状を示している。底面にはほとんど凹凸はないが、西壁寄りが比高3 cm位で低く、壁寄りほど次第に高くなって壁とは丸味をもって接続している。

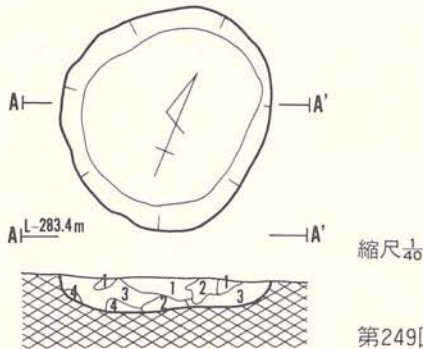
埋土は褐色・明褐色を示すシルトが堆積し、4層に細分される。全層に浮石、1・3層には炭化物が混入し、全体的にややしまっている。人為的に埋め戻された土坑であろう。(Ki)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状・埋土の状況からみて縄文時代の土坑とは思いますが、時期は特定できない。



I j 69土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 褐色	シルト。黄褐色浮石含む。
2	7.5YR 5/6 *	*。褐色浮石含む。
3	7.5YR 5/6 *	*。褐色浮石・炭化物含む。
4	7.5YR 5/6 明褐色	*。明褐色浮石含む。

第249図 (179) I j 69土坑

(180) I j 70土坑 (旧 I i 70土坑-2)

〔遺構〕 (第250図、P L-91)

D区土坑群の南端部に近いグリッド I j 70に位置し、I i 70土坑の南東1 mで西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.15m×1.1m、底部径1.03m×93cmの規模をもち、最も深い東壁で15cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して120度位で外傾し、断面形は浅い皿形を示している。底面には若干凹凸があり、全体が北西に向かって緩く傾斜している。

埋土は黒褐色のシルトの単層で、しまりがなく、炭化物が混入している。自然堆積で埋没した土坑であろう。(Ki)

〔遺物〕

埋土内から6点の土器片が出土している。

土器 (第250図427~429、P L-140)

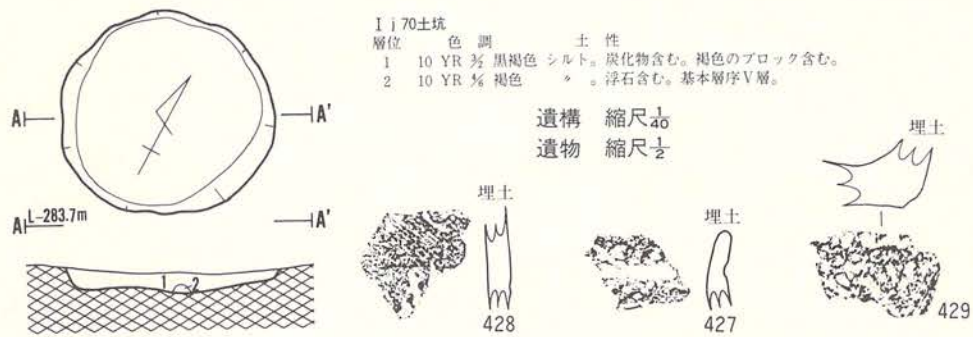
427は口縁部下端に原体の側面押圧による原体圧痕文をもち、その下位には縄文を付す。428は無文土器の破片である。429は底面に網代痕をもつ底部の小破片である。427は第IX群5類、428は第VIII群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

427・428は後期に属し、特に427は初葉頃に相当することから、本土坑も前葉頃の土坑であろう。



第250図 (180) I j 70土坑

(181) II a 68土坑 (旧II b 68土坑)

〔遺構〕 (第251図、P L-92)

D区土坑群では東寄りのグリッドII a 68に位置し、I j 67土坑の東南東6mで北側沢の左岸崖縁の西向き緩斜面に立地している。本土坑はII a 68住居跡の床面を壊して掘り込まれ、さらにII a 68陥し穴状遺構によって壊されている。

II a 68 陥し穴状遺構によって両側が壊されているため、全体的なことは不明であるが、検出された規模は開口部径95cm×45cm、底部径60cm×30cmで、II a 68 住居跡の床面から70cmの深さがあり、残存する北半部の状況から考えると、本来は開口部径95cm、底部径60cm、深さ70cm位の規模をもつ円形の土坑と推定される。壁は底面に対して東部はほぼ直立しているが、西部は底面付近が大きく抉られており、断面形はフラスコ形と推定される。底面にはほとんど凹凸はないが、中央部に開口部径20cm×18cm、底部径8cm×5cm、深さ12cmの規模をもつ副穴が検出されている。

埋土は褐色・にぶい黄橙色のシルトが堆積し、4層に細分される。全体に基本層序第V～VI層を起源とする地山が混入し、特に4層ではそれが主体をなしている。浮石が多く混じり、しまりが良い。人為的に埋め戻された可能性が強い。(Ki)

〔遺物〕

埋土内から土器片が14点出土している。

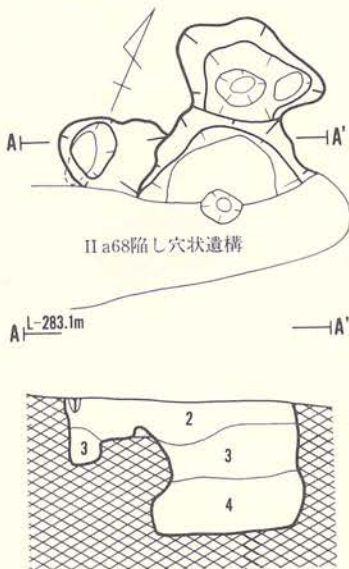
土器 (第251図430～435、P L-140)

6点とも縄文だけが付された粗製土器の破片である。第IX群に属する。

石器

出土していない。

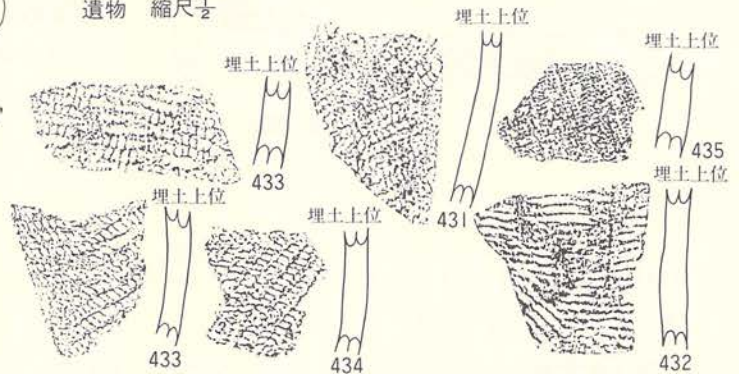
〔遺構の時期〕



II a 68 土坑

層位	色	調	土性
1	10 YR 5/6	黄褐色	シルト。基本層序V層。
2	10 YR 5/6	褐色	※。黄褐色浮石含む。
3	10 YR 5/6	※	※。基本層序VI層。黄橙色ブロック含む。
4	10 YR 5/6	にぶい黄橙色	※。黄褐色浮石含む。

遺構 縮尺 $\frac{1}{20}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



第251図 (181) II a 68 土坑

出土した土器は後期的な特徴をもっているが、本土坑が壊している II a 68 住居跡は後期初葉であることから考えると、本土坑から出土した土器の中にも住居跡に伴うものが転落している可能性がある。重複関係とも合わせて考えると、後期前～中葉頃と推定される。

(182) II a 70 土坑

〔遺構〕 (第252図、P L—92)

D区土坑群の南東端に近いグリッド II a 69・70にまたがって位置し、I j 69土坑の南東3 mで西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.1m×97cm、底部径1 m×85cmの規模をもち、最も深い東壁で15cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して110度～120度で外傾し、断面形は浅い皿形を示す。底面には若干凹凸があるものの、ほぼ平坦で水平状態に近い。

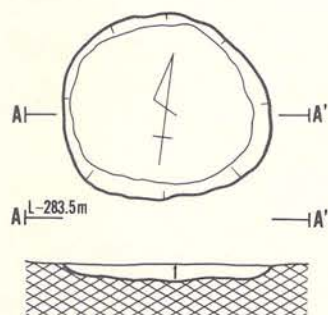
埋土は褐色の砂質シルトの単層である。全体に黄褐色浮石や炭化物が混入し、ややしまっている。自然堆積で埋没した土坑であろう。 (Ki)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状・埋土の状況から縄文時代の土坑とは思いますが、時期の特定はできない。



II a 70土坑
 層位 色 調 土 性
 1 10 YR 7/3 褐色 黄褐色浮石・明褐色浮石含む。黄褐色土ブロック含む。

第252図 (182) II a 70土坑

(183) II a 75土坑

〔遺構〕 (第253図、P L—92)

D区の遺構では南端のグリッド I j 75・II a 75にまたがって位置し、II a 70土坑の23m南で丘陵部裾野の西向き緩斜面上位に立地している。他の遺構との重複はないが、南東側が畑地の周囲の排水溝によって掘りとられているため、一部不明である。

開口部径1.1m×1m、底部径95cm×85cmの規模をもち、最も深い北東壁で10cm位の深さをもつ若干歪んだ隅丸方形を示す土坑である。壁は底面に対して120度～130度で外傾し、断面形は浅

い皿形である。底面には若干凹凸があり、南東部が比高5cmで低くなる。また、南東側の底面に、径40cm×20cm、厚さ2.5cmの不整楕円形の広がりをもつ現地性焼土が検出されている。焼成は非常に良く、赤褐色を示し硬くしまっている。

埋土は黒褐色・暗褐色・淡黄色を示す砂質シルトと火山灰で構成され、5層に細分される。3層は淡黄色の十和田a降下火山灰で断続して塊状に混入する。1・2・4層には白色の浮石粒が混入している。自然堆積によって埋没した土坑であろう。(Ki)

〔遺物〕

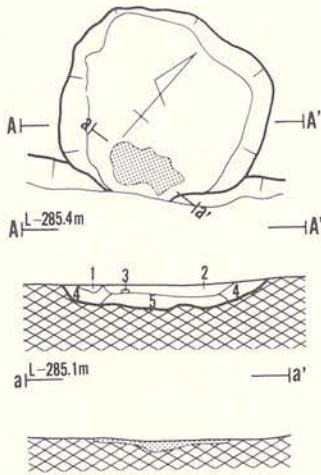
埋土内から3点の土器片が出土している。

土器 (第253図436・437、P L-141)

436は0段多条の原体LR横回転による単節斜行縄文を付す。437は無文土器である。以上から、436は第IX群、437は第VIII群に相当する。

石器

出土していない。



〔遺構の時期〕

縄文土器が出土しているものの、十和田a降下火山灰の堆積等から考えて、縄文時代の土坑ではなく、古代かそれ以降に属する可能性が高い。

層位	色調	土性
1	10 YR 灰 暗褐色	火山灰・白色浮石含む。
2	7.5YR 灰 *	炭化物含む。
3	2.5YR 灰 淡黄色	火山灰帯状に堆積する。
4	10 YR 灰 黒褐色	白色浮石含む。
5	7.5YR 灰 *	炭化物・焼土粒・白色浮石含む。

遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$

遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

第253図 (183) II a 75土坑

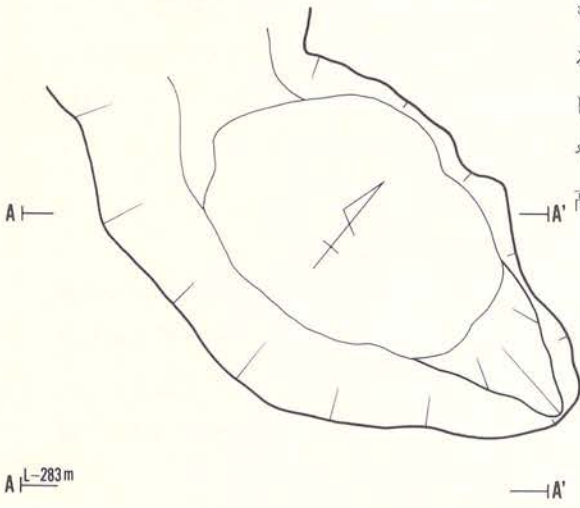
(184) II c 68土坑-1

〔遺構〕 (第254図、P L-93)

D区の遺構群の東端グリッドII c 68・69にまたがって位置し、II a 68土坑の東7mで北側沢の左岸崖縁に立地している。西側でII c 68土坑-2と重複しているが、本土坑の方が新しい。

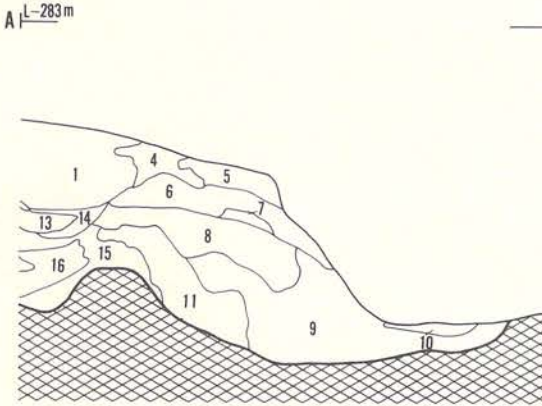
開口部径約2.7m×1.7m、底部径1.7m×1.2mの規模をもち、最も深い南東壁で80cmの深さを

もつほぼ東一西に長軸のある楕円形の土坑である。壁は底面に対して90度~120度の角度で外傾し、断面形は皿形に近い形を示す。底面にはやや凹凸がみられ、中央部が低く壁寄りが次第に高くなり、壁とは丸味をもって接続している。

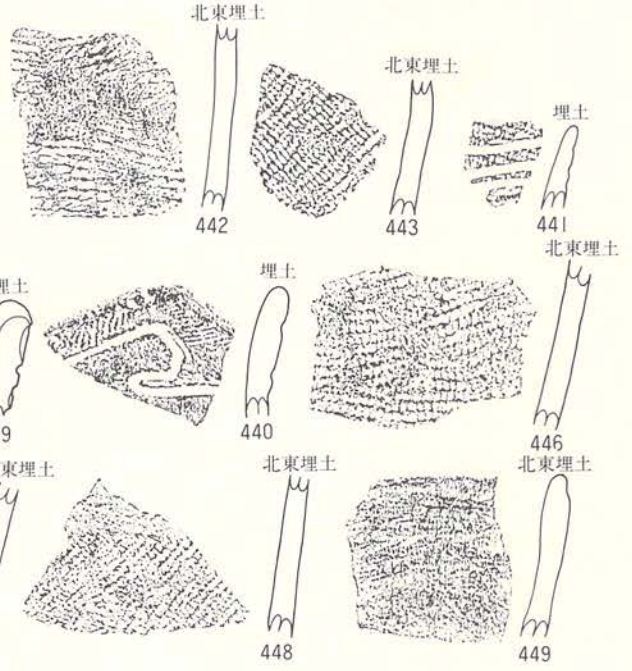


II c 68土坑-1

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 褐色	浮石含む。
4	7.5YR 5/6 黒褐色	〃
5	10 YR 5/6 暗褐色	〃
6	7.5YR 5/6 〃	〃 径5cmの石を含む。
7	7.5YR 5/6 〃	〃 黒褐色土が混入。
8	7.5YR 5/6 極暗褐色	〃 褐色土含む。
9	7.5YR 5/6 黒褐色	〃 固い黒色土がブロック状に含む。
10	10 YR 5/6 褐色	火山灰。灰白色の火山灰ブロック状に含む。
11	10 YR 5/6 暗褐色	浮石含む。中央部に褐色土含む。
13	7.5YR 5/6 明褐色	炭化物・浮石含む。下位に暗褐色土含む。
14	7.5YR 5/6 暗褐色	浮石含む。上位に褐色土を含む。
15	7.5YR 5/6 褐色	〃 明褐色土・暗褐色土がブロック状に混入。
16	7.5YR 5/6 暗褐色	黒褐色土がブロック状に混入。



遺構 縮尺 1/20
遺物 縮尺 1/2



第254図 (184) II c 68土坑-1

埋土は、土層図の8層～11層が該当し、黒褐色・極暗褐色・暗褐色の火山灰や砂質シルトが堆積している。10層は十和田a降下火山灰層で、ほかは全体的に褐色浮石が混入する砂質シルト(8・9・11層)である。8・9・11層は人為的に埋め戻された可能性が高い。(Ki)

〔遺物〕

埋土内から59点の土器片が出土している。

土器 (第254図438～450、PL-141)

438・440・441は縄文の付された器面を沈線で区画し、一部の縄文を磨消した土器である。439は沈線と刻目で加飾した口縁部破片である。447は頸部に原体側面押圧による原体圧痕文をもつ土器片であり、449～450は無文土器である。ほかは器面に縄文だけを付した粗製土器である。以上から、438・440・441は第IV群3類、439は第VI群8類、447は第IX群5類、449・450は第VIII群、ほかは第IX群である。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は縄文後期のものであるが、埋土内に十和田a降下火山灰が堆積していることは、古代に属する土坑である可能性が高い。

(185) II c 68土坑-2

〔遺構〕 (第255図、PL-93)

D区遺構群の東端グリッドII c 68に位置し、II a 68土坑の東6mで沢の左岸崖縁に立地している。東壁がII c 68土坑-1と重複しているが、本土坑の方が古い。

検出された規模は、開口部径2m×1.5m、底部径90cm×90cmで、最も深い南壁で80cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して135度で外傾し、断面形はボール形に近い。底面はほぼ平坦であるが、南に軽く傾斜し壁とは丸味をもって接続している。

埋土は黒色・黒褐色・暗褐色のシルト質土で構成され、4層に細分される。2層は基本層序第V層起源の土である。全体に浮石が混入し、1層には炭化物が含まれる。おそらく、自然堆積で埋没した土坑であろう。

〔遺物〕

埋土内から53点の土器片が出土している。

土器 (第255図451～459、PL-141)

451～453は縄文を付した器面を沈線で区画し、一部の縄文を磨消する土器である。454～456は縄文だけを施した土器で、457は口縁部を無文にして頸部に原体の側面押圧による原体圧痕文

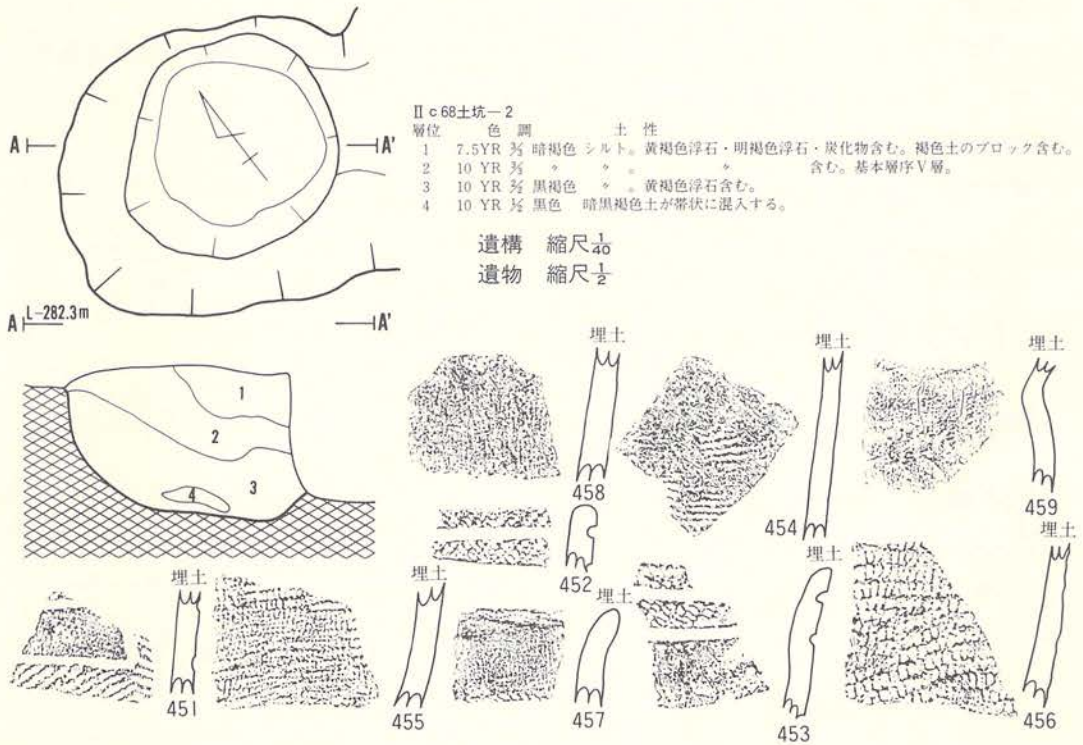
を付している。458・459は無文である。以上から、451～453は第IV群3類、454～456は第IX群、457は第IX群5類、458・459は第VIII群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期初葉のものだけであることと、埋土内に十和田a降下火山灰が混入していないことから、後期初葉に位置づけられるであろう。



第255図 (185) II c 68土坑-2

(186) II c 69土坑

〔遺構〕 (第256図、P L-93)

D区遺構群の東端グリッドII c 69・70にまたがって位置し、II c 68土坑-2の南6mで西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1m×90cm、底部径83cm×67cmの規模で、最も深い東壁で20cmの深さをもつ円形の土坑である。壁は底面に対して西側140度、東側110度で外傾し、断面形は浅い皿形を示してい

る。底面には小さな凹凸があるものの、全体的にはほぼ平坦で北が比高7cmで低くなっている。

埋土は暗褐色の砂質シルトの単層で、全体的に炭化物が多く混入ししまりが良い。また、底面直上には大型の礫が2点あった。人為的に埋め戻された可能性が高い。(Ki)

〔遺物〕

石器が1点出土している。

土器

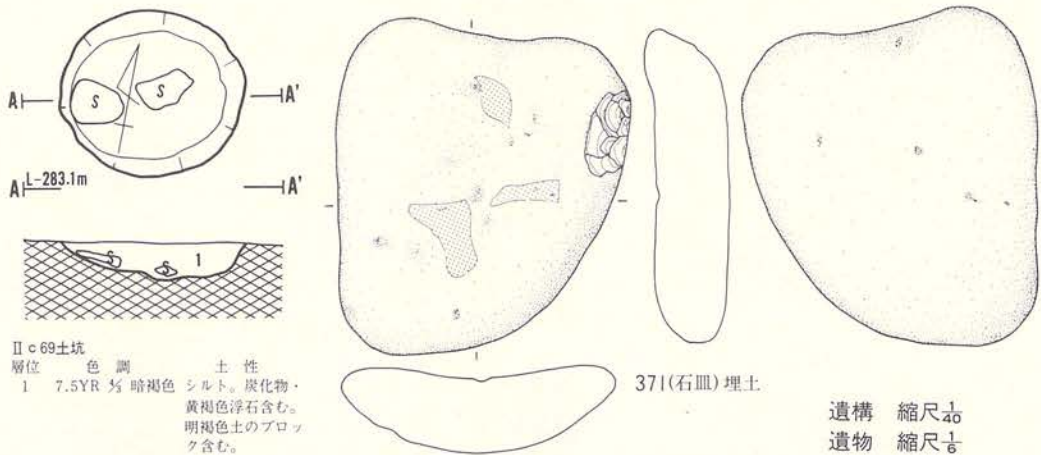
出土していない。

石器 (第256図371、P L-176)

長径27.1cm、短径23.5cm、厚さ5.9cm、重さ5.5kgの扁平でやや湾曲した円礫の凹んだ片面を石皿としている。石材は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

縄文時代の土坑と思われるが、時期は特定できない。



第256図 (186) II c 69土坑

4. 陥し穴状遺構

本遺跡から検出された陥し穴状遺構は46基である。しかし、それらの全てがある部分に密集しているのではなく、各区に分散している。各区毎の内訳をみると、A区-2基、B区-20基、C区-9基、D区-15基となる。また、検出された46基には平面形が長方形、溝状形、幅広溝状形、楕円形、その他の5種類に分けられ、各区ともそれらが混在している。

〈A 区〉

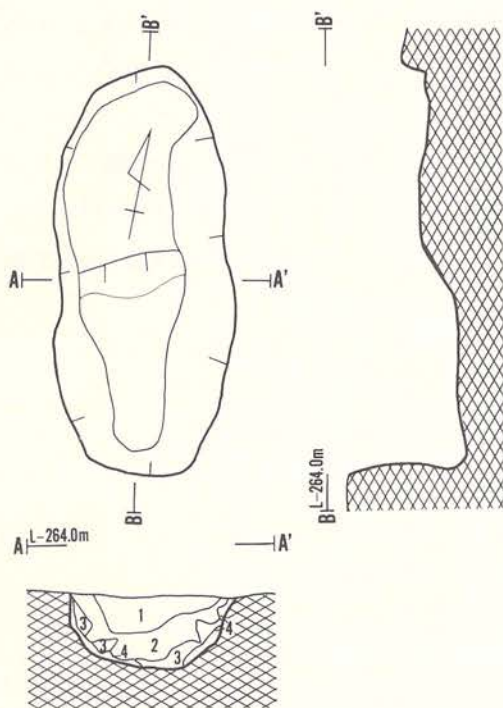
(1) III d 9 陥し穴状遺構

〔遺 構〕 (第257図、P L—96)

A区の北部でグリッドIII d 9・10に位置し、III e 8 陥し穴状遺構の南々西7 mで北東部沢の崖縁から16m離れた西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.18m×96cm、底部径1.96m×60cmの規模をもち、深さが斜面下位11cm、斜面上位60cmである。平面形は長軸がN-20°-Wにある長楕円形を示し、分類に従えばその他の形状に該当する。短軸の壁は底部寄り弱く、中間から上位は強く内湾して立上り、断面形は半円状に近い。長軸の壁は若干外湾気味であるがほぼ直立に近い。底面にはやや凹凸があり、南半が最大20cm弱低くなり、それぞれの面の中で弱く起伏している。内部に伴う施設は検出されていない。

埋土は黒色・黒褐色・褐色のシルトが堆積し、4層で構成されている。全体に浮石が混入するとともに、2層には中央部に黒色土の塊がある。良くしまつて硬く、粘性はない。自然堆積による埋没と思われる。(Na)



〔遺 物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

III d 9 陥し穴状遺構

層位	色 調	土 性
1	7.5YR 弱 黒色	浮石含む。
2	7.5YR 弱 黒褐色	。黒色土のブロック含む。
3	10 YR 弱	。
4	10 YR 弱 褐色	壁の土と同じ。

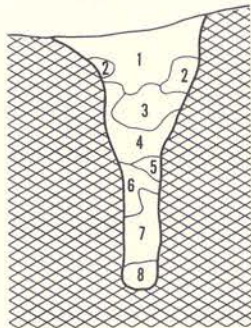
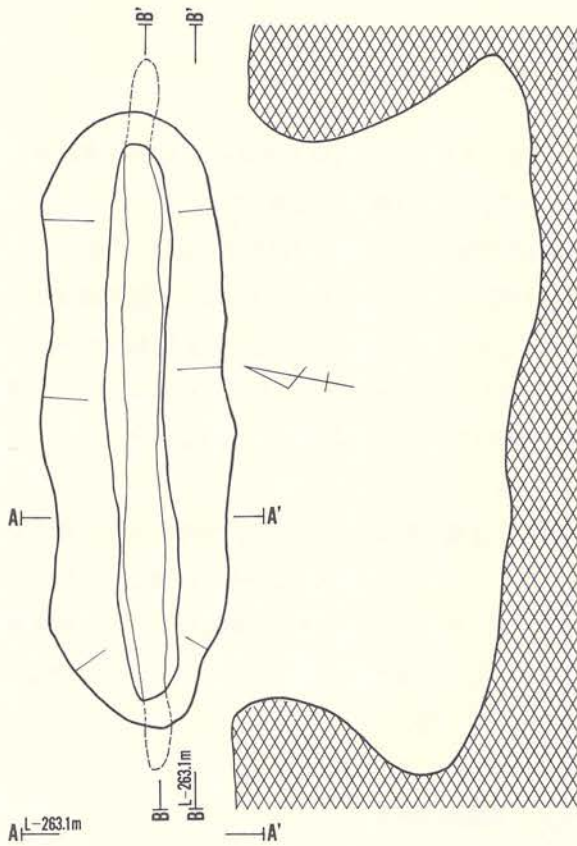
縮尺 $\frac{1}{40}$

第257図 (1) III d 9 陥し穴状遺構

(2) III e 8 陥し穴状遺構

〔遺 構〕 (第258図、P L—97)

A区の北部グリッドIII e 8に位置し、III d 9 陥し穴状遺構の北々東7 mで北東側の左岸崖縁



縮尺 $\frac{1}{40}$

II c 8 陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	10 YR 劣 黒色	浮石少量含む。
2	7.5YR 劣 黒褐色	粘性なし。
3	7.5YR 劣 黒色	浮石少量含む。
4	7.5YR 劣 褐色	。
5	10 YR 劣 暗褐色	細粒浮石含む。
6	10 YR 劣 褐色	砂含む。
7	10 YR 劣 暗褐色	細粒浮石・砂含む。
8	10 YR 劣 黒褐色	細粒浮石含む。

に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径3.24m×1.08m、40cm下位の中段2.95m×30cm、底部径3.76m×20cmの規模をもち、斜面下位1.45m、斜面上位1.35mの深さがある。平面形は開口部が長楕円形、底部は溝状でN-77°-Eに長軸があり、分類では溝状形に相当する。短軸の壁は底面の上位76cmまでほぼ垂直で、その上は開口部まで外傾している。長軸の場合は底面の上位が外方に掘り込まれ、壁が底面に対して斜

第258図 (2)III e 8 陥し穴状遺構

面下位45度、斜面上位60度で内傾し、フラスコ形に近い断面形を示している。底面には起伏があり、中央部が高く壁際が次第に高くなって壁面と接続している。

埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色のシルトや砂が堆積し、8層に細分される。1～5層は黒色土系の浮石混じりのシルトで、6～8層は砂質である。全体に硬くしまり、粘性はない。自然埋没した遺構であろう。(Na)

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

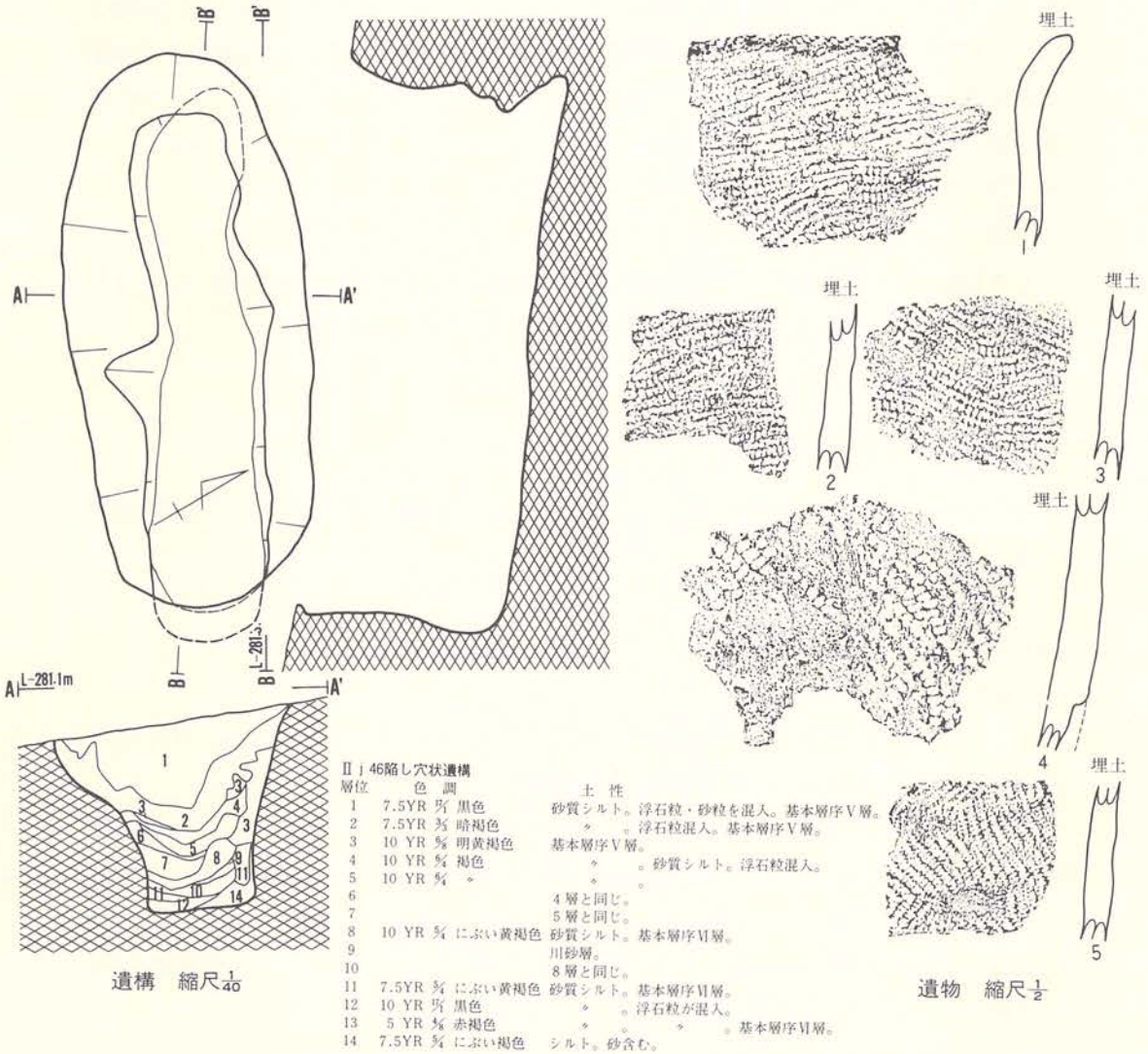
縄文時代の遺構と考えられるが、時期の特定はできない。

< B 区 >

(3) II j 46陥し穴状遺構

[遺構] (第259図、P L-97)

B区中央東寄りの南端グリッドII j 46に位置し、III a 43陥し穴状遺構の南西12mで、南西向



第259図 (3)II j 46陥し穴状遺構

き緩斜面の下位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径 3 m×1.32m、70cm下位の中段2.75m×60cm、底部径3.05m×50cmの規模をもち、斜面下位は1.2m、斜面上位は1.13mの深さがある。平面形は開口部が隅丸長方形気味の長楕円形、底部がやや幅の広い溝状を示しており、分類では長軸がN-76°-Wにある幅広溝状形に相当する。長軸の壁は凹凸があるものの底面に対してほぼ直角、水平に対して83度位を示し、断面形はピーカー形に近い。短軸の場合は底面の上位30cm位まではほぼ垂直であるが、その上位は105度～123度で外傾している。底面には若干起伏がみられ、斜面下位に向って水平に対して8度傾斜している。

埋土は黒色・暗褐色・褐色・明黄褐色等の砂質シルトを主体とし、12層に細分される。1・2層が大半を占め、3層以下は薄層が互層をなす様相を示している。特に下層には壁の崩落と考えられる基本層序第V層を起源とする黄褐色土が互層として多く堆積し、14層はシルトの混じった砂層である。自然堆積で埋没した遺構であろう。(Y)

〔遺物〕

埋土内から34点の土器片が出土している。

土器 (第259図1～5、PL-141)

5点とも縄文のみが施文された粗製土器の破片である。縄文の種類には原体LR(5)とRL(1～4)の単節斜行縄文がある。第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期後半の特徴をもつことから考えて、本遺構も後期後半以降の遺構と推定される。

(4) III a 40陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第260図、PL-97)

頂上部遺構の中央部南端グリッドIII a 40に位置し、III a 43陥し穴状遺構の北16mで南西向き斜面の最上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.15m×62cm、44cm下位の中段2.08m×45cm、底部径2.15m×30cm～40cmの規模をもち、深さは長軸両端とも85cm位である。平面形は開口部・底部とも隅丸長方形気味でやや幅広の長楕円形を示し、形態的には長軸がN-39°-Wにある幅広溝状形に分類される。長軸の壁はほぼ垂直であるが、短軸の壁は底面の上位45cm位までは垂直状態を示し、その上位は93度～108度で外傾している。底面には幾分凹凸があるものの、ほぼ水平状態に近い。

埋土は黒褐色土・暗褐色土・褐色土・黄褐色土等が堆積し、9層に細分される。1・2層の黒褐色土は炭化物を含み「U」字状に堆積している。3層～8層は斜面上位側からの流入を示している。4・6・8層は壁の崩落と推定される地山起源の褐色・黄褐色土で、黒色土系のシルトと互層をなしている。全体に浮石が混入し、さらに9層には炭化物も混じる。埋土は自然堆積の層相を示している。

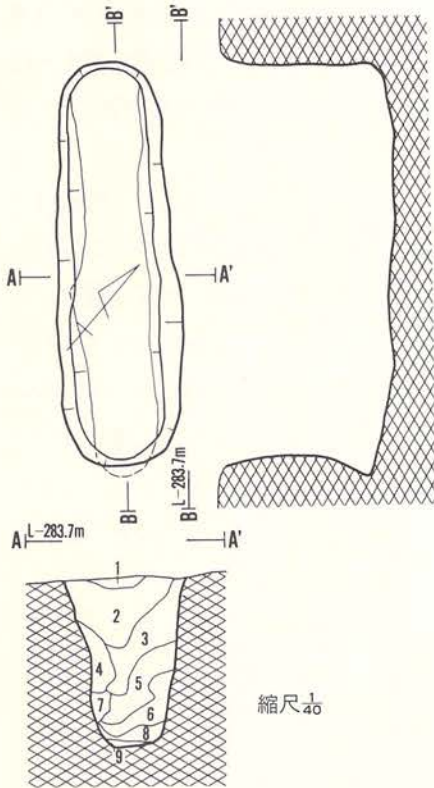
(Mi)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から考えて縄文時代の遺構とは思いますが、時期の特定はできない。



III a 40陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	7.5YR 弱 黒褐色	シルト。炭化物・黄褐色・明褐色浮石含む。
2	7.5YR 弱 *	＊
3	7.5YR 弱 暗褐色	＊
4	10 YR 弱 褐色	＊
5	10 YR 弱 暗褐色	＊ 黄褐色浮石が混入。
6	10 YR 弱 黄褐色	＊ 基本層序VI層。
7	10 YR 弱 褐色	＊ 黄褐色浮石・炭化物少量含む。
8	10 YR 弱 *	＊ 黄褐色浮石含む。
9	7.5YR 弱 黒褐色	＊ 炭化物・黄褐色浮石含む。

縮尺 1/40

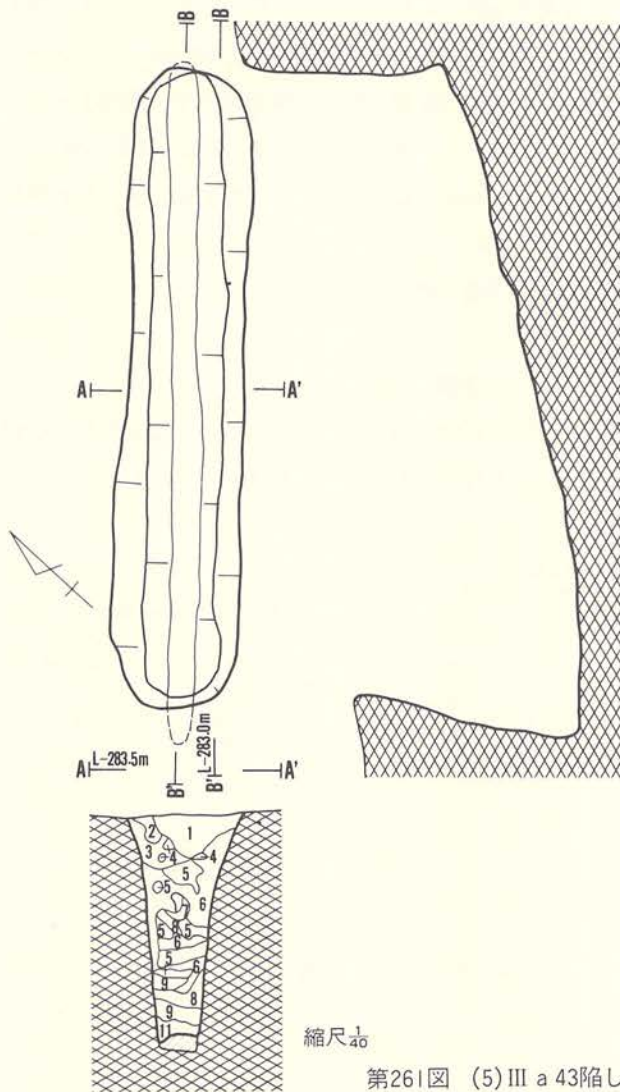
第260図 (4)III a 40陥し穴状遺構

(5) III a 43陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第261図、P L-97)

B区中央南寄りのグリッドIII a 43・III a 44・III b 43にまたがって位置し、III a 40陥し穴状遺構とII j 46陥し穴状遺構のほぼ中間で、南西向き斜面の中位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径3.4cm×60cm～70cm、25cm下位の中段3.34m×40cm、底部径3.6cm×15cmの規模をもち、深さは斜面下位1.15m、斜面上位1.1mである。開口部の平面形は隅丸長方形に近い長楕円形であるが、底部は長軸両端が丸味をもつ細長い溝状を示し、長軸がN-47°-Eにある溝状形に分類される。長軸の壁は、斜面上位側が底面に対して114度、水平に対して92度で軽く外反気味を示し、斜面下位側では底面に対して72度、水平に対して83度で若干内傾している。短軸の



場合は、底面の上位90cmまでは95度外傾し、その上位は112度外傾している。底面には幾分凹凸があり、斜面下位が水平に対して12度傾斜している。

埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色・橙色のシルトが堆積し、11層に細分されている。1～3層はいわゆる黒色土か黒色土に近い土で、浮石粒が混じる。4層以下は黒色土起源の土と地

III a 43陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	7.5YR 弱 黒色	浮石粒混入。
2	7.5YR 弱 黒褐色	〃
3	7.5YR 弱 〃	〃
4	7.5YR 弱 暗褐色	基本層序V層。
5	7.5YR 弱 〃	やや粘性ある。
6	7.5YR 弱 明褐色	基本層序V層。
7	7.5YR 弱 褐色	浮石粒混入。
8	7.5YR 弱 明褐色	基本層序VI層。
9	7.5YR 弱 橙色	〃
10	7.5YR 弱 褐色	汚れた基本層序VI層。
11	7.5YR 弱 極暗褐色	浮石粒混入。

第261図 (5) III a 43陥し穴状遺構

山起源の土との互層が堆積し、浮石粒の混入が多い。しまりや粘性はそれぞれの層によって差があり一様ではない。自然堆積による埋没であろう。 (Y)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土から考えて、縄文時代の遺構と思われるが、時期の特定はできない。

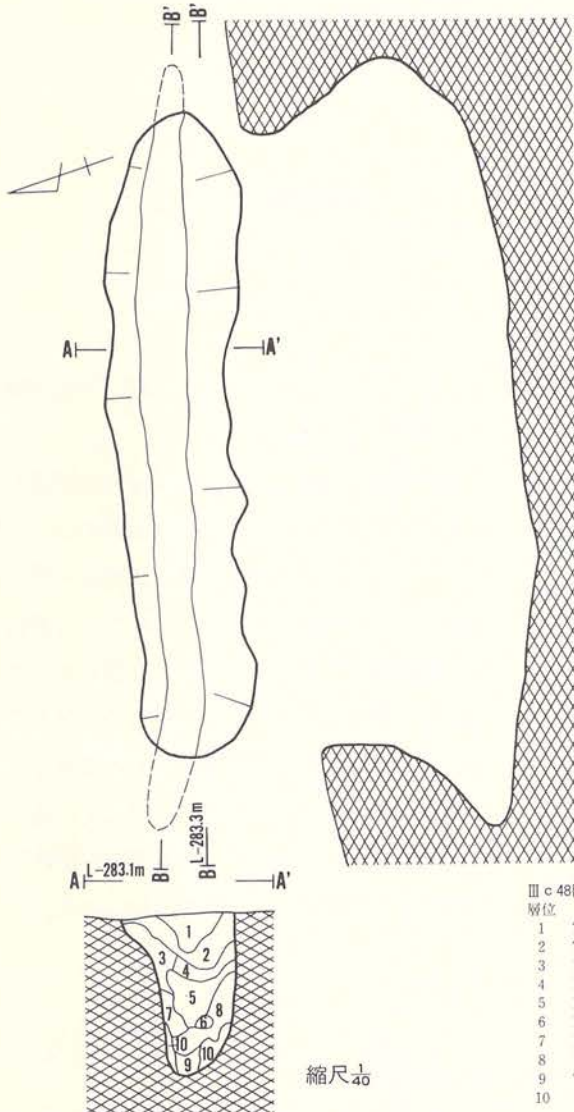
(6) III c 48陥し穴状遺構

[遺 構] (第262図、P L-98)

B区遺構群の南端に近いグリッドIII c 48・49とIII d 48・49にまたがって位置し、II j 46陥し穴状遺構の南東10mで南西向き斜面の下位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径3.4m×60cm～70cm、底部径4.05m×20cm～25cmの規模で、深さは斜面上位1.13m、

斜面下位は1.16mである。平面形は開口部がやや幅の広い溝状、底部は細長い溝状を示し、分類に従えば長軸がN-76°-Wにある細長い溝状形に分類される。長軸の壁は、斜面下位が水平に対して50度、底面に対して40度で内傾し、斜面上位は水平に対して52.5度、底面に対して60度内傾しており、断面形はフラスコ形に近い。短軸の場合は水平に対して95度で外傾し、上部はさらに



層位	色 調	土 性
1	7.5YR 5/1 黒色	シルト。浮石混入。
2	7.5YR 5/1 黒褐色	。浮石・砂混入。
3	10 YR 5/1 褐色	基本層序V層。
4	10 YR 5/1 黒褐色	シルト。炭化物・黄褐色浮石含む。
5	10 YR 5/1 暗褐色	。黄褐色浮石含む。
6	10 YR 5/1 褐色	。。
7	10 YR 5/1 黄褐色	。。
8	10 YR 5/1 褐色	。。
9	7.5YR 5/1 明褐色	。。
10	10 YR 5/1 褐色	。基本層序VI層。

縮尺 1/40

第262図 (6) III c 48陥し穴状遺構

強く外湾する部分もある。底面には起伏があって中央部が低く両端が次第に高くなり、全体が水平に対して斜面下位に向って8度で傾斜している。

埋土は黒色、黒褐色、暗褐色、褐色、明褐色、黄褐色等のシルトや地山起源の土が堆積し、10層に細分される。上半部は黒色土系の土が堆積し、下半部は黒色土起源の土と地山起源の土が交互に堆積し、数回に亘って壁の崩落があったことを示している。全体に浮石が交じり、4層には炭化物も混入している。自然堆積によって埋没した遺構であろう。

〔遺物〕

出土していない。

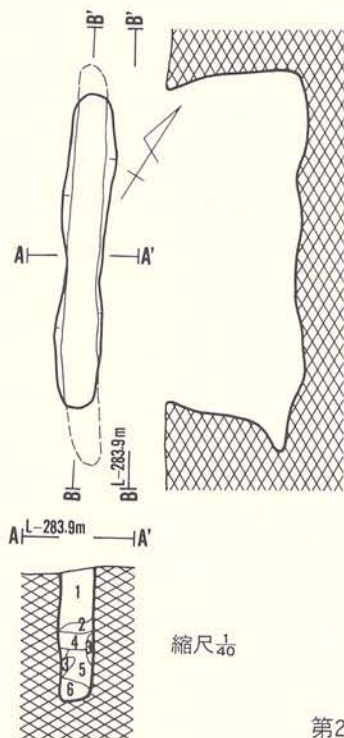
〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から縄文時代の遺構と考えられるが、時期の特定はできない。

(7) III d 43陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第263図、P L-98)

B区南東部遺構群の南西端グリッドIII d 43・44にまたがって位置し、III a 43陥し穴状遺構の東10mで南西向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。



開口部径1.67m×20cm~25cm、底部径2.14m×16cmの規模をもち、深さは北側71cm、南側73cmである。平面形は開口部・底部とも細長い溝状を示し、分類に従えばN-24°-Wに長軸をもつ溝状形である。長軸の壁は底面に対して北側80度、南側78度で内傾し、断面形はフラスコ形である。短軸の場合は両側ともほぼ直立し、短冊形に近い長方形の断面形を示している。底面には起伏があって不規則であるが、総体的にはほぼ水平状態に近い状況を示している。

III d 43陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	10 YR 7/3 暗褐色	シルト。黄褐色・明赤褐色浮石散在する。
2	10 YR 7/3 黄褐色	粘土質シルト。黄褐色浮石少量含む。
3	10 YR 7/3 にふい黄橙色	シルト。黄褐色浮石少量含む。
4	10 YR 7/3 黒褐色	〃
5	10 YR 7/3 にふい黄褐色	粘土質シルト。黄褐色浮石少量含む。
6	10 YR 7/3 黒色	〃

第263図 (7) III d 43陥し穴状遺構

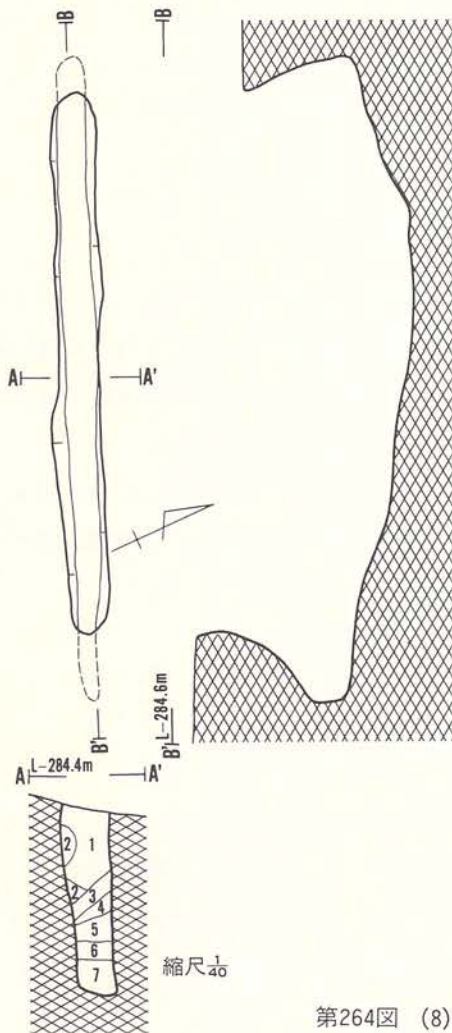
埋土は上位から暗褐色・黄褐色・にぶい黄橙色・にぶい黄褐色・黒褐色等のシルトと壁の崩落と考えられる地山起源の土が堆積し、6層に細分される。中でも、1層の暗褐色土が埋土の上半部を占め、上位に黄褐色土がブロック状に混入している。下半部は黒色土系の土と地山系の土が交互に堆積する様相を示し、壁の崩落があったものであろう。全層に亘って浮石が混入し、しまりや硬さは一様ではない。自然堆積によって埋没した遺構であろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から縄文時代と推定されるが、時期の特定はできない。



(8) III e 43陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第264図、P L-98)

B区南東部遺構群中央のグリッドIII e 43・44とIII f 44にまたがって位置し、III d 43陥し穴状遺構の東5mで南西向き斜面の上位に立地している。III e 43住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

開口部径2.86m×20cm～25cm、底部径3.4m×18cmの規模をもち、深さは西側65cm、東側85cmである。平面形は開口部・底部とも細長い溝状を示し、分類に従えば長軸がN-71°-Wにある溝状形に相当する。長軸の壁は、西側が底面に対して69度、水平に対して72度内傾し、東側は底面に対して53度、水平に対して50度で内傾しており、断面形はフラスコ形である。東壁

III e 43陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 褐色	シルト。明赤褐色・黄褐色浮石多く含む。
2	7.5YR 5/2 明褐色	＊ 黄褐色浮石の細粒含む。
3	7.5YR 5/2 褐色	＊ 黄褐色浮石少量含む。
4	7.5YR 5/2 明褐色	粘土質シルト。黄褐色浮石少量含む。
5	7.5YR 5/2 にぶい黄褐色	＊ 黄褐色の軽石含む。
6	7.5YR 5/2 ＊	＊ 黄褐色浮石・炭化物含む。
7	7.5YR 5/2 黒褐色	＊ 黄褐色浮石少量含む。

第264図 (8) III e 43陥し穴状遺構

は外湾して内傾し、地表寄りには軽く外傾している。底面には大きな起伏があり、長軸両端の底面と比較して最大37cm低くなっており、全体では西側に2度の角度で傾斜している。短軸の壁は底面の上位40cmまでは若干内傾気味であるが、その上位は軽く外傾しており、全体で見ればほぼ直立に近い状況といえよう。

埋土は黒褐色、褐色、明褐色、明黄褐色等のシルトや地山起源の土が堆積し、7層に細分されるが、大部分は褐色土で占められている。3・4層の明褐色土は壁の崩落による地山起源の土で、下位は褐色土との交互堆積が観察されることから、壁の崩落が数回に及んでいるものと推定される。自然堆積による埋没であろう。(Mi)

〔遺物〕

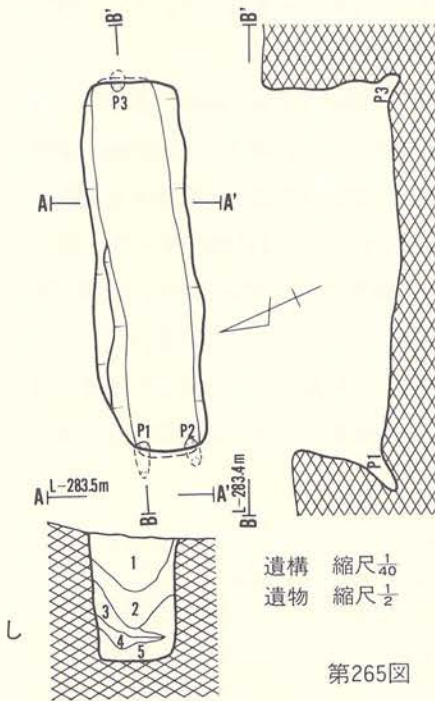
出土していない。

〔遺構の時期〕

形状・埋土の状況から縄文時代の遺構と考えられるが、時期の特定はできない。

(9) III e 53陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第265図、P L—98・109)



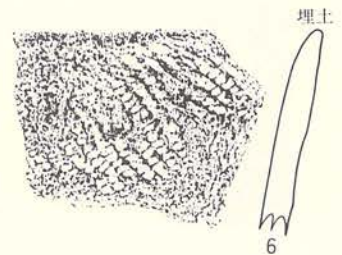
B区の遺構としては最南端のグリッドIII e 53・III f 53にまたがって位置し、III c 48陥し穴状遺構の南東18mで南西向き斜面の下位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径2 m×50 cm、底部径1.97cm×38cmの規模をもち、深さは西側で48cm、東側が66cmで

III e 53陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 褐色	シルト。細粒浮石が混入。基本層序V層。
2	10 YR 5/2 黄褐色	＊。火山灰質。基本層序VI層。
3	10 YR 5/2 黄褐色	＊。＊。基本層序VII層とVIII層。
4	10 YR 5/2 褐色	黒色粒が混入。
5	10 YR 5/2 に近い黄褐色	シルト。浮石粒が混入。

第265図 (9) III e 53陥し穴状遺構



あり、平面形は開口部、底部ともに隅丸で若干歪んだ長方形を示し、分類に従えば長軸がN-60°-Wにある長方形に該当する。西側の壁が底面に対して78度、水平に対して77度内傾し、東壁の場合は底面に対して85度、水平に対して86度で内傾しており、断面形はフラスコ形を示している。短軸の壁は南側・北側とも底面に対して95度位外傾し、ピーカー形に近い断面形である。底面には若干起伏があり、長軸の中央やや東寄りが比高5cm位で最も低く、両端が次第に高くなっているが、全体が1度で西に傾斜している。また、西壁の南北両隅にP₁(径9cm×8cm、深さ7cm)、P₂(径8cm×6cm、深さ8cm)と東壁の中央やや北寄りにP₃(径9cm×8cm、深さ7cm)の副穴が検出されている。いずれも30度～45度の斜位に打ち込まれた杭穴である。

埋土は褐色～黄褐色のシルトと地山起源の土が堆積し、5層に細分される。1・4層が褐色土で、その間層として壁の崩落と考えられる基本層序第V～VI層を起源とする土が堆積し、一部はその両者が混合状態を示している。自然堆積による埋没であろう。(T a)

[遺物]

埋土内から土器片が1点出土している。

土器 (第265図6、P L-141)

器表に原体LR横回転による単節斜行縄文の付された粗製土器の口縁部破片である。第IX群に属する。

石器

出土していない。

[遺構の時期]

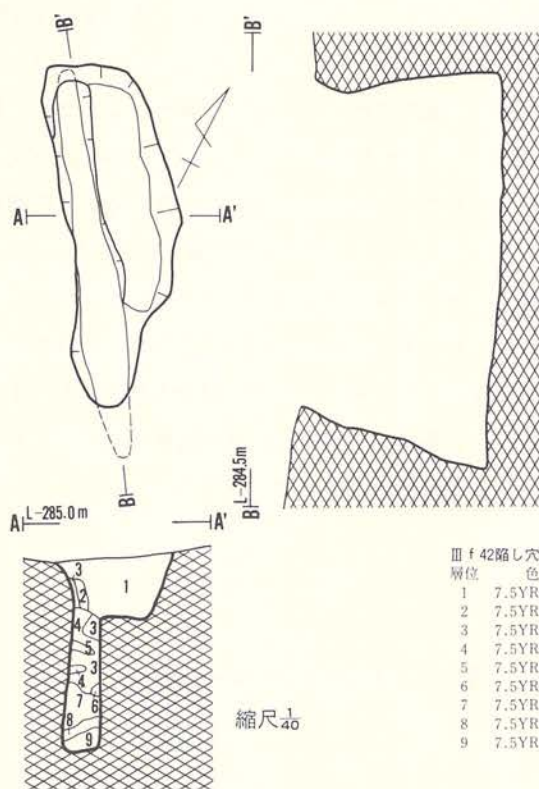
出土した土器から時期を特定するのは困難であるが、縄文時代以降の遺構であろう。

(10) III f 42陥し穴状遺構

[遺構] (第266図、P L-108)

B区南東部遺構群の北端に近いグリッドIII f 42に位置し、III f 43陥し穴状遺構の北4mで南西向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.83m×25cm、底部径2.1m×14cm～22cmの規模をもち、深さは長軸両端とも約1mである。東壁の北端に長さ1.3m、幅40cm、深さ35cmで幅が広がる部分があるが、性格は定かでない。平面形は本来開口部、底部とも細長い溝状を示すと考えられ、長軸がN-35°-Wにある溝状形と分類される。長軸の壁は北壁が底面に対して73度、水平に対して70度、南壁が底面に対して81度、水平に対して83度で内傾し、断面形はフラスコ形である。短軸の壁は両側とも90度～95度で内傾しているが、全体的にみれば細長い長方形を示している。底面には若干起伏があつて長軸中央やや南が比高4cmで最も低く、両端に向って次第に高くなり全体が斜面下位



Ⅲ f 42陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/1 黒色	シルト。赤褐色・黄褐色浮石混入。
2	7.5YR 3/1 極暗褐色	黄褐色浮石混入。
3	7.5YR 3/1 暗褐色	＊
4	7.5YR 3/1 褐色	＊
5	7.5YR 3/1 暗褐色	＊
6	7.5YR 3/1 褐色	＊
7	7.5YR 3/1 橙色	褐色との混土。
8	7.5YR 3/1 明褐色	砂質シルト。
9	7.5YR 3/1 暗褐色	腐植質。

の南に2度で傾斜している。

埋土は黒色、極暗褐色、暗褐色、褐色、明褐色、橙色等のシルトや地山起源の土が堆積し、9層に細分されている。1層は黒色土で2層～6層は黒色土系の褐色土、その下

第266図 (10)Ⅲ f 42陥し穴状遺構

位は7・8層の壁の崩落と考えられる地山起源の土、9層は腐植質と推定される暗褐色土の順で堆積している。自然堆積による埋没であろう。(Y)

〔遺物〕

出土していない。

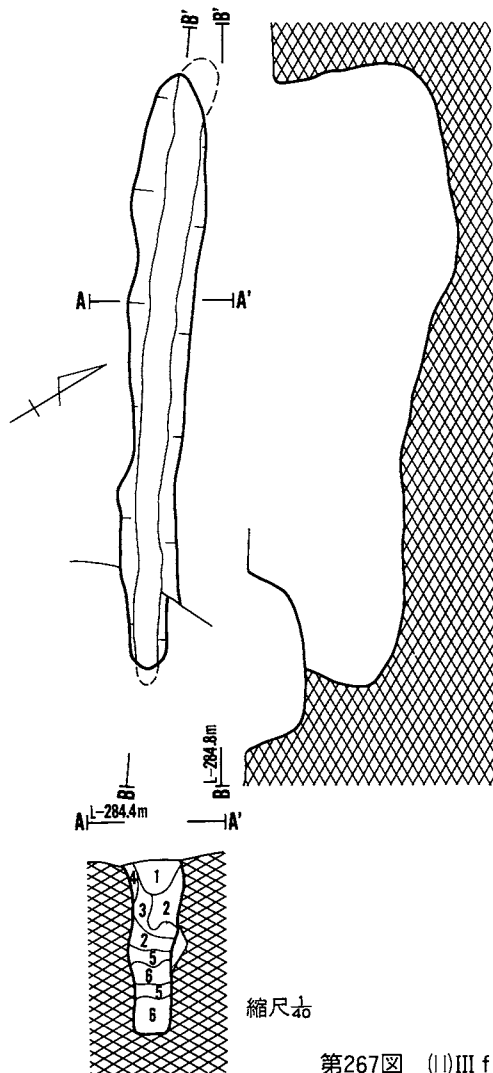
〔遺構の時期〕

形状、埋土の状況から考えて縄文時代の遺構と考えられるが、時期の特定はできない。

(11) Ⅲ f 43陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第267図、P L-99)

B区南東部遺構群の密集するグリッドⅢ f 43とⅢ g 43にまたがって位置し、Ⅲ e 43陥し穴状遺構の北東2.5mで南西向き斜面の上位に立地している。北西端がⅢ e 43土坑-1、南東端がⅢ f 43土坑と重複しているが、いずれも本遺構が壊されている。



第267図 (II) III f 43陥し穴状遺跡

開口部径3.15m×25cm～30cm、底部径3.34m×32cmの規模をもち、深さは北西端77cm、南東端71cmである。平面形は細長い溝状を示し、分類ではN-57°-Wに長軸をもつ溝状形に該当する。長軸の北西壁は底面に対して76度、水平に対して79度内傾し、南東壁は底面に対して70度、水平に対して67度で内傾しており、断面形はフラスコ形である。短軸の両壁には若干凹凸があるものの軽く外反し、断面形は短柵形に近い長方形である。底面には大きな起伏があり、北西側半分がほかの部分より30cm位低く、全体が北西側に4度で傾斜している。

埋土は黒褐色、暗褐色、褐色、黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、6層に細分される。1層～4層までは黒色土起源の暗褐色や褐色のシルトで、その下位は黒色土の6層と壁の崩落と考えられる地山起源の黄褐色土である5層との互層堆積を示している。おそらく自然堆積による埋没であろう。(M i)

III f 43陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	10 YR 7/2 暗褐色	シルト。極小浮石含む。
2	10 YR 6/2 褐色	。浮石含む。
3	10 YR 5/2～6/2 褐色	。黒色土と極小浮石含む。
4	10 YR 4/2 褐色	。
5	10 YR 5/2 黄褐色	。極小浮石含む。褐色土混入。
6	10 YR 3/2 黒色	。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

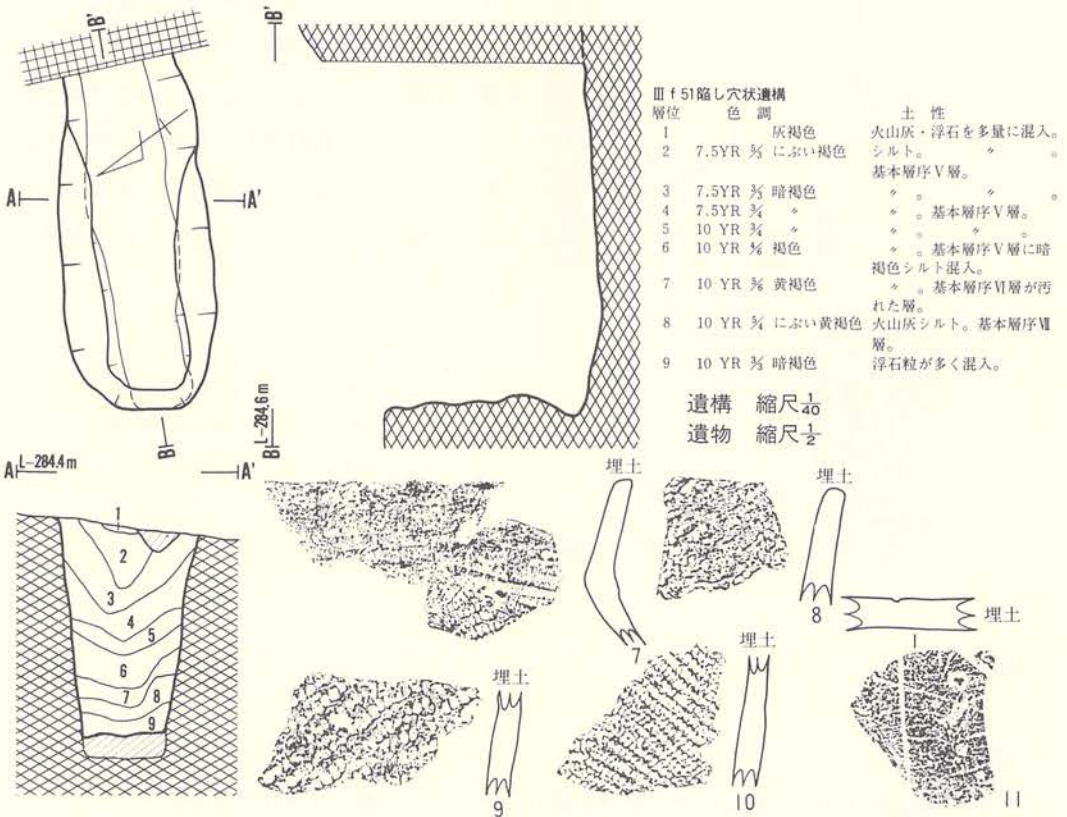
形状、埋土の状況から縄文時代の遺構と考えられるが、時期の特定はできない。

(12) III f 51陥し穴状遺構

〔遺 構〕 (第268図、P L-99)

B区遺構群の南端グリッドIII f 51・52にまたがって位置し、III f 52陥し穴状遺構の北東2.6m、III g 50陥し穴状遺構の南々西3mで南西向き斜面の中位に立地している。他の遺構との重複はないが、南東端が調査区域外に延びているためその部分は調査しなかった。

検出された規模は開口部径1.82m×80cm、底部径1.7m×35cm～40cmで、深さは南東端1.23m、北西端1.19mである。未調査の南東端は定かでないが、平面形は隅が若干丸味をもった長方形を示し、分類に従えば長軸がN-55°-Wにある長方形に該当する。長軸の北西壁は底部の上位30cmまで67度で内傾するが、その上位は97度で外傾している。南東壁の様相は不明であるが、断面形はビーカー形を示す可能性が大きい。短軸の壁は両側とも95度～100度で外傾する左右対称形を示し、ビーカー形に近い断面形をもつ。底面には起伏があり、北西端付近がほかより10cm強低くなっているが、全体的には水平に近い。副穴は検出されていないが、底面に一部堀り



第268図 (12)III f 51陥し穴状遺構

すぎがあるため、本来はあった可能性が大きい。

埋土は暗褐色・褐色・にぶい褐色・黄褐色等のシルトや火山灰、地山起源の土等が堆積し、9層に細分される。1層は灰褐色をした粗粒の十和田a降下火山灰層で、2層～5層は黒色土系の暗褐色シルトが堆積し、6層～8層は壁の崩落と考えられる基本層序第V層～VI層の土、9層は暗褐色のシルトである。全体がレンズ状の典型的な堆積状況を示していることから、自然堆積による埋没であろう。(Ta)

〔遺物〕

埋土内から18点の土器片が出土している。

土器 (第268図7～11、PL-141)

7は頸部～口縁部を無文にした甕で、頸部から下位には原体LR横回転の縄文をもつ。8～10は縄文のみを付した粗製土器の破片で、縄文にはLR横(9)、LR縦(10)、RL縦(8)がある。11は木葉痕をもつ底部の小破片である。7～10は第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器はいずれも後期後半頃の特徴をもっていることから、本土坑は後期後半頃かそれ以降に属すると推定される。

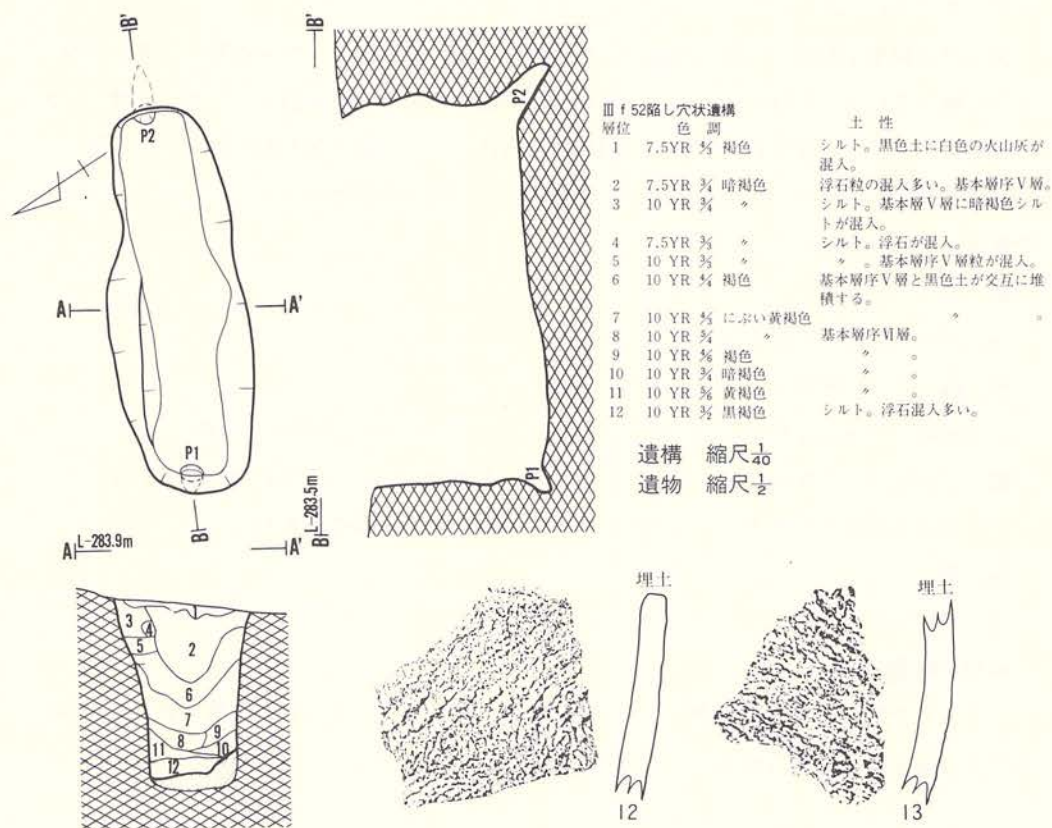
(13) III f 52陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第269図、PL-99・109)

B区遺構群の最南端に近いグリッドIII f 52に位置し、III e 53陥し穴状遺構の北東4m、III f 51陥し穴状遺構の南西3.5mで南西向き斜面上に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.05m×60cm～70cm、底部径1.95m×35cm～45cmの規模をもち、深さは長軸の北西端90cm、南東端94cmである。平面形は壁に若干凹凸があるものの、開口部、底面とも隅が丸味をもつ長方形を示し、分類に従えば長軸がN-63°-Wにある長方形に属する。長軸の北西壁は底面に対して99度、水平に対して102度外傾し、南東壁では底面に対して88度、水平に対して88度で内傾し、断面形は平行四辺形に近い形状を示している。短軸の両壁は96度～101度で外傾し、ピーカー形に近い形をもつ。底面には幾分起伏をもち、北西端寄りが5cm低く、全体が北西へ3.5度で傾斜している。また長軸の北西壁中央の底面にP₁(径12cm×10cm、深さ8cm)、南東壁の北端部にP₂(径15cm×12cm、深さ24cm)の副穴が検出されている。いずれも40度～45度の斜位で打ち込まれた杭穴である。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色・にぶい黄褐色のシルトや降下火山灰、地山起源の土



第269図 (13) III f 52陥し穴状遺構

等が堆積し、12層に堆積している。1層は十和田a降下水山灰であり、2層～6層までは黒色土を起源とする土で、その下位は壁の崩落と考えられる。基本層序第V層～VI層と黒色土起源の暗褐色・黒褐色の土との互層を示している。自然堆積による埋没を示すものであろう。

〔遺物〕 (第269図12・13、P L-141)

埋土内から7点の土器片が出土している。

土器

2点とも器面に縄文のみが付された粗製土器で、縄文はLR横(12)と縦(13)回転の単節斜行縄文である。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器はいずれも後期に属することから考えると、後期以降に属する遺構であろう。

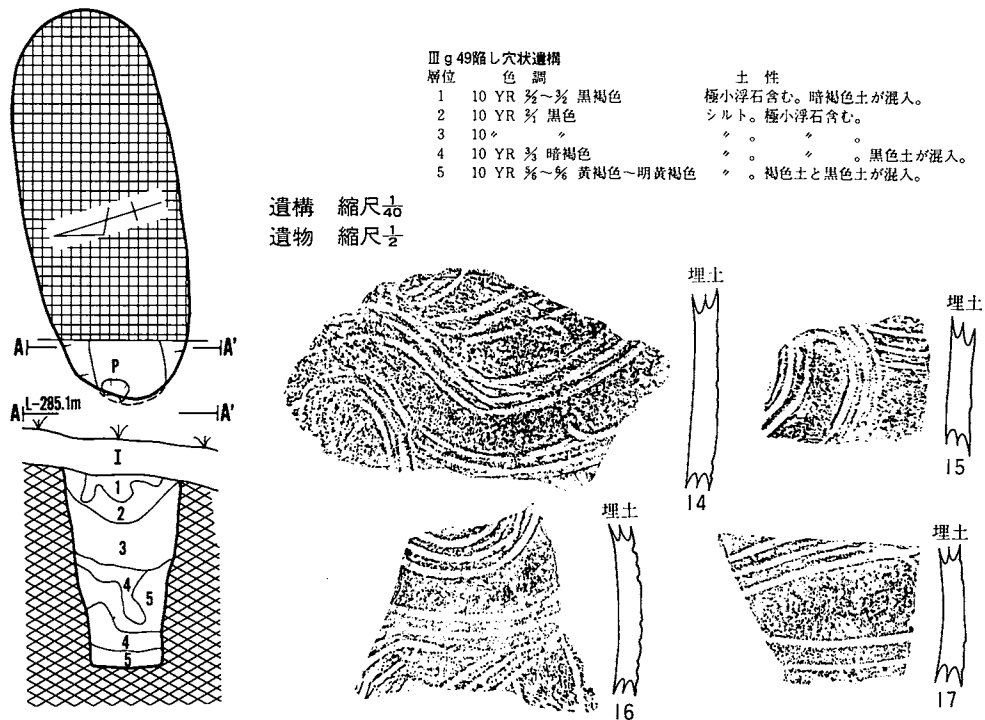
(14) III g 49陥し穴状遺構 (旧III g 51陥し穴状遺構)

[遺 構] (第270図、P L-99)

B区遺構群の南東でグリッドIII g 49・50、III h 49・50にまたがって位置し、III g 50陥し穴状遺構の北々東3.5mで、南西向き斜面の中位に立地している。重複する遺構はないが、本遺構の大半が東側の調査区域外に延びているため、詳細については不明である。

推定される開口部の規模は2.05m×84cm、底部は長さが不明、深さが1.05mである。平面形は開口部が長楕円形で、底部は隈が若干丸味をもつ長方形を示すと推定され、長軸はN-76°-Wにある。長軸の西壁は水平に対して内傾し、短軸両側の壁は底面に対してほぼ97度外傾する左右対称形を示し、断面形は長軸は不明であるが、短軸はピーカー形に近い。底面の状況については不明である。西壁の中央北寄りの底面で副穴(径14cm×12cm、深さ5cm)が検出されており、東壁際の底面でも検出される可能性が大きい。

埋土は黒色・黒褐色・暗褐色、黄褐色～明黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、5層に



第270図 (14)III g 49陥し穴状遺構

細分される。I層は調査時の表土で、基本層序第I層と同じである。1層～3層までは黒色のシルトで上半部を占め、4層と5層は黒色土起源の4層と壁の崩落による地山起源の土が交互に堆積している。自然堆積で埋没した遺構であろう。(Ta)

〔遺物〕

埋土内から7点の土器片が出土している。

土器 (第270図14～17、PL-141)

4点とも同1個体の破片で、無文の器面に3条並行する沈線で蛇行文や楕円文を付す土器である。第IV群4類に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期前葉であるから、本遺構も後期以降に位置づけられるであろう。

(15) III g 50陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第271図、PL-100)

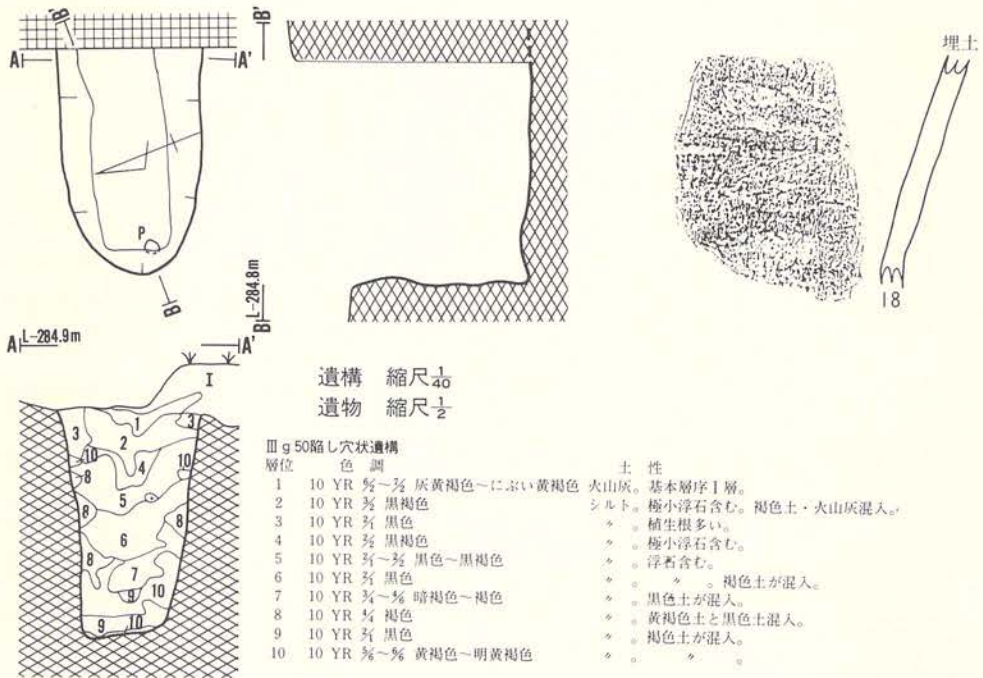
B区遺構群の南東端グリッドIII g 50に位置し、III g 49陥し穴遺構の南々西3.5mで南西向き斜面の中位に立地している。重複する遺構はないが、東側部分が調査区域外に延びているため、不明な部分がある。

検出された規模は開口部径2.1m×75cm、底部径1.03m+α×40cmで、深さは西端75cm、東端1.2mである。平面形は開口部が長楕円形で底部は隈が若干丸くなる長方形を示し、分類では長軸がN-58°-Wにある長方形に相当する。長軸の西壁は若干凹凸があるもののほぼ直立し、短軸の西壁はともに水平に対して97度外傾する左右対称形を示しており、断面形は長軸がピーカー形(?)、短軸はピーカー形に近い形を示す。底面には若干の凹凸があるものの、全体的には水平状態に近い。また、西壁中央南寄りの底面で副穴(径6cm×5cm、深さ4cm)が検出された。斜位に打ち込まれた杭の跡である。このことから、未調査の東端にも副穴が存在する可能性が強い。

埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色等のシルトや火山灰、地山起源の土が堆積し、10層に細分される。I層は調査時の表土で、1層は十和田a降下火山灰層である。以下は黒色土と褐色土が交互に堆積し、8層と10層は壁の崩落による褐色土と黄褐色土である。自然堆積で埋没した遺構であろう。(Ta)

〔遺物〕

埋土内から2点の土器片が出土している。



第271図 (15) III g 50 陥し穴状遺構

土器 (第271図18、P L-141)

18は無文土器の体部破片である。第VIII群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

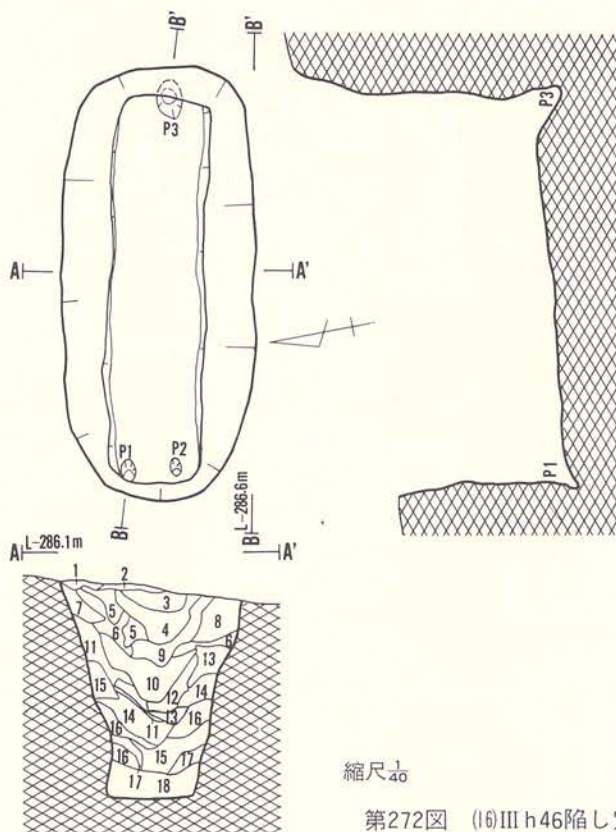
出土した土器は後期に属することから、本遺構も後期以降に位置づけられる。

(16) III h 46 陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第272図、P L-100・109)

B区遺構群の南東端グリッド III h 46・III i 46にまたがって位置し、III i 46 陥し穴状遺構の南1.5mで南西向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.3m×1.03m、底部径2.05m×45cmの規模で、深さは西端90cm、東端1.32mである。平面形は開口部が隈が丸味をもち凸辺の楕円形気味の長方形で、底部は長方形を示し、分類に従えば長軸がN-69°-Wにある長方形に相当する。長軸の西壁は底面に対して85度、水平に対してほぼ直立し、東壁は底面に対して97度、水平に対して92度で外傾し、断面形はピーカー形



III h 46陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	10 YR 弱 暗褐色	シルト。木根による攪乱。
2	7.5YR 弱 灰褐色	火山灰。上相田の火山灰含む。
3	7.5YR 弱 明褐色	砂質・細粒浮石含む。
4	7.5YR 弱 明褐色	シルト。黄褐色・明赤褐色浮石・炭化物含む。
5	7.5YR 弱 *	黄褐色・明赤褐色浮石含む。
6	7.5YR 弱 極暗褐色	黄褐色浮石含む。
7	10 YR 弱 暗褐色	黄褐色・明赤褐色浮石含む。
8	7.5YR 弱 黒褐色	炭化粒・黄褐色浮石含む。
9	10 YR 弱 灰黄褐色	*
10	7.5YR 弱 暗褐色	*
11	7.5YR 弱 黒褐色	黄褐色浮石の細粒含む。
12	7.5YR 弱 *	*
13	7.5YR 弱 明褐色	暗褐色土混入。
14	10 YR 弱 黄褐色	黒褐色土混入。基本層序V層。
15	10 YR 弱 暗褐色	木根による攪乱。
16	10 YR 弱 黄褐色	砂質シルト。スコリア含む。
17	7.5YR 弱 明褐色	シルト。スコリア含む。
18	7.5YR 弱 橙色	粘土質シルト。スコリア含む。黄褐色浮石含む。

縮尺 1/50

第272図 (16)III h 46陥し穴状遺構

に近い平行四辺形気味である。短軸の壁は底面に対して両側とも100度位外傾し、断面形はピーカー形に近い形状を示している。また、底面の上位20cm~30cmまでの壁はほぼ直立気味を示す例が多く、堀削当初は壁が垂直であった可能性がある。底面には若干凹凸はあるもののほぼ平坦で、西に向かって5度で傾斜している。なお、西壁北隅にP₁(径10cm×8cm、深さ10cm)、南隅P₂(径8cm×6cm、深さ8cm)、東壁中央にP₃(径20cm×14cm、深さ12cm)の副穴が検出されている。いずれも40度~45度の斜位に打ち込んだ杭穴である。

埋土は黒褐色・暗褐色・黄褐色等各種の色調を示すシルトや火山灰、地山起源の土が堆積し、18層に細分される。2層は十和田a降下火山灰層で、全体が浮石粒を含む黒褐色~暗褐色のシルトと壁の崩落と推定される地山起源の黄褐色土が混合した土で構成され、一部にはそれら単独の層もある。おそらく自然堆積で埋没した遺構であろう。(Ta)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状と埋土の状況から縄文時代の遺構とは推定されるが、時期の特定はできない。

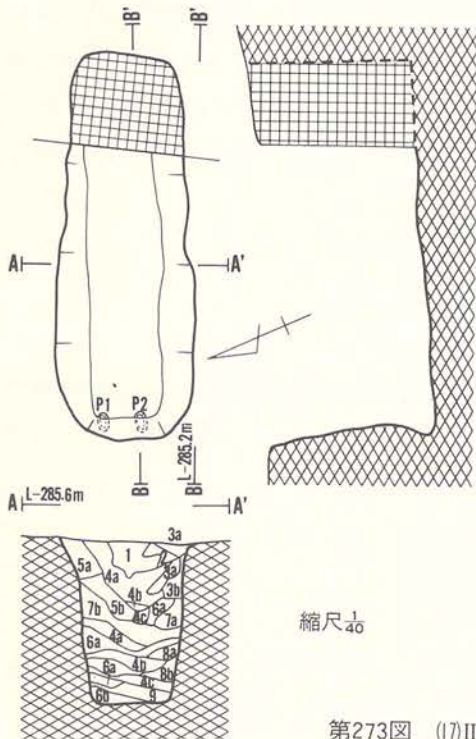
(17) III h 47陥し穴状遺構

〔遺 構〕 (第273図、P L-100・110)

B区遺構群の南東端グリッドIII h 47・48にまたがって位置し、III h 46陥し穴状遺構の南々西6 mで南西向き斜面の上位に立地している。重複する遺構はないが、東側部分約 $\frac{1}{3}$ 弱が調査区域外に延びているため未調査である。

検出された規模は開口部径2.08m×70cm、底部径1.4m+ α ×40cmで、深さは西壁88cm、東端1.01mである。平面形は開口部径が隅丸長方形気味の長楕円形、底部は若干隅の丸い長方形を示しており、分類に従えば長軸がN-59°-Wにある長方形に該当する。長軸の西壁は底面に対して92度、水平に対して97度で外傾し、東壁の状況は定かでないが、断面形はピーカー形か平行四辺形に近い形状を示すと推定される。短軸の壁は水平に対して南側102度、北側97度で外傾し、断面形はピーカー形に近い。底面には小さい凹凸はあるものの大きな起伏はみられず平坦

であるが、全体が西へ4度で傾斜している。また、西壁の南北両隅にはP₁(径6cm×4cm、深さ5cm)、P₂(径5cm×4cm、深さ6cm)の副穴があり、東壁にも存在する可能性が大きい。副



III h 47陥し穴状遺構

層位	色 調	土 性
1	7.5YR 7/4 暗褐色	赤褐色・黄褐色浮石が点在。
2	7.5YR 7/4 黒褐色	赤褐色・黄褐色浮石少量含む。
3a	☆	1層と2層の混土。
3b	☆	☆
4a	7.5YR 7/4 黒褐色	黄褐色浮石少量含む。
4b	☆	4a層よりやや明るい。
4c	☆	基本層序IV層。
5a	7.5YR 7/4 極暗褐色	1層と2層の混土。基本層序IV層。
5b	☆	基本層序II層。
6a	7.5YR 7/4 明褐色	黄褐色浮石少量含む。基本層序IV層。
6b	☆	しまりがある。
7a	7.5YR 7/4 褐色	黄褐色浮石少量含む。基本層序IV層。
7b	7.5YR 7/4 ☆	☆
8a	7.5YR 7/4 ☆	基本層序IV層と暗褐色の混土。
8b	☆	脆い。
9	7.5YR 7/4 暗褐色	暗褐色の混土。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第273図 (17)III h 47陥し穴状遺跡

穴は規模が比較的小型で浅いが、斜め方向に杭を打ち込んだ様相を示している。

埋土は黒褐色・極暗褐色・暗褐色・明褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、9層に大別されさらに細分される。中位～下位は壁の崩落によると推定される基本層序第IV層～V層の土と黒色土系の土が混合したり、単独で堆積する。特に下半部は互層をなしており、壁の崩落が頻繁にあったことを示している。自然堆積による埋没であろう。(Ta)

〔遺物〕

出土していない。

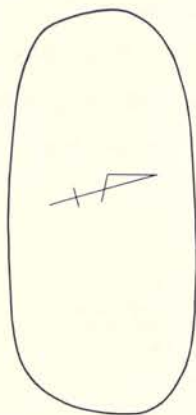
〔遺構の時期〕

形状、埋土の状況から考えて縄文時代の遺構とは推定されるが、時期の特定はできない。

(18) III h 49陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第274図、P L-109)

B区遺構群の南東端グリッドIII h 49に位置し、III g 49陥し穴状遺構の北4 mで南西向き斜面の上位に立地している。重複する遺構はないが、全体が調査区域外にあるため検出はしたが内部の精査は行わずに埋め戻した。従って、詳細なことは全く不明である。



第274図 (18)III h 49陥し穴状遺構

開口部が径2m×50cmの長楕円形を示す以外は不明である。埋土は最上層に十和田a降下火山灰が堆積する。長軸方向はN-70°-Wにあり、分類に従えば長方形に相当するものと推定される。(Ta)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や立地する位置関係から陥し穴状遺構であることは間違いないが、時期については特定できない。

(19) III i 44陥し穴状遺構

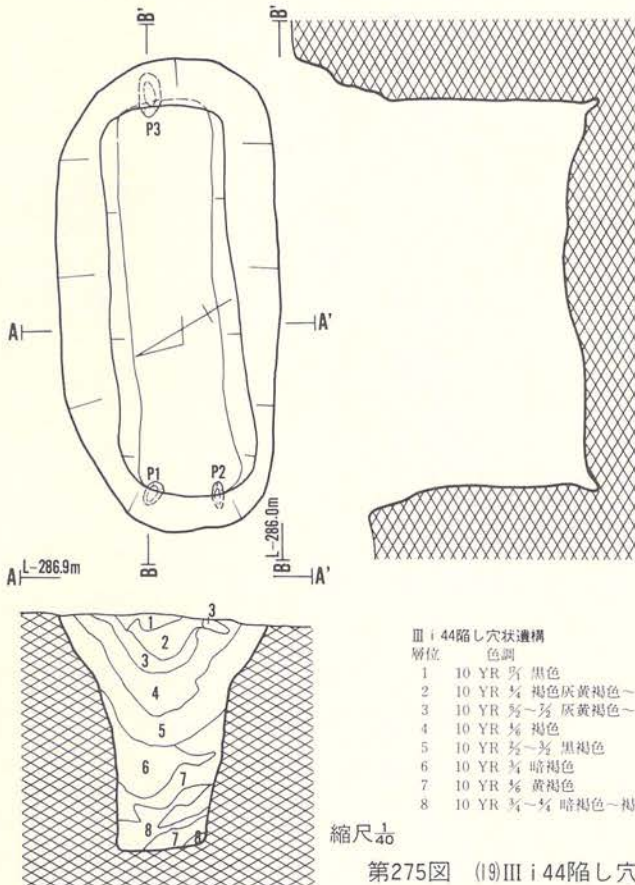
〔遺構〕 (第275図、P L-100・110)

B区遺構群の東端グリッドIII i 44・III j 44・III j 45にまたがって位置し、III i 46陥し穴状遺構の南々西6.5mで北西向き斜面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.5m×1.25m、45cm下位の中段2.1m×70cm、底部径2.15m×45cmの規模をもち、深

さは斜面下位の北西壁1.14m、斜面上位の南東壁が1.45mである。平面形は開口部が長楕円形であるが、中段と底面はやや隅丸で凸辺の長方形を示し、分類では長軸がN-50°-Wにある長方形に相当する。長軸の北西・南東の両壁はほぼ直立し、上位部分が僅かに外傾しているが、断面形はピーカー形を示す。短軸は南西壁がほぼ直立であるが北東壁は98度で外傾し、断面形はピーカー形に近い形である。底面には起伏があり、特に東南東側が最大10cm位で高くなっている。なお、北西壁の北端にP₁(径12cm×8cm、深さ8cm)、南端にP₂(径12cm×5cm、深さ5cm)、東南東壁中央やや北寄りにP₃(径23cm×12cm、深さ6cm)の副穴が検出されている。これらはいずれも40度~45度の斜めに打ち込まれた杭穴である。

埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色等のシルトや火山灰と地山を起源とする土が堆積し、8層に細分される。3層は十和田a降下火山灰層で、7層は壁の崩落による黄褐色土である。



中位は浮石混じりの褐色~黒褐色土が堆積し、その下位は黒色土系の土と壁の崩落による黄褐色土の混合層やそれらの単独層との互層をなしている。自然堆積による埋没であろう。(Ta)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から

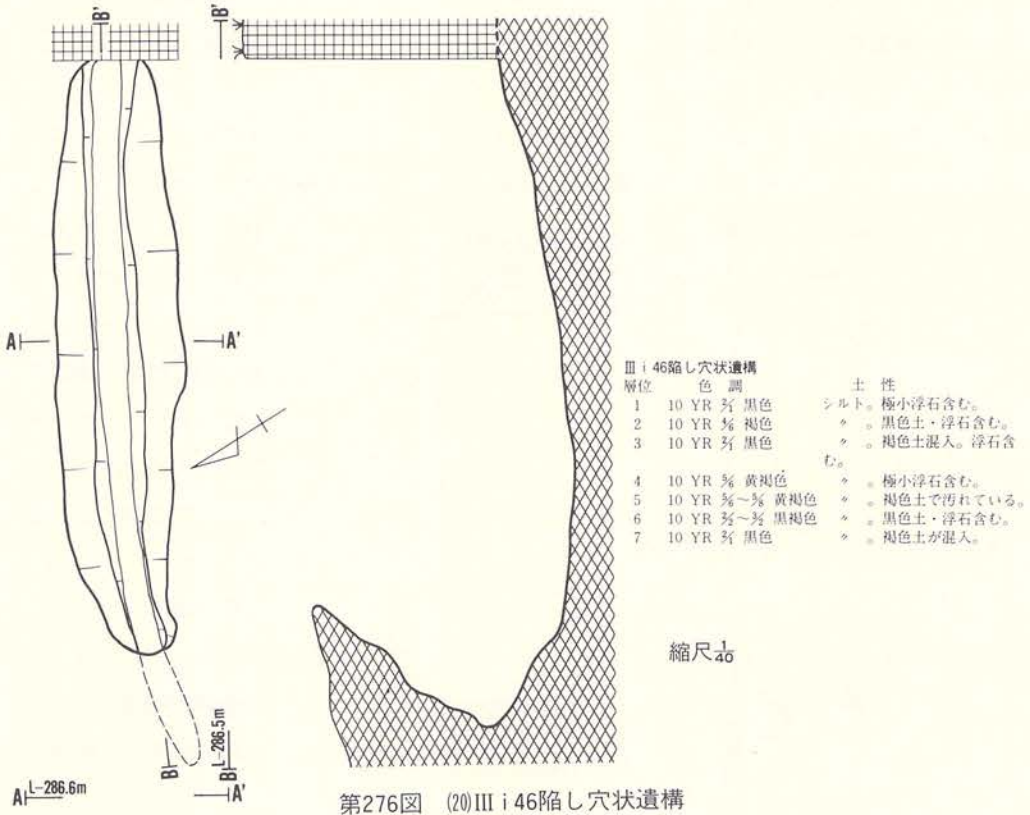
第275図 (19)III i 44陥し穴状遺跡

縄文時代の遺構とは考えられるが、時期の特定はできない。

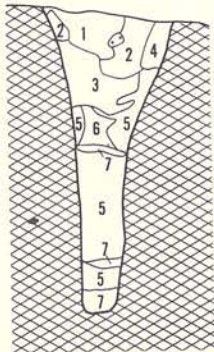
(20) III i 46陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第276図、P L-101)

B区遺構群の東端グリッド III i 46に位置し、III h 46陥し穴状遺構の北1.5mで南西向き斜面



第276図 (20) III i 46陥し穴状遺構



の最上位に立地している。重複する遺構はないが東端部分が調査区域外に延びているため、不明な部分が多い。

検出された規模は開口部径 $3.15\text{m} + \alpha \times 65\text{cm}$ 、 $50\text{cm} \sim 60\text{cm}$ 下位の中段 $3.15\text{m} + \alpha \times 25\text{cm}$ 、底部径 $3.75\text{m} + \alpha \times 16\text{cm}$ で、深さは斜面下位の北西端が 1.32m 、斜面上位の南東端が 1.56m である。平面形は開口部が長軸北西が丸味をもつ長

楕円形、底部は若干湾曲した細長い溝状を示し、分類に従えば長軸がN-60°-Wにある溝状形である。北西壁は水平に57度で内傾しており、南東部壁もほぼ同じ様相と考えられることから、長軸の断面形はフラスコ形と推定される。短軸の壁は両側とも底面の約90cm上位までは94度で外傾し、その上位はさらに強く外折しており、断面形は漏斗状に近い形状を示している。底面には大きな起伏があり、斜面下位部分が最大45cmも低く、全体が斜面下位に向って傾斜している。さらに、中央部が低く長軸両端が高い弓形に湾曲している。

埋土は黒色・黒褐色・褐色・黄褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、7層に細分される。1・3・7層は黒色シルトで4・5層が壁の崩落による地山起源の黄褐色土である。上位は黄褐色浮石混じりの黒色土が主体で、中位～下位は黄褐色土と黒色土の互層である。自然堆積によって埋没した遺構であろう。(Ta)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状、埋土の状況から考えて縄文時代の遺構と思われるが、時期の特定はできない。

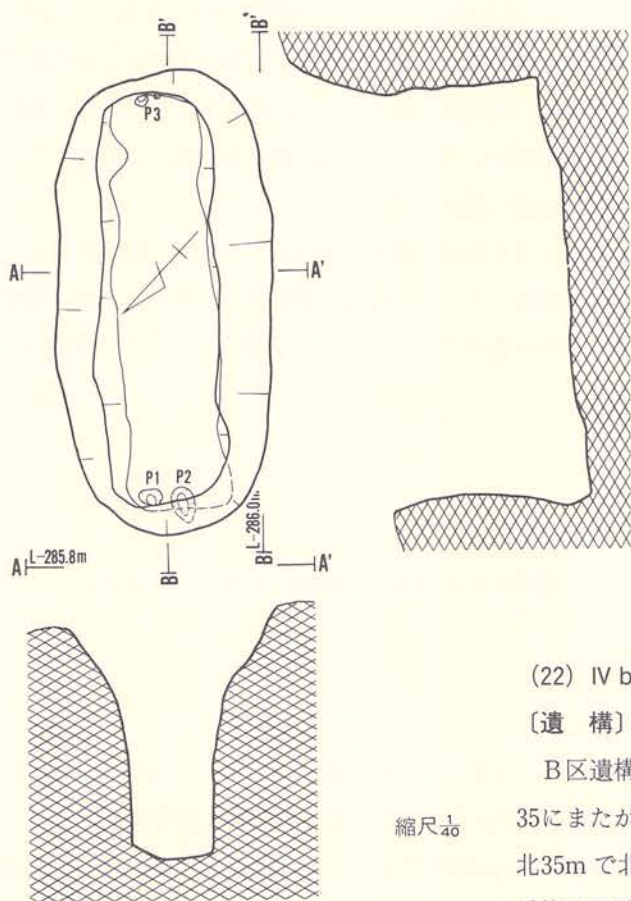
(21) III j 43 陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第277図、P L 101・110)

B区東側に並ぶ陥し穴状遺構の最北端グリッドIII j 43・IV a 43にまたがって位置し、III i 44 陥し穴状遺構の北東7.5mで北西向き斜面の上位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径2.46m×1.14m、底部径2.26m×53cmの規模をもち、深さは斜面下位の北西壁1.08m、斜面上位の南東壁が、1.28mである。平面形は開口部が長楕円形で中段～底部は長方形を示し、分類では長軸がN-44°-Wにある長方形に該当する。長軸両側の壁は底面に対してほぼ直角を示すが、水平に対しては北西が92度で外傾、南東壁が87度で内傾し、断面形はピーカー形や平行四辺形的な形状を示している。短軸の壁は両側とも底面の上位60cm位までほぼ直立し、その上位は外反気味に大きく外傾する。断面形はピーカー形に近い。底面には若干凹凸があるもののほぼ平坦で、斜面下位の北西側に6.5度で傾斜している。なお、長軸の北西壁北隅寄りにP₁(径12cm×10cm、深さ5cm)、ほぼ中央にP₂(径20cm×12cm、深さ6cm)と南東壁中央やや北寄りにP₃(径8cm×5cm、深さ4cm)の副穴が検出されている。いずれも30度～45度の斜めに打ち込まれた杭穴である。

埋土の土層図は作業中の不手際から作図できなかったが、最上層に十和田a降下火山灰、その下位～中位は黒色～暗褐色のシルト、下半部は黒色土起源の土と地山起源の土が互層の堆積状況を示し、III i 43 陥し穴状遺構のそれと近似している。自然堆積による埋没であろう。(Ta)



第277図 (2) III j 43陥し穴状遺構

縮尺 $\frac{1}{40}$

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状、埋土の状況から縄文時代の遺構と考えられるが、時期の特定はできない。

(22) IV b 34陥し穴状遺構

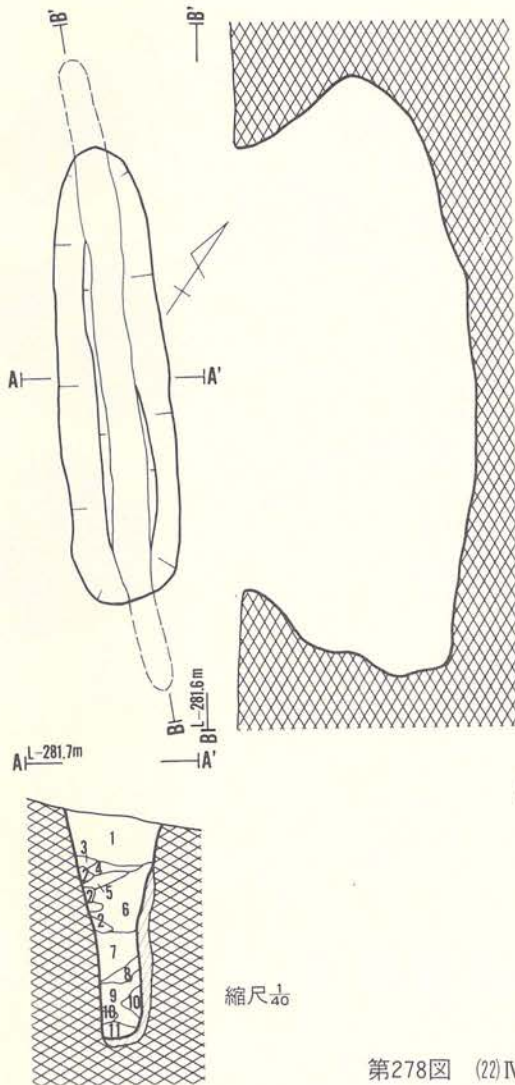
〔遺構〕 (第278図、P L-101)

B区遺構群では最北東端のグリッドIV b 34・35にまたがって位置し、III j 43陥し穴状遺構の北35mで北向き斜面の最上位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径2.44m×57cm、50cm下位の中段2.44m×30cm、底部径3.4m×18cm～20cmの規模をも

ち、深さは南東壁で1.2m、北西壁で1.05mである。平面形は開口部が長楕円形で、底部は若干曲折した細長い溝状を示し、分類では長軸がN-44°-Wにある溝状形に相当する。北西壁は水平に対して52度、底面に対して61度して内傾し、南東壁は底面に対して60度、水平に対して68度で内傾しており、断面形はフラスコ形を示す。短軸の壁は両側とも底面の上位60cmまではほぼ直立し、その上位は強く外反しており、断面形は漏斗状に近い。底面には大きな起伏があり、中央部は最大40cm低くなっており、南東側に8度で傾斜している。全体的にみると中央部が低く両端が高い弓形のように湾曲している。

埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色のシルトや地山起源の土が堆積し、11層に細分される。上位は黄褐色浮石を含む黒褐色土で、中位～下位は褐色～暗褐色のシルトと壁の崩落



第278図 (2)IV b 34陥し穴状遺構

の遺構との重複はない。

開口部径2.6m×1.3m、中段径2.14m×60cm、底部径2.1m×50cmの規模をもち、深さは斜面上位の北西壁1.06m、斜面上位の南東壁が1.3mである。平面形は開口部は長楕円形であるが、中段～底部は隅丸の部分もあるが長方形を示し、分類に従えば長軸がN-60°-Wにある長方形に相当する。長軸の北西壁はほぼ直立状態を示し、南東壁は底面に対して92度で外傾、水平に対して85度内傾しており、断面形はピーカー形もしくは平行四辺形に近似している。短軸の

によると推定される基本層序第V層～VI層との混合土や、それらの単独層が互層で堆積している。自然堆積で埋没した遺構であろう。(Ta)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状・埋土の状況から縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

<C 区>

(23) II g 63陥し穴状遺構

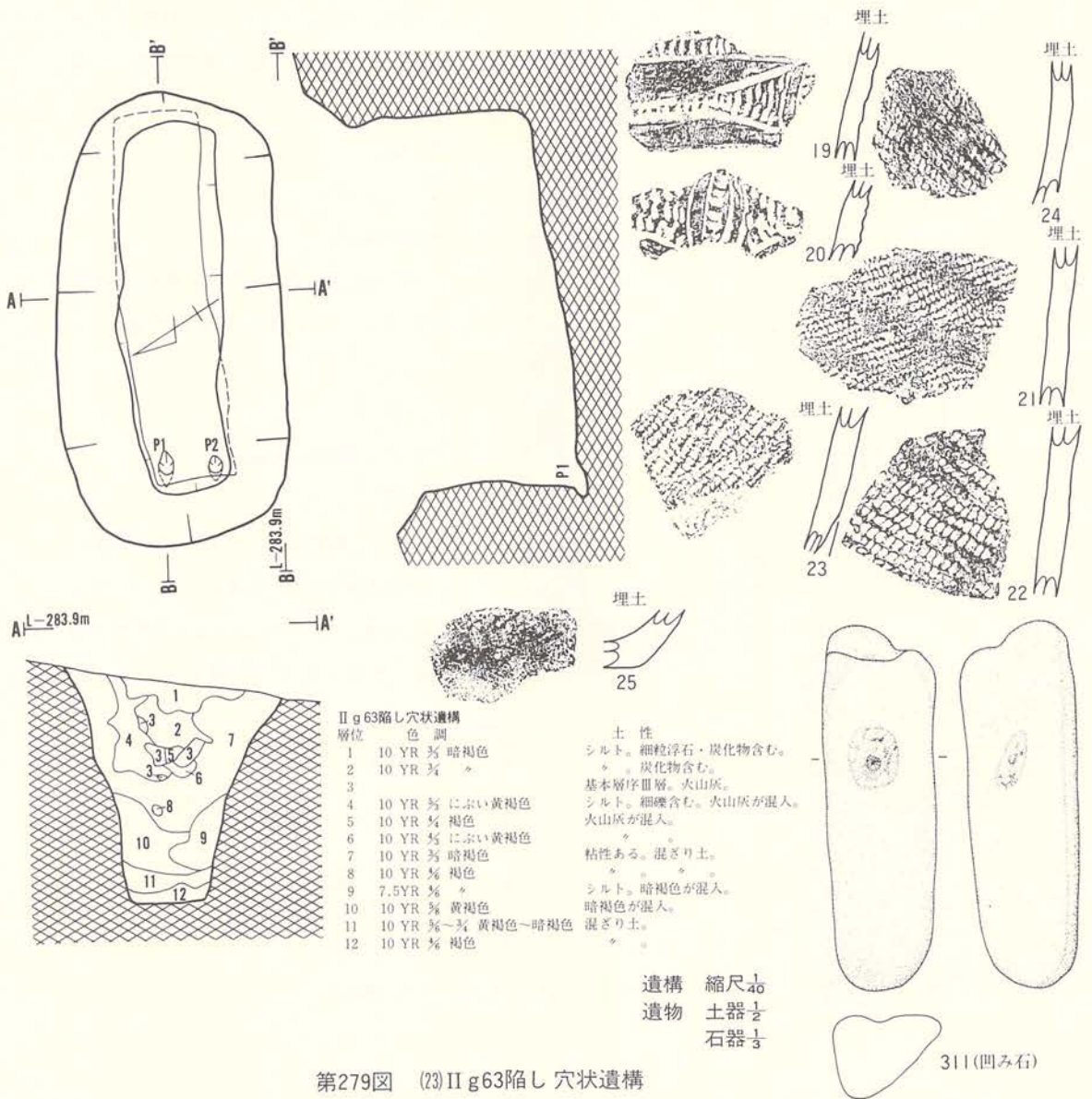
〔遺構〕

(第279図、P L-101・110)

D区境の沢に近いC区南端グリッドII g 63に位置し、II h 63陥し穴状遺構の南西3mで南向き斜面に位置している。他

IV b 34陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	7.5YR 2/6 黒褐色	シルト。黄褐色浮石少量含む。
2	7.5YR 2/6 褐色	〃 〃 〃 基本層序V層。
3	7.5YR 2/6 暗褐色	〃 〃 褐色土がブロック状に混入。
4	7.5YR 2/6 黒褐色	〃 〃 黄褐色浮石少量含む。
5	7.5YR 2/6 〃	〃 〃 褐色土が混入。
6	10 YR 2/6 〃	〃 〃 浮石含む。
7	7.5YR 2/6 褐色	〃 〃 〃 基本層序V層。
8	7.5YR 2/6 黒色	砂質シルト。砂粒・浮石粒含む。
9	7.5YR 2/6 暗褐色	シルト。浮石粒含む。
10	10 YR 2/6 褐色	〃 〃 〃 基本層序VI層。
11	7.5YR 2/6 明褐色	〃 〃 〃 〃



第279図 (23) II g 63 陥し穴状遺構

壁は両側とも底面の上位60cmまでは95度位で外傾するが、その上位は110度～117度で外傾し、断面形は漏斗状に近い形状を示している。底面には若干凹凸があるもののほぼ平坦であり、北西に8度で傾斜している。なお、北西壁の北隅にP₁(径14cm×8cm、深さ14cm)、南隅にP₂(径9cm×7cm、深さ10cm)の副穴が検出されている。南北それぞれの杭穴方向は、底部の中軸線に対して6.5度と8度となり、その延長線は中央部付近で交差する。また、底面からの立ちあが

り角度は29度であり、その延長線は検出面付近で南東壁の立ちあがり線上に交差する。

埋土は12層に分けられるが、基本層序第V・VI層を掘り込んで築かれていることから、シルト質混土層が主体を占める。上位層では基本層序第III層の十和田a降下火山灰がブロック状に堆積し、さらに黄褐色火山灰が斜面上方から流入する状態でみられる。地山起源の10・11層の土は壁の崩落に起因するものであろう。自然堆積で埋没した遺構と考えられる。(Ko)

〔遺物〕

埋土内から27点の土器片と石器が1点出土している。

土器 (第279図19～25、P L-141)

19・20は無文の器面に沈線と列点状の刻目によって施文された土器である。21～24は縄文のが付された粗製土器で、縄文には原体LR、RLがある。25は体部下端と底部を若干残す破片である。19・20は第VI群6類、21～24は第IX群に属する。

石器 (第279図311、P L-172)

全長15.8cm、幅4.9cm、厚さ3.6cm、重さ390gの断面三角形で細長い円礫の二面を凹み石としたもので、石材は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩である。

〔遺構の時期〕

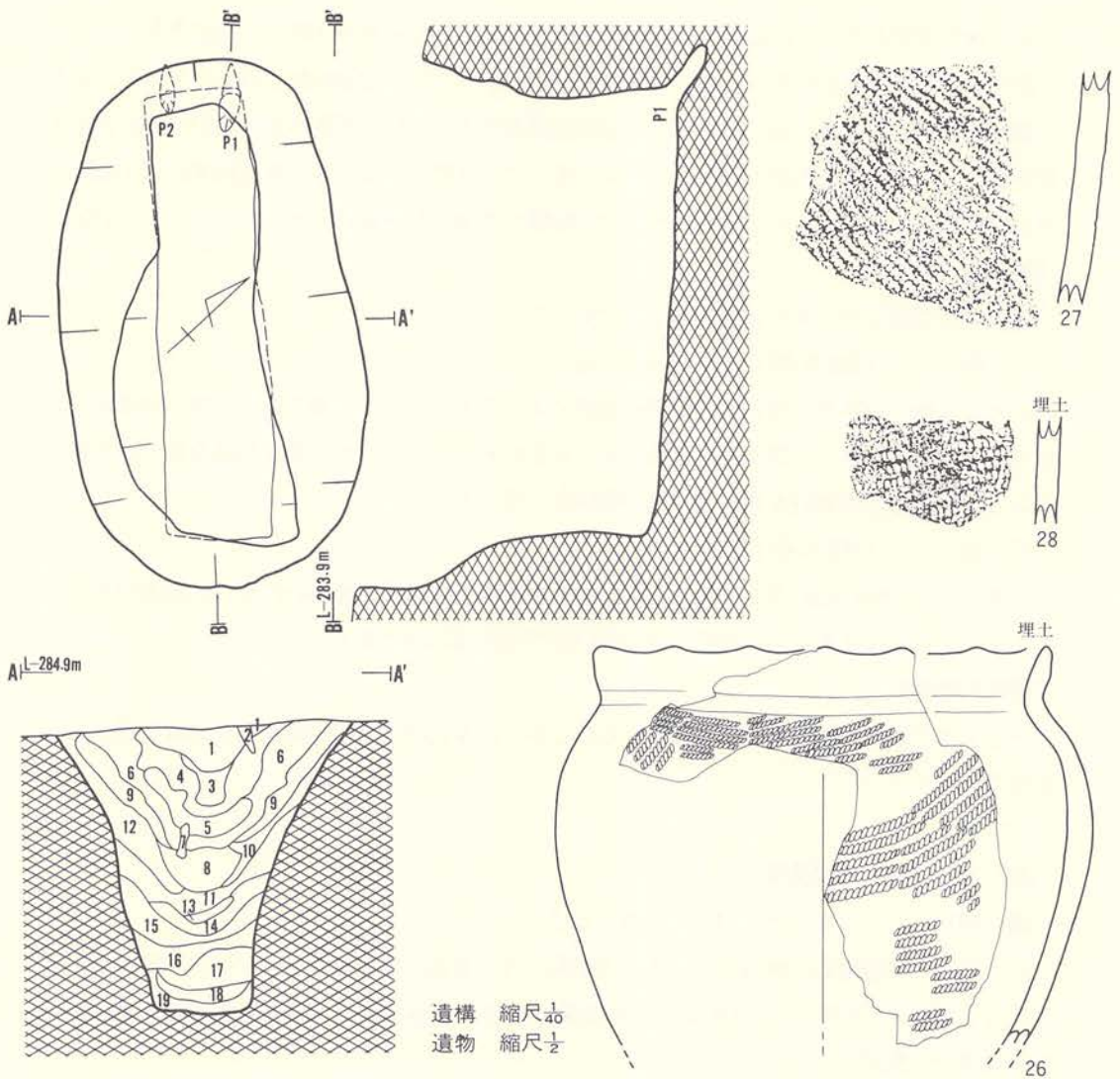
出土した土器19・20は後期末葉に属することから、本遺構と後期末葉がそれ以降に属すると推定される。

(24) II h 62陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第280図、P L-102・110)

C区陥し穴状遺構群の南端にあたるII g 63陥し穴状遺構の東北東7mのグリッドII h 62・II j 62にまたがって位置し、II h 63陥し穴状遺構の東北東4mの北西向き斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.85m×1.58m、中段2.35m×50cm～80cm、底部径2.42m×55cm～60cmの規模をもち、深さは斜面下位の北西壁が1.38m、斜面上位の南東壁が1.57mである。平面形は開口部では長楕円形であるが、中段～底部は長方形を示し、分類に従えば長軸がN-50°-Wにある長方形に該当する。長軸の北西壁は底面に対して80度、水平に対して84度で内傾し、南東壁は底面に対して93度、水平に対して96度で外傾し、断面形はピーカー形に近い平行四辺形である。短軸の北東壁は底部の上位40cm～50cmまではほぼ直立し、その上位は大きく外傾している。南西壁は北西寄りが底面の上位55cmまでは直立であるが、南東側は108度で外傾している。底面には若干凹凸があるもののほぼ平坦で、北西に4度で傾斜している。北西壁の底面には北隅にP₁(径19cm×10cm、深さ30cm)と南隅にP₂(径11cm×8cm、深さ20cm)の副穴がある。位置と形状は



II h62陥し穴状遺構

層位	色調
1	10 YR 2/2 黒褐色
2	10 YR 2/2 暗褐色
3	10 YR 2/2 黒褐色
4	10 YR 2/2 黄褐色
5	
6	10 YR 2/2 褐色
7	10 YR 2/2 黒褐色
8	10 YR 2/2 褐色
9	10 YR 2/2 褐色～黄褐色
10	10 YR 2/2 黄褐色～暗褐色

土性
シルト。浮石・炭化物含む。
＊。木根跡。
＊。浮石含む。
＊。火山灰が混入。
基本層序III層・火山灰成層。
浮石含む。火山灰が混入。
火山灰含む。木根跡。
浮石含む。
シルト。火山灰が混入。
＊。

11	10 YR 5/2 明黄褐色	＊。褐色が混入。
12	10 YR 5/2 黄褐色～褐色	＊。火山灰含む。
13	10 YR 5/2 明黄褐色	＊。火山灰含む。
14	10 YR 5/2 黄褐色	黒褐色土含む。
15	10 YR 5/2 明黄褐色	シルト。浮石含む。基本層序IV層。
16	10 YR 5/2 にぶい黄橙色	褐色土含む。
17	10 YR 5/2 褐色	浮石含む。赤褐色含む。
18	10 YR 5/2 灰黄褐色	やや粘性ある。
19	7.5YR 5/2 明褐色	赤褐色・暗褐色が混入。

第280図 (24) II h62陥し穴状遺構

II g 63陥し穴状遺構に類似し、北西隅の杭穴方向は底部の中軸線とほぼ中央部で交差する。他は中軸線と離れているが、両者の杭穴方向は中央部より南東寄りで交差する。また、北西隅の杭穴は底面から34度で穿たれ、その延長線は南東端の検出面付近に達する。

埋土は基本層序第IV層～V層のシルト質土が主体を占め、上位層では2種の降下火山灰層がレンズ状に認められる。これより上方では黒褐色や暗褐色シルトが多く、いずれも自然堆積の様相を呈している。(Ko)

〔遺物〕

埋土内から24点の土器片が出土している。

土器 (第280図26～28、PL-142)

26は口縁部を無文にし、体部に原体LR横回転の単節斜行縄文を付し、器形は肩部に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は僅かに外反し小さい山形の波状を示す。頸部下端には沈線状の凹みをもつ。27・28は縄文のみを付す粗製土器の破片である。いずれも第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期後半に属することから、本遺構も後期後半以降に位置づけられる。

(25) II h 63陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第281図、PL-102・110)

C区陥し穴状遺構では南端に近いグリッドII h 63に位置し、I j 63陥し穴状遺構の北3.5mでD区境に面した北西に延びる尾根の南斜面に立地する。重複する遺構はない。

開口部径2.43m×1.2m、中段2.25m×60cm、底部径2.2m×40cmの規模をもち、深さは斜面下位の北西壁1.22m、斜面上位の南東壁で1.45mである。開口部の平面形は長楕円形であるが、中段～底部は長方形を示し、分類に従えば長軸がN-44°-Wにある長方形に属する。長軸の北西壁は底面に対して83度、水平に対して85度で内傾し、南東壁は底面に対して直立、水平に対して88度で内傾しており、断面形はフラスコ形に近い形状を示している。短軸の両壁は底面の上位50cm位までは93度～100度で外傾し、その上位はほぼ110度で外折しており、断面形は漏斗状に近い。底面には若干凹凸があるもののほぼ平坦であるが、斜面下位の北西に2度で傾斜している。底部には斜面下位の北隅にP₁(径11cm×9cm、深さ18cm)、南隅にP₂(径11cm×8cm、深さ30cm)、南東壁のほぼ中央にP₃(径12cm×9cm、深さ21cm)の副穴が検出されている。いずれも斜め方向に打ち込まれ、楕円形状を呈する。北西壁の打ち込み方向は中軸線に対してP₁-4.5度、P₂-6.8度でいずれも中央部で交差する。また、底面からの立ちあがり角度は42度ほど

であり、南東壁側のP₃は38.5度の角度で立ちあがり、P₁・P₂とは遺構中央部のやや上方で交差する。

埋土は14層に分けられるが、中位層以下には褐色のシルト質土が主体である。上位層では2種の降下火山灰層とそれらの混土層がみられ、いずれも自然堆積の様相を呈している。(Ko)

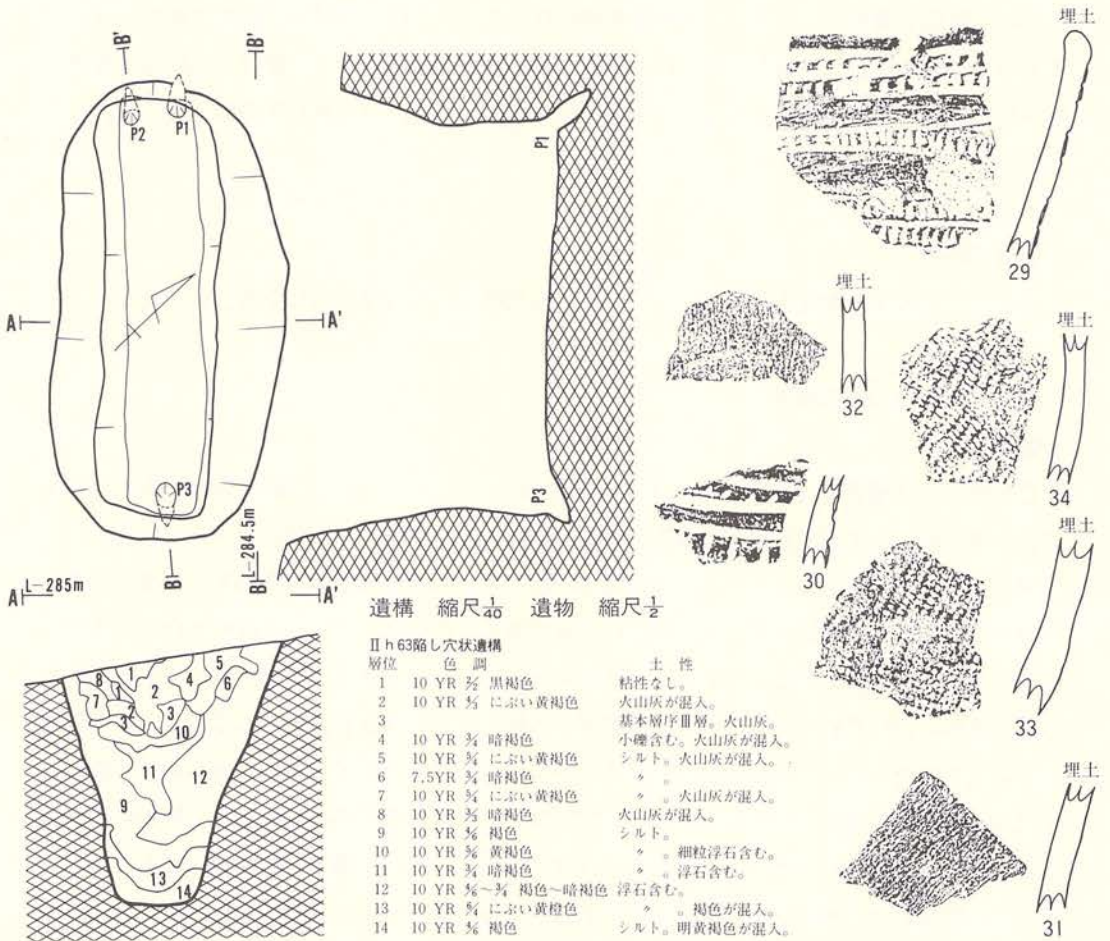
〔遺物〕

埋土内から12点の土器片が出土している。

土器 (第281図29~34、P L-142)

29・30は無文の器面を沈線で区画し、刻目を充填した土器である。31・32は無文土器である。

33・34は縄文だけを付す粗製土器である。以上から、29・30は第VI群7類、31・32は第VIII群、



第281図 (25) II h 63陥し穴状遺構

33・34は第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

29・30は後期末葉の土器であることから、本遺構も後期末葉かそれ以降に属するであろう。

(26) II i 61陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第282図、P L-102・111)

C区陥し穴状遺構群では南寄りのグリッドII i 61・62にまたがって位置し、II h 63陥し穴状遺構の北東5.9mで北西向き斜面に立地している。南東壁でII i 62土坑、北西部でII i 61土坑1・2と重複しているが、本陥し穴状遺構が最も新しい。

開口部径2.7m×1.45m、中段2.25m×70cm、底部径2.25m×45cmの規模をもち、深さは斜面下位の北西壁が1.45m、斜面上位の南東壁が1.64mである。開口部の平面形は楕円形であるが、中段～底部は大略長方形を示し、分類に従えば長軸がN-49°-Wにある長方形に該当する。長軸の北西壁は底面に対して87度、水平に対して直立し、南東壁では底面に対して92度、水平に対して直立状態を示し、断面形はピーカー形に近い平行四辺形状である。短軸の両壁は底面上位70cmまではほぼ97度で外傾し、その上位は115度で外反気味に立上がり、断面形は漏斗状をなす。底面には幾分起伏があり、特に北西半が比高5cmで低く、さらに全体が2度で北西に傾斜している。また、北西壁の北隅底面にP₁(径10cm×10cm、深さ15cm?)、同南隅にP₂(径12cm×9cm、深さ20cm)と南東壁中央やや北寄りにP₃(径11cm×10cm、深さ27cm)の副穴が検出されている。P₁・P₂は隅から僅かに離れた壁際に位置し、方向はP₂の延長線が中央部で中軸線に交差する。立ちあがり角度は底面に対して60度ほどであり、P₃の延長線とは中央部上方の検出面直下で交差する。P₃の方向延長線が中央部で中軸線に接している。

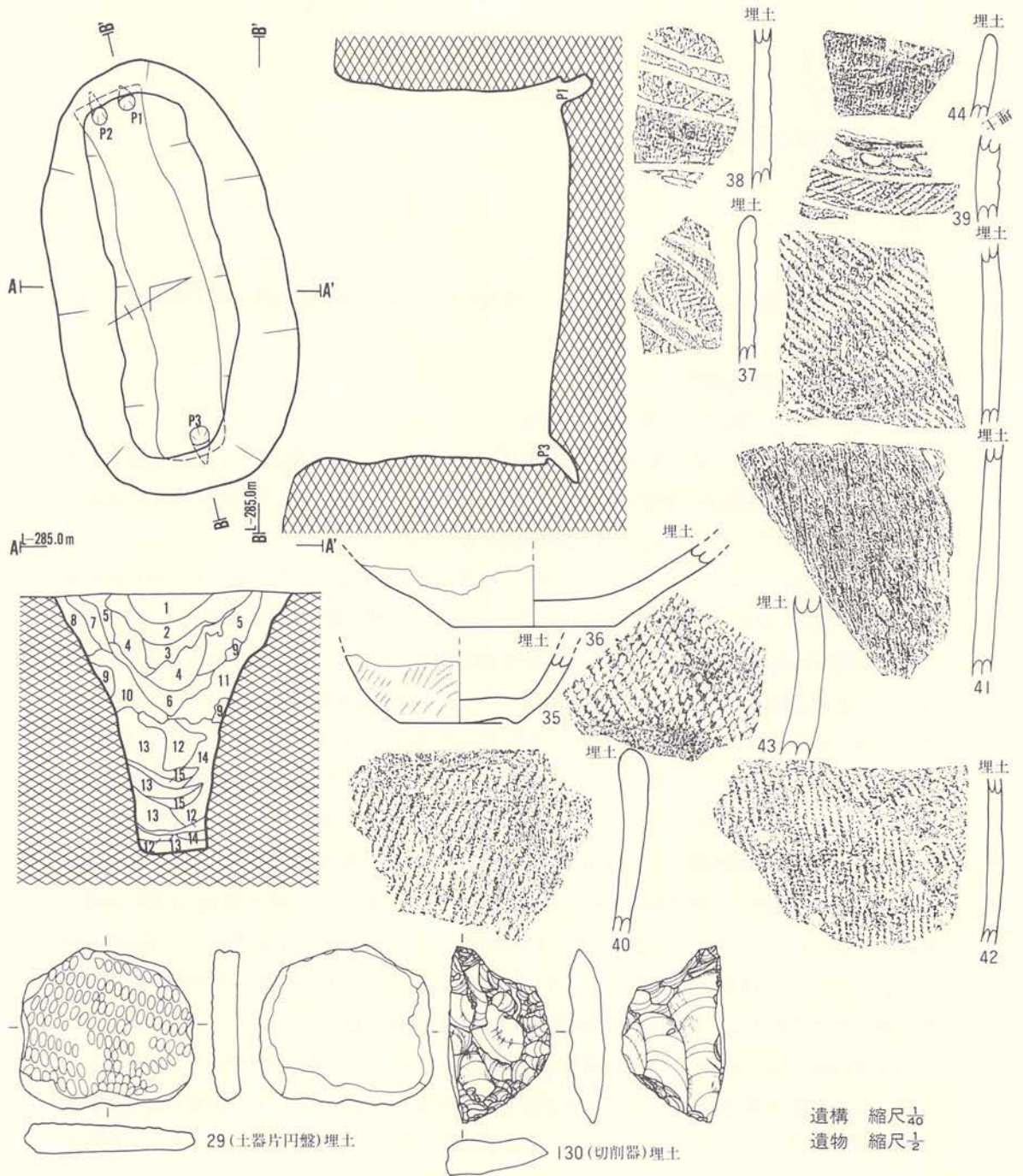
埋土は14層に細分される。中・下位層では底部より僅か上方に暗褐色土層がみられるほか、いずれも基本層序第IV～V層のシルト質土が主体を占めている。これより上位層では2種の降下火山灰および火山灰混土層がみられ、さらに黒褐色土がレンズ状に堆積している。自然埋没の堆積状況を示している。

〔遺物〕

埋土内から土器片93点と土製品1点、石器1点が出土している。

土器 (第282図35～45、P L-142)

35・36は体部下端と底部を残す破片で、35の器表には無節縄文を付すが36は無文である。37～39は縄文を付した器面を沈線で区画して、縄文を磨消したり列点文を付す場合もある。



II i 62陥し穴状遺構

層位	色調	土性			
1	10 YR 5/2 黒褐色	浮石・炭化物含む。	8	10 YR 5/2 褐色	* 砂が混入。
2	10 YR 5/2 褐色	シルト。浮石含む。	9	10 YR 5/2 黄褐色	* 褐色含む。
3	10 YR 5/2 黒褐色	暗褐色混じる。浮石含む。	10	10 YR 5/2 褐色	* 黄褐色が混入。
4		基本層序崩壊。火山灰成層。	11	10 YR 5/2 暗褐色	*
5	10 YR 5/2 明黄褐色	浮石・火山灰含む。	12	10 YR 5/2 *	*
6	10 YR 5/2 褐色	細粒浮石が混入。	13	10 YR 5/2 黄褐色	* 浮石含む。褐色が混入。
7	10 YR 5/2 暗褐色	シルト。火山灰が混入。	14	10 YR 5/2 明黄褐色	* *

第282図 (26) II i 62陥し穴状遺構

40～43は縄文を付した土器で、44・45は無文土器である。以上から、37～39は第VI群3類、40～43は第IX群、44・45は第VIII群に属する。

土製品 (第282図29、P L-157)

土器片円盤が1点出土している。器面に縄文を付した土器片の周囲を打ち欠いて整形し、利用したものである。大きさは径5.4cm×4.7cm、厚さ8.75mm、重さ24.8gである。

石器 (第282図130、P L-163)

横に幅の広い剝片を利用した切削器である。下縁と右側縁に剝離調整をもち、折断面をもつ。大きさは長さ5.4cm、幅3.1cm、厚さ1.1cm、重さ21.1gで、石材は奥羽山地新第三系中新統産の凝灰質珪質泥岩である。

〔遺構の時期〕

37～39の土器は後期後半に属することから考えると、本遺構もその頃かそれ以降に位置付けられるであろう。

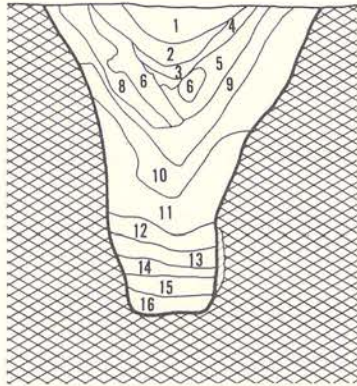
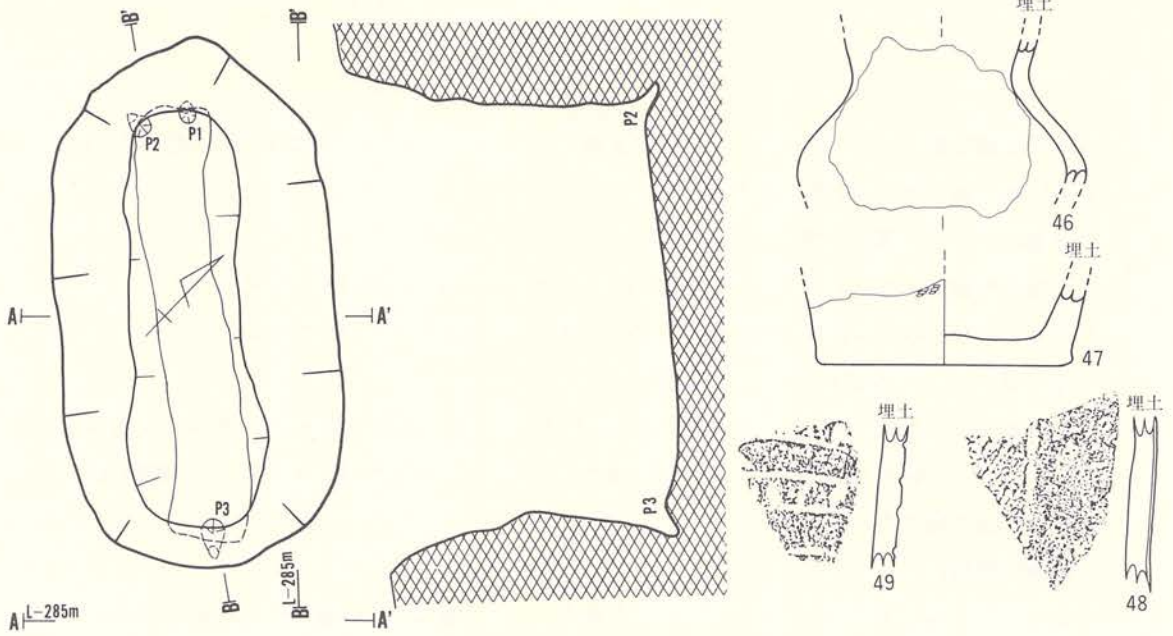
(27) II j 60陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第283図、P L-102・111)

C区陥し穴状遺構群のほぼ中央グリッドII j 60・61にまたがって位置し、II j 62陥し穴状遺構の北東5mで尾根頂上部の北西向き斜面に立地している。南西部でII i 60土坑-4と重複しているが、本遺構の方が新しい。

開口部径2.8m×1.5m、中段2.2m×60cm、底部径2.3m×35cmの規模をもち、深さは斜面下位の北西壁で1.49m、斜面上位の南東壁で1.57mである。開口部の平面形は長楕円形であるが、中段～底部は若干不整形ではあるがほぼ長方形をなし、分類に従えば長軸がN-59°-Wにある長方形に相当する。長軸の北西壁は底面に対して78度、水平に対しては81.5度で内傾し、南東壁は底面に対して94度、水平に対して91度で外傾しており、断面形は平行四辺形に近い。短軸の両側壁は底面の上位90cmまでは90度～92度で外傾し、その上位は113度で強く外折している。底面は両端が高く中央部が比高10cmで緩やかに低くなり、全体が北西に3度で傾斜している。なお、北西壁の北隅にP₁(径9cm×8cm、深さ13cm)と南隅にP₂(径9cm×10cm、深さ15cm)、南東壁のほぼ中央にP₃(径11cm×13cm、深さ16cm)の副穴が検出されている。P₂は底面に対して46.8度の方向に立ちあがり、その延長線はP₃のそれと中央部上方で交差する。P₃はP₁の方向と中央部からやや北西寄りでも重複する。

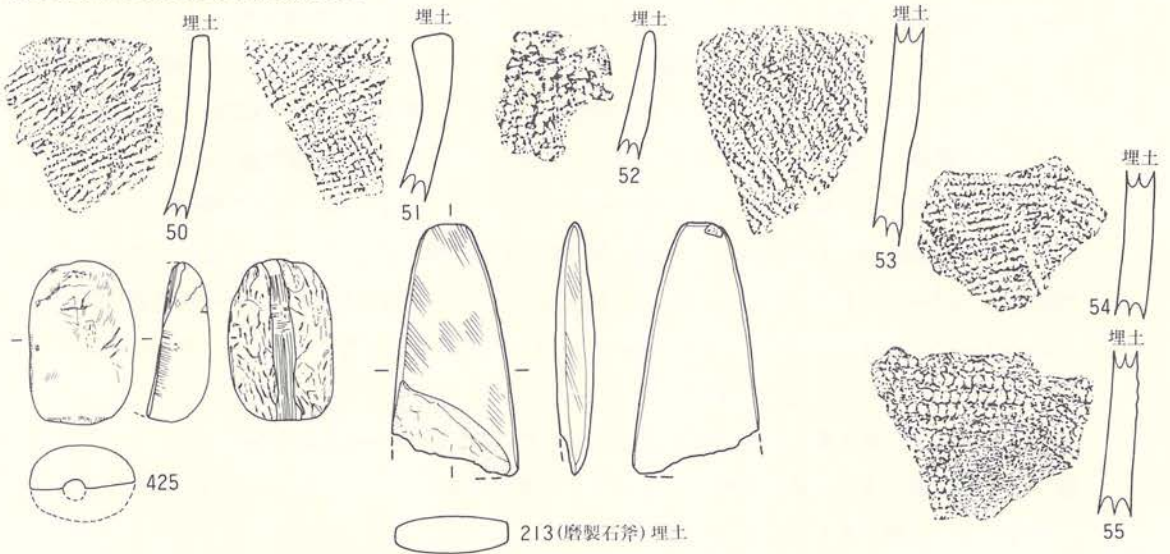
埋土は中・下位層で褐色シルト質土がほとんどであり、黒褐色混土の間層がみられる。上位層では2種の降下火山灰層が堆積し、これより上層では黒褐色シルト質土が多い。いずれも自然埋没による堆積状況を示している。(Ko)



II j 60陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 黒褐色	シルト。
2	10 YR 5/2 褐色	* 浮石含む。
3	10 YR 5/2 黒褐色	浮石含む。
4	10 YR 5/2 に近い黄褐色	火山灰質。
5	10 YR 5/2 褐色	* 浮石含む。
6		基本層序III層。
7	10 YR 5/2 黒褐色	炭化物・浮石含む。
8	10 YR 5/2 黄褐色	細粒浮石含む。
9	10 YR 5/2 褐色	シルト。浮石含む。
10	*	* 明黄褐色混じる。
11	10 YR 5/2 明黄褐色	浮石含む。
12	10 YR 5/2	シルト。浮石含む。
13	10 YR 5/2 黒褐色	
14	10 YR 5/2 暗褐色	浮石含む。混土で汚れている。
15	10 YR 5/2 に近い黄褐色	* * *
16	10 YR 5/2 褐色	* * *

遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



第283図 (27) II j 60陥し穴状遺構

〔遺物〕

埋土内から土器59点、石器1点、石製品1点が出土している。

土器 (第283図46～55、P L-142)

46は無文の壺の頸部～肩部の破片で、47は体部下端～底部を残し、器表には縄文を付す。48は縄文を付した器面を沈線で区画して縄文を磨消する土器である。49は無文の器面に沈線と刻目を施文した破片である。50～55は縄文のみを施した粗製土器で、縄文には各種みられる。以上から、48は第Ⅲ群2類、49は第Ⅵ群8類、ほかは第Ⅸ群に相当する。

石器 (第283図213、P L-167)

磨製石斧が1点出土している。刃部を一部欠失するが、全長6.7cm、幅3cm位、厚さ1cm位、重さ32.5gの大きさで、全面に成形や研磨時の擦痕を残している。石材は北上山地古生界産のチャート質淡緑色凝灰岩である。

石製品 (第283図425、P L-179)

縦割れして約 $\frac{1}{2}$ を欠失した棗形の垂飾りである。全面に研磨時の擦痕をもち、長軸の中心に貫通孔をもつ。大きさは、全長4.3cm、幅2.8cm、厚さ2cm位、重さ50g位である。石材は北上山地古生界産の凝灰質チャートである。

〔遺構の時期〕

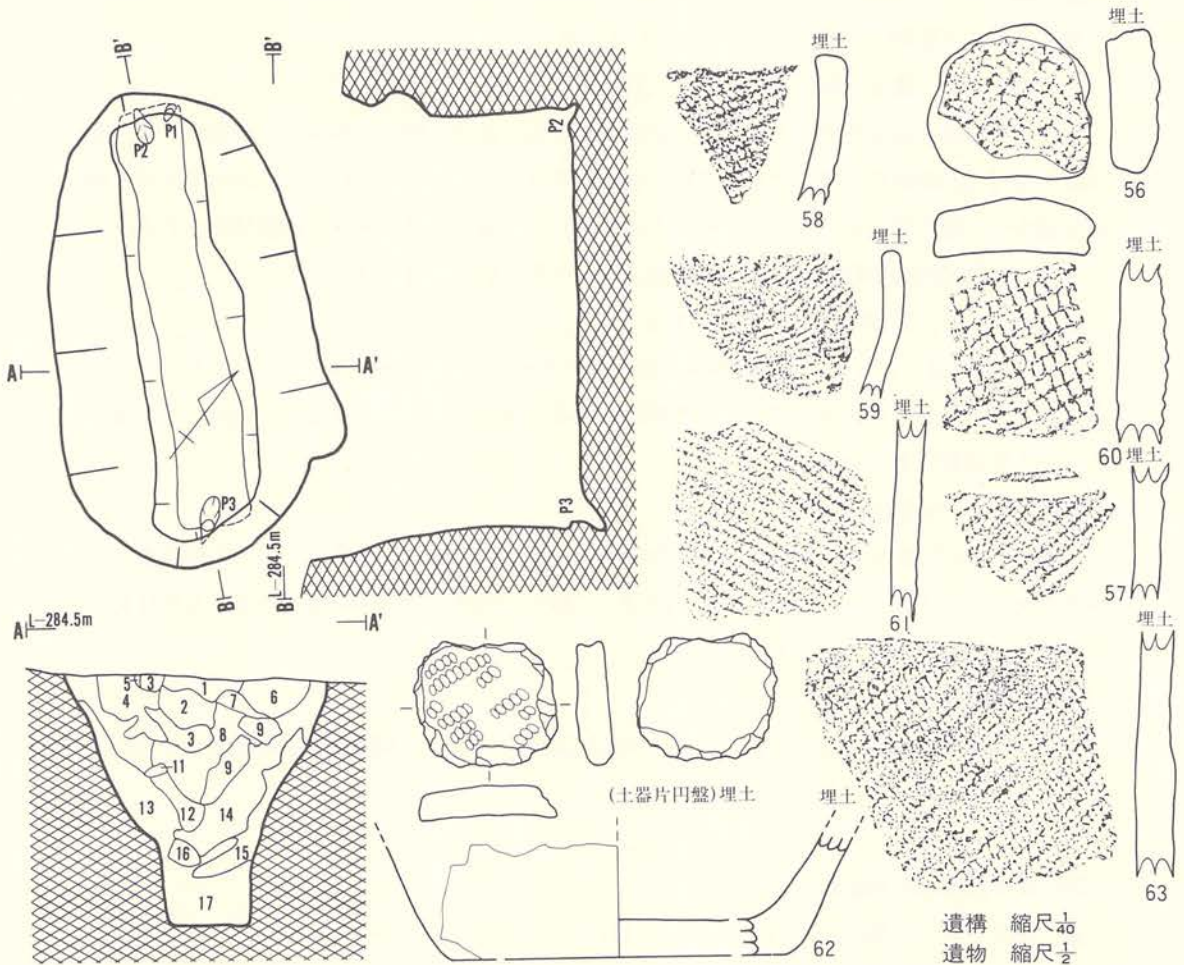
48は中期末葉の土器であるが、49は後期末葉に属する。従って本遺構も後期末葉かそれ以降に位置づけられるであろう。

(28) III a 59陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第284図、P L-103・111)

C区陥し穴状遺構群の中央北東寄りのグリッドIII a 59に位置し、II j 60陥し穴状遺構の北東6.5mで北東向き斜面の上位に立地している。II j 59住居跡、III a 59土坑と重複しているが、本遺構が最も新しい。

開口部径2.55m×1.35m、中段の径2.2m×55cm、底部径2.28m×35～40cmの規模をもち、深さは斜面下位の北西壁で1.19m、斜面上位の南東壁が1.41mである。平面形は開口部が長楕円形であるが、中段～底部は長方形を示し、分類に従えば長軸がN-34°-Wにある長方形に該当する。長軸の北西壁は底面に対して87度で内傾し、南東壁はほぼ直立しており、断面形はピーカー形に近い。短軸の両側壁は底面の上位40cm位まではほぼ直立し、その上位は118度位で外傾しており、断面形は漏斗状を示している。底面にはほとんど凹凸もなく平坦で、水平状態に近い。北西壁際の底面北隅にP₁(径6cm×4cm、深さ7cm)、南隅にP₂(径13cm×9cm、深さ9cm)、南東壁の中央やや南寄りにP₃(径14cm×10cm、深さ15cm)の副穴が検出されている。P₁



III a 59陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	10 YR 7/2 黒褐色	浮石含む。腐植土混入。
2	"	浮石・炭化物含む。火山灰質に腐植土混入。
3	"	基本層序Ⅲ層。
4	10 YR 7/2 黄褐色	火山灰質浮石含む。
5	10 YR 7/2 "	木根跡。
6	10 YR 7/2 "	火山灰質浮石含む。
7	10 YR 7/2 暗褐色	細粒浮石・小礫含む。
8	10 YR 7/2 褐色	浮石含む。
9	10 YR 7/2 黄褐色	火山灰質浮石含む。

10	10 YR 7/2 黒褐色	シルト。細粒浮石含む。
11	10 YR 7/2 褐色	浮石含む。
12	10 YR 7/2 黒褐色	浮石・炭化物含む。
13	10 YR 7/2 褐色	"
14	10 YR 7/2 黒褐色	"
15	10 YR 7/2 暗褐色	極小浮石含む。
16	10 YR 7/2 褐色	細粒浮石含む。
17	10 YR 7/2 "	"

第284図 (28)III a 59陥し穴状遺構

は小規模で浅く、打ち込み方向が著しく南へ傾いている。P₂では対称的な打ち込み方向となるが、立ちあがり延長線はP₃のそれと中央部の検出面下で交差する。P₃の打ち込み方向はP₂と対称をなす。

埋土は17層に分けられる。上位層では2種の火山灰層、中位層に黒褐色シルト質土、下位層に褐色シルト質土が主体をなし、いずれも自然堆積による埋没状況を呈している。(Ko)

〔遺物〕

埋土内から73点の土器片と土製品が2点出土している。

土器 (第284図56～59・61～63、P L—142)

56は体部下端～底部の一部を残す土器片である。57は原体LR横回転による縄文を付した後沈線を引いているが、縄文の磨消があるかは不明である。そのほかは縄文だけをもつ粗製土器の破片である。57は第III群、他は第IX群に属する。

土製品 (第284図30・60、P L—142・157)

2点とも土器の破片を利用し、周辺部を打ち欠いたり磨ったりして形態を整えている。2点とも縄文を付す。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

57は中期末葉の土器であるが、57・59・61は後期後半の特徴をもっている。よって、本遺構も後期後半かそれ以降に位置づけられるであろう。

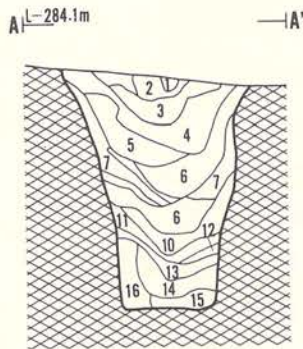
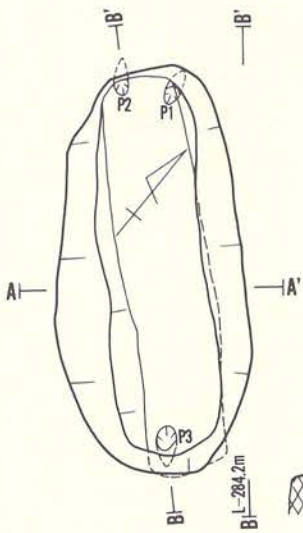
(29) III b 58陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第285図、P L—103・111)

C区陥し穴状遺構群の中では北端に近いグリッドIII b 58・59にまたがって位置し、III a 59陥し穴状遺構の北東3.2mで北東向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.15m×1m、中段2m×50cm、底部径2.12m×45cmの規模をもち、深さは斜面上位の北西壁で1m、斜面上位の南東壁で1.34mである。開口部の平面形は楕円形であるが、中段～底部は四隅が若干丸味をもつ長方形を示し、分類に従えば長軸がN—47°—Wにある長方形に相当する。長軸の北西壁は底面に対して86度、水平に対して88度内傾し、南東壁は底面に対して92度、水平に対してほぼ直立しており、断面形はフラスコ形を示している。短軸の両側壁は底面の上位42cmまでは92度～95度で外傾し、その上位は110度で大きく外折れし、断面形は漏斗状を呈する。底面には若干凹凸があって、中央部が低くくて両端が高く北西に向かって2度で傾斜している。北西壁北隅底面にはP₁(径9cm×9cm、深さ14cm)、南隅にP₂(径9cm×8cm、深さ9cm)、南東壁中央南寄りにP₃(径13cm×11cm、深さ21cm)の副穴が検出されている。いずれも長軸両端の壁際に斜め方向に穿たれる。P₁は隅に位置するが、P₂・P₃は隅からやや離れ、対称的に位置している。立ち上がり方向は39度～39.5度位の勾配であり、P₂・P₃の延長線は中央部付近で接近する。

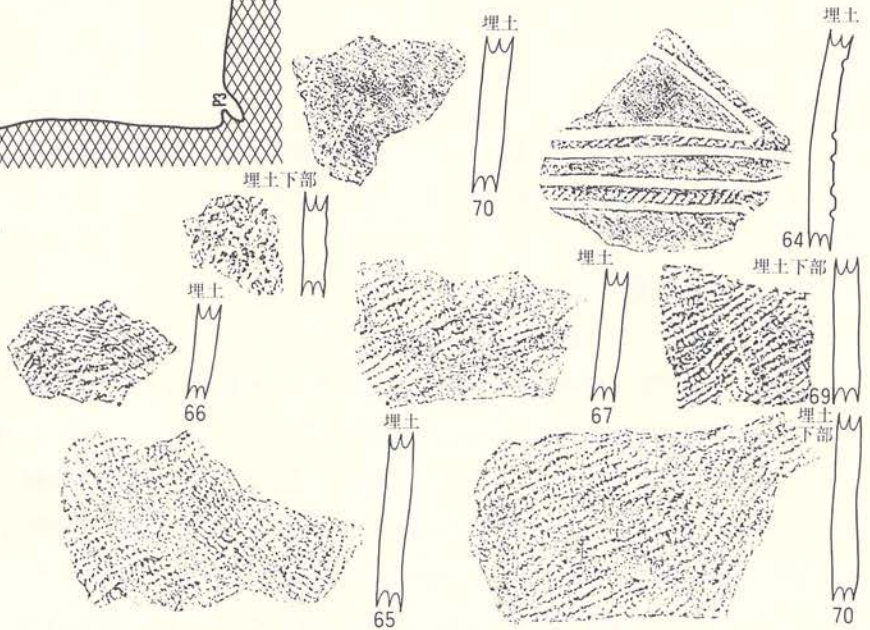
埋土は16層に細分され、最上層に基本層序第III層の降下火山灰がみられ、これより中位層に



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

III b 58 陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	10 YR 5/4 褐色	細粒浮石含む。
2		基本層序 III 層。
3	10 YR 5/4 黒褐色	シルト。浮石含む。
4	10 YR 5/4 *	* 細粒浮石含む。
5	10 YR 5/4 *	* 浮石・炭化物含む。
6	10 YR 5/4 暗褐色	* *
7	10 YR 5/4 *	* 浮石含む。
8	10 YR 5/4~5/2 黄褐色~暗褐色	* *
9	10 YR 5/4 褐色	* 細粒浮石含む。
10	10 YR 5/4 *	* 浮石含む。
11	10 YR 5/4~5/2 黄褐色~黒褐色	* *
12	10 YR 5/4 褐色	* *
13	10 YR 5/4 黒褐色	* 細粒浮石含む。
14	10 YR 5/4 に近い黄褐色	* 浮石含む。
15	10 YR 5/4 褐色	* *
16	10 YR 5/4~5/2 暗褐色~褐色	* 細粒浮石含む。



第285図 (29) III b 58 陥し穴状遺構

は暗褐色シルト質土、下位層では褐色シルト質土が主体をなし、いずれも自然堆積の様相を示す。

(Ko)

〔遺物〕

埋土内から15点の土器片が出土している。

土器 (第285図64~71、P L-142)

64は縄文の付された器面を沈線で区画し、縄文を磨消した土器である。65~69は縄文のみが付された粗製土器である。70・71は無文土器の破片である。以上から64は第IV群3類、70・71

は第VIII群、ほかは第IX群である。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

64の土器は後期前葉の土器であり、他もほぼ同様と推定される。よって、本遺構も後期かそれ以降に属するであろう。

(30) III b 62陥し穴状遺構

〔遺 構〕 (第286図、P L-108)

C区の遺構では南端に近いグリッドIII b 62・63に位置し、II j 60陥し穴状遺構の東南東12mでC区南東の最も高位となる尾根の頂上部に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.65m×90cm、中段の径94cm×62cm、底部径58cm×50cmの規模をもち、深さは中央部で56cmである。平面形は開口部、底部とも長軸がN-48°-Wにある長楕円形を示し、分類に従えば長楕円形に属する。長軸の壁は中央の最深部に向かって緩やかに下降し、底部とも不整になる部分がみられる。短軸の壁面も湾曲した状態で下降し、断面形はボール形に近い形状を示している。このようなことから、本遺構を陥し穴状遺構とするのに問題があるものの、取りあえず陥し穴状遺構として分類した。

埋土は上位層に塊状混土があり、中位の暗褐色土層には炭化物の塊が含まれ、全体が8層に

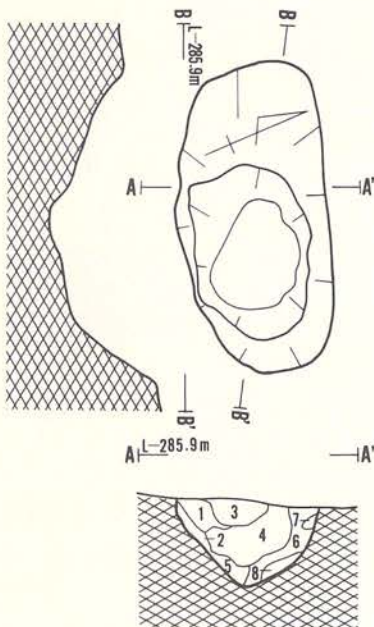
細分される。人為的に埋め戻されている可能性がある。(Ko)

〔遺 物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状・埋土の状況から縄文時代の遺構と推定



III b 62陥し穴状遺構

層位	色 調	土 性
1	10 YR 3/4 暗褐色	細粒浮石含む。黄褐色のブロック含む。
2	〃	混ざり少なく1層より黒っぽい。
3	10 YR 3/4 〃	炭化物含む。黄褐色のブロック含む。
4	〃	浮石含む。炭化物のブロック含む。
5	10 YR 3/4 褐色	暗褐色のブロック含まれる。
6	10 YR 3/4 〃	細粒浮石含む。炭化物少量含む。
7	10 YR 3/4 黄褐色	褐色が混じる。
8	〃	浮石含む。

縮尺 1/40

第286図 (30) III b 62陥し穴状遺構

されるが、時期の特定はできない。

(31) III c 57 陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第287図、P L-103・111)

C区陥し穴状遺構群の最北端でグリッドIII c 57に位置し、III b 58陥し穴状遺構の北東7 mで北東向き緩斜面の中位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.88m×64cm、中段の径1.86m×42cm、底部径1.86m×35cm～40cmの規模をもち、深さは斜面下位の北西壁で77cm、斜面上位の南東壁が96cmである。平面形は若干不整な部分もあるが、検出面、底部とも長方形を示し、分類では長軸がN-55°-Wにある長方形に相当する。

長軸の北西壁は底面に対して80度、水平に対して88度で内傾し、斜面上位の南東壁は底面に対して95°で外傾、水平に対して87.5度で内傾しており、断面形は平行四辺形に近いピーカー形を示す。短軸の両側壁は94度～98度で外傾し、断面形はピーカー形である。底面には僅かに起伏があるものの、ほぼ平坦で全体が8度で北西に傾斜している。北西壁の底面には北隅にP₁(径



第287図 (31)III c 57 陥し穴状遺構

3cm×8cm、深さ9cm)、南隅にP₂(径4cm×7cm、深さ11cm)、南東壁の中央やや南寄りにP₃(径13cm×12cm、深さ9cm)の副穴が検出されている。P₁・P₂は小型で浅く、壁際の斜方向に穿たれる。P₃はP₁とほぼ対応する位置にあるが、方向はそれぞれ異なっている。

埋土は9層に分けられ、最上層に基本層序第Ⅲ層の降下火山灰、以下は暗褐色、または褐色シルト質土であるが、最下層にのみ黒褐色シルト質土の堆積がみられる。いずれも自然堆積に伴う堆積とみられる。(Ko)

〔遺物〕

埋土内から30点の土器片と、土製品が1点出土している。

土器 (第287図、72~79、P L-142)

72は無文の器面に横方向に単一の沈線を乱雑に付す土器である。73は磨消縄文手法による文様をもつ土器である。79は無文の器面に並行する沈線で楕円文を付している。74~78は羽状や単節の縄文だけを施す土器である。以上から72は第Ⅷ群、73は第Ⅵ群4類、79は第Ⅵ群1類、ほかは第Ⅸ群に相当する。

土製品 (第287図31、P L-157)

土器片を円盤状に整形した土器片円盤が1点出土している。器面には単節の斜行縄文のみを付す。径3.8cm×3.6cm、厚さ8mmの大きさがある。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

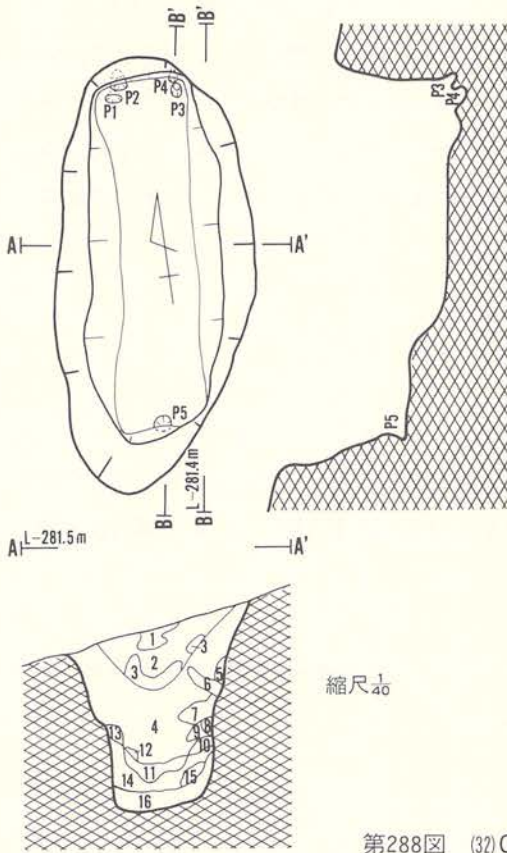
出土した土器の内73は後期後葉に属することから、本遺構も後期後葉かそれ以降に位置づけられるであろう。

(32) 0 j 73陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第288図、P L-103・111)

D区的最南西端グリッド0 j 73に位置し、I a 73陥し穴状遺構の西3mで北西向き斜面の最下位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.3m×1.05m、中段径1.95m×70cm、底部径1.85m×50cmの規模をもち、深さは斜面下位の北壁が60cm、斜面上位の南壁が95cmである。開口部の平面形は若干歪んだ長楕円形であるが、中段~底部は隅丸の長方形を示し、分類に従えば長軸がN-5°-Eにある長方形に該当する。長軸の北壁は底面に対して76度、水平に対して86度で内傾し、南壁は底面に対して116度、水平に対して106度で外傾し、断面形は平行四辺形に近い。短軸の両側壁は底面の上位55cmまではほぼ直立し、その上位は120度で外折し、断面形は漏斗状に近似している。底面には大き



第288図 (32) O j 73陥し穴状遺構

な起伏があり、北に10度で傾斜している。長軸の北壁西隅底面にはP₁(径9cm×9cm、深さ8cm)、P₂(径9cm×5cm、深さ12cm)、東隅にはP₃(径12cm×7cm、深さ7cm)、P₄(径7cm×5cm、深さ6cm)、南壁中央にP₅(径12cm×11cm、深さ4cm)の副穴が検出されている。立ちあが

0 j 73陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 にぶい黄褐色	火山灰。暗褐色土が混入。
2	7.5YR 5/6 灰褐色	白色火山灰のブロック含む。
3	7.5YR 5/6 褐灰色	火山灰。基本層序Ⅲ層。
4	7.5YR 5/6 暗褐色	白色浮石混入する。
5	7.5YR 5/6 褐色	にぶい黄褐色土が混入する。
6	7.5YR 5/6 黒褐色	白石浮石含む。
7	10 YR 5/6 暗褐色	にぶい黄褐色のブロック含む。
8	7.5YR 5/6 にぶい褐色	炭化物少量含む。
9	7.5YR 5/6 褐色	白色浮石含む。
10	10 YR 5/6 黄褐色	褐色土混入する。
11	10 YR 5/6 暗褐色	々
12	7.5YR 5/6 々	にぶい褐色土混入。
13	7.5YR 5/6 褐色	暗褐色土多く含む。
14	10 YR 5/6 黄褐色	々
15	10 YR 5/6 にぶい黄褐色	黄褐色土含む。
16	10 YR 5/6 暗褐色	シルト。黄褐色ブロック状に混入。

りの角度はP₂—50度、P₃—35度、P₄—31度、P₅—30度で、P₅とほかは検出面の若干下位で交差する。北壁の両隅には各2コの副穴があることから、杭の打ちなおしがあったものと推定される。

埋土は黄褐色・灰褐色・暗褐色等の砂質土やシルト質土が堆積し、16層に細分される。上位層には降下火山灰とその混合土、その下位は中央部が白色浮石の混入する砂質土、壁際から下位層は黄褐色や暗褐色のシルト質土である。自然堆積による埋没の様相を呈している。(Ki)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

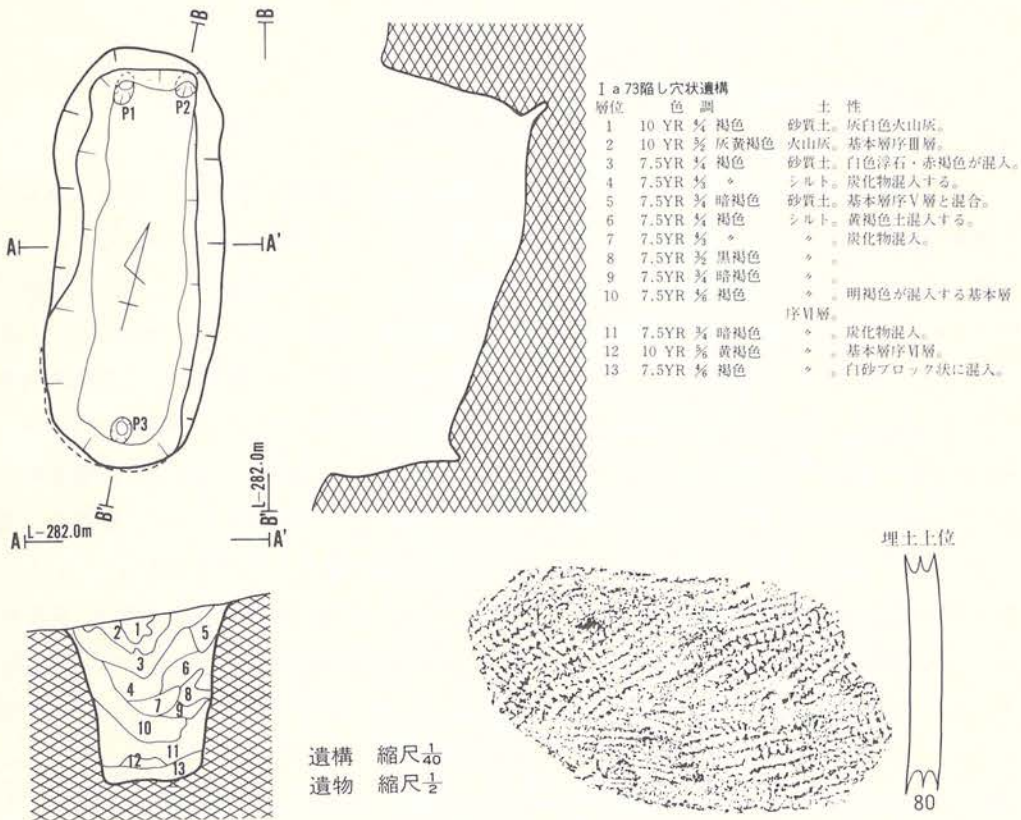
形状・埋土の状況から縄文時代の遺構と推定されるが、時期は定かでない。

(33) I a 73陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第289図、P L—104・112)

D区南西端に近いグリッド I a 73 に位置し、0 j 73 陥し穴状遺構の東 3 m で、北西向き斜面の下位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径 2.2m × 90cm、中段径 2.12m × 65cm、底部径 1.9m × 40cm ~ 50cm の規模をもち、深さは斜面下位の北壁 90cm、斜面上位の南壁は 65cm である。開口部の平面形は長楕円形であるが、中段 ~ 底部は若干歪んだ長方形を示し、分類では長軸が N-10°-W にある長方形に相当する。長軸の北西壁は底面に対して 92 度、水平に対して 97 度で外傾し、南東壁は底面に対して 110 度、水平に対して 96 度で外傾しており、断面形はバケツ形に近い形状を示している。短軸の両側壁は底面の上位 48cm までは 93 ~ 95 度で外傾し、その上位はさらに強く外折れしており、断面形はピーカー形に近い。底面には若干起伏があるとともに、北西に向かって 15 度で傾斜している。北西壁両隅には南隅に P₁ (径 11cm × 9cm、深さ 7cm)、北隅に P₂ (径 10cm × 9cm、深さ 12cm)、南東壁中央に P₃ (径 15cm × 12cm、深さ 12cm) が検出されている。立ちあがりの角度をみると、P₁ - 23 度、P₂ - 45 度、P₃ - 35 度となり、それぞれが遺構の内部で交差する状況を示している。



第289図 (33) I a 73 陥し穴状遺構

埋土は灰黄褐色・褐色・暗褐色・黒褐色等を示す砂質土・シルト質土で構成され、12層に細分されている。2層は十和田 a 降下火山灰で、3層は白色浮石が多く混入する砂質土、埋土中位は褐色のシルト質土で、その下位には粘性のある暗褐色～褐色シルトが堆積する。堆積状況は自然埋没したことを示すものであろう。(Ki)

〔遺物〕

埋土内から土器片が2点出土している。

土器 (第289図80、P L—142)

器面に原体L R横回転による単節斜行縄文を付す粗製土器で、第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期後半頃の特徴をもっていることから、本遺構も後期後半かそれ以降に属するであろう。

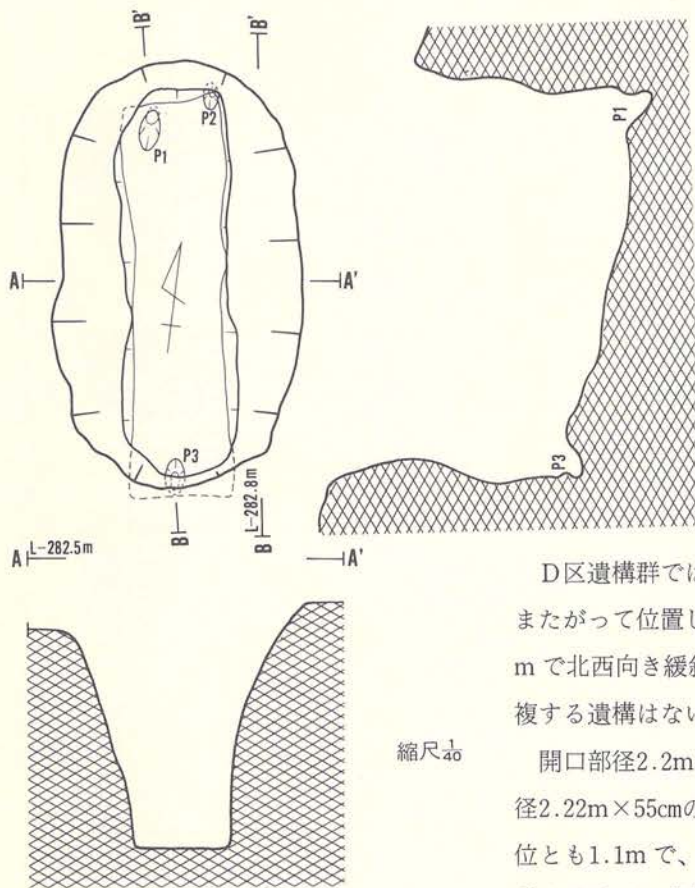
(34) I b 72陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第290図、P L—104・112)

D区遺構群の南西部でグリッド I b 72・73と I e 72・73にまたがって位置し、I a 73陥し穴状遺構の東6 mで北西向き緩斜面の下位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.3m×1.3m、中段2.08m×58cm、底部径2.1m×55cmの規模をもち、深さは斜面下位の北壁で1.12m、斜面下位の南壁は1.2mである。開口部の平面形は長楕円形であるが、中段～底部は長方形を示し、分類に従えば長軸がN-10°-Wにある長方形に相当する。長軸の北壁は底面に対して75度、水平に対して88度で内傾し、南壁は底面に対して97度で外傾しているが、水平に対しては84度で内傾しており、断面形はフラスコ形に近い形状を示している。短軸の両側壁は底面の上位50cmまでは95度位で外傾し、その上位は大きく外折れしており、断面形は漏斗状に近い。底面は長軸の両端が高く、全体が北に向かって13度で傾斜している。長軸北壁の底面には西隅にP₁(径15cm×11cm、深さ17cm)、東隅にP₂(径13cm×10cm、深さ10cm)、南壁のほぼ中央にP₃(径15cm×13cm、深さ8cm)の副穴が検出されている。これらの副穴はいずれも斜めに打ち込まれた杭穴状で、P₁が31度、P₃が53度で立ちあがり、長軸の中央やや北寄りで交差する。また、P₁・P₂・P₃は中軸線のほぼ中央で交差する。

埋土土層図は作業の手違いから作成していないが、D区の他の陥し穴状遺構と差がなく、上位に十和田 a 降下火山灰がレンズ状に堆積している。(Ki)



第290図 (34) I b 72陥し穴状遺構

対して82度で内傾し、南東壁では底面に対しては95度であるが水平に対しては85度で内傾しており、断面形はフラスコ形に近い。短軸の南西壁は99度、北東壁は83度を示し、両壁がほぼ平行しており、断面形は斜位のピーカー形といえる。底面にやや大きな起伏があり、北西に向かって10度で傾斜している。北西壁の南西隅の底面にはP₁(径20cm×16cm、深さ13cm)、北東隅にP₂(径8cm×6cm、深さ5cm)、南東壁のほぼ中央にP₃(径13cm×12cm、深さ9cm)の副穴が検出されている。いずれも斜位に打ち込まれた杭穴状を示し、P₁とP₃は長軸の中央やや南東寄りの検出面付近で交差し、P₁・P₂・P₃は中軸線上のほぼ中央で交差する。

埋土は灰黄褐色・暗褐色・黒褐色・明褐色・褐色等の降下火山灰・砂質土・シルト質土が堆積し、14層に細分される。1層は十和田a降下火山灰層、2・3層は浮石が多く混入する暗褐色～黒褐色土、その下層は暗褐色・黒褐色・褐色のシルト質土が堆積し、基本層序第V～VI層を

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状・埋土の状況から縄文時代の遺構であろう。

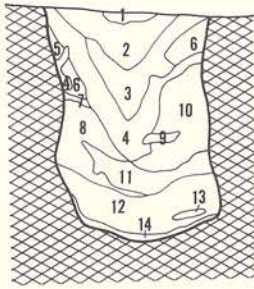
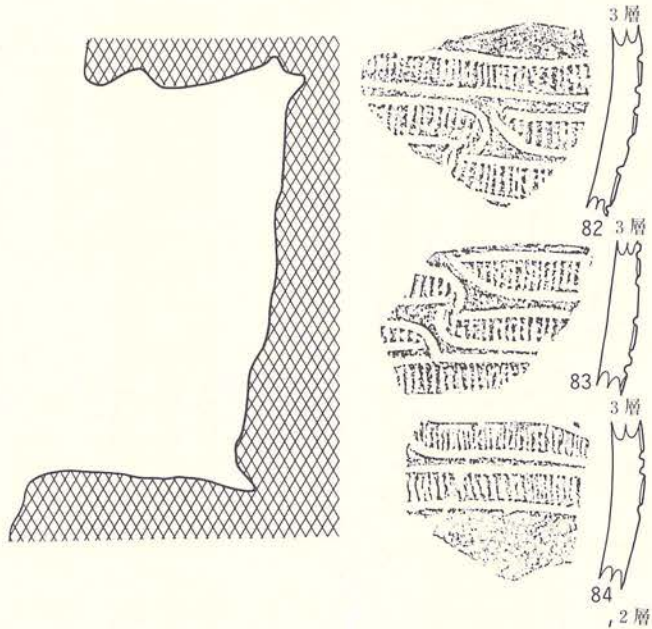
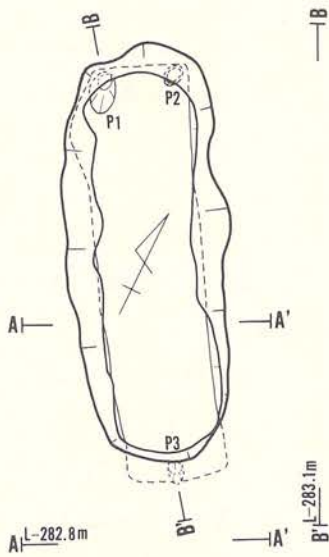
(35) I d 72陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第291図、P L-104・112)

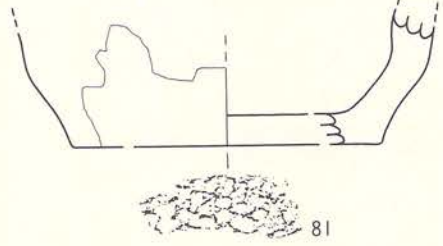
D区遺構群では南西のグリッド I d 71・72にまたがって位置し、I b 72陥し穴状遺構の東8mで北西向き緩斜面の下位に立地している。重複する遺構はない。

縮尺 $\frac{1}{40}$

開口部径2.2m×85cm、中段2m×55cm、底部径2.22m×55cmの規模をもち、深さは斜面上・下位とも1.1mで、開口部と中段の平面形は楕円形を示すが、底部は長方形となっており、分類では長軸がN-30°-Wにある長方形に該当する。長軸の北西壁は底面に対して73度、水平に



遺物 縮尺 $\frac{1}{40}$
土器 縮尺 $\frac{1}{2}$



I d 72 陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	5 Y 灰オリーブ色	大山灰 (基本層序Ⅲ層)
2	7.5YR 暗褐色	軽石・浮石含む。
3	7.5YR 黒褐色	赤褐色浮石・炭化物含む。
4	7.5YR 明褐色	黒褐色混じる。浮石含む。
5	7.5YR 暗褐色	浮石含む。
6	褐色	＊
7	7.5YR 褐色	黒色含む。
8	10 YR 暗褐色	黒褐色含む。
9	10 YR 黒褐色	褐色土混入する。
10	10 YR 黄褐色	褐色土・黒褐色土が混入する。
11	10 YR 黒褐色	軽石含む。少量の褐色土混じる。
12	10 YR 褐色	浮石含む。
13	10 YR 黒色	腐植土に、におい黄褐色含む。
14	10 YR 暗褐色	浮石土・軽石含む。

第291図 (35) I d 72 陥し穴状遺構

起源とする浮石が多く混入する。レンズ状の堆積であることから、自然埋没の遺構であろう。

〔遺物〕

埋土内から7点の土器片が出土している。

土器 (第291図81~84、P L-143)

81は体部下端~底部を残す破片で底面には網代痕をもつ。82~84は無文の器面に並行と沈線

で入組文的に区画され、入組文部分に刻目を充填する。82～84は同一個体の可能性が強い。81は第Ⅷ群、82～84は第Ⅵ群 8類に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期末葉であることから、本遺構も同時期かそれ以降であろう。

(36) I d 73陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第292図、P L—105・113)

D区遺構群では南端に近いグリッド I d 73・74と I e 73・74にまたがって位置し、I d 72陥し穴状遺構の南7mで北西向き緩斜面の中位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.15m×1.8m、底部径1.05m×85cmで、深さは斜面下位の北西壁で、1.3m、斜面上位の南東壁が1.75mである。平面形は開口部が楕円形状であるが、底部は崩壊のため一部不明であるが不整の楕円形を示すと推定され、分類では長軸がN—16°—Wにある楕円形に該当する。長軸方向の北西壁は100度で外傾して立ちあがるが、南壁は120度で外傾し、断面形は不整なバケツ形である。短軸方向の両壁は下部が直立気味の部分が多く、上半は大きく外反している。底面には凹凸もなく平坦であるが、北西に大きく傾斜し、さらに北西壁の直下に径50cm、高さ40cm、奥行き60cm位の水抜け穴跡と推定される横穴状の副穴をもつ。

埋土は黒色・黒褐色・にぶい黄褐色・暗褐色・褐色等の降下火山灰、砂質土、シルト質土が堆積し、14層に細分される。4層は褐色を示す微粒の白頭山火山灰、6層は十和田a降下火山灰が堆積し、1～3層は白色浮石や炭化物が混入する黒色砂質土、5層は褐色火山灰(4層)が混入する砂質シルト、7層は基本層序第V層起源の浮石が混入する砂質シルトである。自然堆積による埋没を示している。

〔遺物〕

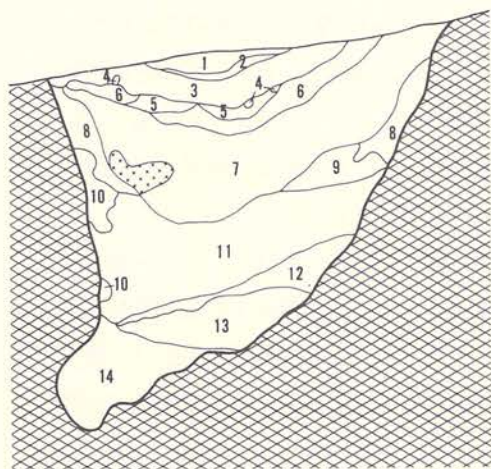
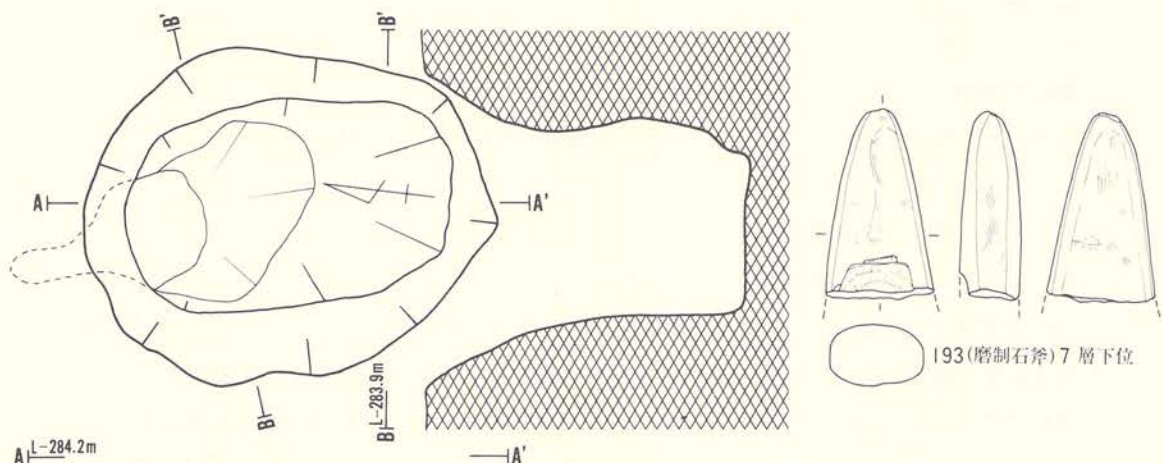
石器が2点出土している。

土器

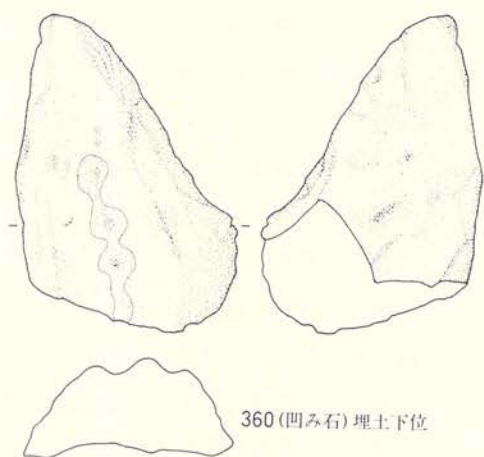
出土していない。

石器 (第292図193・360、P L—166・174)

193は刃部寄り約½を欠失した磨製石斧で、大きさは全長7.5cm、幅3.7m、厚さ2.4cm、重さ120gで、全面に研磨時の擦痕をもっている。石材は北上山地古生界産の輝石玢岩である。360は歪んだ三角形を示す直角礫の片面を使用した凹み石である。長さ11.3cm、幅8.6cm、厚さ5.6cm、重さ482gの大きさをもつ奥羽山地新第三系中新統産の両輝石安山岩を石材としている。



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{3}$



360(凹み石)埋土下位

I d 73陥し穴状遺構

層位 色調

- 1 7.5YR 弱 黒色
- 2 * * *
- 3 7.5YR 弱 *
- 4 10 YR 弱 褐色
- 5 10 YR 弱 黒褐色
- 6 10 YR 弱 ぶい黄褐色
- 7 7.5YR 弱 暗褐色

土性

- 砂質土。白色浮石混入。
- 炭化物混入する。
- 砂質土。白色浮石・炭化物が混入。
- 微粒の火山灰(十和田a?)
- 砂質シルト。褐色火山灰ブロック状に混入。
- 細粒火山灰。基本層序III層。
- 砂質シルト。赤褐色浮石混入。

- 8 7.5YR 弱 褐色 シルト。基本層序V層。
- 9 7.5YR 弱 黒褐色 *
- 10 7.5YR 弱 褐色 *
- 11 7.5YR 弱 黒色 *
- 12 7.5YR 弱 褐色 *
- 13 7.5YR 弱 黒色 *
- 14 7.5YR 弱 黒褐色 *

第292図 (36) I d 73陥し穴状遺構

〔遺構の時期〕

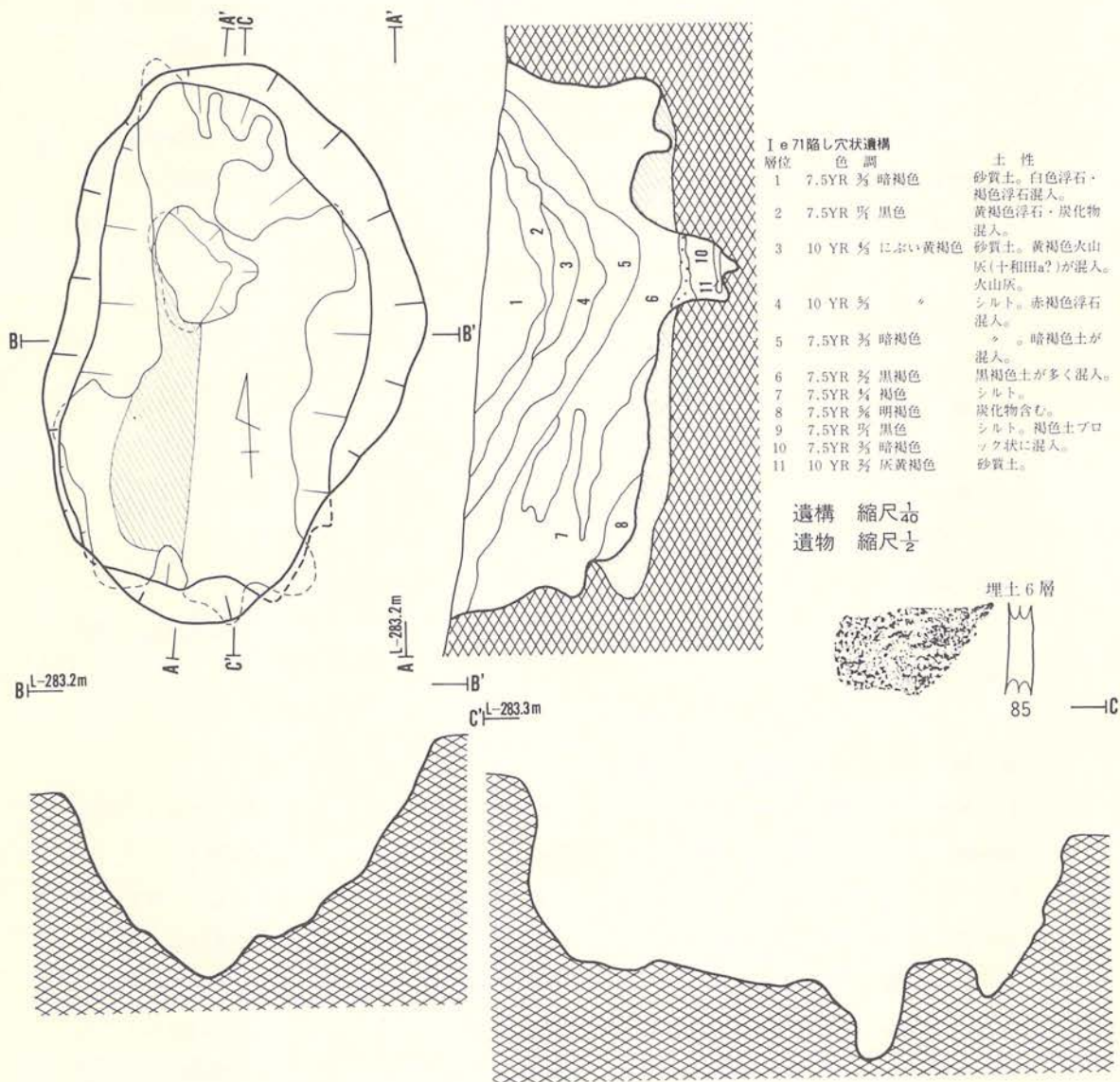
形状・埋土の状況から縄文時代と推定されるが、時期の特定はできない。

(37) I e 71 陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第293図、P L-104)

D区遺構群の中央南西寄りグリッド I e 71・72 にまたがって位置し、I d 72 陥し穴状遺構の東北東 4 m で北西向き緩斜面の下位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径 3.15 m × 2 m、中段の径 2.8 m × 1.55 m、底部径 3.2 m × 1.3 m の規模をもち、深さは



第293図 (37) I e 71 陥し穴状遺構

最深部で1.4mであるが、斜面下位の北壁が99cm、斜面上位の南壁は84cmである。開口部の平面形は長軸がN-7°-Eにある長楕円形を示すが、底部は構築時の原形を残さないほど崩落が著しいため定かでないものの、本来は長方形と推定される。長軸の北壁は水平に対して116度で外傾し、南壁は80度で内傾しており、断面形は平行四辺形に近い。短軸の壁は、西壁が110度～130度、東壁は130度～150度で内湾気味に外傾し、断面形は丸底の鍋状を示している。底面と東壁の中央から下部にかけて雨裂によると推定される大小の凹凸があり、底面の北側に径60cm×45cm、深さ40cmの水抜けと思われる穴がある。副穴の痕跡は検出されていないが、崩壊によって残っていない可能性が強い。

埋土は暗褐色・黒褐色・黒色・にぶい黄褐色・褐色等の降下火山灰、砂質土、砂質シルト、シルト質土が堆積し、10層に細分される。4層は十和田a降下火山灰層、1層は同火山灰が混入する砂質土、2層は炭化物が混入する黒色砂質シルトである。自然堆積による埋没と考えられる。

〔遺物〕

埋土内から土器片が1点出土している。

土器 (第293図85、P L-143)

器面に縄文のみを施文する小破片で、第IX群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

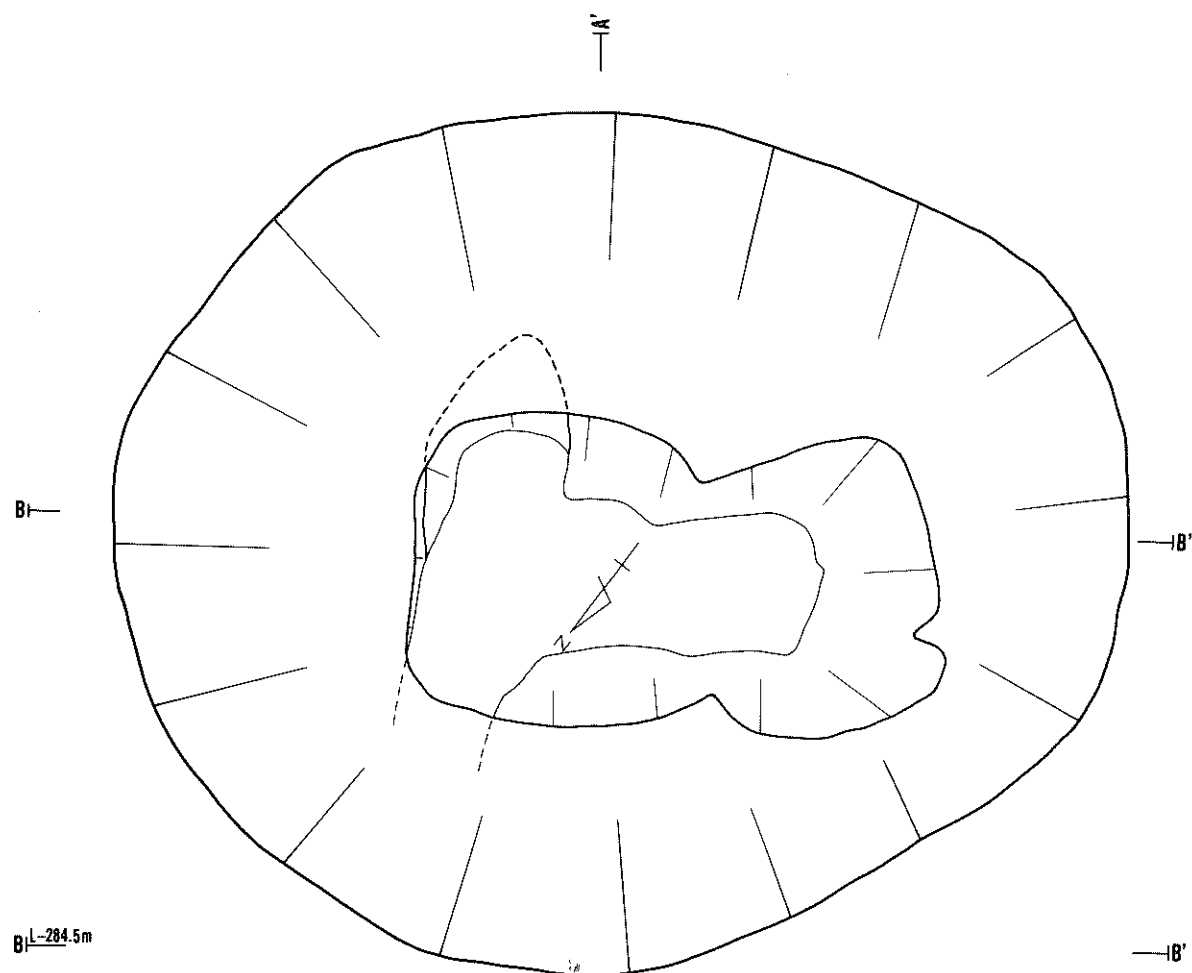
出土した土器の時期が定かでないが、後期頃の特徴をもっている。よって、本遺構もその頃かそれ以降に位置づけられるであろう。

(38) I e 73陥し穴状遺構

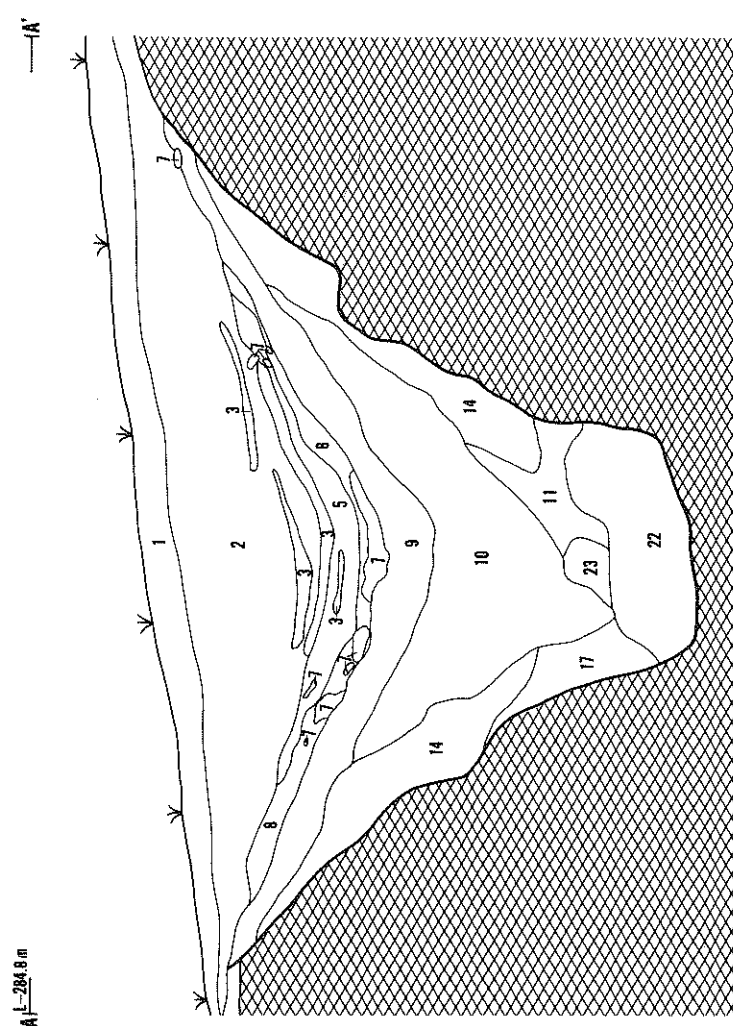
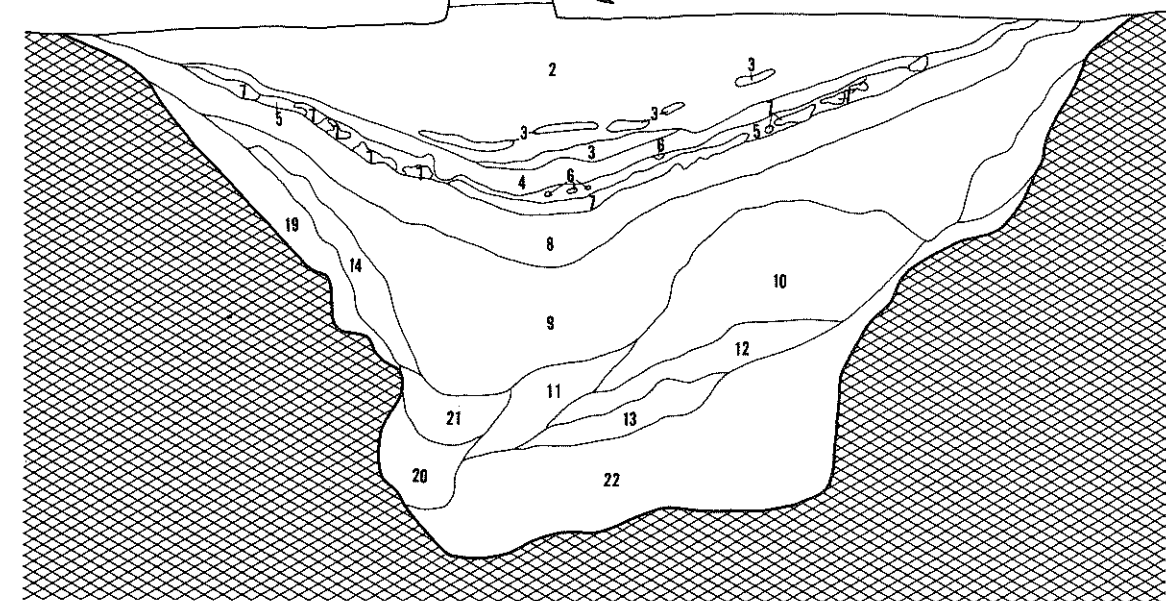
〔遺構〕 (第294図、P L-105・113)

D区遺構群の南端に近いグリッド I e 73・74と I f 73・74にまたがって位置し、I d 73陥し穴状遺構の東3mで北西向き斜面の中位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径5.4m×4.55m、中段2.8m×1.65m、底部径2.05m×80cm位の規模をもち、深さは最も深い南東壁で2.77m、長軸の北東壁で2.6m、南西壁が2.5mである。開口部の平面形は楕円形であるが、中段～底部は崩壊によって不整ではあるが略長方形形状を示し、分類では長軸をN-42°-Eにもつその他の部類に入る。長軸の南西壁は100度で外傾して立ちあがり、中位～上位は大きく湾曲するが平均して130度外傾している。短軸の両壁も長軸のそれとほぼ同様の状況を示し、断面形は漏斗状に近い形状を示している。底面には凹凸があり、北東側に約10度で傾斜し、30cmの高低差がある。北東壁の北西隅には幅55cm、高さ40cmの水抜け跡と考えられる横穴をも



B1-284.5m



I e73陥し穴状遺構

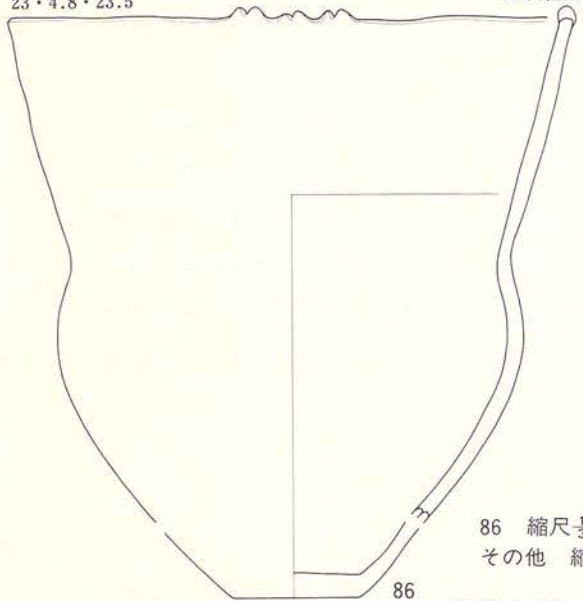
層位	色調	土性
1	7.5YR 暗褐色	砂質土。白色浮石混入。
2	7.5YR 黒色	砂質シルト。炭化物混入。
3	7.5YR 灰	泥炭状物質。
4	7.5YR 黒褐色	砂質シルト。浮石混入。
5	7.5YR 灰	灰白色火山灰混入。炭化物含む。
6	10 YR 褐色	微粒の火山灰。
7	10 YR におい黄褐色	砂質火山灰。
8	7.5YR 暗褐色	シルト。褐色浮石・炭化物混入。
9	7.5YR 黒褐色	シルト。褐色浮石混入。
10	7.5YR 極暗褐色	明褐色シルト混入。
11	7.5YR 黒褐色	シルト。褐色浮石混入。
12	7.5YR 暗褐色	シルト。軽石混入。
13	7.5YR 褐色	シルト。炭化物混入。
14	7.5YR 暗褐色~褐色	砂質シルト。
15	7.5YR 暗褐色	砂質土。基本層序V層。
16	7.5YR 明褐色	シルト。炭化物混入。
17	7.5YR 黒褐色	シルト。褐色土混入。
18	7.5YR 暗褐色	シルト。明黄褐色土混入。
19	7.5YR 明褐色	シルト。炭化物少量含む。
20	7.5YR 極暗褐色	シルト。基本層序VI層。
21	7.5YR 褐色	シルト。
22	7.5YR 明褐色	シルト。
23	7.5YR におい褐色	シルト。

縮尺 1/50

第294図 (37) I e73陥し穴状遺構

23・4.8・23.5

底面直上



86 縮尺 $\frac{1}{3}$
その他 縮尺 $\frac{1}{2}$

北西埋土 5層



95

北西埋土 4層



96

南西埋土 2層



97

北西埋土 5層



100

北西埋土 5層



99

南東埋土 4層



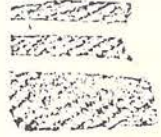
94

北西埋土 4層



89

埋土



88

北埋土



87

埋土 5層



92

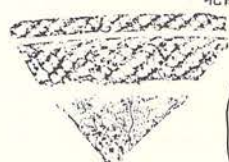
南埋土 1層

北西埋土 5層



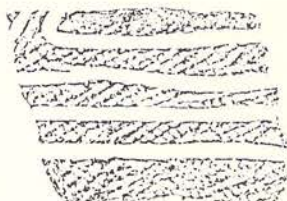
98

北西埋土 4層



93

壁際 4層



90

第295図 (38) I e73陥し穴状遺構(遺物)

つが、奥行きは1 mまで確認したがそれ以上は不能であった。本遺構は崩壊が著しく、原形がどの程度遺存しているか定かでないが、いわゆる貯蔵穴状の土坑とするには問題があるため、形状が最も近似している陥し穴状遺構とした。

埋土は暗褐色・黒色・黒褐色・褐色・にぶい黄褐色・明褐色等の降下火山灰・砂質土・砂質シルト・シルト質土が堆積し、22層に細分されている。埋土上位の2・4層は白色浮石が多く混入する黒～黒褐色砂質土、塊状に堆積する6層は白頭山火山灰、7層は十和田a降下火山灰層である。3層は植物遺体と思われる泥炭状のもので、薄い層状の堆積を示す。中位の8～12・14層は褐色浮石・炭化物が混入する暗褐色～黒褐色シルト質土である。下位の13・20・22層は壁の崩落と推定される基本層序第IV・V層起源のシルト質土が多く混じった褐色や明褐色を示す粘性の強いシルト質土である。自然埋没の堆積状況を示すものであろう。

〔遺物〕

埋土内から106点、底面直上から1点の土器が出土している。

土器 (第295図86～100、P L—143)

86は全体の約 $\frac{1}{2}$ を残す土器で底面直上から出土している。器面に文様をもたない無文土器で、体部の中位が窄み、その上位が口縁端部まで直線的に外傾する器形で、口縁部に3個一對のB形小突起がつく。大きさは口縁部径22.5cm、器高23.5cm位と推定される。87～90は縄文を施文した器表を沈線で区画し、縄文を磨消する土器である。91は頸部下端に原体側面押圧による原体圧痕文を1条付した後その下部全面に縄文を施文している。頸部は無文とし、口縁部に縄文を付す。92・93もほぼ同様であろう。94の器面には網目状燃糸文を付す。95・96・98・99は縄文、97は燃糸文を付す。100は無文土器で86とほぼ同じ様相を示す。以上から、86・100は第VIII群、87～90は第IV群3類、ほかは第IX群に該当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

底面直上から出土した86は後期末葉の土器であることから、本遺構も後期末葉かそれ以降に位置づけられるであろう。

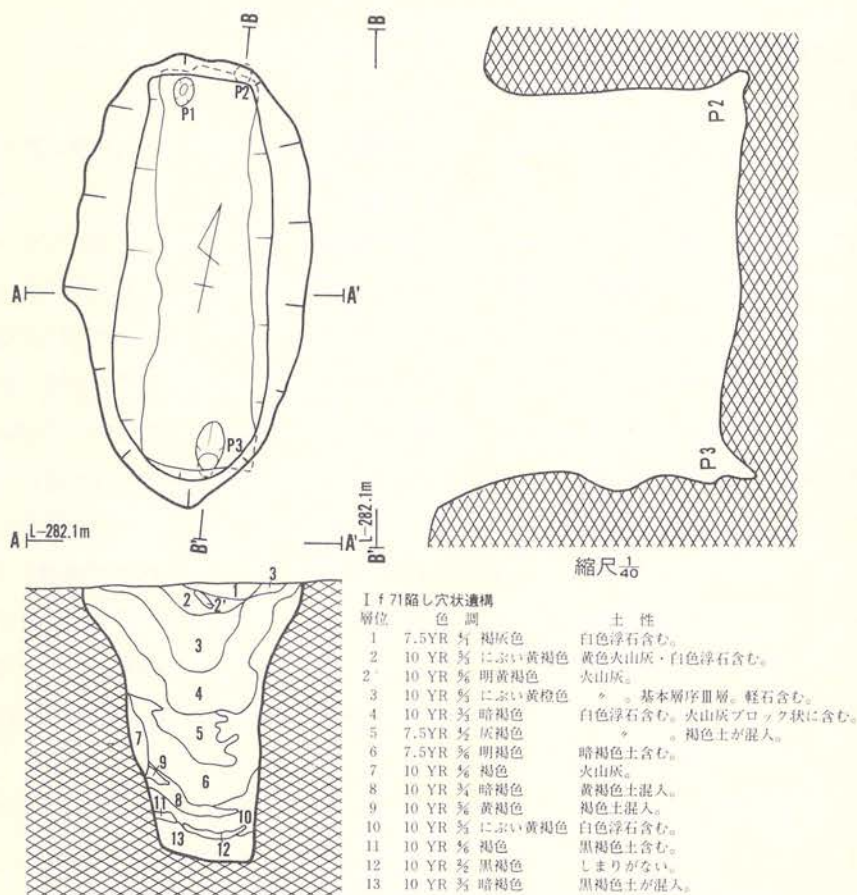
(39) I f 71陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第296図、P L—106・112)

D区陥し穴状遺構群のほぼ中央に近いグリッドI f 71に位置し、I e 71陥し穴状遺構の北東3 mで北西向き緩斜面の中位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.36m×1.26m、中段の径2.12m×77cm、底部1.95m×50cmの規模をもち、深さは

斜面下位の北壁が1.23m、斜面上位の南壁が1.44mである。開口部の形状は楕円形を示すが、中段～底部は隅が若干丸味をもつもののほぼ長方形で、分類に従えば長軸がN-12°-Wにある長方形に該当する。長軸の北壁は底面に対して84度、水平に対して88度で内傾し、南壁は底面に対して86度、水平に対して90度を示しており、断面形がフラスコ形気味の平行四辺形に近い形である。短軸の両壁は底面の上位90cmまでは92度～95度で外傾するが、その上位は110度と強く外折しており、断面形は漏斗状に近い。底面には起伏があり、さらに北へ4度で傾斜している。長軸北壁の両隅底面には西隅にP1（径15cm×12cm、深さ7cm）、東隅にP2（径9cm×9cm、深さ4cm）、南壁の中央東隅寄りにP3（径22cm×16cm、深さ20cm）の副穴が検出されている。いずれも斜め方向に打ち込まれた杭穴状を示し、それぞれP1-23度、P2-25度、P3-35度の角度で立ちあがっている。P2・P3の立ちあがり延長線は検出面より下位で交差し、



第296図 (39) I f 71 陥し穴状遺構

P1・P2・P3は中軸線上付近で交差する。

埋土は褐灰色、にぶい黄褐色、暗褐色、灰褐色、褐色、明褐色等の降下火山灰、砂質土、シルト質土が堆積し、14層に細分されている。1・2層は白色浮石が混入する砂質土、2層は明黄褐色を示す白頭山火山灰、3層は十和田a降下火山灰、4層は十和田a降下火山灰が混入する砂質土である。6層以下の埋土下位は暗褐色・黒褐色や褐色のシルト質土である。自然埋没の堆積状況を示すものであろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状、埋土の状況から縄文時代の遺構と推定されるが、時期の特定はできない。

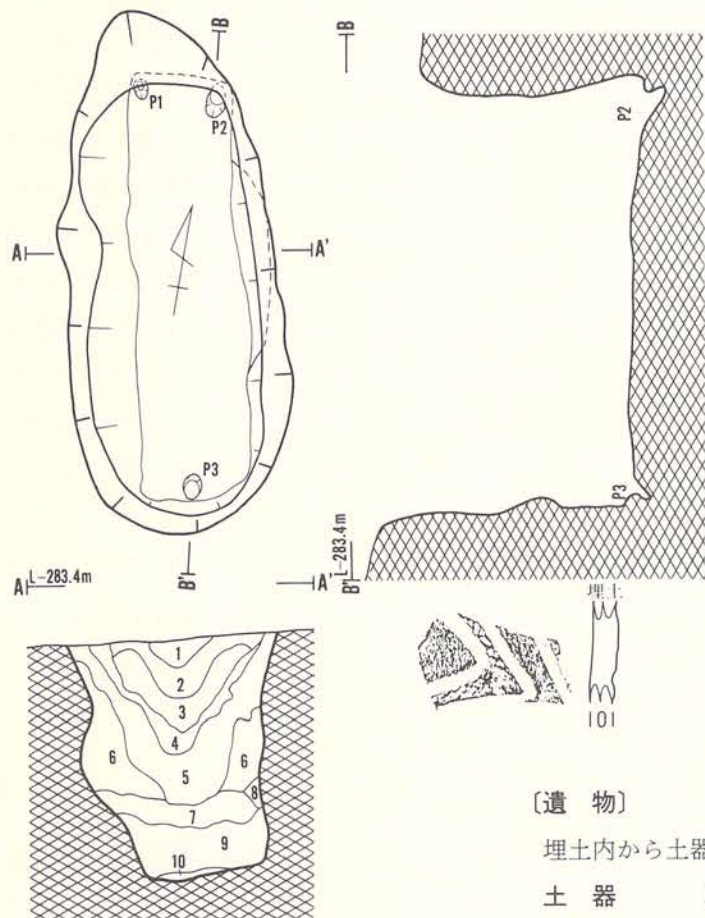
(40) Ig71陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第297図、PL-106・113)

D区陥し穴状遺構群のほぼ中央グリッドIg71に位置し、If71陥し穴状遺構の東5mで北西向き緩斜面の中位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.8m×1.15m、中段2.3m×80cm～90cm、底部2.25m×55cmの規模をもち、深さは斜面下位の北壁が1.15m、斜面上位の南壁が1.36mである。開口部～中段の平面形は長楕形を示すが底部は長方形で、分類に従えば長軸をN-12°-Wにもつ長方形に該当する。長軸の北壁は底面に対して73度、水平に対して75度で内傾し、南壁は底面に対して93度、水平に対して90度を示しており、断面形はフラスコ形的な平行四辺形である。短軸の西壁はやや不規則に外傾し、東壁はほぼ直立気味に立ち上がり、断面形は若干不整であるがピーカー形に近い。底面には幾分起伏があり、中央部が盛りあがって副穴付近が僅かに低くなっており、全体が北に2度で傾斜している。北壁両隅の底面には西隅にP1(径12cm×8cm、深さ9cm)、東隅にP2(径15cm×9cm、深さ14cm)、南壁の中央にP3(径10cm×8cm、深さ7cm)の副穴が検出されている。いずれも斜め方向に打ち込まれた杭穴状を示し、それぞれがP1-45度、P2-30度、P3-30度の角度で立ち上がり、P2とP3は底面に上位約1mで交差する。また、P1・P2・P3は中軸線上で交差するように配置されている。

埋土はにぶい黄褐色、褐色、暗褐色、黄褐色の降下火山灰や砂質土、シルト質土で構成され、10層に細分される。2層は十和田a降下火山灰層、1層は同火山灰が混入する砂質土、3層も粒径2～4mmの白色浮石と径2～5cmの浮石が混入する砂質土である。中・下位は軟らかいシルト質土が堆積している。自然堆積による埋没を示すものであろう。(Ki)



I g 71陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 濃い黄褐色	灰白火山灰含む。黄褐色を含む。
2	10 YR 8/2 *	堅くしまる。
3	7.5YR 5/2 褐色	白色浮石含む。軽石混入する。
4	7.5YR 3/2 暗褐色	白色浮石・赤褐色浮石含む。
5	7.5YR 5/2 褐色	基本層序V層。
6	7.5YR 5/2 明褐色	*
7	10 YR 5/2 褐色	シルト。
8	7.5YR 5/2 明褐色	軟らかい。
9	10 YR 5/2 黄褐色	シルト。
10	7.5YR 5/2 褐色	粘性あり。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第297図 (40) I g 71陥し穴状遺構

〔遺物〕

埋土内から土器片が2点出土している。

土器 (第297図101、P L-143)

縄文を施文した器面を沈線で区画し、縄文を磨消する土器である。第IV群3類に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は後期前葉に属することから、本遺構も後期前葉かそれ以降に位置づけられるであろう。

(41) I i 70陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第298図、P L-106・112)

D区陥し穴状遺構群の中央やや北東寄りグリッド I i 71に位置し、I g 71陥し穴状遺構の東

北東7.5mで北西向き緩斜面の中位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.38m×1.17m、中段の径2.15m×70cm～75cm、底部2.2m×40cm～55cmの規模をもち、深さは斜面下位の北々西壁が1.2m、斜面上位の南々東壁は1.24mである。開口部と中段の平面形は長楕円形であるが底部は長方形を示し、分類では長軸がN-15°-Wにある長方形に相当する。長軸の北々西壁は底面に対して87度、水平に対して90度を示し、南々東壁は底面に対して95度、水平に対して92度で外傾しており、断面形はビーカー形に近い。短軸の両壁は底面の上位50cm位までは90度～100度、その上位はさらに強い120度で外傾し、断面形は漏斗状に近い。底面に幾分起伏があり、全体が北々西に3.5度傾斜している。北々西壁の両隅底面には北西隅にP 1（径20cm×12cm、深さ12cm）、北東隅にP 2（径13cm×10cm、深さ17cm）、南々東壁中央やや東寄りにP 3（径17cm×12cm、深さ15cm）の副穴が検出されている。いずれも斜め方向に打ち込まれた杭穴状を示し、それぞれがP 1-40度、P 2-40度、P 3-45度の角度で立ちあがっており、P 2とP 3は底面の上位1.1mの長軸中央やや北寄りで交差する。P 1・P 2・P 3は中軸線上でほぼ交差するように配置されている。

埋土は褐灰色、褐色、暗褐色、黄褐色の降下火山灰、砂質土、シルト質土が堆積し、18層に細分される。2層は十和田a降下火山灰で、3～5層は砂質土、中位～下位は全体的に粘性をもつ軟らかいシルト質土が堆積している。自然堆積によって埋没した遺構であろう。（Ki）

〔遺物〕

埋土内から実測個体3点を含む24点の土器が出土している。

土器（第298図102～113、P L-143）

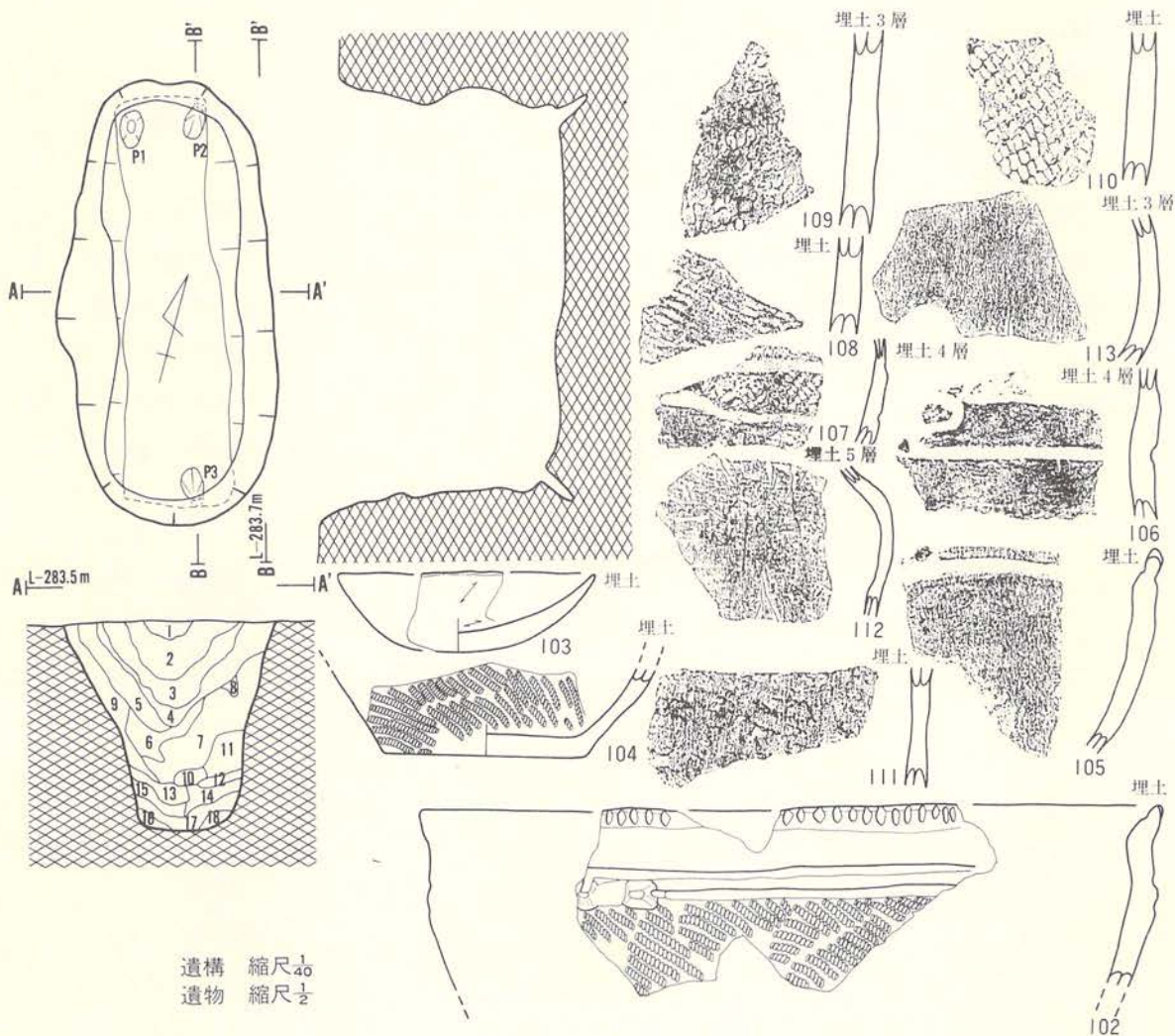
102は肩部の最大径部分に2条の並行沈線を全周させ、さらに小さな瘤を2個貼付し、頸部は無文、口縁端部には刻目を入れており、体部には原体RL横回転の単節斜縄文をもつ。103・105・111～113は文様をもたない無文土器であるが、105には沈線状の凹みがある。106・107は縄文を付した器面を沈線で区画し、縄文を磨消している。ほかは縄文のみを施文した粗製土器である。以上から、102は第VII群3類、103・105・111～113は第VIII群、106・107は第IV群3類、ほかは第IX群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器の中で103は晩期中葉に属するものである。これから考えると、本遺構は晩期中葉かそれ以降に位置づけられる可能性が大きい。



遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$
遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

I i 70陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 褐灰色	火山灰。
2	〃	基本層序III層。
3	10 YR 5/6 褐色	浮石含む。
4	10 YR 5/6 暗褐色	硬くしまる。
5	10 YR 5/6 〃	浮石含む。
6	〃	〃
7	10 YR 5/6 褐色	浮石・炭化物含む。
8	10 YR 5/6 黄褐色	やわらかい。
9	7.5YR 5/6 暗褐色	浮石・炭化物含む。
10	10 YR 5/6 褐色	暗褐色混入する。
11	10 YR 5/6 黄褐色	褐色土アロック状に含む。
12	7.5YR 5/6 明褐色	浮石少量含む。
13	7.5YR 5/6 暗褐色	〃
14	7.5YR 5/6 明褐色	黒褐色含む。
15	7.5YR 5/6 暗褐色	浮石含む。
16	10 YR 5/6 褐色	腐植土含む。
17	7.5YR 5/6 極暗褐色	しまりがない。
18	7.5YR 5/6 明褐色	にじい黄橙色含む。

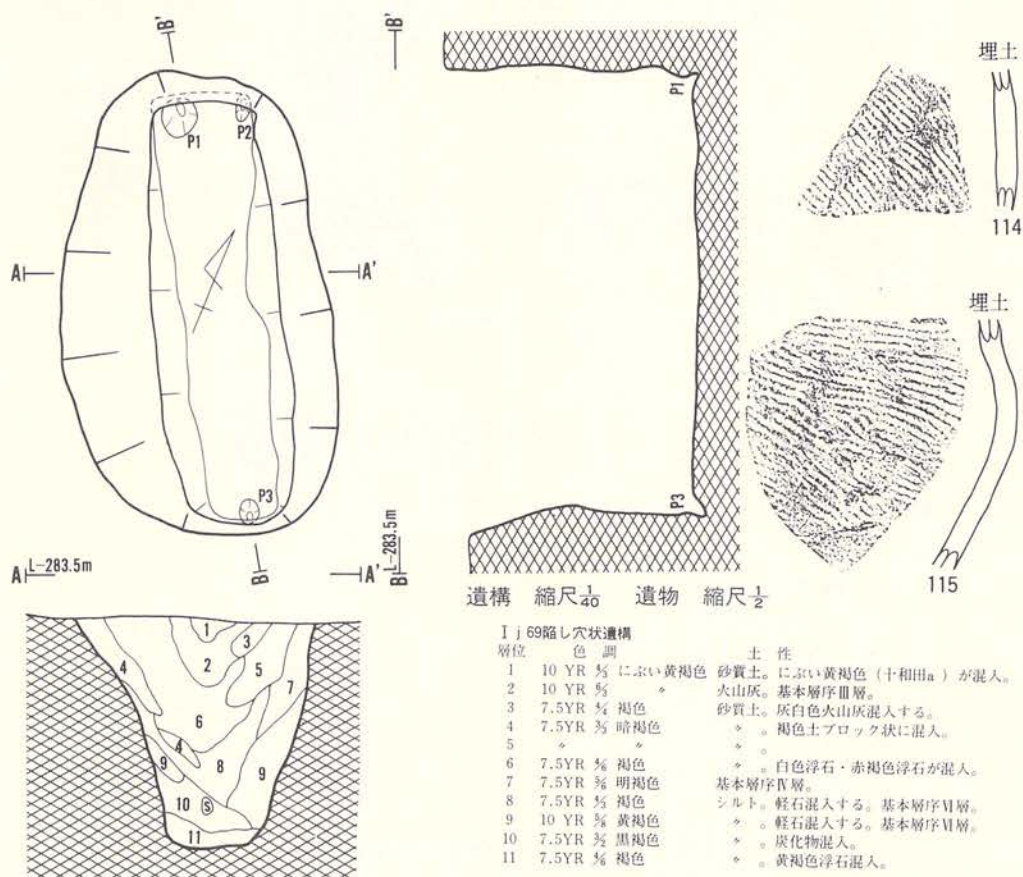
第298図 (4) I i 70陥し穴状遺構

(42) I j 69陥し穴状遺構

[遺 構] (第299図、P L-106・112)

D区陥し穴状遺構群の北東部グリッド I j 69・70にまたがって位置し、I i 70陥し穴状遺構の北東5mで北西向き緩斜面に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径2.5m×1.45m、中段の径2.25m×67cm、底部2.3m×35cmの規模をもち、深さは斜面下位の北々西壁が1.22m、斜面上位の南々東壁は1.27mである。開口部の平面形は長楕円形であるが、中段から底面は長方形を示し、分類では長軸をN-30°-Wにもつ長方形に該当する。長軸の北々西壁は水平に対して85度を示し、南々東壁は水平に対して92度で外傾しており、断面形は平行四辺形に近い。短軸の南西壁は外湾気味に大きく外傾し、北東壁では逆に内湾気味に外傾している。底面には若干起伏があるもののほぼ平坦で、全体が南々東に僅か傾



第299図 (42) I j 69陥し穴状遺構

斜している。北々西壁両隅陥の底面には南西隅に P 1 (径18cm×15cm、深さ 9 cm)、北東隅に P 2 (径10cm× 6 cm、深さ 4 cm)、南々東壁の中央に P 3 (径11cm×10cm、深さ 5 cm) の副穴が検出されている。いずれも斜め方向に打ち込まれた杭穴状を示し、それぞれが P 1—40度、P 2—20度、P 3—30度の角度で立ちあがり、P 1 と P 3 は長軸中央やや南々東寄りの検出面付近で交差する。P 1・P 2・P 3 は中軸線のほぼ中央で交差するように配置されるものであろう。

埋土にはぶい黄褐色、褐色、暗褐色、黒褐色等の降下火山灰、砂質土、シルト質土が堆積し、11層に細分される。2層は十和田 a 降下火山灰層、上位は白色浮石、赤褐色浮石を多く混入する砂質である。下位は基本層序第 V～VI層起源の浮石が混入するシルト質土で、10層には炭化物や礫が混入する。自然堆積による埋没であらう。 (Ki)

〔遺物〕

埋土内から 4 点の土器片が出土している。

土器 (第299図114・115、P L—143)

2点とも縄文のみを付す土器である。第IV群に属する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器が後期後半頃の特徴をもっていることから、本遺構も後期後半かそれ以降に位置づけられるであらう。

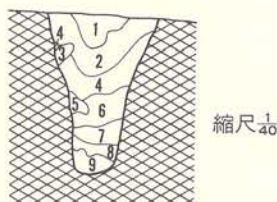
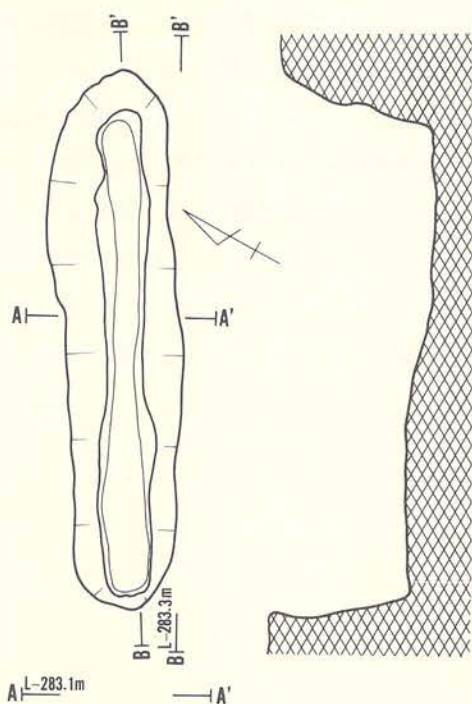
(43) II a 68陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第300図、P L—107)

D区陥し穴状遺構群では最北端のグリッド II a 68・69にまたがって位置し、I j 69陥し穴状遺構の北東6.5mで北側沢の左岸崖縁に立地している。本遺構は II a 68住居跡と II a 68土坑を壊して構築されている。

開口部径2.87m×65m、底部径2.5m×20cm～10cmの規模をもち、深さは南西端65m、北東端80cmである。平面形は開口部、底部ともに細長い溝状の長楕円形を示し、分類に従えば長軸を N—58°—E にもつ溝状形に該当する。長軸方向の壁面は底面に対して100度外傾し、断面形は逆台形を示し、短軸方向は下半部の壁面が底面とほぼ直交し、上半部は僅か外傾する漏斗状に近い形状である。底面に凹凸はないが北東部約1/2は南西部より約15cm低くなっている。

埋土は暗褐色、褐色、明褐色、橙色等のシルト質が堆積し、9層に細分されている。全体的に基本層序第 V～VI層起源の浮石が混入し、粘性がある。自然堆積による埋没を示すものであろうと推定される。



〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はないが、本遺構が壊しているII a 68住居跡は後期前葉に位置づけられることから考えると、後期前葉以降に属する遺構と考えることができる。

II a 68陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	7.5YR 弱 暗褐色	シルト。黄褐色浮石混入する。
2	7.5YR 弱 褐色	〃 〃 〃 基本層序V層。
3	10 YR 弱 暗褐色	〃 〃 〃 木根跡。
4	7.5YR 弱 明褐色	〃 〃 〃 黄褐色浮石含む。基本層序V層・VI層。
5	7.5YR 弱 橙色	〃 〃 〃 基本層序VI層。
6	7.5YR 弱 明褐色	〃 〃 〃 黄褐色浮石混入する。基本層序VII層。
7	7.5YR 弱 橙色	〃 〃 〃
8	7.5YR 弱 ぶい褐色	基本層序VIII層。
9	7.5YR 弱 褐色	シルト。黄褐色浮石・明赤褐色浮石含む。

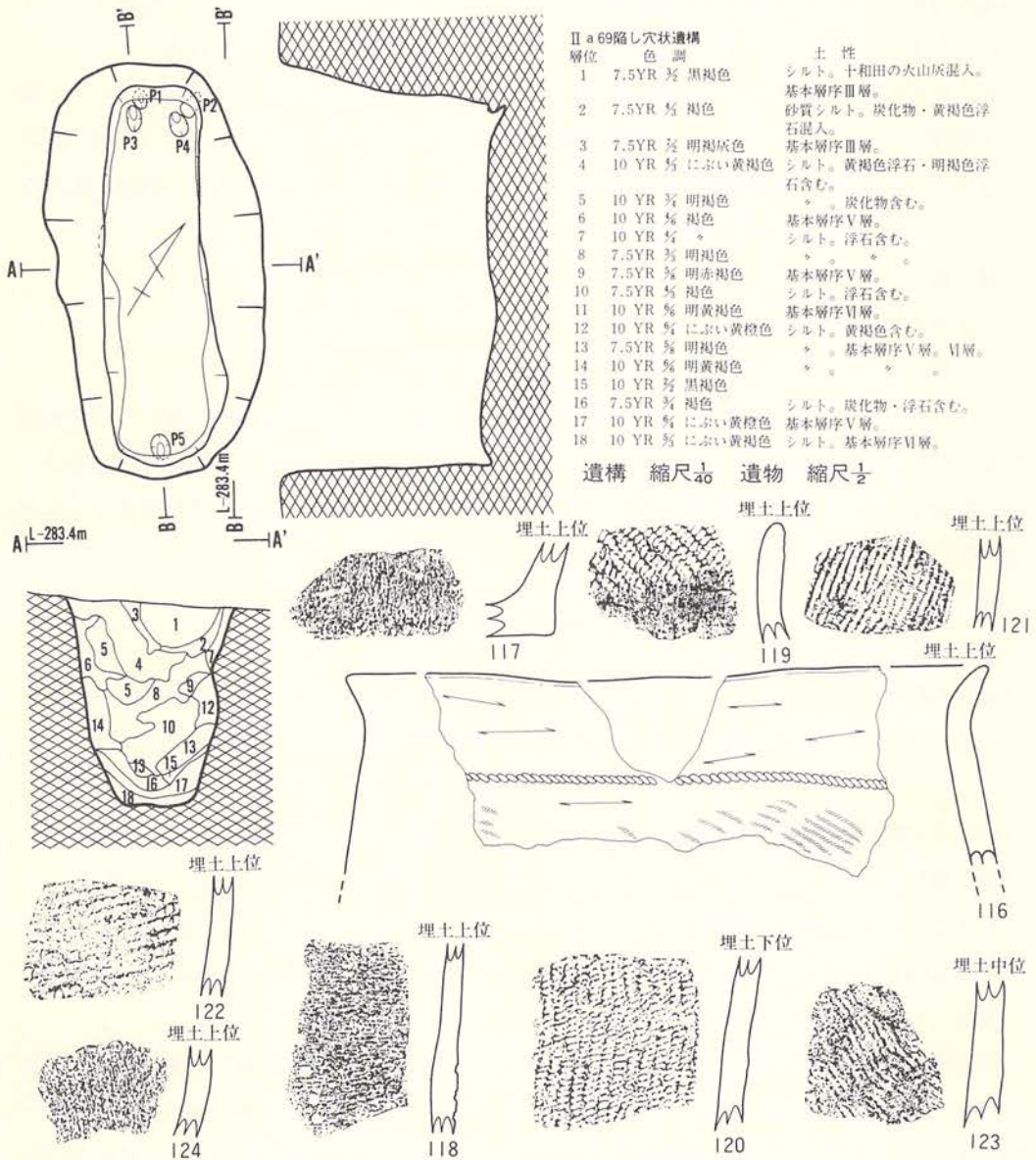
第300図 (43) II a 68陥し穴状遺構

(44) II a 69陥し穴状遺構—1

〔遺構〕 (第301図、P L—107・113)

D区陥し穴状遺構群の北東端に近いグリッドII a 69とII b 69にまたがって位置し、I j 69陥し穴状遺構の東4.5mで北側沢の左岸崖沿いに立地している。本遺構はII a 69陥し穴状遺構—2を壊して構築されている。

開口部径2.24m×1.1m、中段の径2.05m×55cm、底部径1.92m×50cmの規模をもち、深さは中央部が最も深くて1.15mであるが、ほかは1.1mとほぼ一定している。開口部の平面形は長楕円形であるが、中段～底部は隅が若干丸味をもつ長方形を示し、分類に従えば長軸がN—35°—Wにある長方形に相当する。長軸の北西壁は底面に対して95度、水平に対して98度で外傾し、南東壁はほぼ直立状態を示しており、断面形はピーカー形に近い。短軸の壁はやや不規則な部分もあるが96度～98度で外傾し、断面形はバケツ形状である。底面には若干起伏があるものの



第310図 (44)II a 69陥し穴状遺構 - I

ほぼ平坦で、北西に2度の角度で傾斜している。長軸の北西壁両隅には南西隅にP1(径8cm×8cm、深さ5cm)・P3(径14cm×10cm、深さ13cm)、北東隅にP2(径8cm×7cm、深さ9cm)・P4(径14cm×10cm、深さ10cm)、南東壁中央にP5(径9cm×8cm、深さ5cm)の副穴が検出されている。いずれも斜め方向に打ち込まれた杭穴状を示し、それぞれがP1—30度、P2—

44度、P 3—37度、P 4—37度、P 5—24度の角度で立上がり、P 3とP 5は長軸ほぼ中央の検出面付近で交差する。これらの位置関係をみると、北西壁は杭を交換したことを示すと考えられ、P 1—P 2—P 5とP 3—P 4—P 5の二通りの組み合わせが想定される。

埋土は黒褐色、明褐色、にぶい黄褐色、褐色、明褐色等の降下火山灰、砂質土、シルト質土が堆積し、18層に細分される。3層は十和田a降下火山灰層で、その上部は同火山灰が混入する砂質土、4層は黄褐色浮石が混入する砂質土、中位～下位は基本層序第V～VI層起源の浮石が混じるシルト質土である。自然埋没による堆積を示すものであろう。

〔遺物〕

埋土内から32点の土器片が検出されている。

土器 (第301図116～124、P L—143)

116は頸部に原体側面押圧による原体圧痕文を一条全周させて体部と口縁部を限り、口縁部を無文、体部に原体L縦回転の無節縄文を付す。118・119・124は無文土器であるが、118には円形の刺突文がある。ほかは縄文だけを付す粗製土器である。以上から、116を含む縄文のみの土器は第IX群、無文土器は第VIII群に相当する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

116は後期前葉の土器である。よって本土坑も後期前葉かそれ以降に属するであろう。

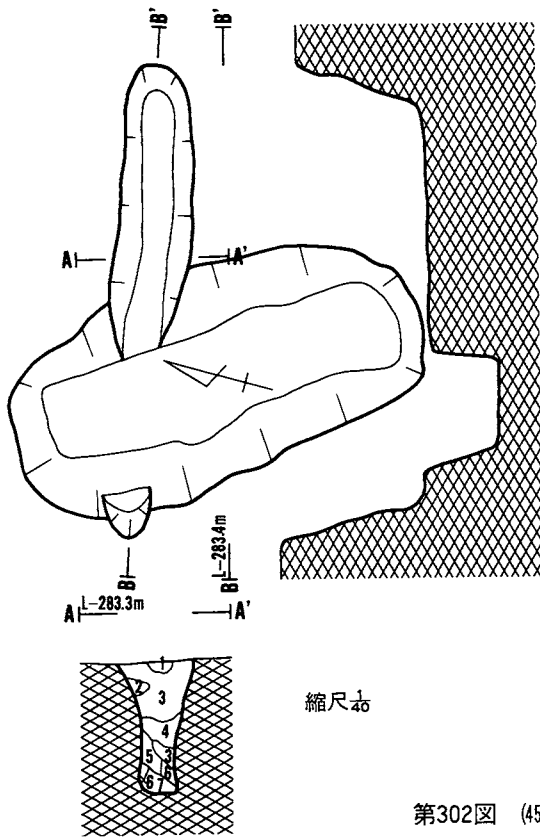
(45) II a 69陥し穴状遺構—2

〔遺構〕 (第302図、P L—107)

D区陥し穴状遺構群の北東端に近いグリッドII a 69・II b 69にまたがって位置し、II a 68陥し穴状遺構の南3.5mで西向き緩斜面の中位に立地している。本遺構はII a 69陥し穴状遺構—1と重複しているが、本遺構の方が古い。

開口部径2.52m×40cm、底部径2.25m×15cmの規模をもち、深さは西端で74cm、東端が69cmである。平面形は開口部・底部ともに細長い溝状の長楕円形を示し、分類に従えば長軸をN—74°—Eにもつ溝状形である。長軸方向の壁は底面に対して110度で外傾し、断面形は逆台形状を示す。短軸方向の壁は底面に対してほぼ直立し、断面形は上半が僅かに外傾する漏斗状に近い。底面には小凹凸があるもののほぼ平坦で水平状態に近い。

埋土は褐色、にぶい黄褐色、暗褐色等を示すシルト質土が堆積し、7層に細分される。全体的に基本層序第V層、VI層を起源とする黄褐色浮石を多く含み、同V・VI層の汚れた土が主体をなしている。自然埋没の堆積状況を示すものであろう。



〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので明確でないが、本遺構を壊している II a 69 陥し穴状遺構—1 が後期前葉かそれ以降に属することと、本遺構と同じ形状を示す II a 68 陥し穴状遺構が後期前葉の住居跡を壊していることから考えると、後期前葉～中葉頃に属する遺構とみることも可能である。

II a 69 陥し穴状遺構—2

層位	色調	土性
1	7.5YR 7/4 褐色	シルト。黄褐色浮石含む。
2	7.5YR 7/4 明褐色	基本層序 VI 層。
3	7.5YR 7/4 褐色	シルト。浮石・炭化物含む。
4	7.5YR 7/4	基本層序 VI 層。浮石含む。
5	7.5YR 7/4	シルト。基本層序 VI 層。
6	10 YR 7/4 に近い黄褐色	〃
7	10 YR 7/4 暗褐色	〃。浮石含む。

第302図 (45) II a 69 陥し穴状遺構—2

(46) II b 68 陥し穴状遺構

〔遺構〕 (第303図、P L—107・113)

D区陥し穴状遺構群の最北東端でグリッド II b 68・69と II c 68・69にまたがって位置し、II a 69 陥し穴状遺構—1の北東5.5mで北側沢の崖沿いに立地している。本遺構は II b 68 住居跡の東部を壊して構築されている。

開口部径3.3m×1.4m～1.5m、中段2.65m×80cm、底部径2.7m×50cmの規模をもち、深さは斜面下位の北西壁で1.63m、斜面上位の南東壁で1.72mである。開口部の平面形が北東壁の南東半部で外方に張りだしているが、中段～底部の壁は相対して並行することから、本来は相対する長楕円形を示すと推定される。中段～底部は長方形であり、分類に従えば長軸をN-37°-Wにもつ長方形に該当する。長軸の北西壁は底面に対して83度、南東壁は86度で内傾し、断面形は逆台形を示す。短軸方向の壁面は底面に対して110度外傾するバケツ形の断面形をもつ。

底面の南東側は一部掘りすぎのため定かでないが、確認された部分は凹凸もなくほぼ平坦である。北西壁の南西隅にP 1（径18cm×13cm、深さ10cm）、北東隅にP 2（径15cm×13cm、深さ9cm）の副穴が検出された。南東壁際は掘りすぎのため明確でないが他の遺構との比較から考えて、存在した可能性がある。いずれも斜め方向に打ち込まれた杭穴状を示し、P 1・P 2とも40度位の角度で立ちあがり、中軸線上で交差する。

埋土は黒褐色、暗褐色、にぶい黄褐色、褐色等の降下火山灰や砂質土、シルト質土が堆積し、14層に細分される。4層は十和田a降下火山灰で、1層～3層は同火山灰が混入する砂質土で、2層には白頭山火山灰の小塊が点在している。5層は十和田a降下火山灰が塊状に混入し、土器片や粒径2cm～4cmの浮石も含む砂質土である。8層～14層は暗褐色～褐色のシルト質土で、8層には浮石の混入がある。自然埋没による堆積状況を示すものであろう。

〔遺物〕

埋土内から実測個体5点を含む80点の土器片と土製品が1点、石器2点が出土している。本遺構は住居跡の床面を掘り込んで構築されていることは既述したが、住居跡出土の土器と何んら変化がないことから、本来は住居跡に伴う土器である可能性が大きい。

土器（第303図125～144、P L-144）

125は頸部に原体圧痕文を全周させて体部と口縁部を限り、体部には縄文を付し口縁部は無文にする土器である。130～133は縄文だけを付した器面を沈線で区画し、縄文を磨消する土器である。134は125と同様である。126・136～138は縄文だけを付す粗製土器である。135・139は無文土器である。以上から、130～133は第VI群3類、125・126・136～138は第IX群、135・139は第VIII群である。

土製品（第303図140、P L-144）

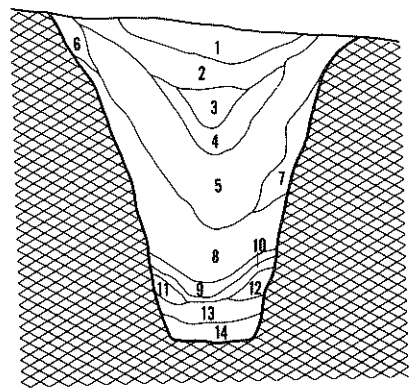
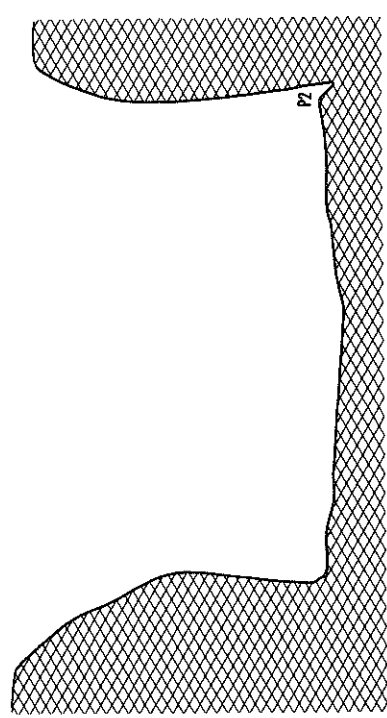
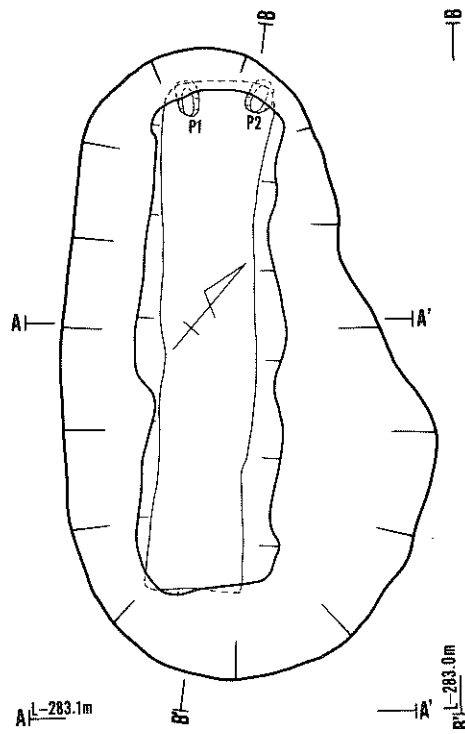
土器の破片を使った土器片円盤である。径3.4cm×4.3cm、厚さ7.15mm、重さ13.15gの大きさで、表面に縄文を付している。

石器（第303図222・423、P L-168・179）

222は磨製石斧で、刃部を欠損しており、一部に敲打調整痕をもっている。長さ10.5cm、幅4.5cm、厚さ2.5cm、重さ220gの大きさで、石材は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩である。

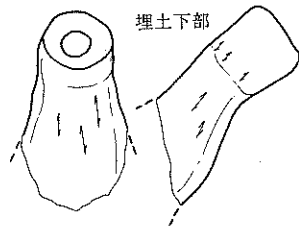
〔遺構の時期〕

本遺構に壊されている住居跡は、125と同様の土器が出土していることから後期前葉である。これから考えると、本遺構は後期前葉より新しい遺構であることは間違いのないであろう。

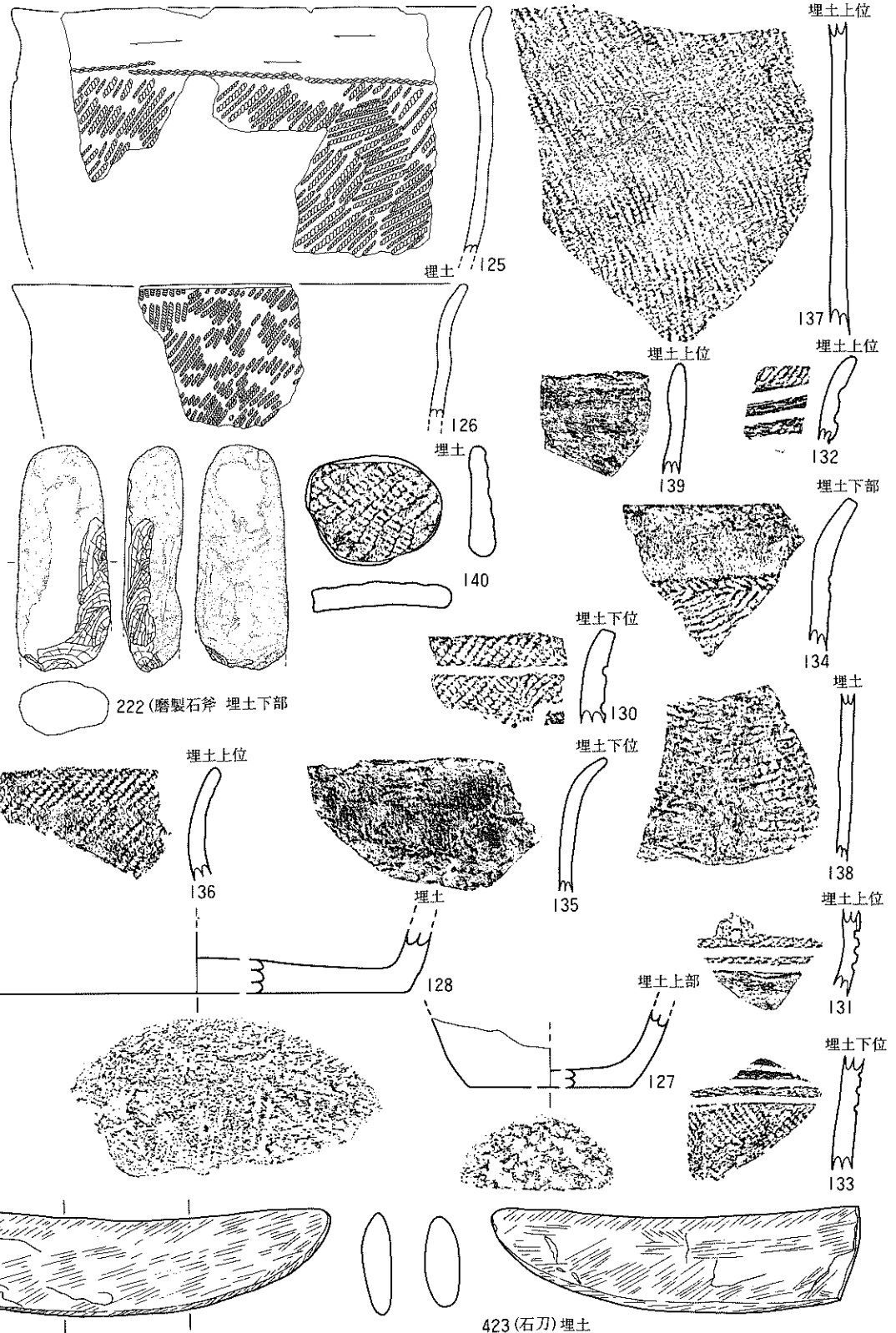


II b 68 陥し穴状遺構

層位	色調	土性
1	5 YR ㄨ 黒褐色	火山灰。浮石多く含む。
2	8.5 YR ㄨ 暗褐色	
3	7.5 YR ㄨ 黒褐色	黒褐色土含む。浮石混入する。
4	7.5 YR ㄨ	基本層序Ⅲ層。
5	7.5 YR ㄨ 褐色	火山灰ブロック状に含む。軽石含む。
6	7.5 YR ㄨ 暗褐色	細粒浮石含む。
7	ㄨ	にぶい橙色混入。
8	7.5 YR ㄨ 褐色	軽石・浮石含む。
9	7.5 YR ㄨ 暗褐色	細粒浮石含む。
10	7.5 YR ㄨ 褐色	にぶい褐色土含む。
11	7.5 YR ㄨ にぶい褐色	暗褐色土含む。
12	7.5 YR ㄨ 暗褐色	白っぽい土含む。
13	ㄨ	細粒浮石含む。
14	7.5 YR ㄨ	浮石混入する。



遺構 縮尺 1/4
 遺物 土器 125・126 - 1/3
 その他 1/2
 石器 1/3
 石製品 1/2



第303図 (46) II b 陥し穴状遺構

423 (石刃) 埋土

5. 埋設土器

本遺跡の調査ではC区から2カ所で埋設土器が検出されている。

(1) II a 58埋設土器

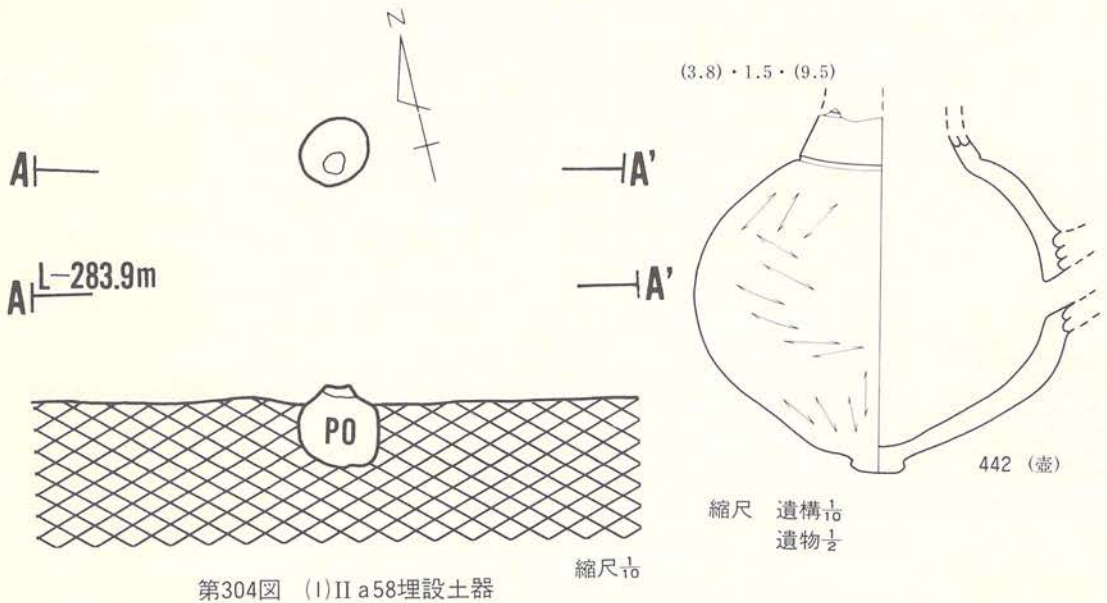
〔遺構〕 (第304図、P L-94)

C区遺構群中央のやや北西寄りグリッドII b 58に位置し、II b 58住居跡の北1.5m、II b 58土坑-1の東1mで尾根の頂上部から南西向き斜面に下がる部分に立地している。他遺構との重複はない。

遺構の位置する付近は表土が20cm~30cmと薄く、耕作土の基本層序第I層を除去すると遺構検出面である基本層序V層が露出し、至近距離にある他の遺構(住居跡・土坑)と同位面から検出された。平面的には土器の残存する口縁部が円形に判別できたのみで、埋設時の掘り方の範囲は不明であった。平面実測の後断ち割りをしたが、土層断面の観察でも掘り方の存在は確認できなかった。以上のことから、元来この付近の表土の発達が悪かったことから地山の基本層序V層を土器が入るだけの小範囲を掘り込み、土器を埋設したものと理解される。(Y)

〔遺物〕 (第304図442、P L-144)

埋設された土器の器種は、口縁部と注口部を欠失する注口付壺形土器で、残存する大きさは器高9.5cm、口縁部径3.8cm、体部最大径10cm、底部径1.5cmである。器形は体部が球状に脹らみ



第304図 (I)II a 58埋設土器

表土が厚く、基本層序第Ⅰ層～Ⅳ層までが60cm位の層厚をもっている。初回の粗掘りでは基本層序第Ⅲ層（十和田a降下火山灰）の下面まで除去したが、本遺構はその段階で地表面の約40cm下位から検出された。Ⅱf 61土坑やⅡg 60住居跡の検出面よりは若干上位である。平面的な検出状況は、基本層序第Ⅳ層の上面に同Ⅳ層の極暗褐色に近い浮石粒の混入がやや多めの暗褐色砂質シルトが径32cmの円形に広がる部分が検出され、その内部に土器が埋設されていた。断ち割りによる土層観察では、掘り方はⅣ層上面から掘り込まれた様相を示すが、出土した土器が体部下半のみを残存することから、当初はもっと上位面から掘り込まれた遺構であることを示している。特に掘り方の下底面が基本層序第Ⅴ層の上面であることから知る事ができ、Ⅳ層がもっと厚い層であった可能性がある。検出された掘り方の深さは10cm～14cm位で、上位が広く下位が狭くなるように掘られている。 (Y)

〔遺物〕 (第305図443、P L—144)

出土した土器は体部中位下部(?)～底部を残存し、残存する大きさは器高20cm、口縁部径27.5cm、底部径12.4cm、器面に0段多条の原体R L横回転による単節の斜行縄文を付す。底部は上げ底風で内面が軽く盛り上っている。体部は若干内湾気味に大きく外傾する。第Ⅸ群に属する粗製深鉢と推定される。

〔遺構の時期〕

時期を明示する決め手を欠くが、器表の縄文、底部～体部の作り方と形状、胎土の調整と色調から考えて、後期後半頃の特徴とすることができる。

6. 焼土遺構

A区—4箇所、D区1箇所の焼土遺構が検出されている。検出された面はいるれも他の遺構の検出面と同様であり、時代的には縄文時代に属すると考えられる。

〈A区〉

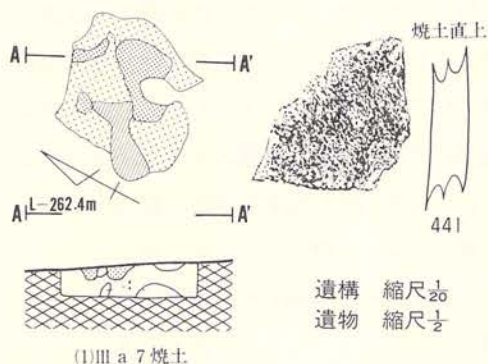
いずれも北東部を北西に流れる沢沿い付近に位置している。

(1) Ⅲa 7 焼土

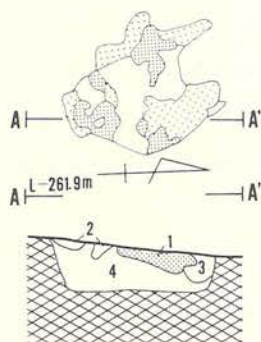
〔遺構〕 (第306図A、P L—95)

A区北端に近いグリッドⅢa 7、Ⅲa 8にまたがって位置し、Ⅲc 7土坑の西9mで北西向き緩斜面下位の段丘崖縁に立地している。他の遺構との重複はない。

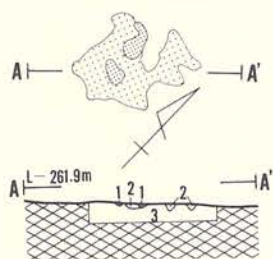
基本層序第Ⅳ層の中位から検出され、88cm×78cm位の歪んだ菱形の広がりをもつ。強い焼成を受けた部分は小範囲で、一部に炭化材が残存している。焼成の強い部分は層厚6cm位であ



(1) III a 7 焼土



(2) III b 5 焼土



(3) III b 6 焼土-1

III b 5 焼土

層位	色調	土性
1	5 YR 5/6 明赤褐色	シルト。
2	5 YR 3/6 暗赤褐色	褐色に焼土混じる。
3	10 YR 2/6 黒褐色	焼土、少量含む。

III b 6 焼土-1

層位	色調	土性
1	5 YR 5/6 赤褐色	黄褐色が混じる。
2	5 YR 3/6	黒褐色のブロック含む。
3	10 YR 2/6 黒褐色	焼土うすく混入する。

るが、周辺部は1~2cmと図化不能である。色調は明赤褐色である。いわゆる焼き火跡的である。(Na)

〔遺物〕 (第306図A441、P L-144)

無文の縄文土器が1点出土している。粗製深鉢の体部破片である。第VIII群に属する。

〔遺構の時期〕

焼土付近からはもっと下位層から後期初葉の土器も出土している。おそらく後期前葉頃に属する遺構であろう。

(2) III b 5 焼土

〔遺構〕 (第306図B、P L-95)

北東部を流れる沢の崖縁グリッドIII b 5に位置し、III c 7土坑の北8.5cmで北西向き緩斜面下位に立地する。重複する遺構はないが、隣接する3ヵ所の中では北端にある。

検出面は基本層序第IV層の上位で、86cm×74cmの盃んだ不整楕円形的な広がりを示している。特に焼成の強い部分は東・西・南の3ヶ所に分散し、その周辺を弱い焼成が囲む在り方が看取される。層厚は最大13cmで、色調は明赤褐色を示している。焼き火跡であろう。(Na)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

後期初葉の土器を包含する基本層序第IV層下半の上位から検出されていることにより、後期前葉頃の所産と考えることができよう。

第306図 III a 7 焼土・III b 5 焼土・III b 6 焼土-1

(3) III b 6 焼土-1

〔遺構〕 (第306図C、P L—95)

北東部沢の崖に近いグリッドIII b 6 に位置し、III c 7 土坑の北5.5m で北西向き緩斜面の下位に立地している。他の遺構との重複はなく、隣接する3カ所では南端にあたる。

基本層序第IV層上部が焼成を受けて生成した焼土で、66cm×46cmの不整楕円形的な広がりをもつ。焼成範囲に比して強い焼成部分は狭く、中央部と北部に分散している。焼成の強い部分の層厚は4cm位と薄く、色調も赤褐色を示す。ほかは層厚が1cm未満で薄く、色調も黄褐色や黄色の部分もある。焼き火跡であろう。(N a)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

土器の出土がないので明確でないが、後期初葉に属する土器の上位から検出されているので、後期前葉頃の遺構であろう。

(4) III b 6 焼土-2

〔遺構〕 (第307図A、P L—96)

北東沢の崖縁グリッドIII b 6 に位置し、III c 7 土坑の北6m で北西向き緩斜面の下位に立地している。隣接する3カ所の中間からやや南にあり、他の遺構との重複はない。

基本層序第IV層が焼成を受けた焼土で、60cm×40cmの楕円形状の広がりをもつ。A区に在る焼土では最も強い焼成を受けており、層厚も最大20cmで、色調も明赤褐色を示している。弱い焼成の部分は南西・東・北東の周辺部にあり、層厚も1cm位で色調は黄褐色状の部分もある。また、一部には黒褐色土が塊状に混在する部分もみられる。焼き火跡であろう。(N a)

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

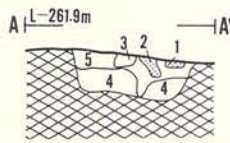
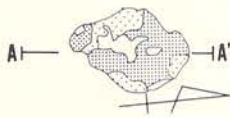
検出面が他の焼土と同様であることや、本焼土の下位から後期初葉の土器が出土していることから、後期前葉頃の遺構であろう。

< D 区 >

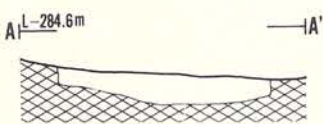
(5) I i 74 焼土

〔遺構〕 (第307図B、P L—96)

D区遺構群では南端に近いグリッドI i 74 に位置し、I j 74 住居跡の西4.5m で北西向き斜



(4) III b 6 焼土-2



(5) I i 74 焼土

III b 6 焼土-2

層位	色調	土性
1	5 YR 5% 赤褐色	シルト。下に褐色混じる。
2	5 YR 5% *	中央部褐色のブロック、下位黒褐色のブロック含む。
3	5 YR 5% 暗赤褐色	褐色に赤褐色のブロック含む。
4	10 YR 5% 黄褐色	基本層序V層。
5		基本層序VI層。

縮尺 $\frac{1}{20}$

第307図 III b 6 焼土-2・I i 74 焼土

面の上位に立地している。他の遺構との重複はない。

遺構検出のために基本層序第IV層を掘り下げ中に、同IV層中位で検出された。住居跡に伴う地床炉の可能性を考え、土層観察用の畔を残して壁の検出に努力したが、検出されなかったことから焼土遺構とした。焼土は48cm×38cmの不整形な広がりをもち、層厚は8cmである。焼き

(M i)

火跡と理解される。

〔遺物〕

出土していない。

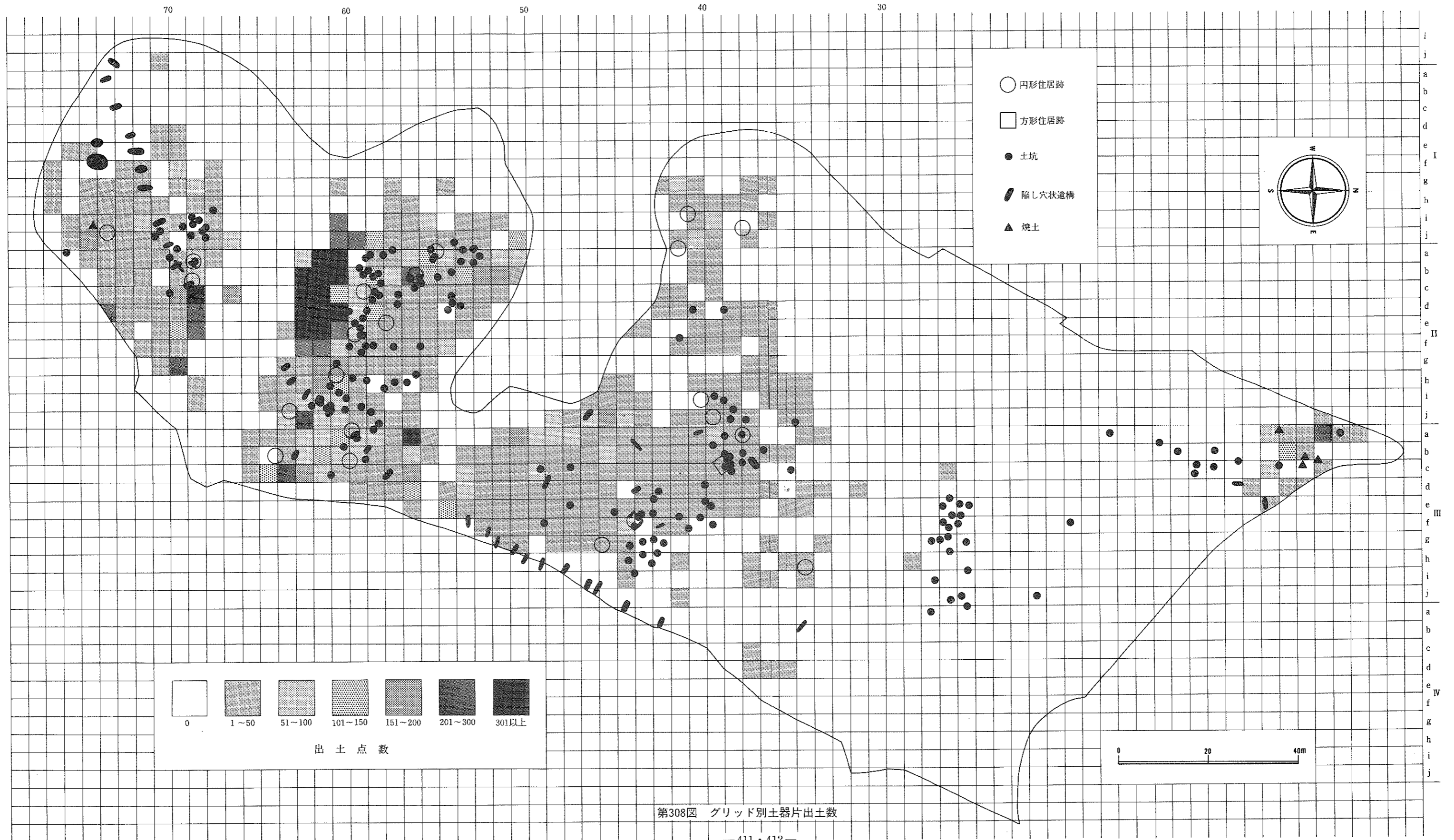
〔遺構の時期〕

この付近から出土する土器は後期のものだけであることから、本遺構も後期に属するものと推定される。

7. 遺構外の遺物

本遺跡の発掘調査で出土した遺物は、検出された遺構の数に比較すると、それほど多いものではない。これは、遺跡が傾斜地に立地するため表土が薄いことと、調査範囲のほとんどが畑地として利用されていたことから、耕作時に遺構（特に住居跡）が削平されていること等に起因すると考えられる。この傾向はB区で特に顕著である（第308図を参照のこと）。

実際の出土量は地点によって差があり、A区-D区-B区-C区の順で出土量が多い。最も少ないA区の場合は、北端部の段丘崖沿いから主に出土し、B区に隣接した南側の斜面高部位からはほとんど出土していない。この状況をグリッド別にみると、201~300点が1グリッド、101~150点が1グリッド、1~50点が13グリッドで、それ以外での出土はない。B区ではほぼ



第308図 グリッド別土器片出土数

全面から出土しているが、主体をなすの南側斜面部で、頂上部と斜面下位で量が若干多い傾向がみられる。グリッド別でみると、151～200点が2グリッド、101～150点が1グリッド、51～100点が15グリッド、50点以下が186グリッドとなり、大半は50点以下の出土である。C区ではほぼ全面で満遍なく出土しているが、頂上部が若干少なく南側斜面部での出土が多い。グリッド別でも301点以上が13グリッドあり、69グリッドが50点以上の出土と全体的に多い。D区の場合は、調査範囲ほぼ全面で出土しているが、50点以上の出土は16グリッドで、それも北側沢沿いに集中している。その他はいずれも50点以下の出土で、南に寄るほど少なくなる傾向がある。

このような出土量の違いは、遺構の種類や分布密度と密接な因果関係があるらしいことを示している。たとえば、出土量の最も少ないA区では、土坑・陥し穴状遺構・焼土遺構といった、言わば生活遺物をあまり共伴しない遺構群が占地する地点であることが、出土量に影響を与えていると考えることができる。B・C・D区では住居跡と土坑を主とする遺構群であることから、これらの地区が一時期の生活根拠地であったことを示している。それが取りも直さず生活調度品の廃棄に継がり、遺物量が多いという結果になる。その典型がC区の出土状況と考えることができよう。B・D区もほぼ同様であるが、B区では削平が著しく住居跡の残存状態が不良であることから、調査範囲全体が削平され遺物が移動している可能性がある。

以上のように、地表や表土中に分布する遺物の密度と地中に遺存する遺構との間（特に住居跡）には、密接な関係があると考えるのが妥当であり、本遺跡と同様の状況は岩手郡岩手町の川口II遺跡でも確認されている。しかし、地形上の特性（特に傾斜と後世の改変）から、遺物が必ずしも原位置を保っていない可能性も考慮する必要がある。これらのことに留意して詳細な分布調査を行うならば、遺跡全体の範囲や遺構群の位置をある程度把握することができるものと考えられる。

本遺跡の調査で遺構外から出土した縄文時代の遺物には、土器、土製品、石器、石製品があるため、本項ではそれらを各種類にごとに分けて、その概要を記すことにする。

(1)土 器

本遺跡から出土（遺構内・遺構外含めて）した土器の総点数は35,225点（破片・完形含む）であり、この中の82.2%に相当する28,959点は遺構外から出土した土器である。（第 表参照）。遺構外出土の28,959点の破片には口縁部2,105点（7.27%）、体部26,094点（90.13%）、底部910点（2.58%）が含まれている。このような部位別の構成比率は、遺構内出土のそれとほぼ同じ様相を示している。この数字の大部分は破片が占めているため、直接個体数を示すものではないが、大まかな個体数を推定することは可能である。破損率からみた場合には、底部より器

厚が薄く径が大きくなる口縁部や体部は、破損した場合により細片になる可能性の強いことが予想される。このことから考えると、口縁部や体部の破片数は実際の個体数より相当多くなるのが普通であり、底部の破片数がより実体に近い数であるとして大過ないであろう。以上のことから、本遺跡の遺構外から出土した土器の個体数は910個体に近い数であると推定される。

出土した土器には、早期から晩期に属するものまで含んでおり、出土地点をみても必ずしも一様ではない。また、良好な遺物包含層や層位的な出土状況も観察されていない。したがって、遺跡全体から出土した土器の中から、各時期別に型式学的な分類をし、土器全体が把握できるように網羅した。

実際の分類と群構成は次のようにした。

- 第I群——早期に属する土器を一括する。A区の限定した地点から5点出土している。
- 第II群——前期に位置づけられる土器である。B区から少量出土したのみである。
- 第III群——中期の土器である。B区の西突端部とC区から出土しているが、量的には多くない。しかし、この時期に属する住居跡と土坑がB区・C区から検出されており、これらの土器はこの集落に伴うものであろう。文様によって細分される。
- 第IV群——後期初葉～前葉に位置づけられる土器である。量としても少なく出土地点もA区とC・D区に限定されている。この時期の遺構はC・D区で集落が検出されており、D区で出土する土器はこの集落に伴うであろう。文様によって細分される。
- 第V群——後期中葉に属する土器である。量的には少なく、出土地点もC区に限定される。文様によって細分される。
- 第VI群——後期後葉～末葉の土器で、出土した土器の中では最も量が多い。特にC区の主体をなす土器で、C区で検出された集落に伴うものであろう。文様には種々あり、それによって細分される。
- 第VII群——晩期に属する土器である。ほぼ遺跡全面で出土しているが、量的には多くない。調査範囲内に位置する晩期の遺構は土坑だけであるが、C区の東側に隣接する調査範囲外にやや濃密な遺物分布地点がみられることから、中心はこの部分に位置すると考えられる。
- 第VIII群——ここには器面に縄文や他の文様をもたない、いわゆる無文土器を一括した。器種や器形・時期ともに限定していない。ほとんどはC区からの出土した土器であり、本来は第V群・第VI群・第VII群のいずれかに伴うものであろう。
- 第IX群——器面に縄文以外の文様をもたない粗製土器を一括した。器種・器形・時期とも限定していない。各区から出土しているが、本来は第VIII群同様第V・VI・VII群のい

ずれかに共伴する土器であろう。また、施文されている縄文に各種があるため、それによって細分した。

底部——ここには体部下位から底部を残存する土器を一括したが、器形や器種・時期とも限定していない。本来は第Ⅲ群から第Ⅸ群までの土器に入るべきものであるが、全体的なことが不明なため、一括した。

網代痕——底面に網代痕や木葉痕をもつ土器が若干あるのでそれらを一括した。

注口部——本遺跡で出土した注口土器の量は少ないが、注口部だけ出土したものを全て実測して一括した。

以下に各群ごとにその内容を記すことにする。

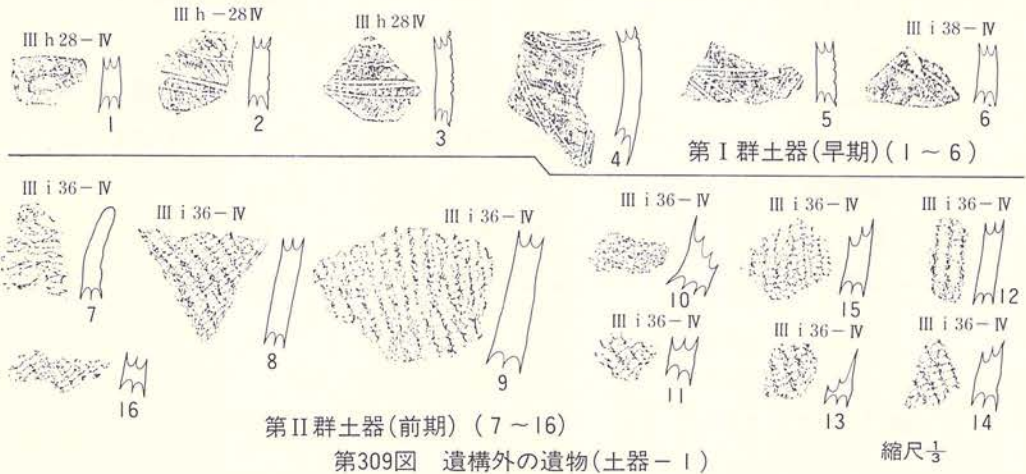
〔第Ⅰ群土器〕 (第309図1～6、P L—145)

早期に属する土器であるが、A区のグリッドⅢh 28の基本層序第Ⅳ層から破片が6点出土したのみであり、本遺跡から出土した土器の中では最も少量である。

いずれも良く研磨された器表に、丸棒か篋先による2条並行する沈線、小波状の単一の沈線、並行沈線の間を貝殻腹縁文を入れる等の文様を付す土器である。口縁部破片は含まず全て体部だけであるが、胎土や器面調整、文様から考えて、全て同一個体の破片と推定される。外面の調整に比較すると、内面のそれは粗製で、ザラツとした仕上げである。胎土には径1mm以下の砂粒が混入するものの、全体としては緻密な粘土を使用しており、繊維の混入はない。焼成は非常に良く堅緻である。色調は、器表が明褐色で中心部から内面にかけては黒褐色である。

〔第Ⅱ群土器〕 (第309図7～16、P L—145)

前期に位置づけられる土器であるが、B区のグリッドⅢi 36の基本層序第Ⅳ層下位から28点出土しているのみである。それも、胎土や体部縄文からみると、同一個体の破片である可能性が大きい。7は口縁部、10が底部付近、9・11は体部下端で、他は体部の破片である。口縁部は軽く外反して口唇が丸味をもち、端部の器表に横走する不整で密な結節回転文が付されている。全体の器形を判断できる状況ではないが、器種は円筒形を示す深鉢形と推定される。器厚5mm～10mmであるが、底部寄りほど厚さを増す。体部の縄文は0段多条による原体RL横回転による単節斜行縄文である。胎土は比較的緻密であるが、砂粒が若干混入しさらに繊維を含んでいる。焼成は良いが二次的な火熱によって脆い。内面に指頭押圧と撫でによる調整がみられるものの、あまり、良好ではない。また、器表には成形時に粘土の塗り付けがあり、中心部にその痕跡を明瞭に残し、一部は剝落している。色調は、器表が明褐色で内面は明褐色から黒褐



第309図 遺構外の遺物(土器-I)

縮尺 1/3

色まで差がある。

〔第III群土器〕

中期に属する土器であるが、出土地点はB区の西突端部とC区北西端および東側を主とするが、量的には多くない。

出土地点によって土器の様相が異なっており、それによって6類に細分される。

1 類 (第309図17・18、P L-145)

B区の西突端部から出土した体部の破片2点が該当する。全体的なことは全く不明であるが、器表に細い原体を使用した単軸絡条体縦回転による撚糸文をもつことから、前期に入る可能性もあるが、とりあえず本群とした。器形は深鉢形であろう。胎土には径3mm位の細礫が少量、石英粒、細砂粒等を若干混入するが、全体的に緻密な粘土を使用している。内面の調整は撫でであるが、ザラツとした触感がある。焼成は良好で、色調は内外とも褐色である。器表の一部に黒斑をもち(17)、ともに煤の付着がある。

2 類 (第309図19~26、P L-145)

本類は体部に縄文を付した後沈線で縦に区画をし、その部分の縄文を磨消することを特徴とした土器である。出土地点はC区の東寄りに限定され、24・25を除いた他の破片は同一個体の可能性が大きい。器種は深鉢形と推定される。19・20は口縁部破片で他は体部破片である。縄文は24・25が0段多条による原体L R縦回転による単節斜行縄文で、その後断面丸形の棒状工具で沈線を引き、縄文を消去する。その他の破片は、原体R L R縦回転による複節斜行縄文が付され、ほかの施文は24・25と同様である。口縁端部の縄文は磨消され、無文帯が全周する。全体的な器形は不明であるが、頸部で若干窄んだ後、口縁部は軽く外反する。体部は中位が脹

らみ、この位置に最大径をもつであろう。胎土には径1mm前後の砂粒が混入するものの、ほぼ均一で緻密な粘土を使用している。焼成は良いが、色調は内外面とも褐色～暗褐色までである。

3 類 (第310図27～38、P L—145)

本類は前の2類に近い様相を示す破片であるが、区画する沈線が断面丸形の複数(主に2条)の並行沈線であることと、渦状や楕円形にも区画されることに相違点がある。27～29は口縁部の破片で、他は全て肩部～体部にかけての破片である。なお、胎土や文様を観察すると30と36が非常に良く似ており、他の破片はそれらの中で近似しており、掲載した12点の破片は、2個体の土器に分けられるらしい。30・36は頸部で窄み、口縁部は外反もしくは直立し、肩部は大きく脹らむ。他の個体は、口縁部が大きく内湾し、端部は波状となる。最大径は肩部にあり、下位は底部によるほど窄む。文様の沈線が両者間で差がある。前者は単線で区画した後縄文を磨消し、縄文部に渦状の沈線を付している。後者の場合は、並行沈線で区画して縄文を磨消し、縄文部に渦状の沈線を入れる。口縁部は両者とも無文帯としている。しかし、全体的にみると、施された文様は大同小異であることから両者を一括した。胎土には、両方とも径1mm以下の砂粒をやや多く含み、粗くみえる。焼成はいずれも良好であるが、27～30・32には部分的に黒斑がみられる。

4 類 (第310図39～47、P L—145)

縄文を付した後沈線で区画し、その部分の縄文を磨消することは2・3類と共通するが、体部文様部と下位の縄文施文部が沈線によって限られるという相違点がある。出土地点はB区西突端部(40・45・47)とC区であるが、完形や口縁部破片はない。全体的なことは不明であるが、器種は深鉢形と推定される。区画する沈線は丸棒の先端による断面丸形で、縄文磨消部は一部粗雑なものがある(46)。縄文は原体L R・R L縦回転による単節斜行縄文である。また、39には原体末端の自縄自縛による結節部の回転文がある。厚味のある土器片(42・43・45・47)の胎土には、径2mm位の砂粒が比較的多く混入しているが、その他の破片には少なく緻密である。色調は内外面とも明褐色～暗褐色までみられ、焼成は良好である。

5 類 (第310図48～52、P L—145)

本類も前類同様縄文を付した後沈線で区画しているが、縄文施文部に刺突文を入れる土器を一括した。52は縦位で2条並行する隆帯があり、さらに隆帯と並行する刺突列を施す。48・49の場合は、口縁文部内面に端部と並行し断面が三角形に近い1条の隆帯が貼付されている。47～49はB区の西突端部から出土し、他はC区の出土である。全て口縁部破片であるが、外反するもの(48・49・52)と内湾するもの(50・51)があり、器種はともに深鉢か鉢であろう。口縁端部は山形の大突起になる大波状縁になるもの(48・49)と、波形に起伏する波状縁である。文様や胎土の状況からみて、48・49、50と51はそれぞれ同一個体の破片と推定される。48・

49の縄文は原体RL縦回転による単節斜行縄文で、縄文施文部に区画線に沿う丸棒先端による斜位刺突痕がある。縄文磨消部は体部～頸部の区画された部分で、口縁端部には縄文がある。50・51には縄文の施文がなく、無文の器面に幅3mm弱の篋先による沈線で区画し、区画帯の中には刺突痕がある。52は口突起部から垂下する断面三角形の隆帯が2条並行して付され、その両側に丸棒の先端による刺突列がある。48～51の胎土には最大粒径1mmの砂粒が混入し、全体として粗い粘土を使用している。52には砂粒の混入がほとんどなく緻密である。焼成はいずれも良好で、色調は褐色で一部に黒斑がある。なお、48～50の器表には媒の付着がある。

6 類 (第311図53・54、PL-146)

口縁端部に並行する1条の沈線とそれから垂下する2条の並行沈線によって器面が区画され、その部分の縄文を磨消する土器で、B区とC区から各1点づつ出土している。体部の縄文はいずれも単軸絡糸体縦回転による撚糸文であるが、53は0段がRで、54はRLである。器形は、体部がほぼ直線的に外傾し、端部で若干外反する。胎土には両者とも最大粒径1mm位の砂粒が混入しているものの、良く揃った粘土を使用している。焼成は良好で、色調はである。また、器表には媒の付着がある。

〔第IV群土器〕

本群には後期初葉～前葉の土器を一括した。調査範囲ほぼ全域で出土しているが、量的には少ない。本群全体をみると、器面の文様に種々あることから、それによって1～4類に細分した。

1 類 (第311図55～60、PL-146)

口縁上端や下端に粘土紐を貼り付け、その上に丸棒の先端で刺突痕を入れている土器である。これらは56～58がA区IIj5で、その他はC区ほぼ中央北向き斜面部から出土したが、量的には少ない。完形土器がないので器形は不明である。55は頸部が強く窄み、口縁部は外反する。肩部に横位1条、頸部に斜位1条の断面三角形を呈する隆帯が貼付され、頸部のそれには丸棒工具側面押圧による凹凸がある。肩部から体部上位の器表は篋によって荒く削られた後、爪による横方向からの引き起しがある。56～58は波状を示す口縁部破片で、口縁突起部から体部上位に低い隆帯の貼り付けがあり、その上面に細い丸棒の先端による刺突がある。全体の器形は不明である。なお、56・57は同一個体の破片と考えられる。59・60は口縁端部に隆帯を貼り付けて肥厚させ、その上面と口厚に刺突痕をもつ。60は山形の突起状となる波状縁で、その下位にも2条平行する刺突痕がある。どの破片も縄文の施文はない。胎土は全て粗く、粒径2mm以下の砂粒が多く混入している。器面調整は粗雑で、撫で痕を明瞭に残している。焼土はいずれも良好で、色調は褐色～暗褐色を示し、58の器表には黒斑がある。

2 類 (第312図61～77・第313図78～83、P L—146)

口縁端部を肥厚させて複合口縁にし(61・63・64・66・～71)、頸部から体部にかけて沈線文を付す土器を一括したが、中には体部に沈線文をもたないもの(66～71)もある。これらは口縁端部の様相が沈線を付す土器と同じであることから、同種と判断した。また、端部を肥厚させない例(65)もあるが、沈線の入れ方が他の破片と共通することから本類に入れた。これらの土器は、A区とC区から出土したが、特にA区の北端部から多く出土した。完形品は全くなく、復元実測できた1個体(72)以外は全て破片である。61～71は口縁部破片で、波状を示すもの(61・62・64・65)と平縁のもの(63・66～71)があり、端部の肥厚帯に沈線を付すもの(61・63・64・66～68・70・71)ともたないもの(69)がある。端部を肥厚させない62・65も沈線を付すことは同様である。また、口縁突起部から頸部に垂下する隆帯や円形浮文を付す例(61・64)もある。61・62・64の頸部には並行沈線による文様がある。なお、一部の頸部は縄文を磨消している(62)。72は口縁端部を縁帯状に肥厚させ、頸部から体部まで並行や蛇行する沈線で文様を付す。78～73は、全体的な様相は他と同様であるが、体部にS字鎖状の沈線による文様がある。体部の縄文には原体LR(63・68・70・71・72～74・77・78・83)やRL(81)による単節斜行縄文、原体R(75・76)やL(61)による無節縄文がある。原体の回転方向には縦と横があるものの、縦回転が圧倒的に多い。胎土に1mm位の砂粒が全てに混入し、全体として粗い粘土を使用している。焼成は全て良好で、色調には明褐色～暗褐色まで種々あり、一部に黒斑がある。

3 類 (第313図84～93・第314図94～104、P L—146・147)

器表を2～3条の並行沈線で区画し、区画帯内の縄文を磨消する土器である。出土地点はA区北端部、C区北西端部からも若干出土しているが、ほとんどはD区北端部からの出土である。完形土器がないので全体的なことは不明であるが、沈線による区画は、器面を大きく4分割するように割付けるもの(85)、渦巻状に入れるもの(84・87・92・102)、その他の種類があり、量的には渦巻状に区画されたものが多い。口縁部破片(84～98)でみると、口縁が小突起状の波状になるもの(85)と、比較的鋭角に尖る波状で左右対称とならないもの(85・95)や大きな山形の波状があり、量的には大きな山形の波状が多い。または口縁突起部に刻みつけるもの(98)、突起部の端部に縦長の隆起帯を貼付するもの(85)がある。器面の文様は、口縁部の縄文施文部に端部と並行する沈線を2～3条付し、その下位に磨消帯を表出するのが最も多いが、中には端部に磨消帯をもつもの(86・88・95)や、端部を肥厚させるもの(89・97)もある。器形は体部上位(肩部?)に最大径をもって頸部で若干窄み、口縁部は外反するもの、ほぼ直立するもの、直線的に外傾するもの等がある。推定される器形から考えると、器種は鉢か深鉢と推定される。磨消部の調整は磨消部の長軸方向に筥状の工具で撫でて磨消しているが、調整

の粗雑なものは一部に縄文を残していたり、縄文の痕跡が観察される例がある。内面の調整は比較的良好で、光沢をもつ例が多い。体部の縄文は原体LR・RL・Lの縦や横回転による単節や無節の斜行縄文で、特に横回転による施文が多い。胎土には径1mm位の砂粒が多く混入し、全体として粗い粘土を使用している。焼成はいずれも良好であるが、色調には明褐色～黒褐色まで差があり、一部には黒斑がある。87・90・92・95・96・99・の器表には煤の付着が観察される。

4 類 (第314図103～109、PL-147)

無文の器表に2～3条の並行沈線によって文様を付した土器である。出土地点はA区北端部のみで、他の区からは全く出土していない。文様は、良く研磨された器面に2条～3条の並行沈線と、沈線で区画された隆起帯(103～105・108)とからなり、103・108の器表は赤色に塗彩されている。105と109の口縁部は他の部分より若干隆起しているが、文様の構成は3類と大同小異である。完形がないので全体的なことは不明であるが、器形は体部上位(肩部か)に最大径をもち、口縁部は外反(104・105)したり、内傾するものがある。器種は鉢か深鉢であろう。胎土には径1mm～1.5mmの砂粒が混入し、全体として粗い土である。焼成は非常に良く、色調は明褐色から黒色まで差がある。

〔第V群土器〕

本群には後期中葉に属する土器を入れたが、後期の土器としては出土量が最も少ない。出土地点はC区に限定されているが、これらの土器を伴出する遺構は検出されていない。

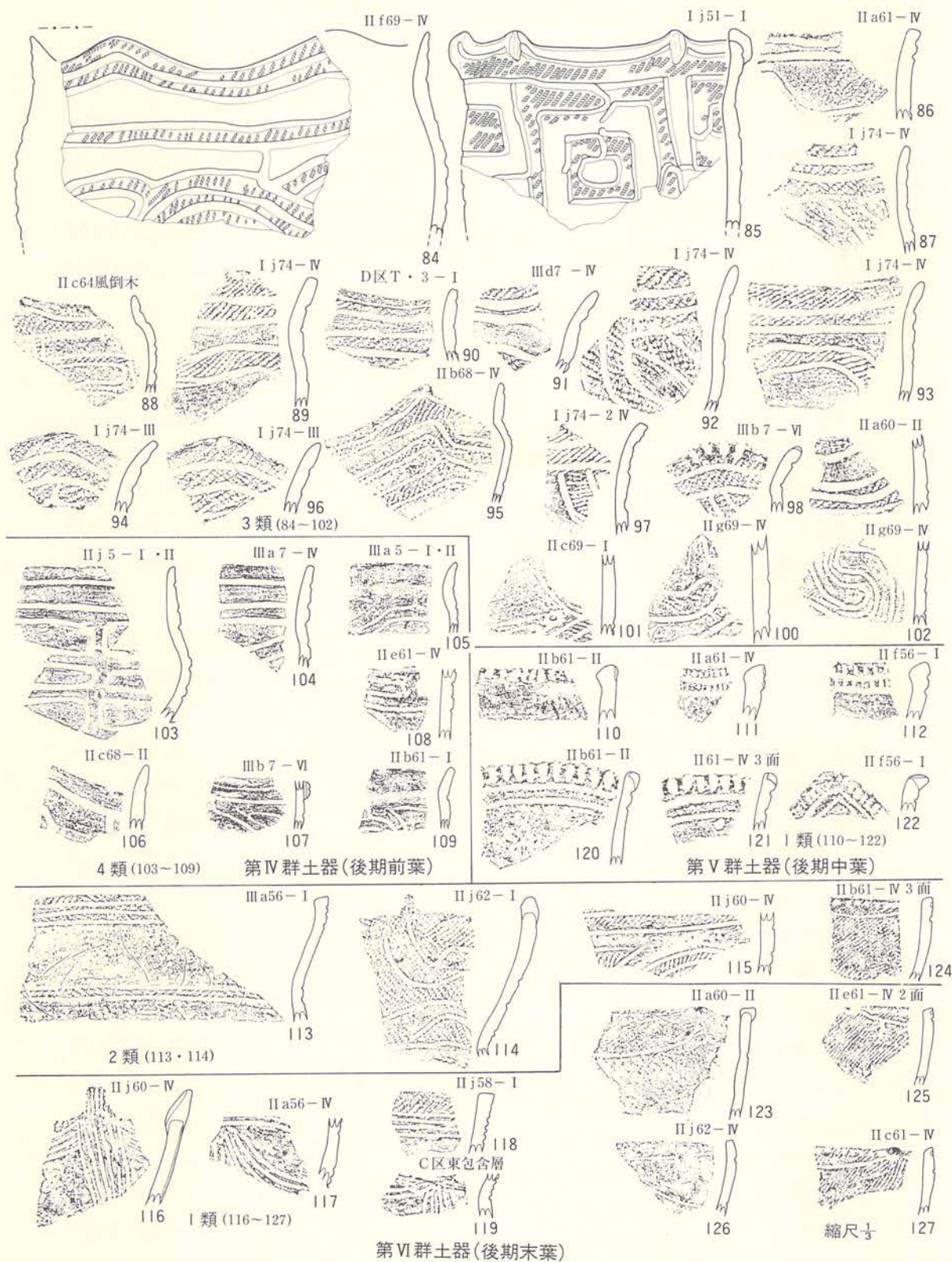
文様によって細分される。

1 類 (第315図110～112・120～122、PL-147)

口縁部に端部と並行する1～2条の沈線が付され、端部と沈線の間を篋先による縦位の刻目を充填する土器である。小破片のため定かでないが、破状口縁と平縁があるらしい。刻目帯より下部の器表は良く研磨され、光沢をもつ。また、口縁端部の内側が三角形に肥厚し、口唇が内削ぎされ若干丸味をもって内傾するもの(110～112)と、丸味をもつもの(120～121)がある。全体的な器形は定かでないが、器種は鉢形か深鉢(110～112・122)と壺形(120・121)となるであろう。胎土には径1mm～1.5mmの砂粒が多く混入し、全体として粗い粘土を使用している。焼成は良好で、色調は明褐色～暗褐色と若干差があり、一部(112)には黒斑がある。

2 類 (第315図113～115、PL-147)

並行沈線で器面を区画し、区画帯の中の縄文を磨消する土器である。113・114は口縁部破片であるが、115は体部の破片である。113は口縁端部寄りと頸部に沈線で区画された縄文施文部があり、その間の縄文は磨消されている。体部も沈線で区画された縄文施文部をもつ。114の場



第312図 遺構外の遺物(土器-4)

合は、頸部の縄文磨消帯で体部と口縁部を限り、口縁部に蛇行する並行沈線で区画された磨消帯をもつ。口縁はともに平縁であるが、114には三角形の突起がつく。115もほぼ同じ特徴をもつ。器形は、頸部で窄み、口縁部は頸部から大きく外反した後、軽く内湾して口縁端部に移行し、口唇は113が平ら、114が若干丸味をもつ。体部最大径は肩部に相当する上位にあるらしい。縄文は原体R L・L Rの横回転による単節斜行縄文である。胎土には径1mm位の砂粒が多く混入し、粗い粘土を使用している。焼成は良好で、色調は褐色～暗褐色と差があり、114と115の器表には黒斑がある。

〔第VI群土器〕

本群には後期後葉から末葉に相当する土器を一括したが、本遺跡から出土した土器の中では最も量が多く、本遺跡の主体を成す土器である。検出された遺構もほとんどはこの時期に属すると推定される。A区を除く各地区から出土しているが、量的に多いのはC区である。

該当する土器全体を概観すると、器表には貼瘤をもつもの、横位の刻目帯をもつもの、入組文的な文様をもつもの等の種類があり、それら全てを同一の特徴とすることには無理があることから、付されている文様によって以下のように分類した。

1 類 (第315図16～19、P L—147)

器表に多条の並行沈線で文様を付す土器である。116～119は口縁部から頸部、119は体部の破片である。口縁端部付近の器表に縄文を付すが、その他の部分は良く研磨された無文帯とし、文様はその部分に縦方向5条単位、左横方向4条、右横方向5条、頸部4条(?)の各単位で不整な並行沈線によって施されている。器形は、頸部で窄んで口縁部が外反し、口唇はほぼ平らであるが軽く内削ぎされ内傾している。口縁は平縁らしいが、角形の突起が付着している。縄文は原体L R横回転による単節斜行縄文である。胎土には径1mm～1.5mmの砂粒や石英粒の混入がやや多いものゝ、全体的には緻密な粘土を使用している。焼成は非常に良く、色調はやや橙色味を帯びた褐色である。

2 類 (第316図123～127、P L—147)

口縁部に円弧を描くような波状の沈線を付し、端部に列点状の刺突をしたり(124・125・127)、波状沈線の下位の縄文を磨消する土器(123・126)であるが、波状沈線と刺突は次の3類とも共通する特徴であることから、本来は3類に入る可能性がある。出土量も少なく、地点もC区に限定されている。本類の土器は他より器厚が薄く4mm位である。破片のため全体的な器形は不明であるが、体部から口縁部が軽く内湾して外傾し、口縁は平縁で、端部の器表に円錐形状の小さな瘤が付着する。縄文は原体L R横回転による単節斜行縄文(124・125・127)と原体L横回転の無節縄文である。胎土は径1mm前後の砂粒や石英粒が混入し、やや粗い粘土を

使用している。特に123はその傾向が強い。焼成は良好であるが、色調は暗褐色～黒褐色で123～125には器表に煤の付着がある。

3 類 (第316図128～142、P L—147)

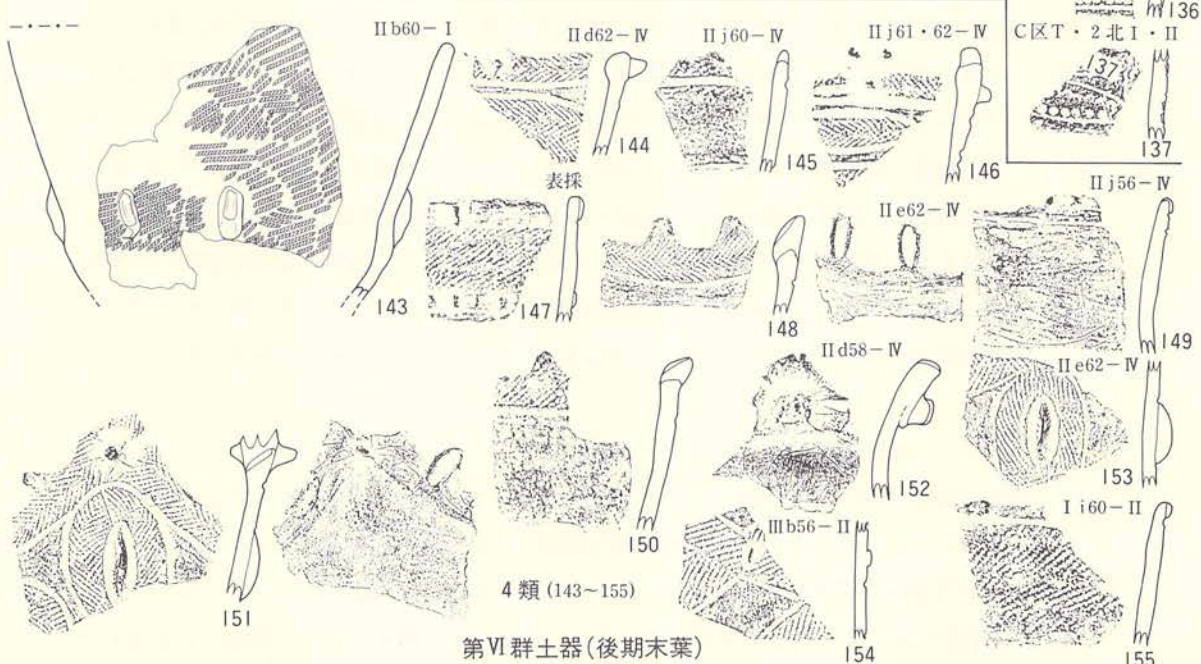
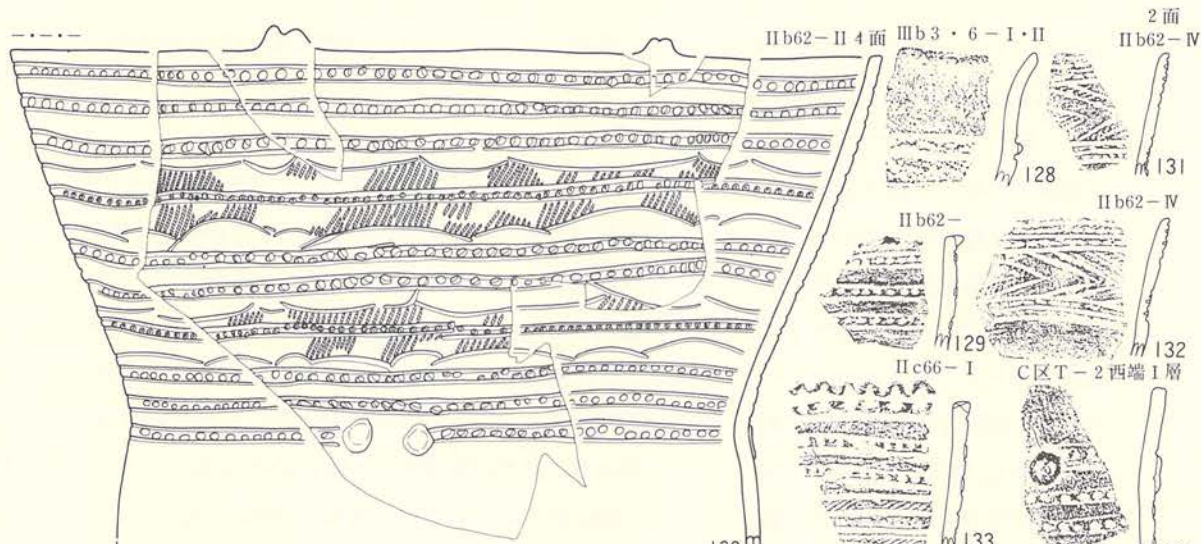
沈線で区画して縄文を磨消し、竹管や丸棒の先端で刺突した列点文を伏すことを特徴とする。全体的な文様構成には何種類かあるが、基本的には刺突による列点文をもつことから、同種としたが、列点を付すための刺突には器面に直角な例(129・130・134～139)と斜位で押し付ける例(128・131～133・140～142)がある。器面を区画する沈線にも、2条かそれ以上の並行沈線を基本とする例(129・133～136・139)と、円弧を描くような波状の沈線(130・137・138)があり、沈線を付す工具はいずれも丸棒の先端である。また、130・134・135には円形浮文の貼付けがある。器形は体部中位が窄み、その上位から口縁部が直線的に外傾する例(130)もあり、器種はおそらく鉢か深鉢形と推定される。口縁部は平縁であるが、端部や口唇に突起の付く例がある。縄文は原体L R・R L横回転による単節斜行縄文である。胎土には径1mm以下の砂粒と若干の石英粒が混入し、やや粗い粘土を使用している。焼成は良好であるが一部に黒斑を残す。色調には明褐色から極暗褐色までである。140～142の器表には煤の付着がある。

4 類 (第317図143～155、P L—148)

器面に縦長や円錐形の瘤を貼付ける土器である。完形土器はなく、実測できたのは143のみである。文様は、縄文を付した後沈線で区画して縄文を磨消し、ところどころに縦長の瘤を付す。頸部から口縁の縄文は、全面磨消して無文帯とする例(145・149・150・152)や、縄文以外に文様をもたないもの(143)もあり、一様ではない。瘤を貼付ける位置は、体部の窄み部、口縁端部、口縁突起部、口唇等である。器形は定かでないが、体部中位(?)が窄み、その上位から口縁部は直線的に外傾する個体(143・149・155)があり、器種はともに鉢か深鉢であろう。縄文は原体R L・L Rの縦回転や横回転による単節斜行縄文や、二種類の原体を使用した羽状縄文がある。胎土には径2mm位の砂粒や石英粒が多く混入し、全体として粗い粘土を使用している。焼成は非常に良好であるが、色調は明褐色～黒褐色までである。また、器表に煤のつく破片が多い。

5 類 (第318図156～162、P L—148)

小さな瘤を数多く貼付ける土器を主体としたが、156・161・162の3点は若干異なる様相を示しているが、とりあえず本類に一括した。156は頸部と体部に帯状の縄文施文部をもち、その部分には小型で円錐形の瘤を貼り付けており、その他は無文で良く研磨されている。161・162もほぼ156と同様であるが、156の縄文施文部に相当する部分が、縄文ではなく櫛描による細かい並行条線が付され、その上面と上位に貼瘤がある。なお、161・162は同一個体である可能性が強い。157・160は、器表に縄文を付した後沈線で区画して縄文を磨消し、縄文施文部に小型の



縮尺

第313図 遺構外の遺物(土器-5)

貼瘤を付す。なお、158のように縄文施文部に斜格子状の沈線を引く例や、157のように篋先刺突による引き起しで瘤状にした例もある。縄文は原体LR・RL横回転による単節の斜行縄文である。156の器形は、体部上位（肩部？）に最大径をもち、頸部で窄んだ後、端部に向って内傾しており、器種は壺形であろう。他の破片は定かでない。胎土には比較的多めの砂粒が混入しているが、全体としてみると緻密な粘土を使用している。焼成は良好で、色調は明褐色～暗褐色まで差があり、一部に黒斑をもつ。また、159の器表には煤の付着がある。

6 類 (第315図163～165、PL-148)

沈線と列点（刻み）による文様を付し、瘤の貼付けのない土器である。出土量は少なく掲載した3点のみである。器形全体が不明であるが、破片の湾曲の程度から考えて、小型の壺か鉢形と推定される。本類は5類と近似しているが、瘤の貼付けがないことから分離させた。文様は、細い丸棒の先端を使用した1条や2条の直線や曲線で施し、163・165は沈線区画に刻目状の列点文を付している。164の沈線文は他と同じであるが、列点の沈線区画はない。また、163・165の器面には原体L横回転による無節の斜行縄文が付され、164には縄文がない。胎土には径1mm以下の砂粒と石英粒が少量混入し、焼成は非常に良好である。色調は橙色気味の褐色（164）と褐色があり、一部に黒斑をもつ。

7 類 (第315図165～176、PL-148)

沈線による区画と横方向に連続する幅広で間隔の広い刻目帯を付す土器を入れた。器形の明らかな166・167は体部中位が窄む小型の鉢形で、168は香炉形と推定される。その他のものは鉢形を示すと思われる。口縁は平縁であるが平面三角形や丸形の突起が付着する。刻目を付す工具には、沈線を引いた丸棒で斜めに押圧するもの（170）、沈線は丸棒で刻目は篋先を使用（166・168・169・171～173）、沈線を引いた丸棒とは異なる丸棒の先端を斜め押圧（174）、沈線は細い丸棒で刻目は半截竹管による爪形（167・175・176）の4種類あり、中には中心が凹む円形浮文（168・170）や縦長（171～177）、円錐形（175・176）の瘤を貼付ける例もある。体部の器表に縄文の施文はなく、良く研磨された無文である。胎土には径1mm以下の砂粒が若干混入するものの、比較的緻密な粘土を使用し、焼成は良好である。色調には黄褐色気味から暗褐色気味まであり、一部に黒斑を残すもの（168）がある。

8 類 (第315図177～192、PL-149)

口縁部から体部にかけての器面を沈線で入組文的な区画をし、区画帯を連続する刻目帯とする土器である。前の7類と刻目を付す方法が同じであり、一部共通する部分がある。また、中には（183・184・187・188・192）入組文的な部分に縄文を付す例もある。器種は、体部中位が窄み、口縁部が大きく外反する器形の深鉢形である。口縁は平縁であるが、平面山形（182・189）や瘤状の2個一対（183・186・191）、または、中央を割って平面B形（177～180・190）の突

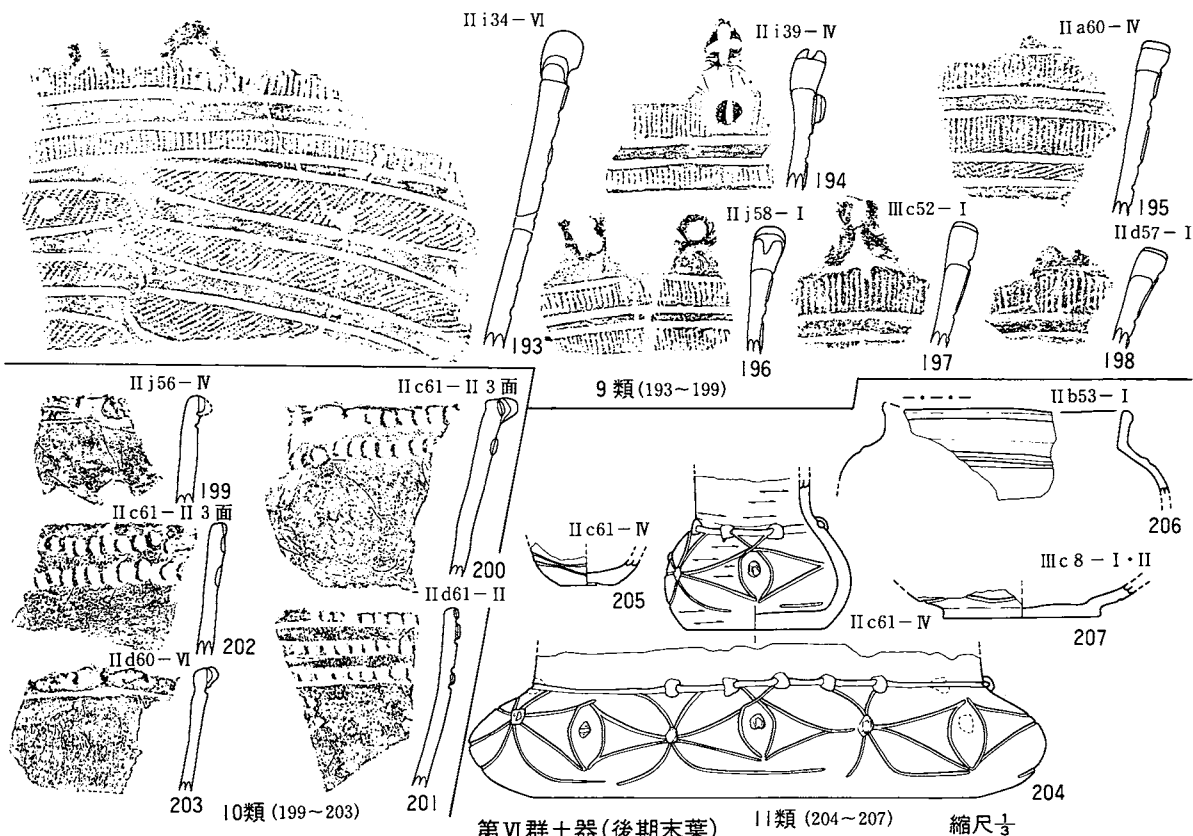


第314図 遺構外の遺物(土器-6)

起が付着する例が多い。付されている縄文は原体LR横回転による単節斜行縄文である。胎土には径1mm位の砂粒が混入する破片が多く、焼成も良いもの(179~184・186・192)と悪いもの(前記以外)がある。色調は明褐色~黒褐色まで差があり、器表に煤を付着する例が多い。

9 類 (第315図、P L-149)

沈線による入組文的な区画と縦長・幅狭で間隔の密な刻目をもつことを特徴とする土器である。入組文部には縄文を付す。破片だけであるため全体的な器形は不明であるが、器種は深鉢か鉢形であろう。刻目は横に連続する帯状でいずれも口縁端部付近に付され、その下位に入組文部をもつ。口縁部は3個一対の突起を数ヶ所にもつ平縁で、突起部には山形のもの、中央が割られるもの(193・194・196~198)がある。また、口縁部の器厚は端部に寄るほど厚味を増し、突起部に最大厚をもつ。体部の縄文は原体LR横回転による単節斜行縄文である。胎土には径1mm位の砂粒が多量に混入し、全体的に粗い粘土を使用しているが、無文部の器面は非常に良く調整されて光沢を有し、焼成も良好である。色調は明褐色~暗褐色まで差がある。



第VI群土器(後期末葉) 11類(204~207) 縮尺1/3
第315図 遺構外の遺物(土器-7)

10 類 (第315図199～204、P L-149)

器表を無文にした後、口縁部に篋先による斜位刺突引き起しによる隆起帯と刻目を付す土器である。199・201・203の刻目帯は沈線で区画されている。また、刻目帯に円錐形の貼瘤文をもつものが多い。器面は良く研磨されるものと粗雑なものがある。胎土には径1mm～2mmの砂粒が多く混入し、全体として粗い。焼成は良いものと悪いものがあり、色調は褐色～黒褐色である。

11 類 (第315図204～207、P L-149)

無文の器表に沈線のみによって施文する土器を一括した。出土量は少ない。204は口縁部を欠損するが、ほぼ完形に近い。その他は破片であるため全体的なことは不明である。なお、204では頸部と体部に貼瘤があり、頸部のそれには横からの貫通孔がある。胎土には径1mm位の砂粒と石英粒や雲母片(204)が混入しているものの、比較的緻密な粘土を使用している。204は焼成があまり良くないが他は良好である。色調は、209が黒褐色で他は明褐色や褐色である。

〔第VII群土器〕

本群は晩期に属する土器である。A区からD区までほぼ全面で出土しているが、出土量の最も多いのはC区である。しかし、全体で見ると量はそれほど多くはない。検出された遺構をみると、A区とC区に該期の土坑が立地するものの、住居跡は未検出である。C区東側に隣接する調査区域外に本群の土器が濃密に分布する範囲があり、この部分が該期の中心となるであろう。

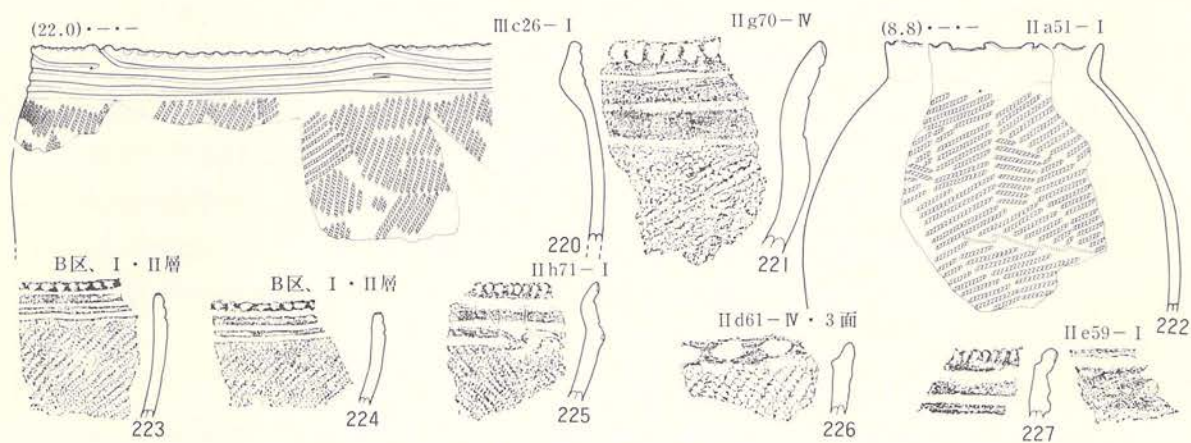
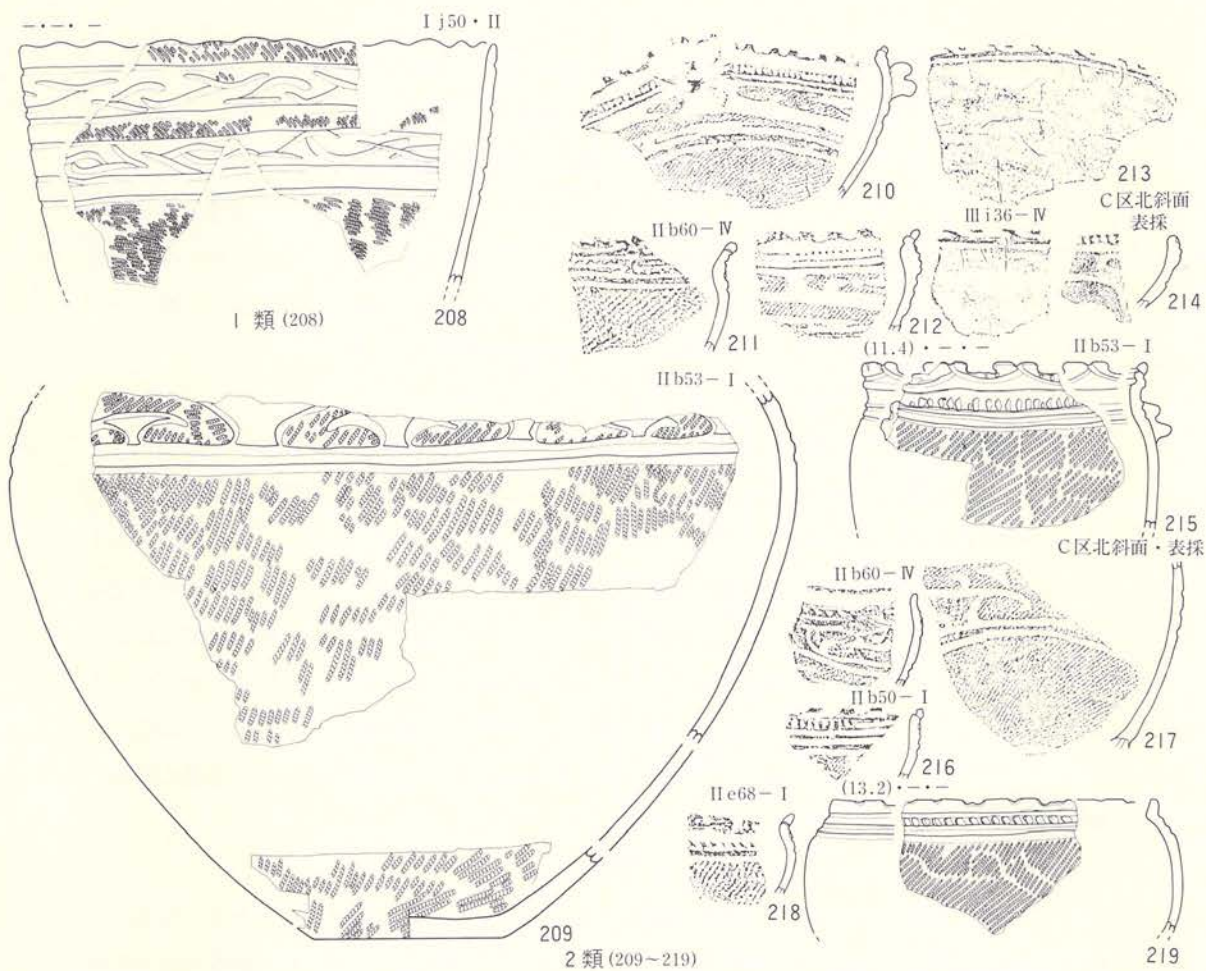
出土している土器を概観すると、施文された文様に各種あり、何種類かに細分される様相を示していることから、以下のように細分した。

1 類 (第316図208、P L-149)

器面を横位で並行する沈線で区画した後、上から1条目と2条目の間、3条目と4条目の間に横に連続する沈線による三叉文が付される土器である。該当する土器はこの1点のみである。器形は体部～口縁部が内湾気味に外傾し、器種は鉢形である。口縁部は不均整な小波状を示している。三叉文の施文部には縄文の施文がなく、良く研磨されている。縄文は原体RL横回転の単節斜行縄文である。胎土には径1mm以下の砂粒が比較的多く混入し、全体的に粗い粘土である。焼成は良く、色調は橙褐色で一部に黒斑を残す。

2 類 (第316図209～219、P L-149)

頸部に羊歯状文からの変化と考えられる横に連続する縦長の刻目を付し、肩部から体部上位に縄文の磨消によるいわゆる大腿骨文(209・212・213・215・217)が施文される土器であるが、頸部に沈線と刻目だけのものもある(211・216・218)。口縁部には平縁(213・215)とB型突



3類 (220-227)

第VII群土器(晩期)

縮尺 $\frac{1}{3}$

第316図 遺構外の遺物(土器-8)

起が付着する小波状縁があり、一部（210・212・214）の内面には横走する1条の沈線が付されている。また、肩部外面に捻った2個の突起をもつ縦長の瘤が付着する例もある（210・214）。器形は、肩部に最大径をもって頸部で窄み、体部は内湾気味に外傾しており、器種は鉢形であろう。中には高台の付くもの（217）や大型の広口壺的なもの（209）もある。体部の縄文は全て原体LR横回転による単節斜行縄文である。胎土には径1mm以下の砂粒が若干混入しているが、全体的には粒子の細かい粘土を使用している。焼成はいずれも良好であるが、色調には明褐色（213・215）と黒褐色があり、209・211・217の器表には煤の付着がある。

3 類 （第316図220～227、PL-150）

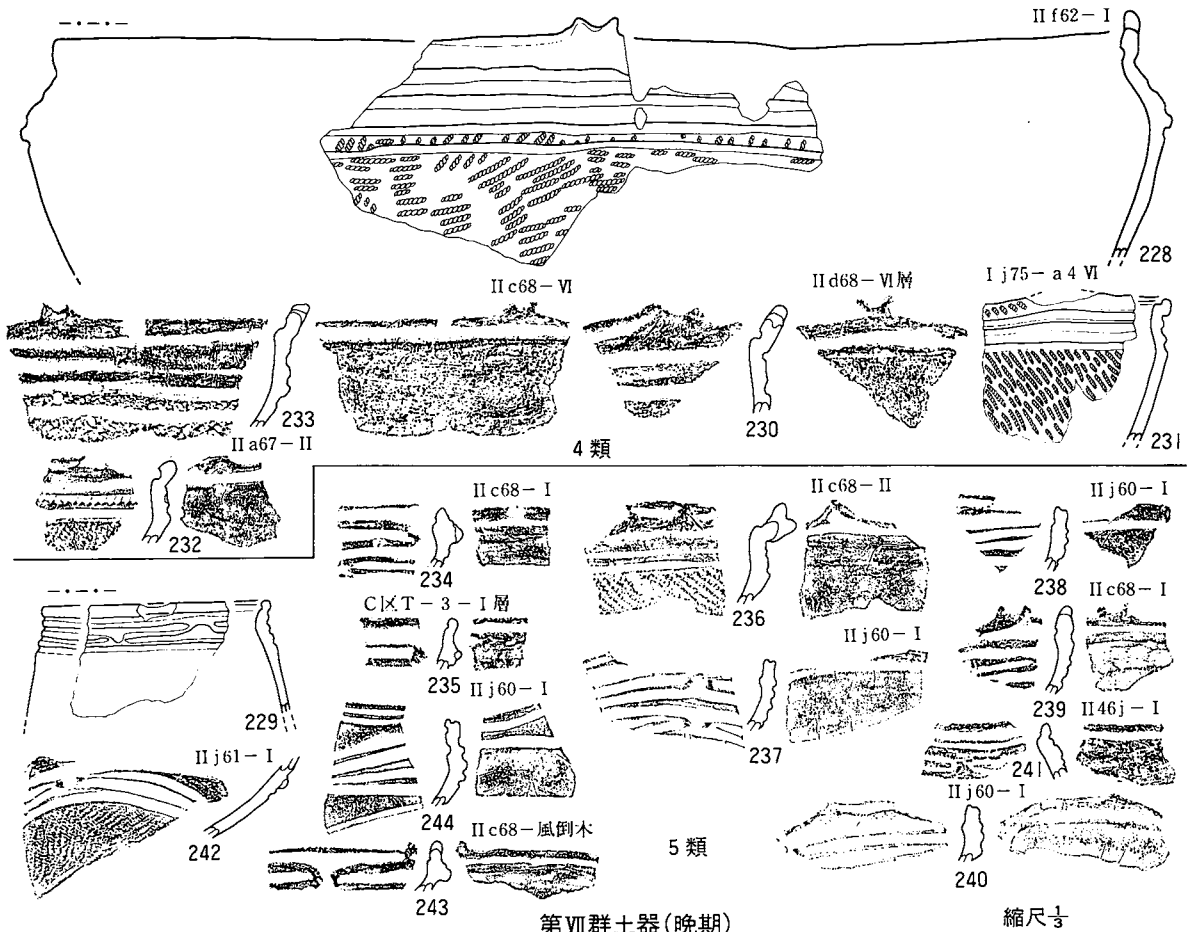
頸部を無文にして並行沈線を全周させ、口縁部や口唇部に刻目を入れて小波状とする土器を入れた。222の口縁突起は後期のそれに近似しているが、とりあえずここに入れておく。226の口縁には無文帯や沈線はないが、口唇が内削ぎされ、外面からの斜め押圧による小波状を示す口縁であることから本類とした。器形には頸部が窄むもの（220～222・225・227）とそうでないもの（223・224・226）が含まれるが、器種はいずれも鉢か深鉢であろう。体部の縄文は原体LRや横回転による単節斜行縄文である。222には原体末端の自縄自縛による結節回転文がみられる。胎土には径1mm～2mmの砂粒が多量に混入し、全体的に粗雑な粘土を使用している。いずれも器表に煤の付着がみられ、二次的な焼成によって脆くなった破片もある。色調は暗褐色や黒褐色である。

4 類 （第316図228～235、PL-150）

肩部下端と頸部に沈線を全周させる土器を入れた。また、口縁端部内面にも1条の沈線を全周させている。232の頸部には沈線の部分に縦形の小さい刻目をもつ。器形は、肩部に最大径をもって頸部で窄み、頸部中位から口縁端部が外反し、口唇は外削ぎされるが若干丸味をもち、一部（230）の口唇には沈線をもつ。口縁部はほぼ平らで、山形の小突起がつく。肩部が帯状に軽く降起する例（228～230）もある。肩部から下位と口縁端部（231）には原体LR（228・229・232）、RL（230）の横回転による単節斜行縄文が付されている。器種は深鉢形である。胎土には径1mm～1.5mmの砂粒が多く混入し（228～231）、さらに228～230には金雲母の混入があり、全体として粗い粘土を使用している。232は砂粒の混入もなく、非常に均一で緻密な粘土である。焼成はすべて良好で、色調には明褐色～黒褐色までである。228・229には黒斑を残している。

5 類 （第316図233～244、PL-150）

沈線で区画した後研磨し、降起帯状の工字文的な文様を付した土器である。降帯の分岐点に瘤状の小突起が付くもの（234・235・237・240・241・243）と付かないもの（233・239・241）がある。器種には鉢と壺形がありそうである。壺と思われるのは233で、器形は文様のある頸部



第317図 遺構外の遺物(土器-9)

に最小径をもち、体部下位ほど径が大きくなり、口縁端部が外反する。鉢(234~244)には明らかに浅鉢と推定されるもの(242)もある。大型の破片がないので全体的なことは不明であるが、底部から大きく外傾した体部は、口縁部下端で直立して中位で軽く窄み、端部は外反か外折している。また、端部内面には横走る1条~2条の沈線が付されている。口縁部は平縁のもの(233)もあるが、ほとんどは波状縁を示し、その中には小突起となるもの(239・243)、3個一対の山形となるもの(236)、大波状となるもの(240・244)等がある。体部の縄文には原体LR(242)、RL(236)横回転による単節斜行縄文である。胎土は、全体として緻密で粒子も良く揃っているが、233には径0.5mm以下の砂粒と金雲母が若干混入している。焼成はいずれも良好である。色調には明褐色~暗褐色まであり、一部(238・240・240)には黒斑がある。

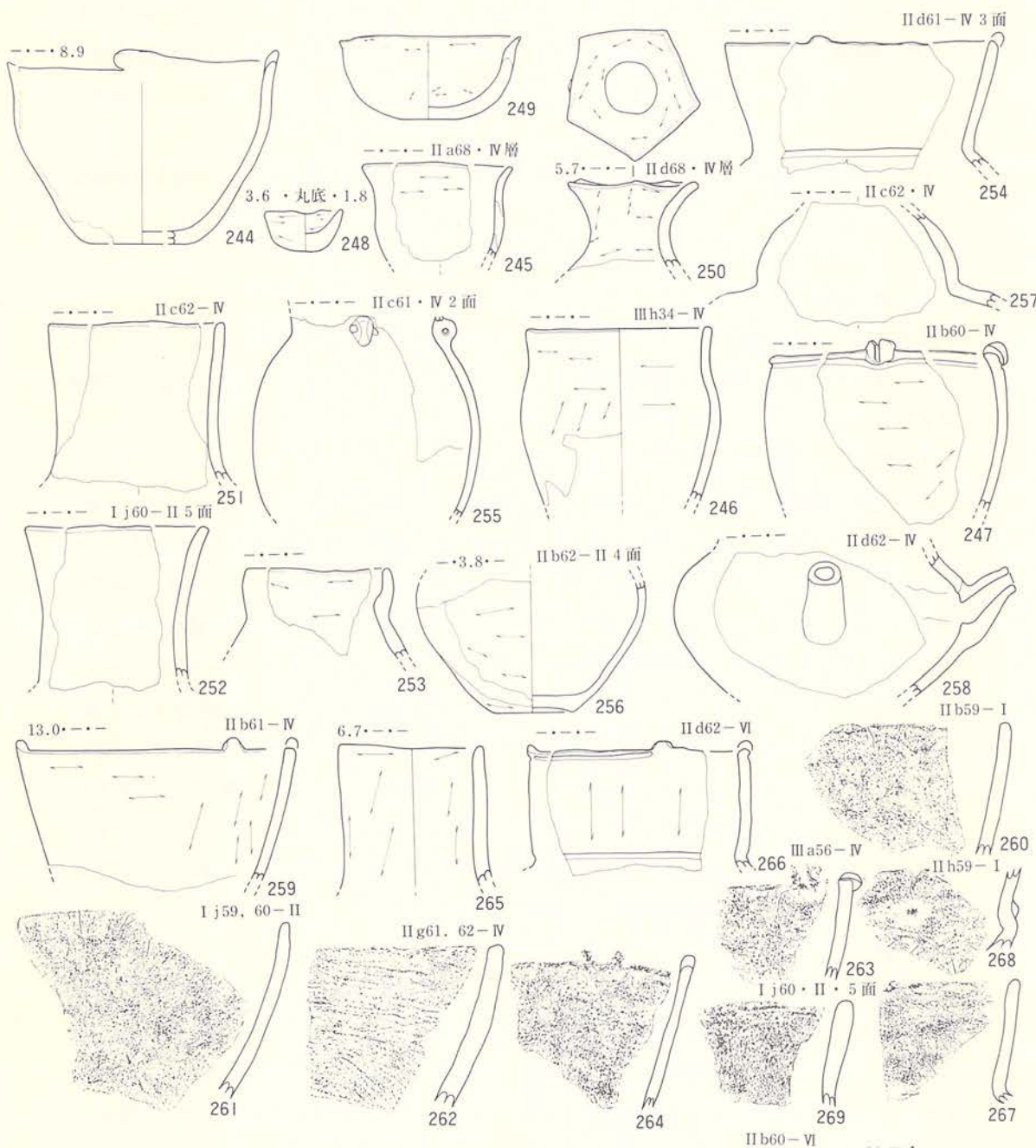
〔第Ⅷ群土器〕

(第318図244～269、P L—150・151)

本群には器面に全く文様をもたない、一般に無文土器と呼ばれる土器を一括した。本群のような無文土器だけで一時期を構成する例はないので、本来は第Ⅲ群～第Ⅶ群の土器に共伴する土器群であろう。出土地点はC区にほぼ限定されている。器形からみた器種には、鉢(244～249・259～264・268)、壺(250～257・265～267・269)、注口土器(258)があるものの、ここでは一括して記述することにした。

鉢には浅鉢(244・248・249)と深鉢(243～246・259～264・268)があり、浅鉢には底部が平底のもの(244)と丸底のもの(248・249)があり、平底の244の方が丸底のものより大型である。244の器形は、底部で外傾する体部が、上位で直立して軽く窄み、口縁部は若干外反し、端部が軽く内削ぎされて先細りとなり、口唇を丸味をもつ。口縁は平縁であるが、一個の横を向く突起がある。248・249は底部が平底風の丸底で、体部は直線的に外傾するもの(248)、内湾してほぼ直立するもの(249)がある。248はいわゆる小型土器で、底部の器厚が厚く、体部は端部に向かって先細りとなって口唇は丸くおさまる。口縁部は平縁であるが、製作時の小起伏がある。249は口縁端部が内削ぎされた後外折し、口唇は先細りで小さな丸味をもつ。器面はいずれも良く研磨され光沢をもつ。また、249には成形時の粘土積み上げ痕をもつ。胎土にはやや多めの径1mm位の砂粒が混入し、比較的粗い粘土を使用している。焼成は非常に良く、色調は明褐色である。深鉢は浅鉢に比して量が多く、やや小型なもの(245～247・259)とやや大型のもの(260～262・264)がある。器形の明らかなものは246・247のみである。246は体部上位に最大径をもち、頸部で窄んだ後口縁部が軽く外反する。口縁部は平縁で口唇は丸味をもつ。247は体部上位に最大径をもち、その上位が口縁端部まで内湾し、口縁部は中央を割る瘤状の突起が付く平縁である。口唇は若干丸味をもつが、撫でによって両側が幾分隆起する。器面は撫で調整であるが、光沢をもつほどではない。胎土には径1mm位の砂粒が多く混入し、粗い粘土を使用している。焼成は良好で、色調は暗褐色で一部に黒斑をもつ。その他の破片は全体の器形が不明であるが、体部上位に最大径をもち、口縁端部に向かって内湾する器形と考えられる。器面調整は撫でであるが粗雑で、262では横位の条線が多数入る。また、261には成形時の粘土紐積み上げ痕をもつ。胎土は径1mm位の砂粒が多く混入した粗い土を使用している。焼成は良好であり、色調は明褐色～黒褐色まであり、一部に黒斑をもつ。268は壺的な器種であるが、これと良く似た鉢がある(第318図166)のでここに入れた。器形は体部上位に最大径をもち、頸部(?)が大きく窄んで瘤状の突起が付き、口縁部は外反する。胎土・焼成・色調は他と大きな違いがある。

壺には全体の器形を推定しうる破片はないが、口縁部が大波状となるもの(250)、平縁のもの(251～253・265・267・268)、平縁に小突起のつくもの(254・266)がある。口縁部は外湾



第Ⅷ群土器(無文土器)

第318図 遺構外の遺物(土器-10)

するもの(252)、直立気味のもの(251)、直線的に外傾するもの(254・267・269)、内湾もしくは内湾気味のもの(253・266)等があり、さらに頸部に一条の沈線を全周する例(254・266)もある。なお、253の口縁は受口状になっている。胎土・焼成・色調は他のものと同様である。

注口土器は、体部最大径の位置に先端が軽く下垂する注口が付いている。その他は大差がない。

〔第Ⅸ群土器〕

器表に縄文以外の文様をもたない土器を一括したが、出土地点は遺跡ほぼ全域におよんでいる。本来は第Ⅲ群～第Ⅶ群の土器に共伴するものであろう。縄文施文に使用された原体や器種に各種含まれるが、ここでは縄文原体によって次のように細分した。

1 類 (第319～321図270～307、P L—152)

原体LR(277～286・289・291・296・287・299～301・303～307)、RL(270～276・287・288・290・292～295・298・302)を使用した単節斜行縄文を付した土器である。出土地点はB区～D区であるが、C区南側の包含層から出土した土器が多い。器種は全て鉢か深鉢であるが、器形には体部が内湾気味に外傾するもの(270・271・273・274・277・279～286・288・296・299・301・303～305)、体部から口縁部が直線的に外傾するもの(276・291・294・297・300)、体部から口縁部が端反か外湾するもの(272・290・298・306)等がある。また、口縁部は270・272が波状を示す以外は、全て平縁である。275の場合は成形時の起伏であろう。270はある間隔で切り込みを入れて小波状とし、272は口縁を5等分して大波状としている。口唇部には丸味をもつもの、内削ぎや外削ぎされて先細りとなるもの、平らに撫でられるもの、指頭押圧による凹凸があるもの等がある。胎土には径1mm以上の砂粒が多量に混入し、全体的に粗雑である。焼成もよし悪しが混在し、色調も明褐色～黒褐色まで雑多である。

2 類 (第322図308～314、P L—153・154)

羽状縄文を付す土器である。C区からだけ出土しており、最的にも少ない。使用される原体には、LRとRLの二種類を並行させて横回転するもの(308～312)とLRを横回転と縦回転させて表出するもの(313・314)がある。器種には壺(308・309・312・314)と鉢(310・311・313)がある。胎土には1mm以上の砂粒が多く混入しているが、全体的には緻密な粘土を使用している。焼成は比較的良好であるが、308・309・311・312は胎土の中心部が灰黒色である。色調は褐色～暗褐色である。

3 類 (第322図315～323、P L—154)

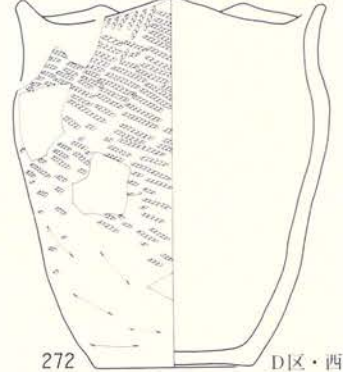
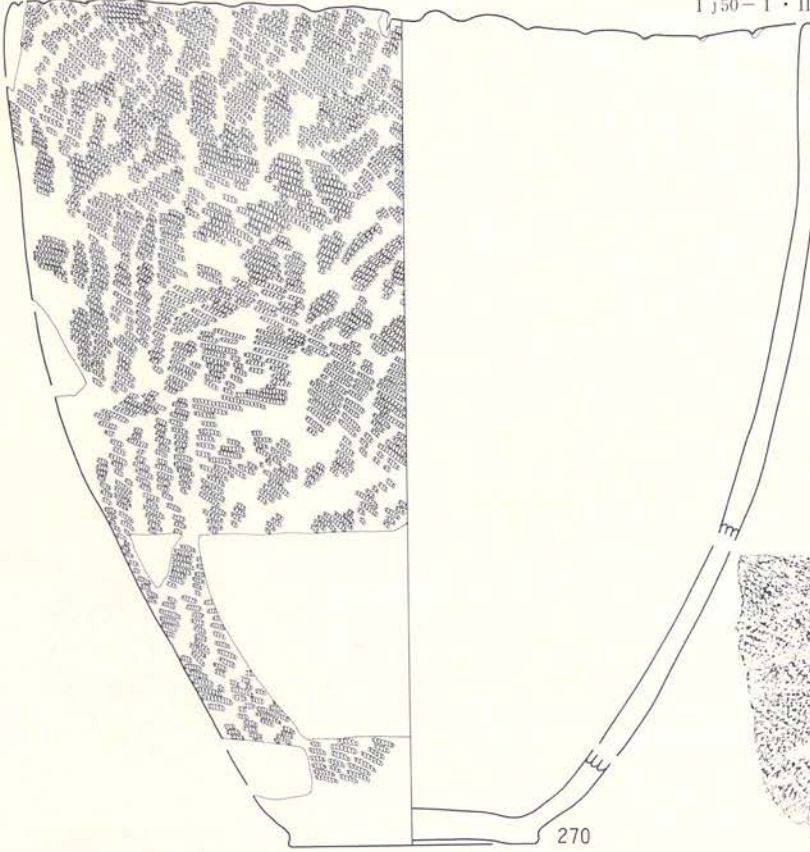
器表に無節縄文の付された土器である。出土地点はC区とD区であるが、D区での出土が多

31.8・10.0・32.8

I j 50-1・II

12.5・6.4・14.7

II g 70-IV層

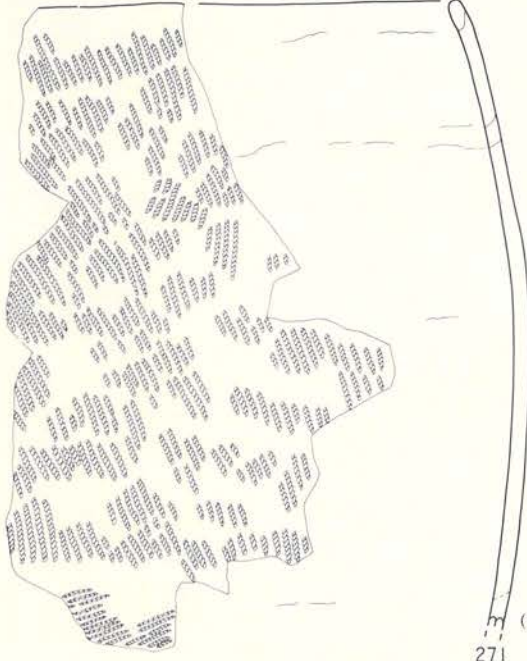


D区・西端
・T-31層

I j 59・60-II



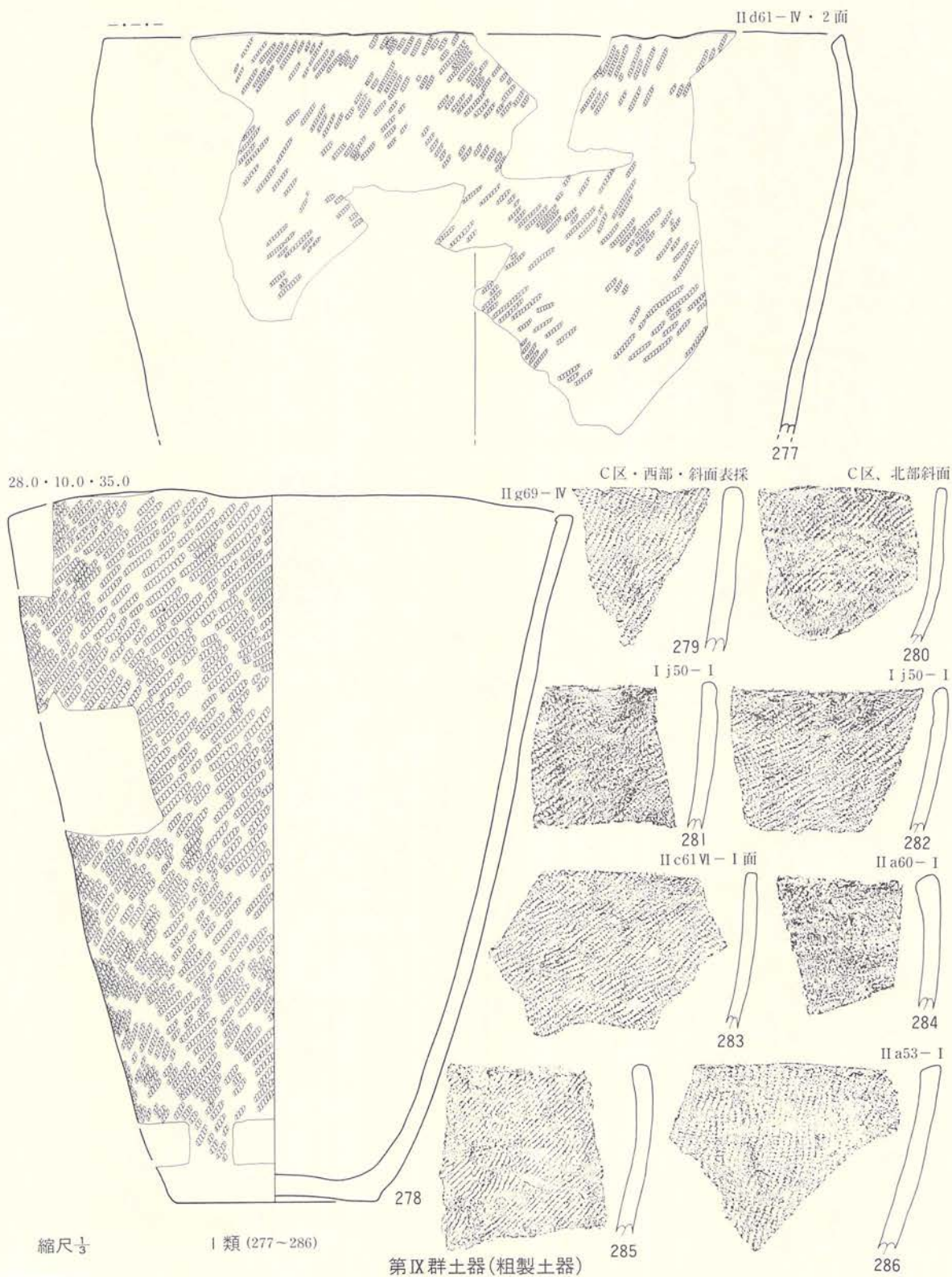
I j 60



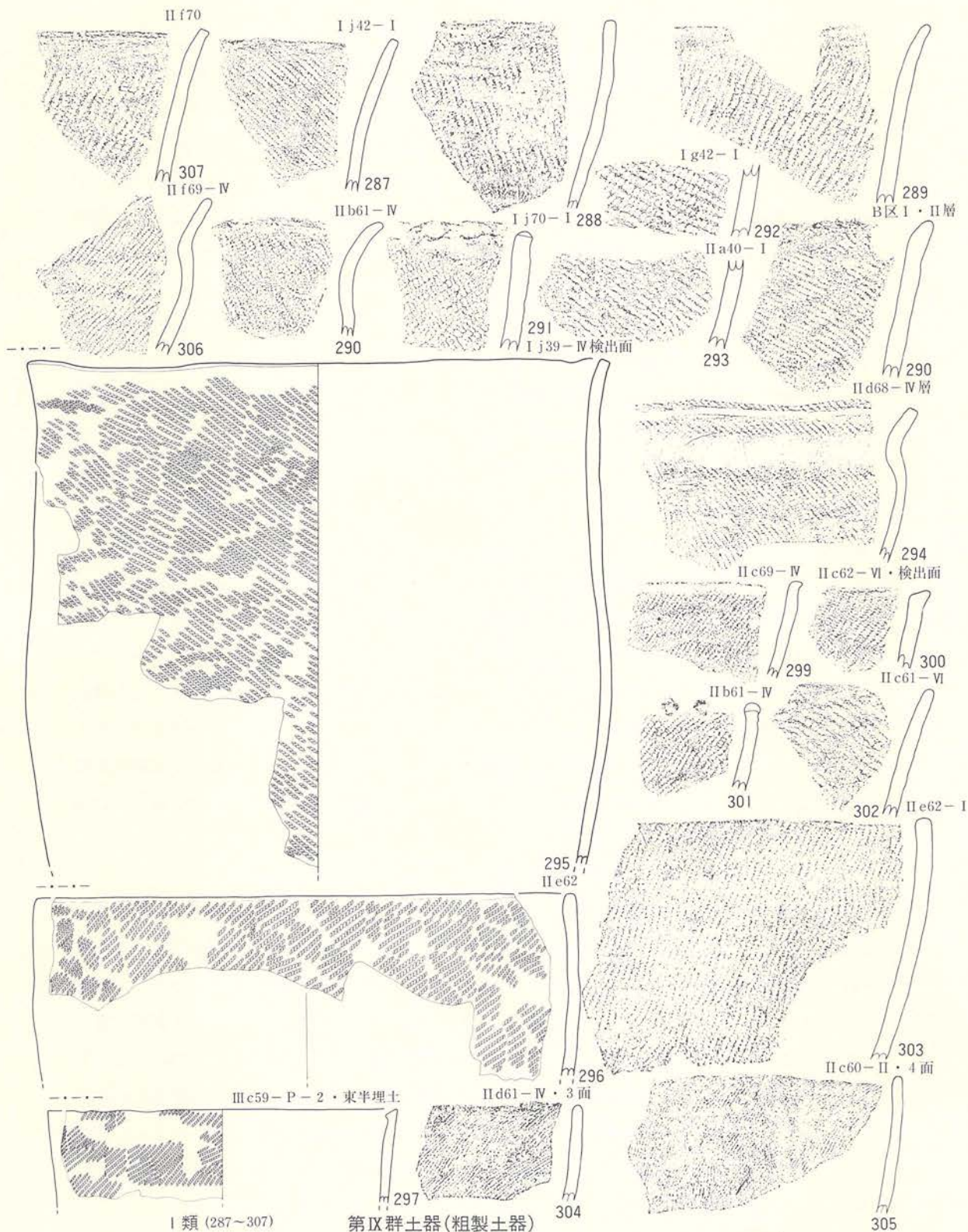
I類
(270~276)

第IX群土器(粗製土器)
第319図 遺構外の遺物(土器II)

縮尺 $\frac{1}{3}$



第320図 遺構外の遺物(土器-12)



第321図 遺構外の遺物(土器-13)

縮尺 $\frac{1}{3}$

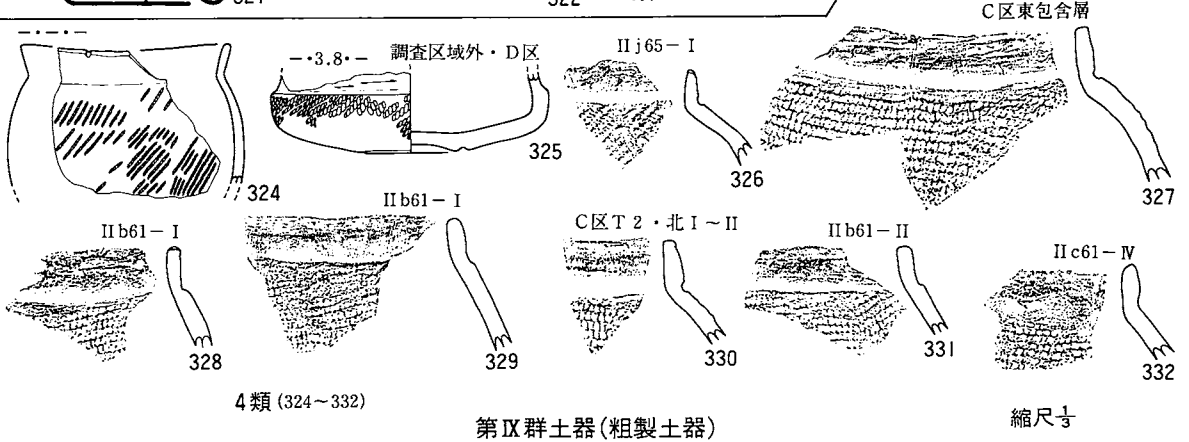
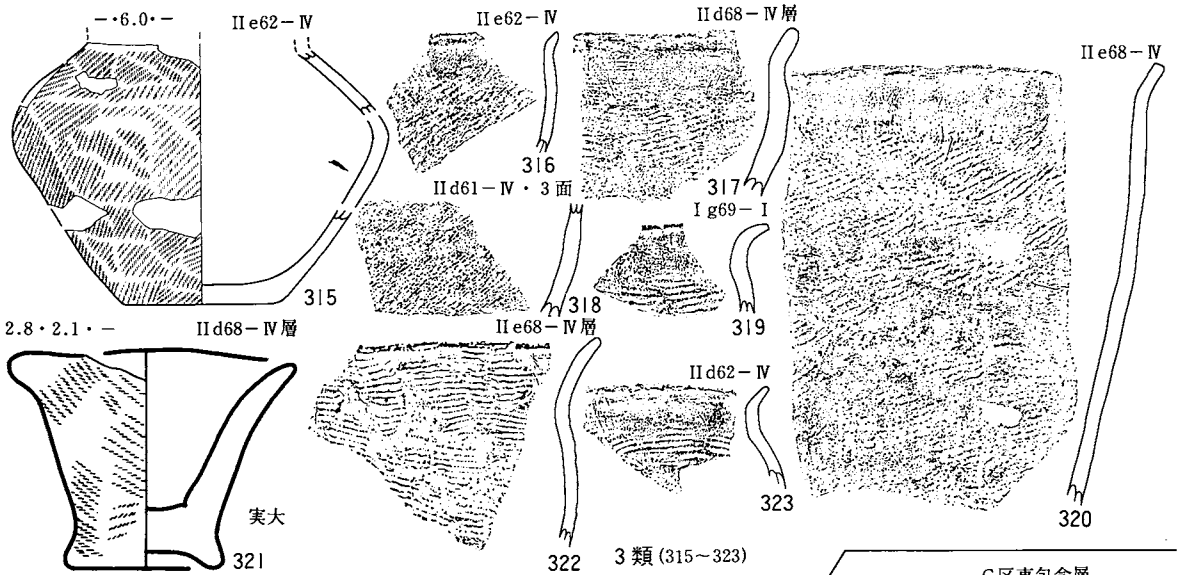
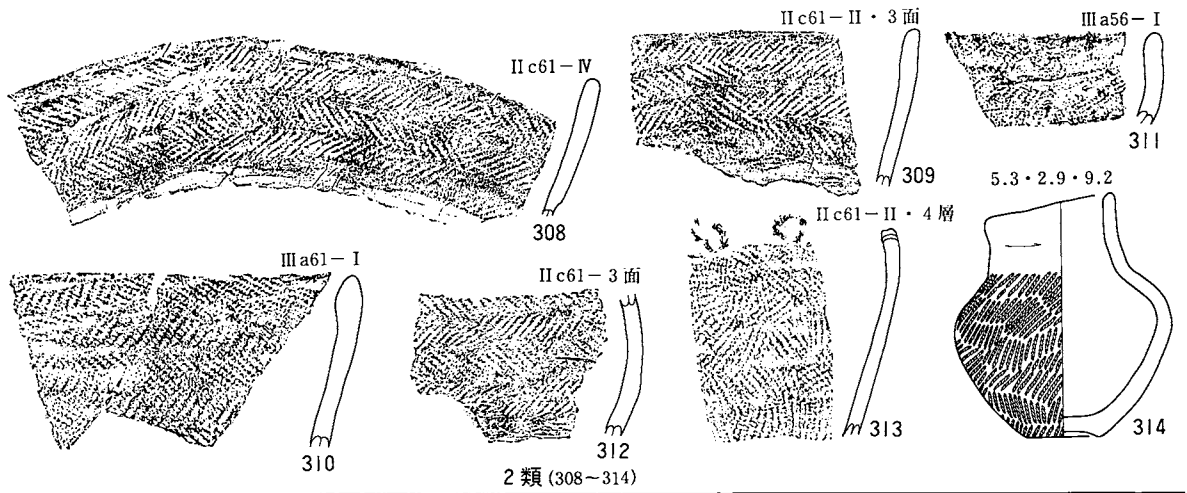
い。縄文は原体Lの縦回転で施文されている。器種には壺(315)と鉢(316~323)があり、その中で321は小型土器である。315の器形は体部上位に最大径があり、頸部で大きく窄むが、口縁部は欠失のため不明である。鉢には、外傾する体部が頸部で窄むもの(317・319・322・323)と窄まないものがあり、口縁部はいずれも外湾(319・322・323)か外反(316・317・320)する。321の底部は上げ底風で低い輪高台状となり、体部は軽く外湾気味に外傾している。器厚は端部に向って次第に薄くなって先細りとなるもの(321)や口縁部が先細りとなるもの(316・319・323)とあまり差のないもの(317・320・322)があり、口唇は丸味をもって小さくおさまるもの(316・319・321~323)と丸くなるもの(317)、やや角ばるもの(320)がある。胎土には径1mm以上の砂粒が多量に混入しているが、全体的に緻密である。焼成は良好であるが、中に胎土の中心が黒色のもの(317・317・320・323)がある。色調には明褐色~黒褐色までである。

4 類 (第322図324~333、P L-154)

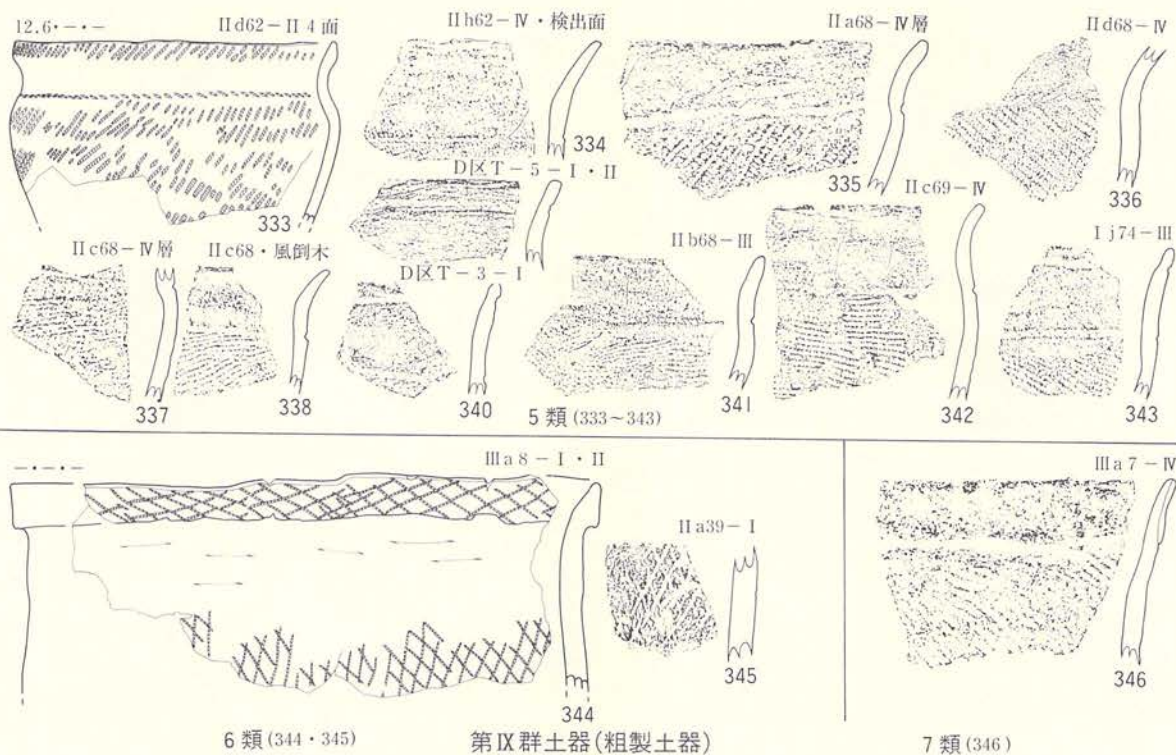
体部と頸部を段差(325~321)や屈曲(324・332)で限り、頸部~口縁端部を無文とする土器である。C区からのみ出土している。2類の314も本類に入る可能性がある。器種はいずれも壺か広口壺で、器形は326~332が近似する。326・327・330は肩部の張りが強く、他はそれより若干弱い。324は体部が球状に脹らみ、頸部で窄んだ後口縁部は外反する。325は口縁部を欠失しているので全体的なことは不明であるが、底部が上げ底風で、体部下端に沈線を全周させて輪高台風にし、体部は斜め外方に大きく広がった後直立気味に若干丸味をもって屈曲させている。口縁部はほぼ直立するらしい。326~322の口縁部はほぼ直立し、削り取りによって小波状を示す。口唇は丸味をもつもの、撫でられてやや角ばるもの、口縁端部が若干肥厚気味になるもの等がある。324の場合は、平縁であるが刻みが付くらしい。胎土には径1mm以上の砂粒や石英粒の混入した粗い粘土を使用している。焼成はいずれも良好で、322・326・330の器表には煤の付着がある。色調は明褐色~黒褐色までである。

5 類 (第323図333~343、P L-154)

頸部に縄文原体の側面押圧による1条の撚糸文を全周させて体部と口縁部を限り、頸部や口縁部を無文とする土器である。出土地点はC区とD区に限定され、本類の土器を出土する住居跡が検出されている。器種は全て鉢である。器形は体部上位(肩部?)に最大径をもち、頸部で窄んだ後口縁部は外湾する。縄文原体の側面押圧は、体部最大径の位置から若干頸部に寄った部分に施し、中には(339・340・343)口縁端部に付す例もある。使用される原体にはL・L R・R LやL R + L R Lの付加条がある。体部の縄文は押圧された原体を横回転することによって付され、333と336は口縁端部に施文される。胎土には径1mm位の砂粒が混入するが、緻密な粘土を使用している。焼成は全て良好である。色調には明褐色~極暗褐色まであり、335・336・339の器表には煤の係着がある。



第322図 遺構外の遺物(土器-14)



第323図 遺構外の遺物(土器-15)

6 類 (第323図334・345、P L-154)

単軸絡条体の縦回転による網目状燃糸文の付された土器で、A区北端部に限定される。器種は鉢で、344は体部最大径を中位(?)にもち、頸部で軽く窄んだ後、口縁部は外湾する。なお、口縁端部には幅1.7cm位の縁帯が全周している。345は小破片のため定かでない。胎土には径1mm以上の砂粒が多く混入し、粗雑な粘土を使用している。焼成は良く、色調は褐色である。

7 類 (第323図346、P L-154)

口縁部を複合口縁にし、体部に原体L縦回転による無節の斜行縄文を付した土器で、A区北端部から出土している。本来は3類に入るべき土器かも知れない。器種は深鉢と推定され、器形は体部上位から口縁部が軽く外湾している。胎土には1mm前後の砂粒と金雲母が多く混入し、やや粗雑な粘土を使用している。焼成は良く、色調は褐色である。

〔底部〕

本遺構から出土した底部破片は約410点(遺構外出土のみ)であることは前述のとおりであり、その中から実測可能な個体64点と、底面に網代痕や木葉痕のある20点の合計84点を掲載した。

これらの底部は、本来は分類して既述した何群かの土器に包括されるものであろうが、分類

の基準となる文様施文部や口縁部を残存していないため、分類する手懸りが明らかでないことから、ここに一括して記述する。しかし、底部を良く観察すると、形や作り方に各種あることが判り、それによって分類することが可能である。したがって、本項では形を基準にして、若干の「仕分け」を試みることにする。

高台の付く底部 (第324図347～351、P L—155)

高さ1cm以上の高台が付き、掲載した5点が全てである。高台部は平底の土器に貼り付けられたもので、端部の外方が開き「ハ」状に踏張る器形である。器種は全て高台付鉢であろう。大きさをみると、高台径が3cm～7cmとそれほど大きい個体ではない。347は高台部中位に断面丸形の沈線を1条全周させ、沈線と下端の間には原体LR横回転による単節斜行縄文を付している。その他の個体には縄文を付すものはない。

上げ底風になる底部 (第324・325図^{352～376・380・383}_{～391・403～405、} P L—154)

外底面を削り取って輪高台風にするもの(352～355・359～362・364～376・383～389)と、外底面が段差をもたないで緩やかに凹むもの(356～358、363・380・390・391・403～405)がある。底径が3cm以上10cm以下の大きさで、どちらかというとなら6cm以下の比較的小型のものが多い。また、器表の底部付近まで縄文を付す例とそうでない例が混在するが、たまたま底部付近まで付けなかったことによる違いなのかは不明である。縄文は原体LRやRLの縦か横回転によって付されている。

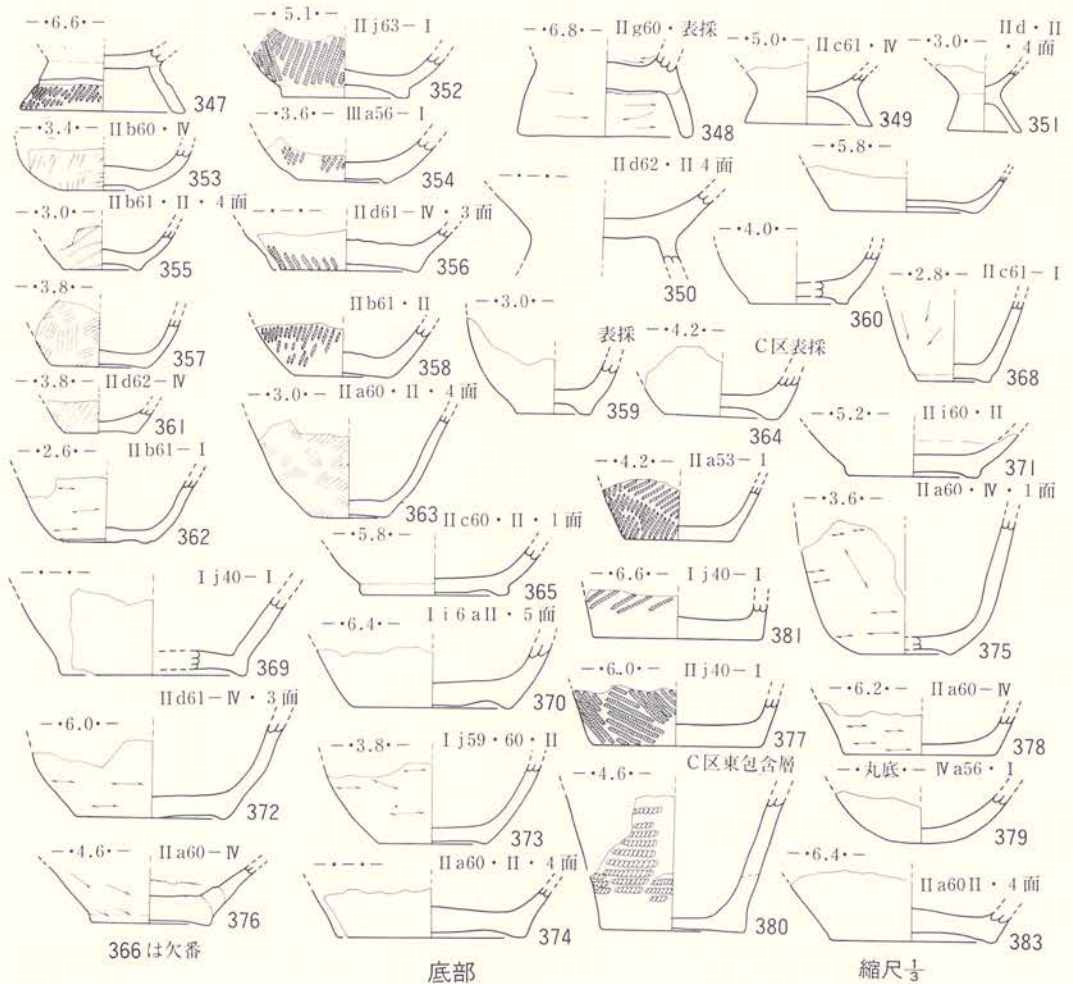
平底のもの (第324・324図^{377・378・381・382・392～}_{402・406・408・409～411、} P L—155)

いわゆる外底面が平らな土器である。底径が4cmと小型のものもあるが、ほとんどは6cm以上で、中型から大型の土器が多い。器表全体に縄文を付すものと、下端を無文とするもの、体部下位以下を無文とする土器がある。縄文は原体LR・RLの縦や横回転による単節斜行縄文と羽状縄文(397)である。

丸底のもの (第324図379、P L—155)

底部が球状の丸底となる土器であり、1点の出土である。縄文の施文もなく、器形・器種とも不詳である。

以上の底部は、A区からD区まで縄文土器の出土した地点で出土しているが、量的に多いのはC区の南斜面部からの出土である。大きさには大小関係の差が大きく、器種は全て深鉢・鉢である。体部の縄文施文部位をみると、体部下端まで全面に付すものと下端を無文にするもの、体部下位には施文しないものがある。これが所属する時期や器形・器種による違いなのかは定かでない。胎土には全般的に径1mmからそれ以上の砂粒が多く混入するが、大型品ほどその程度が強くなる傾向がある。焼成や色調にも個体差が大きく、一様でない。また、器表に煤の付着する土器が多いことは、煮沸具として使用された土器が多いことを示している。

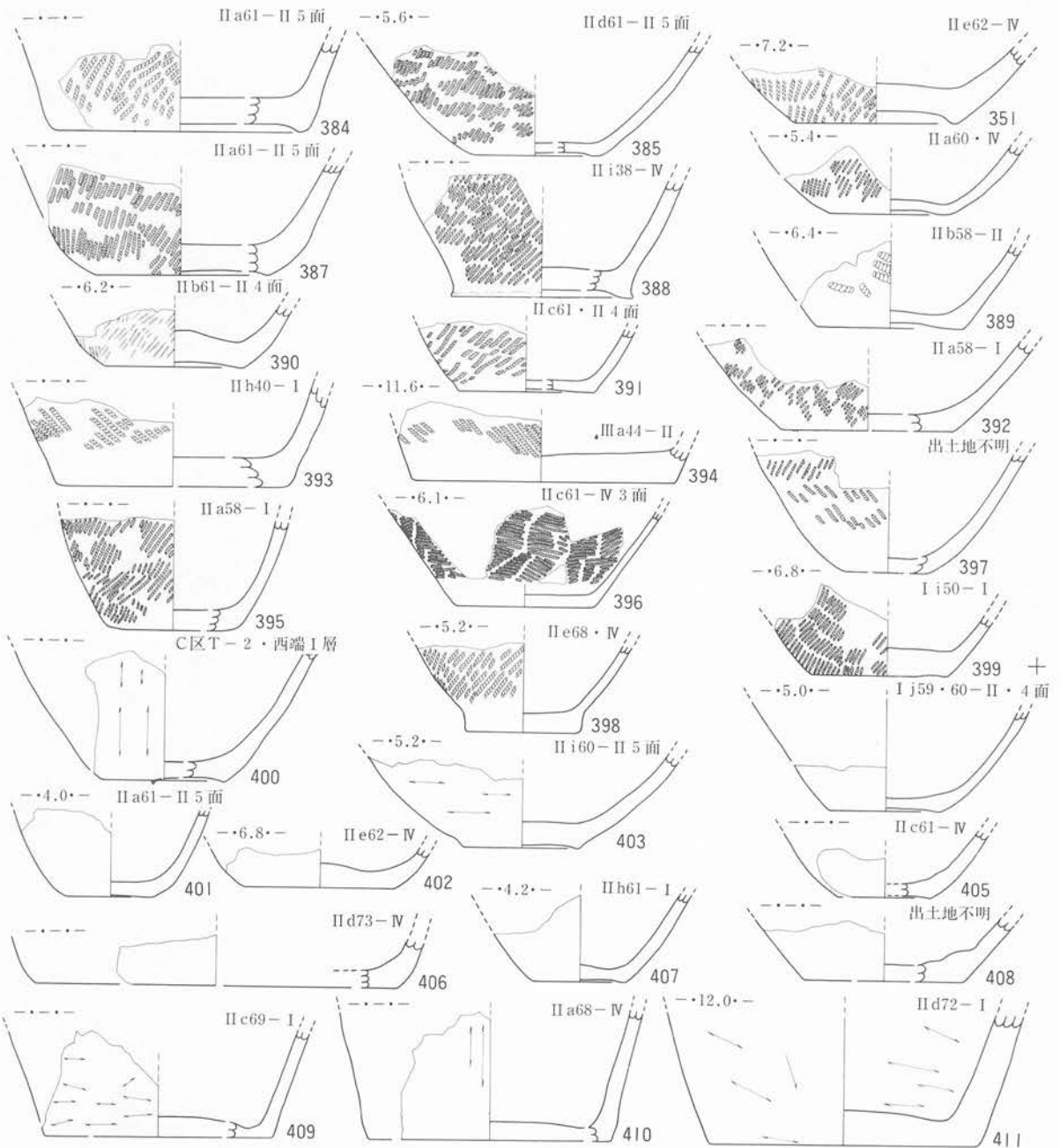


第324図 遺構外の遺物(土器-16)

網代痕が付着する底部 (第326図412~428、P L-156)

遺構外出土の底部410点の内16点に網代痕が付着している。付されている網代の種類には3種類あり、ほとんどは「1本超え、1本潜り、1本送り」で14点が該当し、その他は「2本超え、2本潜り、1本送り」が1点、「2本超え、1本潜り、1本送り」が1点である。器種を知るような残存状態を示す土器はないが、器形から判断すると深鉢か鉢となるであろう。大小関係を見ると、底径10cm以下は2点のみで他は全て10cm以上と、比較的大型の土器に付着する例が多い。胎土・焼成・色調とも個体差が大きく一様ではない。

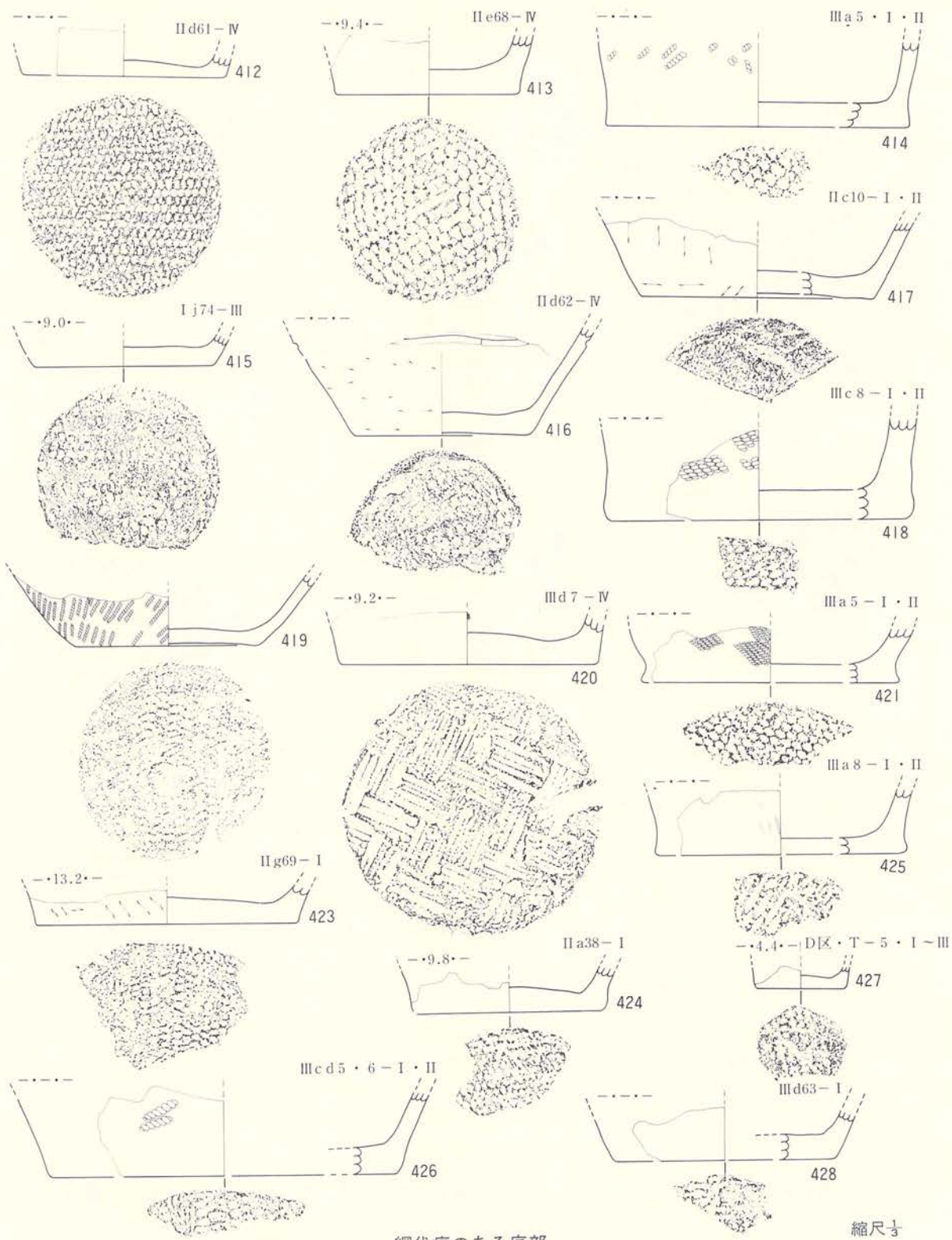
木葉痕が付着する底部 (第327図429~432、P L-156)



底部
第325図 遺構外の遺物(土器-17)

縮尺 $\frac{1}{2}$

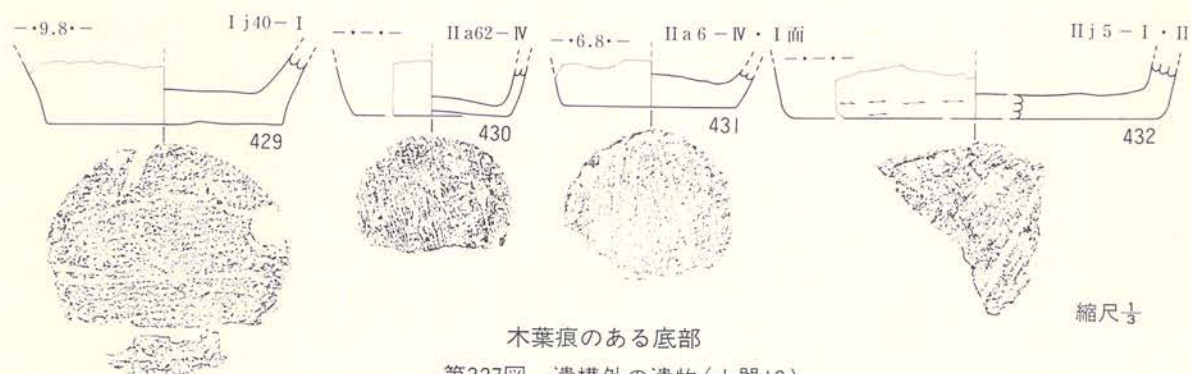
4点のみである。使用された木葉は笹の葉と推定される。その他は網代痕をもつものがない。



網代痕のある底部

縮尺寸

第326図 遺構外の遺物(土器-18)



第327図 遺構外の遺物(土器19)

〔注口部〕 (第328図433～449、P L—156)

本遺構から出土した注口土器は、遺構内外含めて31点の出土と非常に少ないが、注口部分だけを剥落したものを17点出土しており、それも注口土器として掲載した。このような形の注口部が付着する土器は後期か晩期に限定されることから、本遺構では第VI群から第VIII群の土器に共伴するのが本来の姿であろう。

注口部の形をみると、直線的に斜上するもの(434～437・441・444・446・449)と外湾気味のもの(433・438～440・442・443・445・447・448)があり、基部の形に「ふぐり」状の小隆起をもつもの(433・434・436・437・440・441)と隆起帯が全周し刻目をもつもの(435・441)、平滑なもの(その他全て)がある。先端部をみると、隆起帯状になるもの(433～440)と平滑なもの(その他全て)がある。また、437は全面に縄文を付した後沈線で区画し、一部の縄文を磨消している。胎土は、粗製土器よりは砂粒の混入が少ないものの、粗い粘土を使っているものが多い。焼成や色調は個体差が大きい。

2、土製品

本遺構から出土した土製品は、遺構内外出土のものを含めて49点である。その内遺構に伴ったものは総数が20点で、残り29点が遺構外からの出土である。出土点数と種類は次のようである。

- | | | |
|-----------|-------------|-------------|
| 1、耳飾り—13点 | 2、土 偶—4点 | 3、動物形土製品—1点 |
| 4、土 錘—1点 | 5、土器片円盤—29点 | 6、基石状土製品—1点 |

本項では、出土地点に関係なく全てを一括して、種類ごとに記述することにする。

〔耳飾り〕 (第31・47・52・190・328図1～13、PL—156)

出土した13点には遺構から出土した4点と遺構外から出土した9点が含まれている。形態的にみると全て広義の滑車形型に入るが、細部をみると環状のもの(3～8・11・12)と円盤状のもの(1・2・9・10・13)がある。また、破損のため一部を欠失するもの(3・5～13)が10点と多く、完全な形を残すもの(1・2・4)は3点のみである。大きさを計測した9点で見ると、直径が最小37mmから最大50mmまでであるが、7点が45mm以上を示し、平均すると46.3mm位となる。厚さをみると、12mmから23mmまでみられ、平均すると16mm位となる。重量は、円盤状が環状より重いことは当然であるが、一部を欠失する個体が多いので、単純に比較することは不可能である。

環状のものはいわゆるドーナツ状であるが、断面をみると隅丸方形や台形気味の外側面を凹ませたもの(5～7・11・11)と内側面に頂点をもつ三角形の外側面を軽く凹ませたもの(4・8)や外側面が凹むように全体を軽く湾曲させたもの(3)がある。前者が最も大振りに作られ、中者、後者の順で小振りとなる傾向がみられる。いずれも全面が良く研磨され、光沢をもつものが多い。

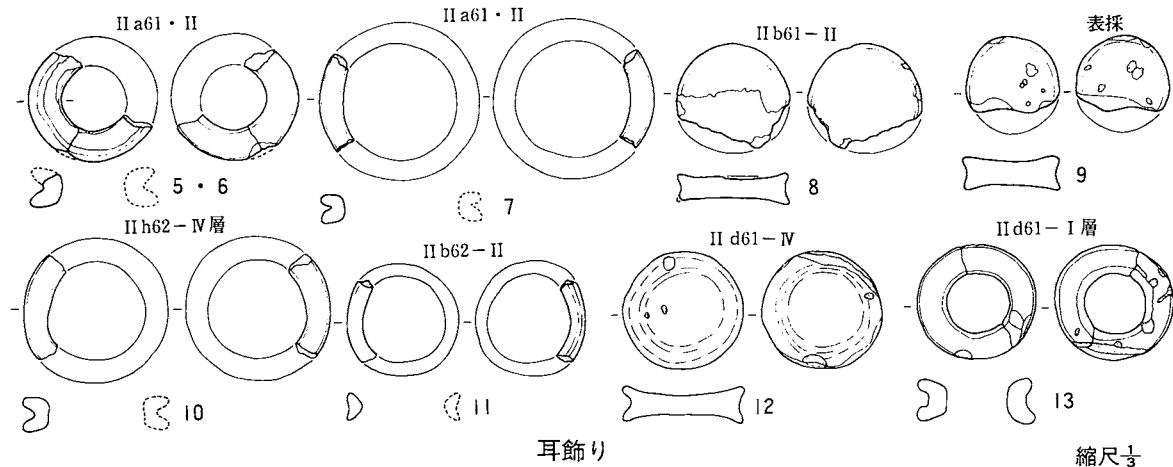
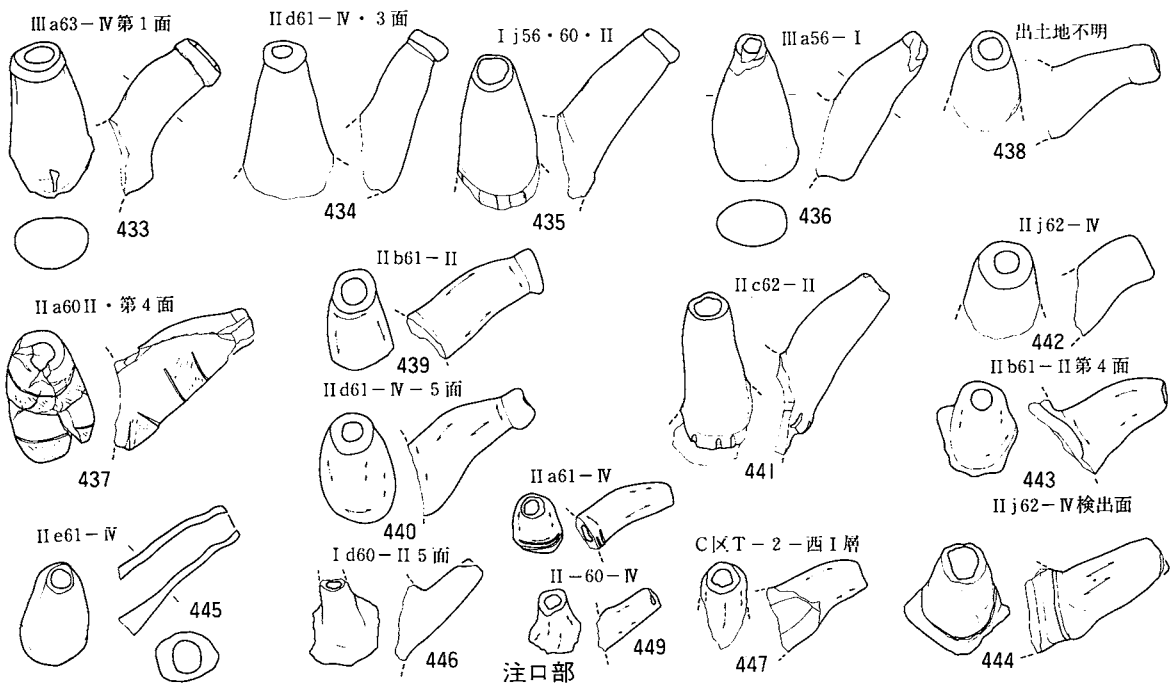
円盤形型ものは、環状のもの中央中空部を中実としたもので、中央部両面の厚みが薄くなり、4・8の形を円盤形型にした形と基本的には同じと考えることができる。1は円盤形型としたが、中央部が厚く側縁が薄く作られ、表面中心部に縦長の瘤が貼付され、ほぼ放射状であるが等間隔に沈線が引かれている。側縁には幅狭で沈線状の凹みがつくが、表面と裏面の径に5mmの差があり、裏面の径が大きい。本来は耳飾りでない可能性もあるが、取りあえず本種と分類した。

〔土 偶〕 (第187・328図14・15・17・18、PL—157)

4点の出土であるが、完形のものはない。また、17・18は土偶とするには若干疑問な点もあるが、本種として入れておく。

4点の中には遺構に伴った14(第187図)と粗掘り中に出土した15・17・18(第336図)がある。残存状態をみると、14は左腕・右手・顔・左右の足を欠損しているが、最も状態が良好である。15は、足の表出はなく、体部上位を欠失し、表面が全体的に荒れている。17・18は体部下位と考えられる破片であるが、全体がどういう形を示すのかは不明である。

14の表面は、肩部から左右胸部から右腹部中位を隆起させたいかり肩とし、腹部の下部を大きく隆起させ、頂点部に十字状の沈線が付されている。腕は細く仕上げているが、詳細は不明であるが左脚の状況から判断すると、膝から下を細く仕上げたらしい。頸部は両端に括れをも



第328図 遺構外の遺物(土製品-1)

つ。裏面は頸部と臀部を軽く隆起させる以外は平らである。残存する大きさは、全高4cm、肩幅3.2cm、最大厚さ1.6cmである。腹部の隆起する表現から考えて妊娠中の女性像を表わしたものであろう。

15は、表面の下部を隆起させ、その中央部右寄りを円形状に凹ませており、妊娠女性を表現した可能性が強い。腹部正中線は2条並行する沈線で表現され、さらに下部の隆起部分との境

に1条と、正中線の両側にも2条の並行沈線が付されている。平面形（体幅）をみると、腹部を隆起させた部分の幅が広くなり、円弧状の沈線で限られている。裏面は平らな面に沈線のみによって表現されるが、身体各部の具体的な表出はない。残存する大きさは、全高7.8cm、最大幅6.2cm、最大厚さ（腹部の隆起部分）2.2cmである。

17は脚部の小破片と考えられるものであるが、全体形や細部については不明である。器面の調整は撫でであるが、粗雑である。底面形が円形か楕円形状で、上げ底風に凹んでいる。

18も17同様体部下半の破片と推定されるが、一般的に土偶は左右対称形であるのに、本資料は非対称形であることに疑問が残る。下端が円い土版の両面に沈線で異なる文様が付され、側縁～下縁にも1条の沈線が入っている。どちらの面が表面なのか不明であるため、実測の面は便宜的なものである。表面の文様は四ヵ所に尖端をもつ変形平行四辺形状とその内部に凸レンズ状の沈線が引かれている。裏面は、下部に頂点を下にした二等辺三角形状、その上位に1条の湾曲線、その上に列点、最上位に1条の湾曲線が付されている。最上端の折損部のほぼ中央には裏面からの円孔が1個穿たれている。平面形下位の両側が軽く幅広となっている。

〔動物形土製品〕 (第329図16、P L—157)

粗掘り中に1点出土しているが、頭部・前右足・体後半部を欠失し、前左足と肩・胸の一部を残存する個体である。背中央には鱗状の突起があり、胴体は断面が丸くなるように作りだし、足は左右に強く踏ん張る。胎土は粗く、器表の調整は粗雑な撫でである。モデルにされた動物の種類は明確でないが、猪・熊・犬のいずれかであろう。

〔垂飾りか土錘〕 (第329図19、P L—157)

1点出土している。長さが2.2cmの円柱状で中心部に1コの貫通孔が穿たれている。中央部が最も太く径9mmあり、両端に向かって次第に細くなって端部の径は6mm位である。形状はいわゆる土錘形であるが、通常の土錘に比較すると小型で、重さも1.5gと錘とするには軽すぎる。おそらく、垂飾りの一種であろうと推定される。

〔土器片円盤〕 (第^{20・31・37・47・52・56}_{230・282・284・287・338} 図20～46・60・140、P L—157)

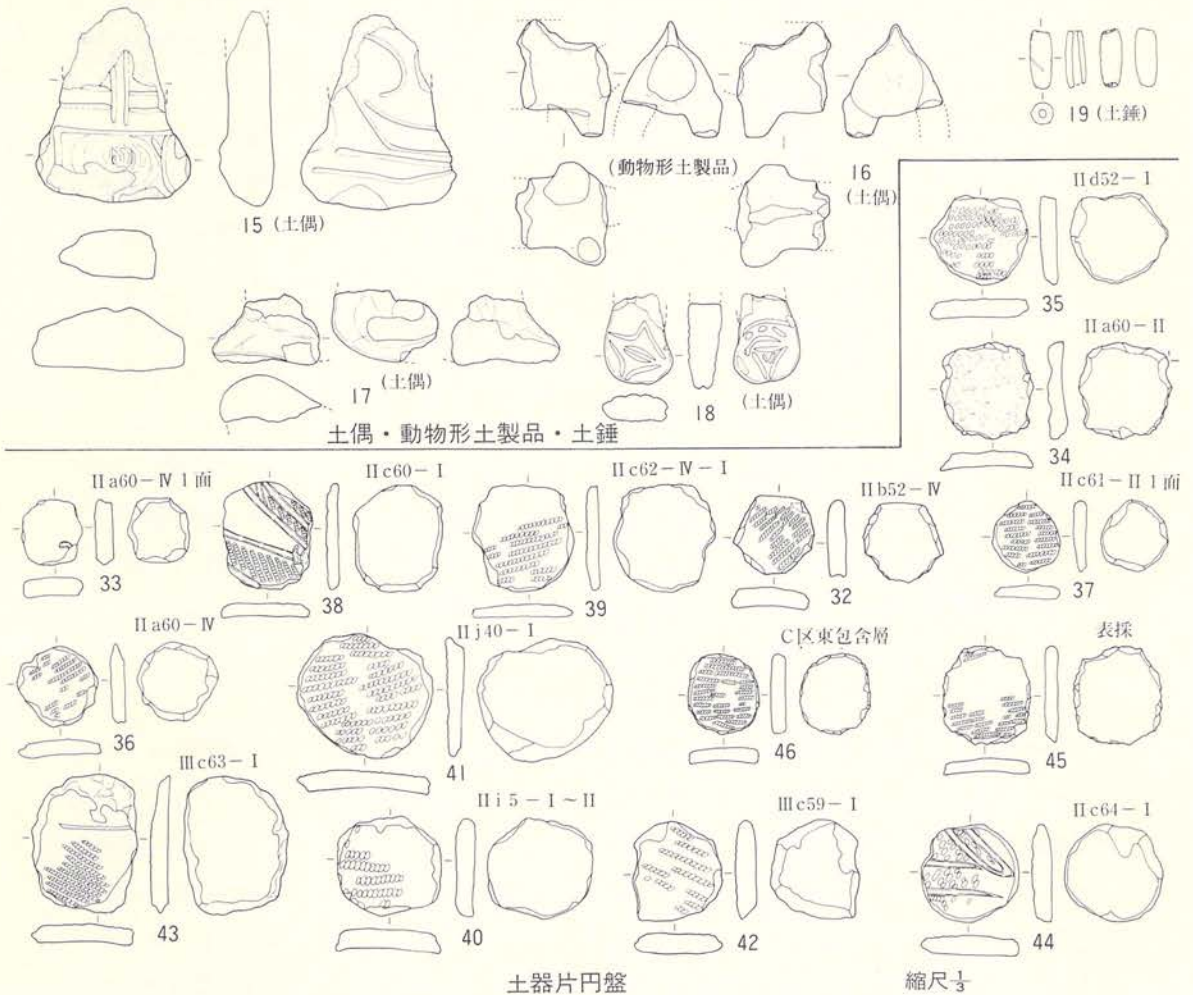
全部で29点の出土であるが、その中には遺構に伴うもの14点と遺構外からの出土15点が含まれており、さらに遺構内出土のものには住居跡9点、土坑1点、陥し穴状遺構5点がある。遺構内出土のものでも床面から出土したのは2点だけで、他はいずれも埋土内からの出土である。

形状や作り方をみると、全て土器片を使用しその周辺部を打ち欠いて円形や楕円形になるように形態調整しており、中には周縁を磨くもの(27・44)もある。使用された土器片の器種を

破片の湾曲程度からみると、いずれも鉢か深鉢と考えられる。また、器表に縄文だけを残すもの(21・24・26・29~32・35~37・39~43・45・46)、縄文に沈線の入るもの(23・27・38・44)、無文のもの(20・22・28・33・34)、無文に沈線の入るもの(25)があり、粗製土器だけではなく精製土器の破片も使われ、器形にも大小がありそうである。

大きさは、長径が最大5.4cm・最小2.6cmで、平均すると3.8cm位である。短径は最大が5.1cm・最小2.5cmで平均が約3.4cmである。厚さは最大1.1cm・最小5.2mm、平均すると6.8mmとなる。重さをみると、最大が28g・最小4.5gで平均が12.3gとなる。

なお、周辺部に紐掛りとおもわれる括れや凹みは観察されない。



第329図 遺構外の遺物(土製品-2)

〔碁石状土製品〕 (第19図47、

1点の出土である。平面が径1.8cmの円形で、中央部の厚さが7mm位で周辺部より厚く、周縁が丸味をもっている。形状が現在使われている碁石に近似している。住居跡(中期末)の床面直上から出土している。胎土は緻密で、焼成も良く色調も明るい褐色である。

3. 石 器

本遺跡から出土した石器は、遺構内150点、遺構外256点の合計406点である。本来は遺構内出土とその他のものを分けて記述すべきであるが、本項では便宜上それらを一括して器種別に説明することとする。器種とその出土点数は以下のとおりである。

- | | | | |
|---------------------|-------------|-------------------|-------------|
| ○石 鏃—— 8点 | ○石 匙—— 26点 | ○石 錐—— 7点 | ○尖頭器—— 8点 |
| ○石 筥—— 2点 | ○搔 器—— 34点 | ○削 器—— 42点 | ○切削器—— 28点 |
| ○使用痕あ
る剥片—— 21点 | ○貯蔵剥片—— 14点 | ○接合剥片—— 2点 | ○磨製石斧—— 33点 |
| ○打製石斧—— 1点 | ○磨 石—— 32点 | ○凹み石—— 102点、 | ○叩き石—— 2点 |
| ○石 皿—— 32点 | ○砥 石—— 5点 | ○石 弾—— 5点 | ○石製円盤—— 2点 |
| ○両刃石器—— 1点 | ○石 核—— 5点 | ○線刻のある
軽石—— 1点 | ○自然礫—— 1点 |
| ○使用痕をも
つ自然礫—— 1点 | ○火打石—— 1点 | | |

以上26種の器種に分けられる。また、この中に自然礫が1点含まれているのは、中世(室町時代後末期)の墓壇底面に密着して出土したものであるし、火打石1点は近世(江戸時代後半)の墓壇底面から副製品として出土した。このように、本項では属する時代枠を超えて一括し、その時代の項では個別の説明とする。次に器種別にその概要について記述する。

〔石 鏃〕 (第38・47・111・330図1～8、PL-158)

全部で8点の出土である。住居跡出土2点(1・2)、土坑出土1点(8)、遺構外5点が含まれている。完形品は4点(2・3・5・6)のみで、他は茎部を欠損する2点(1・4)と先端部と茎部を欠損する1点(7)、先端部を欠損する1点(8)である。なお、1の茎部先端寄りにはアスファルトと推定される黒色のタール状物質が全面に付着している。形態でみると、茎部をもつ6点(1～5・7)ともたない2点(6・8)に分けられ、有茎型のものは水平な基部に茎部がつく3と突起基部に茎部がつくそれ以外のものに細分される。無茎型のものをみると、基部が若干丸味をもつ円基型(8)と逆に若干凹む凹基型(6)に分けられる。

製作素材としての剥片のとり方は、4～6・8はいずれも裏面か表面に一次剥離面を残して

おり、4・6・8は非常に薄手の剥片を使用している。また、4・6・8は側縁の刃部調整が両面剥離ではあるが粗雑で、形態も良好とは言えない。基部をもつものも1・2・7は比較的厚めの剥片を使用し、側縁の刃部調整も両面に規則正しい入念な剥離が施されている。3・5は小型品であるが、形態も悪く刃部調整も粗雑である。

大きさは欠損品が多いので明確でないが、完形の4点は全長2.3cm～4.3cmまでである。幅は全て計測可能で9mm～1.9cmまであり、厚さは2mm～6mmである。全長は定かでないが、幅は1.5cm～1.7cmが4点と主体をなし、厚さも4mm～6mmが5点と、この範囲に入る大きさの石鏃が本遺跡の標準的な大きさであろう。

石質は、北上山地古生界産のチャートやチャート質淡緑色凝灰岩が5点(3～5・7・8)と過半数を占め、その他は奥羽山地新第三系中新統産の凝灰質珪質泥岩製である。

[石 匙] (第32・42・58・339・340図9～34、PL—158・159)

26点の出土で、住居跡出土4点(9・10・19・20)と遺構外出土の22点が含まれている。形態上からみると、縦形14点、横形12点に分けられ、さらに、縦形は刃部と抓み部そして表裏の関係から右刃型4点(10・15・17・31)と、左刃型10点(9・11～14・16・18・30・32・34)に細分される。横形の場合も縦形と同じような関係から右抓み型4点(19・20・22・28)、中抓み型4点(21・22・23・33)、左抓み型2点(26・27)、欠損で不明2点(25・29)に細分される。完形品は24点、欠損品2点と完形品が圧倒的に多い。

素材としての剥片のとり方をみると、縦形の場合は、打点に対して縦長の剥片を使用しているが、1点だけ(16)横長の剥片を選んでいる例がある。抓みの作り出しは、横長の剥片を使用した16と末端を使う30以外はバルブの部分を使用している。刃部の調整は裏面から表面に対して主剥離とするものがほとんどで、16だけが表面から裏面に行なっている。裏面はほとんど一次剥離面を残している。形状は縦形とは言えバラツキが大きく、素材としての剥片の作り方や調整がやや粗雑である。横形の場合は縦長剥片の側縁に抓み部を作り出す4点と、バルブの脇のもの4点、横長の剥片を使用しバルブの部分に作り出す4点がある。刃部の調整は全て裏面から表面に限定されるが、周縁全体に及ぶものと、使用部分に限定されるものがある。形状は縦形のものより良く揃っている。

大きさをみると、縦形は全長が最大10.4cm、最小4cmであるが、最大のものは他とかけ離れた大きさである。平均すると5.6cm位となり、5cm台が10点あることと一致する。幅は最大が3.4cm、最小1.4cmで、平均が2.3cmとなり、1.9cm～2.7cm台が7点あることと一致する。厚さは最大1.1cm、最小3.3mmで平均すると6mm前後となるが、6mm前後のものは2点と少なく、5mm～8mmに範囲を広げると12点入る。この範囲が標準的な大きさであろう。横形の場合は、全長の最

大は5.4cm、最小1.9cmで、平均すると3.6cm位となり、8点が3cm～4cm台に入ることと一致する。幅の場合は、最大6.5cm、最小3.9cmで、平均すると4.3cmとなるが、計測値だけでみるとバラツキが大きく、平均値が必ずしも標準的な大きさとは言えない面がある。厚さは最大9.5mm、最小2mmで、平均すると6mmとなり、6mm～7mmの範囲に6点入ることと共通する。

使用された石材の石質は凝灰質珪質泥岩7点、流紋岩質極細粒凝灰岩3点、珪質泥岩14点、粘板岩2点と、奥羽山地新第三系中新統産の4種類の石材に限定されている。

なお、第42図10の縦形石匙の抓み部にはアスファルトとおもわれる黒色のタール状物質が2条の並行線状に全周している。おそらく、着柄の際の固定に塗布されたものであろう。

〔石 錐〕 (第38・43・341図35～41・43・44・46、P L—159)

10点の出土であるが、この中には遺構（住居跡）内出土2点と遺構外出土の8点が含まれている。形状をみると、抓み部を作り出し刃部を断面菱形の棒状にするいわゆる典型的なものは35・43・44の3点のみで、その他は特別に抓み部を作り出さず、三角形の剥片を素材として、鋭角な頂点に刃部を作り出している。刃部の調整をみると、両面に剥離しているのは6点（35～37・43・44・46）のみで、他は裏面からの片面剥離である。両面剥離のものは調整が粗雑で、この傾向は片面剥離の方が強い。片面剥離のものも尖端部に使用による磨滅痕をもっていることから本種とした。抓み部を特別に作り出さないものは、尖端部対面の幅広な一次剥離面をそのまま抓み部としている。36・39・41では側縁部にも裏面からの片面剥離があり、削器や搔器としても使用している。

剥片の大きさは、長さが5.2cm～2.4cmの範囲に入り、平均すると3.5cmとなるが、大小の差が大きくまとまりがない。幅も3.9cm～1cmと大小の差が大きく、長さ同様まとまりがない。厚みも同じ様相を示していることから、素材の選択に規則性がないことによる結果の表れであろう。

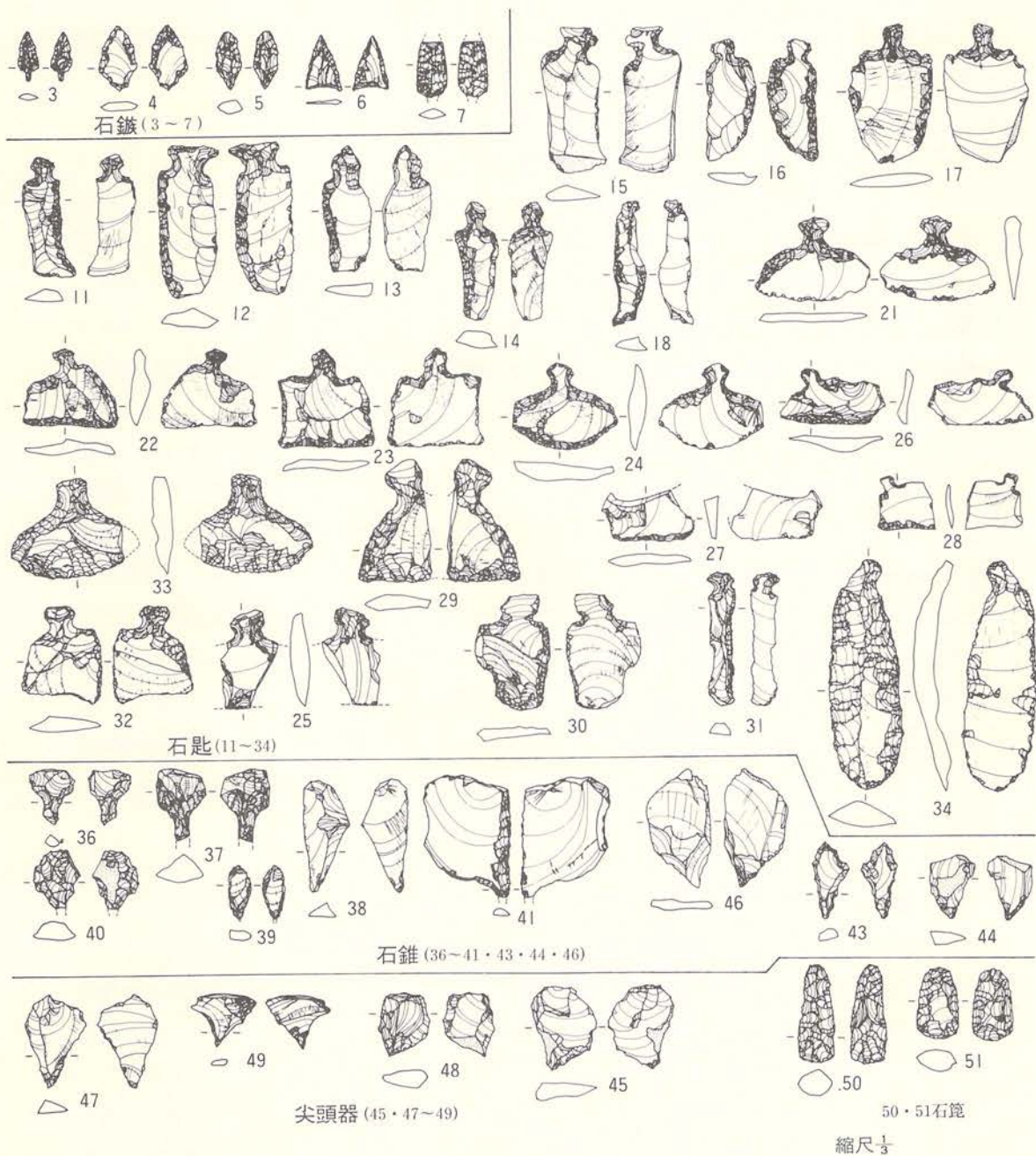
使用された石材の石質をみると、39・43・44・46は北上山地古生界産のチャートや凝灰質珪質泥岩であるが、他は奥羽山地新第三系中新統産の凝灰質珪質泥岩を素材としている。

〔尖頭器〕 (第47・431図42・45・47～49、P L—159)

5点の出土である。遺構に伴うのは1点（42）のみで、他は遺構外からの出土である。

本種は前述の石錐に近似した石器であるが、石錐としたものに比較して刃部の作り出しや調整が粗雑であるとともに、刃部先端が細く鋭角に尖るものに本種の名称を付した。機能としては、キリモミ（ドリル）よりも千枚通し（ピック）的な使用方法が強いと考えられる。

形態は全て不定形であるが、素材としての剥片の選び方をみると、刃部の作り出しに都合の良い鋭角な先端をもつ剥片を使用し、尖端部分の側縁を小範囲だけ剥離調整している。調整の



第330図 遺構外の遺物(石器-I)

仕方は全て粗雑である。抓み部に対する調整は全くない。

大きさは全て全長4cm台で、幅は2.4cm~4.2cmの範囲である。

石材の石質は奥羽山地新第三系中新統産の凝灰質珪質泥岩2点、珪質泥岩1点と産地不詳の玉髓1点である。

〔石 筥〕 (第341図50・51、P L—159)

2点の出土で、いずれも遺構外からの出土である。器形をみると、刃部が丸味をもち、成形や刃部の調整が両面からの剥離であり、横断面の中心部に刃部が位置している。いわゆる典型的な石筥が、裏面からの片面剥離で成形や刃部調整されることを基本とし、平面形も三味線の撥形に近い三角形を基本とするのであれば、本遺跡で石筥とした2点は「石筥」的ではあるが厳密には入らない可能性も考えられる。また、本遺跡出土のものと形態が近いものに打製石斧がある。ただ打製石斧の中にこのような小型品があるのか問題である。

2点とも完形品である。50は全長4.5cm・幅1.6cm・厚さ1.2cm・重さ9.04gの大きさと、頭部から刃部に向かって次第に幅広となり、断面は凸レンズ形である。頭部は丸味をもち、刃部は軽い円弧状を示し、断面のほぼ中央に位置する。剥離調整は、側縁・刃部ともに両面から行われ、刃部裏面への剥離が最終工程である。再調整による剥離痕がないので、当初から両面剥離されている。51は全長3.3cm・幅1.8cm・厚さ9mm・重さ6.86gの大きさと、頭部は丸味をもち、刃部に向かって次第に幅が広がっている。刃部は軽い円弧状を示し、断面のほぼ中央にある。成形や調整は、頭部は裏面からの片面剥離であるが、側縁と刃部は両面剥離で、刃部裏面への剥離が最終剥離である。頭部の両面に黒色の付着物があるとともに光沢をもち、光沢は手擦れによるものであろう。

石材の石質は、2点とも北上山地古生界産のチャート質粘板岩である。

〔搔 器〕 (第^{15・42・58・63}_{201・364・342} 図52～85、P L—160・161)

34点の出土で、その中には住居跡出土5点、土坑1点、遺構外出土28点が含まれている。

形態的には不定であるが、刃部調整が片面剥離であることを原則とし、刃部の角度が鈍角なものを本種とした。しかし、実際のカテゴリに当てはめるとは兼ね合いがあり、必ずしも明確に分類されたとは言えない。特に、機能的にみた場合は搔器も削器も削り具であろうことから考えると、それを厳密に区分することは至難であろう。また、素材としての剥片の選び方をみると、縦長剥片を使用しても側縁部だけを刃部とする場合(例58・65)と側縁部から先端部に若干及ぶもの(例61・73)、先端部を刃部とする例(例80)がある。横長剥片を使う場合はほとんど先端部を直線的に成形してから刃部を調整している(例68)。剥片素材の量的関係をみると、縦長剥片23点、横長剥片11点と、縦長剥片から作られたものが多い。使用刃部の位置をみると、先端部(いわゆる図面上の下縁)17点、側縁部10点、両者兼用6点となる。53の場

合は非常に小型で小指の爪よりやや大きめの大きさで、両面剥離されており、断面形がソロバン玉状である。これから考えると本種に入らない可能性もある。

大きさはそれぞれによって差が著しく一様でない。厚さ・重さともほぼ同様である。

使用された石材の石質は、北上山地古生界産のチャート質粘板岩・粘板岩・輝緑凝灰岩等が12点、奥羽山地新第三系中新統産の珪質泥岩・流紋岩質細粒凝灰岩・凝灰質珪質泥岩が22点ある。

〔削 器〕 (第^{32・47・201}_{343・344} 図86～127、P L—161・162)

42点の出土で、住居跡出土5点、土坑3点、遺構外出土42点が含まれている。

形態が不定形で、側縁部や周縁部の一部に片面や両面の剥離があり、前の搔器より刃部の角度が鋭角で、刃部の厚さが薄いものを本種としたが、搔器と明確に区分することは非常に難しく、むしろほとんど同様であるといっても過言ではない。ただ、刃部の角度が鋭角で薄く、中に両面剥離されるもの(97・101・110)があることは、いわゆる削るという機能ばかりでなく、切るという役目も想定され、周縁部のある部分に簡単な剥離調整するもの(114・115・121等)もこのような役割の範疇で考えることができる。かつては不定形石器として一括されていた石器の1群である。

42点を概観すると、素材が縦長剥片を使うもの31点、横長剥片を使うもの11点が含まれており、その中で、縦長剥片では側縁を刃部とする例が非常に多くある。横長剥片の場合は、下縁部を直線的に調整した後刃部としている。また、一部に刃部を内湾させるもの(103・104・110・122・124～126)もある。

剥片の大きさをみると、必ずしも規格化されておらず、大小の差が著しい。厚さや重さについても同じことがいえる。

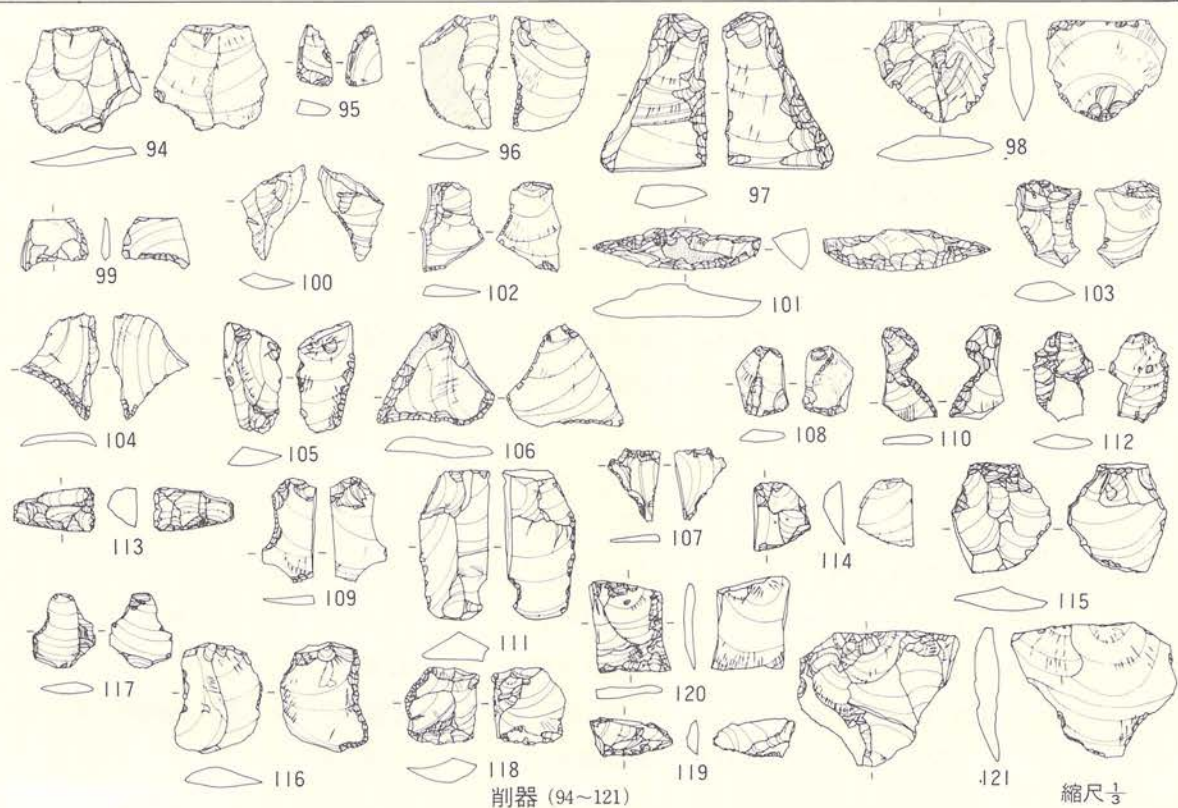
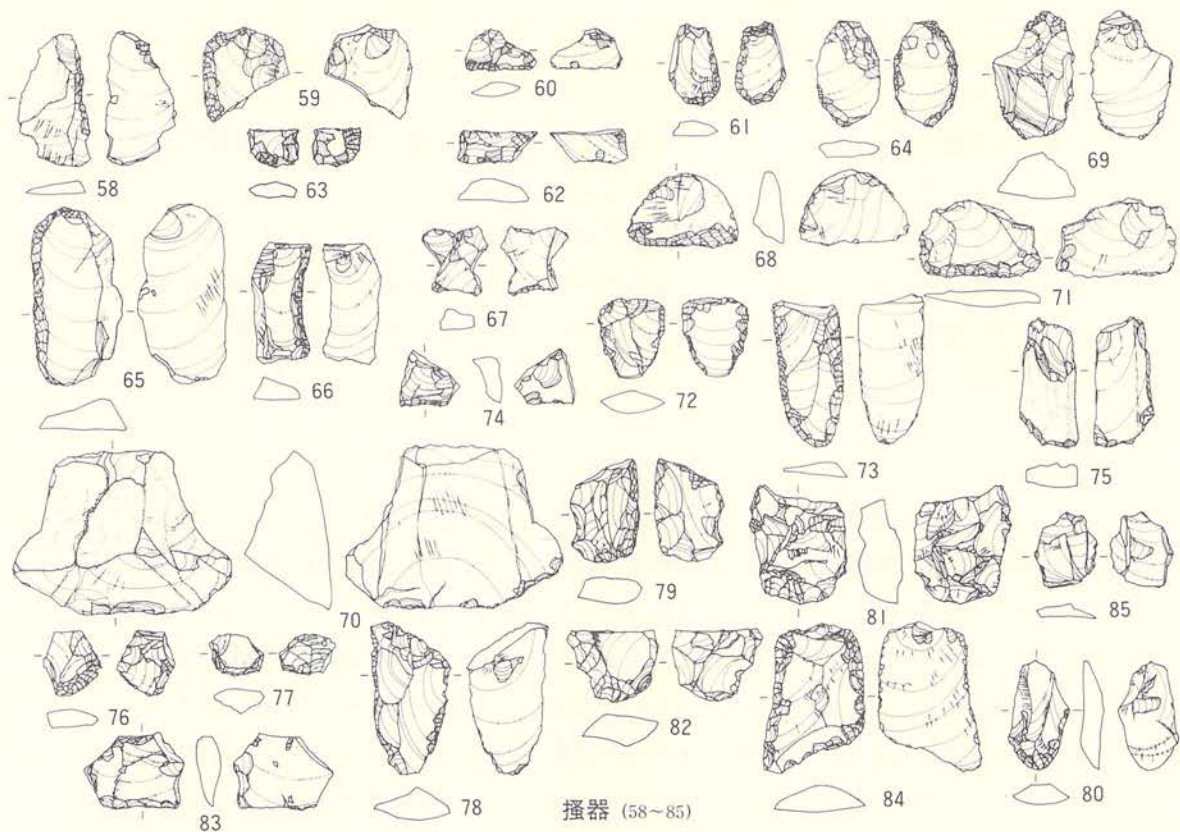
石材の石質には北上山地古生界産の粘板岩やチャート7点と奥羽山地新第三系中新統産の珪質泥岩・凝灰質珪質泥岩・流紋岩質極細粒凝灰岩・玻璃質流紋岩35点があり、北上山地古生界産の石材が搔器より少ない。

〔切削器〕 (第^{25・38・53}_{282・345} 図128～155、P L—163・164)

28点の出土で、住居跡出土4点、土坑1点、陥し穴状遺構1点が含まれている。

形態が不定で、削器や搔器と非常に近い種類であるが、それらよりも薄い剥片を素材とした石器である。おそらく、機能としては切るという役割が考えられる。

素材の選び方が、縦形剥片のもの24点と横形剥片4点あり、縦長剥片を使う例が圧倒的に多い。刃部の位置をみると、縦長剥片の場合は側縁、横形剥片は下縁を刃部とするものが多く、



第331図 遺構外の遺物(石器-2)

刃部の調整は片面剝離のものが主体であるが、一部に両面に剝離する例もある。全体的にみると、削器よりも剝片が粗雑で、刃部の角度が鋭角であるという特徴がある。この石器は、かつて不定形石器として一括されていた。

石材の石質には、北上山地古生界産のチャート・粘板岩・凝灰質チャートが6点、奥羽山地新第三系中新統産の凝灰質珪質泥岩・玻璃質流紋岩・珪質細粒凝灰岩が22点あり、奥羽山地産の原石を素材とする石器が多い。

〔使用痕のある剝片〕 (第^{15・16}_{108・346} 図156~176、P L—164)

21点の出土で、住居跡3点、土坑1点、遺構外17点が含まれている。

本器種には特別に刃部調整をした形跡はないが、周縁部に使用時にできたと考えられる刃毀れを残している剝片を入れた。したがって、形態・大きさともに不揃いで規格性が認められない。

使用されている剝片をみると、縦長剝片が17点、横長剝片が4点含まれ、使用される部位も、それが側縁であれ下縁であれ直線的な周縁部を使用するのが最も多い。一部には円弧状の部分も使用している(165・167)が例は少ない。刃毀れのある面をみると、表面・裏面ともにあり、一様ではない。しかし、磨滅痕を残すものがないことから考えると、いわゆる搔器的な使われ方はなかったと理解することができる。おそらく、切る・削るという作業の中で、切る役割の道具として、手頃な剝片の鋭い周縁部が使われたというのが実体であろう。

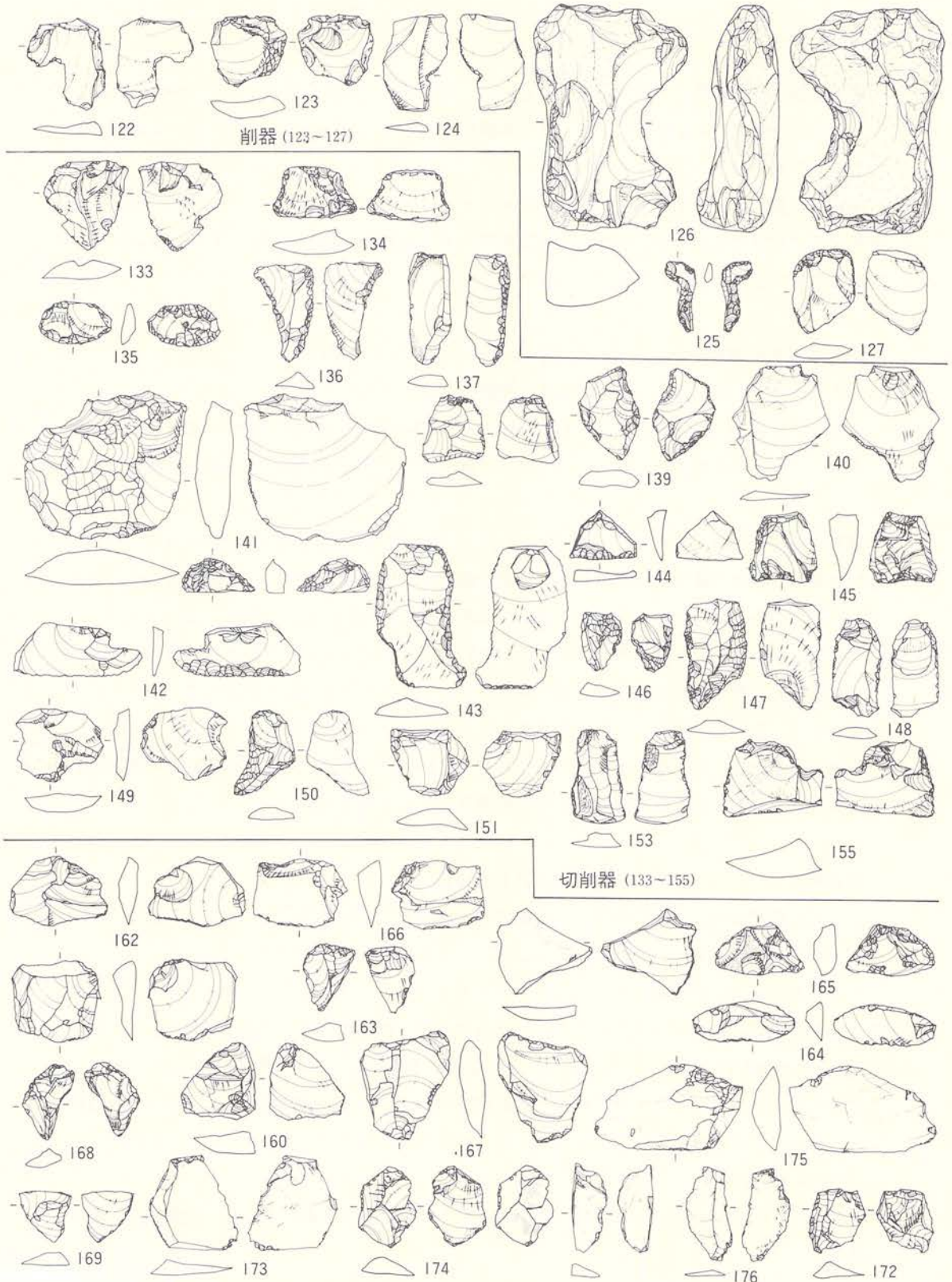
石材の石質には、北上山地古生界産のチャート・粘板岩が3点、奥羽山地新第三系中新統産の珪質泥岩・硬質泥岩・珪質細粒凝灰岩・玻璃質流紋岩が18点ある。

〔貯蔵剝片〕 (第19図177~190、P L—165)

I j 41住居跡の埋土下位に貯蔵された剝片で、14点ある。剝離面のリングやフィッシャー・光沢・色調から考えると、3個の原石(母核)から剝離された剝片が混在している。

177~186の10点が同じ原石からの剝片で、大きさが長さ2cm台5点、3cm台5点と小型の剝片ばかりである。幅をみても2cm台4点、3cm台6点と幅狭で、厚さの場合は最大9mm・最小3.4mmと差が大きい。形をみると、縦長のもの4点と横長のもの6点で横長の剝片が若干多い。自然面を打面としているのは3点(177・178・183)のみで、他は剝離面を打面としている。179は左側縁に自然面を残している。また、181・185は末端がヒンジフラクチャーをおこしているし、182は末端が折断している。

187はこれ1点のみで、全長2.1cm・幅2.2cm・厚さ3mmと小型の剝片である。左側縁と下端が欠損している。



使用痕のある剥片 (162-176)

第332図 遺構外の遺物(石器-3)

縮尺 $\frac{1}{3}$

188～190の3点は同じ原石からの剥片で、長さが1cm台2点と3cm台1点で、幅は全て2cm台、厚さ3mm～4mmの範囲の大きさである。188はやや大きめであるが、他の2点は小型で横長の剥片である。

石質は、177～186と188～190は奥羽山地新第三系中新統産の珪質泥岩で、187は北上山地古生界産のチャート質淡緑質凝灰岩である。

〔接合剥片〕 (第333図191・192、P L—165)

粗掘り中に遺構外から出土した2点のみである。

小型で扁球状の円礫から剥ぎとられた剥片である。191の方が大きめで、剥離面を打面にして剥ぎとられている。剥離面を多く持っているが、方向がまちまちで一定しておらず、その時々で最も手頃な面を打面としている。192は191の外面から剥ぎ取られた剥片である。剥離面を打面とし、表面は全て自然面である。

石質は、北上山地古生界産のチャートである。

〔石核〕 (第38・337図408～412、P L—179)

5点の出土で、住居跡出土1点と遺構外出土4点が含まれている。

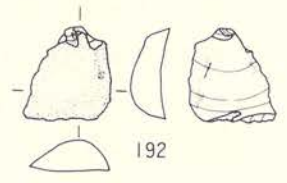
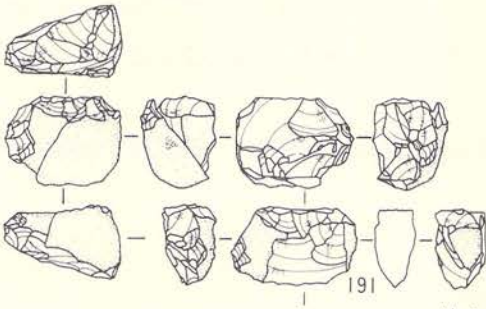
408は多くの剥片を剥ぎとられた残核で、断面が算盤状を呈している。石を回転させながら中心線から両側縁に向かって剥いているが、最初に右側を全周するように剥ぎとり、次いで左側を全周するように剥ぎとるという取り方をしているようであるが、必ずしも規則的ではなく、打面として手頃な部分を選んでいる。剥離面の範囲をみると、比較的幅広で長さの短い横長剥片を取っており、石鏃や石錐といった小型の石器を作る素材ではなく、搔器や削器等の比較的大型で厚みのある石器を作る素材と考えられる。

409は古い剥離面をもつ礫で、再利用している。剥ぐ方向には規則性がなく、あまり良好な剥片が取れたとは考えられない剥離痕を残しており、実用的な剥片を作る前の打面調整の段階で途中放棄している。

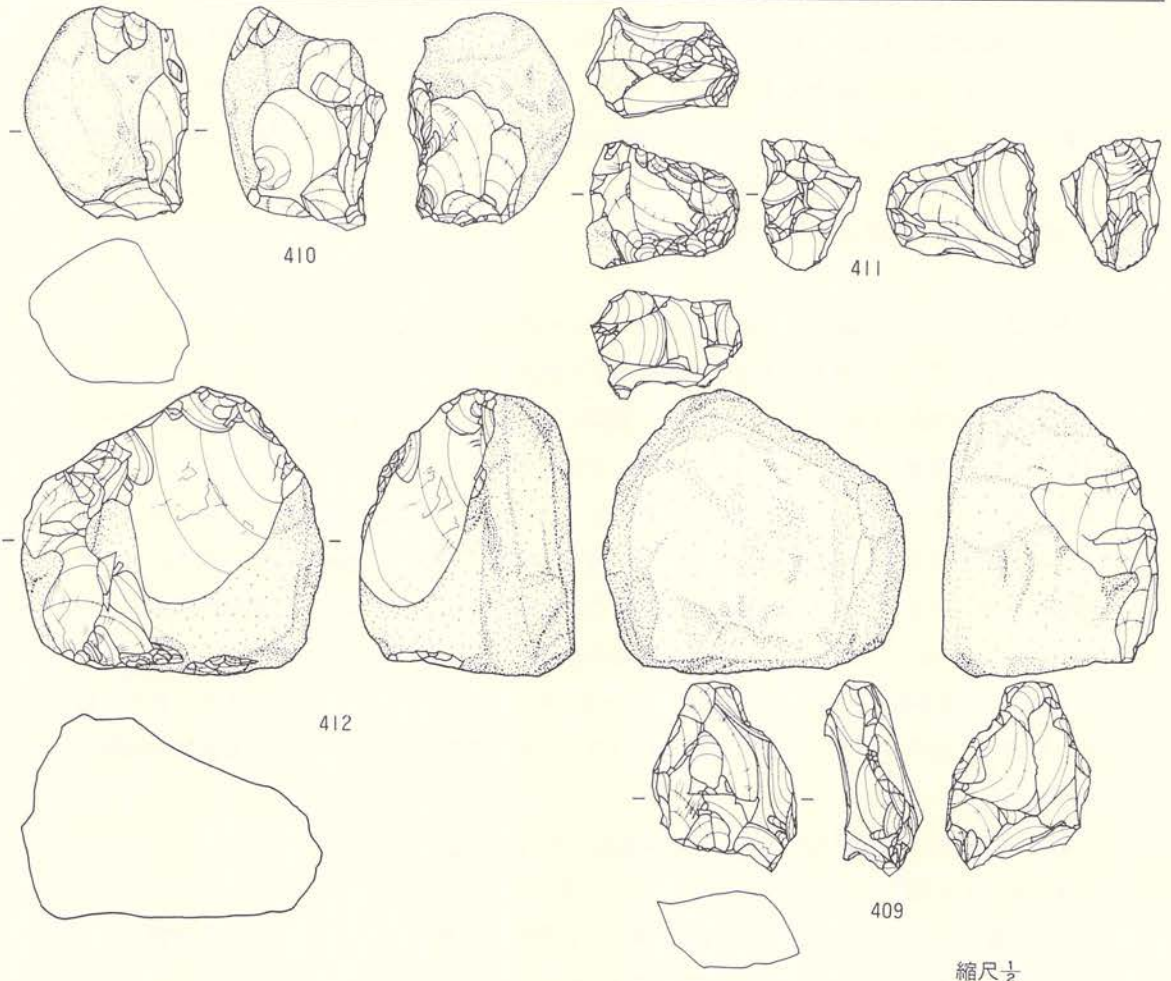
410は409と同じ様な原石である。打面調整した後、調整面を打面として剥片をとっているが、あまり形のいい剥片がとれなかったことから、途中で放棄している。

411は出土した石核の中で最も小型で、多くの方向から剥離している。一部は打面調整したとおもわれる面もあり、若干自然面の残る部分もある。

412は最も大型の石核で、打面調整することなく、自然面を打面としている。剥離の方向は3方向で、合計8個位の剥片を剥いだらしい。しかし、良好な剥片が得られなかったらしく、途中で放棄している。



接合する剥片



石核

縮尺 $\frac{1}{2}$

第333図 遺構外の遺物(石器-4)

大きさ・形状はそれぞれによって差があり、一様ではないが、412が重さ447gと最大で、411が32gと最小である。

石質は、408は奥羽山地新第三系中新統産の流紋岩質極細粒凝灰岩であるが、他は北上山地古生界産の粘板岩（409・410・412）と輝緑凝灰岩（411）である。

〔磨製石斧〕 (第^{38・47・188・226}_{292・303・334・335} 図193～225、P L—166～168)

34点の出土であるが、住居跡出土3点、土坑2点、陥し穴状遺構出土3点、遺構外出土の26点が含まれている。また、11点は完形品であるが他は多少の差こそあれ、一部を欠損している。

頭部が幅狭く、刃部に寄るほど次第に広くなり、左右がほぼ対称となる定形的な形状をもつものであるが、頭部が隅丸方形的なもの(198)、頭部が円弧状で隅が若干丸味をもつもの(201)、全体が細く頭部が丸味をもつもの(196・206・215)等があり、頭部の幅が狭いほど、最大幅との差が大きくなる。この傾向は大型のものほど顕著である。欠損しているものでみると、刃部を欠失するものが13点、頭部を欠失するもの9点あり、頭部だけを残すものが多い。

完形品が少ないので断定できないが、欠損品も含めて全体を概観すると、大型・中型・小型に細分することができそうである。大型は全長が9cm以上のもので22点含まれ、中型は6.5cm～9cmの範囲で6点入り、小型は4cm～6cmで5点が該当する。小型のものほど全体が薄く仕上げられる場合が多い。おそらく、大型のものと小型のものでは、使用形態が違うことによるものであろう。

石質は、北上山地古生界産の輝石玢岩・硬砂岩・チャート質淡緑色凝灰岩・輝緑凝灰質チャート、奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩であるが、圧倒的に北上山地の石材が多用されている。

〔打製石斧〕 (第335図226、P L—168)

1点の出土である。粗掘り中に出土したもので、片面（表面）に自然面を残す縦長の剥片を使用し、側縁に裏面からの粗雑な剝離がある。刃部の刃毀れがあまりないので、長時間使用されたものではないかも知れない。

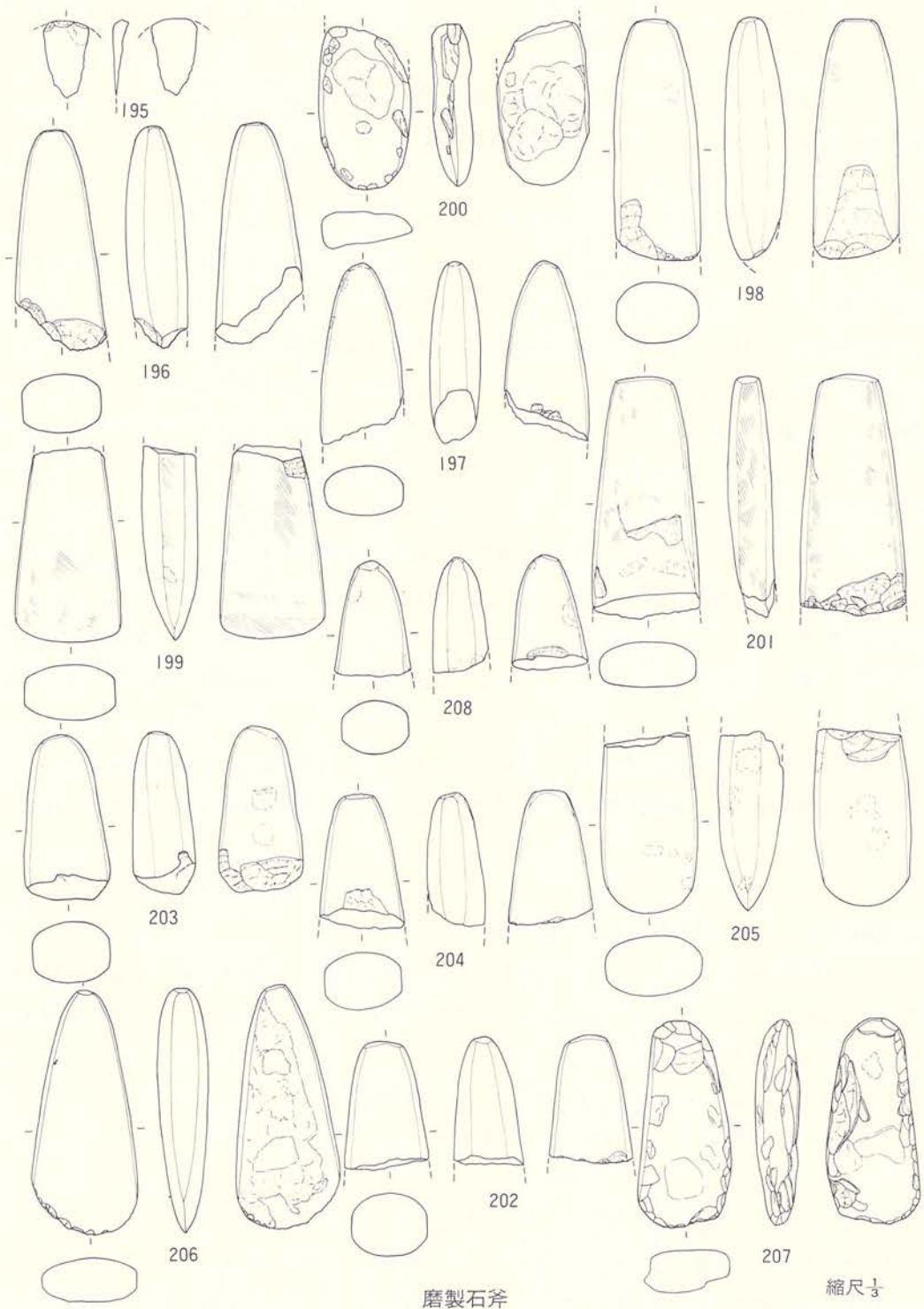
大きさは全長10cm、全幅5.4cm、厚さ1.7cm、重さ150gである。

石材は、北上山地古生界産の輝石玢岩を使用している。

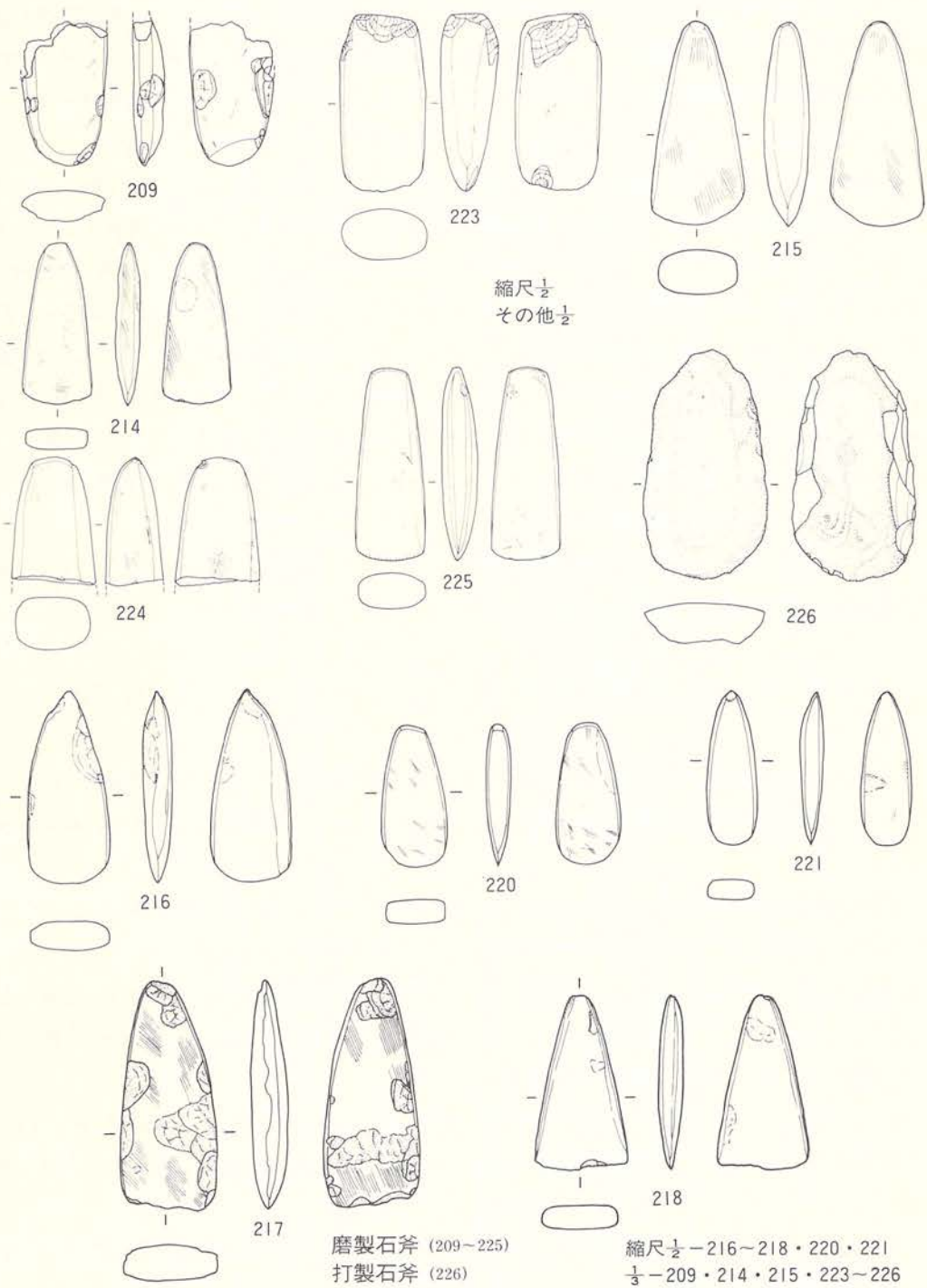
〔磨石〕 (第^{32・38・47・54・111・166・168}_{195・218・226・232・336・337} 図227～259、P L—168・169)

32点の出土で、住居跡出土6点、土坑出土8点、遺構外出土18点が含まれている。

本種は形状が扁平な円形か楕円形で、平らな両面に磨り面をもつことを特徴とするが、246は



第334図 遺構外の遺物(石器-5)



第335図 遺構外の遺物(石器-6)

棒状を示すが磨り面だけをもつので本種に入れた。また、凹み石と併用している例が数多くあり、どちらに分類するか苦慮したものもあるが、一応の分類の目安として使用頻度の多いと思われる使用形態を器種名とした。磨り面の数をみると、全面にもつもの9点、両面にもつもの16点、片面にもつもの7点に細分され、その中の4点が凹み石として併用されている。

大きさをみると、長径が10cm以上13点・9cm～10cm9点・8～9cm4点・7～8cm4点・6～7cm1点・6cm以下1点で、短径は10cm以上4点・9～10cm5点・8～9cm9点・7～8cm7点・5～6cm4点・5cm以下1点となり、重さでは200g以上1点・100g以上7点・80～90g7点・60～80g8点・40～60g5点・20～40g5点・20g以下2点になる。これからみると、長径9cm以上・短径7～10cmの範囲に標準的な大きさがあり、平面形が楕円形を呈するものが多いことを示すものであろう。重さはバラツキが多く標準的なものといっても明確でないが、80g以上に15点が入ることから考えると、この範囲と推定することができる。したがって、重さは厚みとも大きくかわることから考えると、本種は重さ(厚み)はあまり重要な要素ではなく、平面的な形と大きさが使用に大きな影響をもっていたものであろう。

石質は、北上山地古生界産の硬砂岩・石英閃緑岩・珪岩・凝灰質硬砂岩・粘板岩が11点、奥羽山地新第三系の輝石安山岩が21点となり、輝石安山岩が多用されている。

〔凹み石〕

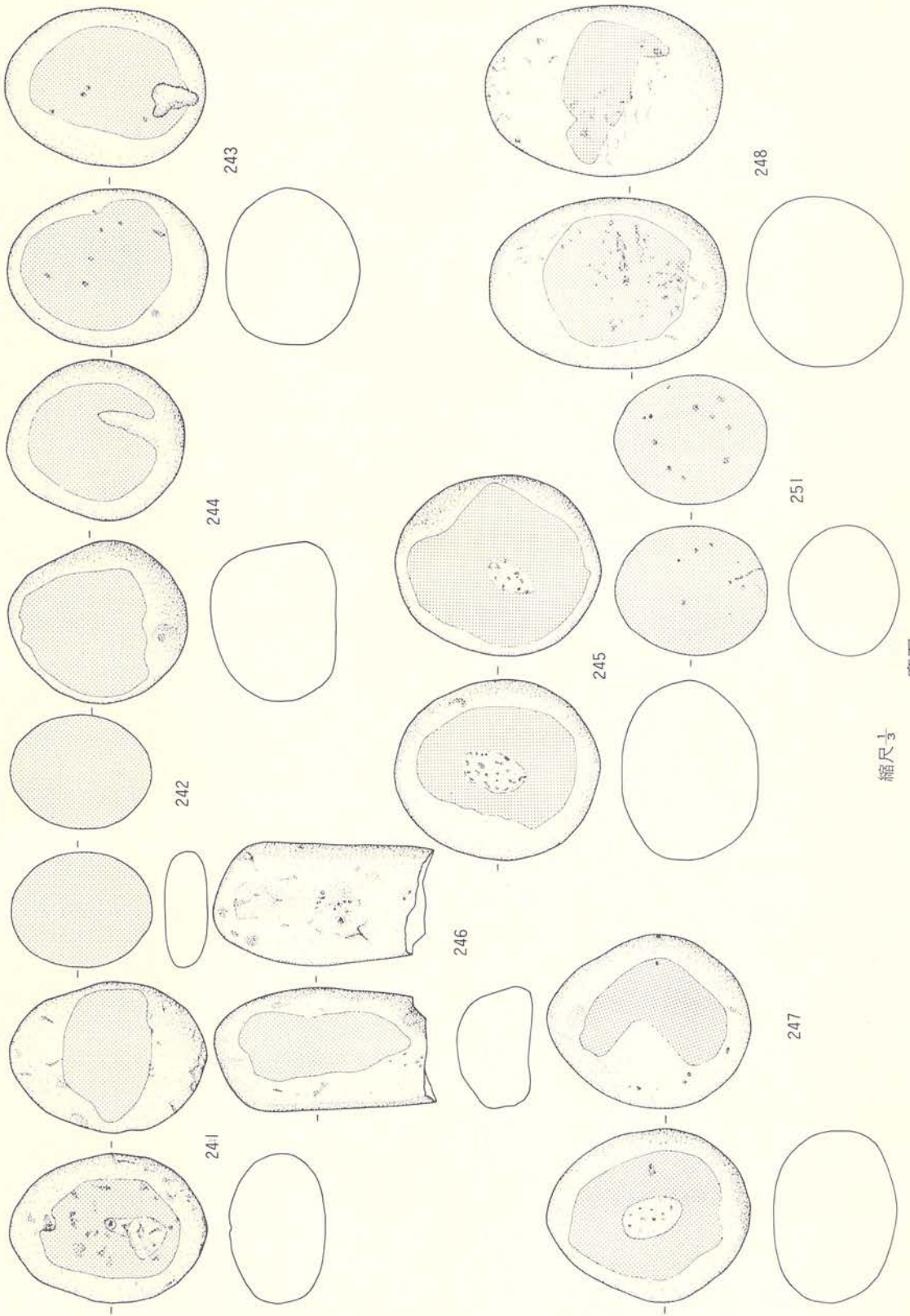
15・20・28・32・34・38・42・47・48・54
(第55・65・129・150・151・163・191・204 図260～360、P L-170～174)
206・236・239・244・279・338～342

102点の出土と、本遺跡から出土した石器の中で最も点数が多く、この中には住居跡出土33点、土坑出土19点、陥し穴状遺構1点の遺構内から出土した54点と、遺構外から出土した48点が含まれている。

形状は棒状や楕円形で断面が扁平や楕円形か略三角形を示し、その平坦面を使用したものである。また、前の磨石同様、凹み石以外に磨石としても併用しているのが27点あり、その他に叩き痕をもつものが4点ある。凹み部も片面にもつもの27点、両面にもつもの72点、3面にもつもの2点、5面にもつもの1点があり、さらに同じ面に複数の凹み部をもつものや、棒状の原石を使用している場合は細長く凹む場合もある。

大きさにはバラツキが大きいものの、棒状のものは長さが11cmを超えるものが72点と、円形や楕円形のものに比較すると長径が大きい傾向が強く、逆に短径は棒状のものの方が小さい例が多い。

石質は、北上山地古生界産の硬砂岩と凝灰質硬砂岩が3点、奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩が99点で、奥羽山系の石材を多用している。



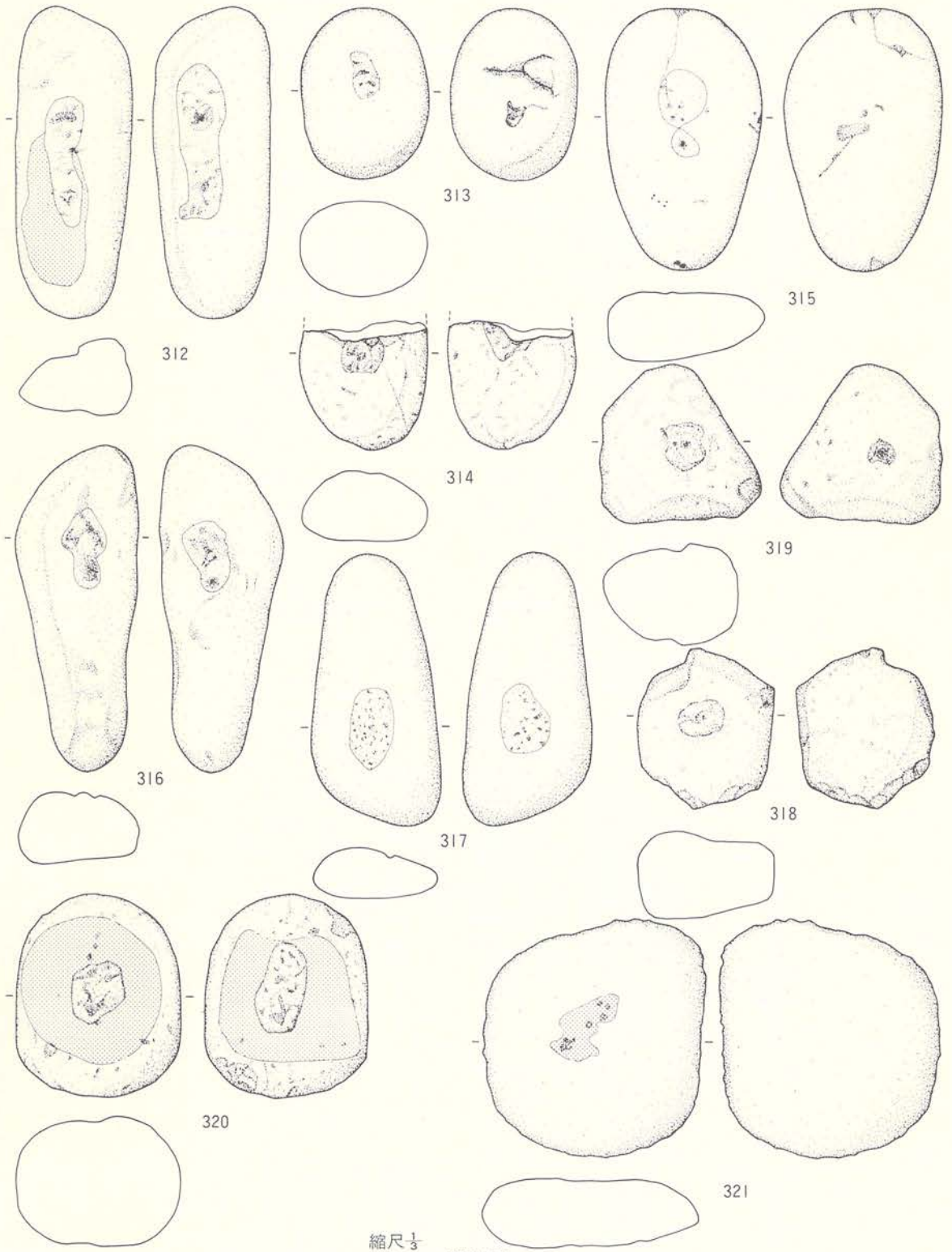
縮尺 $\frac{1}{3}$

磨石

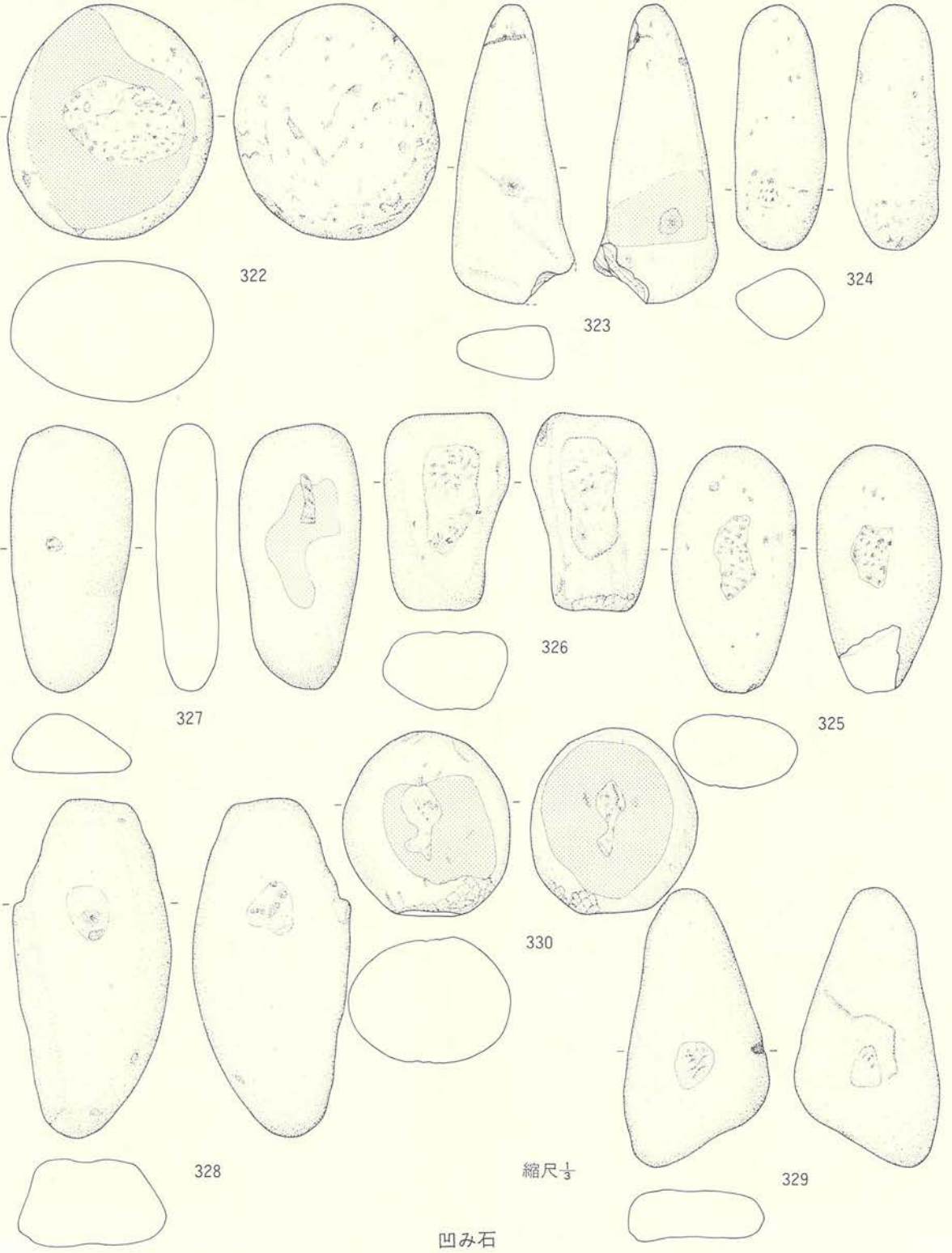
第336図 遺構外の遺物(石器-7)



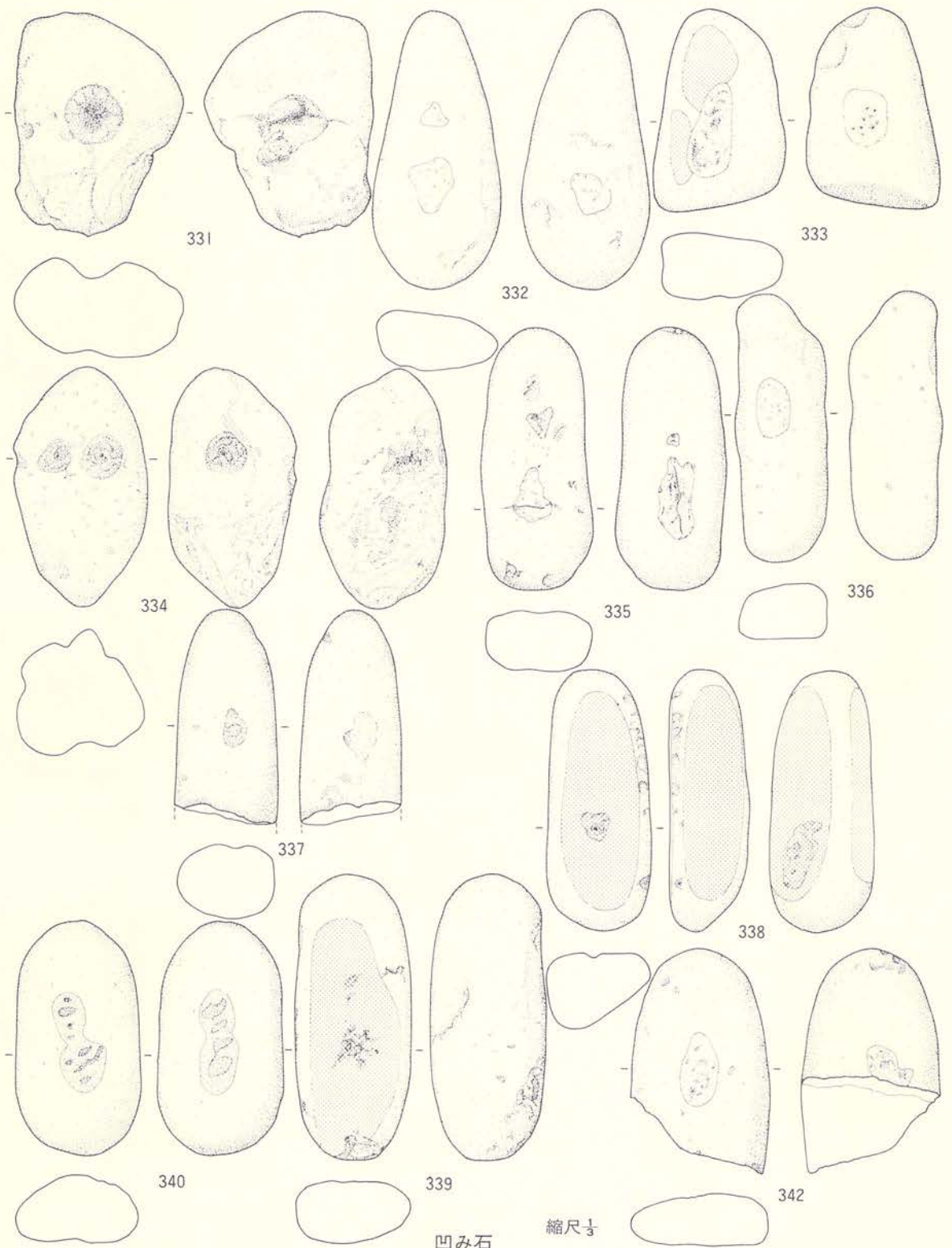
第337図 遺構外の遺物(石器-8)



第338図 遺構外の遺物(石器-9)

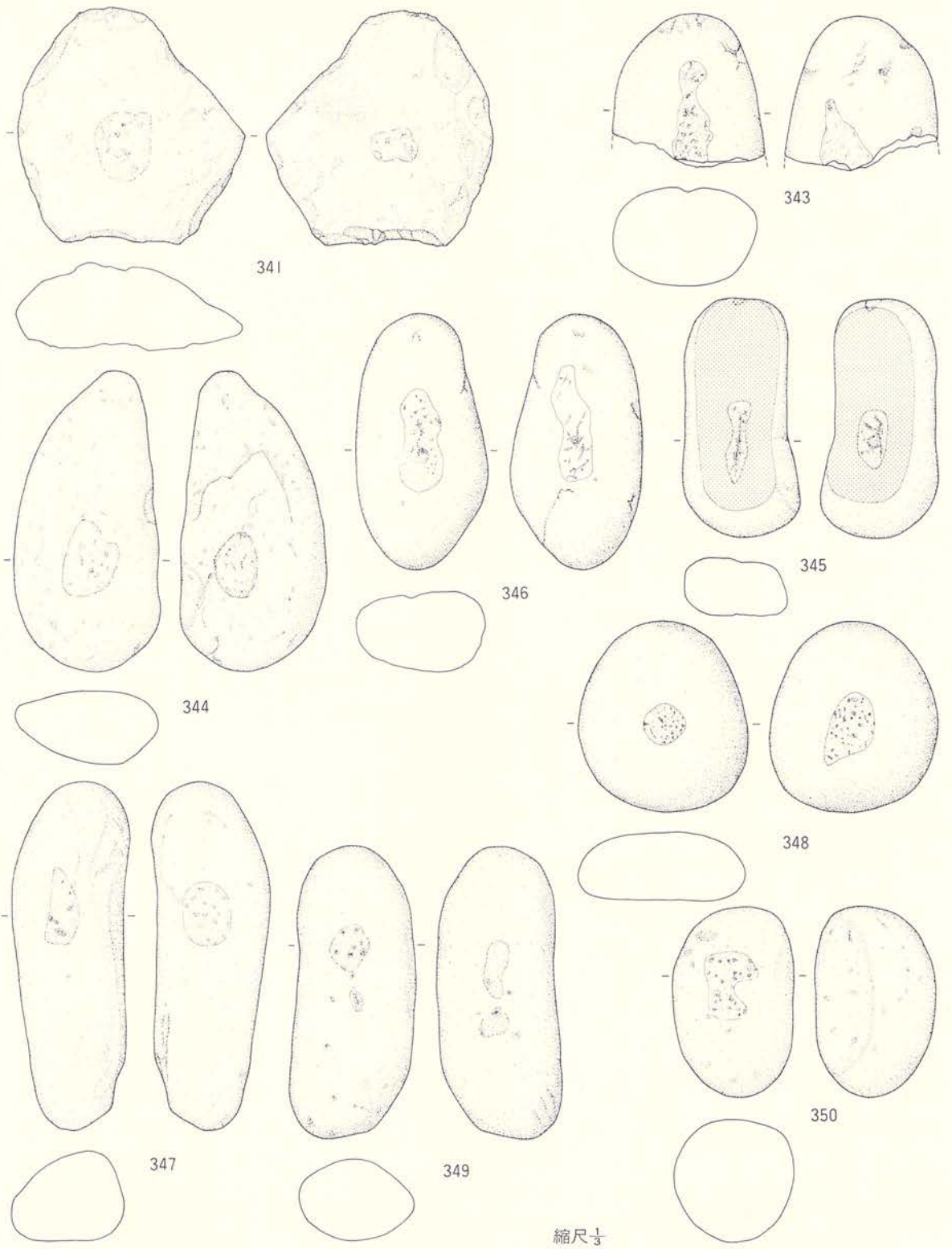


第339図 遺構外の遺物(石器-10)



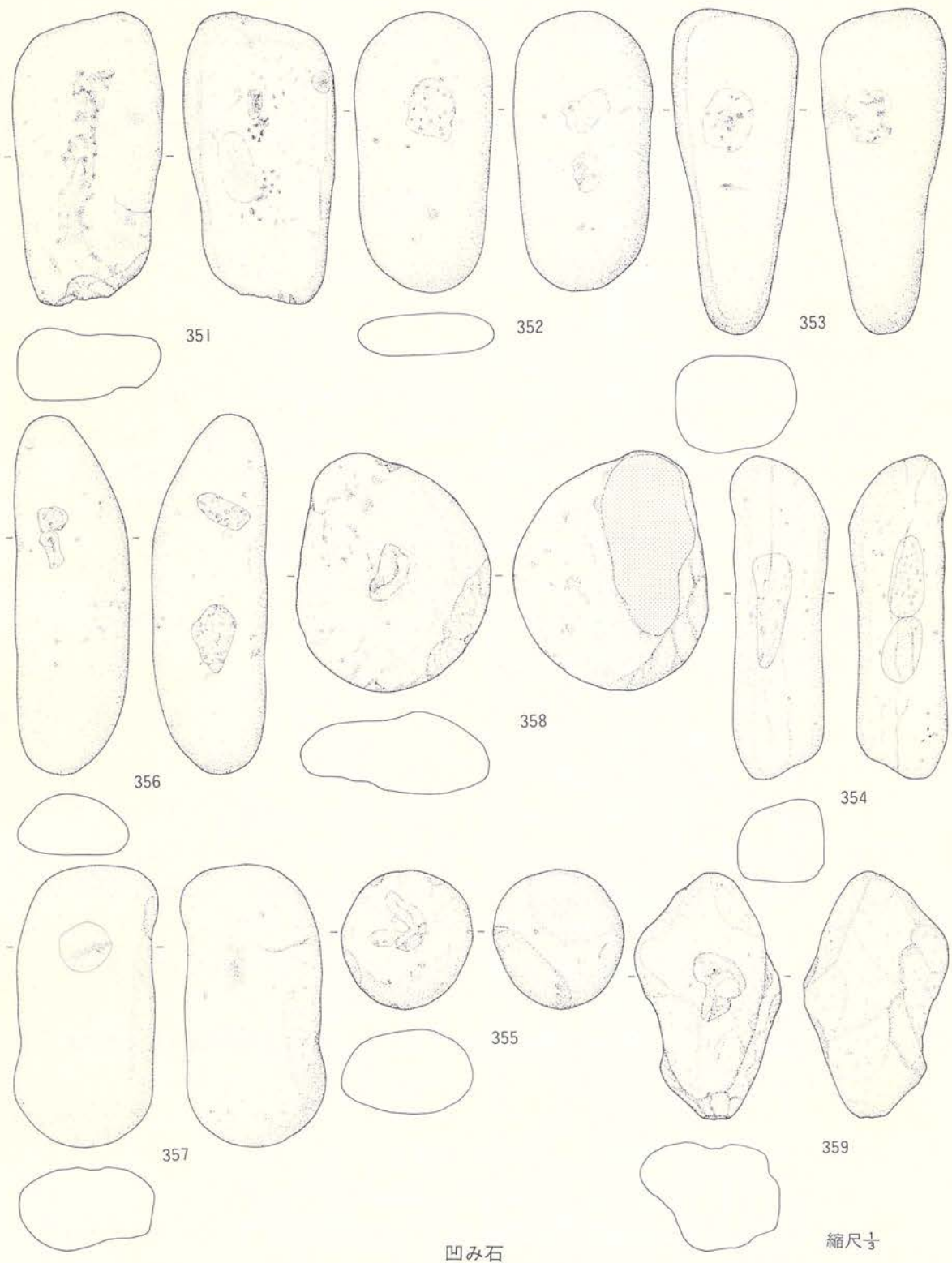
凹み石 縮尺 $\frac{1}{3}$

第340図 遺構外の遺物(石器-11)



凹み石

第341図 遺構外の遺物(石器-12)



凹み石

縮尺 $\frac{1}{2}$

第342図 遺構外の遺物(石器-13)

〔叩き石〕 (第345図361・362、P L—174)

2点の出土でいずれも遺構外からの出土である。361は完形であるが、362は欠損している。361は楕円形でやや扁平な河川礫の長径両端に叩き潰し痕をもち、362は断面が楕円形で棒状と推定される円礫の下端に叩き潰し痕をもっている。

大きさは、362は不明であるが、361は長径12.3cm、短径10.3cm、厚さ6.4cm、重さ128gである。

石材は北上山地古生界の硬砂岩と石英閃緑岩である。

〔石 皿〕 (第^{20・39・42・49・54・55}109・111・244・256・343・344 図363～394、P L—175～177)

32点の出土で、住居跡出土10点、土坑出土7点、遺構外出土15点が含まれている。

本種には石皿として面取りしたもの以外に、台石的な使い方をしたもの（特別な加工をせずに、自然石の自然面を使ったもの）も一括した。破損していないものは15点で、他は多少の差こそあれ破損している。また、片面のみを使用しているのは24点で、他は両面に使用面をもつ。なお、面取りをして成形したものは2点のみで、他は自然石をそのまま使用している。

大きさは、それぞれによって差が大きく、一概に平均することはできない。

石質は、奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩・両輝石安山岩・流紋岩・粗砂質凝灰岩・細砂質凝灰岩等で、奥羽山地産の石材で占めている。

〔砥 石〕 (第166・239・345図395～399、P L—178)

5点の出土で、土坑出土2点と遺構外出土3点が含まれている。

中には台石的なものもある(398)が、形が不整であることから一応砥石として分類した。しかし、使用部が面的なものが多く、線的な使用形態を示すものはない。使用面を片面にのみもつものが4点と多く、両面にもつものは1点だけである。また、395は凹みらしい使用痕も残している。

大きさは、最大径7.9cm～20cmまであり、重さも152g～6.22kgまでと各個々によって大きな違いがある。

石材の石質は、奥羽山地新第三系中新統産の両輝石安山岩と流紋岩質極細粒凝灰岩のみが使用されている。

〔石 弾〕 (第34・346図400～404、P L—178)

5点の出土であるが、住居跡出土の1点を除くと他は遺構外からの出土である。

小型で円形の自然的礫あるが、手で直接握って投げ、武器的な役割を果したといわれる説の

ある石器である。しかし、分類してみると、使用痕が明確でないため、石器として断定するのに基準のとり方が困難である。本遺跡の場合は取りあえず、このようなものが石弾に該当するだろうと考え、入れた。

径4.2cm×5.1cmの円球状で、重さが50g～130gの大きさである。

石質は、奥羽山地新第三舞中新統産の輝石安山岩と白色細粒凝灰岩が使用されている。

〔石製円盤〕 (第346図405・406、P L—178)

2点の出土で、いずれも遺構外からの出土である。405は小型の円磔を半截した後、周辺部と表面と裏面に粗雑な剝離調整を加えて成形したもので、平面形は楕円形である。406は、断面が扁平な自然磔の周辺部に表裏両面に剝離調整し、平面形が楕円形になるように成形している。大きさは、405が4.3cm×5.6cm、406が3.9cm×4.4cmで、厚さは前者1.6cm、後者1.0cmである。重さはほぼ同じである。

石質は奥羽山地新第三系中新統の白色細粒凝灰岩と輝石安山岩である。

〔両刃石器〕 (第346図407、P L—178)

遺構外から1点出土している。

本種は使用刃部（実測図の下端）が楔状の三角形を示し、表裏両面に剝離調整を加えたと推定されるものである。剝離は刃部に限定され、その他の部分は自然状態のままである。

大きさは5.1cm×4.5cm、厚さ2.0cm、重さ60gで、石質は北上山地古生界産のチャート質粘板岩である。

〔その他〕 (第38・362・367・370図428～431、P L—179)

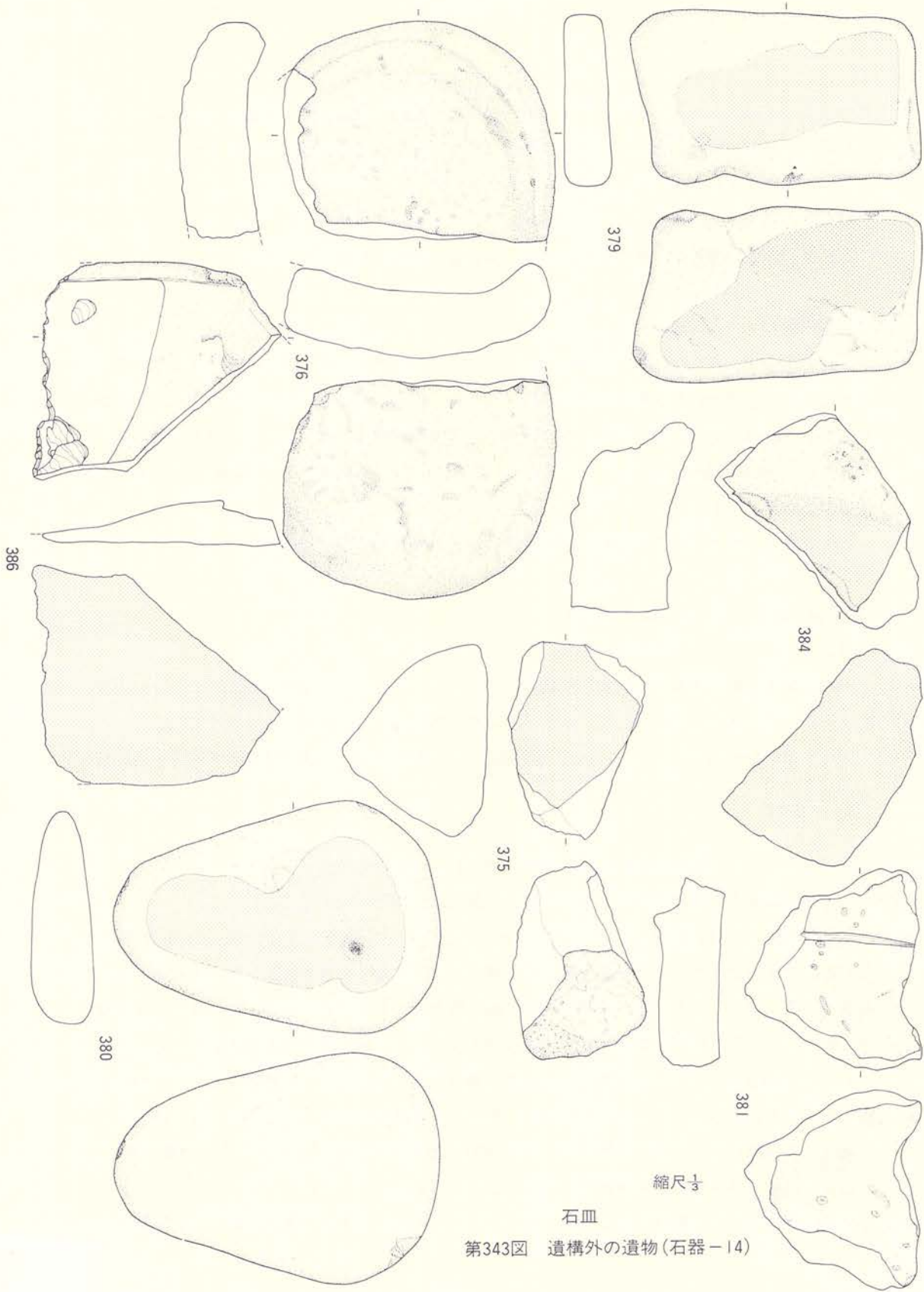
ここには器種名の明確でない4点を一括し、個別的に説明を加えることにする。

428（第38図）は線刻のある軽石で、住居跡から出土した。長径11.4cm・短径10.3cm・厚さ4.9cm・重さ120gの大きさで、形態が不整な自然磔である。非常に軟質で表面に多くの孔がある。線刻は2条並行し、一方が長さ4cm・深さ7mm・断面がV形を示し、もう1条は長さ3cm・深さ3mmである。それ以外には人工とおもわれ加工痕がない。稲庭岳第四系産の軽石であろう。

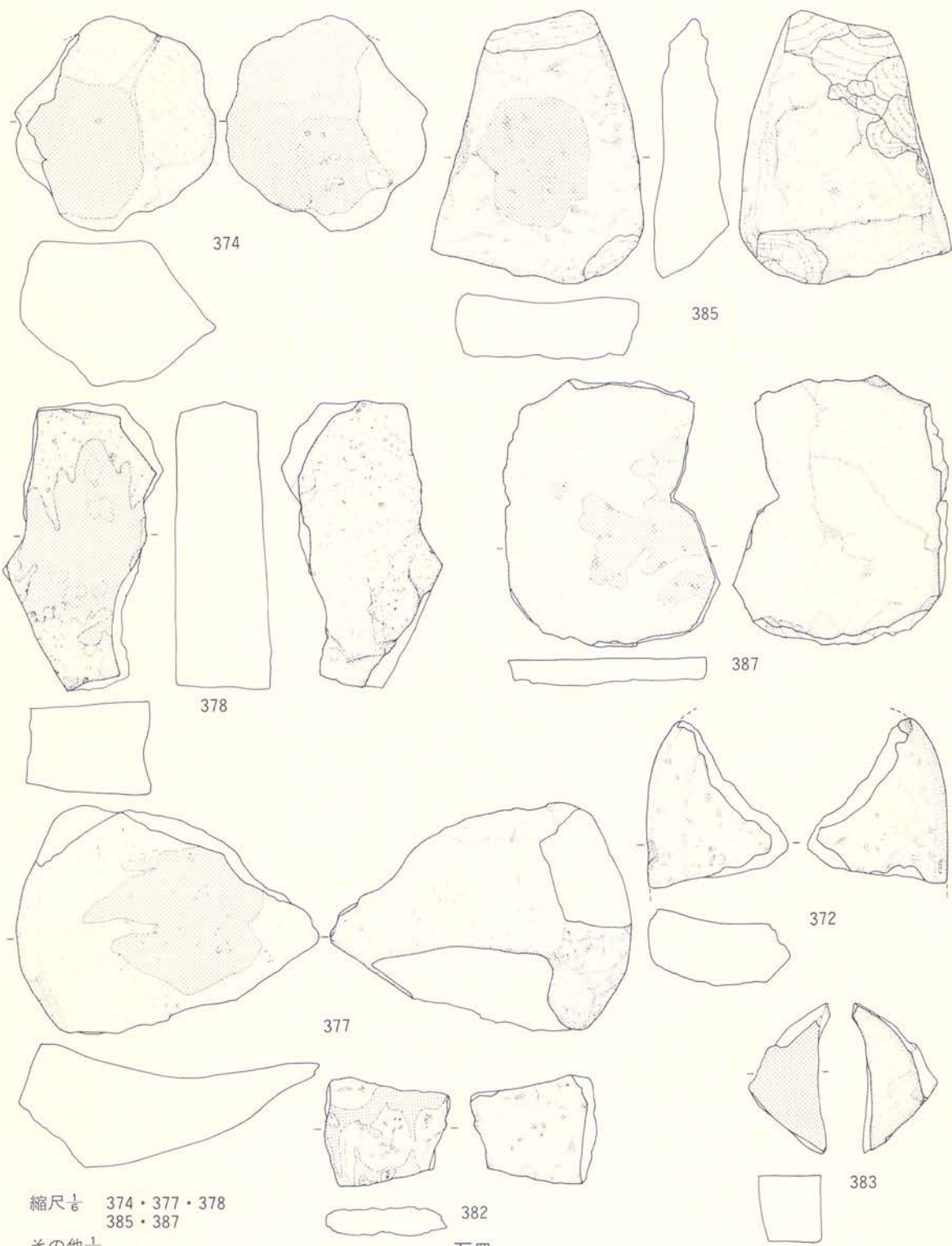
429（第370図）は、中世に位置づけられる墓壇の底面から出土した自然磔である。埋葬後に埋め戻した際に土砂と一緒にいった可能性もあるが、意識的に入れたことも考えられたので、石器として登録した。大きさは長径10.4cm・短径8.3cm・厚さ5.5cm・重さ525gの歪角磔である。

石質は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩である。

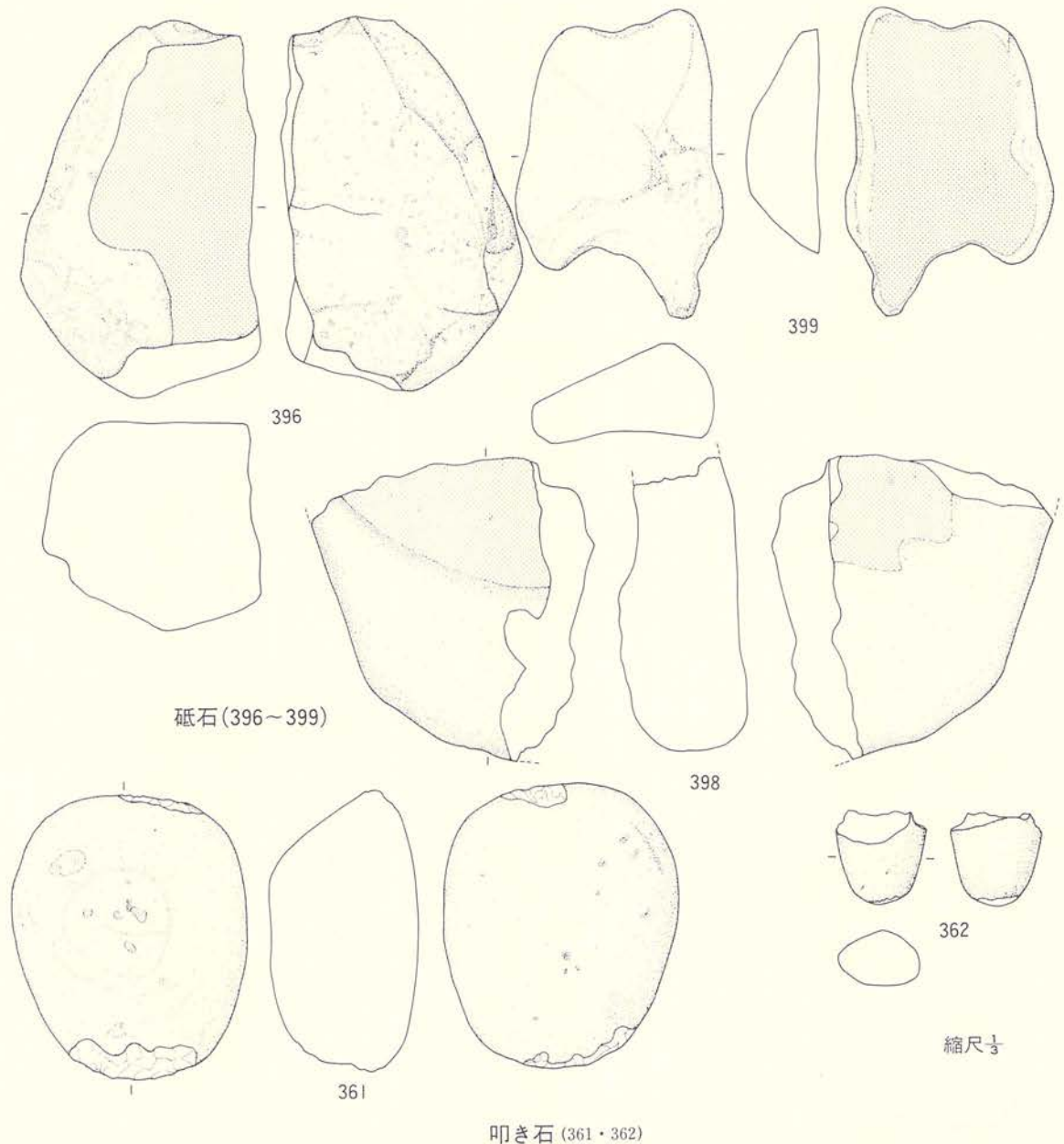
430（第362図）は、粗掘り中に遺構外から出土した扁平な円磔で、表面の若干凹んだ部分に



第343図 遺構外の遺物(石器-14)



第344図 遺構外の遺物(石器-15)



第345図 遺構外の遺物(石器-16)

黒色の物質(煤状)が付着している。一部折損しているが、残存する大きさは、長径7cm・短径6.7cm・厚さ1.9cm・重さ160gである。石質は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩である。

406(第367図)は、近世に位置づけられる墓墳内から、副葬品として出土した玉随である。おそらく、火打石として使われたものであろう。大きさは、長径2.4cm・短径2cm・厚さ2cm・

重さ5gである。

4. 石 製 品

本遺跡で石製品としたのは、石刀・石棒・玉類・垂飾り・装飾品等15点である。器種と出土点数は以下のとおりである。

○石刀——8点 ○石棒——3点 ○玉類——2点 ○装飾品——1点 ○垂飾り——1点

〔石 刀〕 (第303・361図413・415～419・422・423、P L—179)

本遺跡から出土した本種に該当する石製品は、全て破片であるため全体的なことは不明であるが、分類の基準は横断面が扁平であることを主眼とした。

413・414は出土地点が異なるものの接合し、同一個体の破片であることが判明した。また、417も石材や加工の仕方・形態から考えて同一個体と推定される。416・418・419は半割された片側どおしであるが、前と同じ状況から判断して同一個体の破片である。したがって、本種と分類したものは総点数8点であるが、個体数では4点ということになる。遺構内から出土したのは423の1点のみで、他は遺構外から出土した。

413・415・417が接合するものは、石材が粘板岩であるため板状に剝離した素材を用い、突出した部分等を簡単に研磨して成形した石刀である。研磨面の残存するのは頭部・側面・413と417の表面一部である。全長は不明であるが413～417を合計すると約20cm強となり、本来はそれ以上の長さがあったことは明らかである。幅は頭部が約2cm・先端部が約2.9cmと先端に向かって次第に太くなる形で、先端部は丸味をもっている。

416・418・419は同一個体の破片であり、実測図はそれらを接合して作成した。板状剝離する千枚岩を素材とし、敲打調整で断面が扁平になるように粗調整した後、突出した部分を軽く研磨して仕上げている。仕上りそのものは非常に粗雑で、表面に多くの凹凸がある。残存する長さは22.8cm・厚さ1.1cmで、幅は上部が約3cm・下部最大径3.7cmと、上部から下部に向かって次第に幅が広がる。

422は柄部(握り部)だけを残存し、刀身に相当する部分を欠失している。板状剝離した粘板岩を素材とし、その4面を簡単に研磨したもので、残存部全体が若干湾曲している。残存部の長さ10.6cm・幅2.5cm・厚さ5～8cmの大きさである。

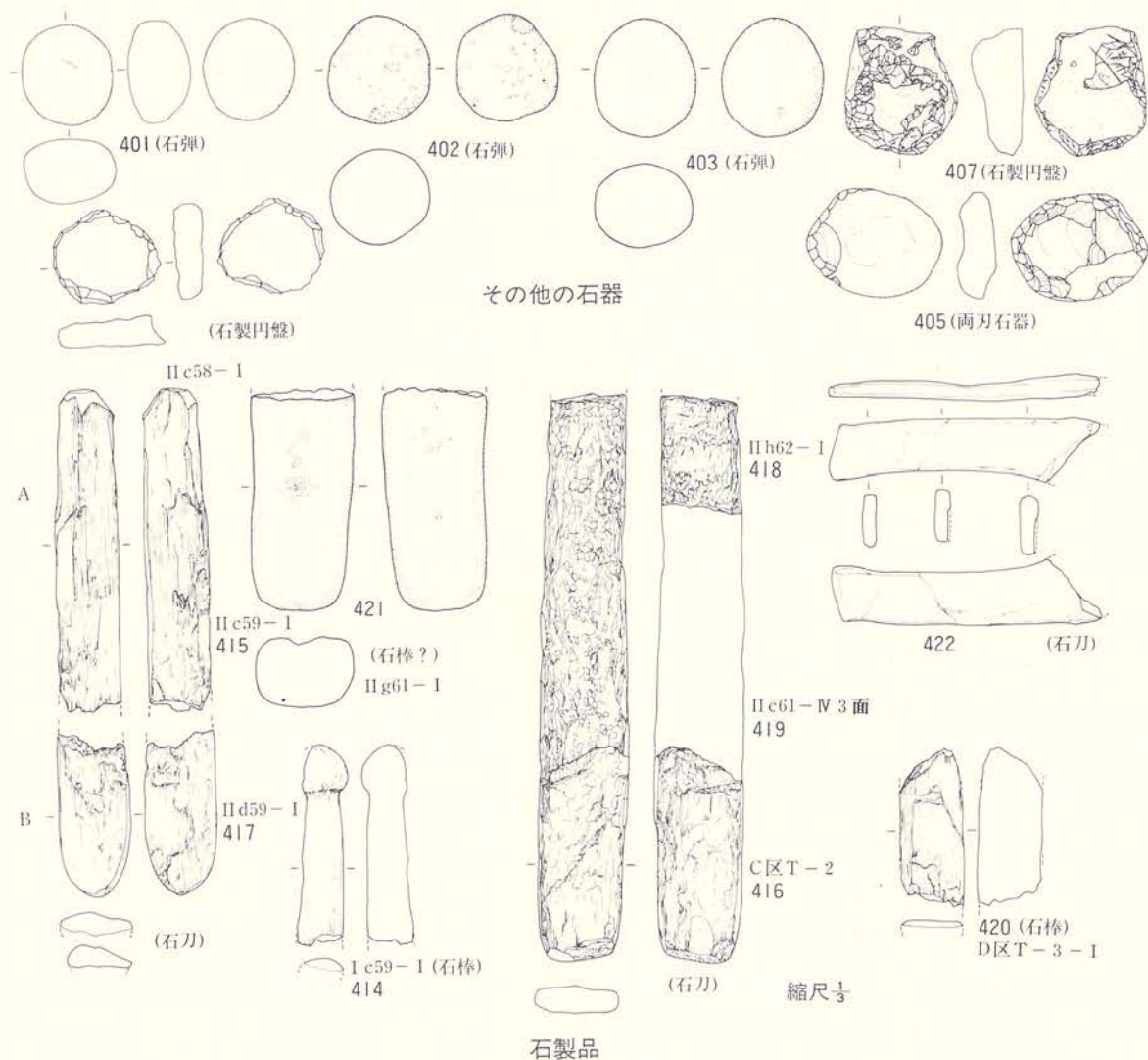
223は、刀の鋒に相当する部分の破片である。板状に剝離した粘板岩を素材とし、全周を入念に(自然面が残っていない)擦って仕上げているが、全面に擦痕を残している。残存する長さは11.5cm・幅3cm・厚さ8mmで鋒には反りがある。

〔石 棒〕 (第361図414・420・421、P L-179)

3点の出土で、いずれも粗掘り中に遺構外から出土した。

本種は、横断面が円形か方形（いわゆる扁平以外）のものを基準としたが、完形品が全くないので詳細については定かでない。

414は板状に剝離した頭部の破片であるし、420は剝離した破片で一部に研磨痕をもつことか



第346図 遺構外の遺物(石器-17、石製品-1)

ら石棒の破片としたが部位は不明である。421は断面が隅丸の略長方形で、全面に磨き面をもつ。おそらく、頭部の逆の先端部破片と考えられる。

残存する長さは、414—8 cm・420—5.8 cm・421—9 cmである。石質は、北上山地古生界産の粘板岩と奥羽山地新第三系中新統産の石英安山岩である。

〔玉 類〕 (第54・283図424・425、P L—179)

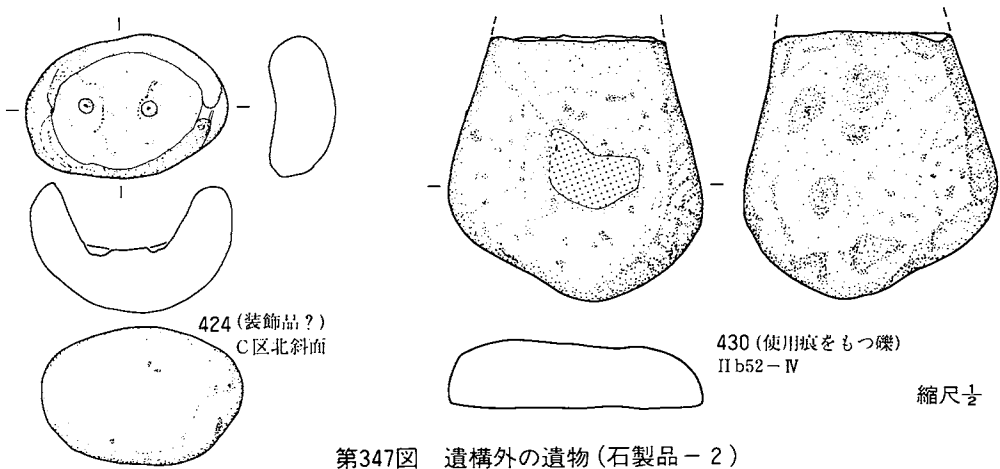
2点の出土で、424は住居跡から、425は陥し穴状遺構から出土した。

2点とも大小はあるがほぼ同形のいわゆる橐形の形状を示している。424は平面が長楕円形で断面も楕円形を呈し、長軸方向の中心部に両端方向からの円孔が1コ穿たれている。円孔部から側面部を一部欠失するがほぼ完形で、全面に不定方向の研磨時に付着した擦痕がある。大きさは、長さ5.2 cm・幅3.1 cm・厚さ2.5 cm・重さ60 gである。425は、長軸方向にほぼ半割されたような残存状態で、424より若干小型ではあるが、形状や長軸方向に円孔を1コ穿つことや、器表全面に研磨時の擦痕をもつこと等、424の様相と同じである。大きさは、長さ4.3 cm・幅2.8 cm・残存厚さ1.3 cm・残存重さ25.7 gである。

石質は2点とも同じで、北上山地古生界産の凝灰質チャートである。

〔装飾品〕 (第362図426、P L—179)

粗掘り中に遺構外から1点出土した。平面形が凸レンズ状で、断面が扁平な湾曲する自然礫の内面に、穿孔途中と考えられる径3 mm位の円形凹みが約2 cmの間隔で付されている。円形凹み以外の加工痕は全くない。類例がなく、器種名が定かでないが、一応装飾品としておく。



大きさは、長さ3.7cm・幅5.4cm・厚さ1.6cm・重さ53.3gである。

石質は奥羽出地新第三系中新統産の珪質細粒凝灰岩である。

〔垂れ飾り〕 (第225図427、P L—179)

鯉節形大珠の形態に酷似した軽石製の垂れ飾りである。最近では一般に浮子と理解されている場合が多いが、本遺跡では装飾品として扱った。その理由は、大珠に近似する形であること、全面を入念に研磨していること、上端に1コの貫通孔をもつ等、浮子とするには作り方が丁寧すぎることから鯉節形大珠に軽石を使って模造したものと判断した。

大きさは、全長13.2cm、上部幅5cm、最大幅5.5cm、下端幅1.3cm、厚さ1.9cmで、重量は60gである。断面形は扁平で、側縁は両面とも削られ「く」形を示している。平面形はほぼ中位に最大幅をもち、その上位は軽く窄み下位は上位より大きく窄む。上部の円孔は上端の約1.5cm下部のほぼ中央に位置し、径5mm～7mmで両面から穿たれている。

石材は、稲庭岳第四系産の軽石である。

V 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代に属する遺構と遺物は、B区とC区から発見されている。遺構はB区から住居跡が1棟検出されており、遺物には土器と石器がある。遺物のほとんどは土器で占められ、石器はほんの僅かである。

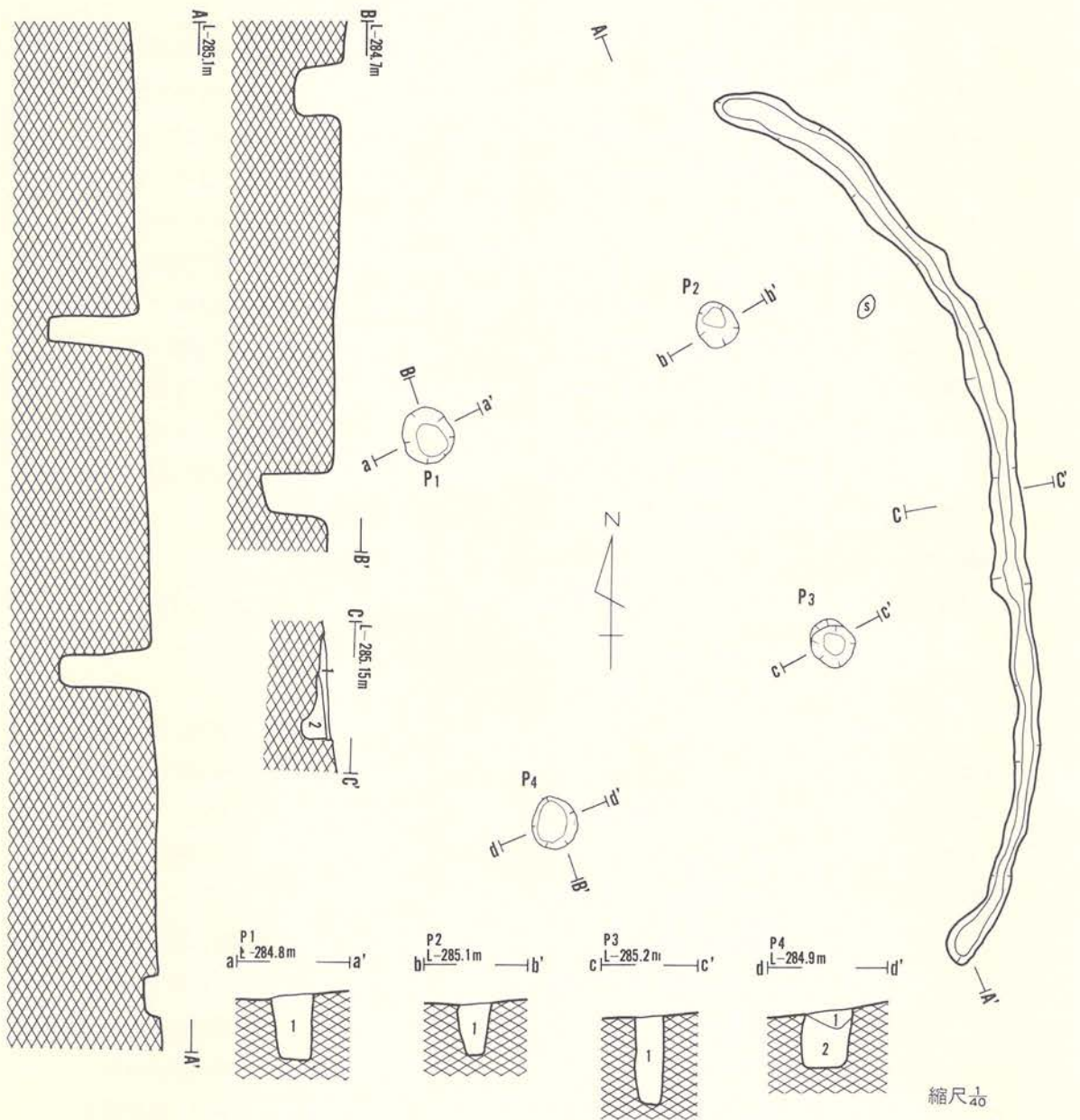
1. 住 居 跡

III g 45住居跡

〔遺 構〕 (第348図、P L—33)

B区中央の最東端やや南寄りのグリッドIII g 45・46、III h 45・46にまたがって位置し、南西向き斜面の上位に立地している。他遺構との重複はない。

本住居跡は斜面に構築されていることから遺存状態が悪く、壁溝と床面の一部、柱穴が検出されたのみである。検出された壁溝は延長5.8mで、斜面に湾曲する円弧状を示している。壁溝の湾曲程度と壁溝と柱穴の距離から推定される全体規模は5.8cm×4.6cm位と推定され、平面形はN-20°-Wに長軸をもつ凸辺の長方形に近い楕円形を示すものと思われる。壁溝の幅は15cm～20cmで、深さは最も深い東壁で12cm～15cmあり、溝底に起伏がみられる。柱穴はP₂が壁溝の



P 1
 層位 色 調 土 性
 1 10 YR 5/2 黒褐色 シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。
 P 2
 層位 色 調 土 性
 1 10 YR 5/2 黒褐色 シルト。黄褐色浮石・炭化物含む。
 P 3
 層位 色 調 土 性
 1 10 YR 5/2 黒褐色 シルト。炭化物・黄褐色浮石含む。

P 4
 層位 色 調 土 性
 1 10 YR 5/2 黒 シルト。黄褐色浮石の細粒含む。
 2 10 YR 5/2 黄 粘土質シルト。黄褐色浮石の細粒含む。
 III g 45住居跡
 層位 色 調 土 性
 1 10 YR 5/2 黒褐色 シルト。浮石・炭化物を含む。やや粘性あり。
 2 10 YR 5/2 褐色 シルト。粘性なし。

第348図 III g 45住居跡

西1.4m、P₃が同1.1mに位置し、さらにP₁はP₂の西1.8m、P₄はP₃の西南西1.95m離れており、P₂とP₃は2m、P₁とP₄には2.35mの距離がある。平面的な規模は径25cm～30cmの範囲で、平面形は楕円形である。深さを底面の標高値で見ると、P₁—284.35m、P₂—284.5m、P₃—284.4m、P₄—284.3mとなり、最深と最浅では20cmもの差がある。特に斜面最下位に位置するP₄が最も深く、次いで下位のP₁、P₃、P₂の順で深く掘り込まれており、それはそのまま斜面のどこに柱穴が位置するかを表している。端的に言えば、斜面下位に位置するほど柱穴底面の標高値が低くなっている。床面と考えられる部分は、壁溝の付近に若干残存しているのみである。炉跡については焼成を受けた痕跡も明確でなかったことから、位置・構造等全く不明である。

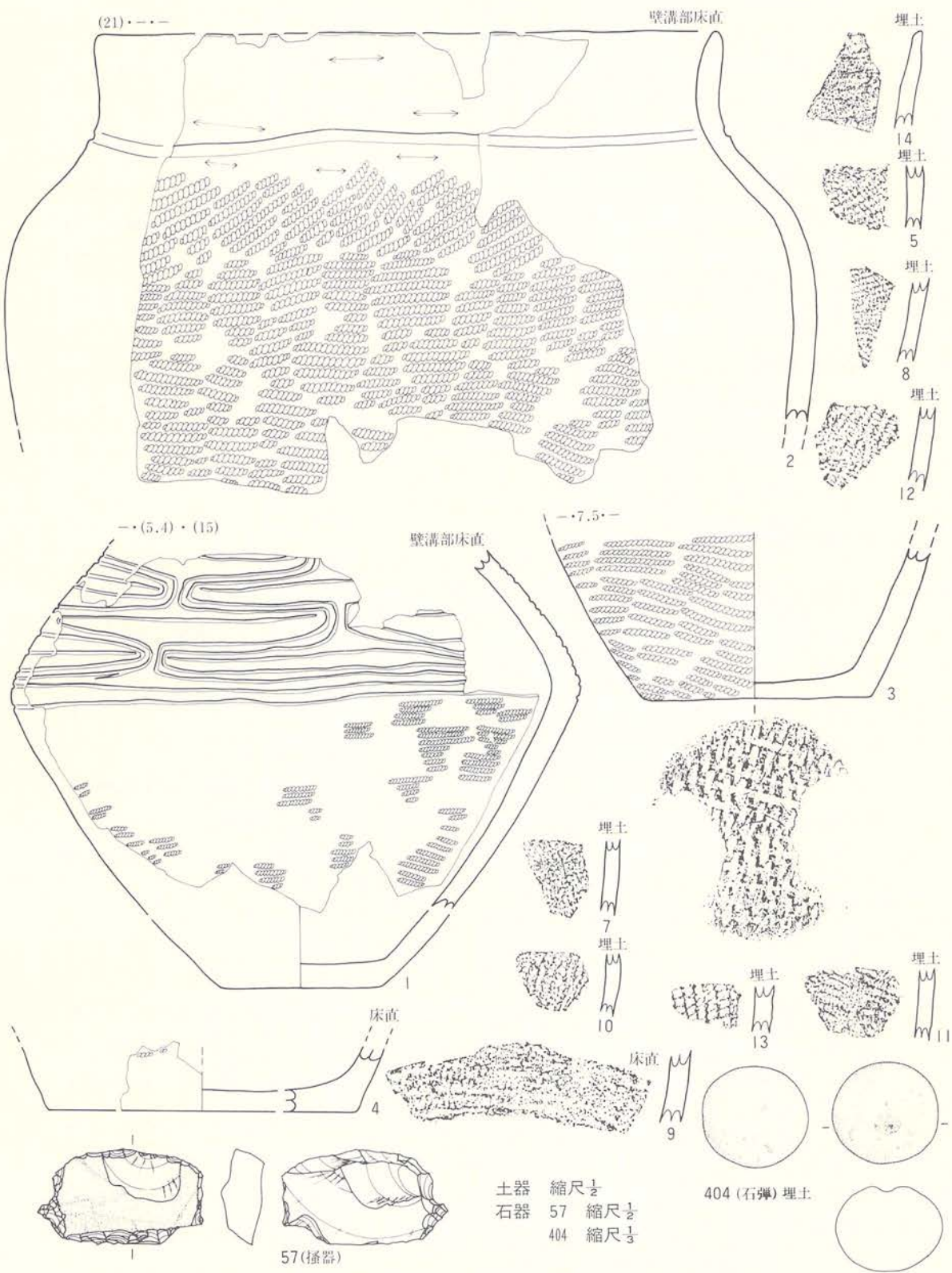
壁溝部に若干残存する埋土は、上層が黒褐色、下層は褐色のシルト質土で、1・2層とも少量の炭化物や黄褐色浮石が混じり、さらに明黄褐色土の塊が散在する土が堆積している。柱穴の埋土はP₁～P₃は炭化物や黄褐色浮石等を混入する黒褐色土が堆積し、P₄は上層に黒色シルト、下層が黄色シルトで、黄褐色浮石が混入する。

〔遺物〕

壁溝ほぼ中央付近の床面直上から実測可能土器2点と埋土内から40点の土器と、2点の石器が出土している。

土器 (第349図1～14、PL-180)

1～3が壁溝部の床面直上、他は埋土内からの出土であるが、埋土が薄層であることから、ほぼ床面直上からの出土ということになる。1は頸部下端から体部下位の一部を残す壺の破片である。推定される大きさは、体部最大径19cm、器高20cm内外と思われる。肩部から上位には縄文をもたず、2条の蛇行する並行沈線と1条の横位沈線によって、工字文的な文様を表出している。沈線は断面V形で、幅・深さとも1mm～1.5mmである。無文部は良く撫でられ、一部は光沢をもつ。肩部から下位は縄文を付すが、施文後に撫で調整が入っているため、不明瞭な部分が多い。縄文は原体LR斜～横回転による単節縄文である。胎土は良好であるが径1mm位の砂粒と石英粒が混じり、器厚は7mm位とほぼ一定している。外面の一部には煤の付着がある。2と3は口縁部～体部中位と体部下位～底部を残存する甕であるが、上部と下部が直接接合しない。大きさは口縁部径21cm、肩部径27cm、器高不明、底径7.5cmである。頸部下端に断面丸形で幅3～4mm、深さ1～2mmの沈線が全周し、沈線と口縁端部の間は無文で、横方向の撫でによって研磨され、軽く外湾し口唇は丸くおさまる。頸部沈線の低位3.5cmに最大径(肩部)をもち、沈線の下部若干に横方向の撫でがみられるものの、縄文は原体LRを用い、頸部は横回転、体部は斜回転による単節縄文である。体部は底部から直線的に外傾し、肩部は丸味をもちナデ肩である。底面には網状痕がある。胎土は比較的緻密であるが、砂粒や石英粒の混入がある。器厚は底部が5mm～6mmと薄く、体部は8mm位でほぼ一定している。外面の一部に煤の付着が



第349図 III g45住居跡(遺物)

ある。4～13は器面に縄文だけが施文された小破片で、縄文は全て単節である。14は無文土器である。これらの土器は、本遺跡の分類に従えば第X群1類に相当する。

石器 (第349図57・404、P L

57は壁溝内から出土した搔器である。表面に一部自然面を残す横長剥片を素材とし、その周縁部に裏面からの片面剝離をしている。長さ3.25cm、幅5.5cm、厚さ1.4cm、重さ31.56gの大きさがあり、石質は奥羽山地新第三系中新統産の流紋岩質細粒凝灰岩である。404は小型の円球状を示す円礫で、石弾の可能性をもつものである。大きさは径5.3cm×5.1cm、厚さ4.3cm、重さ55gで、石質は奥羽山地新第三系中新統産の白色細粒凝灰岩である。

〔遺構の時期〕

1・2の土器は弥生時代初葉～前葉に多くみられる工字文を付す土器の特徴をもつことから、本遺構は弥生時代前葉に位置づけられるであろう。

2. 遺構外の遺物

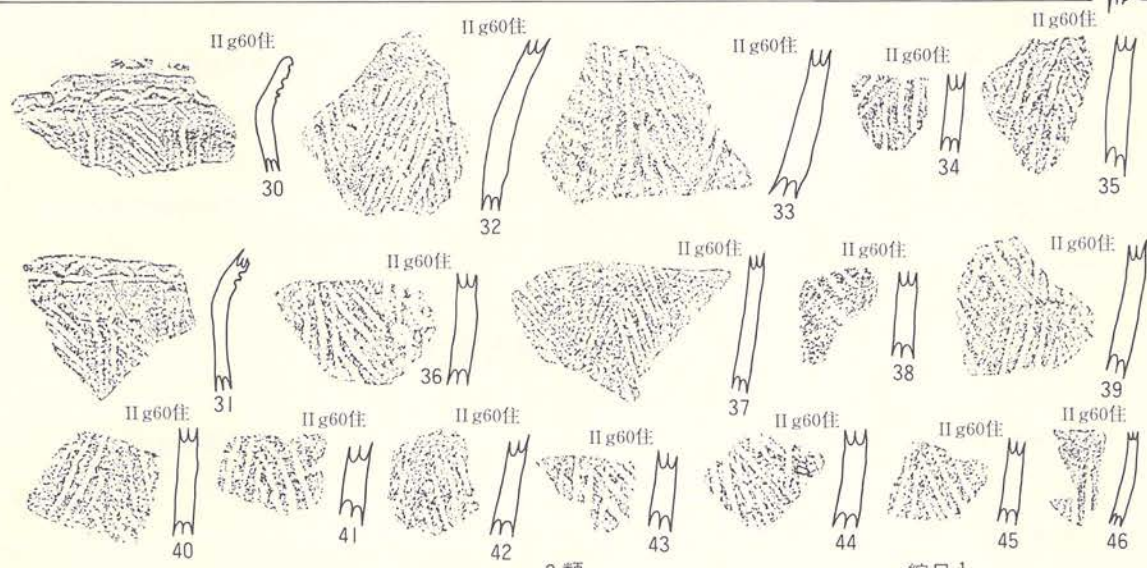
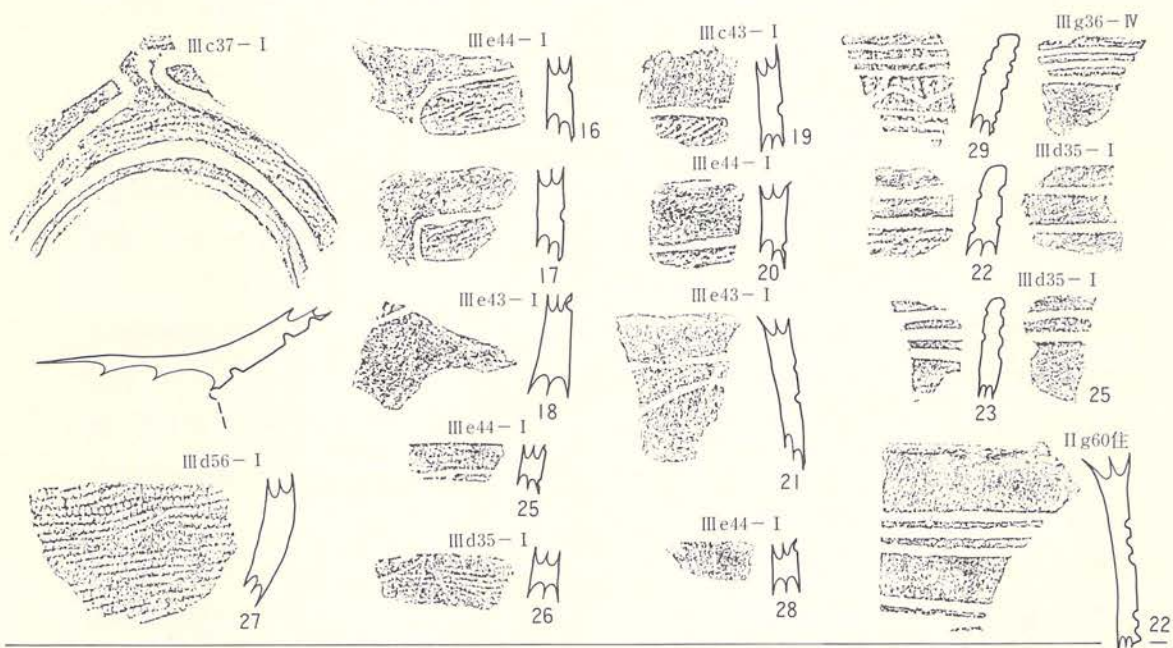
本遺跡から出土した遺物の中で明らかに弥生時代に属するものは、土器のみである。石器の中にも該当するものが含まれている可能性があるものの、土器も縄文時代の遺物と混在する形で出土していることから、弥生時代の石器として分離することは不可能である。

土器は、B区のIII 845住居跡付近とC区II 860住居跡の埋土上部からのみ出土している。B区出土の土器は破片数が21点で、その中から文様の明瞭な15点を掲載した。C区出土のものは17点で、全て掲載している。出土した土器を概観すると、B区出土のものはIII 845住居跡出土の土器と近似した特徴をもち、C区のそれはB区の土器と全く異なった様相を示している。

以上から、本遺跡出土の弥生土器は第X群として大別し、その中で両者を1類と2類に細分した。

1 類 (第350図、P L-180)

B区からのみ出土している。22・23・29は口縁部破片である。22は器表に縄文を付して沈線で区画し、縄文を磨消する。23は研磨された器表に沈線のみ文様である。29は縄文を付した器表に並行と鋸歯状の沈線で文様を付す。3点とも内面に2条か3条の口縁端部に並行する沈線を付す。また、22・29は波状口縁を示すらしい。16・17・25～27は体部の破片である。27は縄文のみを施文した破片であるが、ほかは縄文を付した後沈線で区画し、縄文を磨消するいわゆる磨消縄文手法による文様をもつ。小破片が多いので区画帯の全容が定かでないが、工字文的な区画と推定される。ほかは高坏か高台付鉢の破片である。15は高坏の坏部の破片であろう。



2類
第350図 遺構外の弥生土器

縄文の付された器面を断面V状の沈線で工字文的な区画をし、縄文を磨消している。無文部と内面は良く研磨されている。高台部分は剝落しており、不明である。18~20は磨消縄文手法によって施文された高台部の破片である。28もほぼ同様である。24は縄文を施文しない沈線だけを付した高台部の破片である。付されている縄文は原体R無節（17・26）、LR単節（15・16）、

R L単節(27)があるものの、回転方向が斜位の例が多い。胎土には比較的砂粒の混入が多く、ほかに金雲母の入るもの(15・19・20・24等)が多くある。

2 類 (第350図30~46、P L-180)

いずれも体部の縄文が同様な特徴をもつことから一括したが、胎土の調整と器厚、縄文施文の原体、器面の色調から30・31・37とほかの破片とは異なる様相を示していることから、前者と後者は個体が違い、掲載した16点は2個体分の破片が混在している可能性が大きい。

30・31は口縁部破片で、頸部に3条の並行沈線を全周させ、下位の沈線2条間に丸棒先端の斜位交互刺突による波状浮線文的な文様を付す。口縁端にも刻み的な文様を付している。体部の地文は原体LRを使用し、条間が3mm~4mmの間隔をもつ3~4条を単位とする縦方向の縄文が2cm~3cmの間で入り、その間は条間の離れた斜位縄文が充填されている。条間が離れていることから考えれば撚糸文的ではあるが、節の観察では単節縄文である。ただし、回転施文か押圧施文かは定かでない。器形は口縁部が大きく外反する小型の鉢であろう。胎土は緻密な生地に砂を混ぜた状況を示し、器厚2mm~3mmと薄く仕上げられ、焼成は非常に良好で色調は明褐色を示している。器表には若干黒斑があるものの、煤の付着はない。

他の破片も器表の縄文は同様の状況を示している。しかし、縦位の縄文は原体RL、斜位縄文は原体LRと、2種類の原体を併用している。前者より胎土の調整が粗く、さらに火山ガラス(微細黒曜石か)や石英粒が多い。器厚も4mm~5mmと若干厚手に作られ、焼成も前者より悪く色調は暗褐色~黒褐色を示している。器種は小型の鉢と推定され、器表に煤を付着する土器片が多い。

VI 古代の遺構と遺物

本遺跡の調査では、古代に属する遺構と遺物はD区のみから発見されている。遺構はカマドの袖部らしい痕跡が1基検出され、遺物はこの付近に集中して出土しており、おそらくここに住居跡があつて遺物はそれに伴うものと推定される。以下にその概要を記す。

I i 75住居跡

〔遺 構〕 (第351図、P L-120)

D区中央南端のグリッドI i 75に位置し、II a 75土坑の西北西6.5mで北西向き斜面の上位に立地している。他遺構との重複はない。

遺構の大半は床面まで削平され、カマドの基底部分が僅かに残存していた。したがって、全体

の平面形、規模は不明である。残存部から推定されるカマド本体の幅は1 m前後と考えられ、袖部は灰褐色または黒褐色シルトの積みあげで作られ、外側を土師器甕の破片で補強している。袖部の内側は焼成を受けて厚さ22cm位赤色変化していた。柱穴・壁溝・貯蔵穴といった内部施設は検出されていない。(Mi)

〔遺物〕 (第351図1～6、PL-180)

カマド内およびその周辺部から土師器の破片が48点出土している。須恵器の出土は皆無である。器種と個体数をみると、坏2点、甕6～7点に相当する破片が混在している。全体を復元した個体は1点もなく、全て破片からの復元実測である。

1・2はロクロ使用成形された内面非黒色処理の坏である。1は実測図の下端に軽い稜をもち、その上部は外面が肥厚によって外湾気味に外傾し、口唇は内削ぎ気味に丸くおさまる。内面に再調整痕はない。2は口縁部が軽く端反りし、端部が若干肥厚して口唇は丸くおさまる。内面の再調整痕はない。両者とも胎土に少量の砂粒が混入するが、全体的にみれば緻密な生地を使用している。焼成も良好で、色調は明黄褐色に近く黒斑はない。

ほかは甕であるが、ロクロ成形された3とロクロ非使用成形の4～6に分けられる。3は口縁部径が20cmと推定される比較的大型の部類に属する個体の破片で、全面に横方向のロクロ目を残し、口縁部は外方にく字状に外折され、上端はロクロで上方に挽きだされて縁带状となり、全体が受口状に近い形状を示す。胎土は緻密であるが、粗砂を多く混ぜて調整している。焼成は良く、色調は褐色部と灰褐色気味にくすんだ部分がある。他の3点にはロクロを使用した痕跡は観察されず、粘土紐巻きあげによる手捏ね成形と推定される。外面は縦や斜方向の粗い篋削り調整されている。内面は縦や横の撫でや磨き調整が入っている。器形は、底部から大きく外傾した体部下位は、内湾しながら立ちあがる様相を示している。胎土は先の3よりも粗粒の砂が多く混入し、ほかに石英粒も混じり、全体的に粗雑な生地を使用している。色調は3とほぼ同様である。

〔遺構の時期〕

出土した土師器の特徴は平安時代後期頃の様相に近い。よって、本遺構も平安後期頃に属するであろう。

VII 中世・近世の遺構と遺物

本遺跡の調査で検出された中世・近世の遺構には土葬墓10基、火葬墓4基、溝跡2条がある。時代的にみると、土葬墓が室町時代と江戸時代、火葬墓が室町時代と2時期含まれるが、本項では時代区分をしないで一括して記述することとする。

遺物は、墓の副葬品として出土したものが大半で、遺構外から出土した遺物は少量である。種類には貨幣、煙管、和鋏、毛抜、日本剃刀、火打ち金、和釘、柄鏡等の金属製品類、陶磁器類がある。

1. 土 葬 墓

A区—1基、B区—9基の10基があり、さらに、中世—6基、近世—4基が含まれている。

〈A 区〉

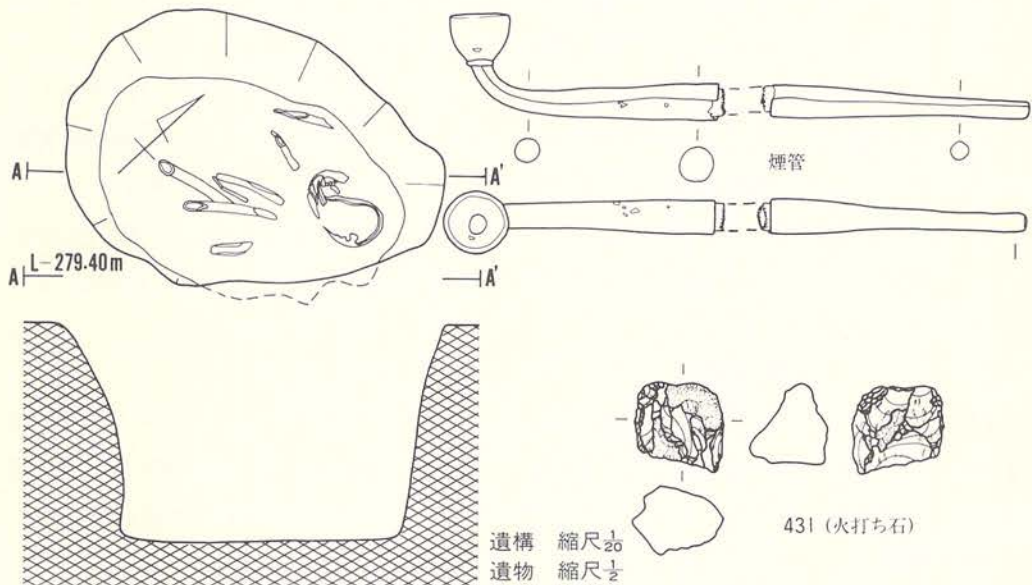
(1) III h 27土葬墓

〔遺 構〕 (第352図、P L—114)

A区頂部に近い北西斜面に位置し、土坑群の分布する南端にあっている。耕作土を除去した基本層序第V層上面に検出されるが、畑地造成による削平を受けている。

墓墳の平面形は北東から南西方向を長軸とする不整な楕円形をなし、長軸方向1.03m、短軸方向72cm、深さ64cmほどである。長軸方向はN—54.07°—Eである。壁の立ちあがりは、東側で湾曲しているほか上方にやや緩やかとなる。底部は西壁寄り若干凹んでいるが、全体に平坦である。

人骨は、墓墳の長軸方向に沿って検出される。遺存状況は良好でないが、北東寄りに頭骨、



第352図 (1) III h 27土葬墓

その南側に膝を折り曲げた下肢骨がみられ、屈葬の状態では埋葬されていたことが推測される。

埋土は基本層序第Ⅰ・Ⅱ層および第Ⅴ層の混土層である。上～下位層に著しい相違はみられず、全体に軟かくしまりが無い。

〔遺物〕 (第352図1・431、PL-181)

副葬品は、床面の南西側に出土する煙管(1)と火打ち石(431)とみられる玉髓片1点である。煙管は、径1.6cmの火受皿をもつ長さ7cmの頭部と長さ6.7cmの吸口部分であるが、いずれも羅宇の一部が残存している。前者には外径7mm、内径4mm、長さ2cm、後者には外径7mm、内径3.5mm、長さ2.6cmの竹管がそれぞれ1cm、1.5cmが挿入されている。火打ち石片は、先端に使用痕とみられる白濁した部分が認められる玉髓蛋白石片である。

〔遺構の時期〕

煙管の出土から近世の墓墳であろう。

〈B区〉

(2) Ie40土葬墓

〔遺構〕 (第353図、PL-115)

B区西突端の尾根最西端にあたる斜面上に位置し、三方は急斜面となる変換部分である。表土を除去して検出され、基本層序第Ⅵ層を掘り込んだ墓墳である。

平面形は不整な円形をなし、南北1.58m、東西1.5mである。壁は斜面となる東西西側の上方で緩やかとなり、底部は斜面に沿って西方に深い。検出面からの深さは1.14mである。底部の形状は南北1.17m、東西80cmほどの不整な隅丸長形状を呈する。

人骨は底部の北東に寄って検出され、頭位を北にした屈葬の状態では頭骨、下肢骨が出土している。人骨の四周には、長形状をなす褐色土の広がり部分が部分的に識別され、長さ80cm、幅40cmとなるが、棺の痕跡が明確でない。人骨中軸線による方位は、N-10°-Eである。

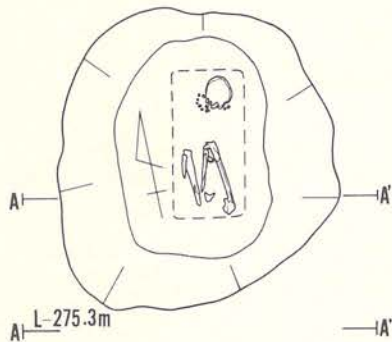
埋土は、全体に暗褐色シルト質土であり、基本層序第Ⅴ・Ⅵ層の混入が多い。上位では細分されない厚層となるが、下位層では人骨を伴うシルト質土が偏在し、中央寄りの立ちあがりには棺の腐蝕による変質とも考えられる。

〔遺物〕 (第353図1～3、PL-181)

遺物は、副葬品としての中国銭3点があり、頭骨の南寄り底面に密着して出土している。天禧通寶(1-1017年初鑄)、皇宋通寶(2-1039年初鑄)、永樂通寶(3-1408年初鑄)各1点であり、北宋銭2枚(1・2)と明銭1枚(3)が含まれる。いずれも遺存状況は良好である。

〔遺構の時期〕

出土した中国銭の種類から、中世の墓墳であろう。

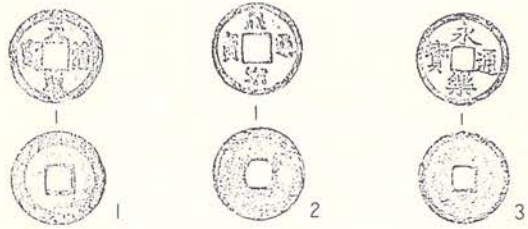
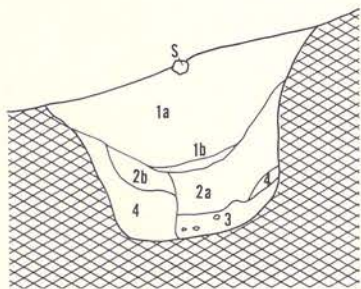


I e 40土葬墓

層位	色調	土性
1a	7.5YR 5/2 暗褐色	ブロック状の褐色土・黒色腐植質土混入。植生根多く柔らかい。
1b	7.5YR 5/2 *	1aより褐色土の混入多い。
2a	7.5YR 5/2 極暗褐色	シルト。
2b	7.5YR 5/2 *	褐色土の混入ある。
3	7.5YR 5/2 暗褐色	シルト。人骨含む。
4	7.5YR 5/2 明褐色	基本層序V・VI層。

遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$

遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$



第353図 (2) I e 40土葬墓

(3) I g 41土葬墓-1

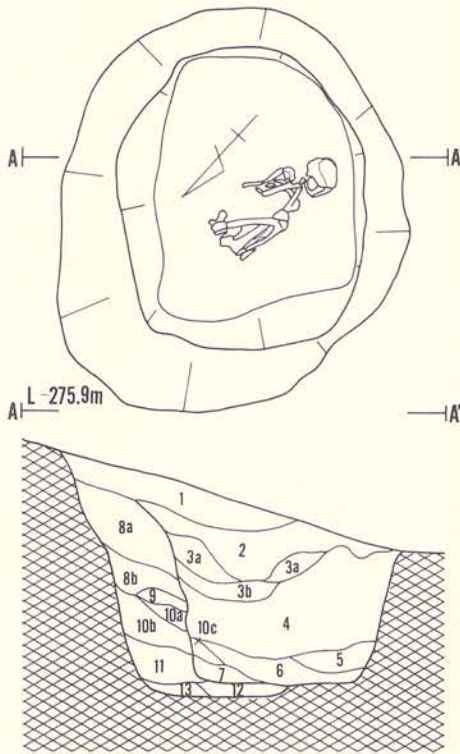
〔遺構〕 (第354図、P L-115)

B区突端部のI e 41土葬墓から南東4 mの南斜面に位置しており、重複する2墓のうちの新しい墓墳である。検出は表土除去後、さらに流入堆積する褐色混土層を除去して確認され、当初は1墓の墓墳とみなされた遺構である。

平面形は、北側でI g 41土葬墓-2と重複して未確認部分があるが、北西から南東方向にやや長い楕円形状をなし、長軸方向2.06m、短軸方向1.5mほどと推定される。壁の立ちあがりは斜面上位で広く緩やかとなり、検出面からの深さは1.3mである。底部は長軸方向1.23m、短軸方向88cmの不整な隅丸長方形形状をなし、平坦である。

人骨は頭位を南にしてほぼ南北方向に、膝を折り曲げた仰臥の状態出土し、ほとんど底面に接している。頭骨や下肢骨の一部に腐食している部分があるものの、全体に遺存状況は良好であり、成人男子の被葬者と思われる。人骨中軸線の方位はS-7.5°-Eである。

埋土は、墓墳が基本層序第V・VI層を掘り込んでいることからこれらの混土層が主体をなし、下位層では塊状に混入する。人骨を伴う最下層では硬くしまりが強い。しかし、棺跡等の痕跡は判然としない。



I g 41 土葬墓		土性
層位	色調	
1	7.5YR 5/6 褐色	にぶい黄褐色土ブロック状に混じる。
2	7.5YR 5/6 暗褐色	5cm以下の炭点在。
3a	7.5YR 5/6 にぶい褐色	にぶい橙色浮石点在。シラス混じる。
3b	*	シラス多く混じる。
4	7.5YR 5/6 *	1cm以下の炭・浮石点在。下層ほどシラスの混じり多い。
5	7.5YR 5/6 灰褐色	シラスの混じり多く、上層は橙色の強い。
6	7.5YR 5/6 明褐色	ブロック状の混土。
7	7.5YR 5/6 褐色	黒褐色シルト質土が、ブロック状に混じる。
8a	7.5YR 5/6 にぶい橙色	浮石点在し、シラスが一樣に混じる。
8b	*	シラスがブロック状に混じる。
9	7.5YR 5/6 にぶい褐色	明褐色シルト混じる。
10a	7.5YR 5/6 褐色	極暗褐色シルト混じる。
10b	*	黒褐色シルト質土混じる。
10c	*	10aより浮石多い。
11	7.5YR 5/6 *	シラス多く混じる。
12	*	しまりが強い。
13	7.5YR 5/6 にぶい橙色	汚れのあるシラス。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第354図 (3) I g 41 土葬墓 - 1

〔遺物〕

遺物は全く出土せず、副葬品は明らかでない。重複する I g 41 土葬墓 - 2 に伴う遺物も含まれていない。

〔遺構の時期〕

形状や埋葬方法の類似性から、中世の墓塚と推定される。

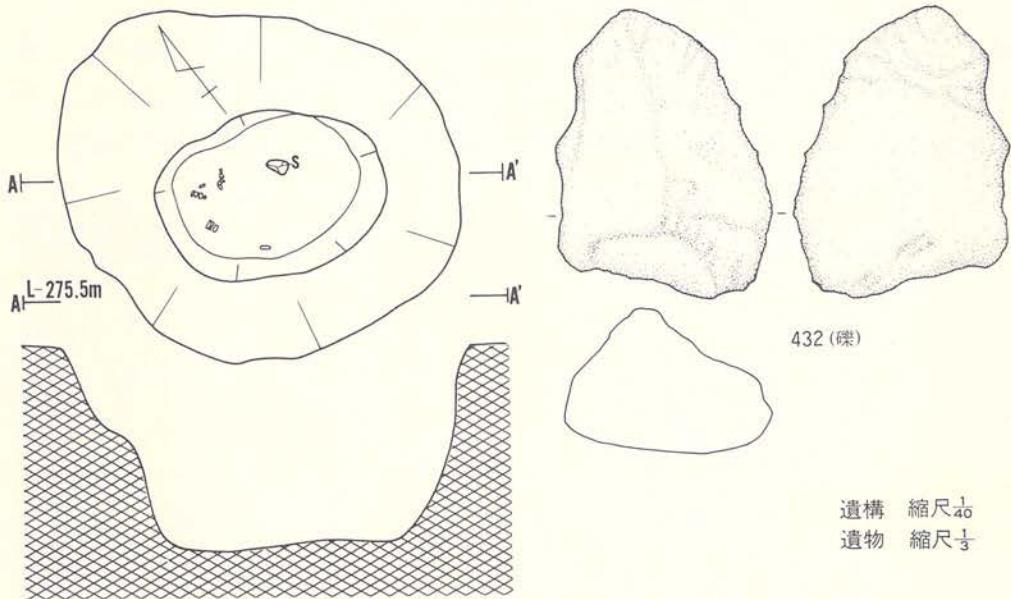
(4) I g 41 土葬墓 - 2

〔遺構〕 (第355図、P L-116)

I g 41 土葬墓 - 1 に先行する墓塚であり、それより僅か北側に寄って重複している。

平面形は、南側を I g 41 土葬墓 - 1 によって切られて不明であるが、底部の状況等によって北西から南東方向に長い楕円形をなすものと推定される。上端によって推計される規模は、長軸方向 2.1m、短軸方向 1.7m ほどである。長軸方向の中軸線方位は N-55.8°-W となる。

底部出土の歯骨片は、西側と北西側にあり、一部は I g 41 土葬墓 - 1 の人骨のさらに下位に位置している。さらに西側に出土する下顎骨とこれに付随する歯牙はキツネと思われるが、下顎骨の両端が損傷し、前方から 7 本残存する歯牙は、いずれも先端部を欠損している。咬痕面



第355図 (4) I g 41 土葬墓 - 2

の摩耗は少なく、生活年齢が低いと思われる。下顎骨の現存長は11.6cmである。

底部北寄りの同一面から出土する歯牙は、あわせて9本あり、同一個体の馬の臼歯と思われる。最大の長さは3.3cm、幅2.9cmあるが、損傷して細片となるものがあり、全体として遺存状態は不良である。

埋土は、I g 41 土葬墓 - 1 の場合と類似する褐色土が主体をなし、歯牙の出土層は非常に硬くしまっている。

〔遺物〕 (第355図、P L - 181)

先の下顎骨 (P L - 181) と馬の臼歯 (P L - 181) 以外は、底面のやや上位に亜角磔 (432) が伴うほか皆無である。

〔遺構の時期〕

重複関係から考えて、中世に属すると推定される。

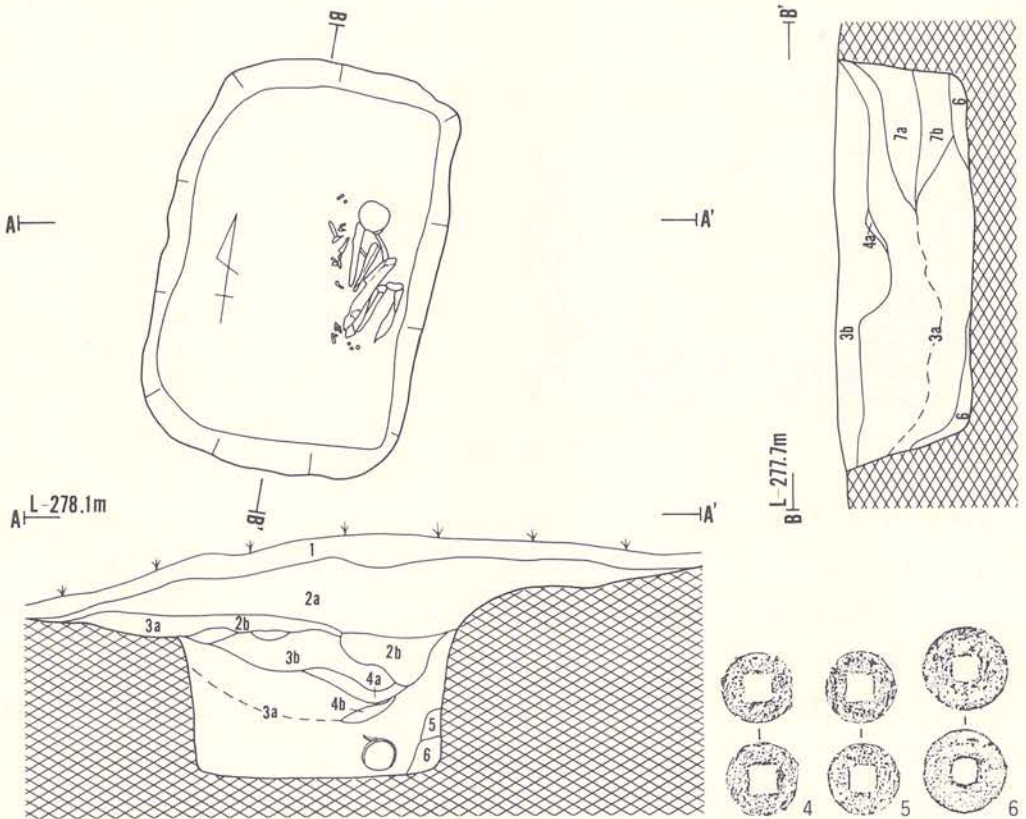
(5) I h 40 土葬墓

〔遺構〕 (第356図、P L - 116)

B区突端部のほぼ中央部にあたり、火葬墓群のすぐ西側に位置している。縄文時代の I e 40 住居跡のほぼ中央に重複して築かれる。現状では、尾根頂部に土盛り状の高まりがあり、塚を

なす墳墓であった可能性がある。盛土は表土を除去して確認され、中央部の墓壇はI e 40住居跡の埋土を切り、さらに、基本層序第V・VI層に及んでいる。

盛り土は南北方向が急斜面に続いて明らかでないが、東西方向では3.55mの範囲に及び、墓壇を広く被っていたものと推察される。高さは20cm以上とみられ、最大層厚は40cmである。すべて墓壇の掘り上げ土と思われる単一のシルト質混土によっており、特に墓碑などの存在した



I h 40土葬墓

層位	色	調	土性
1	7.5YR	5/6	暗褐色 表土。
2a	7.5YR	5/6	炭の微粒含み、植生根多い。
2b	7.5YR	5/6	シルト。
3a	7.5YR	5/6	褐色 黒色(7.5YR 5/6) 暗褐色(7.5YR 5/6)のブロック状混土。
3b			3aよりやや柔らかい。
4a	7.5YR	5/6	褐色 シルト。
4b			4aよりやや明るい。
5	7.5YR	5/6	明褐色 シルト。
6	7.5YR	5/6	黄褐色 褐色(7.5YR 5/6)の混土。
7a	7.5YR	5/6	黒褐色 橙色シルト質土ブロック状に混じる。
7b			7aよりやや明るい。

遺構 縮尺 1/40
遺物 縮尺 1/2

第356図 (5) I h 40土葬墓

痕跡は確認されていない。

盛土のほぼ中央に位置していたと思われる墓墳は、南北方向に長い隅丸の長方形をなす。南北2.2m、東西1.48mであり、長軸方向は南北の方位にほとんど一致している。壁の立ちあがり は全体に強く、上方でやや緩やかである。底部はほぼ平坦であり、墓墳掘り込み面からの深さは79cm、現地表面からは1.28mである。

人骨は、墓墳の東寄り中央部に頭位を北方にとり、膝を折り曲げて仰臥する状態で出土しており、中軸線方向はN-18°-Wである。遺存状況は一部腐食する部分もみられるが、全体に極めて良好である。

埋土は、中位層に褐色シルト質土が不整に入る部分もみられるが、ほとんどが基本層序V層を主とする混土層に占められている。人骨の上層部分が陥没状をなす点では木棺の存在も推測できるが、底部を含めて明確に識別できる痕跡は認められていない。

〔遺物〕 (第356図4～6、PL-181)

遺物は、副葬品としての貨幣10点がある。頭部北東寄りに3点、腹部付近に3点、足元に3点、墓墳の中央よりやや西側に1点である。いずれも底面直上に出土している。足元の3点は細片となる洪武通寶(1368年初鑄)であるが、他は無銘銭である。中央部の2点と頭部付近の3点は穿が方形を示す薄手の鐙銭である。

ほかに、頭骨上端などの埋土中から縄文土器の破片が出土しているが、重複するI e 40住居跡等に関係する遺物である。

〔遺構の時期〕

出土した貨幣の時期と墓墳の形や埋葬方法の類似性から中世に属すると推定される。

(6) I i 41土葬墓

〔遺構〕 (第357図、PL-117)

I h 40土葬墓から南側1.7mに位置し、突端部中央の南斜面上方にあたる。表土を除去し、さらに褐色土を剥いで検出される基本層序V・VI層を切り込んだ墓である。

墓墳は、東側に木根による攪乱があるものの、南西から北東方向に長い楕円形状をなし、長軸方向1.42m、短軸方向1.16mである。検出面からの深さは54cmであり、墓墳中では最も浅い。底部は不整な隅丸長方形形状をなし、底面はほとんど平坦をなす。底部の長軸方向は1.18m、短軸方向80cmであり、長軸方向はN-39.5°-Eとなる。

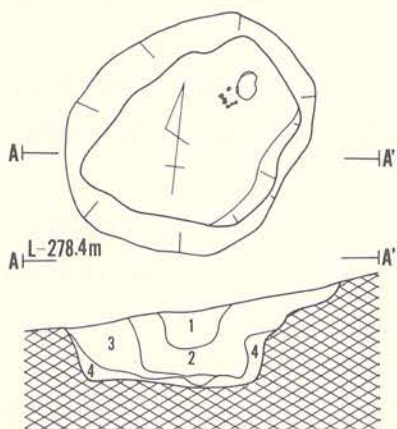
人骨は長軸方向のほぼ中央に埋葬されていたと思われるが、頭骨が北東寄りに残存するのみであり、遺存状況は不良である。歯牙によって成人男子の被葬者とみられる。

埋土は、基本層序第V・VI層の混土層であり、人骨を伴う最下層では他の墓墳の場合と同様

にシラスを含み、しまりの強い特徴がみられる。

〔遺物〕

遺物は、人骨のほかには皆無である。



〔遺構の時期〕

遺物の出土がないことから定かでないが、墓墳の形状や埋葬方法の類似性からみて、中世の墓墳と推定される。

I i 41土葬墓		
層位	色調	土性
1	7.5YR 5/2 黒褐色	5mm以下の炭が点在。
2	7.5YR 5/2 暗褐色	1cm以下の炭混じる。
3	7.5YR 5/2 *	黄橙色シルト質土の混じりある。
4	7.5YR 5/2 にぶい橙色	シラス混じる。

縮尺 $\frac{1}{40}$

第357図 (6) I i 41土葬墓

(7) II b 41土墳

〔遺構〕 (第358図、P L-117)

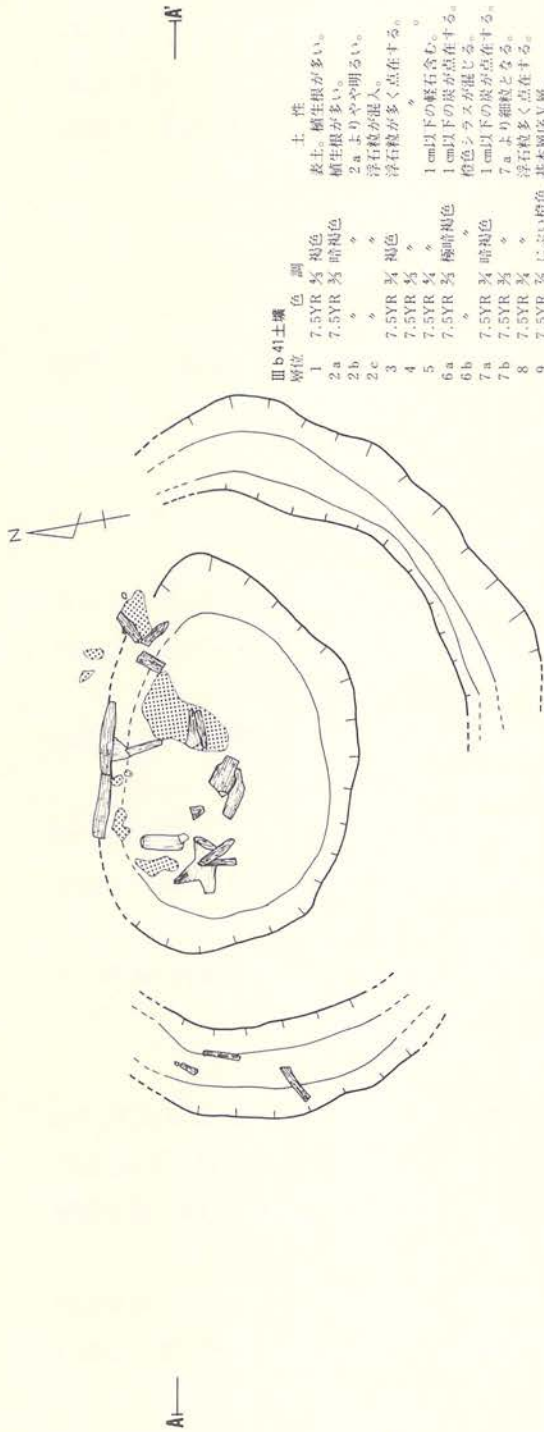
墳墓として特定できる資料は検出されていないが、火葬墓等に密接な関係のある土墳と思われることから、ここに含めるものである。

B区突端部の基部にあたるII b 40溝跡の南西端に重複し、南西斜面の裾部に位置している。II b 40溝跡の埋土を除去中に検出され、基本層序第V・VI層を掘り込む周溝をもつ土墳である。

II b 40溝跡に重複するため、全体の規模・形状は明確でないが、平面形は南々東から北々西方向に長い楕円形状と推定される。周溝からは、長軸方向3.82m以上、短軸方向3.1m以上と推定される。土坑の長軸方向による方位は、N-44°-Wとなり、周溝の検出面から土墳底面までの深さは、最大82cmである。

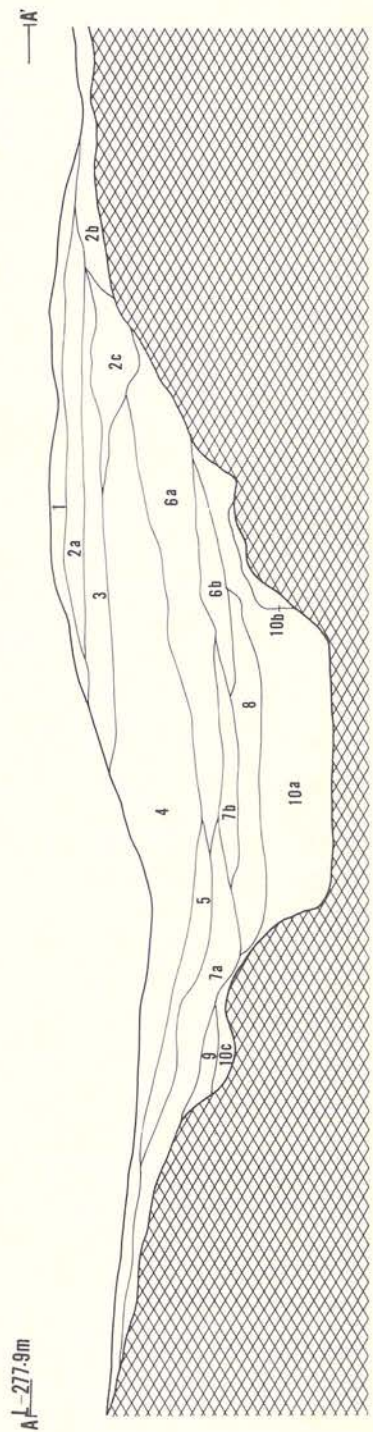
周溝は、土墳寄りの上端が特に南側で崩壊している可能性もあるが、上幅36cm~54cm、底部幅6cm~24cmであり、底部幅に広狭があってやや不整である。壁の立ちあがりは全体に緩やかな部分が多い。

土墳は周溝のほぼ中央部に位置し、長軸方向2.12m、短軸方向1.45m以上の規模である。壁の立ちあがりは上方で緩やかとなるが、下方ではやや勾配が強い。底部は平坦となり、ほとんど水平に近い。



- III b41土壌
- | 層位 | 色調 | 土性 |
|-----|---------------|----------------------|
| 1 | 7.5YR 弱 褐色 | 表土。植生根が多い。 |
| 2a | 7.5YR 弱 暗褐色 | 植生根が多い。 |
| 2b | 〃 | 2aよりやや明るい。 |
| 2c | 〃 | 浮石粒が混入。 |
| 3 | 7.5YR 弱 褐色 | 浮石粒が多く点在する。 |
| 4 | 7.5YR 弱 〃 | 〃 |
| 5 | 7.5YR 弱 極暗褐色 | 1cm以下の軽石含む。 |
| 6a | 〃 | 1cm以下の炭が点在する。 |
| 6b | 〃 | 褐色シラスが混入する。 |
| 7a | 7.5YR 弱 暗褐色 | 1cm以下の炭が点在する。 |
| 7b | 7.5YR 弱 〃 | 7aより細粒となる。 |
| 8 | 7.5YR 弱 〃 | 浮石粒多く点在する。 |
| 9 | 7.5YR 弱 に近い褐色 | 基本別子V層。 |
| 10a | 7.5YR 弱 暗褐色 | 1~5cm以上の炭化材や焼土が混入する。 |
| 10b | 〃 | 10aよりシラスが多い。 |
| 10c | 7.5YR 弱 暗褐色 | 炭を含まず、シラスが多い。 |

縮尺 1:40



第358図 (7)II b41土壌

埋土は周溝から土壌までの大部分が焼土や炭化材の混在する基本層序第VI層の混土層である。焼土は土壌の埋土全体に広く分布し、埋土のやや下位に多い焼土の最大は長さ50cm、幅24cm、層厚2～3cmの平坦な広がりを示す。炭化材は、周溝の埋土上部も含めてほとんどがクリ・ケヤキ等の材であり、焼土に混じって不定方向に残存するものが含まれる。最大は長さ70cmにも及び、内部がやや褐色を呈する焼成不良のものがみられる。しかし、焼土との関係を明確にできる出土状況は認められない。

〔遺物〕

埋土中に含まれる炭化材等を除いて皆無である。

〔遺構の時期〕

明確にする資料はないが、この付近のほかの墓塚との対比から考えて、中世に属すると推測される。

(8) II i 38土葬墓 (旧II i 38土坑-3)

〔遺構〕 (第359図、P L-118)

B区尾根頂上部の土葬墓3基のうち、頂部北側の中央に位置する墓塚である。西側2.5mにII i 39土葬墓が位置している。耕作土を除去して削平された基本層序第V層上面に検出され、II i 38土坑-1の東壁を切って築かれている。

墓塚の平面形は、南北方向に僅かに長い円形を呈し、ほぼ円筒状に近い断面形となる。長軸方向の長さ94cm、短軸方向80cm、深さ83cmである。底部はやや狭まりほとんど平坦となる。

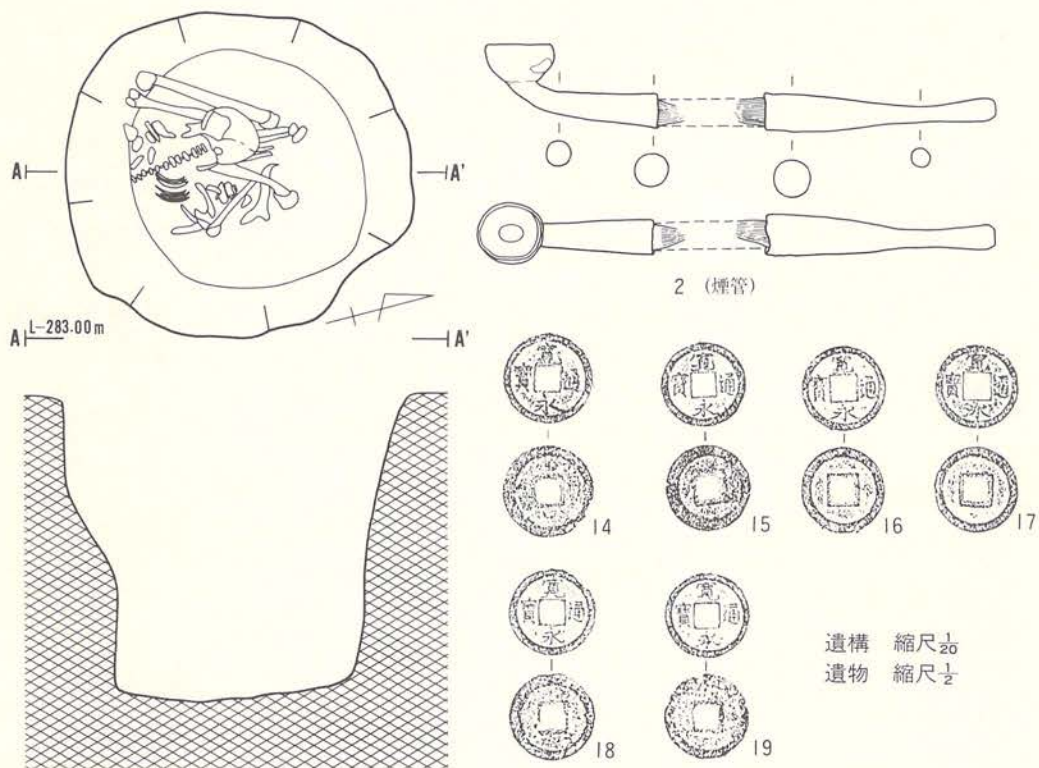
人骨は底面のやや南寄りに位置し、一部は壁に沿って検出されている。頭蓋骨は腐朽して伏臥の状態にあり、下肢骨は膝を折り曲げている。全体に遺存状況は良好であり、蹲踞の形の座棺として埋葬されていることが推定される。

埋土はいずれも墓塚の掘り上げ土とみられる黒褐色土と黄橙色シルト質土の混土であり、上～下位層に著しい相違は認められない。

〔遺物〕 (第359図2・14～19、P L-182)

遺物は人骨にともなって出土する副葬品であり、煙管1点と貨幣7点がある。煙管は径1.7cmの火受け皿をもつ長さ4.6cmの雁首部分と長さ6cmの吸口部分であり、それぞれ長さ3cm、外径5mm、内径1.5mmと長さ2.9cm、外径6.5mm、内径3.5mmの羅字が残存する。吸口の羅字接合部分には、竹管に巻いた和紙が残存している。

貨幣は、寛永通寶6点である。いずれも新寛永銭であり、18・19は秋田藩で元文三年から10年間(1738年～1747年)鑄造された銭である。14・16は俗に不旧手と呼ばれる部類で、享保11年(1726年)以降延宝年間まで鑄造されている。



第359図 (8)II i 38土葬墓

〔遺構の時期〕

出土した貨幣の鑄造時期から考えると、江戸時代後期の墓墳と推定される。

(9) II i 39土葬墓 (旧II i 39土坑-2)

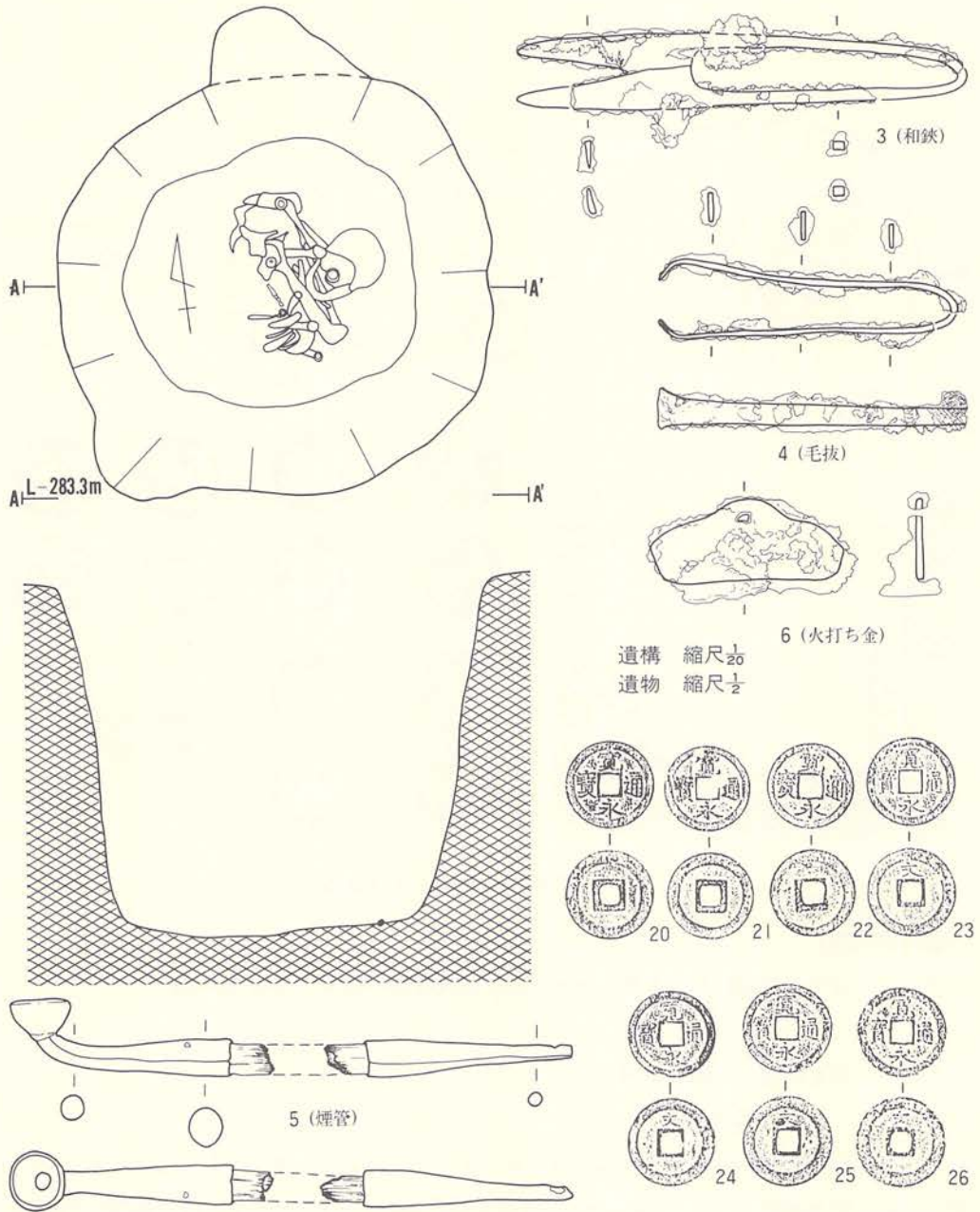
〔遺 構〕 (第360図、P L-118)

B区中央部の頂部に位置する3墓□のうち、もっとも西側に位置し、縄文時代のII i 39住居跡の北西を切る墓墳である。北東5.6mにはII i 38土葬墓がある。検出面は他の墓墳と同様耕作土を除去した基本層序第V層の上面である。

墓墳は直径1.2mほどの円形を呈し、3基の墓墳中では最大である。断面は円筒形をなし、底部はほぼ平坦である。検出面からの深さは、1.04mである。

人骨は、中央部から東寄りに位置し、頭蓋骨等全体に遺存状況は良好である。

埋土は明褐色、または黄褐色シルト質土を主体とする混土であり、人骨を伴う下位層は黒色シルト質土で軟らかい。しかし、木棺の痕跡は確認されていない。



第360図 (9)II i 39土葬墓

〔遺物〕 (第360図 3～6・20～26、P L-183)

遺物は人骨に伴って出土した副葬品であり、煙管・和鉄・毛抜き・火打ち金各1点と貨幣7点がある。

煙管は径1.6cmの火受皿をもつ長さ6.1cmの雁道部分と長さ5.8cmの吸口部分である。それぞれ長さ2.4cm、2.9cmの羅字が残存している。羅字の外径は7mm～7.5mm、内径4mmであり、接合部

は1.2cm～1.5cm挿入されている。銅管には雁首及び合せ目に渡金がみられる。

鉄製品はいずれも欠損して全体の形状が明確ではないが、長さに12cm以上の和鋏、長さ8.7cm以上の毛抜きと、和鋏に密着した小型の火打ち金とみられる山形状の薄板があり、周囲には麻布状の布目がみられる。この内側には青銅色の錆が付着しており、古銭とともに布に被われていたことが知られる。

貨幣はいずれも寛永通寶である。そのうち、3点は所謂古寛永銭（20～22）であり、他の4点は背文に「文」をもつ寛文8年（1668年）に江戸幕府が鑄造した銭である。

〔遺構の時期〕

出土した貨幣が全て江戸時代初期の鑄造から考えて、江戸時代前期に位置づけられる可能性がある。

(10) II j 38土葬墓 （旧II i 38土坑-1）

〔遺 構〕 （第361図、P L-119）

B区中央部の墓壇のうち、最も東側に寄って位置する墓壇である。耕作土を除去して基本層序第V層上面に検出される。

墓壇の平面形は、直径1.1mほどの円形をなし、断面形はほぼ円筒形に近い。深さは、98cmである。底部は径70cmをはかり、ほとんど平坦である。

人骨は中央部から西寄りに位置し、頭骨は伏臥（側臥？）の状態で検出されている。腐朽している部分もみられるが、全体に遺存状況は良好である。

埋土は明褐色、または黄褐色シルト質土が小塊状に混じり、上～下位層の著しい相違は認められない。

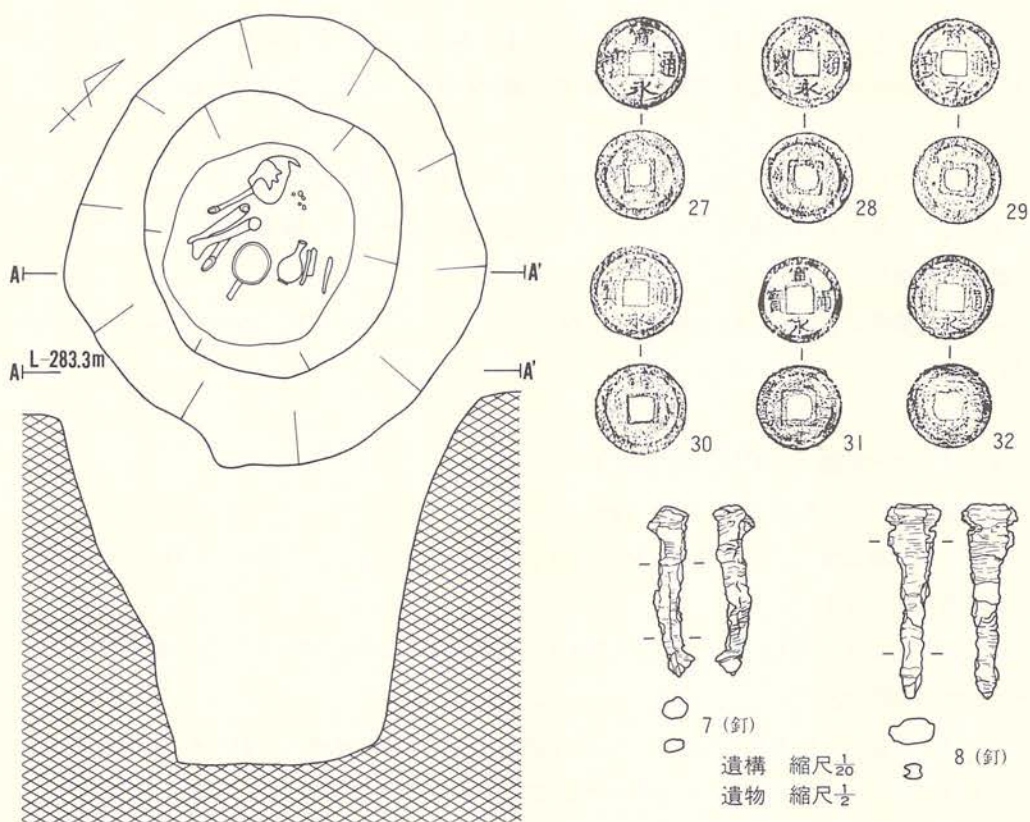
〔遺 物〕 （第361・362図7～10・27～32・A、P L-182）

遺物には人骨の上位と下位の埋土中から出土する木質の付着する鉄釘2点（7・8）がある。頭部は共にL字形に折り曲げられているとみられ、長さは7-4.5cm、8-5.2cmである。木質部は釘に直交して付着しており、繊維の密度から厚さ1.2cm～1.5cmの側板に打ち込まれていたことが知られる。

副葬品では、柄付銅鏡（9）・剃刀（10）・徳利（A）各1点と貨幣6点（27～32）がある。底面の中央部及び人骨に混じって出土するものである。

柄鏡1面は、直径8.8cm、厚さ2mm、柄の長さ7.1cm、幅1.5cm、厚さ1.2cmを測り、両面に若干の青銅錆が付着しているが、腐食はほとんどない。裏面には外縁2.5mmをおいて御簾に葵文が浮彫りされ、「光長作」の銘がある。重量は68gである。

剃刀は先端を欠損し、全体に鉄溜が付着している。両区造りの刃部は、刃幅2.1cmほどとみら

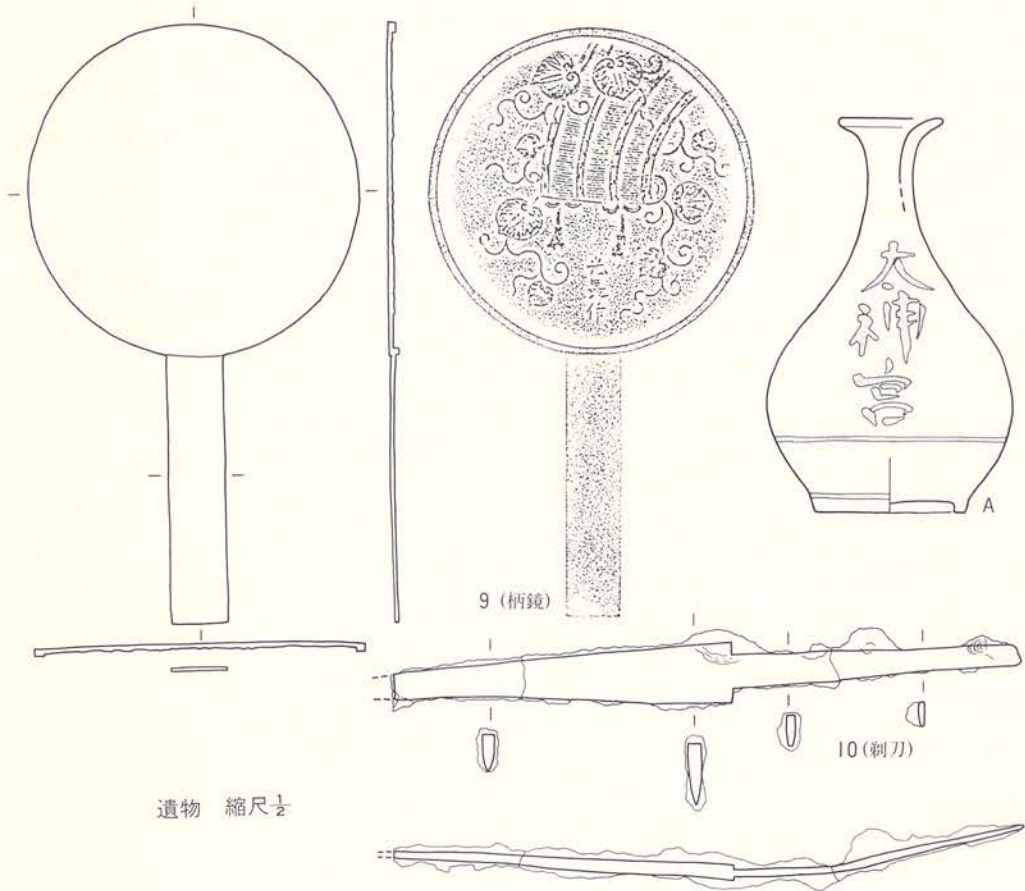


第361図 (10)II j 38土葬墓(1)

れる。柄部は折り曲げられているが、長さ7.8cmと推計される。柄頭に向かって幅が狭まり、次第に薄くなる。

徳利1点は、染付の御神酒徳利である。口径2.8cm、高台径4cm、器高10.6cmの小型である。口縁部は朝顔状に外反し、頸部の中央部が最も狭まる。体部から腰部にかけて最大径となり、高台脇が窄んでいる。高台は低く、畳付幅がやや不整に削られる。施釉は畳付を除いて全面に施され、やや灰白がかった白色をなす。頸部～体部のロクロ成形痕に沿って厚薄がある。体部に縦書きの「太神宮」が筆書きされ、腰部と高台脇に条線が巡る。いずれも呉須の発色は、灰色がかって一様でない。容量は95ccほどである。

人骨に伴って出土する貨幣6点は、いずれも寛永通寶である。うち3点(27～29)は、所謂古寛永銭と呼称される寛永年間(1624年～1644年)に铸造された銭である。30は元文期(1736年～1741年)铸造の新寛永銭である。



第362図 (10)II j 38土葬墓(2)

〔遺構の時期〕

出土した貨幣に元文期に鑄造されたものが含まれていることから、江戸後期に属する墓壙と推測される。

2、火 葬 墓

B区西突端部の中央部から4基検出されている。

(1) I i 39火葬墓

〔遺 構〕 (第363図、P L-120)

B区突端部のほぼ中央に集中する4基の火葬墓のうち、もっとも北西に位置している。表土を除去して検出されるが、北側の急斜面に続く僅かな平坦地の北端にあたり、遺存状況は良好でない。

平面形は、長軸を北東から南西方向にとる楕円形をなし、墓壙の規模は長軸方向の長さ83cm、短軸方向76cmである。北東端は流出崩壊している。壁はやゝ緩やかになって底部に続き、南端における壁高は22cmほどである。底部は平坦となるが、草木根による凹凸がみられる。

検出面から径1cm以下の炭が充満し、白色微粒状をなす火葬骨が点在してみられる。下位層では基本層序第V層が僅かに混じる。炭は広葉樹によるものが含まれるが、細片が多く樹種を確認できるまでにいたっていない。



〔遺物〕

細粒となる人骨を除いて出土していない。

〔遺構の時期〕

同種の他遺構出土の遺物から考えて、中世に属する遺構と推定される。

(2) I i 40火葬墓-1

〔遺構〕 (第364図、P L-120)

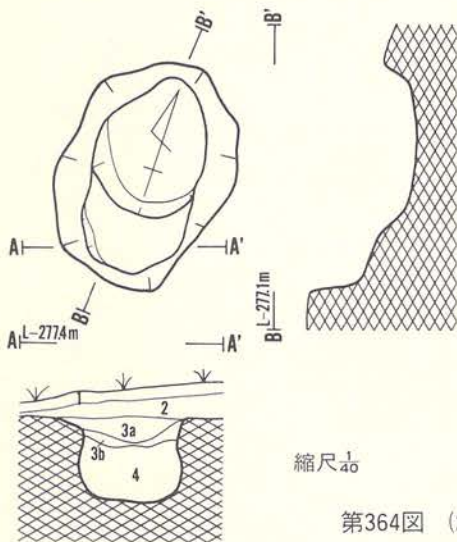
I i 39火葬墓の南側に位置し、南東側にはI i 40火葬墓-2がある。尾根頂部から北側斜面にかゝる部分にあたり、表土を除去して検出される。

平面形は、北々東から南々西方向に長い楕円形状をなし、墓壙の規模は長軸方向1.37m、短軸方向95cmである。深さは検出面から57cmであるが、底部は南側が浅く、北側はやゝ舟底状となる。段状をなす点で重複する2遺構の可能性もあるが、北側では黒色の炭が充満し、明らかな切合い関係は認められない。

埋土は、上位層にやゝ大きい木炭が多く、下位層ではやゝ細くなる傾向がある。しかし、人骨片の混在状況など著しい相違は認められない。

〔遺物〕 (P L-182)

全体に散在する火葬骨の細片と微粒が木炭層に混じり、前者には頭骨や肩甲骨等の小片が含



第364図 (2) I i 40火葬墓-1

まれる。また、南端の検出面に近い木炭中から二次火熱を受けて脆くなった永楽通寶（1408年初鑄）とみられる貨幣が1点出土している。

〔遺構の時期〕

出土した貨幣の時期から、中世に属する遺構と考えられる。

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/4 暗褐色	表土。1 cm以下の炭点在。
2	7.5YR 3/4 黒褐色	シルト。植生根多い。
3 a	〃	〃 微粒の炭含む。
3 b	〃	〃 5 cm以下の炭。浮石粒を少量含む。
4	7.5YR 3/4 黒色	腐植質。1 cm以下の炭。骨片が点在する。

(3) I i 40火葬墓-2

〔遺構〕 (第365図、P L-119)

I i 40火葬墓-1の南東1 mにあり、東にはI j 40火葬墓が並列している。尾根頂部のやゝ平坦をなす中央部にあたる。

長軸方向を北々西から南々東にとる長円形状をなし、墓壇の規模は長軸方向1.18m、短軸方向76cmである。壁の立ちあがり北側がやゝ緩やかとなり、壁高は南端で27cmとなる。底部は舟底状をなし、平坦である。

埋土は、検出面から若干の褐色シルト質土が混在する木炭層に被われ、中位層以下はほとんど木炭層で占められている。長さ10cm、径2 cmほどの広葉樹の枝炭も含まれ、横方向に多くみられるが、細片となって樹種は明確でない。

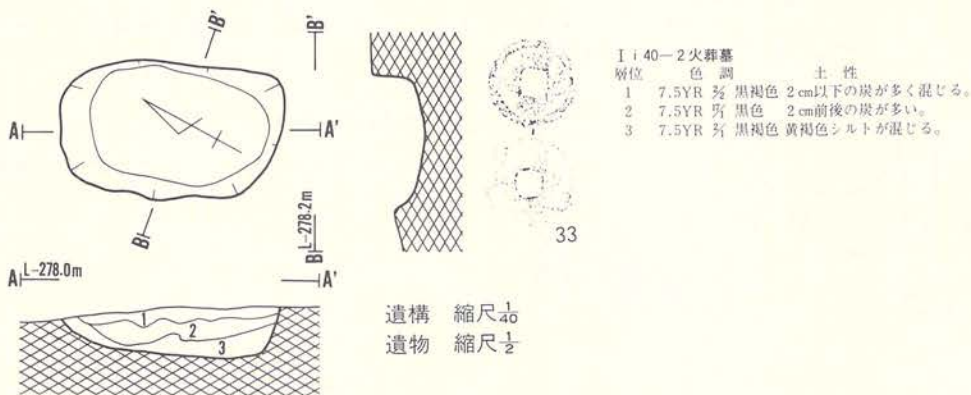
〔遺物〕 (第365図33、P L-183)

検出面直下の木炭層の上位層から古銭が1点出土しているほか、炭に混在して火葬骨の細片が点在して認められる。

貨幣は、二次火熱をうけて歪み半欠した破片であり、銭文は判明しない。外径の大きさからは、永楽通寶等が推測される。

〔遺構の時期〕

出土した貨幣や類似する他遺構との対比から、中世に属すると推定される。



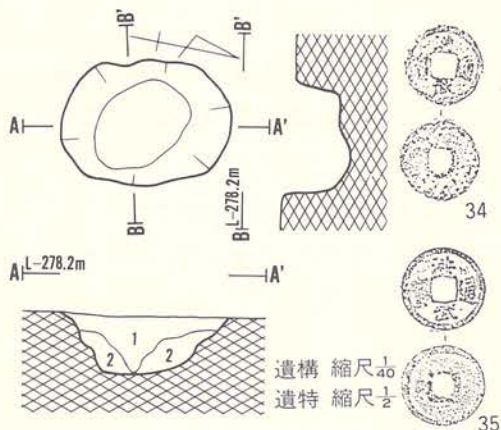
第365図 (3) I i 40火葬墓-2

(4) I j 40火葬墓

〔遺 構〕 (第366図、P L-120)

I i 40火葬墓-2の東側45cmに並列し、4基の火葬墓のうちでは最も南東寄りに位置する。平面形は、南北方向にやゝ長い楕円形状をなし、長軸方向90cm、短軸方向65cm、深さ36cmである。壁の立ちあがりは不整な部分が多く、底部は凹凸があるものの全体に舟底状に近い。

検出面から細かい木炭層が充満し、最下層に基本層序第V層の混入が認められる。いずれも人骨の細片がある。木炭は他の火葬墓の場合と同様に破片が多く、クリ、フジツル、その他雑木の炭が乱雑に堆積している。



I j 40火葬墓
 層位 色 調 土 性
 1 7.5YR ㊦ 黒色 1.5cmほどの炭が多く、人骨細片混じる。
 2 7.5YR ㊦ 黒褐色 黄褐色シルトが混じる。

第366図 (4) I j 40火葬墓

〔遺 物〕 (第366図34・35、P L-183)

検出面直下の北端から固結した径5cmほどの炭化穀類の小塊と東西両側から古銭3点が出土している。炭化穀類は米と思われる。粳が確認されないことや小塊の表面が不定方向にあるものの断面では一定方向をなす部分があり、間隔の小さいことなどから加工されていることが考えられる。計測できる米粒は、長さ4.2mm~5.5mm、幅1.8mm~2.8mm、厚さ1.7mm~2mmである。米以外の異種は、肉眼では明らかでない。

貨幣3点はいずれも二次火熱を受けて脆く、北側で斜方向に立って検出された1点は破損している。外径の大きさから洪武通寶(1368年初

铸)とみられる。他の2点(34・35)はほぼ水平になって検出された洪武通寶である。

第2表 I j 40火葬墓出土の米粒計測表

No.	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ×幅	No.	長さ	幅	厚さ	長さ/幅	長さ×幅
1	4.5 ^{mm}	1.8 ^{mm}	— ^{mm}	2.50	8.10	7	— ^{mm}	1.9 ^{mm}	1.7 ^{mm}	—	—
2	4.2	1.8	1.7	2.33	2.56	8	4.5	2.1	1.8	2.14	9.45
3	4.8	2.1	—	2.29	10.08	9	4.5	2.8	2.0	1.61	12.60
4	5.5	2.0	—	2.75	11.00	10	4.6	2.8	—	1.64	12.88
5	4.2	2.6	—	1.62	10.92	11	4.5	2.2	1.9	2.05	9.90
6	5.0	2.2	—	2.27	11.00	平均	4.6	2.2	1.8	2.09	10.12

〔遺構の時期〕

出土した貨幣の時期から考えて、中世に属する遺構と推測される。

3、溝 跡

B区西突端部から2条検出されている。

(1) I d 40溝跡

〔遺 構〕 (第367図、P L-121)

B区突端部最西端の斜面裾部に表土を除去して検出される。斜面の裾に沿って東に延びる農道の上に位置し、両端は農道及び斜面によって不明となる。

溝方向は高位の南東から北西方向に走り、確認された長さは5.6m、上端幅25cm～35cm、底部幅7cm～14cmである。深さは10cm内外で全体に不整である。両端の比高差は1.54mである。

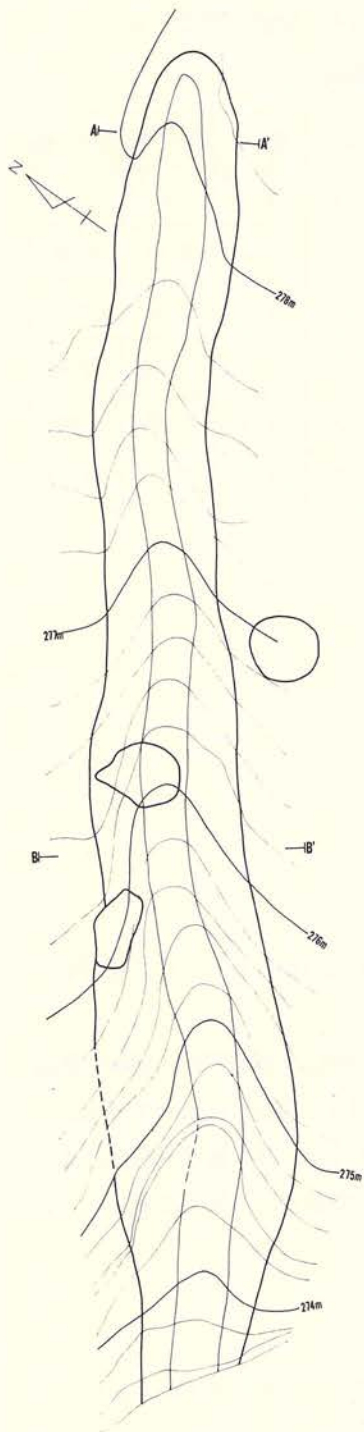
埋土は、南東側の中位層ににぶい褐色の砂質シルトがみられるほか、基本層序第VI層の混土である。底部では部分的に砂の堆積があるものの、大部分は上方斜面からの流入である。

〔遺 物〕

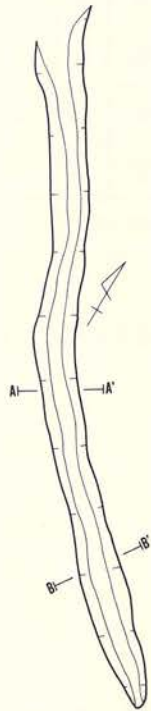
出土していない。

〔遺構の時期〕

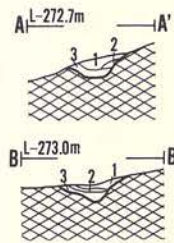
性格や時期は伴出遺物もなく明らかでない。水道管敷設に重複する点からはこれらよりも古く、現存する農道以前の遺構ではある。



(2) II a38溝跡

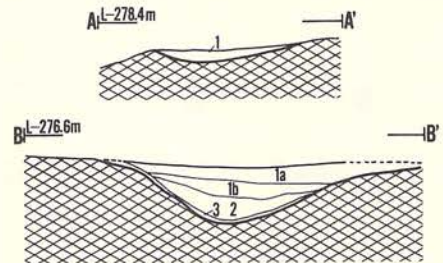


(1) I d40溝跡



層位	色調	土性
1		にぶい褐色の砂質シルト。
2		にぶい褐色の砂質シルトの堆積がある。
3		浅くなって消滅。

(1) I d40溝跡



層位	色調	土性
1 a	7.5YR 3/4 暗褐色	径2~3cmの炭混じる。
1 b	々 々	橙色シルト質土がブロック状混じる。
2	7.5YR 3/4 極暗褐色	浮石含む。
3	7.5YR 3/4 褐色	橙色シルトが混じる。

(2) II a38溝跡

縮尺 I d40溝跡 $\frac{1}{60}$
II a38溝跡 $\frac{1}{120}$

第367図 溝跡

(2) II a 42溝跡 (旧II c 38溝跡)

〔遺構〕 (第367図、P L-121)

B区西端尾根の基部に耕作土を除去して検出される。尾根頂部から斜面を僅かに蛇行しながら下り、裾部の畑地造成により削平されて不明となる。尾根頂部から斜面上方では基本層序第V層、下方では同VI層を切って開削されている。

溝方向は頂部の北東方向から南西方向に走り、確認された長さは21.2m、上端幅は1.8m～2.3mであるが、性格不明のII b 41土壇に重複する裾部では3 m前後に広がっている。底部幅は50cm～80cmとなり、ほとんど変化がない。断面形はいずれもなだらかな傾斜をなし、頂部では僅かな凹み状を呈している。両端の底部における比高差は4.4mであり、ほぼ斜面の傾斜に沿って下降している。

埋土は、斜面土位では基本層序第V層の混在する暗褐色シルト質土であり、上位層については東側からの堆積が厚く、耕作に伴う搬入も推測される。斜面下位では、底部に砂粒の残存する部分が多い。しかし、II b 41土壇に重複する部分では上位層にも砂粒が薄層をなして狭在し、埋没後の流水が認められる。また、中位層では土壇の埋土上に堆積し、厚層をなす褐色土は斜面上位と同様である。

重複する遺構には、II b 41土壇、II c 40土坑-1・II c 40土坑-2がある。II b 41土壇とII c 40土坑-1は溝跡に先行する遺構であり、後者は縄文時代の土坑である。II c 40土坑-2は、溝跡の埋土を切っていることから埋没途上、または埋没以後の遺構と認められる。

〔遺物〕

埋土内から縄文土器の破片が出土している。

〔遺構の時期〕

性格や時期については、資料を欠いているため明確でない。遺構の配置からは、特に土葬墓や火葬墓の集中する突端部を画する位置にあって、墓域と関係する溝である可能性もあげられる。このことは、溝跡以西が畑地造成を受けていないことに符合する点であり、墳墓の構築に相前後して中世に開削されていることも考えられるが明確でない。

4、遺構外及びその他の遺物

陶器片5点、煙管の吸口1点、貨幣2点の計8点が出土している。なお、墓壇の精査時に墓壇の埋土内から出土した縄文土器も便宜的に本項で記述することにする。

(1) 墓壇内出土の縄文土器 (第368図。P L-184)

墓壇内から18点の縄文土器が出土している。その内訳は I g 41土葬墓- 4点、I h 40土葬墓- 10点、II i 39土葬- 4点である。これらの土器は墓壇に直接伴うものでないので、出土点数のみを記し、詳述は省略する。また、石器(石皿)も1点出土している。

(2) 陶器 (第369図B・C、P L-184)

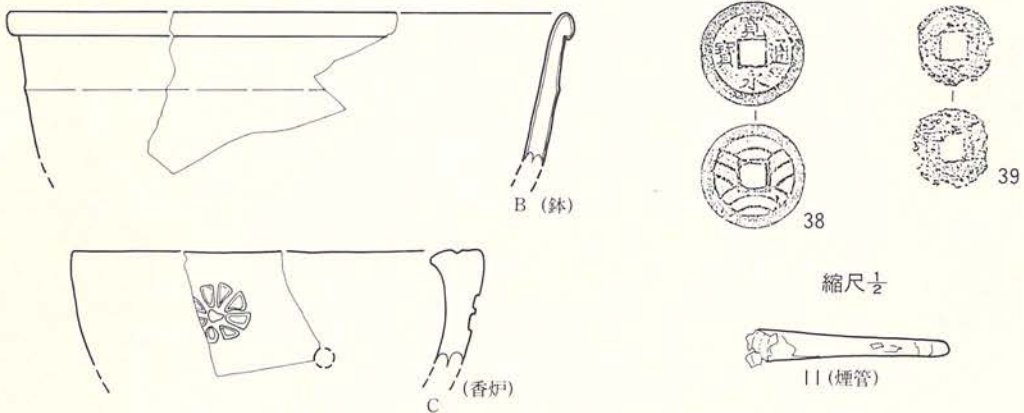
C・D区の耕作土中に出土する小破片である。C区からは薄手灰褐色の急須体部破片が1点出土している(実測図・写真とも未掲載)。

D区出土の4点には、同一個体の口縁部破片2点(B)が含まれ、折り返されて玉縁状をなす。内外面とも緑色がかった光沢のある灰色を呈し、素地は柔らかい灰色である。他に素焼きの香炉の口縁部破片がある(C)。外面に8弁の印花文をもち、全面に赤色塗彩されている。胎土は白色粒を含む微粒で柔らかい灰褐色を呈する。もう1点(D)は内面に白色釉のハケ塗りされた鉢の口縁部小破片である。これらはいずれも近世以降の所産とみられる。

(3) 金属製品 (第384図11・38・39、P L-184)

煙管の吸口1点と古銭が2枚出土している。煙管の吸口(11)は、C区南斜面から出土した破片である。現存長は5.4cmであり、中央寄りが腐蝕欠損している。形状からは、近世の土葬墓出土の煙管に類似している。

古銭2点(38・39)は、ともに寛永通寶である。A区北西端出土の1点(38)は、背に11条



第369図 遺構外の遺物

の波文の入る俗に波銭と呼ばれる四文銭である。また、C区出土のそれ(39)は、外径の小さい鉄銭であり、周縁に欠損部分がある。

VIII ま と め

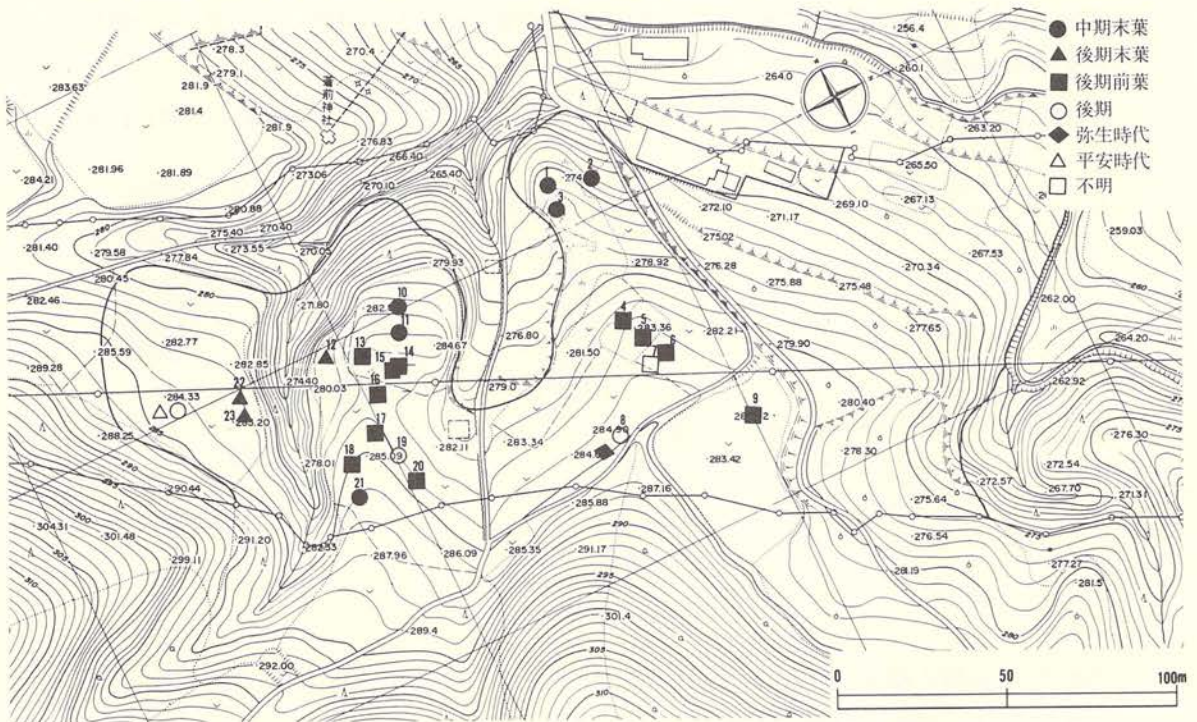
本遺跡の発掘調査で発見された遺構や遺物に、縄文、弥生、古代、中・近世の各時代のものが含まれることは既述のとおりである。本項でも前項同様各時代ごとに大別し、さらに遺構と遺物に分けてその属性や特徴と傾向を記し、若干の問題提起をしてみとめとする。

1. 縄文時代

(1) 遺 構

1) 住 居 跡 (第 図、第 2 表)

検出された縄文時代の住居跡23棟は、B区-9棟、C区-12棟、D区-2棟に分散している。A区では土坑と陥し穴状遺構そして土器が発見されたものの、住居跡は全く検出されなかった。出土した土器をみると、95%以上が後期初葉・前葉の十腰内I式に相当し、ほかは晩期後葉の大洞C₂式と大洞A式に属する。中央部は比較的急な北向き斜面をなし、基本層序第VI層の八戸浮石流凝灰岩が露出する部分が多いことから考えると、斜面崩壊に伴う土砂流下によって住居跡が流失した可能性もあるが、遺物の出土が北端部の安定した平坦面にほぼ限定されることか



第370図 住居跡と時期別分布

第3表 住居跡観察一覧表

No.	遺構名	形状	規模			炉跡	柱穴	時期	出土遺物
			長軸	短軸	深さ				
1	I h 40住	長円形	4.66m	3.53m	30cm	石囲い炉		中期後半	土器・石器
2	I i 37住	円形	2.75m	(2.14m)	45cm	石囲い炉	壁柱 7	中期末葉	土器・石器
3	I j 41住	(円形)	(3.25m)	(1.35m)	35cm	不明	不明	中期末葉	土器・石器
4	II i 39住	(円形)	(2.7m)	(2.1m)	8 cm	不明		後期後半	土器・石器
5	II j 39住	円形	3.3m	3.15m	6 cm	地床炉		後期末葉	土器
6	III a 38住	(円形)	(4 m位)		数cm	配石炉		後期末葉	土器
7	III b 38住	(方形)	4.5m	(3.36m)	不明	地床炉	主柱 4	不明	
8	III e 43住	(楕円形)	(5 m)	(4.6m)	不明	土器埋設炉	主柱 5	後期?	土器
9	III h 34住	凸辺隅丸長方形	3.3m	2.9m	20cm	配石炉		後期後半	土器・石器
10	I j 54住	ぼゞ円形	3.65m	3.5m	40cm	石囲い炉		中期末葉	土器・石器
11	II a 60住	円形	3 m	3 m	1.2m	配石炉		後期前葉	土器・石器
12	II a 56住	円形	3.2m	3.2m	35cm	石囲い炉	主柱 3	中期末葉	土器・石器
13	II b 58住	円形	6.6m	6.6m	60cm	石囲い炉		後期末葉	土器・石器
14	II d 57住-1	楕円形	4.7m	4 m	32cm	石囲い炉		後期末葉	土器・石器
15	II d 57住-2	楕円形	4.8m	4.2m	38cm	石囲い炉	主柱 5	後期末葉	土器
16	II e 59住	円形	5.4m	5.4m	70cm	石囲い炉?	主柱 6 4	後期末葉	土器・石器
17	II g 60住	楕円形	6.6m	5.8m	99cm	石囲い炉	主柱 3 3	後期末葉	土器・石器
18	II i 63住	楕円形	2.7m	2.3m	28cm	配石炉		後期後葉	土器・石器
19	II j 59住	(円形)	(5 m)		38cm	地床炉	4	後期	土器・石器
20	III b 59住	(円形)	2.6m	(2 m)	27cm	配石炉		後期(後半?)	土器
21	III b 63住	長方形気味	2.4m	2.25m	15cm	石組複式炉		中期末葉	土器
22	II a 68住	不整六角形	4.4m	3.6m	24cm	地床炉		後期前葉	土器・石器
23	II b 68住	円形	3.1m	2.92m	30cm	地床炉		後期前葉	土器・石器

ら考えると、調査範囲には住居跡が存在しなかったとして大過ないであろう。調査範囲と西側段丘崖との間には、約2000m²の平坦な同位面が調査範囲外として続いているが、遺物の地表分布が北端部に限定されることから考えると、北端部の調査範囲外に数棟存在する可能性がある。

B区の住居跡はいずれも壁高が10cm以下と掘り込みが浅い。遺跡の標柱がある頂上部が周囲より若干小高くなっており、周辺部の低い面は表土が薄く除去すると八戸火山灰層や八戸浮石流凝灰岩が露出することから推定すると、耕作による削平・攪乱を相当受けている可能性がある。以上のことから、検出された住居跡の壁高が低いことは、後世の耕作による削平に起因することが考えられ、本来はもっと掘り込みが深く、さらにもっと多くの住居跡が存在した可能性が強い。

C区の場合は東側の段丘奥部に位置する住居跡の壁高が低いものの、土層の堆積状況からは

大きな削平や攪乱を受けた痕跡はない、一部(19)に斜面下位部分が残存しない例もあるが、数が少ないことから検出された12棟は当初からの棟数であろう。

D区では北西側ほぼ半分が削平を受けている状況が観察され、検出された土坑や住居跡がいずれも浅い掘り込みであることは、これに起因するものであろう。

以上、地区別に検出状況を概観したが、これらが所属する時期も中期末葉、後期前葉、後期末葉、後期と推定されるもの、時期不明等が混在しているばかりでなく、柱穴のあり方、炉の構造、規模、平面形などそれぞれの特徴がみられることから、以下では各項目ごとにその特徴を記すこととする。なお、遺構番号は第3表の遺構番号に共通している。

〔形状〕

平面的な形状に限定すると、円形—13棟(2・6・10・13・16・19・20・23)、長円・楕円形—6棟(1・8・14・15・17・18)、方形・方形気味—3棟(7・9・21)、多角形気味—1棟(22)に分けられる。これに時期も加味すると、円形の13棟には中期末葉—4棟(2・3・10・12)、後期前葉—3棟(11・19・23)、後期末葉—5棟(4・6・13・16)、後期で時期の特定できない住居跡—1棟(20)に細分される。同様に長円・楕円形の6棟は、中期末葉—1棟(1)、後期末葉—4棟(14・15・17・18)、後期で時期の特定できない住居跡—1棟(8)になる。さらに、方形や方形気味の3棟は、中期末葉—1棟(21)、後期末葉—1棟(9)、時期不明—1棟(7)となり、多角形気味の1棟は後期前葉(22)に属する。

以上から形状をまとめると、本遺跡で検出された住居跡は各時期とも円形を基調とし、長円形や楕円形の6棟も含めると82.6%に相当する19棟が、円形かそれに近い平面形を有していることになる。相対する壁が並行する所謂方形は1棟のみで、凸辺状を示す2棟を含めても3棟と少ないことは、中期末葉～後期末葉にはあまり好まれなかった形を示すものであろうか。多角形気味とした1棟は、北側の壁が検出されていないので断定することはできないが、検出された部分に4箇所角隅をもつことから、多角形(六角形)と推定したものである。

〔規模〕

長軸の長さからみた規模には最小2m台から最大6m台まであり、その差が大きく開いている。規模別にその内訳をみると、2m台—5棟(2・4・18・20・21)、3m台—7棟(3・5・7・10・11・12・23)、4m台—6棟(1・6・7・14・15・22)、5m台—3棟(8・16・19)、6m台—2棟(13・17)となり、2m～4m台が全体の78.2%を占めており、本遺跡の場合は比較的小型の住居跡が多いことを示している。これに所属時期を合わせて考えると、2m台の5棟には中期末葉—2棟(2・21)、後期末葉—3棟(4・18・20)が含まれ、3m台の7棟の場合は中期末葉—3棟(3・10・12)、後期前葉—2棟(11・23)、後期末葉—2棟(5・9)が混在する。4m台では中期末葉—1棟(1)、後期前葉—1棟(22)、後期末葉—3棟(6・

14・15)となり、5 m 台は後期末葉一棟(16)、後期で時期の特定はできない住居跡一棟(8・19)になる。6 m 台の場合は後期末葉一棟(13・17)のみである。なお、所属時期の不明な1棟(7)は4 m 台に該当する。

以上から、規模を時期別にみると、中期末葉の6棟は2 m 台一棟、3 m 台一棟、4 m 台一棟と、ほとんどが2～3 m 台に入りこの時期の特徴を示すものであろうか。後期前葉の場合は3 m 台一棟、4 m 台一棟と全て3～4 m 台に入り、本遺跡での標準的な規模といえる。後期末葉の11棟は2 m 台一棟、3 m 台一棟、4 m 台一棟、5 m 台一棟、6 m 台一棟に細分され、全体としてバラツキが大きく中心をなす規模は定かでない。他に後期と推定される2棟は5 m 台に該当する。

〔炉 跡〕

炉跡には各種の構造をもつものがあり、その内訳は石囲い炉一棟(1・2・10・12～17)、地床炉一棟(5・7・19・22・23)、炉床の脇に礫を1個埋設する配石炉一棟(6・9・11・18・20)、土器埋設炉一棟(8)、石組複式炉一棟(21)になり、前3型が全体の82.6%を占めている。本遺構での特徴は、配石炉と呼称した炉床の脇に礫を1個埋設した炉の存在である。時期的にみると1棟は後期前葉であるが、他の4棟は後期末葉に属し、後期後半を特徴づける炉の構造である可能性がある。石囲い炉の9棟は礫の配置される形状によって円形一棟(2・14・15・16)、C字状馬蹄形一棟(13・17)、方形一棟(1・2)、長方形一棟(10)に分けられ、66.6%が円形を基調とした炉である。時期的にみると、中期末葉は検出されなかった1棟を除くと全て石囲い炉であり、それも円形が1棟(2)ある以外は方形一棟(1・12)、長方形一棟(10)、方形石組複式炉一棟(21)に分けられ、66.6%が方形を基調としている。後期前葉では配石炉が1棟(11)ある以外は全て(22・23)地床炉である。後期末葉の場合は11棟の内5棟(13～17)が石囲い炉で、ほかは配石炉が4棟(6・9・18・20)あり、地床炉は1棟(5)のみである。なお、炉跡の不明な住居跡も1棟(4)ある。さらに、石囲い炉には円形一棟(14～16)とC字状馬蹄形一棟(13・17)の2型がある。また円形石囲い炉はいずれも炉部分の床面を15cm前後掘り下げて掘り込み地業をした後、埋め戻しながら炉石を配置する構築手順を踏んでいる。C字状馬蹄形の2棟では、床面を特別に掘り下げることもなく、炉石を床に軽く押し込んだ後、内外側を黒色シルトで固める構築方法がとられ、いずれも南東部が開口するC字形に炉石が配置され、それも南側の東端には特に大型の礫を立石風に配列する共通点がみられる。もしかすると、この2棟は同時に併存した可能性がある。

〔柱 穴〕

柱穴をもつ住居跡は34.7%に相当する8棟(2・7・8・12・15～17・19)のみで、他には検出されていない。主柱穴をもつものは7棟(7・8・12・15～17・19)で、その中の2棟(16・

17) は2組の柱穴をもち、建て替えられていることが判明した。主柱穴の数は3～6と不定であるが、内訳をみると3—3棟(12・17新・17旧)、4—3棟(7・16・19)、5—2棟(8・15)、6—1棟(16)のようになり、3～5の柱穴が中心であるらしい。壁柱をもつのは1棟(2)のみである。時期的にみると、8棟の内2棟は中期末葉(2・12)、後期が5棟(8・15・16・17・19)、時期不明1棟(7)のようになる。

〔時期〕

検出された23棟は、出土した土器の所属時期によって中期末葉—6棟(1～3・10・12・21)、後期前葉—3棟(11・22・23)、後期末葉—11棟(4～6・9・12～18)、後期であるが時期の特定できない住居跡—3棟(8・19・20)、時期不明—1棟(7)に細分される。

中期末葉の6棟はB区に3棟(1～3)とC区に3棟(10・12・21)に分散しており、B区の3棟とC区の1棟(21)を除く2棟は西端の段丘崖沿いに立地し、C区に残る1棟(21)は調査区東端に位置する。後期前葉の3棟はC区に1棟(11)、D区に2棟(22・23)に分かれ、深い沢を挟んで対峙する位置関係を示している。後期末葉とした11棟には後期後半とした2棟(4・9)も含めているが、これらはB区に4棟(4～6・9)、C区に7棟(12～18)と60m以上の距離をおいて2地点に集中している。このことは、2地点の集落が並存したのではなく、本来は個別の集落で時間的にズレがあることを示している可能性がある。また、後期であるが時期の特定できない住居跡は、B区に1棟(8)とC区に2棟(19・20)ある。

〈小 結〉

以上、各項目ごとにその特徴と傾向について記したが、以下にそれらを総合して各時期の集落を概観して小結とする。

本遺構で検出された住居跡は23棟と、調査面積22.360㎡で検出された土坑186基からみれば、必ずしも多い数ではない。たとえ、B区が後世の削平・攪乱によって消滅した住居跡があったとしても、出土した遺物をも勘案すると全体で30棟以内と考えるのが妥当であろう。

調査区外への遺物の広がりを見ると、A区は既述のように北西側に延びることは明らかである。そのほか、C区は沢沿いを東に続く緩斜面部の相当奥まで遺物の分布範囲が広がっている。それも、調査範囲内では稀薄であった縄文晩期終末に近い土器が表面採集される。B区とD区は地形的にみても、遺跡の広がる余地はないと思われるし、遺物の分布も観察されない。このことから、本遺跡は範囲全面積を調査しておらず、A区北西端の段丘崖沿いとC区沢沿い東奥に未調査部分が残っていることを強調しておきたい。

中期末葉が本遺跡で検出された住居跡では最っとも古く、B区とC区にまたがって6棟ある。遺物の分布では、当該遺構のないB区台地頂上部付近とC区東端部北斜面でも粗掘り中に出土

している。遺物の分布が遺構の存在に直接結びつくとも断定できないが、B区の場合は地形の改変があることから頂上部にも存在した可能性は捨て切れない。B区とC区の集落が同時に並存した同時集落か否かは断定資料を欠くが、出土した土器では時期差が認められない。形状には円形・長円形・方形気味があるものの、全体的にみれば円形もしくは楕円形が基調である。柱穴が検出されたのは1棟のみであるが、規模が2 m～3 m台が主であることから考えれば、柱穴をもたない例が多いのも妥当かも知れない。炉についてみれば、出土した土器がいずれも大木10式に相当し、その意味ではこの時期特有の複式炉が少ないように思える。明らかな複式炉は1棟(21)のみで、形骸化した形が1棟(1)ある。しかし、詳細に観察すると他の住居跡も床面中央から壁寄りに偏って構築されており、複式炉の伝統がまだ残っていることは看取できる。これから考えると、中期末葉とした6棟の時期比定は大過ないであろう。

後期前葉の住居跡は、C区とD区にまたがって3棟検出されている。遺物の分布は、A区の北端とC区北西端付近にもみられるが、A区の状況は既述したとおりであり、C区についても攪乱によって遺構が消滅した証拠はないので、この3棟が全てと推定される。形状はD区の1棟(22)が不整六角形気味である以外は円形を示し、規模も3 m台とほぼ共通している。炉はC区にある1棟(11)は配石炉であるが、他は地床炉である。この3棟が同時存在の一時期集落であるかは重要な問題であるが、決定する資料は何も得られていない。C区とD区を限る沢は、沢底と5 m～10mの比高がある沢幅20m位のV字谷で、現在の流量からみて当時は相当の水量があったと推定されることから、3棟が同時存在で沢を越えて常に行き来していたとするのに問題がないわけではない。しかしながら、3棟から出土した土器は全く瓜二つであるとともに、遺構のもつ特徴も若干の相違点はあるもののほぼ共通している。やはり、3棟が同時に存在した1時期集落と考えるのが妥当ではないだろうか。

後期末葉の11棟もB区に4棟、C区に7棟と分散している。現状ではB区の群とC区の群の間には60m～70mの距離があり、同時に並存した集落とするには若干問題があることは既述のとおりである。B区の本住居跡群が立地する頂上部付近は、後世の削平や攪乱(おそらく耕作による)が著しく、壁はおろか床面も残存せず、柱穴や壁溝の存在によってかろうじて住居跡とした例(7)もあることは、本来はもっと多くの住居跡が存在した可能性があることは先に記した。しかし、B区で出土した遺物は第308図に示したようにそれほど多くはない。ということは、B区に存在した住居跡も検出された棟数から大きく増加する可能性は低いという考え方も成り立つ。B区の住居跡は残存状況が不良で、口縁部文様帯を明確に残す土器も少ないことから、該期と断定するにはいさゝか心もとないが、出土した土器の中に後期末葉のものが含まれるのもまた事実である。平面形が円形で規模も4 m以下とほぼ共通し、炉の構造には地床炉と配石炉が2棟ずつある。C区の7棟は遺存状況も良好でほぼ全体を把握することができる。

7棟の内1棟(14・15)は平面形、規模とも近似した直接的な重複関係を示し、別の2棟(16・17)は柱穴が2組づゝ検出されていることから、この3棟は建て替えが行われた可能性が大きい。規模は13・16・17が5 m以上と大型で、18・20はともに3 m以下と小型である。炉が13と17・15と16・19と20が同じ構造をもっている。13と17は床面を掘り下げることなく、炉石を床面に配置しシルトで固める炉であるし、15と16は炉の部分を広目に深さ15cmで床を掘り下げ、その中に炉石を埋め込む構造をもつ。18と20は炉床の脇に礫を1個配置する配石炉である。いずれも石囲い炉であるという共通点はあるものの、このような構造の相違が時間的なものか築造者の好みによるかは不明である。出土した遺物は、所謂瘤付土器群に該当する土器のみが出土しており、遺物(特に土器)の面から時期差を明確にすることは困難である。遺構の特徴のみで考えれば、単時期・2時期・3時期の3通りの小期に細分されることが考えられるものの、いずれとも断定し難い。しかし、各住居跡の距離や地形上の立地と占地等から考えれば、単時期の集落と考えるのが妥当かも知れない。

2) 土 坑 (第

本遺跡の発掘調査では、調査範囲全域から186基の土坑が検出されており、その分布状況は第図、観察一覧表は第4表、その集計表は第5表に示した。

186基の土坑はA区—32基、B区—57基、C区—78基、D区—19基に分散するが、集計表を概観すると地区によって特徴に若干差のある様相が看取されることから、本項では地区別に集計した後、その結果を遺跡全体に反映させ、若干の特徴を提示しまとめたい。

[A 区]

本区では32基の検出であるが、分布状況を見ると北端部の段丘崖に近い緩斜面部に11基(1～10・16)と、B区から北に延びる緩斜面で北端部の高位部より7～8 m 標高の高い部分に21基(11～15・17～32)が分散している。所属時期をみると、北端部では1基(2)は縄文時代とするのに疑問があるものの、他が縄文時代に属することは形状や埋土の状況から考えて明らかである。遺物が出土したのは3基(1・6・7)のみであるが、いずれも後期初葉～前葉の十腰内I式に相当する土器が検出しており、この地点から出土した土器も後期初葉～前葉に限定されることから、この地点の10基はほぼ後期初葉～前葉に位置づけられるであろう。B区寄りの21基では4基から土器が出土している。その中で2基(14・19)からは晩期前葉～中葉にかけての完形や完形に近い土器が出土している。他の2基(12・28)からは後期後半に属する完形や破片が出土している。したがって、この地区の21基には2時期に属する土坑が混在していることになる。このことは、北端部の10基とB区寄りの21基は時期が異なることを示し、さらにB区寄りには2時期に細分され、A区の縄文時代土坑31基は都合3時期に大別されると推定

第4表 土坑類観察一覧表

No	遺構名	平面形	断面形	規				模		副穴	時 期	出土遺物
				開口部径	底部径	頸部径	深 深	深 深	深 深			
1	III a 4土坑	楕円形	バケツ形	2.17m×1.68m	1.8m×1.2m		85cm				縄後初	土器
2	III a 17土坑	円形	浅皿形	1 m×95cm	80cm×70cm		14cm				近・現	土器
3	III b 11土坑	円形	フラスコ形	1.38m×1.2m	1.3m×1.2m		90cm	1.24m	1		縄	
4	III b 13土坑	円形	フラスコ形	1.26m×1.26m	1.3m×1.2m		1.08m	89cm	1		縄	
5	III b 14土坑	円形	フラスコ形	90cm×85cm	1.05m×95cm		85cm	90cm	1		縄	
6	III c 7土坑	円形	フラスコ形	1 m×1 m	1.2m×1.2m		85cm	95cm	1		縄後初	土器
7	III c 10土坑	円形	フラスコ形	1 m×90cm	1.35m×1.35m		1 m	1 m	1		縄後初	土器
8	III c 11土坑	円形	フラスコ形	1.4m×1.25m	1.45m×1.35m		51cm				縄	
9	III c 12土坑-1	楕円形	ビーカー形	1.55m×1.15m	1.55m×1.05m		40cm				縄	
10	III c 12土坑-2	円形	フラスコ形	80cm×80cm	1 m×1 m		70cm	1.04m	1		縄	
11	III d 26土坑	円形	フラスコ形	1.4m×1.4m	1.7m×1.6m		87cm				縄	
12	III e 25土坑-1	円形	フラスコ形	1 m×1 m	1.5m×1.5m		83cm				縄後半	土器
13	III e 25土坑-2	円形	フラスコ形	1.2m×1.15m	1.3m×1.15m		46cm				縄	
14	III e 26土坑-1	円形	フラスコ形	1.4m×1.35m	1.55m×1.55m		1.3m	1.15m			縄晩中	土器
15	III e 26土坑-2	円形	ビーカー形	1.7m×1.4m	1.4m×1.4m		1.05m				縄	
16	III f 19土坑	円形	フラスコ形	1.15m×1.15m	1.35m×1.25m		65cm				縄	
17	III f 25土坑	円形	フラスコ形	1.5m×1.4m	1.5m×1.45m		74cm				縄	
18	III f 26土坑-1	円形	ビーカー形	1.5m×1.15m	1.2m×1.1m		75cm				縄	
19	III f 26土坑-2	円形	フラスコ形	1.3m×1.1m	1.5m×1.45m	1.15m×1 m	92cm				縄晩前	土器
20	III g 25土坑	円形	フラスコ形	1.25m×1.1m	1.5m×1.45m		63cm				縄	
21	III g 26土坑-1	円形	フラスコ形	75cm×70cm	1 m×1 m		48cm				縄	
22	III g 26土坑-2	円形	フラスコ形	1.4m×1.2m	1.8m×1.65m		84cm				縄	
23	III g 26土坑-3	円形	皿形?	1.3m	1.15m		31cm				縄	
24	III g 26土坑-4	円形	フラスコ形	1 m×1 m	1.5m×1.5m		69cm				縄	
25	III g 27土坑	円形	フラスコ形	1.15m×1.1m	1.7m×1.7m	1.1m	89cm				縄	
26	III h 25土坑	長方形	ビーカー形	90cm×1.2m	80cm×1.1m		60cm				縄	
27	III j 21土坑	円形	フラスコ形	1.5m×1.4m	1.8m×1.75m		1.05m				縄	
28	III j 25土坑-1	楕円形	フラスコ形	1.85m×1.55m	1.9m×1.75m		85cm				縄後?	土器
29	III j 25土坑-2	円形	フラスコ形	1.2m×1 m	1.7m×1.65m		93cm				縄	
30	III j 26土坑	円形	フラスコ形	1.75m×1.4m	1.6m×1.5m		90cm				縄	
31	III i 27土坑	円形	フラスコ形	1.1m×1.05m	1.3m×1.2m		56cm				縄	
32	IV a 27土坑	円形	フラスコ形	1.2m×1.15m	1.2m×1.15m		41cm				縄	
33	I f 40土坑	平行四辺形	バケツ形	98cm×82cm	68cm×40cm		68cm				中	
34	I h 40土坑	不整円形	フラスコ形	1.06m×1.12m	1.36m×1.47m	1 m	93cm				縄	
35	II c 38土坑	円形	フラスコ形	96cm×87cm	96cm×87cm	75cm	58cm				縄	
36	II c 40土坑-1	円形	フラスコ形	1.45m×1.1m	1.3m×1.3m	1 m	1 m				縄中	土器
37	II c 40土坑-2	長方形	バケツ形	1.28m×50cm	1.1m×40cm		35cm				中・近	
38	II d 40土坑	円形	フラスコ形	1.1m	1.2m		26cm				縄	
39	II e 41土坑	楕円形	ビーカー形	1.28m×1.02m	1.12m×92cm		32cm				縄	
40	II i 38土坑-1	円形	フラスコ形	1.24m×1.2m	1.1m×1.1m		51cm	1			縄中末	土器
41	II i 38土坑-2	楕円形	フラスコ形	1.34m×1.16m	1.64m×1.41m		84cm				縄後末	土器
42	II i 39土坑	円形	フラスコ形	1.08m×92cm	2.22m×2.2m	1 m	1.24m				縄後末	土器・石器
43	II j 34土坑	円形	フラスコ形	1.02m×1 m	1.06m×1.01m		39cm				縄	
44	II j 37土坑	円形	フラスコ形	1.14m×1.08m	1.38m×1.21m		38cm				縄中	土器・石器
45	II j 38土坑	円形	フラスコ形	81cm×76cm	1.32m×1.26m	61cm	76cm				縄後末	土器
46	III a 36土坑	円形	フラスコ形	52cm×47cm	60cm×58cm	50cm	37cm				縄	
47	III a 37土坑-1	円形	ビーカー形	1.64m×1.58m	1.52m×1.42m		65cm				縄後末	土器
48	III a 37土坑-2	円形	フラスコ形	51cm×44cm	58cm×52cm		34cm				縄	
49	III a 38土坑	円形	フラスコ形	1.8m×1.78m	2.14m×2.1m		52cm	2			縄後末	土器
50	III a 39土坑	楕円形	フラスコ形?	2.12m×1.52m	1.98m×1.47m		21cm				縄後半	土器
51	III b 36土坑	楕円形	皿形	1.34m×84cm	1.25m×81cm		8 cm				縄	
52	III b 37土坑-1	楕円形	皿形	1.74m×1.18m	1.58m×1.02m		10cm				縄	
53	III b 37土坑-2	円形	皿形	1.26m×1.16m	1.1m×91cm		10cm				縄	
54	III b 37土坑-3	円形	皿形	1.52m×1.36m	1.42m×1.26m		21cm				縄	
55	III b 37土坑-4	円形	フラスコ形	48cm×46cm	61cm×51cm		56cm				縄	
56	III b 37土坑-5	円形	フラスコ形	55cm×49cm	91cm×84cm		66cm				縄	
57	III b 38土坑-1	円形	フラスコ形	1.41m×1.38m	1.62m×1.53m		16cm				縄	
58	III b 38土坑-2	円形	フラスコ形	1.38m×1.34m	1.36m×1.3m		42cm	1			縄中末~後初	土器
59	III b 38土坑-3	円形	フラスコ形	1.16m×1.04m	1.05m×1.03m		18cm				縄中末	土器
60	III b 38土坑-4	円形	皿形	1.78m×1.76m	1.58m×1.56m		39m				縄後	土器
61	III b 39土坑	楕円形	皿形	1.24m×1.19m	1.21m×94cm		28cm				縄	
62	III c 35土坑	円形	フラスコ形	1.86m×1.84m	1.61m×1.59m		91cm				縄	石器

No	遺構名	平面形	断面形	規				副穴	時期	出土遺物
				開口部径	底部径	頸部径	深さ			
63	III c 38土坑-1	楕円形	フラスコ形	1.12m×96cm	1.28m×98cm		58cm	2	縄中中	土器
64	III c 38土坑-2	楕円形	フラスコ形	1.69m×1.31m	1.42m×1.34m		57cm		縄	
65	III c 39土坑	円形	皿形	79cm×74cm	62cm×58cm		13cm		縄	
66	III c 41土坑	円形	槽鉢形	1.54m×1.44m	90cm×88cm		66cm		縄	
67	III c 49土坑	楕円形	不規則である	96cm×74cm	82cm×38cm		75cm以上		不明	
68	III d 40土坑	楕円形	皿形	1.26m×1.06m	1.04m×84cm		18cm		縄	
69	III d 42土坑-1	楕円形	フラスコ形	1.28m×1.04m	1.92m×1.82m	1.1m	1.16m	2	縄	
70	III d 42土坑-2	円形	フラスコ形	1.28m×1.24m	2.18m×1.98m		1.05m	1	縄後後半	土器
71	III e 39土坑	円形	皿形	1 m×1 m	82cm×76cm		18cm		縄	
72	III e 40土坑	楕円形	皿形	1.65m×1.38m	1.3m×1.04m		25cm		縄	土器
73	III e 42土坑	円形	フラスコ形	1.74m×1.64m	1.98m×1.9m	1.69m×1.64m	82cm		縄	
74	III e 43土坑-1	楕円形	皿形	2.14m×1.66m	2.08m×1.62m		24cm		縄	
75	III e 43土坑-2	不整楕円形	ビーカー形	1.08m×94cm	74cm×62cm		74cm		縄	
76	III e 45土坑	楕円形	深い柱穴状	54cm×42cm	36cm×24cm		85cm		縄	
77	III e 47土坑	円形	フラスコ形	1.5m×1.32m	1.56m×1.42m	1.28m×1.18m	98cm		縄	
78	III f 39土坑	円形	ビーカー形	1 m×90cm	75cm×75cm		36cm		縄	土器
79	III f 40土坑	円形	フラスコ形	1.65m×1.55m	1.5m×1.5m		39cm		縄後	土器
80	III f 42土坑	円形	フラスコ形	1.3m×1.25m	1.7m×1.7m		88cm		縄後末	土器
81	III f 43土坑	楕円形	皿形	1.34m×88cm	1.32m×76cm		27cm		縄	
82	III f 48土坑	楕円形	皿形	1.14m×90cm	98cm×80cm		7 cm		縄	
83	III g 43土坑-1	円形	フラスコ形	1.4m×1.35m	1.6m×1.5m		56cm		縄後	土器・石器
84	III g 43土坑-2	円形	フラスコ形	1.3m×1.3m	1.9m×1.85m	1.1m	90cm		縄後後半	土器・石器
85	III g 43土坑-3	円形	フラスコ形	1.4m×1.35m	1.55m×1.35m	1.3m	90cm		縄	
86	III g 43土坑-4	円形	フラスコ形	(1.8m×80cm)	(1.55m×80cm)		31cm		縄	
87	III g 43土坑-5	円形	フラスコ形	1.65m×1.55m	2.55m×2.44m		1.3m	2	縄	
88	III g 44土坑	円形	フラスコ形	1.1m×1 m	1.15m×1.05m		85cm		縄	
89	III h 43土坑	円形	フラスコ形	1.25m×1 m	2 m×1.9m	1.25m	1.15m		縄	
90	I j 52土坑	円形	フラスコ形	1.25m×1.2m	1.2m×1.2m	1 m	1 m		縄後後半	土器
91	I j 53土坑-1	円形	フラスコ形	1.85m×1.65m	1.75m×1.7m	1.45m	1.1m		縄	
92	I j 53土坑-2	円形	フラスコ形	2.25m×2.2m	2.1m×1.9m		1.2m		縄後初	土器・石器
93	I j 55土坑	円形	ビーカー形	1.4m×1.25m	1.05m×1 m		92cm		縄後	土器
94	I j 57土坑	円形	フラスコ形	1.7m×1.7m	1.8m×1.7m		62cm		縄後後半	土器
95	II a 52土坑	円形	ビーカー形	1.05m×1 m	95cm×95cm		1.03m		縄後後半	土器
96	II a 53土坑-1A	円形	フラスコ形	1.25m×1.2m	95cm×95cm	90cm	1.39m		縄後後半	土器・石器
97	II a 53土坑-1B	円形	フラスコ形	1.5m×1.4m	1.25m×1.2m		80cm		縄中末～後前半	
98	II a 53土坑-2	円形	ビーカー形	98cm×85cm	98cm×90cm		74cm		縄	
99	II a 55土坑-1	円形	ビーカー形	1.33m	1.2m		60cm		縄中末～後初	土器・石器
100	II a 5土坑-2	円形	ビーカー形	2 m×1.85m	1.85m		1 m	1	縄	
101	II a 58土坑-1	不整楕円形	皿形	1.15m×1 m	1.1m×95cm		30cm		縄後後半	土器・石器
102	II a 58土坑-2	円形	フラスコ形	1.4m×1.15m	1.5m×1.3m		80cm		縄	
103	II a 58土坑-3	円形	ビーカー形	1.45m×1.4m	1.4m×1.2m		50cm		縄	
104	II a 58土坑-4	楕円形	フラスコ形	1.45m×1.3m	1.8m×1.55m		50cm		縄後後	土器
105	II a 59土坑	楕円形	フラスコ形	1.2m×95cm	1.35m×1.25m		70cm		縄後後半	土器
106	II b 54土坑-1	円形	フラスコ形	1.4m×1.35m	1.45m×1.4m		95cm		縄後後半	土器
107	II b 54土坑-2	円形	フラスコ形	1.05m×1.35m	1.3m×1.25m		58cm		縄後	土器
108	II b 55土坑-1	円形	フラスコ形	1.05m×80cm	1.5m×1.3m		1 m		縄後後半	土器
109	II b 55土坑-2	円形	フラスコ形	60cm×55cm	1.15m×1 m		1 m		縄	土器
110	II b 56土坑-1	円形	フラスコ形	1.35m×1.2m	1.65m×1.5m		92cm		縄後末	
111	II b 56土坑-2	円形	フラスコ形	90cm×80cm	75cm×70cm		50cm		縄	
112	II b 56土坑-3	楕円形	ビーカー形	(1.65m×60cm)	(1.5m×50cm)		28cm		縄中末	土器
113	II b 58土坑-1	円形	ビーカー形	1.4m×1.35m	1.2m×1.1m		75cm		縄晩中	土器
114	II b 58土坑-2	円形	ビーカー形	2.1m×2 m	1.85m×1.75m		1.09m		縄後末	土器
115	II b 59土坑	円形	ビーカー形	1.85m×1.75m	1.6m×1.5m		77cm		縄晩中	土器
116	II c 54土坑-1	円形	フラスコ形	1.15m×1.1m	1.3m×1.2m	1.15m	60cm	1	縄	
117	II c 54土坑-2	円形	ビーカー形	1.35m×1.35m	1.3m×1.2m		43cm		縄	土器
118	II c 56土坑	円形	フラスコ形	1.8m×1.65m	2 m×2 m		1.54m	1	縄後後半	土器・土偶
119	II c 58土坑-1	円形	フラスコ形	60cm×45cm	1.05m×1 m		82cm		縄後後半	土器・石器
120	II c 58土坑-2	円形	フラスコ形	1.1m×90cm	1.15m×1.1m		66cm		縄	
121	II c 58土坑-3	楕円形	ビーカー形	2.9m×2.25m	2.3m×1.7m		69cm		縄後末	土器・土製品・石器
122	II c 58土坑-4	楕円形	ビーカー形	1.15m×95cm	90cm×65cm		59cm		縄	
123	II c 58土坑-5	楕円形	ビーカー形	(1.1m×50cm)	(70cm×45cm)		51cm		縄	
124	II c 59土坑	楕円形	バケツ形	1.8m×1.6m	1.2m×1.05m		70cm		縄後末	土器・石器

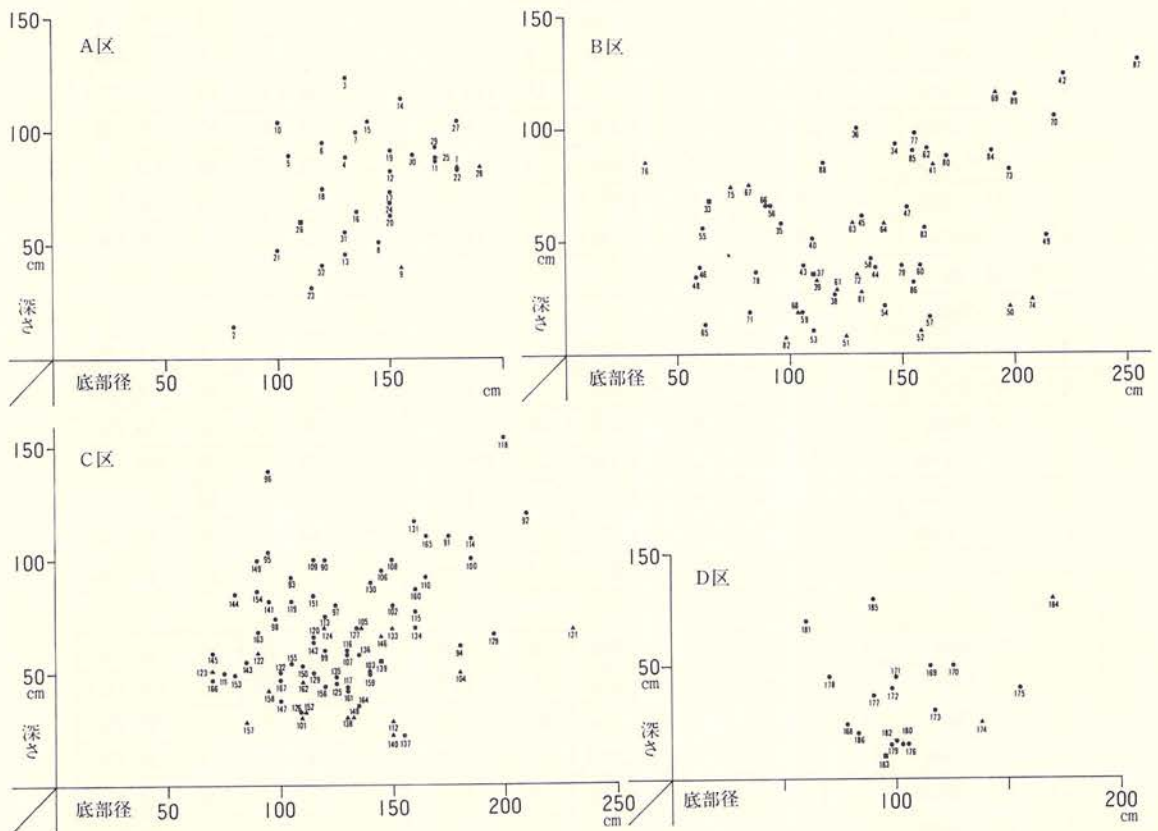
No	遺構名	平面形	断面形	規				副穴	時 期	出土遺物
				開口部径	底部径	頸部径	深さ			
125	II d 53土坑	円形	フラスコ形	1.2m×1.2m	1.25m×1.24m		45cm		縄	
126	II d 54土坑	円形	フラスコ形	1.1m×1.05m	1.1m×1.1m		32cm		縄	
127	II d 58土坑	円形	ビーカー形	1.1m×1.5m	1.35m×1.35m		70cm		縄後前	土器
128	II d 59土坑-1	円形	フラスコ形	95cm×95cm	1.45m×1.4m		67cm		縄後後半	土器
129	II d 59土坑-2	円形	ビーカー形	1.35m×1.35m	1.15m×1.1m		50cm	1	縄後後半	土器
130	II d 59土坑-3	円形	フラスコ形	1.2m×1.1m	1.4m×1.35m		90cm	1	縄後後半	土器・石器
131	II e 59土坑-1	円形	フラスコ形	1.5m×1.25m	1.6m×1.5m		1.17m		縄後前	土器
132	II e 59土坑-2	円形	フラスコ形	70cm×65cm	1m×85cm		50cm		縄後末	土器
133	II e 59土坑-3	楕円形	ビーカー形	1.75m×1.35m	1.5m×1.2m		70cm		縄後後半	土器・石器
134	II f 55土坑-1	円形	フラスコ形	1.5m×1.5m	1.6m×1.5m		70cm		縄後後	土器
135	II f 55土坑-2	円形	フラスコ形	(1.2m×25cm)	(1.25m×40cm)		48cm		縄後後半	
136	II f 57土坑	円形	フラスコ形	1.4m×1.25m	1.35m×1.25m		58cm		縄後末	土器・石器
137	II f 58土坑-1	円形	フラスコ形	1.7m×1.6m	1.55m×1.5m		22cm		縄後末	土器
138	II f 58土坑-2	楕円形	ビーカー形	1.5m×1.2m	1.3m×1.2m		30cm		縄後後半	土器
139	II f 59土坑-1	隅丸長方形	皿形	1.85m×1.6m	1.45m×1.2m		55cm		縄	
140	II f 59土坑-2	楕円形	皿形	1.6m×1.2m	1.5m×1.1m		22cm		縄	
141	II f 60土坑	円形	濯鉢形	1.5m×1.5m	95cm×6.5cm		82cm		縄後後半	土器・土製品
142	II g 56土坑	楕円形	フラスコ形	1m×95cm	1.15m×95cm		64cm		縄後後半	土器
143	II h 56土坑	円形	フラスコ形	80cm×75cm	85cm×60cm		55cm		縄	
144	II h 57土坑-1	円形	ビーカー形	1.15m×1.05m	80cm×70cm		85cm		縄	
145	II h 57土坑-2	円形	ビーカー形	1.05m×80cm	70cm×70cm		59cm		縄後末	土器
146	II h 58土坑	楕円形	フラスコ形	1.3m×1.1m	1.45m×1.25m		67cm		縄後中	土器
147	II h 59土坑	円形	皿形	1.3m×1.1m	1m×90cm		37cm		縄後中	土器
148	II h 60土坑	楕円形	皿形	1.45m×1.35m	1.3m×1.1m		30cm		縄中末	土器・石器
149	II h 61土坑	不整形	不整形	1.3m×40cm	90cm×30cm		1m		縄	土器
150	II i 59土坑	円形	フラスコ形	95cm×85cm	1.1m×1.1m		53cm		縄後	土器
151	II i 60土坑-1	円形	フラスコ形	1.05m×80cm	1.15m×1.15m		84cm		縄後	土器
152	II i 60土坑-2	楕円形	皿形	1.2m×90cm	1.1m×90cm		32cm	1	縄後	土器
153	II i 60土坑-3	円形	ビーカー形	95cm×85cm	80cm×75cm		49cm		縄中末	土器
154	II i 60土坑-4	円形	フラスコ形	95cm×90cm	90cm×80cm		86cm		縄後末	土器
155	II i 61土坑-1	円形	ビーカー形	1.3m×1.3m	1.05m×α		54cm		縄後末	土器・石器・石
156	II i 61土坑-2	円形	ビーカー形	(1.3m×70cm)	(1.2m×60cm)		44cm		縄後末	土器・石器
157	II i 61土坑-3	楕円形	皿形	1m×80cm	85cm×70cm		28cm		縄後	土器
158	II i 62土坑	楕円形	半円形	1.9m×1.4m	95cm×80cm		42cm		縄後中末	土器
159	II j 58土坑-1	円形	フラスコ形	1.4m×1.4m	1.4m×1.3m		49cm		縄後末	土器
160	II j 58土坑-2	円形	フラスコ形	1.2m×1.2m	1.6m×1.55m	1.15m	87cm		縄後末	土器・石器・土
161	II j 58土坑-3	円形	フラスコ形	1.3m×1.25m	1.3m×1.2m		42cm		縄後後	土器
162	II j 59土坑	楕円形	フラスコ形	70cm×65cm	70cm×85cm		46cm		縄	石器
163	II j 60土坑	円形	フラスコ形	80cm×80cm	90cm×90cm	60cm	68cm		縄後後半	土器
164	III a 59土坑	円形?	フラスコ形	(1.4m×50cm)	(1.35m×40cm)		35cm	1	縄	
165	III a 60土坑	円形	フラスコ形	1.2m×1.2m	1.65m×1.55m	1m	1.1m		縄中末	土器
166	III b 59土坑	円形	皿形	85cm×85cm	70cm×65cm		47cm		縄	
167	II c 60土坑	円形	フラスコ形	90cm×85cm	1m×85cm		47cm		縄後後半	土器
168	I h 67土坑	不整形円形	皿形	1.05m×1.02m	78cm×74cm		24cm		現代?	
169	I h 69土坑	円形	バケツ形	1.27m×1.2m	1.5m×95cm		50cm		縄後	土器・石器
170	I i 67土坑	円形	バケツ形	1.5m×1.4m	1.25m×1.15m		50cm		縄後	土器
171	I i 68土坑-1	円形	バケツ形	1.45m×1.3m	1m×90cm		45cm		縄	
172	I i 68土坑-2	円形	バケツ形	1.3m×1.2m	98cm×95cm		40cm		縄	
173	I i 68土坑-3	円形	皿形	1.5m×1.5m	1.17m×1.05m		30cm		縄後前	土器
174	I i 68土坑-4	楕円形	皿形	1.55m×1.15m	1.38m×1.1m		25cm		縄	石器
175	I i 69土坑	不整形円形	皿形	1.8m×1.75m	1.55m×1.55m		40cm		縄後中	土器・石器
176	I i 70土坑	円形	皿形	1.25m×1.15m	1.05m×95cm		15cm		縄後初	土器
177	I j 67土坑	円形	皿形	1.15m×1.15m	90cm×90cm		37cm		縄	
178	I j 68土坑	円形	バケツ形	1.13m×1.1m	70cm×65cm		45cm		縄	
179	I j 69土坑	円形	皿形	1.2m×1.1m	98cm×98cm		15cm		縄	
180	I j 70土坑	円形	皿形	1.15m×1.1m	1.03m×93cm		15cm		縄	
181	II a 68土坑	円形?	フラスコ形	(95cm×45cm)	(60cm×30cm)		70cm		縄後前~中	土器
182	II a 70土坑	円形	皿形	1.1m×97cm	1m×85cm		15cm		縄	
183	II a 75土坑	隅丸方形	皿形	1.1m×1.1m	95cm×85cm		10cm		古代か?	土器
184	II c 68土坑-1	楕円形	皿形	2.7m×1.7m	1.7m×1.2m		80cm		古代か?	土器
185	II c 68土坑-2	円形	ボール形	2m×1.5m	90cm×90cm		80cm		縄後初	
186	II c 69土坑	円形	皿形	1m×90cm	83cm×67cm		20cm		縄	石器

第5表 土 坑 集 計 表

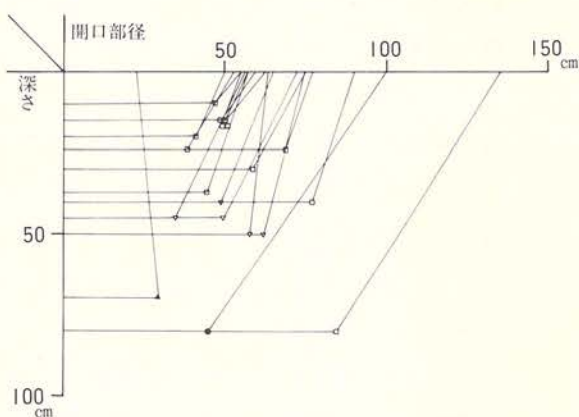
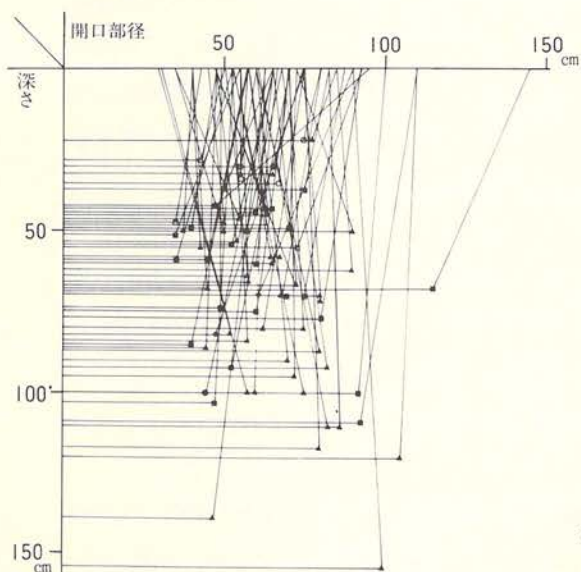
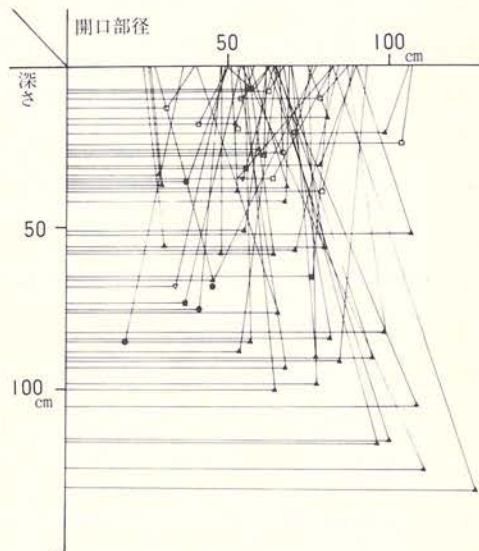
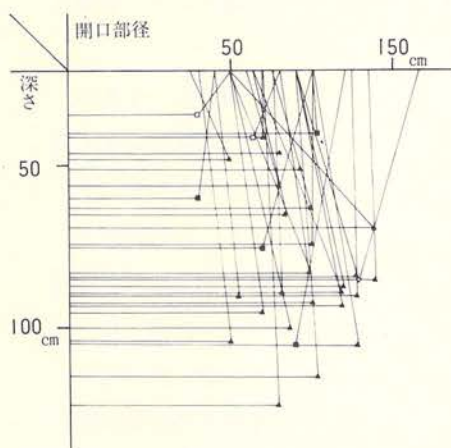
項 目 地 区	A 区	B 区	C 区	D 区	合 計
1 平 面 形					
1) 円 形	28 (87.5%)	38 (66.5%)	58 (74.4%)	16 (84.3%)	140 (75.2%)
2) 楕円形	3 (9.4%)	17 (30%)	19 (24.3%)	2 (10.5%)	41 (22.1%)
3) 長方形	1 (3.1%)	2 (3.5%)	1 (1.3%)	1 (5.2%)	5 (2.7%)
4) 不整形					
2 断 面 形					
1) フラスコ形	25 (78.2%)	35 (61.5%)	43 (55.1%)	1 (5.2%)	104 (56.0%)
2) ビーカー形	4 (12.5%)	4 (7.0%)	23 (29.5%)		31 (16.6%)
3) バケツ形	1 (3.1%)	4 (7.0%)	2 (2.6%)	5 (26.3%)	12 (6.5%)
4) 皿形	2 (6.2%)	13 (22.8%)	8 (10.2%)	12 (63.1%)	35 (18.8%)
5) ボール形		1 (1.7%)	2 (2.6%)	1 (5.2%)	4 (2.1%)
3 開 口 部 径					
1) 0～25cm					
2) 26～50cm		1 (1.7%)			1 (0.5%)
3) 51～75cm	1 (3.1%)	4 (7.0%)	4 (5.1%)		9 (4.8%)
4) 76～100cm	7 (21.9%)	7 (12.2%)	11 (14.1%)	2 (10.5%)	27 (14.5%)
5) 101～125cm	9 (28.2%)	14 (24.5%)	21 (26.9%)	8 (42.1%)	52 (28.1%)
6) 126～150cm	10 (31.3%)	17 (30.0%)	26 (33.3%)	5 (26.3%)	58 (31.1%)
7) 151～175cm	3 (9.3%)	9 (15.8%)	6 (7.7%)	1 (5.2%)	19 (10.2%)
8) 176cm以上	2 (6.2%)	5 (8.7%)	10 (12.9%)	3 (15.8%)	20 (10.8%)
4 底 部 径					
1) 0～25cm					
2) 26～50cm		1 (1.7%)			1 (0.5%)
3) 51～75cm		7 (12.3%)	4 (5.1%)		11 (6.0%)
4) 76～100cm	4 (12.6%)	6 (10.5%)	16 (20.5%)	11 (57.8%)	37 (19.9%)
5) 101～125cm	5 (15.6%)	11 (19.3%)	21 (26.9%)	5 (26.3%)	42 (22.6%)
6) 126～150cm	14 (43.6%)	11 (19.3%)	22 (28.2%)	1 (5.2%)	48 (25.8%)
7) 151～175cm	5 (15.6%)	11 (19.3%)	8 (10.2%)	2 (10.5%)	28 (14.0%)
8) 176cm以上	4 (12.6%)	10 (17.6%)	7 (8.9%)		21 (11.2%)
5 深 さ					
1) 0～25cm	1 (3.2%)	13 (22.9%)	2 (2.6%)	8 (42.1%)	24 (13.0%)
2) 25～50cm	5 (15.6%)	14 (24.5%)	25 (32.0%)	8 (42.1%)	52 (28.1%)
3) 51～75cm	8 (25%)	13 (22.9%)	25 (32.0%)	1 (5.2%)	47 (25.2%)
4) 76～100cm	13 (40.6%)	12 (21.0%)	18 (23.1%)	2 (10.5%)	45 (24.1%)
5) 101～125cm	5 (15.6%)	5 (8.7%)	6 (7.7%)		16 (8.6%)
6) 126～150cm			1 (1.3%)		1 (0.5%)
7) 151cm以上			1 (1.3%)		1 (0.5%)
合 計	32基	57基	78基	19基	186基

をなし、B区寄りに1基(26)ある平面形が長方形を示す土坑が異質(墓塚の可能性が大きい)であると言えよう。規模についてみれば、北端部には開口部径の狭い土坑が多く、この傾向はそのまま底部径にも共通してみられる。深さでは両地区とも76cm~1mに集中する傾向がみられるものの、B区寄りでは平均化した分散傾向がみられ、特にも75cm以下に10基が入るといふ特徴がある。これらから、北端部の土坑はB区寄りより開口部、底部とも径が狭く、その割合に深さのある比較的細長い型が多いことを示している。B区寄りの場合は、北端部に比較して開口部、底部とも径が広いものの、深さでは北端部のそれとほとんど差がない。

北端部とB区寄りには時期差があることは既述したが、このような形態の差がそのまま時期差を反映していると考えられるが、これはあくまで相対的な差であり、個別的な差から所属時期を判定することは不可能である。したがって、B区寄りの21基についての個別的な時期は不明とせざるを得ない。



第372図 底部径と深さの相関図



第373図 断面形態

〔B 区〕

この区では57基が検出され、それらは尾根頂上部—31基、そのやや南東寄り—19基、西突端部が密集する形で分散するが、頂上部と南東寄りとは明確な切れ間がなく、両端にやや密集する部分があり中間がまばらというのが実態であり、この地点の区分には必ずしも厳密な根拠はない。この57基の中には形状や埋土の状況が縄文時代のそれと異なる様相を示す土坑が2基(33・37)あり、ここではこれを除外した55基を対象としてまとめることとする。

遺物が出土した土坑は18基と32.7%にすぎないが、この中には中期—6基、後期—13基が含まれ、さらに中期では中葉—1基と末葉—3基、後期は初葉—1基・後半—3基・末葉—6基に細分され、中期・後期とも2基が確定不能である。

中期の土器を出土した6基(36・40・44・58・59・63)は、頂上部に5基と西寄りに1基が位置し、南東部には分布しない。粗掘り中の土器分布でも、中期の土器は該期の土坑が位置する範囲でのみ出土しており、土坑の分布状況と一致している。中期の住居跡は、西突端部の3棟のみで、頂上部からの検出はない。頂上部は削平された可能性も考えられるが、A区のように住居跡群から離れて土坑だけで遺構群を構成する例もあることから考えれば、頂上部の中期に属する土坑も西突端部の集落に付属する土坑群と理解するのが妥当であろう。したがって、中期に属する土坑は34～36・38～39の西突端部に位置する土坑と、頂上部の40・44・58・59・63の5基を合わせて10基、その他頂上部に若干ある可能性があることから、全体で10数基が該当すると推定される。

後期の場合は、頂上部の8基(41・42・45・47・49・50・60・79)と南東部の4基(70・80・83・84)から出土しており、頂上部の場合は中期に該当する以外は全て後期に属する可能性が強い。南東部の場合は他時期の土器を出土した土坑が皆無であることから考えると、この地区全体が後期に属する土坑群との理解も成り立つ。ということは、頂上部の大多数と南東部には時期差がないことも示しており、分布する地点の区分とは一致しない状況であることを暗示している。南東部に位置する19基の土坑群は、頂上部の住居跡群に付属し、A区のそれと同じ背景をもつ土坑群と言えよう。

また、南東寄り土坑群の東端に位置する7基が、1基を中心にしその周囲に残り6基を円形に配列したような位置関係がみられる。これに近い状況はA区のB区寄り土坑群でも観察されることから、何かしら意識的な状況を示している可能性がある。

集計表に示した各種の集計は、個々の時期比定が不可能であるため一括で作成したが、次にそのまとめをしておく。

平面形は円形—38基、楕円形—17基、方形気味—2基に分けられ、主体を成すのが66.5%を占める円形で、96.5%が楕円形を含めた所謂円形の範囲に入る。断面形はフラスコ形—35基、ビーカー形—4基、バケツ(搦鉢)形—4基、皿形—13基、ボール(半円)形—1基に細分され、フラスコ形が61.5%を占め主体を成している。次いで多い皿形は22.8%であるが、これは頂上部～西斜面の削平が著しいことによる。

規模のうち開口部径は、1.26m～1.5mの範囲が30%に相当する17基と最も多く、次いで1.01m～1.25mが24.5%の14基が該当する。その他は1.51m～1.75mに9基(15.8%)、76cm～1mに7基(12.3%)、1.76m以上に5基(8.7%)、51cm～75cmに4基(7%)、26cm～50cmに1基

(1.7%)の順になり、全体でみると1.01m～1.5mに54.5%に相当する31基が入り、本区の主体を成す。1 m以下は21%の12基で、1.51m以下が14基の24.5%であることから考えると、79%の44基が1.01m以上で、A区に比較して開口部の広い土坑が多いことを表している。底部径をみると、1.01m～1.25m・1.26m～1.5m・1.51m～1.75mがともに19.3%に相当する11基が該当し、1.75m以上も10基(17.6%)と、1.01%以上が43基で全体の75.4%を占めている。他は76cm～1 mが6基の10.5%、51cm～75cmの12.3%、26cm～50cmが1基の1.7%の比率となる。深さは1 m以下が91.2%に相当する52基あり、それがほぼ均等に分散している。他は1.01m～1.25mに全て入る。

以上からまとめると、平面形は円形や楕円形が主体で、断面形もフラスコ形が主であることはA区と共通するが、本区の断面形にはA区に少なかった皿形が22.8%もあり、この点がA区と形態上の違いである。規模でみると、開口部径・底部径ともバラツキが大きいものの、開口部径1.01m～1.5m、底部径1.01m以上、深さ1 m以下が本来の標準的な土坑で、比較的浅く開口部径と底部径の差が大きく、壁面が強く内傾する土坑が多いという結果を示している。この形態に一致する土坑は頂上部北西斜面と南東部寄りに多くみられ、特に南東部寄りに密集している。

〔C 区〕

本区の78基は住居跡の分布する範囲に重複してその周囲に広がり、中央部北斜面と東端部は若干稀薄であるがほぼ全面に散在する分布状況を示す。特に密集する地点もないが、強いて言えば、尾根頂上部に東西方向に直線的に並ぶ傾向がみられるようである。

78基の内71.8%に相当する56基から土器が出土している。その土器を概観すると、中期—6基、後期—47基、晩期—3基があり、56基の84%が後期に属し、本区の土坑数78基からみれば60%以上が後期の土坑と言うことになり、本区が後期の集落を主とすることと一致した状況と言えよう。各時期はさらに細分されることから、次にその小期とその分布の傾向を記す。

中期の6期(97・99・112・148・153・165)は、4基(112・148・153・165)から末葉(大木10式)の土器、1基(99)からは断定し難いが中期末葉～後期初葉頃の土器が出土しているし、残る1基(97)は重複関係から該期とした。分布状況を見ると、北西端に前者3基、東端寄りに後者3基が位置し、中央部には全く存在しない。この状況は住居跡の立地関係と同じ状況であり、北西端の2棟とそれに付属する土坑、東端の1棟とそれに関連する土坑ということができよう。したがって、遺物を出土しない土坑の中にも、該期の土坑を含む可能性が大きい。

後期の47基は、初～前葉—2基(92・112)、中葉—3基(146・147・158)、後～末葉—36基(90・94～96・101・104～106・108・110・114・118・119・121・124)、特定できないが後期—6基(93・107・150～152・157)の小期に細分される。初葉～前葉とした2基は、北西端(92)と中央部(127)に各1基が位置する。本区で検出された該期の住居跡は、中央部南端に位置す

る1棟(2)であるが、遺物の比較では必ずしも同じではないものの、広義の十腰内I式に相当する点では共通することから、この住居跡と土坑はお互いに密接に関連し合う遺構と考えられる。中葉の3基は中央部より東側にあり、西にある2基(146・147)は隣接し、他の1基(158)は南東に12m位離れている。この時期の住居跡は検出されていないことから考えると、調査区外にある可能性が強い。後葉～末葉には36基が該当するが、これらはほぼ全域に散在する分布状況を示し、特に密集する地点は見られない。本区の住居跡ではこの時期が7棟と主体を成すことを考えれば、これらの土坑はこの集落に付属すると理解することができよう。この他に後期とは推定されるが、出土した土器が粗製土器のため時期を特定できない土坑が6基(93・107・150～152・157)ある。これらは、東側に4基(150～152・157)と北西部に2基(93・107)に別れて位置する。北西部の土坑は中期末葉と後期後葉～末葉だけであり、中でも後者が多いことを考えると、この地点の2基は後期後葉～末葉に属する可能性が大きい。東側に位置する土坑は各時期が混在する在り方を示している。後期に限定しても、西側に中葉(2基)、東側に後～末葉(6基)の土坑が至近距離に位置し、明確に断定することは難しい。しかし、周囲に存在する住居跡は後期末葉であり、土坑も後期末葉が最も多いことから考えると、時期の特定できない4基も後葉～末葉に属する可能性が大であろう。

晩期の3基は前葉1基(131)と中葉2基(113・115)に細分される。3基とも隣接する形で中央部西寄りの南斜面上部に立地している。中葉の2基では床面直上から複数の完形土器が出土する共通点がある。特に115は壁際に4点(壺1—正立、壺1と鉢1が合せ口で横転、台付鉢1—倒立)並んで出土した状況に奇異な感じを抱く。貯蔵具として土坑内で使用した土器をそのまま放置したとするには躊躇せざるを得ない。おそらく特別な意味を込めて埋納したものであろう。113も完形土器が2点出土しているが、115の出土の仕方と若干異なる様相を示す。1点は高坏であるが、底面中央に正立、もう1点は小型の鉢でやや壁寄りに横転しており、ただ単に放置された土器と推定される。調査区内では晩期の住居跡は検出されていないことから、該期の遺物が分布する東方の調査区外に存在する可能性が強い。

集計表は本区に位置する土坑を一括して作成しており、時期別の集計は考慮していない。したがって、時期別の状況は看取できないことをお断りしておく。

平面形は74.4%に相当する58基が円形、次いで楕円形が24.3%の19基と、所謂円形を基調とする土坑が77基と97.8%を占め、主体を成している。方形が1基あるが崩壊による可能性がある。断面形をみると、半数強の55.1%に相当する43基がフラスコ形で、次に23基の29.5%を占めるピーカー形が続く、他はバケツ(搦鉢)形—2基、皿形—8基、ボール(半円)形—2基と、合わせても12基の15.4%の比率になり、フラスコ形の壁が崩れるとピーカー形になることを考えると、本来はもっとフラスコ形が多いと推定される。開口部径は1.01m～1.5mに60.2%

に相当する47基が入る。次いで76cm～1 m に11基(14.1%)、1.76m 以上に10基(12.9%)、1.51 m～1.75m に6基(7.7%)、51cm～75cm に4基(5.1%)の順になり、80%が1 m 以上である。この傾向はB区のそれと大差のない状況である。底部径では1.26m～1.5m に28.2%の22基が入り、次に1.01m～1.25m に26.9%の21基、76cm～1.01m に20.5%の16基と、この3者で75.6%に相当する59基が該当する。1.51m 以上には19.1%の15基が入り、51cm～75cm が4基の5.1%と、他は少ない。このことは、76cm～1.5m の底径が本区の主体を成すことを表わしており、B区のそれと比較すると、本区の方が狭い土坑が多いことを示している。深さをみると、26cm～1 m に87%に相当する68基が該当し、1.01m 以上は10.3%の8基、25cm以下は2基と2.6%である。B区との比較ではほとんど差はないが、本区は26cm～1 m に集中する傾向があり、全体ではバラツキが大きいものの比較的揃っていると判断することができよう。

以上をまとめると、形態的には平面形・断面形ともB区のそれとほとんど差がない。本区には断面ピーカー形が比較的多いが、この中にフラスコ形の壁が崩落した土坑も含まれるであろうことを考えると、本来は大多数がフラスコ形であったと推定される。規模をみると、開口部はB区とほぼ同径であるが、底部径はB区より狭く、深さはほぼ同様である。ということは、本区の土坑は、B区より開口部と底部径の比率が小さくて比較的浅い、言わば一回り細目のフラスコ形を示す土坑が多いことを示すものであろう。

〔D 区〕

本区には19基が検出されており、これらは1基(183)を除くと北側を西に流下する沢の左岸崖沿いに立地し、住居跡2棟(22・23)の周囲に散在する分布状況を示している。19基の内遺物を出土したのは、土器—9基(169・170・173～176・181・183～185)、石器—4基(169・174・175・186)で、2基(169・175)からはその両者が出土している。出土した土器の時期や遺構そのものの状況から所属時期をみると、1基(168)は形状が不整で埋土も乱雑であることから、耕作に伴う最近の土坑である可能性が高い。また、埋土内に十和田a降下火山灰を混在する土坑が2基(183・184)あり、これは縄文時代の土坑とするよりも、古代かそれに近い時期と考えるのが妥当であろう。したがって、縄文時代の土坑と言えるのは16基とすることになる。

縄文時代の土坑に限定すると、土器が出土したのは7基となり、後期前葉—4基(173・176・181・185)、後期中葉—1基(175)、特定はできないが後期—2期(169・170)の小期に細分される。本区の土坑分布が北端部に限定されることから、各小期の土坑がお互いに重複し合う分布状況を示しており、土器を出土した土坑も少数である現状をも考慮すると、各小期ごとの分布範囲を明確にすることは不可能である。本区で検出された住居跡2棟は後期初葉に属することが判明していることと、粗掘り中に出土した土器がほとんど後期初葉に属することを考慮すると、本区の土坑も大方は後期初葉に属し、この住居跡に付属する土坑群と言えよう。

平面形は84.3%に相当する16基が円形で、楕円形の2基(10.5%)を加えると18基94.8%が円形を基調とし、本区の主体を成している。隅丸方形気味が1基(5.2%)あるが、古代に属する。断面形では12基63.1%が皿形、5基26.3%がバケツ(播鉢)形を示し、この両者で17基89.4%を占め、他区ではフラスコ形が卓越することと異なる状況を示す。開口部径は1.01m~1.5mに13基68.4%が入り、その他は少ない。しかし、本区では最小が76cm以上で、A区に近い規模と考えることができる。底部径をみると、76cm~1.25mに16基84.2%が該当し、断面形がバケツ(播鉢)形、皿形が主体であることを反映している。深さは50cm以下に84.2%に相当する16基が入り、本区の土坑は他区に比較して非常に浅い土坑であることを示し、これが断面皿形の土坑が多い結果となっている。

以上からまとめると、本区の土坑は平面的には他区と同様円形であるが、断面形がバケツ(播鉢)形、皿形が主体をなし、開口部や底部の径は他区のそれとほぼ同一であるが、深さの浅い土坑で占められる。しかし、本区の土坑が立地する地形は、開畑の際に50cm強の削平(崖縁に原地形が若干残存している)を受けていることから、本来は他区の断面形や深さと同じ状況であった可能性も考えられる。

〈小 結〉

以上、本遺跡から検出された186基の土坑を、A区~D区の区ごとに所属時期、分布状況、形状と規模について集計したが、それを総括して小結とする。

集計の結果、地点によって若干異なるものの、平面形は円形か楕円形とほぼ共通し、断面形はA区~C区はフラスコ形、D区では皿形を示す土坑が主体を成すことが明らかとなったが、D区の皿形もフラスコ形の壁が崩落した結果と考えれば、全区でフラスコ形が卓越するという考え方も成り立つ。開口部径は全区とも76cm~1.5mの範囲に集中し、特に1.01m~1.5mに多く該当する。底部径は各区によって差が大きく、A区が1.26m~1.5m、B区は1.01m以上に散在、C区は76cm~1.5m、D区は76cm~1.25mにそれぞれ集中する。これは、断面がフラスコ形と同じでも壁の内傾角度が各区によって違いがあることを表している。深さをみると、A区~C区は大多数が1m以下、D区は50cm以下に80%が入る現状をみると、総体的に浅い土坑が多いことを示している。深さは地形改変によって変化することも考慮する必要があるものの、本遺跡の土坑の大多数が後期に属することは、前期末葉~中期中葉に多く見られる開口部径1m以上、底部径2m以上、深さ1.5mと言った特大フラスコ形土坑から次第に小型化すると言う一般的な考え方と一致する可能性もある。このことは、A区北端部の土坑(後期初葉)と同区のB区寄りの土坑(後期後葉~末葉)が、所属時期を異にするとともに、形状・規模にも幾分違いがみられることもその傍証と成り得よう。

所属時期には中期末葉（B区頂上部・C区北西端と東部）、後期初葉（A区北端部・C区北西端と中央部・D区）、後期中葉（C区中央東寄り・D区）、後期後葉～末葉（A区のB区寄り・B区頂上部と南東部・C区）、晩期（A区のB区寄り・C区）があり、それらが各区に分散する分布状況を示している。検出された集落の時期との関連からみると、集落と密接な関わりをもち集落の周囲に配置される土坑と、集落と若干の距離をもって土坑だけで遺構群を構成す土坑の二者に細分されることが明白となった。このような配置の仕方が何に起因するかは定かでないが、おそらくは土坑がどんな使われ方をするかという機能的な背景によるものと推定される。土坑群を構成する例としては、A区の北端とB区寄り、B区南東部がその好例である。

機能的な面は、それを明確にする資料が得られていないので不明と言わざるを得ないが、本遺跡の土坑は大多数の平面形が円形で、断面形もフラスコ形が多いことは、所謂墓塚とされる土坑の多くは、平面形が長円形で断面形もビーカー形や皿形か舟底形が主であることと比較すると、少なくとも墓塚とは考え難く貯蔵穴とするが妥当であろう。ただし、A区にある長方形や各区にみられる楕円形を示す土坑は、もしかすると墓塚である可能性も考慮する必要がある。

3) 陥し穴状遺構

本遺跡ではA区—2基、B区—20基、C区—9基、D区—15基の合わせて46基の陥し穴状遺構（以下陥し穴と略称する）が検出されているが、以下に各項目ごとにその概要を記すが、遺構観察一覧表は第6表、その位置関係は第374図に示した。

〔位置と立地〕

A区～D区の各区で検出されていることは既述したが、平面形(特に底部形)と断面形によって何種類かに細分(後項で詳述)されることから、各区ごとに平面形とその分布状況や配列の規則性について記すことにする。

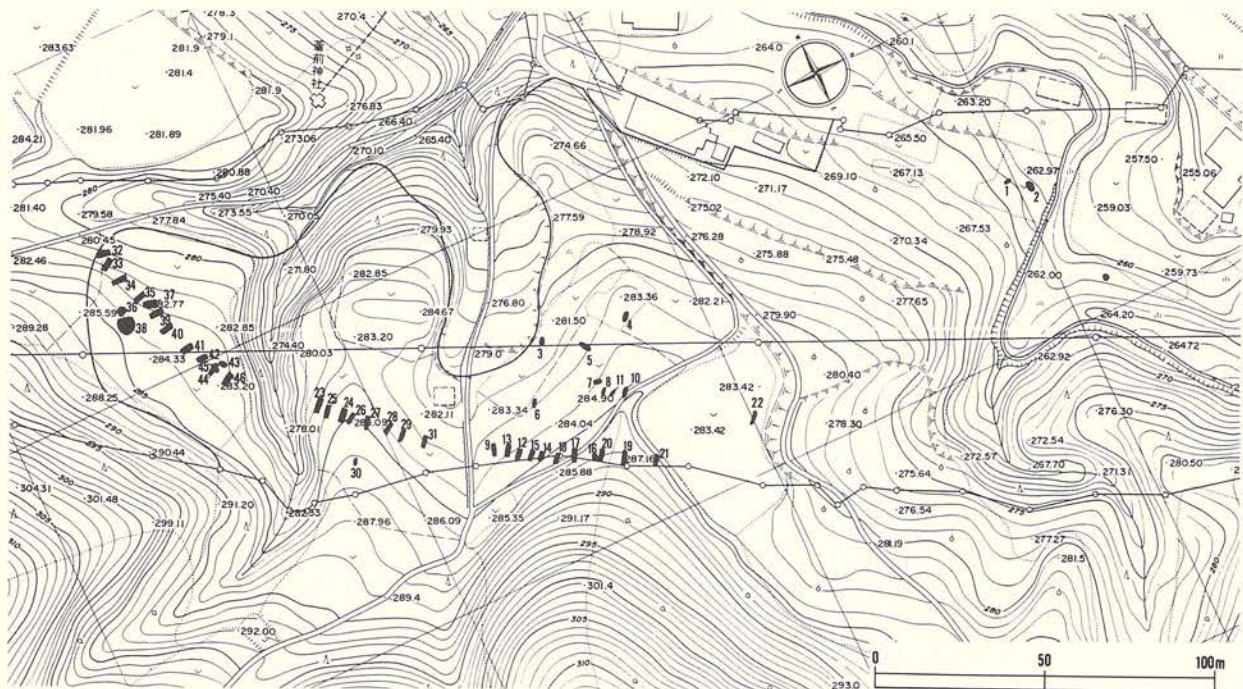
A区では、溝状形型—1基(2)、長楕円形型—1基(1)が北端部の崖沿いに立地している。前者は等高線に並行、後者はほぼ直交するが、所属時期も不明であることから、両者が同時存在の遺構であるかも定かでないため、所謂意識的な規則性の存在も明らかでない。しかし、両者が近接して位置するものの、形状が異なることは異時期の遺構である可能性が大きい。

B区では、長方形型—10基(9・12～19・21)、溝状形型—8基(5～8・10・11・20・22)、幅広溝状形型—2基(3・4)が混在している。長方形型は調査範囲の東端に北東—南西の直線的な配列状況を示している。しかし、詳細にみると、北東4基は配列の間隔が北東から9 m・6.5m・7.5mと、両西6基の間隔が3 m～4.5mであることと比較すると広くとってあるとともに、両者の中軸方向に喰い違いがあることから、北東4基と南西6基は本来別々のセット関係

第6表 陥し穴状遺構観察一覽表

No	遺構名	形状			規模			副穴	時期	分類	遺物
		開口部	底部	状部	開口部	中段	底部				
1	III d 9陥し穴状	長楕円形	長楕円形	形状	2.18m×96cm	2.95m×30cm	1.96m×60cm	60cm	繩	長楕円形	
2	III e 8陥し穴状	長楕円形	溝	状	3.24m×1.08m	3.75m×60cm	3.76m×20cm	1.45m	繩	溝状形	
3	II j 46陥し穴状	隅丸長方形気味	幅広溝状	溝状	3m×1.32m	2.75m×60cm	3.05m×50cm	1.2m	繩後後半	幅広溝状形	土器
4	III a 40陥し穴状	隅丸長方形気味	幅広溝状	溝状	2.15m×62cm	2.08m×45cm	2.15m×30~40cm	85cm	繩	溝状形	
5	III a 43陥し穴状	隅丸長方形気味	細長溝状	状	3.4m×60~70cm	3.34m×40cm	3.6m×15cm	1.15m	繩	溝状形	
6	III c 48陥し穴状	長楕円形	溝	状	3.4m×60~70cm	4.05m×20~25cm	4.05m×20~25cm	1.16m	繩	溝状形	
7	III d 43陥し穴状	長楕円形	溝	状	1.67m×20~25cm	2.14m×16cm	2.14m×16cm	73cm	繩	溝状形	
8	III e 43陥し穴状	長楕円形	溝	状	2.86m×20~25cm	3.4m×18cm	3.4m×18cm	85cm	繩	溝状形	
9	III e 53陥し穴状	隅丸長方形気味	長方形	状	2m×50cm	1.97m×38cm	1.97m×38cm	66cm	繩	長方形	
10	III f 42陥し穴状	溝	溝	状	1.83m×25cm	2.1m×14~22cm	2.1m×14~22cm	1m	繩	溝状形	
11	III f 43陥し穴状	溝	溝	状	3.15m×25~30cm	3.34m×32cm	3.34m×32cm	77cm	繩	溝状形	
12	III f 51陥し穴状	隅丸長方形	長方形	形	(1.82m×80cm)	(1.7m×35~40cm)	(1.7m×35~40cm)	1.23m	繩後後半	長方形	土器
13	III f 52陥し穴状	隅丸長方形	長方形	形	2.05m×60~70cm	1.95m×35~45cm	1.95m×35~45cm	94cm	繩後以降	長方形	土器
14	III g 49陥し穴状	長楕円形	長方形	形	2.05m×84cm	α ×40cm	α ×40cm	1.05m	繩後	長方形	土器
15	III g 50陥し穴状	長楕円形	長方形	形	2.1m×75cm	2.05m×45cm	2.05m×45cm	1.2m	繩後以降	長方形	土器
16	III h 46陥し穴状	隅丸長方形気味	長方形	形	2.3m×1.03m	2.42m×55~60cm	2.42m×55~60cm	1.32m	繩	長方形	
17	III h 47陥し穴状	隅丸長方形気味	長方形	形	2.08m×70cm	α ×40cm	α ×40cm	1.01m	繩	長方形?	
18	III h 49陥し穴状	長楕円形	長方形	?	2m×50cm	2.15m×45cm	2.15m×45cm	1.45m	繩	長方形	
19	III i 44陥し穴状	長楕円形	長方形	形	2.5m×1.25m	3.75m以上×16cm	3.75m以上×16cm	1.56m	繩	溝状形	
20	III i 46陥し穴状	長楕円形	溝	状	3.15m以上×65cm	2.26m×53cm	2.26m×53cm	1.28m	繩	長方形	
21	III j 43陥し穴状	長楕円形	長方形	形	2.46m×1.14m	3.4m×18~20cm	3.4m×18~20cm	1.2m	繩	溝状形	
22	IV b 34陥し穴状	長楕円形	溝	状	2.44m×57cm	2.1m×50cm	2.1m×50cm	1.3m	繩後未	長方形	土器、石器
23	III g 63陥し穴状	長楕円形	長方形	形	2.6m×1.3m	2.35m×50~80cm	2.35m×50~80cm	1.57m	繩後後半	長方形	土器
24	III h 62陥し穴状	長楕円形	長方形	形	2.85m×1.58m	2.2m×40cm	2.2m×40cm	1.45m	繩後未	長方形	土器
25	III h 63陥し穴状	長楕円形	長方形	形	2.43m×1.2m						

No	遺構名	形状		規		模		副穴	時期	分類	遺物
		開口部	底部	開口部	中	段	底部				
26	II i 61 縮し穴状	楕円形	長方形	2.7m×1.45m	2.25m×70cm	2.25m×45cm	1.64m	3	縄後後半	長方形	土器、土製品、石器
27	II j 60 縮し穴状	長楕円形	長方形	2.8m×1.5m	2.2m×60cm	2.3m×35cm	1.57m	3	縄後末	長方形	土器、石器、石製品
28	III a 59 縮し穴状	長楕円形	長方形	2.55m×1.35m	2.2m×55cm	2.28m×35~40cm	1.41m	3	縄後末	長方形	土器、土製品
29	III b 58 縮し穴状	長楕円形	長方形	2.15m×1m	2m×50cm	2.12m×45cm	1.34m	3	縄後前以降	長方形	土器
30	III b 62 縮し穴状	長楕円形	長楕円形	1.65m×90cm	94cm×62cm	58cm×50cm	56cm	3	縄	長楕円形	土器、土製品
31	III c 57 縮し穴状	長方形	長方形	1.88m×64cm	1.86m×42cm	1.86m×35~40cm	96cm	3	縄後	長方形	土器、土製品
32	0 j 73 縮し穴状	楕円形	長方形	2.3m×1.05m	1.95m×70cm	1.85m×50cm	95cm	3	縄	長方形	土器
33	I a 73 縮し穴状	長楕円形	長方形	2.2m×90cm	2.12m×65cm	1.9m×40~50cm	90cm	3	縄後後半	長方形	土器
34	I b 72 縮し穴状	長楕円形	長方形	2.3m×1.3m	2.08m×58cm	2.1m×55cm	1.2m	3	縄	長方形	土器
35	I d 72 縮し穴状	楕円形	長方形	2.2m×85cm	2m×55cm	2.22m×55cm	1.1m	3	縄後末	長方形	土器
36	I d 73 縮し穴状	楕円形	楕円形	2.15m×1.8m	2.8m×1.55m	1.05m×85cm	1.75m	3	縄	楕円形	石器
37	I e 71 縮し穴状	楕円形	長方形	3.15m×2m	2.8m×1.65m	3.2m×1.3m	1.4m	3	縄後	長方形？	土器
38	I e 73 縮し穴状	楕円形	略長方形	5.4m×4.55m	2.8m×80cm	2.05m×80cm	2.77m	3	縄後末	長方形？	土器
39	I f 71 縮し穴状	楕円形	長方形	2.36m×1.26m	2.12m×77cm	1.95m×50cm	1.44m	3	縄	長方形	土器
40	I g 71 縮し穴状	楕円形	長方形	2.8m×1.15m	2.3m×80~90cm	2.25m×55cm	1.36m	3	縄	長方形	土器
41	I i 70 縮し穴状	長楕円形	長方形	2.38m×1.17m	2.15m×70~75cm	2.2m×40~55cm	1.24cm	3	縄晩中葉	長方形	土器
42	I j 69 縮し穴状	長楕円形	長方形	2.5m×1.45m	2.25m×67cm	2.3m×35~50cm	1.27m	3	縄後後半	長方形	土器
43	II a 68 縮し穴状	長楕円形	溝	2.87m×65cm	2.05m×55cm	2.5m×10~20cm	80cm	3	縄後前葉以降	溝状形	土器
44	II a 69 縮し穴状-1	楕円形	長方形	2.24m×1.1m	2.05m×55cm	1.92m×50cm	1.15m	3	縄後前葉以降	長方形	土器
45	II a 69 縮し穴状-2	長楕円形	溝	2.52m×40cm	2.25m×15cm	2.25m×15cm	74cm	3	縄後前葉以降	溝状形	土器
46	II b 68 縮し穴状	長楕円形	長方形	3.3m×1.4~1.5m	2.65m×80cm	2.7m×50cm	1.72m	3?	縄後前葉以降	長方形	土器、土製品、石器

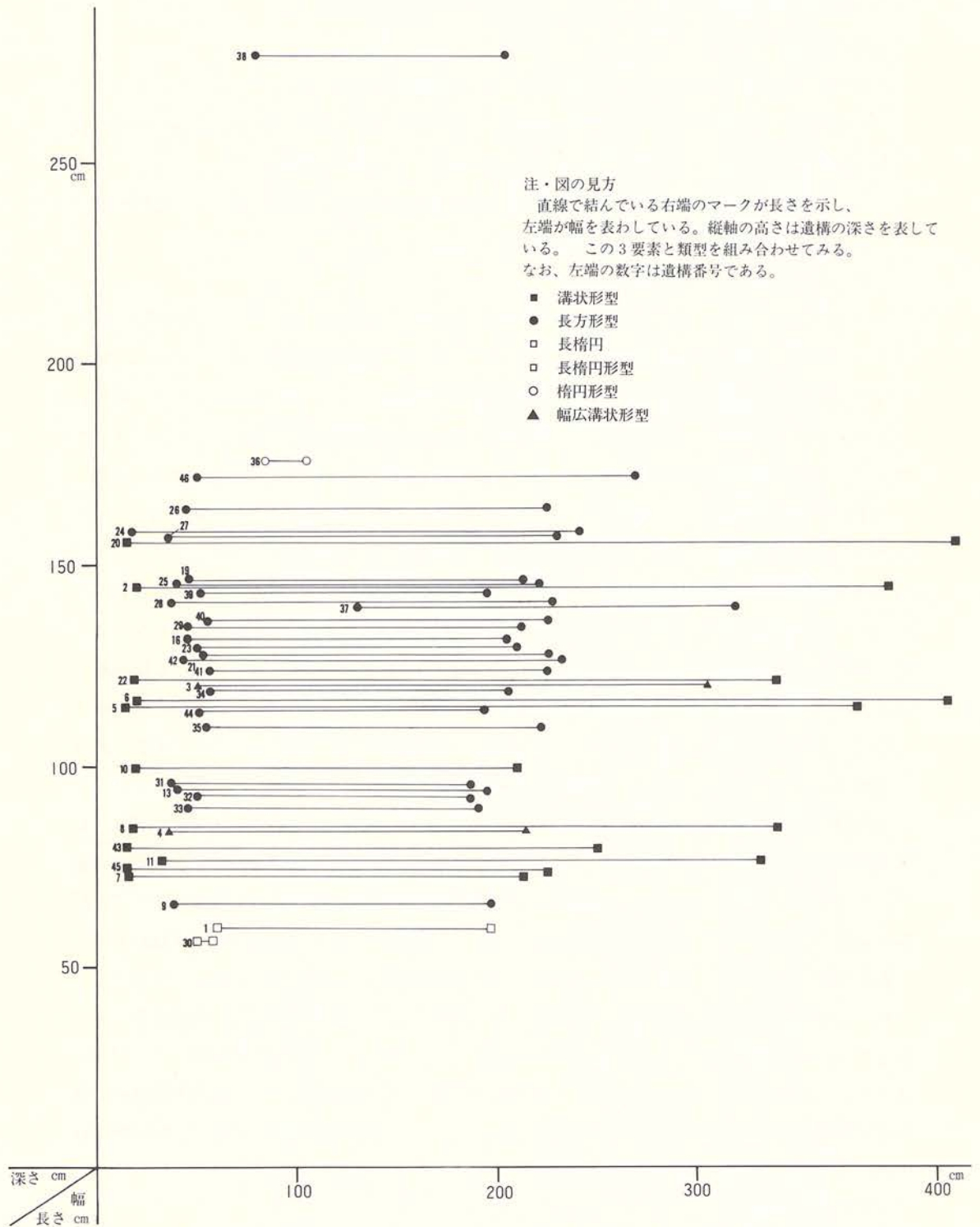


第374図 陥し穴状遺構の分布状況

をなすと理解できる。おそらく、意識的な規則性をもつ配列状況を示すものであろう。溝状形型は頂上部より東側に散在するが、規則的な配列関係は特にみられない。強いて言えば、8と11が並列するのにその可能性がある。しかし、5以外は長軸を等高線に並行させる配置状況を示す。幅広溝状形型は頂上部（4）と南斜面下位に立地し、規則性は認められない。

C区の場合は、長方形型—8基（23～29・31）、長楕円形型—1基（30）があり、前者の8基はほぼ直線的に北東—南西の直線的に配列される位置関係を示す。綿密にみると、B区と同様北東3基と南西5基では配列の間隔が異なり、前者3基と後者5基がそれぞれ違うセット関係を示すものと考えられ、やはり意識的な規則性をもつ配列状況と理解できよう。長楕円形型の1基は、長方形型の配列から東方に離れ、単独で位置する。

D区では、長方形型—12基（32～35・37～42・44・46）、溝状形型—2基（43・45）、楕円形型—1基（36）に分けられる。長方形の配列状況をみると、東北東—西南西に11基が緩い弧状に並ぶが、B・C区の例と同様に東北東の4基、中間の4基、西北西の3基がそれぞれセット関係を示す配列状況を看取することができる。長方形型とした38は、他の長方形型の配列からは外れるとともに、平面形と平面規模には差がないものの深さが2.77mと極端に深くなるという違いがある。したがって、長方形型とはしたが大多数を占める長方形型とは異なる可能性が



第375図長さ・幅・深さの相関図

ある。楕円形型は長方形型とした38の南側に近接して単独で立地する。

〔形状と規模〕

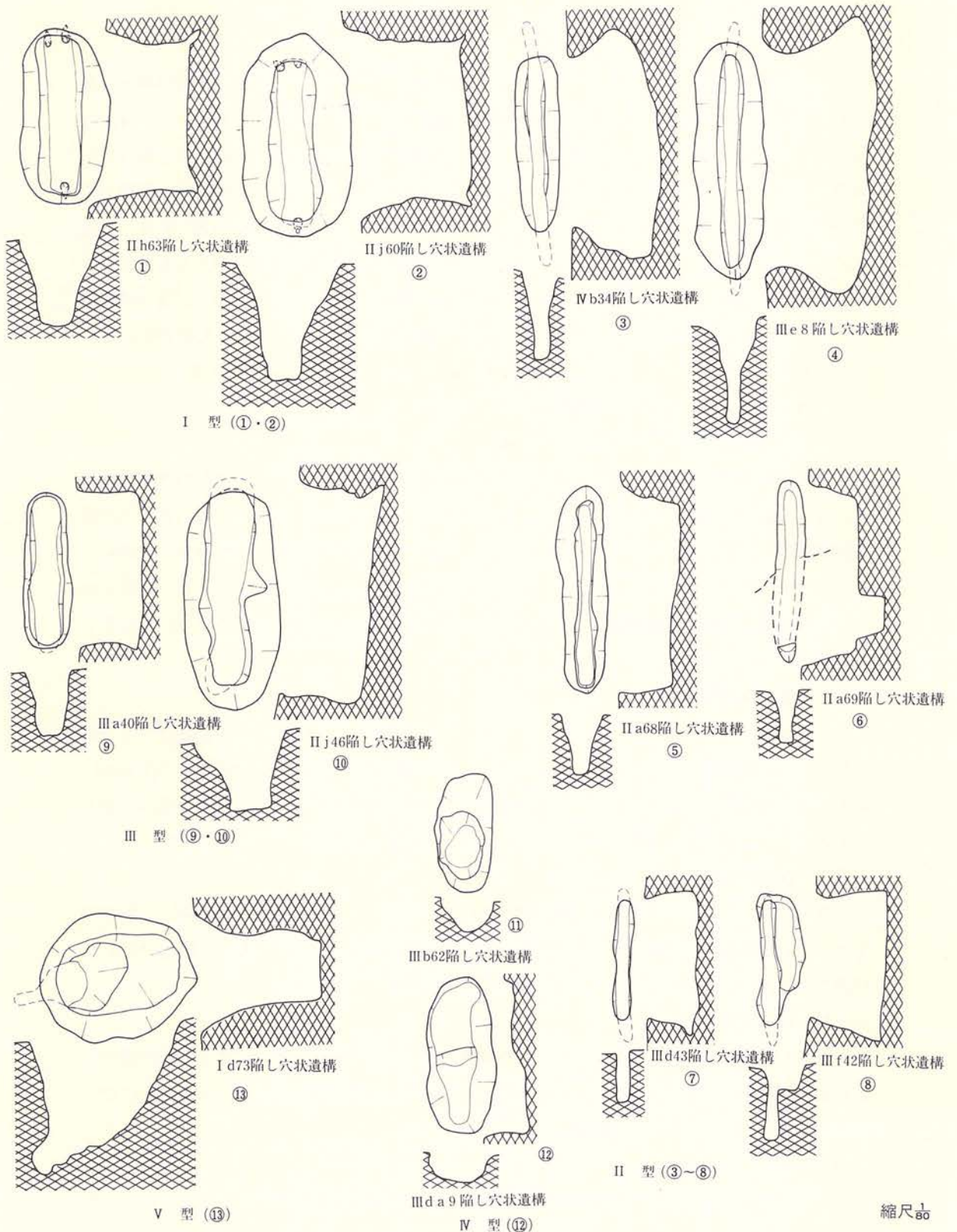
本遺跡で検出された陥し穴には平面形によって何種類かに細分されることは既述したが、ここでは各形状ごとの諸特徴とそれぞれの規模について記すこととする。なお、分類の基準は底面形の形状によったが、それは、開口部の形状は崩落による乱れが著しいことによる。たとえば、長方形型の場合、開口部の平面形が長楕円形を呈しているも、中段～底部では四隅が直交するような長方形を示す例が多くあったからである。

○ I 型 長方形型

B区—10基、C区—8基、D区—11基の合わせて29基と、本遺跡の陥し穴では数が最も多い。平面形をみると、開口部は長楕円形を示す例が多いものの中段から底部にかけては四隅がほぼ直交する長方形（短冊形に近い）を示すことを最大の特徴とする。壁の状況を見ると、長軸両端の場合は軽く内傾するかほぼ直立し、短軸は両側ともほぼ直立する。底面はほとんど平坦であるが、自然地形の傾斜に並行させるように掘られた様相を示している。また、底面の長軸の斜面下位側（西北西～北）の両隅に各1個、対面する斜面上位側では壁長の中央付近に1個の合計3個の斜めに挿した杭穴をもち、中には杭を交換したように2組の杭穴をもつ例もある。規模は各区によって若干差がみられ、B区では長さ2.07m・幅43.9cm・深さ1.12m、C区は長さ2.19m・幅44.3cm・深さ1.4m、D区は長さ2.13m・幅52cm・深さ1.25mである。これを長さと同幅を相関的（長さ÷幅）にみると、B区—4.73、C区—4.93、D区—4.09となり、C区が最も細長く、次いでB区・D区の順に短くなる。深さは削平を受けると浅くなるため端的に比較することは妥当でないが、B区の16・19・21、C区、D区の37・39・40～42等の削平の認められない遺構でみると、1.2m～1.4m位が標準と推定される。

本遺跡では、この型はB区～D区まで約180m間に弧状に連続する配列状況を示し、B区とC区間の浅い埋没谷、そしてC区とD区間の幅20m弱のV字谷を跨いでいる。形状では同種同類に入ることは事実であるが、配置される間隔と中軸線の喰い違い等からみると、全てが同時に連続する状況であったと速断できない。どうも、何基ずつがセットを成し、それが集合した結果検出された配列状況ができあがったと考えるのが妥当であろう。以上のような考えで、詳細にみると、既述したようにB区は北東4基と南西6基、C区は北東3基、南西5基、D区は北東4基と、中央4基、南西3基の合計7組のセット関係とするのが最も矛盾のない見方と考える。しかし、埋土内に十和田a降下火山灰が堆積することは、これらが全く懸け離れた異時期の遺構が集合した結果とは考えられない。おそらくは相互が近接する時期で、短時間に掘削された陥し穴と考えるのが妥当であろう。

○ II 型 溝状形型



第376図 陥し穴状遺構の類型分類

A区—1基、B区—8基、D区—2基の合計11基検出されている。平面形は底面が帯状（溝状）に細長いことを基本としている。短軸の断面観察では、壁の下半が若干外傾するかほぼ直立状で、その上位は外反する。長軸両端の壁はほぼ直立か外傾（43・45）、と内傾する例（前記以外）とある。規模をみると、長さが2m～2.5mの7・10・43・45とそれ以外の3mを超す長さの2種類あるが、幅はA区—20cm、B区—19～21cm、D区—17.5cmと数cmの差であり、有為な差とは断定できない。深さについては長方形型と同様不確定要素が多すぎ何んとも言えないが、A区—1.45m、B区—長い型が1.1m 短い型86cm、D区—77cmと、短い型の方が浅い傾向があることを看取できる。以上の平面形・断面形・を組み合わせると、次のように細分される。

- a. 長さが3m以上で両端の壁が内傾する—2・5・6・8・11・20・22
- b. 長さが2.5m以下で両端の壁が内傾する—7・10
- c. 長さが2.5m以下で両端の壁が外傾する—43・45

各細分された形状と配列の関係をみると、結論的に言えば長方形型のような配列状況は観察されない。しかし、8と11・43と45がともに3m～3.5mの距離で並列する例がみられ、この配列は意識的な状況と考えられる。その他では、5以外は長軸方向を等高線に並行させていることも意識的であろう。全体的にみれば、この型は乱雑に散在することは事実であり、この中から規則性を看取することは無理である。また、同時併存の遺構があるかどうかについても全く不明である。

○III型 幅広溝状形型

B区に2基あるのみである。溝状形型より幅が広くて長方形の長さに近似し、長軸両端の壁が円弧を描く所謂長円形に近い形状を示している。全体的な形状は長方形型に近似しているが、底面の隅部に杭穴をもたないという決定的な違いがある。規模も長さ2.6m、幅40～50cm、深さ1.02mである。規則的な配置は観察されないが、いずれも等高線に中軸を並行させている。

○IV型 長楕円形型

A区—1基・C区—1基の合計2基検出されている。2基とも形が不規則で必ずしも陥し穴とするのに問題がないわけではないが、平面形が幅広溝状形型に近似しており、底面が若干不規則であるという違いがある。ここでは仮に陥し穴状遺構としておく。

○V型 楕円形型

D区から1基検出されたのみである。楕円形型としたのは底面が水抜け穴によって不規則であるが、径が小さく断面が深いピーカー形を示す土坑で、所謂貯蔵穴の土坑とは考えられない状況を呈することから陥し穴状遺構とした。

〔時期〕

本遺跡で検出された陥し穴の所属時期を直接示す状況は全く観察されていない。しかし、数

例の重複関係と出土した土器の時期、埋土等から時期を考えてみる。

まず、重複からみた新旧関係をみよう。D区に位置する溝状形型(43)の1基が、床面直上から後期前葉の土器を出土したII a 68住居跡の床面を掘り込んで作られている。また、43と対を成す溝状形型の別の1基(45)が長方形型(44)によって破壊されている。これから考えると、本遺跡から検出された陥し穴のうち、溝状形型は後期前葉より新しく、さらに、長方形型は溝状形型よりも新しいことを示している。また、D区のII b 68住居跡と長方形型の1基(46)が重複しており、住居跡が後期前葉に位置づけられることを考えれば、長方形型は後期前葉より新しく、さらに溝状形型よりも新しい遺構形態であることを示している。

土器を出土した陥し穴は21基で、それらはB区—5基(3・12~15)、C区—8基(23~29・31)、D区—8基(33・35・37・38・41・42・44・46)に分散し、形態的には長方形型—20基、幅広溝状形型—1基(3)が含まれている。出土した土器をみると後期前葉—3基(29・44・46)、後期後半~末葉—13基(3・12・23~28・31・33・35・38・42)、後期と推定—4基(13~15・37)、晩期—1基(41)に分けられ、後期より古い土器は全く出土していない。まず、長方形型をみると、後期前葉から晩期中葉までの土器が出土している。晩期中葉の土器はD区の1基(41)から、埋土内の遺物として出土している。床面直上出土の土器では、後期末葉のものが1例(38)あるのみである。埋土内出土でみると、縄文以外の文様を施文する土器は全て後期前葉と末葉に属している。後期前葉の土器はその時期の住居跡を壊す陥し穴(46)とその付近のみに限定され、全体の時期を反映しているとは必ずしも言えない。B区・C区の例ではいずれも後期後~末葉の土器に限定され、長方形型の所属時期を示唆している可能性もある。しかし、本遺跡のB区・C区は後期末葉の集落を主体とすることを考えれば、集落に伴うその時期の土器が底面直上から出土することは、少なくとも後期末葉以降かもしくは末葉に近いその前後であることを示すものと理解される。下限については明確にし得ないが、晩期中葉の土器を出土した例があることは、その頃には完全に埋没せず開口していた可能性があることを示すものである。幅広溝状形型からは後期末葉の土器が出土していることから、この型はそれ以降に所属することは確実であろうが、下限については明らかでない。

本遺跡の陥し穴は、形態によって特有の埋土がある。それは長方形型の深さの約 $\frac{1}{2}$ 位下位の埋土内に堆積する十和田a降下火山灰の存在である。それは長方形型にのみ堆積し、他の形態では全く観察されない。堆積しない型は、遺構の重複関係からみてこの火山灰が降下した時には既に全て埋没していたことを示している。十和田a降下火山灰の降下時期は一般に10世紀初め頃と言われていることから考えれば、仮に後期末葉の遺構とすれば降下するまで約2000年の年月を経過してもなお、埋没しきらないで一部開口していたことになる。果してそうであろうか。筆者は疑問を感ずる。おそらくもっと新しい時代の遺構と考えるのが妥当であろう。

以上、重複関係、出土した土器、埋土の状況から所属時期を検討したが、それらを総合して再度考えてみる。まず、陥し穴状遺構と我々が呼称しているこの種の遺構が、狩猟施設で正しいと仮定すれば、一般的には人里を離れた山野に仕掛けるのが普通であろう。少なくとも集落内やその周囲に仕掛けることはないと考える。そうすると、集落が存在した中期末葉・後期前葉・後期後半・弥生時代・平安時代には属しない遺構と考えるのが妥当であろう。また、粗掘り中に出土した土器には晩期後半のものが多くみられ、C区の東方に中心がありそうである。こうしてみると、生活遺物としての土器がない後期中葉・晩期前葉・弥生時代前半・古墳・奈良時代いずれかの時代・時期に伴う遺構と考えることができよう。十和田 a 降下火山灰との関係でみれば、弥生時代～平安時代の遺構（住居跡）に堆積するのが一般的で、縄文時代の住居跡に堆積した例は、掘り込みの深い（約1 m）本遺跡のII g 60住居跡（後期末葉）、二戸市沢内B遺跡（壁高1 m、中期末葉）があるものの、いずれも最上面に断続的に5 cm位の厚さである。本遺構は掘り込みが住居跡より深いとは言え、面積的には小範囲である。層位をみると、底面の上位70cm～1 mの間に堆積するケースが多く、全体的にみれば、II g 60住居跡の埋没程度よりは埋没が進んでいないと考えられる。これらのことから、本遺跡の長方形型は晩期前葉～弥生時代前半頃に位置づけられる遺構と考える。溝状形型の時期決定は困難であるが、後期前葉より新しく晩期前葉までの時間幅に属する遺構と推定され、幅広溝状形型は長方形型と溝状形型の間位置するであろう。その他の形態については明確に提示することは不可能である。

したがって、本遺跡の陥し穴は古い方からの①溝状形型→②幅広溝状形型→③長方形型と変化すると理解することができる。

〈小 結〉

本遺跡で検出された陥し穴状遺構46基について若干の分析を試みたが、簡単に類型ごとの総括しておく。

○ I 型—長方形型（29基）

底面の四隅がほぼ直交に近い長方形を示し、一方の短辺の底面両角隅に2個、それと対面する短辺の底面中央付近に1個の斜位の杭穴をもち、3基～6基がほぼ一定の間隔で直線的に並列することを最大の特徴とする。規模は、長さが1.9m～2.3m、幅35cm～55cm、深さが1 m～1.5 mが標準のようである。所属時期を明示することはまだ時期尚早とも考えられるが、本遺跡での範囲に限定すると、晩期中葉の土器を出土した例があることや十和田 a 降下火山灰の堆積等からみて、縄文晩期前葉～弥生時代前半頃とするのが妥当と考えている。この型は、安比川流域の多くの遺跡で多くの検出例が報告されており、ある一時期に安比川流域で多用された狩猟施設と推定することができる。

○ II 型—溝状形型（11基）

溝状形型を示すことは全て共通するが、長さと同軸の断面形によって次のように細分される。所属時期を先に記しておこう。重複関係からみて後期前葉より新しいことは明らかで、下限は長方形型より古いこともまた明白である。以上から後期中葉頃に属する可能性が最も強い。

II a 型—長さが 3 m 以上で、長軸両端の壁が内傾する型であるが、7 基が該当する。深さはいずれも 1 m 以上と深く、底面が平坦な例はなく例外なく大きな起伏をもつ。規則性はない。

II b 型—長さが 2 m～2.5m で、両端の壁が内傾する型を入れたが、2 基該当する。深さは 1 m 以下で、底面には起伏が多い。2 基が並列している。

II c 型—長さは II b 型と同様 2m～2.5m であるが、両端の壁が直立か外傾する型で、D 区の 2 基が該当する。並列して立地する。深さは 1 m 以下である。

○ III 型—幅広溝状型（2 基）

規模が長さ 2.5m 位、幅 45cm、深さ 1 m 位と長方形型のそれと近似するが、四隅が丸味をもつことと、底面に杭穴をもたないという違いがある。規則性はみられない。所属時期の明示は困難であるが、出土遺物からみて後期末葉以降に属するであろう。

○ IV 型—長楕円形型（2 基）

形状が平面形・断面形とも不整で、果して陥し穴と言えるか否か疑問のある遺構である。

○ V 型—楕円形型（1 基）

底面が水抜け穴によって乱れているが、開口部径 1 m 前後、底径 85cm 位、深さ 1.75m の規模をもち、断面形がビーカー形に近い所謂円筒形に近い陥し穴である。時期は不明である。

以上のことを要約すると、本遺跡で検出された陥し穴は古い方から溝状形型→幅広溝状形型→長方形型の型態変遷をたどることができ、時期的には、溝状形型—後期中葉頃、幅広溝状形型—後期末葉頃、長方形型—晩期前半～弥生前半頃に属するとの結論に達した。

3) その他の遺構

土器埋設遺構—2 カ所と焼土遺構—5 カ所があるが、前節で詳述したことから、本項では特に記すこともないので省略する。

(2) 遺物

1) 土器

本遺跡からは早期・前期・中期・後期・晩期に属する土器が出土しており、前節ではそれらを各種の特徴によって IX 群に大別し、さらに底部と底面に付着する網代痕そして注口部につい

ても別項としてその概要を記した。また、III～VI群の土器は文様によってさらに細分されている。それぞれの群や類については前節で詳述したことから、本項ではそれらの型式学的な位置づけのみを記すことにする。

〔第Ⅰ群土器〕

良く研磨された無文の器面に、並行沈線とその間を充填する貝殻腹縁文を特徴とし、器形も口縁部が内湾することから、早期の貝殻沈線文系土器群の内物見台式土器に相当するであろう。

〔第Ⅱ群土器〕

胎土に繊維を混合し、器表に縄文のみが付された土器であるが、口縁部に横走る結節回転文を付すことを特徴とする。この特徴は前期前葉の円筒下層a～b式にみられることから、その時期かそれに近い時期に属するであろう。

〔第Ⅲ群土器〕

6類に細分されている。1類は器面に縦位の細い捺糸文を付し、前期末葉の円筒下層d式か中期初葉の円筒上層a式に相当するであろう。2類～6類は縄文を付した器面を沈線で区画し、縄文を磨消する土器で、中期末葉の特徴をもつ。2類は縄文の磨消帯が縦に区画されていることから大木9式の新しい時期であろう。4類は体部中位に沈線を全周させて文様施文部と体部縄文部を区画していることから大木10式に属するであろう。3類は2類と4類の中間型と考えられ、大木10式の最も古い部分に相当すると考えられる。5類は4類の土器に刺突痕や口縁部内面に隆起帯を付す等から大木10式に位置づけられるが、4類よりは新しい要素を具備している。6類は縄文を付す器面を沈線で区画し縄文を磨消する特徴は4・5類と同様であるが、器面の縄文が縦位の捺糸文という違いがある。全体的にみれば大木10式に相当するであろう。

〔第Ⅳ群土器〕

後期初～前葉に位置づけられる土器であるが、文様や施文技法によって4類に細分される。

1類は無文の器面に隆帯を付してその上面や平らな面に刺突文を付す土器で、後期初葉に位置づけられている門前式に近似した土器である。2類は口縁端部を肥厚させ、頸部や体部を沈線で施文する土器で、東北南半の堀の内I式や南境式、東北々半の十腰内I式の古い部分に相当するであろう。3類は所謂磨消縄文技法による文様を付し、東北北半の十腰内I式に属する。4類は無文で研磨された器面に沈線のみによって施文した土器で、3類同様十腰内I式に位置づけられる。

〔第Ⅴ群土器〕

後期中葉に属する土器で、2類に細分される。1類は口縁部を沈線で区画したり肥厚させ、その中を縦位の刻目帯を付す土器で、東北南半の宝ヶ峰式や同北半の十腰内II・III式に近い土器であろう。2類は体部縄文が原体0段多条による羽状縄文を付し、沈線で区画した後縄文を

磨消する土器で、宝ヶ峰式の新しい部分、十腰内Ⅲ式に相当すると考えられ、貼瘤が出現する以前の土器と推定される。

〔第Ⅵ群土器〕

後期後葉～末葉に位置づけられる土器であるが、所謂瘤付土器群と総称される土器に相当する。土器形式では、東北南半の金剛寺式・新地式・西の浜式、宮戸Ⅲa・Ⅲb式、同北半の十腰内Ⅳ・Ⅴ式に該当するであろう。分類によれば、1類は多条の並行沈で施文することから新地式に近いとも推定されるが定かではない。2・3類も新地式に相当し、4類は西の浜式に近いと考えられる。5～9類は若干の相違があるもののほぼ新地式や宮戸Ⅲ式、金剛寺式、十腰内Ⅴ式に該当するであろう。詳細な型式比定は後日を期する。10類は宮戸Ⅲa式に近似する。11類は新地式に相当するであろう。

〔第Ⅶ群土器〕

晩期の亀ヶ岡式土器に該当する土器であるが、ここでは大洞式の編年に従うこととする。1類は沈線による三叉文を付した土器で、大洞B式に対比されよう。2・3類は大洞C₁～C₂式に該当し、4・5類は同A式に相当するであろう。

〔第Ⅷ群土器〕

所謂無文土器である。これだけで時期を決定することは困難であるが、器形や他の土器との相伴関係からみて、大方は後期末葉に属すると考えられる。

〔第Ⅸ群土器〕

器表に縄文だけを付した一般に粗製土器と呼ばれている土器である。本群も前群同様、これだけで時期を決定することは非常に難しい。しかし、器形や使用されている原体の種類、他の土器との相伴関係から考えると、ほとんどは後期後半に該当すると思われる。中期末葉頃と推定されるのは275・276・295、後期初葉頃には334～346、晩期は270・325が推定されるがその他は後期後半に相当するであろう。

〔底 部〕

本遺跡から出土した土器は破片が主で、完形品は非常に少ない。実測図を提示した土器も50%強が破片からの復元実測や反転実測したものである。しかし、実際にはここに示したように口縁部～体部を欠失し、体部下位～底部のみを残存する土器が多くあり、本来は既述したように910点前後の土器が使用されていた。ここに示したのは実測可能なものに限定している。

これだけで時期決定することは難しい。形態に高台が付くもの、上げ底となるもの、低い輪高台となるもの、全くのベタ底等がある。

また、底面に網代痕や木葉痕をもつ底部が21点あり、掲載した分で全てである。出土した底部の数からみれば、少ない量である。網代の種類も3種類と少ない。木葉痕は4点であるが、

第7表 土製品計測一覽表

No	遺構名 (グリット名)	出土層位	器種	型態	掲載図版	法 量				備 考
						全長	全幅	厚さ	重さ	
1	II a 60住	埋土2層	耳飾り	滑車型	第31図 1	49.0	49.0	19.0	36.5	一種の滑車型耳飾りか。良く研磨されている。
2	II e 59住	床直No 1	〃	〃	第47図 2	48.0	48.0	12.0	24.2	良く研磨され赤彩されている。
3	II g 60住	東壁埋土	〃	〃	第52図 3					約1/3が残存する。
4	II c 58土坑-3	埋土中位	〃	〃	第190図 4	43.0	46.0	23.0	16.5	作りがやゝ粗雑である。
5	(II a 60)	II層4面	〃	〃	第337図 5	(50.0)	(50.0)	(16.0)	(3.3)	小破片である。全面を研磨している。
6	(II a 61)	II層5面	〃	〃	〃 6	(50.0)	(50.0)	(16.0)	(6.4)	5と同一個体である。
7	(II b 61)	II層4面	〃	〃	〃 7				(4.1)	全面を研磨している。
8	(II b 62)	II層4面	〃	〃	〃 8				(2.3)	成形が粗雑である。
9	(II d 60)	II層	〃	〃	〃 9	45.0	44.0	12.0	16.5	一部を欠損し、器面が研磨されている。
10	(II d 61)	IV層	〃	〃	〃 10	48.0	48.0	15.0	27.5	一部を欠損し、器面が若干荒れている。
11		I層	〃	〃	〃 11	47.0	48.0	17.0	23.9	全面が良く研磨している。
12	(II h 62)	IV層	〃	〃	〃 12					約1/3を残存
13		表探	〃	〃	〃 13	37.0		13.0	13.4	約1/3を欠損し、器面が若干荒れている。
14	II c 56土坑	北西埋土下位	土 偶		第187図 14	(40.0)	32.0	(16.0)		頭、右手・馬足の各部位を欠失する。妊娠土偶である。
15	(B区南沢沿い)	I・II層	〃		第336図 17	(78.0)	(62.0)	(22.0)		下半身を残存し、全体が荒れている。
16	(II b 62)	II層	動物土偶		〃 16					頭部に近い体部を半分残存する。
17	(B区南沿い)	I・II層	不 明		〃 15					
18	(II j 58)	I層	〃		〃 18					無文に沈線による文様がある。
19	(III c 62)	I層	垂飾りか土錘	垂飾りか土錘	〃 19	22.0	9.0	9.0	1.5	器面調整が良くない。管玉的である。
20	II b 58住	北西I層	土器片同盤		第37図 20	46.0	52.0	7.2	20.9	体部下半の無文部を使用。
21	II a 60住	西半埋土1～3層	〃		第31図 21	36.0	47.0	6.3	12.2	原体L R横回転の縄文をもつ体部破片
22		床直	〃		〃 22	29.0	29.0	6.5	6.0	無文の破片を使用
23		西半埋土1～3層	〃		〃 23	30.0	38.0	6.6	7.75	原体L R横回転による縄文に4条の横位沈線
24	II e 59住	北西埋土	〃		第47図 24	27.0	32.0	7.1	6.55	原体L R横回転による縄文のつく体部破片
25	II i 63住	埋土	〃		第56図 25	36.0	39.0	5.4	18.2	無文に2条の横位沈線のつく破片
26	II i 39住	埋土	土器片円盤		第20図 26	35.0	38.0	7.2	11.6	原体L R横回転による縄文のつく体部破片
27	II g 60住	南半埋土	〃		第52図 27	25.0	30.0	5.7	4.5	原体L R縦回転による羽状縄文に沈線を付する破片
28	II j 58土坑-2	東半埋土	〃		第230図 28	32.0	29.0	5.75	7.2	無文土器の破片
29	II i 62陥穴	埋土	〃		第282図 29	47.0	54.0	8.75	24.8	原体L R横回転の縄文をもつ体部破片
30	III a 59陥穴	〃	〃		第284図 30	29.0	36.0	7.70	10.0	縄文の施文はあるが剥落で不明瞭
31	III c 57陥穴	〃	〃		第287図 31	35.0	35.0	1.0	13.05	0段多糸による原体L R横回転による縄文をもつ。
32	(II a 60)	IV層	〃		第338図 32	31.0	28.0	8.2	8.1	〃
33	(II a 60)	IV層1面	〃		〃 33	26.0	26.0	7.4	8.5	無文の破片
34		II層	〃		〃 34	37.0	38.0	6.1	9.4	器表に剥落がある。
35	(II b 52)	IV層	〃		〃 35	34.0	38.0	7.1	11.0	原体L Rの横回転による縄文をもつ。
36	(II c 60)	I層	〃		〃 36	32.0	34.0	6.2	7.2	〃
37	(II c 61)	II層1面	〃		〃 37	27.0	26.5	6.15	4.07	原体L R縦回転による縄文をもつ。
38	(II c 62)	IV層1面	〃		〃 38	40.5	34.0	6.15	17.0	原体R L横回転による縄文と沈線区画磨削がつく。
39	(II d 52)	I層	〃		〃 39	41.0	38.0	5.0	9.0	原体L R横回転による縄文と縁がつく。
40	(II j 5)	I～II層	〃		〃 40	39.0	38.0	8.9	7.0	0段多糸による原体L R縦回転の縄文がつく。
41	(II j 40)	I層	〃		〃 41	51.0	52.0	7.2	25.5	原体L R縦回転による縄文をもつ。
42	(III c 59)	I層	〃		〃 42	38.0	35.0	9.0	12.0	0段多糸による原体L R横回転の縄文がつく。
43	(III c 63)	I層	〃		〃 43	52.0	41.0	7.65	25.5	原体L横回転による無筋縄文がつく。
44	(III c 64)	I層	〃		〃 44	37.0	39.0	9.9	14.6	原体R L縦回転による縄文と沈線がつく。
45		表探	〃		〃 45	39.0	34.0	5.25	9.1	原体R L縦回転による縄文がつく。
46	(C区東)	包含層	〃		〃 46	28.0	26.0	5.20	5.75	原体L R横回転による縄文がつく。
47	I j 41住	床直	碁石状土製品		第19図 47	18.0	18.0	7.05	2.0	碁石に近似した円盤状。
60	III a 59陥穴	埋土	土器片円盤一		第284図 60	39.0	44.0	11.3	28.0	
140	II b 68陥穴	〃	〃		第303図 140	34.0	43.0	7.15	13.15	

全て笹のようである。

〔注口部〕

出土した土器の中で注口の付く完形土器が少ないことから、注口部だけの破片も掲載した。これによって、本遺跡でも注口土器が多用され、器種組成を構成する器種であることが分る。

2) 土製品 (第7表)

土製品は49点出土しているが、その中で最も数の多いのは土器片円盤の29点で、全体の59.2%を占めている。次いで耳飾り13点の27.6%と続き、その他は1点か4点の出土である。土偶は僅か4点と総遺物点数からみて非常に少ない数である。本項では、出土点数の多い土器片円盤と耳飾りについて若干の所見を記し、まとめとする。

〔土器片円盤〕

29点の内48.3%に相当する14点が遺構内からの出土である。遺構外から出土した15点は、そのほとんどに相当する12点がC区からの出土で、その他はA区1点、B区1点、表採1点である。また、遺構内出土の14点は、住居跡から8点57%、陥し穴状遺構5点35.7%、土坑1点7.1%の内訳になる。以上のように、遺構に伴うものが約半数あるとは言え、床面なり底面の直上から出土したものは1点もなく、全て埋土内から散発的に出土している。

大きさをみると、約半数の16点が長径・短径とも3cm台が最も多い。その他には若干バラツキがあり、2cm台に入るのが長径7点(24.1%)・短径6点(20.7%)、4cm台は長径・短径とも4点13.8%、5cm台が長径2点6.9%・短径3点10.3%となる。しかし、総体的には大差がなく、長径・短径がほぼ同数ずつ入ることから考えれば、全てが円形に仕上げると言う意図的な行為と理解することができよう。厚さは5mm台から10mm台まであってバラツキが大きいものの5mm台～7mm台に22点75.8%が入る。ほかは8mm台が3点10.3%、9mm台が2点6.9%・10mm台が2点6.9%の内訳になる。厚さは、既製の土器破片を使用することによる規制が大きく、それが結果的にバラツキが大きいということであろう。5mm～7mm台にしても、5mm台6点、6mm台7点、7mm台9点と特に集中する部分がなく、選んだ破片の厚さが大きく反映しているものとする。重さについては平面の面積と厚みに大きく左右されるが、最低が4.5g、最高が28gと大きな開きがある。しかし、5g～12.5gに18点61.7%が入り、他は1点から3点が該当することから考えると、厚さが5mm～7mm台のものは重さが5g～12.5gの範囲に大多数が入り、8mm以上の厚さが重さ12.5g以上に相当する可能性が強い。

使用形態には土器片錘とか紡錘車と言う説も見受けられるが、本遺跡ではそれを示す明確な資料は得られていない。いずれにしても、大きさや形状から考える限り、厚さや重さを主目的として作られた円盤でないことは明らかであろう。おそらくは、平面的な大きさと形所謂円形

であることが必要とされた結果と考えることができよう。機能的な面については今後に残された課題である。

〔耳飾り〕

本遺跡の土製品で特記すべきは耳飾りである。型態的には滑車形に一括されるが、所謂平面が「ドーナツ」形でその側面に溝を全周されるもの（Ⅰ型）と、「円盤」型の側面に溝を全周されるもの（Ⅱ型）に分けられる。数では前者8点・後者5点となり、前者の方が多い。両者とも全面に研磨痕を残すが、文様は全く付されていない。この中の3点は（1～3）は住居跡、1点（4）は土坑から出土したが、住居跡の1点（3）が床面直上での出土以外は全て埋土内からの出土である。また、出土地点がC区に限定されることを考えると、時期的には後期末葉に属すると考えられ、この形がこの時代の特徴かとも推定される。

3) 石器

本遺跡から出土した石器は総数で431点であり、1点ごとの法量と観察一覧表は第9表、また、器種別構成比率は第8表と第377図、石質別・器種別の集計は第8表と第378図に示した。

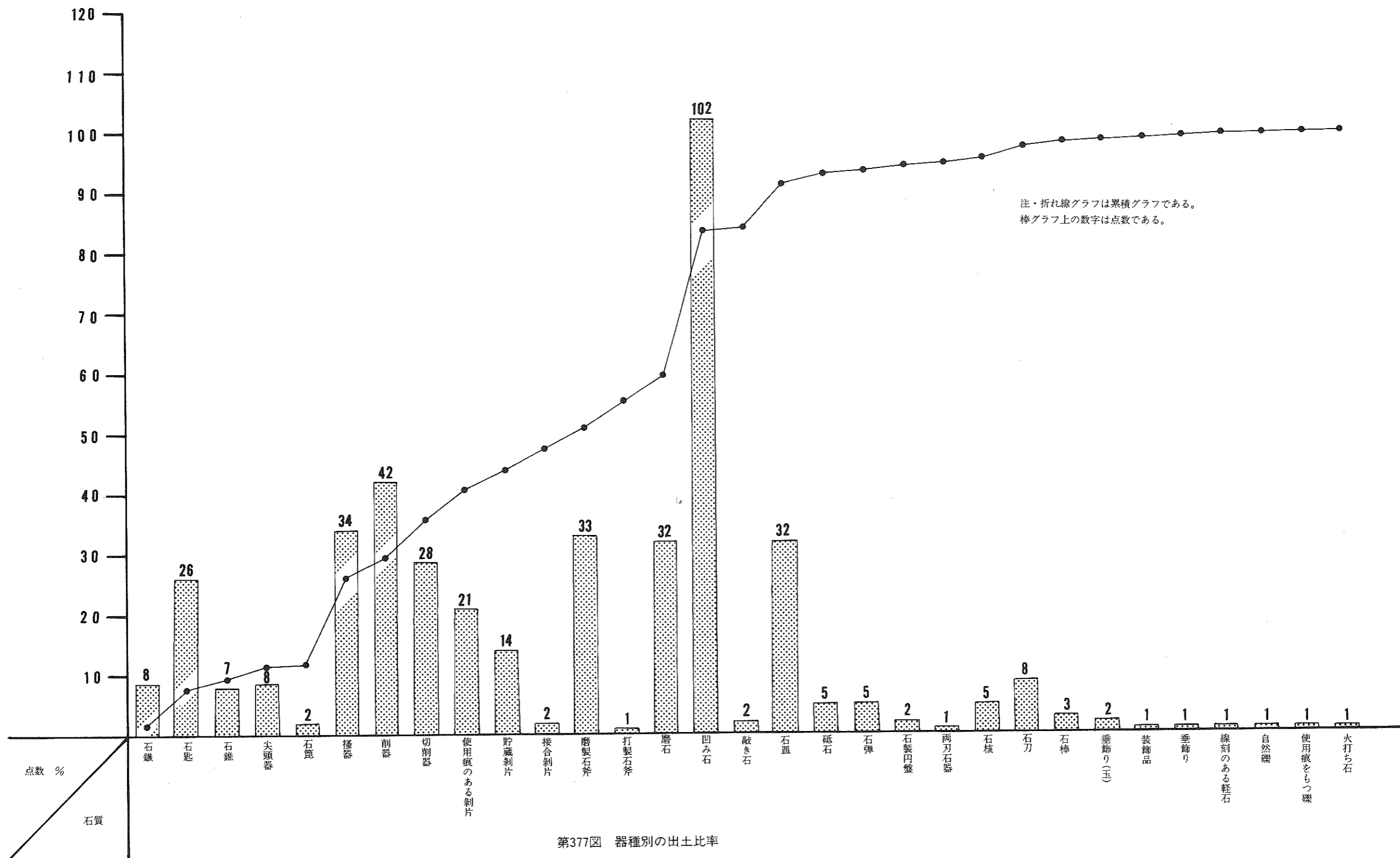
431点の内3点の中・近世の墓墳内から出土したが、ほかは遺構内144点（33.6%）と遺構外284点（66.3%）に分けられる。さらに、遺構の種別と出土点数をみると、住居跡—94点（22%）、土坑—45点（10.5%）、陥し穴状遺構—5点（1.17%）となり、日常生活の場である住居跡からの出土が多いことは納得のいく状況であろう。しかし、石皿とか磨石以外の剝片石器の類が床面直上から出土した例は非常に少なく、大半は埋土内からの出土である。これは、住居外に放置した石器が、集落廃棄後の移動によって窪み状の住居跡に流れ込んだ状況を示すものであろう。ましてや、生活遺物を共伴しないのが一般的な土坑や陥し穴から出土した石器は、全て周囲からの流れ込みと考えると大過ないであろう。

以上の状況を踏まえて、本項では器種組成と石材の選択について若干の所見を記し、まとめとする。

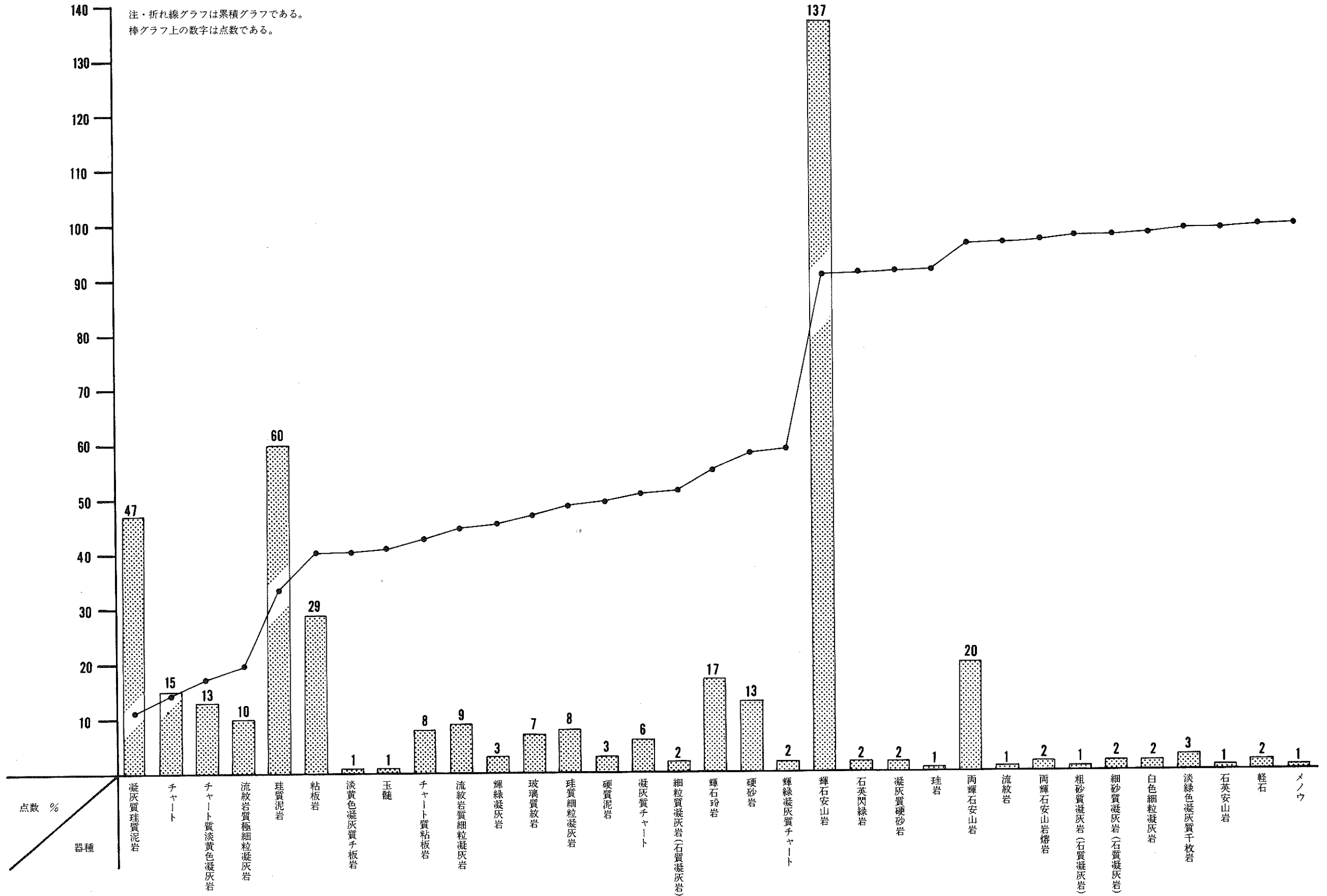
〔器種組成〕（第8表、第377図）

本遺跡の石器は30器種に分類されたが、この中には剝片石器9種類176点（40.8%）、磨製石器1種類33点（7.65%）、礫石器9種類182点（42.2%）、石製品5種類15点（3.5%）、石核1種類5点（1.1%）、剝片2種類16点（3.7%）、その他4種類4点（0.9%）が含まれている。

剝片石器9種類は石鏃・石匙・石錐・尖頭器・石筥・搔器・削器・切削器・使用痕をもつ剝片に細分されるが、最も量の多いのは削搔器類の言わば不定形石器で、125点と剝片石器類の71%を占めている。所謂定形石器の石鏃・石匙・石錐は非常に少なく、この3種合計41点と僅か23.3%のみである。その中でも石鏃が8点だけと極端に少ない特徴がある。



第377図 器種別の出土比率



第378図 石質別の出土比率

磨製石器としたのは磨消石斧のみであるが、磨石も磨製石器に入る可能性があるが、全面を磨っているものと部分的なものがあるため、磨石は礫器の中に入れた。磨製石斧は33点である。

礫石器は打製石斧・磨石・凹み石・叩き石・石皿・砥石・石弾・石製円盤・両刃石器に細分され、その中で凹み石が102点と56%を占めている。次いで磨石と石皿がともに32点で、それぞれ17.6%に相当する。その他の器はいずれも5点以下の出土と少なく、凹み石・磨石・石皿が特に多いという特徴がある。

石製品類は石刀・石棒・玉・装飾品・垂飾りに分けられるが、石刀の8点以外はいずれも3点以下と少ない。この中の特異なものとして橐形をした滑石製の玉がある。

石核は5点のみである。また、剝片には接合した剝片と住居跡の床面に貯蔵された剝片があるものの、数量は両者あわせて16点と少ない。

その他とした器種には、線刻をもつ軽石、墓墳内から出土した自然礫、使用痕をもつ自然礫、墓墳から出土した火打ち石の4種類あるが、各1点出土である。

以上、大雑把に組成をみてきたが、431点という総数からみれば、石鏃・石匙・石錐と言った定形の剝片石器が少なく、逆に凹み石が多いという特徴がある。本遺跡と時期がほぼ並行する岩手郡西根町上斗内Ⅲ遺跡の例では、総点数300点の内石鏃22点(7.3%)、石匙42点(14%)、石錐4点(1.33%)があり、さらに凹み石78点(26%)、磨石23点(7.6%)と言う比率であり、これと比較すると本遺跡の定形石器の少ないのが分る。しかし、総体的にみると、上斗内Ⅲ遺跡では、剝片石器132点(44.29%)、礫石器126点(44.28%)、磨製石斧25点(8.38%)、石製品15点(5.03%)と言う組成であり、本遺跡とはほぼ構成比率が同じであり、これが後期後半の標準的な器種組成である可能性がある。

〔器種と石質の関係〕 (第8表、第378図)

本遺跡で石器として登録した431点は、32種の石材を使用して作られているが、その中には北上山地古生界産が14種類、奥羽山地第三系産18種類が含まれ、石器の点数では前者112点、後者319点となり奥羽山地第三系産の石材を多く使用している。これは、遺跡の所在する安代町は奥羽山系東側の丘陵地をその範囲とすることや、馬淵川支流の安比川が奥羽山地を開析して当遺跡の北方を北東に流れており、石材の多くを河川礫の中に求めていることを考えると、これらの奥羽山系産の石材はこの安比川の河原から採集したと考えるのが妥当であろう。北上山地産の石材は、本遺跡のみならず奥羽山系に立地する遺跡でも各種使用されている。本遺跡と北上山地とは40～45kmの距離があり、当遺跡の周辺部では産出しないと言われていることから、この距離を運ばれた原石を使用したことは確実であろう。

この状況を器種ごとにみると、まず剝片石器は16種の石材を使用している。これらは北上山地産7種57点、奥羽山系産8種145点、各地産1種1点の内訳となり、使われた石材の数にはほ

とんど差はないが、成品の数では圧倒的に奥羽山地系産が多く、北上山地産の石材は使い勝手
があまり良くなかったことを示すものであろう。奥羽山系産の原石の中でも珪質泥岩と凝灰質
珪質泥岩の2種で107点を占め、その他は全て10点以下である。一方、北上山地産の原石はチャー
トと粘板岩が特に多く使用され33点あるが、ほかは少ない。この四種類の石材が多用されてい
ると言うことは、利器として有用であっただけでなく、加工しやすかったこともその一因であ
らう。磨製石斧は5種類の石材を使用しているが、その中の4種類32点が北上山地産の原石を
使用し、奥羽山系産の原石は1種類1点と極端に少ない。これは、原石の硬さによる製作の難
易よりも、使用時の刃部の硬さが要求された結果と考えられる。特に輝石玢岩とチャート質
淡黄色凝灰岩が合わせて26点とそのほとんどを占めている。礫石器は15種類の石材を原石とし
ているが、その中には北上山地産7種18点と奥羽山地第三系産8種164点が含まれており、矢張
り奥羽山地産の石材を多用している。特に輝石安山岩と両輝石安山岩が多く使用され、中
でも凹み石は97%がこの2種類で占められ、その他磨石が65%、石皿が81%が輝石安山岩製である。
北上山地産の石材では硬砂岩が10点と最も多いが、奥羽山地産の石材からみれば9.8%を占める
のみであり、使用頻度がいかに少ないかが判る。しかし、その中で磨石が7点と最も多い。石
製品は出土点数が少ないため断定できないが、北上山地・奥羽山地の各産とも3種類合計6種
類の石材を使用しているが、点数では北上山地12点、奥羽山地3点と、北上山地産の原石を多
用している。特に、粘板岩を石材とする成品が7点と、大半を占めている。

以上、器種の大別ごとにみてきたが、本遺跡のみならず剥片石器を作るための石材と、礫石
器を作る石材は明確に細分される事実がある。本遺跡でもこの状況は歴然としている。すなわ
ち、第8表で明白なように、剥片石器は凝灰質珪質泥岩・チャート・チャート質淡黄色凝灰岩・
流紋岩質極細粒凝灰岩・珪質泥岩・粘板岩・淡黄色凝灰質千枚岩・玉髓・チャート質粘板岩・
輝緑凝灰岩・玻璃質流紋岩・珪質細粒凝灰岩・凝灰質チャート・硬質泥岩・細粒質凝灰岩（石
質凝灰岩）の15種類が使用され、磨製石斧はチャート質淡黄色凝灰岩・輝石玢岩・硬砂岩・輝
緑凝灰岩質チャート・輝石安山岩の5種類であるが、チャート質淡黄色凝灰岩は剥片石器にも
使用される石材であるが、他はどちらかと言うと礫石器に使用される石材である。礫石器の石
材は流紋岩質極細粒凝灰岩・粘板岩・チャート質粘板岩・輝石玢岩・硬砂岩・輝緑凝灰質チャー
ト・輝石安山岩・石英閃緑岩・凝灰質硬砂岩・珪岩・両輝石安山岩・流紋岩・両輝石安山岩熔
岩・粗砂質凝灰岩（石質凝灰岩）・細砂質凝灰岩（石質凝灰岩）・白色細粒凝灰岩の15種類であ
るが、剥片石器と共用するのは粘板岩とチャート質粘板岩の2種類のみであるし、輝石玢岩・
硬砂岩・輝石安山岩の3種類が磨製石斧と共用している。石製品の場合が、粘板岩、珪質細粒
凝灰岩・凝灰質チャートの3種類が剥片石器の石材と重複し、淡緑色凝灰質千枚岩・石英安山
岩・軽石は独自の石材を使用し、礫石器と共用する石材は全くない。このように剥片石器・磨

第8表 器種別・石質別集計表

器種	石質	石 鉢	石 匙	石 錐	尖 頭 器	石 筥	擡 器	削 器	切 削 器	使用痕のある剝片	貯 蔵 剝 片	接 合 剝 片	磨 製 石 斧	打 製 石 斧	磨 石	凹 み 石	叩 き 石	石 皿	砥 石	石 弾	石 製 円 盤	両 刃 石 器	石 核	石 刀	石 棒 ?	垂 飾 り (玉)	装 飾 品 ?	垂 飾 り	線刻のある軽石	自 然 礫	使用痕をもつ礫	火 打 ち 石	合 計 (点数)	比 率 (%)	
1	凝灰質珪質泥岩	3	7	6	3		5	9	14																								47	10.90	
2	チャート	4			2			2	3	2		2																					15	3.48	
3	チャート質淡緑色凝灰岩	1									1		11																				13	3.01	
4	流紋岩質極細粒凝灰岩			3				4									2						1										10	2.32	
5	珪質泥岩		14		2		8	16		7	13																						60	13.92	
6	粘板岩		2				5	8	2	1				1									3	5	2								29	6.73	
7	淡黄色凝灰質千板岩			1																													1	0.23	
8	玉髓				1																												1	0.23	
9	チャート質粘板岩					2		5														1												8	1.86
10	流紋岩質細粒凝灰岩						5	9																										9	2.09
11	輝緑凝灰岩						2																1											3	0.70
12	玻璃質流紋岩							3	3	1																								7	1.62
13	珪質細粒凝灰岩								3	4																	1							8	1.86
14	凝灰質チャート								1																	2								3	0.70
15	硬質泥岩								2	4																								6	1.39
16	細粒質凝灰岩(石質凝灰岩)									2																								2	0.46
17	輝石玢岩												16	1																				17	3.94
18	硬砂岩												3		7	2	1																	13	3.01
19	輝緑凝灰質チャート												2																					2	0.46
20	輝石安山岩												1		21	83		26		4										1	1			137	31.79
21	石英閃緑岩														1		1																	2	0.46
22	凝灰質硬砂岩														1	1																		2	0.46
23	珪岩														1																			1	0.23
24	両輝石安山岩															16			3		1													20	4.64
25	流紋岩																	1																1	0.23
26	両輝石安山岩熔岩																	2																2	0.46
27	粗砂質凝灰岩(石質凝灰岩)																	1																1	0.23
28	細砂質凝灰岩(石質凝灰岩)																	2																2	0.46
29	白色細粒凝灰岩																			1	1													2	0.46
30	淡緑色凝灰質千板岩																								3									3	0.70
31	石英安山岩																									1								1	0.23
32	軽石																											1	1					2	0.46
33	メノウ																																	1	0.23
	合計(点数)	8	26	7	8	2	34	42	28	21	14	2	33	1	32	102	2	32	5	5	2	1	5	8	3	2	1	1	1	1	1	1	431	99.95	
	比率(%)	1.86	6.03	1.62	1.86	0.46	7.89	9.74	6.50	4.87	3.25	0.46	7.66	0.23	7.43	23.67	0.46	7.43	1.16	1.16	0.46	0.23	1.16	1.86	0.70	0.46	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	0.23	99.99		

製石斧・礫石器・石製品間には重複して用いられることは稀であることを示している。このことは、石材と器種の間には明白な使い分けが存在したことを表している。言いかえれば、石鏃を作る時には石鏃用の石を採集し、磨製石斧の時にはその為の原石を手に入れる、ということが存在した可能性を示すものである。

以上のような結果は何も本遺跡のみでない。二戸市上里遺跡（1983・高橋）、岩手町川口II遺跡（1985・高橋）・西根町上斗内III遺跡（1984・高橋）でも同じ様相を示している。しかし、北上山地系の石材にするか、奥羽山系の石材にするかは、遺跡の最短距離に位置する河川の源流がどの山系に発するか大きく左右されるようである。例えば、前記の川口II遺跡では60.75%、上斗内III遺跡では約10%が北上山地系の原石を石材としている。これは、川口II遺跡の場合は丹藤川・江刈内川といった北上川の支流が北上山地を水源としていることから北上山地系の原石が多用されている。一方、上斗内III遺跡は奥羽出地を水源とする涼川の支流斗内川沿いに立地し、北上山地系の原石を直接採集することは無理である。この状況と前記の比率を比較すると、上斗内III遺跡で北上山地系の原石が少ないということを納得することができよう。本遺跡の比率では北上山地産が約26%を占め、上斗内III遺跡の10%よりは多いものの、ほぼ似た使われ方の傾向を示すものと注目しておきたい。

（2）弥生時代

本遺跡では残存状況が良くないものの住居跡1棟と共伴土器、そして、遺構外から若干の土器片が出土している。本項ではそれらの属性を概略的に記し、まとめとする。

1) 住居跡

本遺跡で検出された住居跡は、南向き斜面の上位に立地するため、斜面下位部分は流亡し残存していない。また、1棟のみであったかも明確でない。検出された部分から考えると、壁溝・4本の支柱をもつ竪穴式の住居跡であったことは確実である。平面形については断定できないが、検出された部分のカーブの状態、柱穴の位置との間隔から考えて、卵形に近い楕円形を呈していた可能性が大である。岩手県内の遺跡から検出された弥生時代の住居跡は、円形を示す例が大半を占め、卵形に近い楕円形はほとんどない。この時代にもこのような平面形をもつ住居跡が存在することを示す1例であろう。

所属時期を考えてみよう。出土した土器の中で文様の明確なのは壺1点のみである。この土器は、体部最大径（肩部）と頸部の間に数段の変形工字文を付している。このような特徴は、岩手県で弥生時代初頭の標式土器とされている谷起島式土器に近い様相である。しかし、谷起島遺跡（一関市、1977・小田野）の報告書の限りではみられない。谷起島式土器を出土した沼

第9表 石器計測一覽表

No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	石材產地	掲載図版	量			備	考
							全長	全幅	厚み		
1	II a 58住	北東埋土中位	石	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統	第38図 1	31.0	15.0	4.0	1.35	有莖型、基部先端を欠失、基部にアスファルト付着。
2	II e 59住	セクションベルト	〃	〃	〃	第47図 2	43.0	15.0	5.0	3.38	有莖型、先端部を若干欠失。
3	(II d 61IV)	3面	〃	チャート	北上山地古生界	第339図 3	23.0	9.0	3.0	0.7	有莖型、完形品。
4	(II d 62II)	4面	〃	〃	〃	第339図 4	30.0	17.0	4.0	2.37	有莖型? 作りが粗雑。
5	(III a 48)	IV層	〃	チャート質 淡緑色凝灰岩	〃	第339図 5	26.0	11.0	6.0	2.05	有莖型 〃 石錐的である。
6	(III b 62)	I層	〃	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統	第339図 6	25.0	16.0	2.0	0.78	無莖凹基型、完形品。
7	(II e 8)	IV層	〃	チャート	北上山地古生界	第339図 7	(25.0)	13.0	5.0	1.8	有莖型、先端部と基部を欠損する。
8	II j 37土坑	埋土上部	〃	〃	〃	第111図 8					無莖型、先端部を欠損。
9	II j 59住	東方埋土	石	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統	第58図 9	56.0	27.0	6.0	7.92	線形左刃型、完形品、先端部に自然面を残す。
10	II d 57住	床直	〃	流紋岩質 綠泥岩凝灰岩	〃	第42図 10	55.0	26.0	8.0	12.88	線形右刃型、完形品、抓み部に樹脂付着あり。
11	(II b 60)	IV層	〃	凝灰質珪質泥岩	〃	第339図 11	54.0	17.0	5.0	7.0	線形左刃型、完形品、左側縁に欠損あり。
12	〃	IV層 1面	〃	珪質泥岩	〃	第339図 12	69.0	25.0	8.0	19.55	線形左刃型、完形品、表面に古い剝離面をもつ。
13	(II b 61)	〃	〃	〃	〃	第339図 13	57.0	19.0	4.0	9.0	線形左刃型、完形品、調整が粗雑である。
14	(II d 61)	IV層	〃	〃	〃	第339図 14	53.0	19.0	7.0	5.84	線形左刃型、完形品、左側縁が表面への剝離。
15	(II e 60)	土取穴	〃	凝灰質珪質泥岩	〃	〃 15	65.0	23.0	5.0	12.86	線形右刃型、完形品、形は左刃型であるが刃部は右刃型。
16	(II f 54)	I層	〃	珪質泥岩	〃	〃 16	50.0	27.0	4.0	7.2	線形左刃型、完形品、右上方側縁にバルブを残す。
17	(I i 60)	II層 5面	〃	〃	〃	〃 17	54.0	17.0	5.0	16.16	線形右刃型、完形品、左下方側縁に自然面を残す。
18	(III a 55)	IV層検出面	〃	凝灰質珪質泥岩	〃	〃 18	54.0	14.0	5.0	4.12	線形左刃型、完形品、左側縁にのみ剝離面をもつ。
19	II a 60住	埋土1~3層	〃	珪質泥岩	〃	第32図 19	34.0	55.0	6.0	11.25	楕形右抓み型、完形品、表面への片面剝離。
20	〃	南壁埋土	〃	〃	〃	〃 20	39.0	65.0	7.0	18.34	楕形右抓み型、完形品、右側縁にバルブをもつ。
21	(I j 58)	I層	〃	流紋岩質 綠泥岩凝灰岩	〃	第339図 21	37.0	48.0	7.0	8.97	楕形中抓み型、完形品、表面に古い剝離面を残す。
22	(III a 60)	〃	〃	珪質泥岩	〃	〃 22	34.0	41.0	6.0	8.58	楕形右抓み型、完形品、左上方裏面にバルブをもつ。
23	〃	II層	〃	〃	〃	〃 23	44.0	39.0	4.0	9.74	楕形中抓み型、完形品、左側縁・下縁に裏面からの片面剝離。
24	〃	II層 4面	〃	凝灰質珪質泥岩	〃	〃 24	39.0	46.0	7.0	12.0	楕形中抓み型、完形品、左側縁の裏面にバルブをもつ。
25	(II a 60付近)	II層	〃	〃	〃	第340図 25	42.0	(23.0)	(8.0)	9.77	楕型、欠損品、右側の破損面には折断面をもつ。
26	(II c 62)	IV層	〃	流紋岩質凝灰岩	〃	第339図 26	25.0	43.0	6.0	6.23	楕形左抓み型、完形品、上縁の裏にバルブをもつ。
27	(II c 66)	I層	〃	凝灰質珪質泥岩	〃	〃 27	19.0	(37.0)	4.0	4.95	楕形左抓み型、先端部欠損、破損面に折断面をもつ。

28	(II d 61)	IV層 3面	石	珪質泥岩	北山土地古生界	第340図	28	19.0	(23.5)	2.0	1.82	横形右爪み型、両先端部を欠損、破損面に折断面をもつ。
29	(II e 59)	I層	珪質泥岩	珪質泥岩	北山土地古生界	第340図	29	54.0	(30.0)	6.0	13.98	横形、右側を欠損、破損面に折断面をもつ。
30	(II b 60)	"	"	"	"	"	30	52.0	34.0	6.0	10.34	縦形左爪み型、左側縁下は裏面から片面、右側縁は両面割離。
31	"	"	"	"	"	"	31	59.5	11.0	5.0	3.3	縦形右爪み型、縦長斜片を使い、片面割離で仕あげる。
32	(II d 61)	II層 5面	"	"	"	"	32	40.0	33.0	7.0	9.95	縦形左爪み型、片面割離で仕あげる。
33	(II j 60)	I層	粘板岩	粘板岩	北山土地古生界	"	33	44.0	51.0	9.5	21.0	横形中爪み型、両側縁に裏面からの割離が主である。
34	(III a 39)	"	"	"	"	"	34	104.0	32.0	11.0	41.0	縦形左爪み型、両側縁に裏面からの割離が主である。
35	(II a 58)住	北西 I層	石	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地	第38図	35	32.0	17.0	4.0	1.4	先端部鋭利、爪みを作っている。
36	(II a 60)	II層	"	"	新第三系中新統	第341図	36	25.0	20.0	5.0	2.16	先端部あまり鋭利でない。爪みをもつ。粗雑な作り。
37	"	IV層	"	"	"	"	37	(31.0)	21.0	(10.0)	6.38	爪みもち、先端部を欠損している。
38	(II d 62)	I層	"	"	"	"	38	50.0	20.0	7.0	7.19	先端部のみ調整、先端部は磨減。
39	(C区 T-3)	"	"	"	北山土地古生界	"	39	(24.0)	10.0	4.0	1.22	爪みもち、先端部を欠損するが、磨減痕をもつ。
40	(III b 7)	IV層	"	"	奥羽山地	"	40	26.0	21.0	8.0	4.58	爪みもち、先端部を欠損している。
41	(II b 61)	I層	"	"	新第三系中新統	"	41	49.0	39.0	3.0	13.4	先端部を欠損し、右側縁に裏面からの片面調整がある。
42	(II e 59)住	東・北半ベルト	尖頭器	珪質泥岩	北山土地古生界	第47図	42	(35.0)	20.0	5.0	2.68	側縁に一部割離調整あり、先端部が磨減。
43	(II d 62)	IV層	石	チャート	北山土地古生界	第43図	43	34.0	16.0	5.0	2.27	撞器的であるが、先端部に磨減痕をもつ。
44	(II d 68)	I~II層	"	"	"	第341図	44	28.0	20.0	6.0	2.9	先端部のみ、両面割離がある。
45	(II e 61)	I層	尖頭器	珪質泥岩	奥羽山地	"	45	38.0	27.0	7.0	8.77	先端部のみ調整がある。
46	(III b 63)住	炉開設土器	石	凝灰質珪質泥岩	新第三系中新統	"	46	52.0	28.0	5.0	6.76	先端部の調整が粗雑である。
47	(III e 8)	IV層検出面	尖頭器	珪質泥岩	産地、時代不詳	"	47	42.0	27.0	6.0	6.67	撞器的であるが、先端部のみ調整あり。
48	(C区 T-3)	I層	"	"	奥羽山地	"	48	28.0	23.0	8.0	6.75	先端部だけに調整がある。
49	(D区 T-5)	I~III層	石	凝灰質珪質泥岩	新第三系中新統	"	49	24.0	27.0	2.5	3.1	上縁は折断面である。先端部は両面から調整されている。
50	(II j 6)	IV層	"	"	北山土地古生界	"	50	45.0	16.0	12.0	9.04	周縁部全体に両面割離をもち、刃部は湾曲して丸味をもつ。
51	"	"	"	"	"	第341図	51	33.0	18.0	9.0	6.86	周縁部全体に両面割離をもち、刃部は湾曲して丸味をもつ。
52	I b 40)住	西東埋土上位	擡	珪質泥岩	奥羽山地	第15図	52	42.0	58.0	8.0	28.54	表面下縁・右側縁に裏面からの割離をもち、刃部が磨減。
53	(II a 68)住	中央埋土下	"	チャート質粘板岩	新第三系中新統	第63図	53	19.0	15.0	8.0	1.69	極小形で、右側縁に裏面から割離される。
54	(II d 57)住	南東埋土	"	珪質泥岩	奥羽山地	第42図	54	98.0	26.0	9.0	24.4	粗材の使い方は、縦形石匙右刃型と同様である。
55	(II e 59)土坑	埋土東半	"	粘板岩	北山土地古生界	第201図	55	78.0	45.0	20.0	51.48	下縁に裏面からの片面割離。
56	(II j 58)住	西方埋土	擡	流紋岩質凝灰岩	奥羽山地	第58図	56	63.0	72.0	7.0	52.65	下縁に裏面からの片面割離、軽い磨減痕あり。
57	(III a 45)住	周溝	"	"	新第三系中新統	第364図	57	32.5	55.0	14.0	31.56	下縁に裏面からの片面割離、軽い磨減痕がある。

No	遺構名 (ブリード名)	出土層位	器種	石質	石材産地	掲載図版	法			備考	
							全長	厚み	重さ		
58	(I 836)	I層	攝器	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統	第342図	53.0	28.0	5.0	9.56	表面左側縁に裏面からの片面剥離。
59	(I 173)	IV層	"	輝緑凝灰岩	北上山地古生界	"	39.0	35.0	7.0	11.92	下縁に裏面からの片面剥離。
60	(I 160)	II層	"	珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統	"	17.0	29.0	5.0	2.11	下縁・上縁に裏面からの片面剥離。
61	(II a 60)	"	"	"	"	"	32.0	20.0	6.0	5.14	表面左側縁に両面剥離がある。
62	"	"	"	凝灰質珪質泥岩	北上山地古生界	"	13.0	30.0	9.0	4.06	下縁に裏面からの片面剥離である。
63	(II b 61)	IV層3面	"	粘板岩	"	"	15.0	19.0	6.0	1.94	両縁に両面剥離があるが、下縁の刃部は鈍角に調整。
64	(II b 62)	II層4面	"	チャート質粘板岩	"	"	42.0	25.0	7.0	8.6	裏面の両側縁に表面からの片面剥離あり。
65	(II c 61)	IV層	"	流紋岩質凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統	"	71.0	36.0	12.0	34.8	表面左側縁に裏面からの片面剥離、縦長剥片を使用。
66	(II d 62)	"	"	チャート質粘板岩	北上山地古生界	"	48.0	21.0	9.0	12.63	縦長剥片の表面右側縁に裏面からの片面剥離をもつ。
67	(II e 57)	I層	"	粘板岩	"	"	25.0	25.0	8.0	6.5	下縁に表面から裏面への片面剥離がある。
68	(II f 8)	I～II層	"	"	"	"	29.0	44.0	12.0	17.92	下縁に裏面からの片面剥離がある。
69	(II f 60)	IV層	"	チャート質粘板岩	"	"	50.0	33.0	18.0	22.44	両側縁に裏面からの粗雑な片面剥離がある。
70	(II f 8)	I～II層	"	流紋岩質凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統	"	65.0	87.0	34.0	160.0	下縁に裏面からの片面剥離がある。
71	(II 134)	I層	"	チャート質粘板岩	北上山地古生界	"	30.0	48.0	6.0	14.92	下縁に裏面からの片面剥離がある。
72	(II 151)	I～II層	"	珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統	"	32.0	26.0	9.0	6.82	両側縁に表面の剥離を中心とした両面調整がある。
73	(III b 6)	IV層	"	"	"	"	56.0	26.0	6.0	13.16	縦長剥片を使用し、両側縁に裏面からの片面剥離である。
74	(III b 7)	"	"	"	"	"	19.0	22.0	7.0	5.34	下縁に裏面からの片面剥離があり、右側縁に折断面をもつ。
75	(III b 45)	I層	"	輝緑凝灰岩	北上山地古生界	"	51	22.0	10.0	15.36	下縁に裏面からの片面剥離がある。
76	(C区T-3)	"	"	粘板岩	北上山地古生界	第342図	25.0	23.0	7.0	4.89	下縁に裏面からの片面剥離がある。
77	(D区)	表採	"	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統	"	16.0	21.0	10.0	3.82	調整痕をもつが器種名は不詳、取りあえずここに入れた。
78	"	"	"	珪質泥岩	"	"	59.0	29.0	13.0	20.45	両側縁に裏面からの片面剥離をもつ。
79	"	"	"	凝灰質珪質泥岩	"	"	39.0	27.0	10.0	14.31	表面右側縁に両面剥離があり、刃部が磨滅している。
80	(II a 39)	I層	"	流紋岩質凝灰岩	"	"	43.0	22.0	8.0	8.6	先端部に裏面からの片面剥離をもつ。
81	(II f 8)	I～II層	"	"	"	"	42.0	38.0	17.0	26.45	表面に自然面を残し、下縁に裏面からの片面剥離がある。
82	(III a 8)	"	"	"	"	"	28.0	35.0	12.0	10.7	左側縁に裏面からの片面剥離がある。上縁は折断面である。
83	(III a 68)	I層	"	"	"	"	30.5	39.0	11.0	15.4	下縁に裏面からの片面剥離がある。
84	(III c d 8・9)	"	"	"	"	"	50.0	36.0	10.0	29.2	両側縁と下縁に裏面からの片面剥離がある。
85	(III e 47)	"	"	凝灰質珪質泥岩	"	"	29.0	24.0	5.0	3.5	下縁に裏面からの片面剥離がある。

86	II a 60住	西半埋土4～5層	削器	〃	〃	第32図	86	33.0	17.0	6.0	4.28	表面右側縁に裏面からの片面剝離、切削器的である。
87	〃	埋土1～3層	〃	珪質泥岩	〃	〃	〃	20.0	29.0	3.0	2.53	下縁に表面からの片面剝離。
88	II e 59住	セクシオン・ペルト	〃	粘板岩	〃	北上山地古生界	第47図	29.0	17.0	7.0	5.6	下縁に裏面からの片面剝離。
89	〃	Cライオン・ペルト	〃	凝灰質珪質泥岩	〃	奥羽山地	〃	23.0	17.0	2.0	1.34	下縁に裏面から、裏面左側縁は表面からの片面剝離。
90	〃	セクシオン・ペルト 南西	〃	〃	〃	新第三系中新統	〃	31.0	14.0	5.0	1.84	下縁に裏面からのやや鈍角な剝離がある。
91	II d 59上坑-3	西半埋土	〃	流紋岩質 極細粒凝灰岩	〃	〃	第201図	36.0	43.0	8.0	13.56	右側縁に裏面から裏面への片面剝離をもつ。
92	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	23.0	46.0	10.0	8.86	下縁に表面から裏面への片面調整。
93	II i 61上坑-1	埋土	〃	珪質泥岩	〃	〃	第225図	23.0	24.0	6.0	3.32	表面左側縁は裏面、右側縁は表面からの片面調整である。
94	(I g 36)	I層	〃	凝灰質珪質泥岩	〃	〃	第343図	41.0	44.0	6.0	12.54	左側縁～下縁に微細な片面剝離がある。
95	(I j 59・60)	II層	〃	〃	〃	〃	〃	22.0	13.0	6.0	2.22	下縁は裏面から、右上縁は表面からの片面剝離である。
96	(I g 59)	IV層1面	〃	珪質泥岩	〃	〃	〃	44.0	23.0	6.0	11.13	右側縁下部に表面から、左側縁下部に片面剝離がある。
97	(II a 60)	II層	〃	〃	〃	〃	〃	62.0	42.0	9.0	29.02	左側は裏面へ、右側縁は表面への片面剝離である。
98	(II b 60)	IV層3面	〃	〃	〃	〃	〃	39.0	46.0	10.0	19.55	下位の周縁部に不足の調整剝離がある。切削器的である。
99	(II b 61)	IV層	〃	〃	〃	〃	〃	17.0	25.0	3.0	2.38	下縁に両面、右側縁に裏面からの片面剝離がある。
100	〃	IV層3面	〃	チャート	〃	北上山地古生界	〃	32.0	22.0	6.0	3.1	右側縁に表面からの片面剝離がある。
101	(II b 62)	II層4面	〃	凝灰質珪質泥岩	〃	奥羽山地	〃	16.0	66.0	13.0	12.71	下縁に両面剝離がある。切削器的である。
102	〃	〃	〃	珪質泥岩	〃	新第三系中新統	〃	35.0	23.0	4.0	4.68	下縁左端に両面、右側縁上部は表面からの片面調整である。
103	〃	IV層	〃	〃	〃	〃	〃	32.0	24.0	8.0	6.32	両側縁に裏面からの片面調整がある。
104	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	42.0	29.0	3.0	4.0	左側縁に裏面から、尖端部に両面からの剝離がある。尖頭器的である。
105	〃	〃	〃	チャート	〃	北上山地古生界	〃	40.0	21.0	8.0	8.02	両側縁に表面からの片面剝離である。
106	(II d 58)	I層	〃	粘板岩	〃	〃	〃	39.0	43.0	5.0	13.14	左側下部・下縁に裏面からの剝離がある。
107	(II d 51)	IV層	〃	〃	〃	〃	〃	28.0	20.0	2.0	1.62	左側縁に裏面からの微細な剝離があり、右側縁が折断面である。
108	(II d 62)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	28.0	18.0	5.0	3.46	下縁に簡単な両面剝離がある。切削器的である。
109	〃	IV層1面	〃	珪質泥岩	〃	奥羽山地	〃	41.0	20.0	2.0	5.22	左側縁と下縁に裏面からの片面剝離である。右側縁は折断面である。
110	(II g 55)	IV層	〃	凝灰質珪質泥岩	〃	新第三系中新統	〃	36.0	20.0	3.0	3.0	右側縁に両面剝離があり、切削器的である。
111	(II g 61)	IV層	〃	〃	〃	〃	第343図	49.0	27.0	11.0	23.02	左側縁に裏面への片面剝離があり、若干齧減している。
112	(II j 48)	I層	〃	粘板岩	〃	北上山地古生界	〃	36.0	24.0	6.0	4.37	左側縁が裏面への片面剝離である。
113	(II j 51)	I～II層	〃	流紋岩質 珪質泥岩	〃	奥羽山地	〃	32.0	18.0	12.0	5.64	下縁に両面剝離がある。
114	(II j 60)	IV層	〃	珪質泥岩	〃	新第三系中新統	〃	27.0	22.0	8.0	4.54	下縁に裏面からの片面剝離がある。古い剝離面をもち、再利用の剥片。
115	(III a 51)	I層	〃	流紋岩質 珪質泥岩	〃	〃	〃	43.0	37.0	9.0	18.93	側縁に片面または両面からの剝離がある。

No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	石材産地	掲載図版	法			備考		
							全長	全幅	厚み			
116	(III a 64)	I層	削器	珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統	116	44.0	31.0	8.0	13.64	左側縁に表面からの片面剥離があり、刃部は軽く削減する。	
117	(III a 56)	II層	"	"	"	117	30.0	21.0	4.0	3.48	左側縁に表面からの片面剥離がある。	
118	(III b 36)	I層	"	凝灰質珪質泥岩	"	118	31.0	28.0	9.0	9.0	左側縁と下縁に裏面からの片面剥離がある。挿器的である。	
119	(III c 56)	IV層	"	珪質泥岩	"	119	15.0	31.0	5.0	3.52	下縁に両面剥離がある。	
120	(III d 47)	I層	"	粘板岩	北上山地古生界	120	35.0	27.0	4.0	8.05	下縁に裏面からの片面剥離があり、両側縁に折断面をもつ。	
121	(III f 51)	"	"	●珪質流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統	121	54.0	59.0	9.0	37.45	左側縁下部に表面からの片面剥離がある。	
122	(I f 51)	"	"	流紋岩質粘板岩	"	第344図	45.0	37.0	6.0	9.2	側縁に簡単な剥離を入れて、使用している。	
123	(II b 60)	"	"	粘板岩	北上山地古生界	123	35.0	37.0	9.0	13.8	右側縁に剥離をもち、挿器的でもある。	
124	(II b 61)	"	"	流紋岩質粘板岩	奥羽山地 新第三系中新統	124	47.0	30.0	5.0	7.4	側縁部に小剥離をもつ。	
125	"	II層4面	"	珪質泥岩	"	125	33.0	15.0	4.0	2.7	左側縁を両面剥離している。	
126	(II e 68)	I層	"	粘板岩	北上山地古生界	126	113.0	71.0	31.0	350.00	古い剥離をもつ際の右側縁を両面剥離している。	
127	(III c d 5~6)	I~II層	"	珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統	127	40.0	31.0	7.0	11.60	右側縁に簡単な剥離を入れて使っている。	
128	II b 58住	埋土	切削器	凝灰質珪質泥岩	"	第38図	38.0	23.0	13.0	14.83	削器的である。下縁に両面剥離、表面左側縁に裏面からの剥離。	
129	"	北西1層	"	"	"	129	41.0	51.0	13.0	17.30	下縁に裏面からの片面剥離。	
130	II i 62陥穴	埋土	"	凝灰質珪質泥岩	"	第282図	130	54.0	31.0	11.0	21.10	表面左側縁に折断面をもつ。下縁・右側縁に剥離。
131	II g 60住	"	"	"	"	第53図	131	49.0	27.0	6.0	8.40	側縁に裏面からの片面調整、裏面上端にバルブをもつ。
132	III h 34住	焼土内	"	"	"	第25図	132	26.0	32.0	4.0	2.50	下縁に裏面からの片面調整、上縁に折断面をもつ。
133	(I g 36)	I層	"	"	"	第345図	133	44.0	40.0	9.0	15.66	裏面左側縁下端に表面からの片面剥離。
134	(II a 53)	"	"	凝灰質珪質泥岩	"	134	25.0	42.0	12.0	12.15	削器的である。両側縁に裏面からの片面剥離。	
135	(II a 55)	"	"	珪質流紋岩	"	135	20.0	36.0	5.0	4.36	下縁に裏面からの片面調整。	
136	(II a 61)	II層	"	凝灰質珪質泥岩	"	136	48.0	20.0	8.0	8.75	両側縁に裏面から片面剥離あり、上縁に一次剥離面をもつ。	
137	(II a 62)	IV層	"	"	"	137	55.0	20.0	6.0	8.97	裏面右側縁に表面からの片面剥離。	
138	(II c 61)	"	"	チャート	北上山地古生界	138	31.0	28.0	6.0	7.50	表面右側縁に裏面からの片面剥離、調整が粗雑。	
139	(II d 36)	I層	"	珪質流紋岩	奥羽山地 新第三系中新統	139	48.0	30.0	8.0	11.07	表面右側縁は裏面、裏面右側縁は表面からの片面剥離。	
140	(II d 59)	"	"	珪質粘板岩	奥羽山地中新統	140	58.0	47.0	5.0	15.68	裏面左側縁に表面からの剥離調整。	
141	(II e 60土取穴)	東壁埋土	"	"	"	141	68.0	78.0	17.0	110.00	大型剥片の側縁に簡単な剥離調整が入る。	
142	(II e 62落ち込み)	埋土	"	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統	142	35.0	64.0	4.0	8.27	下縁に裏面からの片面剥離。	

143	(I i 60)	II層	"	"	"	143	71.0	37.0	9.0	26.83	表面両側縁は裏面から、裏面下縁は表面からの片面剝離。
144	(II i 62)	IV層	"	北上山地古生界	"	144	25.0	31.0	4.0	5.07	下縁を裏面からの片面剝離。
145	(II j 46)	I層	"	新第三系中新統	"	145	33.0	34.0	15.0	17.50	下縁に両面剝離。
146	(II j 57)	"	"	"	"	146	29.0	20.0	5.0	4.40	表面右側縁に裏面からの片面剝離。
147	(I j 59~60)	II層	"	奥羽山地 新第三系中新統	"	第345図	52.0	29.0	7.0	13.19	表面両側縁に裏面からの片面剝離、上縁に折断面をもつ。
148	(II j 62)	I層	"	北上山地古生界	"	148	48.0	23.0	6.0	7.17	両側縁に粗雑な片面または片面剝離がある。
149	(III c 8)	I~II層	"	北上山地古生界	"	149	37.0	39.0	9.0	15.27	左側縁に表面からの剝離がある。
150	(III i 34)	II層	"	新第三系中新統	"	150	40.0	24.0	6.0	7.78	表面に裏面からの片面剝離がある。
151	B区	表採	"	北上山地古生界	"	151	33.0	35.0	8.0	13.24	表面左側縁に両面から粗雑な剝離がある。
152	I i 69土坑	埋土	"	奥羽山地中新統	"	第245図	54.0	82.5	16.0	59.06	下縁に両面剝離がある。
153	(II b 61)	II層4面	"	新第三系中新統	"	第345図	47.0	26.0	7.5	10.50	両側縁に簡単な両面剝離がある。
154	(II d 61)	IV層3面	"	北上山地古生界	"	154	(17.0)	(37.0)	(10.0)	(5.80)	両側縁に剝離があり、下縁は折断面である。
155	(II e 68)	I層	"	北上山地古生界	"	155	37.0	49.0	18.0	31.05	左側縁に両面剝離がある。
156	I 3住	埋土	使用痕のある剥片	奥羽山地 新第三系中新統	"	第16図	41.0	28.0	8.0	9.90	微細な剝離痕をもつ。
157	"	"	"	"	"	157	43.0	20.0	5.0	6.32	明瞭な剝離痕がある。
158	II i 39土坑	"	"	"	"	第108図	66.0	37.0	11.0	48.07	使用痕が不明瞭。
159	(II a 50)	I層	"	"	"	第346図	40.0	44.0	11.0	18.00	微細な剝離痕をもつ。
160	(II a 60)	II層4面	"	"	"	160	39.0	37.0	12.0	17.60	下縁は強器的、裏面左側縁に使用痕をもつ。
161	(II b 61)	IV層	"	北上山地古生界	"	161	40.0	46.0	7.0	14.62	裏面右側縁に使用痕をもつ。
162	"	"	"	奥羽山地 新第三系中新統	"	162	35.0	49.0	10.0	16.17	下縁に使用痕をもつ。
163	(II c 69)	I層	"	奥羽山地中新統	"	163	34.0	24.0	9.0	6.14	裏面右側縁に使用痕をもつ。
164	(II j 45)	"	"	"	"	164	20.0	51.0	9.0	9.12	下縁に使用痕をもつ。
165	(II j 57)	"	"	奥羽山地 新第三系中新統	"	165	25.0	43.0	11.0	11.54	剝離らしき痕跡を残す。
166	(III c 56)	IV層検出面	使用痕のある剥片	"	"	166	34.0	46.0	12.0	20.60	下縁に使用痕をもつ。
167	(III d 56)	"	"	"	"	167	51.0	45.0	15.0	24.08	上縁が湾曲し、使用痕をもつ。
168	(III c 56)	"	"	瑤瀾流紋岩	"	168	33.0	18.0	8.0	4.25	裏面右下縁に使用痕をもつ。
169	(D区)	表採	"	奥羽山地中新統	"	169	25.0	26.0	6.0	3.38	裏面右下縁に使用痕をもち、上縁は折断面をもつ。
170	I h 40住	北東埋土	"	奥羽山地 新第三系中新統	"	第15図	36.0	29.0	7.0	8.14	下縁表面に使用痕があり、微細な剝離がある。
171	(I k 36)	I層	"	"	"	第346図	41.0	27.0	8.0	7.42	左側縁に使用痕があり、微細な剝離がある。表面に付着物あり。
172	(D区)	表採	"	北上山地古生界	"	172	31.0	26.0	8.0	6.84	左側縁に使用痕があり、切削器である。

No	遺構名 (ゾット名)	出土層位	器種	石質	石材産地	掲載図版	法			備考		
							全長	全幅	厚み			
173	(I h 39)	IV層	使用痕のある銅片	硬質粘土	奥羽山地 新第三系中新統	173	47.0 (43.0)	40.0 (17.0)	7.5 (6.0)	13.10 (5.00)	左側縁下部に使用痕をもつ。 右側縁に使用痕をもち、左側縁は折断面である。	
174	(II b 61)	I層	銅片	硬質粘土	奥羽山地	174	43.0	63.0	15.0	43.30	下縁に使用痕がある。	
175	(III c 69)	IV層	銅片	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地中新統	175	46.0	21.0	3.0	3.85	側縁に使用痕がある。	
176	(II g 42)	I層	銅片	チャート	北上山地古生界	176	36.0	31.0	4.5	5.55	自然面を打面としている。	
177	I j 41住	壁際埋土	貯蔵銅片	珪質粘土	奥羽山地 新第三系中新統	第199図	177	32.0	38.0	5.2	7.87	自然面を打面としている。
178	〃	〃	〃	〃	〃	178	29.0	39.0	9.0	11.66	左側縁は自然面である。	
179	〃	〃	〃	〃	〃	179	28.2	34.3	5.0	4.50	右下の部分で折断している。	
180	〃	〃	〃	〃	〃	180	24.5	33.0	7.5	6.80	ヒンジフランクチャーをおこなっている。	
181	〃	〃	〃	〃	〃	181	30.0	21.8	3.4	2.02	下端がおかれている。	
182	〃	〃	〃	〃	〃	182	23.0	29.0	4.1	3.35	自然面を打面としている。	
183	〃	〃	〃	〃	〃	183	25.0	35.0	3.9	3.65	〃	
184	〃	〃	〃	〃	〃	184	30.0	23.0	6.2	4.03	〃	
185	〃	〃	〃	〃	〃	185	30.5	24.0	4.2	2.16	〃	
186	〃	〃	〃	〃	〃	186	21.0	22.0	3.0	1.08	〃	
187	〃	〃	〃	チャート質 漆緑色凝灰岩	北上山地古生界	187	34.0	29.2	4.0	4.24	〃	
188	〃	〃	〃	珪質粘土	奥羽山地 新第三系中新統	188	18.4	25.2	3.0	1.45	〃	
189	〃	〃	〃	〃	〃	189	19.0	29.0	3.5	1.74	〃	
190	〃	〃	〃	チャート	北上山地古生界	190	20.0	33.0	14.0	9.95	〃	
191	(II c 69)	I層	接合銅片	チャート	北上山地古生界	第346図	191	25.0	24.0	8.0	4.30	大型、先端約1/2欠失、全面に擦痕をもつ。
192	〃	〃	〃	〃	〃	192	75.0	37.0	24.0	120.00	大型、先端約1/2欠失、部分的に擦痕をもち、先端に黒色付着物あり。	
193	I d 73縮し穴	VII層下位	磨製石斧	輝石砂岩	〃	第292図	193	105.0	38.0	24.0	160.00	大型、先端約1/2欠失、表面は磨き面である。
194	II c 58土坑-1	東壁最上層	〃	〃	〃	第188図	194	35.0	20.0	3.42	3.42	大型、先端約1/2欠失、入念な磨き面をもつ。
195	(II a 60)	I層	銅片	硬砂岩	〃	第348図	195	100.0	36.0	26.5	160.00	大型、先端約1/2欠失、入念な磨き面をもつ。
196	〃	IV層	銅片	輝石砂岩	〃	196	81.0	36.0	22.0	100.0	大型、先端約1/2欠失、頭部に一部叩き面をもつ。	
197	〃	IV層2面	銅片	〃	〃	197	110.0	37.0	27.0	180.00	大型、先端約1/2欠失。	
198	(II b 59)	I層	銅片	〃	〃	198	86.0	41.0	25.0	170.00	大型、頭部を欠失、一部に横し面をもつ。	
199	(II b 61)	II層	銅片	チャート質 漆緑色凝灰岩	〃	199	73.0	41.0	14.0	80.00	大型、完形品であるが、調整が粗雑で自然面を多く残す。	
200	(II c 58)	I層	銅片	〃	〃	200						

201	(II i 61)	I層	輝石安山岩	輝石安山岩	201	(110.0)	43.0	20.0	190.00	大型、先端部を欠失、入念な磨きがある。	
202	(II i 63)	"	輝石安山岩	輝石安山岩	"	202	(57.0)	29.0	80.00	大型、先端部約1/2を欠失。	
203	(II j 6)	IV層	"	"	"	203	(74.0)	27.0	120.00	大型、先端部を欠失し、その部分を叩き石として転用。	
204	(III a 56)	I層	"	"	"	204	(61.0)	25.0	80.00	大型、先端部を欠失。	
205	(III a 61)	III層4面	"	"	"	205	(81.0)	26.0	160.00	大型、頭部約1/2を欠失。	
206	(III b 59)	I層	"	"	"	206	111.0	20.0	140.00	大型、完形品。	
207	(III d 51)	"	チャート質 淡緑色凝灰岩	チャート質 淡緑色凝灰岩	"	207	93.0	19.0	120.00	大型、完形品、全体の成形・調整とも不良である。	
208	(D区T-5)	I~III層	輝石安山岩	輝石安山岩	"	208	(52.0)	24.0	60.00	大型、先端部を欠失。	
209	(B区農道分)	I層	チャート質 淡緑色凝灰岩	チャート質 淡緑色凝灰岩	第349図	209	(64.0)	13.0	33.96	大型、頭部を欠失、成形・調整とも不良である。	
210	II i 61土坑-2	埋土	"	"	第226図	210	(30.0)	(7.0)	10.91	大型、刃部を若干欠すのみ。	
211	II e 59住	"	硬砂岩	硬砂岩	第47図	211	(10.0)	(27.0)	2.21	大型、刃部の小破片である。	
212	II b 58住	埋土下層	輝石安山岩	輝石安山岩	第38図	212	88.0	14.0	51.92	中型、完形品。	
213	II j 60陥し穴	埋土	チャート質 淡緑色凝灰岩	チャート質 淡緑色凝灰岩	第283図	213	67.0	(30.0)	32.56	中型、刃部を欠失。	
214	(II b 61)	II層	"	"	第349図	214	72.0	10.0	33.17	中型、完形品。	
215	(II e 62)	II層5面	輝石安山岩	輝石安山岩	"	215	90.0	20.0	90.00	中型、完形品。	
216	(II e 43)	I層	チャート質 淡緑色凝灰岩	チャート質 淡緑色凝灰岩	"	216	56.0	23.0	18.76	小型、頭部を若干欠失するが、ほぼ完形である。	
217	(II j 45)	"	"	"	"	217	67.0	10.0	31.22	小型、ほぼ完形品。	
218	(III a 60周辺)	IV層連続線出面	"	"	"	218	52.0	22.0	12.58	小型、完形品。	
219	II b 58住	南葉検出面	"	"	第38図	219	(34.0)	21.0	6.92	小型、上半部を欠失。	
220	(II b 61)	IV層	"	"	第349図	220	41.0	17.0	9.22	極小型、完形品。	
221	(II d 61)	IV層	輝石安山岩質 チャート	輝石安山岩質 チャート	北上山地古生界	221	44.0	14.0	6.0	極小型、完形品。	
222	II b 66陥し穴	埋土下部	輝石安山岩	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	222	105.0	45.0	25.0	220.00	大型、一部に敲打調整痕をもつ。刃部を欠損。
223	(III a 5)	I~II層	輝石安山岩	輝石安山岩	北上山地古生界	223	77.5	38.0	23.0	150.00	大型、頭部に敲打調整痕をもつ。完形品。
224	(III c d 8~9)	"	"	"	"	224	(55.0)	(37.0)	83.00	大型、頭部だけを欠す。	
225	(II j 5)	"	"	"	"	225	85.0	31.0	15.5	65.00	中型、完形品。
226	(III b 57)	I層	打製石斧	打製石斧	第226図	226	100.0	54.0	17.0	150.00	両面に磨面をもつ。
227	II b 58住	北壁際埋土	輝石安山岩	輝石安山岩	奥羽山地新第三系	227	110.0	100.0	75.0	143.00	両面に磨面をもつ。
228	II a 60住	埋土I層~III層	硬砂岩	硬砂岩	北上山地古生界	228	84.0	83.0	64.0	64.30	片面に磨面をもつ。
229	II e 59住	北壁際埋土	輝石安山岩	輝石安山岩	奥羽山地新第三系	229	99.0	93.0	75.0	91.80	両面に磨面をもつ。
230	"	炉掘込地業	"	"	"	230	136.0	100.0	51.0	100.50	両面に磨面をもつ。

259	II b 58住	Cライオンベルト 埋土下位	凹	石	〃	〃	第 38図	259	143.0	58.0	(32.0)	46.50	磨面と凹みをもち、他の面は剥落している。
260	〃	北東 I 層	〃	〃	〃	〃	〃	260	(55.0)	48.0	36.0	15.00	両面に凹みをもち、折れている。
261	〃	北東寄床土10cm	〃	〃	〃	〃	〃	261	125.0	61.0	29.0	40.00	両面に凹みをもつ。
262	II a 60住	西半埋土 I ~ III層	〃	〃	〃	〃	第 32図	262	109.0	61.0	29.0	31.50	両面に凹みをもつ
263	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	263	167.0	65.0	43.0	70.00	両面に凹みをもつ。
264	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	264	124.0	59.0	33.0	33.00	片面に凹みをもつ。
265	II a 56住	炉脇床面	〃	〃	〃	〃	第 34図	265	97.0	67.0	58.0	58.00	5面に凹みをもつ。
266	II b 68住	埋土	〃	〃	両輝石安山岩	〃	第 65図	266	116.0	86.0	54.0	54.80	片面にわずかな凹みをもつ。
267	II d 57住	北東埋土	〃	〃	輝石安山岩	〃	第 42図	267	157.0	57.0	35.0	55.00	両面にかすかな凹みをもち、片面に磨面をもつ。
268	II e 59住	北西埋土中位	〃	〃	〃	〃	第 48図	268	147.0	51.0	31.0	45.30	両面にかすかな凹みをもち、片面に磨面をもつ。
269	〃	検出面	〃	〃	〃	〃	〃	269	142.0	60.0	35.5	40.80	両面に凹みをもち、側縁に叩き部をもつ。
270	〃	南埋土 I 層	〃	〃	〃	〃	第 47図	270	119.0	70.0	30.0	40.00	両面にかすかな凹みをもつ。
271	〃	床直No.2	〃	〃	〃	〃	第 48図	271	119.0	61.0	28.0	31.00	両面に浅い凹みをもち、先端に叩きをもつ。
272	〃	床直No.3	〃	〃	〃	〃	〃	272	119.0	64.0	38.0	46.20	両面に凹みと磨面をもつ。
273	〃	北西 I 層	〃	〃	両輝石安山岩	〃	〃	273	130.0	106.0	58.0	70.30	両面に凹みをもつ。
274	〃	北東壁際埋土	〃	〃	輝石安山岩	〃	〃	274	131.0	57.0	45.0	48.00	両面に凹みと、片面に磨面をもつ。
275	〃	南西埋土 I 層	〃	〃	〃	〃	〃	275	153.0	49.0	31.0	34.50	片面に凹みをもつ。
276	II e 59住	北東壁際埋土	〃	〃	輝石安山岩	〃	第 48図	276	130.0	72.0	31.0	60.3	両面に浅い凹みと、片面に磨面をもつ。
277	I h 40住	西壁際	〃	〃	〃	〃	第 15図	277	99.0	62.0	55.0	61.0	両面に磨面、片面に凹みをもつ。
278	〃	床直No.2	〃	〃	〃	〃	〃	278	100.0	83.0	60.0	77.0	両面に磨面、片面に凹みをもつ。
279	〃	床直No.1	〃	〃	両輝石安山岩	〃	〃	279	249.0	112.0	66.0	329.0	両面に凹みと、片面に磨面をもつ。
280	I j 54住	床直No.5	〃	〃	輝石安山岩	〃	第 38図	280	108.0	99.0	68.0	95.3	片面に凹みと磨面をもつ。
281	II g 60住	埋土	〃	〃	輝石安山岩	〃	第 54図	281	98.0	82.0	48.0	53.5	片面に凹みと磨面をもつ。
282	〃	南壁埋土	〃	〃	硬砂岩	〃	〃	282	133.0	33.0	30.0	21.3	両面に凹みをもつ。
283	〃	埋土	〃	〃	凝灰質硬砂岩	〃	〃	283	131.0	54.0	38.0	43.7	両面に凹みと、片面に磨面をもつ。
284	〃	〃	〃	〃	輝石安山岩	〃	〃	284	118.0	64.0	39.0	46.0	両面に凹みをもつ。
285	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	285	(105.0)	63.0	37.0	38.0	両面に凹みと、側面に叩きをもつ。
286	〃	南北軸北半	〃	〃	〃	〃	〃	286	(74.0)	54.0	23.0	17.5	両面に凹みをもつ。
287	〃	西壁埋土	〃	〃	両輝石安山岩	〃	〃	287	165.0	153.0	74.0	204.0	片面にだけ凹みをもつ。
288	〃	東床直	〃	〃	〃	〃	〃	288	153.0	109.0	92.0	218.8	片面に凹み、側面に擦り面をもつ。

No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	石材産地	掲載図版	法量			備考		
							全長	全幅	厚み 重さ			
289	II e 60住	炉石No.3	凹み石	輝石安山岩	奥羽山地新第三系	第54図	289 (156.0)	289 (93.0)	105.0 (89.0)	3面に凹みをもち、炉石に転用されている。		
290	II i 39住	床直No.2	"	"	"	第20図	290	103.0	69.0	片面に凹みと磨面両方をもつ。		
291	II i 63住	埋土	"	"	"	第55図	291	163.0	87.0	264.0	片面に凹みをもち、一部表面が剥落している。	
292	I h 69土坑	埋土	"	阿蘇石安山岩	"	第239図	292	206.0	151.0	345.0	片面に凹みをもつ。	
293	I i 68土坑-4	埋土No.3	"	輝石安山岩	"	第244図	293	117.2	85.0	39.1	両面に凹みをもつ。	
294	"	床直No.2	"	"	"	"	294	110.0	67.2	52.0	両面に浅い凹みをもつ。	
295	I j 53土坑-2	南埋土	"	"	"	第159図	295	151.0	71.0	55.3	両面に凹みをもつ。	
296	II a 53土坑	上部黒色土	"	"	"	第163図	296	120.5	49.5	27.0	両面に浅い凹みをもつ。	
297	II c 58土坑-3	埋土中位	"	"	"	第191図	297	144.0	77.0	31.0	50.0	両面に浅い凹みと、側面に叩き痕をもつ。
298	"	埋土下位	"	"	"	"	298	127.0	67.0	30.0	39.0	両面に凹みと磨面、側面に磨面をもつ。
299	"	埋土中位	"	阿蘇石安山岩	"	"	299	101.0	68.0	35.0	22.0	両面に凹みをもつ。
300	"	"	"	輝石安山岩	"	"	300	113.0	44.0	44.6	44.0	両面に凹みをもつ。
301	II j 58土坑-2	東半埋土	"	"	"	第230図	301	117.0	67.0	43.0	46.2	両面に浅い凹みをもつ。
302	II f 57土坑-1	"	"	"	"	第206図	302	112.0	42.0	22.0	16.5	片面に浅い凹みをもつ。
303	II e 59土坑-1	北半埋土	"	阿蘇石安山岩	"	"	303	75.0	64.0	35.0	15.8	両面に凹みをもつ。
304	"	東半埋土	"	輝石安山岩	"	"	304	99.0	60.0	44.0	39.8	両面に浅い凹みをもつ。
305	II e 59土坑-3	埋土	"	"	"	第204図	305	153.0	61.0	35.0	59.5	片面に浅い凹み、片面に磨面をもつ。
306	II f 57土坑	埋土中位	"	"	"	第206図	306	150.0	62.0	26.0	47.5	両面に浅い凹みと、片面に磨面をもつ。
307	III c 35土坑	埋土2層	"	"	"	第129図	307	128.0	64.0	37.0	45.3	両面に凹みをもつ。
308	III g 43土坑-1	埋土	"	"	"	第150図	308	157.0	64.0	34.0	44.8	両面に浅い凹みをもつ。
309	III g 43土坑-2	北半埋土	"	"	"	第151図	309	90.0	86.0	71.0	70.3	両面に凹みをもつ。
310	"	"	"	"	"	"	310	126.0	68.0	49.0	60.0	片面に凹みをもつ。
311	II g 63縮穴	埋土	"	"	"	第279図	311	158.0	49.0	36.0	39.0	両面に凹みをもつ。
312	(I j 60)	II層5面	"	"	"	第352図	312	153.0	75.0	38.0	468.0	両面に凹みと、片面に磨面をもつ。
313	(I j 60落ち込み)	埋土	"	"	"	"	313	84.0	63.0	47.0	390.0	両面に凹みをもつ。
314	(II a 58)	I層	"	"	"	"	314	(62.0)	63.0	35.0	182.0	両面に凹みをもつ。
315	"	"	"	"	"	"	315	128.0	77.5	34.5	47.5	片面に凹みをもつ。
316	(II a 60)	IV層1面	"	"	"	"	316	161.0	60.0	35.0	47.8	両面に凹みをもつ。

317	(II a 61)	II層	"	"	"	317	135.0	64.0	25.0	341.0	両面に浅い凹みをもつ。
318	"	"	"	"	"	318	79.0	67.0	43.0	26.3	片面に凹みをもつ。
319	"	II層4面	"	"	"	319	77.0	78.0	48.0	26.0	両面に凹みをもつ。
320	"	II層5面	"	"	"	320	100.0	81.0	64.0	69.0	両面に凹みと、磨面をもつ。
321	"	II層4面	"	"	"	321	113.0	160.0	34.0	584.0	片面に凹みをもつ。
322	"	"	"	"	"	322	115.0	100.0	69.0	121.9	片面に凹みと磨面の両方をもつ。
323	(II a 62)	"	"	"	"	323	148.0	60.0	27.0	298.0	両面に凹みと、片面に磨面をもつ。
324	"	IV層	"	"	"	324	150.0	45.0	35.0	280.0	片面に凹みをもつ。
325	"	"	"	"	"	325	121.0	61.0	35.0	380.0	両面に凹みをもつ。
326	(II b 73)	"	"	"	"	326	97.0	62.0	38.0	365.0	両面に浅い凹みをもつ。
327	(II c 61)	"	"	"	"	327	132.0	60.0	29.0	335.0	両面に浅い凹みと、片面に磨面をもつ。
328	"	"	"	"	"	328	166.0	75.0	43.0	751.0	両面に凹みをもつ。
329	"	"	"	"	"	329	133.5	71.5	32.0	410.0	両面に浅い凹みをもつ。
330	"	"	"	"	"	330	91.0	82.0	62.0	668.0	両面に磨面をもち、片面に凹みをもつ。
331	(II c 61)	IV層2面	"	"	"	331	101.0	84.0	48.0	463.0	両面に凹みをもつ。
332	"	II層3面	"	"	"	332	138.0	63.0	31.0	383.0	両面に凹みをもつ。
333	"	"	"	"	"	333	100.0	65.0	34.0	33.2	両面に凹みと、片面に磨面をもつ。
334	"	IV層2面	"	"	"	334	119.0	67.0	56.0	55.0	3面に凹みをもつ。
335	"	"	"	"	"	335	129.0	53.0	29.0	352.0	両面に凹みをもつ。
336	(II c 62)	IV層	"	"	"	336	132.0	44.0	27.0	228.0	片面に凹みをもつ。
337	"	IV層2面	"	"	"	337	104.0	48.0	35.0	285.0	両面に凹みをもち、一部を欠失している。
338	"	IV層1面	"	"	"	338	129.0	52.0	38.0	422.0	2面に凹みと磨面をもつ。
339	"	IV層2面	"	"	"	339	142.0	57.0	31.0	400.0	片面に凹みと磨面をもつ。
340	(II c 69)	IV層	"	"	"	340	116.0	61.5	32.0	37.5	両面に凹みをもつ。
341	(II c 70)	"	"	"	"	341	113.0	113.0	41.0	56.0	両面に凹みをもつ。
342	(II e 61)	IV層1面	"	"	"	342	102.0	67.0	26.0	23.3	両面に浅い凹みをもつ。
343	"	"	"	"	"	343	76.0	74.0	50.0	40.0	両面に浅い凹みをもつ。
344	(II e 62)	IV層	"	"	"	344	147.0	71.0	36.0	55.5	両面に浅い凹みをもつ。
345	"	I層	"	"	"	345	119.0	58.0	30.0	31.3	両面に凹みと磨面をもつ。
346	"	IV層	"	"	"	346	127.0	65.5	42.0	49.8	両面に凹みをもつ。

No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	石材産地	掲載図版	法量			備考		
							全長	全幅	厚み			
347	(II e 62)	IV層	凹み石	阿輝石安山岩	奥羽山地新第三系	第354図	163.0	56.0	66.0	両面に浅い凹みをもつ。		
348	(II f 61)	"	"	"	"	"	95.0	84.0	34.0	両面に浅い凹みをもつ。		
349	(II h 61)	I層	"	"	"	"	145.0	59.0	56.5	両面に浅い凹みをもつ。		
350	(II f 62)	"	"	"	"	"	95.0	60.0	52.0	片面に浅い凹みをもつ。		
351	(II i 59)	"	"	"	"	第356図	144.0	124.0	58.8	両面に凹みをもつ。		
352	(III a 39)	"	"	"	"	"	138.0	68.0	45.8	両面に浅い凹みをもつ。		
353	(III a 60)	"	"	"	"	"	16.0	62.0	48.0	両面に浅い凹みをもつ。		
354	(III d 7)	表採	"	"	"	"	158.0	43.0	52.0	両面に浅い凹みをもつ。		
355	(III d 56)	IV層	"	"	"	"	69.0	65.0	41.0	片面に凹みをもつ。		
356	(III h 60)	I層	"	阿輝石安山岩	"	"	172.0	57.0	30.0	両面に凹みをもつ。		
357	(B区)	I、II層	"	"	"	"	149.0	168.0	41.0	片面に浅い凹みをもつ。		
358	(D区T-5)	"	"	"	"	"	116.0	95.0	41.0	片面に浅い凹みをもつ。		
359	"	I、III層	"	"	"	"	121.0	69.0	53.0	片面に凹みをもつ。		
360	I d 73竈穴	埋土最下部	"	"	"	第292図	113.0	86.0	56.0	片面に多くの凹みをもつ。		
361	(II b 53)	I層	叩き石	硬砂岩	北上山地古生界	第359図	123.0	103.0	64.0	両面に叩き潰しがある。		
362	(II b 61)	II層	"	石英閃緑岩	"	"	(39.0)	40.0	24.0	50.0		
363	II d 57住	炉石	石皿	輝石安山岩	奥羽山地新第三系	第42図	159.0	188.0	78.0	2700.0	片面は石皿、片面は石皿的使用である。	
364	II e 59住	床直石器No.1	"	"	"	第49図	285.0	341.0	70.0	9450.0	両面に使用面をもつ。	
365	II e 59住	南東部埋土	"	"	"	"	224.0	207.0	54.0	2700.0	片面に使用面をもつ。	
366	II g 60住	床直No.1	"	流紋岩	奥羽山地新第三系中新統	第54図	366	520.0	340.0	40.0	両面に使用面をもつ。	
367	"	" No.3	"	輝石安山岩	奥羽山地新第三系	"	367	260.0	208.0	54.0	4250.0	両面に使用面をもつ。
368	II i 39住	No.1	"	"	"	第20図	368.0	378.0	10.0	"	片面に使用面をもつ。	
369	II i 63住	埋土	"	"	"	第55図	240.0	217.0	41.0	2350.0	片面に使用面をもつ。	
370	I i 68土坑-4	床直No.2	"	"	"	第244図	370	213.0	172.0	38.0	2590.0	片面に使用面をもつ。
371	II c 69土坑	埋土	"	"	"	第256図	371	271.0	235.0	59.0	5500.0	片面に使用面をもつ。
372	(II i 区)	"	"	阿輝石安山岩塔岩	岩手火山第四系	第358図	372	(77.0)	(68.0)	33.0	180.0	面取りをした石皿である。破片である。
373	II j 37土坑	埋土最下部No.1	"	輝石安山岩	奥羽山地新第三系	第111図	373	209.0	205.0	46.0	3280.0	両面に使用面をもつ。
374	(II a 68)	IV層	"	"	"	第358図	374	207.0	192.0	139.0	6440.0	亜角礫の一部を使用面としている。

375	(II b 68)	"	"	"	"	第357図	375	(68.0)	(102.0)	(76.0)	625.0	両面に使用面をもち、欠損している。
376	(II c 61)	"	"	"	"	"	376	141.0	113.0	37.0	638.0	面取りした石皿である。
377	(II e 69)	I層	"	"	"	奥羽山地新第三系	377	223.0	293.0	114.0	7920.0	片面に使用面をもち、一部欠損している。
378	(II e 68)	IV層	"	"	"	"	378	277.0	131.0	89.0	5740.0	片面に使用面をもち、一部欠損している。
379	"	"	"	"	"	"	379	148.0	90.0	25.0	590.0	両面に使用面をもつ。
380	(II f 62)	I層	"	"	"	"	380	171.0	122.0	33.0	1060.0	両面に使用面をもつ。
381	(II f 69)	IV層	"	"	"	"	381	(84.0)	(99.0)	(36.0)	463.0	大部分を欠失する。片面に使用面をもつ。
382	(III a 61)	II層2面	"	"	"	"	382	(53.5)	(61.0)	(14.0)	65.0	破片である。片面に使用面をもつ。
383	(III d 56)	IV層	"	"	"	奥羽山地新第三系中新統	383	(69.0)	(33.0)	(33.0)	110.0	小破片である。片面に使用面をもつ。
384	(C区T-2)	西端I層	"	"	"	奥羽山地新第三系中新統	384	(89.0)	(100.0)	58.0)	540.0	破片であるが、面取りした石皿である。
385	(C区T-3)	I層	"	"	"	"	495	265.0	200.0	72.0	4500.0	片面に使用面をもつ。
386	(D区T-3)	I層	"	"	"	奥羽山地新第三系中新統	386	(125.0)	(110.0)	(23.0)	350.0	破片で、片面に使用面をもつ。
387	"	"	"	"	"	奥羽山地新第三系中新統	387	(256.0)	(193.5)	(22.2)	2000.0	周囲が欠損し、片面にのみ使用面をもつ。
388	II i 39土坑-1	床面直上	"	"	"	奥羽山地新第三系中新統	388	(152.0)	(77.0)	(44.0)	880.0	破損している。
389	II i 39土坑-1	"	"	"	"	"	389	(73.0)	(100.0)	36.0	420.0	破損している。
390	"	"	"	"	"	"	390	(106.0)	(63.0)	(27.0)	200.0	破損している。
391	"	"	"	"	"	"	391	(145.0)	(106.0)	42.0	1010.0	破損している。
392	II b 58住	"	"	"	"	第39図	392					
393	"	"	"	"	"	"	393					
394	"	"	"	"	"	"	394					
395	I h 69土坑-1	床直No.2	砥石	"	"	奥羽山地新第三系	395	202.0	148.0	147.0	6220.0	凹みと、砥石面をもつ。
396	(II i 70)	IV層	"	"	"	"	396	160.0	199.0	91.0	2300.0	片面に砥石面をもつ。
397	II a 55土坑-1	埋土	"	"	"	奥羽山地新第三系中新統	397	79.0	66.0	23.0	152.0	片面に砥石面をもつ。
398	(II c 70)	IV層	"	"	"	奥羽山地新第三系中新統	398	128.0	(120.0)	52.0	850.0	両面に砥石面をもつ。
399	(III a 5)	I~III層	"	"	"	奥羽山地新第三系中新統	399	135.0	91.0	40.0	470.0	片面に砥石面をもつ。
400	II a 56	北西埋土	石	彈	"	"	400	50.0	48.0	40.0	130.0	扁円球状の自然礫。
401	(II b 61)	II層4面	"	"	"	"	401	42.0	37.0	26.0	60.0	扁円球の自然礫。
402	(I j 40)	I層	"	"	"	"	402	44.0	42.0	38.0	50.0	"
403	(II b 61)	IV層	"	"	"	"	403	48.5	41.5	35.0	95.0	"
404	III k 45住	埋土No.2	"	"	"	"	404	51.0	53.0	43.0	55.0	" 大きな割に軽い。

No	遺構名 (フリット名)	出土層位	器種	石質	石材産地	掲載図版	法量			備考		
							全長	全幅	厚み			
405	(II a 60)	II層	石製円盤	白色細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統	第360図	405	43.0	56.0	16.0	28.5	周縁には線打刻線による調整がある。
406	(I j 58)	I層	"	輝石安山岩	"	"	406	39.0	44.0	10.0	27.53	周縁に線打調整があるが、粗雑である。
407	(C区T-2)	西端-1	両刃石器	チャート質粘板岩	北上山地古生界	"	407	51.0	45.0	20.0	60.0	下縁に両面刻線が入っている。
408	II b 58住	北西1層	石核	流紋岩質 極細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統	第38図	408	56.0	53.0	41.0	40.0	算盤玉状の石核である。
409	(C区T-3)	I層	"	粘板岩	北上山地古生界	第347図	409	45.0	38.0	20.0	45.0	古い刻線面をもち、その上を再刻線している。
410	(II d 62)	IV層2面	"	"	"	"	410	55.0	44.0	38.0	120.0	簡単な刻線をして、途中放棄している。
411	(III c d 5、6)	I~II層	"	輝緑凝灰岩	"	"	411	39.0	33.0	27.0	32.0	打点を覚えて刻線している。
412	(II c 6)	IV層	"	粘板岩	"	"	412	75.0	80.0	54.0	47.0	3ヶ所に刻線痕をもつ。
413	(II c 58)	I層	石刀	"	"	第361図	413	(89.0)	26.0	8.0	27.76	破片である。先端部であろう。3・5と同一個体。
414	(II c 59)	"	石棒	"	"	"	414	(80.0)	(16.0)	(4.0)	9.52	頭部・先端部の破片である。全面に磨面をもつ。
415	"	"	石刀	"	"	"	415	(45.0)	25.0	4.0	8.26	破片である。側縁に磨面をもつ。
416	(II c 61)	IV層3面	"	淡緑色凝灰質千枚岩	"	"	416	(84.0)	34.0	11.0	55.3	破片である。側縁と両面の一部に磨面をもつ。
417	(II d 59)	I層	"	粘板岩	"	"	417	(59.0)	29.0	(9.0)	18.68	先端部の破片である。
418	(II h 62)	"	"	淡緑色凝灰質千枚岩	"	"	418	(44.0)	32.0	(7.0)	18.61	破片である。側縁に磨面をもつ。7と同一個体。
419	(C区T 2北)	I、II層混	"	"	"	"	419	(192.0)	36.0	(7.0)	90.0	破片である。部分的に磨面をもつ。6が接合する。
420	(D区T-3)	I層	石棒?	粘板岩	北上山地古生界	"	420	(58.0)	(25.0)	(3.0)	7.74	破片である。磨面を多くもつ。
421	(II g 61)	"	"	石英安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	"	421	(90.0)	42.0	(29.0)	195.0	方柱状の塊で、磨面の痕跡がある。
422	(I j 74)	III層	石刀	粘板岩	北上山地古生界	"	422	(106.0)	(25.0)	5~8.0	29.9	柄部だけを残存する破片である。
423	II d 68縮穴	埋土	"	"	"	第303図	423					先端部だけを残存する。
424	II g 60住	北東部III層	垂飾り(玉)	凝灰質チャート	"	第54図	424	52.0	31.0	25.0	60.0	若干欠損するが、全面に研磨の際の擦痕をもつ。
425	II j 60縮し穴	埋土	"	"	"	第283図	425	43.0	28.0	(13.0)	25.7	縦半分を欠失するが、全面に研磨の際の擦痕をもつ。
426	(C区北斜面)	表採	裝飾品?	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地中新統	第362図	426	37.0	54.0	16.0	53.32	自然磨を使用し、若干加工して穿孔しようとしているが、貫通していない。
427	II i 61土坑	西半埋土	垂飾り	凝石	稀産岳?第四系	第225図	427	132.0	55.0	22.0	60.00	全面を磨って整形し、大珠形に仕上げている。
428	II b 58住	北東埋土中位	線刻のある 凝石	"	"	第38図	428	114.0	103.0	49.0	120.0	2条の線刻がある。
429	I g 41墓端下部	底面No 6	自然磨	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	第370図	429	104.8	83.2	55.5	525.0	直角磨である。
430	(II b 52)	IV層	使用痕もつ磨	"	"	第362図	430	(70.0)	(67.0)	(19.0)	160.0	表面に黒色の付着物がある。
431	III h 27墓端		火打ち石	"	"	第367図	431				5.0	

の上遺跡（江刺市、1973・伊藤、1978・山口）、蔵屋敷遺跡（和賀郡江釣子村、1983・高橋）の出土例にもみられない。ただ、体部に付された横走する単節縄文は上記三遺跡例にも多くみられる特徴である。頸部に1条の沈線を全周させ、口縁部を無文とする土器は、前記の蔵屋敷遺跡に多くの類例がある。また、体部縄文の回転方向を変える例は谷起島遺跡でも出土している。

以上のことから、本遺跡出土の土器は、ほぼ谷起島式土器の範囲に含まれるものと考えられるが、相違点も多くみられるので、谷起島式土器の中でも新しい部分に相当する土器であろうと推定している。今後、湯舟沢遺跡№3（滝沢村、3小期18棟の住居跡）、馬場野II遺跡（軽米町、3～4小期11棟）の谷起島式土器並行期の集落遺跡の調査成果が報告書として発刊（昭和61年）されるので、その時点で改めて比較対比することとする。

2) 土 器

弥生時代に属する遺物は土器のみであるが、出土状況には住居跡に共伴した土器と遺構外から出土した土器に分けられる。しかし、住居跡に共伴した土器は前項で属性を明らかにしたので、本項では遺構外から出土した土器に限定して、その属性を記すことにする。

1類とした土器は住居跡の周辺部からのみ出土した土器で、工字文的な区画帯と、大形の鋸歯状の山形区画帯をもつ土器群である。以上の特徴は住居跡から出土した土器とも共通する部分があり、時期的に大差がないことを示すものであろう。全体的にみると、器面の縄文を消去すると言った手法がみられず、住居跡出土よりも古い要素も観察される。以上のことから、本類は谷起島式土器の範囲に入り、その中でもやや新しい時期と考えておく。

2類はC区の中央部に限定して出土した土器で、1類とは全く異なる様相を示している。最大の特徴は、頸部に斜位交互刺突による波状沈線文的な文様を付すことと、体部の縄文が間隔の離れた撚糸文的に表出され、それも頸部の直下は斜位、その下位は縦位に付されることである。波状浮線文は天王山式土器の特徴と言われ、岩手県では水沢市常盤広町遺跡出土の土器（水沢市史、1974・伊東）が著名である。しかし、本遺跡の例は所謂一般的な波状浮線文とは異り、施文技法・文様ともに退化した状況を示しており、岩手県内で「天王山くずれ」と通称される天王山式土器系の末期的な文様と理解することができる。おそらく、岩手県で弥生時代末期に位置づけられている赤穴式土器と呼称される1群に最も近い特徴であろう。岩手県でも、かつて、一戸町小井田IV遺跡（1984・小平）、一戸町竹林遺跡（1985年調査・未報告）等に近似した土器の出土例がある。よって、2類の土器は赤穴式土器相当と理解しておく。

(3) 古 代

この時代の遺構はカマド1基のみであり、土器もこのカマドに共伴するものだけで、本遺跡で検出された各時代の遺構の中では最も少ない。また、遺構・遺物ともD区だけの発見である。

カマドは、袖部と推定される焼成を受けた左右対を成す細長い高まりの検出によって認定した。したがって、果して明確に古代の住居跡に伴う（内设のカマド）カマドであるかは不明である。と言うことは、ここ住居跡が存在したか否かも明らかではない。しかし、この時代の土器「土師器」はこの付近に限定して出土し、他の地区や地点からは全く出土していない。調査時には若干削平を受けた後であり、これによって消失した可能性も考えられる。

いずれにしても、出土した土器が非常に少ないことから考えると、たとえ住居跡（集落）が存在したとしても、せいぜい数棟の住居跡が立地する小規模な集落と推定される。

出土した土器は土師器のみである。器種には坏と甕があり、坏はロクロ使用成形で内面の黒色処理はなく無調整である。甕にはロクロ使用成形と非ロクロ使用成形のものがあり、器形も両者間で差がある。このような土器の様相・組み合わせ関係は10世紀後半～11世紀頃の所産と考えるのが一般的であることから、この考え方にしたがっておく。

（4）中世・近世

1) 遺 構

中世・近世の遺構は、土葬墓・火葬墓の墳墓等14基と溝2条である。このうち、溝2条は伴出遺物もなく時期を特定できないが、埋没の状況等からこれを含めるものである。

A. 土葬墓 (第 表)

明らかに土葬された墳墓はあわせて9基であるが、うち1基は人骨の埋葬された形跡が認められず、ウマとキツネの歯牙が遺存した墓墳である。

〔分 布〕

B区西方の突端部に集中するほか、A区の頂部及びB区の頂上部付近に偏在し、いずれも集落を見渡すことのできる眺望のひらける北西斜面に占地している。特にB区突端部では火葬墓の分布する中央部から西方に限られ、墓域として設定されている可能性を伺せる。一方、A区では単独に1基、B区頂部では3基が存在しており、B区突端部とは時期が相違するなど特殊な理由に拠ることが考えられる。

〔形 状〕

削平や流出等によって構築段階の状況を留めている土葬墓は少なく、特に上部の構造を知ることができる墳墓は僅かにI h 40土葬墓1基である。墓墳を中央にして高さ40cm以上、径3.55mに及ぶ盛土がなされていることから、B区突端部の土葬墓では墓墳掘り上げ土による同様の墳丘を形成していたことが予想されるが、いずれもその形状については不明である。

墓墳の形状は、検出面で隅丸長方形や楕円形、不整な円形等を呈するものがあるものの、底部によっては長方形と円形をなす墓墳に大別される。前者はB区突端部に占地する墓墳であり、

A区の1基もほぼこれに準ずる形状とみなされる。また、B区頂上部の3基はいずれも後者の例である。断面形は箱形、または円筒形に近い。

〔規模〕

墳丘をもつI h 40土葬墓では、長径3.55mを測る。墓壇の規模は、長方形を基調とする墓壇の場合、長辺で1.03m、1.42m～1.58m、2.06m～2.2mに分けられる。B区突端部では底部における長辺が1.16m～1.87m、短辺が0.78m～1.22mであり、その比率は1：0.65～0.76となる。深さは検出面から1.2m～1.3mほどであり、著しく浅い墓壇ではいずれも削平されているものと考えられる。

〔埋葬〕

長方形の墓壇では、膝を折り曲げた仰臥の状態を検出された。円形の墓壇では膝を折り腕を組む座姿勢がみられる。後者では木質付着の鉄釘が残存していることから、木製の箱棺を使用していると考えられ、同様の座棺による埋葬が推定される。木棺の側板は3～4分板と推定される。また、前者では埋土中の変化によって棺の推定されるものも含まれるが、不明な墓壇が大部分である。

埋葬された人骨の頭位方向は、長方形墓壇の場合1基を除いて北～北東方向にとるが、特定の方位に集中する傾向は認められず、この点では墓壇の長軸方向についても同様である。また、円形墓壇の場合は、頭骨の位置からいずれも北西、または南面して埋葬されたと推定される。

〔副葬品〕 (第10・11表)

副葬品を伴う墓壇は6基であり、貨幣のみを伴う墓壇2基、貨幣以外の副葬品を伴う墓壇1基、さらにその両者を伴出する墓壇3基である。

六道銭とみられる貨幣を伴う墓壇は、B区突端部に位置する2基である。その1基には中国から渡来した北宋銭と明銭であり、他の1基は明銭と鏹銭を伴っている。また、貨幣を伴わない墓壇は、喫煙用具を出土するA区の1基である。

六道銭及び他の副葬品を伴う墓壇は、B区中央部の3基である。貨幣はいずれも日本で江戸時代に作られた寛永通寶であり、所謂古寛永・新寛永背文、新寛永が含まれる。他は青銅製品、または鉄製品である。

〔時期〕

個々の墓壇の時代や年号等を明らかにできる資料を欠いているため、詳細は明確でない。墓壇の占地・形状・出土する遺物等によってみると、B区突端部の長方形を呈する墓壇では北宋銭や明銭と言った中国からの渡来銭を伴うことから、15世紀～16世紀にかかる土葬墓とみられる。このうち、北宋銭のみを出土するI e 40土葬墓が鏹銭を伴うI h 40土葬墓に先行することが推定される。そのほか、副葬品の出土していない土葬墓は最も浅い墓壇をもち、人骨の腐朽

第10表 土葬墓・火葬墓等一覧表

No	遺構名	規模		平面形	方位	人骨	副葬品	備考
		長さ×幅 m	高さ m					
1	III h 27土葬墓	1.03×0.72	0.64	不整楕円形	N-54.7°-E	頭～下肢骨	煙管1、火打石1	
2	I e 40 "	1.58×1.50 (1.16×0.78)	1.14	不整円形 (隅丸長方形)	N-10.0°-E	"	天箱通貫1、皇宋通貫1、永楽通貫1	
3	I g 40土葬墓 -1	2.06×1.50 (1.38×1.05)	1.24	隅丸長方形	S-7.5°-W	"	—	I g 42-2に重複
4	I g 40土葬墓 -2	2.10×1.70 (0.97×0.72)	1.30	長円形 (楕円形)	N-55.8°-W	(キツネ・ウマ)	—	I g 42-1に先行
5	I h 40 "	2.20×1.48 (1.87×1.22)	1.28	隅丸長方形	N-0.9°-E	頭～下肢骨	洪武通貫3、無銘鋳銭7	墳丘あり
6	I i 41 "	1.42×1.16 (1.16×0.78)	0.54	"	N-39.5°-E	頭骨	—	
7	II b 41土壇	2.12×1.45～	0.82～	長楕円形	N-44.0°-W	—	—	炭灰材・焼土多い
8	II j 38-1 土葬墓	0.94×0.80	0.83	円形		頭～下肢骨	煙管1、和鉄1、毛抜き1、火打金1、新寛永6	
9	II j 38-2 土葬墓	1.10	0.98	"		"	柄鏡1、剃刀1、徳利1、古寛永3、新寛永3	ほかに木質付着鉄釘2
10	II j 39 "	1.20	1.04	"		"	煙管1、古寛永3、文寛永4	
11	I i 39火葬墓	0.83×0.76	0.22	楕円形	N-25.5°-E	骨片	—	木炭著しく多い
12	I i 40-1 火葬墓	1.37×0.95	0.57	長楕円形	N-58°-E	"	永楽通貫? 1	"
13	I i 40-2 "	1.18×0.76	0.27	長円形	N-17.8°-W	"	永楽通貫? 1	"
14	I j 40 "	0.90×0.65	0.36	長楕円形	N-10.6°-E	"	米塊1、洪武通貫3	"

() は底部の規模・形状

が著しい I i 41土葬墓とともに近接する I h 40土葬墓より古く、重複する I g 40土葬墓1・2では同土葬墓2を切る同土葬墓1が新しく、これらの構築には一定の時間幅が想定される。

ついで、貨幣以外の副葬品が出土している長方形の墓壇をもつA区の土葬墓、さらにB区頂上部の3基の土葬墓があげられる。後者の貨幣には所謂古寛永及び新寛永背文を出土する1基と、混在する1基、そして新寛永のみを出土する土葬墓があり、いずれも近世に位置づけられる。鑄造年代は古寛永と新寛永背文が17世紀中葉、新寛永がそれ以降江戸末期まであり、それによれば、順に17世紀中葉～後半、18世紀～19世紀後半までとなるが、円形の墓壇による埋葬が18世紀前半、あるいは後半以降とされている点^{注1}では、A区の墓壇をこれより以前に、後者の3基はそれ以降に位置づけられよう。

注1. 石川長喜「発掘調査された墳墓について」『紀要Ⅲ』岩手県立埋蔵文化財センター 1983

B. 火葬墓

第11表 出土貨幣計測一覧表

No	出土地	法量				図版番号	銭文	初跡年
		径	厚	重	形			
1	I e 40土葬墓	16.6	1.2	3.27	四角	第353図 1	天沼通寶	1017年
2	"	25.15	1.3	3.41	"	" 2	皇宋通寶	1039年
3	"	25.00	1.7	3.88	"	" 3	永樂通寶	1408年
4	I h 40土葬墓	18.9	1.0	0.8	"	第365図 4	洪武通寶	1368年
5	"	18.5	0.7	0.68	"	" 5	"	"
6	"	23.15	1.3	2.74	"	" 6	"	"
7	"	18.9	0.65	0.62	"	7.15	無銘鋳銭	不明
8	"	19.5	0.7	0.7	"	7.20	"	"
9	"	19.3	0.6	0.45	"	7.55	"	"
10	"	21.80	2.9	2.2	"	10.0	"	"
11	"	21.25	1.0	1.27	丸	5.75	"	"
12	"	22.1	0.4	1.05	四角	6.25	"	"
13	"	20.85	1.20	1.35	"	6.4	"	"
14	II i 38土葬墓	24.65	0.9	2.4	"	第359図 14	新寛永通寶	1740年頃
15	"	23.20	1.0	2.62	"	" 15	"	江戸深川1738年
16	"	23.10	1.45	3.65	"	" 16	"	江戸亀戸1708年
17	"	23.1	1.25	3.08	"	" 17	"	江戸亀戸1708年
18	"	23.6	1.0	2.26	"	" 18	"	秋田藩造1737年
19	"	23.2	1.45	2.72	"	" 19	"	秋田藩造1737年
20	II i 39土葬墓	25.25	1.20	2.65	"	第360図 20	古寛永通寶	1635年頃

No	出土地	法量				図版番号	銭文	初跡年	
		径	厚	重	形				
21	II i 39土葬墓	24.60	1.10	2.95	四角	第360図 21	古寛永通寶	1635年頃	
22	"	24.55	1.40	3.5	"	6.2	" 22	"	
23	"	25.20	1.30	3.15	"	5.75	" 23	新寛永通寶	
24	"	24.70	1.30	4.05	"	5.85	" 24	"	
25	"	25.25	1.30	3.51	"	5.85	" 25	"	
26	"	25.20	1.20	3.27	"	5.50	" 26	"	
27	II j 38土葬墓	24.30	1.30	3.55	"	5.35	第361図 27	古寛永通寶	1635年頃
28	"	24.80	1.20	3.22	"	6.20	" 28	"	
29	"	24.00	1.20	2.85	"	5.60	" 29	"	
30	"	24.90	1.20	25.55	"	6.60	" 30	新寛永通寶	1739年頃
31	"	23.0	1.10	23.80	"	6.30	" 31	"	1710年頃
32	"	22.85	1.10	2.25	"	6.30	" 32	"	
33	I i 40火葬墓-1	24.40	1.15	2.00	"	6.70	第365図 33	永樂通寶	1408年
34	I j 40火葬墓	21.50	1.20	1.75	"	6.30	第366図 34	洪武通寶	1368年
35	"	22.60	1.30	2.05	"	6.0	" 35	"	
36	"	22.30	1.20	1.05	"	7.80	"	"	
37	I i 40火葬墓-2	22.60	1.30	0.75	"	"	"	永樂通寶?	1408年
38	II f 9 I・II層	28.30	1.25	4.82	"	6.40	第369図 38	4文銭 寛永通寶	1769年
39	II e 62IV層	22.0	1.30	1.70	"	6.35	第369図 39	銭 新寛永通寶	不明
40	NW部埋土最上面 II d 57	14.70	1.55	4.22	"	"	"	現通用10円	1962年

第12表 金属製品計測一覧表

No	出土地	器種	粗材	法量			図版番号	備考
				長	径	重		
1	III h 27墓塚	キセル	銅製	火入れ 7.2 吸い口 5.7	2.85	5.9 4.85	第367図 1	
2	II i 38 "	"	"	火入れ 4.8 吸い口 6.2	2.84	5.95 5.43	第374図 2	
3	II i 39 "	和鉄火打ち金	鉄製	一緒 12.6		32.0	第375図 3	
4	"	毛抜	"	8.7		13.8	" 4	
5	"	キセル	銅製	火入れ 6.2 吸い口 5.7	3.2	6.85 3.6	" 5	
6	"	火うち金	鉄製	6.0			" 6	

No	出土地	器種	粗材	法量			図版番号	備考
				長	径	重		
7	II j 38墓塚	釘	"	4.6		2.40	第376図 7	
8	"	"	"	5.2		3.30	" 8	
9	"	鎌	銅製	15.9		70.0	第377図 9	
10	"	カミソリ	鉄製	16.8		22.9	" 10	
11	遺構外 I i 73IV層	キセル	銅製	5.4			第384図 11	
12	III h 27墓塚	火打ち石	石				第352図 431	

明らかに火葬墓と確認されたのは4基である。そのほか、II a 42溝跡に重複する土坑1基に多量の炭化材と焼土が検出されており、何らかの関係あることが推測される。

〔分布〕

B区西方突端部のほぼ中央に位置している。土葬墓が中央部から西方にかけて分布しているのに対し、火葬墓は土葬墓群の東側にほとんど近接する状態で集中している。3基は尾根頂上

部に、1基はやや低位となる北側に位置するが、後者は上部の削平、または流出しているとみられることから、構築時には著しい比高差のない斜面を形成していたことが推測される。

〔形状・規模〕

検出面における平面形は、いずれも長軸を南北方向にとる楕円形か長円形を基調としている。規模は長軸方向で83cm～1.37m、短軸方向が65cm～95cmであるが、深さは検出面によって一定していない。斜面に検出されるI i 40火葬墓-1では57cmを測り、一定の深さを有していたものと思われる。底部は舟底状を成すが、壁の立ち上がりは比較的強い。しかし、いずれも整形された痕跡は特にみあたらない。

〔埋葬〕

墓壙全体に碎片となった木炭が充満し、若干の骨片を含む以外に他の混入物は含まれていない。また、墓壙の底面や壁面には土壙内における焼成の痕跡や加熱変化等は認められず、これらの木炭は土壙内において形成されたものとは考えられない。木炭に含まれている火熱を受けた人骨の小・細片は広く散在し、木炭を同様に埋葬の段階で混在している可能性があげられる。同時に、六道銭や他の遺物についても同様であり、他所に設けられたと思われる茶毘所からの搬入とが推測される。

上部構造については、土葬墓にみられるような墳丘をもつ例は認められず、その痕跡を示す資料は明らかでない。4基とも極めて近接して築かれている点から、それほど大きい盛土等の墳丘は予想できない。

火葬墓が茶毘所墳墓でないと思われる点で、茶毘所は他所に求められるが、多量の炭化材及び焼土の検出されたII b 41土坑がこれを連想させる。土坑内には雑木の丸太材や樹枝状の炭化材が不定方向に分布し、焼土・灰が堆積しているが、骨片や副葬品等の遺物は確認されず、断定することは困難である。

〔副葬品〕

3基から六道銭とみられる貨幣等が出土している。2点の貨幣は火熱変化して銭銘が不明であるが、外縁径などによって中国から渡来した明銭とみられる。また、洪武通寶3点を出土する墓壙には半塊が混入しており、変質状況から茶毘に伴う火熱変化を受けているものとみなされる。確認された米粒は、粒長：粒幅比が2.75～1.61となり、長粒と短粒が混在し極く小粒のものが含まれている。計測値からは円粒が認められないが、中世に出土する米粒に共通する点もみられる。

〔時期〕

墓壙の占地、形状・規模、遺物の出土等、4基はいずれも類似する墓壙であり、極めて近接する時期の所産とみなされる。貨幣を除いて時期を推定できる資料はないが、明銭には鏝銭が

含まれていないことから、15世紀～16世紀の構築と推定される。また、近接する土葬墓とは重複することなく、比較的短い時間幅に前後して構築されているものとみられ、墓域として規制されていることが推測される。

C. 溝 跡

2条の溝の内、1条はB区西方突端部の基部を切るII a 42溝跡であり、他の1条は突端部先端の農道に沿った小溝である。

前者は、B区西方尾根の南斜面を切る比較的浅い溝であり、中世の墓塚が集中する東側に位置している。この点では墓域と関係する溝である可能性もあげられ、畑地造成を受けていないことに符合するところであるが、炭化物や焼土を多量に出土するII b 41土坑の廃絶以後に開削されており、この土坑が茶毘に密接な関係にあるとするならば、火葬墓の築かれる以後の溝として位置づけられる。また、後者の溝はその両端を現在の農道によって切られており、これに先行する農道の側溝である可能性があげられる。しかし、両溝とも中世・近世以降の時期の特定できる資料を欠いており、その性格についても明確でない。

IX む す び

以上、水神遺跡に対する発掘調査の概要を主とし、そのまとめを記した。本遺跡は東北縦貫自動車道の建設に関連し、安代町の関連遺跡では最終年度に調査された。調査範囲が22,260m²と広大であるため、沢や農道を境にして全体をA区～D区に分けて調査した。

その結果、縄文時代は中・後期の住居跡と土坑、陥し穴状遺構、土器埋設遺構、焼土遺構の遺構とそれに伴う土器（早～晩）と石器、弥生時代は住居跡と土器、平安時代はカマド跡と土師器、中・近世は墳墓群とそれらの副葬品等、総数で261の遺構と35000点余の遺物が発見され、本報告書には全ての遺構と1948点の遺物を掲載した。

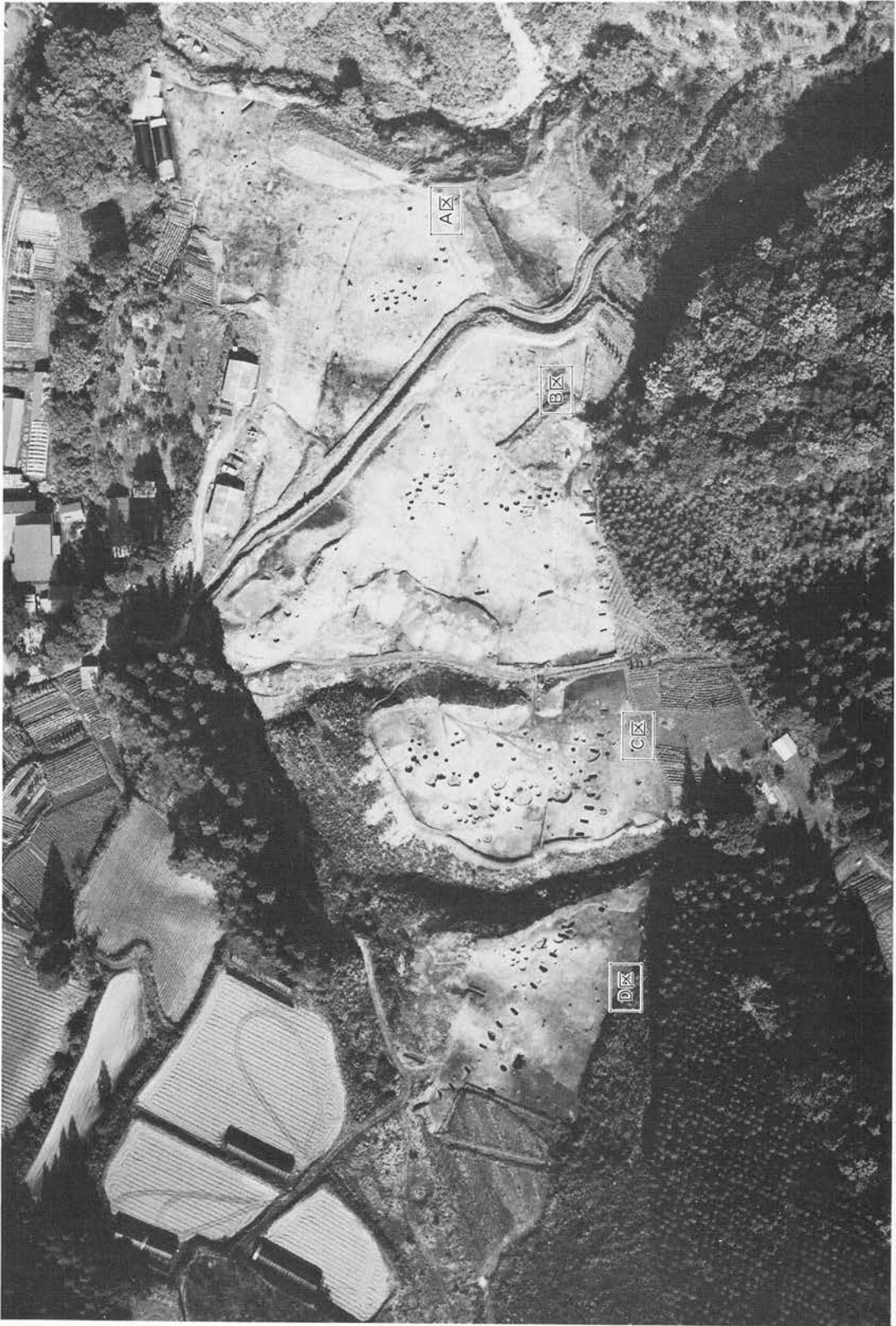
これらのことから、遺構はなかったが、縄文時代早期頃から人間が居住し、その後、断続的ではあるが晩期まで集落として使用されている。また、引き続き弥生時代・平安時代にも小規模な集落が存在したらしい。中・近世になると集落としての伝統がなくなり、埋葬の場としての墓域として使われている。一方、集落がなかった時期には狩猟の場所であり、46基もの陥し穴状遺構が発見されている。特に、29基が並列で連続する長方形型は、安比川流域に立地する遺跡のみで検出される型として、今後も注目する必要がある。

このように多くの遺構や遺物が発見されたことは、調査面積が広いばかりでなく、地形的・自然的環境が集落立地として最適であったことを示すものであろう。

いずれにしても、調査で得られた情報は多大なものであり、本報告書にそれらの全てを盛り込むよう努めたが、脱漏した分については今後何らかの形で明らかにしていきたい。

最後に、本遺跡の発掘調査にあたって、地元安代町教育委員会をはじめ、小山田米蔵氏他40名の方々に発掘調査作業員としてご協力を頂いた。また、調査中に火山灰は岩手大学助教授井上克弘氏、人骨の関係は岩手医科大学教授野坂洋一郎氏から貴重なご指導を受け、分析・鑑定をお願いし玉稿をお寄せ頂いた。整理中に火山灰の分析では奈良教育大学教授三辻利一氏にお願いし、陥し穴状遺構については横浜市埋蔵文化財調査委員会宮澤寛氏のご指導を受けた。全体的なことについては名古屋大学助教授渡辺誠氏からご指導・ご助言を受けた。実際の室内整理作業にあたっては、当センターの室内整理作業員約10名のご協力を頂いた。これらの多くの方々に対し、その旨を記し心からの謝意を表したい。

写 真 图 版



(空中写真)

PL-1 完掘後全景



PL-2 遺跡遠景

(北から望む)



A 遠景

(南から望む)



B 近景

(南から望む)

PL-3 遺跡全景



A 調査前



B 調査後

PL-4 A区全景



A 調査前



B 調査後

PL-5 B区全景



A 調査前

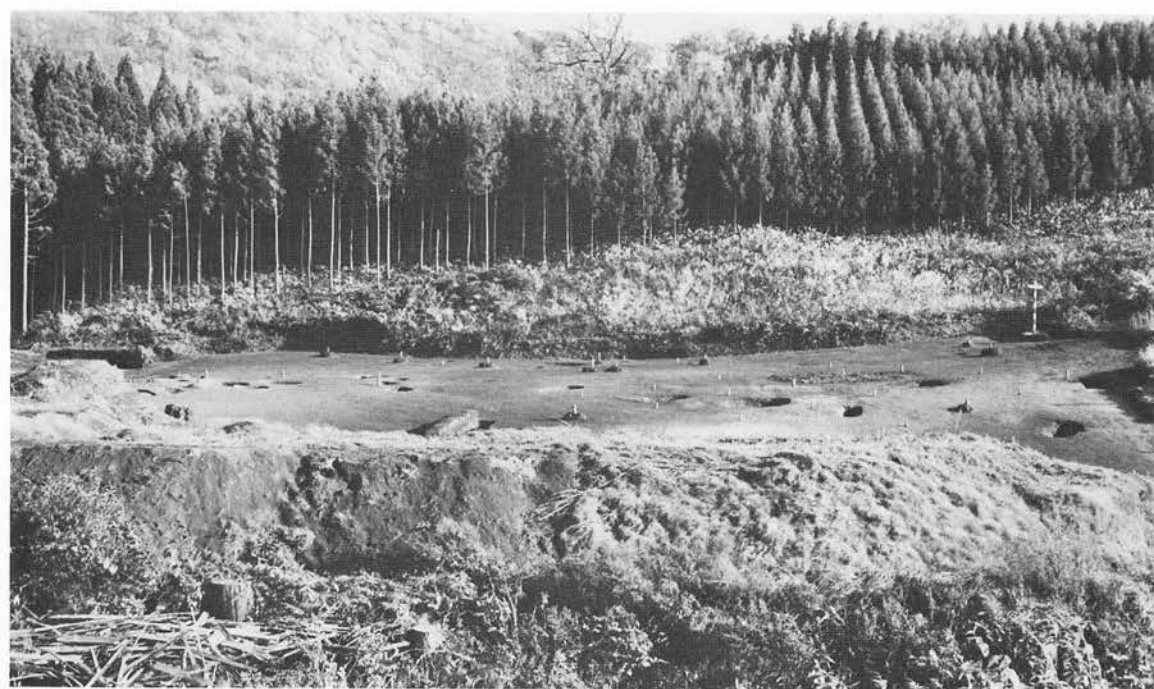


B 調査後

PL-6 C区全景



A 調査前



B 調査後

PL-7 D区全景



A 雑物撤去

(D区)



B 粗掘

(C区)

PL-8 雑物撤去・粗掘

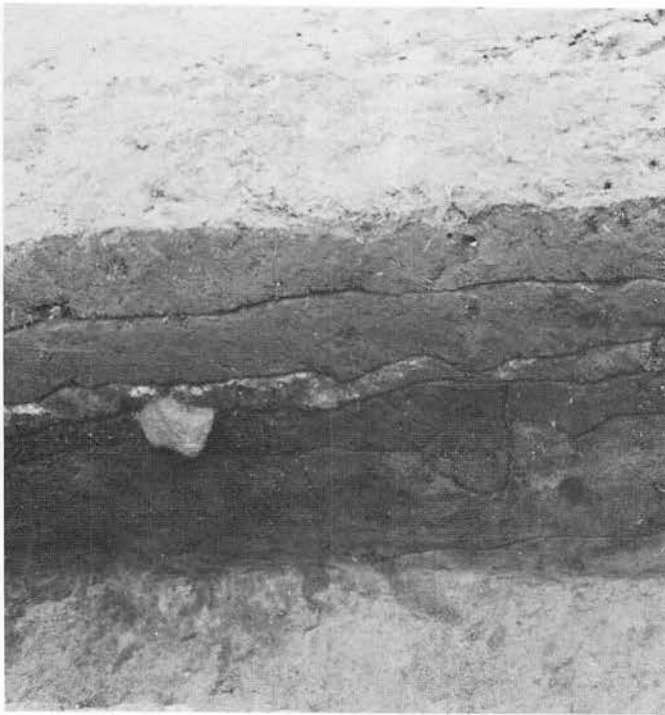


A 人骨供養

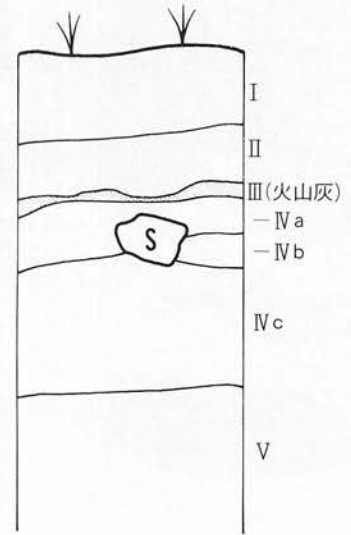


B 現地説明会

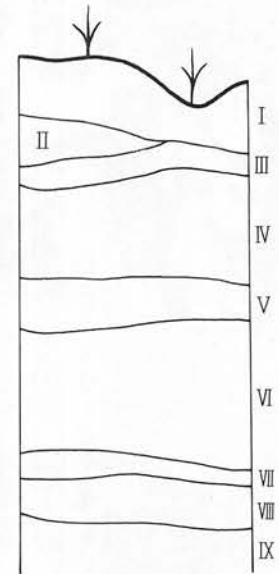
PL-9 人骨供養・現地説明会



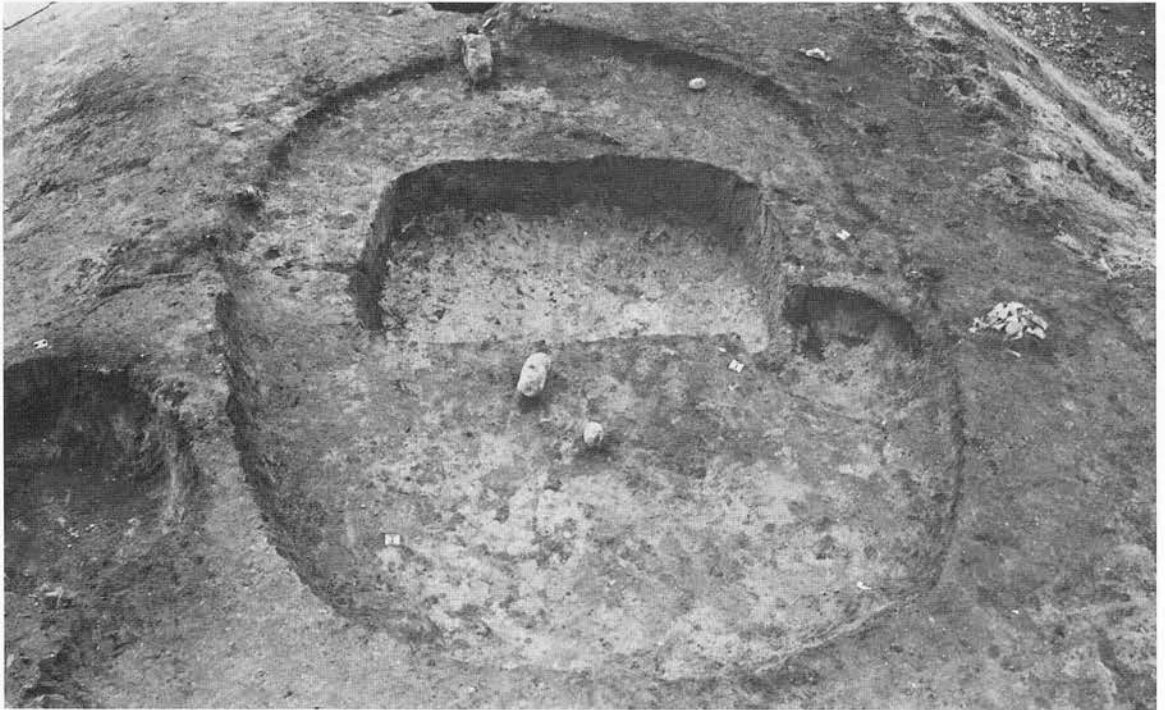
A.D区表層部分



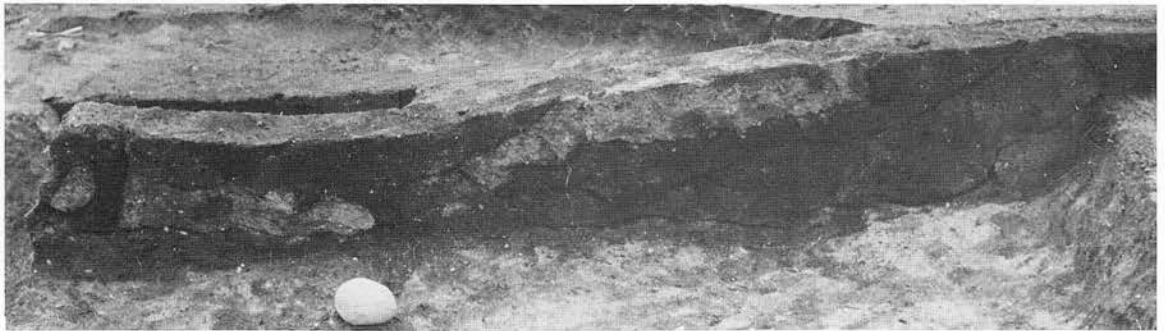
B.D区深掘り



PL-10 基本層序



①



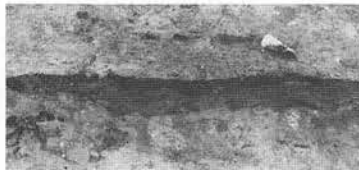
②



③



④



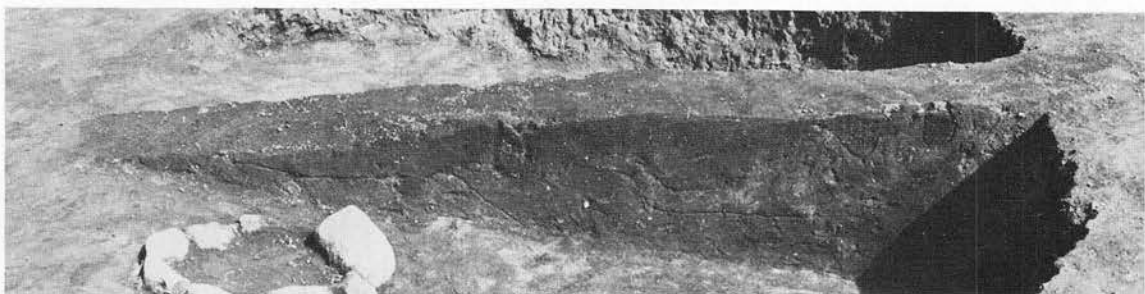
⑤

- ①完掘後全景
- ②埋土土層(部分)
- ③炉跡全景
- ④⑤炉跡断面

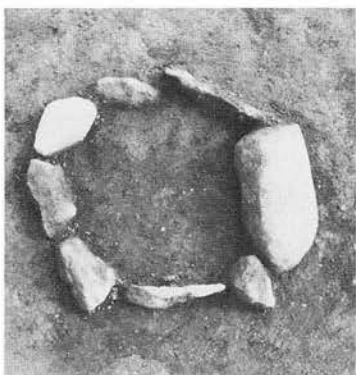
PL-11 (1) I h40住居跡



①



②



③



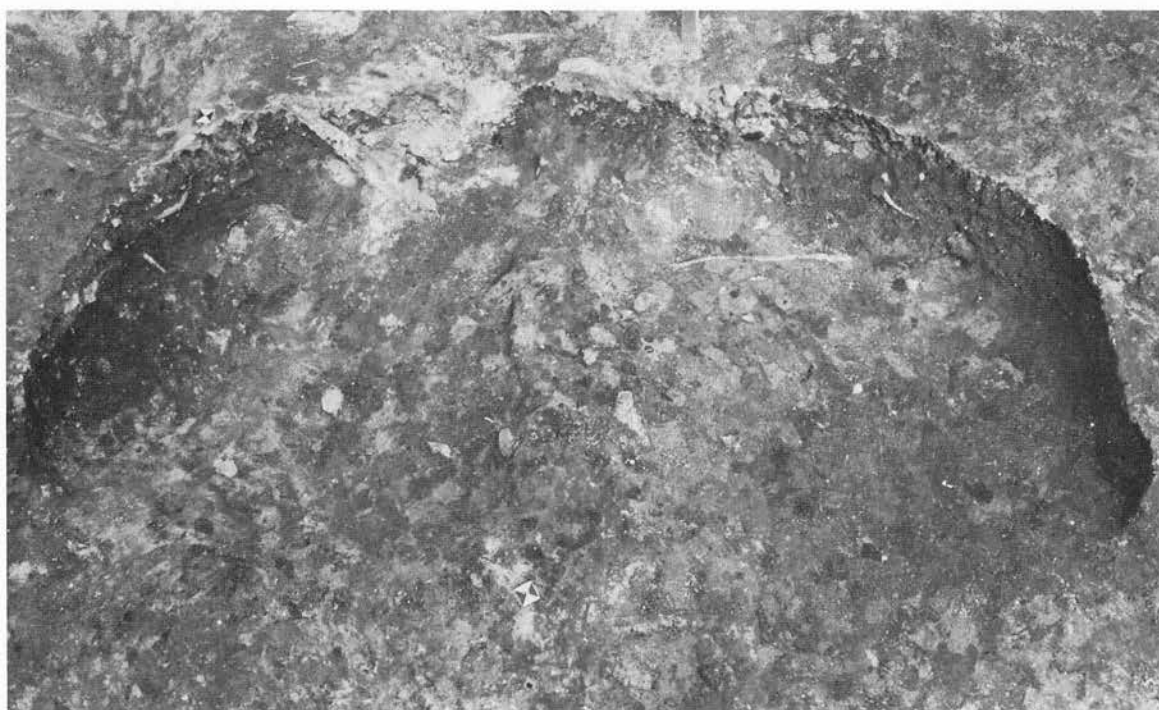
④



⑤

- ①完掘後全景
- ②埋土土層
- ③炉跡全景
- ④⑤炉跡断面

PL-12 (2) I i 37住居跡



A (3) I j 41住居跡

完掘後全景



B (4) II i 39住居跡

完掘後全景

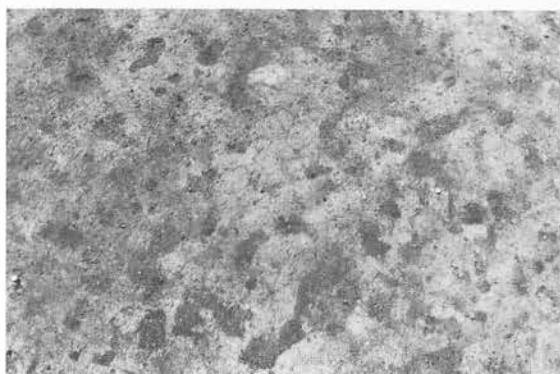
PL-13 住居跡



①



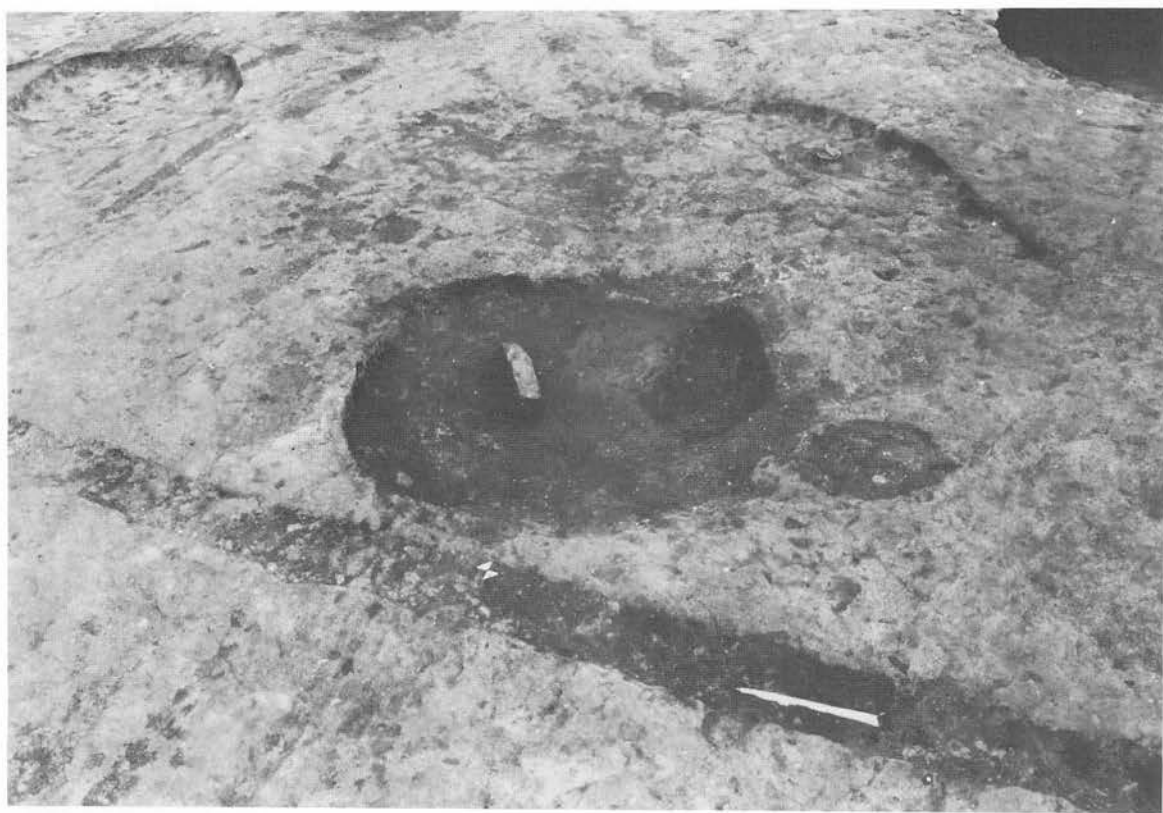
②



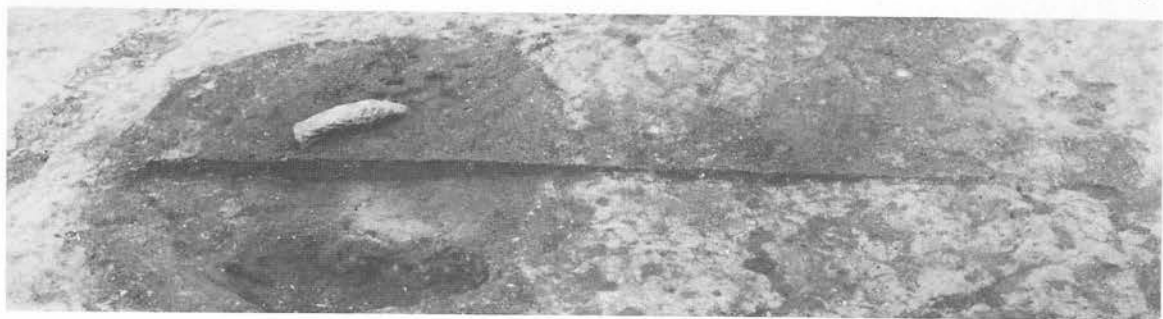
③

- ①完掘後全景
- ②埋土土層
- ③炉跡全景

PL-14 (5) II j 39住居跡



①



②



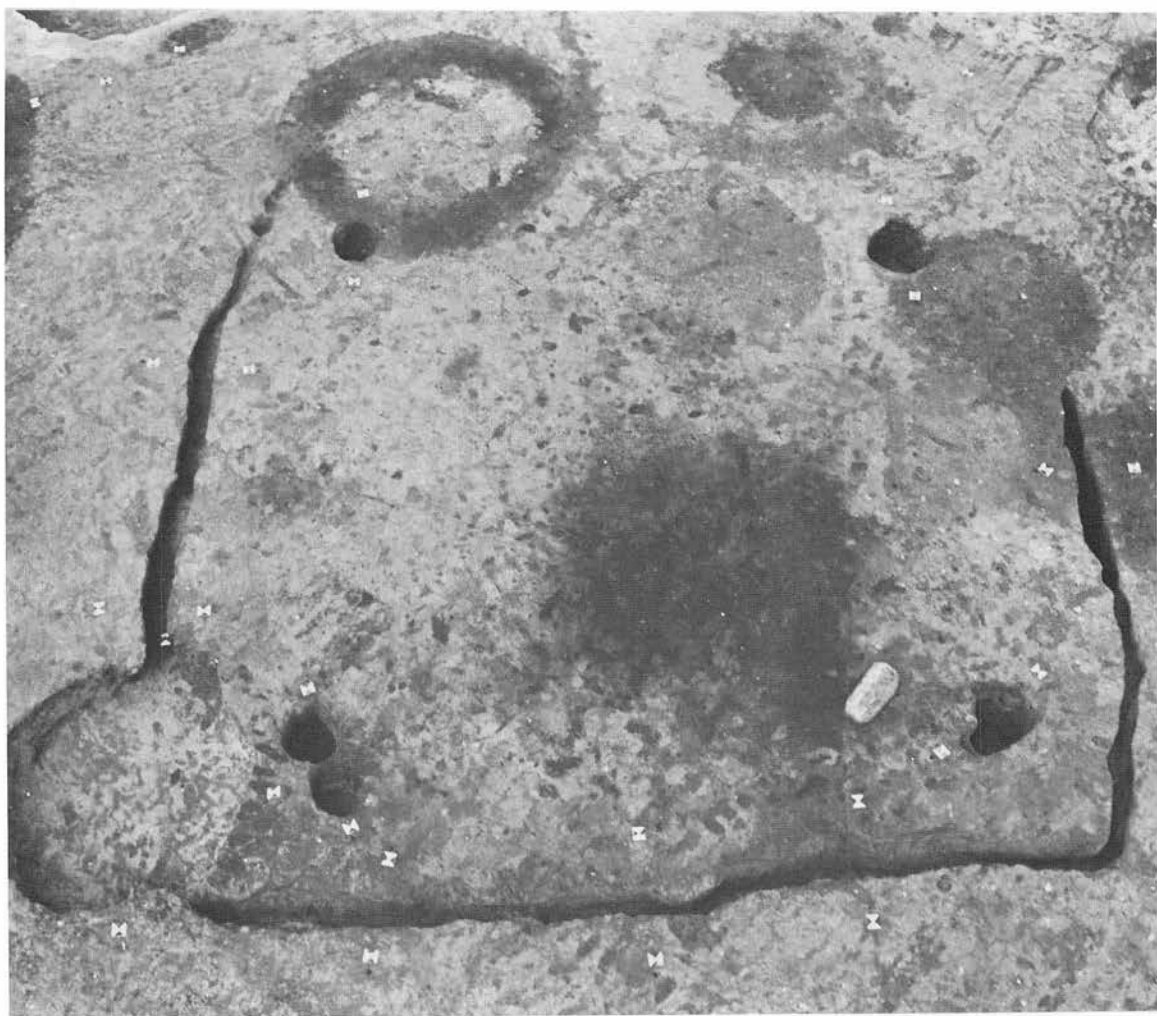
③



④

- ①完掘後全景
- ②埋土土層
- ③炉跡全景
- ④炉跡断面

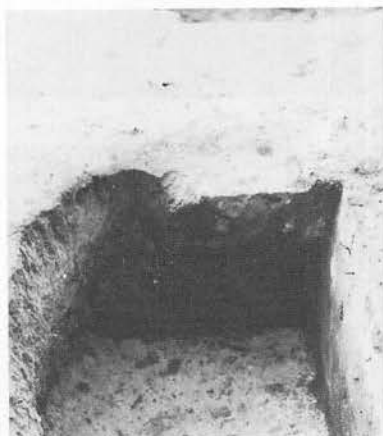
PL-15 (6) III a38住居跡



①



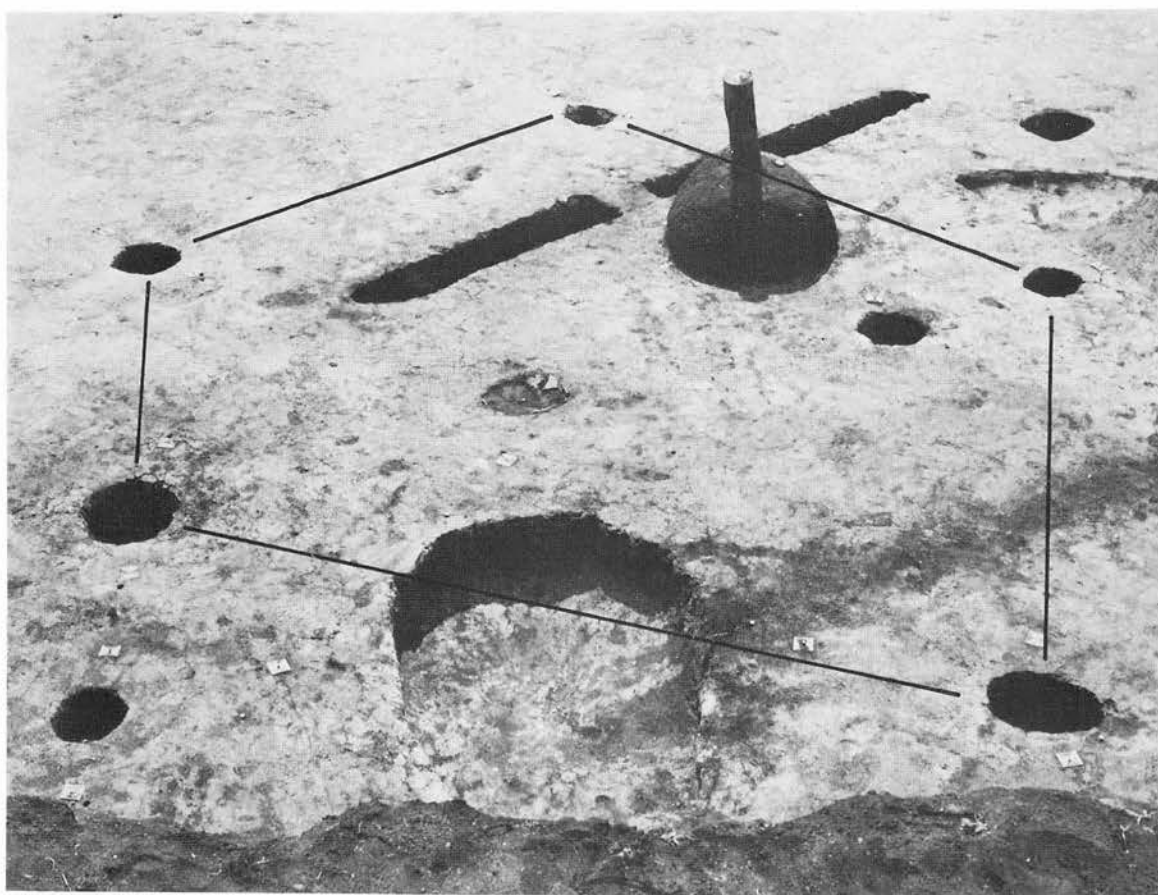
②



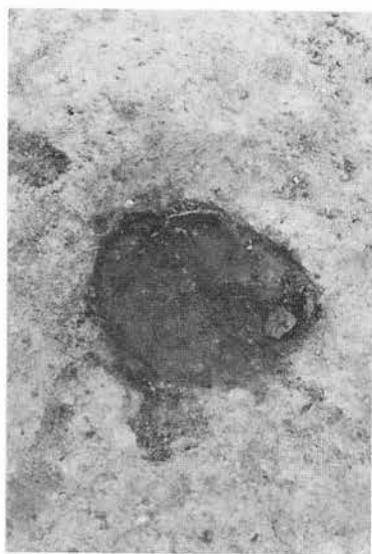
③

- ①完掘後全景
- ②炉跡全景
- ③炉跡断面

PL-16 (7) III b38住居跡



①



②



③

- ①完掘後全景
- ②炉跡全景
- ③炉跡断面

PL-17 (8) III e43住居跡



①



②



③



④



⑤

- ① 完掘後全景
- ② ③ 埋土土層
- ④ 炉跡全景
- ⑤ 炉跡断面

PL-18 (9) III h34住居跡



①



⑦



⑧



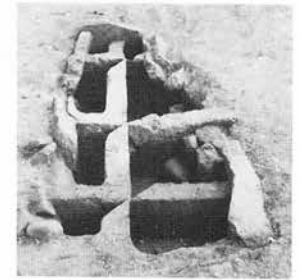
②



⑨



③



⑥



④



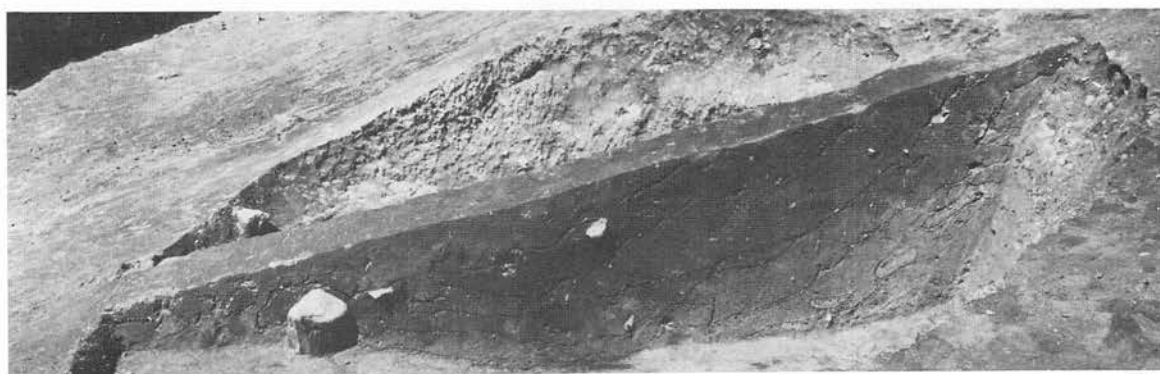
⑤

- ①一次全景
- ②③埋土土層
- ④炉跡完掘全景
- ⑤⑥炉跡断面
- ⑦~⑨遺物出土狀況

PL-19 (10) I j 54住居跡



①



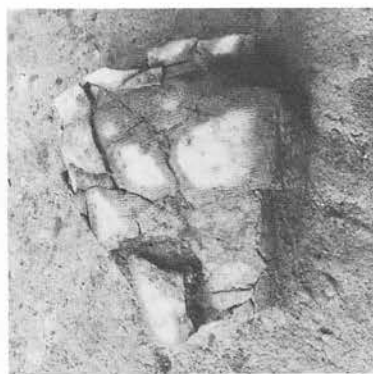
②



③



④



⑤

- ①完掘後全景
- ②埋土土層
- ③炉跡全景
- ④炉跡断面
- ⑤遺物出土狀況

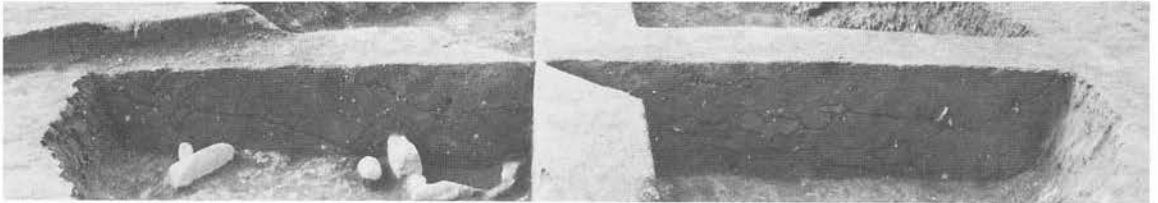
PL-20 (11) II a60住居跡



①



②



③



④



⑤

①完掘後全景

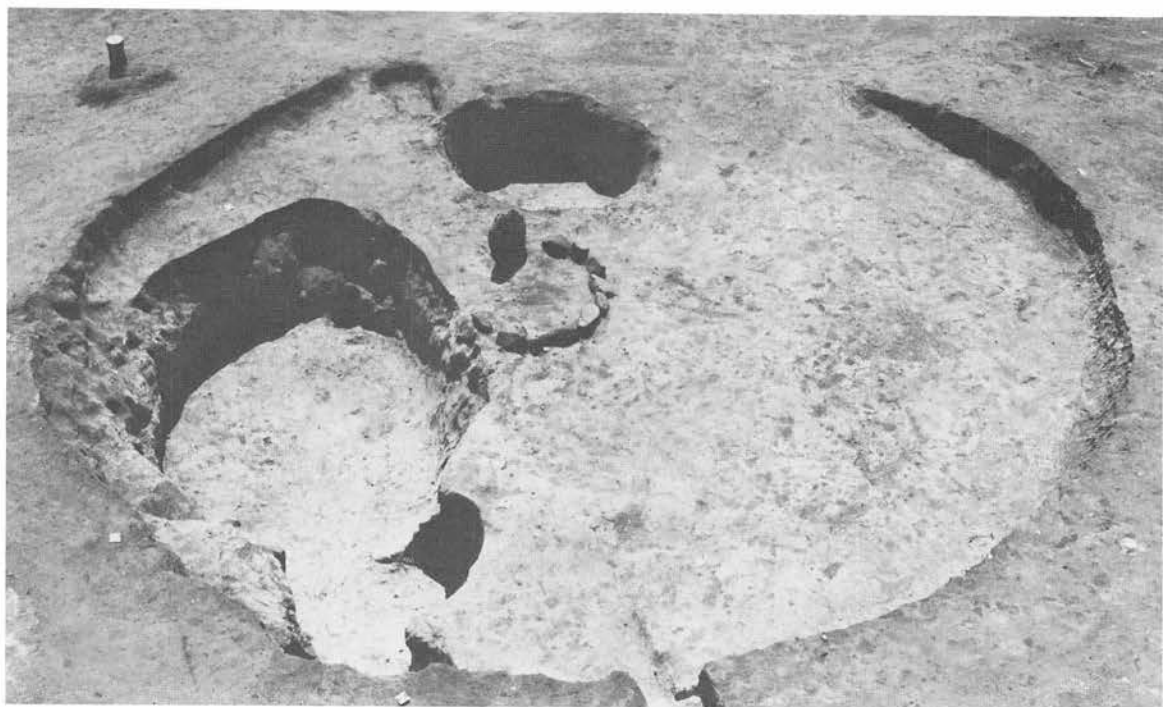
②埋土土層

③埋土土層

④炉跡全景

⑤炉跡断面

PL-21 (12) II a56住居跡



①



②



③



④



⑤

- ① 完掘後全景
- ② 埋土土層
- ③ 埋土土層
- ④ 炉跡全景
- ⑤ 床直の石皿破片

PL-22 (13) II b58住居跡



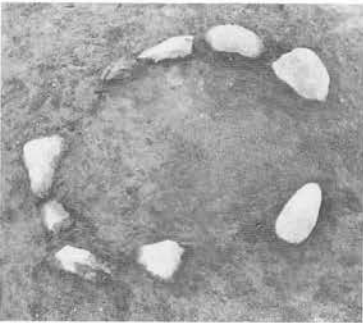
①



②



③



④



⑤



⑥

- ①完掘後全景
- ②③埋土土層
- ④炉跡全景
- ⑤⑥炉跡断面

PL-23 (14) II d57住居跡-1



①



②

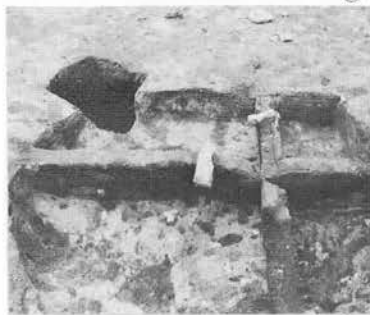


③

- ① 完掘全景
- ② 炉跡全景
- ③ 炉跡下部掘込み地業
- ④ 炉跡断面
- ⑤ 炉跡断面



④



⑤

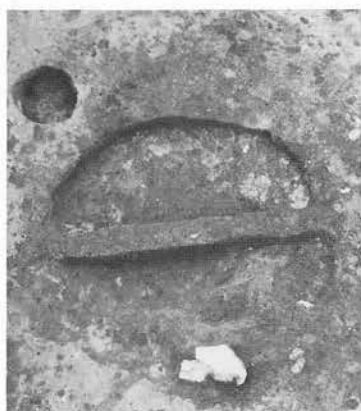
PL-24 (15) II d 57住居跡-2



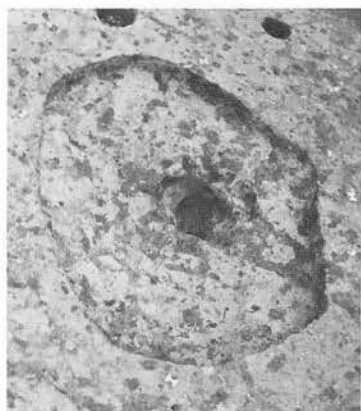
①



②



③



④



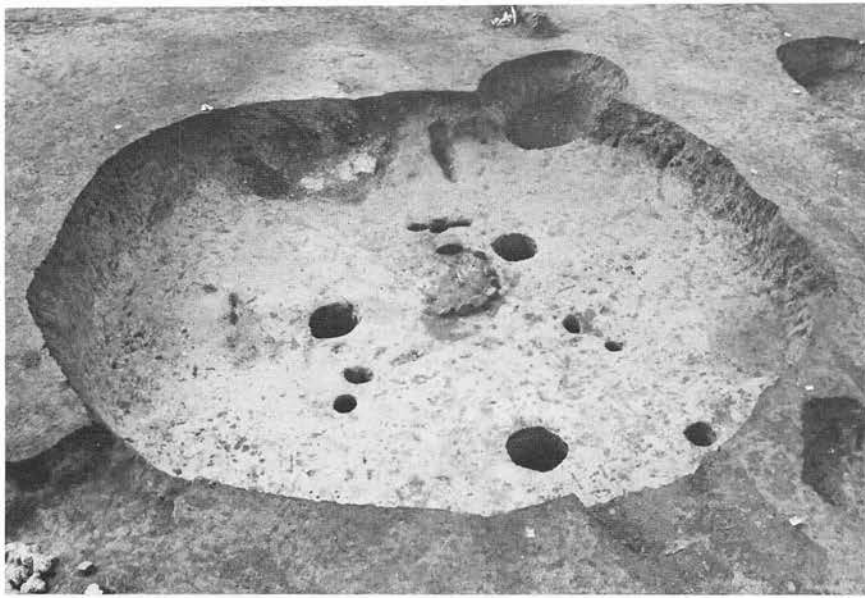
⑤



⑥

- ①完掘後全景
 ②埋土土層
 ③炉跡全景
 ④炉跡掘込地業跡
 ⑤⑥炉跡断面

P L — 25 (16) II e59住居跡



①



④



⑤



②



⑥



③



⑦



⑧



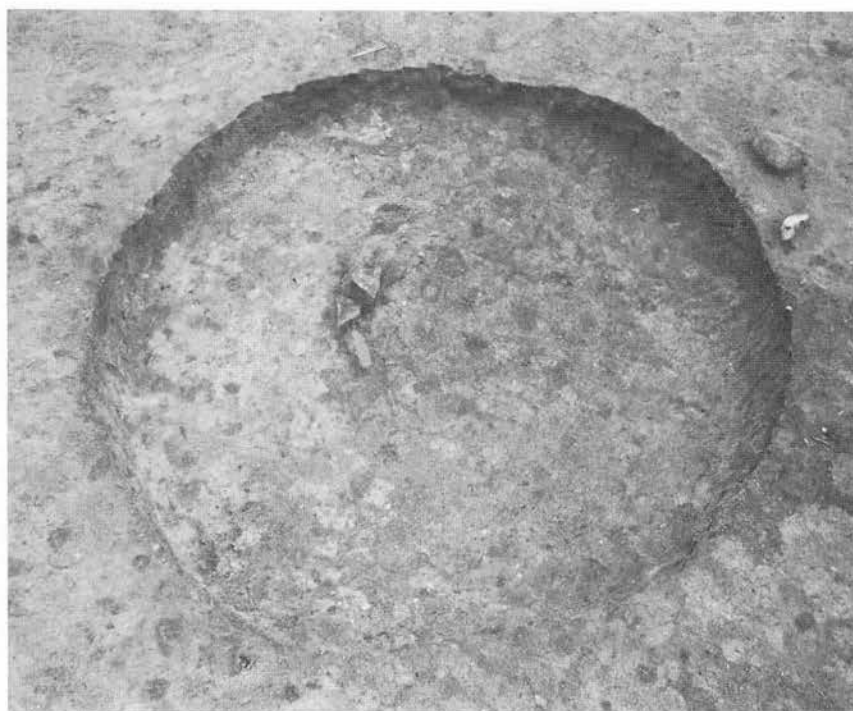
⑨



⑩

- ① 完掘後全景
- ②③ 埋土土層
- ④ 炉跡全景
- ⑤⑥ 炉跡断面
- ⑦～⑩ 遺物の出土状況

PL-26 (17) II g60住居跡



A (18) II i 63住居跡

①



②



③

①完掘後全景

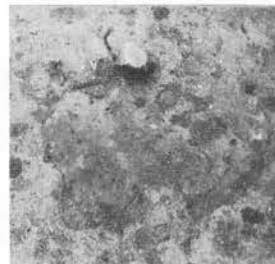
②炉跡全景

③炉跡断面



B (20) III b59住居跡

①



③



④

①完掘後全景

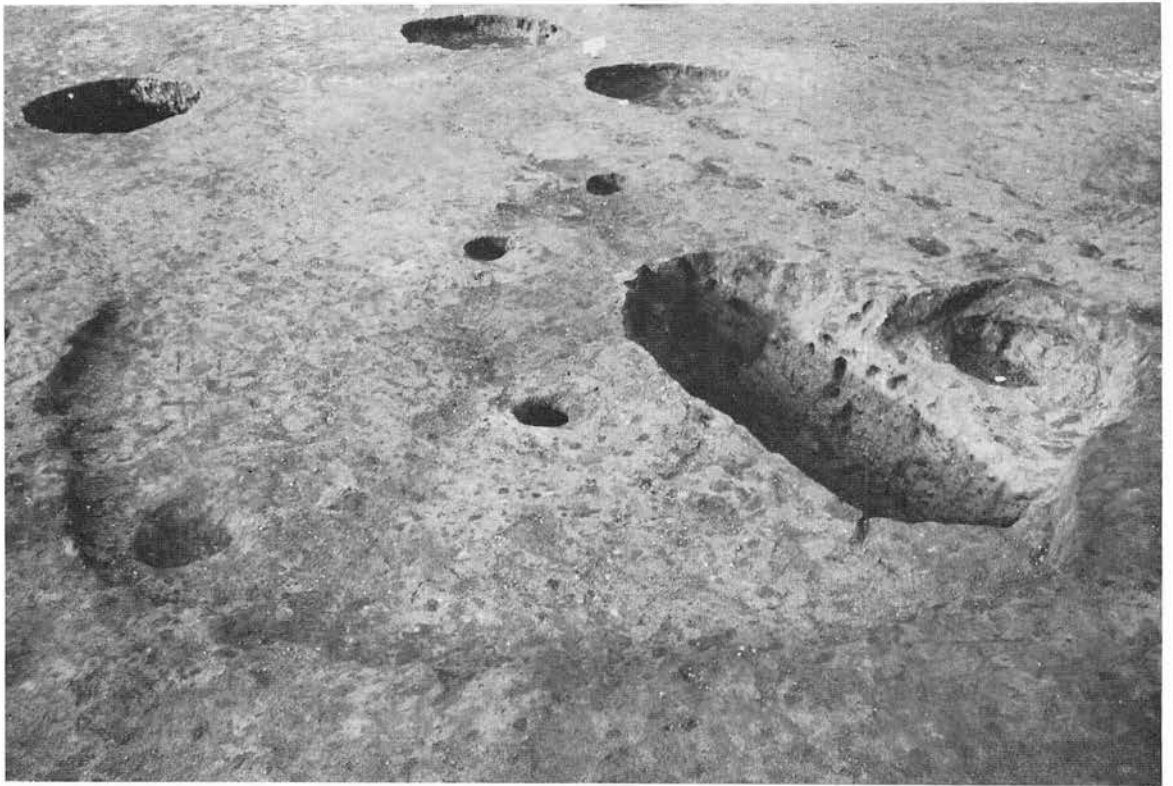
②埋土土層

③炉跡全景

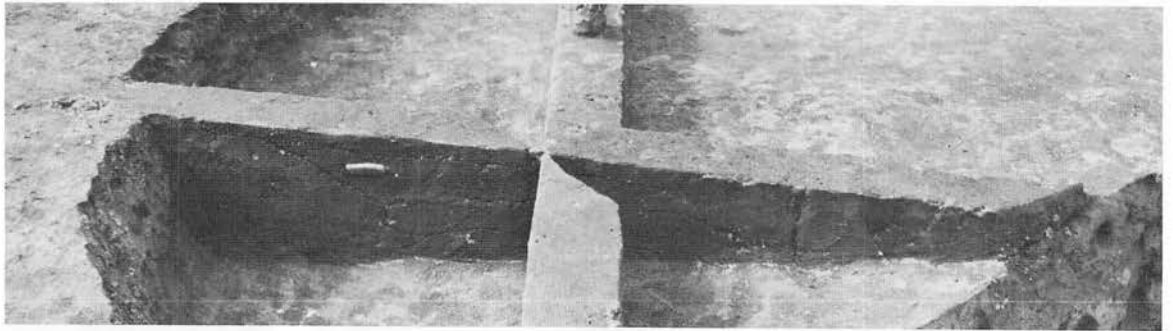
④炉跡断面



PL-27 住居跡



①



②



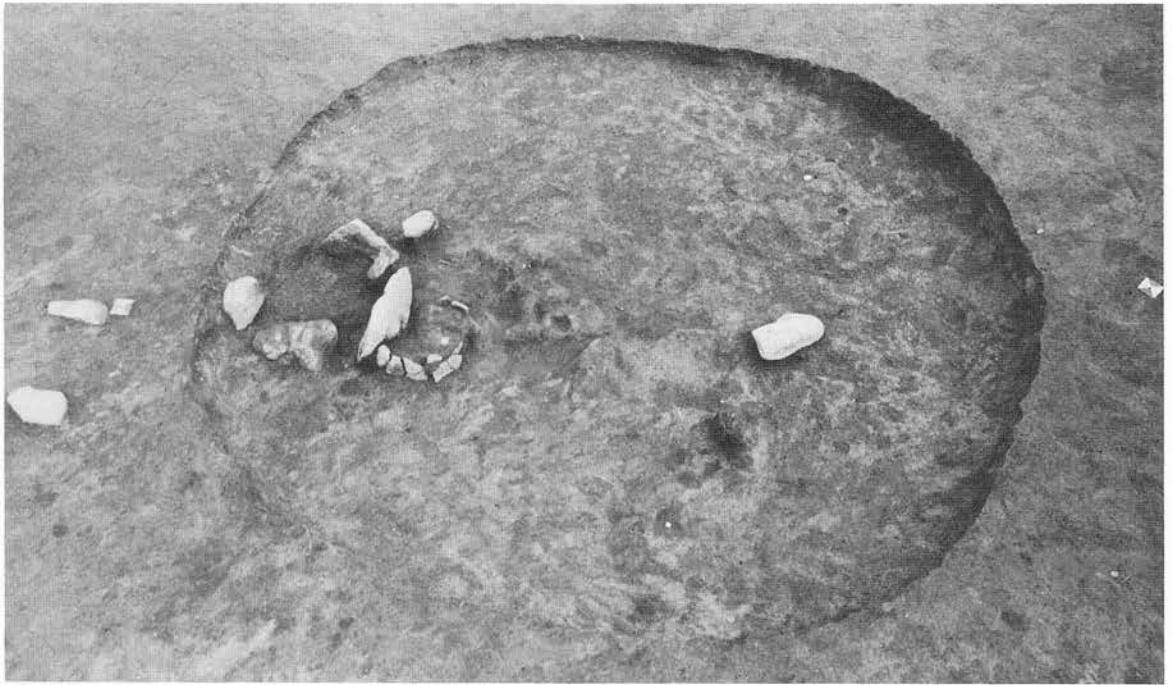
③



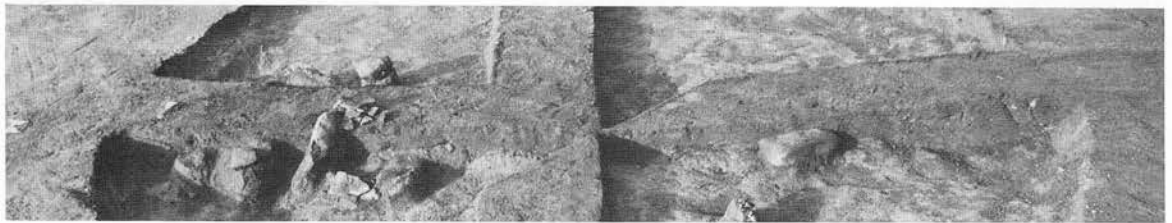
④

- ①完掘後全景
- ②埋土土層
- ③炉跡全景
- ④炉跡断面

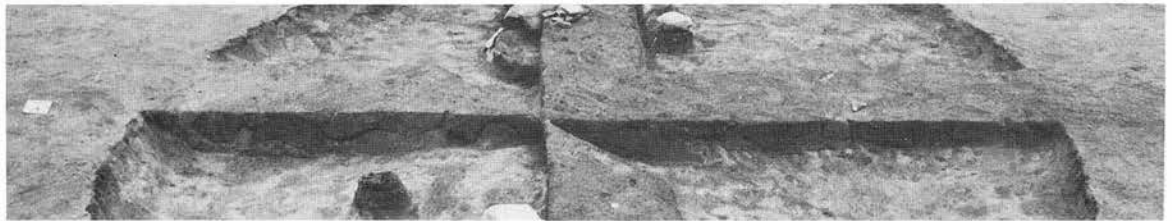
PL-28 (19) II j 59住居跡



①



②



③



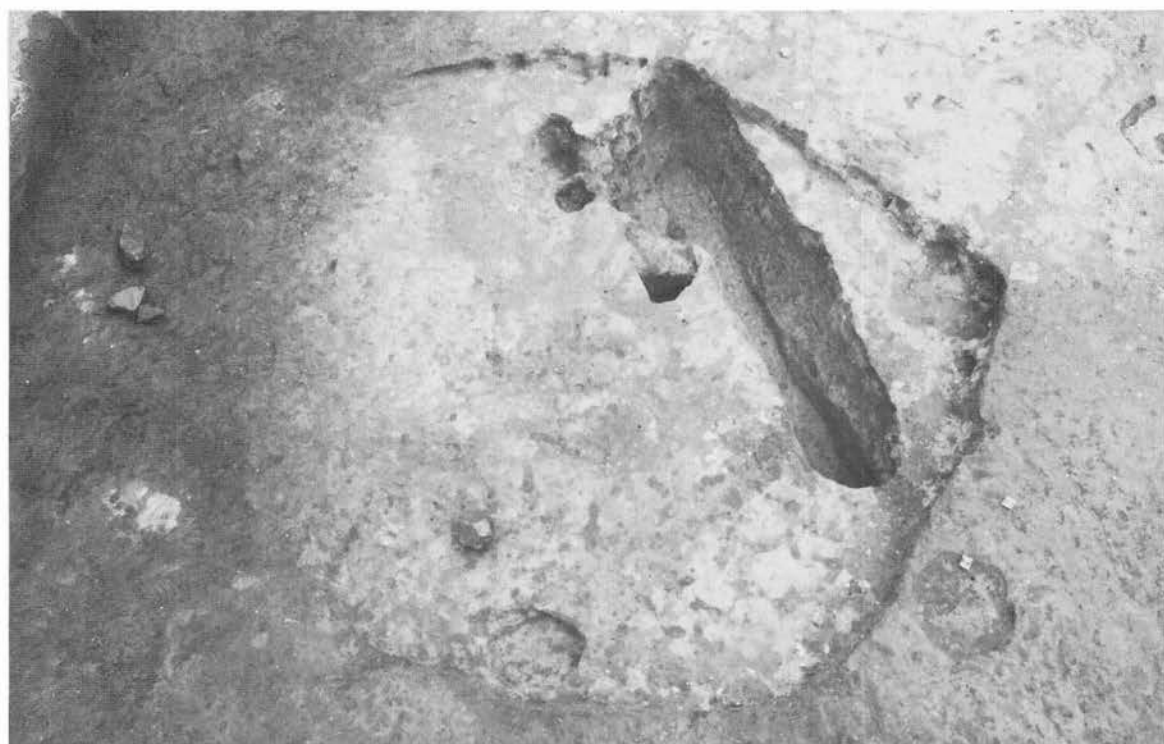
④



⑤

- ①完掘全景
- ②③埋土土層
- ④炉跡全景
- ⑤炉跡断面

PL-29 (21) III b63住居跡



①



②



⑤



③



④

- ①完掘全景
- ②埋土土層
- ③炉跡全景
- ④炉跡断面
- ⑤遺物の出土状況

PL-30 (22) II a68住居跡



①



②



③



④



⑤

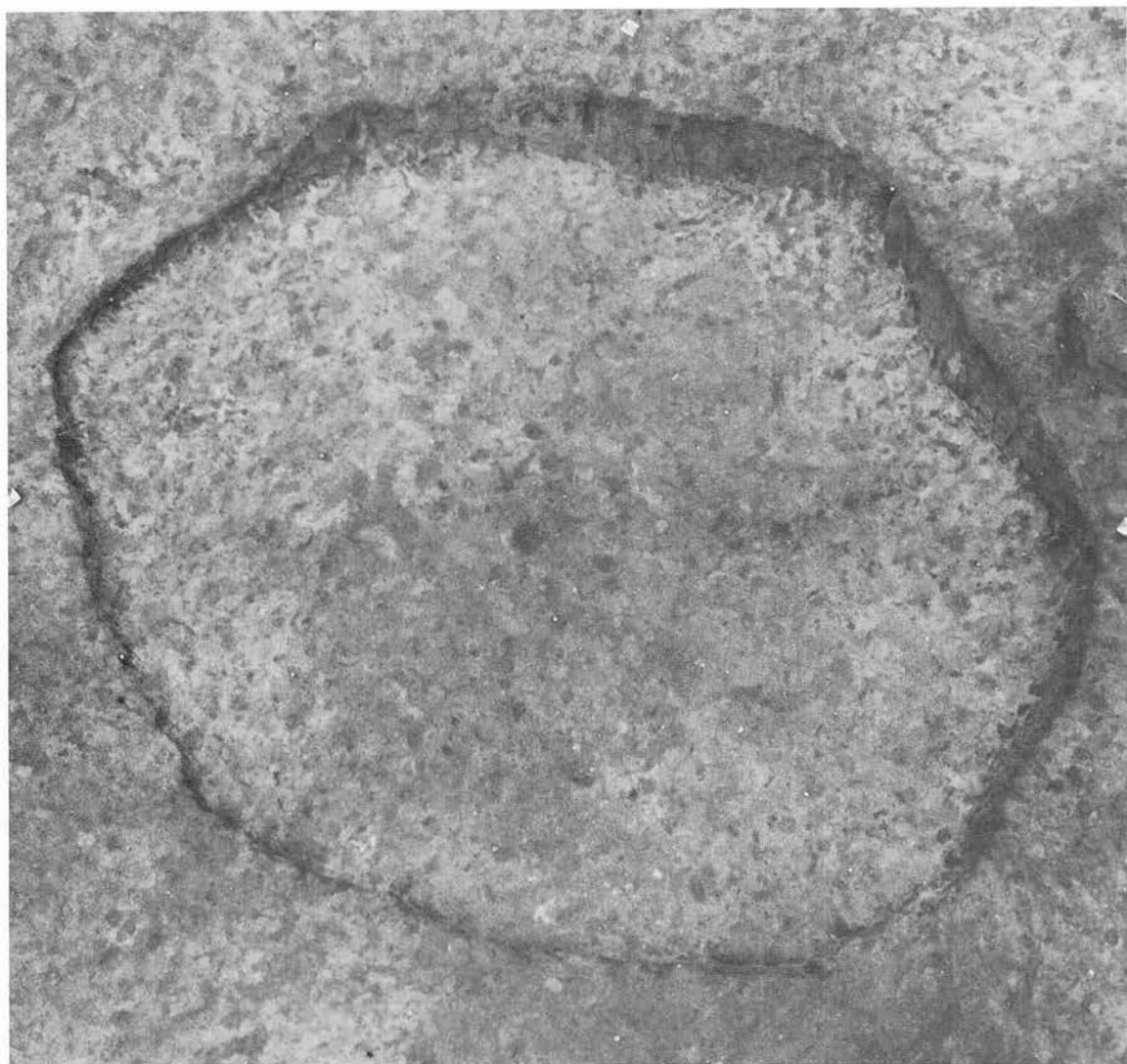
①完掘後全景

②埋土土層

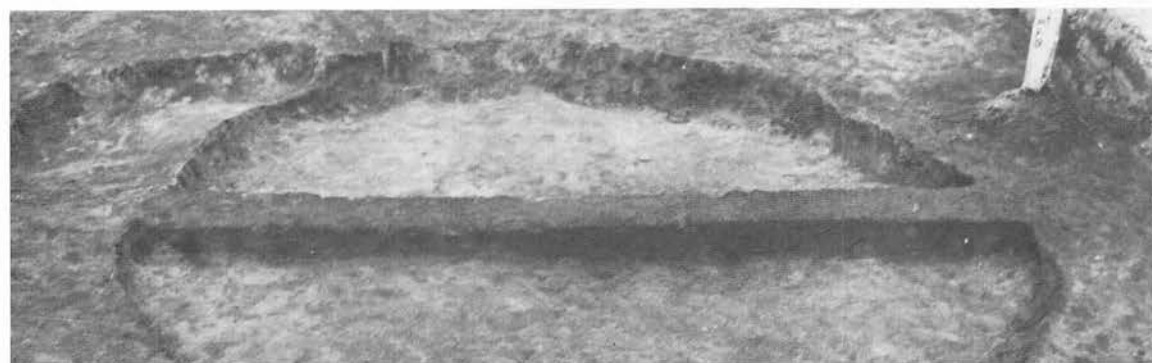
③炉跡全景

④炉跡断面

⑤遺物の出土状況



①

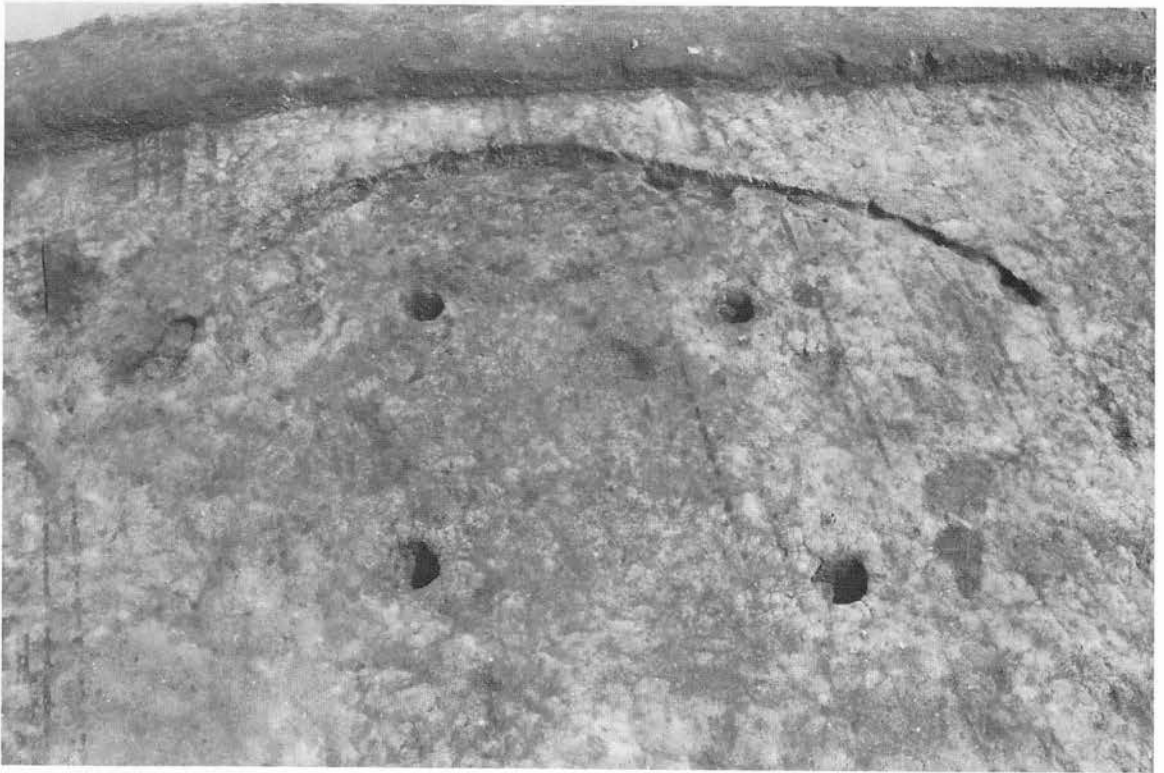


②

①完掘後全景

②埋土土層

PL-32 Ij74住居跡状遺構



①



②



③



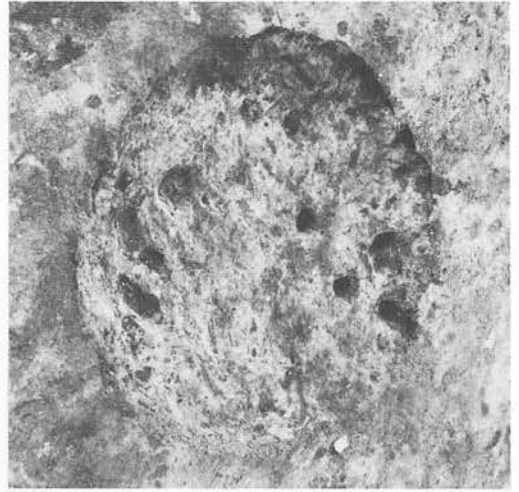
④

①完掘後全景

②埋土土層

③④遺物の出土状況

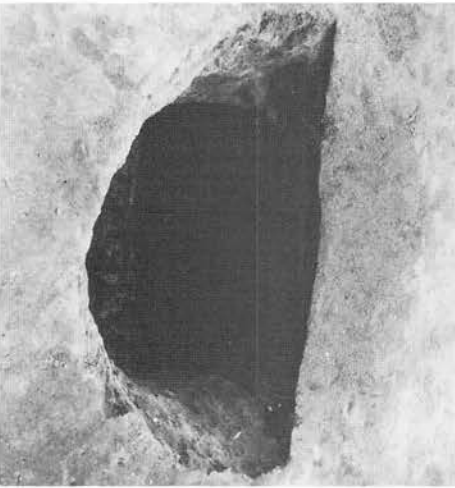
P L - 33 Ⅲ g45住居跡



(1) III a4土坑

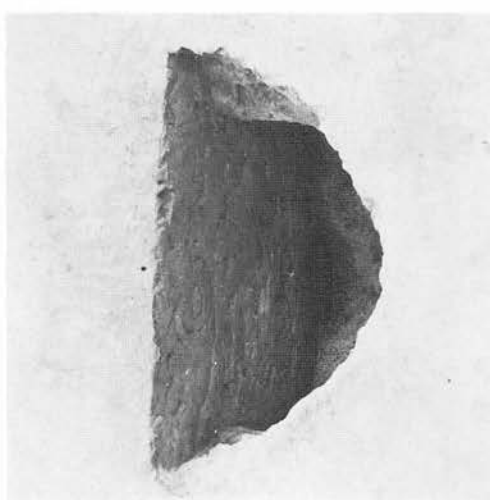
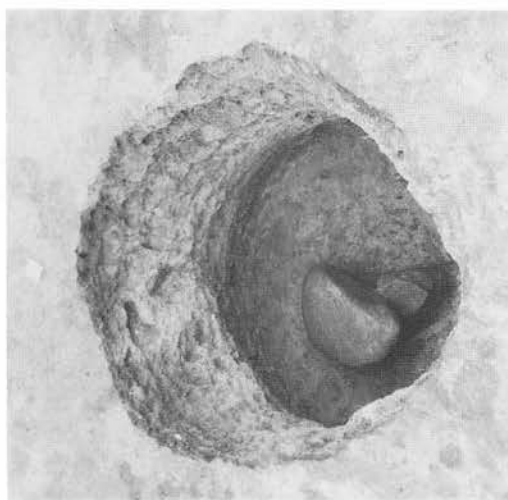


(2) III a17土坑

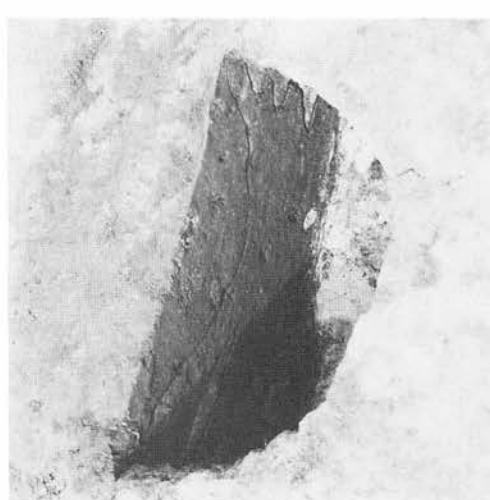
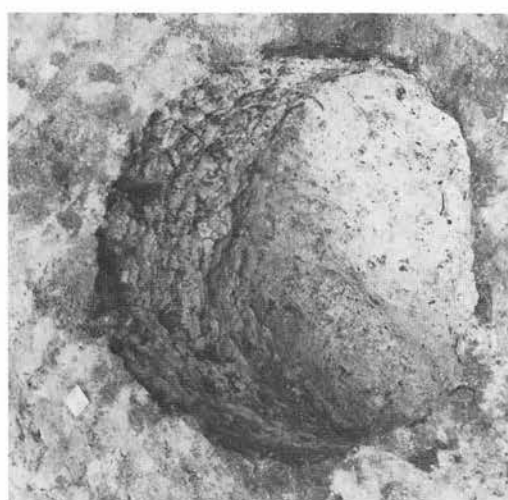


(3) III b11土坑

PL-34 土坑-1

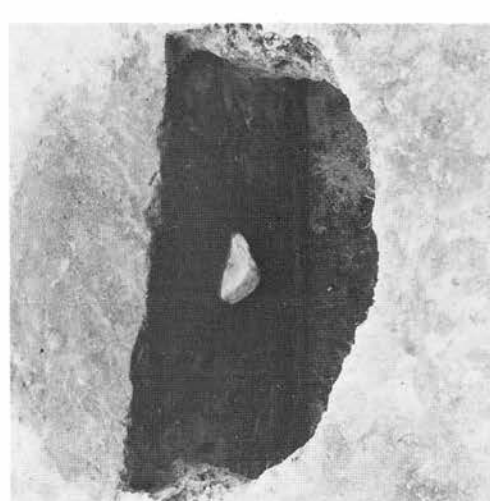
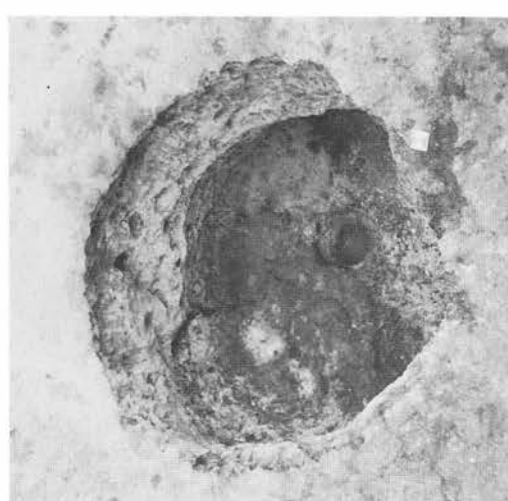


(6) III c7土坑



(5) III b14土坑

PL—35 土坑—2



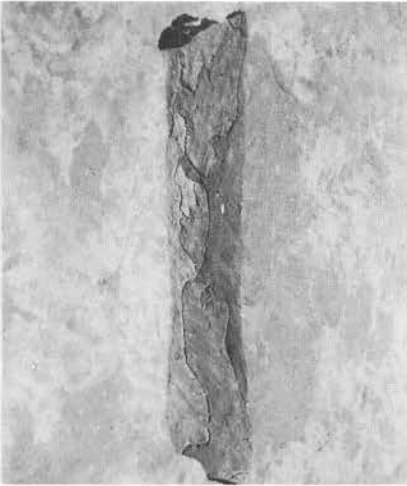
(4) III b13土坑



(7) III c10土坑

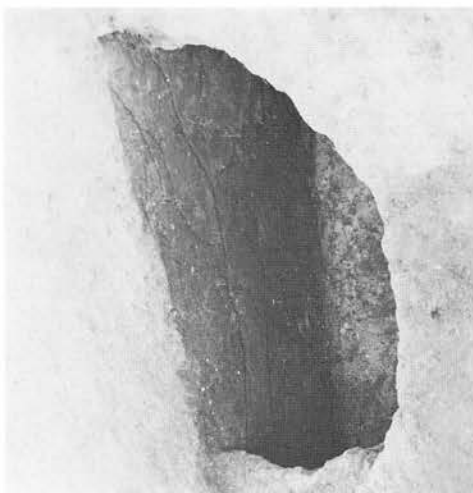
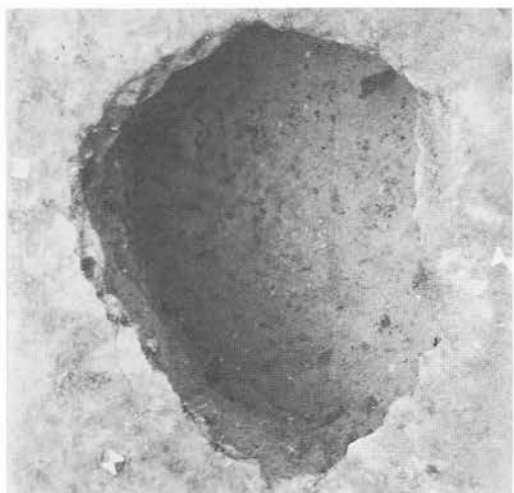


(8) III c11土坑

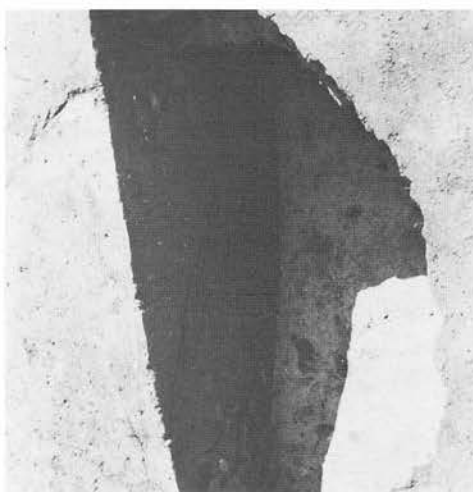
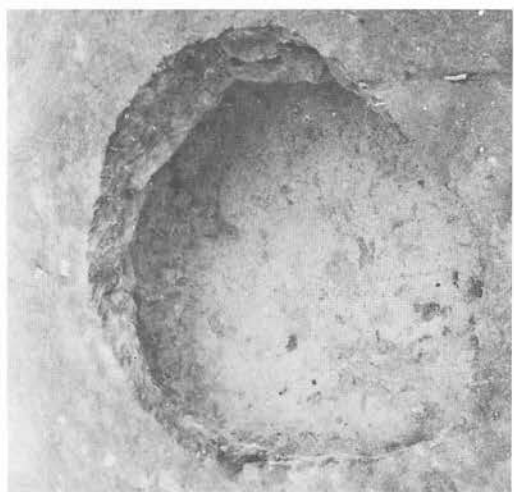


(9) III c12土坑—1

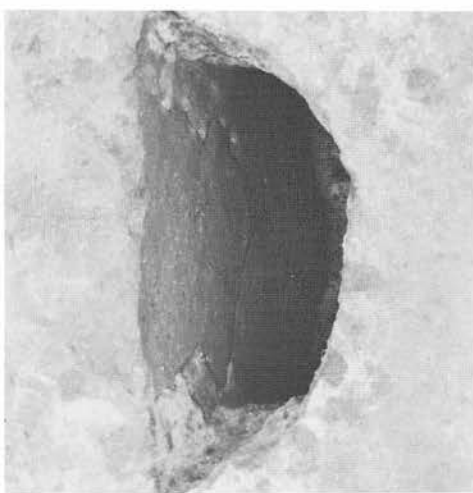
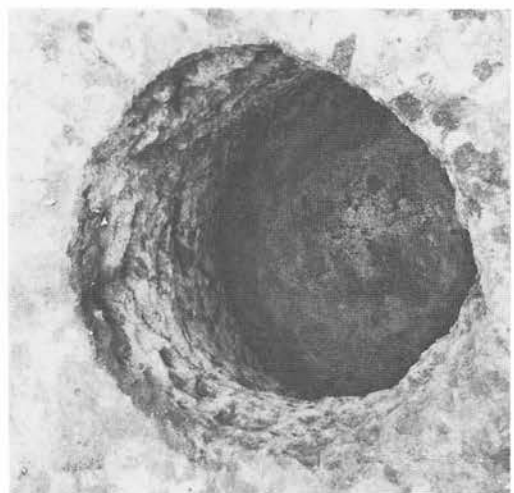
PL—36 土坑—3



(12) III e25土坑—1

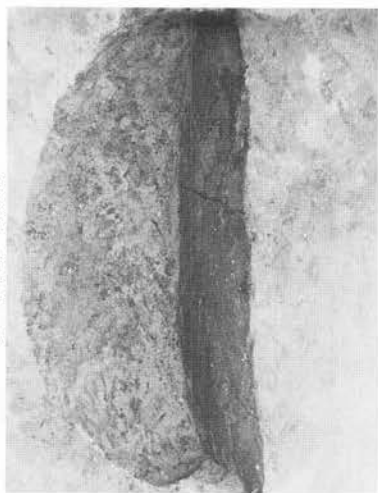
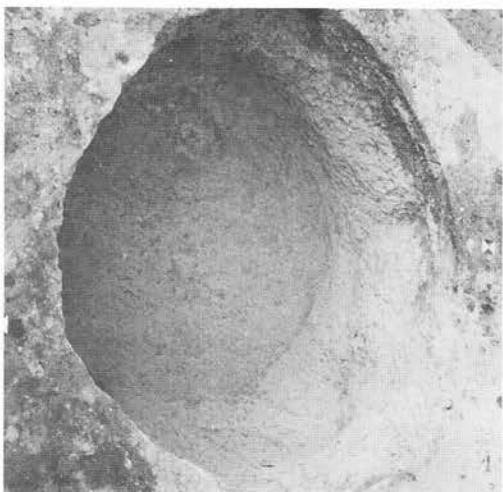
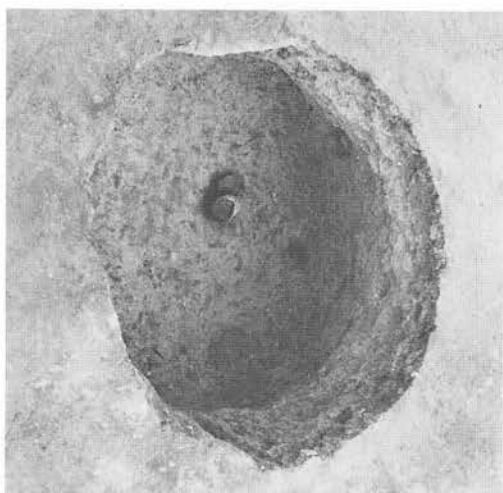
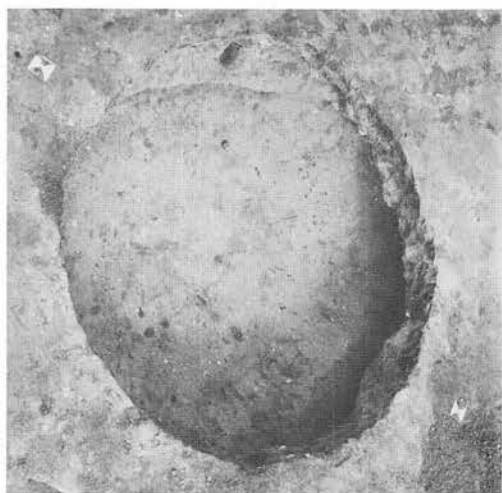


(11) III d26土坑

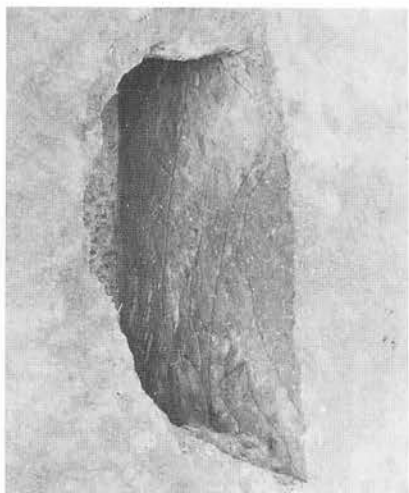


(10) III c12土坑—2

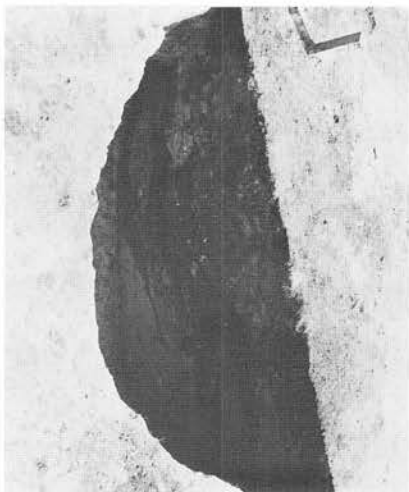
PL-37 土坑-4



(13) IIIe25土坑-2



(14) IIIe26土坑-1



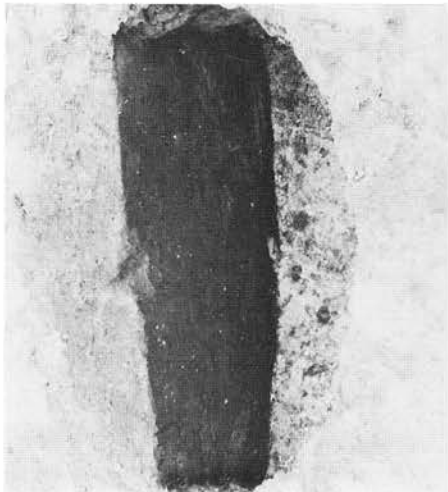
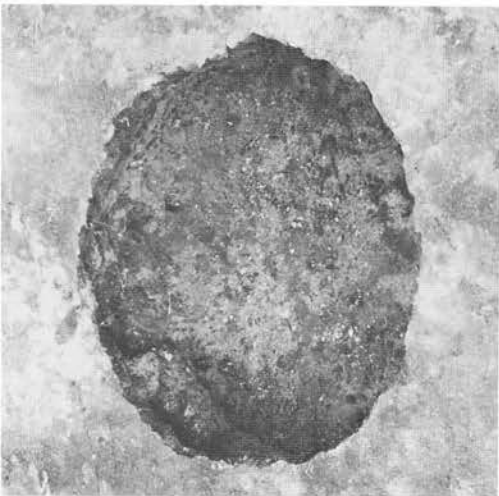
(15) IIIe26土坑-2



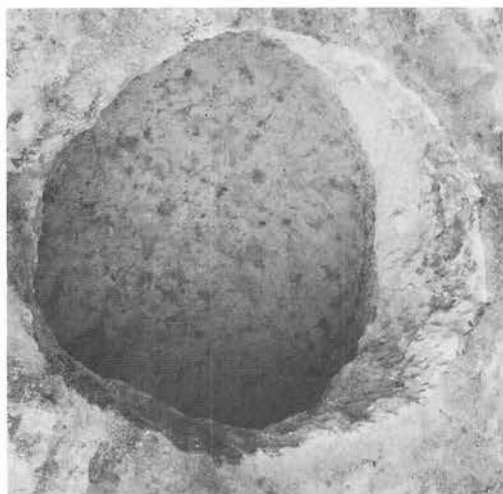
(18) III f26土坑—1



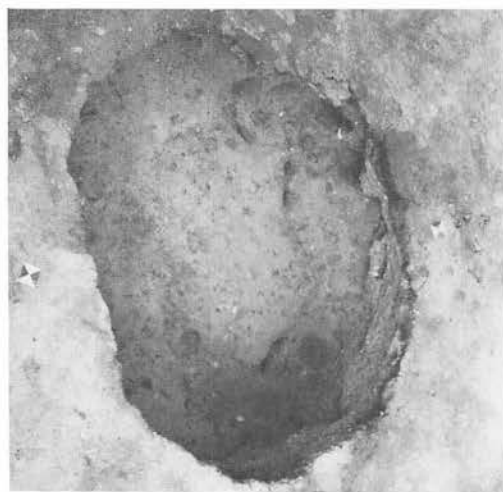
(17) III f25土坑



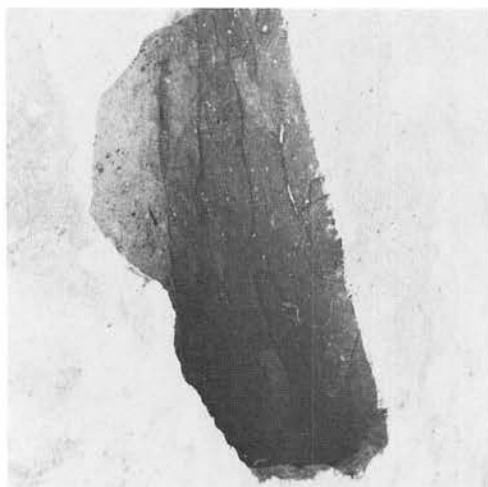
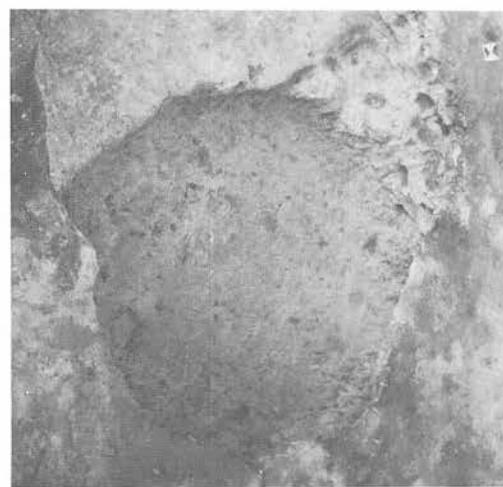
(16) III f19土坑



(19) III f26土坑-2



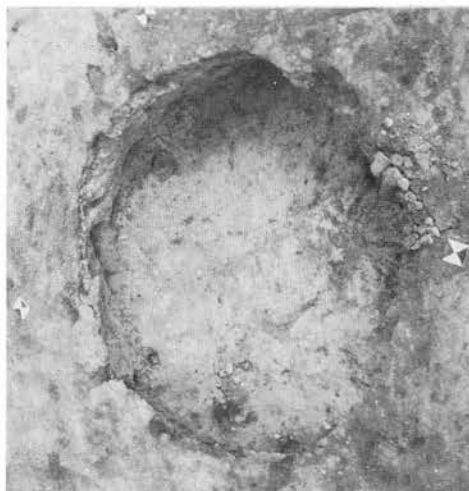
(20) III g25土坑
PL-40 土坑-7



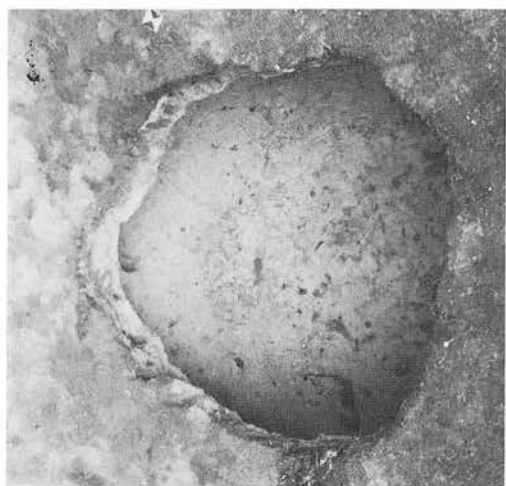
(23) III g26土坑-3



(26) III h25土坑



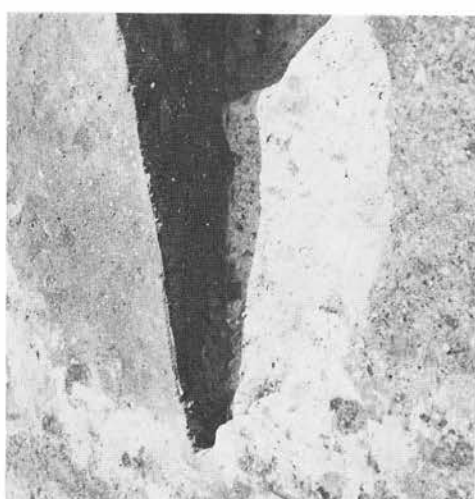
(31) III i27土坑



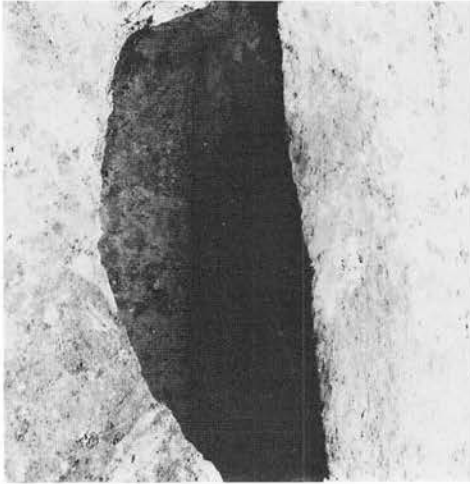
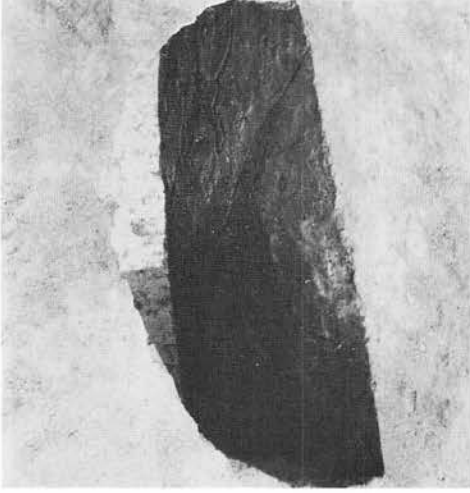
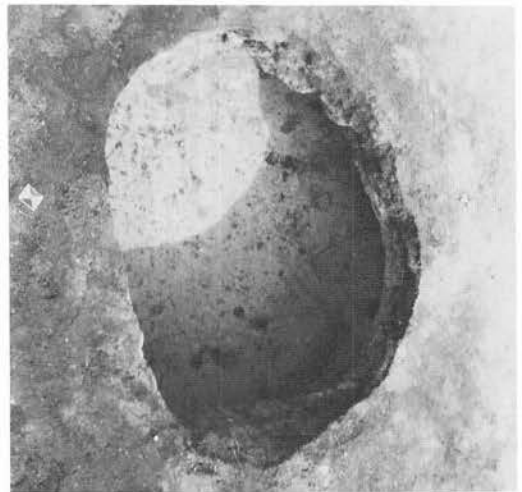
(25) III g27土坑



(24) III g26土坑-4



PL-41 土坑-8

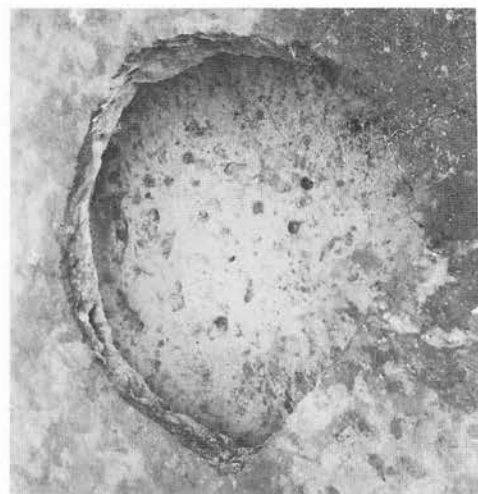


(27) III | 21 土坑

(28) III | 25 土坑-1

(29) III | 25 土坑-2

PL-42 土坑-9



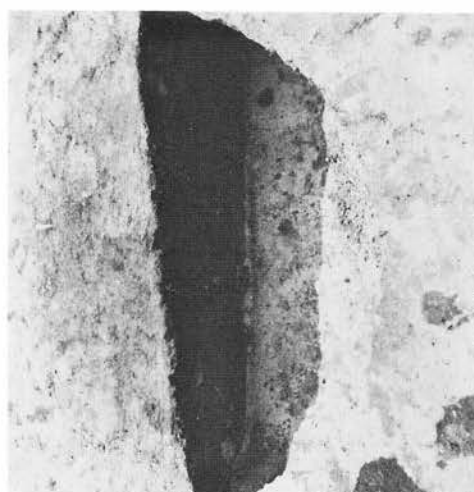
(22) III g26土坑-2



(65) III c39土坑

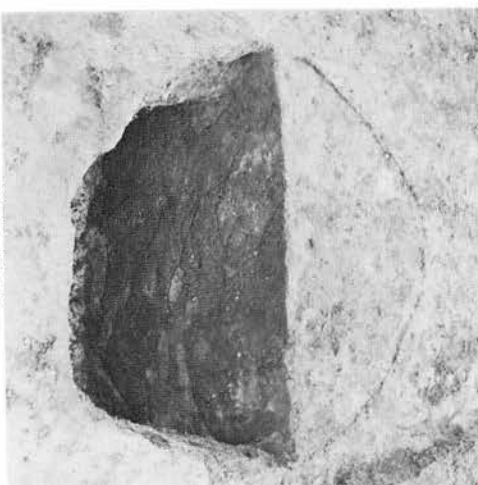
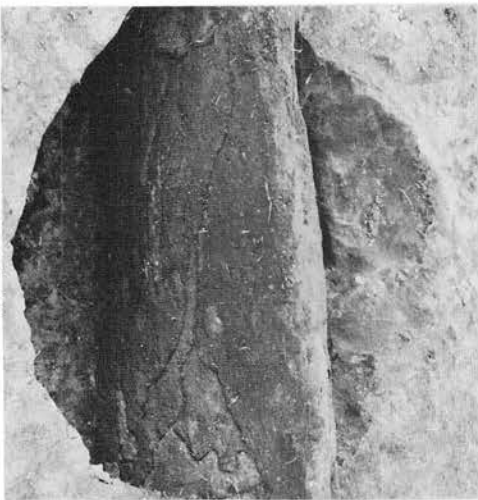
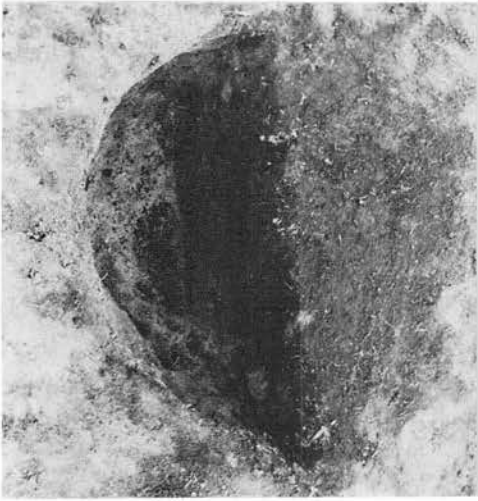
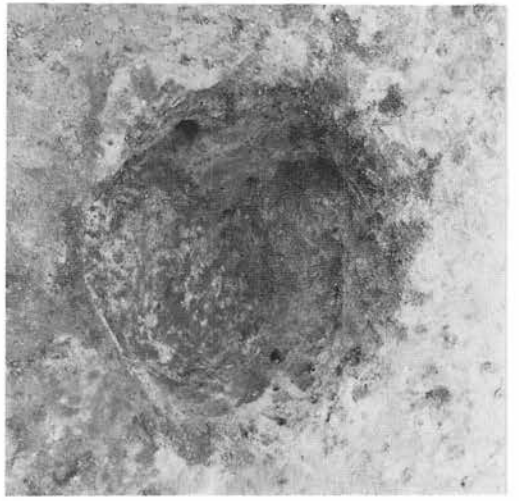


(32) IV a27土坑



(30) III j26土坑



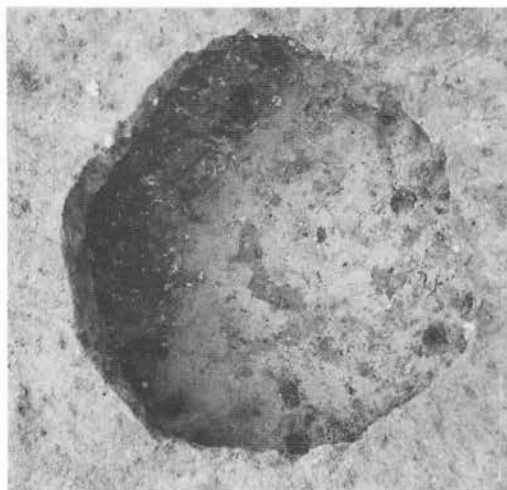


(33) I f40土坑

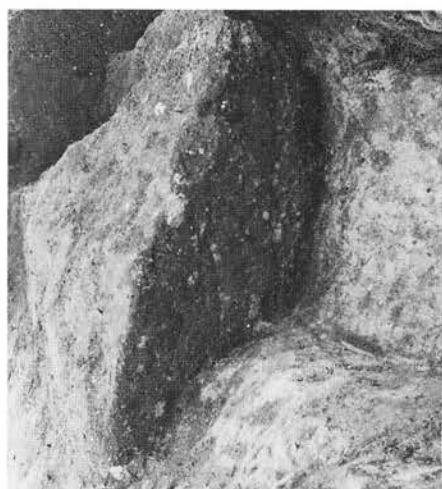
(34) I h40土坑

(35) II c38土坑

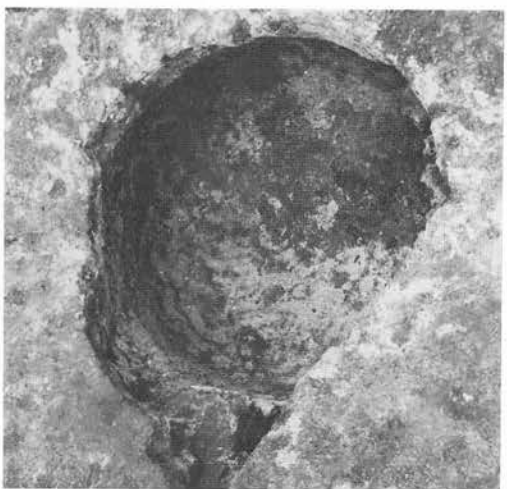
PL—44 土坑—11



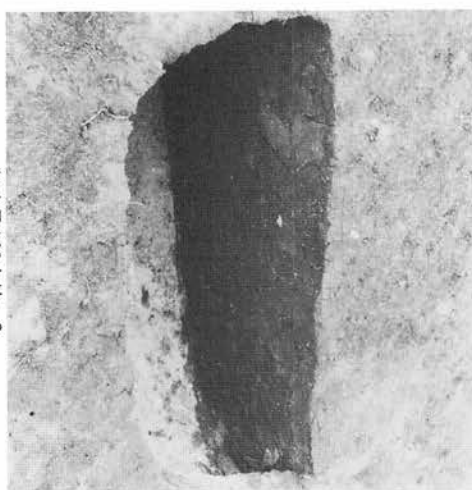
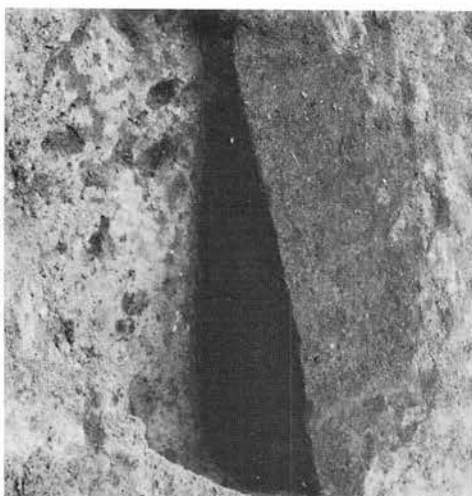
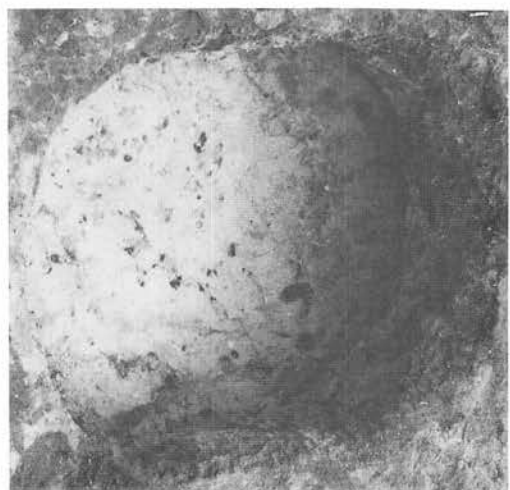
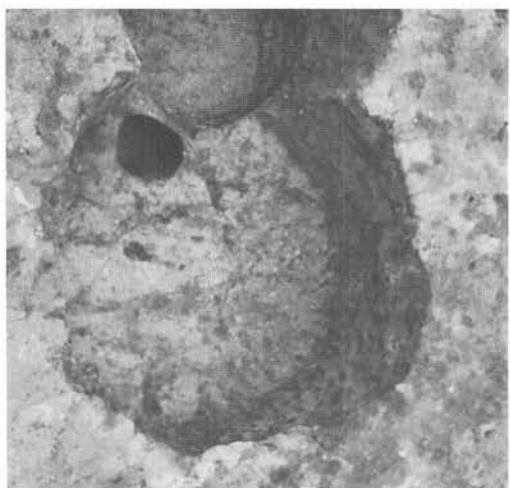
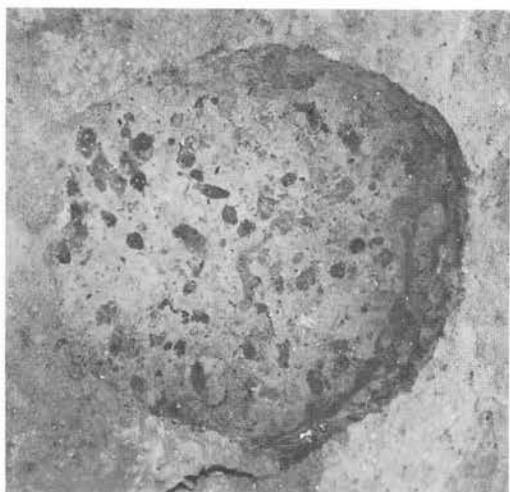
(38) II d40土坑



(37) II c40土坑-2



(36) II c40土坑-1

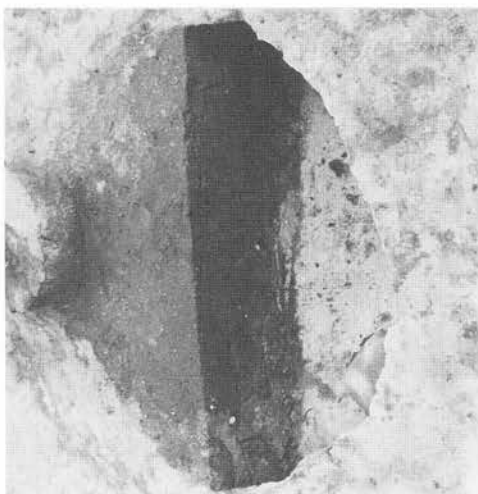


(39) II e41 土坑

(40) II i 38 土坑-1

(41) II i 38 土坑-2

P L-46 土坑-13

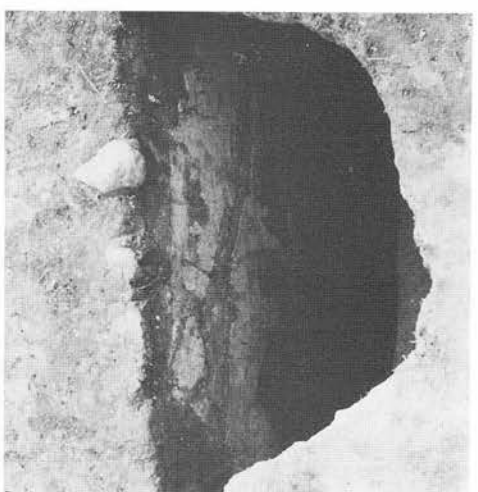
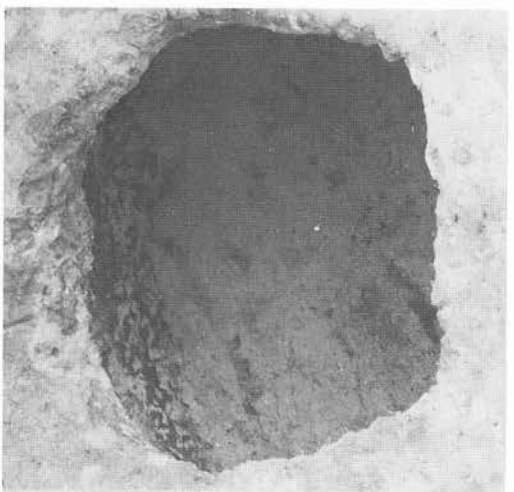


(44) II j37土坑

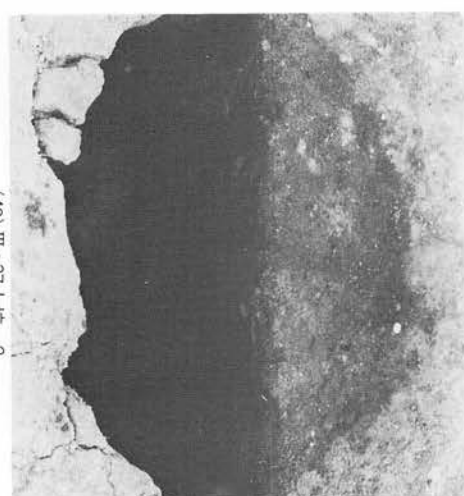
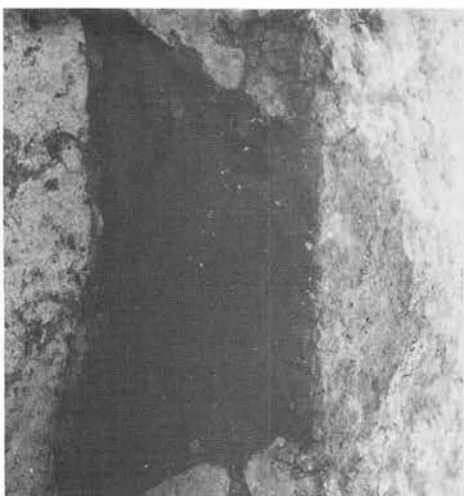
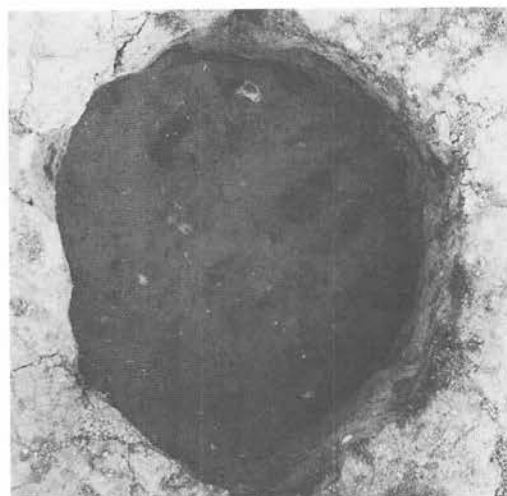


(43) II j34土坑

PL-47 土坑-14



(42) II i39土坑

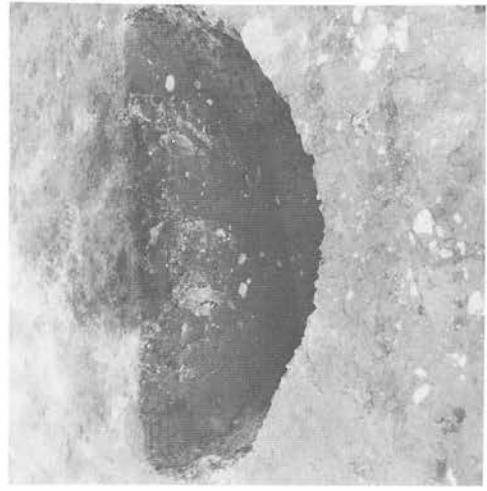
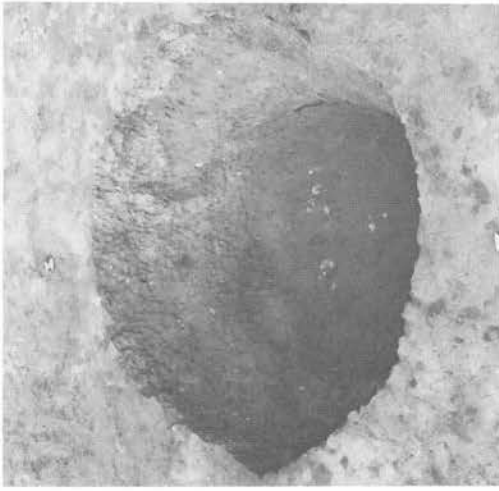


(45) II j 38土坑

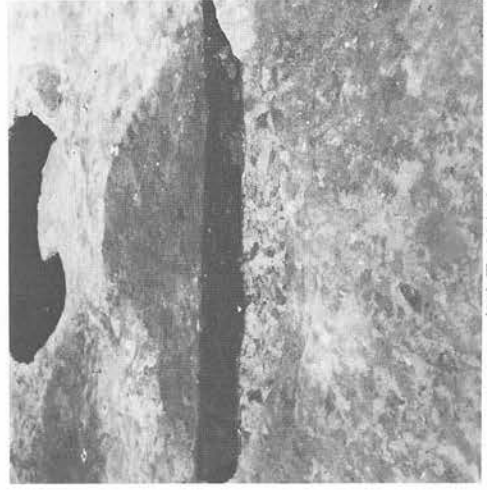
(47) III a37土坑-1

(48) III a37土坑-2

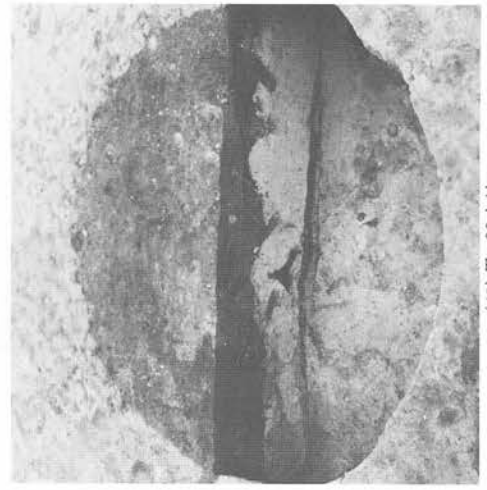
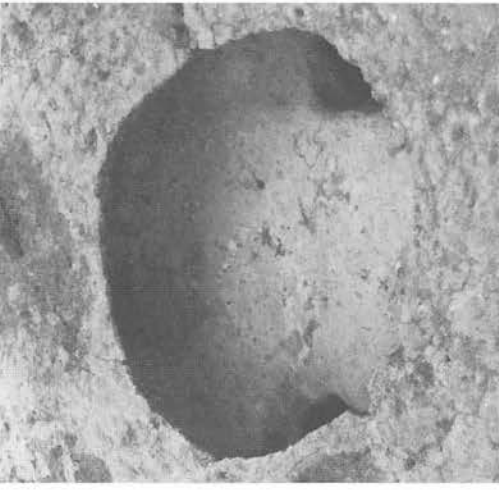
PL-48 土坑-15



(66) III c41 土坑

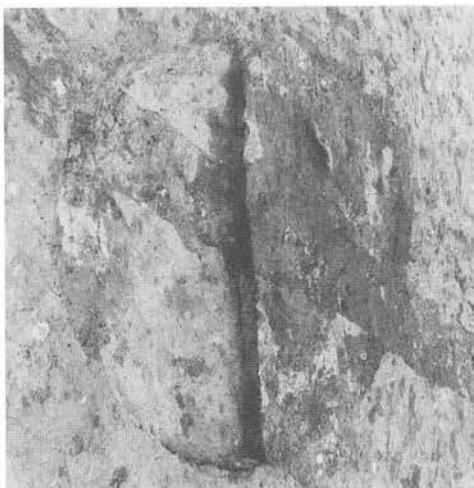
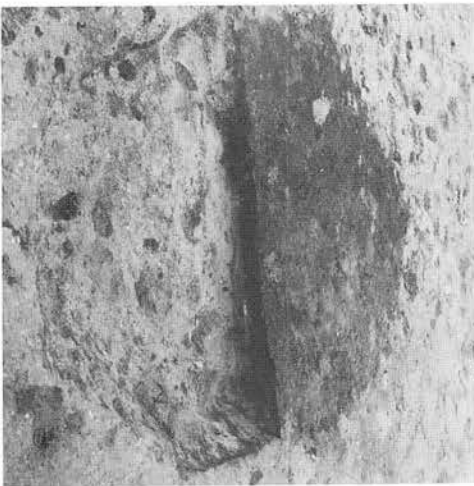
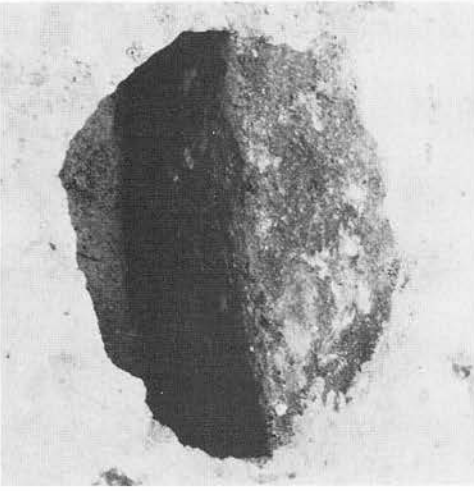
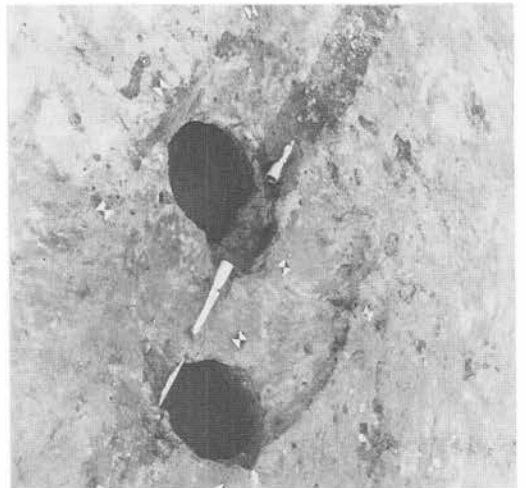
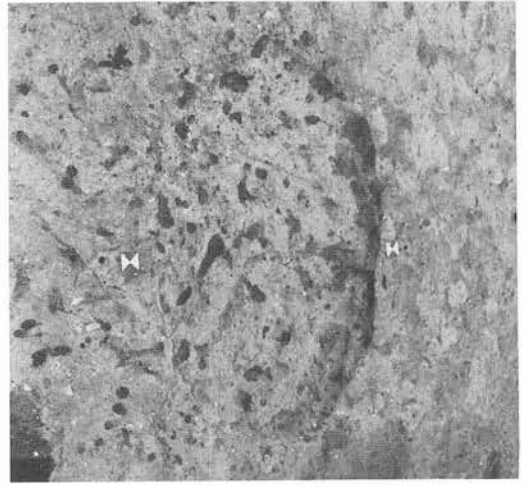
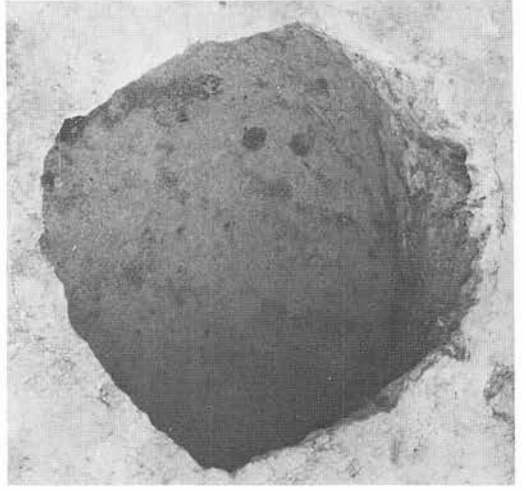


(50) III a39 土坑



(49) III a38 土坑

PL-49 土坑-16

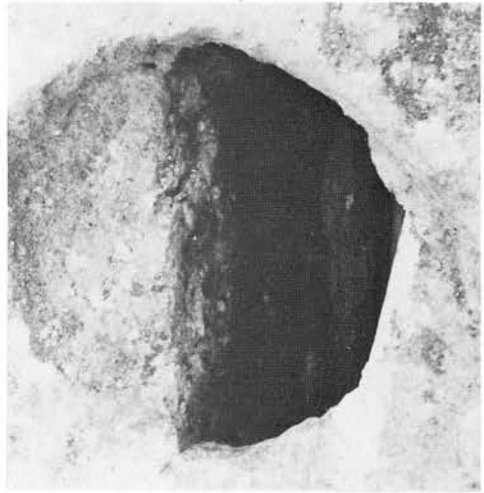
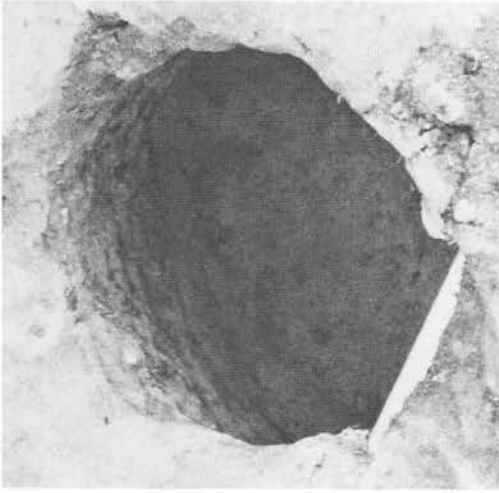


(46) III a 36土坑

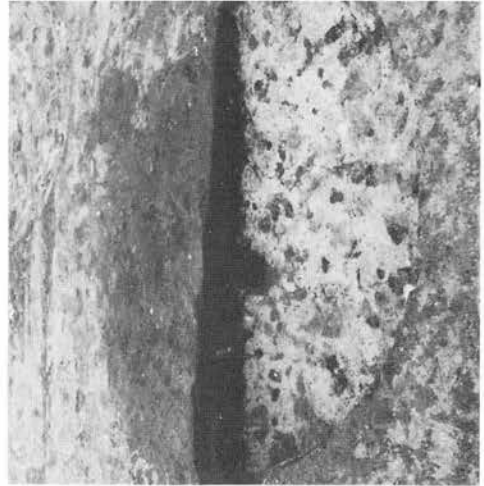
(51) III b 36土坑

(52) III b 37土坑-1

P L-50 土坑-17



(55) III b37 土坑—4

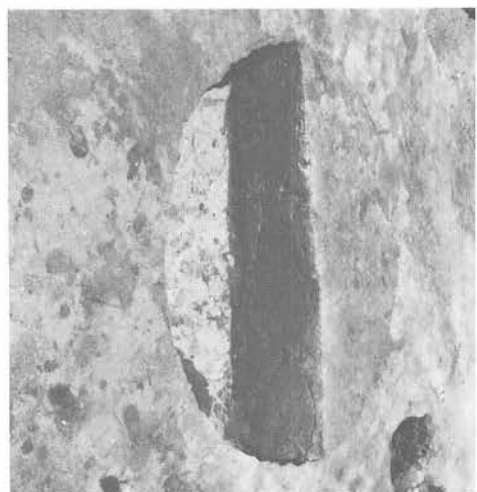
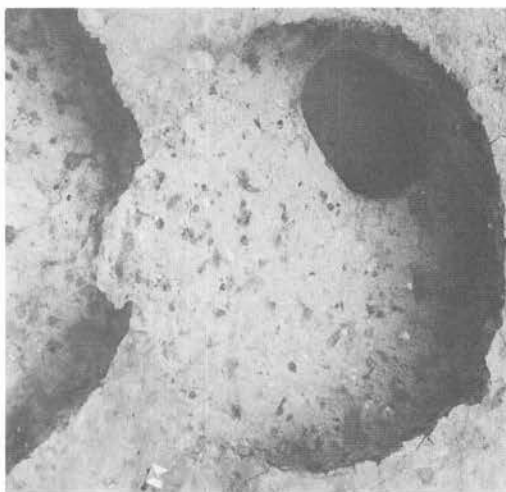
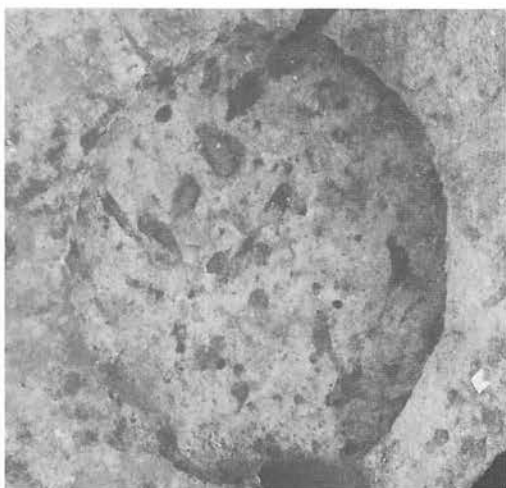
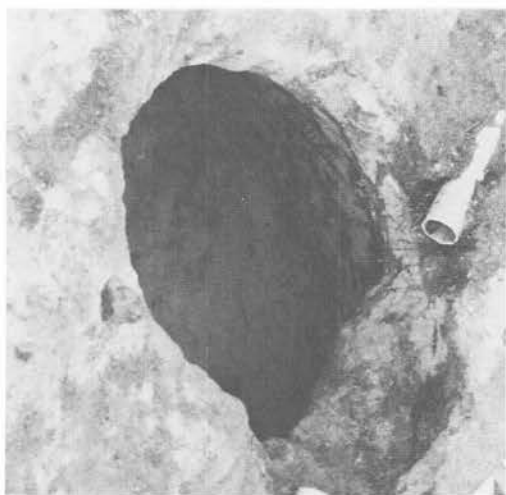


(54) III b37 土坑—3



(53) III b37 土坑—2

PL—51 土坑—18

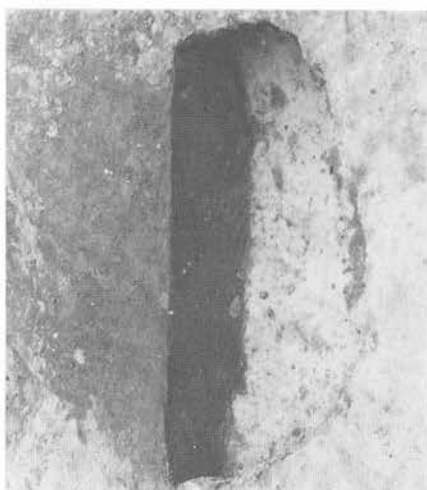


(56) III b37 土坑—5

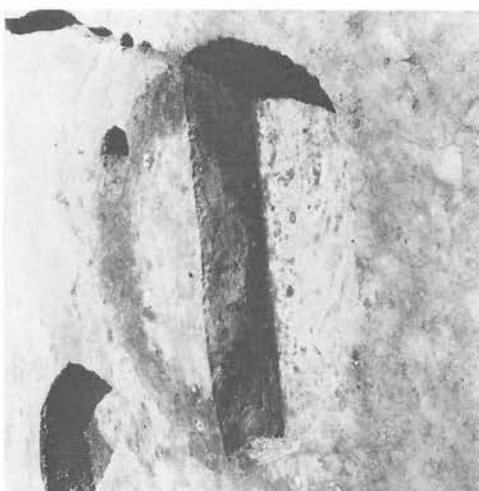
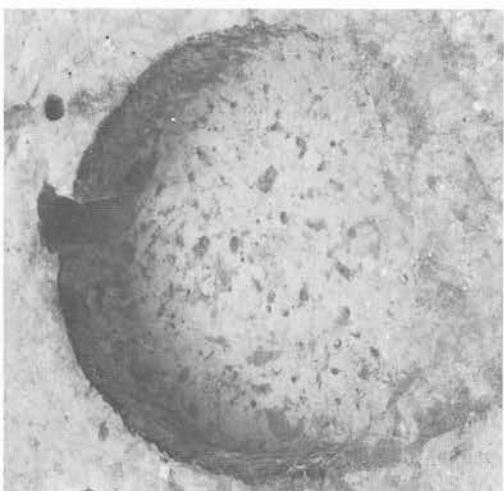
(57) III b38 土坑—1

(58) III b38 土坑—2

P L—52 土坑—19

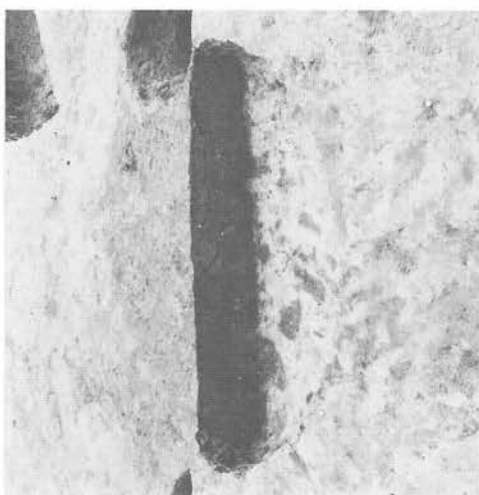


(61) III b 39 土坑

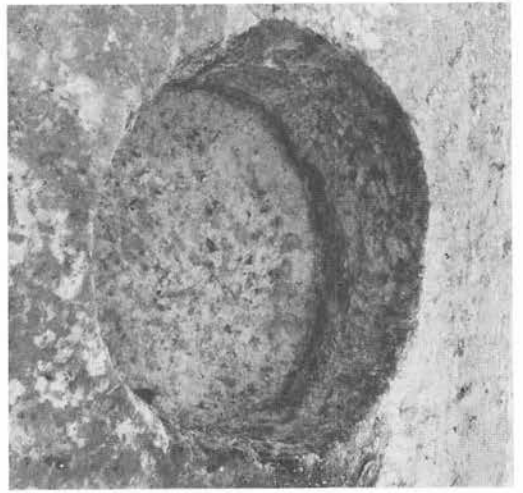


(60) III b 38 土坑—4

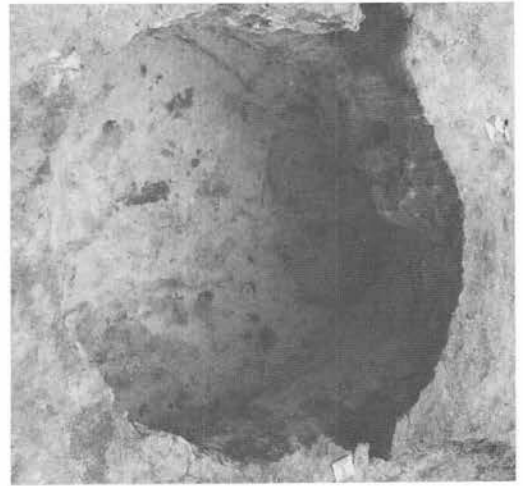
P L—53 土坑—20



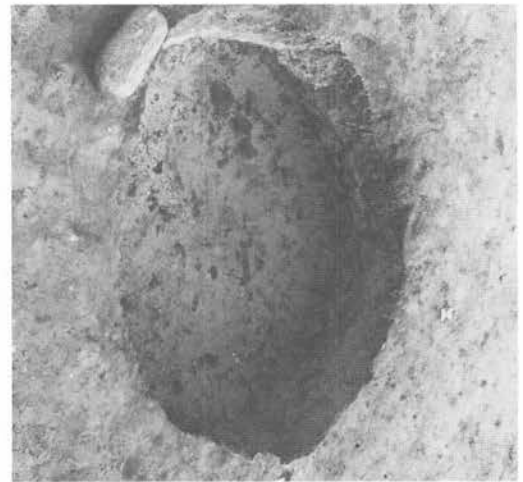
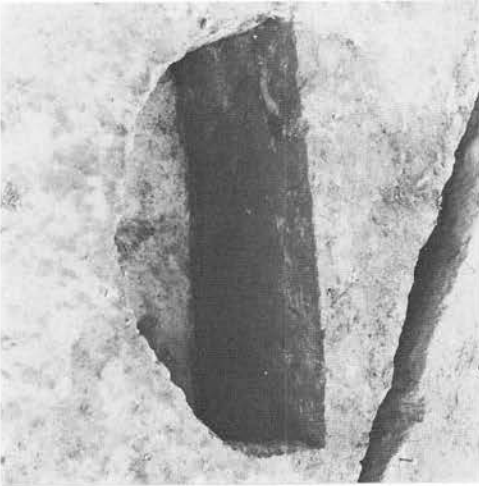
(59) III b 38 土坑—3



(62) III c35 土坑



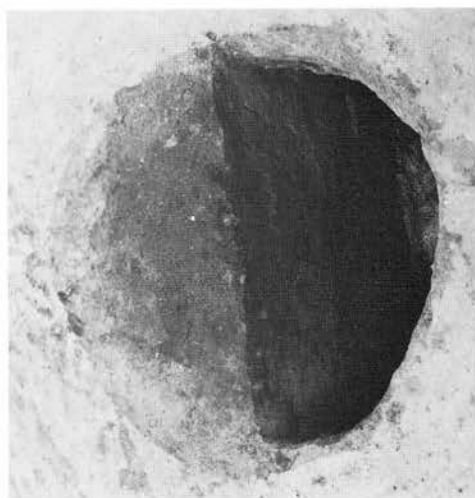
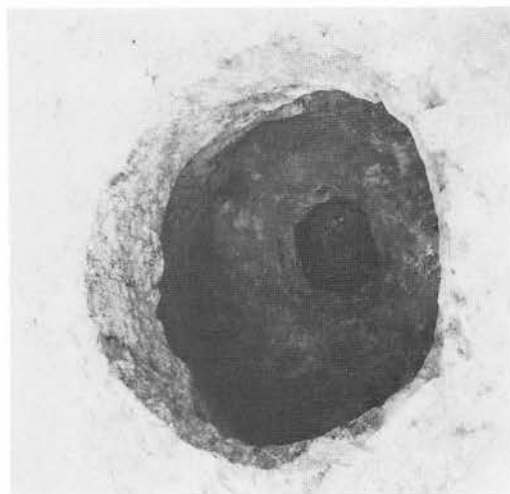
(63) III c38 土坑-1



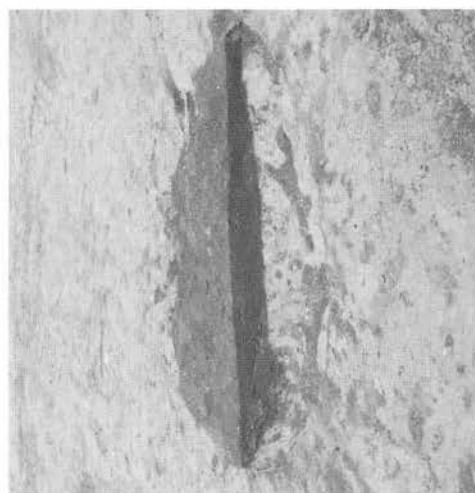
(64) III c38 土坑-2



PL-54 土坑-21



(69) III d42 土坑-1

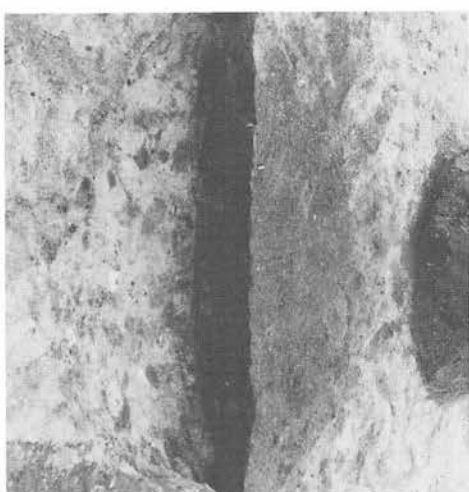
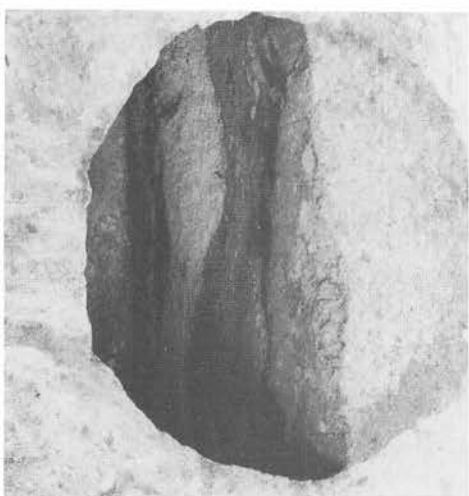


(68) III d40 土坑



(67) III c49 土坑

P L - 55 土坑-22

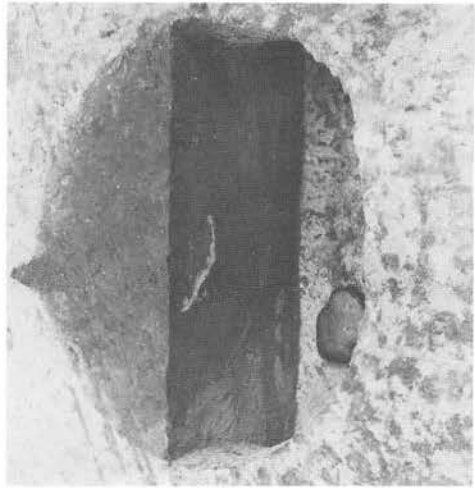
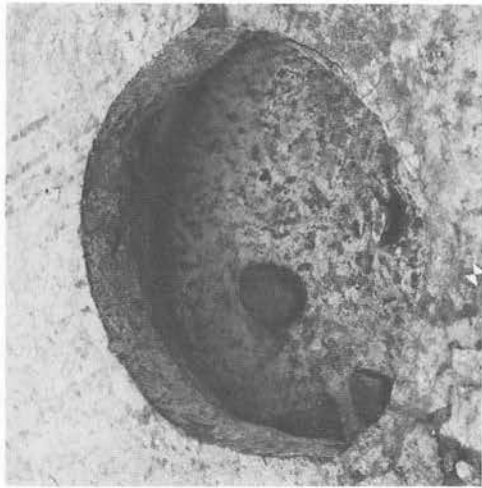
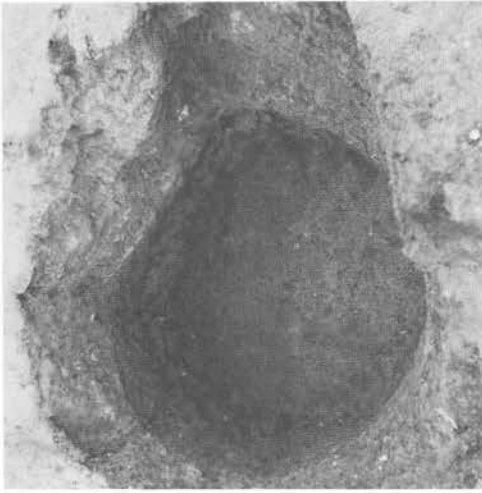


(70) III d42土坑-2

(71) III e39土坑

(72) III e40土坑

P L—56 土坑—23



(75) III e43土坑-2

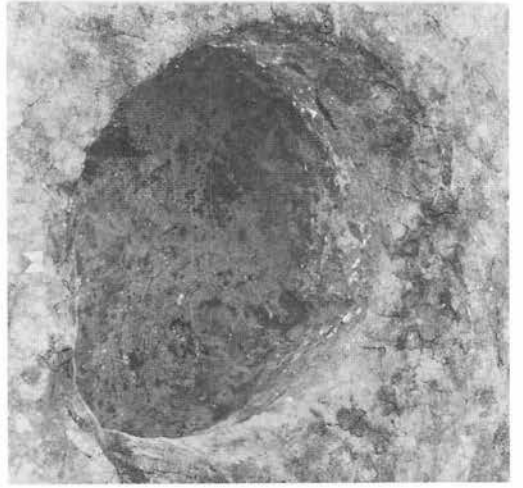
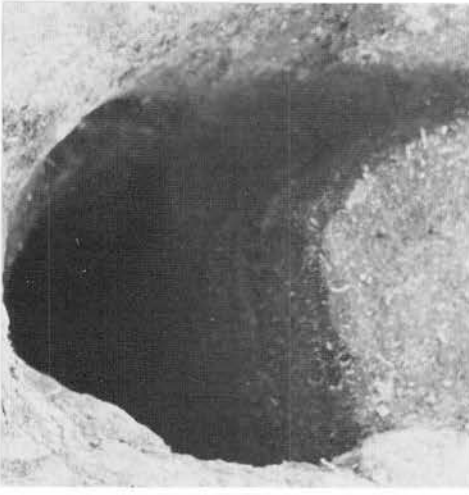
(74) III e43土坑-1

(73) III e42土坑

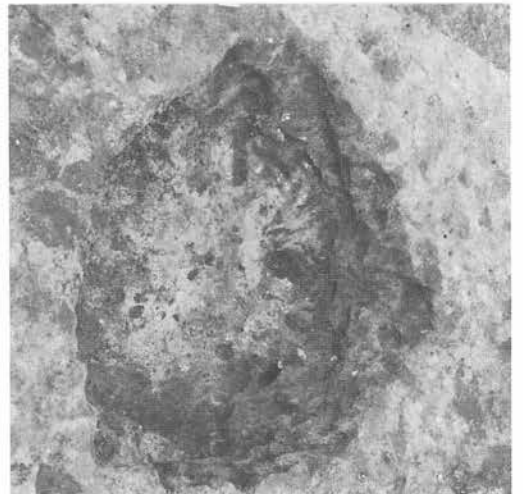
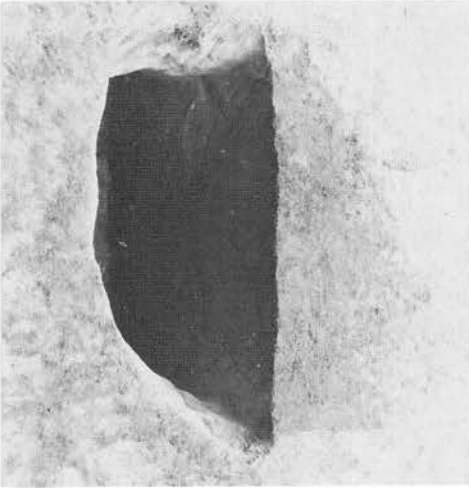
PL-57 土坑-24



(76) III e45土坑



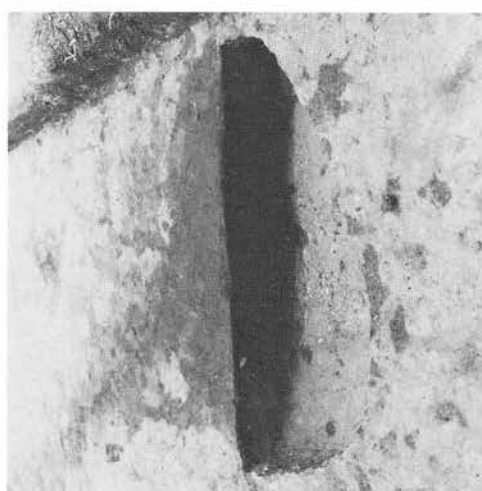
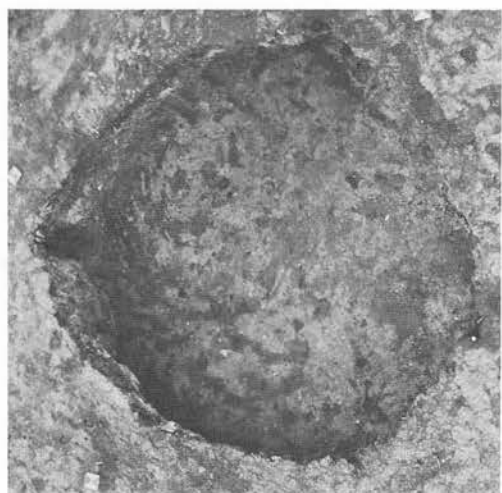
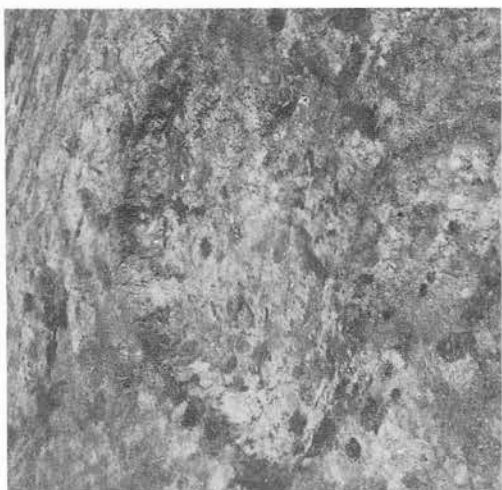
(77) III e47土坑



(78) III f39土坑



P L—58 土坑—25

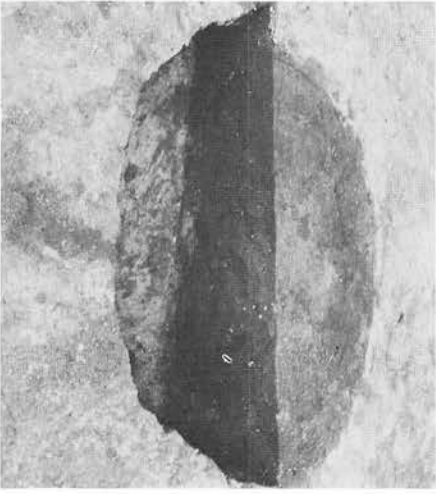
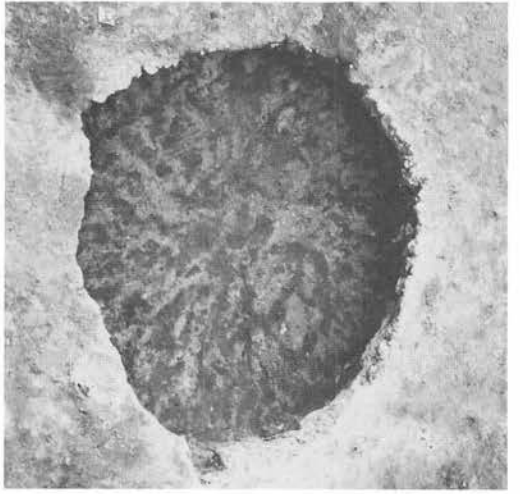


(82) III f48土坑

(81) III f43土坑

(79) III f40土坑

P L — 59 土坑—26

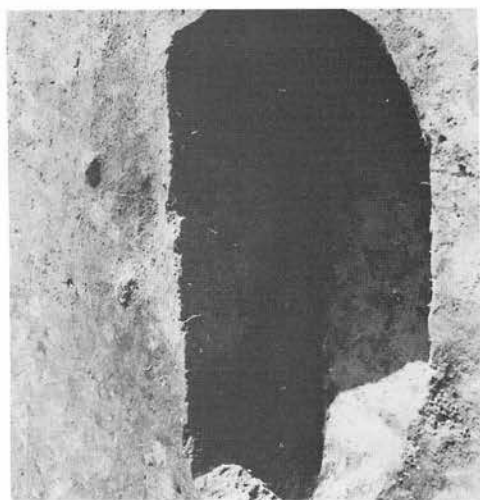
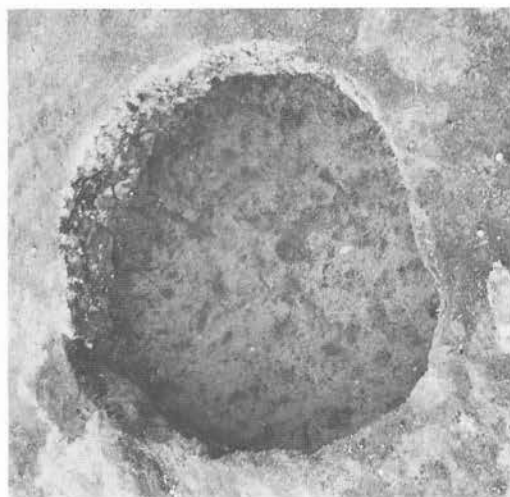


(83) III 943 土坑—1

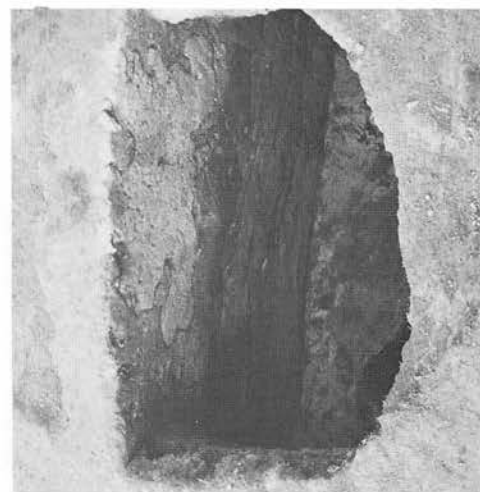
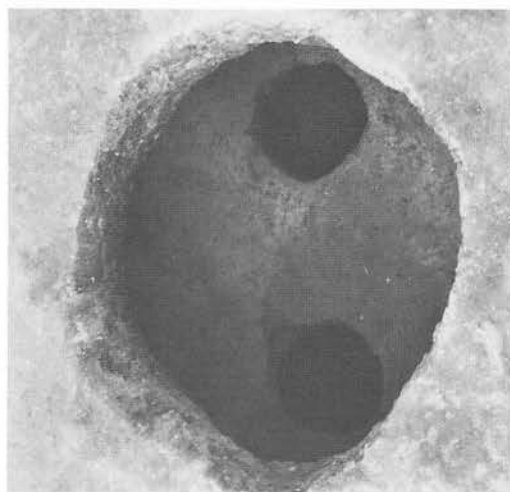
(84) III 943 土坑—2

(85) III 943 土坑—3

P L—60 土坑—27



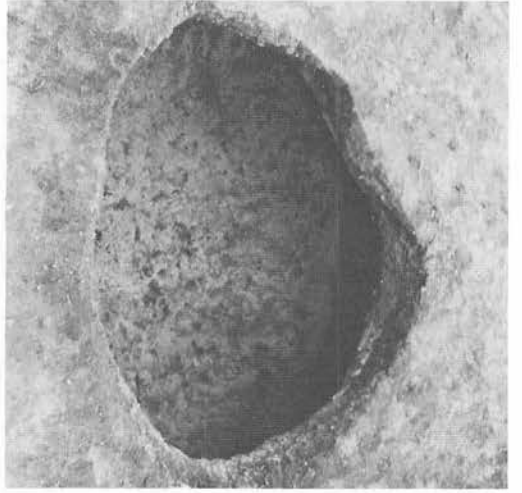
(88) III g44土坑



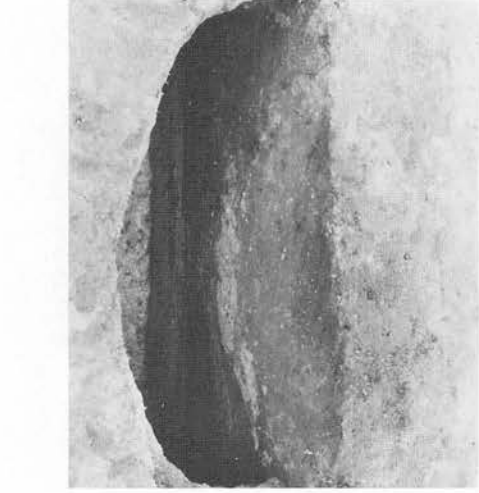
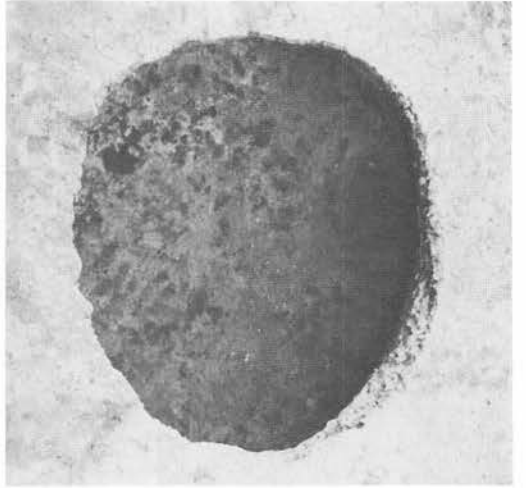
(87) III g43土坑-5



(86) III g43土坑-4



(80) III f42土坑



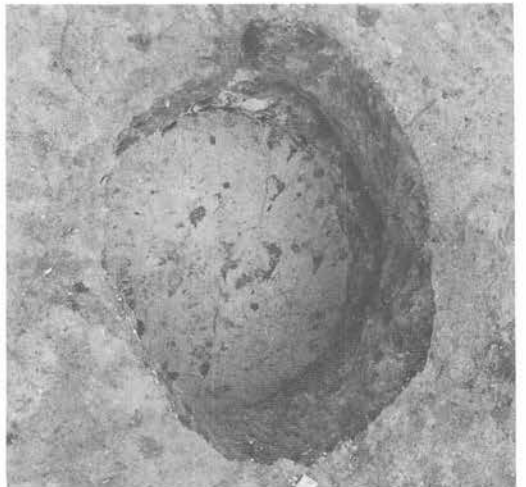
(89) III h43土坑



(99) II a55土坑-1



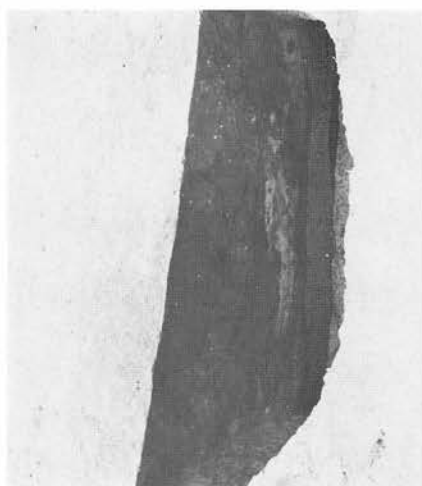
(90) I j52土坑



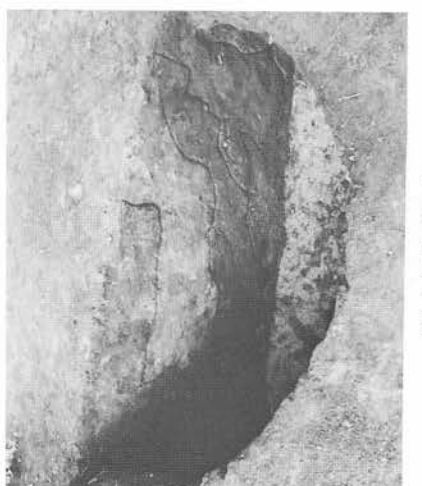
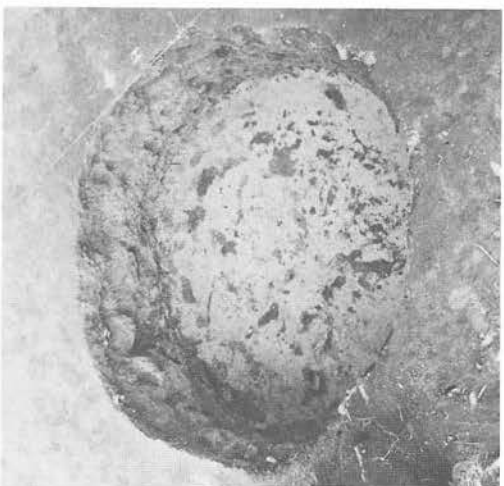
P L-62 土坑-29



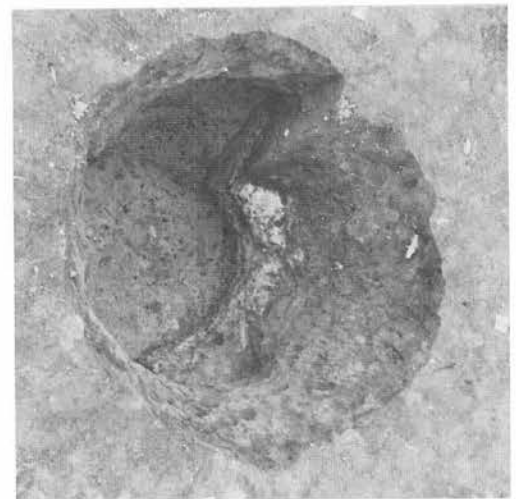
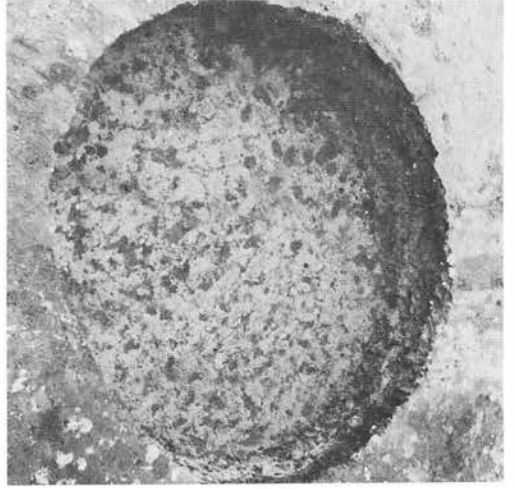
(93) I j 55土坑



(92) I j 53土坑-2



(91) I j 53土坑-1



(94) I j57土坑

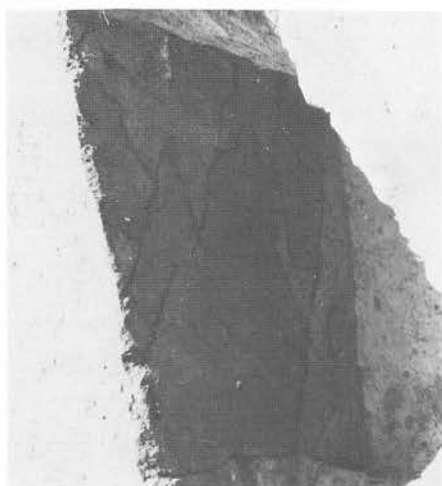
(95) II a52土坑

(96) II a53土坑-1A

PL-64 土坑-31



(100) II a55土坑-2

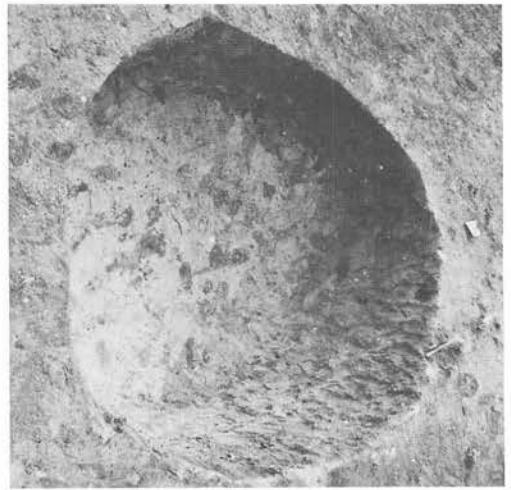


(98) II a53土坑-2



(97) II a53土坑-1 B

P L - 65 土坑-32

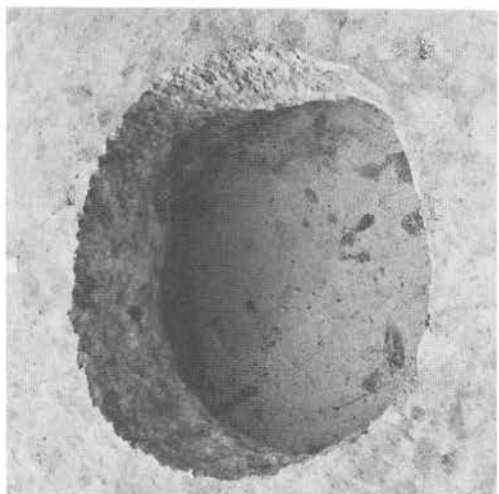


(101) II a58土坑-1

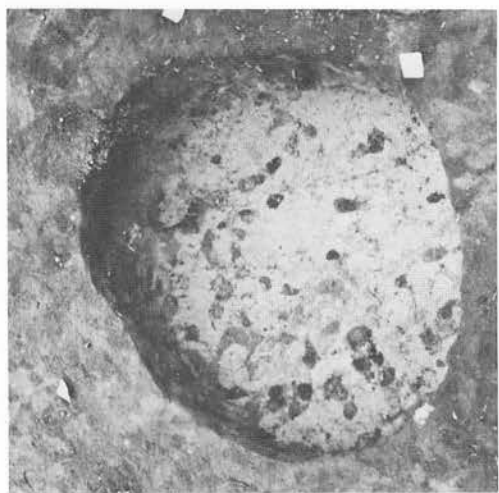
(102) II a58土坑-2

(103) II a58土坑-3

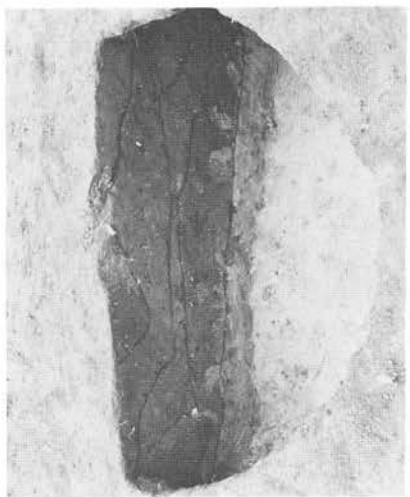
P L-66 土坑-33



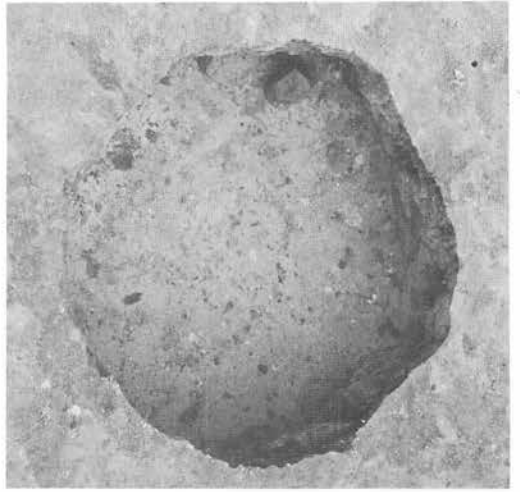
(106) II b54土坑-1



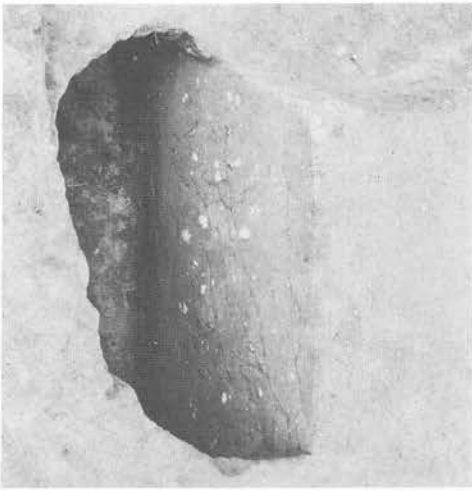
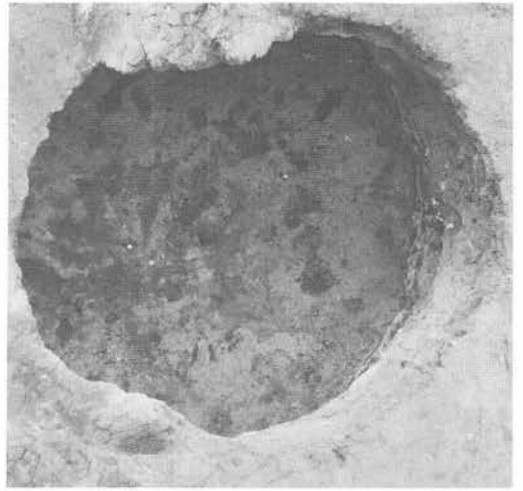
(105) II a59土坑



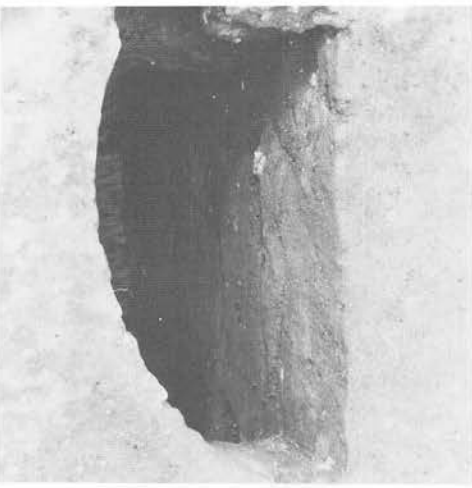
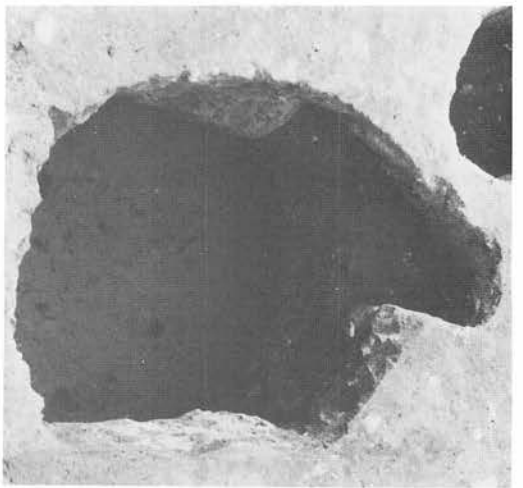
(104) II a58土坑-4



(107) II b54土坑-2



(108) II b55土坑-1



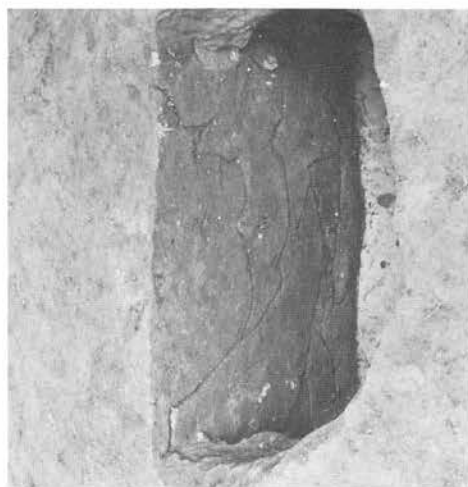
(109) II b55土坑-2



(112) II b56土坑-3

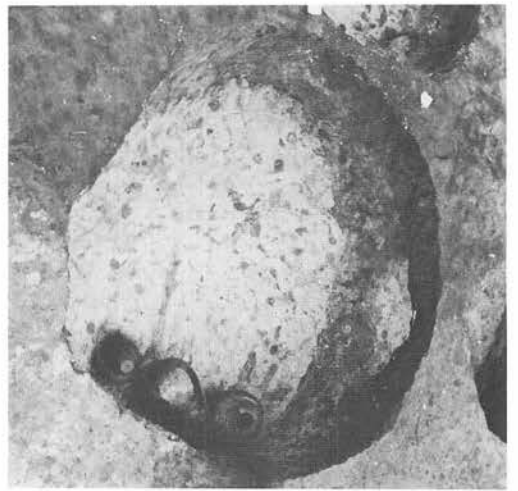
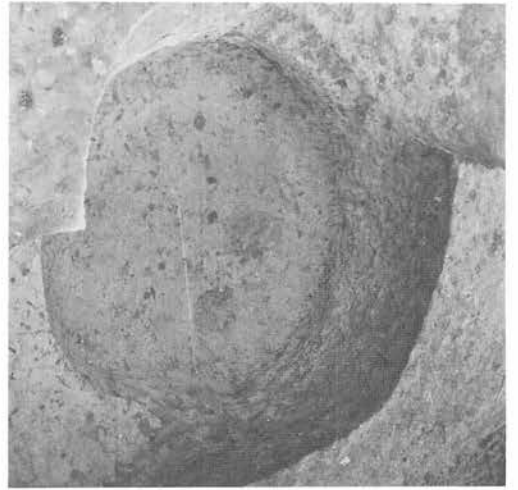


(111) II b56土坑-2



(110) II b56土坑-1

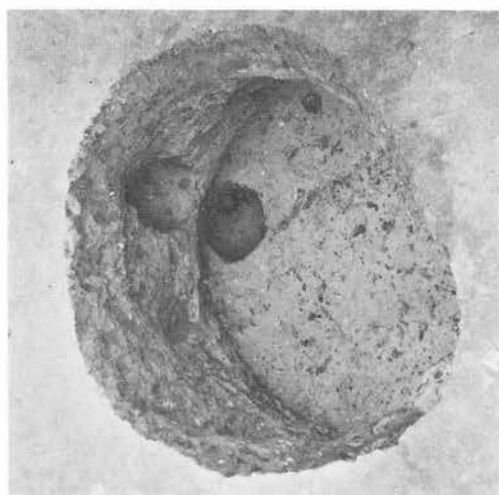
PL-69 土坑-36



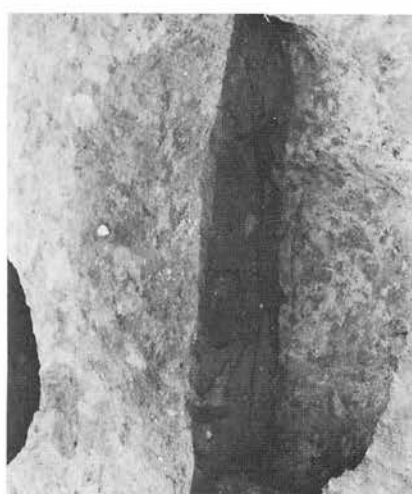
(113) II b58土坑-1

(114) II b58土坑-2

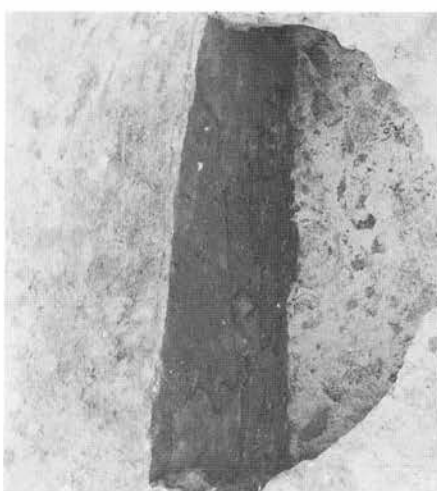
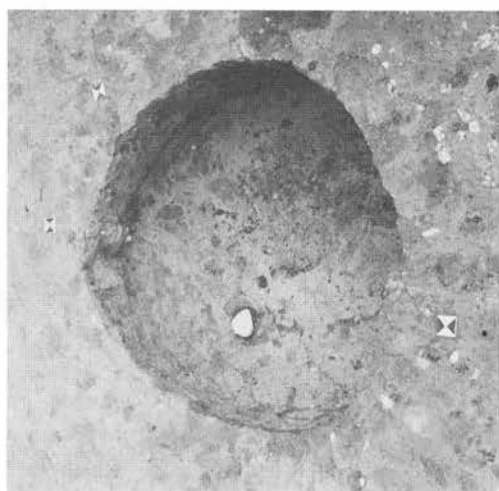
(115) II b59土坑



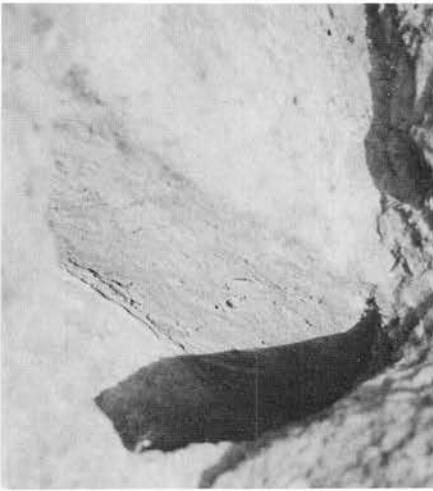
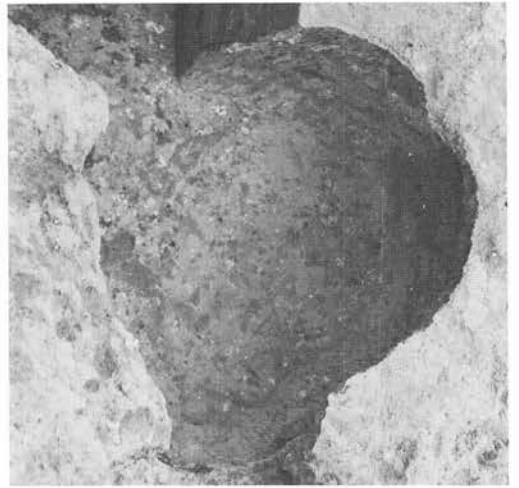
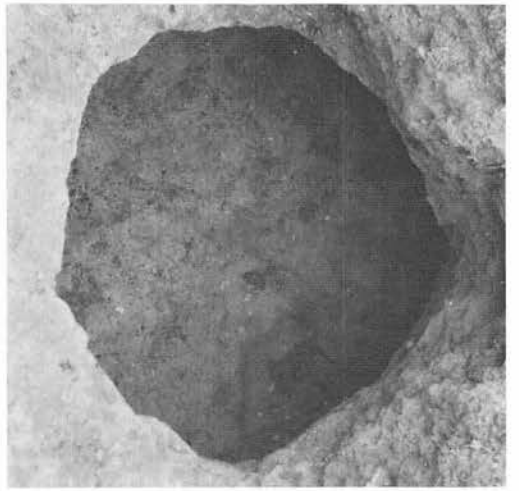
(118) II c56土坑



(117) II c54土坑-2



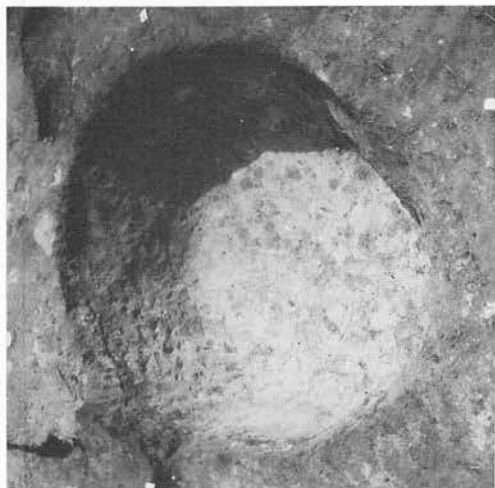
(116) II c54土坑-1



(119) II c58土坑-1

(120) II c58土坑-2

(121) II c58土坑-3



(124) II c59土坑

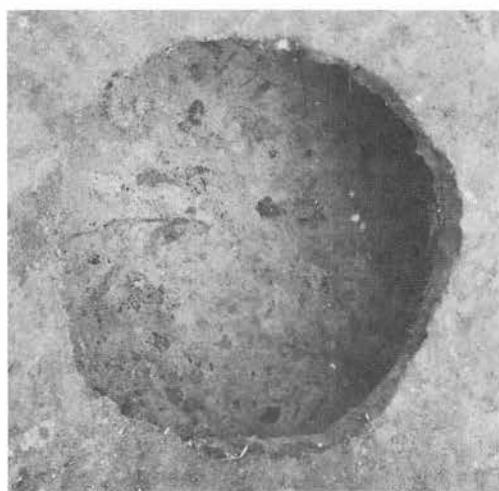
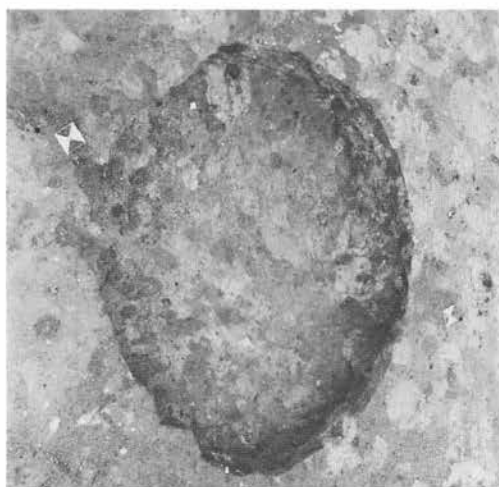
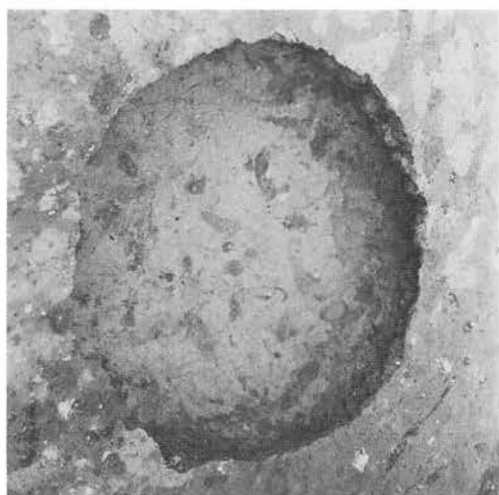


(123) II c58土坑-5



(122) II c58土坑-4

PL-73 土坑-40



(125) II d53土坑

(126) II d54土坑

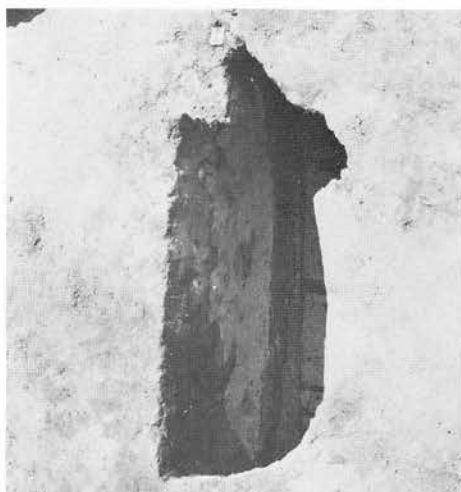
(127) II d58土坑

(128) II d59土坑-1

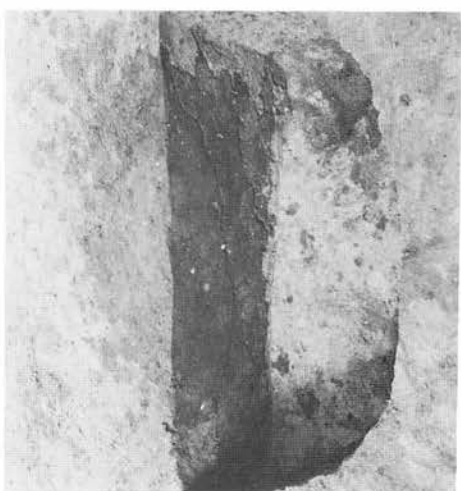
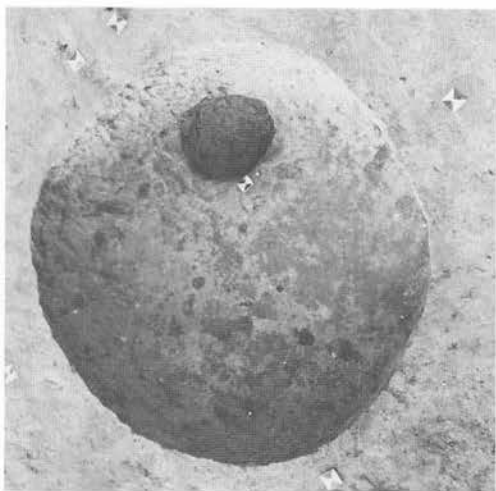
PL-74 土坑-41



(131) II e59土坑-1

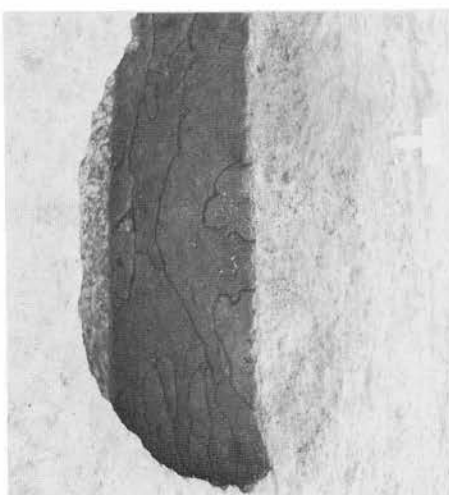
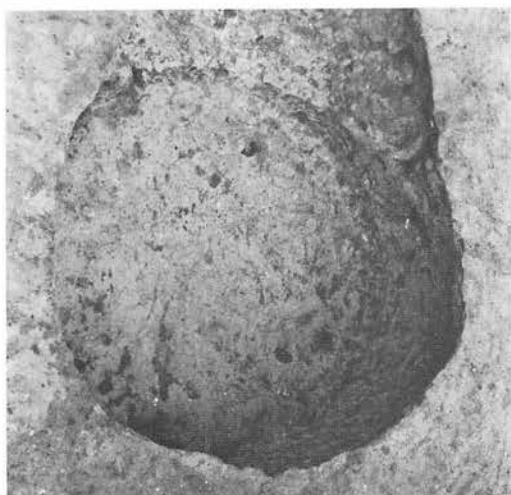


(130) II d59土坑-3



(129) II d59土坑-2

PL-75 土坑-42

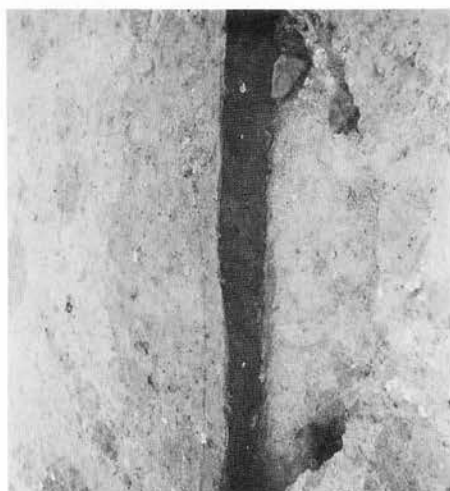


(132) II e59土坑-2

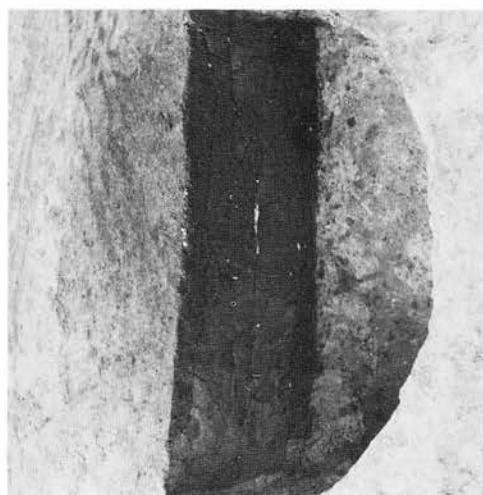
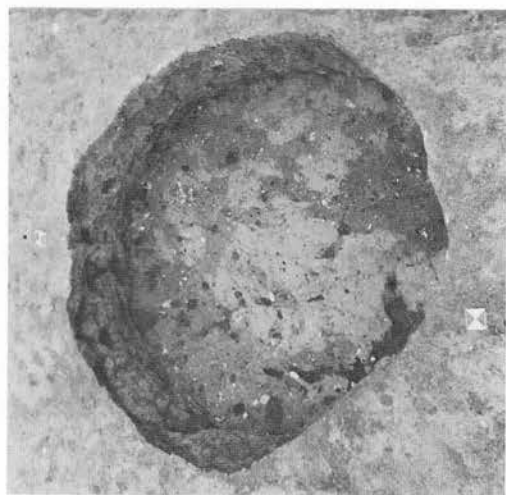
(133) II e59土坑-3

(134) II f55土坑-1

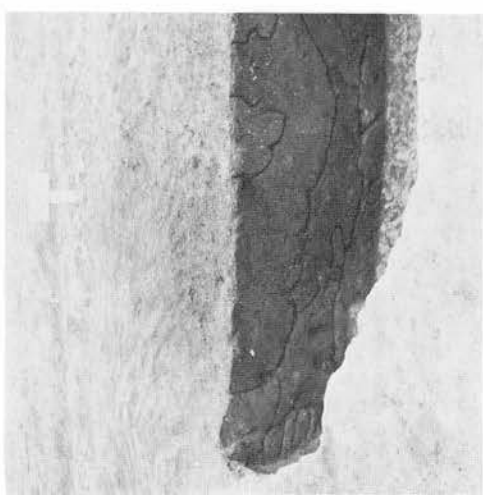
PL-76 土坑-43



(137) II f58土坑-1

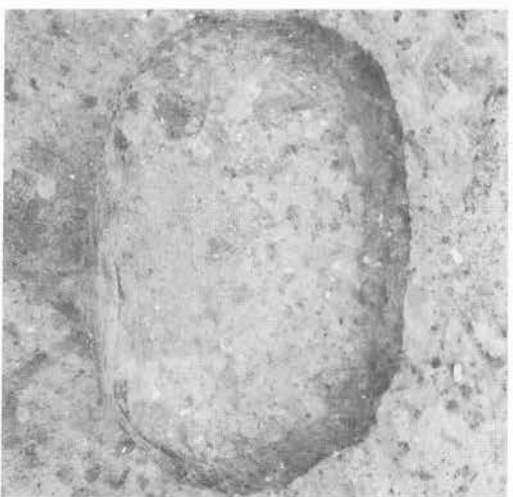


(136) II f57土坑



(135) II f55土坑-2

P L - 77 土坑-44

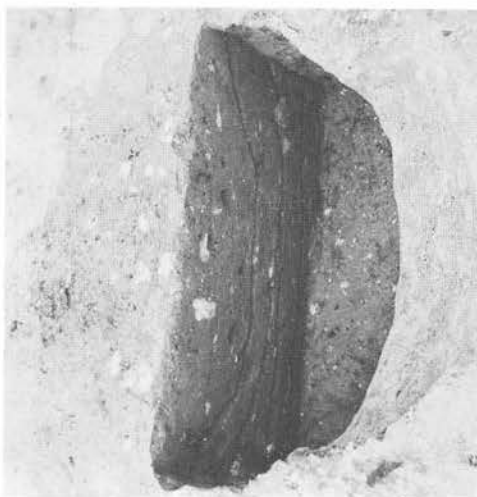
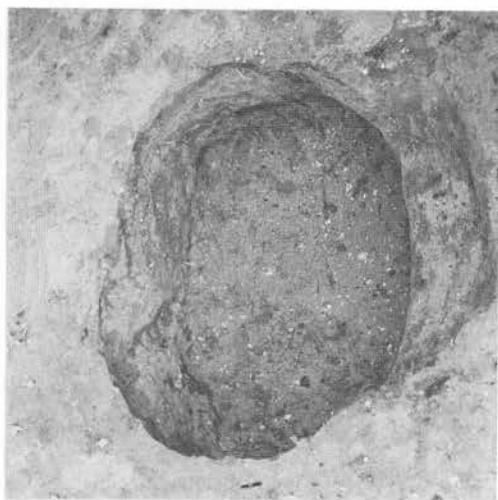


(138) II f58土坑-2

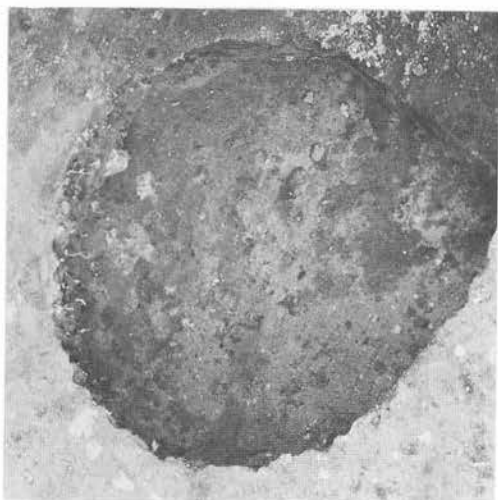
(139) II f59土坑-1

(140) II f59土坑-2

P L-78 土坑-45



(143) II h56土坑

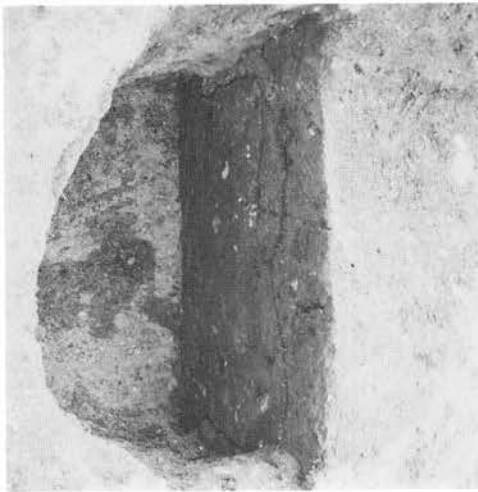
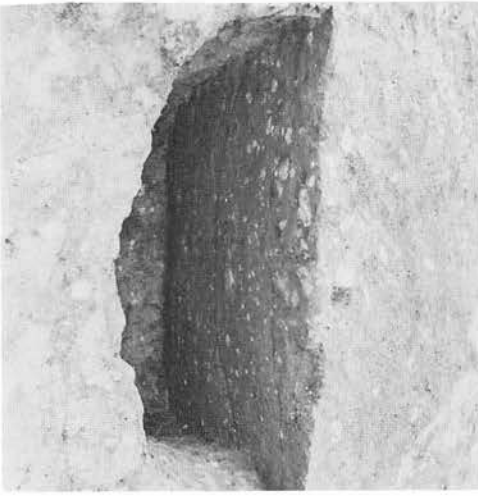
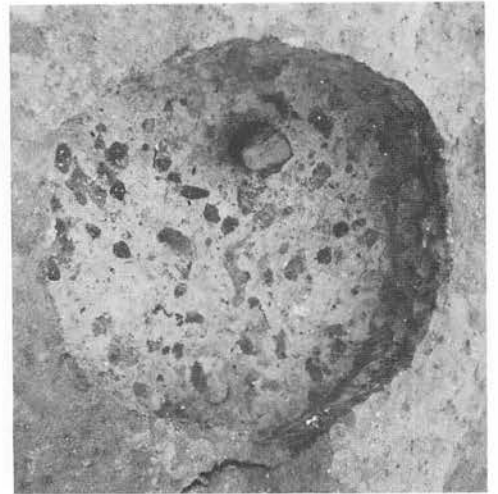
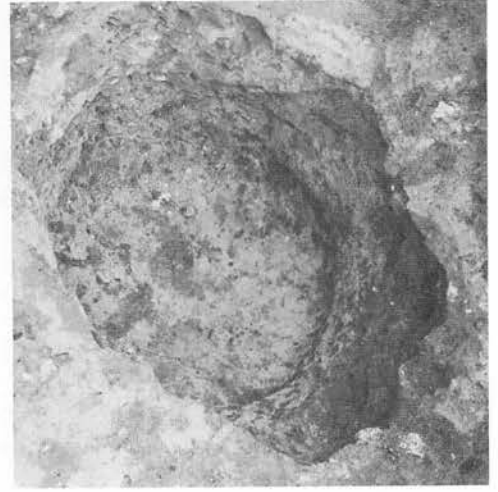
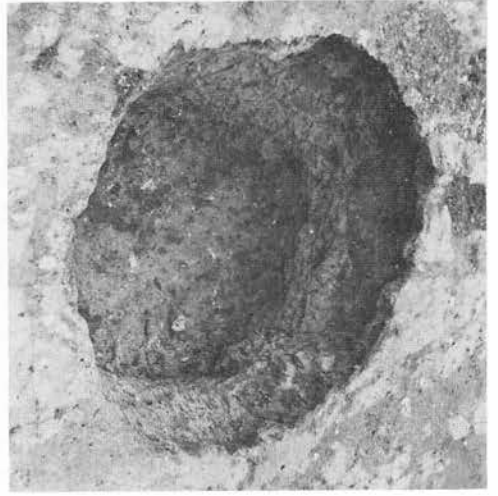


(142) II g56土坑



(141) II f60土坑

PL—79 土坑—46



(144) II h57土坑-1

(145) II h57土坑-2

(146) II h58土坑

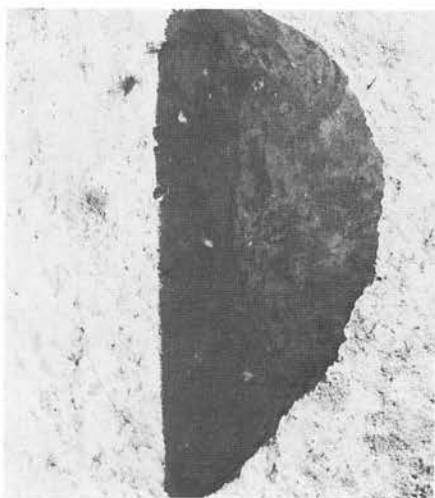
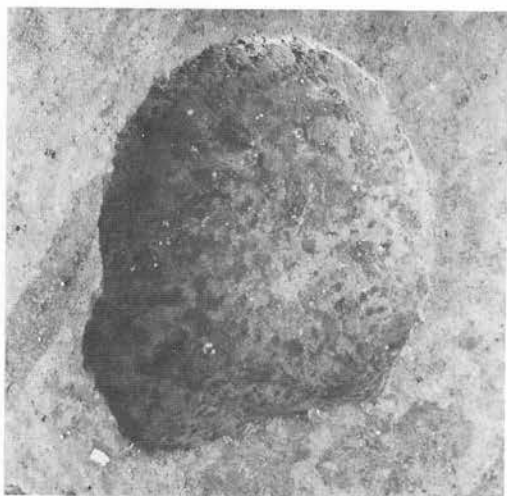
PL-80 土坑-47



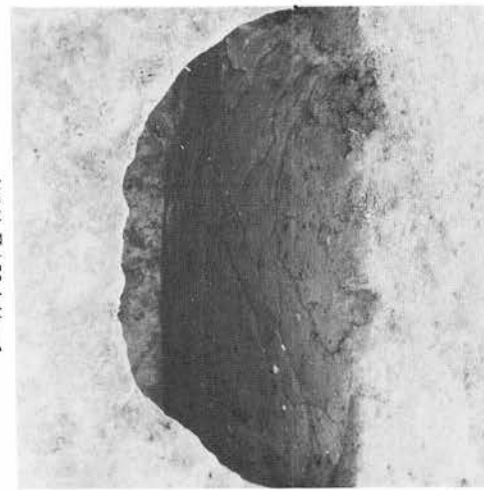
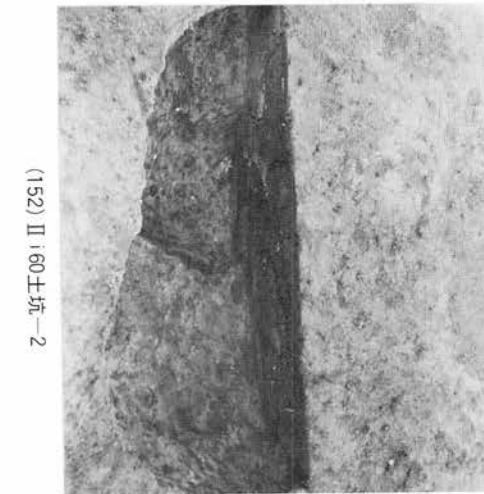
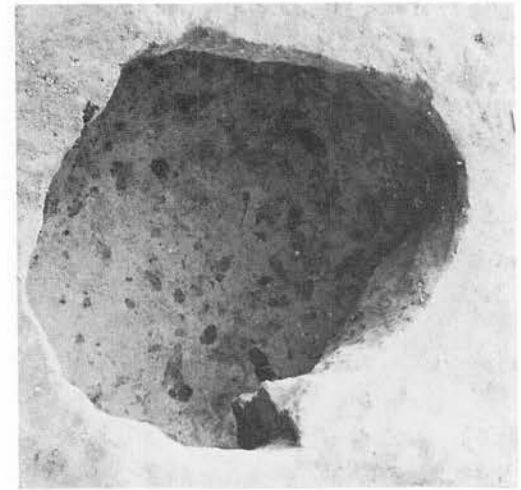
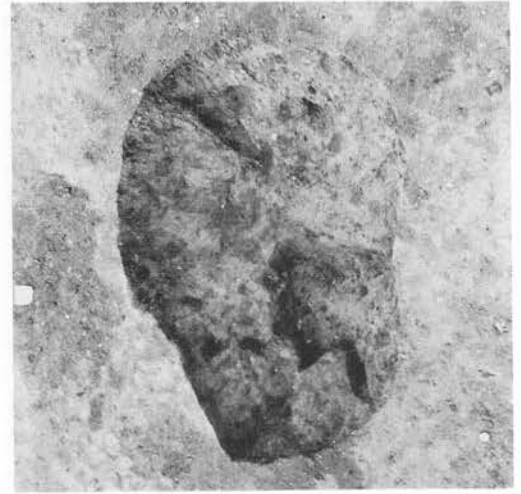
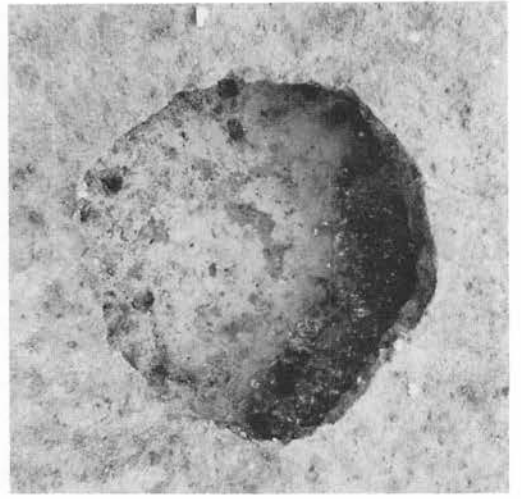
(149) II h61土坑



(148) II h60土坑



(147) II h59土坑

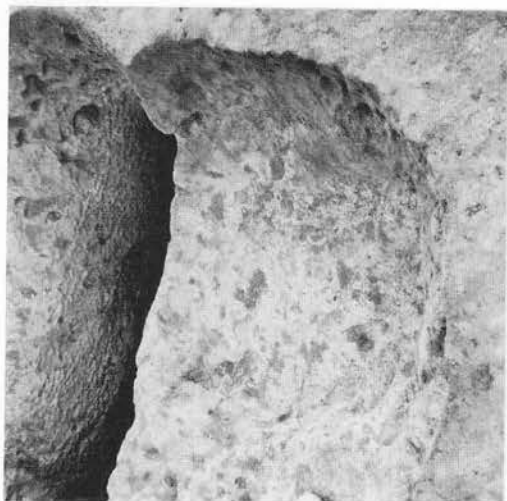


(150) II : 59土坑

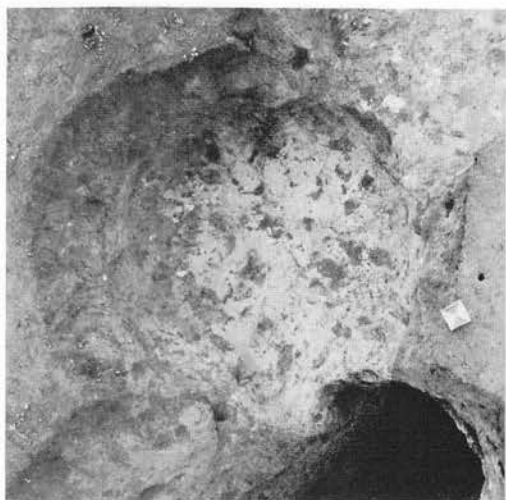
(152) II : 60土坑-2

(151) II : 60土坑-1

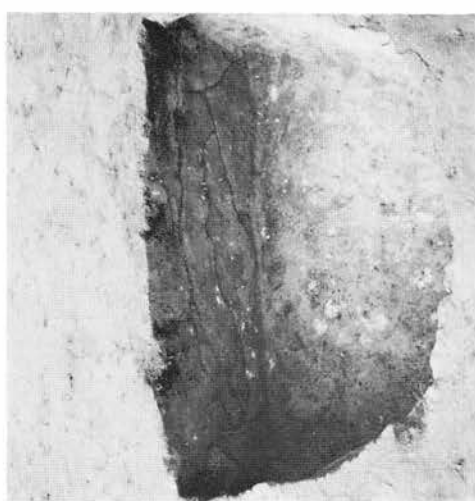
PL-82 土坑-49



(155) II i61土坑—1

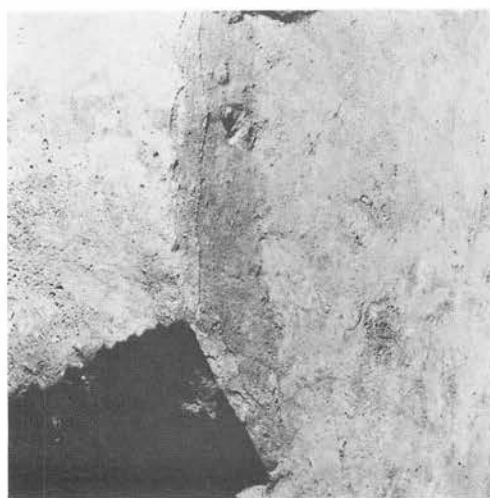
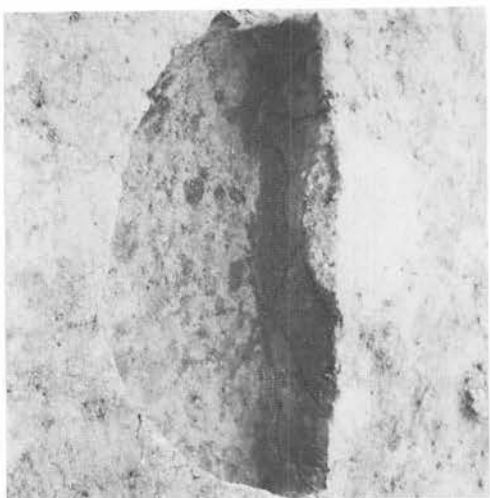
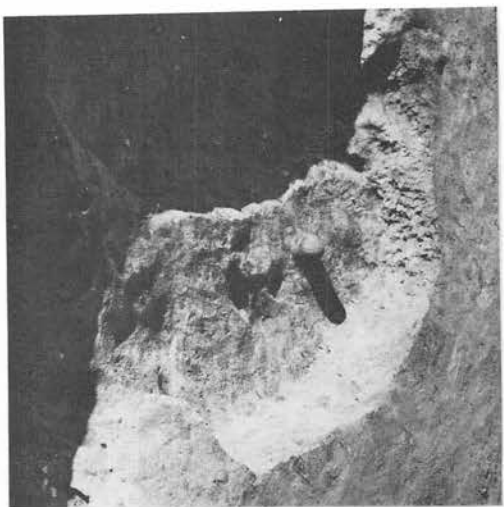


(154) II i60土坑—4



(153) II i60土坑—3

PL—83 土坑—50

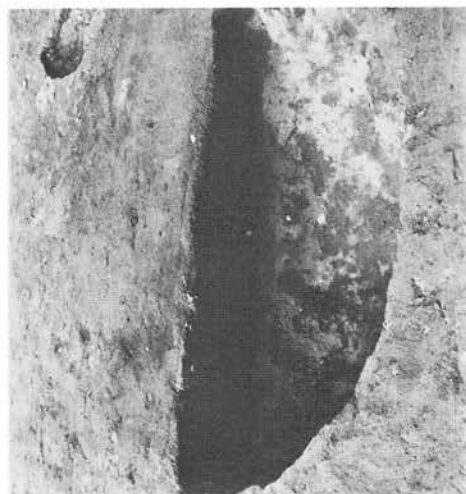


(156) II i 61 土坑—2

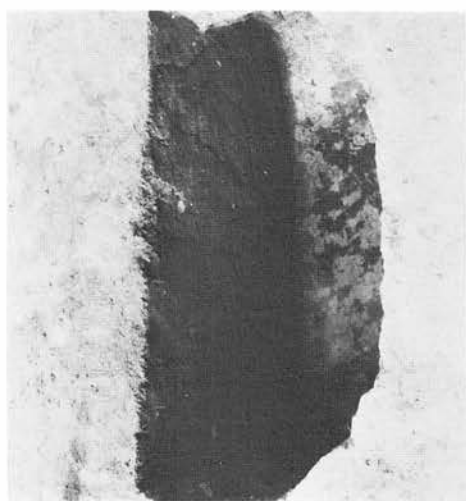
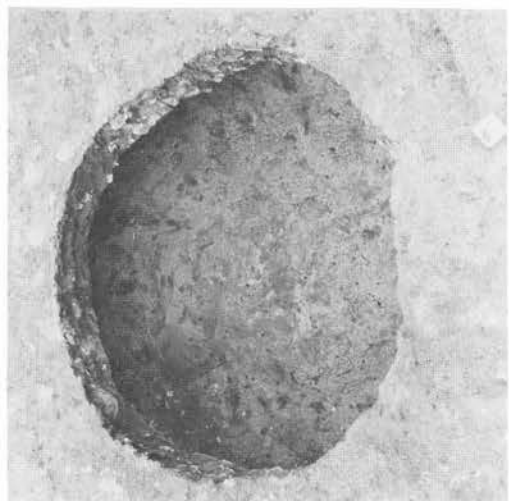
(157) II i 61 土坑—3

(158) II i 62 土坑

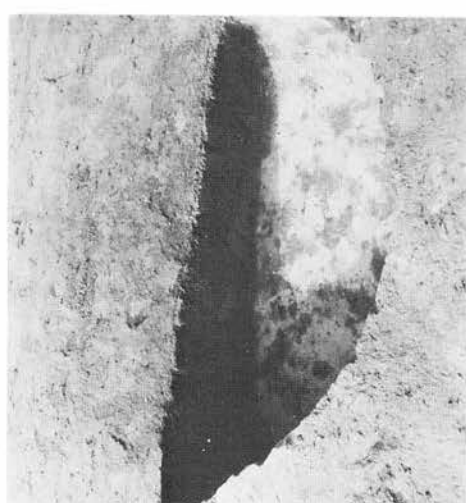
P L—84 土坑—51



(159) II j 58土坑—1

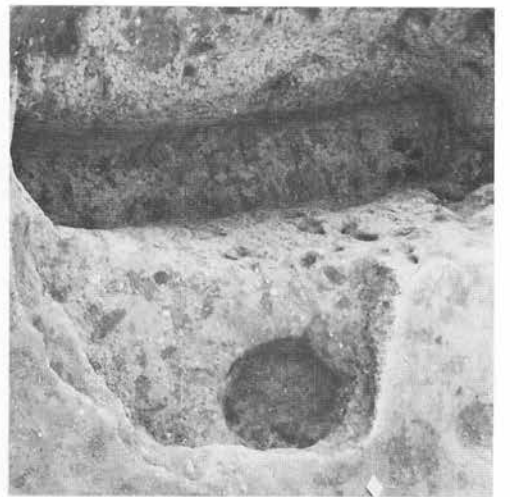
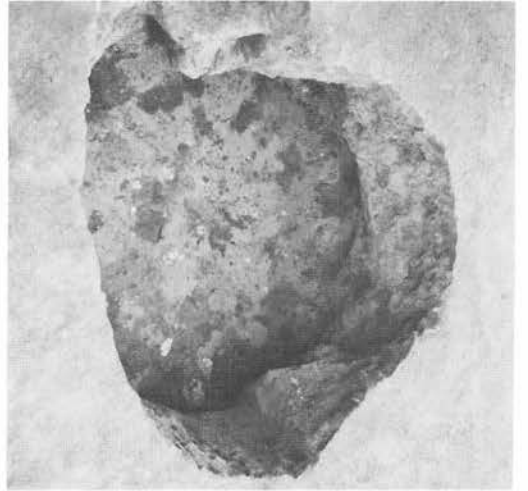


(160) II j 58土坑—2



(161) II j 58土坑—3

P L — 85 土坑—52

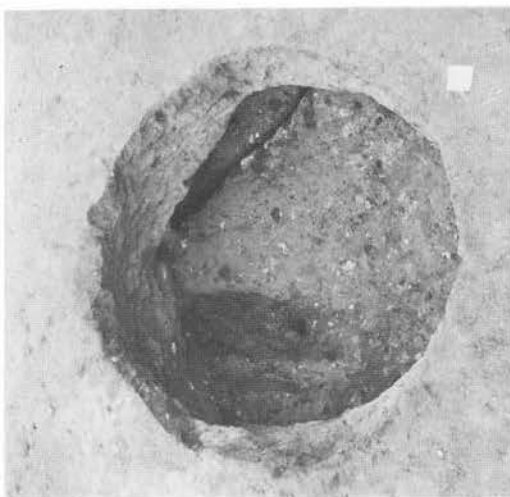


(162) II, 59土坑

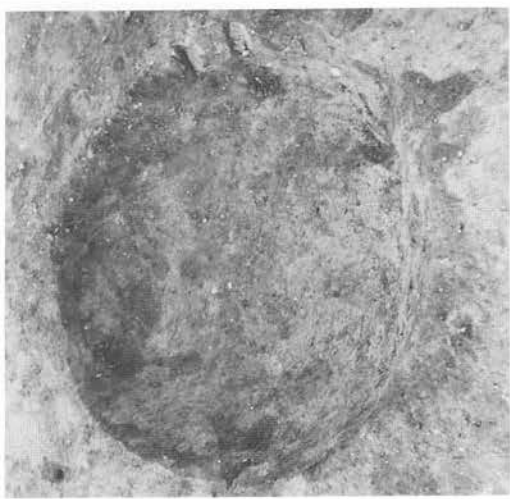
(163) II, 60土坑

(164) III, a59土坑

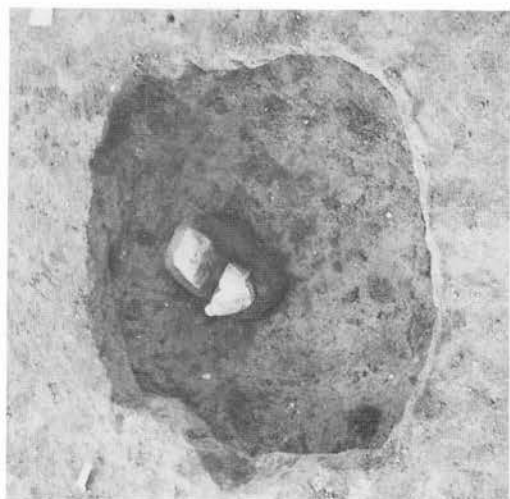
P L—86 土坑—53



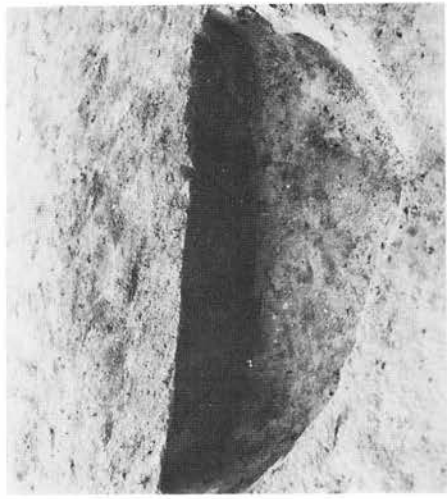
(165) III a60土坑



(166) III b59土坑

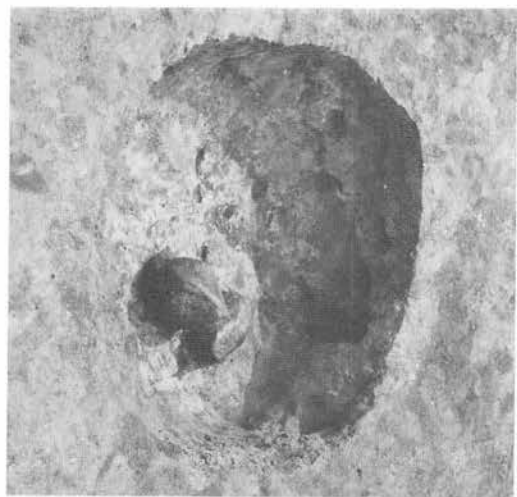


(167) III c60土坑





(168) I h67土坑



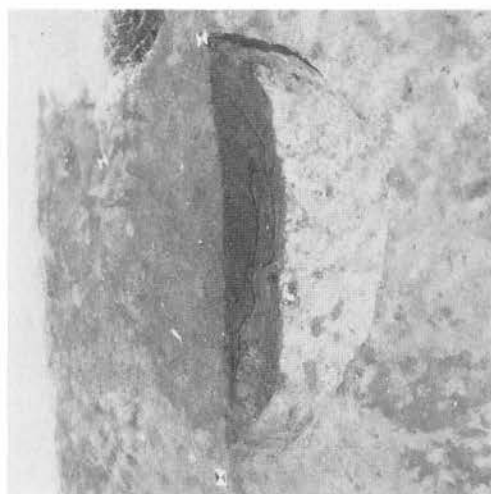
(169) I h69土坑



(170) I i67土坑



PL—88 土坑—55



(173) I i 68土坑-3

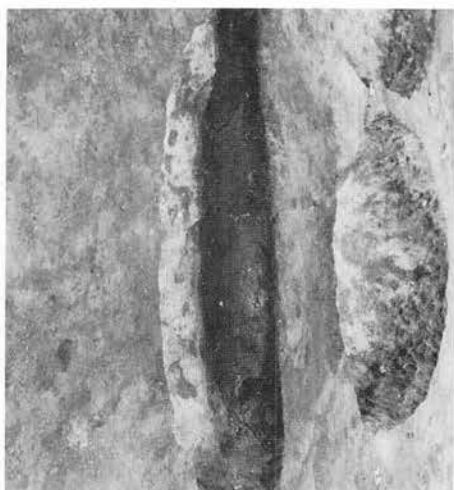


(172) I i 68土坑-2

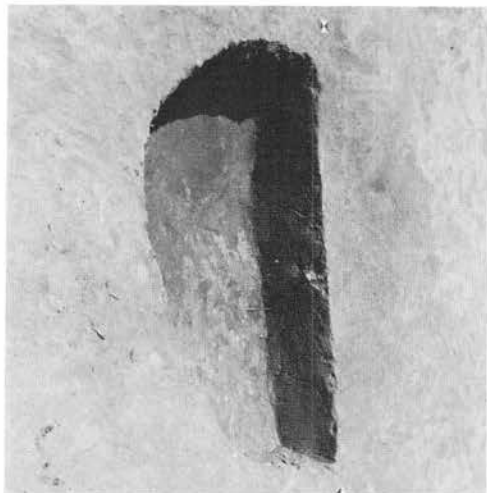


(171) I i 68土坑-1

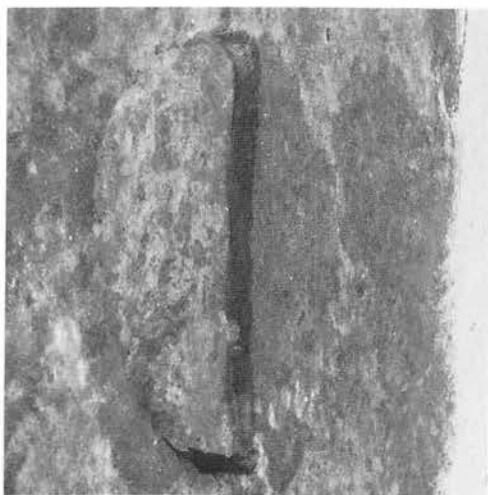
PL-89 土坑-56



(174) I : 68土坑-4

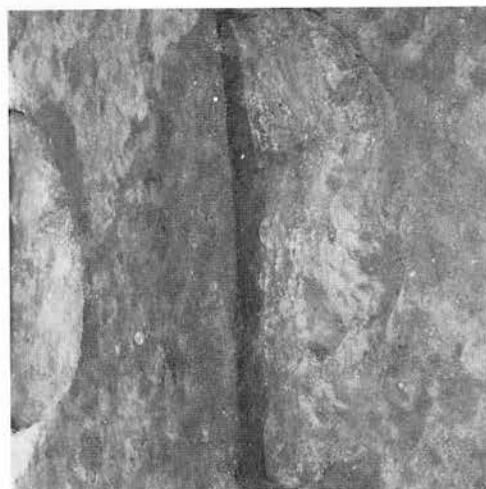


(175) I : 69土坑

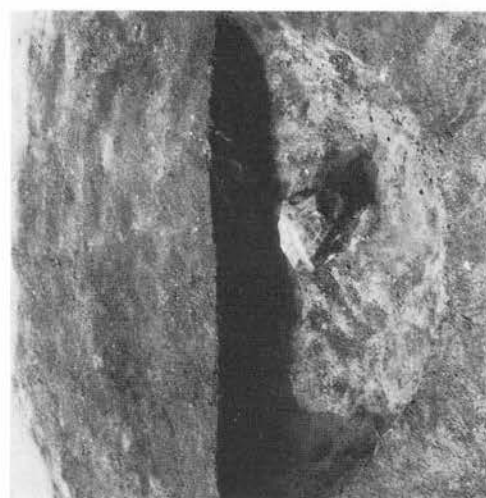


(176) I : 70土坑

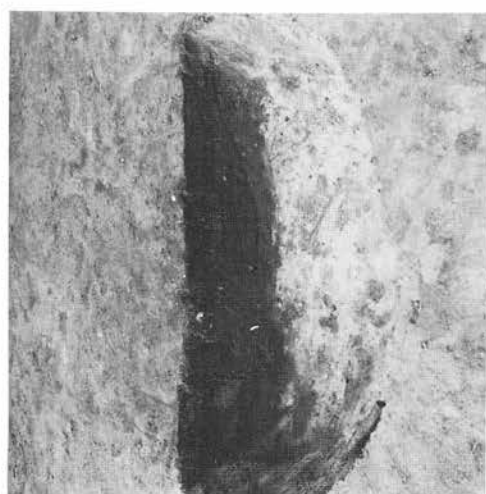
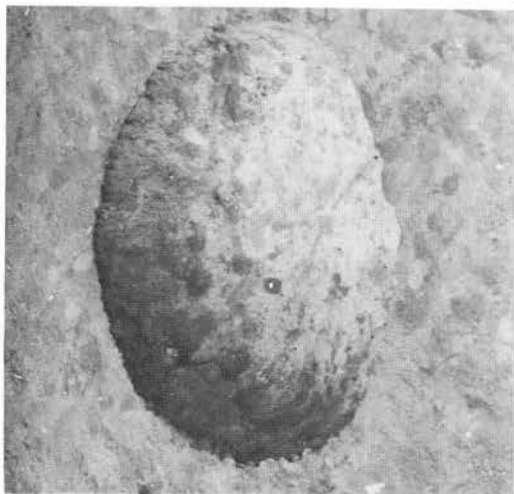
P L — 90 土坑—57



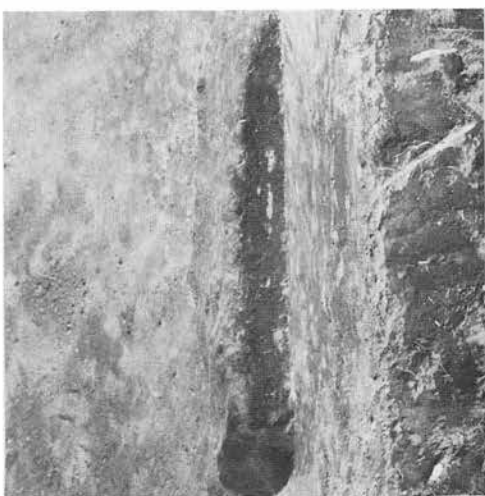
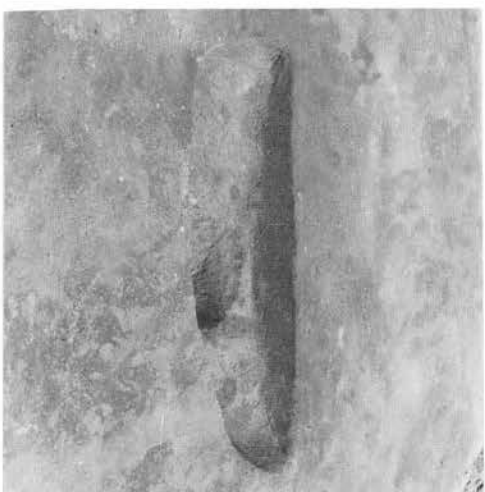
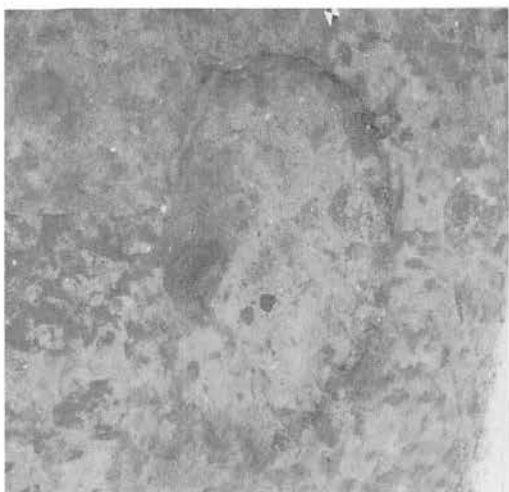
(180) I j70土坑



(179) I j69土坑



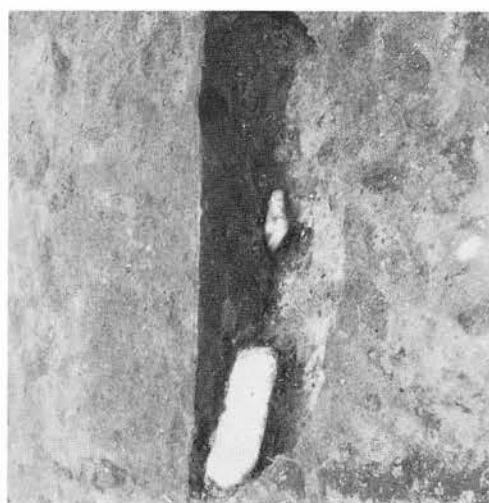
(177) I j67土坑



(181) II a68土坑

(182) II a70土坑

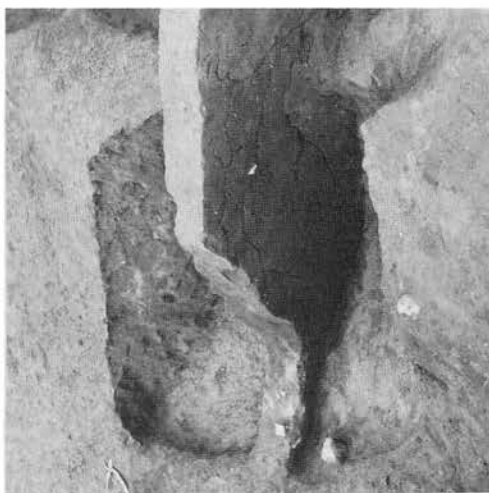
(183) II a75土坑



(186) II c69土坑



(185) II c68土坑-2

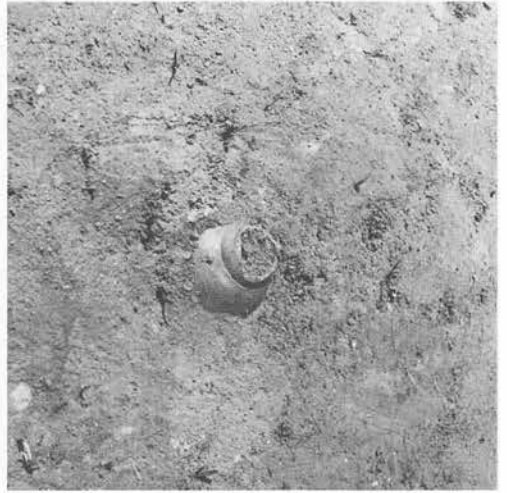


(184) II c68土坑-1

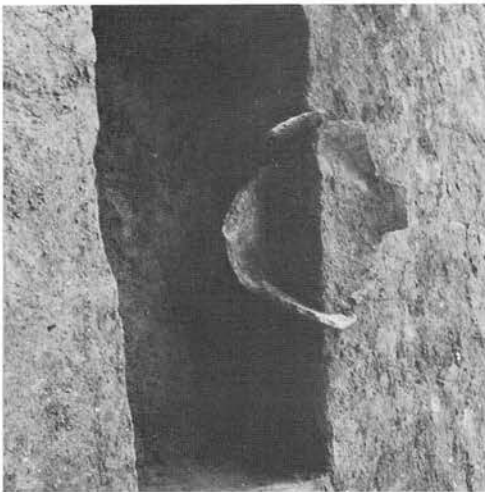
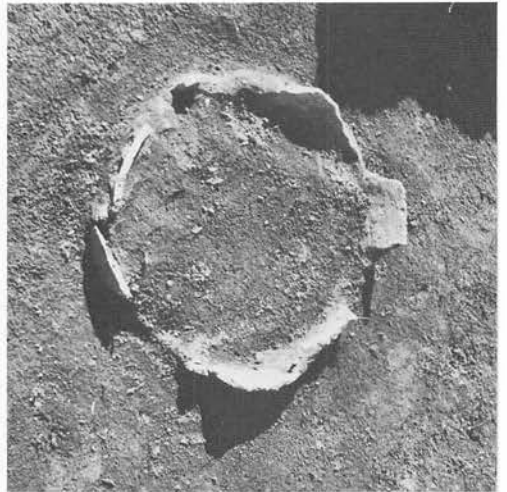
P L - 93 土坑-60



(178) I, 68土坑



II 58埋設土器

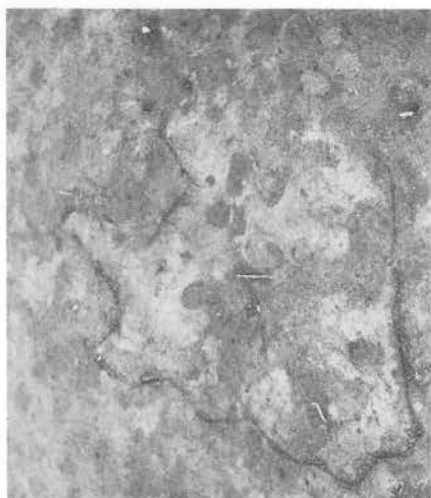


II 961埋設土器

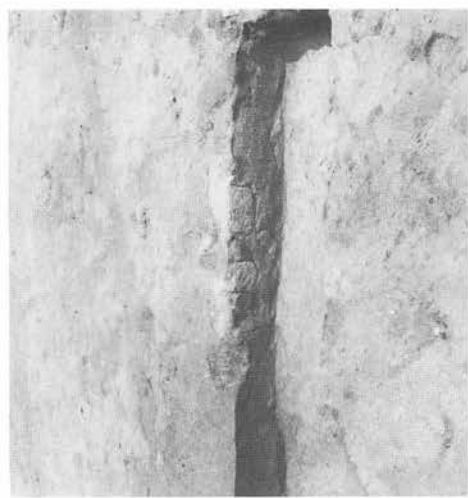
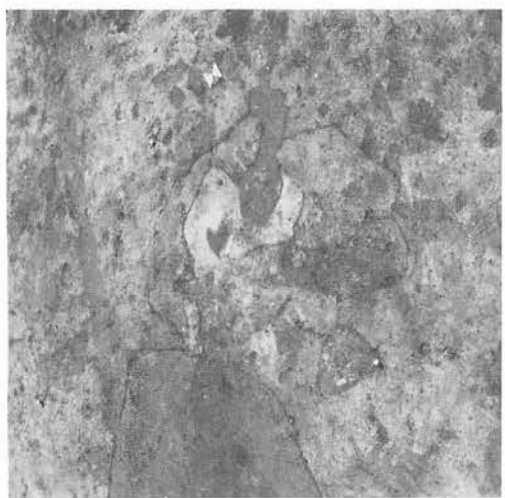
P L—94 土坑—61・埋設土器



(3) III b6 烧土—1

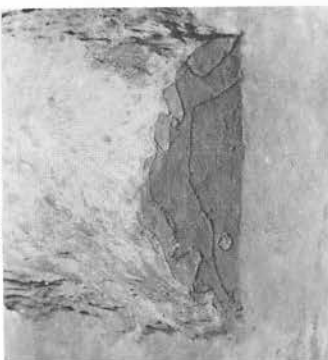
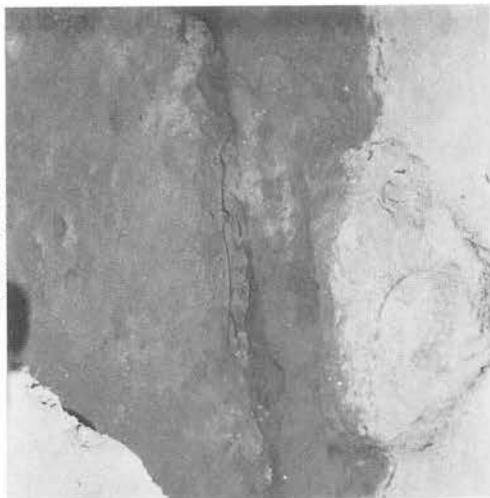
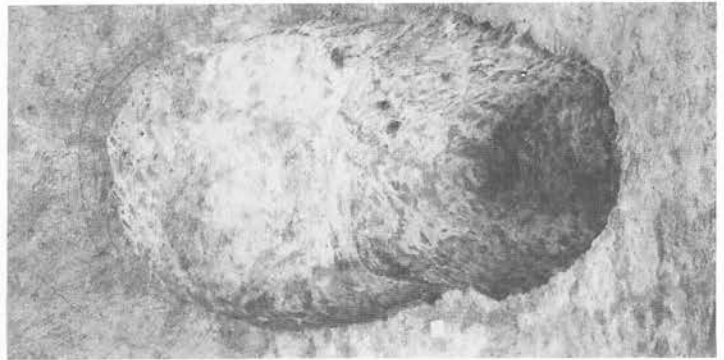


(2) III b5 烧土



(1) III a7 烧土

PL-95 烧土—1

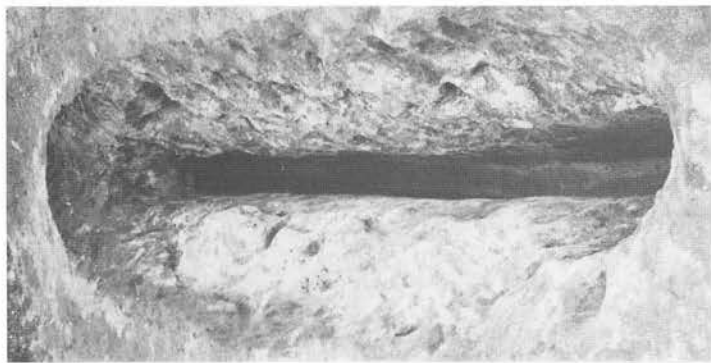


(4) III b6烧土-2

(5) I i74烧土

(1) III d9陷穴

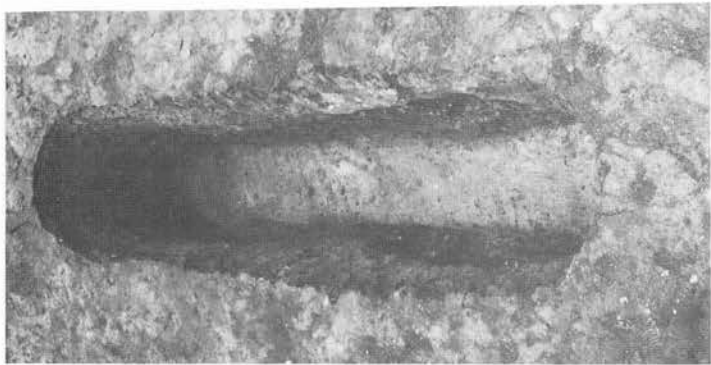
P L-96 烧土-2·陷穴状遗構-1



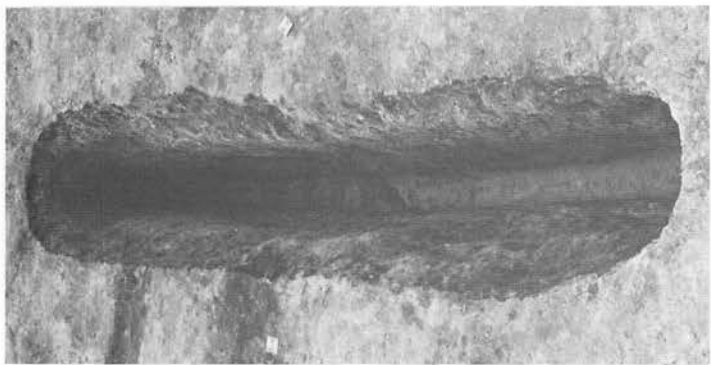
(2) III e8陷穴



(3) II j 46陷穴



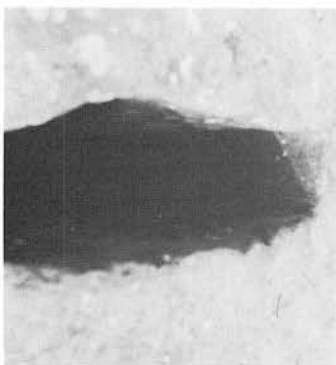
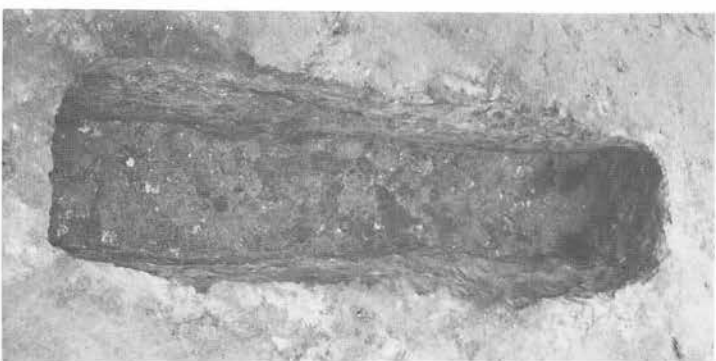
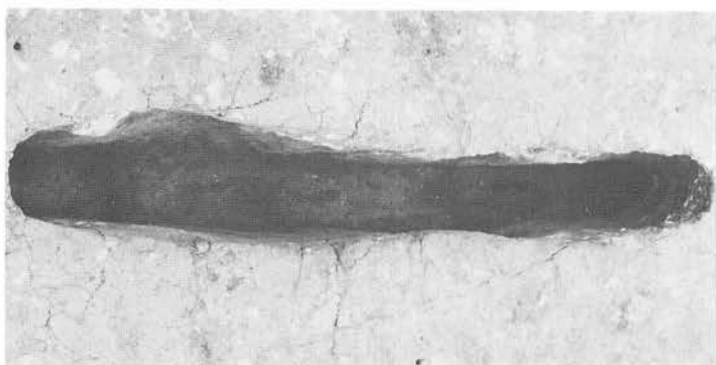
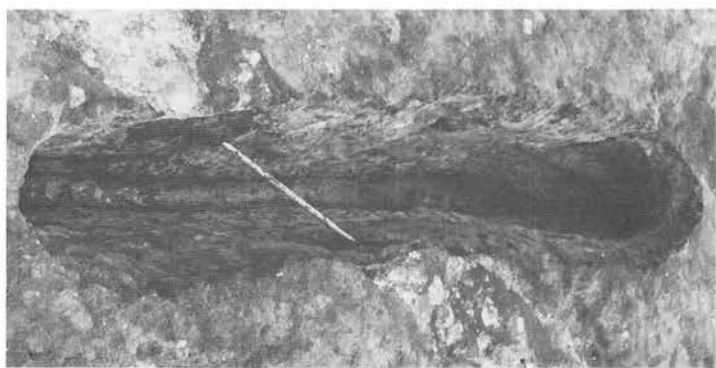
(4) III a40陷穴



(5) III a43陷穴



PL-97 陷穴状遺構-1

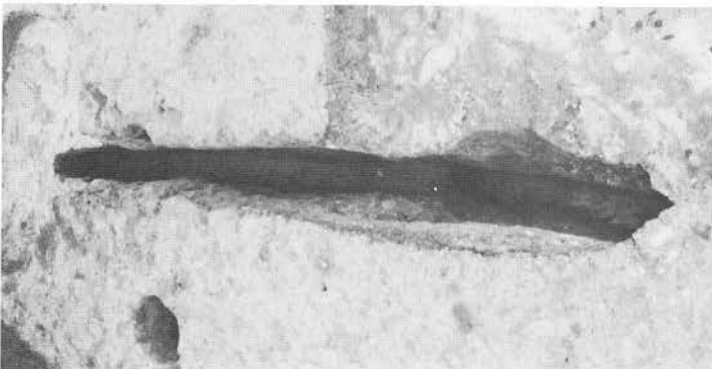


(6) III c48陷穴

(7) III d43陷穴

(8) III e43陷穴

(9) III e53陷穴



(11) III f43陷穴



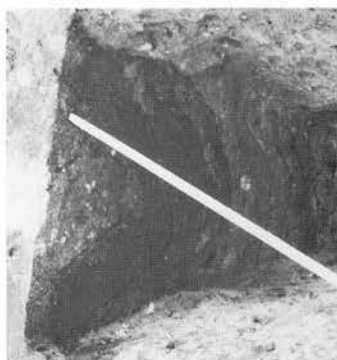
(12) III f51陷穴



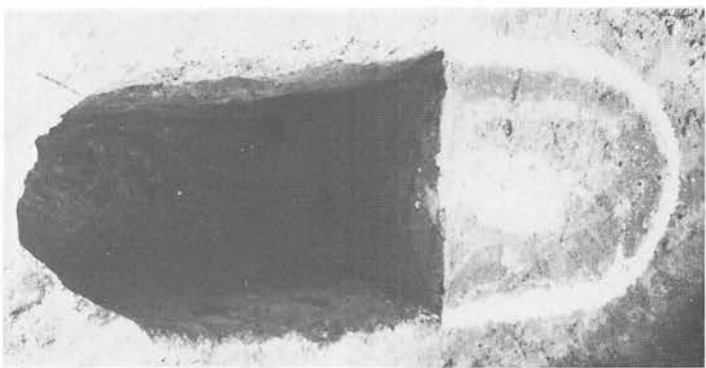
(13) III f52陷穴



(14) III g49陷穴



PL-99 陷穴状遺構-3



(15) III 950陷穴



(16) III h46陷穴



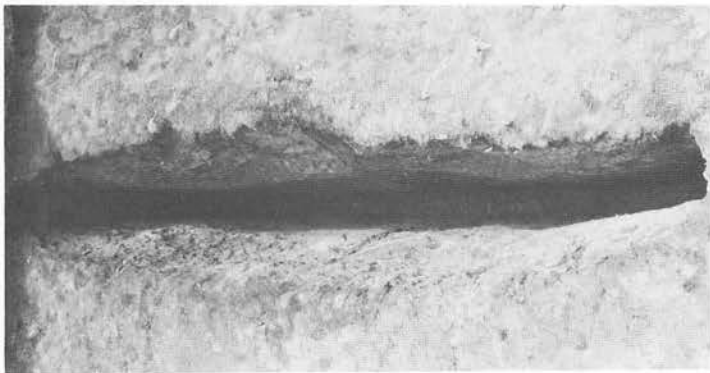
(17) III h47陷穴



(19) III 144陷穴

P L - 100 陷穴状遺構-4

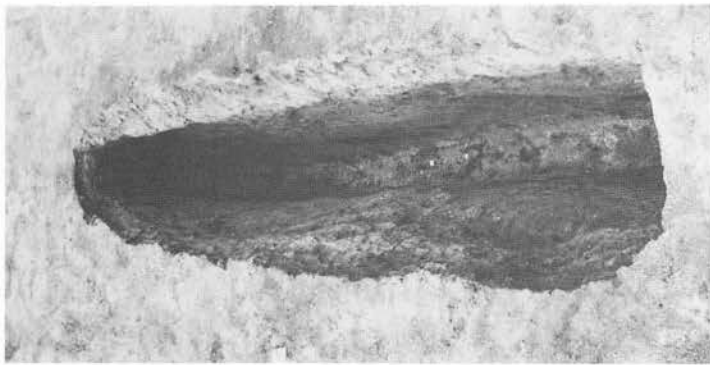
陷穴状遺構-5



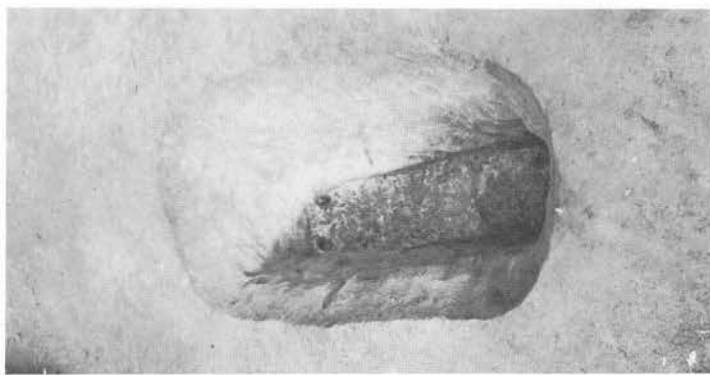
(20) III i 46陷穴



(21) III j 43陷穴



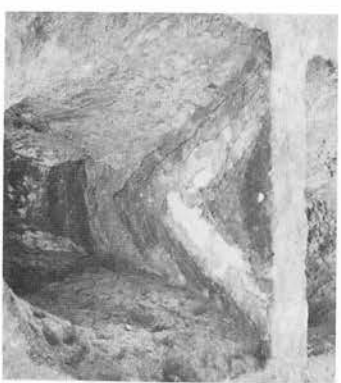
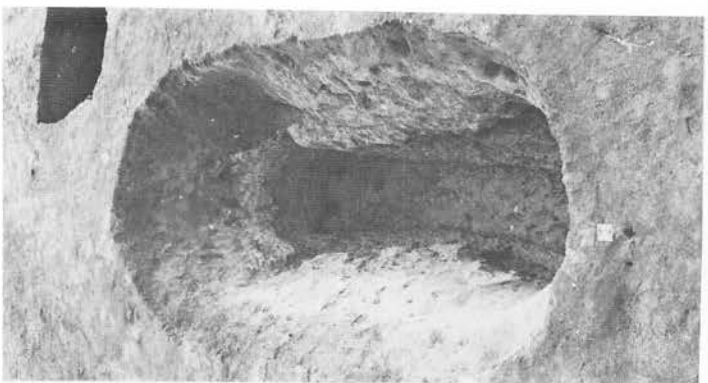
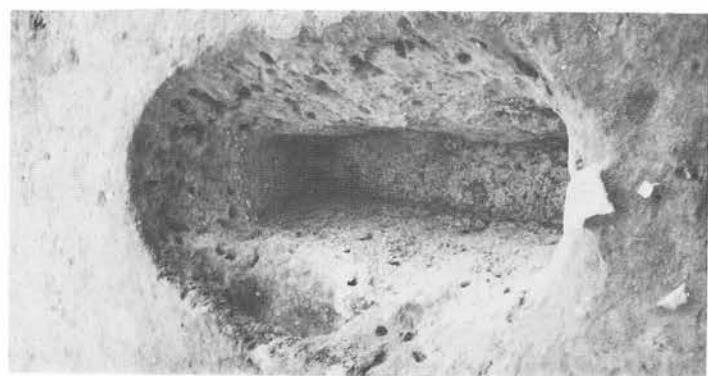
(22) IV b 34陷穴



(23) II g 63陷穴



PL-101 陷穴状遺構—6



(24) II h62陷穴

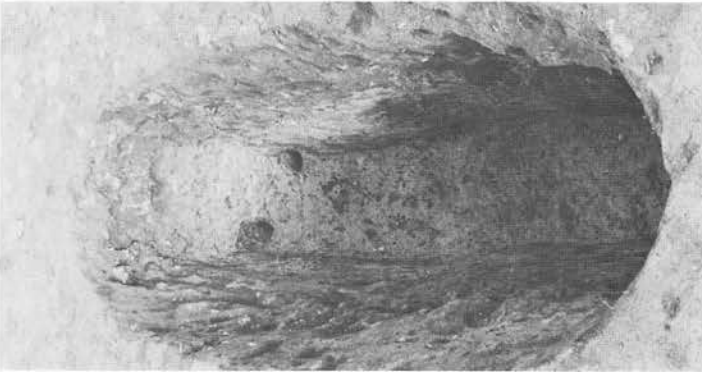
(25) II h63陷穴

(26) II i61陷穴

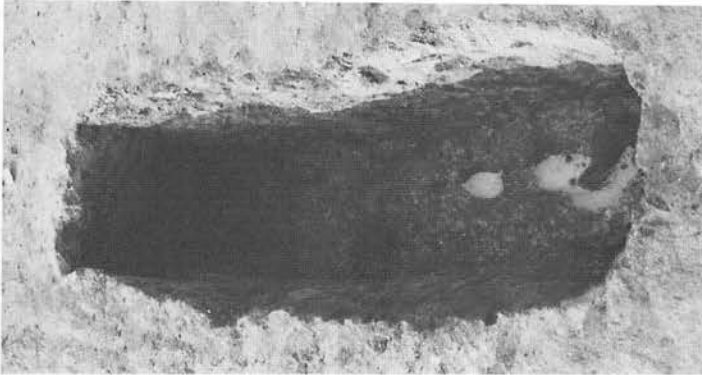
(27) II i60陷穴



(28) III a59陷穴



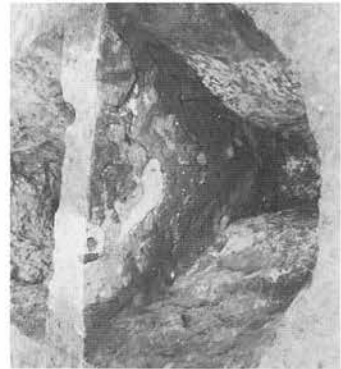
(29) III b58陷穴



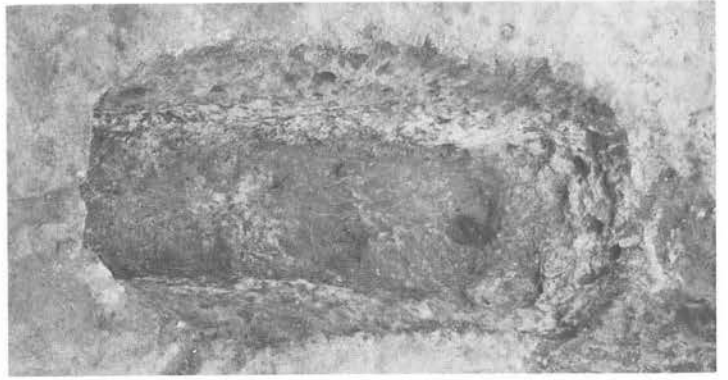
(31) III c57陷穴



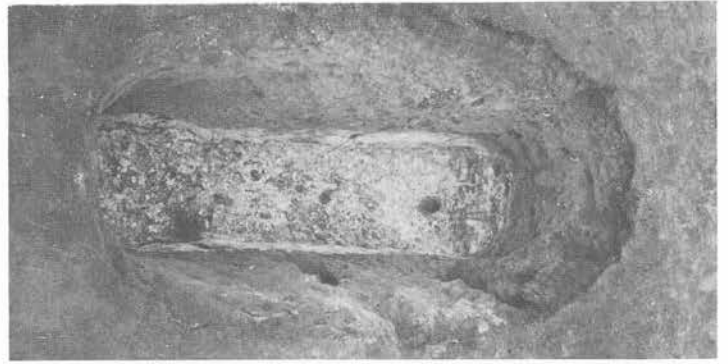
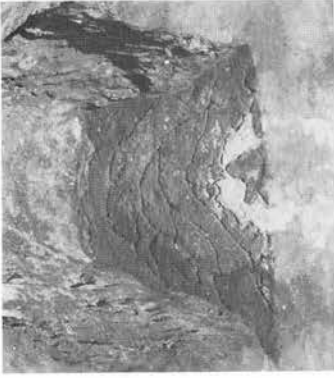
(32) 0 j73陷穴



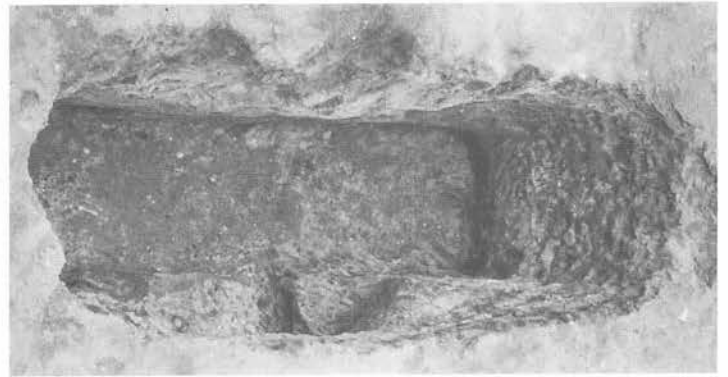
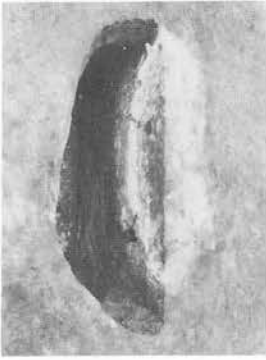
P L — 103 陷穴状遺構—8



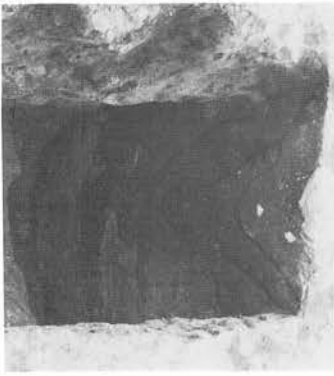
(33) I a73陷穴



(34) I b72陷穴



(35) I d72陷穴

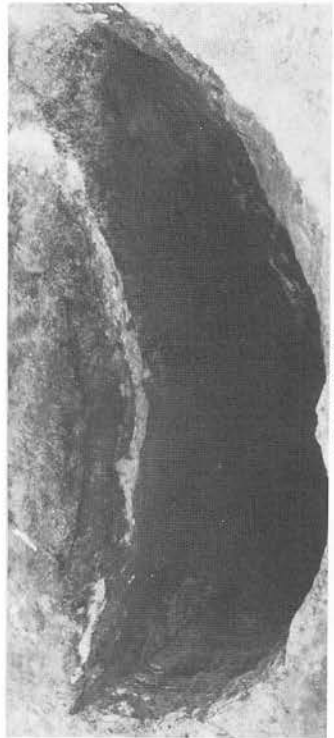
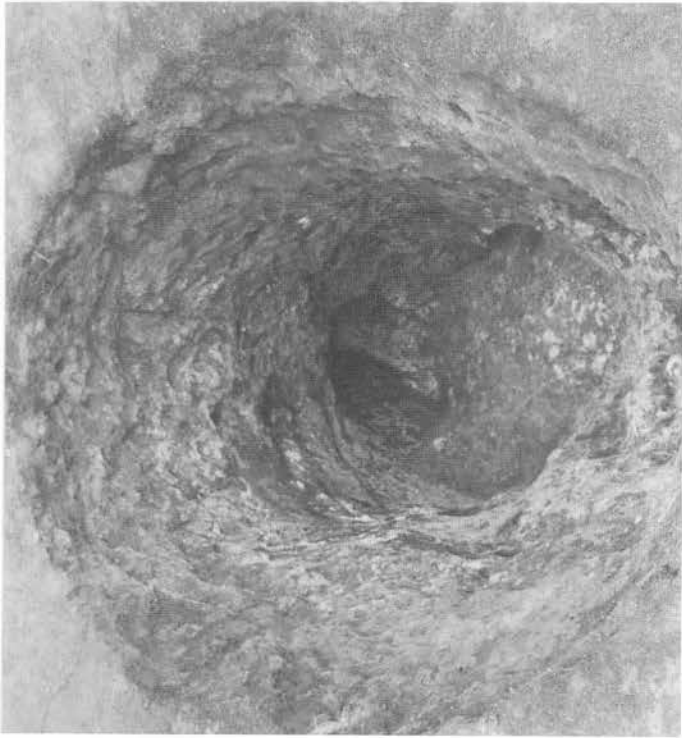


(37) I e71陷穴



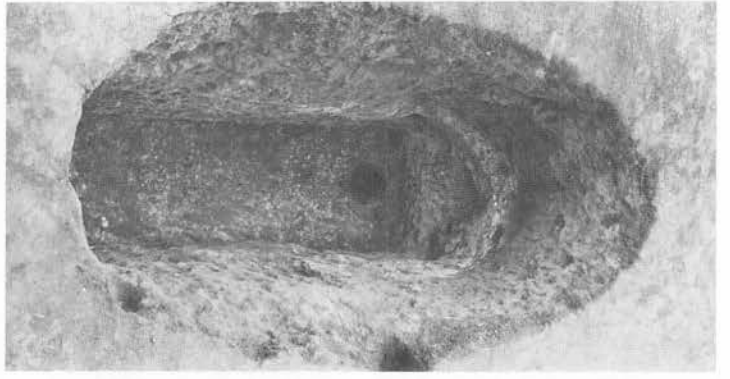


(38) I e73陷穴



(36) I d73陷穴

PL-105 陷穴状遺構-10



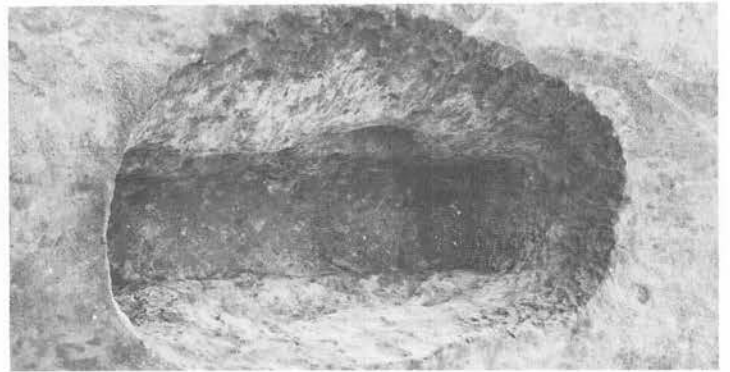
(39) I 171陷穴



(40) I 971陷穴

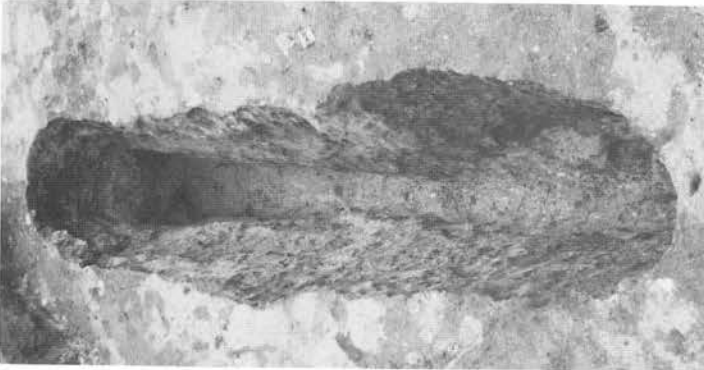


(41) I 170陷穴



(42) I 169陷穴

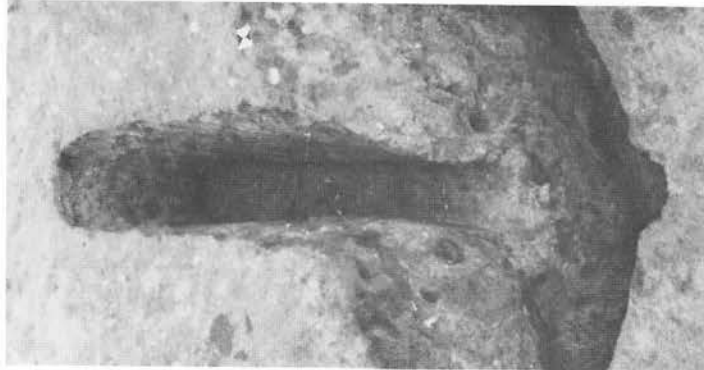
PL-106 陷穴状遺構-11



(43) II a68陷穴



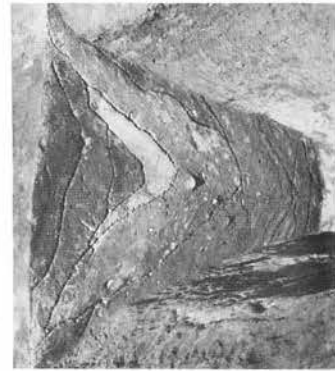
(44) II a69陷穴-1

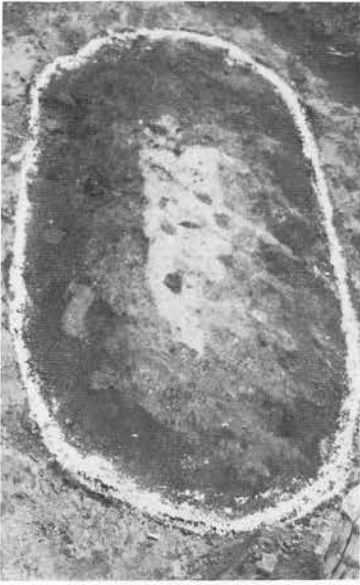


(45) II a69陷穴-2



(46) II b68陷穴





(18) III h49陷穴



(30) III b62陷穴

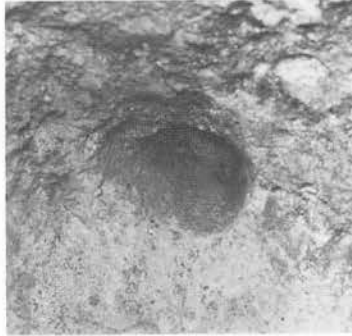


(10) III f42陷穴

P L - 108 陷穴状遺構-13



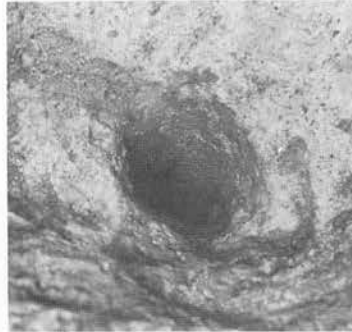
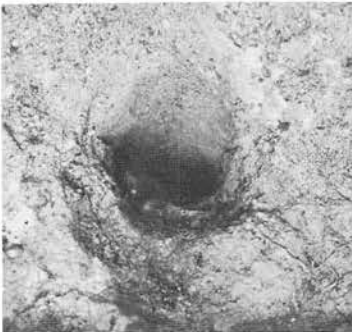
III e53陷穴副穴



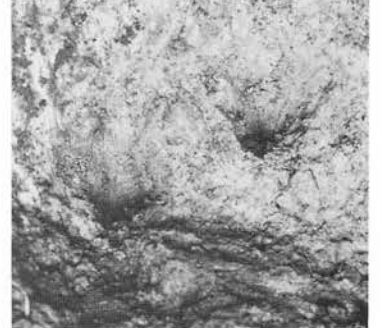
III f52陷穴副穴



III h46陷穴副穴



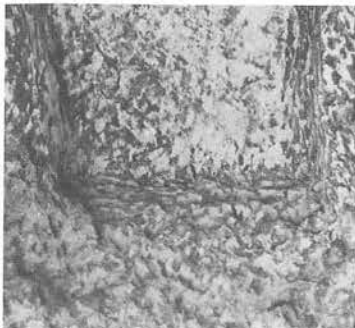
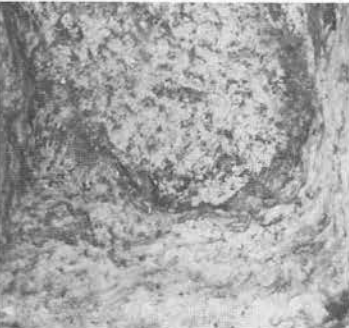
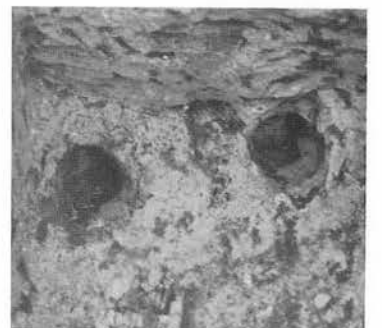
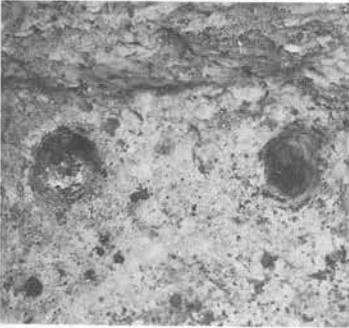
P L - 109 陷穴状遺構の副穴-1



Ⅲ h47陷穴副穴

Ⅲ i 44陷穴副穴

Ⅲ j 43陷穴副穴



Ⅱ g63陷穴副穴

Ⅱ h62陷穴副穴

Ⅱ h63陷穴副穴

PL-110 陷穴状遺構の副穴-2



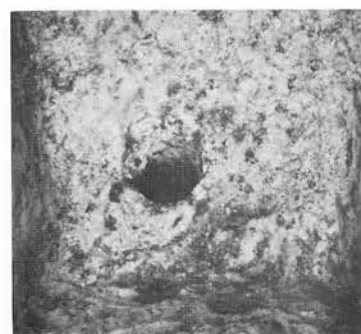
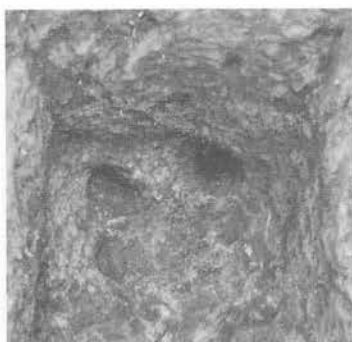
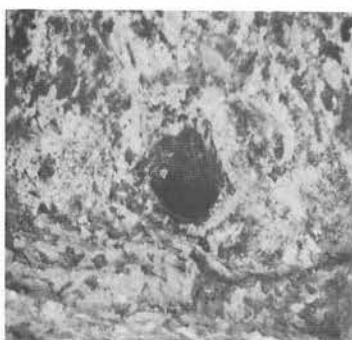
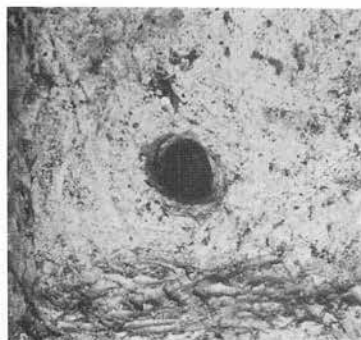
II i 61陥穴副穴



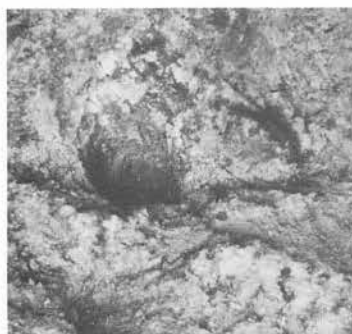
II j 60陥穴副穴



III a 59陥穴副穴



III b 58陥穴副穴



III c 57陥穴副穴



0 j 73陥穴副穴

PL-111 陥穴状遺構の副穴-3



I a73陷穴副穴



I b72陷穴副穴



I d72陷穴副穴



I i70陷穴副穴



I j69陷穴副穴



I f71陷穴副穴



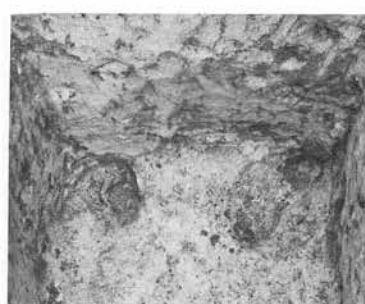
PL-112 陷穴状遺構の副穴-4



I d73陷穴副穴



I g71陷穴副穴



II b68陷穴副穴



I e73陷穴副穴



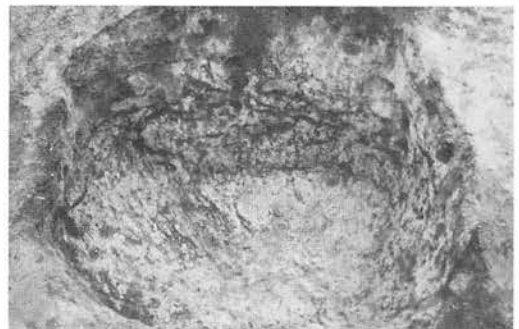
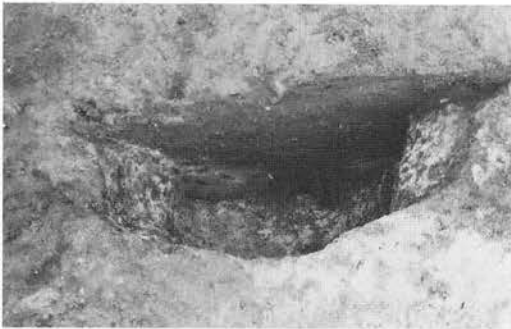
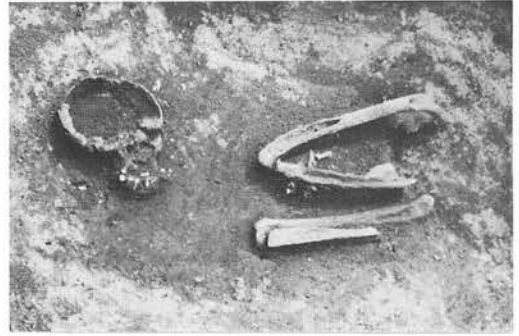
II a69陷穴-1副穴

PL-113 陷穴状遺構の副穴-5



(1) III h27土葬墓

PL-114 土葬墓-1



(2) I e40土葬墓

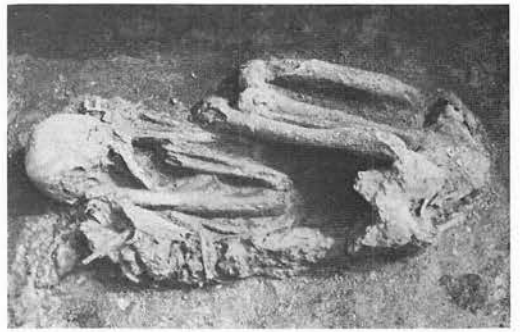


(3) I g41土葬墓-1

PL-115 土葬墓-2



(4) I g41土葬墓-2

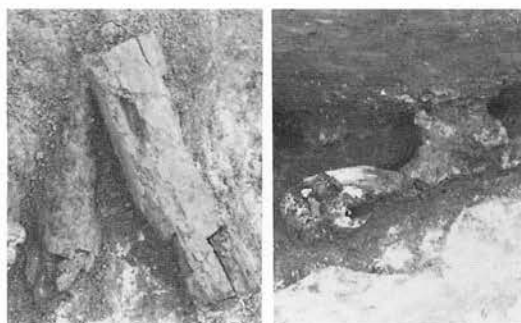
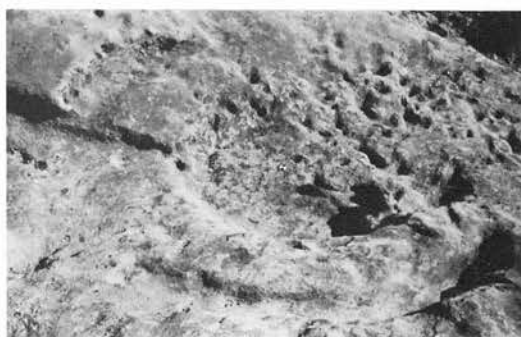


(5) I h40土葬墓

PL-116 土葬墓-3

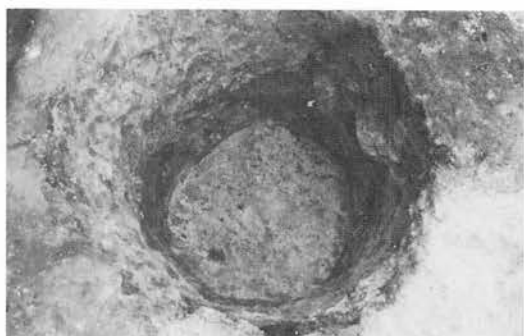


(6) I i 41 土葬墓

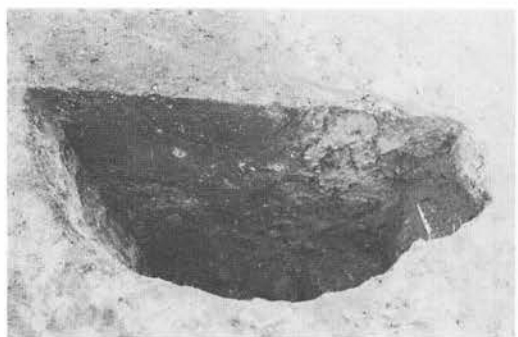


(7) II b 41 土塚

PL-117 土葬墓-4

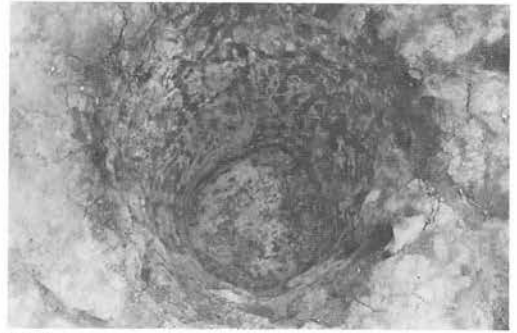
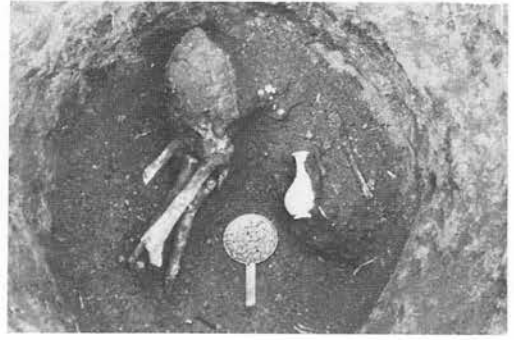
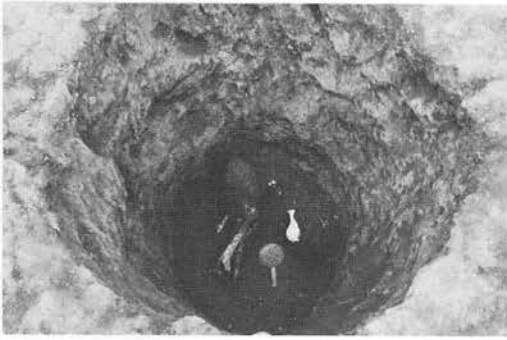


(8) II i 38 土葬墓

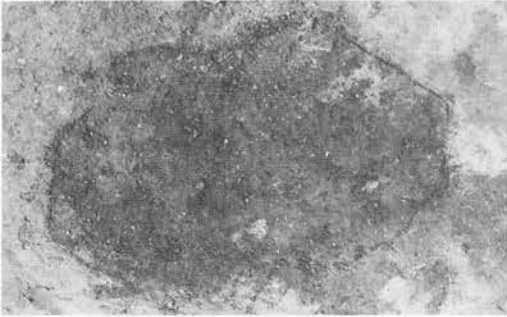


(9) II i 39 土葬墓

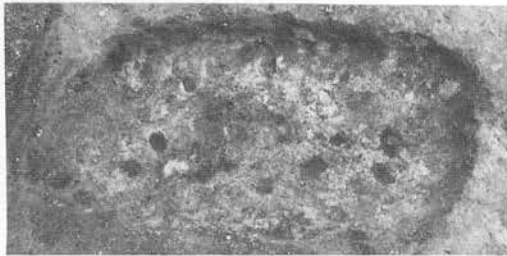
PL-118 土葬墓-5



(10) II j 38土葬墓



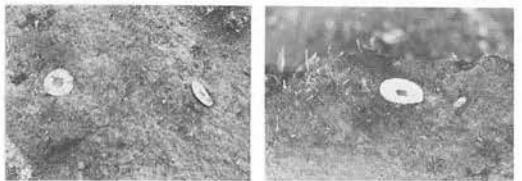
① 検出時の平面
② 断面
③ 完掘平面



(3) I j 40火葬墓-2



① 検出時の平面
② 断面
③
④ 遺物



(4) I j 40火葬墓

PL-119 土葬墓-6・火葬墓-1



① 検出時の平面



② 断面



③ 空掘後の平面



④ 遺物

(1) I i 39火葬墓



① 検出時の平面



② 断面



③ 空掘後平面

(2) I i 40火葬墓-1



① カマド全貌



② 断面

I i 75住居跡



(1) I d40溝跡

①



②



③

①完掘後全景 (南東から)

②土層

③土層

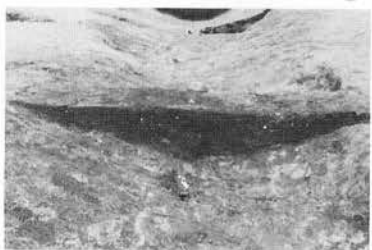


(2) II a38溝跡

①



②



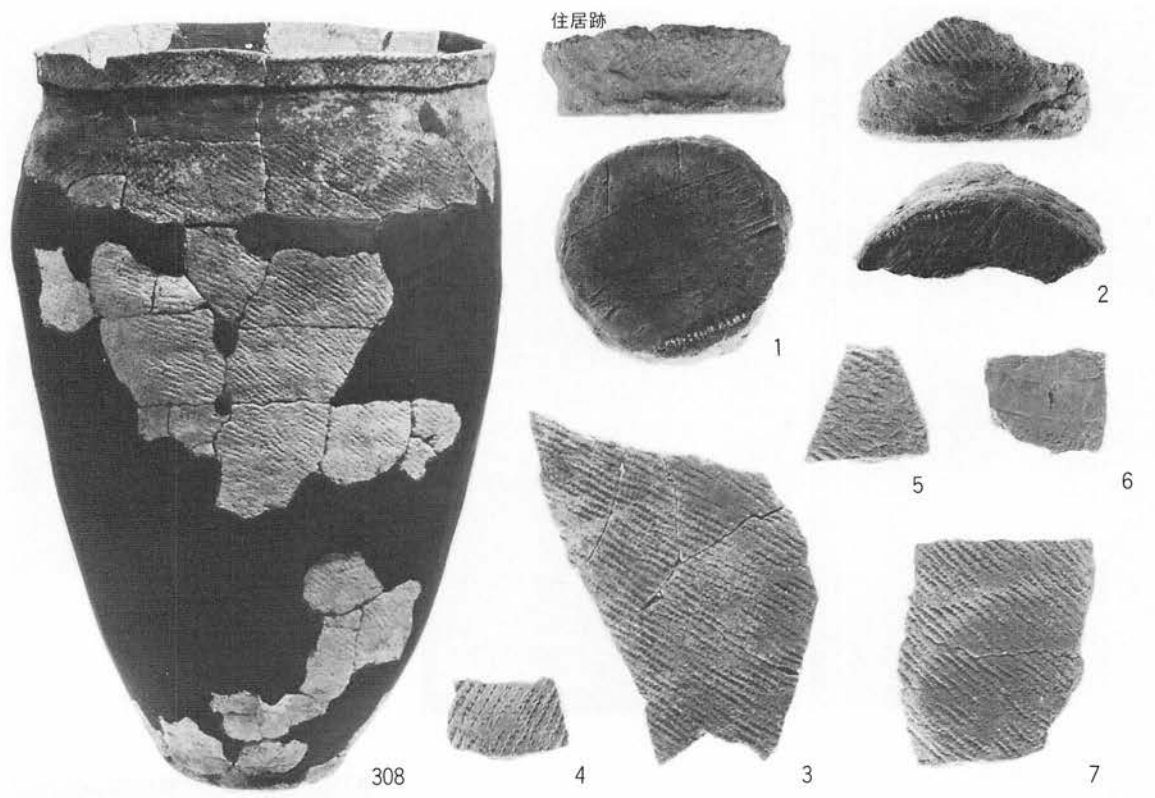
③

①完掘後全景

②土層

③土層

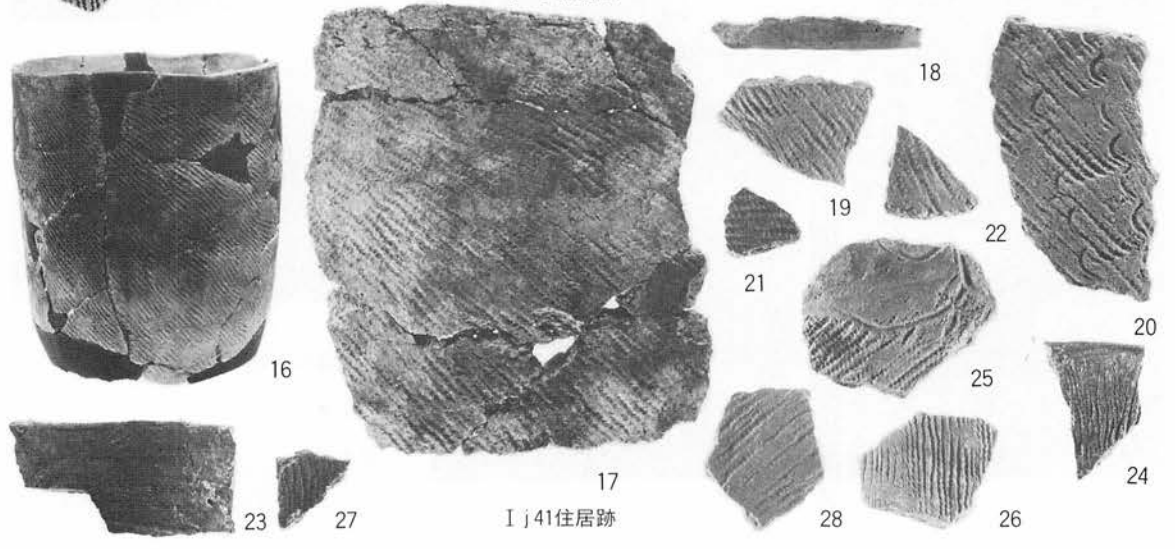
P L - 121 溝跡



I h40住居跡

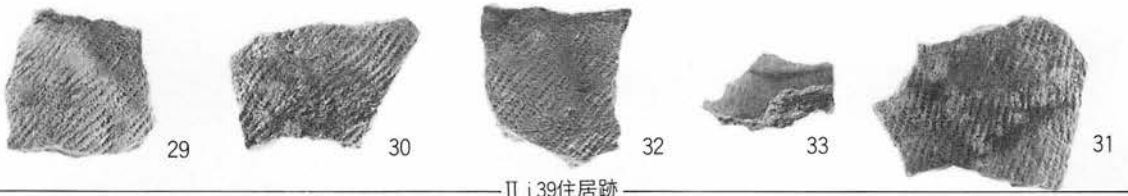


I i37住居跡

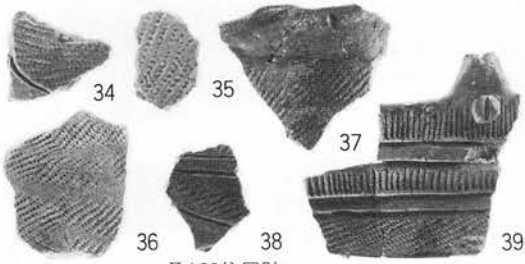


I j41住居跡

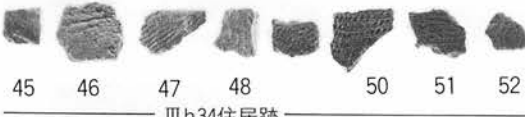
PL-122 遺構内の土器(住居跡-1)



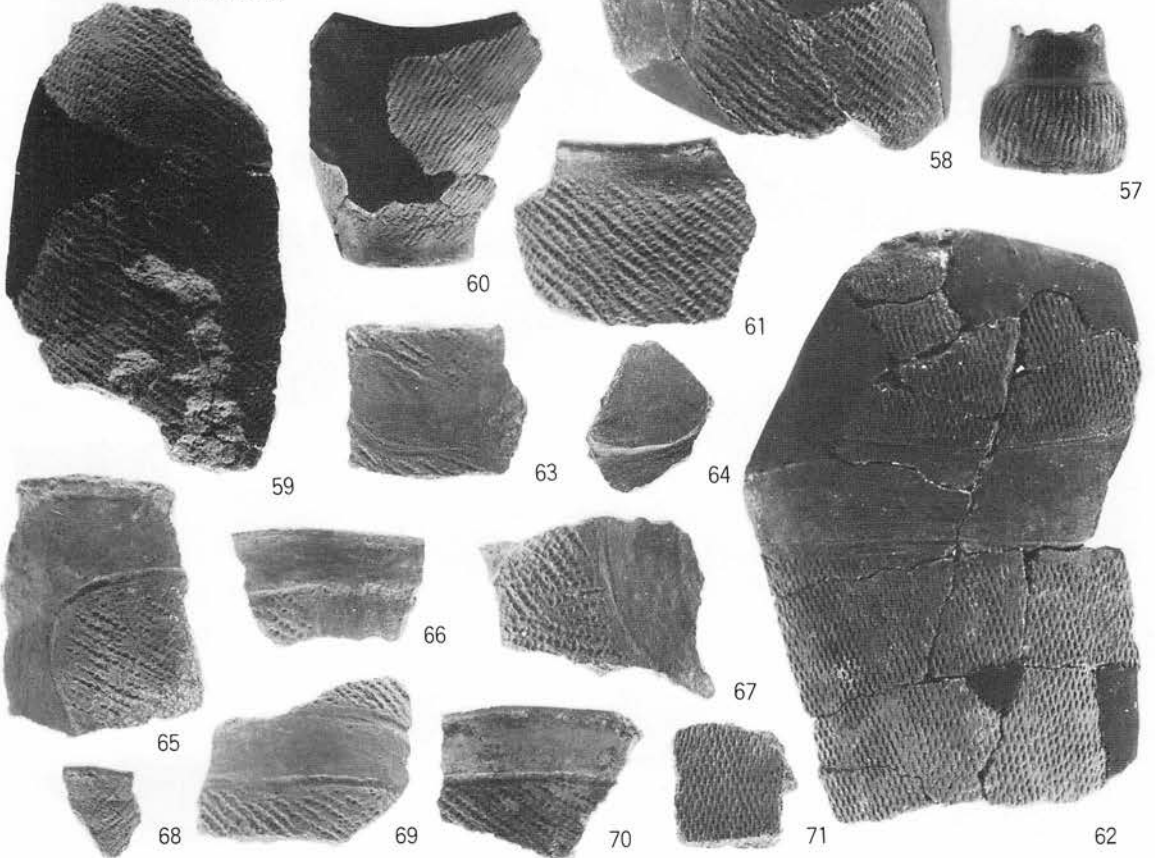
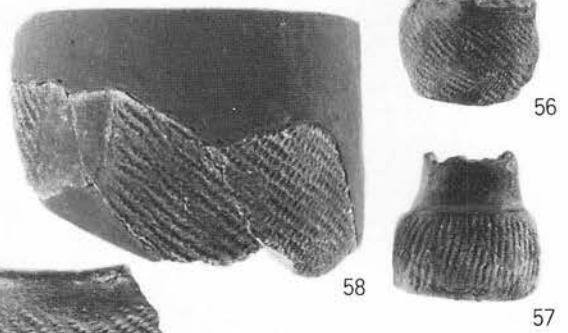
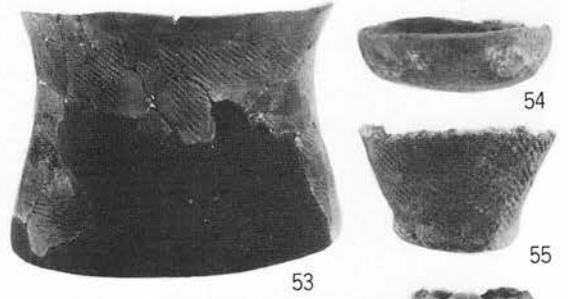
II i 39住居跡



II j 39住居跡



III h 34住居跡



I j 55住居跡

PL-123 遺構内の土器(住居跡-2)

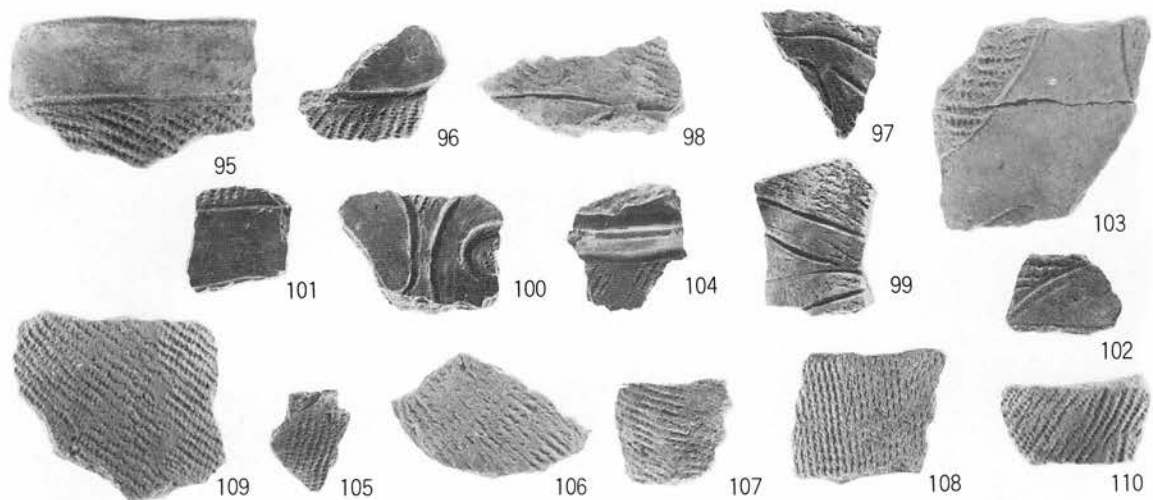


II a60住居跡

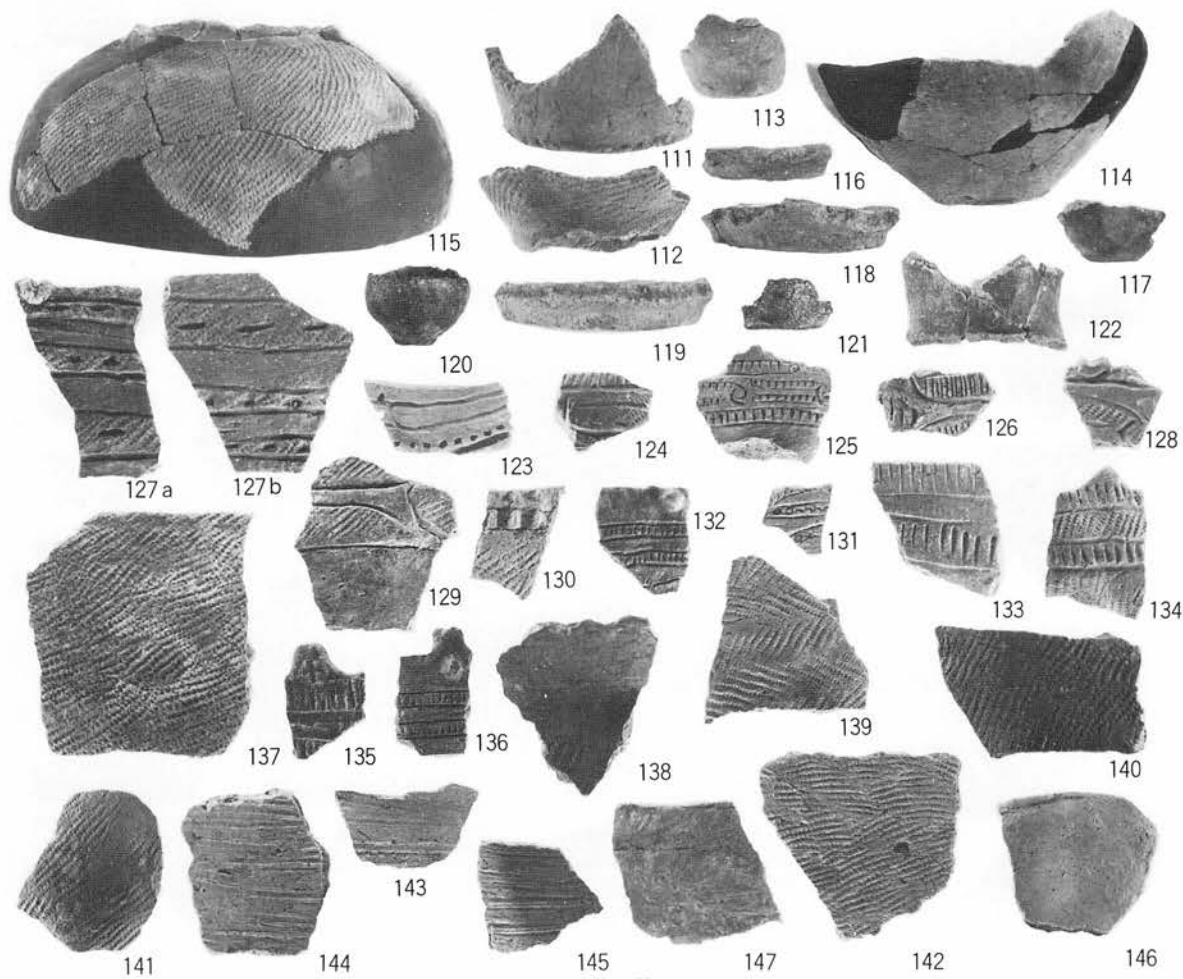


III a38住居跡

PL-124 遺構内の土器(住居跡-3)

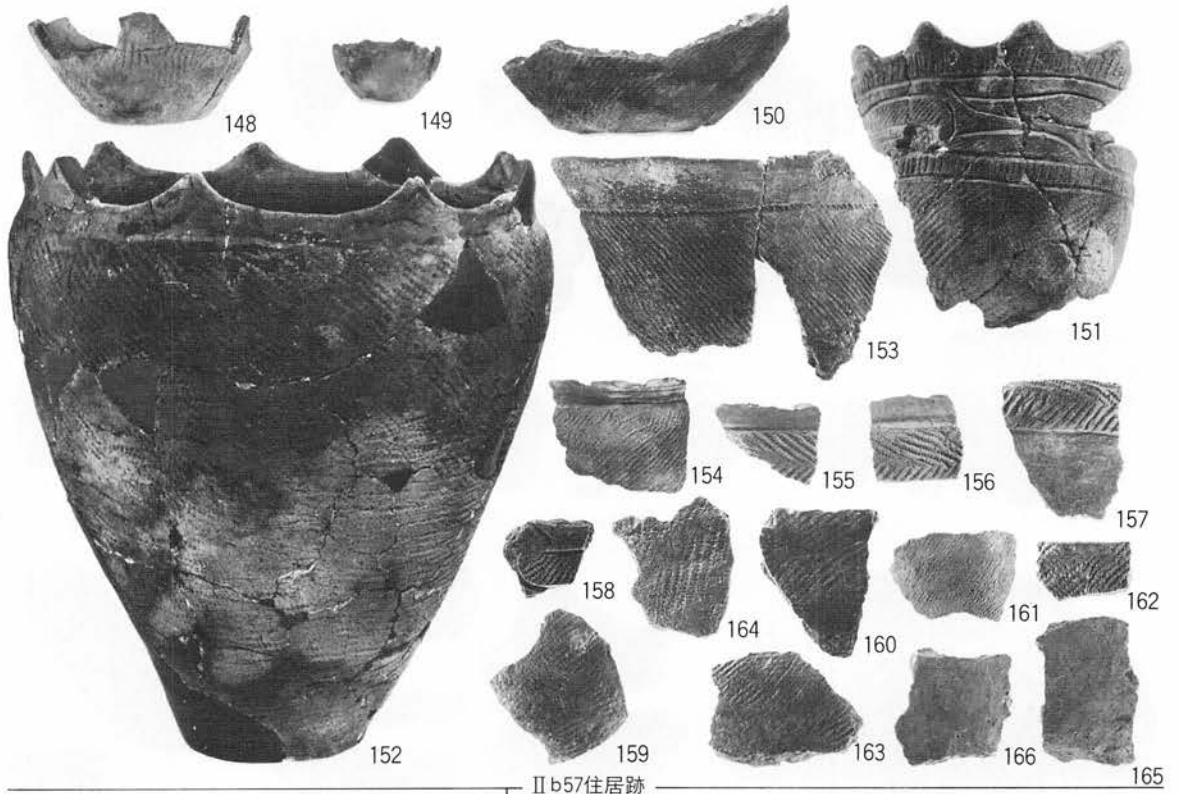


II a56住居跡

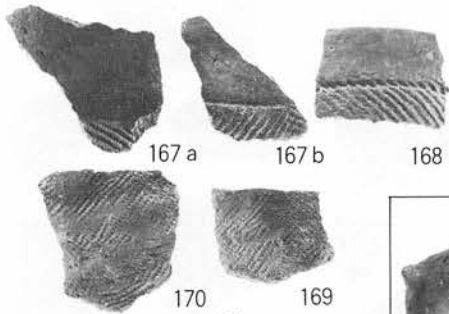


II b58住居跡

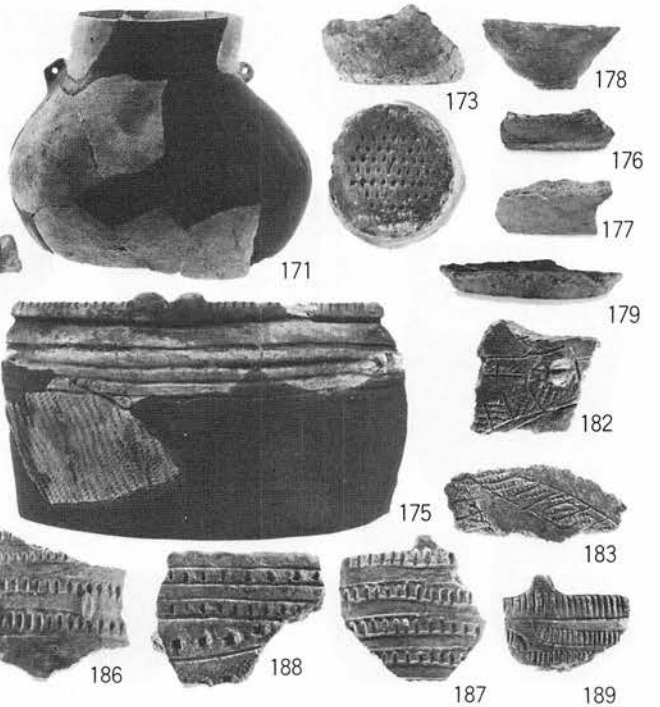
PL-125 遺構内の土器(住居跡-4)



II b57住居跡

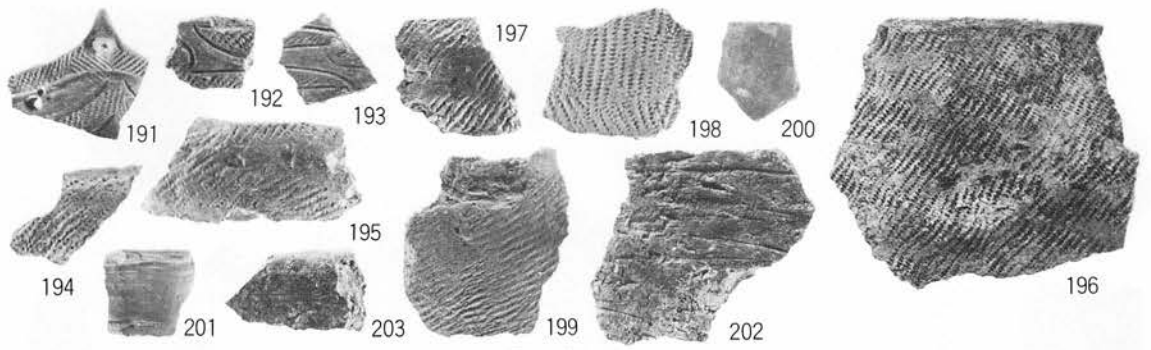


II d57住居跡



II e59住居跡

P L - 126 遺構内の土器 (住居跡-5)

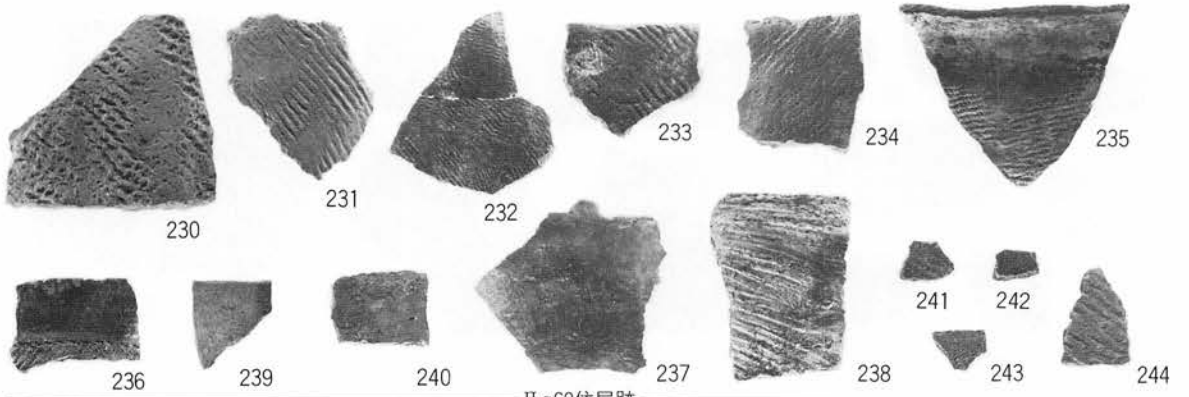


II e59住居跡

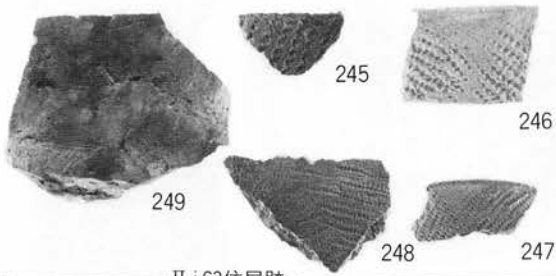


II g60住居跡

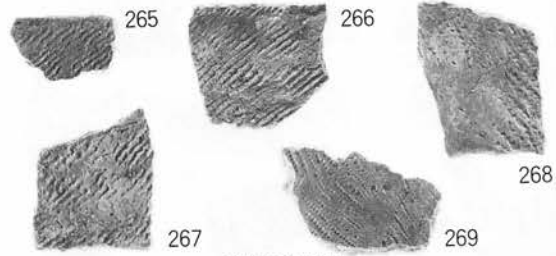
PL-127 遺構内の土器(住居跡-6)



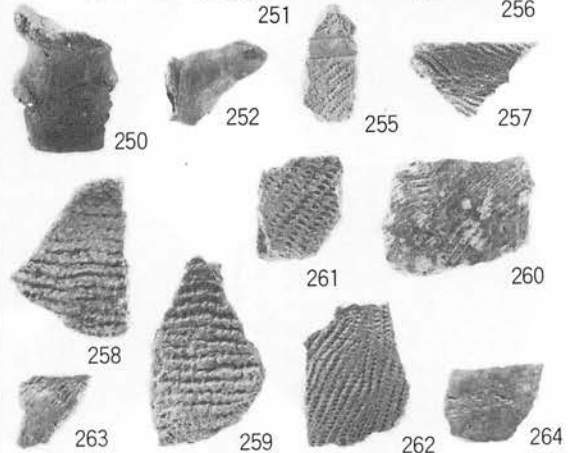
II g60住居跡



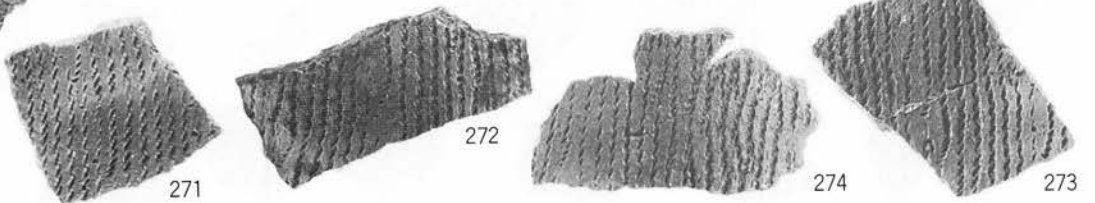
II i63住居跡



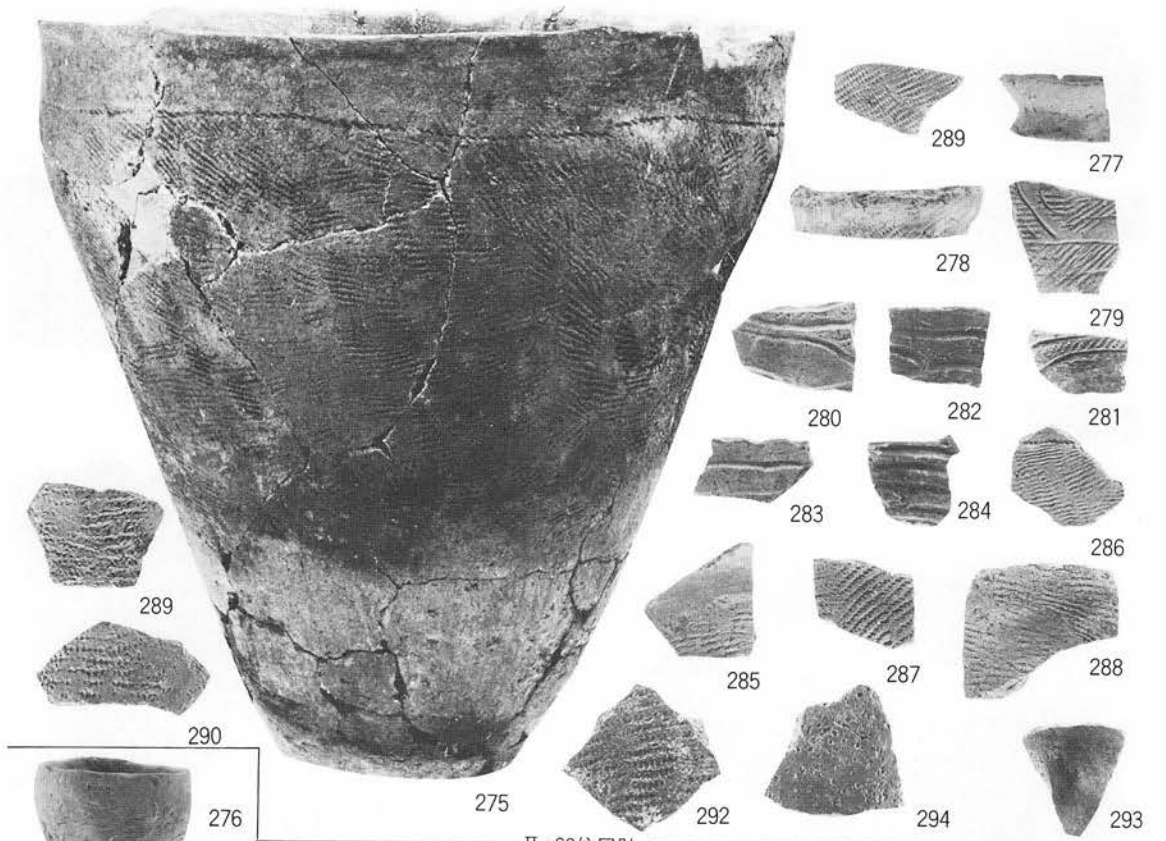
III b59住居跡



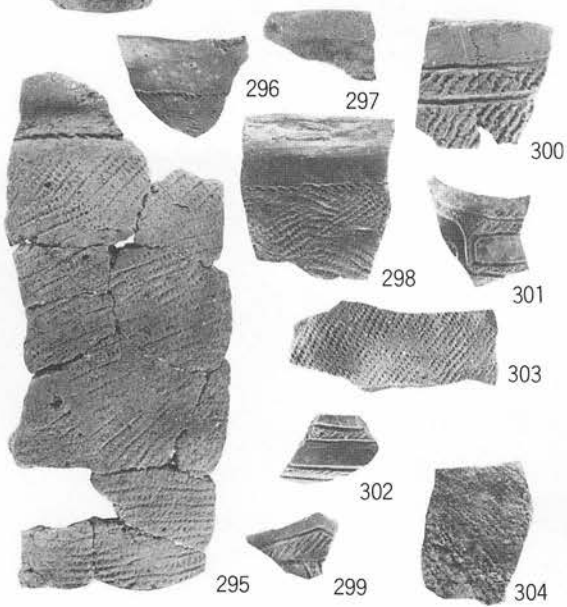
II j59住居跡



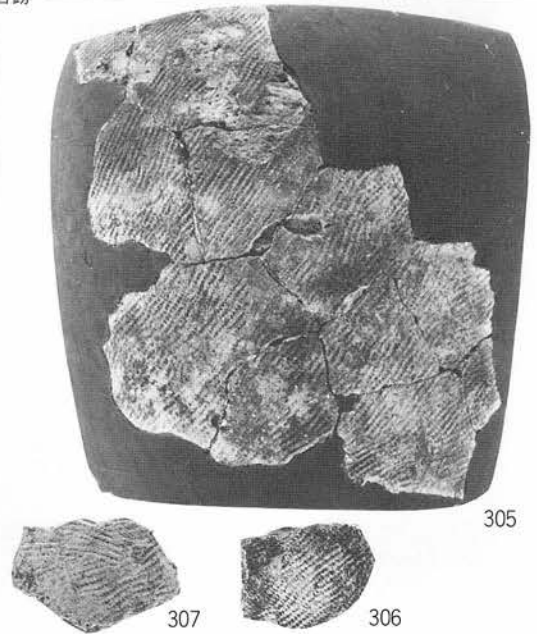
III b63住居跡



Ⅱ a68住居跡

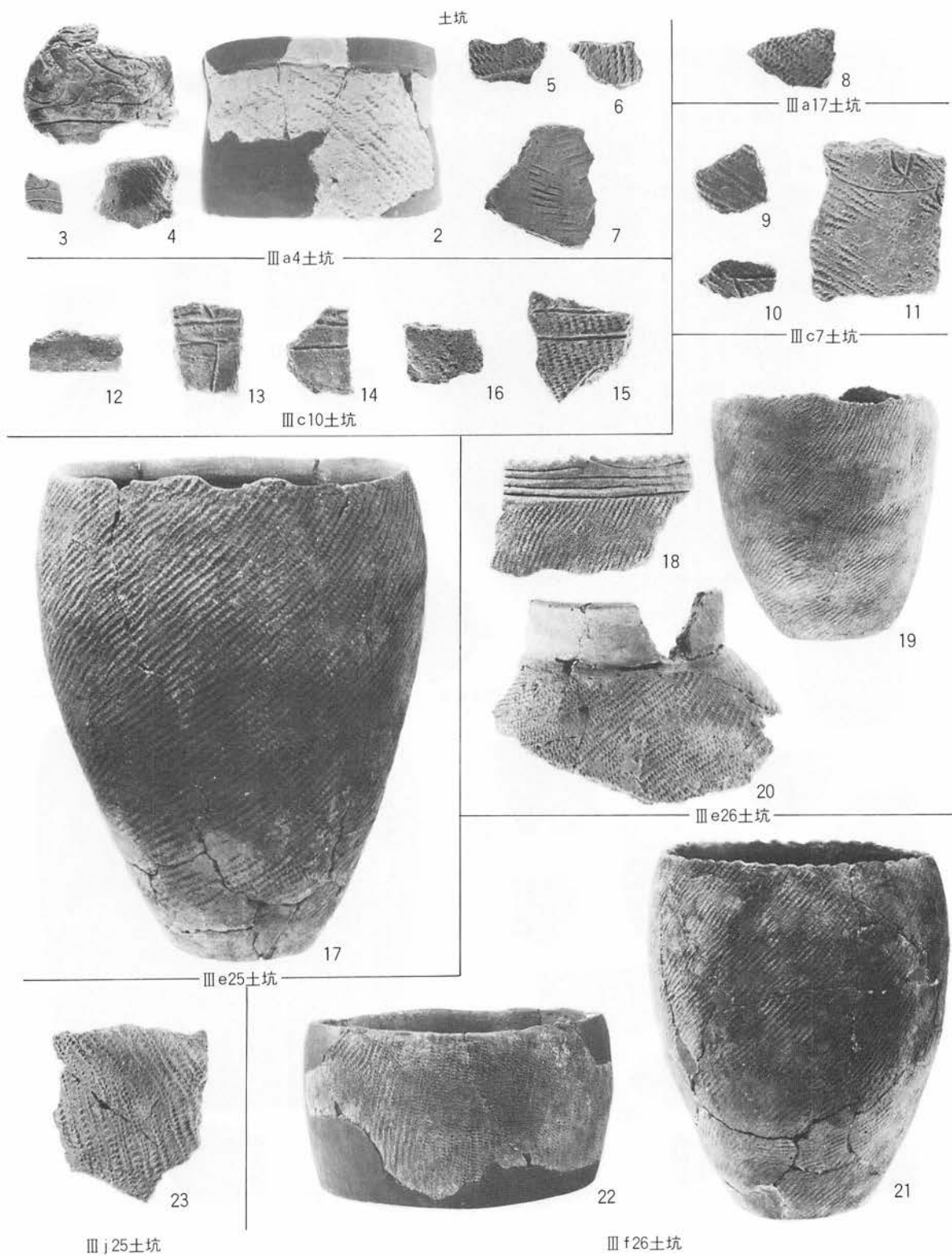


Ⅱ b68住居跡

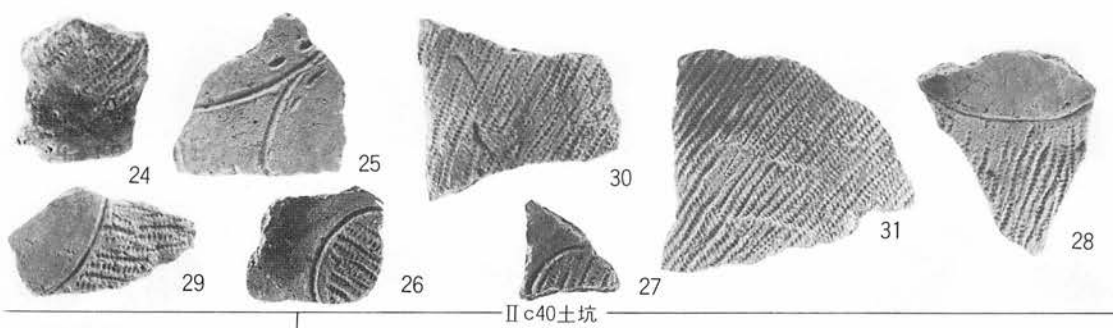


Ⅰ j74住居跡状遺構

PL-129 遺構内の土器(住居前-8)



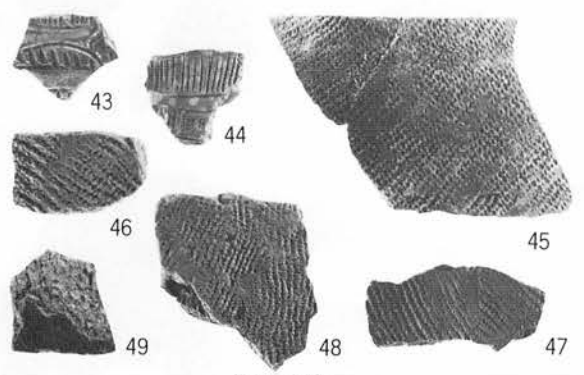
PL-130 遺構内の土器(土坑-1)



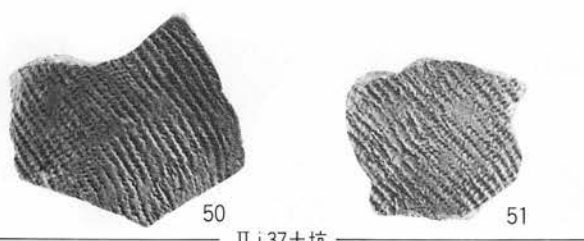
II c40土坑



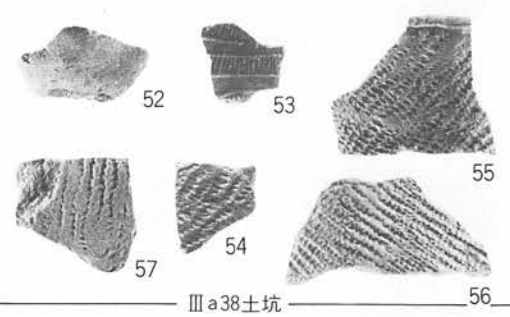
II i38土坑



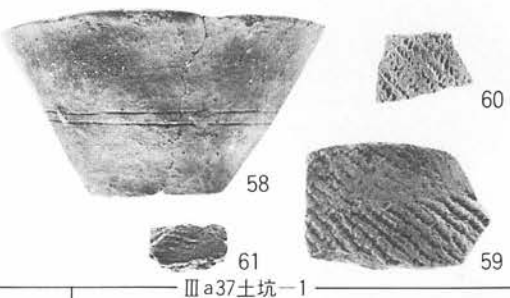
II i39土坑



II j37土坑



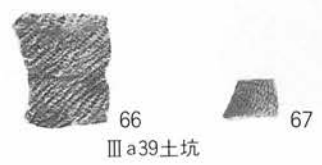
III a38土坑



III a37土坑-1

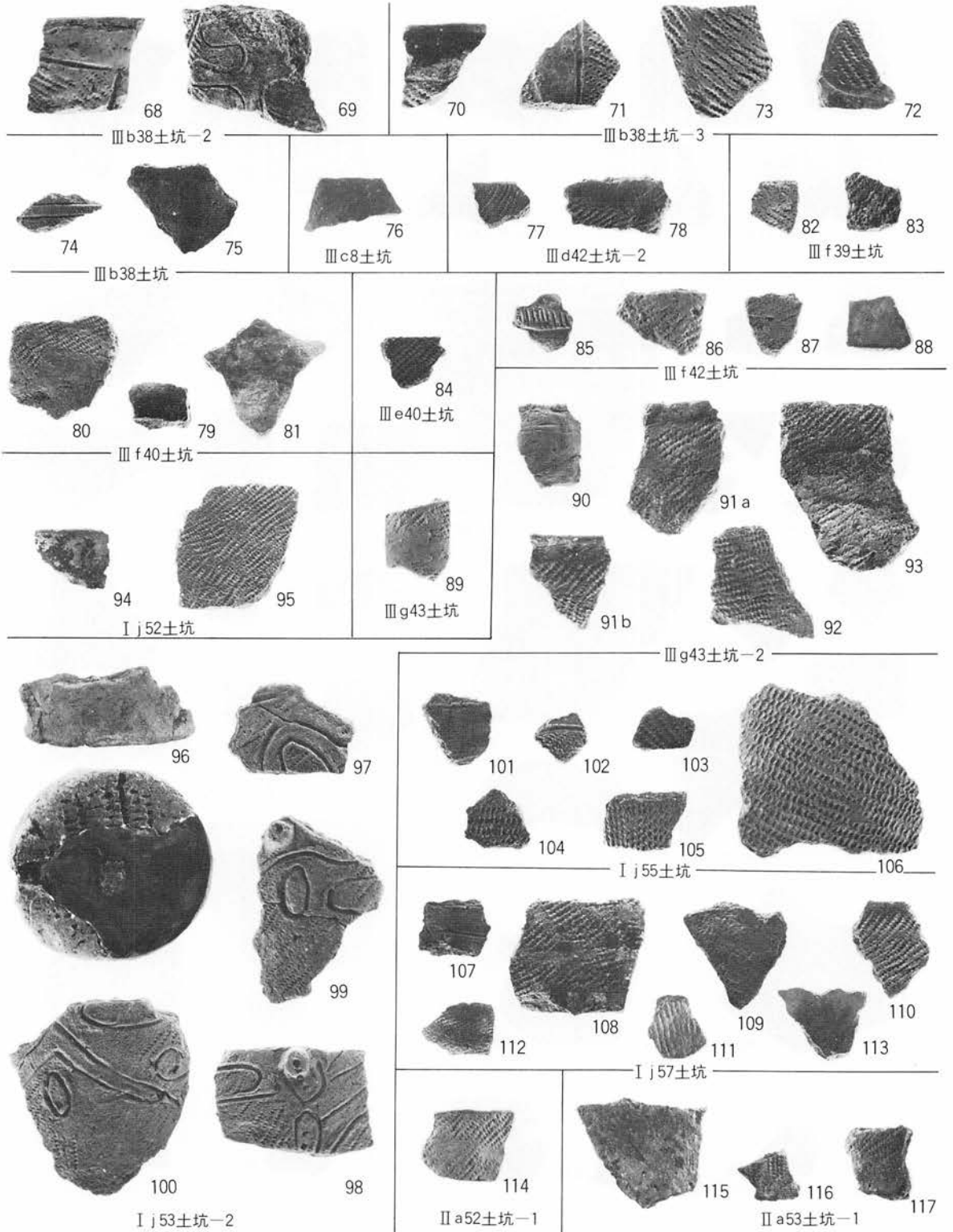


II j38土坑

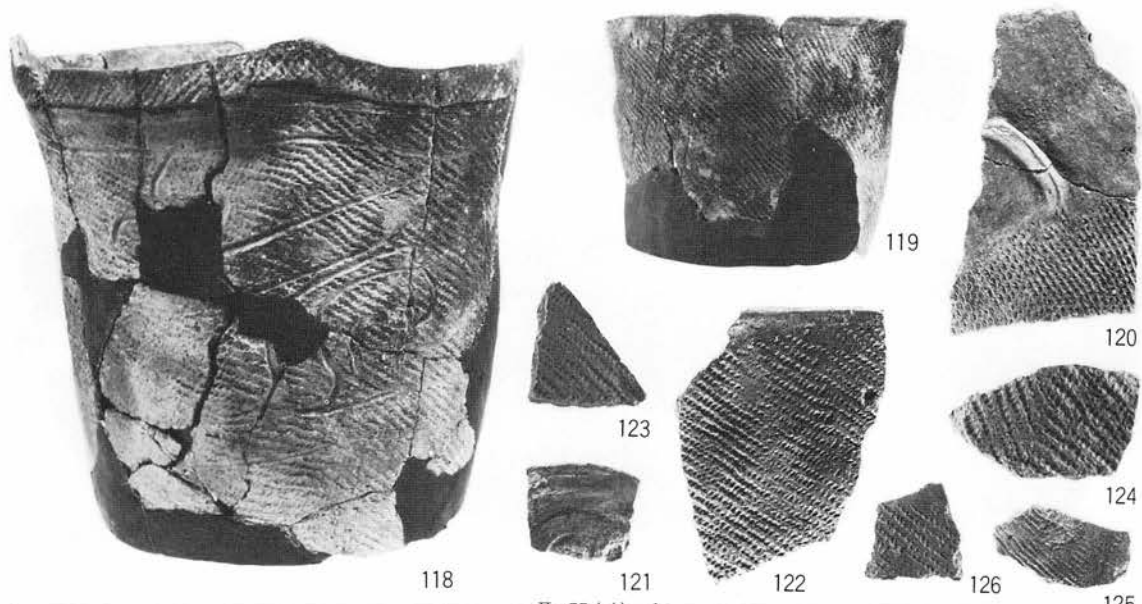


III a39土坑

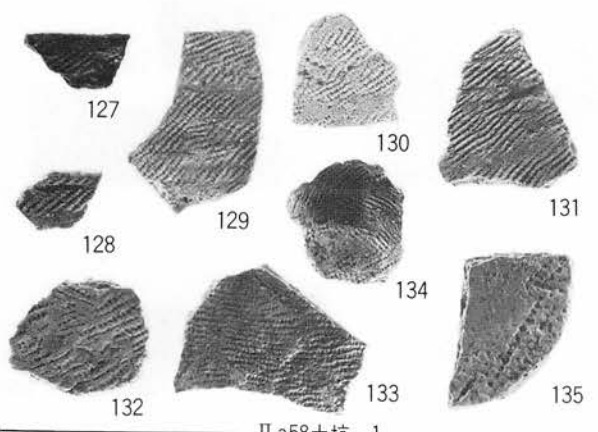
PL-131 遺構内の土器(土坑-2)



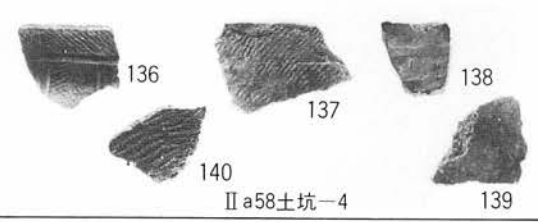
PL-132 遺構内の土器(土坑-3)



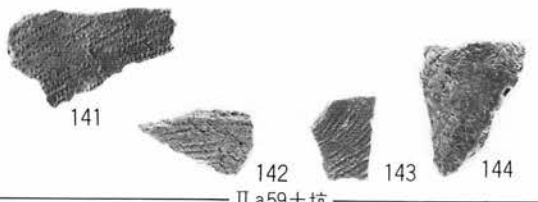
II a55土坑-1



II a58土坑-1



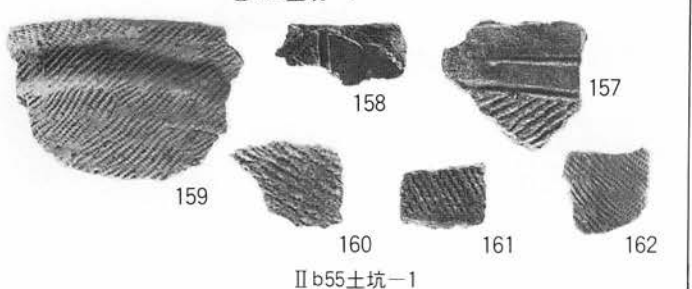
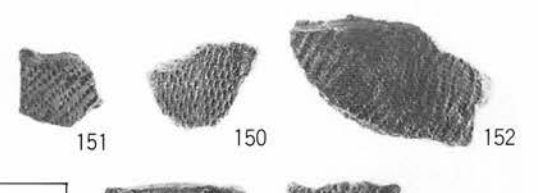
II a58土坑-4



II a59土坑



II b54土坑-1



II b55土坑-1



II b54土坑-2

P L -133 遺構内の土器 (土坑-4)



II b56土坑-1



II b56土坑-3



169



170



172



171



173



174

II b58土坑-1



175



176



177



178



180



179



182



181

II b58土坑-2



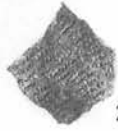
192



205



206



207



208



209

II c58土坑-1

II c54土坑-2



212



224



214



215



216



217



220



218



222



213



223



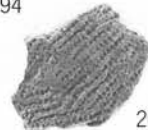
221

II c58土坑-3

PL-134 遺構内の土器(土坑-5)



II b59土坑



II c56土坑

PL-135 遺構内の土器(土坑-6)

(上面観)



(底面観)



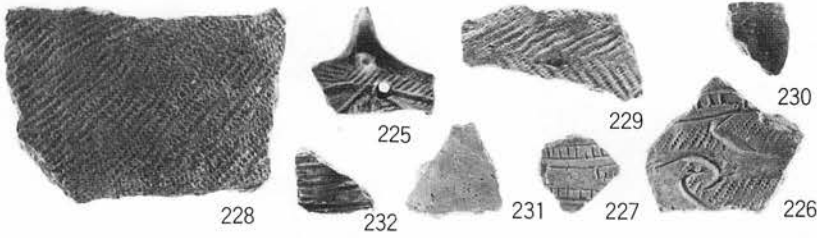
210



211

II c58土坑-3

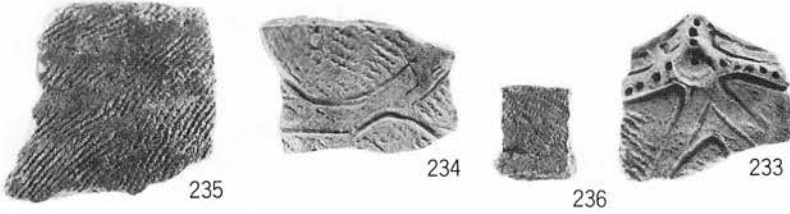
PL-136 遺構内の土器(土坑-7)



II c59土坑



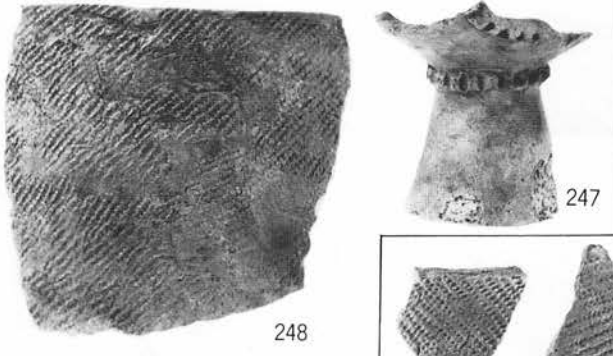
II d59土坑-1



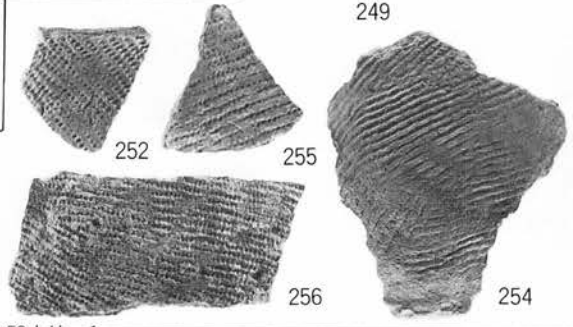
II d58土坑



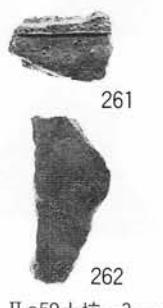
II d59土坑-2



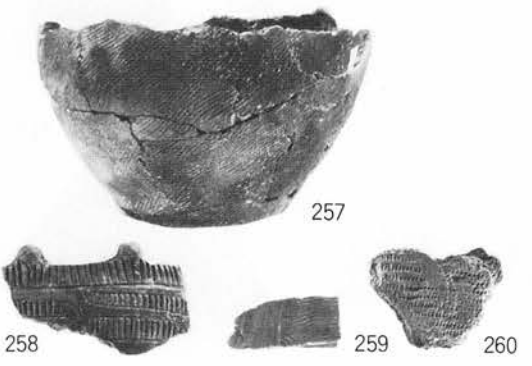
II d59土坑-3



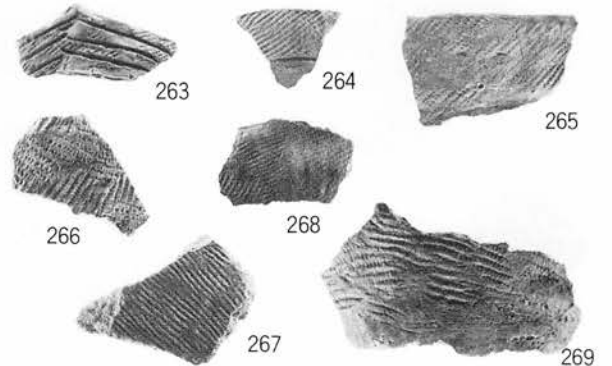
II e59土坑-1



II e59土坑-3

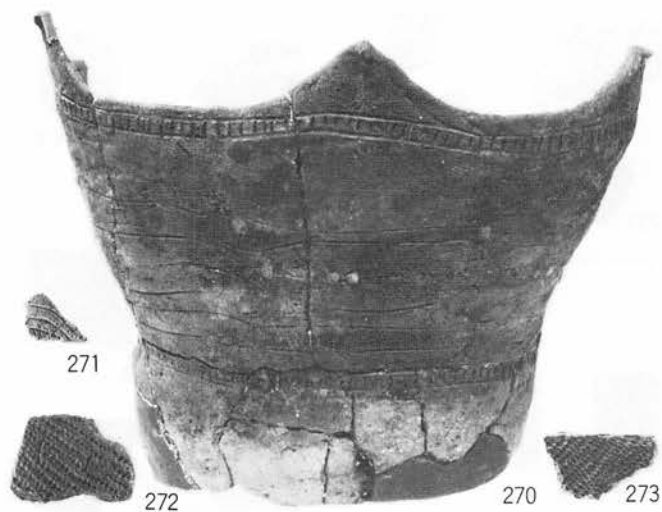


II e59土坑-2

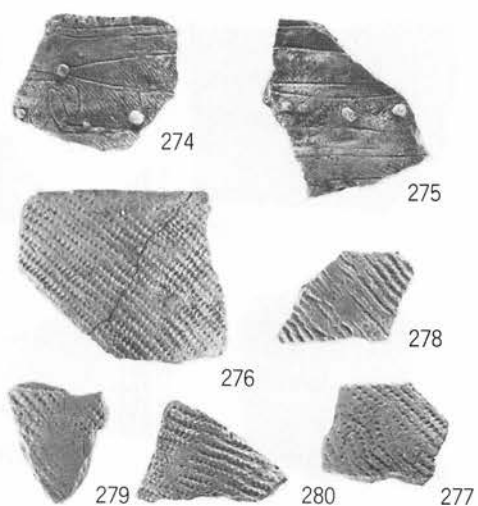


II f55土坑

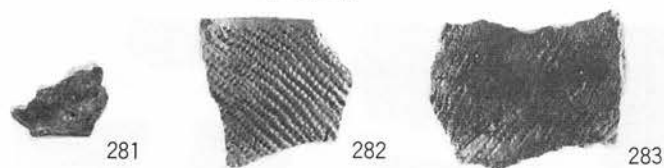
PL-137 遺構内の土器(土坑-8)



II f57土坑



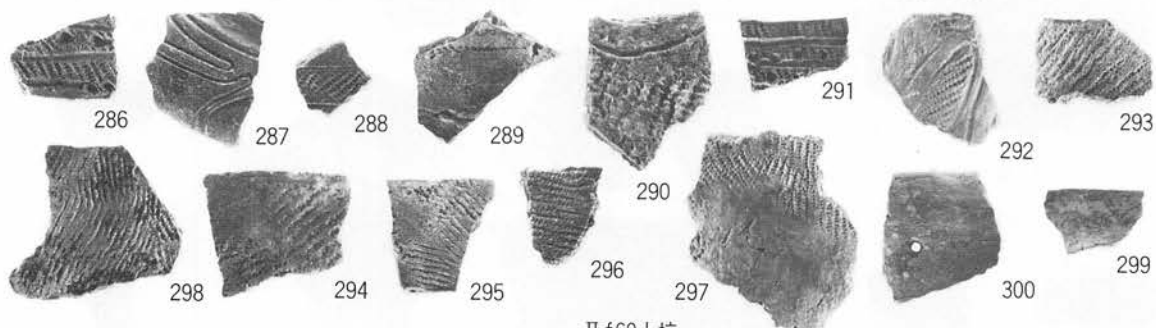
II f58土坑-1



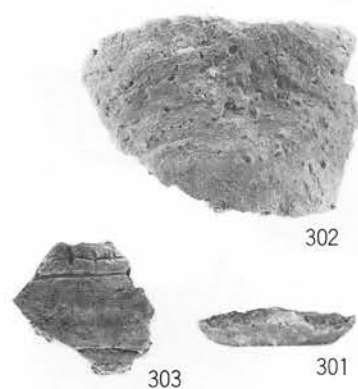
II f58土坑-2



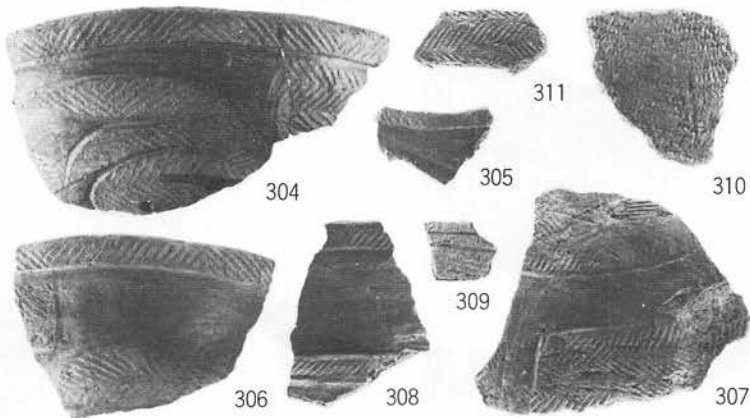
II g56土坑



II f60土坑

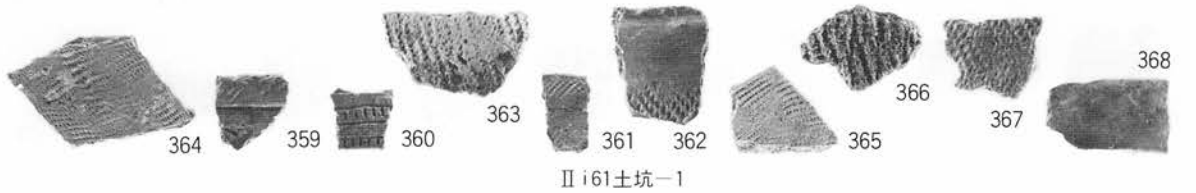
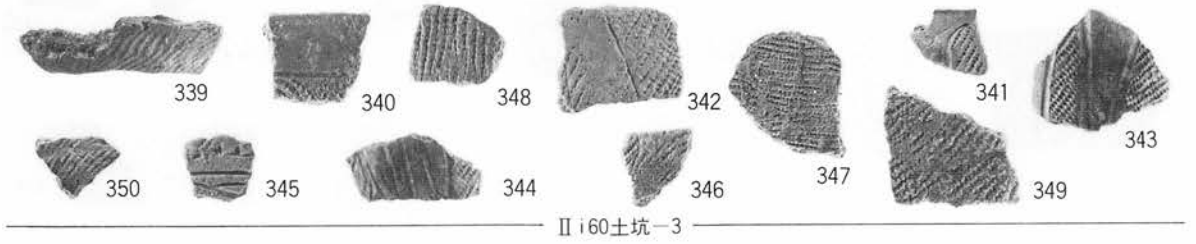
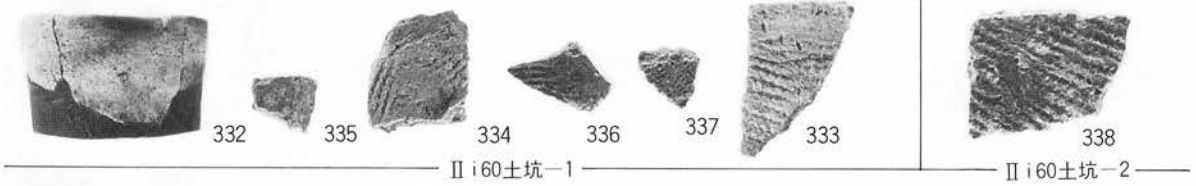
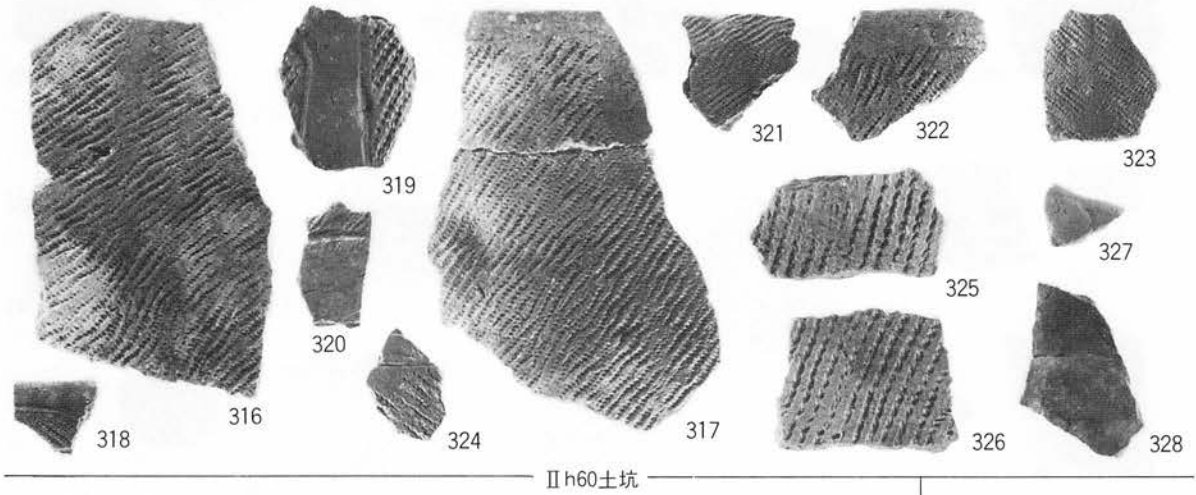


II h57土坑-2

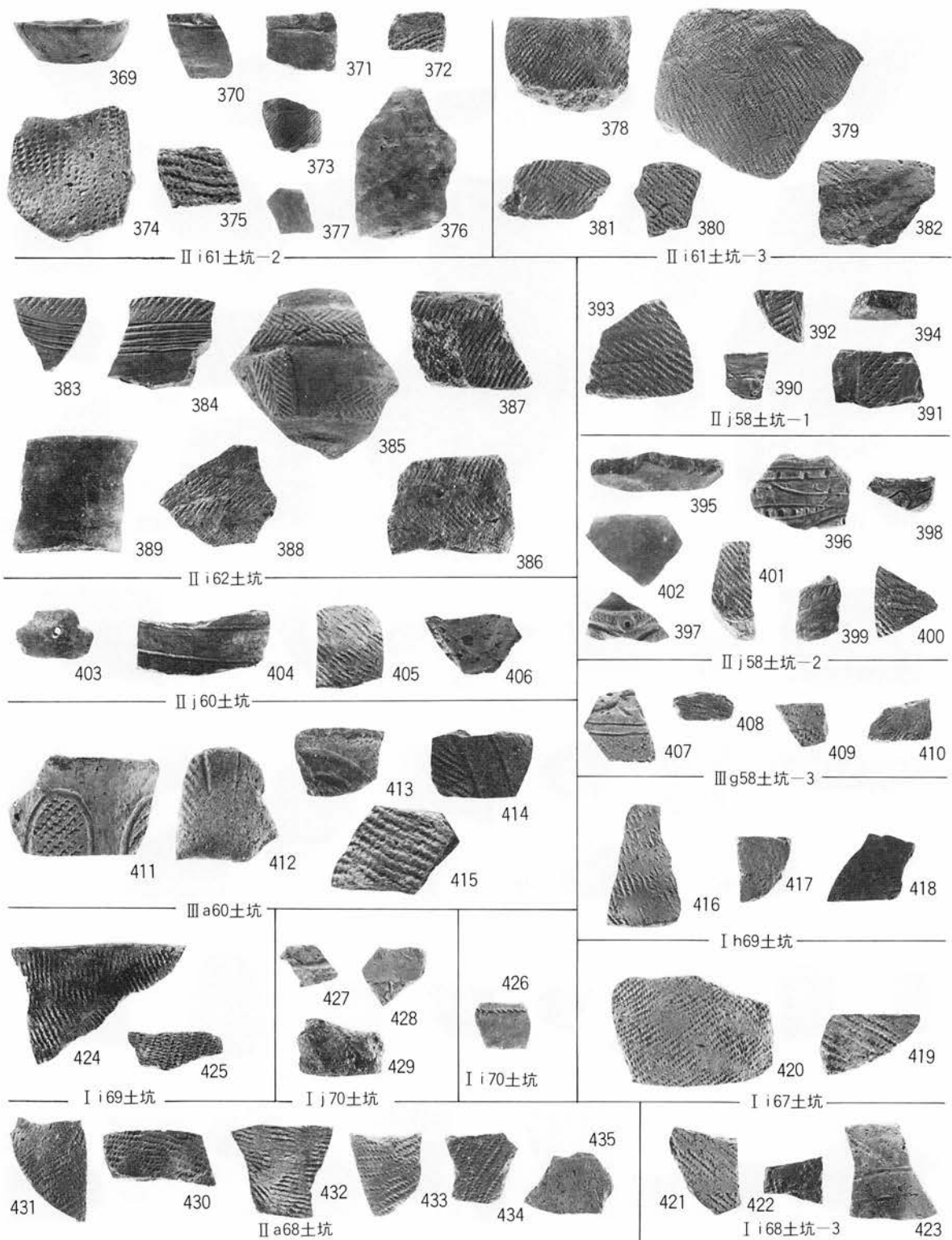


II h58土坑

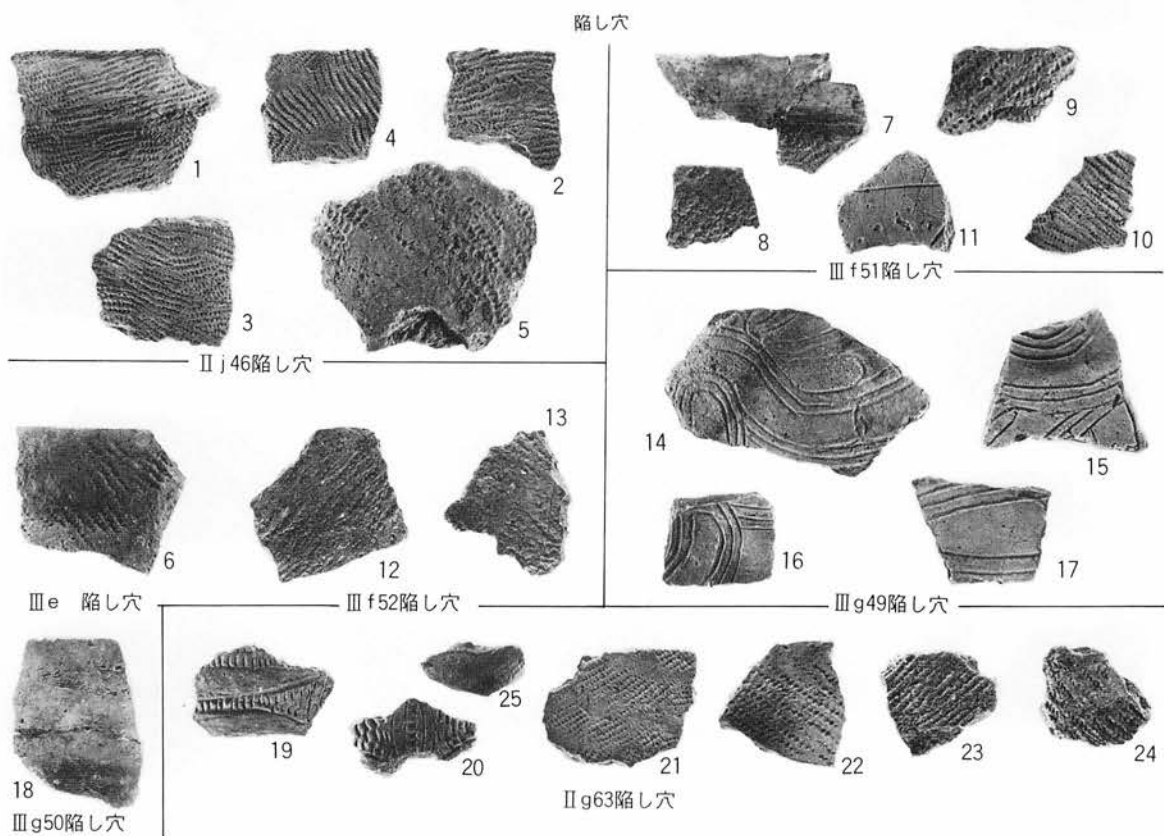
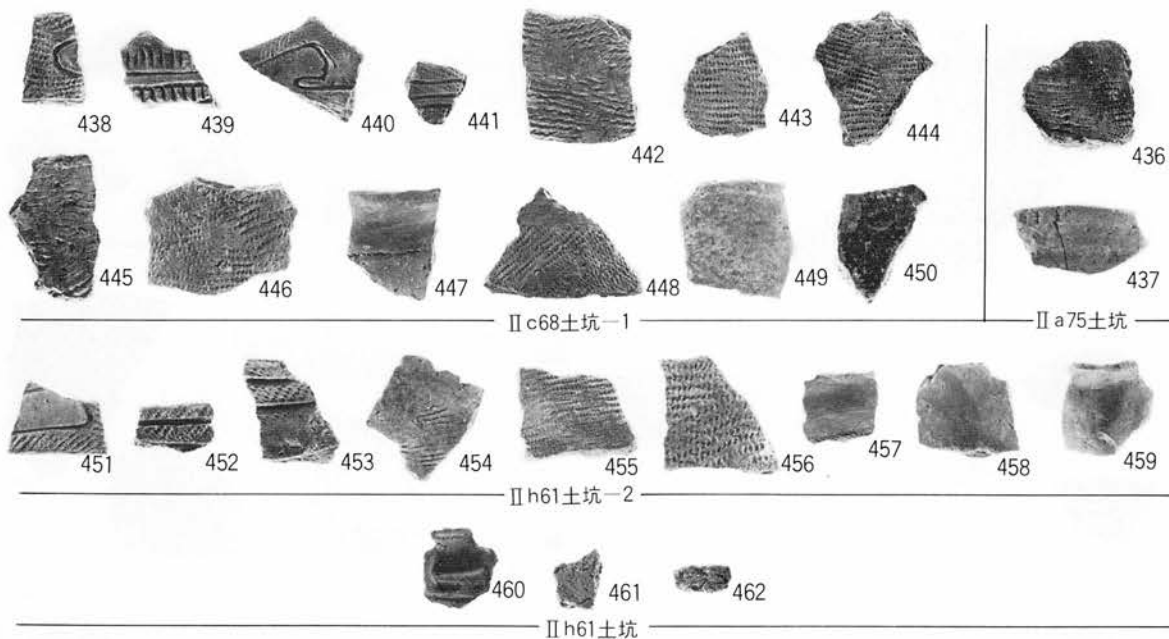
PL-138 遺構内の土器(土坑-9)



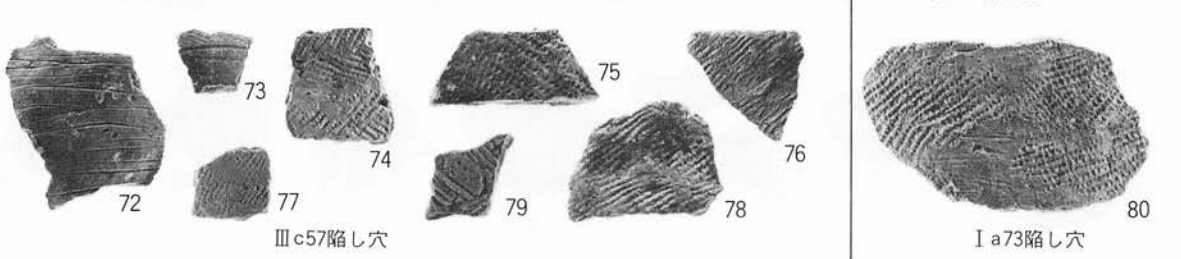
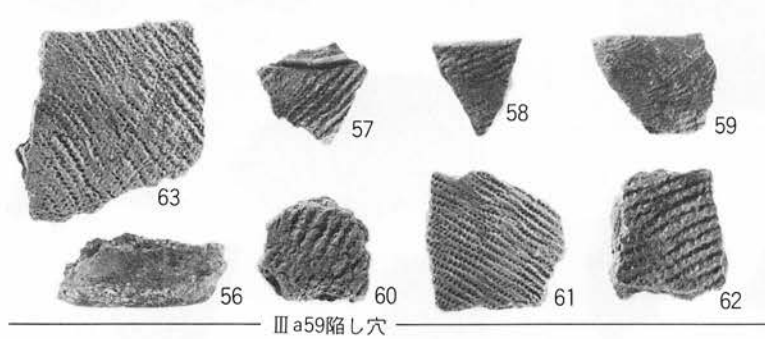
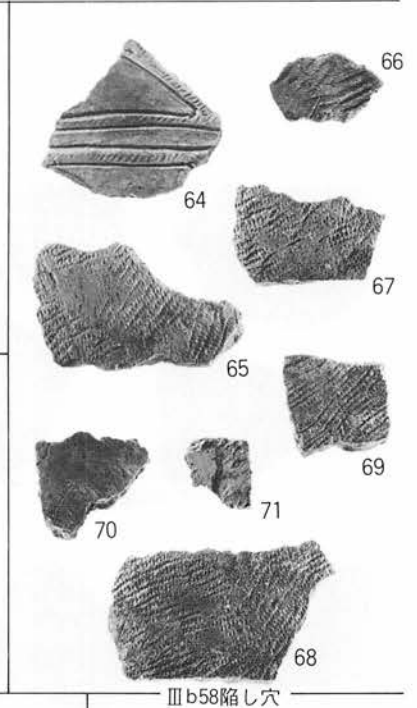
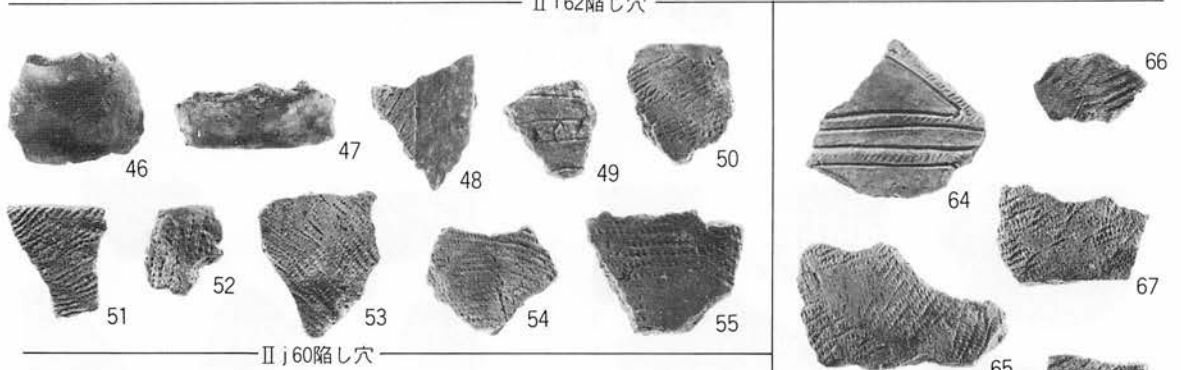
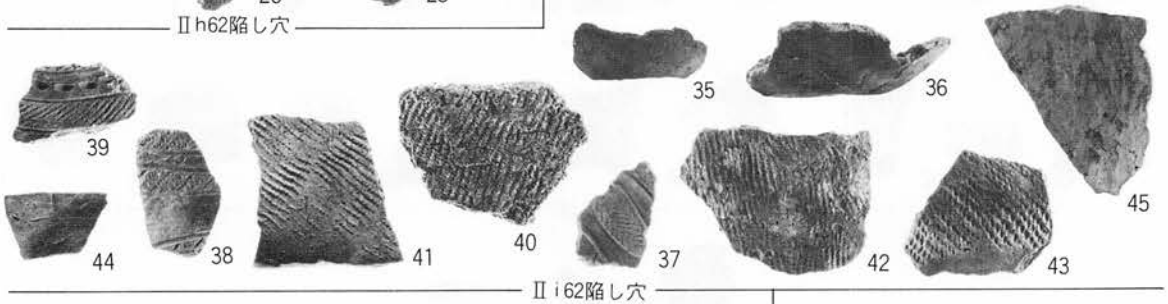
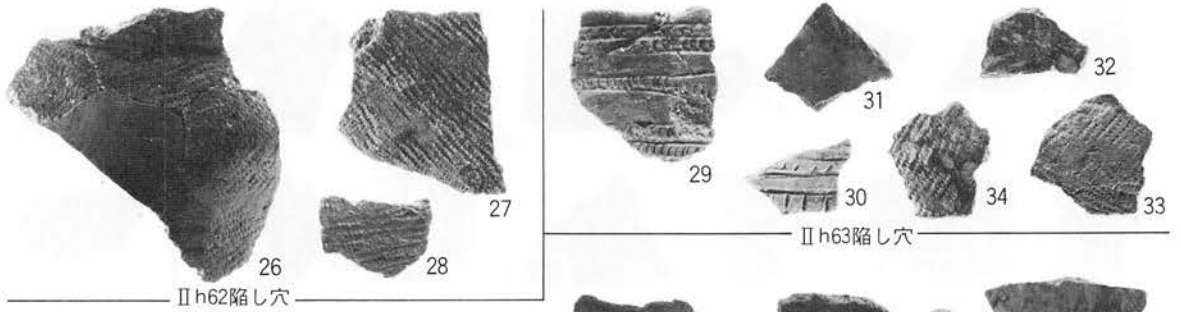
PL-139 遺構内の土器(土坑-10)



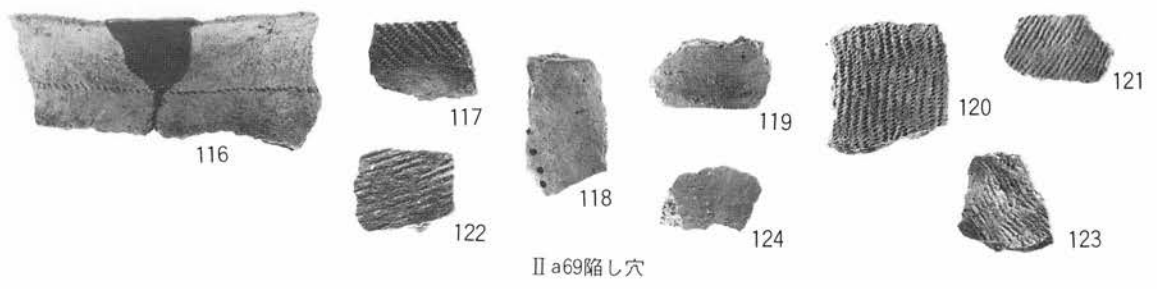
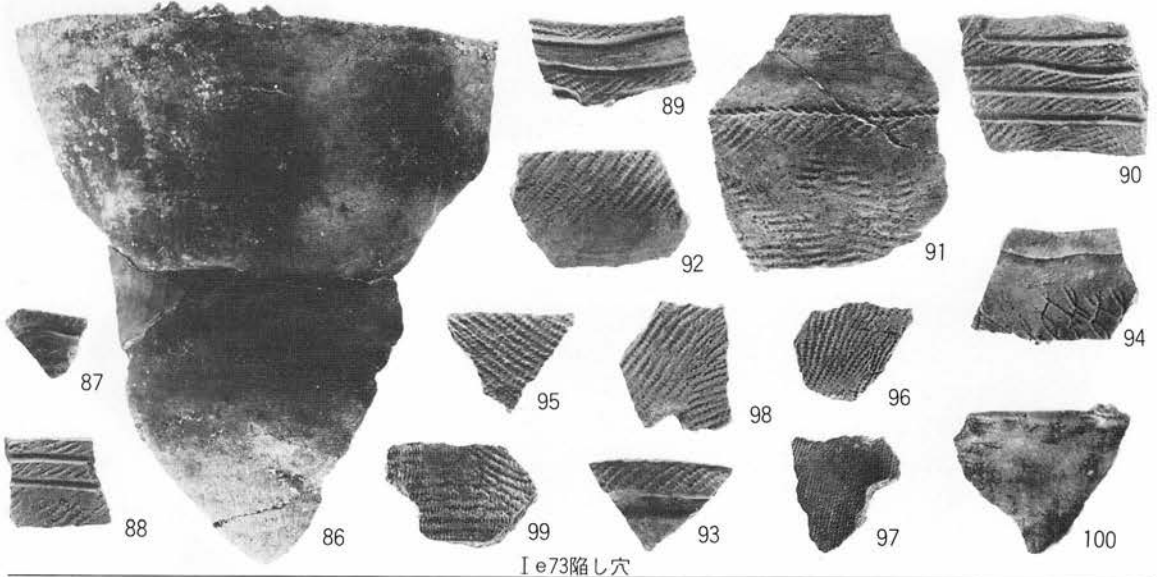
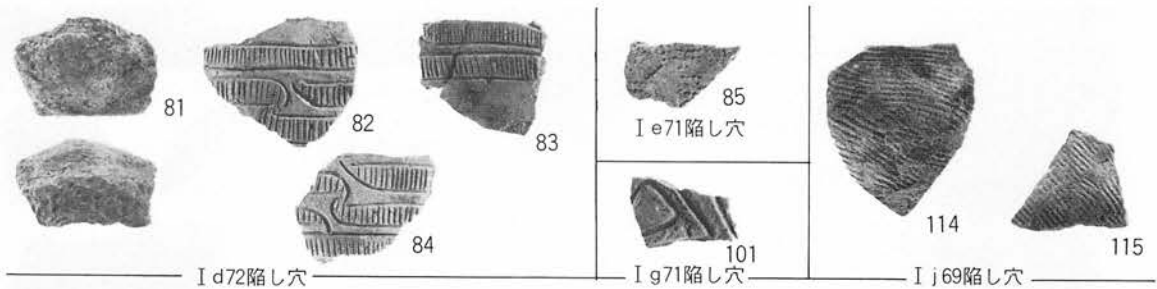
PL-140 遺構内の土器(土坑-11)



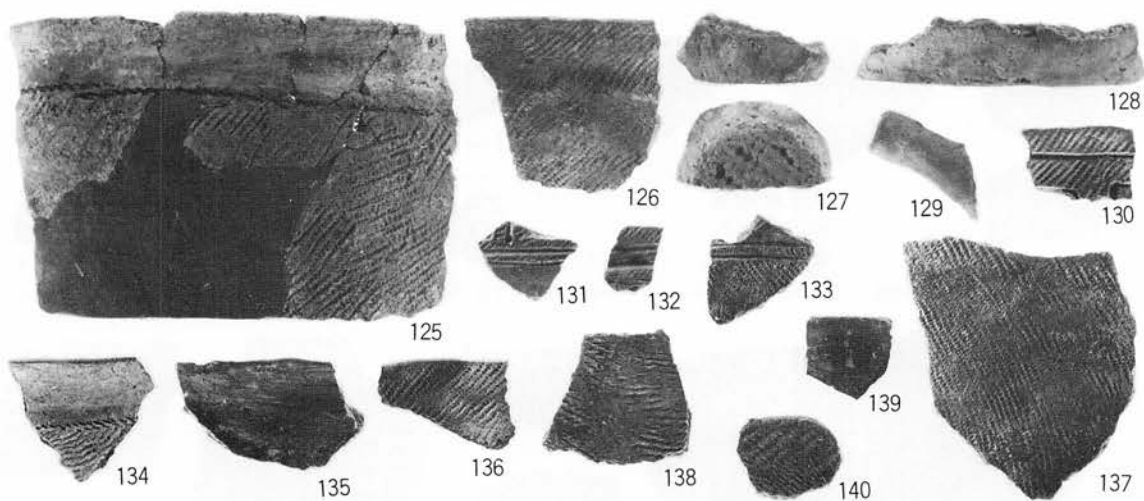
PL-141 遺構内の土器(土坑-12・陥し穴-1)



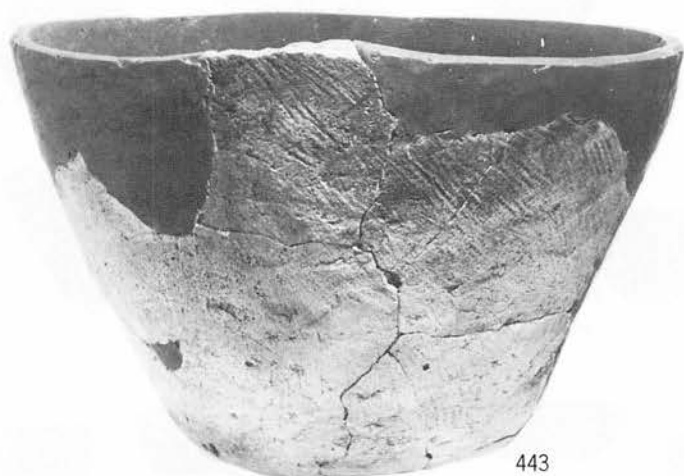
PL-142 遺構内の土器(陥し穴-2)



PL-143 遺構内の土器(陥し穴-3)



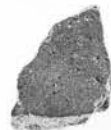
II b68陥し穴



II g61埋設土器



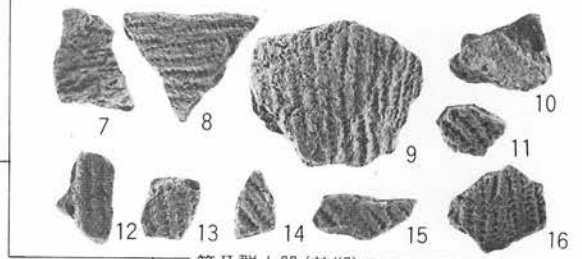
II b58埋設土器



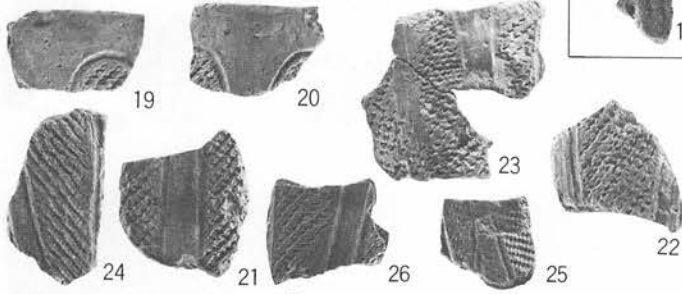
III a7焼土



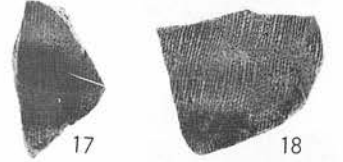
第I群土器(早期)



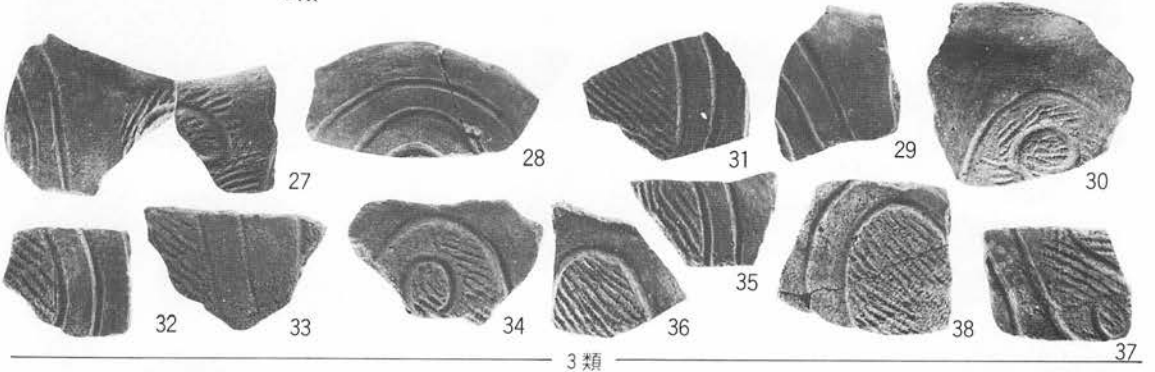
第II群土器(前期)



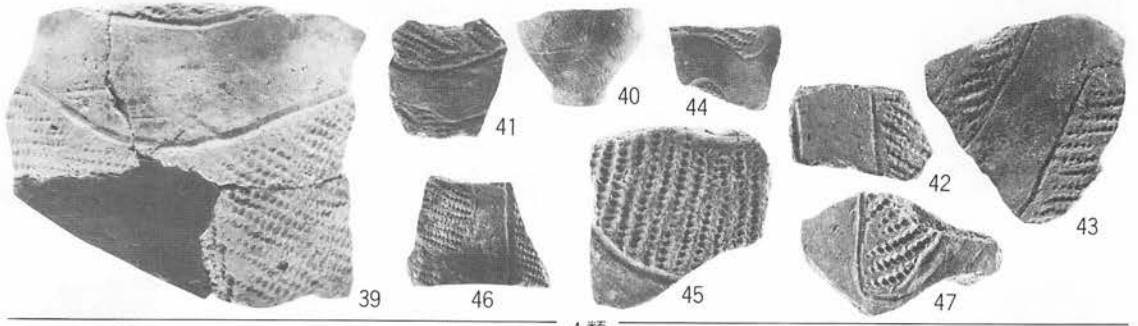
2類



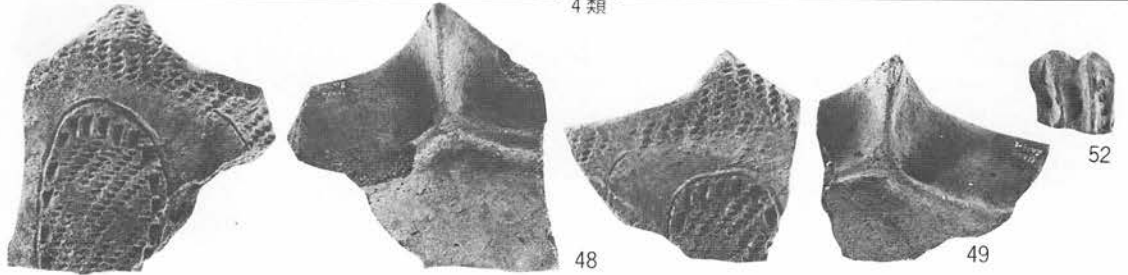
1類



3類



4類



5類

第III群土器

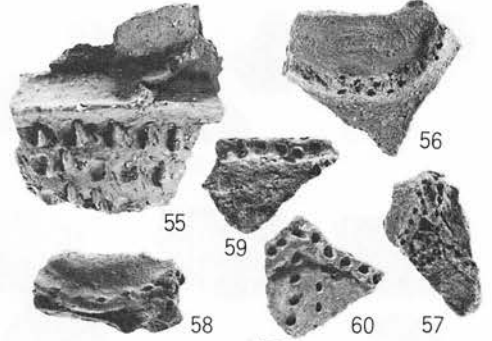
PL-145 遺構外の土器-1



53



54



55

59

56

58

60

57

1類

6類
第Ⅲ群土器



61



62



63



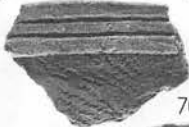
72



65



64



70



66



68



69



67



71



73



77



75



76



78



83



74



79



80



82



81

2類



84



85



87



88



86



89

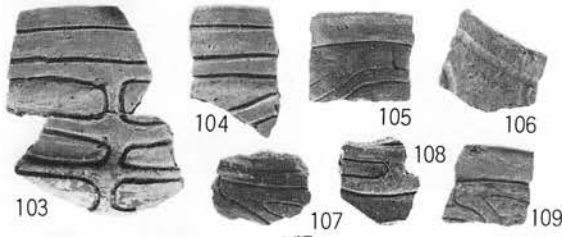
3類

第Ⅳ群土器

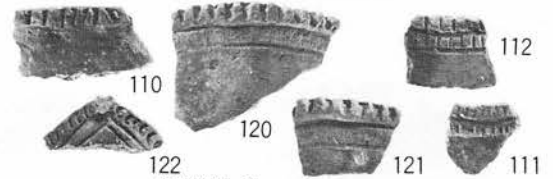
PL-146 遺構外の土器-2



3類



4類
第IV群土器



第V群土器 1類



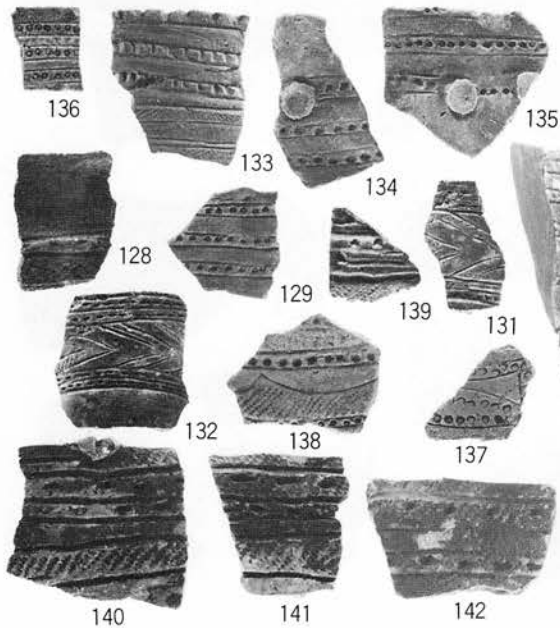
1類



第V群土器 2類



2類



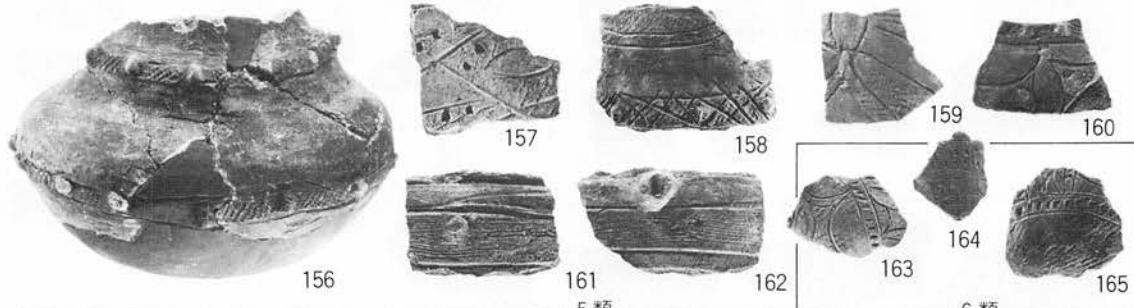
3類
第VI群土器



PL-147 遺構外の土器-3

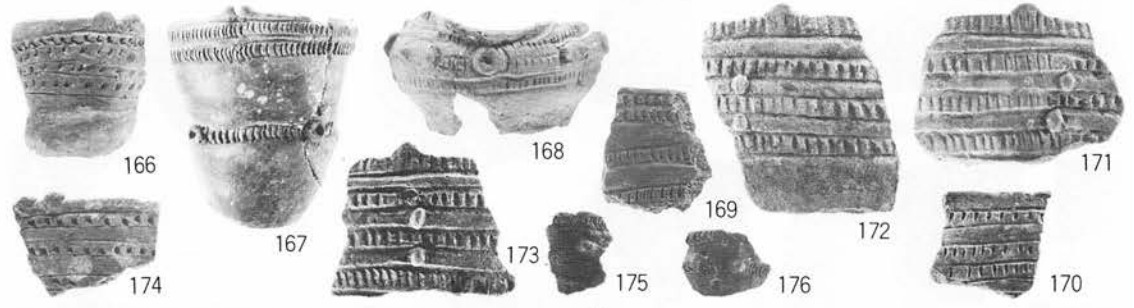


4類

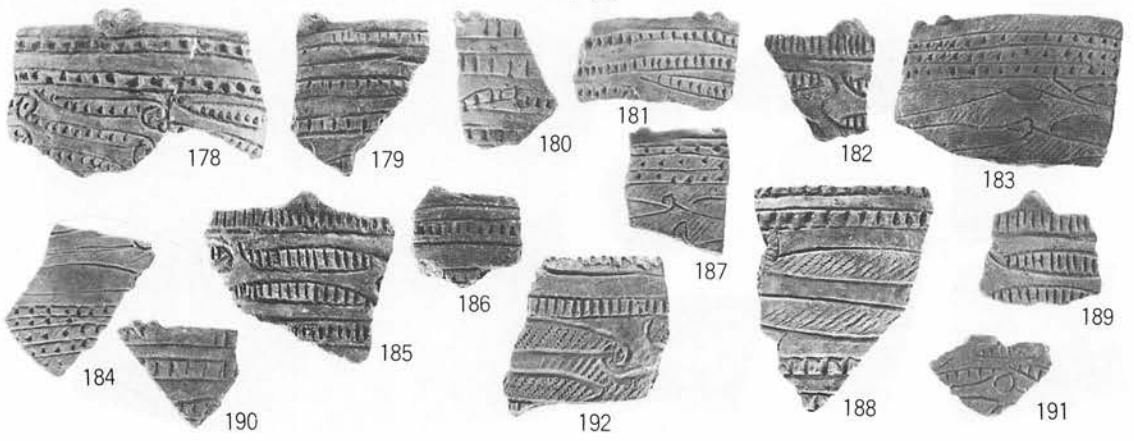


5類

6類



7類



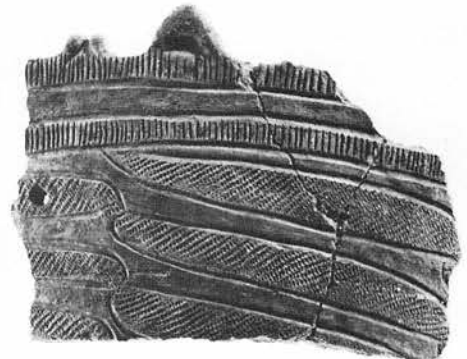
8類

第VI群土器

PL-148 遺構外の土器-4



177



193



194



195



197



196



198

8類



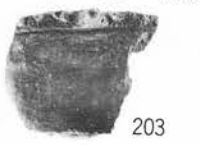
200



202



201



203

10類



206



207



204

11類

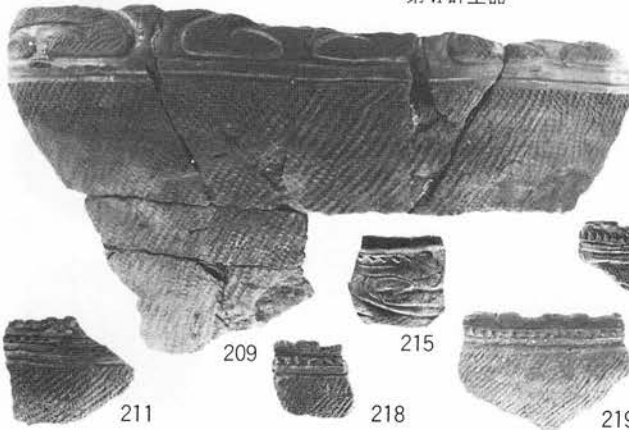
第VI群土器

9類



208

1類



211

209



218



215



219



216



210



212



213



214

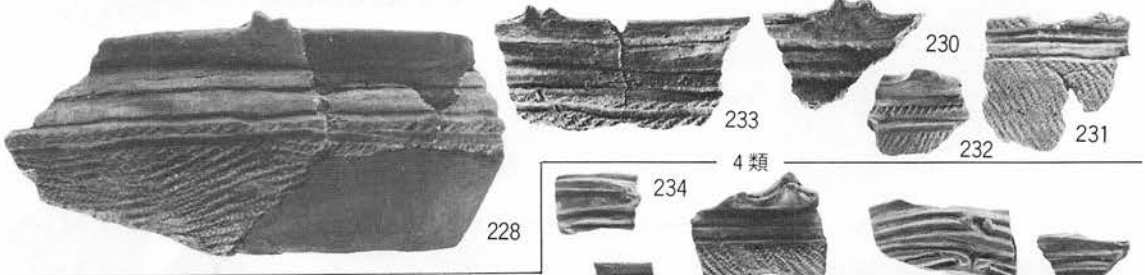
217

2類
第VII群土器

PL-149 遺構外の土器-5



3類

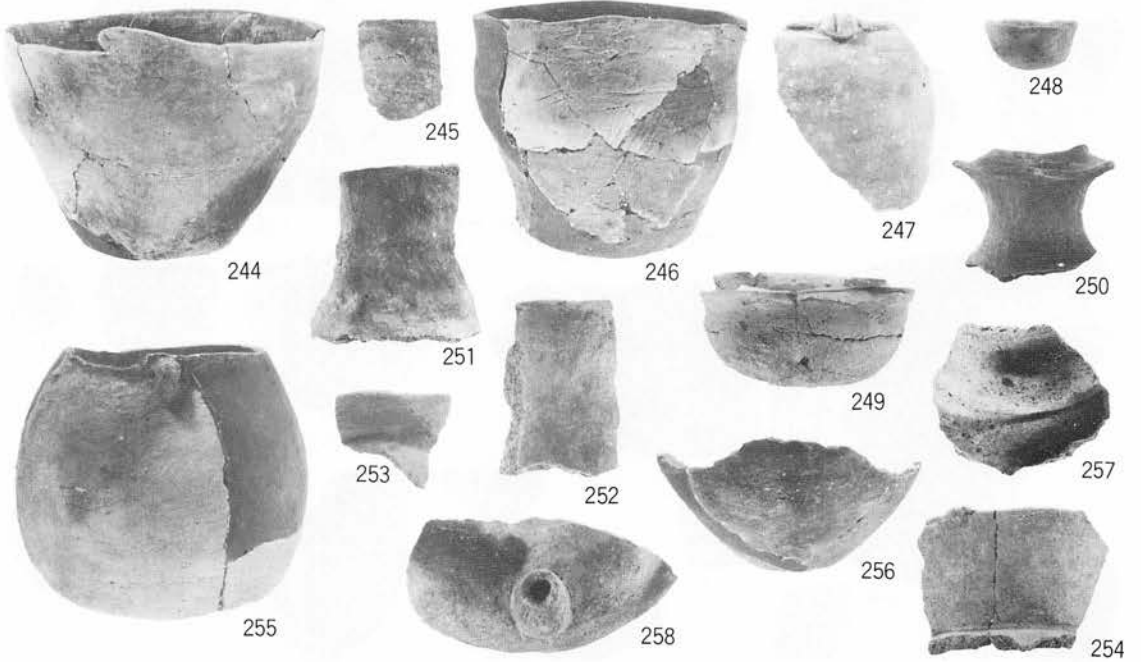


4類



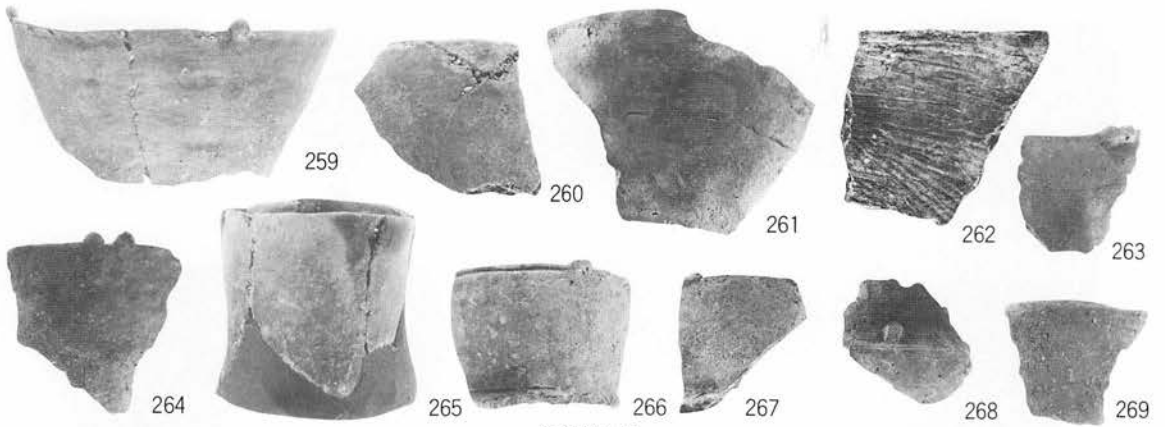
5類

第Ⅶ群土器

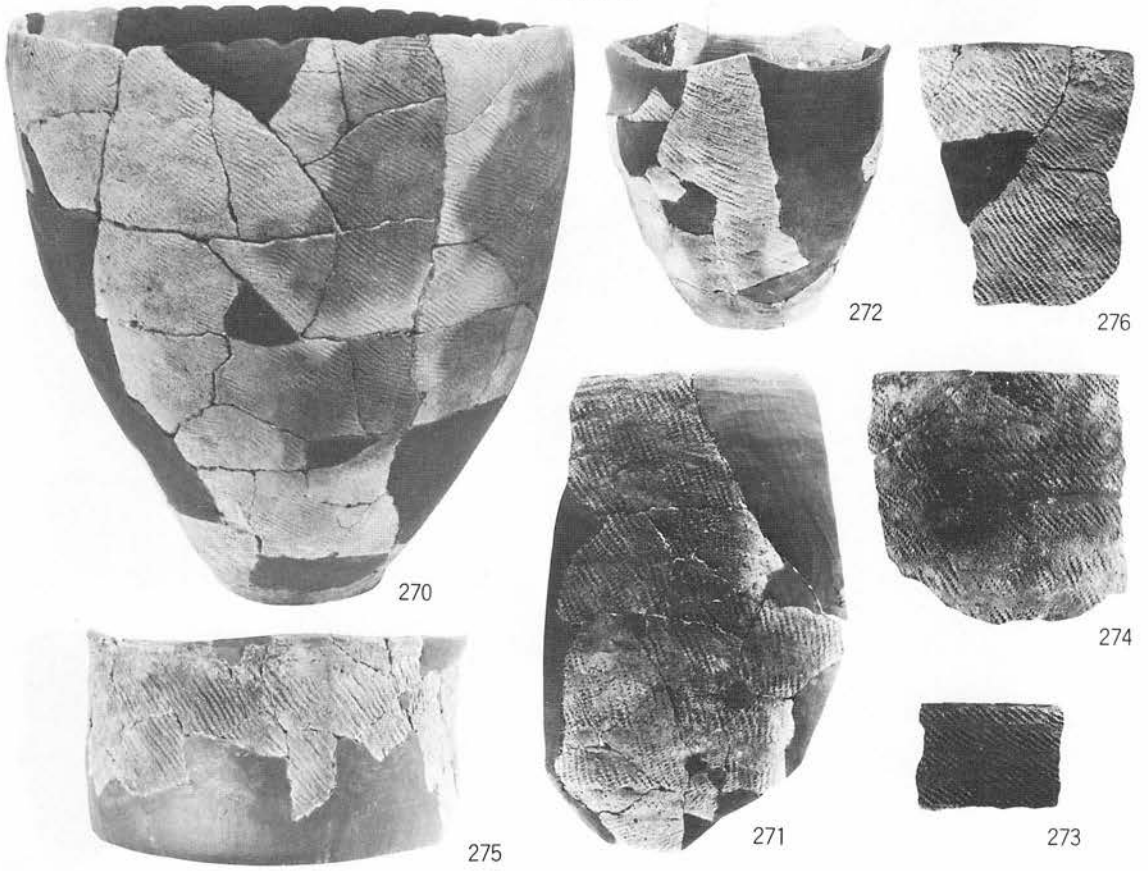


第Ⅷ群土器

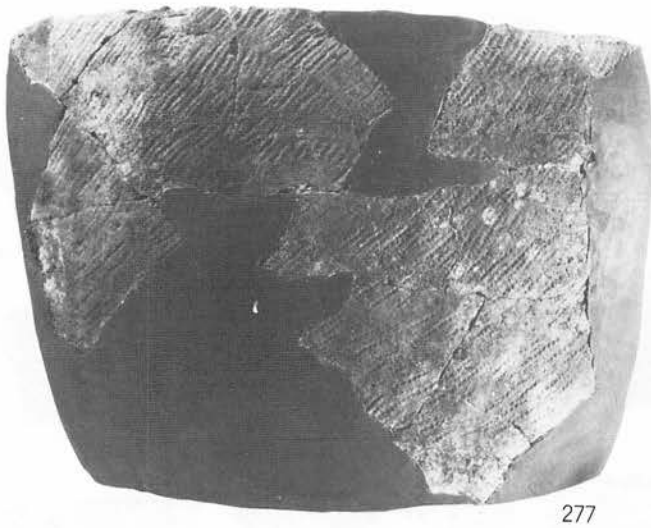
PL-150 遺構外の土器-6



第Ⅷ群土器



PL-151 遺構外の土器-7



277



278



279



280



281



282



283



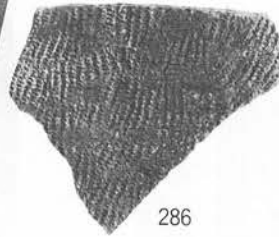
287



284



276



286



289



285



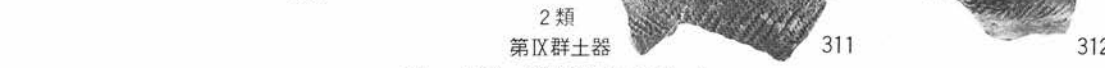
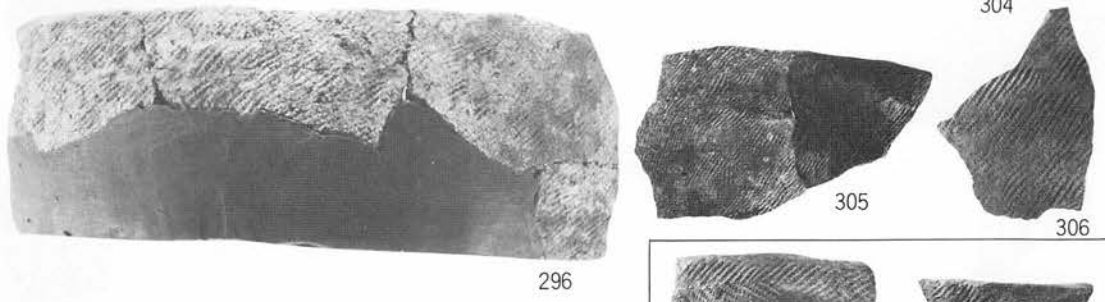
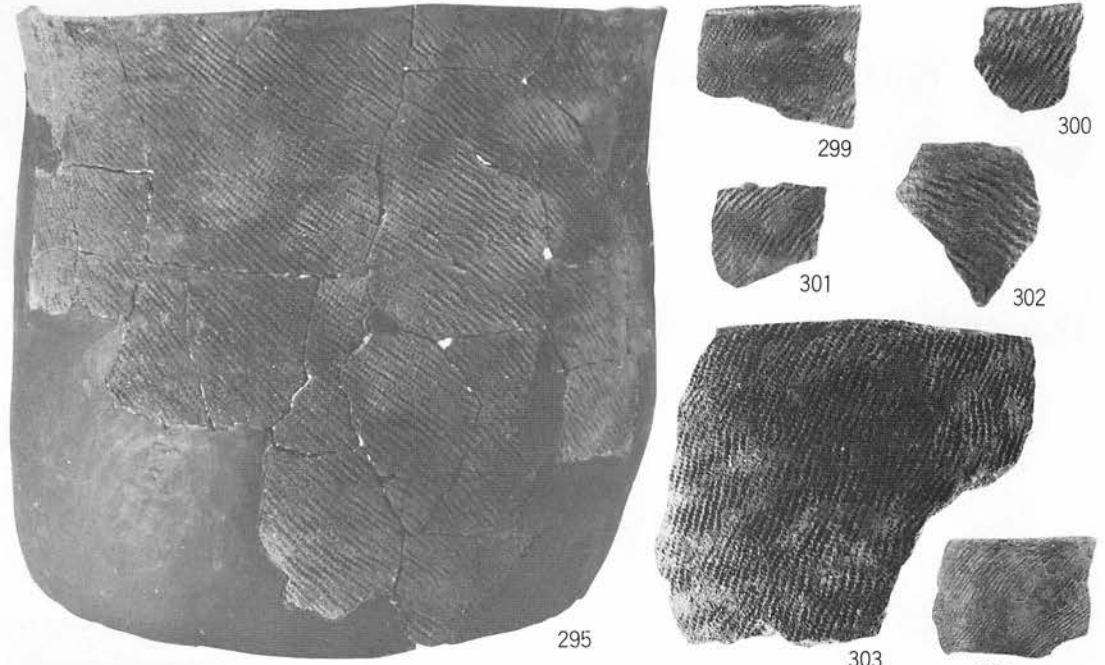
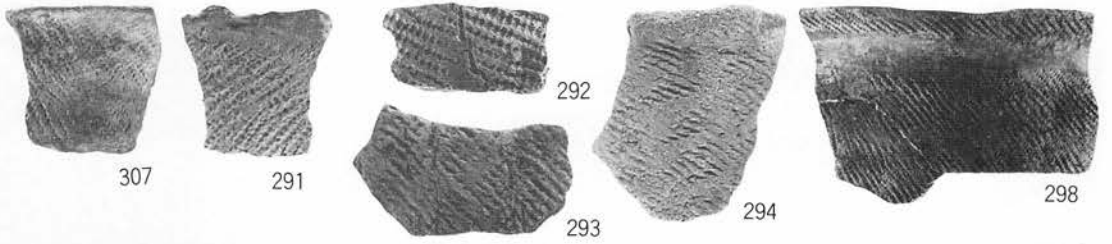
288



307

第Ⅸ群土器 1類

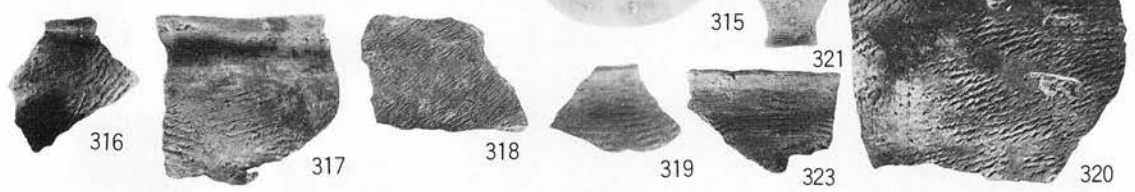
PL-152 遺構外の土器-8



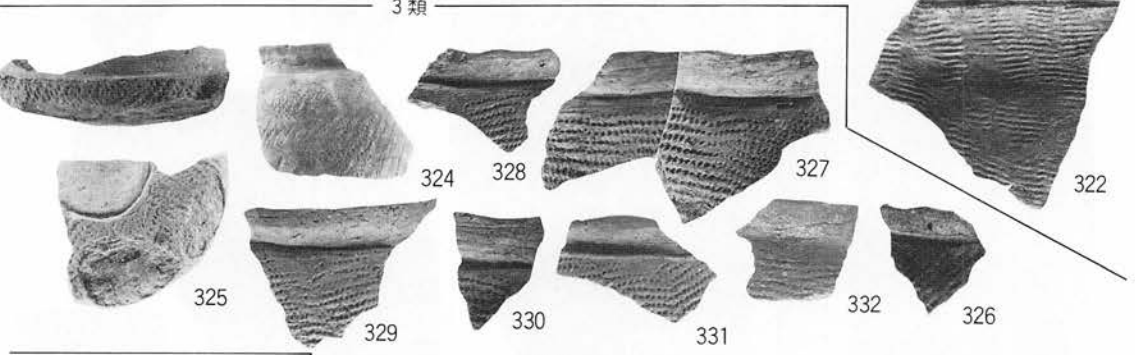
2類
第Ⅸ群土器
PL-153 遺構外の土器-9



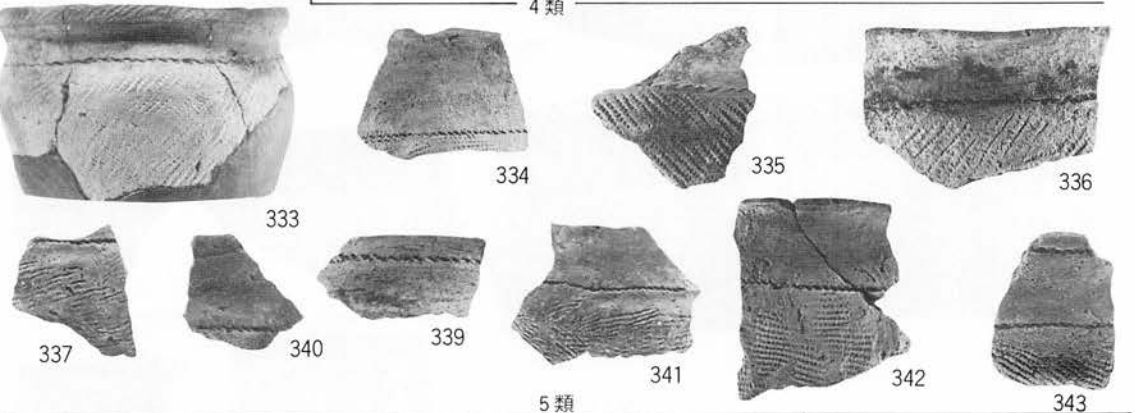
2類



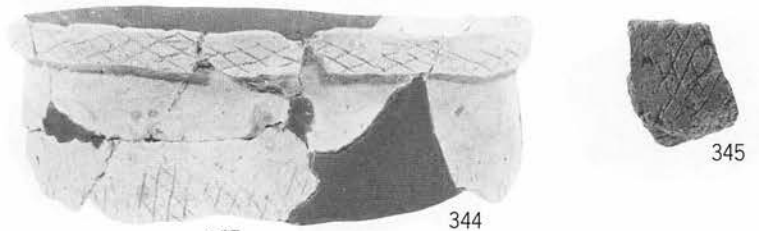
3類



4類



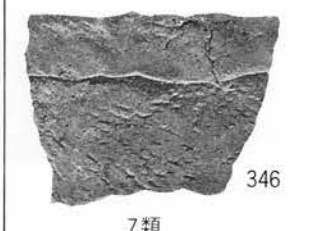
5類



6類

344

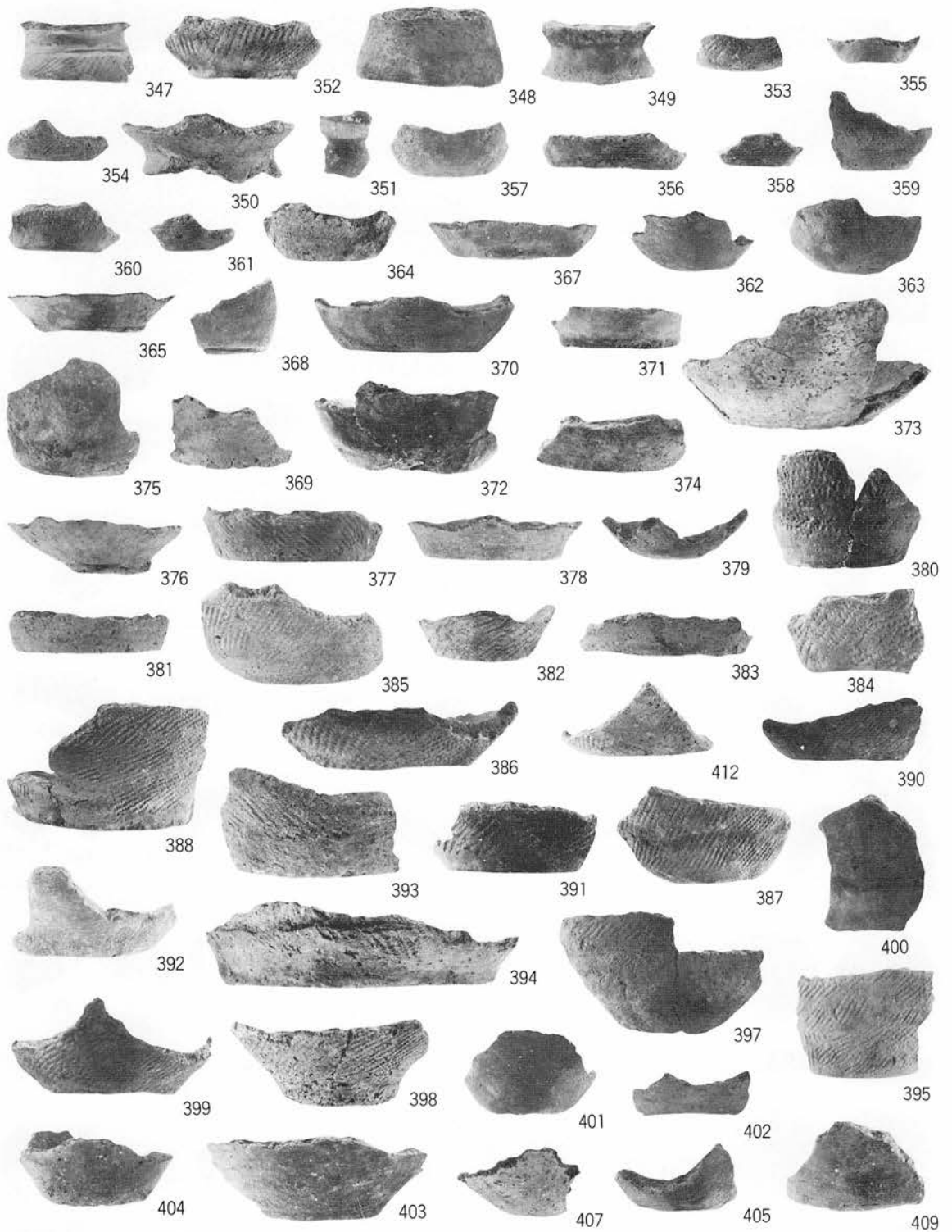
345



7類

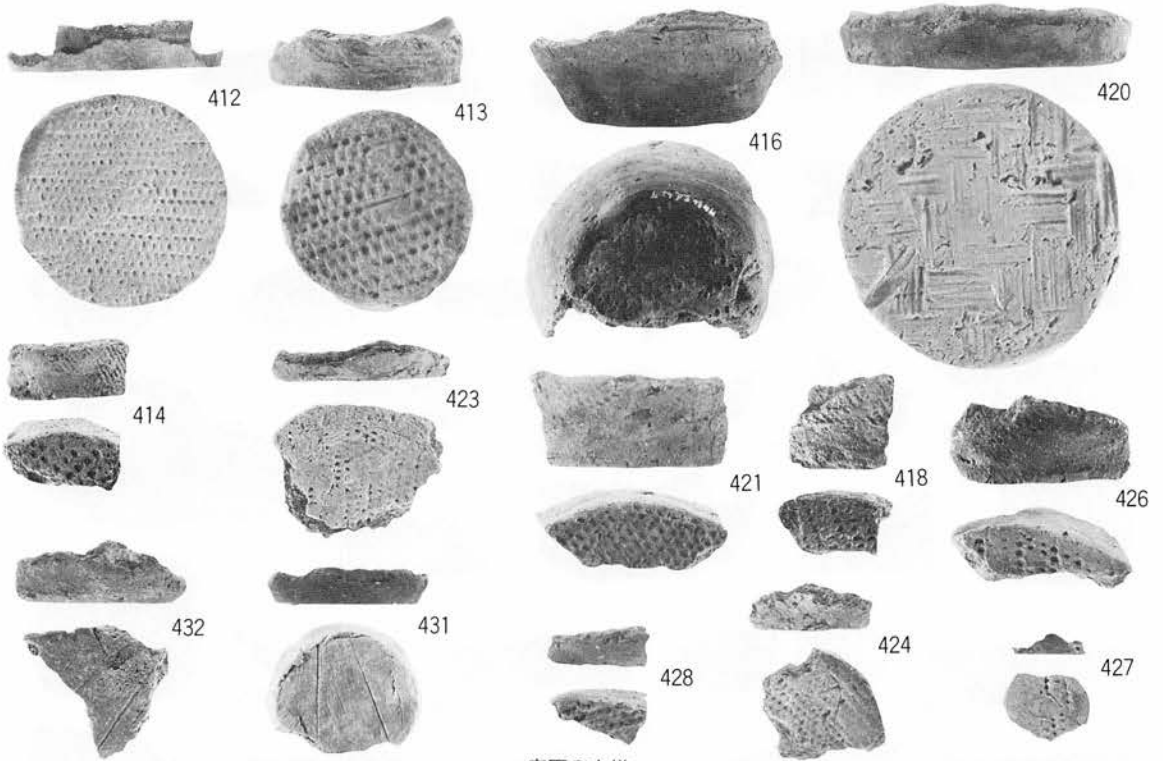
346

第Ⅸ群土器
PL-154 遺構外の土器-10



底部

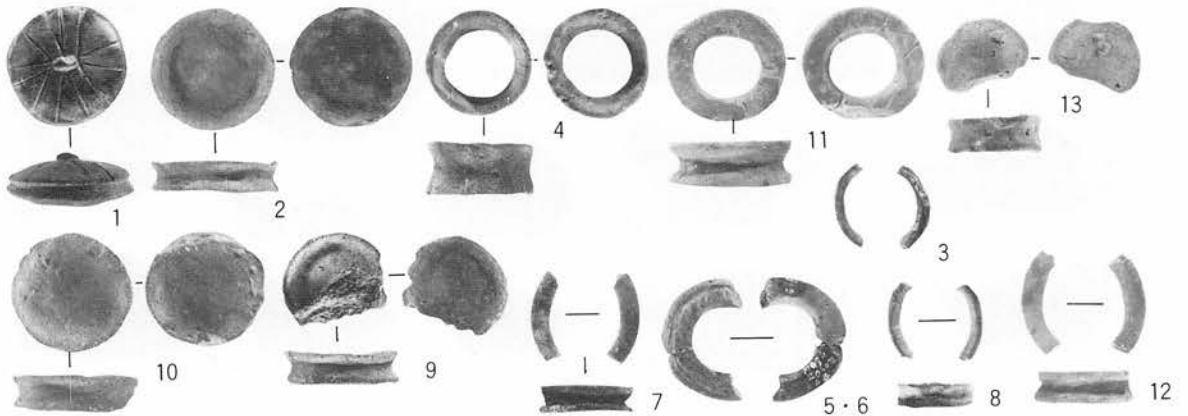
PL-155 遺構外の土器-11



底面の文様

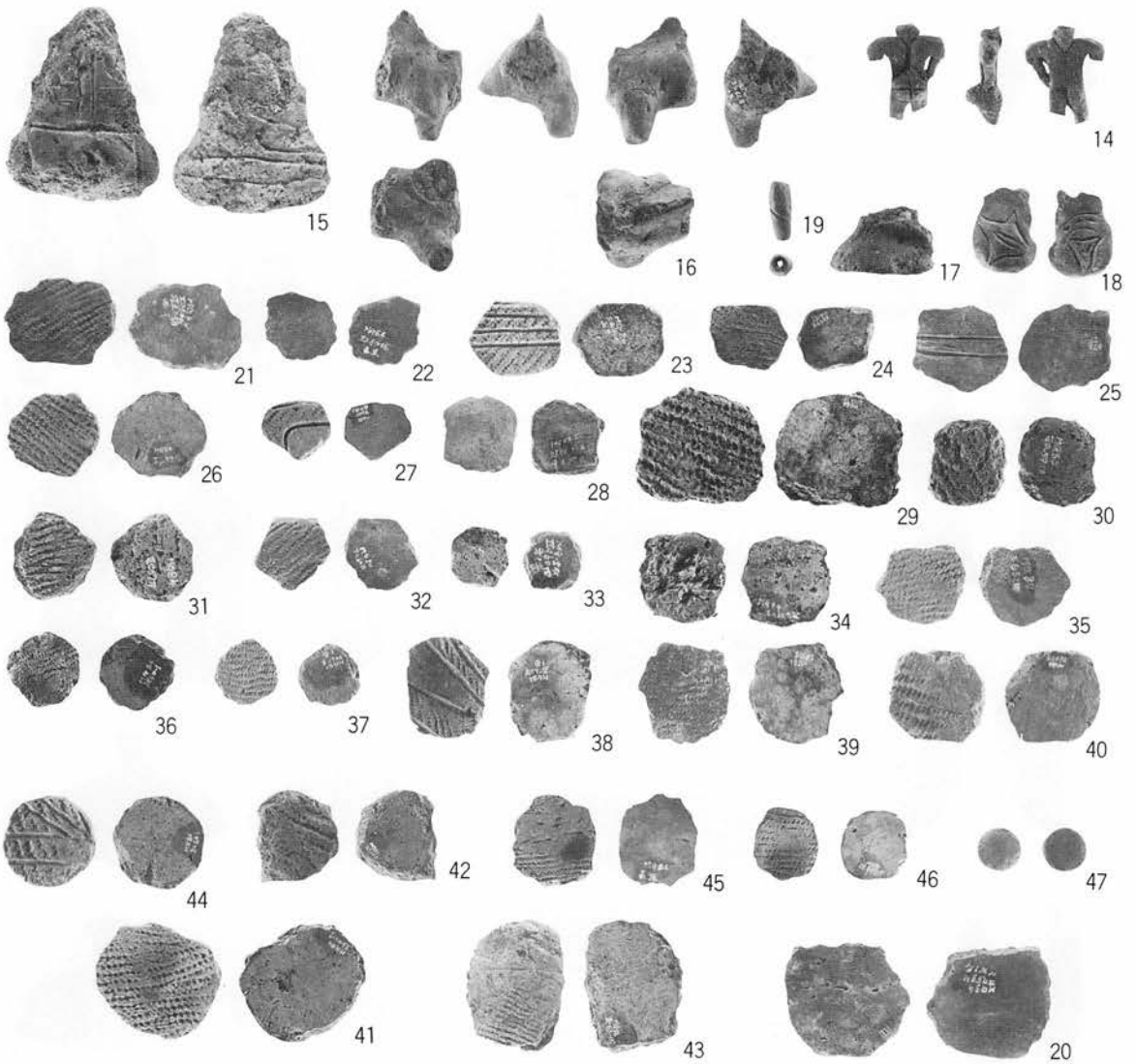


注口部

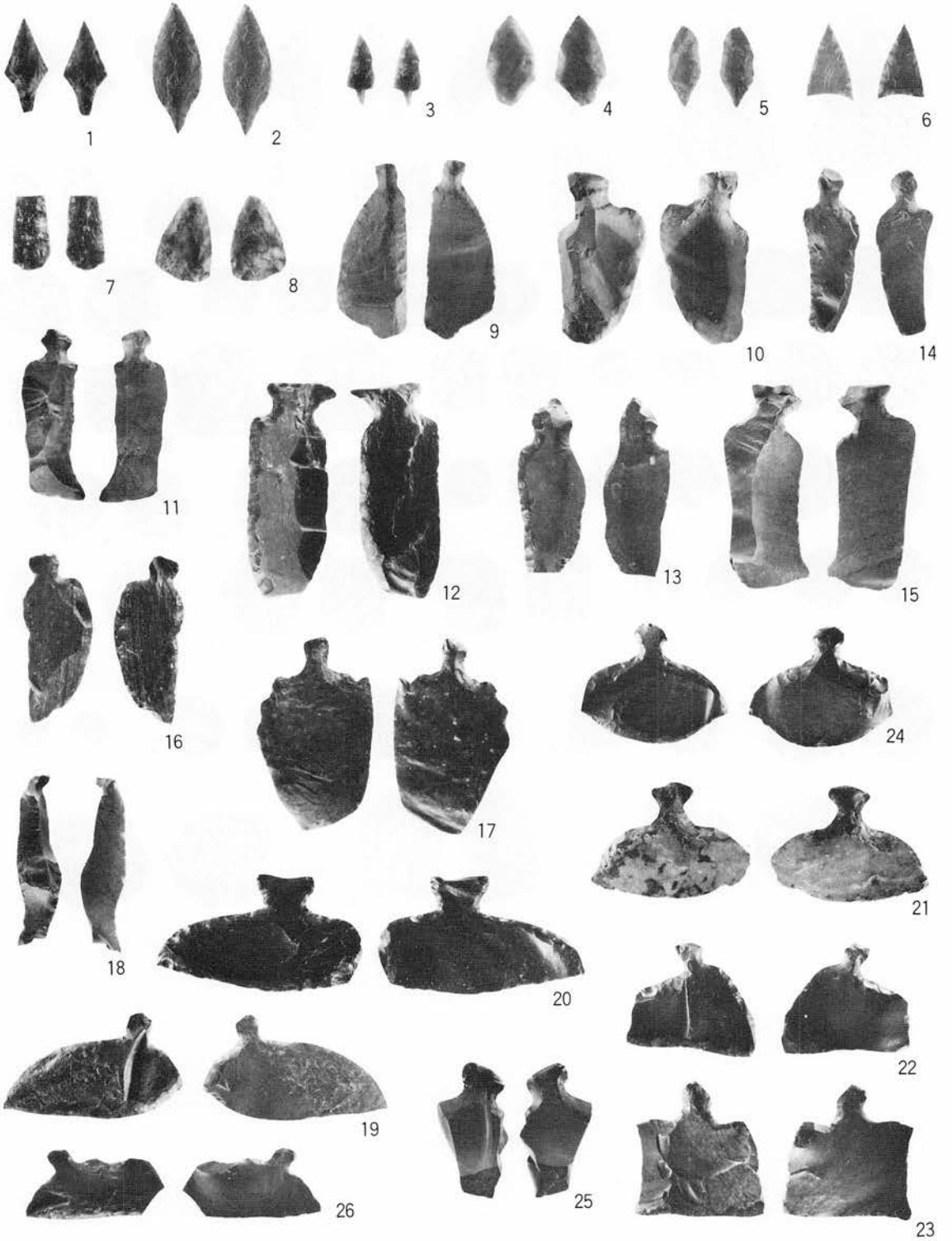


土製品(1)

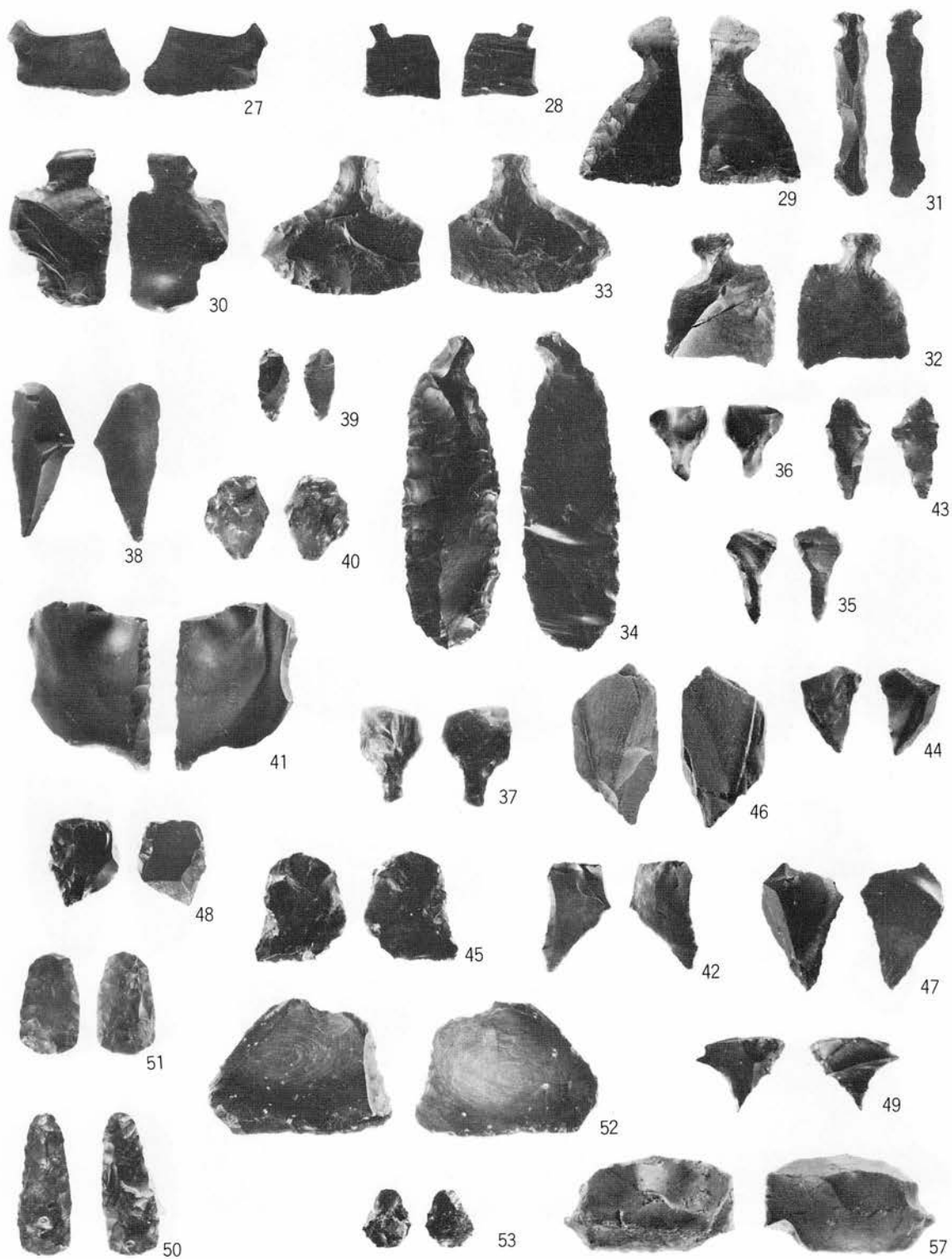
PL-156 遺構外の土器-12



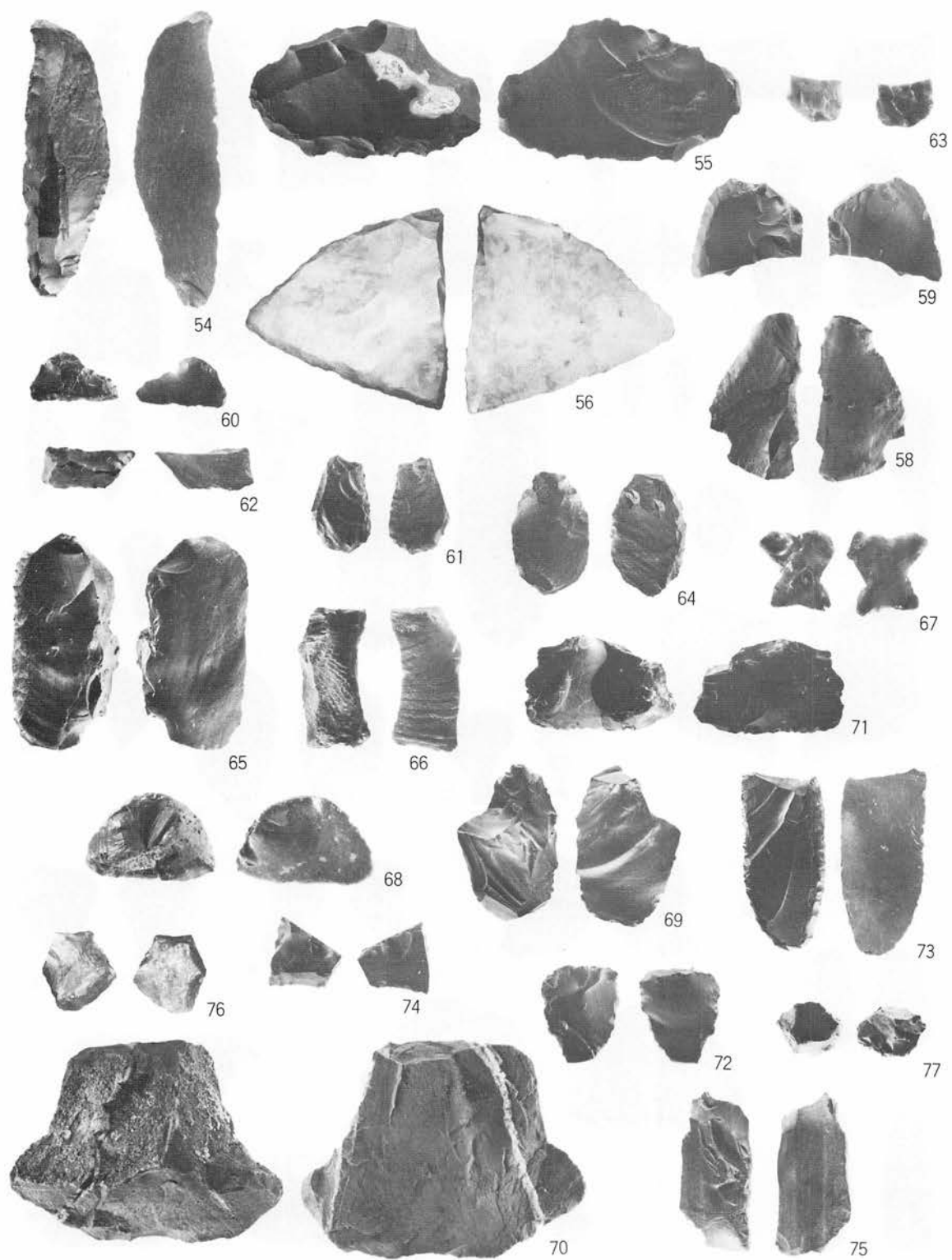
土製品(2)



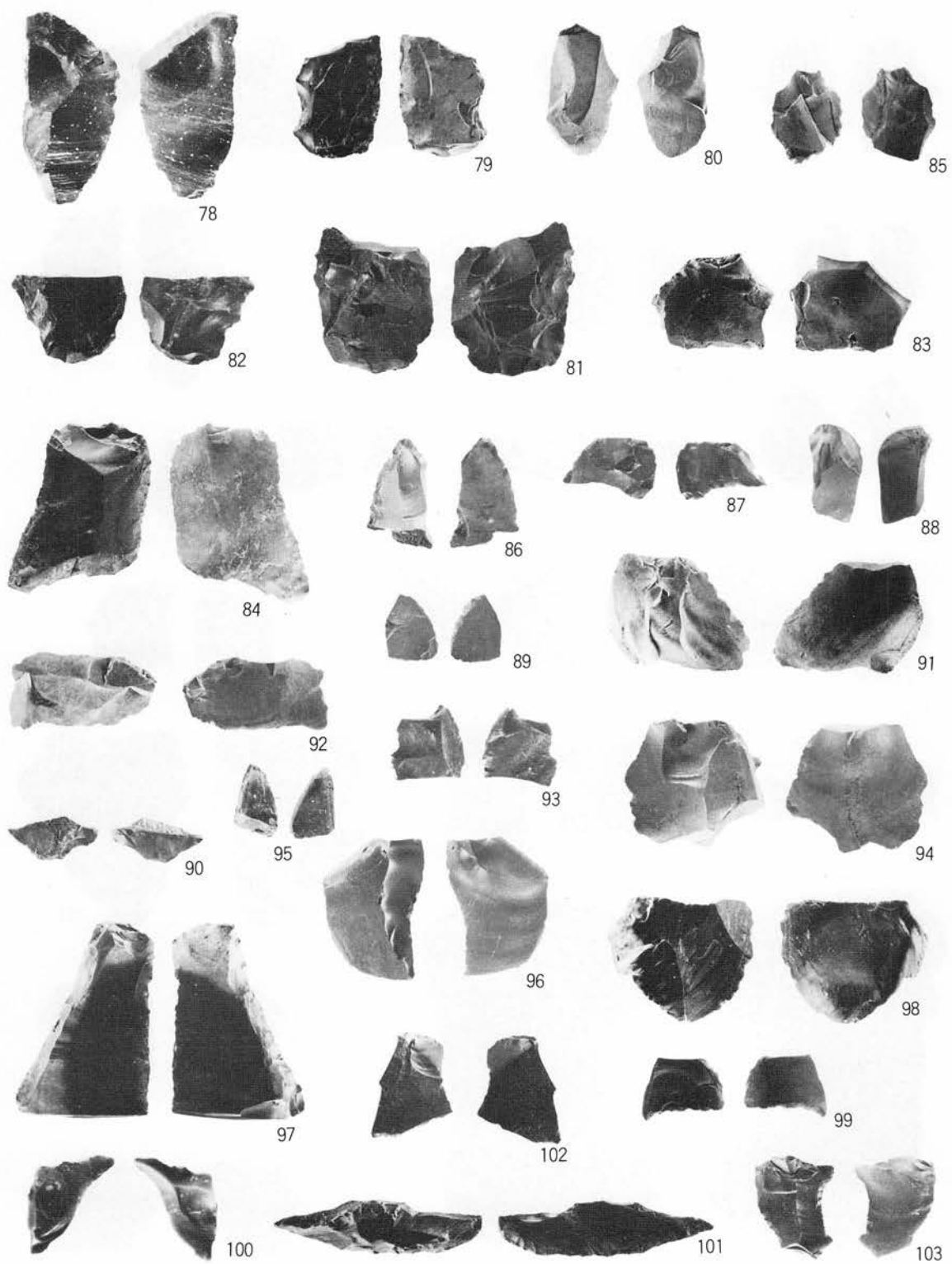
PL-158 石器-1(石鏃・石匙)



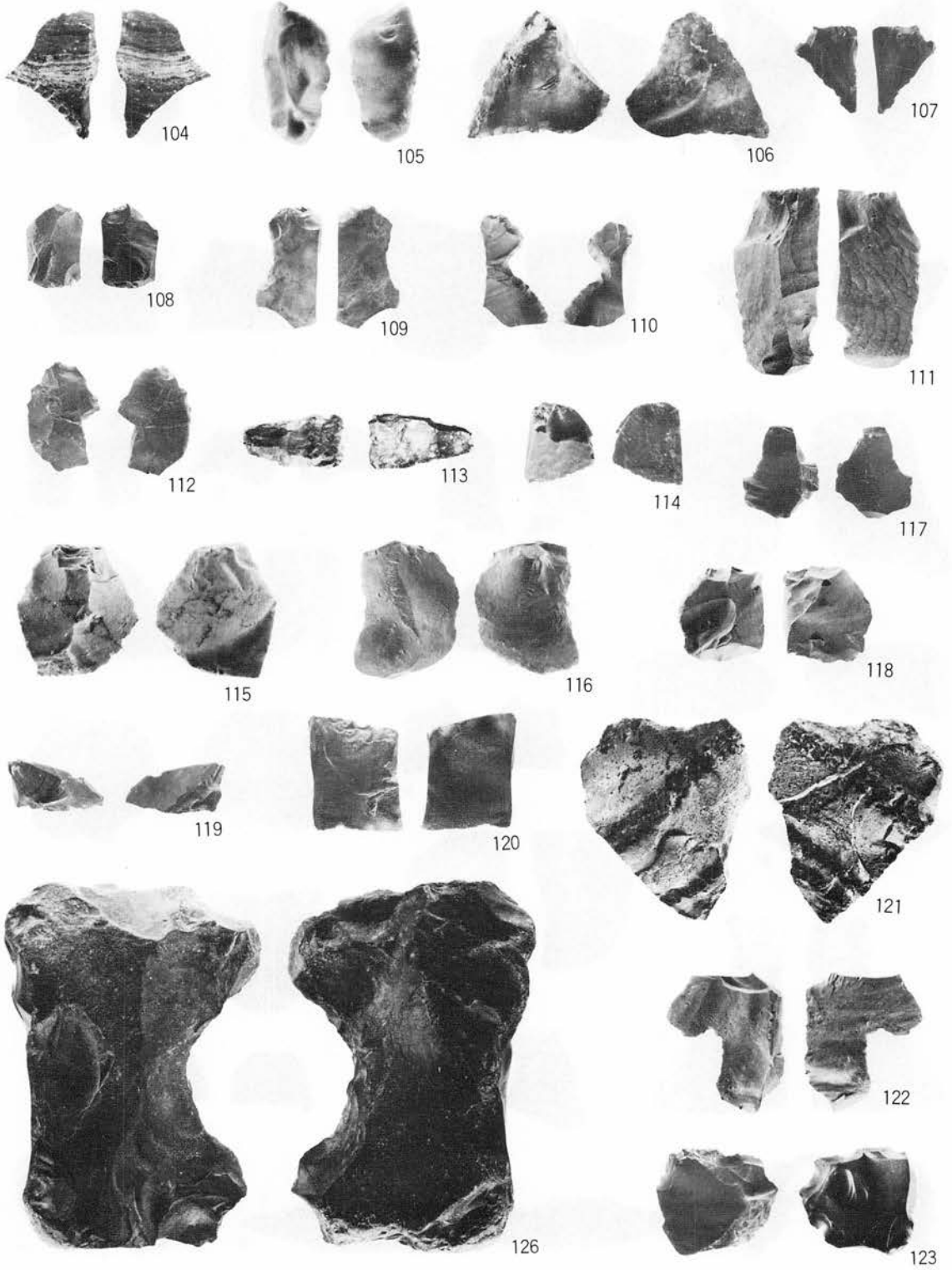
PL-159 石器-2(石匙・石錐・石篋・尖頭器)



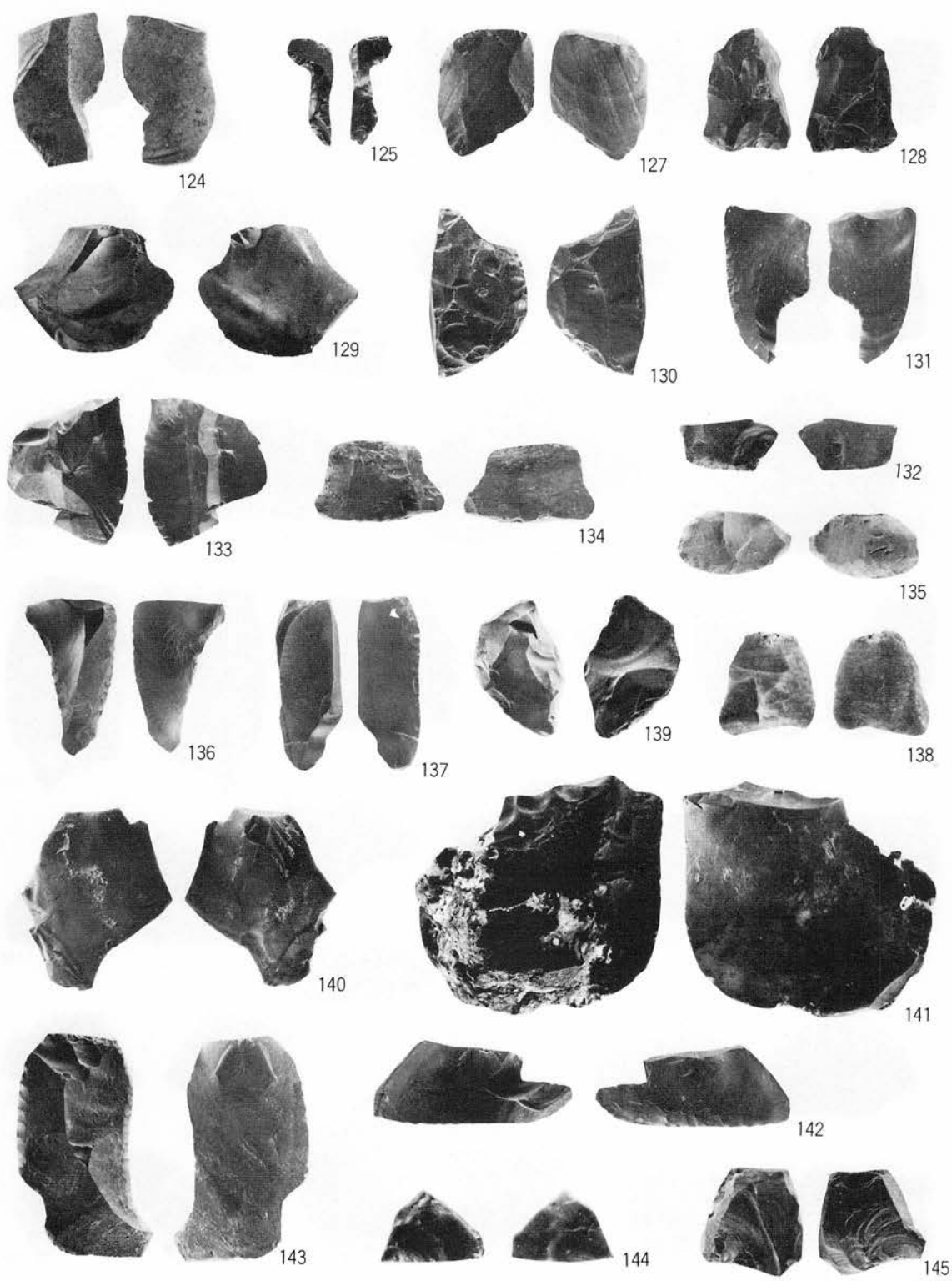
PL-160 石器-3 (搔器)



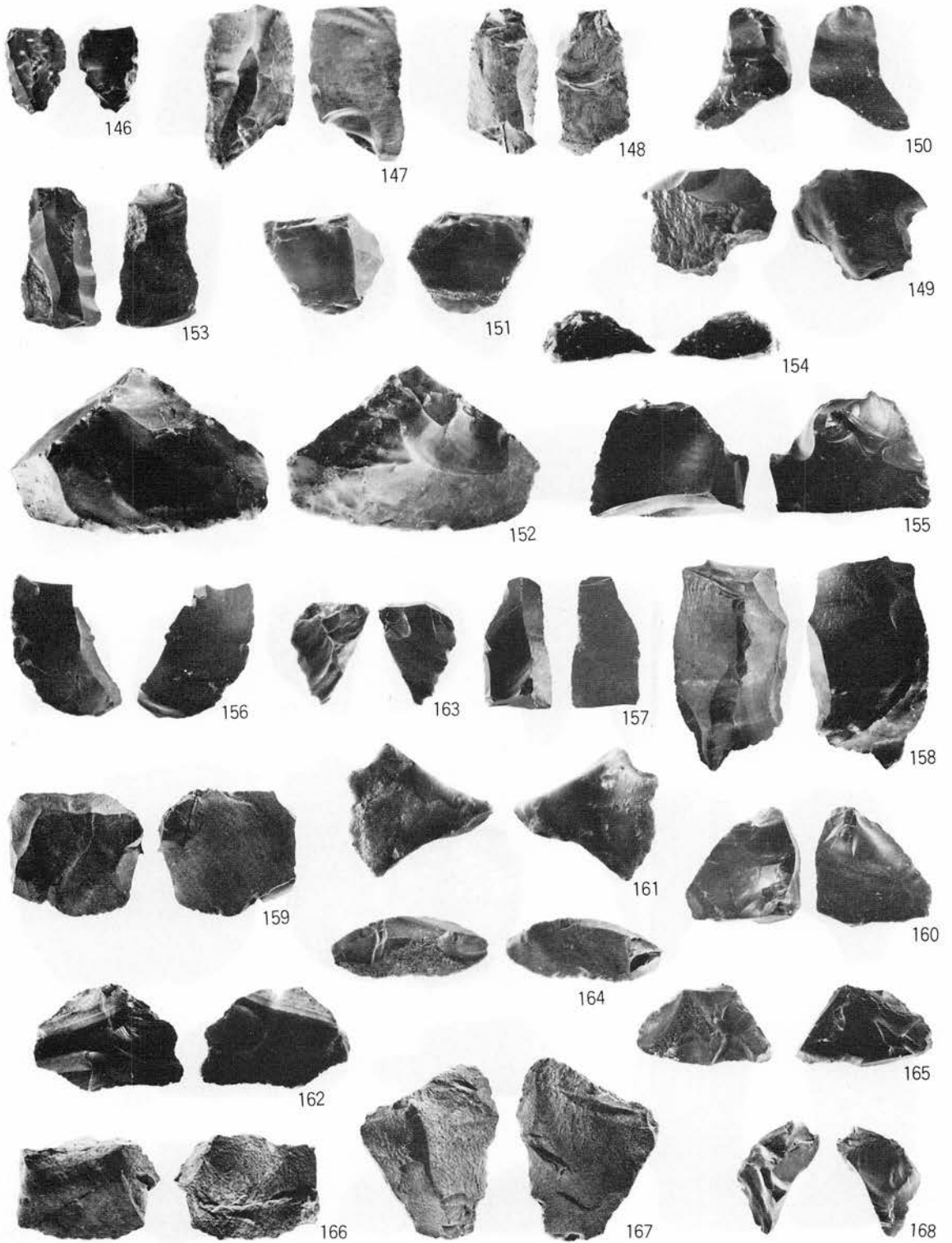
PL-161 石器-4 (搔器・削器)



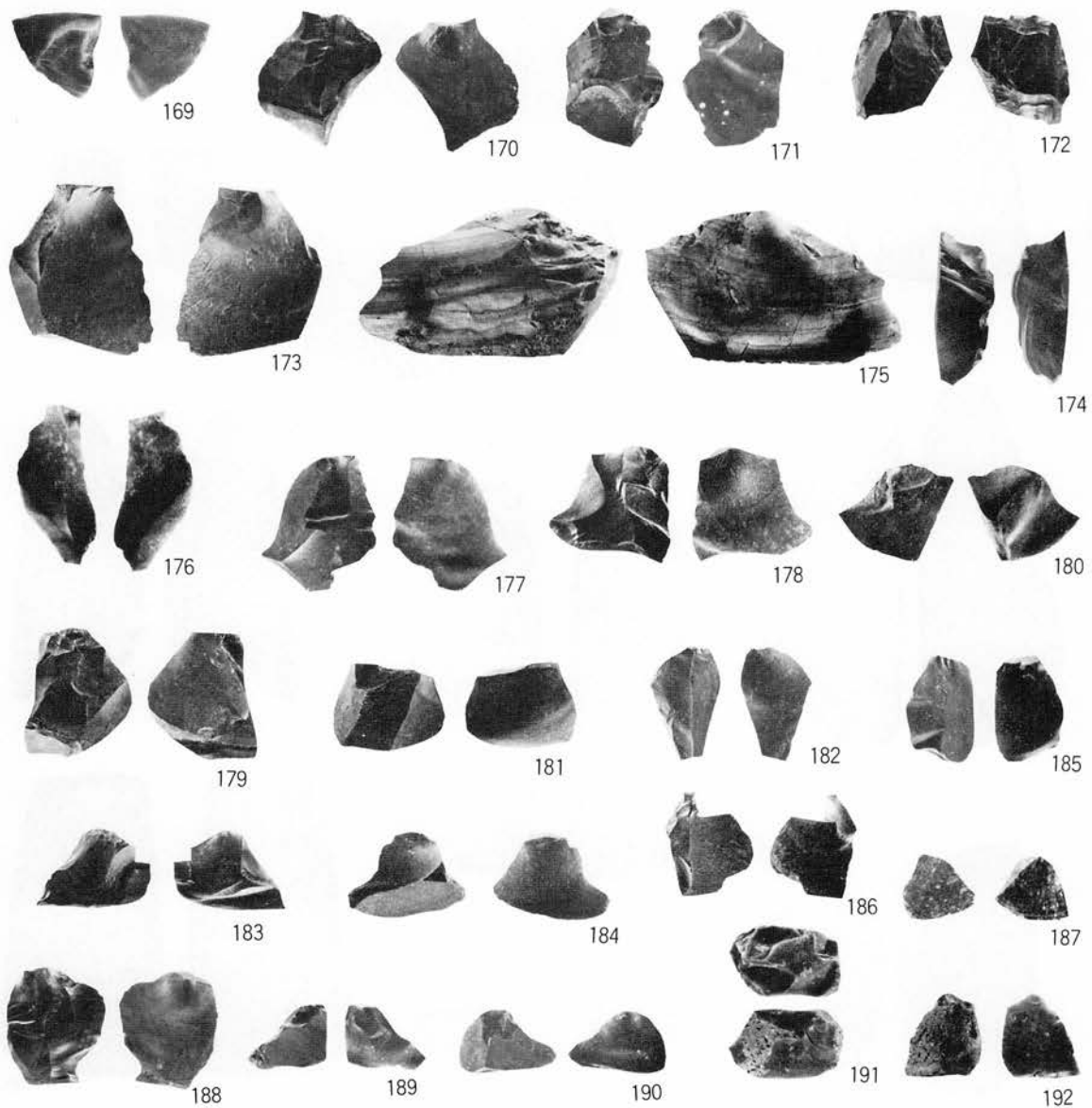
PL-162 石器-5 (削器)



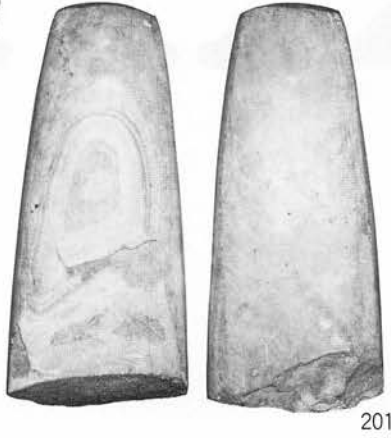
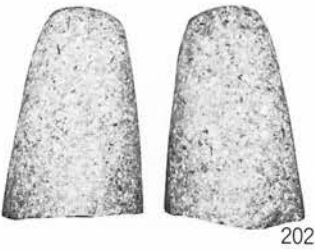
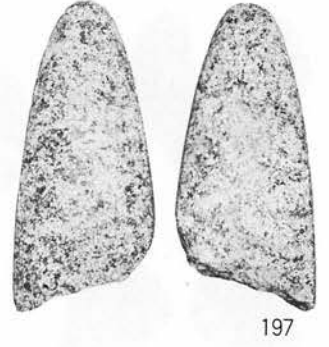
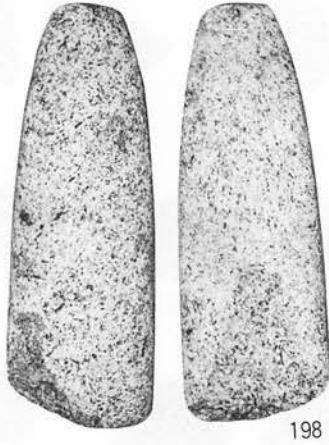
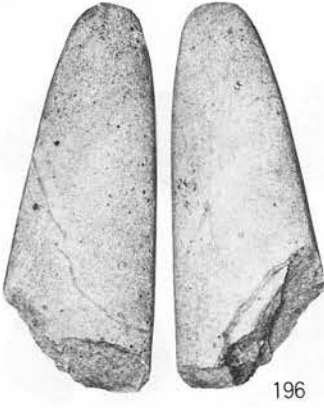
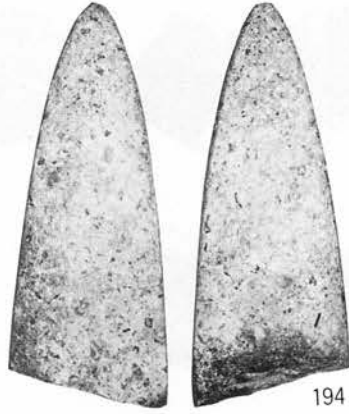
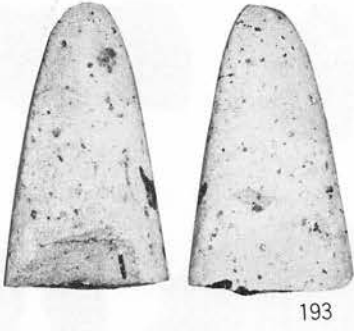
PL-163 石器-6 (切削器)



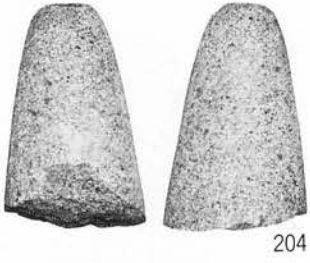
PL-164 石器-7 (切削器・使用痕のある剥片)



PL-165 石器-8 (使用痕のある剥片・接合剥片)



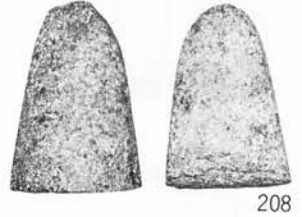
PL-166 石器-9 (磨製石斧)



204



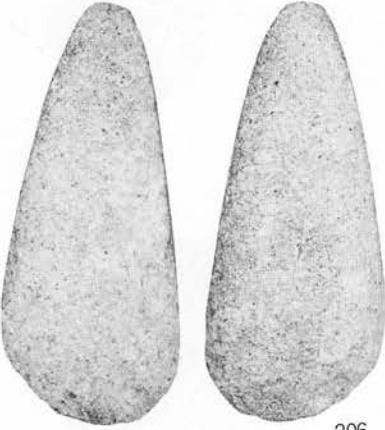
205



208



211



206



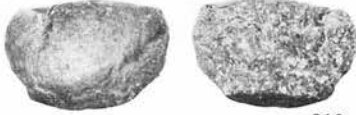
215



212



207



210



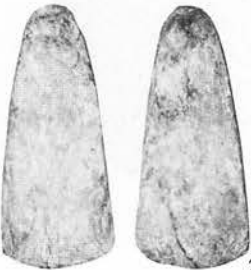
213



209



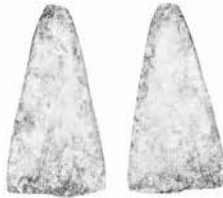
217



214



216



218

PL-167 石器-10(磨製石斧)



219



220



221



223



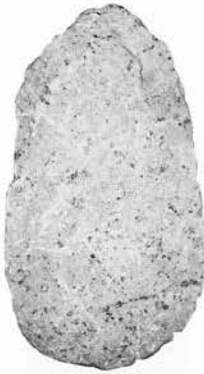
224



222



225



226



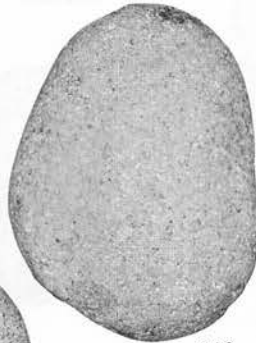
227



231



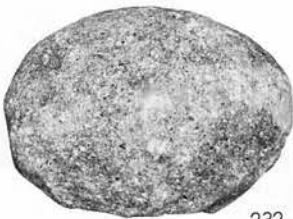
229



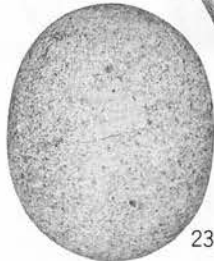
230



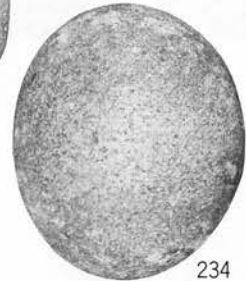
228



232

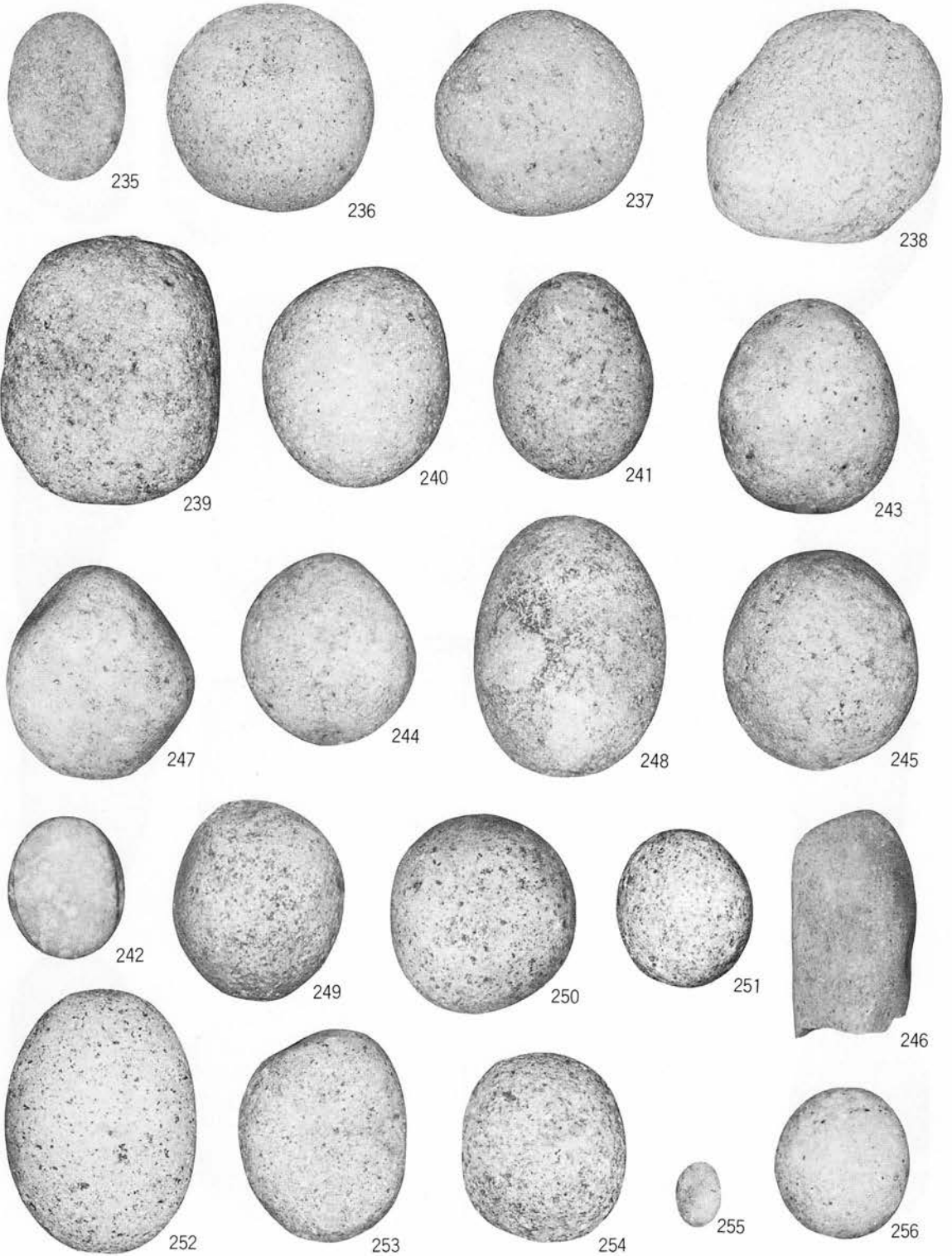


233

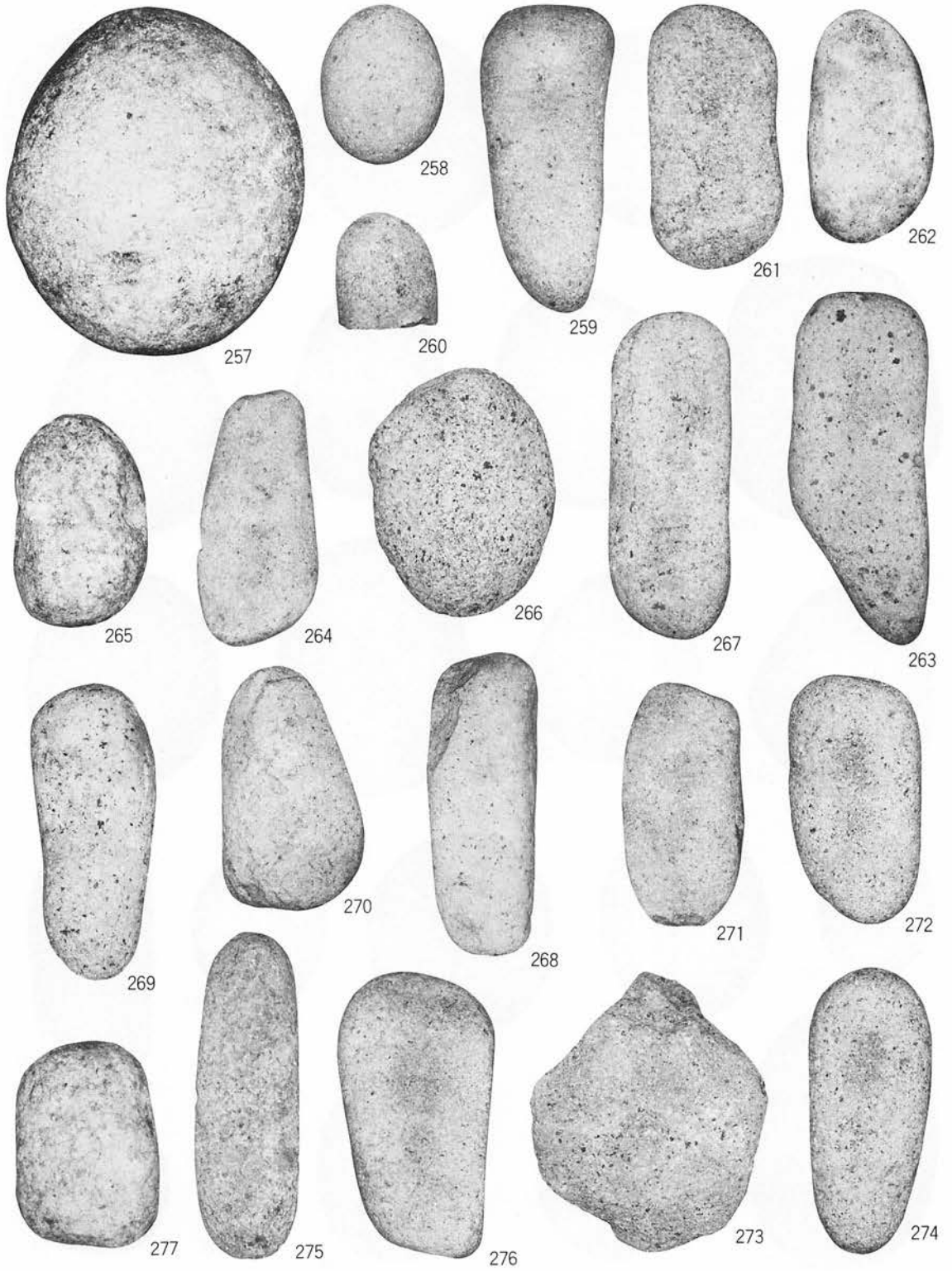


234

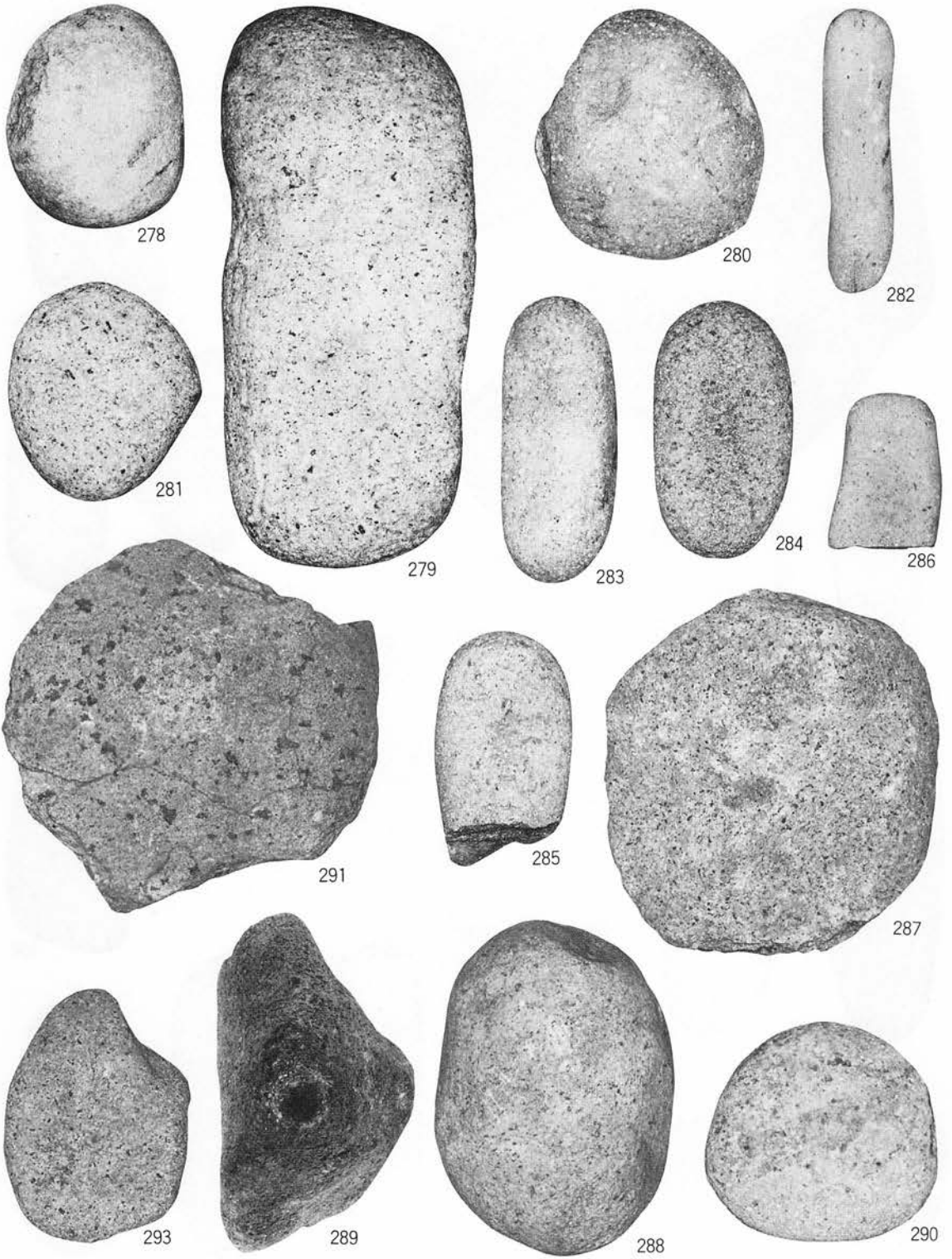
PL-168 石器-11(磨製石斧・打製石斧・磨石)



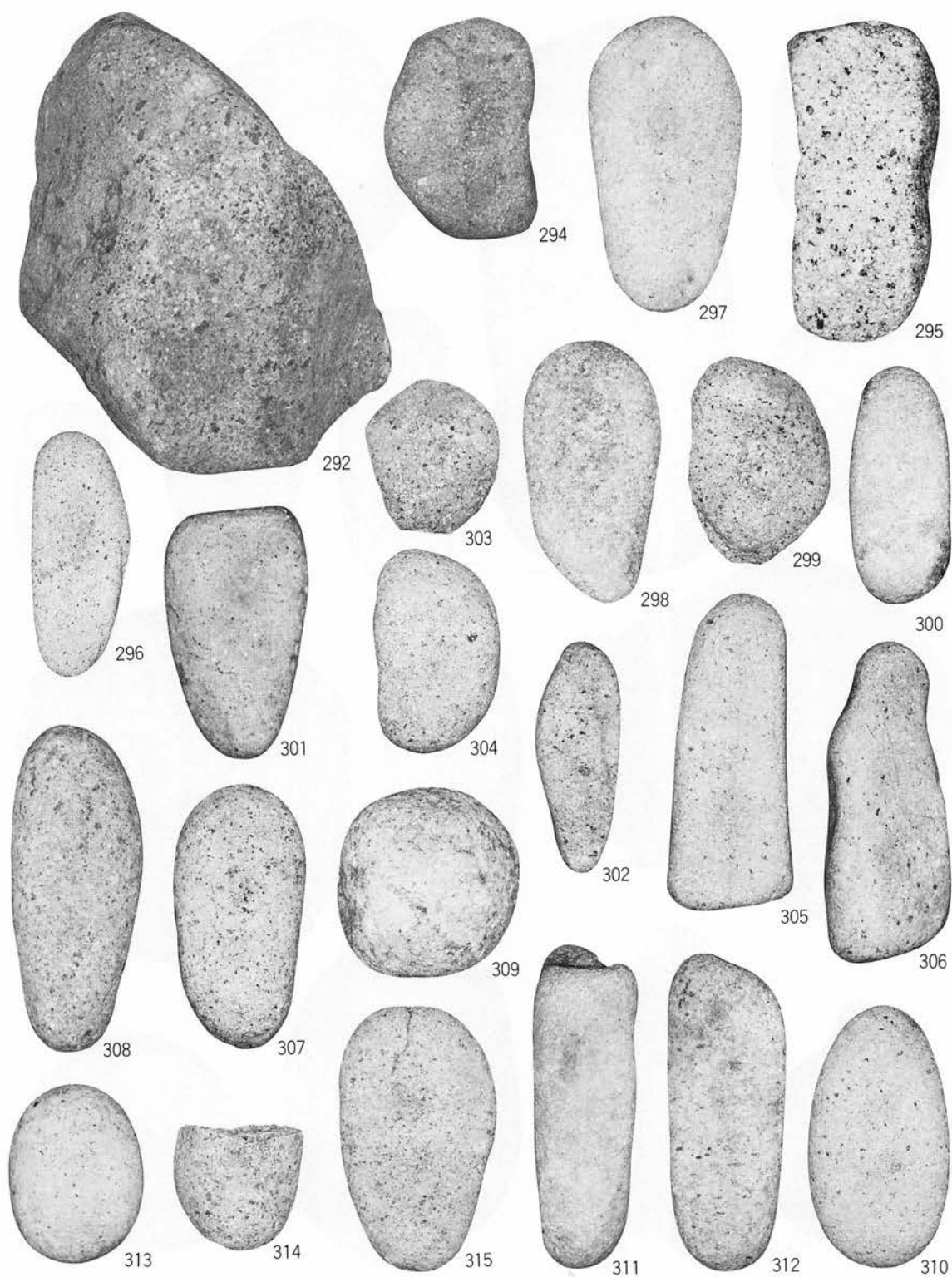
PL-169 石器-12(磨石)



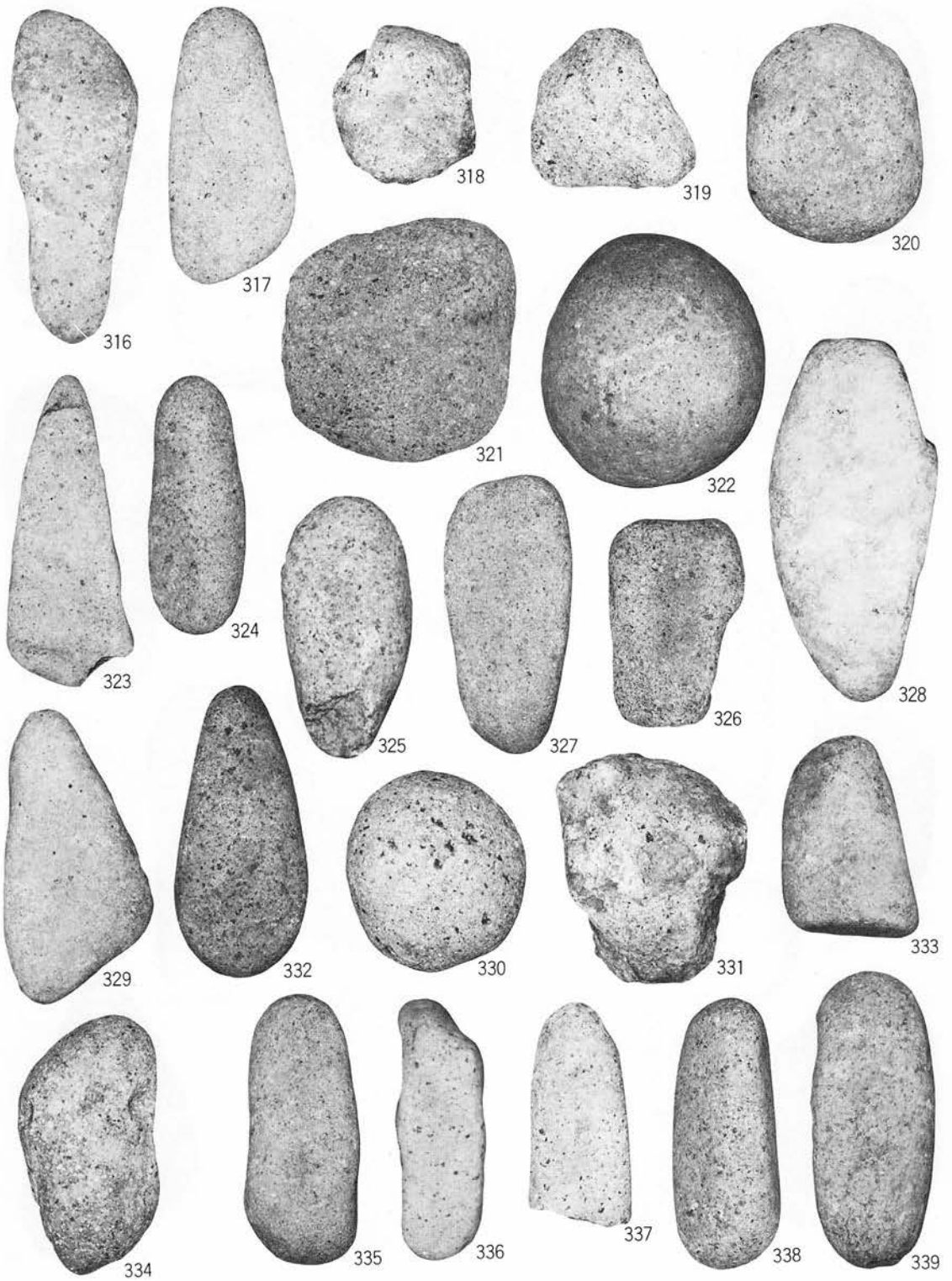
PL-170 石器-13(凹み石)



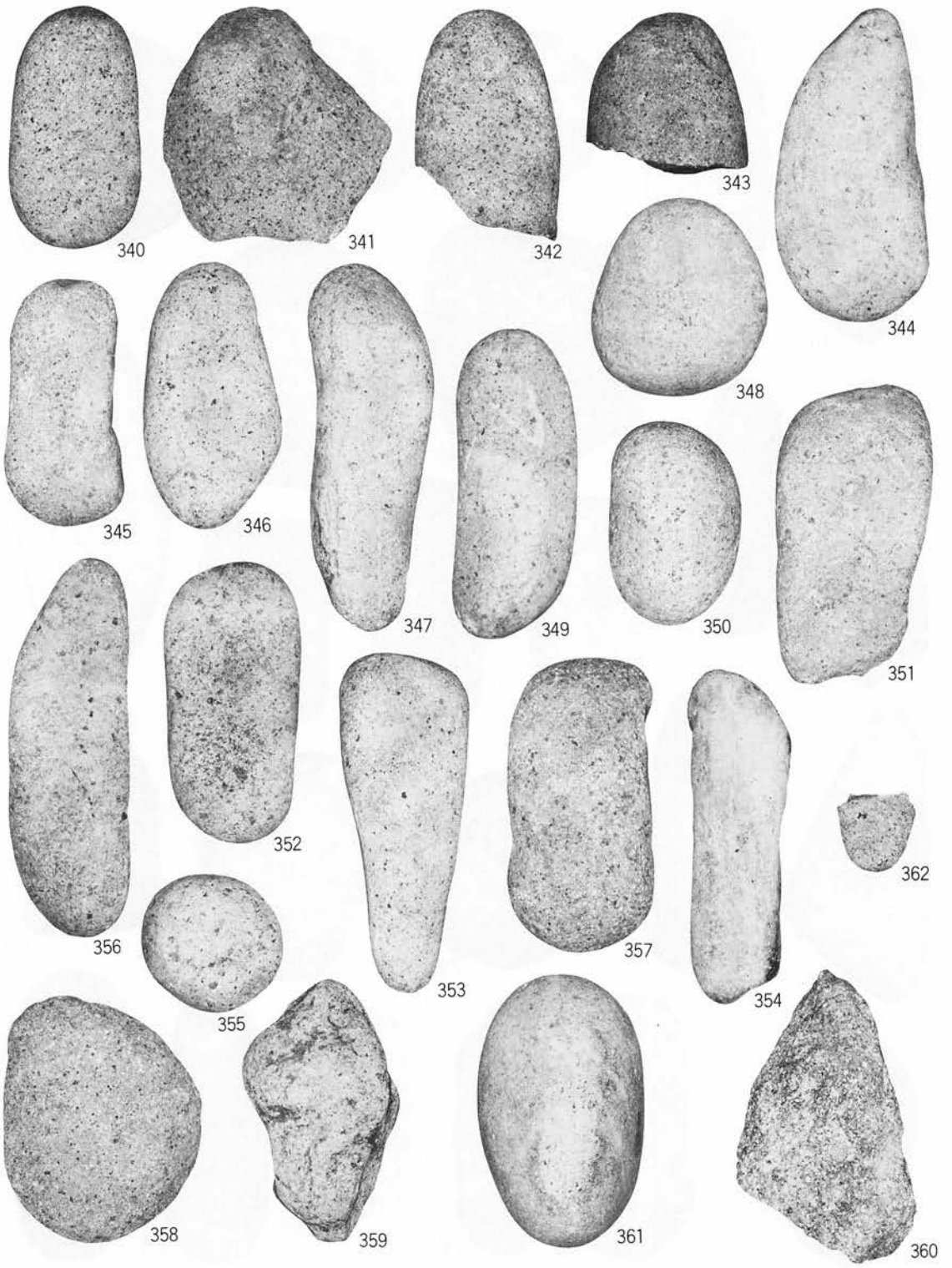
PL-171 石器-14(凹み石)



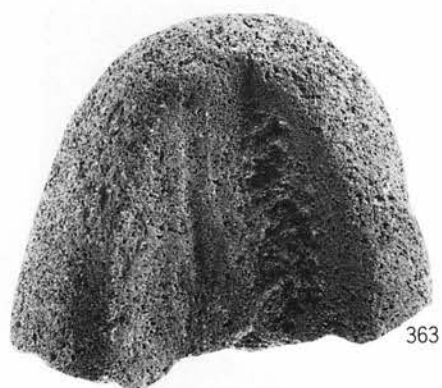
PL-172 石器-15(凹み石)



PL-173 石器-16(凹み石)



PL-174 石器-17(凹み石)



363



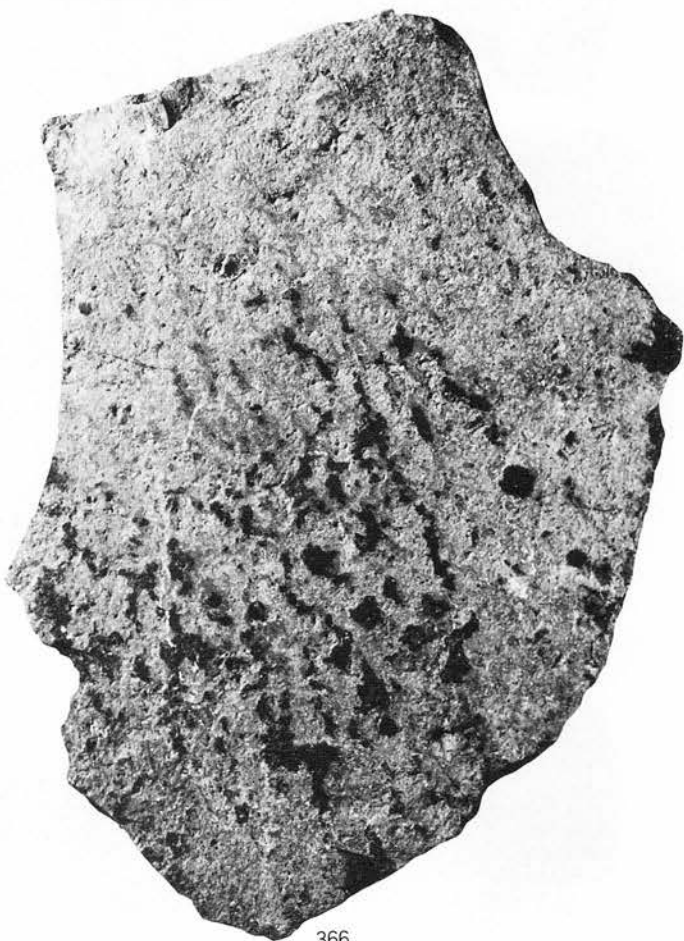
364



365

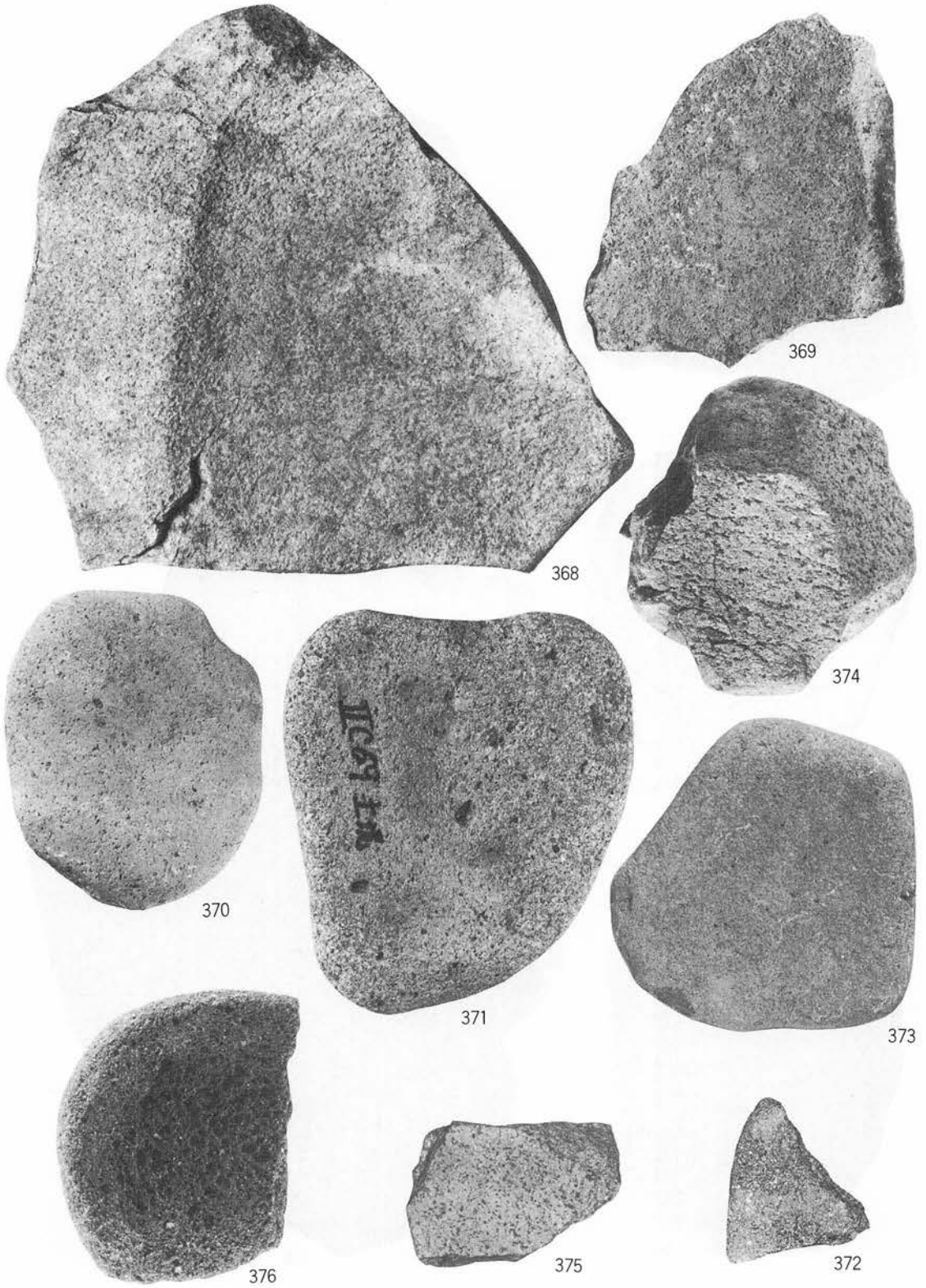


367

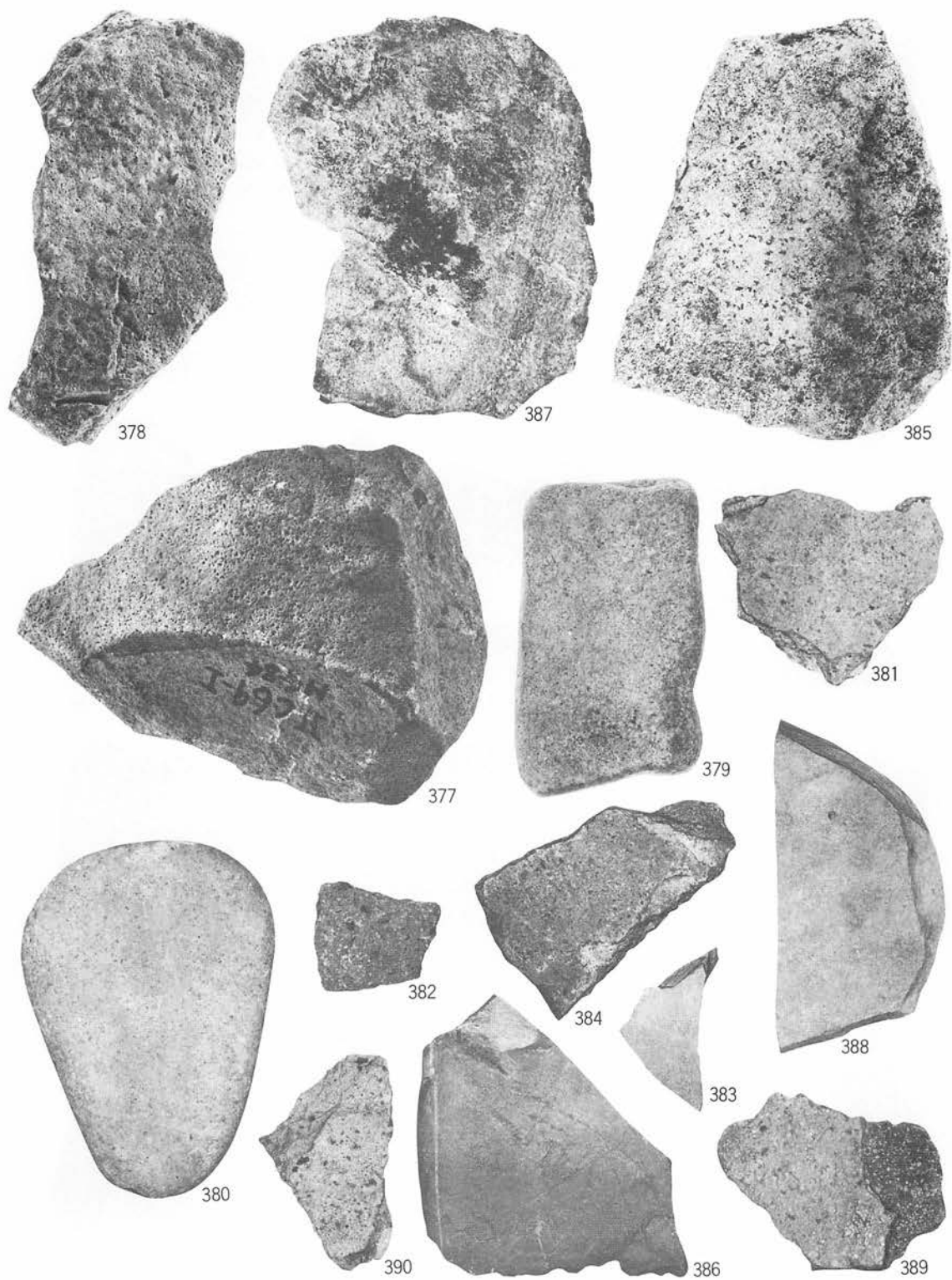


366

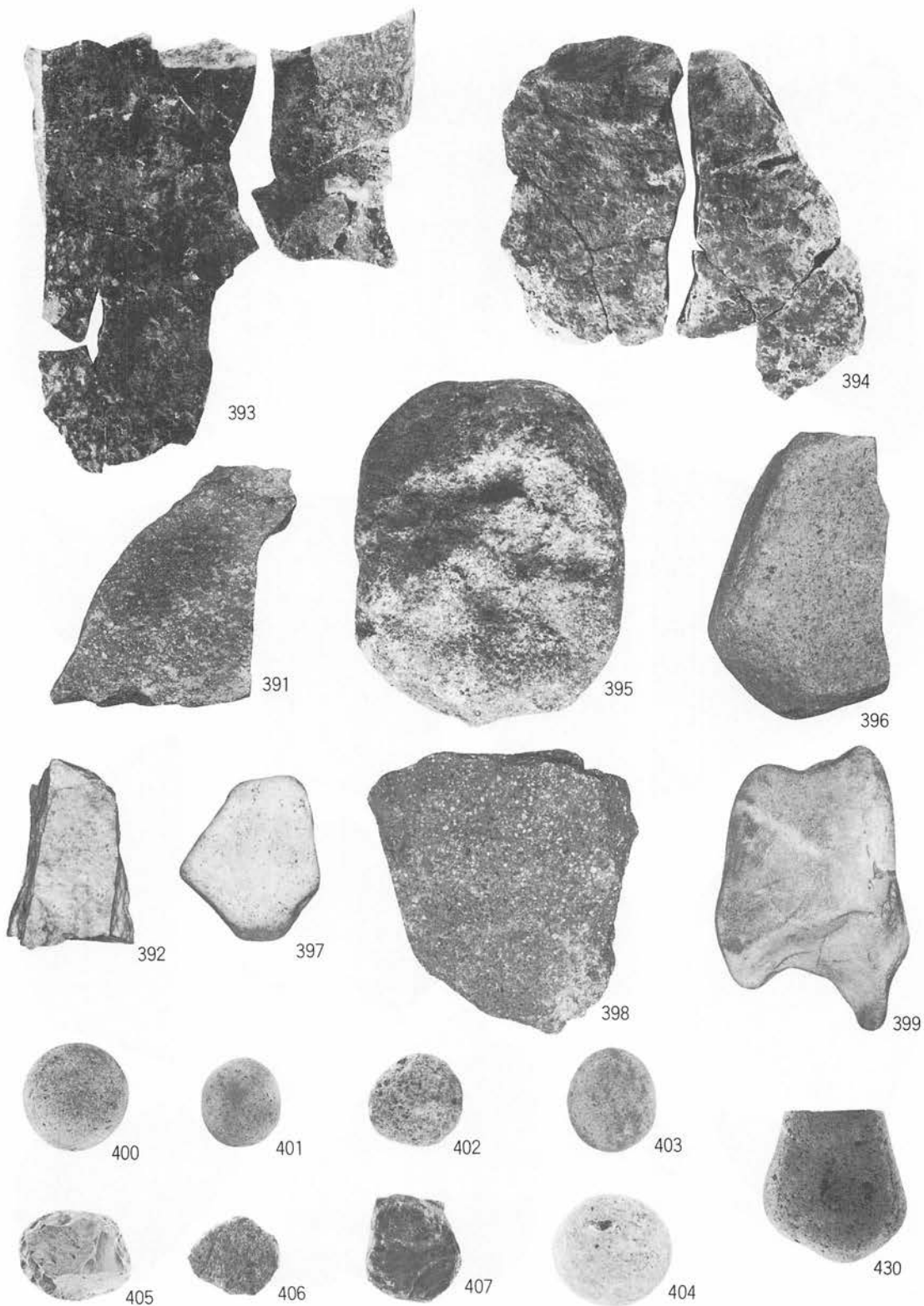
PL-175 石器-18(石皿)



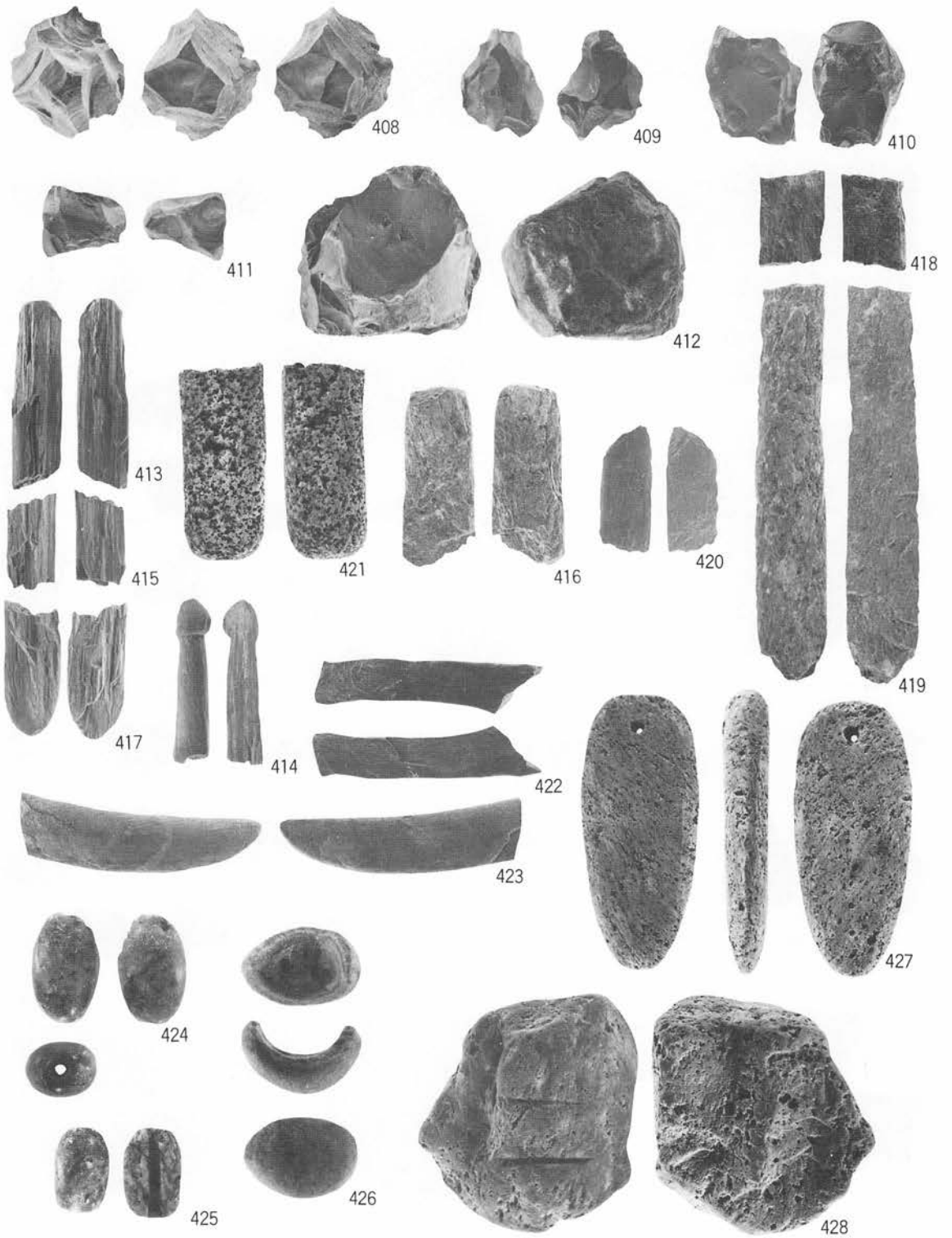
PL-176 石器-19(石皿)



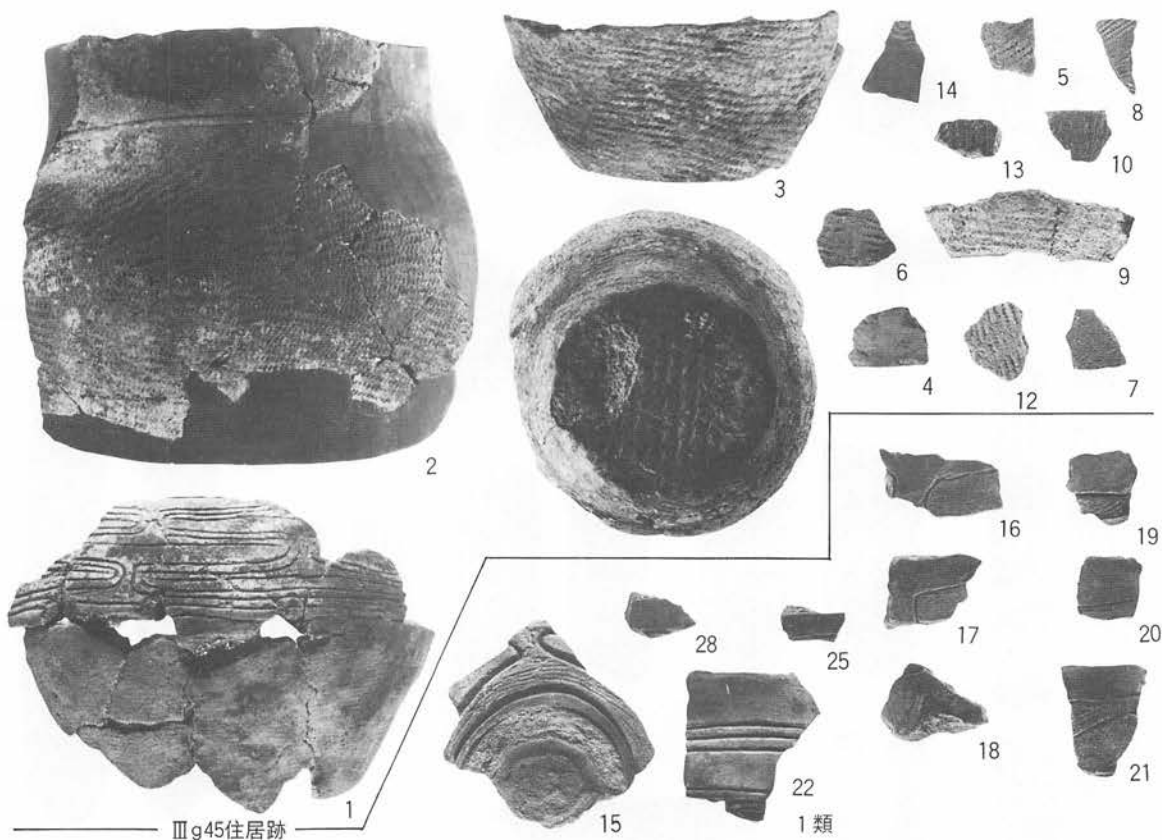
PL-177 石器-20(石皿)



PL-178 石器-21(その他)

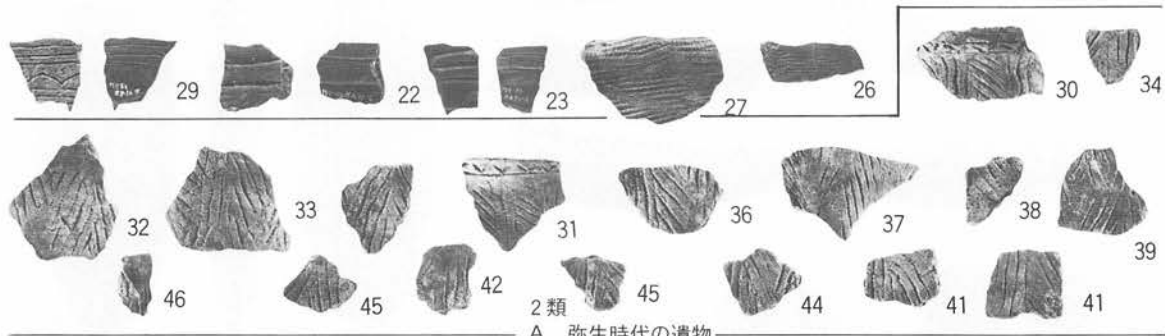


PL-179 石器-22(石核・石製品-1)



III g45住居跡

1類



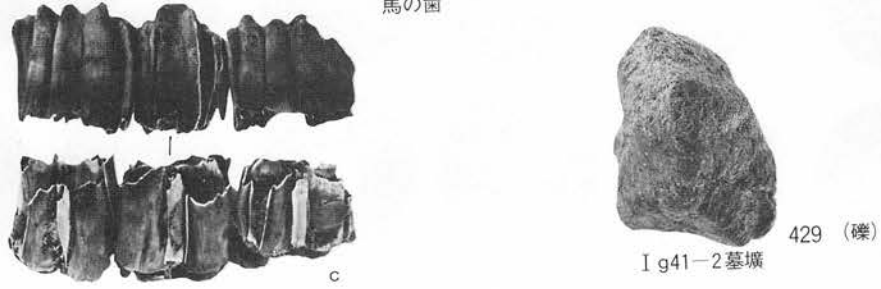
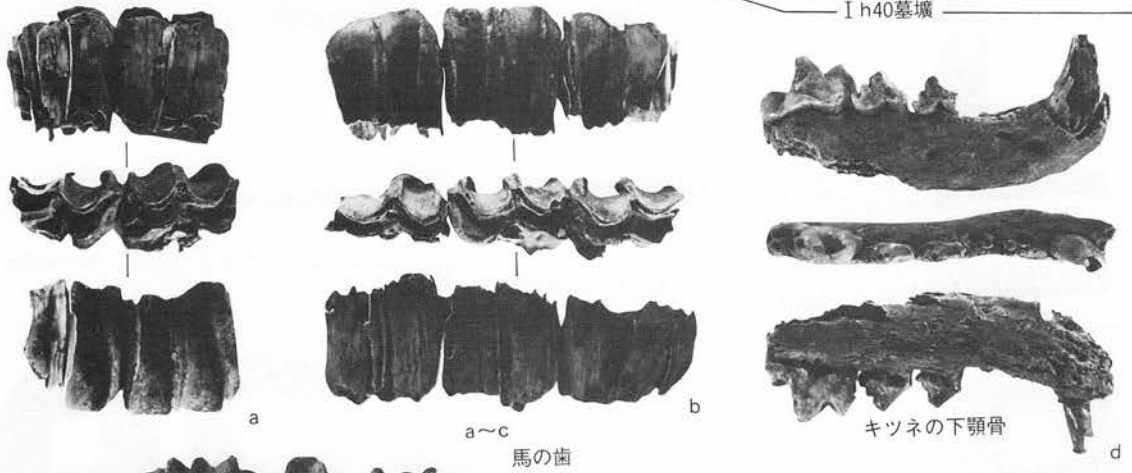
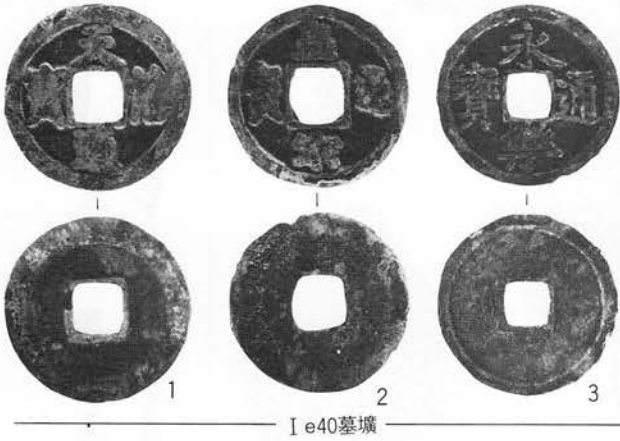
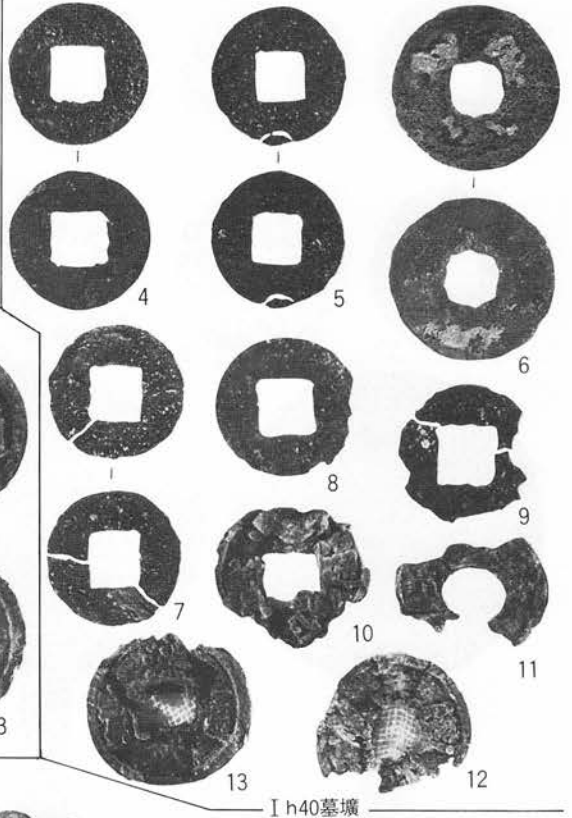
2類

A. 弥生時代の遺物

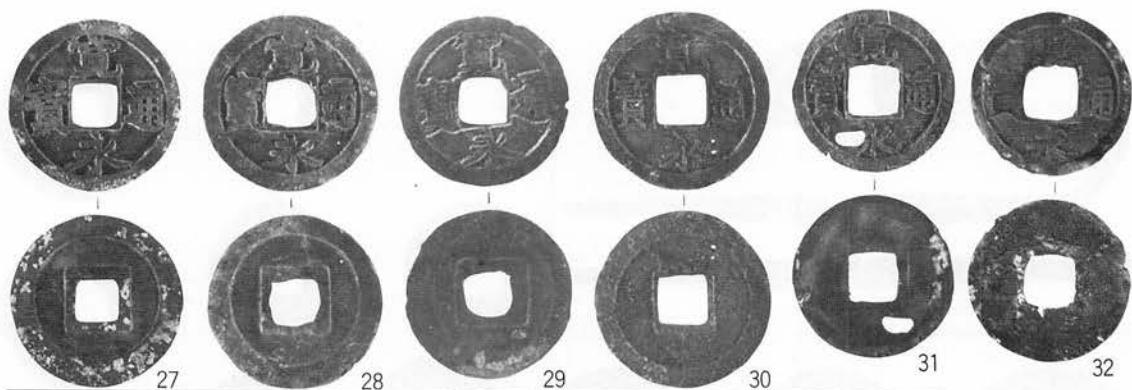


I j 75住居跡

B. 古代の遺物



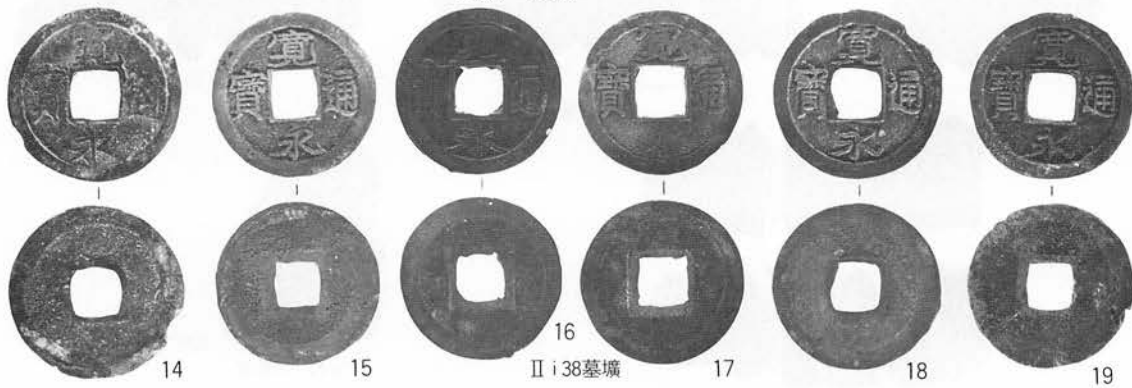
PL-181 墓城の遺物-1



II j 38墓墳



II j 38-2墓墳



PL-182 墓墳出土の遺物-2



6
(火打ち金)



5



3 (和鉄)



4 (毛抜き)



20



21



22



23



24



25



26



33



34



35



36



37

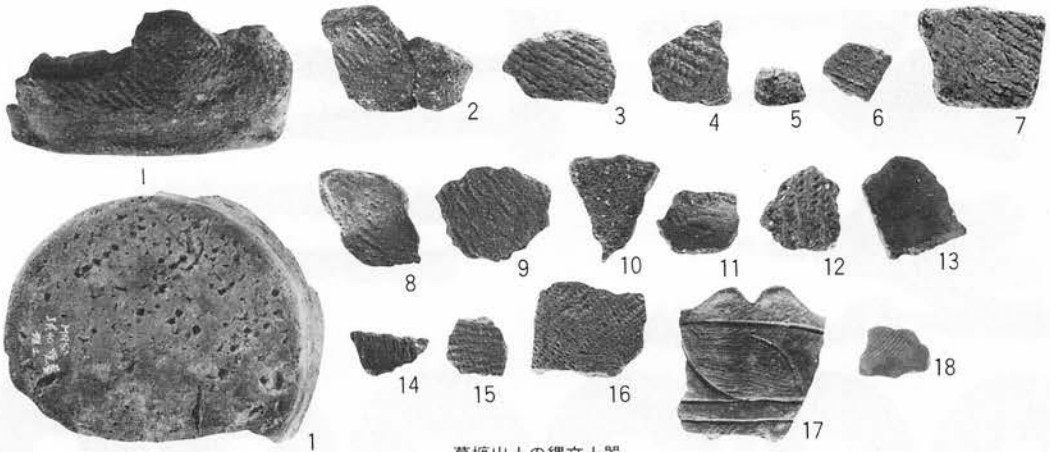
II i 39墓塚

I i 40大葬墓-2

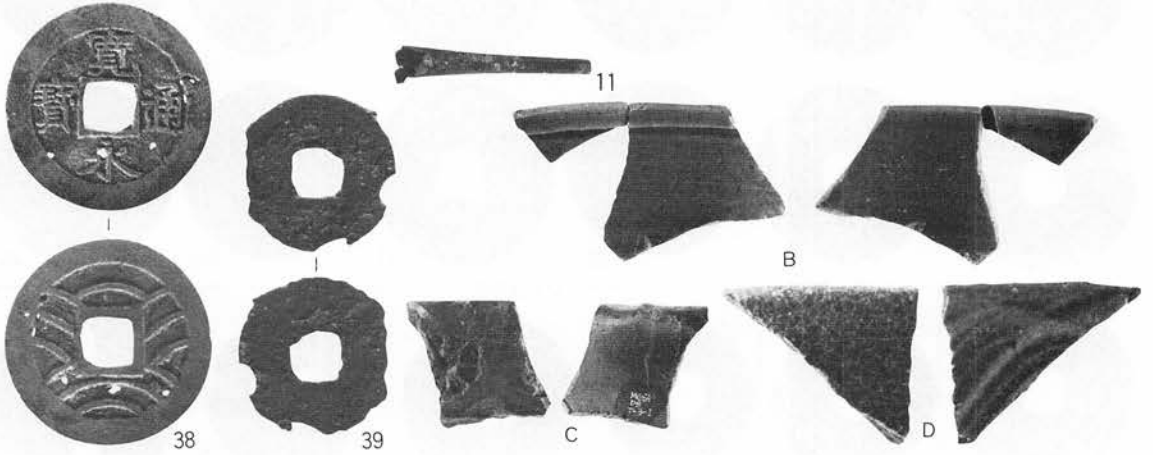
I j 40火葬墓

焼米





墓塚出土の縄文土器



遺構外の中近世遺物

財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二

副 所 長 宮 英 一

〔管理課〕

課 長 千 葉 久 夫

課長補佐 阿 部 詔 夫

主 事 立 花 多加志

技 能 員 佐 藤 春 男

〔調査課〕

課 長 近 藤 宗 光

主任文化財専門調査員 昆 野 靖

文化財専門調査員 片 方 宗 明

〃 長 沼 彬

〃 菊 池 利 和

〃 渡 辺 洋 一

〃 佐々木 嘉 直

〃 平 井 進

〃 中 村 良 一

〃 田 村 壮 一

〃 岩 渕 久

文化財専門調査員 光 井 文 行

〃 玉 川 英 喜

〃 石 川 長 喜

〃 三 浦 謙 一

〃 工 藤 利 幸

〃 中 川 重 紀

〃 高橋 与右^エ門

〃 高 橋 義 介

〃 酒 井 宗 孝

〔資料課〕

課 長 名須川 溢 男

文化財専門調査員 田 鎖 寿 夫

〃 佐々木 清 文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第96集

水神遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷 昭和61年2月25日

発行 昭和61年2月28日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001~2

印刷 山口北州印刷株式会社

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986
